THE BEATLES

ANTHOLOGY

Rittor Music

CamScannerでスキャン

Copyright © Apple Corps Ltd. 2000

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced in any form
without written permission from the publisher.

Portions of the text originally appeared in 'The Playboy Interview: John Lennon and Yoko Ono'
Playboy Magazine (January 1981). Copyright © 1980 by *Playboy*. Reprinted by permission.
All rights reserved. Interview by David Sheff.

Library of Congress Cataloging-in-Publication Data available.

Cover Painting: Klaus Voormann and Alfons Kiefer

Editorial Direction:
GENESIS PUBLICATIONS, GUILDFORD

Editorial Team:
BRIAN ROYLANCE
JULIAN QUANCE
OLIVER CRASKE
ROMAN MILISIC

Consulting Editor:
DEREK TAYLOR

Art Direction:
DAVID COSTA, *Wherefore* ART?, LONDON

Design:
NICKY PAGE
DAN EINZIG
FIONA ANDREANELLI
SIAN RANCE
RACHEL GODFREY

Clearances:
BRYONY CRANSTOUN
JEREMY NEECH

Executive Producer:
NEIL ASPINALL

THE BEATLES アンソロジー

2000年10月5日　第1版第1刷発行

会社リットーミュージック
東京都千代田区三番町20番地
: 03-5213-6260／FAX：03-5213-6261
03-5213-6264／FAX：03-5213-6269
http://www.rittor-music.co.jp/
ンクト（e-mailでのご注文）●http://www.ips.co.jp/

一郎

KAMOTO
C INC.
CHIYODA-KU TOKYO

292／FAX：+81-3-5213-6269

ong

監修翻訳●ザ・ビートルズ・クラブ／TEL:03-5453-2700
監修●斎藤早苗

翻訳●島田陽子　野沢玲子　マッケンジー・スミス
翻訳リサーチ●押葉真吾　デイビット・トンプソン　裕子サンダース

編集●古森 優　大山哲司
編集協力●清水克一郎　茅村はじめ　中川 恵　菅原華子　内山秀央　伝法裕子
小早川実穂子　中島康晴　草野恵子
渉外●平井潤
DTP●トライブス株式会社　米良律子　橋口 孝　波多江潤子　岩永美紀　・
宮野尾さおり　大山幸恵

Special Thanks●株式会社プロデュース・センター　浜田哲生

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
本書の記事、写真、ロゴ、イラストなどの無断転載・複製は固くお断りします。

ISBN4-8456-0522-8 C3073

CamScannerでスキャン

EDITORIAL NOTE

今日にいたるまで、ビートルズに関するおびただしい数の書物が著されてきたが、本書は1970年までの出来事をビートルズの4人が自らの言葉でまとめ上げた不変のものである。ポール・マッカートニー、ジョージ・ハリスン、リンゴ・スター、この3人の発言に基づく本文とニール・アスピノール、サー・ジョージ・マーティン、デレク・テイラーの発言によって補足されている部分は、「ザ・ビートルズ・アンソロジー」のテレビやビデオ制作の際に行なわれたインタビューが一部掲載されているが、そのどちらにも含まれていないポール、ジョージ、リンゴが新たに応じた価値あるインタビューも掲載されている。

ジョン・レノンの発言箇所については（これもまた本書のために特別に）数年の歳月をかけて、印刷物、放送メディア、公私にわたる記録文書を通じたくさんの貴重な資料が世界中から収集された。これらの出典は巻末にクレジットが記されている。本文は年代順に語り口調で自然に流れるように構成されている。正確な歴史的観点からジョンの言葉をとらえようという読者のために、個々の引用は、発言、記録、初版それぞれの日付が末尾に記されている。引用の年次表記は後ろの2桁のみ、たとえば、1970年なら70と記されている（日本版では4桁で表記）。概して日付は、別の日付が出てくるまでは、前述の本文すべてに適用される。ごくわずかなケースだが、引用の日付が不明のもの（ジョンの言葉も含め）があり、この場合、発言は掲載されていても、日付は記されていない。

前後関係の追加事項については、1970年までのポール、ジョージ、リンゴ、その他の人々の発言からわずかな引用が掲載されている。これらにも2桁の年号を末尾に記した（日本版では4桁で表記）。ジョンの言葉についても同様である。

メモラビリア、印刷物または複写物についても幅広いところから入手した。ジョージ・ハリスン、ポール・マッカートニー、リンゴ・スターは、本書の編集期間中、プライベートな書庫を開放してくれた。また、アップル社もEMI本社も写真や文書の資料倉庫等への規制のない出入りを許可してくれた。さらに巻末にクレジットが記されている写真家、エージェンシーの方々も、本書のために多大な貢献をしてくれた。おかげで読者の皆様に本書の内容を明快に理解する手助けとなる厳選された写真やイラストを御覧いただくことができた。

本書は、アップル社のために編成されたジェネシス出版の編集チームおよび1997年に亡くなるまで本書の仕上げのためにさまざまな相談に応じてくれた故デレク・テイラー氏の協力により編集の準備がなされた。

CamScannerでスキャン

TREASURY OF
ART and POETRY
book contains only the work of J.W. Lennon, with
work by J.W. Lennon, and a helping hand
by J.W. Lennon, not forgetting J.W. Lennon.
is this J.W. Lennon?
some remark by a few famous Newspapers.
book better" — J.W. Lennon of the Daily Howl
book has many good uses and should go down
— The Sanitary Journal
— FRED Emney Fan Club Magazine
— Garston Herald.
"And then there's the one about the Bishop and the actress....."

WHAT CAN I TELL YOU ABOUT YSELF WHICH YOU AVE NOT ALREADY OUND OUT FROM THOSE WHO O NOT LIE ?

僕自身について
みんながまだ知らないことを
教えてくれと言われても
何を話せばいいんだろう?

JOHN LENNON

ていること。1940年10月9日に生まれたこと。
の中で最初に生を受けたのは僕じゃない。
1940年7月7日生まれのリンゴの方が先だ。
最初からビートルズにいたわけじゃない。
他の3人よりずっとあとだった。
ハリケーンズで演奏していた頃のリンゴは、
とんでもない運命が自分を待ち受けているなんて
思いも寄らなかったはずだ。

人々、特に西洋人は土曜の夜にウィスキーを飲んだ勢いでこの世に
んだ。つまり、人間の90%は偶然の産物ということ。計画性なんてま
・・ナイト・スペシャル"なんだよ。1980年

った・・・・と思う。ユーモアがあって、歌がうまくて、プロじゃないけ
た。パブなんかではケイ・スターの曲を歌っていた。僕がまだ1歳か
ー映画の歌をよく歌ってくれた。"内緒のお話をしてあげましょう。
にしてね。あなたは、願いをかなえてくれる泉のほとりにいるのよ

離婚した。それで僕はミミおばさんと一緒に暮らすようになった。
はお互いに好きじゃなくなったのよ"ってのがミミの説明だった。
ような言葉はミミの口から聞いたことはない。父のことはすぐに
然だったけど、母への思いは決して消えなかった。時々会って
5マイルか10マイルしか離れていないところに母が住んでいたこ
なかったんだ。1967年

良くて美しい5人姉妹の末っ子だった。母はあまり要領がいい
れなくなり姉にあずけたんだ。5人ともすばらしい女性だった
を主人公にした「フォーサイト家物語」のようなものを書いて
らの影は薄かった。僕はいつも女性たちとともにいて、彼女

たちが自分の夫や人生について話すのを聞いていた。女性たちはちゃんと物事がわかっていたけど男たちはまるでわかっていなかったんだ。僕のフェミニズムに対する意識は、そこから生まれたのかもしれない。1980年

何よりも辛いのは、自分が必要とされてないってことだ。自分は両親を求めているのに、両親はさほど自分のことを気にかけていない。それがはっきりわかった時、僕は幼な心に人間はなんて醜いんだろうと思った。自分が愛されていないなんて考えたくもなかったけど、傷ついたよ。

真に愛されたことはなかった。スターを目指したのはそういう屈折した気持ちがあったからだと思う。もし当たり前の育ち方をしていたら、こんなにも心をかきたてられることはなかっただろう。1971年

時には、自分に親がいなくてよかったと思うこともある。友人には心の通った人間らしい親なんていなかった。あいつらの頭の中にあるのは、小金持ちのブルジョアが抱くようなつまらない心配事ばかりなんだ。僕には自分のアイディアがあったし、自分自身が楽しむことを第一に暮らしていた。でも、心のどこかで真にわかり合える親との出会いを待ち焦がれていたんだよ。ほとんどの親らは死んでるみたいだった。まだ少し脈があると思えるのもいたけど、そんな親らを喜ばせるなんて、僕は嫌だった。1979年

ほとんどの人が親のしがらみから逃れられずにいる。40歳、50歳になっても、自分が親に苦しめられているということがわかっていない。考え方や頭の中身まで束縛されていることがね。僕は親を恐れたことはないし、親にいい子だと思われようともしなかった。1980年

ペニー・レインは郊外にあって、僕は両親や祖父と一緒に暮らしていた。もっとも父は船乗りだったからほとんど海の上だったけどね。僕はそこのニューキャッスル・ロードという通りに住んでいたんだ。1980年 思い出に残っている最初の家は赤煉瓦造りで、正面の部屋はいつもカーテンを閉じて使っていなかった。壁には馬車の絵が掛かっていた。2階にはベッド・ルームが3つあった。ひとつは正面の通りに面していて、もうひとつは裏側。その間にものすごく小さな部屋がひとつあった。1979年

ペニー・レインを離れて郊外のミミおばさんの家へ移った。ウールトンのメンローブ・アベニュー251番地にあって、ふたつの建物が仕切り壁でつながった小さな庭のある家だった。近所には医者や弁護士といった人たちが住んでいて、よく言われる貧しいスラム街のようなところじゃないんだ。僕は郊外に住む小ざっぱりとした感じの子どもで、階層で言えば公営住宅に住んでいたポール、ジョージ、リンゴより半階級は上だった。うちは庭付きの持ち家だったんだからね。ある意味では僕の方が3人より恵まれていたのさ。1980年 4人の中じゃ、リンゴが一番貧しい地区の出だと思う。でもそんなこと関係ないし、リンゴ自身も気にしてない。リンゴはリンゴなりに楽しい経験をたくさんしてきたからね。1964年

僕は昔から、夢にうなされていたんだ。1979年

とてもシュールで色鮮やかな夢をよく見た。まるでヒエロニムス・ボッスやダリの絵のような世界で、毎晩でも見たいくらい気に入っていた。1974年

大人になった今でも空を飛ぶ夢をよく見る。僕は子どもの頃から夢の中で危ない目に遭うとそこら中を飛びまわるんだ。まるで空中を泳ぐみたいに。飛びまわるのはたいてい自分が住んでいるあたりか、よく知っている場所だった。時には巨大な馬のような何かが僕をめがけて突進してくる夢でうなされた。もう少しでぶつかるというところで、また体がふわっと宙に浮くんだ。リバプールにいた頃にこの手の夢を見ると、"もしかしたら自分はこの街から出たいと思ってるんだな"って考えたりしたものさ。1971年

まだ学校に行っている頃に見た忘れられない夢のひとつに、自分が飛行機になってリバプール上空を飛んでいて、何度も行ったり来たりしながら、高く高く昇って行くっていうのもあった。

もうひとつ忘れられないのは、僕が古ぼけた家の中にお金がたくさんあるのを見つけ、山ほどの半クラウン硬貨に埋もれそうになっている夢だ。全部持って行けると思って、ポケットや袋にできるだけ詰め込み、両手にもいっぱい抱えてみても、とても一度じゃ運べそうにないんだ……。僕は知らず知らずのうちに上昇志向を持つようになっていて、人の上に立ちたい、型にはめられたくないという感情が無意識に働いていたんだと思う。1966年

CamScannerでスキャン

自分が実際に何かに縛られている時は、抜け出したり、逃げ出したりする夢を見るものだ。僕自身はもうそんなことはなくなったけどね。1968年

故郷に対する思いは、他のみんなとまったく変わらないよ。自分の故郷が嫌いだと言っている人もいるけど、何か嫌な思い出があるんだろう。僕は何ひとつ不自由のない幸せな少年時代を過ごしたからリバプールが好きだ。いつか別の街に住むようになるのは仕方ないことだけど、それでも故郷は故郷だからね。1964年

リバプールは、アイルランド人が主食のジャガイモが乏しくなった時に移り住む土地だった。アフリカから奴隷として連れてこられた黒人たちが立ち寄り、そのまま残って住みつくケースもあった。リバプールにはアイルランドの血をひく者が多いし、黒人や中国人や、とにかくありとあらゆる人種が集まっている。
生活はどんどん厳しくなり街も貧乏になったけど、人々はくじけなかった。ひどい苦労もしてるけどユーモアの精神を忘れない。ウィットに富んでいて、いつもジョークを飛ばしている。そして、鼻にかかった独特のしゃべり方をする。まるでアデノイド症にかかったみたいにね。1964年

リバプールにはイギリスで2番目に大きな港があり、1800年代には最も繁栄し、経済的に潤い、大金持ちの人々が行き交っていたけど、僕たち北部人は南部、即ちロンドンの人たちからはアニマルとして見下されていたんだ。1970年

ウールトンの家の近くには有名な建物がふたつあって、ひとつは家の窓から見えたグラッドストーンの少年院。もうひとつはストロベリー・フィールドで、その少年院から角を曲がってすぐのところにあった。古いビクトリア朝風の屋敷を、救世軍が孤児院として使っていたんだ。その名のとおりかつてはイチゴ農園だった。僕は友だちのアイヴァンやナイジェル、ピートと一緒によくそこのガーデン・パーティをうろつきまわり、瓶入りのレモネードを売ったりしていた。ストロベリー・フィールドはいつも楽しいところだった。1980年

僕は幼稚園の頃から他の子どもとはどこか違っていた。サイケデリック・ドラッグをやって悟りを開いたとか、ソフト・ドラッグの力を借りて目ざめたとか、そんな次元の話じゃない。僕の人生はいろいろなものから影響を受けているんだ。すべての物事がどれも同じように大切で、ルイス・キャロルからオスカー・ワイルドまで、さらには近所の悪ガキで結局刑務所行きになった奴からも影響を受けた。だから5歳の頃抱えていた悩みはこんな感じだった"何か変だぞ。僕には他の人に見えないようなことが見えてしまうらしい"1980年

子どもの頃から家にいるのが好きだった。ミュージシャンにはそういう人間が多いと思う。曲を書くのも演奏するのも基本的に室内だからね。画家になりたいとか、詩を書きたいとか、僕が興味を持つのはすべて家の中でやることだった。1980年

本もよく読んだ。家でブラブラするのがつまらないと思ったことはない。大好きだ。1980年　これはきっと僕がひとりっ子だったからだと思う。父親違いの妹はいたけど、ミミおばさんの家では子どもは僕ひとりだった。僕はいつも本を読みながら、自分だけの空想の世界に浸っていた。1971年

ジョンと母ジュリア

僕は自分がアーティストになって狭い通りの小さなコテージに住む姿を思い描いていた。僕が心から楽しいと思うのは、ちょっとした詩を書いたり、油絵を描いたりすることなんだ。僕の夢はコテージに住んで森を散策するような生活を送ることなんだよ。1969年

僕は『不思議の国のアリス』に夢中になって登場人物の絵を描いた。ジャバーウォックの真似をして詩を書き、アリスやジャスト・ウィリアムになったつもりで自分を主人公にしたウィリアム・ストーリーを書いたりもした。『ウインド・イン・ザ・ウィロウズ』(楽しい川辺)も大好きだった。何か1冊の本を読むと、すぐそのとおりに試してみようとした。学校時代、ガキ大将になりたかった理由のひとつは、僕が本で読んで覚えた遊びを仲間がやらないと、どうしても我慢ならなかったからだ。1967年

ダブデイル小学校では、年がら年中ケンカをしていた。自分より大きくて強そうな相手には、心理作戦を使って間違いなくこっちが勝つんだということを、そいつがわかるまで、あらゆる手を使って脅すんだ。1967年

親に束縛されなかったおかげで、僕は他の子どもたちの心に入り込むことができた。それは、両親がいないことから授かった贈りものだった。親がいなくて泣いたこともあったけど、逆に自分は普通とは違うんだという意識を持つことができた。1980年

リンゴを盗んだ時はすぐに見つかってしまったな。いつもいたずらをしていた仲間と一緒に、ペニー・レインで路面電車のバンパーに飛び乗り、何マイルも無賃乗車したこともある。乗っている間ずっと、今にもバンパーから落ちてしまいそうで恐くて、わざと汚ない言葉で悪態をついていた。1967年

僕は同じ年頃の仲間では親分だった。まだほんの子どもだったくせに、近所の女の子から教えてもらった卑猥なジョークをたくさん覚えていた。1967年

セックスについてはちゃんと教育を受けなかったけど、トイレの落書きを見て知識を増やしていったんだ。8歳になる頃には、すでにいろんなことを聞かされていて、たいていのことは知っていた。女の人の裸の写真だって見ていたし、どんな行為なのかもわかっていた。まわりの奴らも同じだったよ。人間はおかしな罪の意識や偽善にがんじがらめにされていて、そこから自由にならないかぎり、セックスが社会の中で生活における行為のひとつとしてきちんと認知されることはないだろう。

エジンバラは夢のような場所のひとつだ。エジンバラ・フェスティバルへ行った時、城に世界中のマーチング・バンドが集まって演奏を繰り広げるのを見た。アメリカ人バンドが奏でるスウィングの心地よさはたまらなかった。でも、やっぱり一番はスコットランドのバンドだったね。思い出すたびに言いようのない感動が甦ってくる。演奏が終わり照明が落ちてバグパイプのソロが聴こえてきたんだ。スポット・ライトがたったひとりの演奏者を照らしていて、実に感動的だった。1979年

小さい頃から僕は音楽に興味を持っていたけど、誰もその才能を伸ばそうとしないのが不思議だった。もっとも、それだけの経済的余裕はなかったんだろうけど。1965年

エジンバラのおばさんの家へひとりで行った時、僕がバスの中でずっとハーモニカを吹いていたら運転手が気に入って"明日の朝エジンバラのバス停へおいで。もっといいハーモニカをやるよ"って言ってくれた。翌朝、僕はほんとにハーモニカをもらったんだ。あと、小さなアコーディオンも持っていて、右手だけでよく弾いていた。やがて「スウェーディッシュ・ラプソディ」、「ムーラン・ルージュ」、「グリーンスリーブス」などハーモニカでやってたのと同じ曲をアコーディオンでも弾けるようになった。1971年

なぜ最初に手にした楽器がハーモニカだったのかは思い出せないけど、たぶんすごく安かったからなんだろう。家に下宿していた学生のひとりがハーモニカを持っていて、"もし僕が翌朝までに1曲吹けるようになったらハーモニカを買ってやる"と言った。僕はがんばって2曲マスターしていったんだ。まだ半ズボンをはいていたから8歳から11歳くらいだったと思う。

イギリスには"イレブン・プラス(中等教育コース選別試験)"という試験があって、5歳になるとそのための勉強を始めなきゃならないんだ。イレブン・プラスに受からないとあなたの人生は終わりよ、ってわけで、僕はこの試験にだけは合格した。落ちるのが恐かったし、試験さえ終われば何でも好きなことをしていいと先生から言われたんだ。だから僕は絵ばかり描いていた。1974年

クオリー・バンク・グラマー・スクールで何百人という新入生を眺めて、僕は"よし、またダブデイル小学校の時みたいに思い切りケンカしてのし上がってやるぞ"と思った。ところが、なかなか手ごわい相手がいて、最初のケンカでは負けてしまった。とことん痛めつけられて、僕はすっかり落ち込んでしまった。さんざん悪態をついたり、怒鳴ったりしたあげく、あっさり一発食らってしまったんだ。ちょっとでも血が出たら、それでもう負けだった。それからというもの、パンチが強そうな相手の時は"わかった、じゃあ、レスリングでいこう"と言うことにした。1967年
僕がケンカっ早かったのは、人気者になりたかったからだ。おべっかを使ったり、へつらったりするより、その方が魅力的だったし、みんなが自分の言うとおりに動き、自分のジョークに笑い、自分をボスにすることが望みだった。初めのうちはダブデイルにいた時のように、少しは学校の勉強にも精を出していたと思う。ダブデイルではいつも正直にしてたんだけれど、それが馬鹿みたいだってことに気がついたんだ。いずれにしたって、叱られるのは同じなんだから。それで僕は、何から何まで嘘をつくようになった。
一度だけミミにぶたれたことがある。ミミのハンドバッグから金をくすねたんだよ。前からちょっとずつやってはいたんだけど、その日はたくさん取りすぎてしまったんだ。1967年

12歳になる頃には自分は天才に違いないと考えていた。でも、まわりは誰もそのことに気づいていなかった。"自分は天才なのか、それとも頭がおかしいんだろうか。だれも自分を隔離したりしないから、狂人ではないのだろう。だとすれば自分は天才なんだ"。こんな風に僕は思っていた。天才も狂気の一種なのかもしれないってね。でも、僕は遠慮がちだった。まるで自分のギター・プレイについて謙遜してしまうように。もし天才というものが存在するのなら、それは僕のことだ。存在しないなら、どうだっていい。子どもの頃の僕は、詩を作ったり絵を描いたりしながらそんなことを考えていた。僕がいっぱしの人間になることができたのは、ビートルズが成功したからじゃない。僕は昔からずっと変わっていない。天才であることは苦痛だ。ただ苦しいだけだ。1970年

CamScannerでスキャン

僕が天才だってことがなぜ誰にもわからないのか、いつも不思議に思っていた。この学校で誰よりも賢いのは自分なのに、みんなそのことがわかっていないのだろうか。1970年

成績表を見ても、書いてあることはいつも同じだ。"すべてを陳腐な笑いでごまかして満足している"、"現実を見ずに空想にふけってばかりいる"。1980年

学校ではいつも空想にふけっていたから、20年間もずっと夢うつつ状態だったわけだ。とにかく学校はつまらなかったから、夢でも見ていなければやってられなかった。でなきゃ映画でも見に行くか、そのへんを走りまわっているしかなかった。1980年

学校で習った詩の一部を替え歌みたいにして、とんでもない時に大声で歌い叫んで先生たちを困らせたものだ。確か、お祈りの時間にチョコレートを食べてたか、水泳の先生をプールに沈めたか、そんな悪ふざけが原因で停学処分も食らったよ。1963年

ある数学教師は僕のことを"このままでは堕落の一途をたどるだけだ"と評価した。ほとんどの教師から嫌われていたから、今になって彼らがいかに見る目がなかったかを思うと愉快でたまらない。でも、学校にひとりは必ず、僕をわかってくれる先生がいた。それはたいてい美術の先生か、英語や英文学の先生だった。絵や作文に関することなら、僕はちゃんと合格点をもらっていた。これが理科や数学となると、まったくひどいものだった。1971年

15歳の頃の僕は、リバプールを出て有名になって、金持ちになれたらすごいなと考えていた。1975年

「不思議の国のアリス」のような作品を書きたいと思っていたけど、何をやってもレオナルド・ダ・ヴィンチを越えることはできないということがわかったら、"こんなことして何になる、僕なんかよりずっと苦労してきた人たちが、ずっといい作品を残しているじゃないか"と思うようになった。1971年

自分は生まれながらの物書きであるとは思わないけど、ただ"考えること"は生まれつき得意だったと思うよ。学校でも、何か特定のテーマを与えられるんじゃなくて、自由に発想することを求められてたら、すごくいい成績だったと思う。1964年

学校ではいろんな絵を描いて、クラスのみんなにまわして見せていた。目の見えない犬が目の見える人間を連れている絵なんかもあった。1965年

残酷なジョークを最初のうちは学校の中だけで言っていたんだ。リバプールの街は身体の不自由な人が多く、背が3フィートしかない男が新聞を売っていたりするんだけど、卒業式の帰りに少しアルコールも入っていて、普段はそれほど気にならないのに、その日はやたらそんな人たちばかりが目について、だんだんおかしくなって、ついにげらげらと笑いだしてしまったんだ。何となく感情を隠すと言うか、カモフラージュしたくなっただけで、彼らを傷つけるつもりは全然なかった。あれはただのジョークで、日常会話みたいなものだったんだ。1967年

ジョン(右)、メンローブ・アベニュー251番地の玄関にて

子どもは誰でも絵を描いたり詩を作ったり、さまざまな創作活動をする。18歳頃まで続ける子もいるけど、ほとんど12歳くらいでやめてしまう。それは誰かにひとこと"よくないね"とか言われて、挫折してしまうんだ。"おまえには才能がない"とか"へたくそだ"というのは、誰もが一生言われ続ける言葉で、みんな一度は経験していると思う。でも逆に"ああ、君はすばらしいアーティストだね"なんて言われていたとしたら、僕はもっと地道な職を選んでいたかもしれない。1969年

教師は生徒に余裕を与えて、生徒の興味や関心を伸ばすようにしてやらなきゃダメだ。僕は昔から絵が好きで、絵だけはずっといい成績だったのに、誰もそんなことに関心を持ってくれなかった。1967年

先生から"将来何になりたいか？"と聞かれた時、僕は"ジャーナリスト"と答えていた。対に"アーティスト"などとは答えなかった。これは我が家の方針でね、ミミおばさんが芸術家のことを本で読んだり、美術館の絵を見て感激したりするのはいいけど、芸術家一緒には住まないよ"と僕によく言っていたからなんだ。それでも先生は"もっと現実なものを言いなさい"と言う。"じゃあ、どんなものがあるか教えてほしい"と言うと、獣や医者、歯医者、弁護士などをあげてくる。だけど僕は、自分がそんな道に進むはずないとわかっていた。そう、僕には最初からあてなどなかったんだ。1980年

950年代の社会が求めていたのは科学者だった。アートだの芸術だのと言ってる連まるで国家の敵扱いだった。今だって、まだ社会的に十分認知されているとは言え。1980年

ート・カレッジにいた時でさえ、教師にならないかと言われた。学校側は、学生にかして絵描きになることをあきらめさせようとするんだ。"教職に就くというのはどうだね？ 日曜日を使って絵の勉強も続けられる"。僕はそういうのにことごとく反発した。1971年

学校には、僕と同じように社会に適応できない奴らが他にもいて、僕はそうした仲間たちと一緒に反抗した。やりたいことが何もないと、学校のカリキュラムについていくことができないんだ。クオリー・バンクにいた頃の僕の成績表には、"頭はいいが、やる気がない"と書かれていたし、僕は特に鼻持ちならない生徒だったようだ。典型的な"労働階級の英雄"だったのさ。D・H・ロレンスと同じような闘いで、階級なんてくそ食らえだった。それもこれも、すべて階級制度に反抗するためだったのさ。1969年

僕はいつも反抗的で社会のあらゆる物事が息苦しく感じられた。だけどその一方で、社会に愛され、受け入れられたいと願っていた。ステージに立ったのも、芸をするノミみたいな者であっても、この社会に属していたかったからなんだ。僕の中には、社会のすべてから受け入れられたいと思う気持ちもあった。生意気で頭のイカれた詩人、ミュージシャンなんて嫌だ。でも僕は僕でしかない。いったいどうすりゃいいんだ。社会に受け入れて欲しいのに、受け入れてもらえないなんて。1980年

学校では、僕はかなりの乱暴者で知られていた。でもそれは、自分が強く見えるようにイメージを作り上げていただけの話。そのおかげで面倒なことに巻き込まれることもあった。僕はいかにも強そうなテディ・ボーイという服装をしていたから、柄の悪い地区で本物のテディ・ボーイたちと遭遇してしまった時はそれこそ大変だった。学校では頭を使って切り抜けていたから何の問題もなかったよ。俺はおまえより強いんだと思い込ませればいいんだから、ゲームみたいなものさ。万引きだとか、いろいろ悪さはしたけれど、それ以上のことは決してやらなかったし。でもリバプールはなかなか恐いところで、本物のテディ・ボーイっていうのは、20歳をとっくに過ぎた港湾労働者なんだ。対する僕らはまだほんの15かそこらの子どもだろ。相手は小型の斧とかベルト、自転車のチェーン、場合によっちゃ本物の武器まで持ってる。そんな連中のいるところへは絶対に足を踏み入れなかった。もしそういう奴が目の前に現れたら、もう全員で一目散に逃げるしかないね。1975年

僕らの仲間は万引きしたり、女の子のブルマーを引っ張り下ろしたりといった類のことをやってた。仲間がみんなつかまった時はすごく恐かったけど、うまく逃げ切ったのはいつでも僕ひとり。親たちの中で何も知らないのはミミだけだったと思う。教師たちはほとんど、ヘビやトカゲのように僕のことを嫌っていた。しばらくすると僕らはお菓子屋の店先からキャンディをかっぱらうといったことから少しばかり進歩して、タバコのヤミ売りをやったりもした。1967年

僕は決してタフ・ガイなんかじゃない。他の奴らがあまりにも神経をピリピリさせているから、自分を守るためにそんな仮面をつけざるを得なかっただけだ。でも実際にはとても傷つきやすくて、弱い男なんだ。1971年

まあ、幸福な少年時代だったね。ケンカっ早くはなったけれども、みじめな気持ちになったことは一度もなかった。いつも愉快にやっていた。1967年

ジョージおじさんはとてもやさしくて、僕とは仲が良かった。彼が亡くなった時、僕は何をすることもできなかった。悲しみの気持ちを表すこともできず、ただうろたえて2階へ上がってしまっただけだ。やがていとこが訪ねてきて、その子も2階へ上がって来たんだけど、ふたりともどうすることもできないで、ひたすらげらげら笑っていた。ずっとあとになって、ものすごい罪の意識を感じたよ。1967年

おじの死後、ミミは女手ひとつで僕の面倒を見てくれた。ミミは決して生活のレベルを下げようとはせず、それまでどおり2軒続きの家に住み続けた。一時期、学生たちを下宿させていたこともある。

ミミは僕がラグビーをやるようなスポーツマンか化学者になってほしいと考えていたんだ。でもミミと暮らすようになってからずっと、僕は詩も書いていたし、歌も歌っていた。だから僕は、しょっちゅうケンカしてこう言っていた。"わかってくれよ。僕はアーティストなんだ。数学なんてやらせないでくれよ。化学者だの獣医だのと言わないでよ。そんなのにはなれないよ"ってね。

僕はいつも"僕が書いたものを捨てちゃダメだ"と言っておいた。それなのに14歳の時、家に帰るとミミは部屋にあった僕の詩なんかを全部捨ててしまっていた。僕は言ったんだ。"いつの日か僕が有名になったら、後悔するよ"。1972年

その手のいやらしい詩はどこかで読んだことがあった。読むだけでも恥ずかしくなるようなやつだった。どんな奴がこんなのを書くのかと思ったけど自分でも書いてみたんだ。ある時ミミにそれを枕の下から見つけられてしまってね、僕は"それは他の奴の

ために書いてやったんだ。そいつは文章が下手で、無理やり僕に書かせたんだ"と言ってごまかした。もちろん、ほんとは自分の意志で書いたんだけど。1967年

しばらくして僕は真面目で感傷的な詩を書くようになった。そんな時はミミに読まれないように、わざと殴り書きの筆跡で書いたんだ。1967年

ある朝、母ジュリアが黒いコートを着て、顔中血だらけになって現れた。何かの事故に遭ったらしい。僕はとても母を正視できなかった。"ああ、そこに母親が血だらけで立っている"と思っただけでいたたまれなくなり、庭へ逃げ出した。僕は母を愛していたけれど、関わりたくはなかった。卑怯だったと思う。そんな自分の気持ちを見せたくなかったんだ。1967年

ミミおばさん

初めてカラー・シャツを買ってくれたのはジュリアだった。僕はジュリアの家を訪ねるようになり、彼女の新しい夫にも会った。あいつのことは特に何とも思わなかったけど"トゥイッチー（顔面神経痛）"と呼ぶことにした。ジュリアは僕にとって若いおばさんとか姉という感じだった。僕は年を重ねるにつれ、ミミと衝突することが多くなり、週末にはよくジュリアの家へ泊まりに行くようになった。1967年

"トゥイッチー"はロバート・ダイキンズという名前で、ボビー・ダイキンズとも呼ばれていた。ジュリアの二番目の夫‥‥と言っても、ふたりが結婚していたのかどうかは僕にはわからない。背の低いウエイターで、神経質そうな咳をしていて、薄くなりかけた髪を油で固めていた。彼はいつもマーガリンかバター（たいていはマーガリン）に手を伸ばし、出かける前には髪に塗りつけていた。もらったチップは台所の食器棚の一番上のブリキ缶の中に貯めていた。僕はよくそれを失敬した。どうやらジュリアが犯人ということになっていたらしい。僕のためを思ってそうしたのだろうが、別にありがたいとは思わなかった。1979年

僕はいつも、あるひとりの女性との出会いを夢見ていた。美しく知的で、黒い髪をしていて、頬骨が高く、自由な心を持ったアーティスト（ジュリエット・グレコのような）との出会い。彼女とはわけあって離れ離れになってしまっているけど、僕と魂を分け合う女性だった。もちろん、10代の僕が思い描いていたセクシーな女性のイメージは、アニタ・エクバーグであり、お決まりの北欧の大柄な女神たちだった。でも、それは50年代の終わりにブリジット・バルドーに憧れるようになるまでの話。黒髪じゃなかった僕のガールフレンドたちはみんな、ブリジットのようになれという僕の執拗な要求に悩まされた。最初の妻（彼女は生まれながらにして赤毛だ）は、僕と結婚する頃にはちゃんと前髪をそろえ、ブロンドのロング・ヘアになっていた。数年後、ついに本物のブリジットと会うことができたが、その時の僕はトリップ中で心ここにあらずの状態、彼女も女性としての盛りを終えようとしていた。1978年

ある男についての本を読んだ。性的な妄想の話で、男はそれが一生衰えないと言って嘆いていた。20代、30代の頃は"そのうち少しは弱くなるのだろう"と思い、40代にて"そろそろ"と期待したがまったくその気配はなく、60代、70代と年を重ねてもな腹の底からわき上がってくる衝動を自分ではどうすることもできないのだという。"くない！"と僕は思った。僕だって以前は年をとればそういう妄想は消えるのかと思たけど、最近はどうもこれは永遠に続くものだと悟っている。"永遠に"では大袈裟たら"魂がこの体を離れるまで"とでも言っておこうか。とにかく、期待しよう。魂がれれば克服できるのだ。それでも克服できなければ、さらなる快楽を求めて魂たび舞い戻って来るのだ（ほんとにそれだけのために戻ってくることなどあるのか？）。1979年

夜のことはいまだに覚えている。いや昼と言った方がいい。10代の頃、墓石のールフレンドと抱きあっていたら尻にアブラムシがついてしまったんだ。墓地なんデニングにも不向きだし、あんなことするのはもっての他という教訓だ。バーバ今どこにいるんだい？ 太って醜い身体をしているのかい？ 子どもは15人？ あは苦しんだけど、君には何かいいことがあった今、彼女にキスをしているのはどんな男なんだ

は若者たちの夢をかなえてくれるところだと言いた。アメリカはどこもそんなティーンエイジャっぱいだった。1966年

ことは何でも知っていた。映画で見ていたかの頃に見た映画は、ディズニー・ランドにドリク・ハドソン、ジェイムス・ディーン、マリリン・だってアメリカ製だ。コカ・コーラにハインツ。リカに行くまでの僕は、ハインツのケチャップ

メンローブ・アベニューの家の庭で

はイギリス製だと思っていたんだけど。

ロックン・ロールが生まれるまでは、音楽もみんなアメリカだった。イギリスにも人気のあるアーティストはいたけど、ビッグなアーティストはみんなアメリカだった。ロンドン・パラディアムに来て演奏したのもアメリカ人だし、イギリス映画だって、アメリカ人の俳優なしには成立しなかった。たとえB級映画であっても、アメリカ人なしで客を呼ぶことはできなかったんだ。アメリカ人がダメならカナダ人を出演させていたくらいだ。1975年

イギリスのレコードでいろんな国で知られているような大ヒットは、クリフ・リチャードの「ムーブ・イット」が最初だったと思う。それまではそんな曲はひとつもなかった。1975年

リバプールはさまざまな人種が行き交う街で、船乗りたちはアメリカからブルースのレコードをたくさん持って帰ってきた。1975年 リバプールの港町ではイギリスやヨーロッパの人々がまだ聴いたこともないような古いファンキーなブルースのレコードを聴くこともできた。

ロンドンを除けばイギリスでカントリー＆ウエスタンが最も盛んなのはリバプールだ。ロックン・ロールに出会うまで、僕もリバプールでカントリー＆ウエスタンを聴いていた。リバプールの人々は、アイルランド人が祖国を愛するように、カントリー＆ウエスタンを愛していた。ロックン・ロール以前にも、リバプールにはフォークやブルース、それにカントリー＆ウエスタンを聴かせる、定評のあるクラブがあったんだ。1970年

子どもの頃の僕らはフォーク・ソングがあまりにも中流階級的に思えてそっぽを向いていた。大きなスカーフを首に巻いてビールのジョッキを手に、気どった声でフォークを歌っていたのはみんなカレッジの学生だった。"ニューキャッスルの炭鉱で働いた"とか、そんなくだらないやつをね。本物のフォーク・シンガーなんていなかった。それでもドミニク・ビーハンはちょっと気に入っていたし、リバプールではわりといい曲も聴けた。アイルランドの労働者たちが歌うとても古いレコードがラジオやテレビでかかることがあったけど、そのパワーといったらすごいもんだった。でも大部分のフォーク・ミュージックは、甘ったるいだけの過去の遺物さ。まるでバレエ団みたいに退屈なんだ。最近のフォーク・ミュージックはロックン・ロールしてるけどね。1971年

フォーク・ミュージックは決して、アコースティック・ギターを抱えた歌手が炭鉱や鉄道についてぶつぶつ言いながら歌うものじゃない。今じゃそんなのは誰も歌わないよ。僕たちはカーマ（因果応報）や、平和とかを歌にするんだよ。1970年

うちにはずっとラジオがなかったから、ポールやジョージと違ってポップ・ミュージックを聴き始めたのは意外と遅かったんだ。あいつらは家のラジオからいつでもポップ・ソングが流れてくる環境で過ごしてきたけど、僕は友だちの家で聴くだけだった。1971年

ビル・ヘイリーの時代は、ある意味では僕を素通りしてしまった。彼らの曲がラジオから聴こえてくると、母は立ち上がって踊り始めた。すごく気に入っているみたいだったね。僕も聴いたけど、それほどの印象はなかったね。1963年

知り合いのドン・ビーティという奴が、『ニュー・ミュージカル・エクスプレス』誌に載っていたエルヴィス・プレスリーを指差して、こいつはすごくいいって言うんだ。曲は「ハートブレイク・ホテル」だった。"傷心ホテル"なんて嘘っぽい響きだなと思ったけど、その音楽誌は絶賛していた。最初、僕は、ペリー・コモやシナトラのようなシンガーを想像していたんだ。「ハートブレイク・ホテル」ってタイトルが古臭かったし、エルヴィス・プレスリーって名前も当時は変な感じだった。ところが、初めてラジオ・ルクセンブルクで曲を聴いたとたんにすべてがひっくり返ってしまってね。急いでレコードを家に持って帰り、"フランキー・レインとジョニー・レイとテネシー・アーニー・フォードを合わせたようなすごいシンガーだ！"って興奮したのを覚えている。1971年

リバプールを出る直接のきっかけはエルヴィスだった。一度耳にしてしまったら生活のすべてになってたんだ。ロックン・ロール以外のことなんか考えられなかった。セックスと食べ物とお金は別としても‥‥いや、そんなものみんな同じようなものだった。1975年

世間は生まれたばかりのロックン・ロールを抹殺しようとした。ロックン・ロールを嫌ったのは、親たちの世代だった。初期のロックン・ロールは、歌詞に二重の意味が込められていることが多い。それが、白人のオーディエンスの好みに合わせて、ほとんどがあたりさわりのない言葉に置きかえられてしまったんだ。黒人たちが歌いだした頃の歌詞は、セックスを連想させるものが多く、リトル・リチャードも「トゥッティ・フルッティ」をレコーディングし直さなければならなくなったんだ。とにかく、歌詞のあらゆる部分

を下品でない言葉にするよう求められた。エルヴィスの曲に「ワン・ナイト・ウィズ・ユー」というのがあるんだけど、これはもともと「ワン・ナイト・オブ・シン」というタイトルだった。"あの罪深い一夜のため祈りを捧げる……"っていうような、なかなかいい歌詞だったんだけどね。スラングや、黒人独特の言いまわしがよく使われていたんだ。1975年

ロックン・ロールは、"すぐに消えてなくなるだろう"と言われ続けてきたんだ。新聞には"もうすたれ始めた"なんてしょっちゅう書かれてね。でも、ロックン・ロールがなくなることはない。生まれた時点からあらゆる音楽の要素が含まれていたんだから。ロックン・ロールの母体となったのはブルース、リズム&ブルース、ジャズ、そしてカントリーだ。黒人と白人の音楽が、ほんとの意味で一緒になって出来上がったのがロックン・ロールだったんだ。1975年

16歳の頃、いつも聴いていたアルバムが2枚ある。1枚はカール・パーキンスのファーストかセカンド、どっちだか思い出せないな。もう1枚がエルヴィスのファースト・アルバムだ。入っている曲が全部好きだったのはその2枚だけだね。1980年

「レディ・テディ」や「リップ・イット・アップ」を聴くと、必死でレコードを聴いていた自分の若い頃の姿が浮かんでくる。ロンドン流にアレンジされたアメリカのレーベルのデザインまで思い出す。ミミおばさんにこの曲を聴かせたら"何これ?"って言われたよ。みんなで踊りまくったダンス・ホールの風景も甦ってくる。1975年

ジョンとジョージおじさん

バディ・ホリーは偉大だった。眼鏡をかけていたのも僕には良かった。僕は人前ではずっと眼鏡をかけなかったんだけどね。僕らに歌と演奏が同時にできることを初めて教えてくれたのはバディ・ホリーだった。それもただ適当にかき鳴らすだけじゃなくて、ちゃんとリフも弾いてね。あの頃の僕は若かったから、バディに直接会ったこともライブを見たこともない。でもエディ・コクラン、ジーン・ビンセント、リトル・リチャードのライブには行ったよ。ジーン・ビンセントとリトル・リチャードには、あとになって個人的に会うことができた。ひとりのファンとして客席で観たのは、エディ・コクランぐらいだね。1975年

リトル・リチャードは、昔も今も変わらず、すばらしいロックン・ローラーだ。最初に聴いたのは、オランダ帰りの友人が持っていた78回転のレコードだった。片面が「ロング・トール・サリー」で、もう片面は「スリッピン・アンド・スライディン」だった。ぶっ飛んだよ。あんなすごい歌い方は初めてだ。サックスもめちゃめちゃイカしてた。

リトル・リチャードの歌で最高にゾクゾクしたのは、ソロの直前でシャウトするところだった。"吠える"という言い方がピッタリ。彼の長い叫び声を聴くと、身の毛がよだったよ。1980年

今でも僕はリトル・リチャードが大好きだ。それにジェリー・リー・ルイス。彼らの真髄は画家のような表現力だった。チャック・ベリーは、時代を越えた偉大な詩人のひとりでロック詩人と呼んでもいいね。歌詞は時代の先端を行っていた。僕たちはチャック・ベリーにボブ・ディランと同じように多くの影響を受けた。チャック・ベリーが作った歌は全部大好きだ。他のパフォーマーたちとはレベルが違うんだよ。偉大なブルース・アーティストの伝統を受け継ぎ、なおかつ自分自身の言葉で歌詞を書いたアーティストだった。リトル・リチャードも自分で書いていたが、チャック・ベリーこそが、まさにすばらしい歌詞を作り出したんだ。もっとも、彼が言わんとしていることを僕たちは半分もわかっていないんだろうけどね。1970年

1950年代、みんなが中身のない歌を歌っていた頃に、チャック・ベリーは社会的な言葉を巧みにリズムと調和させていた。チャック・ベリーの才能が生み出したすばらしいロックに僕はすっかり理性を失って、他のことはどうでもよくなってしまったんだ。僕にとってロックン・ロールは世界に終わりを告げる病のようなものさ。1970年

僕をイギリスの片田舎から世界の檜舞台へと引っぱり出したのはロックン・ロールだ。今ここにいる僕を作り上げたのはロックン・ロールなんだ。ロックン・ロールがなかったらどうなっていただろう。僕はほんとにロックン・ロールを愛しているんだ。1975年

ロックン・ロールだけが本物で、あとはすべて嘘っぱちだった。他にもいろんなことがあったけど、15歳の僕の心を射抜いたのはロックン・ロールだけだった。1970年　ロックン・ロールに出会うまで、音楽で生きていくなんて夢にも思わなかった。ロックン・ロールにインスパイアされて僕は音楽をやるようになったんだ。1980年

16歳の頃、母が音楽を教えてくれた。母が最初に教えてくれたのはバンジョーだった。そのせいで、バンドを始めたばかりの頃の写真を見ると僕はおかしなコードを押さえている。その後少ししてギターをやるようになった。1973年

生まれて初めて見たギターを覚えている。リバプールの郊外で、カウボーイ・スーツを着た男が持っていたんだ。そいつは星形の飾りをいっぱいつけて、カウボーイ・ハットをかぶり、大きなドブロ・ギターを持っていた。彼らは本物のカウボーイだったらしく、真面目に演奏していた。カウボーイたちはロックン・ロールが生まれるずっと前から音楽をやっていたんだからね。1970年

最初にプレイしていたのは借り物のギターだった。どうやって弾いたらいいのかわからなかったけど、その後、母が通信販売で1本買ってくれてね。ちょっと安物だったけど、僕はそれを片時も離さずそばに置いて、一生懸命練習をしたんだ。1963年

僕はギターでバンジョーのコードを弾いていた。だから6弦はだらりとゆるめたままだ。最初に手にしたギターの値段は10ポンドだった。とにかく、自分の歌の伴奏のためにかき鳴らせればそれでよかった。1964年

ギターを始めた頃は、ちょっと練習してはあきらめ、また練習してはあきらめと、その繰り返しだった。2年くらいでやっと自然にメロディが弾けるようになった。一度レッスンを受けたことがあるんだけど、学校みたいですぐにやめてしまったんだ。僕の場合、自分であれこれつま弾きながら覚えた曲がほとんどだ。最初の頃に覚えた思い出深い曲が「エイント・ザット・ア・シェイム」だった。それから「ザットル・ビー・ザ・デイ」や「ジョニー・B・グッド」、「キャロル」なんかのソロをマスターしたけど、「ブルー・スウェード・シューズ」のソロはどうしても弾けなかった。あの頃、僕はチャック・ベリー、スコッティ・ムーア、そしてカール・パーキンスからすごく影響を受けていたんだ。1971年

ミミがよく言っていた。"ギターも趣味としてはいいのよ、ジョン。でも、それで生活していくことはできないでしょ"ってね。アメリカのファンがこの言葉を金属プレートに彫って、ミミにプレゼントしたことがあるんだ。ミミはそれを、僕が買ってあげた家で、いつでも見えるところに飾っていたらしい。1972年

イギリスでロックン・ロール・ブームが起こった頃……僕が15歳だったから1955年かな、もうひとつ"スキッフル"と呼ばれる大きなブームがあった。これはフォーク・ミュージックの一種で、アメリカのフォークにウォッシュボードを加えて演奏するという感じだった。15歳を過ぎた子どもたちは、こぞってグループを作り、演奏を始めたんだ。1964年

カントリー・ミュージックも聴いたよ。15歳の時にハンク・ウィリアムズの物真似から始めたんだ。まだギターは弾けなかったけど友だちのギターを借りてね。そいつはレコード・プレイヤーを持っていたから、よく彼の家へ寄って、ロニー・ドネガンやハンク・ウィリアムズの曲を歌った。レコードは彼が全部持っていた。「ホンキー・トンク・ブルース」も演奏したよ。プレスリーはカントリー・ロックという感じだったけど、カール・パーキンスは正真正銘のカントリーだった。バック・ビートもはっきりしていたしね。1973年

僕らは学校仲間でグループを作り、言い出しっぺの奴の家に集まった。そいつは結局グループに入らなかったけどね。メンバーはエリック・グリフィスがギター、ピート・ショットンがウォッシュボード、レン・ギャリーとコリン・ハントンがドラム、ロッド・デイヴィスがバンジョーで、あとはポールと同じ学校に通っていたアイバン・ボーンという奴がいた。

エンパイア・デイの祭典の日、僕らはローズベリー・ストリートで初めて人前に出た。通りのトラックの荷台に乗って演奏したんだ。ノー・ギャラでね。その後パーティーとかの演奏で何シリングかもらったことはあったけど、ほとんどは自分たちの楽しみで演奏していた。金をもらえなくても少しも気にならなかった。1967年

ビートルズというグループ名になる前はクオリーメンと名乗った。それは、僕が通っていたグラマー・スクールの"クオリー・バンク"という名前からとったんだ。学校にはラテン語で書かれた校訓みたいなものがあって、"この石（クオリーは採石場の意）から真実を見つけよう"という意味だった。石、つまりロックというのが象徴的だろ!

僕たちは勉強なんてしなかったからいつも赤点だったし、ピートはいつも将来のことを気にしていた。僕は"大丈夫、何とかなるさ"って連中によく言ったものだ。僕はいつも数人の連中をひき連れていた。彼らは役立つ連中で、僕の言うとおりに動いた。ほとんどの場合、僕がボスだった。それがやがてビートルズという仲間になったんだ。

僕はいつも、どうにかなると信じていて、将来の計画も、試験勉強も、貯金も何にもしなかった。そんなことができるタイプじゃなかったから、他の子の親たちは"あいつとはつきあうな"と言っていた。親たちは、僕がトラブル・メイカーで、社会に適応できず、自分の子どもに悪影響をおよぼす人間だということを、本能的に見抜いていたんだ。実

CamScannerでスキャン

歌。そうだったのさ。僕はあらゆる友だちの家庭をぶち壊そうと必死だった。僕にはいわゆる家庭がなかったから。羨ましさも多少はあったと思うよ。でも僕にはおばもおじもいて、素敵な郊外の家もあった。僕が孤児だったみたいなイメージはでたらめだ。僕は、おばやおじにちゃんと面倒みてもらっていたんだから。1980年

学校では勉強もせず、ただブラブラしていただけだった。GCE試験（大学入学資格を得るための試験）は3科目受けたけど、見事に全滅。模擬試験では英語と美術だけは合格点がとれたんだけど、本番では美術すら合格できなかった。1967年

美術の試験に落ちたのにはがっかりしたけど、きっぱりあきらめがついた。試験で求められるのは、いかにきれいに描けているかだとわかったから。僕はきちんと描こうなんて考えず、たくさんの色をごちゃ混ぜにしてみた。試験に出された課題の中に、"旅行の絵を描きなさい"というのがあったので、僕は背中が曲がっていて全身にイボのある男の絵を描いたんだ。案の定そういう絵は好まれなかった。1967年

[illegible]

GCE試験に受かったところで何も始まらないし、知識を詰め込めば先へ進めたのかもしれないけど、自分にはこの先、成し遂げるべき何かが待っているという予感があって、それがこの試験でないことだけは確かだった。でも15歳になってみると僕はまわりの馬鹿な連中のひとりでしかなかった。そこで歌を作ろうと決心して、チャレンジしてみたけど何も変わらなかった。自分の中に眠る才能を見い出そうと、くだらないことをいろいろやってみたけど、愉快に過ごすことと、怠けること以外に才能はないみたいだった。1967年

僕はいつも、有名なアーティストになるんだろうと思っていた。そのためには大金持ちの老女と結婚するか、創作活動を支えてくれるパトロンを見つけるしかないと思っていた。ところが、ロックン・ロールと出会い"これぞ求めていたもの"と悟った僕は、結婚のこともパトロンのことも考える必要がなくなった。1970年

自分が何になりたいかはよくわからなかったけど、ゆくゆくは変わり者の億万長者になると思っていた。何が何でも金持ちになりたかったんだ。そのためなら悪党にだってなる気だった。僕の絵に金を出してくれる物好きはまずいなかったから。でも、悪党になるには臆病すぎた。仲間と面白半分にある店へ盗みに入る計画を立てて、夜中に下見に行ったりしたけど、実行できなかった。1967年

"あなたもついにそうなる日が来るのね"とミミから言われていたとおり、僕は文字通りテディ・ボーイになった。ミミ以外の人間はみな、僕に愛想を尽かしたみたいだった。ポールと出会ったのはそんな頃さ。1967年

ポールにひき合わせてくれたのはアイバン・ボーンだった。アイバンが言うには"ポールはいつも音楽に夢中で、僕らのグループにもひとりくらいそんな奴がいてもいいんじゃないか"ということだった。アイバンは、僕らがウールトンで演奏した日にポールを連れてきた。その時のことは、ポールも僕もよく覚えている。その日は天気がよくて暖かかったから、お客もたくさん来ていて、クオリーメンは仮設ステージの上で演奏していた。1967年

それは教会のガーデン・パーティで、僕がずっと好きだった「ビー・バップ・ア・ルーラ」をステージで初めてやった日だった。1980年 アイバン・ボーンがポールを連れてきて、"君たちはウマが合うと思うんだけど"って言ったんだ。1975年 ステージのあと、僕はポールと話をし、彼は楽屋でエディ・コクランの「トゥエンティ・フライト・ロック」を弾いて、こいつはすごい才能の持ち主だと思ったよ。1980年

ポールはギター、トランペット、それにピアノもプレイできた。僕以上の才能があったとは言わないが、僕よりいい音楽教育を受けていた。その頃、僕はハーモニカは吹けたが、ギターはふたつのコードしか弾けなかった。おまけに、バンジョーみたいにチューニングしていたから、弦が5本しかなかった。ポールはちゃんとしたギターの弾き方を教えてくれたけど、あいつは左利きだからコードの押さえ方が正反対なんだ。僕は家に帰って逆さまにして覚え直した。とにかくあの日、僕はステージに立っていて、5弦のバンジョーみたいに弾いていた。そして、お客だったポールが僕に会いに来た

ポールは僕の弾いているコードは正しくないと言った。あいつの親父に言わせれば、バンジョーのコードとしても間違っているということだった。僕は正しいと思っていた。ポールはその時すでに、14ポンドはするという、かなりいいギターを持っていた。あいつは、父親からもらったトランペットと交換で、そのギターを手に入れた

んだ。[illegible]

ポールの「トゥエンティ・フライト・ロック」に感心させられた。[illegible]

[illegible]

[illegible]

最初に会ったら、僕はポールの[illegible]"グループに入らないか"[illegible]もった。
と、僕の記憶ではそうだ。[illegible]

ポールはトランペットを[illegible]

[illegible]

それから、ポールの紹介でジョージがやって来た。[illegible]
今度は、ジョージをメンバーに加えるべきかどうか、決断を迫られた。僕はジョージの「ローンチー」の演奏を聴いて、範囲を広げることにし、これでビートルズの3人が集まった。他のメンバーは、いつの間にかやめてしまったんだよ。[illegible]

ジョージを誘ったのは、僕らより多くのコードを知っていたからだ。あいつにはコードをたくさん教わった。ポールのクラスメイトにコードを見つけ出すのがうまい奴がいて、そうやって覚えたコードがリバプール中に広まるんだ。僕らは新しいコードを覚えるたびに、それを使って歌を作った。

僕らはよく学校をサボっては、午後ジョージの家へ遊びに行った。ポールもベビーフェイスで、10歳くらいにしか見えなかったんだけど、ジョージはさらに若く見えて、最初は年を聞く気にもなれなかったよ。使い走りなんかしていて、まるっきり子どもに見えた。一度、一緒に映画に行かないかって誘われたけど、僕は忙しいからって断ったことがある。つきあうようになってからも、どうもよくわからない奴だった。ミミに言わせると、ジョージはリバプール訛りのボソッとした喋り方をするため不興をかっていたんだ。"あんたはあんな貧乏人タイプが好きなのね、ジョン"って、よく言われたよ。1967年

ポールと僕はすぐに仲良くなった。でも古くからの仲間がやめていき、ポールやジョージのような新しいメンバーを迎えて最初は少し不安だったけど、すぐにうまく運ぶようになった。「トゥエンティ・フライト・ロック」のような本格的なロックン・ロールを演奏し始めた……って言うのもちょっと変なんだけど、その頃はまだ自分たちはスキッフル・グループだと思っていたんだ。「レッツ・ハヴ・ア・パーティ」はいつも僕の大好きな曲だった。1980年

これといった目標もなくリハーサルするのはあまり発展的じゃないんだけど、僕らはただ自分たちが楽しむために練習をしていた。場所はたいていメンバーの誰かの家だった。練習中はずっとアメリカの最新ヒットをかけっぱなしにして、同じようにかっこよく弾こうとしていた。1980年

ダンス・ホールに演奏に行くとバリバリのテディ・ボーイたちが敵意の目で見るんだ。女の子たちがみんなバンドにばかり注目するからね。もみあげの髪をばっちり決めて演奏してるもんだから、かっこよく映るんだよ。恐ろしいことにあいつらは演奏が終わって帰る頃に僕らを襲ってくるんだ。だから15歳とか17歳のバンドは、ギターを抱えて逃げまわることになるのさ。一番狙われたのはドラマーだよ。ドラム・キットのせいで身動きがとれないからね。僕らは必死に走ってバスに飛び乗る。車は持ってなかった。僕はギターと一緒にちゃんとバスに乗ることができたけど、ウッド・ベースを抱えたメンバーがよく捕まった。僕らは連中めがけてベースや帽子を投げつけ、彼らがそれを観戦している間に、僕らは逃げるというわけだ。1970年

クオリー・バンクを卒業すると僕は、うまくすれば素敵な女の子たちをモデルに絵入りポスター用の絵が描けるかもしれないという期待を抱いて、リバプール・カレッジ・オブ・アートに進学した。1980年
何年か前に"母校をもう一度見に来ませんか"みたいな誘いを受けたことがあったけ

CamScannerでスキャン

何年か前に“母校をもう一度見に来ませんか”みたいな誘いを受けたことがあったけど、通ってた頃に十分見たからもうたくさんだ。すごくいい思い出はないけど、それなりに思い出はちゃんとある。

クオリー・バンクのポブジョイ校長が、僕をアート・カレッジに推薦してくれた。校長は“あそこへ行かなかったら、この生徒の人生は終わってしまう”と言って、僕が入学できるように取りはからってくれたんだ。僕はアート・カレッジでユーモアのセンスにさらに磨きをかけ、おもしろい連中と知り合い、大声で笑い、ロックン・ロールを演奏した。もちろん、僕はグラマー・スクールにいた頃もずっとロックン・ロールを演奏してたよ。ロックン・ロールの基礎を養うためにね。1964年

僕は決して熱心な学生ではなかったけど、まわりのみんなが年寄りみたいに思えたから、僕は自分にしかできない何かを残すためにがんばろうと思った。結局、5年間在籍して商業美術を勉強した。1963年

自分は他の分野では成功する見込みがないし、僕にできるのはおそらくこれしかないと思ってアート・カレッジに行ったんだ。でも、ここでもまた落ちこぼれてしまった。ものぐさな性格だからね。1964年

カレッジでの生活があまりに自由だったから僕はだんだんクレイジーになっていった。

ポールとジョージがまだグラマー・スクールに通っていた頃、僕はすでにアート・カレッジの学生だった。高校生と専門学校生ではかなりの違いがあって、その頃僕はすでに性体験もあったし酒も飲んでた。いろんなことを経験ずみだった。1980年

アート・カレッジに入学した頃は、僕はみんなからテディ・ボーイだと思われていた。そのうちにまわりに合わせて少しは芸術家っぽくなったけど、服装は依然としてテディ・ボーイ風で、黒のジャケットに細いズボンをはいていた。1967年 僕は表向きテディ・ボーイを真似ていたけど、心の中ではテディ・ボーイと美術学生のどっちにするか思い悩んでいたんだ。だから、ある週はアート・カレッジにふさわしいネクタイをして髪も普通に下ろし、次の週は革のジャケットに細いジーンズをはいて、という感じで学校へ通っていた。1973年

講師のアーサー・バラードはいい先生だった。もう少し服装を変えなさいとか、ズボンをもう少し太めにしなさいとか注意されたけど、他の先生が僕を相手にしていない時でも、いつも僕をかばい続けてくれた。でも僕はテディ・ボーイのふりをしていただけで、ただのロッカーだった。

勉強は嫌でたまらなかったし、イラストか油絵でもやればカッコよかったんだけど、何の取り柄もなかった僕はレタリング科に編入させられた。あそこはくだらない連中ばかりでレタリングをやるくらいならスカイ・ダイビングでもやった方がましだった。僕は試験という試験でみんな不合格になった。それでも学校をやめなかったのは、就職するよりはましだったからだよ。1967年

僕は抽象画なんて簡単だと言って、そこら中に絵の具をぶちまけた。まわりのみんなは、そんなのクズだと言うんだ。“説明してくれよ”と言ったら、みんなからクソミソにこきおろされた。1964年

僕は油絵をやるようになった。ほんとは僕は絵描きじゃなくて、ブック・イラストレーターを気取っていたんだけど、その頃はイラストにあまり興味がなかったし、油絵の方がずっと楽しかった。友だちにも油絵を描く奴が多くなったこともあって、僕も油絵の道に進もうかと思ったけど、まともな作品ひとつ仕上げられなくてね。自分のキャリアにとって何のプラスにもならなかった。1965年

そのうち何とかなるさという気がいつもしていた。自信がぐらつく時もあったけど、やがて、何かが起こると信じていたんだ。1967年

17歳の僕には失うものなんて何もなかった。だから地震とか革命が起きて、その隙に盗みでもできればいいな、なんて思っていた。今でも同じさ。死にたくはないし、肉体的な苦痛もごめんだが、世界中がむちゃくちゃになるのなら、全員が苦しみから解放される。何の問題もなくなるんだよ。1970年

その週末は、僕はジュリアと“トゥイッチー”と一緒だった。警官が事故を知らせに玄関先にやって来た。まるで映画のワン・シーンみたいに、そうなるのが当然という感じで、“君が彼女の息子さん？”って。それから警官は事故の話を切り出し、僕らふたりは真っ青になった。1967年

母は僕が住んでたおばさんの家を訪ねたあと、非番の警官が運転する車にはねられて殺された。酔っぱらい運転だったんだ。母はただバス停に立っていただけなのに、そこへあいつの車が突っ込んで来たんだ。1980年

最悪の出来事だった。数年前から、僕とジュリアはほんとに親しくなり、理解し合い、いい関係を築いていた。ジュリアはすばらしい女性だった。“クソッ”、何もかもこれでダメになった。自分が責任を負うべき相手はもう誰もいなくなった。

“トゥイッチー”は僕以上にショックを受けたようだったが、“これから誰が子どもたちの面倒を見ればいいんだ”なんて言いやがった。汚ない利己主義者め。

僕らはタクシーでジュリアの遺体が安置されたセフトン総合病院へ向かった。僕はジュリアの姿を見るのが恐くてヒステリックになり、もっと急げと運転手をせかし、怒鳴りつけた。運転手はぶつぶつ文句を言うだけだった。僕は病院へ入って行くことができず、“トゥイッチー”はひとりで入って行った。彼もすっかり打ちひしがれていた。1967年

それは、僕にとってふたつめの大きな心の傷となった。僕は母を2度失った。最初はミミおばさんの家にあずけられた時。そして2度目は17歳で、母はほんとにこの世からいなくなってしまった。まだ10代のロックン・ローラーで、アート・カレッジの生徒だった僕が、母親との関係をやり直そうとした矢先に殺されてしまったんだから、もともと反抗的な僕はますます反抗的になっていった。ものすごくショックでとにかく辛くてやりきれなかった。1980年

“マミーが死んだ(My mummy's dead)”と言ってみたら、気持ちが楽になったんだ。“母は死んだ(My mother died)”とか、“母は僕にあまり良くしてくれなかった”とか、そんな言い方をするよりも(人は自分の親に現実とは違うイメージを持ちたがるもの)。それで事実を打ち消すことはできないけど、楽にはなった。何よりもまず受け入れることから始まるんだ。僕はずっと母の死を認めることができなかった。あまりにつらくて悲しい出来事だったから、思い切り泣いたり叫んだりする前に、さまざまな感情が凍りついてしまってね。人には感情を堰きとめる力があって、たいていはそれに身を委ねてしまう。今、僕の中で長い間閉ざされていた感情があふれでていて、とめどなく流れだそうとしてる。でも、ギターを手にするたびに母のことを歌いたいのかどうかはわからない。今はもっと別の形で表現してるんだと思うけど。

僕は芸術とはそもそも“苦痛を表現するもの”だと思う。芸術家にとっては、自分のやりたいこと、思うこと、考えることが人生そのものなんだ。だから芸術家はそれが人から責められても、普通の人々が辛くて目をそむける“真実”に目を向け、自分の生き方として表現してしまうんだ。

子どもの頃、人は心にたくさんの傷を負い、心の奥深くにしまい込んでしまう。長い間トイレに行かなかったり風呂に入らなかったりすると、老廃物が体内に蓄積されてしまうのと同じように、そうした感情が何年もかかって積もり積もってしまい、形を変えて外に噴出してしまう。暴力とか、荒廃とか、偏見とか、そんな形でね。1971年

17歳の頃の僕は現実的な考え方に凝り固まってしまい、もしうまくいかなかった時のために何かやっておいた方がいいのでは、と考えるようになっていた。1969年

いつも神というか、人間の力を越えた何かが存在するのではないかと思っている。自分は無神論者だけど、そういうものの存在は信じている。だから優しい気持ちになれるんだ。もちろん、物事に嫌悪感を抱くことだってあるよ。僕は自分より努力しない奴が大嫌いだし、まあ、あまりここで大きな口をたたくつもりはないけどね。僕だって逃げ出したことはあるしね。この世の中は、狂った連中の狂った目的のために動かされてるんだよ。

12歳から16歳くらいの間、ずっとモヤモヤ気にしていたのは、そのことなんじゃないかと思う。僕は今まで、さまざまな形で自分の言いたいことを表現してきた。僕が言いたいことはいつも同じだ。今ならそれを言葉で伝えることができる。つまり、この世界は狂った目的を持つ狂った奴らに動かされているんだ、とね。でもそれを表に出すといつも、おまえこそ狂人だとつまはじきにされてしまうのさ。それが狂った奴らのやり方なんだけどね。1968年

僕は死を恐れていない。死ぬ覚悟はできているし、もともと死など信じていないんだから。死とは、ある車を降りて別の車へ乗り替えるようなものさ。1969年

カレッジにいた頃は、ちょっとヤケになったこともある。1980年 酒に酔って電話ボックスを壊したりね。リバプールの通りでは、郊外じゃなければ道路際を歩いちゃいけない。キャバーン・クラブにたどり着くのなんて至難のわざだ。日によってはランチ・タイムでもね。とにかく油断しちゃいけない場所なんだ。1975年

長い酒宴をずっと続けているような感じだった。18や19になると、あまり飲みすぎたり、身体を痛めつけたりしないようになるもんだけどね。カレッジにいた頃は、飲むといつも少し乱暴になった。でも、インド人とアラブ人の混血のジェフ・モハメッドという友だちがいてね。もう死んじゃった奴なんだけど・・・・(奴の魂が安らかでありますように)、僕のボディ・ガード役を務めてくれていた。僕がとんでもないことに足を踏み入れてしまうと、いつも助け出してくれたんだ。1980年

みんなが集まるクラブのひとつに、ジャカランダというのがあった。アート・カレッジのすぐ近くで、リバプールのど真ん中にあってね、本格的なバンド活動をする前によく行っていたよ。あの頃はまだ僕とポール、ジョージの3人だけだった。1974年

僕らが初めて録音したのはバディ・ホリーの「ザットル・ビー・ザ・デイ」という曲だった。片面にはポールの作った「イン・スパイト・オブ・オール・ザ・デインジャー」を録音した。1974年

僕はグラマー・スクール時代より自信がついてきて、ますますミミを無視するようになった。外出の時間も長くなったし、服も好きなものを着た。金はなかったから、借りる

CamScannerでスキャン

か、巻き上げるしかなかった。ポールにもしきりに、親父なんか無視して好きな服を着ろってけしかけていた。1967年

ポールは親父に逆らってまで細いズボンをはこうとはしなかった。あとでわかったことなんだけど、彼の親父は陰で僕を息子の仲間から追い出そうとしていた。ジョージにまで"ジョンとつきあうのはやめた方がいい。面倒ばかり起こしているじゃないか。ちゃんと髪を切って、普通のズボンをはきなさい"って言っていたらしい。きっと僕が悪の元凶だったんだね。一番年上で、何をするにも先頭に立っていたからね。1972年

めちゃくちゃな生活だった。ガンビア・テラスのぼろアパートで4ヵ月は暮らしたと思う。ギターの練習と、絵を描くことに明け暮れていて、汚ないごみ捨て場のような感じだったね。同じ部屋に7人は寝泊まりしていて、ベット以外何もない、ものすごい生活環境だった。僕らはただのらりくらりと過ごしていて、そこが家だという感覚もなかった。他の奴らは少しはきれいにしようとしていたけど、僕はまるで気にかけなかった。一度だけ、古いじゅうたんか何かを買ったことはあるけどね。ハンブルクへ行った時、自分のがらくたは全部あそこに置いていった。1963年

同い年の友だちにブルース・フリークがいた。彼のおかげでブルースに目ざめたんだ。ロックン・ロールも理解していて、エルヴィスやファッツ・ドミノやリトル・リチャードの良さもちゃんとわかっているんだけど、彼は"これ聴いてみな"ってしきりにブルースを勧めるんだ。ブルースを好きになったからといって、僕のロックン・ロールに対する愛情が消えることはなかった。僕の意識の中にブルースという新しい引き出しができたって感じだった。1980年

ブルースは本物だ。決して邪道なんかじゃないし、それについて思案したり、概念にとらえるべきものでもない。——例えてみれば、椅子なんだ。椅子のためのデザインでもなく、上等なものだとか、大きいとか、革製だとか、模様がどうとか、そんな問題じゃなくて、本来の目的、つまり座るためにある椅子。見たり、鑑賞したりするもんじゃなくてね。ただ座るためだけにある音楽なのさ。1970年

カレッジではブルースを演奏するようになると少しずつロックン・ロールも演奏させてもらえるようになった。カレッジのレコード・プレイヤーではトラディショナル・ジャズしかかけさせてもらえなかったから、生徒会の役員に立候補してロックン・ロールを認めてもらおうとしたけど、ブルースをやって俗物の仲間入りをしたってことかな。レッドベリーとか、当時流行ってたやつをね。1969年

シンシアと出会ったのもアート・カレッジ時代だった。シンシアはホイレイクの出身で、いつもつんとすましていた。友だちのジェフ・モハメッドと一緒によく彼女をからかったよ。彼女の口調をまねて"静かにしてよ"と言ってみたり、"下品な冗談はやめろ。シンシア様のお目見え"とか怒鳴ったりしてね。クラスのダンス・パーティの時、酔った勢いでシンシアにダンスを申し込んだ。その前からジェフがしきりに"シンシアはおまえのことが好きなんだぜ"と言ってたんでね。踊りながら、明日のパーティに行かないかと誘ったら、彼女は婚約してるから行けないって言うんだ。

シンシアを連れ出すことができて、僕は勝ち誇った気分だった。僕らは一杯やってから、フィッシュ&チップスを買って、スチュ(スチュアート・サトクリフ)と一緒に住んでいたアパートへ戻った。

僕は自分に自信がなかったから、シンシアと少しでも関わりのある男に嫉妬し、彼女に絶対の信頼を要求した。ヒステリックになり、イライラをことあるごとに彼女にぶつけた。一種のノイローゼだったんだ。それが問題で一度、彼女が僕のもとを去ったことがあった。ショックだったよ。彼女なしではやっていけなかった。

2年近く、僕はわけもわからず無性に腹が立っていた。だから酔っぱらうか、暴力に訴えるかのどちらかだった。他の女の子に対しても似たようなものだった。当時の僕はどうかしてたんだ。1967年

大切なことは何ひとつ教わらなかった。教えられたのは恐れと憎しみだけ。とりわけセックスに対しては。1978年

ティーンエイジャーの時に見た映画の中では男は女を殴ってばかりいた。それが強い男だった。女性の顔に平手打ちをくらわせ、乱暴に扱うのが男のやり方だ……ハンフリー・ボガートだとかそんなのばかり見て育ったから、そこから抜け出すのに長い時間がかかった。現実じゃないのにね。

それで"同じことをリンゴやポールやジョージに言ったら、どうなるだろう"と考えてみた。"あれを取ってこい"、"やかんを火にかけろ"、"玄関に誰か来たぞ"……いつも女性に対して言ってるのと同じようなことを彼らに言ったら、たちまち顔にパンチが飛んでくるはずだろ。1972年

子どもの頃は決して辛いことばかりじゃなかった。"ビートルズの4人はスラム街から這い上がってきた"みたいなことがアメリカのファン向けの雑誌に書いてあったけど、僕はいつもきちんとした服を着て、腹もすかせていなかったし、ちゃんと学校にも通っていた。イギリスの中流階級の子どもとして育てられ、ジョージ、ポール、ジョンはグラマー・スクールに通っていた。そこがビートルズの違うところだった。それまでのロックン・ローラーは黒人で、アメリカ南部の田舎町か、都会のスラム出身だった。そして、白人の連中はエルヴィスみたいなトラックの運転手だ。でもバディ・ホリーは明らかに僕らと同類だ。読み書きもできて、ある程度教養のある郊外の子どもだった。ビートルズもちゃんとした教育を受けていて、トラックに乗っていたわけじゃなかった。ポールはいつも優等生で大学に行こうと思えば行けたんだ。試験にも受かったし、たとえば……マッカートニー博士にだってなれたはずだ。僕だってがんばればなれたかもしれないけど、全然勉強しなかったからね。1980年

僕がアート・カレッジに行くと決めた時、一緒に学校を卒業した仲間の中には、すぐに9時から5時の仕事についた奴もいたけど、みんな3ヵ月もたたないうちに老人のようになってしまった。僕には無限の可能性があるんだ。自分の人生ですばらしいと思うのは、オフィスのような場所にしばられていないことだ。今、この瞬間を生きるというのが僕の主義。先の計画を立てるのは性に合わない。

ビートルズがなぜ生まれたかは、誰にもわからない。それは自分がなぜこの道を行くのか、そしてなぜまた別の道を行くのか、その答えを探し求めていくようなものだ。僕がリバプールで生まれたことや、クオリー・バンク・グラマー・スクールに通っていたこと、そしてオスカー・ワイルドやホイッスラー、フィッツジェラルドそしてブック・オブ・ザ・マンス・クラブの本がずらりと並んだ本棚のあるおばさんの家に住んでいたということ……、すべてが関係してるんだろう。1980年

CamScannerでスキャン

PROGRAMME

STALLS — SIDESHOWS — ICE CREAM — LEMONADE

Teas and Refreshments in large Marquee situated behind the Hall

2.00 p.m. PROCESSION leaves Church Road, via Allerton Road, Kings Drive, Hunt's Cross Avenue, returning to the Church Field.
Led by the Band of the Cheshire Yeomanry.
Street Collection by the Youth Club during the procession.

3.00 p.m. CROWNING OF THE ROSE QUEEN (Miss Sally Wright) by Mrs. Thelwall Jones.

3.10 p.m. FANCY DRESS PARADE.
Class 1. Under 7 years.
Class 2. 7 to 12 years.
Class 3. Over 12 years.
Entrants to report to Miss P. Fuller at the Church Hall before the procession.

3.30 p.m. to 5.00 p.m. MUSICAL SELECTIONS by the Band of the Cheshire (Earl of Chester) Yeomanry. Bandmaster: H. Abraham.
(By permission of Lt.-Col. G. C. V. Churton, M.C., M.B.E.)

4.15 p.m. THE QUARRY MEN SKIFFLE GROUP.

5.15 p.m. DISPLAY by the City of Liverpool Police Dogs. By kind permission of the Chief Constable and Watch Committee.

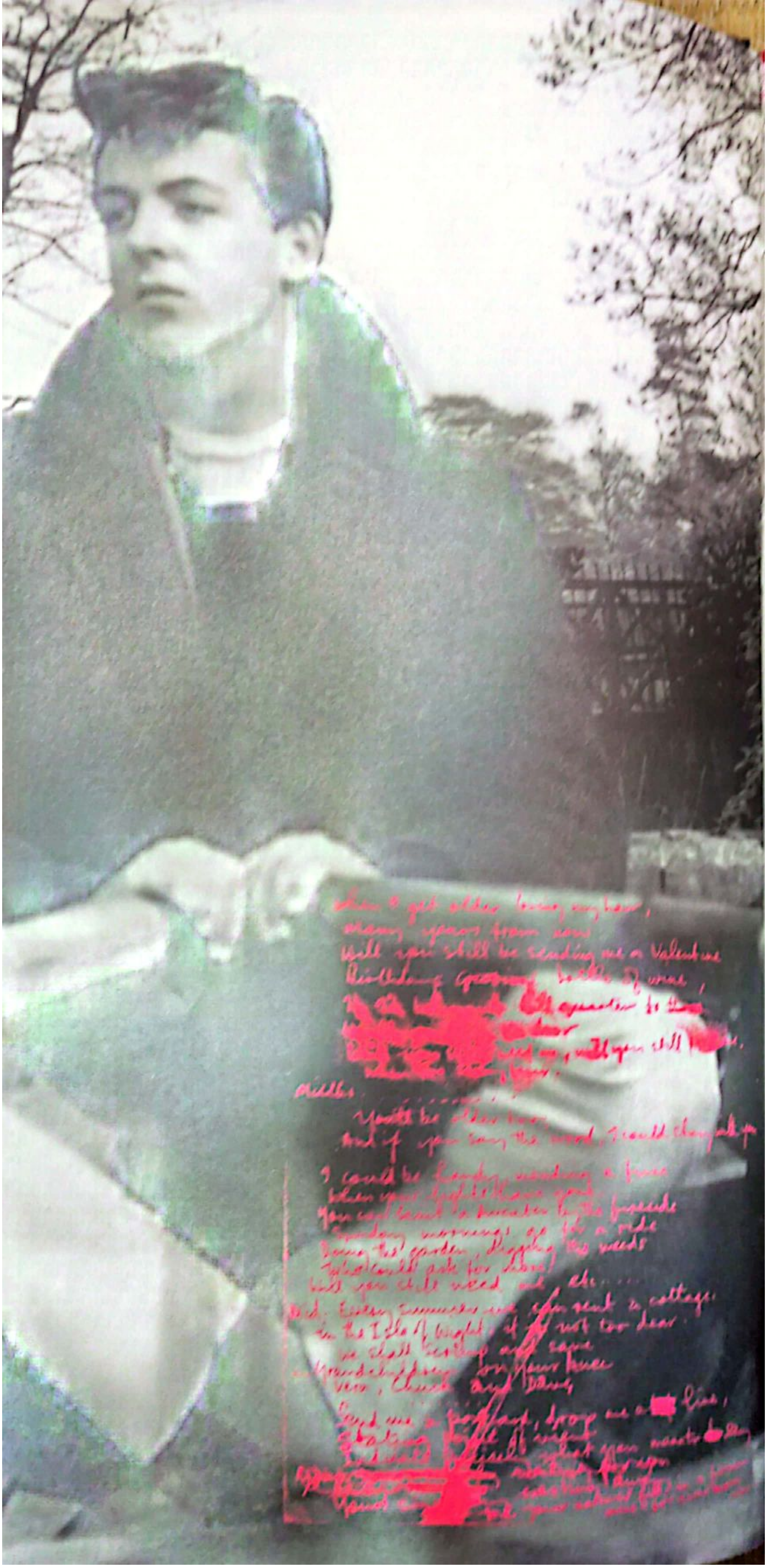
5.45 p.m. THE QUARRY MEN SKIFFLE GROUP.

8-0 p.m. GRAND DANCE in the CHURCH HALL

GEORGE EDWARDS BAND also *The Quarry Men Skiffle Group*

TICKETS 2/-

REFRESHMENTS AT MODERATE PRICES



CamScannerでスキャン

I WAS BORN IN WALTON HOSPITAL ON 18TH JUNE 1942.

僕は1942年6月18日に
ウォルトン病院で生まれた

PAUL McCARTNEY

母はカトリック教徒、父はプロテスタントだった。両親は結婚したのが遅かったので、僕はふたりが40歳の頃に生まれた。母の仕事は助産婦で、どこで働こうとも助産婦専用の住宅を与えられて住むことができたけど、引っ越しが多く、まるで幌馬車に乗った開拓者一家みたいだった。ひとつの家に落ち着いたと思ったら、すぐ次の家に引っ越しって感じで、まだ道路もない頃のスピーク郊外の家にも住んだことがある。こうして住むようになったリバプールは当時、まだ開発途上の街だった。引っ越しは多かったけど、みんな慣れてしまってたから、僕はそれなりに穏やかな少年時代を過ごしていた。僕には1歳半年下のマイケルという弟がいる。

リバプールは独自の文化を持つ街で、人々の言葉には訛りがある。そのせいか街の中心から半径10マイルを越えて外へ出ると、"ランカシャーの奥地から来た人"みたいな目で田舎者扱いされたものさ。リバプールで育った者は、多かれ少なかれそういう思いをしたことがあるはずだ。

子どもの頃のリバプールには路面電車が走っていた。終点まで来ると運転手は反対側の運転席へ移り、今度は逆方向に電車を走らせていた。当時はまだ戦争の爪跡が街のあちこちで見られ、空襲で焼け野原になった空地は子どもの格好の遊び場になっていた。僕は大きくなるまで、"焼け跡"という言葉は"遊び場"という意味なんじゃないかと思っていたくらいだ。"どこへ遊びに行くの？"——"ボンビー(焼け跡)さ"というふうにね。そういえば"シェル・ショック(戦争神経症)"という言葉もよく耳にした。僕らは深く意味も考えず、フラフラと歩いている復員兵を見かけると、みんな"あの人どうしたの？"——"シェル・ショックだよ"などと気軽に言っていたんだけどね。

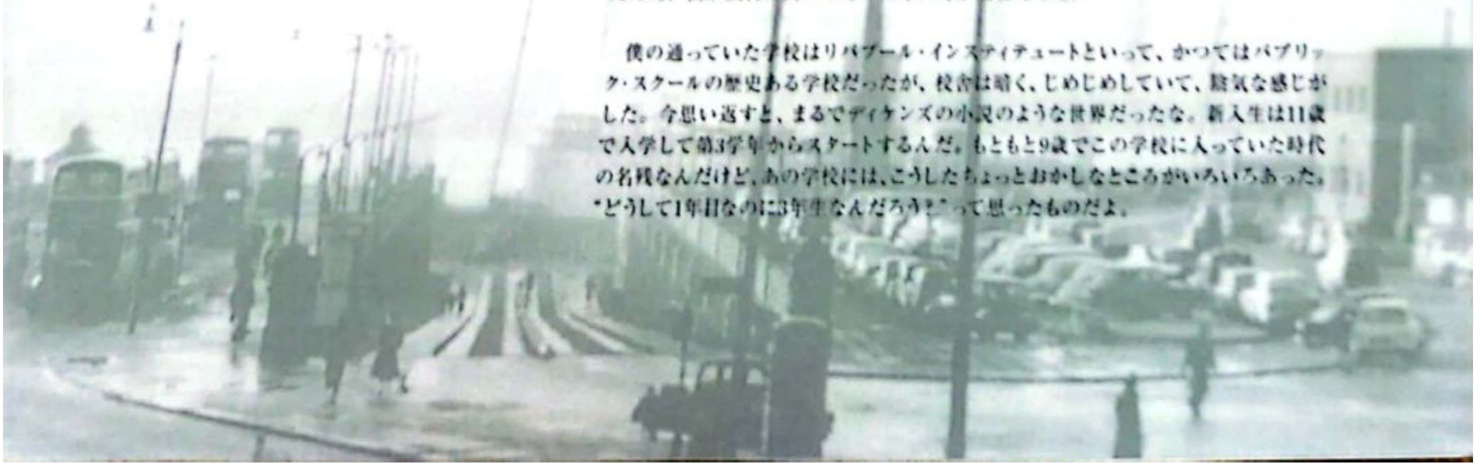
母は看護婦でリバプールの
ファゼイカリーの出身。
父はエバートンで生まれ、
14歳で学校を出て
綿花のセールスマンをしていた。

リバプールの冬はまるでシベリアのように厳しかった。半ズボンの膝小僧がひび割れでガサガサになり、腿の内側から膝にかけては寒さでいつも真っ赤で、風があたるとものすごく痛かった。そうそう僕は、ボーイスカウトに入ってたけど、あまりキャンプに参加しなかったからバッジの数は少なかった。あと思い出すのは、港に古くなったタイヤがものすごくたくさん積まれていて、そこでよく遊んだことだ。

港はとてもロマンチックな場所だった。友だちの父親がヘルクラネウム・ドックの現場主任をしていて、そこでひと晩泊めてもらったことがある。スペインの船が入ってきた時、僕らは学校で習い始めたばかりのスペイン語が通じるか試してみた。船員たちの会話が速すぎて全然ついていけなくて、僕は"non rapidamente"(そんなに速く言わないで)と言った。"ゆっくり"って単語がわからなかったんだ。甲板でスペイン人の男が散髪をしていたのを覚えている。

セント・ジョンズという名前の市場があった。そのあと駐車場か何かになってしまったと思うけど、そこには思い出がある……。男の声が聞こえてくる。"さあ、この皿、いくらにしようか？"。男は続ける。"これだけあれば50ポンドはするんだが、20ポンドにまけておこう。いや10ポンドだ"、"ええい、奥さん、まとめて3ポンドでいいよ"。そう言って皿を高く積み重ねるんだけど、これがまた絶妙のバランスでね。そしてまたガチャガチャと音を立てながら戻す。丈夫な皿だってことを見せたいわけだ。集まった人垣の中には必ずサクラがいて、"それください"って言うと、みんな我も我もと。財布に3ポンドが入っていなくても、別に皿が必要じゃなくても、とにかく買ってしまうんだ。すごいセールス・テクニックで、僕はすごく気に入っていた。

ダンジョン・レーンを通り、マージーの河口の灯台のある砂浜によく行った。10歳の時そこでふたりの男に腕時計を奪われた。奴らはうちの次の通りに住んでいた。奴らの家の庭とうちの庭は隣合わせだったんだ。それで僕は"パパ、あいつだよ。あいつが僕の時計をとったんだ"って父に話した。父は警察に通報し、奴らは裁判所にひき出されて、刑務所行きになった。僕も裁判所へ行って、彼らがやったという証言したんだ。僕が裁判に関わったのはその時が最初だった。



僕の通っていた学校はリバプール・インスティテュートといって、かつてはパブリック・スクールの歴史ある学校だったが、校舎は暗く、じめじめしていて、陰気な感じがした。今思い返すと、まるでディケンズの小説のような世界だったな。新入生は11歳で入学して第3学年からスタートするんだ。もともと9歳でこの学校に入っていた時代の名残なんだけど、あの学校には、こうしたちょっとおかしなところがいろいろあった。"どうして1年目なのに3年生なんだろう？"って思ったものだよ。

CamScannerでスキャン

"ジム・マックス・バンド" リバプールのボールルームにて。ドラムから右へ3人目に座っているのがジム・マッカートニー。

学校が好きという人にはあまりお目にかからないけど、僕もそれほど好きじゃなかった。でも、大嫌いというわけではなくて、楽しいと思うこともそれなりにたくさんあった。英文学の授業はいい先生だったからおもしろかったよ。嫌だったのは、何かをやりなさいと命令されることだった。

学校へ行くバスは、いつも満員だった。僕は、"特等席"に座るため、ピアヘッドまで15分歩いて始発のバスに乗るようにしていた。その特等席とは、2階の最前席か最後部席で、どちらにするかはその日の気分で決めていたんだ。少し大きくなってからは、まるでディラン・トーマスにでもなったような気分で、テネシー・ウィリアムズの戯曲を読みながら2階席に座り、パイプを吹かしたりもしたな。

僕ら兄弟は母に言われて日曜学校へ通った。我が家ではそれ以外に、宗教に関して特に何もしなかったけど、学校では人並みに朝の賛美歌を歌っていた。おかげで、好きな曲がたくさんできた。自分で曲を書き始めた頃、"この曲どう? どんな風に聴こえる?"と人に感想を求めると、"何か、賛美歌みたいだね"なんて言われたこともある。でもそれは僕にとっては最悪の評価のひとつだった。

宗教についての僕の考えは、ピアヘッドで培われた。そこはカトリックとプロテスタントが論争しているスピーカーズ・コーナーになっていた。プロテスタントの人が"我が友が言っていることは、すべて間違っている。生まれながらの罪など存在しない。我々は罪人として生まれてくるのではない"と言うと、今度はカトリックの人が"我が友は、原罪というものの存在を知らないのだ。我々は己れの罪を取り除かなければ、地獄で焼かれ永遠の苦しみを受けるのだ"と始める。ふたりともキリスト教徒なのに、絶対に相入れないんだ。アイルランド問題も中東和平問題も、同じようなものなんだろうと思う。

ポール(左)とマイケル。ふたりの息子と一緒のジム・マッカートニー。

ピア・ヘッドでの多くの宗教論争を聞きながら、僕はひとつの結論に達した。"神(God)"とは"良い(good)"という言葉から"o"の文字がひとつとれたものであり、"悪魔(Devil)"とは"悪い(evil)"という言葉に"d"の文字が加わったものだ、ということだ。人間がその長い歴史を通じて行なってきたのは、善と悪というふたつの概念を擬人化する試みだったんじゃないだろうか。それらは"エホバ"や"アラー"などさまざまな名を与えられてきたけど、もとはすべて同じなのかもしれない。僕はそんな風に考えるようになった。

11歳の頃に忘れられない出来事が起こった。両親と弟と僕でバトリンズのホリデ・キャンプに行った時のことだ。その時、ホットドック売場の前で弟が僕を撮った写が残っている――当時の僕らにはアメリカン・フードの店が一番カッコよかったんだ――まだ小さくてポッチャリした僕は、半ズボンをはいて、制服のブレザーを着てるんだ。普段は休みの日に学校の制服なんて着ないんだけど、たぶんよそ行きの服これしかなかったんだと思う。

その日は焼けつくような暑い日で、僕は学校の帽子を被ってプールの脇に立っていた。るとカリプソ・ボールルームから、5人の男たちが出てきた。全員お揃いのシャレたェックのフラット・キャップにグレーのクルーネック・セーター、チェックのショート・パ、デッキ・シューズというスタイルで、白いタオルを小脇に抱えて1列に並んでプールって行くところだった。するとそこにいたみんなの視線が、彼らを追ってるんだ。ったい誰? 有名人?"――その時僕はルックスの重要性というものに気づいたんだ。はバトリンズのタレント・コンテストで優勝したグループだった。何のグループからないけど、優勝して当たり前という雰囲気だった。

は生まれついてのミュージシャンで、若い頃はザ・ジミー・マック・ジャズ・バンドでンペットを吹いていた。父が大きなバス・ドラムの前で座っている写真を家族の誰かがくれたんだけど、これが「サージェント・ペパー」のジャケットのアイディアのもとになった。タキシードを着て座っている父は、この時24歳。隣にはジャックおじさんもいる。おじさんはトロンボーンを担当していた。メンバーはみんな家族のように親しい人たちだったようだ。

父は歯がダメになるまでトランペットを続け、その後はクラリネットをやったが、演奏はひどいもので、みんなで大笑いしたもんだ。我が家にはピアノがあって、父は家ではよくピアノを弾いていた。すごくいい音がするピアノで、今は僕が持っている。それは偶然にもノース・エンド・ミュージック・ストアズ、つまりエプスタインの店で買ったものなんだ。当時のオーナーはハリー・エプスタインで、ブライアンはその息子だ。リバプールでは、みんなどこかでつながっているんだよ。

子どもの頃の素敵な思い出って言えば、床に寝そべって、父のピアノを聴いたことだ。父がよく弾いてくれた「ララバイ・オブ・ザ・リーブス」は今でも僕の大好きな曲だ。他には父のお気に入りだったポール・ホワイトマンの曲や「ステアウェイ・トゥ・パラダイス」のような古い曲も弾いてくれた。

僕は今もピアノが大好きだ。おそらく父の影響だろう。生まれた時からビートルズの活動が本格化する頃まで、僕はずっと父のピアノを聴いてきた。「スタンプリング」みたいな古い曲を聴くと、僕の音楽的ルーツがわかると思う。とてもよくできた曲で、父は僕にこの曲の良さを説明してくれた。僕に音楽を教えてくれたのは父で、学校じゃないんだ。父も僕も音楽教育なんて受けたことがない。父はいつも、「ステアウェイ・トゥ・パラダイス」の出だしのコード・チェンジなんかを例に音楽を教えてくれた。ずっとあとになって父から、ビートルズもこの曲をやればよかったのに、って言われたことがある。もしほんとにビートルズでやっていたら、「ねえ、歌詞は"Build a stairway to paradise……"でよかったんだっけ?」なんて父に訊ねたりしてたんだろうな。

つい最近、僕が昔作った「ライク・ドリーマーズ・ドゥ」をみんなで聴いていた時に、ジョージと僕は思わず顔を見合わせてしまった。ジョージが"これ、まるで君のおやじさんがやってたあの曲……「ステアウェイ・トゥ・パラダイス」じゃないか!"って。僕の音楽性は父から受け継いだものなんだ。

父は友人のフレディ・リマーというピアニストを家に連れてきて"こいつのピアノはものすごくうまいんだぞ"って紹介した。あとで彼は、自分は君のお父さんが言うほどうまくはないよって言ってたけど、僕は幼な心に、彼の演奏を聴いて"なんてリッチで魅力的な和音なんだろう"と感動していた。父もよく弾いていた「シカゴ」みたいな古いジャズのナンバーなんだけど、それまで聴いたことのない響きだった。ふたりとも変わった拍子の曲が好きだったね。もっとも、変拍子だなんて意識はなかったんだろうけど。

父は独学でピアノをマスターしたから、僕にも教えてくれることはなかった。僕がよく"ちょっとでいいから教えてよ"と頼んでも、"習いたいなら、ちゃんと習わなきゃいけない"という返事が返ってくるだけだった。先生につけばよかったんだろうけど、僕は父が教えてくれさえすればそれでよかったんだ。でも今は父がそうしなかった理由がよくわかる。そして結局僕は父と同じように自分の耳でピアノを覚えたんだ。先生についたのはそれからだった。ところが、そこで問題があった。どんな先生かよく知らなかったし、年輩の女性の家に行くというのがどうも気が進まなかった。ガキだったせいか、老人の匂いがするようでとても居心地が悪かった。先生がいろいろ弾いてみせてくれるまではよかったんだけど、"来週までにこの曲をおさらいしてくるように"なんて宿題を出されてしまった。レッスンに行くだけでも面倒なのに、その上宿題かよ! と思った。それは僕には拷問でしかなかった。4~5週間は何とかがんばったけど、宿題がだんだん難しくなってきて、ついにギブアップ。でも、今でも僕は楽譜の読み書きができないけど、最近では楽譜が読めても自分のやってきたことは変わらなかったんじゃないかと思うんだ。

父は1曲だけ作曲をした。ずっとあとになってから、僕は父に"ねえ、パパが昔書いたあの曲、「ウォーキング・イン・ザ・パーク・ウィズ・エロイーズ」ってやつ、覚えてる?"と訊ねた。すると父は"私は書いたんじゃないよ。曲を作っただけさ"と答えた。僕は続けて父に、ナッシュヴィルで仲間たちとその曲をレコーディングしてきたんだと報告した。ひとりはチェット・アトキンス、そして彼の誘いでフロイド・クレイマーも加わり、僕はその小品を父に聴かせるために特別にレコーディングしたんだ。

父は僕に"ピアノを覚えなさい。そうすればパーティに招いてもらえるから"と言っていた。うちでは毎年大晦日になると、親戚中が集まって盛大な年越しパーティを開いていた。すごく楽しい思い出だ。

この日は僕ら子どもも、台所のカウンターの中に入って手伝うんだ。カゴがいくつか

CamScannerでスキャン

と、テーブルがちょこっとあるだけの台所でね。誰かが"ジンとあれをくれ"と言ったらそれはジンとイタリアンのことなんだとか、"ラムとブラックをくれ"と言われたらラム酒にクロフサスグリの実を添えて出せばいいとか、"ビールが欲しい"と言われたら、あの樽から取ってくるとか、"苦くないやつがいい"と言われた時はあっちという風に、何をどうすればいいのかひとつひとつ覚えていったんだ。みんな酔っぱらってメチャクチャだったけど楽しかった。ジャックおじさんは、いつもかすれた声で"よしよし、いい子だ。じゃあ、これは知ってるかな?"と言って、誰よりもおもしろいジョークを教えてくれた。一番酔っぱらっていたのは、ジャックおじさんとハリーおじさんだったね。パーティをやるのはエイントリーにあるジョーおじさんの家で、大晦日の真夜中にはいつもバグパイプの演奏があった。近所の人が吹いてくれたんだけど、それがとてもすばらしくて、ほんとに、あたたかな雰囲気のパーティだった。

大晦日のパーティの主役はずっと父だった。僕が大晦日のピアニストをやるようになったのは、父が関節炎をわずらってピアノを弾けなくなってしまったからだ。僕のいとこと結婚した、僕より年上のジャック・オリーという人がいるんだけど、彼はよく僕のためにビールを持ってきて、ピアノの上に置いてくれた。そして、立ってビールをちびちびやりながら、僕の演奏を聴いて"いいよ、いいよ、弾いてもいいよ"と言ってくれた。かけてくれた言葉はそれだけで、あとはひたすら飲みをおごってくれた。

ここしばらくは僕もその役目から遠ざかってしまっているけれど、レパートリーの中には「レッド・レッド・ロビン」や「カロライナ・ムーン」も含まれていた。ロンという愉快なおじさんがいて、よく僕にこんなことを言った。"よしよし、いいぞ。ところで「カロライナ・ムーン」は知ってるか?"、"うん、知ってる"、"そうか、でもまだ弾いちゃダメだ。俺がいいって言うまで待つんだぞ。おじさんがOKを出すからな"。そこで僕は、みんなの酔いが十分まわってくるのを待つ。パーティが盛り上がって、いい雰囲気になるまで待つんだ。夜11時になる頃、ロンは僕のところへ来て、僕の肩を叩く。"よし、今だ。弾きなさい"。そこで初めて「カロライナ・ムーン」のメロディが鳴り始め、拍手喝采となる。ロンの出すタイミングはいつもずれたことがなかった。僕はパーティのたびに、何時間も何時間もピアノを弾いたのでいい練習になった。あらゆる意味でいい訓練だった。もっとあとになって、そのような機会に僕がピアノの前に座ると、「レット・イット・ビー」のような自分のヒット曲をリクエストされるようになった。でもその場にふさわしいと思わなかったから、弾かなかったんだ。

父はクロスワード・パズルが得意で、僕たち兄弟にも語彙力の勉強になるからやりなさいと言っていた。父は社会に出たのが早かったから、自分なりの方法で知識を増やしたのだろう。父は僕に、まわりの誰も知らないような言葉を教えてくれた。例えば"phlegm"(粘液質)なんて単語の綴りを知っていたのは、クラスの中で僕ひとりだった。父は仕事を通じて尊敬できる人にたくさん会っていたから、父も母も教育や勉強することの大切さを堅く信じていた。僕の中にある向上心は、両親の影響によるものが大きい。

父はうぶなところもあって、気恥ずかしいのか、セックスについて僕に何も教えてくれなかった。それでも父は一度教えようとしたが、まるでうまくいかなかった。交尾している犬を見て、"あそこの2匹の犬を見てごらん"と父。"ああ、冷たい水でもかけてやろうか"と僕。"そうじゃなくて、私が言いたいのは・・・・"。父は何とかして説明しようとしていた。でも僕は11歳になる頃には、学校の友だちを通じてほとんどのことは知ってたんだよ。みんなで"赤ちゃんがどうしてできるか知ってる?"って夢中で話していたからね。

父は社会的な出世はしてなかったけど、やさしくて、前向きな目標を持っているすばらしい人だった。看護婦の母もすばらしい人だ。弟も僕も初めは医者になることを期待されていたけど、結局ふたりとも勉強をサボってたから、母の夢がかなうことはなかった。僕が育ったのはそういう家庭だったんだ。

ジョンといろいろ子どもの頃の話をするようになって、自分の方がずっとあたたかい家庭環境で育っていることがわかった。だから僕は何にでもオープンな性格になったんだと思う。情にもろいところや、涙もろいところがあるけど気にしてない。カッコ悪いと思う人もいるだろうけど、僕は自分のそういう部分を大切にしたいと思っている。

ポールといとこのベティ、ベティの息子テッド

14歳の時に母を失ったことは、すごいショックだった。母が亡くなった時には死因が癌だということは知らなかったんだ。

母は言葉遣いに厳しく、クイーンズ・イングリッシュを身につけさせようと一生懸命だった。そのことで、母に対してものすごく申し訳ないと思っていることがひとつある。ある時僕は、母の話し方をからかってしまったんだ。母が"ask"という言葉の"a"の音を伸ばして発音した時、僕は思わず「"aask"だって! それって"ask"だよママ」と言ってしまった。母親のプライドを傷つけてしまったんだ。母が死んで、それを思い出した、どうしてあんなこと言ったんだ。"クソッタレ、どうしてあそこでわざわざママを非難するようなことを言う必要があったんだ"。最近になって、ようやくその気持ちを乗り越えることができたと思う。

母の死によって、父はすっかり打ちのめされてしまった。それまで僕は、父が泣いたところなんて見たことがなかったからね。女性や子どもが泣くのはわかるけど、父親が泣くなんて、想像を絶することで辛かった。自分が信じてきたものが、すべて揺らいでしまうような出来事だった。でも僕は、感情に溺れまいと決心し、何とか踏んばったんだ。あの年齢で、僕は自分の心に殻をかぶせることを覚えた。

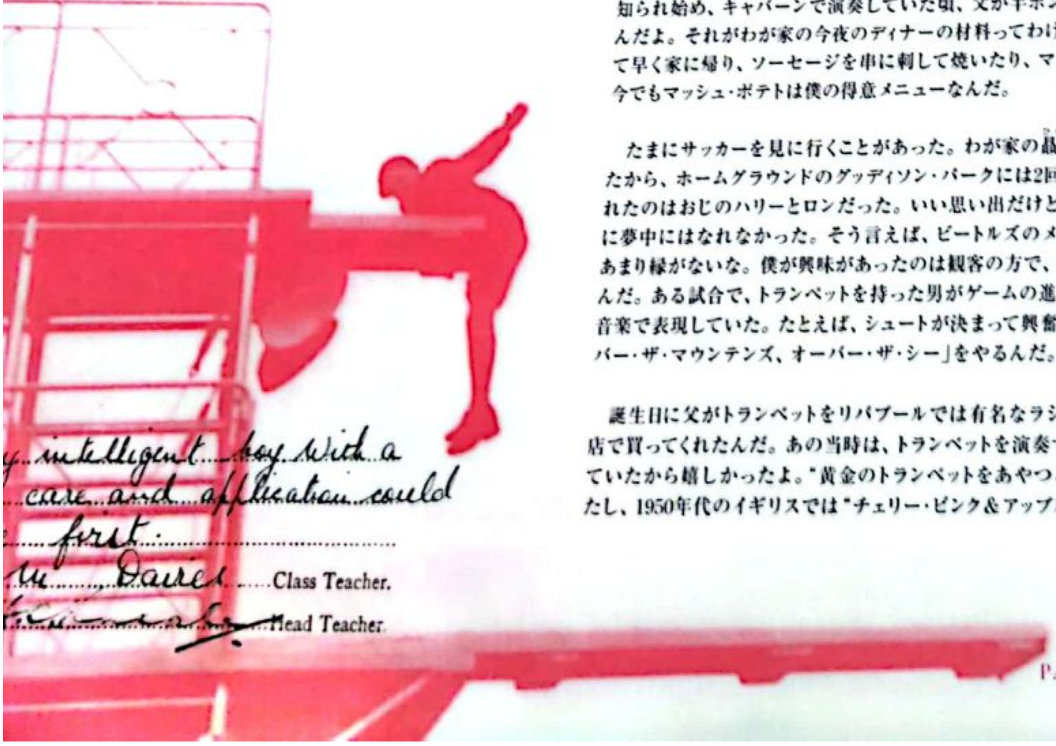
母を亡くしたことはジョンと僕を結ぶ太い絆となった。ジョンもまた、早くに母親を亡くしていたからね。僕らふたりは同じような心の痛手を受け、それを克服しなければならなかった。言葉にするには辛すぎ、悲しみを笑いとばすことで、どうにか乗り越えたんだ。それでも、ジョンや僕以外の誰かが笑うのは許せなかった。ジョンと僕は"死"をネタにして笑ったりもしたけど、それは表面だけのことで、心の底でジョンは苦しんでいた。若者は悲しみを外に出しちゃいけないと思ってたんだ。何年か経っても、幾度かふたりであの時の悲しみに襲われ、一緒に泣いたことがあった。そんなにしょっちゅうじゃないけど、いい経験だったと思う。

母がいなくなって、僕らは家事を分担した。僕の仕事は火を起こすことと、洗濯を少し。もちろん、外で息抜きをすることも忘れなかったよ。近所に住んでる、ミリーおばさんとジニーおばさんが火曜日になると来てくれて、その日は、家に帰っても何もしなくてよかったから僕にとっては週の中で一番嬉しい日だった。おばさんたちは夕食をこしらえて、僕の帰りを待っていてくれたんだ。僕は食事をして、あとは寝ちゃっただけでOKだったんだ。

おかげで、僕らはちょっとした料理はうまく作れるようになった。トマトの缶詰を煮込んで、おいしいトマト・ピューレを作ったこともある。そうそう、ビートルズとして名前を知られ始め、キャバーンで演奏していた頃、父が半ポンドのソーセージを持って来たんだよ。それがわが家の今夜のディナーの材料ってわけ。そんな日は父の期待に応えて早く家に帰り、ソーセージを串に刺して焼いたり、マッシュ・ポテトを作ったりした。今でもマッシュ・ポテトは僕の得意メニューなんだ。

たまにサッカーを見に行くことがあった。わが家の贔屓(ひいき)のチームはエバートンだったから、ホームグラウンドのグッディソン・パークには2回ほど行った。連れていってくれたのはおじのハリーとロンだった。いい思い出だけど、僕はおじたちほどサッカーに夢中にはなれなかった。そう言えば、ビートルズのメンバーは全員、スポーツにはあまり縁がないな。僕が興味があったのは観客の方で、中に必ずおもしろい奴がいるんだ。ある試合で、トランペットを持った男がゲームの進行に合わせて、自身の気分を音楽で表現していた。たとえば、シュートが決まって興奮が最高潮に達した時は「オーバー・ザ・マウンテンズ、オーバー・ザ・シー」をやるんだ。なかなかのもんだったよ。

誕生日に父がトランペットをリバプールでは有名なラシュワース&ドレイパーズ楽器店で買ってくれたんだ。あの当時は、トランペットを演奏するスターたちが脚光を浴びていたから嬉しかったよ。"黄金のトランペットをあやつる男"ハリー・ジェイムスがいたし、1950年代のイギリスでは"チェリー・ピンク&アップル・ブラッサム・ホワイト"のエ



ポールの学校時代のノートに描かれたスケッチ

ディ・カルバートがヒーローだった。他にもトランペットをフィーチャーした新しいレコードがたくさん出ていて、みんなトランペット奏者になりたがったものさ。

僕はしばらくの間トランペットを練習し「ザ・セインツ」(聖者の行進)も吹けるようになった。今でもキーがCなら吹けるよ。僕はCの音階を練習し、他にもいくつかテクニックを覚えた。でもある時、この楽器は演奏しながら歌えないということに気がついたんだよ。ずっと唇を当てているから、歌えないのは当たり前だけどさ。その頃、僕はギターをやりたいって思ってて、父がトランペットをギターに取り換えてもいいって言ってくれたので、僕は楽器店でゼニスのアコースティック・ギターと取り換えたんだ。そのギターは今も僕の手元にあるよ。

最初の1本としてはなかなかいいギターだった。僕は左利きなので、ボディを逆さまにして弾き、自分なりのやり方で左利きのコードを覚えた。あの頃はAとDとEの3つだけ知っていれば十分だった。そして曲も書き始めた。初めて作曲したのは14歳の時だ。タイトルは「アイ・ロスト・マイ・リトル・ガール」。"朝、目がさめたら頭はふらふら。そこで気づいた。あの子はいなくなってしまったんだ"という古めかしい歌詞で、ちょっと笑っちゃうような感じの曲だ。使ったのはG、G7、Cの3コードだけ。僕は、ひとつのメロディ・ラインが低い方へ流れ、それに対するもうひとつのメロディが高い方へ流れる、という音楽用語で言う"反進行"と呼ばれているパターンが好きだった。まあとにかく、最初の曲はこのとおり、可愛いものさ。この曲も含めて、初期の作品はゼニスのギターを使って作ったんだよ。「ミッシェル」、「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」なんかもそうだ。クオリーメンに入るきっかけとなった「トゥエンティ・フライト・ロック」をマスターしたのもこのギターだった。

このギターは四六時中かき鳴らしていたから、だんだんくたびれて、使いづらくなってしまったんだけど、腕のいい大工だったいとこのイアンが留め金と2インチのネジで直してくれたんだ。実にうまい具合に直って、見た目もそれまでよりよくなった。

ジョンは近所でも評判の不良少年だった。ジョンの生い立ちは、あとになって知ったんだ。僕は大人になるにつれ、ジョンがあんな風なのは子どもの頃の体験が大きく影響しているってことがわかってきた。父親はジョンが4歳の時に家を出てしまい、ジョンは一生、その時の心の傷を拭い去ることができなかったんじゃないかと思う。ジョンと話をしていてその話題になると、彼は"親父が出て行ってしまったのは、俺のことが嫌いだったからなのかな"と言っていた。もちろんそんなことはなかっただろうけど、ジョンはずっとショックから立ち直れずにいたんだ。

ジョンは母親とではなく、ミミおばさんとジョージおじさんの家で生活をしていた。ジョージおじさんが亡くなってから、ジョンは自分は男親に恵まれない運命だと考えるようになった。父親は家から離れ、おじさんは死んでしまったからね。ジョンはおじさんが大好きだったんだ。ジョージおじさんはおおらかに誰にでも優しかった。愛する人を次々と失ったことは、ジョンに大きな影響を与えた。ジョンの母親は、ジョンの言葉を借りて言えば"人の道に背く"ような生活をしていて、別の男と一緒に暮らし、娘もふたりいた。ジョンの父親違いの妹たち、ジュリアとジャッキーだ。みんないい人たちだったよ。ジョンは母親のことを愛していたし、崇拝してると言ってもよかった。僕も彼女が大好きだった。豪快でユーモアがあって、長く伸ばした赤毛がきれいだった。僕は彼女がウクレレを弾いているのを見たことがある。――今でも僕は、ウクレレを弾く人に出会うと、好感を持ってしまうんだ――でも、彼女は殺されてしまった。ジョンの人生は悲劇の繰り返しだったんだ。

ジョンが不良っぽくなったのは、母親の死がきっかけだった。リバプールの街は暴力沙汰なんてしょっちゅうで、チディ・ボーイたちがうようよいた。もしその辺の路地で奴らを見かけたら、隠れるしかない。ジョンはもみあげを伸ばし、ダブダブの長いジャケットにピッタリした細いズボンをはき、薄いソールの靴を履いていた。そして、いつも人を寄せつけないような雰囲気を漂わせていた。バスの中で、遠くからジョンの姿を見ていたけど、知り合いになる前は、恐そうな奴がバスに乗ってくるぞ、あんまりジロジロ見ると殴られるぞって思ってた。僕よりずっと年上に見えたしね。

アイバン・ボーンという誕生日が僕と同じ友だちがいた。すごくいい奴だったんだけど、残念なことにパーキンソン病にかかり、もうこの世にいない。そのアイバンはジョンとも仲が良くて、ウールトンのジョンの家のすぐ近くに住んでいた。ある日、アイバンが僕にこう言った。"土曜日に、ウールトン地区のお祭があるんだ。一緒に行かないか？"。

――僕は"いいよ、どうせ暇だし"って答えた。

それは1957年7月6日のことだった。アイバンと僕は15歳になったばかり。祭の会場では、ココナッツ落としとか輪投げなんかをやっていたけど、どれもあまり変わりばえがなく、パッとしない感じだった。野外ステージではバンド演奏をやっていて、小さな人だかりができていた。

僕らは迷わずステージの方へ行った。ステージでは、ブロンドの髪をちょっとカールさせた奴が演奏していた。チェックのシャツを着ていて、なかなかセンスのいい、イカした奴だった。それがジョンだったんだ。僕の好きなデル・バイキングスの「カム・ゴー・ウィズ・ミー」をやってたけどジョンは歌詞を知らないみたいだった。聴いている方もほとんど誰も知らないのだから、別に問題はなかったんだけどね。たとえば、リフレインの部分は"Come little darlin', come and go with me, I love you darling"という歌詞なのに、彼は"Down, down, down to the penitentiary"とブルースの歌詞をあてはめてた。歌もうまいし、かっこよかったな。バンドはスキッフルのグループで、ティー・チェスト・ベース※1、ドラム、バンジョーなど、雑然とした編成だった。ジョンがクォリー・バンク・グラマー・スクールに行ってたことからクオリーメンという名が付いたんだ。僕はこのバンドがすぐ気に入った。

アイバンと僕が楽屋へ行くと、バンドは夜に行なわれる教会のホールでのステージの準備をしていた。バンドのメンバーは未成年なのにビールを飲んでたんだ。僕はビールなんか飲んだこともないくせに、イキがって"僕ももらおうかな"なんて、必死でつきあったよ。夜のステージもやはり素晴らしかった。ところが、ガーストンから悪ガキ連中が来て客席でケンカが起こりそうになってしまったんだ。巻き込まれるのはごめんだと思ったね。何事もなくすんで良かったんだけど、不良のたまり場に来ちゃったかなと思った。

ステージが終わってから僕はバンドのみんなの前でピアノを弾いたんだ。ジョンは酒臭い息で肩に寄りかかって楽しそうに聴いていたよ。「ホール・ロッタ・シェイキン・ゴーイン・オン」をCのキーで弾いたり。「トゥッティ・フルッティ」、「ロング・トール・サリー」なんかもやった。次は、ギターを逆さに持って、「トゥエンティ・フライト・ロック」を歌ったんだ。クオリーメンのメンバーは、僕が「トゥエンティ・フライト・ロック」の歌詞を間違わずに正確に歌ったからとても驚いていた。そのおかげで、僕はビートルズのメンバーになることができたんだ。

僕が歌詞を知っていたのは、友だちのイアン・ジェイムズと一緒に好きな曲の歌詞を夢中で書きとっていたからなんだ。「トゥエンティ・フライト・ロック」のレコードは、カリーズかNEMSの、どっちかの店に注文して何週間も待たされて、手に入れた。いつも僕らは、レコード店で試聴するだけで買わずにすましていたから、店の人はイライラしてた。でもこっちはそうやって歌詞を覚えていたのさ。

その頃、僕はアラートンに住んでいて、アイバンに会いに、ウールトンあたりをよく自転車で走りまわってた。まだ10代の僕らは車なんて持ってないから、僕にとってもジョンにとっても友だちが自転車で行ける距離にいるってことは重要だったんだ。クオリーメンのピート・ショットンも、よく自転車に乗っていたな。ある日僕は偶然ジョンの親友のピートと行き合った。"やあ、ポール。こないだの演奏、よかったぜ。あれからずっとジョンと話してるんだけど、君、僕らのバンドに入る気はない？"。僕はその時"考えとくよ"と答えただけだったが、内心は誘われたことが嬉しくて仕方がなかった。僕はアイバンを通じて、ジョンにイエスの返事をした。

僕がクオリーメンに入って初めて人前でギグを行なった場所は、ブロードウェイだった・・・・(もちろん、リバプールのだよ)。あと、僕らが初めて自主制作のレコードを作った小さなスタジオがあったのは、ケンジントンというところだった。リバプール、ニューキャッスル、グラスゴーなどの地方都市のいいところは、有名な場所の名前を使った地名がいろいろあることだよ。メジャーっぽくていいだろ。クオリーメンの初ステージで僕は「ギター・ブギ」って曲のギター・ソロをやらせてもらえることになった。リハーサルの時、簡単に弾けたから、みんなが僕のソロでいこうぜと言ってくれたんだ。ところが、さあ出番という時になって、メチャメチャあがってしまって指が動かなくて、頭が真っ白になってしまった。リード・ギタリストとして客席の視線を一身に浴びるなんて荷が重すぎた。大失敗だった。あの日からこの数年前まで僕は二度とステージでギター・ソロを弾くことはなかった。できるようになったのはつい最近のことだ。ジョージがグループに加入することになったのには、そんなわけもあったんだ。

アラートンの家に移る前、バスの中で、ジョージと知り合ったんだ。スピークでの住まいは公営住宅で、それは失業対策のための産業誘致計画に由来して"商業団地"と呼ばれていた。住んでいた当時はなぜ"商業団地"なのか知りもしないし、興味もなかったけどね。ジョージの家は、そこからバス停ひとつ分だけ離れていて、学校へ行くバスに乗ってると、いつも次の停留所でジョージが乗ってきたんだ。お互い年も近かったから、すぐにうち解けたよ。ジョージの方がひとつ年下だったから、僕はつい偉そうな口調になっちゃってね。今振り返るとビートルズ時代も、僕はジョージに対してずっとそんな調子で、ちょっとまずかったかな？とも思うけど、14歳の自分には、13歳の奴を対等な存在として見ることなんてできなかったんだ。ジョージのことは、今でもかわいい弟のように思えてしまう。逆に、リンゴは今でもすごく大人のような気がするよ。2歳も年上だからね。リンゴは僕らの中で一番大人だったし、ビートルズに入った時には髭をはやして、車も

※注：茶箱を細工して弦を張った手作りベース楽器

CamScannerでスキャン

スーツも持っていた。当時はこれを"大人の男"って思ったよ。
　僕はジョンやクオリーメンのメンバーに、ジョージのことを話した。"そいつはものすごくギターがうまいんだぜ。リード・ギタリストが欲しいなら、そいつしかいないよ"って。すると"OK、じゃあそいつのプレイを聴いてみよう"という話になった。
　ジョージは「ローンチー」という曲をほんとにうまくやった。ある夜、僕らは他に誰も乗っていないバスの2階で、ジョージのプレイを聴いた。その場でみんな納得して"一緒にやろう。合格だ"ってことになった。言ってみれば、僕が「トゥエンティ・フライト・ロック」の歌詞を知っていたのと同じような理由だったんだ。ジョージの場合は、"こいつはまだちょっと若いけど、確かに「ローンチー」をちゃんと弾くことができるからな"という理由だった。その時からジョージは僕らのギタリストになったんだ。あとになってジョンもチャック・ベリー・スタイルのソロを弾いたことがあったけど、グループのリード・ギタリストの座は完全にジョージに明け渡され、ジョンはリズム・ギターに専念するようになったんだ。

　その頃、ジョンはアート・カレッジの学生だった。僕はまだ15歳、ジョンは17歳。あの頃にしてみれば、ものすごい差だった。みんなで何か大人の遊びをしようとする時は、ジョージが子どもに見られやしないかといつもヒヤヒヤしていた。"髭を伸ばすというのはどうだろう。少しは大人っぽく見せられるんじゃないか？"なんて、みんなで考えたりもした。
　一度、ジョージと一緒に映画「ザ・ブラックボード・ジャングル」(暴力教室)を見にいったことがあるんだ。主演のビック・モローもなかなかよかったけど、もっと重要だったのはテーマ曲にビル・ヘイリーの「ロック・アラウンド・ザ・クロック」が使われていたことだ。初めてこの曲を聴いた時、感動のあまり背筋がゾクゾクしてしまったんだ。それで、ただテーマ曲を聴くだけのために、また観にいった。この映画は"15歳以下お断り"だったけど、僕は見た目はベビー・フェイスでも、大人の前ではけっこうハッタリを効かすことができたから、何とかうまく中に入れた。でも、ジョージはダメだった。態度は一人前のくせに、見かけが幼なすぎるんだ。それで、笑える話なんだけど、ジョージの家の裏庭へ行って泥を少し取ってきて、彼の口のまわりに口髭みたいに塗ってから映画館に行ったら入れちゃったんだ……。でも、映画そのものにはすごくガッカリしたよ。犯罪に走るティーンエイジャーの話なんだけど、演技やセリフがまったくなってなくてね。
　ビートルズの中では僕だけがオデオン・シネマで開かれたビル・ヘイリーのコンサートを見てるんだ。入場料は24シリングだったと思う。他の3人は、そんな金を貯めることはできなかったんだ。僕も自分の収入があったわけじゃないよ。ビル・ヘイリーのコンサートを見たい一心で、長い間かけて貯金したんだ。映画であれだけ感動したから、コンサートにもどうしても行きたかったんだ。当日は半ズボンをはいて行ったのを覚えている。ロックン・ロールのコンサートに半ズボンだよ！　ステージはすばらしかった。でも、ショーの最初の半分がビック・ルイス&ヒズ・オーケストラの演奏だったのには、ちょっと騙されたような気分だった。最初から最後までビルの演奏が聴きたかったのに。
　スクリーンの中にもヒーローはいっぱいいた。フレッド・アステアは僕のヒーローのひとりだった。ひたすら優雅で上品で、声も大好きだった。マーロン・ブランドには、まわりの仲間たちもみんな注目していた。コメディアンのロブ・ウィルトンにいたっては、サインを手に入れたことがある。親戚のひとりがリバプール・エンパイア・シアターの楽屋口でドアマンをしていて、僕のためにサインをもらってきてくれたんだ。僕もエンパイア・シアターの楽屋口でクルー・カッツとか、そういう人たちからサインをもらった。だから、僕はできる限りサインには喜んで応じることにしてるんだ。優しくしてもらった思い出は、一生心に残るものだからね。
　僕は一度、ジョニー・ヘインズのサインが欲しくて、フルハム・フットボール・クラブのクレイヴァン・コテージ宛に手紙を書いたことがある。ポストに返事が届いていた時のことを思い出すと、今でもまだちょっと嬉しくなるよ。サー・ピーター・スコットにも手紙を出した。ミーハーな奴だと言われそうだけど、何事も思い切ってやってみなければ何も得られないというのが僕の持論なんだ。ピーター・スコットはテレビ・ショーをやっていて、その中で彼は毎週いろんな鳥の絵を描いていた。そこで僕はこう書き送った。"もしいらなくなったアヒルの絵がありましたら、僕にくださいませんか？"ってね。丁寧な返事を受け取ったよ。
　テレビを見ていると流行っていることがよくわかるんだ。「ロック・アラウンド・ザ・クロック」もテレビを見て知った。あのマハリシもだ。グラナダというローカル局が放送した、放浪する人物に迫るインタビュー番組に出てきたんだ。
　「暴力教室」やマーロン・ブランドの「ザ・ワイルド・ワン」(乱暴者)なんかのロックンロール・ムービーの情報もテレビからだね。でも「乱暴者」にはちょっとがっかりさせられたけどね。
　それでも、僕が何よりも好きなのは音楽だった。落ち込んだ時に好きな曲を聴くと元気が出るという経験は何度もした。10代の頃、僕はよく友だちのイアン・ジェイムズと一緒に胸ポケットに蓋のついた、まだら模様のジャケットを着て、市場や通りをウロついていた。それで気分が滅入ってくると、家まで戻ってエルヴィスの「ドント・ビー・クルエル」のレコードをかけるんだ。そうすればどんな憂鬱も吹き飛んで元気になったよ。

　ある日、学校の自由時間に講堂でワイワイ騒いでいた時のことだ。誰かが持ってきた音楽雑誌に「ハートブレイク・ホテル」の広告が載っていた。そのエルヴィスがムチャクチャかっこよかったんだ。これだ。これこそほんものだ。エルヴィスこそ救世主だ！って思った。実際に曲を聴いてみてさらに確信した。すぐにファースト・アルバムも出たんだ。それは僕が今でも気に入っているアルバムだ。毎日かけっぱなしにして、必死になって曲を覚えたよ。僕らがやってた音楽は、すべてあのアルバムが基本になってるんだ。
　でも、軍隊をやめたあとのエルヴィスにはあまり夢中になれなかった。あまりにも"いい子"になってしまって、「GIブルース」も「ブルー・ハワイ」も好きじゃない。そういうのが今では代表曲のように言われてるし、太ってラスベガスでショーに明け暮れていた頃のエルヴィスが一番いい、という声も聞いたことがある。そういう人は、あの時期の彼の危うさとか、あっち側へ行っちゃいそうなところとか、そんなところがたまらないって言うんだ。覗き見趣味のような快感なのかもしれないね。でも僕にとっては、1956年頃のエルヴィスが最高だ。若くて、カッコよくて、キラキラした目をして、ユーモアがあって、すばらしい声をしていた頃のエルヴィスだ。信じられないくらいすごいボーカリストだった。みんながエルヴィスのように歌おうとしていたんだ。特に「エルヴィス・ライブ・イン・'56」というビデオの彼は最高に素晴らしいよ。ところが、そのわずか1年後にエルヴィスはハリウッドへ行ってしまい、目の輝きを失ってしまった。「ライブ・イン・'56」のエルヴィスは、叫び続ける女の子たちを前にしても"そんな声は耳には入らないぜ"ってプレイを披露していた。フレーズに合わせて体を動かし、最高のパフォーマンスだった。エルヴィスは僕らにほんとに大きな衝撃を与えたんだ。
　チャック・ベリーの「ジョニー・B・グッド」からもすごく影響を受けたよ。よくジョンの部屋へ行って、彼の小さなレコード・プレイヤーで聴いたもんだ。「メンフィス・テネシー」を覚えたのもジョンの部屋だった。
　エディ・コクランはテレビ番組「オー・ボーイ！」で見たんだ。当時クリフ・リチャードとかマーティ・ワイルドとか、いいシンガーがたくさんいたけど、ギターを弾きながら歌うのはエディが初めてだった。「ミルク・カウ・ブルース」をビグスビーのアームが付いたグレッチのギターでプレイするエディはほんとにかっこよかったな。
　当時の音楽映画は、たいていB級だった。でなきゃ「暴力教室」のようなテーマ曲だけが目立つ映画だった。テー

父親。リバプール、フォースリン・ロード20の家にて

CamScannerでスキャン

マ曲以外は、アラン・フリードがパーソナリティをやっていた、冴えないモノクロ映画のイメージしかない。ほとんど、"黒人のショー"くらいにしか思われていなかったんだ。僕らにしてみれば、ただの"黒人"なんかじゃない。憧れのクライド・マクファターだったんだ! 僕らはそういう人たちを崇拝していたし、彼らが映画で安っぽい扱いしか受けていないのを、いつも苦々しく思っていたんだ。ところが、「ザ・ガール・キャント・ヘルプ・イット」(女はそれを我慢できない)は画期的な映画だった。まずは有名なオープニング。トム・イーウェルが出てくるシーンだ。彼が"ちょっと待って"と言って画面の左右を広げるアクションをすると、ワイド・スクリーンになる。そして指を鳴らすと、それまでモノクロだったのがカラーに変わる。僕らが求めていたのはまさにこれだった! ジェーン・マンスフィールドが出てくるシーンは最高で、彼女のことを見つめていた男の眼鏡が割れるんだ。バックには、リトル・リチャードの「ザ・ガール・キャント・ヘルプ・イット」やエディ・コクランの「トゥエンティ・フライト・ロック」が流れている。ジーン・ビンセントの「ビー・バップ・ア・ルーラ」も出てくる。音楽映画として今でもNo.1だと思うよ。ちなみに、僕が生まれて初めて買ったレコードは「ビー・バップ・ア・ルーラ」だったんだ。

あの時代はたくさんのスターが出てきたが、バディ・ホリーは最高だね。バディはナッシュビルの出身で、最初はカントリー・ミュージックで有名になった。僕はバディのボーカル・スタイルが好きなんだ。それに彼の作曲もね。ビートルズで重要だったのは自分たちの歌う曲を自分たちで書いていたことだった。今ではどんなアーティストも当たり前のようにやっているけど、当時そんなことをしてる人はほとんどいなかったんだよ。ジョンと僕が曲を作り始めたのは、バディ・ホリーの影響だった。"すごい! この人はミュージシャンなのに曲も書いてるぞ"って興奮したんだ。

エルヴィスの映画で僕らは彼がほんとにギターを弾けるかどうかチェックしていて、ちょっとだけど弾けることがわかった。持ち方もサマになっていて、悪くはなかった。いわゆる"ギタリスト"たちの中には、どうしようもないのもいたんだよ。"構えはなっちゃいないし、コードもでたらめだ"ってわかった時は、即"さよなら"って感じで、僕は興味を失っていった。弾けもしないのにギターを鳴らすなんて許せなかった。それなら楽器なんか持たずに踊っていればいいのさ。でもバディはちゃんと「ペギー・スー」のソロを弾いてたから、僕はさらにバディに惹かれていったんだ。彼のレコードにはいつも"Holly/Petty"か"Petty/Holly"と書かれていた。それを見て僕らは、バディがソングライターのひとりであることを知った。僕らは「ザットル・ビー・ザ・デイ」のイントロをコピーするのに苦労したんだけど、ついにジョンが弾き方を見つけた。バディはカポを使ってFで弾いていたんだよ。でも僕らにはそんなことはわからなかったから、必死にAで弾こうとしていたんだ。

ジョンはひどい近視だったのに、ごくプライベート以外で眼鏡をかけることはなかった。バディ・ホリーが太い黒ブチの眼鏡で登場するまでは、それがものすごくカッコ悪いことだと思っていたんだ。それでジョンはしょっちゅう、いろんなものにぶつかっていて、それをネタにジョークも言ってたくらいだ。ジョンのアート・カレッジの友人のジェフはもっと目が悪かったのに、ふたりとも眼鏡をかけずにを歩き回るんだ。でもバディが登場してからは、ジョンも眼鏡をけるようになり、ステージからでも客席にどんな人がいるのかわかるようになったんだ。あの頃、ジョンはバディになったつもりで、僕はリトル・リチャードかエルヴィスになったつもりでいたんだよ。最初はみんな、憧れの誰かになりきろうとするものなんだ。

が好きだった音楽はロックン・ロールだけじゃなかった。今の子たちだって音楽がロックン・ロールだけなんて想像もつかないだろう。今はポップからシリアスなブルース幅広いからね。当時の僕は必ずしもロックン・ローラーを目指していたわけではないんだよ。16歳で「ホエン・アイム・シックスティ・フォー」を書いた時はシナトラのた曲を書いている気分だった。ロックン・ロール以外にも、大好きな曲はたくさんあ。ビートルズでやった「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」なんかもそうだった。

エリザベス・ダンハー(現在はロビンスだ)という年上のいとこからもすごく影響た。彼女の愛称はベティって言うんだ。ベティのレコード・コレクションはなか人っぽい趣味で、ある時"これ聴いたことある?"って「マイ・ファニー・バレンを聴かせてくれたんだ。"Don't change a hair for me, not if you care for me."が気に入った。僕がチャック・ベリーを好きだったのも、彼がすばらしい歌詞を書いていたからだ。

ペギー・リーの「フィーバー」のレコードを聴かせてくれたのもベティだった。ペギー・リーは「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」も歌っていたんだ。この曲が「ザ・ミュージック・マン」というミュージカルの挿入歌だってことは、その後何年もたってから知った(今このミュージカルの楽曲の権利は僕の会社が持っているんだよ)。こうした趣向の延長で、「ア・テイスト・オブ・ハニー」(蜜の味)など、ロックン・ロールとはちょっと毛色の違う音楽も聴くようになったんだ。

ジョンとジョージと僕の音楽の趣味はすごく似通っていたし、影響を受けた音楽を互いに聴かせ合ったものさ。ジョンもロックン・ロールだけじゃなくて、僕が聴いて育った音楽、つまり僕の父の時代の曲も気に入っていたね。ジョンの好きだった曲のひとつに「ドント・ブレーム・ミー」というのがある。この曲は彼の母親から教わったんじゃないのかな。いい曲だったよ。もうひとつ、「リトル・ホワイト・ライズ」というのもあった。僕らはこういった曲からもコードを覚えたんだ。でもやっぱり一番夢中になって聴いたのはロックン・ロールだったけどね。

パーティやタレント・コンテストでの待ち時間には、他のグループの奴のギター・プレイを、知らないコードや新しい曲がないかって必死に目で追っていた。まるで、キリストの聖杯を探し求めるようなものだった。僕らはファゼイカリーに住む男がB7のコードを知っているという噂を聞くと出かけて行くんだ。同じリバプールでも、当時の僕らにとっては世界を横断するくらい遠い所だったけど。でもその男がB7のコードを知っている! じゃ、すぐ行こうってね。そこで、僕らは座って教えを乞う。"師よ、あなた様がB7をご存知だと伺いました。どうぞ、お教えください"。"よし、わかった"。で、僕らは大急ぎで家に帰る。"やったぞ! EとAとDだろ。さぁ、B7だ"。でも、まだB7の細かい押さえ方までは完全にはわかっちゃいなかったんだ。

またある時は、丘の向こうに住む奴が、コースターズの「サーチン」のレコードを持っている、という噂が僕らの街まで流れてきた。幸い、クオリーメンのドラマーだったコリンがそいつがどこに住んでいるのか知っていた。僕らはそれを手に入れると、価値のわからない奴が「サーチン」を持っているなんて、宝の持ち腐れだという勝手な理由でレコードを返さないんだ。僕らが持っている方がいいんだってね。それは砂金を掘りあてたようなものだった。「サーチン」はビートルズお得意のナンバーになり、キャバーンでよく演奏するようになった(キャバーンに来るファンの子たちは自分たちのグループ名を持っていた。その中に"ウッドゥントップス"というクリスとヴァルのふたり組の女の子がいてね、彼女たちはリバプール訛りで"「サーチン」を歌ってよ、ポール! 「サーチン」をやって"と叫んでいたな)。

僕らは何でもそうやって手に入れたり解決していった。レコードを持っているヤツがいれば、バスに乗って出かける。ティーンエイジャーの集まるパーティにもよく行った。パーティに行けば必ずシングル・レコードを買い物袋いっぱいにして持ってくる奴がいたから、僕らはみんなが酔っぱらっているうちにそのレコードを頂戴しちゃうのさ。

僕は再び父のピアノを弾くようになった。「ホエン・アイム・シックスティ・フォー」を作ったのもそのピアノで、16歳の時だった。16歳なのに64歳の歌を作ったというところがちょっと不思議だろ? あの曲を書いた時のことは、はっきり覚えている。僕は漠然と、この曲はミュージカル・コメディか何かに使えそうだなと、思いながら作った。あの頃はまだ、自分がどんな道を進もうとしているのかが、よくわかっていなかったんだ。

僕はバスを待ちながら、"宝くじにでも当たって75,000ポンドが手に入ったら、生活に必要なものが揃うのにな。ギターに車、それから家だ"なんてことを考えていたのを思い出す。他に欲しいものなんて思いつかなかったんだ。

僕とジョンは、学校をサボッて、よく僕の家でギターをかき鳴らしていた。父は働きに出ていたからここが一番いい場所だった。パイプに紅茶の葉を詰めて吸ったこともある。味は良くなかったけど、大人の気分を味わっていたんだ。ふたりでアコースティック・ギターを持って、向かい合って座った。曲を作ろうと自分の心を見つめる代わりに、目の前でプレイするジョンを見ている。まるで、自分自身を映す鏡を見ているような、最高の時間だった。

僕らは一緒に曲を作った。僕がノートに書きつけたタイトルはいつも「アナザー・レノン=マッカートニー・オリジナル」だった。次のページの曲もまた「アナザー・レノン

「ザットル・ビー・ザ・デイ」と「イン・スパイト・オブ・オール・ザ・デインジャー」のオリジナル・シェラック盤、1958年

マッカートニー・オリジナル」なんだ。ノートには歌詞とコード・ネームをメモしてあるだけで、カセット・テープなんてまだなかったし、グランディグ社のテープ・レコーダーを買う金もなかった。だからメロディは頭に入れておかなければならなかった。バック・コーラスのところには"oh"という印をつけた。他に書き方を知らなかったんだ。テープ・レコーダーを持っている知り合いがいたけど、僕らは録音することはほとんどなかった。まだ僕らは自分たちの曲に入れ込んでなかったせいもあるけど、ジョンと僕の間に、自分たちが覚えられないような曲を人が聴いて覚えられるわけがないっていう暗黙の了解があったからなんだ。

ジョンと僕は「ラヴ・ミー・ドゥ」や「アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア」を書き、ベースやコーラスをつけていった。どちらかがアイディアを思いつくと、もう一方が発展させ、それを繰り返していく。アイディアをやりとりする中には、ちょっとした競争意識もあった。「ラヴ・ミー・ドゥ」はほとんど3コードでできていて、あとはGとCとDというシンプルな曲だった。この曲にはハーモニカがいいぞって決まった。ジョンはハーモニカがうまかった。スティーヴィー・ワンダーが持っているようなクロマティック・スケールのやつを持っていたんだけど、ちょっとオシャレすぎる音だったから、ジョンはそのハーモニカでブルース・サウンドを出すにはどうしたらいいか工夫したんだ。

僕らは一緒に、曲作りの技術を身につけていった。ジョンは僕の書いた歌詞を気に入ってくれることもあれば、そうでない時もあった。たとえば"She was just seventeen, she'd never been a beauty queen"（あの子はまだ17歳、美人コンテストの女王になんかなったことがない）は気に入らなかったようだ。ジョンの反応は、"美人コンテストの女王？ 何だそりゃ"って感じだった。僕らはその時バトリンズでのことをイメージしていたので、どんな言いまわしがふさわしいかをよく考えてみた。そこでジョンが出してきたのが"You know what I mean"（僕の言ってることわかるよね）という言葉。これで決まりだった。誰も"僕の言ってること"などわからないんだからね。

ジョンと僕は作曲の腕を上げ、作品は少しずついいものになっていった。僕らが"ファースト・ハンドレッド"（初期の100曲）と呼んでいた作品は、ほとんどがフォースリン・ロードにある僕の家で書かれたものだ。ほんとは5曲くらいだったけど、当時はソングライターとしての僕らに注目してもらいたくて、口から出まかせで言っていたんだよ。曲作りが終わると、学校をサボってた僕らは、紅茶の葉のタバコの匂いを消し、父が帰ってくる前に家を出なければならなかった。

あの当時でも、みんなでお金を出し合えば貸しスタジオを利用して自主制作レコードが作れた。確か5ポンドだったかな？ ティーンエイジャーにとっては大変な金額だった。僕らは楽器を揃えて出かけ、病院のような待合室で順番を待っていた。前のグループがレコードをカッティングしてもらっている間に、僕らはスタジオに入る。マイクを調整してもらって、あとは思いっきり歌うだけでよかった。終わるとまた待合室に戻り、テープからレコードができるのを15分ほど待つんだ（ずっとテープだと思っていたが、実際はどうも直接シェラック盤に刻んでいたらしい）。ほんと原始的なレコーディングだったね。

こうして僕らは1958年に、シェラック盤のレコードを作った。メンバーは5人。ジョン、ジョージ、コリン・ハントン、ジョン（通称ダフ）ロウ、そして僕だった。ダフは僕の学校の友だちで、ピアノを弾いた。ジェリー・リーの「ミーン・ウーマン・ブルース」の出だしのアルペジオが弾けたからグループに入ったんだ。ピアノの鍵盤でちゃんとアルペジオが弾ける奴なんて、僕らが知るかぎりではあいつしかいなかった。僕らは、ひとつのコードを一発弾いては休み、別のコードを弾いてはまた休み、といった弾き方しかできなかったけど、彼は、正しい指使いでずっと1曲弾きとおすことができたんだ。

そこはケンジントンにあるフィリップスのスタジオだった。地名だけ聞くと高級な感じがするだろ。あの時はジョンが「ザットル・ビー・ザ・デイ」を歌い、B面にはエルヴィスの影響を受けて書いた「イン・スパイト・オブ・オール・ザ・デインジャー」を入れた。ジョンと僕がボーカルをとり、ジョージがギター・ソロを弾いた。

出来上がった1枚のレコードを僕らはひとり1週間ずつと決めて、まずジョンが1週間持っていて、僕にバトンタッチ。僕も1週間で、次はジョージ。ジョージも1週間でコリンへ。そしてまた1週間でダフへ……と、ここまではよかったが、そのダフが23年間ずっと持っていたんだ。僕らが有名になってから、あいつは"見てくれ、最初のレコードを手に入れたぞ"と言い始めたんだ。結局、僕が買い戻したんだけど、ずいぶん高い値段がついてた。その後、僕はこのレコードのレプリカを何枚か作った。シェラック盤そのものをプレイヤーにかけるようなことはしたくない。擦り切れてダメになるから。当時のデモ盤はみんなそうだった。でも、持っていられるだけでもすごいことだと思ってる。

バンドはリバプール周辺のあちこちで演奏するようになっていたけど、しばらくすると僕ら3人を残して他のメンバーはみんな抜けてしまったんだ。仕事についた奴もいれば、大学へ行った奴もいて、いつの間にかバンドは3人だけ。ジョージとジョンと僕。よりによって3人ともギタリストだった。この3人だけでギグに行くと、僕らをブッキングした担当者は"で、ドラマーはどこ？"って聞くんだ。その場しのぎに、にっこり笑って、はったりをきかせながら、"リズムはギターで刻むんです"と答えるんだ。そんな風にして演奏できる曲はあまりなかったが、僕らはことさらリズミカルに演奏してみせたんだよ。

テレビに出演するためのタレント・コンテストに挑戦したこともあるよ。優勝すればキャロル・レビスが司会の「ディスカバリーズ」のような番組に出られるんだ。レビスはブロンドの髪をした、恰幅のいいカナダ人紳士だった。カナダ人はアメリカ人に似ていたから、僕らにとっても特別な存在でね。カナダ人はエンターテインメントの世界にも入りやすかったんだ。ヒューイ・グリーンなんかがいい例だ。理由は言葉のアクセントなんだ。カナダ人が"レディース・アンド・ジェントルメン……"と言うと、"すごい、さすがプロだ"って感じだった。1959年、僕らは「ディスカバリーズ」出演のコンテストのため、マンチェスターのアードウィックまで行った。リハーサルはリバプールからマンチェスターまでの汽車の中でやった。僕らは「シンク・イット・オーバー」と「レイヴ・オン」を演奏した。

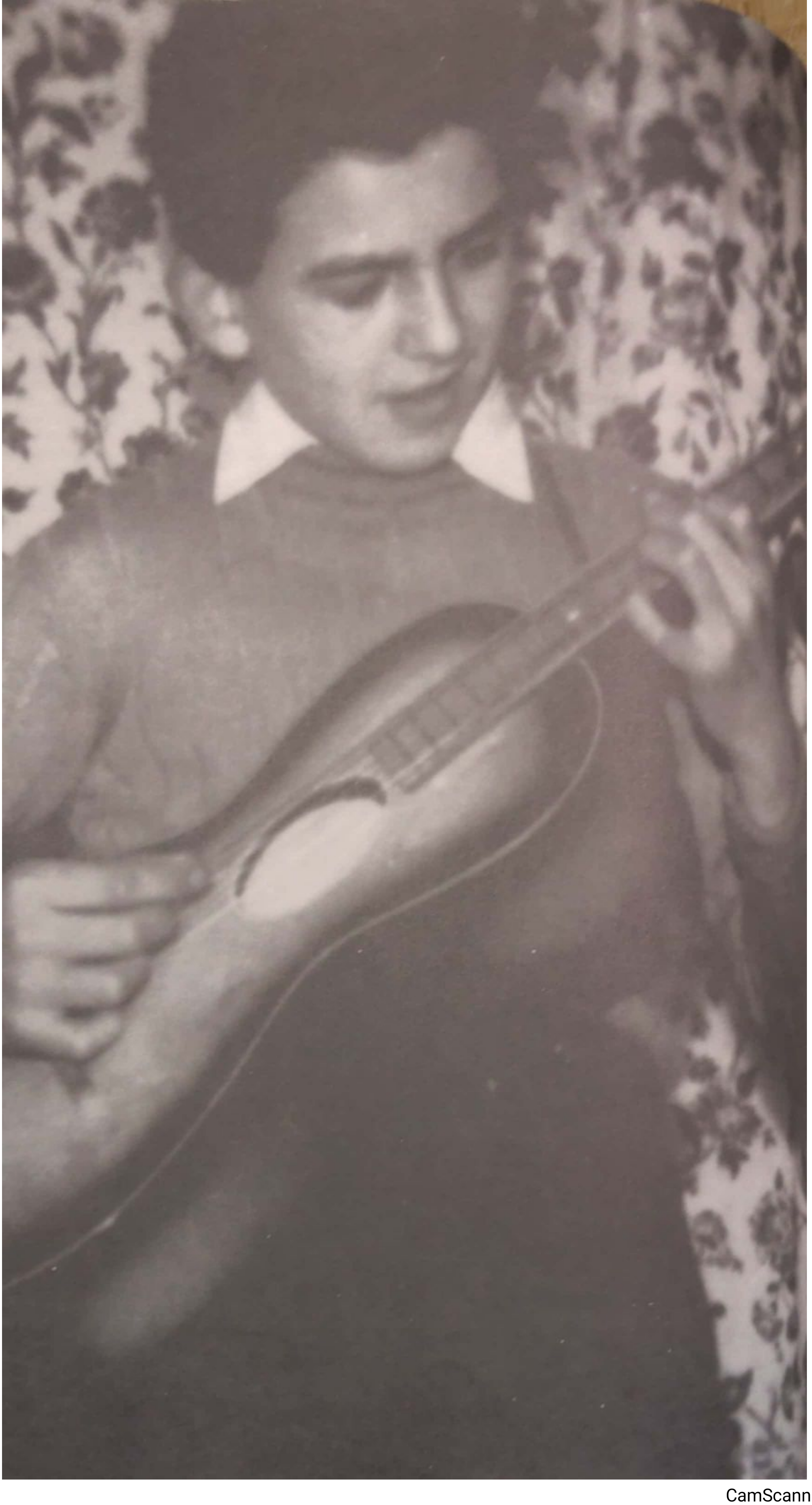
残念ながらコンテストは落選。僕らはこの手のコンテストでうまくいったためしがなくて、バンドを始めてからずっと優勝した経験がないんだ。パブや労働者向けのクラブで夜遅く行なわれるちょっとしたコンテストにも出ていたけど、最後はいつも、ほうきを持ったおばさんにステージから叩き出されて終わりだった。夜の11時にもなると、みんなすっかり酔っぱらってて、僕らの演奏なんか聴く雰囲気じゃないんだ。帰りのバスの中でよく文句を言ったもんだよ。"あんなおばちゃんに負けるなんてとんでもないぜ。別に美人でもなかったのに"、"きっと何かいいところがあるんだよ。太腿とかさ"、"いや、俺たちはよかったよ。あいつらみんな酔っぱらいじゃないか"。落選のたびに、僕らはそんなことを言って自分たちを慰めていたんだ。

スチュアート・サトクリフは、ジョンのアート・カレッジの友だちだった。彼は自分の絵が65ポンドで売れたばかりだった（スチュはお気に入りの画家ニコラ・ド・スタールのスタイルで描いていた。彼の作品は抽象画で、僕らにはキャンバスに絵の具を投げつけて、グニャグニャと伸ばしたみたいに見えた）。その65ポンドをどうしようかという話になった時、僕らはコーヒーを飲みながらスチュに言い寄った。"君がこんな大金を手にするなんて、笑っちゃうよな。ヘフナーのベースを買うのにちょうどいい金額なんだけど"って。それは当時の僕らにしてみれば、遺産が転がりこんできたようなものだった。でもスチュは、そうやって全部を使ってしまうわけにはいかないよと言った。キャンバスや絵の具を買わなければならないってね。僕らは懸命に説得した。"スチュ、考えてみろよ。バンドに入れば女にもてるんだぜ。憧れのヘフナーのギターを持って、No.1グループになれば、名声だって夢じゃない……！"。ついにスチュは折れて、ヘフナーのベースを買った。あのベースは大きくて、スチュが小さく感じられたよ。僕らの悩みはスチュがあまりうまく弾けないことだった。でもヘフナーの見た目がかっこよかったから、それほど大きな問題にはならなかった。

スチュがバンドに入ったばかりの1959年のクリスマス。ジョージと僕は少しスチュにやきもちを焼いていた。うまく説明できないけど、僕らはいつも、ジョンの友だちに対してちょっぴりジェラシーを感じていたんだ。彼は僕らより年上だから仕方ないことなんだけど、スチュが来た時は、ジョージと僕はスチュにグループでのポジションを奪われてしまったように感じてたんだね。僕らは、今までより後ろの席にまわらなければならなかったし、スチュはジョンと同い年だし、アート・カレッジの学生で、絵の才能があって、僕らよりずっと流行に敏感だった。それに対して僕らは年下で、グラマー・スクールの生徒で、まだかなり子どもっぽいところがあった。

ともあれ、臨時のドラマーを加えれば——ドラマーは数人いた——グループは5人編成になった。

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

I WAS BORN IN 12 ARNOLD GROVE, LIVERPOOL, IN FEBRUARY 1943.

僕は1943年2月にリバプールの
アーノルド・グローブ12番地で生まれた。

GEORGE HARRISON

僕には兄がふたりに姉がひとりいて、姉は僕が生まれた時すでに12歳だった。ちょうど"イレブン・プラス"(11歳で受ける試験で、結果により進む中学を決定する)を受けたばかり。小さい頃の姉の記憶ってほとんどないんだ。姉は17くらいで家を出てしまったからね。教師の養成学校に行って、卒業後も戻ってこなかったんだよ。

祖母は——母の方だけど——アーノルド・グローブの隣のアルバート・グローブに住んでいた。だから僕が小さい頃は、家の裏口を出て路地(リバプールでは"ジガー"と呼んでいた)をまわれば、すぐ祖母の家に行けた。母と父が仕事に出ている時はいつもそっちにいたよ。

父方の祖父には会ったことないけど、大工の親方で、リバプールのプリンセス・ロードにすばらしいエドワード様式の家をたくさん建てた人なんだ。医者とか、そういった頭を使う職業の人が住む家だよ。あの頃は石積みでも煉瓦でも木材でも、家の建て方ってものを知ってたよね。僕が建築に興味を持ったのは、たぶん祖父の影響なんだろう。小さな草葺の家でも、セントパンクラスの駅でも、いい建築なら何でも好きだ。僕はずっと、人生というのは年月を重ねるうちに成長してチャンスを作っていくもの、何かを生み出すものだと思っていた。リバプール生まれは大きな邸に住めるはずないなんて、絶対考えなかったね。

僕らの家はすごく狭かった。2階にふた部屋、下にふた部屋——舗道から一歩で家の中、奥の部屋から一歩で外に出られる。正面の部屋はまったく使っていなかった。お洒落なリノリウムの床で、3点セットの応接家具が置かれていたけど、凍えそうに寒いから誰もそんな部屋にいたくなかったのさ。みんなキッチンで縮こまってたよ。キッチンなら火もあるし、ケトルにお湯も沸いてるし、小さな鉄のコンロもあるしね。

庭の大部分は石が敷き詰められていて(幅30センチくらいの花壇の部分を除いて)、奥にトイレがあった。一時は小さいニワトリ小屋もあって、雄鶏を何羽か飼っていたんだ。裏庭の塀には亜鉛のバスタブが吊るされてて、いつもそれを持ってきて鍋やケトルでお湯を入れる。そうやって風呂を使ってたんだよ。バスルームがなかったのさ。もちろんジャグジーもね。

父はもともと船乗りだったんだけれど、
僕が生まれた頃にはバスの
運転手をやってた。母はフレンチという
アイルランド系の家の出で、
男も女も兄妹がたくさんいたね。
母はカトリック教徒。父は違った。
カトリックじゃなければ英国教会だって
みんないつも言うけど、父はどの宗派でもないように見えたな。

僕の一番古い記憶は、階段の上でおまるに座ってたこと——それで"出たよ!"って怒鳴るんだ。もうひとつ幼い頃の記憶というと、僕が赤ん坊の時に町中でパーティをやったこと。あちこちに防空壕があって、そういうところでみんなテーブルを囲んでベンチに座ってる。僕はいいとこ2歳くらいだろう。家にその時の写真があったから、子どもの頃それを見て思い浮かべてた光景が、今記憶として残ってるのかもしれない。

アーノルド・グローブは、TVドラマによく出てくるみたいな、家同士がぴったりくっついて立ってる地域だった。といっても、もうあのあたりのことはまるで覚えていないんだけどね。ウェバーレットのラム・ホテルの裏だった。アビーというアール・デコ調の大きな映画館があって、ピクトン時計塔があって。小石を敷き詰めた道路を少し行くと屠殺場で、そこでは馬を銃で殺してた。

昔のリバプールはほんと活気があった。あの頃のマージーはとても有名だったんだよ。フェリーはみんなあそこから出ていたし、アメリカやアイルランドから大型の蒸気船が入ってきていたしね。古いビルや歴史のある建築物もたくさんあった。ちょっと薄汚れた感じだったけど、やっぱり素敵だったよね。そういう立派な建物がある一方で、ひどく空襲でやられたきり放っておかれた地域もあった(僕がリバプールを離れたのは1963年だけど、その頃ですら、直撃のあとの瓦礫だらけになってる場所がそこら中に残っていた)。買い物に出かけると、いつもどこかの焼け跡に人垣ができてる。袋の中に手を隠して、手錠とか鎖を外してみせる奴がいて、みんなそれを見物してるんだ。そういうことをやってる奴が必ずいたね——フーディニ(縄抜けなどを得意にした魔術師)が流行っていたんだよ。

御影石に小石が敷き詰められた道路を路面電車が走っていて、頭上にはケーブルが通ってた。僕らは路面電車であちこちに行ったよ。ウィラルへ行くには地下鉄を使った。僕が自転車に乗り始めた頃にはバスが路面電車に替わり、線路は全部取り外され、石畳にはアスファルトが敷かれてた。

母が土曜日に買い物に出かける時は、よく一緒に連れて行かれた覚えがある。あちこち引っ張りまわされて、年のいった御婦人たちに会った。母はいつでもそういう知り合いを訪ねていかなきゃいけないみたいだった。実際にはそんなに歳じゃなかったんだろうけど、こっちが子どもだと、20歳以上の人はみんな年寄りに見えるものさ。

写真:ジョージ、母、姉ルイーズ

CamScannerでスキャン

ジョージ：僕と母、それにギターとドランビュイのボトル。

それにニュース・シアターというのがあって――古い小さな建物に入ってる映画館だ――そこではアニメや"パセ・ピクトリアル・ニュース"をやっていた。劇場用の長い映画とかはなくて、せいぜい15分くらいのものだよ。だから買い物をして疲れたら、コーヒー飲んでニュース・シアターに行き、短いアニメを見て、それからまた買い物の続きができるわけさ。

僕は小さい頃、カブ・スカウトに入った。本部がパデュア(イタリア)の聖アントニウスという教会にあって――たかがカブ・スカウトなのに、なんて遠いんだ! (飛行機で行かなきゃならなかった、アリタリア航空さ――スチュワーデスが腋の下を剃ってない唯一の航空会社だ)。戻ってくると、さっさと寝ろっていつも班長にネッカチーフ結ぶリングでぶたれるし。母は時々教会に行ってた、お決まりの時期――イースターとかクリスマスとか、そういう時にね――子どもの頃は僕も一緒に行った。11歳で聖体拝領を受けたけど、それからは教会を避けてたね。もうスピークに引っ越してたから。

学校はあんまり好きじゃなかった。しばらく幼児学校に行ってたのを覚えてる。あんまり楽しくなかったよ。ダブデイル・ロード幼児学校で記憶にあるのは3つ。ゆでたキャベツの匂いと、金髪のカーリーヘアの女の子と、クラス全員で作ったピーター・パンのが教室の隅にあったこと。

それからダブデイル小学校へ行った。いろいろ遊ぶものがあったから、小学校はけっこうおもしろかったね。サッカーもやれたし、走りまわることもできたし。自分ではかなり走るのが速いつもりだったから、サッカーが好きだった。子どもはみんな、自分はすごいと思ってるもんだよ。実際にはまるでダメなのにね。僕が通ってる頃ジョンもダブデイルにいたんだ。同じ校庭にいたのに、僕は彼を知らなかった――たぶん、僕が1年の時、彼は最上級(小学校は11歳まで)だったからだろう。

ダブデイルに通ってる間にスピークへ移った。アプトン・グリーン25番地。そのあたりに新しく公営住宅が建てられていたんだ。バス・ルームとキッチン付きのね。僕らは何年も新しい家を待ち続けて、ようやくリストの一番になって、そこへ越したというわけ。

スピークはリバプールの郊外で、港からは離れていた。かなり辺鄙(へんぴ)でね、街まで出るのにバスで40分くらいかかる。マージー川はうねりながらだんだんと細くなり、上流のウィドネスやランコーンへ向かう。40年代、そのあたりにズラッと工場が建てられた――ブライアントやメイ(マッチを作っていた)、エバンス・メディカル・サプライ。ダンロップの工場もスピーク空港のすぐそばにあった。空港の近くにスピーク・ホールという、古いチューダー朝のすばらしい建物があったよ。

家はウィドネスのすぐそばだった。僕はいつも川沿いのオグレットへ遊びに行ってた。川の水が何マイルも引いて、泥だらけの土手が現れる。みんなそこをバイクで上り下りするんだ。僕は何時間もマージーのぐちゃぐちゃになった川岸を歩いて、農場の中をぶらついた。自然の中が好きだったんだ。

スピークに引っ越してから、ちょっと嫌な思い出もある。亭主に逃げられた女性と、何分おきに子どもを作ってるような女とかがいたんだよ。それに男連中がいつもふらついてて、どっかの家に入っていって――女とやってたんだろうね、たぶん。家に来てあれこれわけのわからないことを言う奴がいて、母が追い払うのに困ってたのを覚えてるよ。母はバケツを持ち出して、玄関から水をぶっかけてドアを締めた。何度かそういうことがあったな。

司祭が一軒一軒家をまわってお金を集めてた。うちはそんなに貧しくはなかったけど、中にはひどい家もあってね。家の明かりを全部消して、ラジオの音を小さくして、居留守を使うんだよ。僕の父の稼ぎは週に7ポンド10シリングくらいだったのかな。寄付は数シリングで、払ってはいたけど、かなり額としてはきつかったよね。あの頃は失業者を見たことがなかった。まあ子どもだから気がつかなかったのかもしれない。小さい頃は毎日のことだけで精一杯で、世界の政治みたいな、自分の生活の外のことなんか目に入らないんだよ。

そういう寄付金で大きな教会が立った。それまでは木造の小屋みたいな、仮普請(かりぶしん)の教会だったんだ。十字架の道の留(りゅう)(キリストの苦難を示す14の絵)があってね、それを見て不思議に思ったのを覚えてるよ。"これってなんだろう?"って。キリストが十字架を引きずって歩いてるのはわかる。みんながキリストに唾(つば)してる。なるほど要点はわかった。でもまるで意味が通らないように思えたんだ。

まだ11だったけど、あの頃すでに、世の中には偽善があるんだって感じてた。イギリスのどこの住宅地も同じみたいだったけど、一方に教会があり、もう一方にはパブがある。みんな酔っ払ってパブから出てきて、それから教会に行き、アベマリア3回に主の祈り1回やって、献金皿に5ポンドを置く。僕はそういうのにすごい違和感を覚えた。ステンドグラスやキリストの絵はいいんだ、ああいうのは大好きだったよ。お香やローソクの匂いも。ただ、ああいうくだらないことは好きになれなかったな。聖体拝領のあと、僕はほんとなら堅信礼を受けるはずだったんだけど、"そんなものにわずらわされたくない"と思った。"信仰を確かめるのはあとで自分でやろう"って。

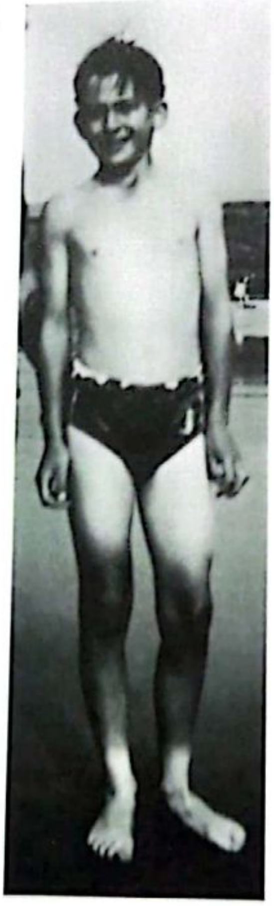
それ以来僕は教会を避けていたけど、毎週木曜日には子どもの伝令が来て、司祭が来たと告げる。街中まわって、みんなの家のドアを叩いて、"司祭が来ます!"って叫ぶんだよ。すると僕らはみんな、"ヤバい"みたいな感じで、大急ぎで階段を駆け上がって隠れる。母はドアを開けないわけにいかない。すると司祭が、"どうもこんにちは、ミセス・ハリスン。またお目にかかれて嬉しいです。えー、キリストの……"。母が司祭の汗ばんだ小さな手に半クラウンのコインを2枚渡すと、司祭は帰っていく。そして次の教会だかパブだかを建てるわけだ。

僕は幸せな子ども時代を送った。親戚がまわりにたくさんいてね。いつも夜に目が覚めて、部屋を出て階段の上から見下ろすと、大勢でパーティをやってるんだ。実際には僕の両親とおじのひとりかふたりだけだったんだろうけど(僕のおじには頭の禿げてる人が多かった。パブのドアに頭突きくらわして開けてるうちにそうなったんだって言ってたね)。でもみんな、いつも僕に内緒でパーティをやってるみたいだったな。どんな音楽が流れていたかは全然覚えていない。たぶんラジオだったんだろう。

当時のラジオというのは、原始的な鉱石ラジオみたいなものだった。まあ、それよりはましかな。ラジオには電池がついてた。薬品の入ってる変な電池だよ。角の店にその電池を預けて、3日くらいしないと充電できないんだ。

僕らはラジオでかかる曲なら何でも聴いた。ジョゼフ・ロックみたいなアイルランドのテナー歌手、ダンス・バンドの曲、ビング・クロスビー。母はダイアルをまわし続けて、アラビア語か何かの放送局が見つかるといつもそこで止めるんだ。でもそのうちバリバリ言い出して、とても聞いていられなくなる。すると母は別の局に替えるのさ。

子どもの頃は両親の持ってるレコードを聴いていた――イギリスのミュージック・ホールでやってたような、古い音楽ばかりだった。「シャナナギー・ダ」というレコードがあったな。"Old Shananaggy Da, he plays his guitar……"とかいうやつ。でもレコードの真ん中の穴が中心からずれてたもんで、変な音に聞こえるんだ。あれはよかったね。それから「ファイヤー、ファイヤー、ファイヤー、ファイヤー、ファイヤー」というのもあった。"Why do all the engines chuff-chuff? (なぜエンジンはシュッシュッっていうの?) It's fire, fire, fire, fire, fire."。延々と歌詞が続いて、消防車とか、みんなが息を飲む声とか、建物の中に取り残された人たちの声とか、そういう効果音も入ってた。78回転の両面入ってるやつでね。片面が終わると、"えー皆さん、裏返すともっと聴けますよ"って声が入ってる。それで裏返すと、またリフレインが始まって、20番くらいまで続くんだよ。



"ロックン・ロールしか好きじゃない"とか、"ブルースしか聴かない"とかいう人の気持ちが僕にはわからない。エリック・クラプトンすら、「ザ・ランナウェイ・トレイン・ウェント・オーバー・ザ・ヒル」に影響を受けたとか言う。「アイ・ミー・マイン」にも書いたけど、僕が一番初めに聴いた曲はジョシュ・ホワイトの「ワン・ミート・ボール」とか、ホーギー・カーマイケルの歌とか、ああいったものだった。僕らが忌み嫌ってたクズみたいな音楽にしても――40年代後半から50年代始めの、「ザ・レイルロード・ランズ・スルー・ザ・ミドル・オブ・ザ・ハウス」みたいなアメリカの安っぽいレコードとか、イギリスの「アイム・ア・ピンク・トゥースブラッシュ、ユーアー・ア・ブルー・トゥースブラッシュ」とか――そんなものですら、どこかで僕らに影響を与えてるんじゃないかな。こっちが望むかどうかは別としてね。そういうものすべてが何らかの形で僕の中に入っていて、どこかでふっと顔を覗かせるんだよ。僕らの曲のコミカルな面に現れてるよね。たとえば「イエロー・サブマリン」の中盤あたりなんかそうだよ。

何かを耳にして、これは嫌いだな、これは自分

CamScannerでスキャン

に影響を与えることはないな、って思う場合もある。だけど人間というのは自分の食べているもの、目にするもの、触れるもの、感じる匂いや耳にする音で決まってくるんだ。音楽は常に超越的な性質を持っているから、自分では思いもかけないような部分にまで届くんだよ。そしてそれが、表現しようもない形で影響を与えている場合もある。自分とは関わりがないと思っていたものが、何年も経ってからひょっこり顔を出すことがあるんだ。ビートルズはあらゆるタイプの音楽に触れていて幸運だったと思う。僕らはラジオから流れてくるものなら何でも聴いた。あの頃はあれが何よりの楽しみだったんだよ。

一番上の兄のハリーは、小さなポータブル式のレコード・プレイヤーを持っていた。EPとLPがかけられるやつ。10枚まで自動的にセットできるんだけど、兄は3枚しか持ってなくてさ。その3枚を大事にジャケットに入れてしまってたね。1枚はグレン・ミラーだった。兄は出かける時もすべてきちんと片づけていくんだよ。コードもケーブルもプラグも、全部きちんとまとめて、誰も使っちゃいけないことになってた。でもハリーが出かけるなり、兄のピートと僕とでレコードかけてたけどね。

僕らはほんと何でも聴いた。父は船乗りだった頃にニューヨークでゼンマイ式の蓄

リバプール・エイントリ・レースコースで。1955年

音機を買って、それを持ち帰っていてね。木製のやつで、扉がついてるんだよ。上の扉にスピーカーがあって、下にレコードを入れる。それと別に小さなブリキの箱がついてて、レコード針が入っていた。

父はアメリカでレコードも何枚か買ってきていた。その中にジミー・ロジャースの「ザ・シンギング・ブレイクマン」もあった。ハンク・ウィリアムズのお気に入りのシンガーで、僕にとっては初めて聴いたカントリー・シンガーだ。彼はいろんな曲をやってたよ、「ウェイティング・フォー・ア・トレイン」や「ブルー・ヨーデル94」、「ブルー・ヨーデル13」。父が持ってたのは「ウェイティング・フォー・ア・トレイン」だった。あれが僕をギターに向かわせたんだ。

その後ビッグ・ビル・ブルーンジーとか、フロリダのカントリー&ウエスタン・シンガー、スリム・ホイットマンとかが出てくる。彼は「ローズ・マリー」という映画の主題歌を歌って、それが大ヒットしたんだ。ギター弾いてる人を見たのはスリム・ホイットマンが初めてだったな。雑誌で彼の写真を見たんだったか、テレビでライブを見たんだったか。とにかくギターが流行りだしてたのはたしかだった。

ダブデイル小学校を出て、上の学校、リバプール・インスティテュートに入ったばかりの頃、僕は入院することになった。12か13の時腎臓を悪くしてね。扁桃腺はしょっちゅう腫らしてたけど、扁桃炎というのは子どもの病気だから。あれはほんと喉が痛いんだ。ところがその年、伝染性の腎炎が流行って、僕もそれにやられた。腎臓が炎症を起こす病気だよ。

6週間アルダー・ヘイ・ホスピタルに入院して、非蛋白性の食餌療法というのをやらされた。ほうれん草とか、ぞっとするようなものばかり食べさせられて。このころだね、ギターを欲しいと思い始めたのは。レイモンド・ヒューズという、ダブデイルで一緒だった子——僕はもうインスティテュートに入ってたから、1年くらい会ってなかったけど——彼がギターを売りたがってるって聞いたんだ。3ポンド10シリング。当時としては大金だった。でも母が金を出してくれて、それで僕はレイモンドの家へ行ってギターを手に入れた。

ほんと安っぽくてひどいギターだったけど、それでもあの頃は全然かまわなかった。ネックの裏にボルトがはめてあるのを見て、好奇心がわいてね。ねじ回しで外してみたらネックそのものが取れちゃった。きちんともとどおりにできなかったもんで、ふたつに分かれたまま戸棚に入れて、それきり放っておいた。でもついに——1年くらい経ってたような気がするけど——兄のピートが直してくれたんだ。でも今度はネックがへこんじゃって、コードもあんまり弾けない。弦がフレットに当たって変な音を立ててばかりいたんだ。

父も船に乗ってた頃ギターを弾いていたんだ。でも船の仕事がなくなると、船乗りをやめると同時にギターも売ってしまった。ところが僕が弾きだしたら、父が"ギターをやってる友だちがいる"って言うんだよ。まだつきあいがあったらしくて、その人に電話をかけてくれた。酒屋をやってるレン・ヒュートンという人で、店の2階に住んでた。木曜なら店が休みだというんで、父は僕が毎週木曜の夜に2、3時間教えてもらえるように話をつけてくれた。僕は彼から新しいコードを習い、「ダイナ」とか「スウィート・スー」みたいな歌や、ジャンゴ・ラインハルトやステファン・グラッペリみたいなタイプの曲も教わった。「ウィスパリング」なんて、20年代、30年代の歌もね。彼にはほんと、よくしてもらったよ。

この頃にはもうポール・マッカートニーに出会っていた。学校から帰るバスの中。あの頃は僕の住んでる住宅地までバスが通ってなくて、僕はバスを降りてから20分くらい歩いて帰ってた。ポールの家はウエスタン・アベニューのバス停のそば。ヘールウッドのすぐ近くだよ。僕はいつもそこの原っぱで遊んでた。トゲウオが棲んでる池があってね。今はあそこ一帯が忌まわしいフォードの工場になってしまった。何エーカーも何エーカーも、ずっとフォードの敷地だよ。

で、ポールと僕とは同じバスに乗り、同じ学校の制服を着て、リバプール・インスティテュートから家に帰ってたわけだ。僕は彼がトランペットを持ってるのに気づいて、彼は僕がギターを持ってるのに気づいた。それで仲良くなったのさ。僕は13歳だった。彼はたぶん13歳後半か、でなければ14歳になってただろう(彼は常に僕より9ヵ月年上だ。今、これだけの年月が経っても、やっぱり彼は9ヵ月年上なんだよ!)。

ティーンエイジャーになって最初に聴いたのがファッツ・ドミノの「アイム・イン・ラヴ・アゲイン」だった。僕が初めて聴いたロックン・ロールのレコードと言えるだろうね。もう1枚、まだ学校にいる頃に聴いたのが、デル・バイキングスの「ウィスパリング・ベルズ」——あのギター・サウンドは今でも覚えてる。それからもちろん、「ハートブレイク・ホテル」。ある日誰かのラジオから流れてきて、僕の頭の奥に入り込み、永遠に抜けなくなった。

アーサー・ケリーとジョージ

エルヴィス、リトル・リチャード、バディ・ホリー。僕らはすごく影響を受けたし、今でも彼らの曲は僕の大好きなロックン・ロール・ナンバーだよ。

あの頃のポップ・シーンにはいろんなものが混ざっていた。ビッグ・スターがいて——ファッツ・ドミノとかコースターズとかエルヴィスとか——その一方で、レコードは聴くけど歌ってる本人はあんまり見たことないようなアーティストがいた。ファン雑誌とかで写真を見るくらいの人たちだ。それからイギリスのアーティスト。トミー・スチール(イギリス初のポップ/ロック・スター)とか、少しあとになるとクリフ・リチャード。それにラリー・パーンズお抱えの、ビリー・フューリーやマーティ・ワイルドなんかだ。わくわくしたよ、だってピンクのジャケットに黒のシャツも、フェンダー・ストラトキャスターもエレキ・ギターも、見るのは初めてだったからね。

リバプール・エンパイアへ見に行くようになると、パフォーマーはアンプとか持ってて、それでまた興奮した。今みたいにいろいろある時代じゃなかったからね。今は自分の好みに合ったもの、人とは違うものを何でも選べる。でもあの時代は、ものをもらうのに選り好みはできない、っていう諺どおりだったのさ。僕らはとにかく、何でもいいから手に入れたかった。どんな映画だろうと上映されれば見に行った。どんなレコードだろうと、かかってれば聴こうとした。とにかく何もかも限られた数しかなかったんだから。まだ配給制から数年しか経っていない頃だよ。砂糖一杯すら手に入れにくい時代だ、ロックン・ロール・レコードなんて言わずもがなさ。

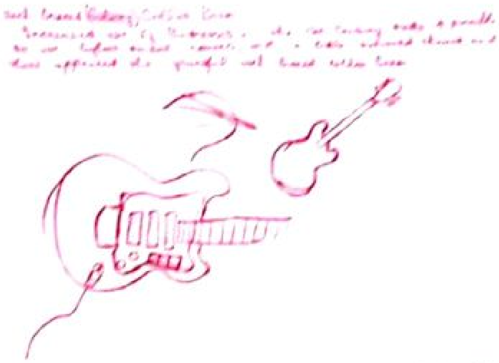
一度金が入って、ビル・ヘイリーの「ロック・アラウンド・ザ・クロック」を買おうと思った。覚えてるよ、買ってきてくれって家族の誰かに頼んだんだ。もう待ちきれなかった。ところが帰ってきた家族は僕にレコードを差し出すと、"ああ、ビル・ヘイリーは売り切れだったから、これを買ってきた"。ディープ・リバー・ボーイズだった。"違う、こんなのが欲しかったんじゃない"って思ったよ。すごくがっかりした。あれが手に入らな

CamScannerでスキャン

かった最初のレコード。僕は人生で学んだね。自分を信頼してる相手を失望させちゃいけないんだ。

バディ・ホリーが来た時は見に行けなかった。ロンドン・パラディアムのステージをテレビで見ただけ。ビル・ヘイリーがリバプールに来た時にはチケットを買う金がなかった。15シリング──学生にとっては大金だよ。ポールがどこで15シリング手に入れたんだろうって、ずっと不思議だった。彼は見に行ったんだよ。でも僕は1956年にリバプール・エンパイアでロニー・ドネガンを見た。ダニー＆ジュニアズやクルー・カッツも（彼らは「アース・エンジェル」や、ペンギンズのオリジナルをカバーした「シュ・ブーン」なんかをやった）。

コンサートはずいぶん見に行ったけど、その中でもエディ・コクランは最高だった。彼を見に行ったのは1～2年あとだね。バックをやってたのはイギリスのバンドだった。エディ・コクランはすごく記憶に残ってる。彼はいつものように黒の革のベスト、黒の革ズボンで、ラズベリー色のシャツを着ていた。オープニングは「ホワッド・アイ・セイ」だったんだけど、カーテンが開くと彼は観客に背中を向けながらリフを弾いてるんだ。僕は彼がどんなふうに弾くのか知りたくて、指の動きをずっと追ってたよ。グレッチのギターだった。彼の写真に必ず出てるやつ。それに黒のギブソンのピック、ビグスビーのトレモロ・アーム。オレンジ色のチェット・アトキンス6120。のちに僕がカール・パーキンスのテレビ・スペシャルに出た時に使ったようなやつ。ウッドの部分に"G"の焼印が押してあるんだ。彼はすごくいいギター・プレイヤーだったね。何よりそれを覚えてる。彼の持ち歌もすごく印象に残ったけど（彼は「サマータイム・ブルース」とか「カモン・エヴリボディ」とか「トゥエンティ・フライト・ロック」とか、すごくいい曲をたくさん持っていたからね）、カバー曲にも感心した。レイ・チャールズの「ハレルヤ、アイ・ラヴ・ハー・ソー」とかね。すごくよかった。



曲の間におもしろい間があってね。彼はマイクの前に立ってて、喋りながら両手で髪を後ろに撫でつける。すると女の子が"エディ!"って悩ましげな声で呼ぶんだ。するとクールな彼はマイクに向かって"ハイ、ハニー"って囁く。"これだ!"って思ったよ。"これだ──これこそロックン・ロールだ!"

そしてもちろん、彼はアメリカの偉大な秘密を知っていた──巻き弦じゃない3弦だよ。何年もあとになるけど、僕はエディとツアーに出ていたジョー・ブラウンと親しくなって、巻いてない3弦のことを教えてもらった。初期のビートルズのレコードを聴いていてすごく感じるのは、僕が3弦を弾くと3つの音に分かれた感じになってることだね。"ディ・ディドル・ダン"って。もしプレーンな細い弦を使ってたら、一度にベンドして弾けたんだよ。あの頃はそんなに賢くなかったから、"3弦の代わりに2弦を使えば楽にベンドできる"なんて考えてなかった。でもエディ・コクランはそういうのも全部わかってたんだよ。

初めてのギター。
3ポンド10シリングのエグモンド

スキッフル・ブームが起きたのは僕が10代の初めの頃。ロニー・ドネガンはイギリスのロック・バンドにすごい影響を与えたんだよ。もっと認められていいはずなのにね。50年代末頃は、ギター・プレイヤーといったら彼しかいないような感じだった。彼は最も成功した人間で、誰より有名だったんだよ。声も最高だし、エネルギッシュで、歌もすばらしかった──レッドベリーのキャッチーなバージョンとかね。

僕は彼が大好きだった。僕にとって彼は偉大なヒーローだったんだよ。誰もが彼に影響受けてギターを持ち、スキッフル・バンドを組んだ。スキッフルはブルースから生まれたものだけどパフォーマンスの形が僕らリバプールの白人にも受け入れやすかった。ものすごく安上がりなんだ──ウォッシュボード（洗濯板）、茶箱を使ったティー・チェスト・ベース、ほうきの柄に弦を張ったやつ、3ポンド10シリングのギター、それだけでいい。それに音楽を始める取っかかりとして簡単だったしね。ほとんどの曲はコードふたつだけ、多くても3つだから。いい曲がほんとにたくさんあったよ。「ミッドナイト・スペシャル」、「ウォバシュ・キャノンボール」、「ロック・アイランド・ライン」といった一連の曲──すばらしい曲が何百とあった。こういうのがすべて、ルーツは黒人奴隷の文化なんだよ。

まあそういうわけで、みんなスキッフル・グループに入っていた。ほとんどのグループはいつの間にか消えていき、残ったグループが60年代にロック・バンドになったんだ。そういうバンドは伝説になってるよ。エディ・クレイトンというバンドがあったのを覚えてる（リンゴは一時このバンドに入っていた）。僕ら"わあ、こういうのいいなあ"って思ってたんだ。それから少しして、僕はアーサー・ケリーと兄と一緒に、レベルズというスキッフル・グループを作った。兄は誰かのガレージで見つけてきたギターを弾いてたよ。僕らはブリティッシュ・リージョン・クラブで一度ギグをやっただけだったけどね。

13か14の頃、僕はよく教室の後ろの方の席でギターの絵を描いてた。"f"ホールがあいた大きなチェロ型のやつとか、良い形の黒いボディのしっかりしたやつとか。すっかりそういうのに夢中になって、ギターを自分で作ろうとしたこともある。まったく無謀だよね。知らなければ何だってできるものなのさ。木工は学校で1年やっただけ、そんなにうまくなかったけど、それほど下手でもなかった。僕らが習ったのはすごく簡単なことばかりで、ダブテイル・ジョイントに丸鑿とか、その程度。どこかでギターの作り方を読んだんだろうね。自分で考えついたとは思えないもの。

3枚張りの合板を買ってきた。まず好みの形を描き、それから切り取る。f"ホールはついてた。ボディは空洞。あとはそれぞれの内側みたいな形だったけど、"f"ホールはついてた。ボディは空洞。側面にいくつか小さな四角い切込みを開け、その穴にダボを通して表板を固定する。それから板を水に浸けて曲げ、縁に合わせてくっつける。すごくおおざっぱな作りで、曲げた部分はちょっと凸凹になってた。だけど僕のしでかした大きな間違いはネックが1枚で作れなかったんだよ。ナットのあたりまでそんなに大きい板がなかったから。同じ板で、ヘッドは別の板にした。それぞれの端の部分に穴をあけて、ネジでアルミ板を取り付けて固定したんだ。それから光沢剤を全体に塗り、フィルピース、ブリッジ、マシンヘッド、ナットを買い、弦を張った。"f"ホールも開けて、オレンジ色のニスまで塗ってね。何十年もかかったような気分だった。そして最後に弦を巻き上げたら、見事にばらばらになってしまった。僕はかっとなってギターを小屋に放り込み、このことはもう二度と口にしなかった。

ヘフナー・プレジデントは、僕が手にした初めてのまともなギターだ。あの大きなスーパー・ギブソンのギターが原型で、チェロ式に大きい"f"ホールが開けてあった。僕は何時間でもずっと弾いていた。いろいろ覚えようと、夜遅くまで起きてたよ。だんだんわかってくるのがおもしろくて。自分では練習って感じがしなかったね。僕がほんとに好きなことはこれだけだった。新しい弦を手に入れると古い弦は全部取り払い、ギターは磨いていつもきれいにしてあった。ほんと、けちのつけようがないくらいピカピカだったよ。

始めてすぐにギター教本を買った。コードの押さえ方とかが載ってるんだよ。ポールと知り合ってから、彼にもその教本を見せた。その頃、ポールはまだトランペットをやってたんだけどね。僕らはその本を見てCとかEとかG7とか、ちょっとコードを覚えた。でもそれにはCの基本のスリー・フィンガーしか出てなかったんだ。まもそう、だからあとでもう一度やり直さなきゃならなかった。ちょっと頭に来たのを覚えてるよ。"どうして最初からフル・コード教えてくれないんだ?"って。

転回というものを発見した時のことも忘れないね。ネックのボトムあたりのコードを覚え始めた時、突然わかったんだ。ネックの上に行くにつれてどう音が変わっていくか──同じコードでもどんどん音程が上がっていくんだ。そういうことがわかってくるのって、最高の気分だよ。もうちょっと大きくなった頃、誰かからチェット・アトキンスのアルバムをもらってね。それでいろんなコードを使う曲に挑戦し始めた。

僕はテクニックのあるギター・プレイヤーじゃなかった。いつだってもっとうまい奴がいた。ポールや僕と同じ学校に行ってた奴で、その後レモ・フォーのメンバーになったのがいる──コリン・マンレーだ。ふたつの旋律を同時に弾くチェット・アトキンスのプレイをコピーできるような奴だった。どうも僕にはそういう忍耐力がなくてね。どうしてこれでいっぱしのプレイヤーになれたのか不思議だよ。子どもの頃はよく練習してたけど、いつまでもそうやってじっとしてられやしないさ。僕はそこまで熱心じゃなかった。

僕の初めてのガールフレンドはロリー・ストームの妹で、アイリス・コールドウェル。彼女はほんとにいい子だった。ブラに靴詰め詰めてたてね（彼女の方じゃ、僕のガールフレンドだなんて思ったこともないだろう。若い頃って何もわかってないのさ。誰かのことを思い浮かべて、あるいは同じクラスの子を見て、そのうち彼女が自分のガールフレンドだと思い込んでしまうんだ）。だから僕は、ビートルズができる前からロリーを知ってたんだ。僕は何度かアイリスと会って、彼女の家に遊びに行ったりもした。ちょっとした地下があって、そこをコーヒー・クラブにするつもりだったらしい。50年代にはそういうのが流行ってたみたいだね。ロリーはスポーツマンだった。アイリスを迎えに行くと、ロリーが息を切らしながら玄関を駆け上がってくるのにぶつかる時があったよ。汗びっしょりで、ストップ・ウォッチをチェックしてね。そうやってトレーニングしてたんだ。

ロリーの本名はアラン・コールドウェル。父親はアーニーといった。家族全員、とてもいい人たちで、僕らみんなすごく仲良くしてもらった。その後──ハンブルクから帰ってきて、リバプールやイギリス北部でたくさんギグをやるようになった頃──僕らはギグを終えてリバプールに戻ると、いつもロリーの家にたむろしてた。お母さんのヴァイは僕らのために紅茶とトーストを際限なしに出してくれたよ。

アーニーは空いてる時間に地元のブロード・グリーン・ホスピタルで道具係をやってた。よく患者さんに歌を歌ってあげてたよ。ほんとにいい人だったな。本業は窓拭きで、僕らが夜遅く行くと、彼はそのうち寝ちゃうんだ。それでみんな彼のことをジョークの種にしてたけど、悪口じゃなかったよ。彼はさっぱりしてて、静かで、物腰の柔らかな人だった。彼が亡くなった頃には、僕らはもうレコードも出して、リバプールを離れ

左：スピークのアプトン・グリーン，中央：ポールとヒッチハイクをした時，右：1957年5月4日付サウス・リバプール・ウィークリー・ニュース

Intense excitement is shown above by the clenched fists of George Harrison and Jim Kelly, who were watching the Cup Final on the projection television in the Speke Congregational Church Hall on Saturday last.

Spectators in church hall saw cup final

ていた。アーニーが亡くなったあと、ヴァイとロリーがふたりとも自殺しようとしたって。それを聞いた時は悲しかったね。アイリスはその後シェーン・フェントンと結婚した。つまりアルヴィン・スターダストだよ。

ある年、ポールと僕はヒッチハイクをしようと思い立った。今じゃそんなこと考える人もいないだろうね。だって、まずマージー・トンネルを抜ける前に襲われるだろう。第二に誰もが車を持ってるから、最初から渋滞で動けない。でもあの頃、僕は家族でよくデボン州の南のエクスマスまで行ってた。で、ポールと僕もまずそこまで行ってみることにした。

金はあんまり持ってなかったから、ベッド＆ブレックファーストを探して泊まった。ある街に着いて、通りを歩いているうちに、あたりが暗くなってきてね。女の人がいたから"すみません、どこか泊まれるところを知りませんか"って訊いたんだ。そしたらその人が僕らを気の毒に思ったらしくて、"今、息子たちがいないから、私の家にお泊まりなさい"って言ってくれた。それで僕らは彼女の家に行って――彼女を殴って縛り上げ、有り金全部奪った！　冗談だよ。彼女は自分の息子の部屋を使わせてくれて、朝になると朝食を作ってくれた。ほんといい人だった。誰だったのかな――ローン・レンジャーかな？

それから南部の海岸沿いにエクスマスを目指していった。途中、パブで酔っ払いと話をしたら、彼は自分の名前がオクソ・ホイットニーだと言った（彼はのちに「スパニアード・イン・ザ・ワークス」に登場する。僕らの話を聞いて、ジョンがその名前を使ったんだよ。ジョンの本には、みんなから聞いたおかしな話がたくさん入ってる）。それからペイントンへ向かった。相変わらず、金はほとんどない。小さな携帯用のコンロがひとつ。ブリキに蓋がついてるようなやつさ。下の部分にメチル・アルコールを少し入れると燃えるんだけど、ほんのちょろちょろって感じ。僕らはそれと小さなバックパックを持って、食料品の店に寄る。スメドリーズのスパゲティ・ボロネーズかスパゲティ・ミラネーズのどちらかを買うんだ。どっちもストライプの缶でね、ミラネーズが赤いストライプ、ボロネーズがダークブルーのストライプ。それにアンブローシアのクリームライスを買う。缶を開けて、蓋を折り曲げて持ち、コンロの上にかざして温めるんだ。そういうもので食いつないでた。

ペイントンに着いた時にはもう全然金がなかったから、その晩は海岸で寝た。どこかで会った救世軍の女の子ふたりが一緒にいてくれて、しばらくは暖かかったけど、そのうち寒くなるわ湿っぽくなるわで。もう耐えられないって、朝起きるとまた歩き始めた。ノースデボンを抜けて、フェリーボートでサウス・ウェールズに渡った。ポールの親戚でバトリン休暇村の係員をしてる人がいたから、そこへ行こうと思ったんだよ。

チェプストウで警察署に行って、留置所に泊めてくれないかって頼んだ。すると"冗談じゃない、出てけ。サッカー場のスタンドならかまわんよ、そこの偉そうな警備員に、警察で許可をもらったと言いなさい"って。それでそこに行って、固い木のベンチで眠った。とんでもなく寒かったよ。そこからまたヒッチハイクを続けて、ウェールズを北に向かう時、トラックに乗せてもらった。その頃のトラックには助手席がなかったから、僕はエンジン・カバーの上、ポールはバッテリーの上に座った。ポールは後ろのポケットにジッパーが付いてるジーンズをはいててね、しばらくして、いきなり大声出して飛び上がった。ジッパーがバッテリーのプラス・マイナスにつながっちゃったんだ。それでカンカンに熱くなって、ポールは尻に大きくジッパーのやけどの跡がついたよ。

ようやくバトリンズに着いたら入れてもらえなかった。まるでドイツの捕虜収容所みたいだったな――17番収容所、みたいな感じだった。鉄条網のフェンスで仕切ってあって、休暇をそこで過ごす人は中に通され、僕らは締め出される。だから忍び込まなきゃならなかった（リンゴはここでプレイを始めたんだ）。

ポールはスピークからアラトンのフォースリン・ロードに引っ越した。ジョンが住んでるメンローブ・アベニューのすぐ近くだよ。その頃には、ポールは歌いながらトランペットは吹けないってことに気づいて、ギターを買おうと決めていた。で、もうふたりともギターを始めてたし、学校でも一緒に遊んでたから、彼が引っ越してからもつきあいは続いてたんだ。彼のところは自転車で行ける距離だったしね。20分くらいだったかな（今、車で行くとびっくりするよ。当時何マイルにも思えたのが、車なら3分で行けてしまう距離なんだから）。

リバプール・インスティテュートにいたアイバン・ボーンという奴がジョンの近所に住んでて、彼がポールをジョンに紹介したんだ。ジョンはすでに有名で、学校じゃ評判の男だった。また自分でもそれをわかってたんだよね。僕がジョンと会ったのはもう少しあとで（場所は覚えていない）、その時にグループに入らないかと誘われた。クオリーメンだよ。ジョンはこの頃すでにアート・カレッジの学生だった。初めて会った時の印象は覚えてないな。いい奴じゃないかって思ったくらいかな。あの年頃の僕は、とにかく音楽をやりたいってだけだった。そういうふうに音楽やってる奴とか歌を歌う奴とかなら、会えばすぐ仲間になれるもんだと思うよ。

ジョンは母親からコードを習ってた。彼のギターは小さな丸いサウンド・ホールがついてる安っぽいやつで、弦が4本しかなかった。ジョンはギターの弦が6本だってことすら知らなかったんだよ。彼の弾いてるのはバンジョーのコードだった。指を大きく広げて弾くコードだ。"何やってんの？"って僕は言ったんだよ。彼はそうやって弾くものと思ってたのさ。それで僕らはまともなコード――EとかAとか全部――を教えて、弦を6本にさせた。

クオリーメンには他にもメンバーがいたけど、何にもしてないように見えた。だから僕は、"あいつらを追い出せよ、そしたら僕が入る"って言ったんだ。ナイジェル・ウォーリーがティー・チェスト・ベースをやってたけど1週間でやめた。アイバンも一時入ってて、他にも何人か――グリフ（エリック・グリフィス）ってギター・プレイヤーもいたね。入れ代わり立ち代わりって感じだったけど、そのうちジョンとポールと僕だけが残った。そのメンバーでしばらく続いてた感じだね。結婚式とかパーティとかで演奏したよ。僕の兄のハリーが結婚した時も、ジョンとポールと僕とで演奏したんだ――酔っ払ってね。キャバーンにも一度出た。当時のキャバーンはまだジャズ・クラブで、僕らはロックン・ロールをやったもんだから追い出されそうになったよ。

ジョンとはしょっちゅう会ってた。彼がよく僕の家に来てくれたんだ。僕の母親は大の音楽好きで、僕が音楽に興味を持ち始めるとすごく喜んだ。母が僕にギターを買ってくれたんだよ。だからみんなが遊びにくると、母はほんとに嬉しそうだったね。それにジョンは自分の家にいたくなかったんだ。ミミおばさんがすごく厳しくて几帳面な人だったから。ジョンはいつもミミのせいで気まずい思いをして、しょっちゅう彼女を怒鳴りつけてたよ。

知り合ってすぐの頃、一度ジョンの家に行ったのを覚えてる。僕はまだインスティテュートに通ってて、ちょっと幼く見えた。僕らテディ・ボーイ風の格好してたね――僕はかなり決まってたに違いない、ミミに見事に嫌われたもの。彼女はギョッとして、"なんて子でしょう！　どうしてこんな子を家に連れてくるの？　ひどい格好だわ、まるでテディ・ボーイじゃないの"。するとジョンが、"うるさいんだよ、メアリー、黙ってろよ"ってやり返す。そんなだから、彼が僕の家に来る方が多かったね。母はちょっぴりウィスキーとか出してくれたし。

僕は学校の制服を自分で作り変えるようになっていた。兄のお古が何枚かあってね、そのうち千鳥格子のスポーツ・ジャケットを黒に染めてブレザーにした。しっかり染まってなくて、まだかすかにチェックの模様が見えてたけど。それからライム・ストリートで買ったシャツ。自分じゃ最高にクールだと思ってた。白いシャツで前ひだがついていて、ひだの端には黒の刺繍があってね。あとジョンにもらったベスト。ジョンは"おじさん"のダイキンズ（彼の母親の恋人）からもらったんだ。ミスター・"トゥイッチー"・ダイキンズね。イブニング・スーツのベストみたいなやつ――黒のダブルで、襟がついてた。ズ

CamScannerでスキャン

ボンも知り合ってまもなくジョンからもらったものだ――パウダーブルーのスリム・パンツで裾の折り返しがある。それも黒に染めた。あとは兄にもらった黒のスウェード・シューズ。

ミミおばさんの夫はジョージ・スミスという人で、彼の兄弟にインスティテュートの英語の教師がいた。ちょっと女っぽくて、それでも控えめな言い方だな。いつでも胸ポケットにシルクのハンカチを覗かせてて。彼のしぐさとか喋り方とか、僕ら10代の少年には転げまわっちゃいそうなくらいおかしくてね。みんなして彼のことをシシー・スミスって呼んでた。彼はいつでも言うんだよ、"それは学校で履く靴ではありませんね、ハリスン。隅に立ってよくお考えなさい"。

僕のそういう格好はかなりヤバいものだった。最後の1、2年あたりは、毎日ずっと退学になるんじゃないかって思ってたよ。あの頃の僕らはワセリンで髪を後ろに撫でつけて、ロックン・ロール・スタイルにしてた。それに校則では帽子とタイ着用、ブレザーには校章を付けることになってたんだけど、僕は校章を縫いつけずにピラピラさせてた。簡単にとれるように胸ポケットにペンを入れて、それで挟んでたんだ。タイもすぐ外してたね。

入ってたんだ――ギグはたまにしかなかったから。彼はクイーンズ・ドライブのミュアヘッド・アベニュー寄りに住んでいた。で、僕は彼ともつきあいながら、音楽を覚えて少し金が稼げるようになりたいと思ってた)。とにかく、レスが家でパーティを開いた時に、そのブリジット・バルドー風の子が来てたんだ。それで僕は彼女を引っかけてキスしたりとかしてね。どういうわけかそれがジョンの耳に入って、それから彼は僕を少し見直すようになったわけ。

レスはバンジョーもマンドリンもギターもこなした。肉屋に勤めてた叔父が彼に会わせてくれたんだ。僕はその肉屋で土曜日に配達のバイトをやってたんだけど、そこにいた彼がドブロ・ギターを持ってて(僕はその時に初めて見た)。レスとも知り合いでき、レスはいいプレイヤーだったよ。レッドベリーの曲とかビッグ・ビル・ブルーンジーとか、ウディ・ガスリーをやってた――どちらかというとカントリー・ブルースやブルーグラスっぽいやつで、ロックン・ロールじゃなかったね。僕は彼のバンドと組んで――もうバンド名も覚えてないけど――何度かパーティで演奏もしていた。たまたまウエスト・ダービーのヘイマンズ・グリーンにあるクラブでギグをやった時、ヘイマンズ・グリーン8番地に新しいクラブができるって話を聞いた。それでそこへ連れて行ってもらって、地下を覗いてみた。その店がカスバだよ。ピート・ベストに初めて会ったのもその時だ。何ヵ月か経ってからピートがドラムを持ってたことを思い出して、ハンブルクへ行くために彼を仲間に引き入れたんだ。

ポールと僕はアート・カレッジに通ってるうちにスチュアート・サトクリフと知り合いになった。スチュアートは痩せてて、いかにもアーティストっぽい奴だった。サングラスかけて、ゴッホみたいな髭を生やしてたね。実際画家として才能あったよ。ジョンはスチュアートをアーティストとしてすごく気に入っていた。スチュアートも当然ジョンを気に入ってた。ジョンはギターをやるし、すごいテディ・ボーイだったから。スチュアートはクールだったよ。ルックスも最高で、雰囲気も最高で、それにすごく話しやすい奴だった。いつでもほんとに優しくてね。僕はスチュアートが大好きだったよ。ジョンは時々、かすかに優越感を匂わせることがあったけど、スチュアートはポールや僕がアート・スクールじゃないからって差別するようなことはなかった。彼は僕らがパーティで演奏する時見に来るようになって、そのうち僕らのファンになったんだよ。実際何度か、ジョンとポールと僕がパーティで演奏できるようにもしてくれた。その頃はほとんど僕ら3人だけでやってた。ジョンはいつも学友会にうまいこと言って、僕らの機材を

ジョン、ポール、ジョージと、デニス。――リバプールの
ナース・レーンで。
兄ハリーの結婚式のあと。

リバプール・インスティテュート時代の宿題で15歳
したもの。女性を描いたのはポールだよ。

:僕はよく学校をサボって、できるだけグラ
ールの生徒じゃないふりして歩いてた。タ
ンとつるんでたね。だけど学校に出てて
になるとジョンに会いに行ってた――ロー
兎がなきゃ出られないようなところだった
全速力で逃げ出さなきゃいけない。角を
服から外せるかぎりのものを外して、それからアート・スクールに行く(校
ル・インスティテュートと隣り合わせだった)。
と嘘みたいにリラックスできた。みんな煙草吸ってるし、エッグ&チップス
僕らはまだ給食でキャベツとかパッタのゆでたのとか食べさせられてた
の子もいて、アーティストっぽいタイプもいて、すべてが揃ってた。ほん
となかったんだろうけど、あの頃の僕らからすれば楽しそうに見えたん
草吸ったって誰にも怒られない。ジョンは僕らが行くと喜んでくれた―
少しびりびりしてるのがわかるんだ。僕もポールも、アート・スクールの
っと幼く見えたからね。あの頃僕はまだ15だったはずだよ。

らある程度認められたのは、僕がアート・カレッジの女の子に目をつけ
・バルドーっぽい感じのキュートな子で、金髪をポニー・テールにし
レス・スチュワートのバンドでプレイしてて(同時にふたつのバンドに

買わせようとしてたね。そのうちようやくアンプを手に入れて、おかげで時々学生会館で演奏しなきゃならなくなった。曲目を決めてやってたかどうかも覚えてないけど、何曲かはまとめて練習してたはずだよ。

ある時リバプールでアート・スクールのパーティをやった。学生寮のひと部屋を使ってね、僕にとって初めてのオールナイト・パーティだった。オールナイトって最初から決まってるんだよ。ルールとして、各自ワイン1本と、朝食用の卵をひとつ持ってこなくちゃいけない。それで僕らはイェーツ・ワイン・ロッジで安ワインを買って、部屋の冷蔵庫に卵を入れた。そのパーティで最高だったのは(ジョンとポールも絶対同じ意見だと思う)、誰かがレイ・チャールズの「ホワッド・アイ・セイ」を持ってきてたことだ。パート2がB面に入ってるEP盤だよ。ひと晩中そればかりかかってたな、8時間か10時間くらいノンストップだったろう。あれは僕がこれまで聴いた中でも最高の名盤の1枚だ。翌朝僕は吐いたよ。あの時シンシアもいてね、僕は酔っ払って彼女に言ったのを覚えてる。"君みたいな素敵な女性とつきあえたらなあ"って。

CamScannerでスキャン

下：子どもの頃のガールフレンド、ジェニファー・ブルーアーと、ピンフィールド・ヒースで。

リバプールのパント・デイというのは、リバプール大学やアート・カレッジの生徒たちが慈善のために募金を集める日だ。仮装行列の日だよ。みんな変な格好して化粧して、何でも好きなことをやっていい。金を払わずにバスに飛び乗り、ブリキの箱を持って金を集めてまわるとか、あちこちの店に入っていくとかね。要するに、ふざけて街中のしまくわけさ。ポールと僕は大学生じゃなかったけど、おもしろそうだと思って。それでジョンがスチュアートと住んでたガンビエ・テラスのフラットへ行って、衣装を着こんで参加したんだ。ジョンとスチュアートが持ちきれないほど募金箱を持ってたから、それを少しもらってね。何時間か募金集めをしてガンビエ・テラスに戻り、ブリキの箱を壊して金を全部いただいた。といっても1ペニーのコインばかり、全部で4シリングくらいだったろう。

僕は学校をやめて、いつまでも仕事をしなかった。休暇が終わり、新学期が始まって、もう何ヵ月も経っていた。みんな学校に戻っていったのに僕はまだ仕事にもつかず、学校に行く気もなかった。いつも父から金を借りてたよ。仕事にはつきたくなかった——バンドをやっていたかったんだ。だけど、"仕事を見つけた方がいいと思わないか?"って父から言われ続けると、やっぱりちょっと居心地悪くなってきてね。

父自身は専門職じゃなかったけど、自分の息子3人はそれぞれ違う専門の仕事につかせようと考えていた。一番上の兄は機械工になり、次の兄は板金と溶接をやっていた。そこで父はこう考えたわけだ。"ジョージは電気工になるといい、そうすれば家族で自動車修理場がやれる"。父はクリスマスのプレゼントに小さな工具箱を買ってくれた。箱を開けると中にはドライバーとかいろんな道具が入っててね。それを見て思ったよ、"参ったな、ほんとに僕を電気工にしたいのか"。ほんとげっそりした、僕が電気工になれるはずないんだから。

父は僕にリバプール・コーポレーションの試験を受けさせた。でも僕は見事に失敗した。わざと落ちたんじゃない——ほんとに通らなかったんだよ。僕は数学がまるでだめだったから。すごく恥ずかしかった、だってリバプール・コーポレーションに勤めてる人って、それほど賢い連中じゃなかったんだよ。職業安定所で訊くと、"中心街のブラックラーズに行きなさい。ショー・ウィンドウの飾りつけをする人間を探してる"って言われた。それで行ってみたら、ブラックラーズのショー・ウィンドウ担当者が、"申し訳ないが、その仕事はもう人が見つかったんだ。でも上に行ってミスター・ピートに会ってごらん"って。ミスター・ピートはメインテナンス部の部長で、電気工見習いとして僕を雇ってくれた。そもそも父が望んでいた仕事だよ。

僕はミュージシャンになりたかった。それに、なれるという根拠も資格もなかったけど、グループができた時、僕らは驚くほどポジティブな気持ちを持ってた。全員がフルタイムでバンドやろうって思ってたよ。どうしてなのかはわからない——単に僕らは生意気だったのかな。何かすばらしいことが起こりそうな予感がしてた。でもね、あの頃のすばらしいことというと、メッカ・ボールルームに出ることとか、そんなものだったんだ。それだけでもすごいことだったんだよ!

父はフィンチ・レーンにあるリバプール・トランスポート・クラブに何かつてがあったらしくて、一度クオリーメンに土曜の晩ギグをやらせてくれた。そこはダンス・ホールで、ステージがあってテーブル席があって、みんな踊ったり酒を飲んだりしてた。父は喜んでたね、そこに僕らを出せたのが自慢だったんだ。僕らはステージを2度やることになっていた。

最初のステージを15分か20分やって、それから休憩中にブラック・ベルベットでしこたま酔っ払った。ブラック・ベルベットはあの頃流行ってたドリンクでね——ギネス1本にサイダー(シャンペンじゃないよ)を半パイント混ぜたものだ。僕は16歳、ジョンは18歳、ポールが17歳。みんなでそれを5パイントくらい飲んだ。2回目のステージに上がる時には、見事に酔っ払ってたよ。自分たちもとまどったし、他のみんなも戸惑った。父はカンカンになって怒ったね。"よくも恥をかかせたな……"って。ケン・ドッドが大ブレイクしたのはあのクラブだよ。

1959年12月、僕らはテレビの「ディスカバリーズ」で司会をしてるキャロル・リービスのオーディションを受けた。あの番組で発掘された人がいたのかどうかも怪しいけど、とにかく誰ひとり何ももらえなかったのは確かだね。延々とコンテストが続いて、彼の方はギャラなしでたくさんのアーティストを出演させ、チケットを売ることができる。番組の最後に、誰が勝ったかを拍手の量で決めるんだ。勝てばまた次の週に出られるわけだよ。

僕らはジョニー・アンド・ザ・ムーンドッグスという名前で、マンチェスターのコンテストに出た。ジョンがギターを持ってなかった時期だよ。確か"絶対割れない保証付き"のギターが割れたんだ。ギターを持ってないジョンが真ん中に立って、両手をそれぞれ僕らの肩にかけて「シンク・イット・オーバー」を歌う。ポールと僕はギター——片方のネックはこっち、片方はあっち向いてる——弾きながらバック・コーラスをやった。すごくいい出来だと思ったけど、僕らはリバプール行きの最終電車に乗らなきゃいけなかった。だから拍手をどの程度もらえるか確かめるまで待ってるわけにいかなかったのさ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

I WAS BORN ON 7TH JULY 1940 AT NO. 9 MADRYN STREET, LIVERPOOL 8.

僕は1940年7月7日、リバプール8の
マドリン・ストリート9番地で生まれた。

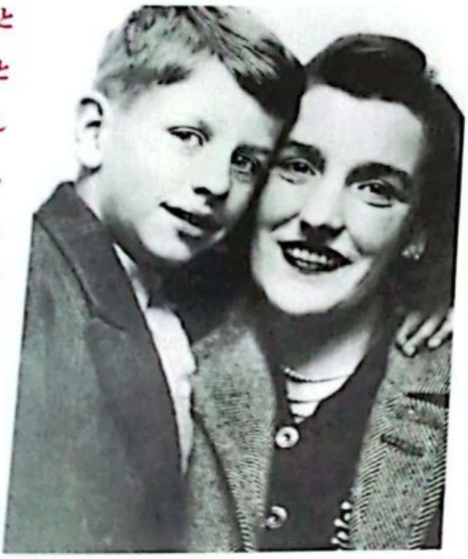
RINGO STARR

戦争とか爆撃とかは記憶にないんだけど、実際、リバプールはずいぶんやられたんだ。僕らの家のまわりもひどい空襲を受けてね。何度も隠れなきゃいけなかった。って僕はあとから聞かされたんだけど。いつも地下の石炭貯蔵庫に隠れてたんだ(貯蔵庫というより食器棚みたいな感じだった)。何軒か家が建ってたあたりに大きな割れ目ができてたのを覚えてるよ。少し大きくなると、そういう瓦礫の中で遊んでた。あと防空壕の中とか。

一番幼い頃の記憶は乳母車に押し込められたこと。母と祖母と祖父と一緒に出かけたんだ。どこへ行ったのか知らないけど、田舎の方だったんだろうね。山羊に追いかけられたから。みんなものすごく怖がった。僕も怖かったよ。みんな声上げて走りまわった。だって山羊が追いかけてくるんだよ。間違いなく、トクステスやディングルじゃないね!

父方も母方も、ごく普通の、貧乏なワーキング・クラスの出だった。母の母なんて、ほんとにすごく貧しかったんだよ。子どもが14人いてね。曾祖母はかなり裕福だったっていう話だけど——家のまわりにクロム・メッキの欄があったから。いや、だってあれ、とにかくきらきら輝いてるじゃないか。ひょっとしたら僕が話を作ってるのかな。そういうのってあるじゃない、何か想像したり、母親から吹き込まれたりしてるうちに、ほんとにあったことだと信じ込んでしまうのさ。

トンネルをくぐり抜けていくと
が見えて、そこを目指して進むと
そうやって僕はこの世に誕生し
たわけ。大喝采浴びてね。
実は母がよく言ってたんだ、
まれたから第2次世界大戦が
始まったんだって。
意味わかんないよね、ほんと。
どう考えてもわかんないけど、
く母はそう言ってたんだよ。
か祝えなかったんだろうな、
にひょっとしたら母の言うとおりかもしれない——
ありえないとは言い切れないさ。



僕のほんとの名前はスターキーじゃなくてパーキンなんだ。祖父の名前がジョニー・パーキン。祖父の母が再婚して、いや再婚なんて当時じゃすごいショッキングなことだったんだけど、とにかくその再婚相手がスターキーで、それで祖父も苗字をパーキンからスターキーに変えたんだ(僕は60年代に家系図を作ってもらおうとしたんだけど、2世代しか遡れなかった——しかも僕が存在しない! しょうがないから僕は家族に訊いたんだけど、マスコミに嗅ぎつかれるのを心配して、みんなも何も言ってくれなかった)。

父はパン屋。それが縁で両親は出会ったんだと思うよ。ケーキを焼くのが仕事だから、戦争中も砂糖は切らしたことがなかった。でも僕が3歳の時、父はもうたくさんだって、僕らを置いて出て行った。ひとりっ子だったから、それからは僕と母とふたりきりになった。僕が13歳のときに母は再婚したけどね。

父の思い出と言えるようなものは何もない。父が出て行ってから会ったのは5回くらいかな、でも僕は絶対好きになれなかった。父はひどい奴だって、母に洗脳されてたからね。僕は父が出て行ったことに腹を立てていた。でもほんとの怒りを感じたのは、その後リハビリ・センターでセラピーを受けた時だ。その時僕は自分を見つめて、自分の気持ちを閉じ込めずにちゃんと感じ取れるようになった。僕としては、小さい頃に自分の中でケリをつけてたつもりで、実は怒りを抑えつけていたなんて気づいてなかった。気にしないでいればいい、そうやって僕らは育てられたんだよ。僕らは "とにかく気にしないこと" って教えられた最後の世代だ。あんまり感情を表に出そうとしなかったのさ。

母もしばらくはうまく感情を出せずにいた。父がいなくなったあとはちょっと辛かったんだよね。そのうち僕に食事や着るものを与えるために、どんなくだらない仕事でも引き受けるようになった。ほんとに何でもやってたよ。バーのウエイトレスに階段の床磨き、食料品の店でも働いた。

最初は寝室3部屋の、広い堂々とした家に住んでたんだ。でもふたりじゃ広すぎるし、父の経済的な援助がなくなればとても住んではいられなかった。僕らはもともとワーキング・クラスだったけど、リバプールじゃ父親がいなくなったとたんにワーキング・クラスの中でも下の層になるんだよ。だから僕らはもっと小さな、寝室ふたつの家に移った(どちらの家も借りてたんだ——当時、家はみんな賃貸だった)。僕らが入る10年前から、とても住めないって見放されてた家だったけど、僕らはそこに結局20年住んだよ。

引越し自体はマドリン・ストリートからアドミラル・グローブへ、隣の通りに移っただけ——あの辺の人はそんなに遠くへ行かなかった。僕らはバンに荷物を積んだ。300ヤードしか離れてないからね、後ろの扉も閉めなかった。僕はバンの荷台に座ってたのを覚えてる。子どもにはキツい記憶だよね。自分の置かれた場所に慣れなきゃいけないんだ(僕のかわいそうな子どもたちの場合も、1週間おきに引っ越してたような気がするけど)。

マドリン・ストリートの家の中は覚えてない——庭つきの家じゃなかったのは確かだ

CamScannerでスキャン

けど——でも同じ通りに友だちがたくさんいたから、よくみんなの家に遊びに行ってたよ。アドミラル・グローブの家の方は覚えてる。そこも庭はなかったね。トイレが外にあるんだ。バスルームなんてなかったんだよ。でもれっきとした家だったし、それで十分だった。寝室はふたつ。片方が母の部屋で、もう片方が僕の部屋。

アドミラル・グローブの家の隣はボペイさん、通りを少し行くとコナーさんの家があった。祖父母はマドリン・ストリートに住んでいた。リバプールではみんな祖父母の家のそばに住むんだよ。母の親友のアニー・マグワイアもマドリン・ストリートに住んでいた。

父がいなくなってからは、僕は祖父母と母に育てられた。奇妙だよ、だってその祖父母って父の両親なんだから。母の両親じゃないんだ。でもふたりとも僕をすごく可愛いがってくれて、よく面倒見てくれた。すばらしい人たちだったよ。休みに旅行へも連れて行ってくれた。

祖母のアニー(もちろん僕は、アニーなんて呼ばなかったけど)は大柄な女性で、祖父は小柄だった。祖父が酒かなんか飲んでおかしなこと始めると、祖母は腕まくりして、ファイティング・ポーズをとるみたいに拳を握って言うんだ。"ジョニー、いいかげんにして！ そういう口の利き方はやめなさい——こっち来て、このろくでなし"。たいした女性だったね。階段磨いたりとか、いろんなことやって、がんばって生きてた。

祖母はリバプールの巫女さんでもあったんだよ。僕が病気になると、母は僕を毛布にくるんでおばあちゃんのところへ連れて行く。すると治っちゃうんだ。どんなものでも治療法はふたつ。パンの湿布とホット・トディ(ウイスキーやブランデーをお湯で割って甘味をつけたもの)——僕はあのホット・トディが大好きだった！ みんな優しかったね。それに誰もが僕にあれこれかまいたがって——僕はみんなの関心の的だった。ひとりっ子だから、どちらにしても僕に目が向きがちだったんだよね。

祖父は競馬が大好きだった。"おウマさん"さ。帰ってきて、賭けた馬が負けてたりすると、毒づくわ、新聞は放り投げるわ——"あの間抜け馬め、老いぼれ馬"……何だかんだって、ギャンブラーってみんなそうなんだよね。祖母が"ジョニー、子どものいる前でしょう！"って言うんだけど、祖父はまだ"間抜け馬！"ってやってる。僕にはそういうのがみんなすごくおもしろかった。

祖父が座る椅子は決まってた。戦争中もずっとその椅子に座ってたんだ。祖父は絶対逃げ隠れしなかったんだよ。家の煉瓦が吹っ飛んでも、そのまま自分の椅子に座ってた。子どもの頃、僕はその椅子に座りたくてさ。でも僕が座ってると祖父が入ってきて、何も言わずに指差す。すると僕はどかなきゃいけない。でももちろん、祖父の椅子だからこそ座りたかったんだよ。

祖父の死は、僕の一生でも一番悲しいことのひとつだ。僕が19か20歳の時かな。彼が地面に埋められた日は、ものすごく悲しい日だった。あの時僕は、自分は火葬にしてもらおうと思った——大きな穴を掘って僕の体を埋めるなんて、そんなひどいことを誰かにさせるわけにいかないよ。あの瞬間に僕は泣き出した。祖父が埋められるまでは泣けなかったんだけど、あれでもうグッと来ちゃったんだ。

僕の記憶の中では、学校というのは大イベントだ。セント・サイラス・スクール。初めて学校に行った日のことをほんとに自分で覚えてるのか、それとも母が何度も聞かせてくれたことが頭にあるからなのかわからないけど。その朝、母は僕を門まで連れて行ってくれた——学校は家のすぐそば、歩いて数分のところだ。あの頃は親が門の前まで送って行って、それから"じゃあね、行ってらっしゃい"で終わりだった(僕らが子どもにしてやったみたいに、教室まで一緒に行って座らせてやるとかいうことはなかった)。今でもあの大きな建物が目に浮かぶよ——地球上で一番でかい建物だ——校庭には百万人くらい子どもがいる。そして僕もそこにいる。すごく怖かった。

昼休みには歩いて家に帰った——僕らが子どもの頃は、どこへでも好きに歩いていけたんだよね。危険なことなんか何もなかった。それでたとえば僕は家に帰って、"学校がお休みになったんだ"って言う。子どもの浅知恵でさ、"今日はもうこれでおしまいなんだよ、ママ"って。母は僕の言葉を信じる。だけど他の子どもたちがお昼を食べ終わって学校に戻っていくのが窓から見えて、"さっさと行きなさい"ってことになるんだ。学校が楽しかったという思い出はないな。いつ行っても気が滅入る場所だった。僕が学校に行ってたのは、全部で5年程度じゃないかな。

6歳半の時、僕はひどい腹膜炎になった。盲腸が破裂しちゃったんだ。壮大なドラマだったね。みんなが家に集まっていた。僕は痛くて死にそうになっていたから、親戚がかなりの人数来ていたんだよ。医者がやって来ると、いきなりみんなが僕を抱き上げて担架に乗せ、家から連れ出した。そして救急車で運ばれたんだ。病院に着いたら、女医さんが診察しながら脇腹を押すんだよ。あの時ほどの痛みはその後も経験がないね。

手術のために麻酔を打つ段になって、"何か欲しいものある？"って言われたから、"紅茶一杯飲んでいい？"って訊いた。そしたら"これが終わったらお茶を飲んでいいよ"って。でもお茶がもらえたのは2ヵ月半後だった。回復するのにそれだけかかったんだよ。手術を始めたら腹膜炎を起こしてることがわかってね。かなりたいへんな手術だったんだ。とりわけあの時代だから。明日の朝まで持ちません[illegible]れたそうだ。母には相当こたえたよね。だから母はやたらと僕を[illegible]ったんだなって、あとで納得したよ。僕が死ななかったのは[illegible]だ。意識が戻ってからも、ずいぶん長いこと心許ない状態[illegible]。

病院というのは退屈なところさ。長期間いると、そこが自分の[illegible]2年も病院で過ごしたんだよ(2度目は僕が13歳の時)。[illegible]活になる。いつも決まった毎日。自分と同じように病気の子[illegible]けど自分が元気になってきたら、その子たちとも離れることにな[illegible]んど毎日来たね。祖父母もそう。忘れられないのは父が来た[illegible]トを持って立ってた。僕の誕生日が近かったから(その時6歳[illegible]"何が欲しい？"って。僕が言ったものを全部ノートに書い[illegible]なかった——父が僕に何か買ってくれたことなんか一度もなか[illegible]いう文字はなかったんだよ。

僕はベッドに寝かされていて、そのうち足でものを取るのが[illegible]コインや紙切れや、ベッドから落ちたものは何でも足で拾ってたよ[illegible]ど経った頃かな、ずいぶん元気になってきて、あと数週間もすれば[illegible]になった。僕は誕生日に小さなおもちゃのバスをもらったんだけど[illegible]の子が見たいって言うから、ベッドの横の柵から身を乗り出し[illegible]だよ。1メートルくらいの高さだったのかな。僕は乗り出しすぎてそのまま[illegible]手術の傷が全部開いちゃったんだ。あの時は危なかった。あれでまた[illegible]とになったんだ。

1年近く入院して、退院後も療養し[illegible]は2年間行かなかった。当時は補習な[illegible]いつでも、最低1年分は遅れてた。[illegible]て、"大丈夫、僕が見てあげるから"なん[illegible]先生はいなかった。僕はただクラスに入れ[illegible]け、授業にはいつもついていけな[illegible]は、クラスで一番大きい奴と仲良くな[illegible]た。そのうちますます学校が嫌いにな[illegible]かなくなってくるわけさ。母には学校へ[illegible]されたけど、僕は友だち何人かと公園をぶらぶら[illegible]自分たちで欠席届を書いたりもしたけど、[illegible]ってるからバレちゃうんだよ。

僕は9歳まで字の読み方もわからなかった。母は仕事があったから、[illegible]にあんまり気を配っていられなかったんだ。でもマリー・マグワイアという[illegible]えてくれた。母の友だちのアニーの娘でね、母がパブとか映画に行く時はマリーが[illegible]つも僕の面倒を見てくれてた。「ドビン・ザ・ホース」を教科書にして読み方を教えてくれたよ(僕は読むことはできる、でもスペルがダメなんだよ——音のとおりに書いちゃうんだ)。もっと早くから勉強してればよかったと思う。知識がすごく[illegible]てしまうもの。僕はラテン語を習ったことがない。ジョンはラテン語も[illegible]も習ってた。

ディングルはリバプールでも一番荒れた地域だよ。トクステスはいまだにかなりの評判を誇ってる。ほんとに荒れてたな。あの頃はまだ悪い連中もいたし、[illegible]盗とかとんでもないことがしょっちゅうだった。でも子どもは安全。女性も安全。[illegible]りも安全だった。その3つのグループには誰も手を出さなかった。だけど今は[illegible]んと嫌になるね——車椅子の人を引きずりおろして、90歳のおばあさんを殴ったりするんだから。最低の臆病者だ。もしあの頃誰かが年老いた女性を殴ったりしようものなら、そのあたりの不良が全員出てきてそいつを見つけ出して、メチャクチャにぶん殴っただろう。悪い奴でも、そういうことは許さなかったんだ。

リバプールは暗くて怖いところだったけど、子どもにとってはすごく楽しかった。[illegible]イビー・パターソン、ブライアン・ブリスコと僕。僕らは三銃士だ、僕らは[illegible]グだ、僕らはブラック・ハンド・ギャングだ——って、そういう3人組を気取ってた。どこへ行くにも一緒だったよ。探偵の真似したり、カウボーイの真似したり。学校も[illegible]で、すごく仲がよかった。10歳か11歳まではそれが僕の世界で、ああいう空襲の焼け跡も僕らには天国だったね。そこで爆撃に遭って死んだ人のことなんか何も考えなかった。単に広い遊び場でしかなかったんだ。"焼け跡で会おうぜ"っていうのが[illegible]葉だったよ。

僕らが子どもの頃はどこへでも歩いて行った。僕の大きな夢は放浪者になることだったね。だって、放浪者ってあちこち歩いてまわってるだけだろ。僕ら3人はバスに乗るお金がなかった。8歳か9歳くらいで、スピークや、公園や、町外れの森まで、5マイルとか8マイルとか平気で歩ってた。バスを追いかけるのもよくやったよ——"あ、もう[illegible]がった！"——僕らはその通りを走っていって、次のバスが来るまで待つ。それで行き先を確かめるんだ。自転車に乗るようになったのはもっとあと。母が中古の自転車を買ってくれて、それでウェールズまで行って帰ってきた。そのあと体じゅう痛くて、それで自転車にあんまり興味がなくなっちゃった。ノース・ウェールズまではたかだか[illegible]キロか50キロなんだけどね。

CamScannerでスキャン

放浪者になる以外にも、子どもの頃の僕にはいろんな計画があった。僕はずっと船乗りになりたかったんだよ。僕にとっては、海に出るのは当然の成り行きみたいなものだった。"ああいうところに行ってみたいし、あんなラクダの鞍を買いたいし"って。リバプールの家には必ずどこか隅にラクダの鞍が置いてあった。他の家は必ず誰か船に乗ってる人がいて、そういうガラクタをお土産に持って帰ってたのさ。何よりいいことは、レコードや流行の服を持ってきてくれることだ。僕の記憶に残ってる最初の音楽は、8歳くらいの時。ジーン・オートリーの「サウス・オブ・ザ・ボーダー」だった。背筋に震えが走るってやつ、あれをほんとに経験したのはあの時が初めてだね。彼には3人の仲間がついていて、"Ai, ai, ai, ai"って歌ってる。ほんとわくわくしたよ。あれ以来ずっと、ジーン・オートリーは僕のヒーローなんだ。

船乗りはすぐ目についた。格好がイカしてるからさ。だから僕もそれを目指した——海へ乗り出すこと。僕はシー・スカウトにも入ってたんだよ。本部に行って、訓練をして、ライフルで遊んで——それがかっこよかった。でも僕はライフル持って逃げようとしたから追い出されちゃって。僕は船も見たことがなかった。何をやっても長続きしなくて、いつでもみんなを怒らせるようなことばかりやってたね。

遊ぶものは持ってたよ。クリスマスが来ると、オレンジ1個と古ぼけた段ボール箱をもらう……。嘘だよ——母も、おじやおばも、目一杯のプレゼントを買ってくれた。僕はいつでもお菓子の箱とか、ちょっとしたおもちゃをもらってたよ。どっちみち、必ず交換しちゃうんだけどさ。いつも違うものが欲しくなるんだよ。実験セットみたいな素敵なプレゼントをもらっても、それを他のものと取り替えてしまう。そうやって親類の誰かをちょっとがっかりさせちゃうんだね。僕は絶対に満足できなかった。切手もちょっと集めてて、ディンキーのミニカーも集めてたけど、結局は交換が僕の趣味なんだよ。僕と友だちと、ウールワースでちょこちょこ万引きもしてた。こっそりポケットに忍ばせることができるような、くだらないプラスティックのものばかりだけど。

Hハント&サンズのクリスマス・パーティーで、ジェラルディン・マクガバンと。

何を集めても、最後には誰かにあげてしまう。78回転のコレクションはいとこにあげたんだけど、彼はただ置いとくだけだったね(リバプールを出る時に残りのレコードは全部持っていったんだけど、バッツィ・クラインやリトル・リチャードのレコードは母が譲らなかった——自分のものだって言うんだ)。

祖父は埠頭で働いていて、よく僕の遊び道具にって、歯車とか車輪とか、金属のものを持ってきてくれた。祖父はボイラーの製造が仕事で、一度エンジンに本物の火がつく列車を作ってくれたことがある。たぶんあれが僕のもらった中で一番すばらしいおもちゃだね。かなり大きなもので、乗っかることもできるんだ。僕は常に実業家だったから、それにみんなを乗せてあげてお金を取ろうと考えた。他にもちょっとした劇をやろうとか、裏庭に動物園を作ろうとか考えたよ。僕らはジャムの瓶にクモを飼ってた——ライオンとか虎とかはないよ、イギリスにいるものだけだからね。一度、死んだチーターの皮をもらったことがあった。これもやっぱり船乗りから。これは入場料半ペニーにした。入る時はタダだけど、出る時1ペニーという場合もある——それが嫌なら、傘さしてパラシュートみたいに塀から飛び降りてもらう! そうやっていつでも金儲けの方法を考えてたんだ。

その後僕はすばらしい計画を思いついた——その時はもう子どもじゃなかった。いろんな百万長者たちに電話をかけるんだ、フランク・シナトラもターゲットのひとりだっ、そういう人たちに何とか連絡をつけて、百万ドル貸してくれって頼むんだよ。僕その金には手をつけない。利息だけもらうんだ。そこにはきっとみんな気づかないろう。1年後僕は彼らの百万ドルを返してあげる。この計略、知らないだろう!っていながらね。もちろん、実際にはやらなかったよ。

歳の時、ディングル・ベイル・モダン・スクールに移ったけど、その学校にもあんまかなかった。ディングル・ベイルで一番よく覚えてるのはランチを買ったこと。ホスのちっちゃいパンだよ。そのパンの中をくり抜いてチップスを詰めるんだ。そ最高の食事だった。僕は給食が大嫌いだったから。僕らは外でパンを買って、そらブランコに腰を下ろして食べた。

ングル・ベイルは恐ろしく遠かった——歩くとたっぷり30分かかるんだよ。プリンークを抜けて行ってもいいし、パーク・ロードを通っても行けた。ある時ブライアリスコと一緒に、雪が降ったあとの公園を歩いたのを覚えてる。僕らは雪の上最初に足跡をつけたんだ。それで学校に行くのをやめた。一日中公園を歩きて、足跡をつけてたんだよ。

でもあちこちでちょっとしたケンカが起きてた。ケンカして相手にけがをさせた日にはでかい奴が校門の前で待ち構えてる。そいつに殴り倒されるか、でなきっこつかまれてひどく脅されるんだ。"二度とうちのフランクに手を出すんじゃ!"ってさ。僕はいつでも損な役まわりだった。でかい兄貴が欲しいって真剣よ。僕をいつも殴る奴を負かしてくれたらなあって。僕には父親も兄貴もい。だけど母は僕のために何度も戦ってくれたよ。僕がでかい奴にいじめられると、母はそいつの家に行ってドアをどんどん叩いて、家の人と話をつける。母はほんと、とっても素敵な人だった。僕はただひとりの子どもで体も弱かったから、母にとってはすごい宝物だったんだよ。

ハリーが現れるのは僕が11歳の時だ。新しい父親になる人だよ。ハリーはバートンウッドのアメリカ軍基地で塗装と室内装飾をやってた。いつもおもしろい話をしてくれて、DCコミックスも買ってくれてね。それにすごく音楽に詳しくて、いつもいろんな曲を教えてくれた。でも絶対に無理強いはしないんだ。彼が好きなのはビッグ・バンドやジャズやサラ・ヴォーンだったけど、僕はくだらないのばかり聴いてた。彼はいつも、"これ聴いたことある?"って言う。それが決まり文句だ。"これ聴いたことある?"。ほんとに優しい人だったな。動物や子どもはみんな彼を好きになるんだよ。僕はハリーから優しさを教わった。

僕はハリーが大好きで、そして母もハリーが大好きだった——やがて母は彼と結婚すると言った。"おまえはどう思う?"って訊かれたよ。僕はしばらくの間、すごく腹を立ててた。まだ13歳だったからね。でも僕が"だめ"って言ったら母が結婚をあきらめるのはわかってた。小さい頃にそんな立場に置かれるなんて、ものすごく辛いよ。でも僕は"もちろんいいよ、最高じゃない"って言った。ハリーはいい人だもの。

地元でお菓子屋をやってるレンが、ハリーと仲良くなった。その店では新聞配達も兼ねてたから、僕は新聞の仕分けとかをちょっと手伝った。配達そのものは絶対やらなかった——寒いのが嫌だったんだ——でも雑用をやったから、時々お菓子をもらえた。かなりラッキーだったよ、まだ配給手帳があった頃だからね。

配給制が廃止になった日は記念すべき日だったけど、だからって急に甘いものやバターや卵を買いに行けたわけじゃない。僕ら金がなかったんだ。実際、戦時中に配給制になったって、貧乏人にとってはそれまでと変わんなかったんだよ。どのみち、僕らはずっと経済的に規制を受けてたんだから。僕が最初入院した時は運が良かったね。何でも食べさせなきゃっていうんで、取りたてのジャガイモやバターをもらえた。バターひとしずくだって、あの頃じゃ大変なことだったんだよ。

13歳くらいから、まわりのことが少しはちゃんと見えるようになってきた。リバプールは暗くて汚ないところに感じられて、こんな家を出て、どこか小さな庭のあるところに住みたいって思ってた。アドミラル・グローブから逃げ出したかったんだ。そんなに遠くまで行かなくてもいい——エグバースみたいに、ちょっと緑があるところなら。僕は公園が大好きだった。学校サボってよくセフトン・パークやプリンセス・パークへ行ったよ。僕は緑や海や、広い空間に親しみを感じるんだ。僕が自分で買った家はみんな敷地が広かったけど、僕に必要なのは家からの眺めなんだよ。モンテカルロの家からは地の果てまで見渡せる。大事なのは空間なんだ。とにかく遠くまで眺められるところがいい。別に自分の家じゃなくたって、僕がいてもいいところならかまわないさ。丘の上なら、半エーカーの土地に立ってる小っちゃな家でもいい、景色が見えるからね。モーリーン(最初の妻)と僕と子どもたちと、ハムステッドに越した時のことを覚えてるよ。すごくいいとこだったんだけど、僕は庭が気に入らなかった——どこに座っても柵があってむかつくんだよ。それでその家はやめた。どうしても我慢できなかったんだ。リバプールがあんなに閉鎖的なのはあのせいだと思うな。

僕はいまだにじっとしていられないところがある。今でも放浪者なんだね。どこかに落ち着こうと思うんだけど、僕の中にはそれを邪魔するものがあるんだな。バーバラ(現在の妻)とよく笑うんだよ、家を買って、すっかり仕上げて、内装もやって、ぜーんぶ出来上がる——すると僕は考え始めるんだ、"もう引っ越さないか?"。

13歳の時、僕は肋膜炎になった。リバプールは結核の繁殖地でね、特に僕の住んでたあたりはひどかった。僕は肺を悪くしてよく休んでたけど、そこから結核になっちゃったんだ。丸1年、温室みたいなところに入れられた。

この2度目の入院の時は、シスター・クラークとナースのエジントンがいた。13とか14の頃って思春期だろう、看護婦さんたちがおやすみのキスをしてくれたりすると、もうはしゃぎまわっちゃってね。"看護婦さん、おやすみのキスしてくれる?"——大勢の看護婦に、とっても素敵なキスをもらった。みんな若くて(少なくとも老けてはいなかった)、18歳から20歳くらい。シスターにはキスをせがまなかったよ!

病棟は2棟に仕切られていて、片方の棟が女子、片方が男子。もう熱に浮かされた感じで、みんなで夜に女子の病棟へ忍び込んではゴソゴソやってた。僕は女の子の胸を触りたくて何時間もそこにいたよ。もちろん全員結核患者なんだから、そうやって菌をお互いに移し合ってるわけだ。ただガールフレンドができても、病気が治ったら出て行っちゃうんだから絶対に長続きしなかった。それも成長の過程なんだね。それにあの頃はみんなすごく奥手だった。映画に行って、腕を女の子にまわすくらい。そこからちょっと手を伸ばして、もっと下の方に触れようって魂胆だ。

でも僕がセックスについて知ったのはずいぶん早かったんだよ。2回機会があった。ふたりの女の子が、僕が彼女たちのパンツを下げて、見たり触ったりしたって母親に

言いつけた。僕が8歳の時だ。みんな子どもだったのさ、ちょっと見て触ってみただけ——大人になるまでに経験する自然なことだよ。農場暮らしみたいにのどかなもんさ。友だちの妹がみんなに触らせてくれた。他には何もしなかったよ、ただ眺めて触れてみただけ。それでみんなで大笑いした。

初体験は16くらいの頃。セフトン・パークだった。すごく変な感じだったけど。女の子ふたりと僕の友だちと、サーカスが出てる広場の奥で芝生に座ってたんだ。サーカスの音楽と、フランキー・レインと、何百万という人がいて——そしてその時だ、僕らは芝生に寝転んでて、「ゴースト・ライダーズ・イン・ザ・スカイ」がかかってて。最高だったね。それにあの年頃だと、一度経験しちゃうとまた味わいたくなる。長いこと頭から離れなかったよ。

パトリン休暇村、カリプソ・ボールルーム前。左から右へジョニー・ギター、タイ・ブライアン、ロリー・ストーム、ルー・ウォルターズ、リンゴ

2度目の入院の前、僕はいつもパーク・ロードの小さな楽器屋の前を通って学校に行ってた。ギターやバンジョー、アコーディオン、マンドリンとかがウィンドウに飾ってあったけど、僕がいつも眺めてたのはドラムだった。そこにあるタムタムを見るたびドキドキしてね、毎朝学校へ行く時必ずそれを見て、帰りもまたそれを眺める。値段は26ポンドだった。当時としては大金だよ。

僕がドラムをやり始めたのは1954年の入院中だった。僕らが退屈しないようにって、病院で楽器を少し教えてくれたんだよ。先生がひとり、でかいイーゼルを抱えてやってきて、その上に大きなボードを乗せる。そこに楽器のシンボルの色が示してあるんだ。彼女が教えてくれたのはパーカッションだった。トライアングルにタンバリンにドラム。先生が黄色を指差すとトライアングルを鳴らし、赤を指差すとドラムを鳴らす。僕は自分がドラムの番になった時だけやった。

僕は病院のバンドに入り、糸巻きでベッドの脇のキャビネットを叩いて練習するようになった。入院してたのは10ヵ月。それだけ長いと、自分で何かおもしろいことを見つけなきゃね。楽器の他には編物くらいしかないだろ。そういうところから、本気でドラムをやりだしたんだよ。それからはもう、他のことは何も望まなくなった。欲しいのはドラムだけ。退院するとあちこちの楽器屋を覗いてドラムをチェックするようになった。ドラムしか目になかった。祖父母がマンドリンとバンジョーをくれたけど、そんなの欲しくなかったんだ。祖父は僕が7歳の時、ハーモニカをくれた——つまらない。家にはピアノがあった——くだらない。意味があるのはドラムだけだ。

その頃から音楽もよく聴くようになった。14歳の時にレコードを3枚買ったよ。フォー・エイシズの「ラヴ・イズ・ア・メニー・スプレンダード・シング」、エディ・カルバートの「オー・マイン・パパ」、デヴィッド・ホィットフィールドの「ママ」。フォー・エイシズは生き残ったな、今でも聴けるよ。あとのふたりはもうほとんど聴かないね。

ドラマーには興味がなかった。映画のジーン・クルーパは大好きだったけど、わざわざ彼のレコードを買いに行く気にはならなかったな。唯一買ったドラムのレコードは、コージー・コールの「トプシー・パート・トゥー」。僕はずっとカントリー&ウエスタンが好きだった。そういうのもほとんどは船乗りが持ち込んだものだよ。パーティへ行くといつもハンク・ウィリアムスやハンク・スノウなんかのカントリーがかかってたっけ。今でもカントリー・ミュージックは大好きだよ。スキッフルもあの頃流行りだしてて、僕もジョニー・レイの大ファンだった。1956年頃になると僕の最大のヒーローはフランキー・レイン——ビル・ヘイリーも好きだったな。マン島まで「ロック・アラウンド・ザ・クロック」を見に行ったよ。退院してから、祖父母が連れて行ってくれたんだ。あの映画はセンセーショナルだった。だって観客が映画館をぶち壊すんだよ、最高の見ものだったね。僕はやらなかった、病弱な子どもだったから。みんなが僕の代わりにやってくれるだけで、すごくおもしろかった。

初めてドラムを手に入れたのもこの頃だ。30シリングでドラムを1個買ったんだよ。きな、片側だけ張られたバス・ドラムだった。当時はあちこちでパーティがあってね。じさんのひとりはバンジョーやハーモニカをやり、祖父母はマンドリンとバンジョー弾いた。いつでも誰かが何かを演奏してた。そこで僕がそのでかいドラムを薪2本どんどん鳴らすと、みんなひどく怒ったよ。でも相手が子どもだから大目に見てくれ、"ああすごいね"みたいなこと言ってね、でもそれから僕を追い出すんだ。

みんながよくやってたのは「スターダスト」とか「ザット・オールド・ブラウン・マジック」か「ユール・ネバー・ノウ」、「ゼイアー・ビルディング・フラッツ・ホエア・ザ・アーチズ・ユスト・トゥ・ビー」(これはジムおじさんとエヴィおばさんの十八番)——そういう昔の曲った。僕のアルバム「センチメンタル・ジャーニー」でやったような歌だよ。リバプールは誰でもパーティで歌う持ち歌があった——何か歌わなきゃいけないんだよ! 母のは「リトル・ドラマー・ボーイ」。僕に歌ってくれるんだ。僕は母に「ノーバディズ・イルド」を歌ってあげた。すると母はいつも泣く。"僕は誰の子どもでもない"って歌、母は"まあ、やめて!"って。「クライム・アポン・マイ・ニー」も、みんなの大好きだったな。

は15歳の頃聖歌隊で歌ってた——金のためだよ。もっと小さい頃は日曜学校にもっと通ってた。僕はプロテスタントだった——母はしばらくオレンジ党支部のメンバーだったけど、そんなに長くはやってなかったね。3月17日の聖パトリックの日には、パレードをやるカトリック教徒をプロテスタントがみんなでぶん殴る。7月12日のオレンジ党勝利記念日(北アイルランドのプロテスタントがボインの戦いでカトリック勢力を破った戦勝記念日)には、パレードやってるプロテスタントをカトリック教徒がぶん殴る。そういうことさ。誰もがいつも言ってるとおり、リバプールはアイルランドの首都なんだよ。

13歳からはもう学校に行ってなかった。ある時、仕事が見つかるまで失業手当を受けようと思って、修了証をもらいに行ったんだ。学校へ行って、"すみませんけど、僕は今ほんとに15歳で、この学校に通ってたって証明する書類をもらえませんか?"って言ったんだ。すると向こうはファイルやなんかを全部調べて、それから言った。"君はこの学校の生徒じゃないね"。"嘘じゃない、僕はここに通ってたんです"って食い下がったら、ようやく見つけてくれた。でも僕が生徒だったことを誰も覚えてないのは明らかだった。ところがそれから7、8年経って、僕らがビートルズとして成功すると、学校の園遊会に"僕の"机と椅子が出されて、金をとってみんなを座らせてるんだよ。僕のだなんてわかるはずないじゃないか。

あの頃は中退者でも簡単に仕事が見つかった。僕はまず鉄道のメッセンジャー・ボーイとして働いた。5週間ほどね。僕が鉄道を選んだのは制服をくれるから——暖かい服を手に入れるには好都合だった。でもやめる時は帽子しかもらえなくて、すごくガッカリしたよ。5週間目に健康診断に行かされて、"冗談だろう?"って言われてクビさ。でも16歳ぐらいで病気はすっかり治って、それからはどこでも問題なく働けた。

それからセント・チュドノー号という遊覧船で働いた。これは蒸気船で、リバプールからノース・ウェールズのメナイまで行くんだ。僕は遠洋に出たかったから、そのためのチケットを手に入れるにはこれが手っ取り早い方法だったんだよ。3ヵ月近海に出ていれば、大型の遠洋船に乗せてもらいやすくなる。僕はこの日帰り船までは行ったんだけど、そこで終わっちゃった。パブで女の子を引っかけるには、商船員のふりをするのが一番だった。"ああ、ちょうどメナイから戻ったところなんだ"って。するとメナイを外国だと思ってる女の子たちが、"まあすごい、いつ頃向こうを出たの?"って言う。僕は答える。"今朝の10時"。するとそこで、どっか消えてよって肘鉄食わされちゃうんだ。

僕は徴兵が怖くてたまらなかった。軍隊に入ると思うとぞっとしたよ。それで機械工見習いになったのさ。56〜57年あたりは、軍は見習生は取らなかったから。"ちゃんとした仕事についてるなら引っ張らないよ"ってわけ。逃れるにはそれが一番の方法に思えた。とにかく軍隊だけはごめんだったからね。うまい具合に、父がパブで知り合った人が、H.ハント&サンという工場に働き口があるのを知ってた。僕はそこで建具工になろうと思ったんだけど、入ってから6週間くらい、ずっと自転車で配達をさせられてさ。うんざりしちゃって、文句を言いに行ったんだよ。"ねえ、僕はここへ建具工になろうと思ってきたんです、自転車に乗るためじゃない"。すると上の人が、"困ったな、今建具工には空きがないんだ——機械工はどうだい?"って。それで僕は機械工見習いになった。週に1日学校へ行って、残りの日はみんなと働くんだ。

ここで——僕にとって最後のまともな職場で——ロイ・トラフォードと出会った。僕らはすごく仲良くなった。今でも友だちさ。あんまり会わなくなったけど、僕は今でも彼が大好きだ。彼と一緒によくパブへ行って(僕は16歳でパブに行きだした。かなり早いよね)、それからキャバーンへ行った。キャバーンで再入場のパスをもらって、またパブへ行く——それからもう一度キャバーンに戻って、またパブに行く!

ロイと僕は好きな音楽が同じだった——ロックン・ロールが大好きだったんだ。僕はいつでもラジオ・ルクセンブルグを聴いていた。音波がうまく入らなかったけど、どんなに音が悪くても、違う音楽が聴けるってだけで最高だった。日曜にはアラン・フリードの番組があってね、いつもロイの家で一緒に聴いてた。そこでかかるロックン・ロールが最高だったんだ。ロイと僕は似たような格好をしてて、一緒にスーツを仕立てに行ったりもした。僕らはテディ・ボーイだったのさ。僕はいつも黒、彼はブルー。何をやるにもふたり一緒だった。

僕らがいたのはリバプールの埠頭のそばだったんだけど、どの地域にもそれぞれ仕切ってる奴らがいるんだよ。ニューヨークかハンブルクみたいだね。僕はテディ・ボーイだった。そうなるしかなかったんだ。僕が住んでるところでは、ゴロつきとつきあわざるをえなかった。そうでないと誰からも攻撃される"無防備都市"になっちゃうから。道はふたつ。近所の誰かに殴られるか、違う地域の奴らに殴られるか(僕は何度もやられた)。

リバプールというのは怖いところでね、誰かとすれ違うと、向こうが"俺を見てんのか"って言う。"ノー"と言えば、"なんで避けるんだよ"ってなるし、"イエス"と言ってもやられる。勝ち目がないんだよ。どう答えても無駄なのさ。だけど自分も仲間になっちゃえば安全だ。ジョンやポールやジョージは大変だったろうな、不良仲間に入って

なかったからね。彼らはみんなテディ・ボーイじゃなかったんだよ。

ある時、ロイと僕はゴーモント映画館へ行くことにした。映画が終わってパーク・ロードを歩いてると、いつも人目につかないところで集まってる連中がいるんだよ。僕らの知ってる奴らではあったけど、"こっち来い"って言われて。そばに行ったらそいつらが言うんだ。"これからガーストンでケンカだ、ちょっとつきあえよ"。すぐにぴんと来るわけさ、"ノー"と言えばその場で叩きのめされる。それが嫌なら、ケンカの場所までついて行って運を賭けるしかない。こいつらに混じってベルトをぱっと抜き、強そうなふりをして、相手方の一番でかい奴が自分に向かってこないことを祈るわけ。ほんとカッとしやすい奴が多かったね。リバプールにはワーキング・クラスのタフな不良がぞろぞろいたんだ。

僕はテディ・ボーイ風の服を持ってた。いとこが船に乗ってて——何でも船乗りを中心にまわってるのさ——僕によくお古をくれたんだ。その彼がテディ・ボーイだったから、自然と僕もそういう格好になる。でかくて丈の長いジャケット、ピチピチのズボン、ゴム底靴。でも彼は僕よりずっと大柄だったから、ズボンは太くて重いベルトで締めなきゃならなかった。そのベルトにはワッシャーをズラリとつけておくんだよ。僕は16でそういう格好をし始めた。そのうち少し金が入るようになると、自分で服を買い始める。工場の稼ぎもあったし、物々交換とか"借りたものを売る"とか——そういうことをかなりやってたね。

ベルトのワッシャーとバックルはヤスリをかけて鋭く尖らせておく。そういうベルトで殴られたら当然大怪我だ——テディ・ボーイというのはほんと狂ってるね。みんな襟の折り返しにカミソリの刃を仕込んでたから、襟をつかんだ奴は手が血だらけになる。恐ろしく危険だよ。その頃の暮らしってのはそういう感じだったんだ。

よく他の地区の奴らとケンカになってね。僕はそんなに強くはなかったけど、走るのが速かった。短距離が得意で——今でもそうだよ——いきなり自分ひとりに5人が向かってきたら、走るのだって速くなるさ。ぐずぐずしてる暇はないんだ。"おまえだ! こっち来い!"で、バンバンってやられちゃうからね。僕はナイフで刺したこともないし、人を殺したこともない、だけど何度か叩きのめされた——たいていは自分の味方にね。まったくメチャクチャだよ。みんなもう頭の中がおかしくなってるから、敵も味方も見境つかなくて、仲間うちで殴り合いを始めちゃう。狂った犬みたいだ。かなりタチ悪かったよ。失明した奴もいたし、刺された奴もいた。ハンマーで殴られるところも見たよ。

そういうグループに名前はついてなかったけど、それぞれリーダーはいた。僕らはディングル・ギャング。同じ地域にいくつかグループがあったから、いざこざが起きないようにみんなで固まって歩いてた。"仲間とつるむ"とか言ってたけど、やってることと言ったら道を行ったり来たりして、角で立ち止まって、ぶん殴って、ぶん殴られて、映画を見に行って……。しばらくすると飽きてくる。僕はそういうのをすべてすっぱりやめたかった。それに音楽をやりだしてからはつるむこともしなくなった。ロイと僕はミュージシャンになりたかったから。それでだんだん不良生活から離れ始めた。音楽に取り憑かれたおかげで僕は脱け出せたんだよ。19歳でようやく完全に脱け出せた。やれやれ、ありがたいことにね。

1957年からスキッフルが大流行した。アメリカのブルースから発生したものだよ。ブルースと、それに酒持ち込みのパーティやレント・パーティがもとなんだ。レント・パーティっていうのは自宅を開放して、みんなが家賃の足しに10セントとか25セントとかのコインをカンパするやつ。そういう時、誰かが酒瓶を持ってきて、誰かが洗濯板を持ってきて、誰かが茶箱に弦を張ったティー・チェスト・ベースやギターを——手作りの楽器さ。

僕はアメリカに移住しようと思ったんだ。ジョニーっていう友だちと一緒に(苗字は言いたくない、彼は今も身を隠してるかもしれないから——その数年後にちょっとまずいことになったんだよ!)。僕はテキサスに行ってライトニン・ホプキンスと一緒に暮らしたかったんだ。最高のブルース・マン、僕のヒーローだよ。僕は実際大使館へ行って書類をもらったんだ。それが1958年。僕らは書類に記入した。ほんと面倒くさいのにがんばって書いたんだけど、次の書類になったら気が滅入った。"あなたの母親の祖母の飼い犬のグレートデンは共産主義でしたか?"みたいな質問でさ。ティーンエイジャーだったからね、すぐあきらめた。でも僕らは、ヒューストンに行ってからの職探しも考えてたんだ——雇ってくれそうな工場をリストにしておいたんだよ。それだけ真剣に考えてたんだ。

イギリスにはロニー・ドネガンと、バイパーズというスキッフル・グループがいた。当時キャバーンでやってたのはトラディショナル・ジャズとスキッフル(だから僕らもスキッフルを始めたんだよ)。エディ・マイルスとロイと僕とでバンドを作った、僕が最初に入ったバンドだ——エディ・クレイトン・スキッフル・グループ(エディ・クレイトンなんてほんとは存在しなかった)。僕らは全員同じところで働いてたんだ。エディは旋盤工、僕は機械工見習い、ロイは建具工だった。

実家の誰かが亡くなってハリーがロンフォードへ行ったら、12ポンドで売ってるドラム・セットがあったんだよ。親戚みんなで金を出し合って、ハリーはそのドラムをリバプールへ持ってきた。そして僕のクリスマス・プレゼントにくれたんだ。それまで僕は家でドラムを叩いてた——ビスケットの缶で作ったやつだよ、スティックは薪。でも今度もらったドラムはすばらしかった。ドラム1個じゃなくて、ドラム・セットなんだから。スネア・ドラムにバス・ドラム、ハイハット、小さいタムタム1個、上にはシンバルもついてるしバス・ドラムのペダルもあった(おかげでもう蹴っ飛ばさずにすんだ)。

僕は興味を持ち出すと、いきなりレッスンを3つくらい受けた。"毎晩楽譜を読んで、演奏法を勉強しよう"って思ってた。ドラムやってる小柄な男の家に行ったら、何か原稿用紙を持ってきなさいって言われてね。持っていくと彼が全部書いてくれたから、もうそれきり行くのをやめた! いちいち面倒くさくてさ。あまりにも決まりきってて、僕には我慢できなかったんだ。

ドラム・セットが手に入ると、それを家の奥にある僕の部屋で組み立てて、ガンガンやり始めた。すると階段の下から声がする。"もう少し静かにしなさい、ご近所に文句を言われるわ!"。2回しかやらなかったけど、2回とも怒鳴られた。それであきらめて、家ではもう練習するのをやめた。そうなるとグループに入らなきゃ練習できない。ドラムをもらったのはボクシング・デイの12月26日で、2月にはもうグループに入ってた。当然、そんな短い間でプレイできるようになるはずないさ。でも他のみんなも演奏できなかったんだよ。ギタリストだけはいくつかコードを知ってたけどね。それで僕らも何とか追いつこうとした。時間が経つのも忘れて練習した——だけどエディはほんとにいいプレイヤーだったな。何か楽器を与えればすぐこなせるタイプだね。音楽の才能が備わってるんだ。

僕はずっと工場で働いてて、昼休みには地下で職場仲間相手に演奏してた。そのうち工場の他の奴ら数人も入れてバンドを作ったんだ。それからはタダで出られるところならどこでも行って演奏したよ。クラブとか結婚パーティとか。

結婚パーティは何度かやったよ。誰か知り合いが結婚するってなると、楽器持ってって何時間か演奏する。一度職場の奴が"この結婚パーティで演奏しなきゃ"って言ってきた。あつかましい奴でさ、そう言ってから、"話をつけてきたら僕もグループに入れてくれる?"って。僕らはOKして、彼もグループに入ることになった。"ここなら問題ない、みんなすごい毛皮のコートを着てくるような結婚式だから。高い酒ばかりだ、あんな安ビールは出ないよ"。僕らが会場に行って準備してる時、客はみんなパブへ行ってた。戻ってきたら、薬瓶に黒ビールを詰めて持って来てる——あんな下品な結婚パーティは見たことない! 何が"すごい毛皮のコート"だよ……。

僕はセミプロになった。昼間は工場で働き、夜はドラムを叩く。エディ・クレイトンや他のバンドと一緒に、よその地域のダンス・パーティに出ることもあった。その後ロリ

CamScannerでスキャン

ーとも組んだよ。僕らが演奏してると、女の子は必ずミュージシャンを見るだろ、すると他の男どもはムッとする。殴られずにクラブから出られてラッキーだったよ。よく知らない地域で、地元の仲間もいないんだから。

そうやって僕のキャリアがスタートした。それからリバプールのいろんなバンドを渡り歩くようになった。まずダークタウン・スキッフル・グループ――当時は一番ビッグなバンドだった――それからロリー・ストームと組んで、次にトニー・シェリダンと組んで、そしてビートルズ。ほんといろんなグループとやったね。リバプールのあらゆるグループと一緒に練習した。あの頃はみんな混ざり合ってたんだ。全員が知り合いだったから、誰か病気だとか来てないとかってことになると、代役で別のグループに入ったりしてたんだよ。

僕の使ってたドラム・セットはイカしたスネア・ドラムが付いてたし、すごくよかったんだけど、何しろ古かった。それで1958年の夏、祖父から46ポンド借りて、中心街にあるフランク・ヘシーの楽器屋に行った。そこでエイジャックスのシングル・ヘッドのドラムを買ったんだ。ラディックのシルバー・パールに似た感じのやつ。

ロリー・ストーム＆ザ・ハリケーンズは最高だって思ったよ。本気でロックン・ロールをやろうとしたグループは、リバプールでは彼らが最初だったんだ。それまではみんなスキッフルをやってたけど、彼らはロックン・ロールの金髪だった――ロリーはビッグになろうとしてた。ミスター・ロックン・ロールになろうとしてたんだ。ジョニー・"ギター"・バーンはリバプールのジミ・ヘンドリックスさ。

僕はその頃すでにロイやエディと別れてダークタウン・スキッフル・グループにいた。ロイたちはそのままでいいって考えて――本業としてやる気はなかったんだよ。彼らは機械工や建具工として働き、結婚して、そして片手間に音楽をやる。でも僕はロリー＆ザ・ハリケーンズのオーディションを受けた。やりやすかったね、彼らの曲は全部知ってたから――どこのバンドも同じ曲をやってたんだよ。他にオーディションを受けた人がいたのかどうかも知らないけど、とにかく僕はパスした。"イエス"と言われて、僕はメンバーになったわけ。おもしろいことに、ロリーもその後のビートルズも、僕に対する第一印象が同じでね。オーディションを受けに行った時、僕はちょっと荒っぽく見えたんだよ。まだその頃も丈の長いダラッとした黒のジャケットを着て、髪は後ろに撫でつけたテディ・ボーイ風だったからね、みんなちょっと不安になったらしい。

トラッド・ジャズが大流行の頃は、スキッフル・グループは幕間（まくあい）のバンドだった。ギャラが安かったからね。少しでも稼ぎたければギグをたくさんこなすしかない。リバプ

ールでは、どのバンドにとってもキャバーンこそ理想の舞台だった。あそこだと歓声が
すごいしさ。でも僕らがロリーと出演した時は追い出されちゃったんだ。スキッフル・
グループとして出たのに、ジョニー・ギターがラジオを持ち込んで、それにギターをつ
ないだんだ。いきなりエレキ・ギターに変身さ。演奏もちょっとロックン・ロールっぽく
なった。それで僕らは反逆者だって追い出されちゃった。"そのやかましい音をやめ
ろ！"って。彼らが求めてたのは"ハイ・リリ・ハイ・ロー"――ああいうやつだった。ブ
カブカのセーターを着た人がたくさんいる中で、当時僕は黒のコーデュロイを着てた
――僕らはみんな、ビートニクみたいなものだったんだよ。

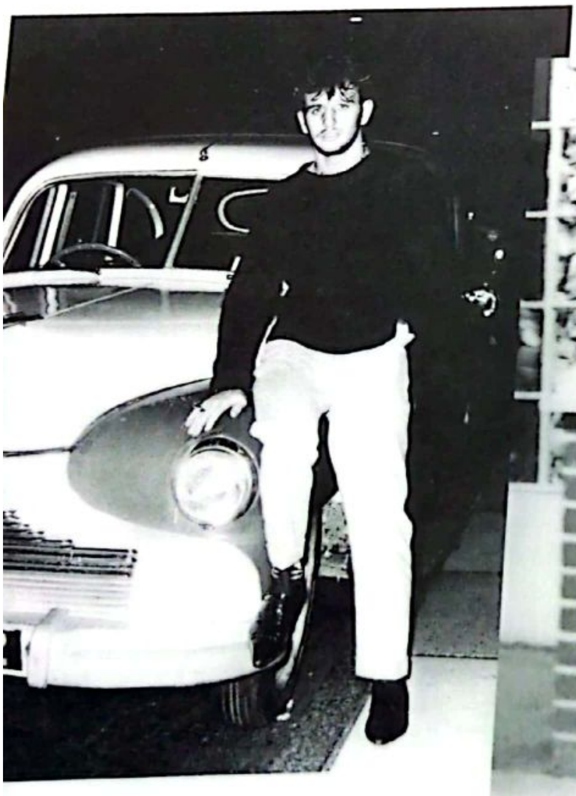
ロリー＆ザ・ハリケーンズはいろんなところで演奏した。イギリスの上から下までま
わり、外国へも行った。ロンドンでギグがあった時、ライシーアム・ホールへ行ったの
を覚えてる。女の子が誰も僕らと踊ってくれないんだ。グループの5人そろって、ひと
りの女の子に目をつけて、"踊りませんか？"。すると"えっ？ バカなこと言わないで"。
次の子も同じだった。"ねえ、踊らない？"――"あっち行ってよ"。その晩相手をして
くれたのは、しつけの行き届かないフランス人の子だけだった。そういうもんさ。

仕事とドラムで少し金を稼げるようになって、18で最初の車を買った。でかいやつ。
それだってそれまで、僕はいつも放り出されてたんだから。ギグに行く時、バスを使
うしかなかったんで、たいていスネアにシンバルにスティックしか持っていけなかった。
バス・ドラムとタムタムは、その晩同じところでやるバンドに頼んで借りなきゃならない。
貸してもらえないこともあったよ。たまに僕のセットを一式全部持っていった。ギグ会
場へ行く時はみんなすごく助けてくれるんだけど、ギグが終わればさっさと帰っちゃう
――僕はドラムと一緒に置いてきぼりだ。すごく惨めな晩のことを覚えてるよ。バンド
のみんなが手伝ってくれて、ドラムをバスに乗せた。バスを降りて気がついた。バス停
から僕の家まで800メートルくらいあるんだよ。そして僕の荷物は4ケース。僕はまず
2個を持ち、残した2個から目を離さずに20メートル走った。それから戻って残りの2
個を持ち、40メートル走り、放り出すとまた20メートル戻りって、それを繰り返したん
だ。あんなに惨めなことはなかったね。それで僕は思ったのさ、"クソッ、車を買う
ぞ"。

ジョニー・ハッチというドラマーが、スペア・パーツを使って車を組み立てていてね
――それで彼からスタンダード・バンガードを買った。あの車はすごく気に入ってたん
だ。最高に楽しませてくれたからね、タイヤはパンクしてばかりだし、ギアはセカンド
に入らないし。だけど僕はあの車が自慢だった。赤と白の手塗りで、でかいアイスク
リームみたいでね。"手塗り"っていうのは、単に彼がスプレーを使う余裕がなかった
だけなんだけど、僕はいつでも"これ手塗りなんだぜ"って言ってた。

1959年、軍隊は1939年9月以降に生まれた人間（確かそうだったと思う）を徴兵しな
いことに決めた。僕はその10ヵ月あとだから救われた。その時思ったよ、"やった、こ
れで音楽をやれる"って。それで僕は工場をやめ、ロリーと一緒にプロを目指すことに
した。だけどロリーのバンドとバトリン休暇村へ行きたいって言ったら、たいそうな家
族会議になっちゃってね。ロック＆カリプソ・ボールルームで、週に16ポンド。それまで
僕がステージに出るのは夜だけだったんだ。あとはたまに午後やるくらい。

僕の家はずっと労働者か兵隊で、実際に何かちょっとしたもの――機械工――だっ
ていう証明書がもらえそうな人間は、僕が初めてだった。おじにおばに工場のボス、



みんなから言われたのを覚えてるよ。"3ヵ月で戻ってくるに決まってる。その時は半端な仕事しかまわしてもらえないぞ"。でも僕は引かなかった。"かまわないさ。ドラムが僕の人生なんだ、僕はミュージシャンになりたいんだ。その夢をかなえるために、僕はロリーとバトリンズへ行く"。そしてそのとおりに実行した。20歳で仕事をやめちゃったわけ。僕はずっと、自分はいつまでもドラムをやり続けるって信じてたよ。それが僕の夢だったんだ。まあこれまでの人生には、たまにその夢を忘れてよけいなものに踊らされたこともあったけど。

ある日の午後、僕らはリバプールのジャカランダ・クラブへ行った。バトリンズへ行くちょっと前だね。いつもは夜にスティール・バンドが出てたんだけど、その日はどっかの奴が3人、メチャクチャなギターを鳴らしてた。何やってるんだろうって、ロリーとジョニー・ギターと僕とで下へ見に行ったんだ。知らない奴らだった。ジョンとポールがスチュアート・サトクリフにベースを教えてたんだよ。僕らはすでにプロで、彼らの方はまだ子ども、芽が出ずにがんばってるアーティストだった。僕の頭にはこれといった印象も残らなかったね。あの頃の彼らはたいしたことなかった――クズの集まりにすぎなかった。僕らの方はバトリンズ出演を控えてて、スーツも靴も揃えてて――黒と白のコンビの靴、赤いスーツに赤いタイと

左："手塗り"のスタンダード・バンガード

CamScannerでスキャン

チーフ——僕らは大物の気分だった(ロリー・ストーム&ザ・ハリケーンズが一時リバプールでNo.1のバンドになったのは、揃いのスーツのおかげだよ。その後ブライアン・エプスタインがビートルズで同じことをやりだした)

僕らはバトリンズに3ヵ月行っていた。最高に楽しかったよ。着いたらまず、みんなそれぞれ芸名をつけた。ジョニー・ギターというのもその時つけたんだよ。僕の場合、そもそもリバプールの時から指にリングをいっぱいはめてたんで、みんなから"おい、リングス!"って呼ばれるようになったんだ。僕の名前はリチャードだから、そこからリッチーになって……そしてリングスになった。で、芸名をつける時、リンゴって名前にしたんだ。リンゴ・スターキーでいくつもりだったんだけど、どうもしっくりしないから、苗字を半分にして最後に"R"をもう1個くっつけた。バス・ドラムにその名前を書いて、それ以来ずっとここまで来てるってわけ。バトリンズには週ごとに新しいお客さんが入ってきて、僕らは休みなしで仕事をした。あれ以上の場所は考えられなかったね。夏だったから、リバプールで何か取り逃がす心配もなかった。リバプールでクラブが忙しくなるのはいつも冬だったから。ロリーって奴は、ほんと運動神経がよくてさ。ドラムの後ろにピアノが置いてあるんだけど、ロリーはいつもフィナーレでそのピアノに乗っかって踊り、それから僕の頭を飛び越えるんだよ。最高だった! あの頃僕が一番気に入ってたのは「ホール・ロッタ・シェイキン・ゴーイン・オン」だな。

バトリン休暇村には毎週バスで女の子たちがやってくる。僕らは"ハイ、僕ここのバンドにいるんだよ"って声をかける。そういう意味じゃ天国だった。週末には涙の別れがあり、そしてまた次のバスがやってくる。ある意味で、それもロックン・ロールが持つ魅力のひとつだったんだよ。もちろん僕の一番の目的はプレイすることだったけど、バトリンズでの週ごとの楽しみは逃せないさ! そのうち僕は、バトリンズで美容師と一緒にトレーラー・ハウスで生活するようになった。そうやって大人になっていくんだよ。みんな休暇を楽しんでたんだ。今だって同じさ、場所がベニドルム(スペインのリゾート地)に変わっただけ。

僕はある女の子と婚約したんだけど、結局は続かなかった。彼女がプレッシャーをかけてくるようになったから。私かドラムか、どっちを選ぶのって感じで。僕の人生でも、ものすごく辛い時だったね。ある晩僕は彼女のところを出て、バスに乗り込み、そして考えた。"戻らなかったらどうなるだろう?"。そして二度と戻らなかった。僕はとにかく音楽をやっていたかった。僕にとってはこっちの方が大事だったんだよ。だけど婚約してたくらいだし、彼女のことはほんとに愛してた。彼女も僕を愛してくれてた。僕ら家具とかの支度も始めてたし、結婚に向けていろいろ準備を整えていたんだよ。

僕はスタンダード・バンガードをリバプールの別のドラマーに売った。そしてバトリンズで初めての3ヵ月間を過ごしてから、憧れのゼファー・ゾディアックを買ったんだ。の車に乗ってると、僕はキングさ。最高の車に乗ってる大物って感じで、みんなをせて走りまわった。これで工場に行って、外に停めて、まだそこで働いてるみんな会いに行く。"ほら、僕はこんなに羽振りがいいんだよ!"って——僕の稼ぎはぐんとがってたからね。工場では週に6ポンドだったのが、バトリンズでは週20ポンドだったんだもの。金はたんまりあったよ。

ただね、そんなにきらびやかだったわけでもないんだ。僕は失業手当にもずいぶん話になっててさ。今でも社会保障省からの通知を持ってるよ。"工場を辞職し、ダンバンドに加入"って書いてあるやつ。当時は失業者なんてそんなにいなかったし、はいつでも働けた。だけど失業手当の給付を受けるには、ああいう列に並ばなきゃないんだよね。年取った酔っ払いがたくさんいるんだ、手が震えてるんだよ——ああいうのは初めて見た。あの頃もたくさんの人間が並んでたけど、それでも今ほどじゃなかったな。

僕が子どもの頃は、休みだからって旅行らしい旅行なんかしたことなかった。時々シーフォースの海岸へ行くとか、ニューブライトンへ行くとか、その程度だ。15歳の時、母とハリーと一緒にロンドンへ行ったのが、僕にとっては大旅行。ほんとはロンフォードに行ったんだけどね、ハリーの実家がそっちだから。でも1日だけロンドンへ行ったんだ。僕がホースガードと一緒に写ってる写真があるよ。僕が馬の頭を撫でてるんだ。あの時は全部まわったね。バッキンガム宮殿も、英国博物館も、ロンドン塔も。ビッグ・イベントだったよ。マン島へは何度か祖父母と一緒に行った。あそこだと外国へ行くような感じだね。だけどヨーロッパへは行ったことなかったな。

ほんとに外国へ行ったのは1962年。ロリー&ザ・ハリケーンズが、フランスの米軍基地の仕事をもらったんだ。でも問題は女性シンガーが必要になったこと。兵隊は野郎の面ばかり見ていたくないものね。それで僕らはリバプールで金髪の女の子を見つけて(なんて名前だったか覚えてない)、彼女を連れてフランスへ行き、そういう荒っぽい基地で演奏した。

あの時は、船を降りて列車に乗り換えたんだけど、まっすぐリヨンまで行くはずが——パリに着いたらみんな降ろされちゃったんだよ。怖かったね。当時フランスはアルジェリアと戦争してただろ、僕がでかいドラム・ケースを持ってたもんだから警官が駆けつけて来ちゃってね。目の前でマシンガンをちらつかせるんだ。僕はパスポートをつかんで、とにかく"アングレ!(イギリス人)撃つな!"って叫ぶことしか思いつかなかった。

泊まったのはすごく安い部屋だけど、フランス料理はものすごく高くて手が出ない。僕ら金はないし、泊まってるのは安宿。でも気にならなかったよ。観客は最高、それに個人手当も最高だったから。僕らは米軍の売店に行ってハンバーガーを買えたし、王様みたいに好き放題食べてもタダみたいなものだった。兵隊と同じレートで食べ物を買えたからね。アメリカ人じゃないから、ほんとは食堂に入っちゃいけない——行くといつも追い出されるんだ——それでもなんとか入り込んで、ハーシーのチョコ・バーやハンバーガーを仕入れてたよ。

僕はロリーと一緒に訓練を積んだ——僕らはほんとのプロだった。よそでステージをやっては、またリバプールに戻ってくる。僕がそういうことをしてた時、ジョンとポールとジョージの方は、まだバンドの形にもなってなかった。僕らは絶好調だったから、ハンブルク行きのオファーがあった時も最初は断ったんだよ。でも1960年の秋、ついにドイツへ行くことになった。そこで僕はビートルズと出会う。いったいこいつら何があったんだ?って感じだったね。

1960-62

nineteen sixty to nineteen sixty-two

CamScannerでスキャン

ジョン　むかしむかしあるところに、小さな男の子が3人おりました。名前はジョンとジョージとポール。集まって遊ぶのが好きな3人は仲間になりました。けれども3人で遊んでいる時に思いました。僕たちは何のために集まっているんだろう？ そこで3人は、いきなりみんな揃ってギターを鳴らし始めました。おかしなことに、誰もおもしろがってくれません。一番つまらないのは彼ら自身でした。そして……4人目の男の子、彼らよりもっと小さなスチュアート・サトクリフがそばで走りまわっているのに気がついて、3人は言いました。"ねえ君、ベース・ギターを持っておいで、きっとうまく弾けるから"。3人に言われて、男の子はそのとおりにしました——けれども最初はうまく弾けませんでした。そこで3人は彼が弾けるようになるまで辛抱強く待ちました。でもまだビートがありません。すると親切な老人がやって来て言いました。"おまえたちにはドラムがないぞ！"。ドラムがない！ 彼らはぎょっとしました。それから入れ代わり立ち代わりドラムがやって来ました。ドラムも決まり、スコットランドへジョニー・ジェントルとツアーに出かけた時、そのグループ（ビートルズと名づけられていました）はふいに気づきました。自分たちの音はあんまりよくない——それは彼らがアンプを持っていなかったからです。そこで彼らはアンプを手に入れました。大勢の人がビートルズってなんなの？ と訊きます。どうしてビートルズなの？ ビートルズって名前はどこから来たの？ では教えてあげましょう。幻が現れたのです——燃えさかるパイに乗った男が現れ、彼らに告げたのです。"今日からおまえたちはAがひとつのビートルズだ"。"ありがとうございます、お告げの方"。彼らは男に感謝しました。1961年

ポール　名前を考えたのはジョンとスチュアートだよ。ふたりともアート・スクールの学生だった。ジョージや僕が親に寝ろって言われる時間に、スチュアートとジョンは、僕らみんなのささやかな夢をかなえることができたんだ。つまり、夜どおし寝ないでいられたんだよ。そういう時にふたりは名前を考えついた。

1960年4月のある晩、ガンビア・テラスを歩いていて、リバプール・カテドラルのそばに来た時、ジョンとスチュアートが言ったんだ。"なあ、このバンドを〈ビートルズ〉って名前にしないか"。僕らは"うーん、ちょっと変じゃない？"って言った。すると、"いや、いいんだよ。これはダブル・ミーニングになってるんだ"って。僕らの好きなグループのひとつ、クリケッツには、二重の意味があった。競技のクリケットと、バッタの意味のクリケット。そういうのがかっこいいって僕らは思ってた——これぞまさに文学だって（その後クリケッツと話したら、彼らはイギリスにクリケットという競技があるのを知らなかった。自分たちの名前にもうひとつの意味があるって知らなかったんだ）。

ジョージ　どうやって名前がついたか、はっきりしてるわけじゃないよ。ジョンは自分が考えたって言ってたけど、僕はあの前の晩ジョンとスチュアートが一緒だったのを覚えてる。

バディ・ホリーのバックをやってたクリケッツ、あれとも共通点があるけど、スチュアートはあのころマーロン・ブランドが大好きだったんだよ。ブランドが出てる『乱暴者』という映画で、リー・マーヴィンがこう言うシーンがある。"ジョニー、ずっとおまえを探してたんだ、ビートルズが会いたがってたぜ、ビートルズの全員がおまえに会いたがってた"。ジョンもスチュもあれを思い出してたんじゃないかな、だからそういうことにしておこうよ。サトクリフとレノン、半々のクレジットということでさ。

ポール　『乱暴者』で、"ビートルズもおまえに会いたがってた！"って、そいつがバイクに乗ってる女の子たちを指差すシーンがあるんだ。友だちがアメリカのスラングの辞書で調べたら、ビートルっていうのはバイクを乗りまわすような、先を行ってる女性のことなんだって。それでひとつ解決だ！

ジョン　名前はふたつくらいあったんだ。出る場所によって名前を変えるようになって、そのうちついに"ビートルズ"を思いついたんだよ。

クリケッツみたいにふたつの意味をかけた名前を考えていて、クリケッツ（バッタ）からビートルズ（かぶとむし）が出てきたんだ。だけどEふたつの"beetles"のままだと二重の意味にならないから、BEAに変えたのさ。言葉だけ聞くと、もぞもぞ歩く虫を思い浮かべるだろう。だけど文字で見れば、ビート・ミュージックなんだ。1964年

ジョージ　もうスチュアートもバンドのメンバーになっていた。でもあんまりいいミュージシャンとは言えなかったね。実は僕らがベースを買うように言うまで、音楽自体全然やってなかったんだ。僕らはチャック・ベリーの「サーティ・デイズ」とか、12小節のものを教えた。彼が一番最初に覚えたのはそういうやつだ。それからまた少し覚えて、ちょっと練習して、他の曲もなんとかできるようになってきてね。ちょっとひどい話だけど、当時はその程度でもかまわなかったんだ。彼はすごくクールだったから。どっちみちハンブルクへ行くまでは、リバプールじゃあんまりギグをやってなかったしね。

ポール　1960年の春、ジョンと僕はレディングのフォックス&ハウンズというパブへ行った。僕のいとこのベティ・ロビンズが夫とふたりでやってる店でね。僕らはバーテンとして働かせてもらった。それは楽しい経験だったな。ジョンと僕でヒッチハイクしながらあそこまで行ってね、1週間経つ頃には"ナーク・ツインズ"と名乗ってそのパブで演奏もした。ポスターまで作ってさ。

僕がショー・ビジネスの世界に興味を持ったのは、ベティの夫の影響が大きかった。どういうふうにショーをやったらいいかという話も、僕らにとってすごく勉強になったよ。彼はその店をやる前はエンターテインメントの世界にいて、バトリンズのタレント・コンテストのホストを務めたり、ラジオの番組にも関わったりしてた。彼にオープニングはなにをやるのかって訊かれて、「ビー・バップ・ア・ルーラ」って言ったんだ。すると彼が、"だめだ。最初はテンポの速いインストゥルメンタル曲にしなきゃ"って言うのさ。"ここはパブなんだよ、しかも土曜の夜だ。他に持ち歌は？"。——"ええと、「ザ・ワールド・イズ・ウェイティング・フォー・ザ・サンライズ」とか"（僕がメロディ、ジョンがリズムをやった）。すると彼が、"それがいい。1曲目をそれにして、次が「ビー・バップ・ア・ルーラ」だ"。そんなふうにいいアドバイスをくれたんだ。何年も経って、自分たちでステージを考えるようになってからも、僕は彼のアドバイスを頭に置いてたよ。

ジョージ　1960年の初めにはいろんなことがあった。リバプール・スタジアムでコンサートがあったのを覚えてるよ。エディ・コクランも出るはずだったのに、コンサートの何日か前に死んでしまった。それでコンサートの目玉はジーン・ビンセントになった。

リンゴ　僕は一生エディを許さない。彼に会うのをものすごく楽しみにしてたのに。

ジョージ　あのコンサートが開かれたスタジアムは、ピート・ベストの父親のジョニーがボクシングの興行によく使ってたところだ。リンゴはロリー・ストーム&ザ・ハリケーンズとあのコンサートに出ていた。僕らはまだ出演できるほどビッグじゃなかった（ドラマーもいなかったし）。僕らのバンドもちゃんとまとまらないといけないって思ったのを覚えてるよ。だってハリケーンズは全員スーツを着て、ダンス・ステップも揃ってて——まともなことをやってた。ほとんどプロに近かった。僕らのレベルから見たら、すごいことに思えたよ。

ブライアン・キャスのやってるキャス&カサノバズというバンドも、そのコンサートに出ていた（1年後くらいに彼は姿を消して、残った3人でビッグ・スリーを結成した）。どういうつてなのか、キャスはギグを取りつけて、ある晩僕らを小さなクラブに出してくれたんだ。それが"シルバー・ビートルズ"として出演した初めてのステージだね。ほんとは彼、ロング・ジョン&ピーシズ・オブ・シルバーとして出てほしかったらしいけど。

ポール　彼が"名前は？"って言った。僕らは"ビートルズ"を考えついたばかりだったから、オーディションではこれで行こうと思ってた……。ところがキャスは、"ビートルズ——何だいそりゃ？ 何の意味もないじゃないか（ファンもプロモーターも、みんなこの名前を嫌ってた）"。それから彼はジョンに名前を訊いた。その頃はジョンがリード・シンガーって感じだったからね。それで彼が"ジョン・レノン"って答えると、"よし、ビッグ・ジョン……ロング・ジョン……OK、ロング・ジョン・シルバーだ"って。それからお互い譲り合って、ロング・ジョン&シルバー・ビートルズになった。仕事もらうためなら僕らは何でもやったからね、それでそういう名前になったんだ。

ジョージ　彼はジョンがリーダーだと思ったのさ、ジョンが一番でかくて、一番押しが強かったから。クオリーメンでも彼がリーダーだったし、この時も明らかに彼がリーダーだった。今でも彼がリーダーなんじゃないかな。

ポール　5月にラリー・パーンズがリバプールへオーディションに来た。彼はロンドンの有力なエージェントでね。彼の担当する人間にはほとんど例外なしに怖そうな名前がついてた。ロニー・ウィチャリーはビリー・フューリー（怒り）になった。実際会ってみると、そんなに怒りっぽい人じゃないよ、リバプールのいい奴だ——僕らからすれば、彼は地元で成功した初めての人間だった。マーティ・ワイルドもラリーの手駒だったけど、彼もワイルドなんて荒っぽい名前だろ。だけどラリー・パーンズは何人か新しいシンガーを入れたんで、バック・グループを探していたんだ。リバプールあたりにいくつかグループがあるって誰かに聞いたんだね。それでブルー・エンジェルまで来たらしい。ビリー・フューリーも一緒だった。

ブルー・エンジェルとジャカランダはアラン・ウィリアムズの店だった。彼は地元の小っちゃなマネージャーでね（身体のことだよ——小柄なウェールズ人で、ちょっと声が高くて——すごく熱意があって素敵な奴だった、僕らはいつもからかってたけど）。彼がラリー・パーンズと組んでオーディションを開いた。リバプール中のグループが来てたよ。僕らもそのひとつだった。

CamScannerでスキャン

ジョージ　ブルー・エンジェルは当時ワイバーン・ソーシャル・クラブって呼ばれていたんだけど、そこでラリー・パーンズのシンガーにつけるバック・バンドのオーディションをすることになった。オーディションの前に僕らは靴を買いに行ったんだよ。紺靴で、甲の部分だけが白いやつ。僕らはすごく貧乏で、揃いの服なんか着たことなかったんだけど、何とかユニフォームをこしらえようとした——黒いシャツと、その靴さ。
　僕らがクラブに行ったらドラマーが来てなくて、仕方がないからキャス&カサノバズのドラマーだったジョニー・ハッチンソンに出てもらった。僕らの演奏はすごくよくもなかったけど、すごく悪くもなかったと思う。

ジョン　その日は代役のドラマーだった。スチュはベースを弾けないから後ろを向いてたよ。1972年

ポール　あっち向いてろ、ってスチュアートに言うしかなかった。"ふてくされたふりをしてろ——エルヴィスみたいに気取ったポーズしてさ"。しっかり見てる人がいたら、僕らが全員Aを弾いてる時にスチュだけ別のコードを弾いてたのがわかったはずだよ。彼もすぐ気づいて直したけどね。それで僕らはオーディションに合格して、ツアーに出ることになった——勇ましい名前の人たちとじゃなく、ジョニー・ジェントルっていう奴と一緒にね。

ジョージ　ちょっとがっかりしたんだ。すばらしかったって、ラリー・パーンズが立ち上がってくれたわけでもないし。それでけっこう暗い気分になってた。でも何日かしたら電話があって、ジョニー・ジェントルとツアーに出られるって言う。たぶん向こうはこう思ってたんだよ。"ちょうどいい。あいつらは間抜けだ。これでバンドに金を払わなくてすむ"。

ポール　もうほんとのプロなんだ。ずっと頭の中で思い描いてたことを実行に移せる。つまり、本名を芸名に変えるのさ。僕はポール・ラモーンになった。自分ではなかなかエキゾティックだと思ってたんだよ。スコットランドの女の子に、"あれが本名なの？かっこいい"って言われた。あれはフランス風の名前なんだ。ラ・モーンって、後ろにアクセントが来る。スチュアートは画家にちなんで、スチュアート・ド・スタール。ジョージはカール・パーキンス(「ブルー・スウェード・シューズ」を書いた僕らの一大アイドル)からとって、カール・ハリスン。ジョンはロング・ジョンだ。"ああ、ジョンは名前を変えなかったんだ。それは偉いな"みたいなことをみんな言ってるけど、いいかい、ロング・ジョンなんだよ。"彼は名前を変えなかった"なんて、全然違う。僕ら全員が名前を変えたんだ。
　そんな具合で、僕らは突然、ラリー初の穏やかな名前のシンガーと、スコットランドへツアーに行くことになった。ちょうどその頃、ほんとなら僕はGCE試験(日本の大学入試検定に似たもの)を受けるはずだった。それが、GCEなんかまったく受ける気もない悪ガキどもと出てっちゃったんだから、僕の両親の望みは打ち砕かれたも同然だ。
1962年

ジョン　アート・スクールに通ってる間も、サボるのはしょっちゅうだった。最初の試験期間の時はビートルズとスコットランドでジョニー・スウェードのバックをやってた。次の試験の時はビートルズとハンブルクに行ってた。ついに僕は、試験に通るかどうかに関係なくやめようって決めたんだけど、戻ってきたら通知が来ていてね。"無理に復学する必要はありません"。信じないかもしれないけど、ほんと腹が立っちゃってね。

ジョージ　僕は兄に訊いたんだ。"もし僕の立場だったら、仕事をやめてこっちを選ぶ？"って。兄の答えを覚えてるよ。"その方がいいさ——おもしろいことがあるかもしれないよ。それに、うまくいかなかったとしても、失うものは何もないだろ"。それで僕は仕事をやめ、フルタイムでバンドに関わることになった。それ以来、9時から5時の仕事を考えることは二度となかったよ。でもジョンはまだアート・スクールにいて、ポールは卒業まであと1年あった。
　あれが僕らのプロとして初めてのギグだった。何マイルと離れたスコットランド北部、インバネスあたりで、ダンス・ホールをまわる。"やった、ギグができる！"って最初は思ったよ。ところが蓋を開けてみたら、誰もいないちっぽけなホールでプレイするだけだった。そのうちパブを掃除しにスコットランドのテディ・ボーイが5人くらい入ってきて、ちょっと僕らを見る。それだけだ。何も起きない。僕らはほんと、何ひとつわかってなかったんだ。親のない子みたいで侘びしかったね。僕らは穴だらけの靴に、みっともないスラックス。ジョニー・ジェントルの方はこざっぱりしたスーツだよ。彼がエルヴィスの「テディ・ベア」をやっていて、"Won't you wear my ring around your neck?"ってとこに合わせて弾こうとして——覚えてるよ、すごくぎこちなかった。演奏は最悪でね、恥ずかしかったよ。アンプも何もなかったし。
　もらった金はほんのわずかで、ホテル代にも足りなかった。それでみんなバンで寝てたんだよ。いつも場所取りでケンカしてた。バンの座席じゃ足りなくて、誰かひとりは後ろのタイヤのフェンダーのくぼみに座らなきゃならなかった。たいていスチュだったけど。

ジョン　僕らはほんとスチュにひどいことしてたね。僕らと一緒に座っちゃだめだ、一緒に食べちゃだめだ、って。あっち行けよって言うと、彼はそのとおりにした——そうやって僕らの仲間になっていったんだ。まったくくだらない話だけどね。僕らそういう人間だったんだよ。1965年

ポール　あのツアーではまあまあうまくやれた。フレーザーバラとか、スコットランド中の教会ホールをまわってさ。最高だったよ——プロって感じがしたもの。だけど僕らはひっきりなしにラリー・パーンズのオフィスへ電話して、金が来てないって文句言ってたんだよ(何年も経ってから、ラジオ番組で僕がこの話をすると、ラリーが訴えるって脅しをかけてきた。まわりのおばさんたちからブーブー言われたんだね。"ラリー、あなたあの真面目なビートルズにお金をあげてなかったんですって"って。彼にすれば、ひどい屈辱だったんだろう)。
　ツアーから戻ってしばらくは、バック・バンドをやっていた。まだシルバー・ビートルズの名前で——たしか"E"ふたつのビートルズとして出てるポスターも何枚かあったよ——だけどそのうち"シルバー"を落とすようになった。僕らはそんなのつけたくなかったんだ。ジョンは"ロング・ジョン・シルバー"という名前で知られたくなかったし、僕はポール・ラモーンとして知られたくなかった——エキゾティックな時期はそこだけでいいよ。
　ありとあらゆる人のバックをやった。いい時代だったね。他の人の曲を覚えるとプロって感じがした。かなりきつい時もあったよ。僕らまだそんなにコード弾くのがうまくなかったから。みんなただぽんと楽譜を投げてよこすんだ。それで僕らは、"歌詞覚えた？ コード覚えた？"って大騒ぎだ。それにあの頃はまだうぶでね——あるアーティストと女の人が一緒にいて、僕らその人を奥さんだと思ってた。それでずっと、ミセスなんとかって呼んでたんだけどね。ずっとあとになってから、愛人だったんだって気がついた。

ジョン　しょっちゅうドラマーが変わってたよ。ドラム・キットを持ってる人間なんてほとんどいなかったからね。ドラムは高級品だったんだ。1976年

ジョージ　トニー・ムーアというドラマーがいて、スコットランドの時は彼が来たんだ。おもしろい奴で、いろんなバンドと組んでてね。しばらくは彼がやってたけど、そのうち顔を見せなくなったから、別のドラマーに替えた。
　ドラマーは次から次へと替わったよ。3人くらいやめていったあと、彼らがちょっとずつ置いていったものを集めたら、ほぼフル・セットそろってね。それでポールがドラムをやるってことになった。彼はけっこううまかったんだよ。少なくとも問題はなさそうだった。だってあの頃の僕らは、全員相当な下手くそだっただろうから。まあその構成も1回かぎりだったけど、あの時のことはよく覚えてるよ。アッパー・パーラメント・ストリートにウッドバイン卿って人がストリップ・クラブを持っててね。そこへ午後に行くと、何人かちょっとおかしい奴ら(コートを着こんだ男が5、6人)と、地元のストリッパーがひとり。僕らはそのストリッパーのバック・バンドとして連れてこられたわけだ。ポールがドラム、ジョンと僕がギターで、スチュアートがベース。
　ストリッパーが来て、楽譜を出した。"これが私の曲"って言われて、僕らは"何の曲？ 僕ら楽譜読めないんだ"。「ジプシー・ファイアー・ダンス」だって彼女が言う。"ええと、それってどんな感じ？ テンポは？"。僕らはその曲の代わりに「ラムロッド」をやることにした。それなら知ってるから。そのあと「ムーングロウ」をやった。

ポール　ワラシーのグロブナー・ボールルームは最悪の場所のひとつだった。地元ワラシーの奴ら100人くらいで、シーコムの奴ら100人くらいを待ち構えていて、とんでもない騒ぎになるんだ。覚えてるよ、ある晩また乱闘が始まって、そのうち僕はとんでもないことになってるのに気づいた。エルピコのアンプを守らなきゃって、僕はステージに駆け上がった。あの頃の僕にとってはあれがプライドであり喜びだったんだからね。そこら中で殴り合いになってて、どっかのテディ・ボーイが僕をつかんでと言った。"動くな、動くと殺すぞ！"。ものすごく怖かったけど、アンプだけは渡したくなかった。

CamScannerでスキャン

ジョン 僕を育ててくれたのはリバプールじゃない、ハンブルクだよ。

ジョン　しばらくはリバプールのあちこちをまわってたけど、そうやってても先は見えてこなかったし、仕事も来そうになかった。他のグループからは"そのうちうまくいくよ、いつか仕事も来る"ってずっと言われてたけどさ。そうこうするうち、ハンブルクへ行くことになった。

ジョージ　シュトゥットガルトでいろんなミュージシャンがギグをやってるっていうのは、前から聞いてた。あそこには米軍基地があるからね。ドイツ中でそういうギグをやれるっていうから、僕らはわくわくしてたんだ。
　どうして僕らが行くことになったかというと、デリー＆シニアズという別のリバプールのグループと関係がある。彼らは他の仕事を断ってラリー・パーンズのためにギグをやる予定だった。ところがそのギグができなくなったんで、すごく怒って、ロンドンへ乗り込んでラリーをぶん殴ろうと思ったわけさ。その時アラン・ウィリアムズが、"ロンドンへ行くなら楽器も持っていけ"って彼らに言った。彼がバンドを車に乗せ、21（トミー・スティールが見出された場所）へ連れて行った。彼らは結局、ラリー・パーンズを殴る代わりにクラブで認められたんだ。
　ドイツ人のプロモーター、ブルーノ・コシュミダーがそこで彼らを見て、自分のクラブに呼んだのさ。ハンブルクのカイザーケラーだよ。それで彼らは何カ月かそこに出演した。よっぽど気に入ってたんだろうね、彼はアラン・ウィリアムズに連絡をしてきて、"またリバプールのバンドがほしい、インドラに出す"って言ったんだよ。
　アラン・ウィリアムズが僕らにその話を持ってきた。"ただ、向こうは5人組のバンドがいいと言ってる"。つまり、もうひとり必要なわけだ。僕ら3人とスチュアートしかいないんだからね。その話には大喜びだったけど、同時に思った。"ポールはそもそもドラマーじゃない。どこかにドラマーがいないかな"って。その時、僕は、クリスマス・プレゼントにドラムをもらったっていう奴のことを思い出した。彼の名前はピート・ベスト。彼の家の地下がカスバ・クラブだった。

ポール　ピート・ベストの母親、モナ——インド系イギリス人の、すごくいい人でね——彼女がリバプールのウエスト・ダービーというところでカスバを経営してた。僕らはその辺へよく出かけるようになってて、どういうわけかその店のペンキ塗りを手伝うことになったんだ。
　コーヒー・バーが新しく誕生するのにひと役買えるのはいいものだね——当時はそういう場所がすごく大切だったんだ。地下のコンクリートや板を全部取っ払って、それぞれ違う色で塗ってね。全員が手を貸した——ジョンもジョージも、それ以外のみんなも。僕らでペンキを塗って、そこは僕らのクラブになった——ビートルズはよくそこで演奏してたんだよ。ピートはドラム・キットを持ってたから、時々ドラマーとして参加してた。いいドラマーだったよ。それでハンブルクの話が来た時、一緒に行くことになったんだ。すごくルックスが良くて、グループ全員の中でピートが一番女の子に人気があったね。

ジョン　僕らの知ってる奴でドラムを持ってるのがいたんで、彼を捕まえてオーディションした。この程度ビートが刻めればいいやってことで、彼に決めたんだ。1970年

ポール　ハンブルクの話が来た時、僕はまだ学校に行ってたんだ。試験を受けるつもりで、やめてなかったんだよね。自分の人生をひとつの小さな穴にはめ込むのはまだ早いと思って、だからやめたくなかったんだよ。教師になろうかなってちらっと考えてた——僕がそれなりの給料をもらうには、それくらいしか道がないかもしれないって——でも自分の人生をセメントで固めてしまうのは怖かった。
　アート・カレッジに24歳の奴がいてね、こっちが17の時には24歳なんてすごい年上に思えた。その年までそうやって定職にもつかずにいられるのなら、僕だって許されるんじゃないかと思ってさ。だから最高学年では好きなことを何でもやって、なんとか24歳までつなげようとしてた。24になったら道を決めなきゃって。そこへハンブルクの話が舞い込んできたんだよ。
　リバプールにはいいグループがたくさんいるって誰かが目をつけたんだろうね。しかもロンドンのグループより安くつくって。僕らは世間知らずだったから、何時間でも仕事した。プロモーターの理想だよ。"ハンブルクへ行けば週に15ポンドもらえる"って聞かされたんだ。週給15ポンドっていったら、僕の父親の稼ぎより多いんだよ。学校の先生だってそんなにもらってなかった。だからハンブルクはほんとにおいしい話だったんだ。立派な職業を見つけたような気分だった。しかもちゃんと金がついてくる。その夏、校長先生に得意気に手紙を書いたのを覚えてるよ。"9月の新学期に僕が学校にいなくても、先生はその理由をわかってくださると思います。この仕事の給料は——ええと、ちょっと待ってくださいね——週15ポンドです"。ほとんど、"先生の稼ぎより多いでしょ"と言ってるような手紙だね。
　でも行かせてもらえるかどうかは、何より父親にかかってたんだ。僕は必死で頼んだ。ダメだろうなって思ってた。父は厳しい人じゃなかったけど、かなり分別のある人間だったからね。だって自分の子供を、かの有名なストリップ地区、レーパーバーンへやらせるなんて——あそこは危険な場所として知られてたんだ——マフィアが仕切ってて、よく水兵が殺されるところだって。
父がいろんなアドバイスしてくれたのを覚えてるよ。行くことは認めるしかなかった。こんなうまい話、そうはないんだから。

ジョン　アラン・ウィリアムズが僕らをバンで連れて行ってくれた。オランダを抜けていってね、あそこでちょっと万引きした。1972年

ジョージ　たしかアラン・ウィリアムズのクラブ、ジャカランダの前でバンに乗ったんだ。僕ら5人にアランとアランの奥さんのベリル、それからウッドバイン卿が一緒だった。
　車はぎゅうぎゅうでさ。座席もなくて、アンプの上に腰かけるしかなかった。そのバンでハーウィッチまで行って、そこから船でフーク・ファン・ホラントへ渡った。オランダを走っている時に、アルンヘムに寄ったのを覚えてる。パラシュートで降りて、みんなが死んだ場所だよ（これもウィンストン・チャーチルの犯罪のひとつだ）。墓地には白い十字架が何千と立ってた。

ポール　僕が覚えてる中で一番不思議だったのは、国境を越える時にコーヒーを所持してないかって訊ねられたことだ。わけわかんなかったよ。ドラッグならわかる、銃もわかる——酒とかそういうものもわかるけど。でもコーヒーの密売が盛ん、なんてあるかい？
　とにかく、ある晩すごく遅い時間に、ようやくハンブルクに着いた。タイミングが悪かったね。誰も迎えに来てなかった。ハンブルクまでは地図を見ればたどり着くけど、それからセント・パウリ地区を探して、さらにレーパーバーンを探さなきゃいけなかった。ようやく通りとクラブを見つけた時には、どこもかしこも閉まっていてね。ホテルも何もない、もう寝る時間だっていうのに。
　なんとか近くのクラブの人を起こして、僕らが行く店の人間を連れてきてもらった。それでクラブを開けてもらって、ハンブルク最初の夜は狭いアルコーブの赤い革張りの椅子で寝たんだよ。

ジョージ　当然といえば当然、僕らが着いた最初の晩は何の段取りもできてなかった。クラブのオーナーのブルーノ・コシュミダーが車で彼の家まで連れて行ってくれて、結局そこに泊まることになったんだよ。全員がひとつのベッドでね。ブルーノが一緒じゃなかったのはありがたかったけど。彼はその最初の晩、僕らを彼の部屋に泊まらせてくれて、自分はどこか別の場所へ行った。最終的に僕らはバンビ・キノという小さな映画館の裏に入れられた。グロッセ・フライハイトという通りの一番奥にある映画館だよ。
　ブルーノは若いロックン・ロール・プロモーターなんかじゃなくて、戦争で体を悪くした老人だったんだ。足を引きずっていてね、音楽のこともあんまり詳しくないようだった。まあ、彼には週に一度、オフィスへ給料をもらいに行く時、顔を合わせるだけだったけど。
　ハンブルクの街は素敵だった。大きな湖があり、一方には汚れた部分もある。レーパーバーンやグロス・フライハイトみたいなところを見るのは初めてでね。クラブにネオンだらけで、レストランや娯楽の場がいっぱいあって。最高に思えた。いかがわしい部分があるのは明らかだったけど。僕らが最初に行った時放り込まれたのも、そういう環境だった。

CamScannerでスキャン

ポール　僕はシェイクスピアやディラン・トーマス、スタインベックなんかを読んでいたから、ハンブルクでの経験も学生気分というか、アーティストとして受け取ってる感じがあった。"これはいつか自叙伝のいいエピソードになるぞ"みたいなね。僕らは他のグループとは違う捉え方をしてたんだ。まるで自分たちがディラン・トーマスで、彼のドイツ時代を経験してるような気分でね。すごく中身の濃い体験をした時期だった。若者が鎖から解き放たれたんだからさ。

僕らが出ることになってたクラブはインドラといって、インドっぽさを出すために通りに面して大きなゾウが置いてあった。のちに僕らがインドの影響を受けるようになった時、出発点からそんなのがあったと思うとおもしろい気がするよ。

ジョージ　インドラはレーパーバーンの奥、グロッセ・フライハイトのどん詰まりにあった。クラブが集まっている区域だよ。ブルーノは開店したばかりのそのクラブに僕らを出演させた。

そのあたりは女装趣味の奴らと娼婦とマフィアだらけだったけど、そういうのが客に来ていたわけじゃない。確か最初はあんまり人が入ってなかったんだ。だんだん口コミで評判が広がっていったんだけど、その頃には通りの向かいの教会から苦情が出ていて、僕らの出す音がうるさいというんでブルーノは店を閉めることになったんだよ。

ポール　僕らはバンビ・キノのトイレの隣で寝起きしていた。いつでもトイレの匂いがしたよ。僕らが泊まってたのは古い倉庫で、コンクリートの壁があるだけだった。暖房もなけりゃ壁紙もない、ペンキひとつ塗ってない。2段ベッドがふたつ入れてあったけど、折り畳み式みたいな小さいやつで、かけるものもあんまりなかった。凍えそうだったよ。

ジョン　僕らは壊れかけた薄汚い映画館のトイレのような豚部屋に入れられた。トイレで暮らしてたんだ、女性用トイレのすぐ隣の。1972年　夜遅くベッドに入って、翌朝映画の音で目が覚める。いつも最初は女性用のトイレに行こうとしたんだけどね、映画館のトイレじゃ一番きれいだったから。だけど太ったドイツ女に押しのけられちゃって。1967年

朝目が覚めると、隣で年とったドイツ女たちが小便してるわけ。そういうところで僕らは顔を洗ってた。そこが僕らのバスルームだったのさ。ちょっとばかりショックだったね。1972年

ポール　映画館の客がみんなトイレにやって来るだろ、するとそこではリバプールの若者たちが並んで髭を剃っていて、"おはよう"って声をかけてくる。"アー、グーテン・モルゲン、お元気？"。

ジョージ　僕はシャワーだけですます習慣がなかった。バンビ・キノのトイレには洗面所はあったけど、そこで体を洗うって言っても限界があるだろう。歯みがきと髭剃りはできても、それ以外はほとんど無理だった。一度公衆浴場へ行ったのを覚えてるけど、バンビ・キノからはずいぶん遠くてね。その後、たぶん3度目のハンブルクかな、アストリット・キルヒヘルの家のバスを使わせてもらうようになった。初めて行った頃はバスもシャワーも使わなかったと思う。2度目も同じだったんじゃないかな。

ジョン　ジョニー・ジェントルのツアーは経験してたけど、僕らがステージに立っていたのはほんのわずかな時間、20分かそこらだった。ほとんどは彼ひとりでやってたからね。リバプールでも得意の曲ばかりやってた。毎回同じものばか

ジョージ　これはインドラで初めてプレイした時。この衣装、覚えてるよ。このライラック色のジャケットね、ポールの近所の人が作ってくれたんだけど、インドラに何週間か出てるうちダメになっちゃった。見事にボロボロさ。

ポール　近所の人っていうのはミスター・リチャード、洋服屋でね。フォースリン・ロードで僕の隣に住んでた。僕らで生地を選び、彼のところへ持っていって、あのジャケットを仕立ててもらったんだよ。メンバーがみんな僕の家に来て試着してさ。結局、汗で使い物にならなくなっちゃったけど。

りさ。だけどハンブルクじゃ8時間ステージをやるんだから、今までとは違う方法を考えなきゃいけなかった。1967年　ステージに上がるのもけっこうスリルだったんだよ。ちっぽけなナイト・クラブで、ダンス・ホールと違ってちょっとおっかなかった。みんな何か期待して待ってるんだから。

最初はかなり冷ややかな反応だったね。2日目の晩にマネージャーが言うんだ、"夕べはひどかったな、── mach shau（おい、派手にヤレ！）、他のグループみたいに"。967年　で、何かしらプレッシャーがかかってくると、そこを切り抜けるのは僕の役目なんだよ。みんな言うのさ、"困ったな、でもジョン、リーダーは君だぜ"。何もない時には、リーダーなんてどうでもいいだろ"って感じなのに、何かあると"君がリーダーなんだか、君が先に立ってショーを引っ張ってくれなきゃ"ってなるんだ。1972年
あういう、ちょっとヤバそうなクラブでやるのは、僕らも初めは怖かったよ。でも自分ちはリバプール出身だってことで、生意気なところもあったんだ。少なくとも、リバプーは生意気な人間を輩出してるという伝説は信じていた。1967年　それで僕はギターを、ひと晩じゅうジーン・ビンセントをやった。床を叩いたり寝転がったり、マイクを振したり、脚が悪い真似をしてみたり。あれはなかなかいい経験になったね。1972年
からは全員が"マック・シャウ"するようになったよ。

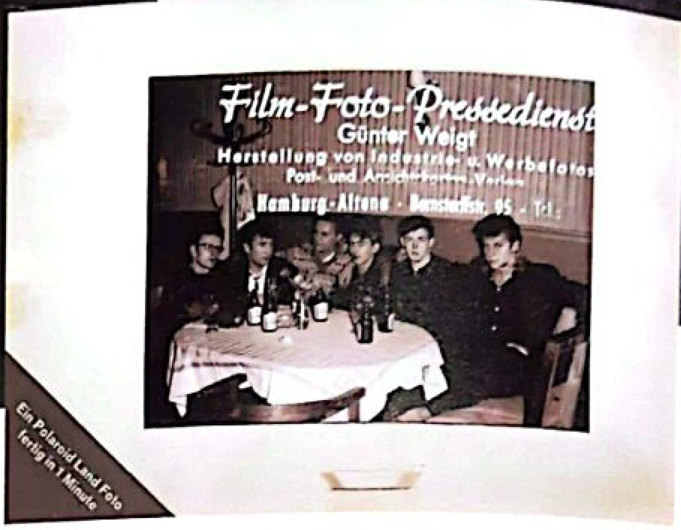
ポール　自分たちで客を引っ張り込まなきゃいけなかったんだ。そうでないと、誰もいない真っ暗なクラブで演奏することになるからね。誰かの姿が目に入ったとたん、気がついてないふりをしながら「ダンス・イン・ザ・ストリート」をやり始める。それで何人か入ってきたよ。サーカスの呼び込みみたいなもんだったね。4人来た──つかまえろ！って。

いい訓練になった。だって、来る人が最初に目をとめるのはビールの値段なんだ。客（たいていカップル）が入ってきて、僕らの方を見る。"ふ～ん……悪くない"って。でも女の子の方が彼を肘でつついて、"1マルク50ペニヒですって。高すぎるわ"。それで出て行っちゃうんだ。僕らブルーノに言ったのさ、"値段を下げてくれよ。これで足を引っ張られてる。もうちょっと安くすれば客が入るんだから"。それでようやく、ちょっとオーディエンスがついた。僕らは客をふたりつかまえて、何でも好きな曲をやってあげた──レパートリーを全部。"リクエストどうです？"って言って（客のいるテーブルはひとつしかなかった）。"やりましょう"。僕らはジョークをふりまき、最高のプレイを心がけて、またその客が来てくれるようにしたんだ。

CamScannerでスキャン

ジョージ
バンビ・キノの中だよ。
僕らの部屋は映画館と
女性用トイレの間にあった。
非常口につながる、
暗い古びた廊下の途中にね。
コンクリートを流しただけの部屋で、
狭い寝台が置かれ、窓はひとつもない。
そういうところで寝起きしてたんだ。
左は下着1枚でバンビ・キノの
外に立ってるジョン。
このドアを入るとすぐに
コンクリートの通路だ。
ポールとピートがここでよく
コンドームを燃やしてたよ。

ジョン　ハンブルクで観光中の僕。1960年11月。



ジョージ　インドラで1カ月くらいやったかな。そのうちそこが閉店になって、カイザーケラーに移った。デリー＆シニアーズが出てたんだけど、ちょうど彼らが帰国するところでね。2カ月の契約期間が終わって、今度はロリー・ストーム＆ザ・ハリケーンズが出ることになってたんだ。

カイザーケラーは最高の場所だった——まずはとにかくダンス・フロアがついてたからね。それに全体が船のイメージで統一されていて。テーブルは樽であちこちにロープとか海に関するものが置いてあったよ。

ジョン　ビールがあってテーブルがあって、そしてもうひとつのグループがいた。

ハウイ・ケイシーが来てたんだ、シニアーズと一緒に——僕らが行った時には、もういたんだったかな——とにかく、彼らはブルーノのもう1軒のクラブに出てた。すごく力のあるバンドだったよ。サックス・プレイヤーもいたし、よくまとまってた。黒人シンガー（デリー・ウィルキー）は、歌そのものはあんまりよくなかったけど、生粋のショーマンだった。だから僕らはまず彼らと競わなきゃならなかった。自分たちのショーの力で、クラブに客を引き込まないといけなかったんだ。経営者は同じなんだけどね。そのうち僕らは店を移った——ロリー・ストームとリンゴがいるところへ。彼らは完全にプロで、僕らはまだアマチュアだった。彼らはもう何年もやってて、バトリンズにも出てたし、ほんとステージのやり方ってものをわきまえてた。

リンゴ　ハンブルクは最高だったね。僕はロリー・ストーム＆ザ・ハリケーンズと一緒に行ったんだ。僕らの場合はバンじゃない——呼ばれたんだから——飛行機で行ったんだ、あれはいい気分だったね。だけど着いたらオーナーのコシュミダーがカイザーケラーの裏で寝ろって言うんだ、ビートルズも映画館の裏に泊まってるからって。

僕らの前に出てたハウイ・ケイシーのグループも、クラブの裏で寝起きしていた。あれは忘れられないね、僕らが着いた時に言われたこと。"ほら、ここがこれから泊まる場所"ってさ。古ぼけたソファがいくつかあって、ユニオン・ジャックの旗がかけてある。旗が僕らのシーツだよ。"冗談だろ、こっちは呼ばれて来たんだぞ！"って言った。それでローリーと僕とバンドのメンバーは、ドイツ海員会館の一室に全員で泊まった。豪奢なもんだね——豪奢極まって腹が立つよ。

ドイツで演奏してる頃にビートルズと会った。リバプールでも彼らを見たことはあったけど、その頃は何とか寄せ集めただけのどうってことないバンドだった。いや実際は、まだバンドとも言えなかったね。

ジョージ　カイザーケラーでは、出番が早くて終わるのは遅かった。もうひとつのバンドと交代で出て——最初組んでたのがデリー＆シニアーズで、そのあとがロリー・ストーム＆ザ・ハリケーンズ。契約では、僕らが6時間、もうひとつのバンドも6時間ショーをやることになってた。つまり両方で12時間やるわけだ。僕らが1時間出て、向こうが1時間出る。それを1ヵ月毎日延々繰り返してる感じだ、わずかな金のためにね。だけど若いうちはそんなのまるで気にならないものなんだよ。

僕らはロリーのバンドとつきあうようになった。リンゴとは前にも一度イギリスで会ってたはずだよ。僕ら全員、彼には同じ印象を持った。"あいつには気をつけろ、どうも厄介な奴らしいぞ"。

リンゴは偉そうな感じに見えたんだ。当時の僕らと比べれば、彼のいたバンドはまさにプロだった。今見たらそんなにいいとも思わないだろうけど、あの頃にすれば全員がいい楽器を持ってたしね。ドラムもフル・セットあったし、ユニフォームもあって、タイとチーフまで揃えてた。

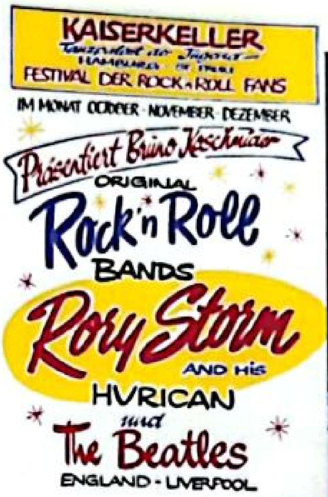
曲目は全部きちんと順序も決めてあって、まともなショーになってたよ。フロントマンのロリーはいつでも跳ねまわって"マック・シャウ"してたしね。リバプールのアマチュア・バンドの中では、彼らが一番プロに近かった。だから彼らがハンブルクに来たとき、アラン・ウィリアムズに言われたよ。"気合いを入れろよ、ロリー・ストーム＆ザ・ハリケーンズが来るからな。彼らがすごいことは知ってるだろう。おまえらなんか簡単に負かされるぞ"。

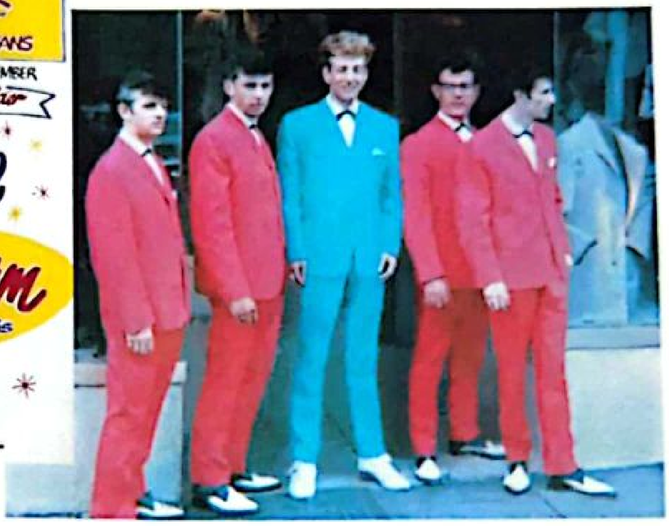
彼らがショーをやる時、リンゴは後ろでどんと構えてるわけだ。その彼を見ると、髪には白いメッシュが入ってるし、眉毛も半分白いし、鼻はでかいし、ほんとに怖い奴に見えたよ。だけど、たぶん30分もかからなかっただろうな、すぐにわかったよ、こいつはまさに……リンゴだ！

リンゴ　ドイツで一緒になった頃、彼らはもううまくなってたよ。最初は僕ら違うクラブでやってて、そのうち同じ店になった。ビートルズはいつも最後に出てたから、その頃になると僕は半分酔っ払って、スローな曲をやってくれってリクエストしてたんだ。

ポール　リンゴはいつも夜の相当遅い時間にやって来た。もう客もそんなに残ってない時間に、ブルージーなセッションを聴くのが好きでね。僕も彼の好みがわかるよ。そのくらいの時間になると僕らものんびりしてきて、B面の曲ばかり引っ張り出してやってた。よくやったのが「スリー・サーティ・ブルース」という曲。リンゴはいつも店に入ってくるとドリンクを頼み、ゆっくり腰かけて、「スリー・サーティ・ブルース」をリクエストしたっけ。

CamScannerでスキャン





リンゴ　僕はあの頃まだテディ・ボーイ気分だった。あとからジョンに聞いて初めて知ったんだよ、みんなが僕を怖がってたなんてさ。ジョンが言うんだ、"僕らちょっと怖かったんだよ——またあの酔っ払いだ、テディ・ボーイみたいな格好して、スローな曲をやれって言う奴"って。

ハンブルクの彼らは最高だったよ。ほんとよかった——すばらしいロックだった。あの時、彼らとやってたドラマーより僕の方が上だなとは思ってたけどね。で、時々会うようになって（そうたびたびじゃなかった）、そのうち同じクラブに出るようになると、戦いが始まったんだよ。週末の夜はふたつのバンドで12時間やった。とてつもなく長い時間だ、しかもステージに立つたびに僕らは彼らを負かそうとして、彼らも僕らを負かそうとしてるんだから。

ジョージ　きっかけは他にもあったんだ。ピートは絶対僕らとつるまなかったのさ。ギグが終わると、ピートはひとりで出かけて、僕ら3人で出歩いてた。そこへリンゴが入ってくると、何だかひとつの完全なユニットみたいになったんだ。ステージの上でも、ステージを降りてもね。リンゴを加えた4人だと、すごく気分がしっくりした。

ジョン　ハンブルクでは何時間も何時間もぶっ続けで演奏しなきゃいけなかった。どの曲も20分、どの曲にも20カ所ソロがある。夜8時間、9時間と演奏してた。おかげで格段にうまくなったよ。それにドイツ人はハード・ロックが好きだから、ずっとロックをやってなきゃいけない。そうやってがんがんやりまくるようになったんだ。1972年

スチュアート・サトクリフ　ドイツに行ってから千倍くらいうまくなったね。今ここにいるアラン・ウィリアムズも、リバプールじゃ僕らにかなうバンドはないって言ってる。1960年

ジョージ　恐ろしい数の曲を覚えなきゃならなかった。演奏時間がものすごく長いから、とにかく何でもやったね。ジーン・ビンセントを全部——アルバムに入ってるのはすべてやった。「ブルー・ジーン・バップ」だけじゃない、すべてだよ。チャック・ベリーのレコードを手に入れればそれも全部覚えた。リトル・リチャードも、エバリー・ブラザーズも、バディ・ホリーも、ファッツ・ドミノも——とにかく何でも。だけど「ムーングロウ」みたいな曲もやってたんだ、インストゥルメンタルでね。何でもいいのさ、長時間持たせなきゃならないんだから——とにかく何とかしのがなきゃいけなかった。

ハンブルクはまさに僕らの修業時代だったね、あれで人前でプレイするコツを覚えたんだ。

ジョン　一度ドイツの曲を客の前でやったことがある。

僕らはうまくなってきて、自信もつき始めていた。当たり前だよ、ひと晩中演奏してあれだけの経験積めばさ。相手が他国の人間っていうのもよかったんだ。地元でやる以上にがんばって気持ちをこめなきゃ、わかってもらえないから。1967年

その頃は演奏もうまくなってた。長時間演奏して——あの年で仕事が取れるんだから悪くない。1976年　それで僕らみんな、最後の頃にはフロア中飛びまわってた。ポールは「ホワッド・アイ・セイ」を1時間半くらいやってたよ。1972年

ポール　「ホワッド・アイ・セイ」をやると、いつでも客席が沸いた。僕らの得意な曲のひとつだったね。だんだんギネス・ブック入りを目指してるみたいになった——誰が一番長くやれるか、ってね。あれは完璧な曲だよ。オープニングのリフは最高だ。ウーリッツァーがあれば（なかったけど）、何時間でもあのリフをやっていられたね。そこから"Tell your MAMA, tell your PAW. Gonna take you back to ArkanSAW. See the girl with the red dress on＿"と、ずっと引き伸ばしていけるんだ。次にコーラスで"Tell me, what'd I say?"、何時間でも続けられるよ。そこから決め手の、"Oh Yeah!"——客も参加するわけ。

ジョン　僕が知るかぎり、あれはエレクトリック・ピアノを使った最初のレコードだ。「ホワッド・アイ・セイ」はすべてのギター・リフの元祖みたいな感じがする。僕らは誰もエレクトリック・ピアノを持ってなかったから、ギターで何とかあの低音を出そうとしたんだ。それまでのレコードでは、どれもリトル・リチャードのロックン・ロールみたいなリフだった。「ルシール」でもサックスとギターだろ。「ホワッド・アイ・セイ」でまったく新しい形が始まって、それが今も進化を続けてるんだ。1974年

ポール　あの頃は自分たちで曲を書こうなんて考えてもいなかった。演奏する曲ならたくさんあったからね。僕はちょっとしたやつを書いてたけど、誰にも見せる気になれなかった。ほんとにつまらない曲だったんだもの。そんなのよりチャック・ベリーをやった方がいいに決まってる。「テイスト・オブ・ハニー」はハンブルクで僕のオハコのひとつだった——バラードっぽいやつ。他のとは感じが違う曲だけど、常にリクエストが多かった。小っちゃなエコー・マイクでハモってね、なかなかうまかったよ。実際、いつもいいコーラスだった。

僕らはどんどんうまくなっていって、他のバンドも見に来るようになった。中でも最高の賞賛に思えたのは、トップ・テン（僕らが出たくてたまらなかった有名なクラブ）のトニー・シェリダンが来た時とか、ロリー・ストームやリンゴが残って僕らを見てた時だね。

ジョージ　土曜は午後3時、4時から始まって、朝の5時や6時まで続くんだ。すべて終わってから朝食。みんな酔っ払ってた——バンドのメンバーだけじゃなく、客も、セント・パウリの人は誰もさ。みんなで何か食べに出かけて、ついでにまた酒を飲んだりして、それから日曜の朝の魚市に行く（なぜなのか、どうしてもわからなかったけど）。僕らは陽光あふれる街をベロベロに酔っ払って、一睡もしない状態でうろついて、それからやっとベッドに入る。でも日曜のステージは始まりが早いんだ。終わるのはものすごく遅い。

時間が早いうちは客層もすごく若くて、15歳から17歳くらい。8時や9時になると少し上の年代になって、10時をまわると18歳以上のみになる。午前2時には完全な酔っ払いか、僕らのクラブのオーナーと喋りに来た他の店のオーナーくらいしかいない。みんなひとつの大きなテーブルを囲み、セクト（シャンペン）や、ありとあらゆる種類のシュナップス（ブランデー）のケースを前にして笑ってる——僕らは僕らでドリンクを買って飲んでた。そのころはスコッチ＆コーク割りが気に入ってたね。

リンゴ　ドイツ人はいいよ、気に入ってくれるとビールをケースでくれるんだ。それが金のある人、つまりよその街から来てる人とかハンブルクのスノッブとかね、そういう人だと、シャンペンをおごってくれる。僕らは何も気にせずに全部飲ませてもらった。

クラブにはかなりヤバい連中も来ていてね、そういう奴らは銃を持ってた。銃なんか見るの初めてだったよ。みんな店に来るとバーに陣取って、スツールから転げ落ちるか、金を使い果たすまで飲み続ける。ドアを指差されるなんて悠長なんじゃなくて、店から蹴りだされて"二度目は許さないぞ"って言い渡されるんだ。

ジョン　いわゆるゴロつき連中も来てたね——地元のマフィアだよ。奴らがシャンペンを箱ごとステージにまわしてくる。ドイツのまがい物のシャンペンだけど、それが来ると飲まなきゃいけないんだ。じゃないと殺される。"まあ飲め、それから「ホワッド・アイ・セイ」をやれ"と言うんだ。夜の何時だろうとやらなきゃいけない。奴らが朝の5時に来て、僕らがその前に7時間演奏してようと、シャンペンの箱が来たら続けなきゃいけないんだ。

僕は歌いすぎで咽喉を痛めてた。でも覚醒剤をやれば起きていられるってドイツ人に教えられてね、それを実行してたんだよ。1967年

僕はいつも、酔っ払うと他のメンバーが演奏してる間、ステージのピアノの後ろで寝ていたよ。ステージでぐっすりさ。それに僕らはステージでしょっちゅうものを食べてたよ、普段食べる暇がなかったから。ひどい光景だ……今やったらぶっ飛んだステージになるね。ステージでもの食べて、煙草吸って、悪態ついて、疲れたら寝ちゃうんだもんね。1972年

CamScannerでスキャン

リンゴ　その頃生まれて初めて覚醒剤ってものを知った。そういうのでもやらなきゃ、あんな長時間演奏してられないさ。プレルーディンってやつでね、薬局に行けば買えた。悪いことしてるなんて意識はなかったよ、あれをやればギンギンに目が冴えて、何日でもやっていられたんだ。つまりビールとプレルーディンのおかげで僕らは何とかしのげたのさ。

ジョン　初めてドラッグをやったのはまだアート・スクールにいる頃で、仲間とやったんだ(みんなで一緒にやった)。あれはベンゼドリンだった。鼻炎薬に含まれてるやつ……。1974年

ジョージ　ロンドン郊外に、ロイストン・エリスという髭面のビート派詩人がいたんだ。彼がリバプールへ詩の朗読会にやって来ることがあって、そういう時はいつも僕らがバック・バンドをやっていた。そのエリスが発見したんだよ、ヴィックスの鼻炎カプセルを解体すると、中の紙にベンゼドリンが沁みこませてあるって(その後、彼はこの事実を『ニュース・オブ・ザ・ワールド』で暴露した)。

ジョン　イギリスにおけるアレン・ギンズバーグみたいなビート派詩人の話を聞いて、みんなが鼻炎薬の中身を調べた。それでみんな思ったわけだ、"ワオ！ 何だこれ？"。それからひと晩中喋りっぱなし。

ハンブルクではウェイターは全員プレルーディンをやっていた(他のクスリもいろいろやっていたけど、プレルーディンを覚えてるのは、最高にいいトリップができたからだ)。みんな眠らないようにその手のクスリをやってたんだよ、それで何とか、あの不夜城で信じられないくらい長時間働いていられたんだ。ミュージシャンが疲労や酒で倒れると、ウェイターがクスリをくれた。クスリを飲むと口がなめらかに動き始めて、頭がはっきりして、ほとんど休みなく働けるようになる――クスリが切れたらまた次を飲まなきゃならないけどね。1974年

ジョージ　口から泡吹いて喋ってたね。あれだけの時間演奏しなきゃならなかったから、クラブのオーナーがプレルーディンをくれたんだ。痩せ薬だよ。アンフェタミンじゃないと思うけど、覚醒剤だったことは確かだね。だからいつでも延々喋りまくって、跳ねまわっていられたんだ。

大酒飲んで暴れまわって、すごい勢いで演奏して、それからあの手のクスリをもらう。ベッドに横になって、プレルーディンで汗びっしょりになりながら、"どうして眠れないんだ？"って思ったのを覚えてるよ。

ポール　僕の父はワーキング・クラスの賢い男でね、こんなことになるのを見通してたんだ。若造がひとりでハンブルクへ行くというので、僕は警告されてたんだよ。"ドラッグには気をつけろ、いいね？"って。それでハンブルクでみんながプレルーディンをやるようになった時、たぶん僕は手を出すのが一番遅かったと思う。"いや、僕はビールにしておくよ、サンキュー"って。

みんなすっかりハイになって、僕は天然のハイな状態だけで対抗してた。ジョンが僕の方を見てぺらぺら喋りながら、"おまえは何をやってるんだ？"って言うんだよ。それで僕は"何にもやってないよ～"って。みんなに負けないくらいの早口で喋ってたんだ。みんなのハイな気分が僕にも伝染したのさ。

ああいうものはほんとに怖いと思ってた。"ああいう悪魔の薬には気をつけなさい"って言われたし。実際に自分の目で危険を見ていたから、初めは手を出さないようにしていたんだ。振り返ると、あれは何にも増して仲間からのプレッシャーが大きいんだよね。それに今じゃ拒むことがクールな感じになってるけど、当時はそうじゃなかった。"ねえ、みんながやることを何でも一緒にやる必要はないだろ"って言うのが賢い大人なんだろうけど、当時は僕が弱虫みたいに思われるだけだった。全体にそういう雰囲気だったんだよ。

ジョン　僕らのやってたことといったら！ 毎回ステージをぶっ壊してた――ザ・フーがものを壊し始めるのはずっとあとのことだよ。まだ鳴ってるギターをステージに放り出して帰っちゃったり、ベロベロに酔っ払って機材をぶち壊したり。フラストレーションのせいさ、頭で考えてやってたんじゃない。"ステージを壊そう、便座をかぶろう、裸で出てやろう"なんて考えたわけじゃない。単に酔っ払いが暴れてただけだ。

ポールは彼と僕とでどっちがリーダーか争ってたって言ってたけど、僕はそんなの覚えてないな。あの頃はもう、どうでもよかった。何が何でもリーダーになろうなんて思ってなかった。言い争ったとすれば、それは単にプライドの問題だろうね。

ケンカはどれもつまらないことばかりだった。要するに働きづめでイライラしてて、おかしくなってたのさ。僕らはまだほんのガキだった。ジョージがステージで僕に食べ物を投げつけてきたこともあったよ。その時も何だかくだらないことでケンカになったんだ。その顔をぺしゃんこにしてやるぞって僕が言った。怒鳴り合いはしたけど、それだけだ。僕は何もしてないよ。1967年　一度、食べ物が載った皿をジョージにぶつけたことはあったな。僕らの間で暴力沙汰といったらそのくらいだね。1969年

ジョージ　ジョンはあの頃、みんなにありとあらゆるものを投げつけてたよ。その一件については思い出せないけど、彼がそう言うのなら、そういうこともあったんだろう。彼が人にものを投げたことなら何度もあった。彼はかなりぶっ飛んでたんだ。何日も寝ない状態で酒やプレルーディンを飲むと、マイナスの効果もあるんだよ。幻覚が出てきたりして、ちょっとおかしくなってくる。ジョンは時々キレかけた。明け方に部屋に入ってきて怒鳴り散らすこともあったよ。そんな時僕は寝たふりをして、彼に気づかれないように祈ってた。

ある時ポールが女の子をベッドに連れ込んでたら、そこへジョンが入ってきて、彼女の服を全部はさみで切り刻んで、めちゃくちゃにしちゃったことがある。ジョンは時々そんなふうになった。ドラッグと長時間寝ないでいるのがあまりに続いたせいだよ。僕らはドイツ人にもものを投げてたね。どのバンドもやってたよ。

ジョン　ドイツ人によく英語で怒鳴ったな。ナチス出てけ、とか言ってね。1970年

ポール　その頃のある日、僕らがいつものように演奏してると、ちょっと変わった雰囲気の、周囲とはちょっと感じの違う人間が入ってきた。すぐ僕ら思ったよ、"おいおい……同類が来た……何か起きそうだぞ"。彼らは店に入ってきて腰をおろした。それがアストリットとユルゲンとクラウスだった。クラウス・フォアマンはやがてマンフレッド・マンでベースをやるようになる。ユルゲンはユルゲン・フォルマーだ、今でも優秀なカメラマンだよ。そしてアストリット・キルヒヘル、やがてスチュアートの恋人になる女性――ふたりは大恋愛をしたんだ。まあとにかく、彼らがやって来てテーブルについた時、こいつらはどこか違うと僕らは思った。そして、彼らにとっても僕らこそが求めている人間だったんだ。

ジョージ　アストリットはもともとクラウスの恋人だったんだよ。でもある晩ケンカになって、彼はカッとして飛び出したのさ。ものすごく腹が立っていたんで、あの手のハンブルクでも名うての良からぬ場所へやって来たわけ。そうでもなけりゃ絶対足を向けないような場所だよ。それでうろうろしてるうち、地下から音がするんでカイザーケラーへ入ってみると、僕らがいてこいつらはすごくおもしろいと思ったらしい。それでアストリットに話して彼女や友だちをつれて――バレエ・ダンサーも混じってた――しょっちゅう来るようになったんだ。中でもアストリットとクラウスが一番よく来てたね。ふたりは僕らが気に入って、アストリットは僕らの写真を撮りたがった。

ポール　みんなロックン・ロールが好きで後ろに流すヘア・スタイルだったけど、彼らだけは違ってた。全身黒ずくめだったんだよ。実を言うと、僕らのスタイルは彼らからかなりいただいてるんだ。彼らは自分たちを"イグジス"――イグジステンシャリスト(実存主義者)と呼んでいた。ロッカーでもモッズでもない、彼らは"イグジス"なんだ。

僕らはまだロッカーの雰囲気ではあったけど、僕に言わせれば、他のグループとはちょっと違ってた。レパートリーも違えばユーモアのセンスも違う。スチュアートはジェイムス・ディーンみたいな格好をしていた。サングラスをかけ、ベースを持って立ち――すべてポーズなんだけどね。最初は彼らもスチュアートを見てぶっ飛んだんだ。彼らが求めていたのはミュージシャンじゃなかったらしい――イメージなのさ。そのうちスチュアートは画家だってわかる。ジョンもアート・スクールの学生だろ、そして彼らもアート・スクールの学生ということで、強いつながりができたわけさ。彼らと飲んで喋って、そのうち僕らはほんとに彼らのことがわかってきた。

スチュアート・サトクリフ　最高にすばらしい友だちを見つけたばかりなんだ。こんなかっこいい3人組に会ったのは初めてだよ。僕は彼らの魅力に完全に取り憑かれた。ところが彼女の方じゃ、僕がこのグループで一番ハンサムだと思ったという。こっちは一番使えないメンバーだと引け目を感じてるのに、僕の方がよっぽどイカしてるって言われて――すばらしいロメオ・ジョン・レノンや、彼の仲間のポールとジョージを脇においてだよ、ハンブルクのカサノバたちを！

ジョージ　みんなすごくいい人だった。僕らほんと、彼らに会えてよかったよ。彼らは地元の誰よりも洗練されてた。彼らの方は僕らをすごく評価してくれたけど、彼ら自身がすごくおもしろくて、アーティスティックな人間だった。ハンブルクあたりじゃ一番芸術家っぽい連中だったよ。

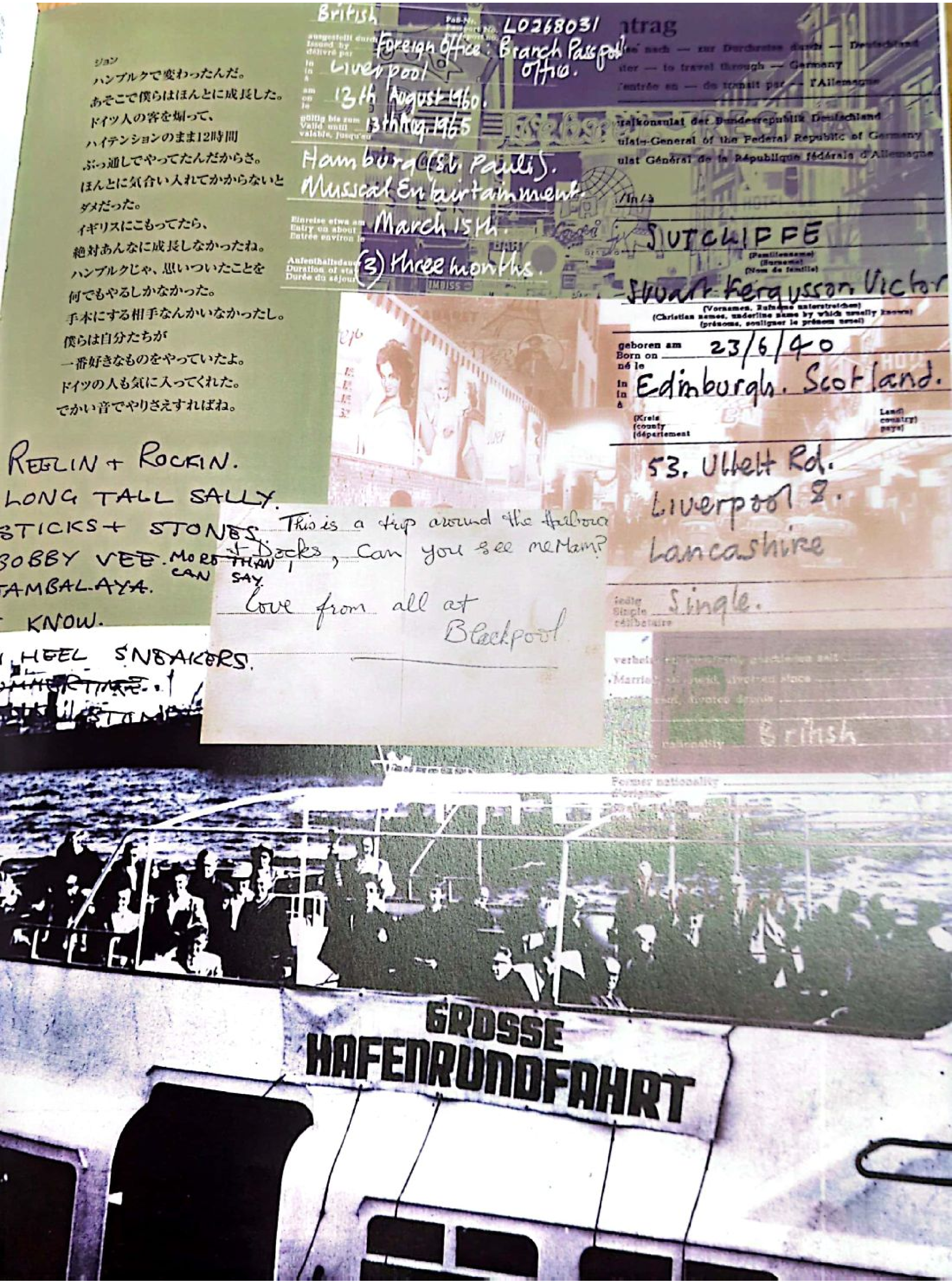
僕らは彼らとつきあいだした。あの頃はこっちが教えることなんかなかったよ。僕らの方がよっぽど教えられたね、スタイルとかも含めて。クラウス、アストリット、ユルゲン。3人は僕らの本当の友だちになった。クラウスはその後ベース・プレイヤーになって、僕のレコードにも他の人のにもたくさん参加してる。それにアストリットはほんとに優しい女性で、よく僕らを家に呼んで食べさせてくれた。すごく助かったよ、風呂も使わせてもらったしね。アストリットは当時22歳だった。僕は17歳だったから、彼女はものすごく年上って感じがした。すごく大人に見えたよ。

そのうちスチュアートとアストリットは恋人になる。アストリットはすごく素敵だった――スチュアートも。写真を見ればわかるよ。

ポール　僕らは彼らとすごく親しくなった。ユルゲンとアストリットは初期の僕らの写真を撮ってるよ。彼らはスタジオを持っていて(あるいはスタジオを持ってる人と知り合いだったのかも)、僕らもそこに行って撮ってもらったんだ。そんな待遇を受けたのは初めてだったね。

CamScannerでスキャン

ジョン
ハンブルクで変わったんだ。
あそこで僕らはほんとに成長した。
ドイツ人の客を煽って、
ハイテンションのまま12時間
ぶっ通しでやってたんだからさ。
ほんとに気合い入れてかからないと
ダメだった。
イギリスにこもってたら、
絶対あんなに成長しなかったね。
ハンブルクじゃ、思いついたことを
何でもやるしかなかった。
手本にする相手なんかいなかったし。
僕らは自分たちが
一番好きなものをやっていたよ。
ドイツの人も気に入ってくれた。
でかい音でやりさえすればね。



CamScannerでスキャン

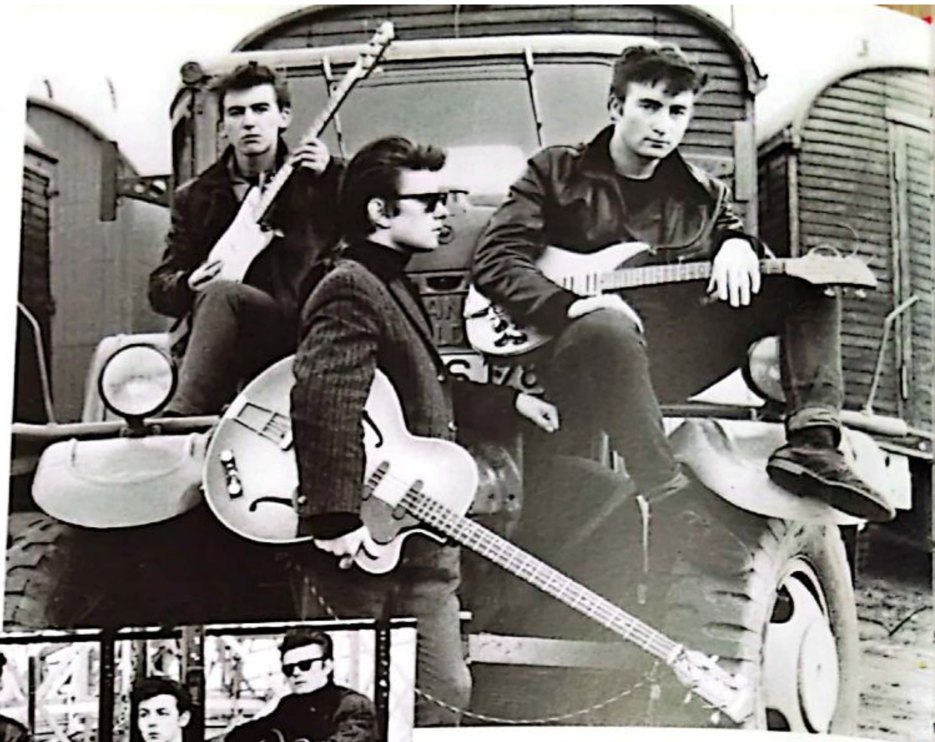
ポール　ユルゲンとアストリットはサーカスの市が立つようないかがわしい場所へ僕らを連れて行って、そこで写真を撮ったりした。それで僕らも撮影ってものがどんなふうに行なわれるかわかってきたんだ。初期にパンフレット写真なんかを撮る時は、よくカメラマンに"外で撮らない？"って言ったもんだよ。僕らそういうイメージが好きだった——クールに見えた。ケバケバしいのは絶対嫌だった。

ある店で革のジャケットを見つけた。リバプールじゃ手に入らないようなやつで、すごくクールだった。これはイギリスに戻ったら自慢できるぞって感じでね。

ジョージ　見たとたん、これを着ようって全員が思ったよ。革ジャンはいつだって魅力が褪せない——マーロン・ブランドのイメージだね——それにジーンズ。ドイツにはすごくいい革があって、僕らの仲間はみんな着ていた。僕らがまだリバプールのゴミみたいな格好をしてる頃、アストリットはそんなスタイルだったね。レザー・パンツにビートル・ヘアは、彼女のおかげなんだよ。

地元にも何人か親しい仲間ができた。ウェイターとかクラブのマネージャーとかね。僕ら何度もハンブルクへ来るから、すごく気に入ってもらえたんだ。

ポール　戦争はそんな昔の話じゃなかったし、リバプールの人



ジョージ　初期のビートルズ写真はすばらしい。
これはハンブルクの遊園地でアストリットが撮ったもの(僕らが腰かけてるトラックは、ジェット・コースターを運ぶのに使われてた)。ビートルズは最高にイカして見える。
アストリットはほんと、誰よりも僕らのイメージに影響を与えた。彼女のおかげで、僕らのルックスがまともになったのさ。

間も僕らの近所の人間もまだみんな忘れちゃいなかった。だからドイツの若者たちに会えたのはよかったよ。クラブへ来る若者は戦争のことなんかもう忘れていた。彼らとつきあう上で、そういう点はすごくプラスになったね。

僕らには不思議だった。すべてが違うんだ、ドイツは空気のすべてが。郵便局へ行って切手買うだけでも違う。子供の頃、ボーイスカウトのキャンプに行った時みたいだよ、郵便がものすごく大切なものになるんだ。郵便物を渡される時、自分にも2、3通手紙が来てますようにって祈る。自分宛の手紙がないとがっかりしてさ。

ドイツではクラブのマネージャーから郵便を渡されてた。1通でもあれば最高の気分だった——隅へ行って、長い手紙をひとりで読んだもんだよ。

リンゴ　初めてドイツへ行った時、ある朝、僕はどこへ行こうかなって考えながらぶらぶらしてた。するとグロッセ・フライハイトでスチュアートに会ったんだ。あの頃、彼のことはまるで知らなかったんだけど、彼がパンケーキを出すカフェへ連れて行ってくれてね。僕はそこで初めての食事にありついた。

みんなでレーパーバーンをうろついて、コーンフレークやらパンケーキやらを食べた——そうやってドイツ語を少し覚えたんだ。僕が最初に覚えたのはコーンフレークのドイツ語で、そのあとが"pfannkuchen"(パンケーキ)、"Ei und Kartoffeln(卵とポテト)。ウェイターの奴らは"失せろ"とか"くそくらえ"みたいな意味のドイツ語を違う意味として教えるんだよ。それで僕らが誰かにその言葉を使うと、首根っこつかまれるんだ。で、あわてて"違う、僕らはイギリス人だ！ あいつがそう言えって言ったんだよ！"って。

あのあたりはほんとに物騒だった。リバプールもそうだったね。だけど僕らはもう大人になってたから、どう対応すればいいかわかってた。

ジョージ　食べに行く場所はいくつかあった。カイザーケラーのすぐ近くにも1軒、すごく安い、これが店かっていうようなのがあってね。通りを右に折れて裏道をちょっと行ったところ。客は地元の人たちばかりだったけど、みんな戦争に行った人みたいで——脚がない人、目がない人、腕がない人——それに猫。僕らはそこで、これ以下はないってくらいおぞましい料理を食べた。値段はすごく安かったけどね。

ハラルドはそこよりよっぽどましだった。そこならコーンフレークに、卵、ポテチッ

CamScannerでスキャン

ブも出してくれた。それに牛乳。あれのおかげで僕らは救われた——あの通りには新鮮な牛乳だけはたっぷりあったんだよ。僕らは朝起きると、バンビ・キノの向かいにある小さな牛乳屋で冷たいミルクを1リットル買った。何度かバター・ミルクを買ったんだけど、僕らそれが何だか知らなくてね。"げっ！ 何だこれ？"と思ったよ。固まってるような味がしたんだ。

ポール　ハラルドはグロス・フライハイトにあった。ハンバーガーはフリカデレンって名前で売られてたよ(ハンブルクなのになぜハンバーガーって言わないのか、どうしても理解できなかった)。ハラルドはクラブのすぐそばだったけど、裏にまわるとチャグーという店があった。ジョージが言ってたのはそこのことだよ。中華料理の店で、通りを300ヤードくらい行ったところ、レーパーバーンのはずれにあった。そこの目玉はパンケーキ——"Pfannkuchen mit Zitrone bitte, und Zucker"——レモンと砂糖入りパンケーキ。そういうのを出す店はそこだけだった。あとはどこも、僕らにとっては"外国料理"でね。あの店の思い出というと、何よりもまず僕らが来たってことがひと目でわかること。僕らの皿だけは、ガーキン(きゅうりのピクルス)だけ残してすっかりきれいになってるから——あのピクルスだけはどうしても納得できない。だからいつでも僕らの皿には小っちゃなガーキンがふたつだけ残ってて、あとは削りとったくらいきれいになってたんだよ。

パンケーキが食べられるのは最高に嬉しかった。毎日がパンケーキ・デイ(イギリスでは懺悔の火曜日とも言われ、この日パンケーキを食べる習慣がある)みたいでね。ただ、あそこの困ったところは、手や足のない老人たちが何人も来てたってことだ。黒いベレー帽をかぶってね、明らかに戦争帰りの人たちだよ。考えてみれば、まだ15年前の出来事だったんだ。退役軍人は何百万人といた。それにドイツ人は制服好きでね——掃除夫でもゴミ収集係でも、アスファルトで道路を舗装する人でも、みんな制服着てる。そういう仕事してるのは退役軍人だから、制服や腕章してても手や脚がなかったりするんだよ。そういうのを見ると、あれはついこの間なんだってつくづく思い知らされる。

でもリバプールの若者としては、"ああ、僕らはあの戦争に勝ったんだ——気にするな"みたいな気分だった。"戦争の話はするな"って雰囲気は常にあったけど、いざそういうことになると、僕らもわりと国粋主義者っぽかったね。ちょっとばかり血の気が多かったのかな。

スチュアート・サトクリフ　**ここに来てからひとつ確信したことがある。**
僕は野蛮なことは嫌いだってこと。
この地域はあまりにも野蛮だよ……。 1960年

ジョージ　ハンブルクのナイト・クラブで困ったことは、ウェイターやバーテンのほとんどがヤクザ者だってことだ。とにかくタフな奴らで、ケンカっ早いから、乱闘騒ぎも日常茶飯事だった。

ケンカのバック・ミュージックに一番合ってるのが、これはハンブルクだけじゃなくリバプールでも同じで、「ハリー・ガリー」だった。「ハリー・ガリー」をやるたびにケンカが起きるんだよ。リバプールでは消火器で殴り合いしてたね。土曜の晩にみんながパブから繰り出してくると、まず間違いない。「ハリー・ガリー」だ！

ハンブルクでは催涙弾が使われることも多かった。ある晩のこと、プレイヤーやキャプスタンの煙草の匂いがしたから、"あれ、イギリス人が来てるぞ"って。兵隊が来たのさ。そのうちのひとりに、ここのホステスには手を出さないようにと言っといただ、彼女はクラブのマネージャーとくっついてるから——タフ・ガイのひとりだよ。でその兵隊は酔っ払って、そのホステスにちょっかい出しちゃって。一瞬にして、「ハリー・ガリー」とともにすごい騒ぎになった。曲の最後の方では演奏を続けられなかったよ、催涙ガスだらけで。

ジョン　バカなイギリスの軍人がつるんでやって来て、騒ぎを起こしたがるんだ。客の中に海軍の奴らが混ざってるとわかると、こりゃ、今夜はトラブルになるなって僕らはわかるわけ。何杯か飲むと、「アップ・リバプール」や「アップ・ポンペイ」をやれって怒鳴り出す。だけどそのうち、全員死んだように床に這いつくばることになるんだ。勘定のことでウェイターにケンカ売ったりするからさ。何の理由もなくケンカになることもあるけど。ウェイターが飛び出しナイフか棍棒を取り出せば、それで終わりだ。あんな人殺し連中、見たことないね。1967年

ジョージ　棍棒に鉄パイプにブラスナックル。僕らが泊まってたところのすぐそばに、そういうものを何でも買える店があった。ケンカになるとそりゃものすごい殴り合いで、そのうち悪い方が裏口から放り出される。そして1時間後、そいつはそれ以上の凶器を持って戻って来るんだよ。それからすさまじいことになる——そこら中、血だらけだ。そういうことがしょっちゅうだった。特に軍人が来てる時だね。船乗りや兵隊はよく街に来てた。みんな酔っ払ってるから、自然と最後は血と涙になるんだ。そしてバンドも目にくれるわけ、催涙ガスを顔に吹っかけられるもんだから。

ポール　船乗りはどこにでもいたよ。ウエイターはみんな暴れん坊だった——そうなるしかないんだ、いつでもケンカが起きるんだから。ほんとクレイジーな時期だったね。でも楽しかったよ。

ジョン　僕らイギリスの船乗りから金を巻き上げようとしたんだ。英語で話しかけて、女の子を紹介してやるって言えば、うまくだませると思ってさ。それで彼にどんどん飲ませると、"女はどこだ？"ってそればかり言ってる。僕らはそいつが金をどこに隠してるのか、何とかうまく聞き出そうとした。でも結局失敗。最後には2発殴ってあきらめたよ。怪我させてまで金をぶんどる気はなかった。1967年

ポール　ピートについては、僕はちょっと文句を言ってたんだ。ひと晩じゅう帰ってこないことがよくあったから。彼はストリッパーと知り合って、いい仲になった。彼女は朝の4時にならないと仕事が終わらないから、それで彼も一緒につきあってるわけ。次の日、10時くらいに戻ってきてベッドにもぐりこむんだ。もう仕事の時間だよ。いさかいが始まったのは、そういうことも関係があると思うな。

ちょうど同じ頃、僕はスチュアートとも少しもめていた。言わせてもらえば、僕はすごく演奏のうまいバンドにしたかったんだよ。誰が見てるかわからないんだから。スカウトの目に止まるようでなきゃいけないと僕は思ってた。そういう点で、僕は完璧主義者って言われてしまうんだろうね。僕はただきちんとやりたかったんだよ、だけどそれで何度かごたごたしたのは確かだから、そういうところはもっと気を回すべきだったかもしれない。だけど、あの年頃でそんなに気が回る奴なんているかい？　少なくとも僕は違ったね。

スチュアートと僕は、一度実際にステージの上でつかみ合いのケンカをした。彼は僕より小さいから、簡単にやっつけられると思ってた。ところがこれが強くてね、それで死に物狂いの取っ組み合いになった。ステージの上で、演奏の最中にだよ。ひどい話だ。僕らは互いに言いすぎたんだね。"おまえなんか……じゃないか"——"おまえ、そういう言い方するのか？"みたいな感じで。それでケンカになったものの、どっちもそれ以上やり合いたくなかった。まわりのみんなも怒鳴ってるわけ、"ふたりとも、やめろ！"って——"こいつがやめれば僕もやめるよ"。

ジョン　ポールはスチュの彼女のことで何か言ったんだよ——すごくいい女だったから嫉妬してたのさ。それでスチュがステージで彼を殴ったんだ。スチュは人に手を出すような奴じゃなかったのに。1972年

ポール　もちろん、まわりのゴロつき連中はみんな笑ってたよ。人を殺すのだって何とも思わない奴らだから。僕とスチュはケンカなんてあんまりしたことなかった。とは言え、そういうことは僕とスチュアートやピートとの関係にプラスには働かなかったよね。

リンゴ　かなり柄の悪いところだったけど、それでいて売春婦なんかは僕らのことを気に入ってくれてね、洗濯もしてくれた——バーの女の子たちも、いつだって親切にしてくれたよ。

ポール　ハンブルクではほんと目を開かされた。僕らあそこへ行った時はガキだったけど、戻ってきた時は……老いたガキだ！

セックスの衝撃だよ。一方にレーパーバーンの女性たちがいて、一方にもう少し家柄のいい、週末になるとやって来る女の子たちがいる。ドイツの警察がアウスヴァイスコントローレ(身元確認)にまわってくるから、そういう子たちは10時前に帰らなきゃいけない。他にも、もうちょっと"レーパーバーンっぽい"女がいて、あとストリップ・ダンサーもいる。そして気がつくと、ストリッパーが恋人になってるわけだ。それまでの人生でセックスと無縁も同然だったとしたら、これはかなりすごいことだよ。相手は明らかにその手のことを知っていて、自分の方はほとんど知らない。だから僕ら、かなり手っとり早くセックスの洗礼を受けたわけさ。いろいろ経験したね、それで僕らは鎖から解き放たれた。

リバプールの人間だから、僕らに関するかぎり、本国で逮捕される可能性はなかった。リバプールでは女の子はみんな頑丈なガードルをしててさ、まるで中世だよ。でもハンブルクでは、ほとんどあそこを見せびらかさんばかりだった。しかもすべて承知の上でやってる感じだったね。そういうのは実際に味わってみなきゃわからないってわけだ、僕らはそれをいただくことができた。最高にきれいな女たちだったし、だからほんと女あさりの時期だったね。みんなバーのホステスだよ。普段つきあってるようなごく普通の可愛いバージンじゃない。でも僕らは教えてもらえてとても満足してた。僕ら全員がハンブルクで教育を受けたのさ。なかなかのもんだったね。

ジョージ　50年代末のイギリスでは、そんなことはそうはできなかった。女の子はみんなブラにコルセットで武装してた。強化スチールかっていうような代物だよ。どうやったってぜったい歯が立たない。全部はずそうとしたら必ず手がおかしくなるよ。ピート・ベストの家かどこかのパーティに行った時のことを覚えてる。よくそういうオールナイトのパーティをやってたんだけど、その時僕はどこかの女の子といちゃついてた。こっちは8時間ギンギンの状態で、しまいには股間が痛いくらいになって——それでも何の救いも得られなかった。いつだってそんな感じだったよ。ひどい時代だったね。

ただ、そんなのはどんな時代にもあるものだ。異性に対する欲望、湧きあがってくる男性ホルモンってやつ。でもそれだけじゃない、別の面もある——仲間うちのプレッシャーだよ。"あれ、おまえ、まだなの？"ってやつ。それで"俺も経験しなきゃ"となって、みんな嘘をつき始める。"もちろん、もうとっくにすませたさ"。——"じゃ、女できたの？"——"できたさ"——"へえ、俺はもうやっちまったぜ！"

もちろんハンブルクで僕にストリッパーの相手がいたわけじゃない。ピートにストリ

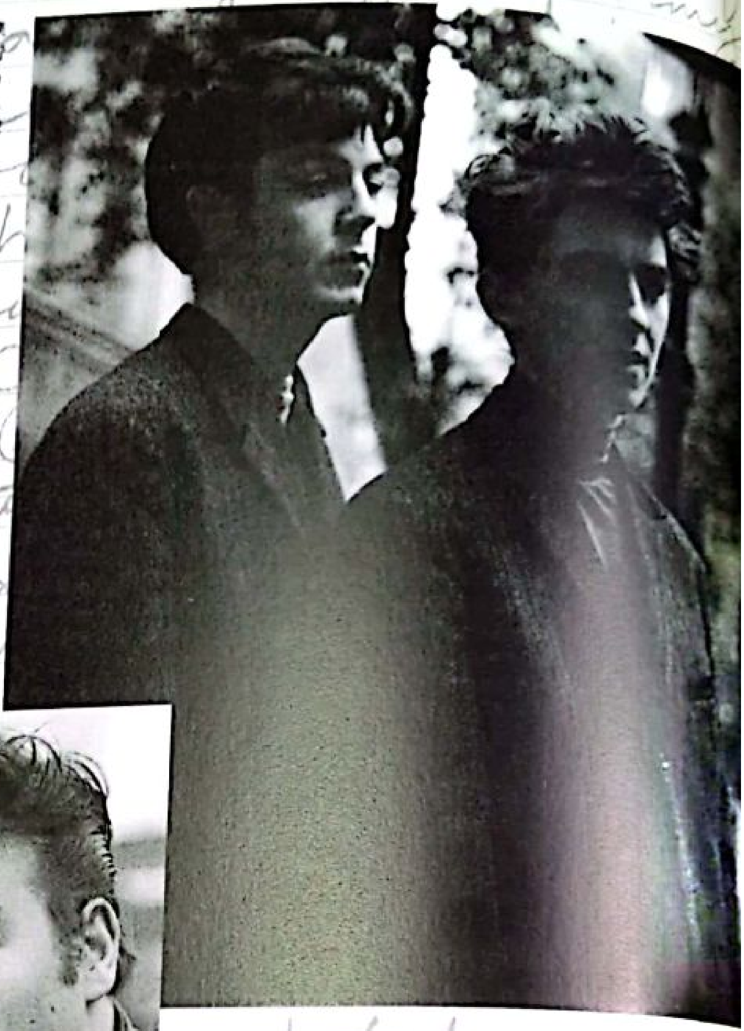
CamScannerでスキャン

ッパーの恋人がいたのは知ってるけどね。クラブには若い女の子がたくさんいて、僕らも何人かと知り合いだった。だけど僕に言わせりゃ、別にすごい乱交パーティが行なわれていたとかいうんじゃない。僕の初体験はハンブルクだった——ポールとジョンとピート・ベストと、みんなが見ている中でね。僕ら寝棚に寝てただろ。シーツにくるまってるから実際には何も見えないわけだけど、終わったらみんなから拍手喝采だったよ。ともかく、やってる間はみんな静かにしてくれてたわけだ。

ポール　僕らは壁の方を向いたまま、音を立てずに眠ったふりしてた。他のみんなはすでにちょっと経験があって、ジョージだけスタートが遅かったんだ。

それくらい僕らは身近な存在だったのさ。しょっちゅうお互いに邪魔し合ってね。ジョンがやってる最中に僕が部屋に入っちゃったこともある。彼の下に女の子がいて、腰動かしてるところをちらっと見ちゃってね。そんなのまるきり普通のことだった。"あっ、ごめん"って部屋を出るだけのことさ。いかにもティーンエイジャーらしい。"ここ使うかい？ 俺、ちょっとやりたいんだけど"。それで女の子を引っ張りこむわけ。

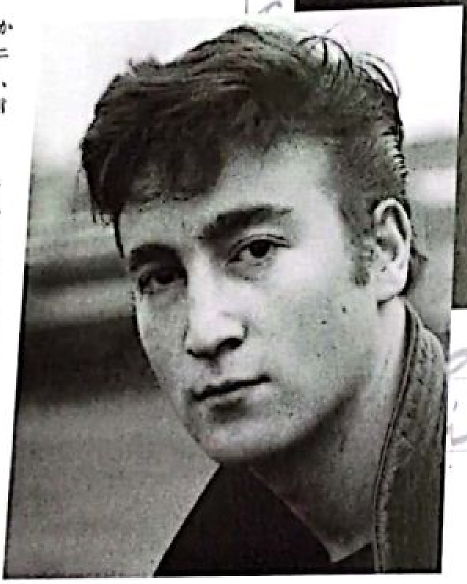
だから僕は前からすごく不思議だったんだよ、なんでジョンがゲイってことになるんだろうって。15年以上一緒に暮らしてきて、生活を共にしてた僕らが、誰ひとりとしてジョンと男がいる現場を見たことないんだよ。その手のことは今より盛んだったのかもしれないけどね。それにジョンは酒を飲むと確かに抑制をなくしちゃう感じだった。



リンゴ　僕らは20歳だった（少なくとも僕はね）。あらゆるストリップ・クラブへ行ってね、ほんと楽しかったな。それまでリバプールで見た中で、あれに一番近いものといったら、"ヌード・オン・アイス"くらいだ——透明な箱に裸の女性が閉じ込められてるやつ——ところがドイツだと、いきなりそれが目の前に来ちゃうんだから。僕はそういうクラブを全部まわった。夜も昼も寝ないでいる方法を身につけてたし。

ジョン　ステージと酒と女、それで寝る時間なんかあるわけないだろう？

ジョージ　僕らの友だちのバーニーがリバプールからやって来た。ある日僕らがクラブにいるとバーニーが入ってきて、"今ちょっとトイレで抜いてきたよ、すげえイカした女がいてさ"。僕ら声をそろえて言ったよ、"バーニー、女じゃないよ、それ！"。



ポール　みんなでバーニーをひっかけたんだ。ロキシーってクラブがあってね、僕らはどういうところか知ってたんだ。最高にいい女がいるんだよ。低い声で、"わたしのシュヌーデル・プーデル"とかって言うのさ。"可愛い人"みたいな意味だよ。僕らも最初は気づかなかったんだけど、その店へ行くようになって1、2週間経つと、誰かが教えてくれたんだ——全部男だよって。僕らに目をつけたのが何人かいてね、ほら僕らルックスのいい若者だったから。それでバーニーが来ただろ、彼もリバプールの若造だから、"よし行こうぜ——おい、あれ見ろよ、あの女最高じゃないか！"。僕らはもうほんとのことを知ってたんだけど、"ああ、俺、あの女とやったぜ、いい女だよ"とか言って。翌日彼がやって来た。"まいったよ、あそこに手入れたら出っ張りがありやがったぜ"。みんな笑い転げたよ。

そういうことを経験して大人になっていった。かなり慣れてきてたね。金はすべて酒につぎ込み、いつでも楽しく過ごしてた。

ジョージ　レーバーバーンとセント・パウリ、あのあたりは全体がソーホーみたいな感じだったね。何杯かビールを飲んで明るい気分になって、友だちとでかい声で話しても、別に目立つこともない。その場すべてが騒ぎ狂ってるようなものだった。ロバが女とセックスするとかいう——見たことはないよ、そういう話だ——そんな店もあったし、女性の泥んこプロレスとかオカマの店とか、何でもあった。僕らはちょっと酔っ払いながらロックン・ロールをやってただけ。まあ時にはちょっとうるさかったかもしれない。でも巷に伝わってる話とは違うよ。伝記ってのは、そういうのに飾りをつけて、やたらと水増ししてあるんだ。

ール　毎晩10時になると見回りがある。ドイツ人の警官がステージに上がってこう告るんだ。"22時になりました、18歳未満の人は店を出てください。Ausweiskontrolle（アウスヴァイスコントローレ）
限のこと）を行ないます"。そのうち聞き飽きちゃって、僕らもジョークのアナウンスをだした。僕はちょっとドイツ語を知ってたんだ。ジョージと僕は学校で習ってたからのみんなはフランス語をやってたけど、僕らはドイツ語とスペイン語を習ってた）。そすごく役に立って、そういう馬鹿なこともやれたんだよ。最後の頃は熱気ムンムンのブが満員になって、みんな僕らを気に入ってくれてた。

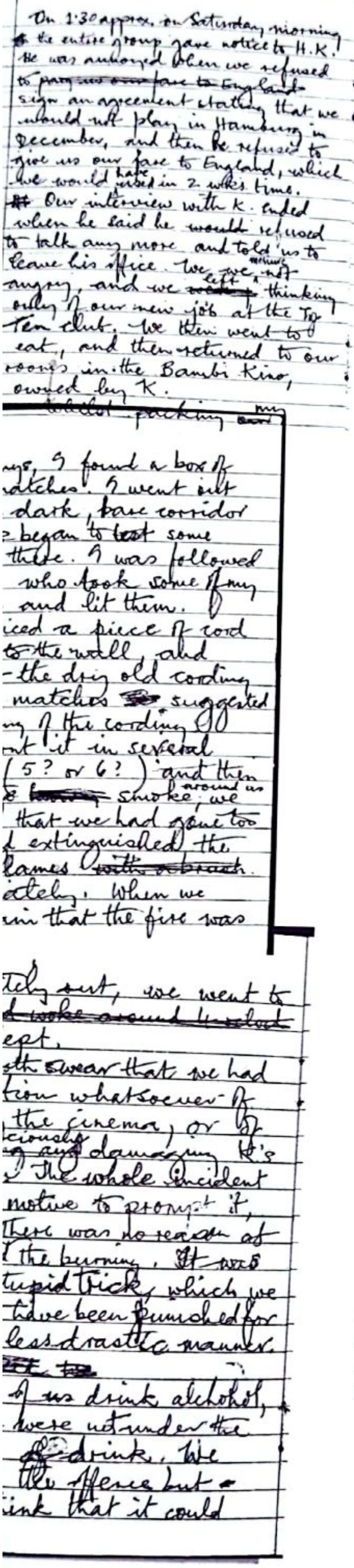
ージ　それがすむまで僕らはステージでじっと待ってた。コントローレになるとクラブの照明が全部ついて、バンドは演奏を止めなきゃならない。警官がテーブルをまわってIDを確認するんだよ。

ポール　彼らのことを僕らは"ゲシュタポ"って呼んでた——いかにもそれらしいドイツの制服を着た男たちが、若い客のパスポートを見てまわるんだよ。あんなの初めてだった。リバプールならパブにいるところをつかまらないかぎりどこへ行っても大丈夫だし、誰かがまわってきてパスポート見せろだなんてありえない。ああいうのも戦争の名残りなんだろうね。

ジョージ　奴らが実際何を言ってるのかわかるまで2カ月かかったね。"18歳未満の人間は全員出て行け"って言ってたんだ。僕はまだ17だったから、バンドに混じっていて不安になった。そしてついに誰かが気づいたんだ。どうしてだかわからないんだけど。僕らは就労許可もビザも持ってなかったし、僕は未成年だしっていうんで、そのうち僕らに近づいてきたんだよ。そしてある日警察がやって来て、僕を追い出した。

僕はイギリスに帰らなきゃならなかった。それがちょうど大事な時期だったんだよ。というのは、ちょうど別のクラブから仕事の話をもらったばかりだったんだ。トップ・テンという、ずっとクールなクラブだよ。カイザーケラーが休みの時に僕らはよくそこへ行って、シェリダンなんかのステージを見てた。それ以前にもマネージャーがブルーノ・コシュミダーに内緒で声をかけてきて、すでに何度か店に出てたんだ。すごく雰囲気のいいクラブでね。音響システムもすばらしいし、店の感じもずっといいし、もらう金もこっちの方がちょっと上だしね。

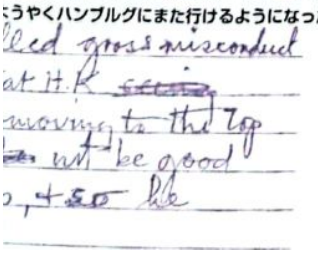
CamScannerでスキャン


On 1:30 approx. on Saturday morning
the entire group gave notice to H.K.
He was annoyed when we refused
to ~~pay our own fare to England~~
sign an agreement stating that we
would not play in Hamburg in
December, and then he refused to
give us our fare to England, which
we would have used in 2 wks time.
Our interview with K. ended
when he said he would refused
to talk any more and told us to
leave his office. We were angry, and we left, thinking
only of our new job at the Top
Ten club. We then went to
eat, and then returned to our
rooms in the Bambi Kino,
owned by K.
... packing my

..ngs, I found a box of
matches. I went out
dark, bare corridor
began to test some
these. I was followed
who took some of my
and lit them.
iced a piece of cord
to the wall, and
the dry old cording
matches suggested
ng of the cording
nt it in several
(5? or 6?) and then
smoke around us, we
that we had gone too
extinguished the
flames ~~with a brush~~
ately. When we
in that the fire was

tely out, we went to
~~d woke around 4 o'clock~~
ept.
th swear that we had
tion whatsoever of
the cinema, or of
iciously
g and damaging. It's
The whole incident
motive to prompt it,
There was no reason at
the burning. It was
tupid trick, which we
have been punished for
less drastic manner.
of us drink alcohol,
were not under the
drink. We
the offence but
ink that it could

て書いた手紙の下書き。古いノートの後ろの方に
うやくハンブルグにまた行けるようになったんだ。


lled gross misconduct
at H.K
moving to the Top
not be good
, + so he

カイザーケラーとおさらばしてトップ・テンへ行けるっていうんで、僕らはすごくやる気になってた――そういうところへ奴らがやって来て、僕を追い出したんだ。だから僕はひとりで本国へ向かい、みんなはあの素敵なクラブへ向かうことになった。

アストリットがハンブルク駅まで車で送ってくれた。たぶんスチュアートも一緒だったと思う。長い旅だったね、ひとりきりで列車に乗ってフーク・ファン・ホラントまで行くのは。そこから船に乗った。何年もかかる気がしたよ、それに僕はあんまり金を持ってなかった――これで足りますようにってずっと祈っていたよ。ハーウィッチからリバプール・ストリート駅まで行って、そこからタクシーでユーストンへ、それからさらに列車に乗り、やっとリバプールに着いた。今でも思い出すよ。ハンブルクで買ったアンプ、くたびれたスーツ・ケース、いろんなものが入った箱、服を入れた紙袋、それにギター。持ちきれないほど荷物をまわりに置いて列車の通路に立っていた。しかも列車には酔っ払った兵隊がたくさん乗ってたしね。やっとリバプールに着いて、タクシーで家に向かった――やっとのことでたどり着いた。家に着いた時は一文なしさ。帰ってくるまでに全部使い果たしてしまったんだ。

僕はひとり寂しくイギリスに戻った。ところが実はポールとピートも同じ頃に追い出されて、僕より先に戻ってたんだ。ブルーノはビートルズにクラブをやめられたくなかったらしいね。そこへたまたま火事があって、彼は警察を呼んだ。

ブルーノが自分の映画館に放火されたと主張して、ピートとポールはレーパーバーンの警察に引っ張られ、数時間後にイギリスへ追い返された。強制追放だよ。その後、ひとりで残っても意味ないって、ジョンも帰ってきた。スチュアートはまだ残ってた。彼はもうアストリットと真剣につきあう気でいたからね。よかった、僕は救われたよ。ああいうことにならなかったら、バンドが向こうに残ってがんばってるのに自分だけリバプールに閉じ込められてるって、うんざりしてしまっただろう。

スチュアート・サトクリフ　先週でカイザーケラーの仕事は終わりになった。警察が入ってきたんだよ、僕らが就労許可を持ってなかったから。ポールとドラマーのピートは昨日国外退去になって、手錠をはめられて空港へ連れて行かれた。今回のことは、僕は何も知らなかった。放火の容疑をかけられたけど――みんなが寝ている間にバンビ・キノに火をつけたっていうんだ。クラブへ行ったら、ハンブルク中の警察が僕を捜してるって聞かされた。残りのメンバーはみんなもうつかまってるって。それで僕はアストリットと腕を組んで、にこやかに出頭した。この時はまだ容疑については知らなかったんだ。警察へ行くと、持ち物全部、サングラスまで取られて、独房へ連れて行かれた。そこで飲み物も食べ物もなしで6時間、扉がしっかり閉められた中で木のベンチに座ってた。それから火事のことは何も知らないってドイツ語で書かれた供述書にサインして、釈放された。翌日、ポールとピートは国外退去になって飛行機で本国へ送還され、ジョンと僕は無職の一文なしになった。僕らは3ヵ月ドイツで不法労働をしてたわけで、すでに国外追放の対象になってるから、仕事は警察から禁止されてたんだ。それでその次の日にジョンも帰った。僕は1月までアストリットの家にいる。今、彼女は、この数カ月に僕がためこんだゴミと汚れを全部きれいにしてくれてるんだ。ああ、僕はほんとに心から彼女を愛している。1960年

CamScannerでスキャン

みんな追い出されて、ひとりハンブルクに残された僕は、他のミュージシャンと組
楽してた。あんな若い頃に、ひとりきりで外国に取り残されるんだ、そりゃもう痛烈
だよ。僕らは金も使い果たしてた。余分な金なんかないし、食費もなしでハンブ
ルに込められるなんて冗談じゃない。しかもクリスマス時期と来てるんだから。
帰る時も救われない気分だった。自分が哀れになったよ。リバプールに戻るまで
腹ペコだったんだ。盗られるんじゃないかとびくびくしながら、アンプを背中
てさ。まだ支払いもすんでなかったんだ。絶対イギリスまで行き着けないと思

ってからも、僕はすっかり鬱になっちゃって何週間かみんなに連絡さえしなか
18、19歳の頃の1ヵ月といったら長いよ。みんなが何してるのかも知らず、僕
じこもって、こんなこと続けていく価値があるのかと考えていた。"これが僕の
ことか?"って。僕はいつも詩人や画家まがいのことやってたからね。"これで
ナイトクラブに出演して、いかがわしい場所をうろついて、あげくに国外退
、クラブの変な連中とつきあって"といろいろ考えた。今ならデカダンスって
だろうけど、当時はただのハンブルクであり、バンドが出てるクラブであり、ス
ラブであるにすぎなかった。これを続けていくべきなんだろうかって真剣に
そのうちジョージとポールに会ったら怒ってるんだ。ふたりは"もう仕事した
ゃないか"って思ってたから。でも僕はひたすら引きこもってた。僕の中には
分と、パフォーマンスで跳ねまわる人間とが同居してるのさ。どこが限界か
ことは、僕の生き残りに関わってくるんだよ。
しばらくすると、リバプールのビート・シーンでひと儲けさせてもらうべきか
たんだ。まわりがすごく活気づいてきてたし、僕らの経験を無駄にするの
い気がしてね。ハンブルクで毎晩あれだけの時間演奏してたんだから。

ブルクのあとはちょっとしぼんじゃったね。全員、休みが必要だったんだ。
とを話し合おうってみんなから電話が来るものと思ってたんだけど、「西部
」、まるで音沙汰なしだった。お互い電話もしなかった。僕はがっかりし
惑ったね。これから続いていくんだろうか、それともこれで終わりなんだ

ー&コギンズというコイル工場で働き始めた。父から仕事につけって言わ
最初は"仕事はあるよ、僕はバンドをやってるんだ"って言ったんだけど、
バンドの活動は何もしてないから、"ダメだ、ちゃんとした仕事を見つけ
ちゃってね。家から追い出されたようなもんだよ。"仕事につかないなら
てさ。それで僕は職業安定所に出かけて、"仕事ありませんか? 何でも
ださい"って言ったのさ。"そこの束の上にあるやつ、何だか知らないけ
す"。そうやって最初に見つけた仕事が、マッシー&コギンズの庭掃除
いやと思ってね。
人事部長が言うんだ、"君はマネージメントの方が向いてる、庭掃除をさ
いかない"。それで、ゆくゆくはマネージメントに配属するってことで、工
わり始めた。もちろん僕は工場の仕事には不向きだった——コイル巻
手じゃなかったんだよ。
、僕が掃除してるはずだった庭へジョンとジョージが現れて、キャバー
て言うんだ。でも僕は言った、"いやだ。僕はここで安定した仕事を
ポンド14シリングだ。研修も受けてるし、これ以上は望めないくらい、
よ"。僕は本気でそう言ったんだ。でもそのうち——父の戒めの言葉
んだけど——考えが変わってきて、"かまうもんか。こんなとこ耐えら
乗り越えて、それから二度とマッシー&コギンズに行くことはなかっ
れば、かなり賢い選択だったね。

言い続けてた。"父親にまともにぶつかってみろよ、「失せろ」って言
れやしないさ。でもおまえの方は殺すこともできるんだぜ、向こうは
って。ポールの父親は彼のことを子ども扱いしてた。髪を切ってや
を着るべきかって指図してさ。でもポールはいつでも言うことを聞

いてた。父親から仕事しろって言われれば
グループを抜け、"ちゃんとした仕事をすべきな
んだ"とか言ってトラック乗って働きだしてさ。信
じられなかったよ。それで僕は電話で彼に言ったん
だ。"来ないんだったら、もうこれでお別れだ"って。
つまり彼は僕か父親か、どっちかを選ばなきゃなら
なかった。それで最後には僕をとったのさ。[illegible]

ジョージ　ギグの話が来たんだ。アラン・ウィリアムズがボブ・ウーラー……
ホールの司会をしてる男を紹介してくれて、ある晩僕らは彼のオーディションを……
それで彼はポスターを作った。"ハンブルクから直撃、ビートルズ……"。僕ら……
見えたんじゃないかな。革ジャンなんか着て。他のバンドとは全然違ってたから……
目も変わってたし、演奏も違ってた。爆弾を落としたのさ。

ポール　僕らは全員黒ずくめだった。ハンブルク仕込みさ。リバプールの……
な言ってたよ。"ドイツの人なの?"とか、"ハンブルク出身って出てたか"とか。

ジョン　いきなりの大人気だ。いいかい、客の70%は僕らがドイツのすごいグループ……
と思ってたんだぜ。でもこっちはそんなのどうでもよかった。リバプールの……
らがリバプールの人間だって知らない。ハンブルク出身だと思い込んでた。"すごい、
なんて英語がうまいんだ!"ってさ。当たり前だろ、イギリス人なんだから。
　僕らが殻を破って思いっきりやれるようになったのはあの晩からだな。……
受けたんだ。それから、自分たちはほんとにいいバンドだって思い始めた。リバプー……
に戻って初めて、僕らは違いに気づいたんだよ。他のみんながいまだに……
ードなんかやってる時に、自分たちがどれだけ先を行ってたか。[illegible]

ポール　**ハンブルクで僕らはボロボロになった。**
イギリスに戻って来た時、父親は僕が
死にかけてると思ったらしいよ。
骸骨みたいだったからね。
僕はそんなの気づかずにいた。
ずっと楽しいことばかりだったからね!

ジョン
僕らはずっと
アンチ・ジャズだった。
あんなのろくでもない
音楽だと僕は思うね
――ロックン・ロールより
くだらないや――
マークス&スペンサーの
セーター着た学生が
夢中になってるだけだ。

ポール　僕らはキャバーンでギグをやるようになった。キャバーンは汗の匂いが染みついたような、湿っぽくて、暗くて、やかましくて、最高におもしろいところだった。いつもながら、初めのうちはあんまり客が入らなかったけど、だんだん噂が広まっていった。僕らはいつだって客を楽しませることができたんだ。それがあとあと強みになったね、ライブでもレコードでも――僕らはいつでも、何かしら奥の手を持ってたんだ。

ョージ　ずっとランチ・タイムに出てたんだ。起きてキャバーンへ行き、昼から2時頃ま演奏する。すごく気楽な感じだったよ。紅茶とサンドウィッチと煙草を持ってステージ上がり、何曲かやってちょっとジョークを入れる。ブライアン・エプスタインだってそういのを気に入ってたんだけどね、それでも彼は僕らをそこから引き離して、もっと大勢客を相手にさせようとしたんだ。

ン　あの古き良きキャバーン時代は、半分がアドリブだった。コメディみたいなもん、メチャクチャやって客席に飛び込んで、何でもやったね。1964年

僕らチーズ・ロールと煙草を持ってステージに上がった。ここで何かが起きようるって実感があったよ。アンプのヒューズがしょっちゅう飛んで、そうすると僕らはやめ、修理がすむまでサンプレストのパンのコマーシャル・ソングを歌うんだ。コったよ――僕はシャドウズのジェット・ハリスの真似をやった。彼はあそこに出て彼、一度ステージから落ちたのさ。それで僕も落っこちて見せる――最高だっ

ニールは僕らの個人的なロード・マネージャーだった。彼は最初からいたんだールやジョージと同じ学校だったんだ。1964年

スピノール　ハンブルクから戻ってきて、ビートルズはキャバーンとかのクラブ移動手段が必要になった。初めのうちはタクシーを使ってたんだけど、稼いタクシー代になっちゃうもんだから。一方、僕はバンを持っていて、金が必そこでピート(彼とは友だちで、僕はその頃彼の家に居候していた)が、僕ができると他のメンバーに話してくれたんだ。ひと晩1ポンドもらえた。悪くな、週7ポンドになったからね。その頃試用期間中の会計士としてもらっていド50シリングだった。
なをバンで送っていくと家に帰って通信教育をやり、しばらくして彼らを迎こからだんだん話が大きくなっていったんだ。まもなく僕は経理の仕事のって――職場に行かなくてもいいやって気になったんだ――それでいつにいるようになった。楽しかったね、あれがリバプールにおけるロックの幕開けだったんだ。すごい活気にあふれてたよ。
ールに会ったのは11歳くらいだったけど、友だちとして知り合ったのはだ。同じグラマー・スクールで、1年の時クラスが一緒だったけど、それ進んでしまったからね。ジョージも同じ学校だったけど、1学年下で――に煙草吸ったよ、運動場の防空壕の裏に隠れてね。
記憶は、リバプールのペニー・レインでのことだ。確かみんなでポールだったと思う。僕が15歳の時だ。当時はみんなスキッフルに夢中で、っては楽器をやってた――確かバンドは組んでいなかったはずだ。あも覚えてるよ。ペニー・レインのバス停で、バスが停まった時、どこか身体に腕をまわして、話しかけながら降りてきた――そしてそのままんだ。
つが戻って来て、誰かが僕に訊いたんだよ。"さっきのは誰だい？"は初めて見たよ"。僕のジョンに対する最初の印象ってのは、"会に、なんで手を貸したりするんだ？"。それがジョン・レノンって奴だった。

ジョージ　学校の防空壕の裏手に秘密の喫煙所ができてたのさ。そこでニールと出会った――休み時間に煙草吸ってたんだよ。学校に行ってる間はずっと会ってた。卒業する頃には、彼はピート・ベストの家に住んでたんだ。地下にカスバ・クラブがある家だよ。ニールは会計士の仕事をしてて、小さなバンを持っててね。それで車が必要になった時、ふと思いついたんだ。ひょっとしてニールはちょっと小遣い稼ぎをしたいんじゃないかって――あの頃はたぶん、せいぜい5シリングだったと思うけど。機材を彼のバンに積み込んで、ギグをやる店まで彼が送ってくれた。そのまんまずっと続いたわけ。それがいつの間にかロード・マネージャーになったのさ。

ニール・アスピノール　彼らは当時リバプールとその近辺でかなりの数のギグをこなしていた。ダンス・ホールやタウン・ホールの他にも、バンドが出られるクラブはたくさんあった。キャバーンやアイアン・ドア、ブルー・エンジェルみたいなところ。でもほとんどがジャズ・クラブだったんだよね。そういう店は絶対ビートルズを出してくれなかった。だから無理やり入り込んでいくしかなかったんだ。キャバーンも、ケニー・ボールやアッカー・ビルクみたいな人たちが中心だったな。ロックン・ロール・バンドが出してもらえるとしても、せいぜい休憩時間、メイン・バンドが出る前だった。メインはジャズ・バンドだよ。

ジョン　ジャズなんて無駄さ、何の役にも立たない。どれも同じだし、あいつらのやることといったらビールをガブガブ飲むだけだ。ああいうクラブでやらせてくれないから、僕ら頭に来てたんだ。1967年

ニール・アスピノール　ギグが終わるとよく飲みに行った――たいていブルー・エンジェルかな――それで今の流行りとかをチェックしながらたむろしてたんだ。みんな知り合いなんだよ。バンドが違っていても、同じ学校へ行ってた同士だったりして、ちょっとした仲間意識があった。同時にライバル意識もかなりあったね。
　あの頃みんなにしょっちゅう訊かれたよ、"今何やってるんだ？"。その頃はもう会計士もやめてたし、会計士のふりをするのもやめてたから、"このバンドの運転手だよ"って答えた。するとみんな、"ああ、それはわかってる――でも本業は？"。その2年後、同じ人間が言ったよ。"ニール、おまえはラッキーな奴だな"。

リンゴ　僕らのバンドもリバプールに戻ってた。仕事はなかなか見つからないし、あんまり稼げなかったね。僕はまだロリーたちといっしょにやってて、ビートルズはビートルズでやってた。時々同じとこでギグをやる時もあって、そのうち僕は彼らを見に行くようになった。彼らのプレイが好きだったのさ。曲も好きだし、雰囲気も最高だったし、それに僕がいるバンドよりいいバンドだってわかってた。

ジョージ　僕らはダンス・ホールでも出番が増えてきた。そういうところでは必ず複数のグループが出ていてね、5つくらいかな。だから誰かのあとでやるんだけど、そのうち僕らにどんどん人気が出てきてた。ちょっとラフな感じが受けたんだろう。それに僕らはドイツでたっぷり経験を積んでたしね。客はみんな信じられないような顔してたよ。どのグループも"ダン・ダ・ダン"って感じだったのに、僕らは出てくるなり、飛び跳ねて暴れまわる。革ジャンのワイルドな連中、って感じでね。僕らが他のグループよりずっとうまくなってるって気づくまでしばらくかかった。だけど、どこへ行っても客が集まるのがわかってきたんだよ。みんな僕らを追っかけてくるんだ。ダンスに来るんじゃなくて、僕らを見に来てるんだ。
　ギンギンにロックやってて、小さなクラブで人気が出始めたあの頃は、まだビートルズの騒ぎなんてなくてね、楽しかったよ。あちこちのああした古いナイト・クラブでやるのが、とにかくおもしろかった。僕らはちっぽけだけどしっかりまとまってて、いいバンド

が、とにかくおもしろかった。僕らはちっぽけだけどしっかりまとまってていいバンドだったと思う。

ジョン　ステージをやる大きな理由のひとつは、女の子を見つける手っ取り早い方法だってこと。まだリバプールにいた頃、エルヴィスなんかが出てる映画を見にいくと、みんな彼がスクリーンに現れるのを待ってる(僕も待ってたけどね)。そして出てくればいっせいに声をあげるんだ。"こりゃいい商売だな"って思ったよ。実際、たいていのミュージシャンはそれが理由でステージやってるのさ。どんなパフォーマーにとってもりっぱな動機だ。
　ほんとの初期、ダンス・ホールでやってた頃も、今ならグルーピーって呼ばれるようなタイプの女の子たちが来てた。夜の終わりに"お役目"を果たしてくれる子たちさ。ほとんどの子はボーイフレンドなんかと一緒に家に帰るけど、中にはどんなパフォーマーでも追っかけるグループがいる。コメディアンだろうとガラスを食べる男だろうと誰でもいいのさ。ステージに出てさえいれば。1975年

ポール　もちろん楽しいことばかりじゃなかったよ。辛い仕事が多かった。いろんなところでやったけど、みんなペニー銅貨を投げてくるんだ。彼らの気をそらそうと思って、僕ら演奏を止めてコインを全部拾い始めた。"これでわかるだろう、もう投げてこないさ"と思ってね。ポケットがコインでいっぱいになったよ。

ジョン　あるホールのことが記憶に残っているよ。すごくたくさん人が入ってたから、こりゃまそのマネージャーが来てるに違いない。これでもっと仕事が入るぞって言ってたのさ。ところが僕らは無知だったんだ。実はホール側が用心棒をたくさんつけて、他のプロモーターを近づけないようにしてただけ。だから僕らに誰ひとり寄ってこなかった。そこのホールの奴だけが来て、僕らを気に入ったからひと晩8ポンドでしばらく続けて出してやるって言ってね。当時僕らがもらってたより数ポンド高い額だったから、それで喜びはしたんだけど。1967年

ージ　リバプールのクラブでもしょっちゅうケンカがあったけど、僕らはもうハンブルクを経験してたし、その頃から・ホールのツアーを始めてた。
　ハンブルトン・ホールはケンカで有名なところだった。そこでギグをやった時に、「ハリー・ガリー」を演奏して消火器を引っ張りだす騒ぎになってね。曲が終わるとみんな血だらけの泡だらけさ。
　僕らがハンブルクから戻ってきたのは1960年で、次にやりだしたのが1961年の4月だった。2回目にハンブルクへ行った時は僕も18になってたから、もう大丈夫だった。ポールとピートが国外追放になったしね。なんとか収めることができた。ピーター・エクスタインが解決したんだよ。彼はトップ・テン・クラブのオーナーで、そこに出演することになってた。彼がそれだけ骨を折ったってことは、つまりビートルズをそれだけ見込んでたんだよ。僕らもやらせてもらえるのが嬉しかった。トップ・テンに出演しながら、クラブの上に寝泊りした。ベッドが5つ置かれた狭くてほんとに汚ならしい部屋。隣にムティって呼ばれてる年取った小柄な女の人がいて、それがすごく臭いんだ。トイレ掃除をしてたけど、そこのトイレはほんとひどいもんだった。

のトイレには必ず係の女性がいるんだよ。そのトイレ係のムティと仲良くなった。トイレ行くと皿に10ペニヒ置くことになってる。誰かがムティがトイレからバケツを持って怒鳴りながら追っ払いに掃除しろって命令するんだ。だから行きたくなる奴はそんなにいなかったよ。
時のガールフレンドが泊まれるようにハウスボ。ある時、女の子たち、シンシアとドット・ロ

……ンがまるごとになって、場所が必要だったんだよ。[illegible]ウボートが見つかった。

リンゴ　トップ・テン・クラブには[illegible]なかった。それに[illegible]だぜ！　きつかったよ。だけど20歳くらいだと何も気にならないもんだ。[illegible]た。あれで目から鱗が落ちたね。これが故郷を離れるってことだ[illegible]ってことなんだって。ハンブルクはすばらしかった。20歳の若者なら[illegible]ドだと思うよ。僕にとってハンブルクは[illegible]みたいなもんだった。

ポール　この時のハンブルクで"ビートル・カット"をやったんだ。みんな髪を[illegible]め、"さあどうだ、僕らのロックン・ロールは最高だよ"って。

ジョージ　アストリットとクラウスの影響はすごく大きかった。今でも覚えてるよ。みんなでプールへ行った時、僕が水から上がったら髪が全部前に垂れちゃったんだ。[illegible]らが"直すな、そのままがいい"って言うんだよ。どっちみちワセリンがなかったしさ。こいつらはクールだ――こいつらがいいって言うなら、このままに[illegible]と思ったんだ。彼らがそう保証してくれるんだからね。乾くと自然と前に垂れてきてスタイルになった。それがやがて"ビートル・カット"になるんだよ。
　それまではロッカーっぽく、髪は後ろに流してた。でもこれが大変なんだ。洗うとすぐ前に落ちてきちゃうからね(ビートル・カットというのは自然な流れだったんだよ！)。いつもワセリンをたっぷりつけて、髪を固めてなきゃいけなかった。
　僕はジョンの髪を一度切ってあげたことがある。それで彼にも僕の髪を切ってもらった。遊びでね。あれ一度きりだったけど、彼の切り方より僕の方がうまかったと思うな……。

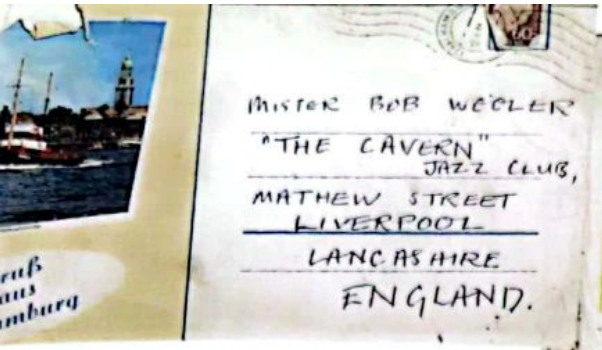
ジョン　あれで人の髪を切るのはやめた。[illegible]

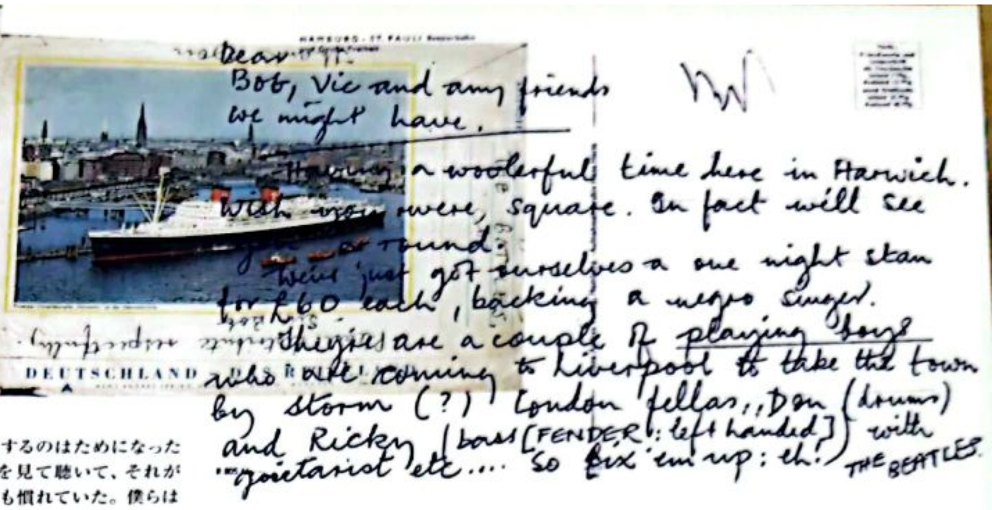
ジョージ　それからレザー・パンツを見て"ワオ、これは買わなきゃ！"と思ったんだ。それでアストリットに[illegible]へ連れて行ってもらって、"チバレーダー"を作った[illegible]あいうイカしたパンツをね。ハンブルクに[illegible]人のカウボーイ・ブーツを置いてる店があるのも[illegible]知ってた。あとはどう金を工面するかだった。[illegible]"払い"で支払ってたんじゃなかったかな。それにみんな同じ、小っちゃなピンクの帽子を持ってたな。これはリバプールで買ったやつで、"ボロ帽子"って呼んでた。それで僕らのバンドのユニフォームができた。カウボーイ・ブーツにボロ帽子に、黒のレザー・スーツさ。

ジョン　2度目に行った時は前よりちょっと金があったから、レザー・パンツを買った。ジーン・ビンセントが4人いるみたいだったね――ただ、彼よりちょっと若いけど。[illegible]

ジョージ　トップ・テン・クラブには、ビンソン・エコーっていうマイク・システムがあった。銀と金の2トーン・カラーで、中に小さいグランディグのテープ・マシンが入っていて、小さな緑のライトをまわしてボリュームを調節する。すごくいいエコーがかかるんだ――これを使うと、ジーン・ビンセントが「ビー・バップ・ア・ルーラ」を歌ってるみたいに聞こえる。
　トップ・テンではいろんな人のバックをやった。トニー・シェリダンもいたよ――僕らが初めて行った時からいたんだけど、今度はレギュラーだった。あのクラブでずっと仕事ができるようになってたんで、僕らはたいてい彼のバックを務めてた。

リンゴ　トニー・シェリダンとやるのは最高だったよ。僕は1962年に、あそこでロイ・ヤングと組んで彼のバックをやった。[illegible]ー・ウォーターズがベースでね。何もかも、すごくエキサイティングだったよ。トニーはすぐ爆発する奴で、クラブの誰かが彼の恋人に話しかけたりしようもんなら、殴る蹴るでフロア中暴れまわった。その間、僕らはかまわず演奏を続けてる。そのうち彼が戻ってくるんだ。ケンカに負けた時には血だらけでね。でもすごくいいプレイヤーだったよ。





ジョージ　トニー・シェリダンにはいいところも悪いところもあった。いいところは、すごくいいシンガーであり、いいギター・プレイヤーだったということ。彼と一緒に演奏するのはためになったよ、僕らはまだ勉強してる段階だったからね——たくさんバンドを見て聴いて、それが役に立った。彼は僕らより年も上だったから、その分この業界にも慣れていた。僕らはまだ入り込んだばかりで、元気もよかったけど、うぶでもあった。そういう点でシェリダンがいてくれたのはありがたかったんだけど、反面、彼にはものすごく困ったところもあってね。彼はイギリスを逃げてきたんだよ——何かトラブルがあったらしい——それにいつでもすぐケンカを始めるんだ。ケンカの時、割れた瓶で指の腱を切っちゃって——幸いギターを弾くのに支障はなかったけど。あれからはギター・ピックを使う時、怪我した指がぴんと立ってた。

トップ・テン・クラブでは毎週火曜日の夜にアマチュア・ショーをやっててね。客がステージに出てきて歌うんだ。僕らはそのバックをやらなきゃいけなかった。しばらくやってたんだけど、いつも僕らがからかうもんだから、みんな怒っていたね。

あるサックス・プレイヤーが出た時のことを覚えてる。あの頃の僕らはまだあんまり曲を知らなくて、わかるのはそれぞれのキーくらいだった。そいつがサックスを吹き始め、僕らはバックで演奏してたんだけど、途中でちょっとからかってやろうと思った。キーを変えよう、Dにしようとか言って。それで誰かが合図して、みんなでいきなり違うキーにしちゃうんだ。何事もないようなふりしてね。その男は何がどうなってるんだかわからないまま、何とかついてこようとする。すると僕らは"B♭"とか囁いて、またキーを変えてしまう。見事に振りまわしてたね、そいつはどのキーだってムキになって僕らに追いつこうとしてた。

ドイツ人のグループが出てきて、リトル・リチャードやチャック・ベリーの歌をやることも
った。でも歌詞がわかってないんだよ。音としては知ってるんだけど、意味はちゃん
わかってない。「トゥッティ・フルッティ」みたいな歌だと特にね。それにドイツ語のアク
ントはあまりロックン・ロールに向いてないもんだから、もうおかしくてたまらなかった。
高に笑えた話はね、あの頃僕ら、まだ当時の流行りの曲を演奏してたんだけど、そ
中にジョニー・キッド&パイレーツの「シェイキン・オール・オーバー」があったんだ。
ivers down my backbone, shaking all over……"ってところが、ドイツ人は
ick ihn nach Hannover"だと思ってたんだ——"彼をハノーバーに送れ"ってこと
英語で言う"彼をコベントリーに送れ"と同じ意味で、つまり"村八分"にしろってこ

らはバンドとして形ができてきていたし、曲もたくさん覚えて、どの曲でも即興をどん
れるようになった。自信もちょっぴりついてきてた。でも僕らは常に次を目指して
だよ、レコーディングさえできればってずっと思ってた。トップ・テン・クラブでや
頃の僕らにとって、それが最大の目標だったんだ。だから"ベルト・ケンプフ
来てるぞ"って聞いて、"誰だいそれ"——"ベルト・ケンプフェルトだよ、
ーランド・バイ・ナイト」の。レコード・プロデューサーで、タレントを探
てるんだ"——"しまった、じゃ、しっかりやらないと"。

トニー・シェリダンと「マイ・ボニー」のレコーディングを
ンド・リーダーでプロデューサーのベルト・ケンプフ
ころでね。実際には"トニー・シェリダンとビー

ト・ブラザーズ"だった。僕らの名前が気に入ってもらえなくて、"ビート・ブラザーズに変
えてくれ。その方がドイツのオーディエンスには通じやすい"って言われたんだ。僕らは
反対しなかった——レコードだからね。

ジョン　あのオファーが来た時は、こんなの楽なもんだって思ったよ。ドイツで出てるレ
コードはクズばかりだ。僕らの方がいいものができるに決まってるってね。それが、僕ら
で5曲やったんだけど、気に入ってもらえなかった。「マイ・ボニー」みたいなやつの方が
好まれたんだ。1967年　トニー・シェリダンが歌ってて、僕らはバックでがんがんやってるだ
け。ひどいもんだ。あれなら誰がやったって同じじゃないか。1963年

ジョージ　「エイント・イット・スウィート」もレコーディングしたんだよ。ちょっとがっかりし
たね、僕らは自分たちがレコード契約を結べるものだと思っていたんだ。「エイント・イッ
ト・スウィート」と、シェリダン抜きでインストゥルメンタルの「クライ・フォー・ア・シャドウ」
をやった。でもレコードには僕らの名前も出してもらえなかった。その後僕らが有名に
なったら、"ビートルズ・ウィズ・トニー・シェリダン"としてそのレコードが出たよ。まったく
情けなくなるね。最初出た時は僕ら"ビート・ブラザーズ"だったんだ。

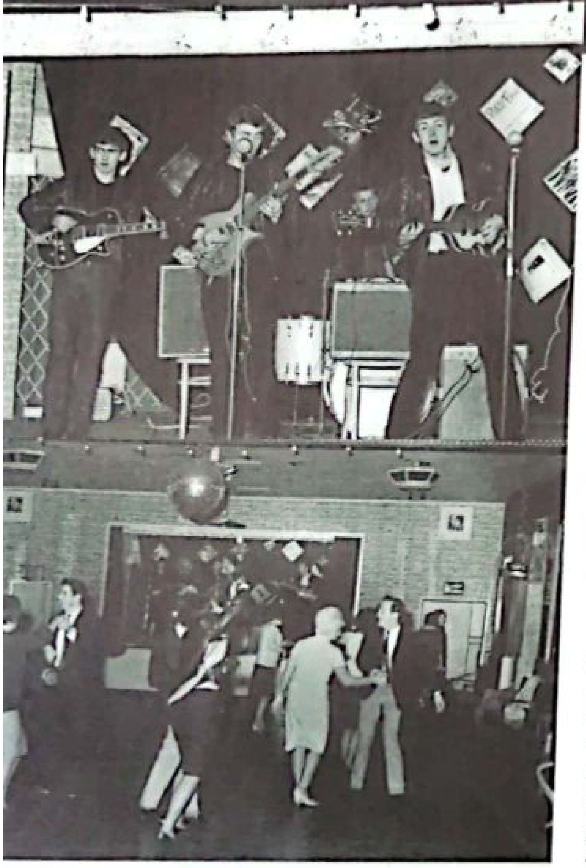
ルー・ウォルターズともレコードを作った。彼はロリー・ストームのバンドでベースをや
ってたんだけど、自分ではシンガーのつもりでいたんだよ。それで自分で金を出してレコ
ードを作った。僕らがリバプールで「ザットル・ビー・ザ・デイ」をやったみたいにね。

ジョン　ジーン・ビンセントの「エイント・シー・スウィート」
は、高音ですごくやわらかい。僕もそういう感じで
やっていたんだけど、ドイツ人は"もっともっとハ
ードに"って言うんだ——ドイツ人はみんな、ち
ょっと行進曲っぽいのが好きなのさ——それ
で結局、かなりハードなバージョンになった。
1974年

リンゴ　ハンブルクでロリーとレコー
ディングしたよ。だからドイツのどこ
かにすばらしいビニール盤がある
はずだ。僕も1枚ほしいんだけ
ど。僕らは「フィーバー」と、
あと1曲やった。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



ニール・アスピノール　12月にオールダーショットへ行った。南部で初めてのギグだ。まだあっちではそんなに人気がなかったのかな――18人しか客が来なかった！

ジョン　僕らはいいライブ・バンドだった。全体としてはすごく楽しい思い出だよ。どこに向かってるのか見当もつかないままに一生懸命やってたね。だけどその当時は楽しいなんて思えなかった。仕事があるのかないのかってだけさ。今振り返れば、なんていい時代だったんだろうとつくづく思うね。その渦中にいる時は、"まったく、夜6時間も演奏してるのに、もらえるのはたった2ドル。寝ないためにこんなドラッグまでやらなきゃいけない。どっかおかしいぜ"って思ってたけどね。1976年

僕らは何度も何度もステージをやったけど、同じことを繰り返したりはしなかった。時には15〜20人ものミュージシャンと一緒にプレイして、それまでどんなグループもやらなかったようなステージを見せたりもした。僕が言ってるのは有名になる前の話だよ。自然発生的なものの源、僕らがステージの上の動くロボットに変わる前の話さ。僕らは自然に、僕らがいいと思った方法で自分たちを表現していた。ところがそこへマネージャーが現れ、"ああしろ、こうしろ、あれをやれ、これをやれ"って言い始めた。そうやって、僕らは妥協しながら有名になったんだ。

ジョージ　スチュアートはアストリットと婚約して、このツアーが終われば、バンドを脱けてドイツに住むことに決めたんだ。エデュアルト・パオロッティがハンブルク・アート・カレッジで講師を務めることになったからね。もともとスチュは音楽にはそれほど打ち込んでいなかったよ。僕らは彼に残ってほしかったけど。彼はルックスもすごくいいし、何とかやれるくらいまでにはなっていた。でも彼自身は、自分がミュージシャンになれるとは思えなかったんだろう。

"みんな、僕はバンドを脱けるよ"って彼は言った。"アストリットとハンブルクに残る"って。その時、僕は言ったんだ。"バンドに5人目の人間を入れないとすると、僕ら3人のうちで誰かがベースをやることになる。僕はやらないよ"。するとジョンも"僕もやらない"って言った。でも、ポールはベースやるのは嫌じゃなさそうだった。

トニー・シェリダンのトリオにいたベース・プレイヤーのコリン・ミランダーが、ヘフナーのバイオリン・ベースを持っててね。ほんとはあれ、ギブソンのベースの真似なんだけど。ポールは自分がベースをやるってことに決めると、コリンと同じやつを買いに行った。

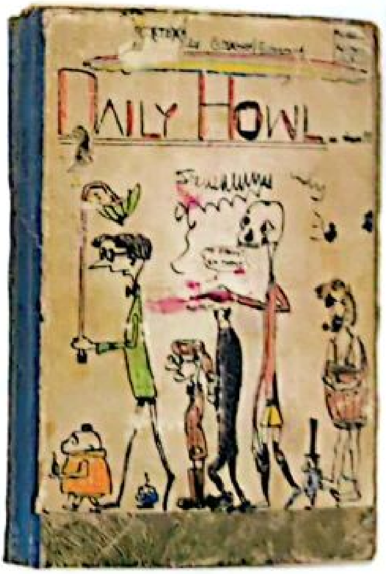
ポール　実際には僕がベースを押しつけられたんだよ。誰もベースをやりたがらなかった。だからスチュアートがやってたのさ。ほんとはみんなギタリストになりたかったんだ。初めは僕ら3人ともギター・プレイヤーだったんだよ。

ちょっとはっきりさせておきたいことがあるんだけどね、なんだか歴史的事実みたいにされちゃってるから――何年か前に、僕の冷酷な野心のせいでスチュがグループから追い出されたって誰かが言ったよね。確かにちょっとケンカはしたよ。でも実のところ、僕は自分たちをほんとにすばらしいバンドにしたかっただけさ。スチュは――すばらしいアーティストではあったけど――ちょっとだけブレーキになってたんだ。ちょっとだけね、ひどく足を引っ張るとかいうんじゃない。ただ、誰かが僕らを見に来てて、がんばらなきゃって時は、"ああ、スチュに台無しにされないといいけど"って思った。他のみんなは信頼できた。要するにそういうことさ。スチュアートはちょっと背を向けて、自分がどのキーを弾いてるかはっきり見えないようにしてた。みんなのキーとずれてるとまずいから。

スチュがアストリットと暮らすためにバンドを離れることになったから、僕は落ち着くまでの間ベースを貸してくれって頼んだんだ。彼のベースは僕には左右逆なんだけど――また彼が弾くことがあるかもしれないから、弦を張り替えることはできなかった。どっちみち、その頃は逆の弾き方もできるようになってたしね。ジョンもジョージも、絶対ギターの弦を逆にさせてくれなかったから――もとに戻すの面倒だろ。

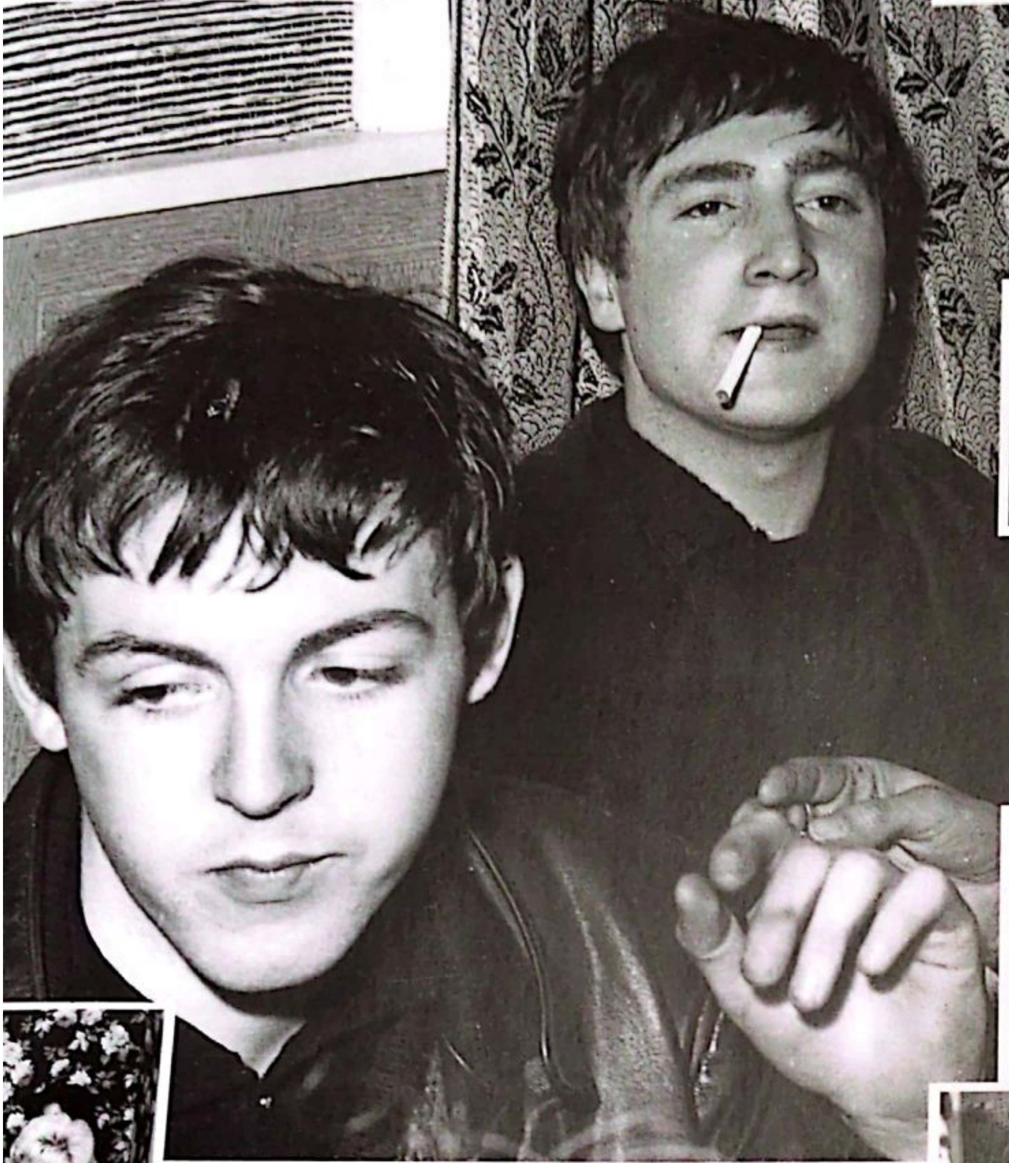
ジョージ　1961年の夏、僕らがドイツから戻ってすぐの頃、ビル・ハリーがリバプールで「マージー・ビート」という新聞を始めた。ジョンは彼と同じアート・カレッジに行ってた関係で、その新聞でおもしろいことを始めたんだ。

ジョンは文章も絵もお喋りも、生まれついての素質があった――特に笑える類のやつ。彼はクオリー・バンクに行ってた頃、「デイリー・ハウル」という本を書いてた。すごく大きな、「ビーノ」（イギリスの子ども向け漫画雑誌）の1年分くらいありそうなやつだった。新聞みたいなもので、くだらないジョークや漫画が載ってて――子どもっぽいユーモアだけど、ほんとうまくて、絵も上手だった。彼はそういうことならすべて得意だったんだよ。



ジョン　僕は「マージー・ビート」に文章を書いていた。あそこに書いたものの一部が「イン・ヒズ・オウン・ライト」に入ってる。それに"ビートコーマー"ってやつを書いてたんだ。「デイリー・エクスプレス」の"ビーチコーマー"というコラムが好きだったから。ジョージと"燃えさかるパイに乗った男がやって来て……"ってのを書いたのもあの頃だ。あの頃からもう訊かれていたんだよ、"ビートルズって名前は、どこから思いついたんですか？"って。1972年

CamScannerでスキャン



ポール　ヴァイ・コールドウェルのところへはよく行ってたよ。短い間だったけど、僕はロリーの妹のアイリスとつきあってたことがある。彼女はダンサーでね。あんな時間に入れてくれるのはあの家くらいだった。ヴァイは夜更かしだったから。ほんと、僕らにとってはあそこが夜の溜まり場だったよ。お茶飲んでトランプやって、喋ってるだけだけどね。仲間が大勢集まってたよ。シーラ（今はシラ・ブラックだ）や彼女の友だちのパットとウィージャボードで占いなんかやったのを覚えてる。

ジョン "ギア"というのは、フランス語の "de rigueur"から来てるリバプールの表現だ。"最高にクール"みたいな意味だよ。

ジョン ビートルズがようやくどうにかなってきた頃、僕はすでに21か22だった。その頃からもう僕の中では"なあ、おまえもういい年だぞ"って声がしていた。レコードを出す前から僕は思ってたんだ、"年を取りすぎてる"って。僕は乗り遅れた。17歳じゃなきゃダメなんだ――アメリカのスターはたいてい若かったからね。みんな僕やリンゴよりずっと若かった。1974年

スチュアート・サトクリフ 夕べ聞いたんだ、ジョンとポールがふたりでプレイしにパリへ行ったって――言い換えれば、バンドは解散したってことだ! 僕には気狂い沙汰にしか思えない、信じられない……。1961年

ール ジョンの21歳の誕生日に一緒に旅行に行ったんだ。ジョンの家はすごいミドル・スでね。僕は感じ入っちゃったよ。他のメンバーは全員ワーキング・クラスの出だったね。僕らにすれば、ジョンは上流階級の人間だった。彼の親戚には教師とか歯医者、エジンバラのBBCに勤めている人までいた。皮肉なことに、彼自身はいつでも汚言葉をまき散らしてたし、「ワーキング・クラス・ヒーロー」なんて歌まで作った――で際の彼はワーキング・クラスなんかじゃなかったんだよ。ともあれ、ジョンは親戚のから誕生日のプレゼントとして100ポンドもらった。100ポンドも手に入れたんだ! 思らない幸運だ。僕らみんな信じられなかったよ。今だって、誰かが100ポンドくれは感激するね。そして僕は彼の相棒だった、それ以上言う必要ないだろ? "遊び"――"僕もってこと? 100ポンド持って? すごい!"。僕もそのお裾分けに預かさ。

ールがお祝いにハンバーガーを買ってくれたよ。
になってもそんなに嬉しくなかった。親戚の女性に"ここからは落ちる一方"っ、すごいショックだったのを覚えてる。肌が衰えてくるとかどうとか、そういうくと聞かされたよ。
はヒッチハイクでパリへ向かった。いや、ヒッチハイクするはずだったんだよ、と電車を使った――まったく怠け者でね。1963年 嫌になっちゃったんだ。宿ったんだけど、キャンセルしてさっさと先へ向かった。1967年

ヒッチハイクでスペインへ行こうと思った。僕はジョージと一緒にちょっとったことがあったから、これにはちょっと技が必要だって知ってたのさ。ばかりだったんだけど、何か小道具を使う奴ら(ユニオンジャックを身体にとか)は成功してた。それで僕はジョンに言ったのさ、"山高帽をかぶービズを取り込んでいたんだね。僕らはまだ革ジャンにスリム・パンツと―それが自慢だったから、女の子に会った場合を考えると手放せなかったら山高帽はすぐ取る。でも車に乗せてもらうためにはかぶる。山――馬車が止まる! ユーモアさ。この方法と列車を使って、僕らはパ

めてだった。ちょっと疲れたから、その晩は小さなホテルに泊まっチハイクするつもりだったんだよ。だけど当然ながら、ヒッチハイクをあまりに気持ちよくて、"もうちょっとこのままいよう"ってことになった。

それからまた、"スペインは遠いよ、苦労してそんなところまで行くことないよ"ってことになって、結局1週間ずっとパリにいた――ジョンが例の100ポンドで宿代を出してくれたよ。
毎日ホテルを出て何マイルも歩いた。パリではそれが普通だから。アベニュー・デ・グレのそばのバーでカッコつけて座ってね。今でも僕はあの時のたくさんの写真を持ってる。リンダのお気に入りのがあるんだ。僕が薄汚れたレインコートをケープみたいに着て、眼鏡を斜めにかけたジョンがズボンをずらして下着をちょっと覗かせてるっていう写真だよ。僕らほんと気取ってたね。"ほら、俺たちはカフェのイカすアーティストだ。これがパリの俺たちだ"みたいに、カメラの方を見てる。ほんと、そんな気分だったんだ。
モンマルトルにも行った。アーティストが集まることで有名だからね。それにフォリー・ベルジェール。で、僕らは、歩いてる奴らがみんな丈の短いレザー・ジャケットを着て、裾幅のすごく広いパンタロンを履いているのに気づいた。これこそファッションだ! イギリスに戻ったらこれであっと言わせてやろうって思ったね。そういうのが流行り始めてたんだ。膝まではぴったりしてて、そこからぱっと広がる。裾はきっと20インチ(約50センチ)近くあったね。僕らがはいてたスリム・パンツはせいぜい15か16インチ(約38から40センチ)くらいだった。15インチが一番理想なんだけど、これだとなかなか脚を通せない。だから16インチでも我慢した。そういうズボンを見て、僕ら訊いたのさ、"エクスキューゼ・モワ、ムッシュー、どこでそれ買ったんですか?"。通りにちっぽけな店があって、僕らはそこで1本ずつ買ってホテルに戻り、着替えて外へ出た――これがうまく歩けないんだよ。"脚もとがばたばたしない、スリムの方が楽だよな?"。それですぐまたホテルに戻って、余分なところをとって16インチ幅に直した。その方が落ち着いたね。その後、街でユルゲン・フォルマーに会った。彼はまだ写真をやってたんだ。

ジョン ユルゲンもベルボトムをはいてたけど、リバプールでそれはいてたらものすごくイカれた奴に思われるだろうって気がした。女っぽい格好はしたくなかったんだ。リバプールの客はまだ男が多かったからね(僕らはレザーを着てロックをやってたんだ。リバプール・バラードで、だんだんと女の子は増えてきてたけどね)。1967年 ともかく、ユルゲンは前髪を降ろしてぴったり撫でつけたヘア・スタイルをしていた。僕らそれが気に入ってね。彼のところへ行って、僕らも同じスタイルにカットしてもらった――ズタズタにしたという方が近いけど。1963年

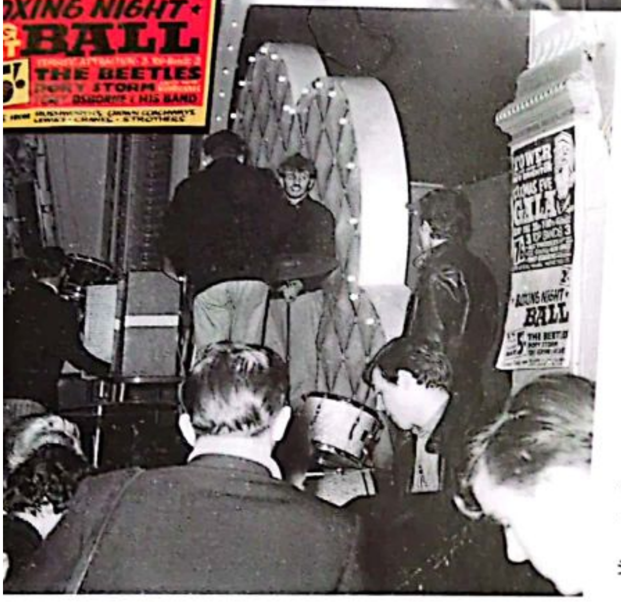
ポール 彼はモッズっぽいスタイルにしていた。"僕らも君みたいな髪にしてくれないか?"って言ったんだ。僕らは休暇中だった――何でもやっちゃえ!って勢いで。マントやパンタロンも買って、すっかり大胆になってた。彼は"いや、やめとけよ。君らはロッカー・スタイルでいいと思うな。それかっこいいよ"って言ったんだけど。でも僕らが頼むもんだから、彼も"わかった"って承知してくれた。でも終わってみたら、彼のスタイルとちょっと違うんだ。
彼のはもっとはっきりと横分けになってた。ヒットラーを長髪にしたような感じ。僕らもそういうふうにしたかったんだ。だからほんと、あれはちょっとした偶然だったんだよね。彼のホテルに行って、出来上がったのがあれだったんだ――"ビートル・カット"!
それからその週はパリの実存主義者気分だったね。ジャン・ポール・サルトルなんて僕ら何も知らなかった。そんなのより、肝心なのはこれだって。"あんな奴らどうでもいい――今週体験したことで小説が1冊書ける"。心の中でそう思ってた。もうなんでもできるって。

リンゴ 帰ってきた時の彼らの姿といったら!

ポール リバプールに戻ると、"あれ、髪が変になったな"ってみんなに言われた。"違うよ、これが新しいんだよ"。
もとに戻そうかと思ったけど、すぐ前に落ちてきちゃうからダメだったんだ。それでそのまんまになった。実はあの髪型はあんまり気に入ってなかったんだよ。なんだか"スリー・ストゥージズ"のモーみたいでさ。すぐ前髪が落ちてきちゃう。だけどスタイリングや何かをする必要がなかったのはよかったね――洗ってタオルでさっと乾かして、首振ったら出来上がり。みんなあれを僕らが始めたと思ったのさ。それで"ビートル・カット"ってことになったんだ。

ジョン 僕らは流行に敏感なんだよ、ずっとそうだった。ある程度流行を広めたってことはあるかもしれないけど――でも僕らが服のスタイルを考え出したわけじゃない。僕らは自分たちが好きなものを着てただけだ。それをみんなが真似したってことなのかな。もともと僕らのスタイルはアメリカっぽかったし、イギリス人はイギリスっぽい服を着てたからね。でもそのうちイギリスにもアメリカのスタイルが入ってくるようになった。1964年
成功するまでは、アメリカに行って自分はイギリス人だって言う気になれなかった。ビートルズはイギリスのイメージを変えようとしてきたんだ。僕らは世界のヘア・スタイルも着るもののスタイルも変えた。アメリカも含めてね――いざアメリカへ行ってみたら、アメリカ人ってすごく堅くてつまんない奴らだった。1969年

ブライアン・エプスタイン 1961年10月28日。土曜日だった。ある若者が、ビートルズというグループのレコードを探しに来た。リクエストされたら絶対そのレコードを見つけるのが



だったから、僕はメモを取っておいた。"「マイ・ボニー」。ビートルズ。月

ブでリバプールのビート・グループがいくつか台頭し始めていたが、僕は
かった。僕の生活とは接点がなかったんだ、世代が違うし、それに僕は
ら。"ビートルズ"という名前も僕には何の意味も持たなかった。ニュー・
ダンス・パーティのポスターで見かけたような記憶はぼんやりあったけれ
しなスペルだと思ったことしか覚えていなかった。
ェックする前に、さらにふたり女の子が店に来て、またそのグループ
と言うんだ。のちに広まった話とは違い、この頃にリバプールでビー
しいという声はそれがすべてだったんだけどね。とはいえ、この無
で3件問い合わせがあったということは、何か大きな意味があるに違

話をして、それで初めてビートルズというのが実はリバプールのグル
ブルクのいかがわしい街外れのクラブをまわって戻ってきたばかり
生も言っていたよ。"ビートルズ？　あのグループは最高。今週キャバ

プスタインはNEMSという店をやっていた。彼はオーナーのハリ
だったんだ。NEMSというのはノース・エンド・ミュージック・ストアズ

の略。僕らもそこでレコードを買ってたよ。かなりの客が入る店で、あそこに行けば探してるレコードが必ず見つかった。

僕らはキャバーンでけっこう人気があって、客もすごく集まるようになってた。それで噂が広まったんだよ。ある若者がブライアンのレコード店へ行って、ビートルズの「マイ・ボニー」が欲しいって言ったんだ。ブライアンは"違います、それはトニー・シェリダンのですよ"と答え、そして注文を出した。でも、そのあとで僕らが店から200メートルも離れてないところでステージをやってるって聞いたわけさ。それでブライアンはキャバーンへやって来て、僕らの耳にもそのニュースが届いた。"ブライアン・エプスタインが客席にいるって――ひょっとしたらマネージャーかプロモーターかもしれない。とにかく彼は大人だ"。あの頃は、若者と大人とはっきりふたつに分かれていたんだよ。

ジョージ　ブライアンが僕らをチェックしに来た。ディスク・ジョッキーのボブ・ウーラーが、"今日はNEMSの店長、ミスター・エプスタインがいらしてます"って言ったのを覚えてる。みんなそれを聞いて、"ほんとかい。すごい、そりゃすごいぞ"ってね。

彼は後ろの方で聴いていて、そのあと楽屋へやって来た。すごい上流階級の金持ちって感じがしたよ。それがブライアンと初めて会った頃の印象だな。彼は僕らと契約したがっていたけど、実際にマネージャーになると決めたのは、何度か僕らを見に来てからだと思う。

ジョン　彼は有能で金持ちに見えた。それしか覚えてないね。1967年

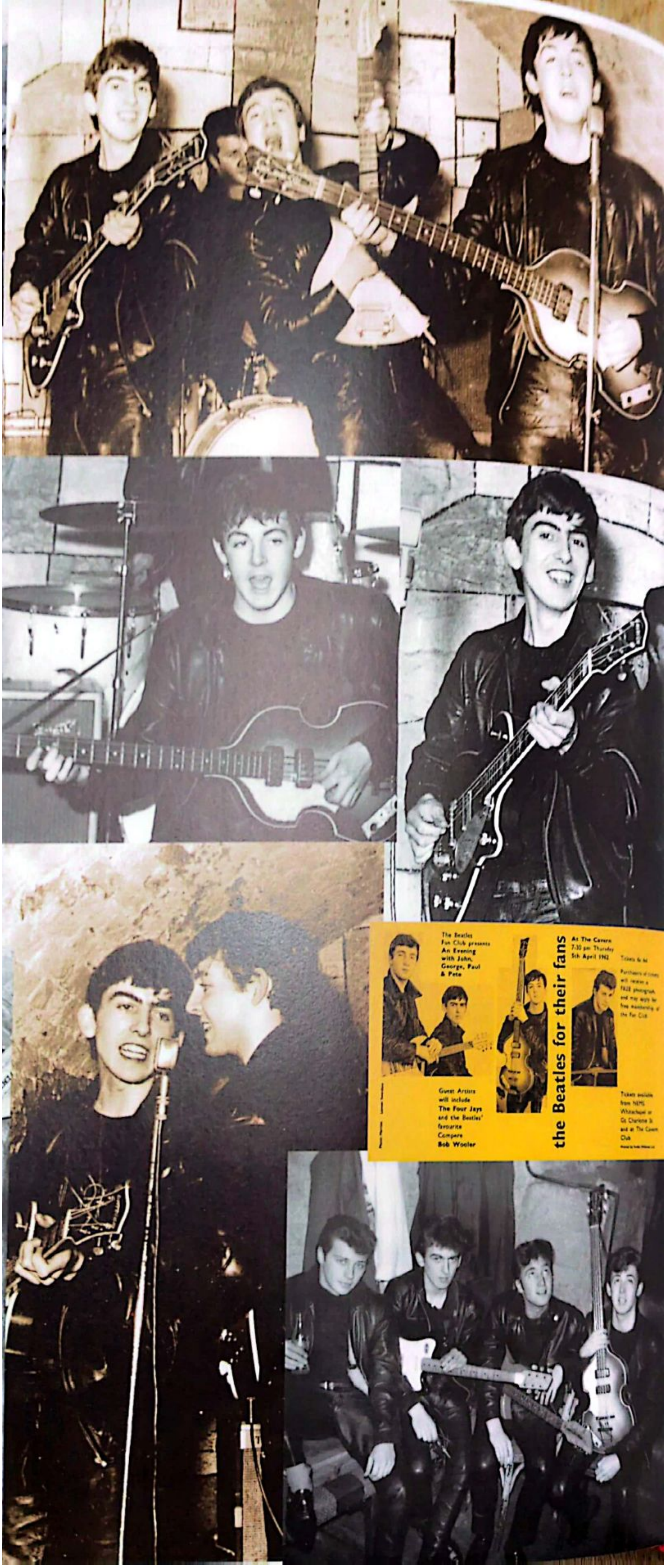
彼は僕らのマネージャーになろうとしたんだけど、僕らはなかなか納得できなかった。1週間くらいそんな感じだったかな。"あんたとは組まないよ"って態度だった。彼が入ってきて、"よし、こういうふうに髪を切って、こういうスーツを着るんだ"って仕切ったわけじゃない。そんなんじゃなかったんだ。1969年

ポールはそんなにきつい態度はとらなかった。彼は何をやるにも僕らより人当たりがいいから。彼本人がそう言ってるよ――それも大いにけっこうなことさ。最後には彼が誰よりたくさんヨットを乗りまわすようになるんじゃないのか。1975年

ポール　あの頃の僕らは、スーツを着てる人や車を持ってる人なら誰にでもいい印象を持った。一方、ブライアンの方でも僕らに好感を持ったんだ。僕らのユーモア・センスも、僕らの音楽も、僕らの格好も気に入ったのさ――黒のレザーね。

で、ある晩、僕らはNEMSに出かけた。あんな大きなレコード店へ、閉店後の誰もいない時に通されるんだから、もう萎縮しちゃってね。大聖堂の中にいるみたいだった。僕らは2階のブライアンのオフィスへ行って契約した。僕は彼と話をして、こっちが有利になるように持ち込もうとした。マネージャーの取り分が低くなるようにした方がいいって、そういうことは知ってたからね。みんなでがんばったんだけど、彼は25%の数字を譲らなかった。"これならいい、これなら君たちのマネージャーになろう"って言って、それで僕らも受け入れた。僕の父親のアドバイスなんだ――マネージャーはユダヤ人にしろって――まさにぴったりだった。それでブライアン・エプスタインが僕らのマネージャーになったわけさ。

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

ジョン　エプスタインはレコード屋で客の相手をしてるだけで、やることがなかった。そういう時に不良のロッカーが大音響で音楽をやってるのを見て、多くの若者がそれに夢中になってるのを知ったんだ。で、"これが自分のやるべき仕事だ"って思ったのさ。彼は気に入ったんだよ――あの雰囲気がね。彼は僕らのマネージャーになりたいと考え、自分にはできると思うと言ってきた。僕らも彼よりいい人間を知らなかったから、"わかった、やってくれよ"と言ったのさ。1975年

彼が現れるまでは夢の中にいるような感じだった。自分たちが何をやってるのかわからなかったんだ。出撃命令を書面で見た時、すべてが正式なものになったのさ。1967年

ニール・アスピノール　僕らは感動したね。それまではこの先4週間火曜日の夜に出てくれってどこかの店の経営者から言われて、それを誰かがメモ帳に書いておく――まあ、ポールかピートかな。そうやって出演契約をするにはするんだけど、いつでも行き当たりばったりだった。ところがブライアンが来てまずやったのは、キャバーンでの出演料を7ポンド10シリングから15ポンドにすることだった。いきなり倍になったんだ。

ポール　ギグの内容もよくなっていた。それにギャラもほんのわずかとはいえ、上がってはいたんだ。演奏する場所も前よりいいところになってきてたね。僕らはまだロックをやっていたんだけど、キャバレーを除くと、ロックじゃ、どこのギグでもたいして金はもらえなかった。僕は「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」とか「テイスト・オブ・ハニー」なんかができた――キャバレー向きの曲だよ――ジョンは「オーバー・ザ・レインボウ」や「エイント・シー・スウィート」をよくやってた。僕らにとっては信頼できる曲だったのさ。ジーン・ビンセントのアルバムに入ってたんだから。「レインボウ」がジュディ・ガーランドの曲だとは知らなかったんだよ。ジーン・ビンセントの曲だとばかり思ってたから、喜んでやってたんだ。

ニール・アスピノール　ブライアンの演劇の経験が生かされた――服装も、1曲ごとに客席に向かってお辞儀することも、そこから来てるんだよ。ギターの弦の端を切るのもそうだ。当時はギターの弦が高かったから、弦が切れたらその端をほどいて引っ張って結び、それから巻き上げて演奏に戻る。ギターの先から弦がぶら下がってて、あんまり見た目はよくなかったね。だからブライアンがアドバイスしたんだ。"その先を切って、もっとすっきりさせろ――一般のお客さんにも見てもらえるように"。

そういう案に最初はみんな渋ったよ。ギターの弦の場合は、全部外して新しいのに張り替えるってことになるし、そうなると時間もかかる。お辞儀の方は――ジョンもやったけどね、渋々。両手をひらひらさせてみたり、客席にいる僕らにわかるような皮肉を言ったりしてた――僕らは彼のやってる意味がわかるから笑ってたけど、客には全然わからなかったと思うよ。

ジョン　ブライアン・エプスタインはこう言った。"なあ、本当にもっと大きな場所でやりたいのなら、変わらなきゃだめだ――ステージでものを食べるのはやめろ、汚ない言葉を使うな、煙草を吸うな……"。1975年

彼は僕らのイメージをクリーンにしようと考えてたんじゃない。格好が間違ってるって言ったんだ。そのままじゃいいところには絶対出られないって。僕らはステージの上でも下でも、いつだって好きな格好をしてたから。1967年　ジーンズはあんまりスマートじゃない、きちんとしたスラックスをはかないかって彼は言ってたけど、いきなりかしこまった服装をさせようとしたんじゃないよ。彼は僕ら自身に、個性ってものをわからせようとしたんだ。1975年

僕らにすればブライアンはエキスパートだった。だってもともと店をやってただろ。店を持ってる人間ならみんな正しいはずだってね。それに車、でかい家……それが全部父親のだろうと関係ない。こいつこそ理想の人間だって僕らは思ったのさ。1972年

成功するか、ステージでチキンを食べ続けるか、どっちかだった。僕らは彼の考えを尊重した。チーズ・ロールやジャム・パンをかじるのもやめた。もっと自分たちのやってることを考え、遅刻しないようにして洒落た格好をするようになったんだ。1975年

ジョージ　ブライアンは僕らを軌道に乗せようとすごく時間をつぎ込んでくれた。彼は最初っから僕らを信じてくれてたんだ。

ジョン　彼はあちこちに行ってニコニコし、新聞屋などにも気に入られた――みんな彼のことを認めてたよ。1972年

宣伝してもらうのもゲームなのさ。僕らは地元の新聞社や音楽誌の事務所をまわって、記事を書いてくれるように頼んだ。そうしなきゃダメなんだ。最高のステージをやるのは当然のことだけどね。記者の前ではいい顔しなきゃならなかった。たとえ相手がすごい傲慢な奴で、恩を売ってやってるんだぞって態度だとしてもね。僕らはそいつらに調子を合わせてやったよ。取材してくれてほんとにありがとう、みたいな態度で。そういう点では、見事に二重人格だった。1967年

ブライアンはずっとリバプールとロンドンを往復してた。そしてある時ロンドンから戻ってくると、こう言ったんだ。"オーディションだぞ"。僕らみんな大喜びだったよ。デッカのオーディションだった。彼はマイク・スミスとかいう奴と話をつけていて、僕らはそこへ行くことになった。それでいろいろ曲をやったんだけど、不安と緊張でガチガチでね、それがしっかり演奏にも出てた。でも、最初は不安だったものの、そのうち気持ちも落ち着いてきた。「トゥ・ノウ・ハー・イズ・トゥ・ラヴ・ハー」っていうフィル・スペクターの曲とか持ち歌をいくつかやった。キャバーンのステージをそのまま再現したようなもんだよ。何曲か外しただけで――20曲くらいやった。1974年

テープはデッカとパイに送ったけど、パイには行かなかった。1969年

ニール・アスピノール　1961年の大晦日にロンドンへ行くことになったんだ。デッカ・レコードのオーディションがあったから。ミッドランドのどこかで道がわからなくなった。その大晦日が僕らのロンドン初体験だった。

ジョージ　雪が降る中、デッカのスタジオに行ったのを覚えてる。ただ入っていって、アンプをセットして、演奏しただけ。

あの頃のロックン・ロール曲は、実際には古い曲ばかりだった。10年代とか20年代とか、みんながロックにハマってた頃のやつさ。やるものがない時はそういうのをやってたんだ。オールディーズでロックするしかなかった。ジョー・ブラウンが「シーク・オブ・アラビー」のロックン・ロール・バージョンを出してたね。彼は土曜のテレビ番組「シックス・ファイブ・スペシャル」や「オー・ボーイ！」ですごく人気があった。僕はそのジョー・ブラウンのレコードをやって、「シーク・オブ・アラビー」を歌った。ポールは「セプテンバー・イン・ザ・レイン」を歌った。それぞれがやりたい曲を選んだんだよ。

グループのメンバー全員が歌うというのは当時では珍しかった。あの頃は、クリフ＆シャドウズって具合に、どのグループでもリード・ボーカルを前面に出してた。他のメンバーは全員スーツに揃いのタイとチーフで、決まった動きをしてるだけ。その前にボーカルがひとり立って歌ってるんだ。

オーディションは何時間か続いた。それが終わると、僕らはホテルに帰った。

ニール・アスピノール　全員が一文なし。その上、雪が降ってすごく寒いときてる。シャフツベリー・アベニューあたりへ行ってみたんだ。買いたいものばかりで、目を見張ったね。角に靴屋のアネロ＆ダビデがあって、洋服のセシル・ジーがあって。セント・ガイルス・サーカスでクラブに入った。退屈だからすぐ出ちゃったよ。女の格好してるのに髭がはえてるのがいたりしてさ。飢え死にしそうだったからレストランに入ったんだけど、僕らの持ってる金じゃスープしか頼めなかった。それで追い出されて、ソーホー行ってなんとかしのいだ。ロンドンはほんとエキサイティングで、すべてが新しかったね。

ジョージ　僕らがロンドンで会ったグループが、その後"ビートル・ブーツ"として知られるようになるブーツを履いててね。そういうブーツを初めて見たのがその時だったんだ。先が柔らかいんだよ。チャリング・クロス・ロードのアネロ＆ダビデっていう店で作られてるものだった。

デッカからはいつまでたっても何も言ってこない。ブライアンは何度もせっついてたんだけどね。それで結局は断られた。おかしなことに、断ってきたのがあの手の"ダン・ド・ダン"的なバンドをやってたトニー・ミーハンでね。彼、その頃はデッカのディレクターとして成功してた。それで有名な話がある。ブライアン・エプスタインが彼をつかまえて、僕らを気に入ったかどうか聞きだそうとした。僕らは契約できるのかって。すると返ってきた言葉が、"ミスター・エプスタイン、私は忙しいんです"。奴はまだ若造だったんだぜ！

ジョン　リバプールに戻って待ち続けた。そしてようやく、通らなかったことがわかったんだ。これで終わりだなって、その時はほんとに思ったよ。ここまでだって。

"ブルージーすぎる"とか"ロックン・ロール色が強すぎる、ロックはもう過去の音楽だ"とか、いつもそういうことを言われてた。ハンブルクでドイツの会社のオーディションを受けた時にも、ロックやブルースはやめろ、他のものにしろって言われた。みんなロックは死んだと思ってたんだよ。でも間違ってたのは彼らの方だった。1972年

ポール　今テープを聴けば、どうしてデッカのオーディションに落ちたかわかる。あんまり出来がよくない。とはいえ、すごくおもしろくてオリジナリティがあるものも入ってるけど。

ジョン　聴いてみたけど、僕ならこれで断りはしないだろうね。問題ないと思うな。特に後半なんて、あの時代にこれだけできれば文句ないさ。当時はああいう音楽をやってる人間がそんなにいなかった。1972年　デッカはすっかり洗練されたグループを期待してたんだろう。でも僕らがやったのはただのデモ・テープだった。僕らの将来性を見るべきだったね。1967年

ジョージ　何年もあとで知ったんだけど、彼らがあの時採用したのはブライアン・プール＆トレメローズだった。デッカの社長のディック・ロウは親い手測をしてたんだ。"ギター・バンドはもう終わりですよ、ミスター・エプスタイン"。

ポール　今頃自分を蹴飛ばしてるだろうね。

ジョン　死ぬほど蹴飛ばせばいいんだ！ 1963年

CamScannerでスキャン

ポール　あの頃は百万くらいグループがあった――ブルー・エンジェルズ、ランニング・スケアズ――でも、どれも似たり寄ったりだった。シャドウズとロイ・オービソンを真似してるグループが多かったね。一方で僕らみたいな、もっとブルースっぽい、あんまり知られてない曲をやるグループがいた。そういう変わった曲をやっていたから、僕らは見るべきバンド、コピーしがいのあるバンドになったのさ。

僕らはすごく尊敬を集めるようになった。「イフ・ユー・ゴッタ・メイク・ア・フール・オブ・サムバディ」みたいな曲をどこから見つけてきたのかって、よく訊かれたよ――それで、ジェームズ・ロイのアルバムに入ってるよって教えてあげるんだ。一度ホリーズが僕らを見に来たことがある。次の週に彼らが来たら、僕らそっくりになってたよ！　僕らは全員黒のタートル・ネック・セーターを着て、ジョンがハーモニカ吹いて、R&Bの曲をやっていた。翌週になるとホリーズもタートルネックを着て、ハーモニカを入れてた。すべてそういう具合になってきてたんだ。僕らがリバプールに戻ったら、フレディ&ドリーマーズが「イフ・ユー・ゴッタ・メイク・ア・フール・オブ・サムバディ」を、彼らのヒット曲としてやってたよ（フレディ・ギャリティは僕らがマンチェスターのオアシス・クラブでその曲をやってるのを見て横取りしたんだ）。

つまり、僕らはそういうグループに大きな影響を与えてたんだ。どっちみち曲ならいくらでもあった。契約した時も全部はレコーディングできなかったくらいだ。それでよそのグループが僕らの持ち歌をもらっていって、ヒットを出した――スウィンギング・ブルー・ジーンズの「ヒッピー・ヒッピー・シェイク」もそうだよ、あれは僕の得意な曲だったんだ。

ポール　僕らの曲の多くは"クール"じゃなかったかもしれない。もしクールなだけだったら、あんなふうに成功しなかったと思うよ。でもそれこそ僕らの強みだったんだ。ジョンは「ア・ショット・オブ・リズム・アンド・ブルース」や「ユー・リアリー・ゴット・ア・ホールド・オン・ミー」なんかをよくやってた。ああいうのはクールって感じだよね。でも、その一方で、僕らは「イフ・ユー・ゴッタ・メイク・ア・フール・オブ・サムバディ」みたいな曲もやった――ほんとはああいうものの方がもっとクールなんだよ。だって、あれはおそらくR&B初のワルツだろう。

美しいメロディとクールなロックン・ロールとの違いというのが、僕にはどうしてもわからない。僕は父親の親戚の影響で、バラードっぽい曲が大好きになった。「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」や「マイ・ファニー・バレンタイン」――いい曲だなと思った。そういうのを恥ずかしがらずにやったことで、ビートルズにちょっと幅が出たのかもしれないよ。それに、実際問題いろんな曲をやる必要があったんだ。キャバレーに出ることが多かったからね。「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」や「エイント・シー・スウィート」みたいな曲は、深夜のキャバレーに向いてる。僕らはただのロックン・ロール・バンドじゃないっていう証明だよ。

レノン＝マッカートニー・コンビはこの時期に生まれた。「ラヴ・ミー・ドゥ」から始まり、やがてもっとディープな、もっとずっと中身の濃いものを書くようになっていく。あの頃、誰かから面と向かって、「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」なんかちっともクールじゃないって言われなくてよかったよね。

ニール・アスピノール　当時ポップ・ソング専門のラジオ局はほとんどなかった。日曜の夜のラジオ・ルクセンブルクくらいだ。だけど、イギリスでかからないアメリカのレコードも、商船員からたくさん手に入ったんだよ。最初にレコードを聴いたバンドがその曲をやることになる。つまりジェリー・マースデンが誰よりも先に何かの曲を見つけたら、それは彼のものだ。他の誰がやろうと、それはジェリーの真似ってことになるんだよ。

ニール・アスピノール　ツアーの規模はどんどん大きくなっていった。リバプールから外へ外へと広がっていって、スウィンドンなんてとこでもやるようになった。ワオ！　ものすごく遠いところだよ。それからサウスポートにクルー、さらにマンチェスター。ダンス・ホールがメインだった。彼らは名前を売って、レコード契約を結びたかったんだ。でもそれが実現するまではすごく長くかかったし、がっかりさせられることもしょっちゅうだったよ。

ブライアンはデッカでレコーディングしたテープを持って、あちこちをまわっていたね。

ポール　他のグループと違うところがなければ、この先どうしようもない、僕らはそれに気づくのが早かったんだと思う。オリジナルのものがなければ立ち往生するはめにもなりかねない。たとえば、僕は以前フランク・アイフィールドの「アイ・リメンバー・ユー」をよく歌ってた。あれはどこでやっても嘘みたいに受けたんだ。だけど、もし僕らの前に出るグループが「アイ・リメンバー・ユー」をやってしまったら、僕らは大事な曲が使えなくなる。それでいつも一緒に出るバンドに、"君らは何をやるの？"って訊いてたんだ。それでもし「アイ・リメンバー・ユー」が入ってたら、"なんてこった"ってことになる。だから他のグループがやらない曲を持ってこなきゃならなかった。あるいは、両方でカチ合ったら取り引きするとかね。

そういうところから、自分たちで曲を書こうって話になっていったんだ。自分たちで曲を書いて、それを発表しようって。初めはキャバーンでしかやらなかった。確か、最初にやったオリジナル曲は、「ライク・ドリーマーズ・ドゥ」っていう、僕の作ったひどいやつだった（その後これもカバーされたけど）。それでも十分だったんだよ。リハーサルして、本番でやったら、若い奴らは気に入ってくれた。それまで聴いたことないものだったからさ。僕らを見にきた時しか聴けない曲だもの。

今考えると、僕らはすべてにおいてすごく賢かったよね。直感でやってたわけだけど。まわりとは違うグループになろうとしてたんだ。

ジョン　15ポンドかそこら払って、デッカのスタジオでテープを作った。ブライアン・エプスタインがそれを売り歩いてたわけさ。彼は列車に乗り、そのテープを持ってひとりでロンドンへ行く。そして彼が無表情な顔で戻ってくると、ああ、またダメだったなってわかるんだ。

今聴いてもあのテープはけっこういいよ。最高じゃないけど悪くはないし、あの当時としたら明らかにかなりのもんだ。だってあの頃を考えてみろよ、シャドウズしかないんだぜ――特にイギリスではね。でもみんな全然わかってなかった。ああいうオーディション・テープを聴く時、奴らが求めてるのはシャドウズなんだよ。きちんと聴いてなんかいないのさ――今だって同じだけどね、ああいう連中がどういうもんか知ってるだろう――すでに下り坂になってるものをつかまえようとするんだよ。新しいものなんか耳に入らない。

その頃の僕らはかなり不安定な状態だった。レコードを出せなかったらどうにもならない。1974年　成功できるなんて思えなかった。僕らは成功するって言ってたのは、ブライアンだけだよ。それにジョージ。ブライアン・エプスタインとジョージ・ハリスンだけだ。

ロンドンから戻ってきたブライアンは、僕らの顔をまともに見られないんだ。20回くらい断られてたからね。帰ってくると、"残念ながら今度もとってもらえなかった"と言う。その頃には僕らも彼と親しくなってたから、けっこう彼を傷つけるようなことも言ってた。だから彼、またダメだったって言うのが怖かったんだよ。1972年

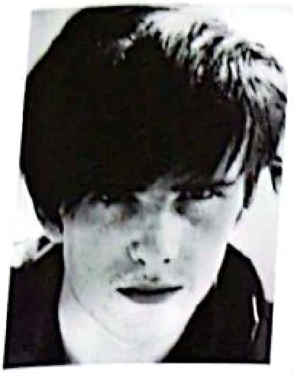
実際ブライアンとは何度かちょっとしたケンカになった。僕らよく言ったもんだよ、あいつは何の役にも立たない、僕らばかり働かせてるって。ほんとは口だけだったんだ――彼がどんなにがんばってくれてるか、僕らだってわかってた。あれは僕らと"奴ら"の戦いだったんだ。彼のおかげでEMIと契約できたんだよ、彼が歩きまわったおかげさ。1967年　彼がテープを脇に抱えて、ロンドン中あっちからこっちへ歩きまわって、ついにジョージ・マーティンと出会った。そうでなかったら、僕らは芽が出ないまま終わっていただろう。僕ら自身じゃ、そんなにがんばれなかったよ。そういう面では、ポールはちょっと積極的だった。"何か人目を引くことをやろう、マージー川に飛び込むとか"――そんなふうなことを言ってたね、成

ジョン　自分たちのオリジナルをやりだしたのは、リバプールやハンブルクの時代からだ。「ラヴ・ミー・ドゥ」は初期のものだけど、ポールは15歳くらいから書き始めてたはずだよ。思い切ってやる気になったのはあの曲が最初だ。かなり勇気がいることだよ。だって僕らレイ・チャールズとかリトル・リチャードとか、そういうすばらしい人たちの曲をやってたんだから。1972年（僕はキャバーンで「ウェル」という古いオリンピックスの曲をよくやっていた。12小節の短いやつだ）。1980年

そんな中で「ラヴ・ミー・ドゥ」を歌うのは気が引けたよね。僕らは自分たちの曲をちょっと軟弱だと思ってた。それでもだんだんそういう気持ちを乗り越えて、やるだけやってみようって気になったのさ。1972年

ジョン
ビートルズのみんなが
落ち込んで、
"こんなバンドどうしようもない、
契約は最低だし、
楽屋も最低だし……"
って考え始めると僕が言うんだ。
"なあみんな、僕らが目指すのは何？"。
するとみんなが、
"No.1さ、ジョニー！"って答える。
それで僕がまた訊ねる、
"No.1ってどこだ？"。
"ポップ界のトップ！"。
それで僕が"そのとおり！"って。
するとみんな元気になってくるのさ。

CamScannerでスキャン



功するにはそういうことしなきゃって。1972年

ジョージ　1962年4月にスチュアート・サトクリフが死んだ。彼はすでにグループは抜けていたけど、死ぬちょっと前にリバプールへ来たんだよ(ピエール・カルダンの襟なしジャケットを着てた。僕らより先にそういうのを着てたんだ)。それで僕らみんなであちこちに行って遊んだ――まるで僕らと会えなくなるのがわかってたんじゃないかって思えるくらいだ。みんなで会っただけじゃなく、彼は僕の家へも来てくれてね、すごくいい奴だなあって思った。

スチュアートが病気だなんて知らなかった。彼は煙草をやめようとしててね。煙草を細かく切っておいて、吸いたくなったらその吸いさしみたいなのをちょっとだけ吸うんだ。世間に出回ってる話では、彼は誰かに頭を蹴られて、脳内出血がもとで死んだってことになってる。彼がリバプールのギグのあとで殴られた(彼がバンドのメンバーというだけで)のは僕も覚えてるけど、それは何年か前のことだよ。

彼が帰ってきてくれたのはすごく嬉しかった。今考えると、彼は何かにケリをつけようとしてたんだと思う。だって彼、ハンブルクに戻るとすぐに脳内出血で死んでしまったんだよ。しかも、その翌日に僕らはハンブルクへ着く予定だった。

僕は風疹にかかって、みんなより1日遅くブライアン・エプスタインと一緒に行った。飛行機に乗ったのはあの時が初めてだ。

僕らは葬式には出なかった。"生きることに関わりのない者が死の世話を焼く"って、誰かが言ったじゃないか。でも僕ら全員、ほんとに悲しかったんだ。とりわけアストリットのことを思うとすごく辛かった。彼女はそれでも僕らのショーを見に来てくれたよ。僕らといれば、少しは気持ちが休まったんじゃないかと思う。

ジョン　僕はスチュを尊敬してた。彼なら本当のことを言ってくれるって信頼できたんだ。これがいいって彼が言えば、僕はその言葉を信じた。僕らは時々彼にひどいことしたけどね。特にポールだ。いつも彼にいちゃもんつけてた。みんなおまえを嫌いなわけじゃないって、いつも僕はあとでとりなしてたんだよ。1967年

ジョージ　ストレスがひどかったからね、バンの中でちょっとしたケンカになることもあった。よくポールと彼とでちょっとした殴り合いをやってたよ。ふたりで取っ組み合いになったこともあった――スチュアートはすごく小柄だから、ポールは簡単に勝てると思ってたのさ。ところがスチュアートは、ポールが予想もしなかったすごい力でやり返してね。

僕も一度、スチュアートとちょっとケンカしたことがある。だけどそれきりだ、それを除けばすごく仲が良かった――間違いなく最後にはね。

ポール　同世代で死んだ人間なんて、あの頃にはほとんどいなかった。死ぬにはみんな若すぎた。死ぬのは年とった人たちのはずで、だからスチュアートが死んだことはものすごいショックだったよ。それに僕の場合には、ちょっと罪の意識も混ざっていた。僕は常に彼の親友だったとは言えないから。最後にはいい友だちになれたけど、たびたびぶつかったからね。ジョンを間にはさんで、嫉妬もあったんだ。僕らはみんなジョンと仲良くなりたくて競い合ってたのさ。

でもスチュアートはアート・スクールの仲間だから、ジョンと一緒にいることが多かった。それを僕ら嫉妬してたんだ。それに僕はグループを上達させたくて必死だったから、ょ"おい、そこ違ってただろう"みたいなことも言ったんだよね。でもスチュアートが死でしまうなんてひどい。彼はすばらしい画家になれたはなのに――彼のスケッチ・ブックを見ればわかるよ。

僕らはジョンほどスチュと親しくなかったけど――ふた:大学も同じで、一緒に暮らしてたこともあったし――でも全員、仲は良かったよ。彼はハンブルクにいて、は彼がいないことにだんだん慣れ始めていたから、で少しは衝撃が和らいだかもしれないけど。それでっぱり、誰もがすごく悲しんだんだ。

チュアートが死んだと聞いて、ジョンが笑ったって話るけど、そんなの嘘だよ。若かったから、あれこれかっただけさ。僕らが考えてたのは"彼、戻ってく"ってこと。僕ら決めてたんだよ。もしこの中の誰んだら、みんなのところに戻ってこようって。向こ世界があることを知らせにね。スチュアートが最初ことになって、僕ら半分本気で彼が現れるのを待

ってたんだ。夜に鍋がカタカタ鳴ったりしたら、それは彼かもしれない、って。

ジョージ　今回のハンブルクではスター・クラブに出演した。広いし、音響システムもすごくいいし、最高だったね。それに今度はホテル住まいだったんだよ。クラブにはかなり遠いけど、レーパーバーンで市街に一番近いところにあった。数カ月そこに滞在した。

ポール　スター・クラブは最高だった。そこのオーナーのマンフレッド・バイスレーダーと、ホルスト・ファッシャーは、すごくかっこいいメルセデスのコンバーチブルを持っててね。ホルストは人を殺して刑務所に入ったことがある。彼はボクサーで、バーでケンカになって船乗りを殺しちゃったんだ。でも僕らにはすごく優しかったよ。僕らは彼らのペットみたいな感じだった。矛盾してるようだけど、彼らといれば安全だった。

ジョン　僕らはハンブルクへジーン・ビンセントと行き、(のちに)リトル・リチャードとも行った。今でもとんでもないエピソードがたくさん残ってるよ。特にジーン・ビンセントにまつわる話はね。彼は相当ワイルドな奴だったから。僕らは裏でジーンと会った。"裏"って――つまり"トイレ"ってことだよ、わくわくしたね。1975年

ポール　ジーンは元海兵でね、いつも僕にぶちのめすぞって言うんだよ。人間の急所を2カ所知ってるからって。"嘘つけ！ 出てけよ！"って僕が言うと、彼は言うんだ。"偉そうに、おまえなんかすぐに叩きのめせるぜ"。

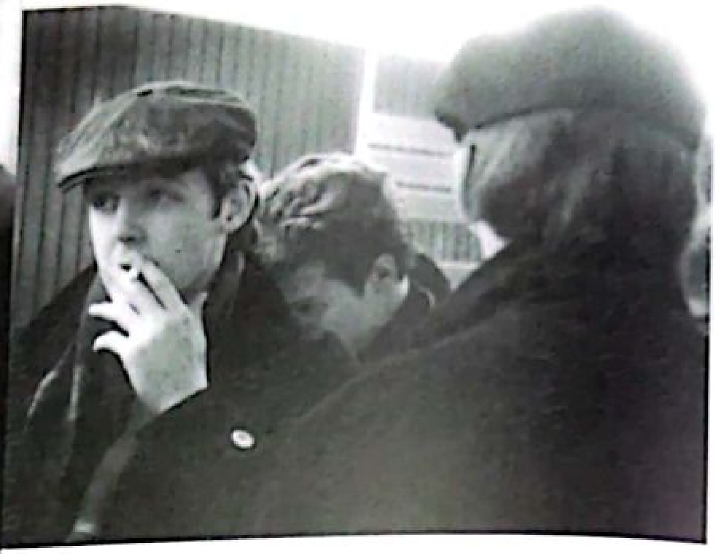
ジョン
僕はいつも、
パフォーマンスを
見るたびがっかりしてた。
リトル・リチャードから
ジェリー・リーまで、みんなさ。
レコードどおりのサウンドが
聴けることなんてなかった。
僕は1956年の
「ホール・ロッタ・シェイキン」が
好きだけど、
別バージョンに興味はない。
ジーン・ビンセントが
ハンブルクで
「ビー・バップ・ア・ルーラ」を
やった時も、
レコードとは違ってた。
ジーン・ビンセントに会って、
彼のステージが見られるのは
嬉しかったけど、
あれは「ビー・バップ・ア・ルーラ」
じゃない。
僕はレコードの
ファンなんだね。
1980年

ジョージ　ある日スター・クラブのバーで、休憩時間にジーン・ビンセントと会った。すると"一緒に来い、早く"って彼が言うんだ。僕らはタクシーに飛び乗り、レーパーバーンの彼が泊まってるアパートメントへ向かった。そのうち僕は彼がすごくびりびりしてることに気づいた――ツアー・マネージャーが彼の恋人を寝取ってるって思いこんでたんだよ！

建物に飛び込み、
部屋まで駆け上がると、
ジーンは上着の前を開けて
銃を取り出した。
僕は"持ってろ"と
それを僕に渡すと、
ドアをノックしながら
わめいた。
"ヘンリー！ ヘンリー！
この野郎！"。
僕はひそかに、
"こんなのごめんだ"と
思って、銃を返すと
さっさと出て行った。

ポール　オストゼー(バルト海)沿いのリューベックまで、よくドライブに出かけた。アストリットが世話をしてくれてさ。彼女の家族がそこで海の家か何かをやってたんだよ。それ以外にも、よく日帰りであちこち出かけた。一度ピアニストのロイ・ヤングと出かけた時のことはよく覚えてる。僕はアウトバーンにすっかり感心した。当時イギリスには、あんな道路なかったもの。すごく早いし、僕らはメルセデスに乗ってたから、もうとんでもなく最高の気分だった。

CamScannerでスキャン



ニール・アスピノール　ほとんどすべてのレコード・レーベルから断られてた。だけどついにブライアンがハンブルクへ電報を打ってきたんだ。"EMIからレコーディングの依頼。新曲のリハーサルよろしく"。レコード契約だってブライアンは言ったけど、ほんとはそうじゃなかった。プロデューサーのジョージ・マーティン相手のオーディションにすぎなかったんだよ。

ジョージ　1962年の6月にパーロフォンのオーディションがあった。僕の出来はそう悪くなかった。ジョージ・マーティンは僕らのことを、まだ未熟で荒削りだけど、でもどこかおもしろいって思ったんじゃないかな。僕らがその日やった中には「ラヴ・ミー・ドゥ」、「P.S.アイ・ラヴ・ユー」、「アスク・ミー・ホワイ」、「ベサメ・ムーチョ」、「ユア・フィーツ・トゥー・ビッグ」も入ってた(「ユア・フィーツ・トゥー・ビッグ」はファッツ・ウォーラー。これはポールの父親の影響だ)。

初めてジョージ・マーティンに会った時のことで覚えてるのは、彼のアクセントだ。コックニーでもリバプール訛りでもバーミンガム訛りでもなかった。そういう訛りのない人間は、すごい上流階級に思えた。彼は親しみやすい感じだったけど、学校の先生みたいだったな。尊敬しないわけにいかなかった。でもそれでいて、堅苦しい人間じゃなさそうだった――ジョークを言っても通じそうな相手に見えた。よく知られた話なんだけど、僕らが演奏を終えて第2スタジオのコントロール・ルームへ階段を登っていこうとした時、彼が言ったんだ。"何か気になるところがあるかい?"。みんな黙ってぐずぐずしてたんだけど、そのうち僕が言った。"あのね……あなたのタイが気になる!"。一瞬"おいおい"みたいな感じになったけど、すぐにみんな笑った。彼も一緒に笑った。リバプール生まれの奴は、どうしてもコメディアンになっちゃうんだよね。

ポール　EMIでのジョージ・マーティンは、あまり知られてないアーティストをプロデュースすることで有名だった――グーンズとか、あんまり真面目にレコーディングする気のないアーティストを担当してたんだ。シャーリー・バッシーとかのビッグなアーティストは他のプロデューサーが受け持っていた。ジョージが押しつけられるのは"切れっ端"で、僕らがその"切れっ端"だったわけ。彼がオーディションをしようと言ってくれたものの、僕らは強烈に印象づけるような演奏ができなかった。彼はピート・ベストにちょっと不満だったんだよ。

ジョージ・マーティンはすごく"正確な"テンポのドラマーに慣れていたからね。彼が使っていたビッグ・バンドのドラマーは、みんなすごくテンポに敏感だった。でもリバプールのドラマーというのは、元気があって熱意があって経済観念すら持ってるけど、リズムを正確に刻むセンスはないんだよ。レコードを作るプロデューサーとしてはその点が気になるんだね。ジョージは僕らを隅に引っ張っていって、"あのドラマーはどうも気に入らない。ドラマーを替える気はないかね?"って持ちかけた。"そんなことできない!"って僕らは言ったよ。そういうのも、若い頃にくぐり抜けなきゃならない苦しみのひとつだね。彼を裏切るなんてできるか? 無理だ。だけど僕らのキャリアがかかってる。ひょっとしたらこれで契約がダメになるかもしれない。

あの時はそれが大きな問題だった。そうやってピートを"捨てた"ってことが、ほんとに今でもすまない気がするんだ。彼が手に入れたかもしれないものを考えればね。でも、僕らにすればあくまでもプロとしての決断だった。彼が基準に達してないとすれば(僕らから見ればほんのわずかだったけど、プロデューサーから見れば明らかな差だった)、他に道はなかった。だけどやっぱり、すごく辛かったよね。僕らが経験したことの中でも、一番辛いことのひとつだ。

ジョン　そのうちにくだらない話が出来上がっていった。彼はすばらしくて、ルックスもよかったから、それでポールが嫉妬したとかいうのさ。あのふたりはあんまり気が合う方じゃなかったけど、ピートがちょっと鈍かったってのも原因なんだよ。まったく罪のない奴だった。でも、鋭さがなかった。他のみんなは頭の回転が速かったけど、彼はどうしてもついてこれなかったんだ。

そもそも彼がグループに参加したのは、ハンブルクへ行く時ドラマーがいなかったからだ。ちゃんとしたドラマーが見つかったらいつでも降りてもらうつもりだったのさ。でもドイツから戻る頃には、スティックを上下させることくらいは彼に教え込んでた(4ビートだけだ。彼はそれ以外はとんどできなかった)。それに彼はルックスもよくて女の子にもてたからね。ドラムができなくてもかまわなかったんだ。1974年　彼をクビにする段になると、僕ら卑怯者でね。ブライアンにやらせたんだよ。だけど僕らが面と向かって話してたら、よっぽど後味の悪いことになってただろう。たぶん最後にはケンカになったね。1967年

ポール　性格の問題だったんだ。あんまりいいプレイヤーじゃないのはわかってたけど、彼は他のみんなとちょっと違ってたんだよ。僕らみたいに学生っぽくないというか。ピートはまともな奴で、そこが女の子にもちょっと受けたんだ。意地悪で気分屋のところがあったけど、でもいい奴だったよ。

ジョン　リバプールにはトップ・グループがふたつあった――ビッグ・スリーと、ロリー・ストーム&ザ・ハリケーンズだ――リンゴはそのハリケーンズにいた。リバプール最高のドラマーふたりがそのふたつのグループにいて、彼らは僕らが出る前からすでに名前を知られてた。

リンゴのことは知ってたよ。僕らが会う前から、リンゴはもう純然たるスターだったんだ。1974年　リンゴはプロのドラマーで、歌も歌うしパフォーマンスもできた。だから彼の才能はどっちみち認められてたはずだよ。最終的にどういう形で認められたかはわからないけど――リンゴが持ってる輝きが何であれ、僕らはみんなわかってるんだ。ただ、それが何かって、はっきりとは表現できないんだよ。彼には何か光るものがあるんだ。彼がひとりでやってても、それは引き出されていたはずだよ。1980年

ジョージ　上：布の帽子で揃えた僕ら。ハンブルク空港で。1962年
中央：ハンブルクからバルト海へ向かう道沿い。僕、ポール、ジョンとジェリー&ペースメーカーズ。
(左からフレディ・マースデン、ジェリー、レス・チャドウィック、レス・マグワイア)たぶんこれはピートが撮ったんだね。

ポール　リバプールで一番のドラマーを入れなくちゃ
いけないって、僕らは本気で考え始めていた。
で、そのドラマーというのは、
僕らが見たところでは、
リンゴ・スターという男だったんだ。
僕らの誰よりも先に芸名を使っていて、
髭をはやしていて、もう大人で、
ゼファー・ゾディアックに乗ってることで有名だった。

それでリンゴに、僕らのバンドに入らないかって声をかけた。
ピートとは当然、恐怖の談判になるわけだ。

CamScannerでスキャン

ジョージ　僕には当然のことに思えた。ピートはしょっちゅう調子が悪いってギグを休んでたから、そういう時は代役でリンゴにやってもらってたんだよ。するとリンゴがドラムを叩くたび、"これだ"って感じがしたんだ。それでついに僕ら思ったのさ、"フルタイムでリンゴに入ってもらうべきだ"って。

いざこざが起きたのは僕にもかなり責任がある。リンゴを正式なメンバーにしようと働きかけたのは僕なんだ。僕がポールとジョンに話をして、それでふたりもそういう考えに傾いていったんだよ。僕は彼の家に行ったのを覚えてる。彼は留守で、僕はお母さんとちょっとお茶を飲んでね。それで"リンゴに僕らのバンドに入ってほしいと思ってるんです"って切り出した。するとお母さんが"今はロリーとバトリンズのリゾートへ行ってるんだけど、電話してきたらそちらに連絡するように言いましょう"って言ってくれて、僕はこっちの番号を教えておいた。

ピートにやめてくれとはなかなか言えなくてね。だってそんな話、どうやって切り出せばいい？　ピートとはまだそれほど長くなかった――2年なんて、一生のうちじゃたいして長い期間じゃないよ――とはいえ、若い時にバンドから追い出されるのは楽しいことじゃないし、どんな形にせよ追い出すのは楽しいことじゃない。ブライアン・エプスタインはマネージャーだから、こういうのは彼の仕事だ。だけど彼もそうさらりとはできなかったみたいだね。でもそうするしかなかったんだ。それでよかったんだよ。

リンゴ　ビートルズから声をかけられた時、僕はキング・サイズ・テイラー&ドミノスや、ジェリー&ペースメーカーズからも誘われてたんだ（ジェリーは僕にベースをやらせようとしてたんだよ！　僕は当時も今も、ベースなんか弾いたことない。だけどステージの前に出られるというのは魅力だったね。楽器をやった経験がなくたって、当時はたいして問題にならなかったんだ！）。

僕はよくビートルズを見に行ってた。彼らが演奏してるステージの端に、僕が"やあ、みんな"みたいな感じで座ってる写真もいっぱい残ってるよ。やがてある日のこと、お昼頃かな、僕がまだベッドにいると、母が部屋のドアをノックして、"ブライアン・エプスタインがいらしてるけど"って言うんだ。彼のことはあんまり知らなかった。ただ、ビートルズがマネージャーをつけてるってことがすごく不思議だったね。まともなマネージャーのいるバンドなんて、あの頃はなかったんだよ。彼が"キャバーンのランチタイム・セッションで叩いてもらえないかな？"って言う。僕は"お茶を一杯だけ飲ませてくれないか、ズボンをはいたら降りていくから"。それで彼のイカした車でキャバーンまで連れて行ってもらって、僕はセッションに参加した。

あの頃はどのバンドも同じ曲ばかりやってたよ。一度クロスビーでギグをやった時、全部で3組のバンドが出てた。各バンドが30分ずつ2回やることになってたんだけど、他の2組のドラマーが来てない。それで僕は3つのバンドでドラムをやることになったんだよ――ずっと座りっぱなしでね。カーテンが閉じるとジャケットだけ替える。次のバンドが出てきても僕だけそこにいるわけさ。そしてまたカーテンが閉じて開く――またしも僕だ！　これを6回やったんだよ。あの頃はスタミナもあり余ってたし、やる曲もわかってたから問題なかったんだけど。

キャバーンのギグが終わると、みんなで別のクラブへ飲みに出かけた。"お疲れさま"って感じでね――みんなで楽しく過ごして、それから僕は帰った。ところがあとで頼まれたんだ。"一緒にやってくれないか？　ピートが出られないんだ"。彼らとはキャラがよかったし、一緒にやるのは楽しかったから、"いいよ"って答えた。彼らと出るとギグは何回続いたかな――僕らは仲が良くて、ステージのあとは一緒に飲んだ。それから僕はロイのところに戻った。

その後またある日、水曜日のこと――僕らはまたバトリンズに行ってた。3シーズン目でね、3カ月の仕事で週16ポンド。嘘みたいにいい話だ――そこへブライアンが電話してきて、"ずっとこっちのバンドでやる気はないかい？"って言うんだよ。しばらく前から僕が手札として考えられていたってことに、僕は気づかずにいた。プレイの方で忙しかったから。実はみんながブライアンに持ちかけていて、ジョージなんかすごく僕を売り込んでたらしい。

ビートルズはデモ・テープをレコード会社に持ち込んでいた。しかも、これからEMIへ行ってレコード契約を結ぶという！　1枚の薄っぺらなビニール盤は黄金に等しかった。いや、それ以上だった。小っちゃいレコード1枚出せるなら、みんな魂だって売るよ。それで僕は言ったんだ、"OK。でも今は他の4人と一緒なんだ。まだ何カ月かギグが残ってる。今ここで脱けるわけにいかないよ、みんなが続けられなくなる"。

土曜には参加できると伝えておいた。バトリンズではいつも土曜はオフだった。土曜に滞在客が入れ替わるんだよ。今日が水曜だから、木曜、金曜、土曜、それだけあれば、ロイは誰かを引っ張ってこられる。日曜には間に合うだろう。

それで決まりだった。ジョンに言われたよ、"リンゴ、髭を剃れよ。それからヘア・スタイルも変えるんだ"。僕は言われたとおり髪を切り、バンドに入った。ピート・ベストを気の毒だと思ったことはないね。僕はそっちのいざこざには関係なかった。それに彼より僕の方がドラマーとしてはずっと上だと思ってたし。

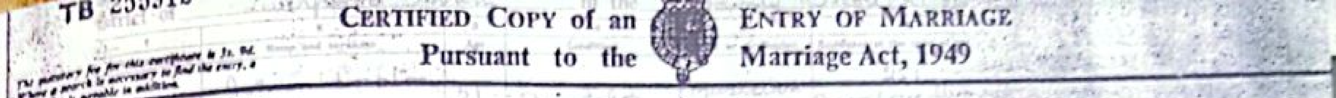
僕が入ってから初めてキャバーンでギグをやった時は、かなり荒れたね。そこら中でケンカになって、怒声が飛び交って。客の半分は僕を憎んでて、半分は僕を大好きだった。ジョージは目のまわりにあざを作ったよ。僕はあの時のことを思い出さないようにしてる。

ジョージ　ファンの中には――数人だけど――"ピートがベスト！"とか"リンゴ帰れ、ピート・ベストは永遠！"とか叫んでる人もいた。ごく一部の人間だから、僕らも無視してたんだよ。だけど30分くらいそれが続くとうんざりしてきて、僕は客に向かって怒鳴ったんだ。ギグが終わって楽屋から暗い通路に出たら、どこかの野郎が頭突きを食らわしてきて、僕は目のまわりにあざができた。リンゴのためには仕方ない！

ジョン　ピート・ベストは変わりなくやってたよ。一度ピート・ベスト・バンドとしてアメリカへツアーに出かけたらしいけど、きっと大げさに売り込まれて、うまいこと踊らされたんだろう。その後結婚して、腰を落ち着けてパン屋で働き始めてね。どこかで彼の話を読んだ。こうなってよかったって彼は書いてたよ。あの手のいろんなことを免れてよかったって。1971年

リンゴ　軽い脚注をひとつ。ニール・アスピノールはピート・ベストとも彼の家族ともすごく仲が良かったから、しばらく僕のドラムのセッティングをしてくれなかった。それが数週間続いたんだけど、そのうち忘れてくれた。僕らには彼しかいなかったからね。バンを運転するのは彼で、機材でも何でも準備をするのは彼だ。その彼の機嫌を損ねちゃったんだ。

ポール　ピート・ベストは悪くなかったけど、ちょっと限界があった。「アンソロジー」のテープを聴けば違いがわかると思う。リンゴが入ってから僕らにはちょっと弾みがついて、イマジネーションも少し広がり、バンド全体が安定した。この新しい組み合わせは完璧だったんだ。リンゴは確実にビートを刻み、ぶっきらぼうなウィットを飛ばし、バスター・キートンみたいな魅力を持っている。ジョンは鋭いウィットとロックン・ロール魂を持ち、それでいてすごくソフトな面も持ち合わせている。ジョージはギターの腕がすばらしくて、ロックン・ロールもうまく歌える。僕は歌と楽器がちょっとできて、ロックン・ロールとソフトなナンバーをそこそこやれるってわけ。



ジョン
**妻の宗教も知らないうちに
結婚しちゃってた。
訊いたことなかったんだよ。
何だって良かったのさ、
アラブでもね。** 1964年

ジョージ　ジョンの結婚のことはあんまり覚えていないんだ。1962年の8月だったんだけど。ある日の午後に彼はリバプールのどっかの役所へ行き、その日の夜、僕らはブライアンの車でギグへ行った（実際、その当日もギグをやったんだ）。その時に"いやあ、結婚してね"って。別に隠してたわけじゃない。マスコミに訊かれなかっただけだ。結婚式もなかったし——登記所に行って5分で終わりさ。あの頃は今とは違ってた。余分な時間はなかったんだ。

ジョン　シンシアとは古いつきあいだった。デビュー・レコードを作る直前に結婚したんだよ。シンシアから（妊娠を）聞かされた時はちょっとショックだったけど、"そうだな、じゃあ結婚しなくちゃな"って言ったのさ。争う気はなかった。1967年　結婚する前日、僕はミミに話をしに行った。シンに子どもができたってね。彼女は呻いただけだった。登記所じゃ外でずっと道路工事やっててさ。そいつが何を言ってるんだか、ひと言も聞き取れなかった。それから道の向こうへ行ってチキンのディナーを食べた。まったくお笑いだね。
　これでグループとはお別れだと思ってた。結婚しちゃったんだから。僕らの誰もキャバーンに女の子を連れてきたことがなかった。そういうことをするとファンが減ると思ってたのさ（あとになればそんなのお笑い草だったけど）。でも実際、すごく恥ずかしい気分だった。結婚して歩いてるってことがね。左右違う靴下はいてるか、ズボンの前を開けたまま歩いてるのと同じだよ。1965年

リンゴ　僕は結婚式に行かなかった——ジョンは結婚したってことすら教えてくれなかった。ジョンとシンシアは誰にも秘密にしてたんだよ。話に出そうになると、"シーッ、リンゴがいる"みたいな感じでさ。
　僕が話してもらえなかったのは、最初のうち、ほんとのメンバーとして認められてなかったからだ。僕はバンドには入ってたけど、気持ちの上ではまだ入り込めずにいた。ツアーに出るまでジョンは僕に何も言わなかったよ。安宿にみんなで泊まって、互いにわかり合えるようになって、初めて話してくれたんだ。

ジョン　秘密にしてたんじゃないさ。僕らがデビューしたての頃、そんなこと誰も訊いてこなかったってだけだよ。結婚してるかどうかなんて、みんな興味なかった。奴らが訊いてくるのは、"どんな女性が好みですか？"みたいなことばかりさ。僕らの初期のインタビューを見ると、"ブロンド"とか答えてる。こっちから"結婚してます"なんて言うつもりはなかったけど、僕は"結婚してません"とは一度も言ってない。僕だって他人の家の記事なんか読みたくなかったし。

ブライアン・エプスタイン　僕はまずレザー・ジャケットをやめるように勧めた。そのあとすぐに、ジーンズで出るのも禁じた。それからステージでセーターを着せ、やがて、彼らはすごく嫌がったけれども、スーツを衣装にさせた。よく覚えていないが、初めてスーツを着たのはBBCでライブ客を前に演奏した時だったかもしれない。

ポール　ブライアン・エプスタインと出会った頃は、僕らはまだレザーを着てた。でも写真撮影をする時になって、みんなが"レザーだとイメージがハードすぎるんじゃないか"って言い出したんだよ。エージェントもみんな同じ意見だった。アストリットさえ、スーツ姿の僕らを写真に撮るようになった。結局、何となくブライアンに説得されてスーツを着るようになったんだ。彼はけっこう賢いことを言ったよね。"僕がでかい仕事をとってきても、革ジャン姿の君たちでは認めてもらえないだろう"。僕にはそれが悪いアイディアとは思えなかった。ゲーツヘッドの労働者みたいに全員似た格好をするべきだという、僕の"ゲーツヘッド・グループ"哲学に合ってたからね。それにモヘア・スーツはちょっと黒人グループっぽいじゃないか。
　あとから僕がバンドのレザーのイメージに背いたってことにされたけど、僕は誰かを洋服屋へ引っ張っていった覚えなんてないよ。僕ら全員、けっこういそいそとウィラルへ行き、ボノ・ドーンという小さな店でモヘアのスーツを買ったんだ。そこからイメージが変わっていった。まだ革もちょくちょく着てたけど、ちょっと洒落た場所ではスーツにした。キャバレーでのギグにはスーツ。僕らはまだ大きな世界の入り口に来たばかりだった。キャバレーはギャラがよかったからね。そしてそのうち、ハンブルク時代に終わりが来たんだ。

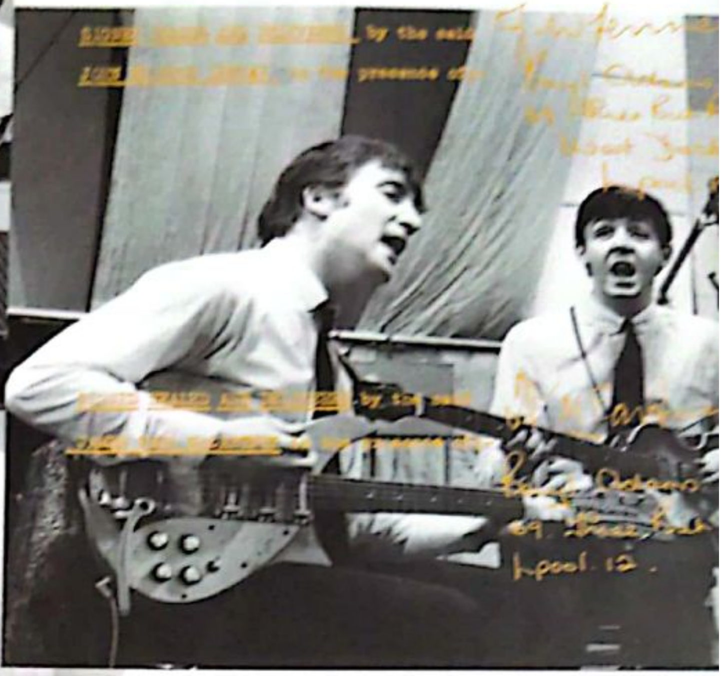
ジョン　リバプールを出て、南部あたりでレザーを着てると、ダンス・ホールのプロモーターなんかに嫌がられた。ゴロつきの集まりみたいだって思われたのさ。それでエプスタインが言い出したんだ、"ねえ、スーツを着ればこれだけの金になる……"。それにみんな、仕立てのいい、シャープな黒のスーツが欲しかったんだ。革とジーンズも好きだったけど、いいスーツも欲しかったんだよ。ステージ以外で着るためにもね。それで言ったんだ、"ああいいよ、スーツを着よう——金を出してくれるなら、ブカブカのラッパズボンでもはいてやる。革なんて、そんなに好きじゃないからね！" 1975年

ジョージ　みんな僕らの格好が好ましくないと思ったんだろう。今だって、革ジャン着て長髪の若者は半端なフーリガンみたいに思われる。でも普通の若者なんだよ、それが若者の好むファッションなんだ——革というやつはね。僕らの場合も同じだ。黒のTシャツに黒の革ジャンで汗臭い感じで、実際、フーリガンみたいだったろう。
　ブライアン・エプスタインはアッパー・ミドル・クラスの出だったし、僕らがラジオやテレビのプロデューサーとかレコード会社の人間からいい印象を持たれるようにしたかったんだ。金をもらえて、ギグが増えるなら、僕らは喜んでスーツに着替えた。

リンゴ　**僕らをちょっとばかりスマートにしただけで、
彼は僕らのイメージを変えてしまった。
僕のイメージはすっかり変わったよ。
それまで僕は髪をテディ・ボーイみたいに
まっすぐ後ろへ流し、トニー・カーティス気取りで、
髭もはやしてた。それが突然、"髭を剃って髪をおろせ"
だもんね。言われたとおりにしたけど。**

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



ポール　ジョンはあとになって彼が反抗する側で、僕が彼を型にはめようとしてた、みたいに考えていたようだけど——そんなのくだらないよ。僕らはみんな揃って、ストレートなイメージに変えたんだ。僕が彼の髪を切ったわけじゃない。彼のタイが曲がってようとボタンを開けてようとどうでもいいさ。写真を見てごらんよ——どれを見たって、ジョンはしかめ面なんかしてないだろう!

ニール・アスピノール　1962年頃にもなると、彼らはリバプールとかマンチェスターとかの、北西部ではかなりビッグな存在になっていた。1956年からグラナダTVは地方局を置いていてね、「ノウ・ザ・ノース」はそのローカル番組だった。ビートルズの噂を聞いて、キャバーンへ撮影に来たんだよ。リンゴがバンドに入ったばかりの頃だったから、客席の野次も入ってる。

ジョージ　あの年の8月、グラナダTVがキャバーンへ来たのを覚えてるよ。すごく暑い日だったけど、僕らはきちんとした格好をするように言われた。シャツにタイに黒のセーターで、かなりスマートに見えたね。あれがテレビ初出演だ。当時じゃすごいことだったよ、テレビ局が僕らを取材に来るって興奮——ジョンだって夢中になってた。

ポール　9月にリンゴも一緒にロンドンへ行き、もう一度EMIで演奏した。この時は契約もしてたんだよ。

僕らにとっては、あの世界への序奏だった。僕らは裏口から入って、自分たちで機材を準備した。10時に入って10時半ジャストには準備を整え、1時半までに2曲やることになっていた。それから昼休みが1時間(ランチは自腹)。僕らはセント・ジョンズ・ウッドの裏手にあるアルマ・パブへ行った。僕らは若くてパブは大人の場所だったから、もっと上に見えるようにと煙草吹かして、半パイントのビールにチーズ・ロールを注文した。当然ながらセッションのことばかり話してたね。昼休みが終わるとスタジオに戻り、2時半から5時半までやる。それがメインのセッションだった。昼間のセッション2日だけで、4曲を完成させなきゃいけないんだ。

すごくいいテイクだったりすると、"コントロール・ルームで聴いてみるかい?"と言われることもある。"え、僕らが? あんな雲の上のような場所へ行っていいの?"って思ったよ。それまで自分たちのサウンドをちゃんと聴いたことがなかったんだ。ヘッドホンで"ライブ"の音を聴いたことはあるけど、スピーカーを通すと最高だったね。"わあ、レコードみたいだ! もう一度やろう、何度でもやろう!"。それから僕らはレコーディングというドラッグ中毒になった。

ジョンと僕とでアルバム用の曲を書くようになってからも、いつもそれが頭にあった。"あの時の興奮覚えてる?　もっといいものが作れるようにがんばろうぜ"って思った。

ジョン　ブライアンとポール対僕とジョージで、しょっちゅうケンカしてたよ。1970年　ブライアンとポールはいつも髪を切れって僕に言うんだ。1969年　あの頃、普段は写真で見るより長かったんだよ——たいてい撮影用にカットしてたんだけど、プライベートな写真ではかなり長いまま映ってる。グリースで後ろに撫でつけて、だらりとさせてさ。テディ・ボーイは髪が長かった。トニー・カーティス気取りの奴らはどんどん頭が膨らんでいったよ。美容院に行かないからね。かなり節ぎっていたな。1975年

ブライアンがきちんとしたスーツにシャツを着させようとすると、ポールはすぐ彼に従った。僕のちょっとした反抗は、タイをゆるめてシャツの一番上のボタンを開けることぐらいだったけど、それでもポールがやってきてちゃんとしろって言うんだ。僕はジョージを味方に引き込んで、一緒に反抗しようとした。"なあ、こんなスーツなんかいらないよ。こんなもん捨てちまえ"ってよく言ってたね。

僕らが初めてテレビに出た時の映像を見たよ。グラナダTVが僕らの取材に来たんだ。僕らはスーツを着て映ってる。あれは僕らじゃない。あのビデオを見てわかったね。あの時から僕らは自分を裏切り始めたんだ。1970年

ジョージ
ジョンはスーツがあんまり
好きじゃなかったみたいだ
—僕もそうだった—
でも僕らはもっと仕事が
ほしかった。それにはこういう
ことも必要だってわかったのさ。
当時はみんな、
今よりお堅かったんだよ。
業界全体がそうだった。

CamScannerでスキャン

の返事をくれた。僕らはオーディションを何度かやってたし、ジョー
てみる気になってたからね(でも、僕らが北部出身だというんで、
応をしてたけど)。
た9月、ジョージ・マーティンのために何曲かやったんだ。「プリー
ったよ。僕がなぜ覚えているかというと、レコーディングの時、僕
手にタンバリン持って、バス・ドラムをやってたから。そのせいで、
ドゥ」のレコーディングに行った時、ジョージ・マーティンは"プロ"
ったんだと思うな。どっちみちピート・ベストの代わりってことで、
ことになってたんだけど。ジョージはもう危険な橋を渡りたくなか
ょうど僕がはさまっちゃったわけ。
信頼されてないってわかって、僕はがっくりきたね。やる気満々
ラマーがいるから"って言われたんだ。ジョージにはその後何
はひどいよ——あのことを僕は何年も恨んでた。いまだに完全
!

ー・ドゥ」のシングルではアンディがドラムをやってる——アルバ
アンディはそんなにたいしたことしてないから、アルバム用にや
った。その後はすべて僕がドラムをやってるよ(まあ、「バッ
曲は除くけど)。

ポール　なんてことだ! ジョージ・マーティンはリンゴを気に入らなかった。確かにあの
頃のリンゴは、あんまりビートが正確じゃなかった。今じゃ完璧だけどね。いつだって彼
の貢献度はすごく大きかった、だからこそ僕らは彼を望んだんだよ。でもジョージから
すれば、セッション・ドラマーほどきっちり正確じゃなかったわけだ。それでリンゴはデビ
ュー・シングルから外されてしまった。ジョージが"ちょっといいかな?"って来てね。
"何?"—— "いや……リンゴはやめよう"。彼はこう言ったんだ、"このレコードでは別
のドラマーを使いたい"。
　その決定を受け入れるのはものすごく辛かった。"リンゴがドラマーでなきゃ困る。僕
らは彼を失いたくない"って言ったんだよ。だけどジョージは譲らなくて、結局、リンゴ
はデビュー・シングルで叩けなくなった。彼がやったのはタンバリンだけだ。
　リンゴはずっとあの痛手を乗り越えられなかったと思う。リバプールに戻ると、みんな
に"ロンドンはどうだった?"って訊かれるだろ。僕らはいつも、"B面はいいよ"って言って
た。リンゴはA面が好きだとはどうしても言えなかった、自分が参加してないんだからね。

ニール・アスピノール　9月4日と11日のセッションで、ビートルズはミッチ・マレーの「ハウ・
ドゥ・ユー・ドゥ・イット」をやるように言われた。それが当時のやり方だったんだ。ソング
ライターと版権業者がくっついていて、版権業者はレコード・プロデューサーと知り合い
で、プロデューサーはこれをレコーディングしろってバンドに渡す。でも、ビートルズは自
分たちの曲をやりたいって言ったのさ。

ポール　ジョージ・マーティンが、音楽業界はソングライターとバンドで成り立ってるって言うんだ。普通はディック・ジェームズのような版権業者とプロデューサーがつるんで、何曲かバンドにオファーする。でも、僕らは自作の曲をやるグループとして出ようと思ってたんだ。

ミッチ・マレーはいろいろ曲を書いてて、「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ・イット」も彼が作った。僕らはデモ・テープを聴いて、"これはヒットするよ、ジョージ。だけど僕らには「ラヴ・ミー・ドゥ」って曲がある"って言ったのさ。"君たちの曲ではあまりヒットしないと思う"とジョージは言った。"そうだろうね、でもこれが僕らなんだよ、これが僕らのやろうとしてるものなんだ"って僕らは言ったんだ。"僕らがやろうとしてるのはブルースで、ラ・デ・ダ・デ・ダって感じのじゃない。僕らは学生気質で、アーティスト志向の人間だ――そういう曲じゃリバプールに帰れないよ、笑われちゃうよ。「ラヴ・ミー・ドゥ」なら地元のみんなにも聴いてもらえる。僕らが尊敬するグループ、ビッグ・スリーのような人たちも、これなら気に入ってくれる"。他のバンドに笑われたくなかったのさ。だけどジョージは、彼の選んだ曲ならヒットになると言い張る。それで僕ら、"わかったよ、じゃあ覚えてくる"って答えた。

僕らはリバプールに戻って、そこそこアレンジをして、「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ・イット」をレコーディングした。ジョージ・マーティンは"これならNo.1になる"って言った。だけど僕らが嫌だって言い続けるので、ジョージもついに折れてジェリー&ペースメーカーズに譲ったんだ。ジェリーは僕らのデモに忠実にレコーディングして、初めての大ヒットを出したよ。

ジョージ　それまでもステージでは「ラヴ・ミー・ドゥ」をやっていて、すごく反応がよかった。あれもポールとジョンの曲だよ。僕らはあれをやりたかった。勧められた曲の方はすごく古臭い感じだったし。

ジョージ・マーティンは両方聴いて、「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ・イット」をセカンド・シングルにまわしてもいいと思ったんだろう。だけど僕らがすぐに「プリーズ・プリーズ・ミー」を作っちゃったから、それで話は消えたのさ。

ジョージ・マーティン　あの当時はティン・パン・アレイへ行って版権業者の持ち歌を聴き、アーティストにふさわしい素材を見つけるのが当たり前だった。私の生活では日常生活の一部になっていたんだよ、長い時間をかけて曲を探すことがね。ビートルズにはヒット曲が欲しかった。「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ・イット」ならヒットすると私には確信があった。これといって出来のいい曲ではなく、私が聴いた中で最も優れた曲というわけではなかったが、多くの人にアピールする本質的なものが含まれていると思った――実際にレコーディングもしたんだ。ジョンがリード・ボーカルでね。彼らはやりたがらなかったが、いいレコードになったし、あれをファースト・シングルとして出す寸前まで行ったんだよ。

結局は「ラヴ・ミー・ドゥ」にしたが、彼らにせっつかれて「プリーズ・プリーズ・ミー」の別バージョンを聴かなかったら、私は次に「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ・イット」を出していただろうね。

リンゴ　EMIで覚えていることというと、ドラムも叩かせてもらえずに気が狂いそうになったこと以外では、僕らみんなが"自分たちで書いた曲をやりたい"っていうスタンスを貫きとおそうとしていたことだね。それには相当性根を据えてがんばらないといけなかった。だけど僕より他のみんなの方がしっかりしてたよ。僕はまだ新参者だったから、"行け、みんな、がんばれ"って応援してただけさ。

僕はまだ自分の居場所を見つけようとしているところだった。でも大したもんだね、彼らは頑として、与えられた曲は嫌だって突っぱねた。今思えばすごくあっぱれな態度だよ。あんなちっぽけなビニール盤のために、みんな魂を売るっていうのに。クリフ・リチャードなら断ってなかったと思う。クリフは自分で曲を書いたことなんてないしね。ディッキー・プライドとかビリー・フューリーとか、ああいう手合いはみんな曲をもらって歌うだけだった。

ジョージ　「ラヴ・ミー・ドゥ」をリリースしたら、すごく売れたんだ。チャート17位まで行ったんだよ。ほとんどは地元で売れたんだけどね。ビートルズのファンはもうかなりの数になってたんだ。僕らはウィラルやチェシャー、マンチェスター、リバプールと、あちこちまわってたから。すでにけっこう人気があったわけで、つまりあのセールスは本物だったのさ。

ラジオで初めて「ラヴ・ミー・ドゥ」を聴いた時には、体中ゾクゾクした。生涯最高の快感だね。木曜の夜7時半くらいにラジオ・ルクセンブルグでかかるってことは、僕ら知ってたんだ。僕はスピークの自宅にいて、家族みんなで聴いてたよ。最高だったな、でも、17位になってからどうなったかは覚えてないんだ。自然と消えちゃったんだろうね。だけどチャート入りしたおかげで、次にEMIへ行った時はみんなが愛想よくなってた。"やあ、こんにちは。どうぞどうぞ"みたいにさ。

リンゴ　「ラヴ・ミー・ドゥ」が出た時、ブライアンがオンエア用テープ・リストを見せてくれた。僕らの曲が6時45分だか6時26分だかにかかるはずだから、その時は車を停めて聴くようにって(僕らはいつでも動いてたから――移動中とか、仕事中とか)。あれはゾクゾクしたよ。

ニール・アスピノール　ウィラルだかバーケンヘッドだかでギグをやってる時に、「ラヴ・ミー・ドゥ」が5千枚売れたって聞いたんだ。ジョンの反応を覚えてるよ。"まあ、こんなもんさ――これ以上何が望みだ?"。

ジョン　2日でチャート入りしたもんだから、これはイカサマだろうってみんな思ったのさ。最高だね。僕らのマネージャーの店は電品の山だったから、南部の連中は誰もが考えた。"ははあ、彼が自分で買ってるか、でなきゃチャートを操作してるに違いない"。でもあれはほんとだったんだ。1963年

リンゴ　「ラヴ・ミー・ドゥ」は1位にはならなかったけど、それでもすごく嬉しかったよ。だって僕らが望んでたのはビニール盤を出すことだけだったんだ――初めて作ったレコードが、どこかの店のどこかの棚にあるんだよ! でも次はNo.1になりたくなった。どっちも重要なことだったんだ。

1962年の末までに「ラヴ・ミー・ドゥ」は10万枚売れた。そのほとんどがリバプールだ。今でも僕らの家にどっさりある(ジョークだよ)。

ポール　僕らに初めてメイクを教えてくれたのはテッド・テイラーだった。あの年の末、僕らはピーターバラのエンバシー・シネマに出演した。すごい格下のランクでね、フランク・アイフィールドよりも、テッド・テイラー・フォーよりも下だった。テッドはピアノの端におかしな小型シンセサイザーを取り付けていた。「スーティ」みたいな曲もそれで演奏できるんだ。彼はそれを使って「テルスター」をやってた――オーディエンスはシンセ・サウンドに夢中になってたよ。そのテッドが言ったのさ、"君たち、ちょっと顔色が悪く見えたよ。メイクするといい"。どうやってやるのか訊いたら、"パンケーキってものがあるんだ。ドラッグストアで買えるよ。ちょっとつけて塗ると、日焼けしたような色になる。それから目のまわりに黒いラインを入れて、唇も塗る"。"そういうのってちょっとずるい気がしない?"って言ったんだ。すると彼、"大丈夫、誰にもわかりゃしない。それで見映えもよくなるんだからさ"。

ジョージ　テッド・テイラー・フォーは「サン・オブ・ホンキー・トンク」というレコードを出してたグループだ。彼らの楽屋へ行ったら、"パンケーキ"って呼ばれてたステージ用のメイク道具があってさ。僕らもそういうのやった方がいいんじゃないかと思ったんだ。ライトは強いし、それに僕ら、ステージではみんなそういうことをするんだろうと思ってた。それで塗ってみたら、アウトスパンのオレンジみたいになった。その時の写真があるよ。ジョンもアイシャドウに黒いアイライナーをしてる。オレンジ色のでかい顔に真っ黒な目だ。

ポール　それからすぐに、僕らはブラックプールのギグ用にポスター撮影をすることになった。海賊版ポスターが出まわってたんだよ(つまり、明らかに僕らはかなり人気が出てきてたってことだ)。それでポスター会社が、公式のポスターを作るべきだと言ってきたのさ。それで彼らが作ったのが4つの四角――それぞれにひとりずつ入ってる。僕らの目は真っ黒く縁どられてる。あの汚点は一生消えないよ!

ニール・アスピノール　ブライアンは自分でショーのプロモーションを始めた。そうすれば自分の手持ちのバンドを出すことができるわけさ。ニューブライトンのタワー・ボールルームみたいな会場を借りて、リトル・リチャードのようなスターをひとり連れてくる。どうせ彼はイギリスをツアーしてたんだし。ブライアンはロンドンのエージェントに電話して、リトル・リチャードをメインでタワー・ボールルームに出演させる契約を結んだ。同じステージに――これは1962年10月12日のことだ――ビートルズ、ジェリー&ペースメーカーズ、アンダーテイカーズも出ていた――リバプールのバンドばかりさ。でも格付けとして、ビートルズは常にそういう大スターに次ぐ位置を占めていた。

ジョン　ブライアンは落ち目になってるロック・スターを連れてきた。ジーン・ビンセントとか、リトル・リチャードとかね。けなすつもりはまったくないけど、事実彼らが来たのはそういう理由なんだ。ブライアンは彼らと僕らを一緒に出した。彼らに次ぐランクとしてね。つまり彼らを使って人を集めたわけさ。

みんなには想像つかないと思うけど、僕ら4人は偉大なロックン・ローラーを生で見られるってだけでもわくわくしてたんだ。彼らふたりは憧れの存在だったんだから、もう全身が痺れそうだったよ。ついでに言うと、リトル・リチャードのバックでオルガンを弾いてたのがビリー・プレストンだった。あの頃の彼は10歳くらいに見えたよ。1975年

ジョージ　リトル・リチャードとは、僕らが11月に4度目のハンブルクへ行った時も一緒だ

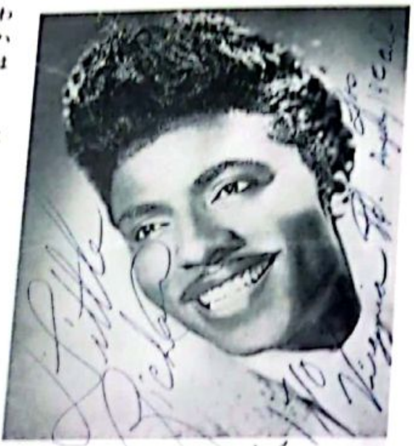
ポール
あれを拒否したのは、
いかにも僕ららしかったね。
もうひとつ僕らがきっぱり
断ったことがある。
あの少しあとだけど、
ブライアン・エプスタインに
こう言ったんだ。
"アメリカでNo.1になるまで、
アメリカ・ツアーはしない"。
僕らは待った。僕らのとった
行動の中でも、一番賢い
戦略だったと思うね。
僕らほんと生意気だった。
でもそれはクリフ・リチャードを
見ていたからだ。彼はアメリカへ行って
コンサートをやった時、
出演者の中で3番目の
位置づけだったんだ。
フランキー・アヴァロンより下だよ。
僕らは思った、"嘘だろ、クリフは
アヴァロンよりビッグだ!
どうしてこんなことになるんだよ!"。
アダム・フェイスもそうだった――
僕らが尊敬してた昔のスターたちは、
みんなひどい格下扱いだったんだ。
だから僕らは言ったのさ、
"向こうでNo.1になって、
ヘッドライナーを
飾れないかぎりは行かないよ"。

CamScannerでスキャン

った。その頃は僕らの待遇もよくなっていてね。どのバンドも新しいフェンダーのアンプが使えたし、僕らはホテルに個室を取ってもらえた。レーパーバーンのちっぽけなホテルだけど、それでも自分たちの部屋があったんだ。ハンブルク以前にもブライアン・エプスタインがリトル・リチャードを僕らと一緒にリバプール・エンパイアやニューブライトンのタワー・ボールルームに出してたから、僕らは彼にちらっと会ってはいた。

あの頃のハンブルクはほんとに活気にあふれてた。ああいうクラブはドリンク代とか入場料とかでかなり金を儲けてたね。ショーは4回あったから、ひと晩で4回分の客を入れることができた。

ジョン　僕らはハンブルクのスター・クラブのバック・ステージで、立ったままリトル・リチャードの演奏を見てた。彼がやってきて話をすることもあったよ。彼はよく楽屋で聖書の朗読をしてくれてね。僕らは彼の声を聞くだけのためにまわりに座って耳を傾けていた。ブライアン・エプスタインが彼をハンブルクに連れてきたんだ。僕は今でも彼が大好きだよ、彼は最も偉大な人物のひとりさ。1975年



LITTLE RICHARD

sings on Star Club Hamburg-St. Pauli

リンゴ　11月、12月と続けて行った。最後に行った時、どこに泊まったかは覚えてないな。霧がかかっちゃってるみたいで。滞在場所はどうでもいいんだ、とにかくあそこの生活はクールだったよ。相当狂ってたけどね。僕はそれまでにもロリー・ストームと行ってたし、グループと離れてトニー・シェリダンと組んだこともあった(1カ月彼とステージをやったんだ)。そして今はビートルズと一緒だ。すごくいい気分だったね。もうあそこが故郷みたいになってたよ。

リトル・リチャードはビリー・プレストンとスター・クラブに出てた。あの時、ビリーは16歳だったけど、すばらしかったね。もちろん今もすばらしいよ。僕はリトル・リチャードをひと晩に2つ、6日間ずっと見てた。ほんと最高だった。僕らの前でちょっとリキんでたけど──舞台脇で僕らに見ていてほしかったんだ。その頃には彼も僕らの噂を聞いていたからね。

僕らはまだ22で、まだプレルーディンにハマってて、酒も大量だった。だけど何をやろうと、ステージでプレイしてるかぎり許してもらえたんだよ。ドイツ人にとって許せないのは、ステージに出てこないことだ。どんな精神状態だろうと、プレイが続けられればいいんだ(僕らは続けてた)。

ステージでは楽しいハプニングがあったね。僕らはステージの上でものを食べたり煙草吸ったり、汚ない言葉を吐いたりしてた。僕は何度か下着姿で出たこともあった。それもわりと大きなクラブでね。スター・クラブだ。ジェリー&ペースメーカーズとかリバプールのバンドがずらりと来てたときさ。あの時は僕らすごく客を煽ったね。僕は首に便座かけて出たりした。やりたい放題だよ。完全に頭がおかしくなってた上、ドラム・ソロまでやって──ドラムなんか叩けないさ、いまだにできない──ジェリー・マースデンが演奏してる時にね。1972年

あの頃までは、客に向かって暴言吐くのも当たり前だった。向こうも意味はわからず返してくるけど、それでもみんな僕らを好きだったんだよ。ドイツ人全体がどうか知らないけど、ハンブルクのドイツ人、僕らのまわりにいたホルスト・ファッシャーとか、あと何人かは、ほんと荒っぽかった──いま何人生きてるかなあ。

どんな気分だろうと、とにかく演奏を続けなきゃいけなかった。ミュージシャンが"ぶちのめしてくれ、もうやりたくない"って言うのをよく聞いたよ。だってどっちみちぶちのめされるかもしれないんだ、ステージで蹴りを入れられるかもしれない。僕らがイギリスに戻る段になると、いつでもみんな泣くんだよ──あれには驚いた。ハンブルクの人たちはすごく感じやすいんだ。僕らがいる間はタフガイなのに、僕らが帰る時になると、あのでかい図体のドイツ人が泣きながら"行かないでくれ"って。ホルスト・ファッシャーなんか、すぐに泣き出すんだから。悲しい雰囲気一色になって、"マック・シャウ、ちきしょう、がんばれよ"って。忘れられない奴らだよ。

……ャーというグループに、ハリーという男がいたんだ。ちょっと嫌気がさして、クラブの舞台脇で休んでた。明らかに、僕らほど熱心でもなけりゃ野心もない。演奏を続けたくないもんだから、いつもみんなにぶちのめしてくれって。僕はそれがどうも理解できなくて、こう思ったのを覚えてる。"うんざりだけど、グループの一員なのにステージを続けたくないなんて──そいつは僕らがぶちのめしてやるべきかも!"

……けで起きなきゃならない。1錠飲んだらあとは延々続くんだ、1日も……。疲れでだんだん頭がおかしくなってくる、ここから逃げられたらと思う。だけどリバプールへ戻ると、思い出すのはハンブルクで……だからまた行こうって気になる。でもさすがにあの最後の時には……なくなった。1972年　うっとうしくて窮屈な気がしてきたんだよ。いつでもこれでやめようと思ってたね。ステージに疲れて、もう荷物まとめて帰ろうと思うと、もう次のステージになっちゃうんだ。

僕らはハンブルクのステージをやり抜いた。もうこれでやめにしたかった。あの最後の2回は、ハンブルクに戻るのが嫌だったんだよ。もうあそこはうんざりだった。ブライアンが契約を守らせるために僕らを行かせたのさ──僕らの好きにやってたら約束も反故にしてただろう。そこまでの義務はないと思ってたから。──僕らがあそこのクラブを世界的なクラブにしてやったんだ。1972年

ジョージ　ビートルズのためにひとつ言っておくと、僕らはいつだって契約を大事にしたんだ。何年もの間、僕らの出すレコードはすべてNo.1になってた。それでも以前に契約してあるから、小さなダンス・ホールで半年仕事しなきゃならなかった。ひと晩80ポンドだよ、その頃の僕らなら5千ポンドは稼げたはずなのに。でも僕らは契約を守った。なぜなら僕らは、というよりブライアン・エプスタインは、紳士だったからさ。僕は"ああ、そんなのいいから、代わりにロンドン・パラディアムでやろう"なんて言わなかったんだよ。

リンゴ　ブライアンはほんとにクールな奴だった。僕らはどのギグもちゃんとやった。バーミンガムのくだらないクラブでも演奏したよ、契約だからね。今じゃよかったと思う。ちっぽけなクラブを放っぽりだして、"かまうもんか"ってパラディアムでやったりしなくてさ。僕らは高潔なバンドだった。ブライアンはほんとに高潔な人間だったよ。

ジョン　ハンブルクでの僕らの話、尼さんに小便かけたとかそういった話は、すごく大げさに膨らまされてる。まあいろいろあったんだよ。事実はどうだったかというと──僕らの部屋にはベランダがついていてね──ある日曜の朝、僕らは通りに向かって小便してた。ちょうどみんなが教会へ行くところでね。たまたま尼さんもそこを通りかかったわけだ。いつもと同じ日曜の朝だ。クラブのあたりもみんながうろうろしてて、中には3〜4人、立ち小便してるのもいたわけだよ。1972年

ジョージ　ハンブルク時代、ハンブルクとイギリスを行き来して、マージーサイドでだんだん名前が知られるようになってきた頃、あの頃が最高だったと思うよ。だけどハンブルクの方がエキサイティングではあったな、メルセデス・ベンツのタクシーとナイト・クラブと。いろんなことがあったよ。なんだかあの頃を思い出すと、50年代のモノクロのジャズ映画みたいだ。

あとになって考えると、ビートルズの一番いい時期はハンブルクを境に終わってたんだね。確かに当時の僕らは何の贅沢もできなかった。バスルームももらえなきゃ、着るものもない、すごく汚ない姿だったよ。金の余裕なんて全然なかったからね。だけどその反面、僕らはまだ有名になってなかったから、名声につきまといろんなくだらないものを相手にしなくてすんだ。僕らは僕ら自身でいられたし、好きなことを何でもやれたんだ。何をしたって、それが新聞に出ることはなかった。やりたければ誰に小便ひっかけてもかまわなかったのさ、実際にはそんなことしなかったけどね(ジョンは尼さんに小便ひっかけたりしてないよ──僕らは朝の4時半くらいに、誰もいない道路に向かってベランダからオシッコしただけさ)。僕らはその辺の人たちとまったく変わりがなかった。だからすごく楽しく、ロックだけやっていられたのさ。

ポール　ハンブルクにいる頃、僕らは"すべておしまいになった場合を考えて、ここで金を貯めておかないと"って思ってた。でも、まるで貯まらなくて、僕は心配だったんだ。自分たちの仕事に見合う金をもらえず、やりたくない仕事までやらされて、それでも貧乏なままで終わるんじゃないかって。1965年

ハンブルクは確かに、若き日のすばらしい思い出だ。だけど何でも時とともに美化されていくものだと思う。すごくエキサイティングな時期ではあったけど、僕にはもう少しあと、レコードがちょっと売れだした頃の方が楽しかった気がするな。

ジョン　僕らはいつでもハンブルクやキャバーンやリバプールのダンス・ホールの話ばかりしてる。なぜかというと、音楽的にはその頃が僕らの一番乗ってる時期だったからさ。1972年　あの頃の僕らはパフォーマーであり、僕らが生み出すものはすばらしかった。ストレートなロックをやらせたら──イギリスで僕らにかなう奴はいなかったよ。

(劇場でコンサートをやるようになると)1、2時間やっていたのを20分に縮めなきゃならなかった。それで毎晩、同じ20分の繰り返しだ。1970年　いきなりすべて20分以内ですませなきゃならなくなり、ヒット曲を全部やらなきゃならなくなった。それにそういうライブ会場は数千人しか入らないから、ひと晩に2回しかやらないのさ。1972年

クラブ時代はいつだって懐かしいよ。その後僕らは優秀なテクニックを持つレコーディング・アーティストになった。これはまた別の段階だ。僕らは自信を持っていた。それにどんな環境に入れられようと、僕らは価値のあるものを生み出せるんだ。1970年

NEMS ENTERPRISES present
B 75
BAND PASS
LITTLE RICHARD
AT
THE TOWER
FRIDAY 12 OCTOBER 1962
7-30 p.m. to 1-0 a.m.
Late transport to all areas
A Bob Wooler Production
Billy Kramer with The Coasters
The Dakotas with Pete MacLaine
The Four Jays
Lee Curtis and The All Stars
The Mersey Beats
Rory Storm and The Hurricanes
…ARS

1963

nineteen sixty-three

CamScannerでスキャン

ポール　最初は、アコースティック・ギターから始めたんだよ。人からものは借りちゃいけないってしつけられたからね(父から仕込まれた道徳だ)。初めてエレキに移行した時、ロゼッティ・ラッキー・セヴンを買わなければならなかった。ひどいギターだったけど、安かったし、なんと言ってもエレキ・ギターだった。僕はこのギターを、小さなエルピコのアンプ(今でもまだ持ってる)に通していた。ベークライト製の、いかにも50年代風のデザインでね。このエルピコは、ほんとはギター・アンプじゃなかった。入力端子がマイク入力とフォノ入力(レコード・プレイヤーからの入力)しかなかったんだ。でもマイク入力につなげば、そこそこの音が出た。これと、そのちゃちなエレキを、ハンブルクに持っていったわけ。ひと月ぐらいはなかなか役に立ったんだけどね、そのうちギターが汗でやられてしまった。それでも3日間は、見た目もまあまあきれいで、問題なさそうな気がしたけど、だんだん塗装が剥げてきて、しまいにはバラバラになってしまった。ある日、誰かが壊してしまったんだ。振りまわすか何かしてね。どのみち、長持ちするものじゃなかったのさ。格好だけの安物だった。実際、壊れるように設計されていたんじゃないかと思うよ。初めっから、もろい作りだったんだ。

ハンブルクで楽器なしじゃどうしようもないから、カイザーケラーのステージに備えられていたピアノを弾くしかなかった。僕は観客と向かい合わせに立つことに慣れていたから、これで観客に背を向けて音楽だけに専念する口実ができた。それがよかったね。レイ・チャールズのB面「ドント・レット・ザ・サン・キャッチ・ユー・クライング」などの曲ができるようになった。こういう期間があったのは、僕にとっていいことだった。ピアノはかなり上達したと思う。この時期以来、僕は他のメンバーより少しピアノがうまくなった。

だからほんとは、アコースティック・ギターが僕の楽器なんだよ。もともと、それから始めたんだからね。でもアコースティックからロゼッティ・ラッキー・セブンに替え、さらにピアノもやった。その後スチュアートがバンドを脱けるとはっきりした時、僕がスチュのやってたベースを引き継ぐことになった。それで僕はまた前に立つことになったんだけど、別にそれを望んでたんじゃないんだよ。うしろにいるのはすごく楽しかったんだもの。あの頃の僕はすごく単純なベース・ラインを時々刻む程度で何とかしのいでたんだ。

当時は実際にピアノの弦を切ってベースの弦にしていたんだよ(今聞いたらそんなの無理だと思うけど、あの頃はやってたんだよね)。たとえばA弦が必要なら、ピアノの上に乗ってビンビンビン——Aだ!って。目指すものが見つかったらペンチで、引き抜いて、"おかしな弦だって誰も気がつかないさ"って、それをベースに張っちゃう。うまくいくこともあったけど、ほんとはやっちゃまずいよね。それにたぶん、ギターに相当な負担がかかると思う。だけどあの頃と今とじゃまるっきり違うからね。今はローディが予備の弦をトランクいっぱい持っててくれる。昔は誰だって1パックしか持ってなかった。弦は二の次だったんだよ。1本切れたら他の3本(ギターの場合は他の5本)だけで弾いた。切れちゃった弦は無視して、"そのうち手に入れよう"らいに思ってたね。

ジョージ　最近ではドラムの音もPAに通し、ベースにはちゃんとした専用のアンプを使うようになっている——でも僕らが持ってたのは、小さなアンプ数台だけだった。それこ今、ギター弦のゲージ(太さ)は59種類もある。僕らの場合は"君の弦、ちょっとくれる?"って感じだった。当時の僕らは、エレキ弦とアコースティック弦の違いもわかっていなかったんじゃないかな。どれも電話線みたいで、とても太くて曲げることさえできなかった。あまりいい音が出るとは思えないよね。

ール　とにかく、その後しばらくして、僕は自分のベースを持とうと決心した。ハンブクの中心地に小さな楽器屋が1軒あってね。時々店の前を通ってバイオリン形のベーを見ていたことを、今でも思い出すよ。バイオリン形というだけで、十分に僕の興味をそそった。それに、左利きの僕としては、左右対称なのが気に入った。左右対称だから、逆向きに持ってもあまりおかしくなかったんだ。僕が買ったのは小さなヘフナーだった。即金で買ったんだ。ポンドに換算して、だいたい30ポンドぐらい。当時ですら、かなり安い値段だった。

ここで決まったのさ。これがきっかけで、その後、このベースがトレードマークみたいなものになる。すばらしい楽器だよ。それにすごく軽いから、ベースを持ってるって感じがしない——それってかなりの開放感だよ。実際それで違いが出てくるんだ。

つまり軽いおかげでギターに近い感覚で扱えるんだよ。僕はいつの間にか他のベース・プレイヤーよりメロディアスなベース・プレイをやるようになっていた。12フレットの高音をたくさん使えたからさ。僕はメロディ重視の曲作りをするから必ずしもルート音を弾かなくてすむというのは都合が良かった。それにさ、でかいベースを弾くにはもうちょっと筋肉をつけなきゃね!

まあとにかく、メロディアスだってことと、この楽器がすごく軽量で、なおかつすごくベースっぽい音が出せるってこと、そういう要素が全部うまくハマッて、ある種のサウンドが生まれることになった。ほんと、幸運ってやつだね。「サージェント・ペパー」時代にリッケンバッカーをもらった時(これはヘフナーよりちょっと重くて、エレキっぽさもちょっと上だけど)。僕はすでにメロディアスなスタイルを確立していた。「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」や「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」なんかに、かなりおもしろいベース・ラインが出てるだろう。

何年かすると、僕はヘフナーをケースにしまい込み、過去のものとして葬ってしまった。だけど、『レット・イット・ビー』の映画の屋上のシーンを見たら、なんと軽やかにベースを弾いていたのだろうって気がついてね、すべてが甦ってきた。"ああ、そうだった。あのベースのそんなところを愛していたんだ"。

リンゴ　いつだってドラマーが雰囲気を決めるのさ。僕はそういうつもりでプレイしてたと思う。それにベースにはポールがいるだろ——驚異のベース・プレイヤーだね。今に至るも、彼ほどメロディアスなベース・プレイヤーはいない。——僕らはベースとバス・ドラムを合わせてた。このふたつが揃ってさえいれば、その上に何だって重ねられるんだ。僕はひとつだけルールを決めてる。歌い手に合わせるってことだよ。歌があれば、ほんとは何もやる必要ないんだ。曲をまとめておけばいいんだよ。僕のプレイを聴けば、僕がドラムと一体になって、曲の雰囲気を奏でようとしてるのがわかってもらえるんじゃないかな。たとえば"Four thousand holes in Blackburn, Lancashire"(ランカシャー州ブラックバーンに穴が4000個)——ドン・ダ・ドン。僕はその感じを出そうとしてるんだよ。げっそりするような感じをね。ドラムのフィル インもそのひとつの方法だ。

もうひとつ、僕は同じドラム・シーケンスを二度と叩けなかった。どんなリズムの演奏であれ、まったく同じように繰り返すのは、絶対にできない。僕は頭じゃなく魂で演奏しているからさ。僕の頭はリズム——ロックン・ロール、スウィング、何だって知ってるよ——だけど音として現れるのは、その瞬間のフィーリングなんだ。ビートルズのおもしろいところは、まるでみんながテレパシーでつながってたみたいだったこと。意識するんじゃなし

• INSTRUMENTAL BREAK • INSTRUMENTAL BREAK • INST

CamScannerでスキャン

に、自然とみんなで盛り上げたり抑えたりしてた――それが揃ってるのさ。魔法だよ。それもビートルズの力のひとつだったんだ。このテレパシーが(それにもちろん、音楽を愛する心もすばらしい曲も)。あとにも先にも、そんな経験は一度だってないよ。

加入した当初、僕はいつも、一段低く見られてた。"ジョン、ポール、ジョージ…それからリンゴ"ってね。特にイギリスでは"彼らがいて、僕がいる"って感じだった。今でも、ドラムをあまり評価しない音楽評論家はいる。でもアメリカに行った時は嬉しかったね。ジム・ケルトナー(いまだに僕にとって最高のドラマー)みたいなドラマーが、"すごい!"と言ってくれたんだから。他のミュージシャンから評価されることの方が、僕にとって記者の意見なんかよりはるかに重要になった。

世界中のドラマーの中でも特別好きなのは、ジム・ケルトナーとチャーリー・ワッツのふたり。バディ・リッチとかジンジャー・ベイカーとか、そういう偉大なドラマーたちはすごく速いけど、全然僕の好みには合わない。彼らのドラミングは、複雑で忙しすぎる。僕はせわしないのよりも堅実なドラミングが好きなんだ。

ジョン リンゴはメチャクチャいいドラマーだ。昔からずっと、いいドラマーだった。技巧的に優れているわけじゃないよ。でもリンゴのドラミングは過小評価されていると思う。ポールのベース・プレイが過小評価されているのと同じようにね。ポールは、かつて存在したベース・プレイヤーの中で一番革新的なプレイヤーのひとりだ。今、巷に流れてるものの半分は、ビートルズ時代のポールのプレイをそのままパクってる。ポールはベース・プレイに関しては謙虚だった。他のことでは何に関してもすごくエゴの強い男だったけど、ベース・プレイとなると、常に少し謙虚だったね。彼は偉大なミュージシャンだ。彼のようにベースを弾ける人は、そうはいないね。ポールのベースとローリング・ストーンズのベース、それにリンゴのドラムとチャーリー・ワッツのドラムを比べたら、勝るとは言わないまでも、決して劣ってはいない。チャーリーはリンゴよりもいくらか"アーティスト"っぽく見えるし、ジャズの知識もありイラストも描けるから称賛される、という説があったけど、僕はいつも納得いかなかった。確かに、チャーリーはいいドラマーだし、向こうのベーシストもいいと思う。だけど、ポールとリンゴは、場面を問わずどんなロック・ミュージシャンと組んでも通用すると思うんだ。技術がすごいわけじゃない。ビートルズの中には技巧派のミュージシャンはいなかった。誰も楽譜を読めなかったし、書くこともできない。だけど、純粋にミュージシャンとして、音を出すインスピレーションを受けた人間として、ビートルズは誰にも負けなかった。1980年

僕はいわゆるプリミティブなミュージシャンだと思うな。教育を受けてないってことだよ。楽器だって、そんなに弾けなかった。自分のやりたいこと、つまり自分を表現できさえすればよかった。1974年

子どもの頃、僕はよくハーモニカを吹いていた。「ラヴ・ミー・ドゥ」は、すごくファンキーなロックン・ロールだけど、ポイントはハーモニカだよ(それ以前に「ヘイ! ベイビー」という曲があって、それから「アイ・リメンバー・ユー」なんてひどい代物もあった。僕らはそういうナンバーをやってきて、「ラヴ・ミー・ドゥ」でアレンジにハーモニカを使い始めたんだ)。それから「プリーズ・プリーズ・ミー」と「フロム・ミー・トゥ・ユー」でも使い、そのあとやめた。吹くのが恥ずかしくなったんだ。1970年

ギターも昔から大好きだ。今でも黒のリッケンバッカーを持ってるよ。もともとはブロンドだったんだけど。僕にとって初めてのちゃんとしたギターだ。今じゃ、ちょっと傷んじゃってる。実のところ、冗談半分で置いてあるだけなんだ。これを買ったのはハンブルク。分割払いで買った。値段がいくらだろうと、当時の僕にとってはとんでもない大金だった。1966年

ジョージ 僕らはあまりいい機材を持っていなかったから、初めてハンブルクに行った時、スタインウェイズに行ったんだ。ここでジョンがリッケンバッカーを買った。僕も同じ回数の分割払いでギブソンのアンプを買った。そのアンプをどうしたのかは覚えていない。かっこよくは見えたけど、全然魅力がなかった。

僕のギターの歴史は、まずかわいくて安っぽい3ポンド10シリングのギターから始まる。2番目がヘフナー・プレジデント。エレキじゃなかったけれど、数ポンドでピックアップが買えたから、それをフィンガー・ボードの下にねじ止めすれば――僕はそうした――セミ・エレクトリックにすることができた(あるいは、ギターのヘッドを中が空洞になっているものに接触させる。洋服だんすとか戸棚とか扉とか、響くものなら何でもいい。そうすると――音がそこで共鳴するから――わずかながら増幅される。僕はギターを洋服だんすにくっつけて弾いていた)。ヘフナーのギターはなかなかよかった(その前が3ポンド10シリングのちゃちなギターだったから、なおさらだ)。バリエーションが豊富で、それぞれにブロンドとサンバーストの2色があった。僕のはごく普通のブロンドだった。

最初、僕はアンプを持っていなかった。僕が初めてギターをつないだものというと、ジョンの義理の親父のラジオ付きレコード・プレイヤーだった。音は少ししか増幅されなかったけれど、それでも最高だったね。ただ、それをやると、しょっちゅうアンプやスピーカーが飛んじゃうんだよ。ジョンは"トゥイッチー"がいない時、彼の家に入ることができたから、僕らはギターをつないで大騒ぎしてはアンプを壊し、そっと抜け出した。そのあと、彼が修理させるまで、2~3週間待たなきゃならなかったけど。

僕はスウィンギング・ブルー・ジーンズのメンバーとギターを交換した。ヘフナー・プレジデントと引き替えに彼からもらったのが、僕の3番目のギター、ヘフナー・クラブ40だ。その次はフューチュラマ。フランク・ヘシーズで買った。フェンダー・ストラトキャスターのコピーなんだけど、すごく出来が悪かった。

ポール ついでに話すと、僕はいまだにフェンダーを買ってもいいんだって気分になったことがない。頭の奥に妙な感覚が残ってて、フェンダーは高嶺の花だって気がしちゃうんだ(こういう感覚は、抜けないんだよ。すごいもんだね)。僕にとって、フェンダーは今でもちょっとエキゾチックな楽器なんだ。今ならたぶんフェンダーを工場ごとだって買えるだろうけど、それでもまだ手が届かないような気がするんだ。

ジョージ フューチュラマを買った時は、ポールも一緒だった。フューチュラマは他のギターと一緒に壁に掛けられていた。ポールがフューチュラマをアンプにつないだら、音が出ないんで、彼はアンプのボリュームをぐいっと上げた。このギターにはロッカー・スイッチが3個付いてて、僕がそのひとつにちょっと触ったら、アンプから"ブオーン"というものすごい音が出てね、他のギターが全部壁から落ちちゃった。僕の母が、僕の代わりに分割払いの契約書にサインした。つまり、頭金として1ポンドを払い、残りは店の人に出くわした時、ってこと。

僕の5番目のギターは、1962年にリバプールの船員から75ポンドで買ったグレッチだ。黒のデュオ・ジェットだった(チェット・アトキンスがグレッチのギターを使っていたんだ。アルバムのジャケット写真で、彼はいつも違うグレッチを持って写っていた)。これは僕にとって初めてのアメリカ製のギターだ。『リバプール・エコー』に、その広告が載ってたんだ。いったいどうやって75ポンド集められたんだろうね。僕には大金だった。ポケットの中にその金を忍ばせて"誰かに襲われなければいいけど"と思ったのを覚えているよ。

それから1964年、『エド・サリバン・ショー』に出るためにニューヨークのプラザに泊まっていた時、リッケンバッカーの人が来て、12弦ギターをくれた。それ以来、このギターをよく使ったよ。音がすばらしかったし、当時12弦ギターはリッケンバッカーの他にはひとつしか出ていなくて、そっちはネックがすごく太くて大きかった(弦高が高く、チューニングは至難の業で、ストロークなんて不可能だった)。リッケンバッカーのネックは細くて、弦高が低かった。12個のマシン・ヘッドはとても整然と配置され、おかげでどの弦をチューニングしているのかわかりやすかった。6本のレギュラー弦のペグは脇に付いていて、オクターブ上の6本の弦のペグは、昔のスパニッシュ・ギターのように裏側に向かって付けられていた。

ジョンはすでに小さな6弦のリッケンバッカーを持っていた。ブロンドの有名なやつだよ。ショート・スケール・ネックでね。ジョンはあとでそれを黒に塗りかえた。僕がプラザで12弦のやつをもらうと、ジョンと僕のふたりともリッケンバッカーを持つことになって、リッケンバッカーと言えばビートルズみたいな感じになったんだ。

ジョン 古い方のアームは悪くなかったけど、ニューヨークに行った時に、リッケンバッカーの人が僕らに会いに来て、新しいやつをくれたんだ。これのネックが最高なんだ。僕はずっとこういうギターを弾いていたいね。ジョージがリッケンバッカーを手に入れたのは、ただ単に、僕をグループの中でただひとりのリッケンバッカー所有者にしたくなかったからさ。1964年

ジョージ 『ラバー・ソウル』の頃はストラトキャスターを使っていた。「ドライヴ・マイ・カー」とか、そういった曲でね。その後、60年代末から70年代の初め頃、スライド・ギターに凝ってた時は、ストラトをかなり使ったね。テレビの衛星放送で「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」(愛こそはすべて)をやる前に、このギターを塗り替えた。もともとは淡い青だったんだ。ペイントはすぐに落ち始めたよ。当時、僕らは何でもかんでも塗りたくってた。家、服、車、それに店も! ほんと、何から何まで。その頃、蛍光色のオレンジとライムの塗料はすごく珍らしかったんだけど、僕はそれを買える場所を見つけてね――すごく濃厚な、ゴムのような塗料だった。僕は、2~3色用意してストラトを塗った。だけど、塗りが厚すぎて、あまり芸術的じゃなかったな。セルロース・ペイントというのがあるのも知った。先が丸くなったチューブに入っててね、その塗料でスクラッチ・プレートを塗り、パティのきらきらした緑のマニキュアを使ってギターのヘッドに絵を描いたんだ。

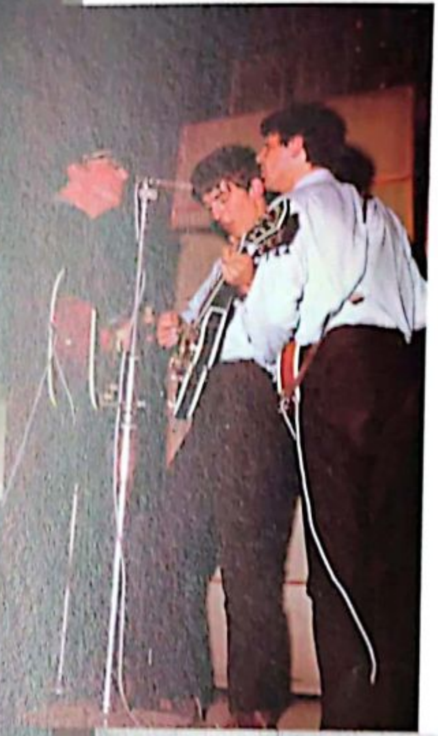
CamScannerでスキャン

ポール　夜にして有名人、
なんていうんじゃなかった

スタートはパブ。僕らはタレント・コンテストに出場し、それから労働者が集まるようなクラブに出た。ハンブルクのクラブで演奏し、その後キャバーン、オールナイト・クラブで演奏するようになり、さらにダンス・ホールに進出した。ダンス・ホールには多ければ2000人の客が入るから、そこでライブをやれば確実に噂が広まるわけ。その次のステップは劇場だ。ブライアンは僕らにこういう段階をすべて経験させたんだ。

劇場でヘッドライナーを飾れるようになり、ほんとうにここまで来たんだって実感したよ。その上の段階がラジオだ。そうやってだんだん進んでいったのさ。僕らはすでにクラブを征服していた。……イントロを征服し、キャバーンを征服して、……大衆にかなり知られた顔になっていった。そこで、あと残っているものは何か。ラジオだということになったわけ。

僕らはブライアン・マシューの「サタデイ・クラブ」に出たいと思っていた。すごく人気のあるラジオ番組でね。僕は1週間学校に通ったあと、週末の朝ベッドから出ずに聴けるのがすごく楽しみだった。ベッドの横にラジオを置いて、だいたい11時ぐらいまでベッドの中でぐずぐずしてたね。一生のうちで一番贅沢な朝寝坊は、そういうティーンエイジャー時代の朝寝坊だな。気持ちよく目覚めてラジオをつけると、まだあと1時間も「サタデイ・クラブ」を聴くことができる。だから僕ら、すごくあの番組に出演したかったんだ。この番組には多数のリスナーがついていることも知っていたしね。



ニール・アスピノール　「ラヴ・ミー・ドゥ」はすごく売れて、チャートの17位までいった。リバプールのバンドにすればこれはすごいことだった。何といってもチャート入りしたんだから！　これでビートルズは北西部やリバプールだけでなくイギリス全国で知られるようになり、ラジオでは彼らの曲が流れ、あらゆる場所でみんなが聴いてくれるようになった。1963年にBBCラジオの出演も決まった。これは生演奏で、1回の番組で5曲くらいやってたね。1963年から1965年まで、ずっと続いたよ。

ジョン　「サタデイ・クラブ」で演奏した曲はいっぱいあるよ。ほとんどはキャバーンやハンブルクでやった曲だ。「スリー・クール・キャッツ」もやったと思う。けっこう出来のいいのもあるし、録音状態もよかった。

ジョージ　ハンブルク時代のあと、僕らはイギリス中あちこちまわって、ロンドンのBBCでもたくさんライブをやった。いいバンに買い替えて、さらに金が入ると更にいいバンに買い替えた。

リンゴ　移動中のエピソードならたくさんあるよ。バンドはそうやって絆を強めて行くものなのさ。みんなでバンに乗り、M1を何度も往復して、タマが縮まりそうなほどの寒さに耐えて、席を奪い合っているうちに。バンの中では、とんでもないことばかりだったけど。そのおかげで僕らはまとまっていった。ベッドフォードを持っててね、運転するのはニール。僕らのうちで誰かひとりが助手席に座り、その他3人――組み合わせはどうでもいいんだ。とにかく残りの3人――は、うしろのベンチ・シートに座る。これはかなり惨めだった。

どこへ行くにもバンだ。アンプとか機材もすべて、一緒に詰め込んだ。スコットランドをまわった時のことを覚えているよ。冬のスコットランドって、メチャクチャ寒いんだから。

ジョン　スコットランドではいつもすごい歓声だった。あのあたりじゃ、他にあんまりやることがないんじゃないの？ ツアーに出るとほっとしたよ――ちょっと外に出て、新しい土地に行くことがね。僕らは新鮮さを失って、窮屈な気分になり始めてた。1967年

リンゴ　絶対に途中で止まらないんだ。木曜日にエルギン（スコットランド北東部）にいて、金曜日にはポーツマス（イングランド南部）にいなくちゃいけないとなれば、ひたすら運転するしかない。誰もこのバンを止められないんだ！ 1日休みがあって、ロンドンからリバプールに戻るような時も、ひたすら車を走らせた。

当時は高速道路が発達していなかったから、何時間もA5号線を走ったもんだった。霧がすごく深くて、時速1マイルしか出せない時もあったけど。それでも走り続けた。伝書鳩みたいだったね。とにかく、いつだって家に帰らなきゃいけないのさ。

えらく寒かった夜のことを覚えているよ。ベンチ・シートの3人はウィスキー瓶を抱え、重なり合って寝ていた。一番上の奴があまりの寒さに体温が下がり始めると、今度はそいつを一番下にするんだ。そんなふうにしてお互い暖め合ったんだよ。ひたすらウイスキーをあおり、ひたすら家を目指すんだ。

ポール　たいしたイメージだよね。みんなスターというのは贅沢三昧だと思ってるけど、ところが僕らは、凍え死にそうになってたんだよ――文字どおり重なり合って寝てたんだ。ビートルズ・サンドウィッチさ。

ジョージ　バンでは、いろいろ楽しいことがあったよ。とんでもない騒ぎばかり起きてね。大笑いしちゃうようなこともあった。僕は一度すごい事故を起こしたんだよ。ペナイン山脈を越えようとしてる時で、道路は凍ってたんだけど、僕はかなりのスピードで飛ばしてた。ヨークシャーのグールに出て、何も問題なく走ってると思ったら、いきなり道が右に折れてね。それが見た目よりちょっときついカーブだったんで、土手の草むらへ乗り上げちゃったんだ。その土手は左側が坂になっていて、僕らはバンごとそこを転げ落ちていった。脇には金網が張り巡らされていて、ところどころにコンクリートの杭が立ってた。向こう側はバートン社の工場だったんだよ。
車は弾みながら――ドスン、ドスン、ドスン――コンクリートの杭を全部なぎ倒し、やっとのことで止まった。僕の隣に座っていたニールが"あいたっ、腕が痛い！"って叫んだよ。このショックで、燃料注入口のキャップが飛んで、ガソリンが流れ出した。僕は車を降りて、注入口にTシャツなんかを詰めこんで、何とかガソリンが流れるのを止めなきゃいけなかった。
バンを道路まで押し上げようとしてたら、いきなり"ちょっとちょっと、いったい何してるんだ？"という声がした。警官だった。事故を起こしたってことで、僕らつかまっちゃったのさ。2ヵ月後、僕は裁判所に行った。ブライアンが一緒に来て、僕を精神的に支えてくれた（彼はほんと、いつも僕らを支えてくれたよ）。確か僕は3ヵ月の免停を食らったはずだ。

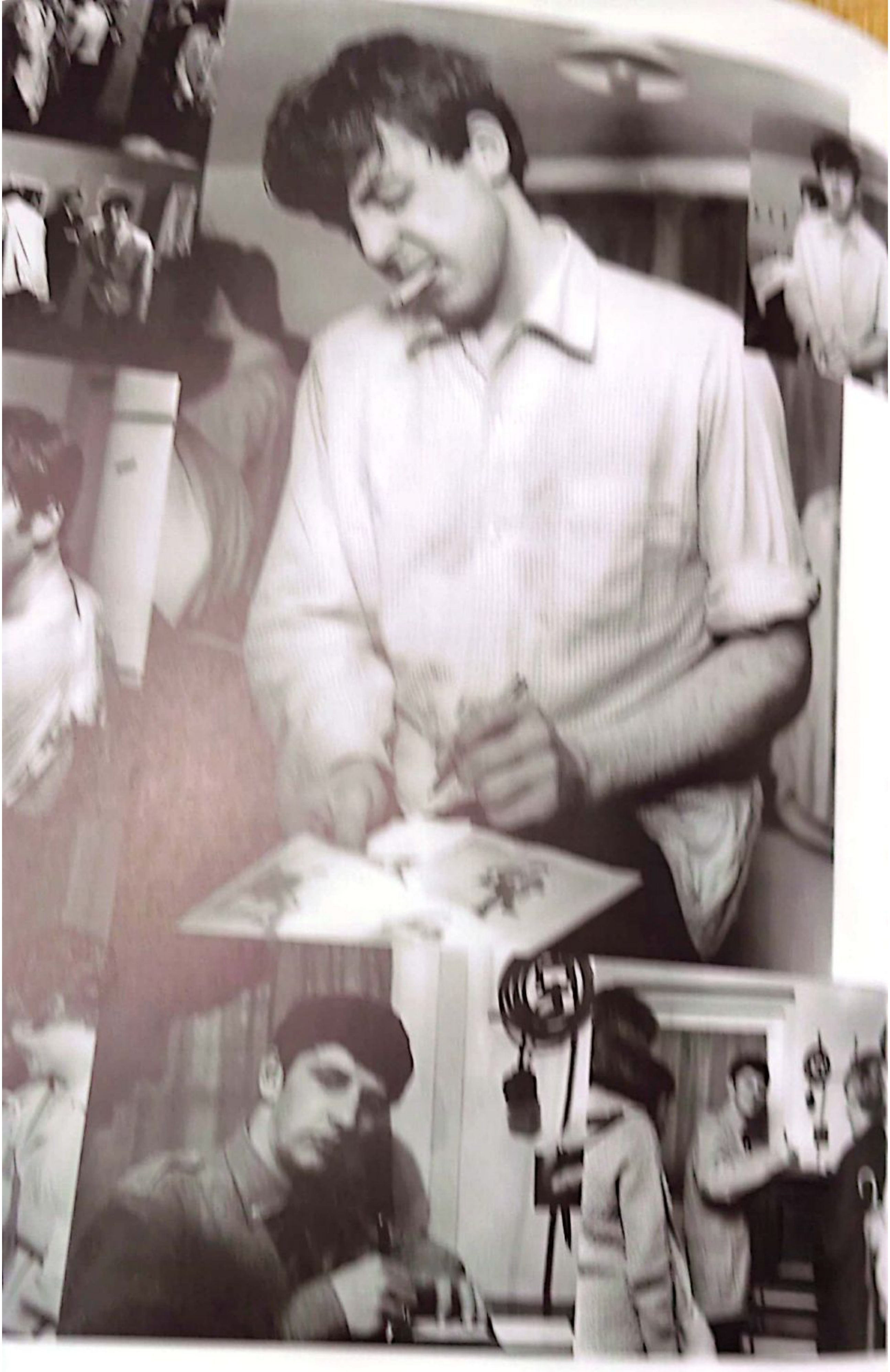
リンゴ　バンの話なら、もうひとつ最高のやつがある。ジョージとポールがふたりとも自分でバンを運転する気になってて、ジョージは運転席にどかっと座り、ポールはキーを握ってて、どっちも頑として譲らないんだよ。これじゃどこへも行けないさ。結局2時間ずっとそこにいたよ。ツアーの最中って、時々すごくピリピリした雰囲気になるんだよね。そうなると、すごく些細なことがいきなり山のような大事件になっちゃう。これもそういう、とんでもなく話が膨らんだ例だね。

ジョージ　**バンドとしての結びつきはすごく強かった。それははっきり言えることだよ。僕らはほんとにしっかりつながれてたんだ、友達としてね。ケンカも随分したけど。それでもみんなものすごく身近な存在で、他の人といる時や違う環境にいる時、僕らは必ず一致団結してた。**

ケンカになるのは、いつも場所取りみたいなことが原因だった。"補助席に誰が座る？"――だってそこに座る奴以外は全員、スコットランドだろうがどこだろうが、目的地までずっと、タイヤの上部のアーチか、床に座らなければならないんだから。お互いに腹を立て、まわりの奴らを押しのけ、我を通そうとしてたよ。"今度は僕が前に座る番だぞ"って。

ポール　車の後部は笑いにあふれていた。あれこれアルバムをあげたり、女の子のことか他のグループの曲とか、いろんな話をしてさ。深い話なんてあまり記憶にないな。ずっと笑ってばかりだったよ。

ひとつはっきり覚えてる事件がある。高速を走っていたら、フロント・ガラスに小石が当たって、ひびが入ってしまったんだ。我らが偉大なるロード・マネージャーのマル・エヴァンズが運転してたんだけど、彼は自分の帽子を拳にかぶせ、フロント・ガラスを完全にたたき落として、そのまま、運転を続けたんだよ。冬のイギリスだよ、まわりには凍りつきそうな霧が立ちこめていた。マルはリバプールまでずっと、縁石に気をつけてなきゃいけなかった――200マイルもの間ね。



CamScannerでスキャン

リンゴ　僕らには、ニールとマル以外いなかった。有名になってからもずっと、僕らの面倒を見てくれるのはこのふたりだけだったんだ。マルがフルタイムでついてくれるようになったのは、1963年。ボディガードだったんだけど、適任だったね。絶対人に怪我させないんだ。すごい巨漢だったから、"すみません。通してください"って言うだけですんじゃうんだよ。なかなか逞しい男でさ。ベース・アンプだってひとりで持ち上げちゃうんだ。すごいよね。サーカスに入ってもやっていけたな。

マル・エヴァンス　前は気に止めたこともなかったマシュー・ストリートっていう小さな通りを歩いていたら、キャバーン・クラブって店があった。それまで入ったことなかったんだけど、音楽が聴こえてきてね——本物のロックって感じがした。ちょっとエルヴィスみたいでね。それで、お金を出して、入っていった…。

ジョージ　マルはキャバーンの常連だった。すぐそばで電話技師の仕事をしていて、昼休みになるとクラブに来ていたんだ。他の客に混じって座り、よくエルヴィスの曲をリクエストしていた。そのうち僕らも覚えてね、また来たぞ、いつもエルヴィスを聴きたがる奴がって。それで"では、ここで、マルのリクエストに応えて"とかやってた。そのうち彼は夜に用心棒としてキャバーンで働き始めた。

ある時、ニールが病気になって、ロンドンまで運転してくれる人が必要になった。それでマルに頼んだんだ。——彼はいい奴だし、その頃にはもう僕らともよく喋るようになってたんだよ。運転手をやるんで、その時彼は2日ぐらい仕事を休まなきゃならなかった。その後ライブ活動がどんどん増えていくと、ニール以外の人間が必要になってきた。そいつにバンの運転を任せて、ニールには僕らのこと、僕らの衣装とかそういったことの面倒を見てもらおうって。全員同じ意見だった。そこでマルが仕事を辞め、僕らのために働いてくれることになったのさ。

ニール・アスピノール　ツアーがひとつ終わると、体重が約8ストーン(50.8キロ)に落ちちゃって、手伝ってくれる人が必要だとブライアンに話した。それでマル・エヴァンスが加わることになったんだよ。僕らはみんな、用心棒のマルを知ってた。彼は"心優しき大男"で——いい友だちだった。

マルがバンを運転し、機材や衣装を担当することになった。僕の方はビートルズやプレスや、その他みんなの生活に関わる人たちの面倒を見るのが仕事の中心になっていった。リンゴのドラムのセッティングのやり方もマルに教えなきゃならなかった！　(リンゴは最初のうち僕がドラムのセッティングをしなかったと言ってる。嘘だよやってたよ)。

マル・エヴァンス　それまでドラム・セットを間近に見たことなんかなかった。僕は何ひとつ知らなかったんだ。最初の2日ぐらいはニールに手伝ってもらったけど、初めてひとりでやった時は大変だったね。巨大なステージで、それを見たら頭が真っ白になっちゃったんだ。どこに何を置けばいいのかわかなくて、他のグループのドラマーに頼んで手伝ってもらった。ドラマーによってシンバルの高さまで好みが違うことも知らなくて。そのドラマーは自分流にセッティングしたんだけど、リンゴにとってはどうにも使いにくかったんだ。

最悪だったのはロンドンのフィンズベリー・エンパイアでやった時。ジョンのギターを失くしちゃったんだ。しかもそのギターは、彼が何年も前から使っていたやつだった。ほんとに消えちゃったんだよ。"僕のジャンボはどこだ"ってジョンに言われたけど、僕にもわからなかった——いまだに謎だね。

テレビで見るだけだった人たちみんなと会えるなんて、ほんと最高の気分だった。みんな親切で、知り合いになろうとする。でも、それはビートルズとつながりをつけるために僕を利用してるだけだった。そのうち僕にもわかってきたよ。

ポール
マル・エヴァンスは、1976年に
ロサンゼルス市警の手で射殺された。
信じられない。ムチャクチャだよ。
マルは愛すべき大きな熊みたいな
ローディだった。
時にはやりすぎることもあったけど、
僕らみんな彼を知ってた。
問題を起こすような奴じゃなかったよ。
市警の方もちょっと
気の毒ではあるけどね。
マルが散弾銃を持って上の階に
こもってるって言われたから、
急いで階段を上がり、ドアを蹴り開けて、
すぐに発砲しちゃったんだ。
マルのガールフレンドが"彼がちょっと
不機嫌になってるし、鎮痛剤も少しやってる"
って警察に言っちゃったんだよ。
僕がその場にいれば、
"マル、馬鹿はよせ"って言えたのに。
僕じゃなくても、実際彼の友人なら
誰だって、楽々と彼を説得できたはずさ。
だって、彼はイカれた人間じゃなかったもの。
だけど、ガールフレンド——
LAの女性だったけど——
彼女は彼をそんなによく知らなかった。
警察に電話すべきじゃなかったんだ。
だけど、現実には…ドアをガンガン叩いて、
"奴はどこだ？　どこで暴れている？"
バンバンバン、というわけさ。
警察は質問もしなかった。
いきなり発砲したんだ。

ジョージ　彼は仕事が大好きで、すばらしい奴だったよ。よく彼が殺されたことを思い出して、辛い気持ちになる。僕はいまだに"マル、どこにいるんだよ？"って思ってるんだよ。彼が今もここにいてくれたなら。彼はとてもおもしろくて、その上、すごく頼りになる人だった。何だってできる。彼が数年かけて考え出したバッグがあってね。年がら年中"マル、絆創膏持ってない？　マル、ドライバー持ってない？　マル、瓶入りの何々持ってない？　マル、何々持ってない？"って、いつでもそんな感じだったからね。でも彼は、必ず何でも持っていた。もし持っていなくても、即座に手配してくれた。彼は、自分の仕事を愛し、仕えることに何のわだかまりも持たないタイプの人間だった。誰だって何らかの意味で誰かしらに仕えているんだけど、中にはそれを認めたがらない人もいる。マルにはそういう問題はなかった。彼はとても謙虚だったけど、威厳がなかったわけじゃない。彼にとって、僕らの注文どおりに動くことは、彼自身を卑しめることではなかった。だから、彼は僕らにとって完璧だったのさ。僕らにはそういう人が必要だったんだ。

ポール　マルは口癖のように言ってたよ。"人に仕えることは人を治めること"だって。

ジョージ　マルがオースティン・プリンセスのうしろのラックにギター1本とスーツケースを載せて、ロープで固定しておいたことがある。僕らはA2号線にのってヨークシャー州を走っていた。トランクが空いて、何だか音がしたと思って外を見た。あの時窓から見た光景は忘れられないよ。ギターがケースに入ったまま道を転がっていくんだ。僕は大声で、止まれって運転手に叫んだ(数年の間に、僕らの運転手は3～4人ぐらい替わった)。だけどもう遅かった。僕らのうしろにトラックが来ていて、そのまま見事にギターを踏みつぶしていったよ。あれは確か、ギブソンのアコースティックだった。

すべての機材の面倒をみるのは大変だった。もっとも、僕らはそんなにたくさん使っていたわけじゃないけど——ドラム・セットとアンプ3台だけだ。だけど、それだけでも、けっこう何度も行ったり来たりしなければならない。荷造りしたら、ニールが機材をいくつか運び出し、バンを開け、バンの中に荷物を入れ、盗まれないようにバンに鍵をかける。それから戻って次の荷物を持ち、また外に出て、バンを開け、中に入れ、鍵をかける。こんな具合だったから、そのうち僕らはもっと人手が欲しいと考えるようになった。それまではニールが全部やらなければならなかったんだ。

最初の頃のバンは、停まるたび注目の的になった。ボディが赤と灰色に塗られてて、頭からお尻までびっしり落書きされてるんだ——女の子の名前とか、"ジョン、愛してる"みたいなやつとか。おもしろいのはいいんだけど、誰もがそれを見たとたん、自由に落書きしていいんだと思い込んじゃう。それにもうひとつ問題があってね。誰かが何か盗もうと思えば、それがどこにあるかはっきりわかってしまうんだよ。ニールはいつもその心配をしなきゃならなかった。

CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　おかしなギグもやったね。覚えてる中でも最悪だったのはクルーだな。観客が5人しかいないんだ。僕らの方が客より多いんだから。それでも僕らはステージを2回こなした。その5人は2度目のステージまで残ってくれたよ。1ヵ月後にまた同じところでやったら、今度は700人集まった(たぶん最初の時の5人も混じってただろう)。

ポール　バーミンガムのギグはきつかった。あそこへ行くと、必ず　車に契約されてるんだよ。2ヵ所とは言え、すぐそばだからって、僕らにすれば近く思えたかもしれないけど――ウルヴァーハンプトンとバーミンガムとか、ウルヴァーハンプトンとコヴェントリーとか。ひと晩で2倍稼げるという面では僕らもかなり嬉しかったけど、それにしたってやっぱりかなりきつかったよ。あとの会場が回り舞台だったりすると、僕らは他のバンドが出ている間に奥で準備しなきゃならない。出演バンドの音ががんがん響くところで、ギターを耳のすぐそばに寄せてチューニングするのさ。舞台が回り始めると、ギターのリード線がこんがらがってないようにと祈ったね。

　もっと遠くまで行く時には、ワトフォード・ギャップみたいなサービス・ステーションに寄って、油まみれのすばらしい料理を食べた。時々そういうところでジェリー・マースデンとか、リバプールのバンドに会ってね。冗談言い合っちゃ笑ってばかりいた。

リンゴ　エルギンのギグは、僕らがやった中でも一番奇妙な部類に入るね。スコットランドのはずれまではるばる出向くと、L字型の会場があって――僕らがプレイする場所じゃないって！見ると客はみんな長靴はいてる。農家の人と田舎の人間ばかりだよ。片側にバーがあって、もう一方に僕らがいて、どっち側がにぎわってるかは一目瞭然だった。当時の僕らはまだみんなから笑われてたね。革ずくめで暴れまわってたから。ステージが終わると、みんな僕の車に乗りこみ、はるか彼方の次の会場まで行くわけだ。

　あのツアーの時は、芝居に出てきそうな宿屋に泊まってた。僕らの前にせむしの男が泊まってたっていう噂が流れてね、みんなちょっと心配になったんだ。そいつのベッドに寝ることになるかもしれないって。ジョージとジョンは違う宿に移ったんだけど、ポールと僕はイチかバチか、そのベッドに当たらない方に賭けてみた。

　個人経営のような小さな宿によく泊まってたね(ホテルに泊まるようになったのは1963年のすばくらいからだ)。ロンドンに行く時は、ラッセル・スクエアの宿の常連だった。

　いつもふたりずつに分かれてふた部屋とった。どのふたりの組み合わせでもかまわない。とは言え最初の頃はいつもポールと僕が一緒だったね。僕は新入りだったし、他のふたりはあんまり僕のそばで寝たくなかったのさ。どんな寝方をしてたのか知らないけど。鼾かいたのか、足が臭かったのか。もしかすると向こうのふたりが臭かったのかもしれないけど、彼らはお互いをよく知ってたから。みんなはもうつきあいが長かっただろ、でも僕はまだこれからってところだった。

ジョージ　ピート・ベストが抜けたあと、ツアーで相部屋をとる時には、僕はいつもジョンと同じ部屋に泊まった。リンゴをバンドに入れようって強く推したのは僕だったからね。僕がリンゴと一緒にいるより、他の誰かと同じ部屋になる方がいいと思った。その方がリンゴも早く馴染めるだろうって。

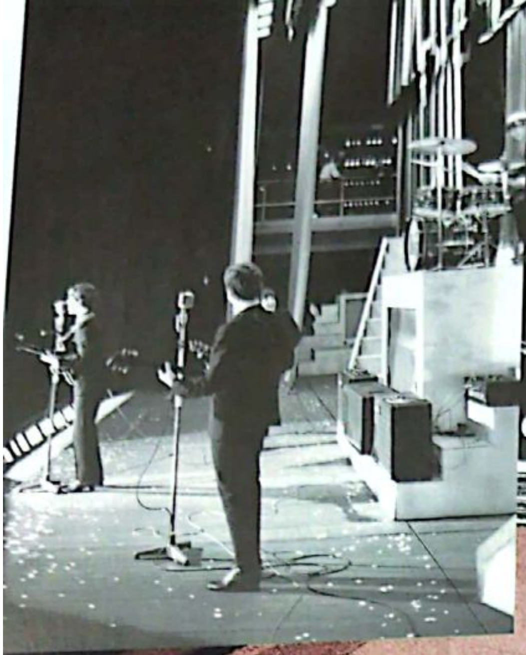
リンゴ　小さいホテルだと、ギグから戻ってきても食べるものがないんだ。必死で頼まないと、たとえ午後1時に作ったサンドウィッチだろうと出してもらえなかった。"ここにはアルマ・コーガンも泊まったことがあるんですよ。彼女はそんなことであれこれ言いませんでしたよ"なんて言われてさ。"なあ、僕らは今の今までずっと演奏してたんだぜ。何か食べたいって言ってるだけじゃないか。バーを開けてくれるとか、何とかしてもらえない？"って僕らが言う――"あいすみません、バーを開けるのはちょっと無理でして。こちらではそういうことはしません――ロンドンとは違いますので"。夜のスタッフは最悪だった――まったくひどい連中だよ。

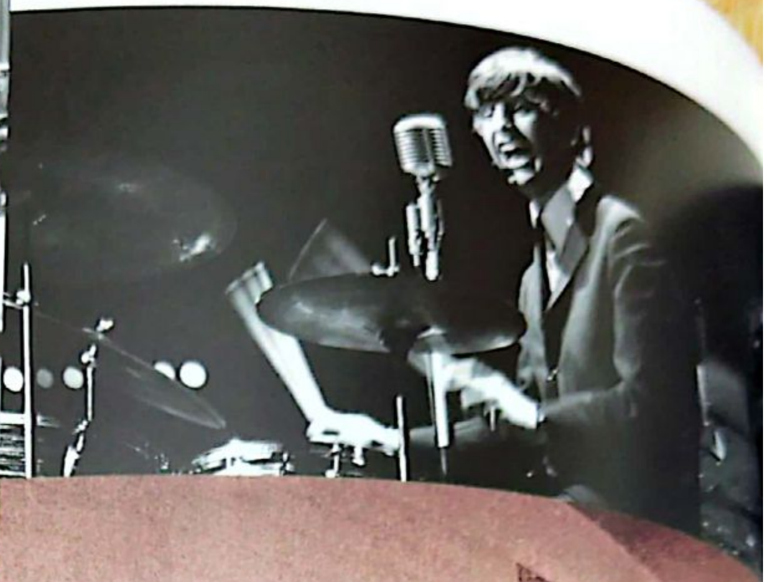
　翌朝ニールが起こしに来る。そして彼は時間どおりに会場へ僕らを送り届け、照明とサウンドの調整をするんだ。実行委員だね。

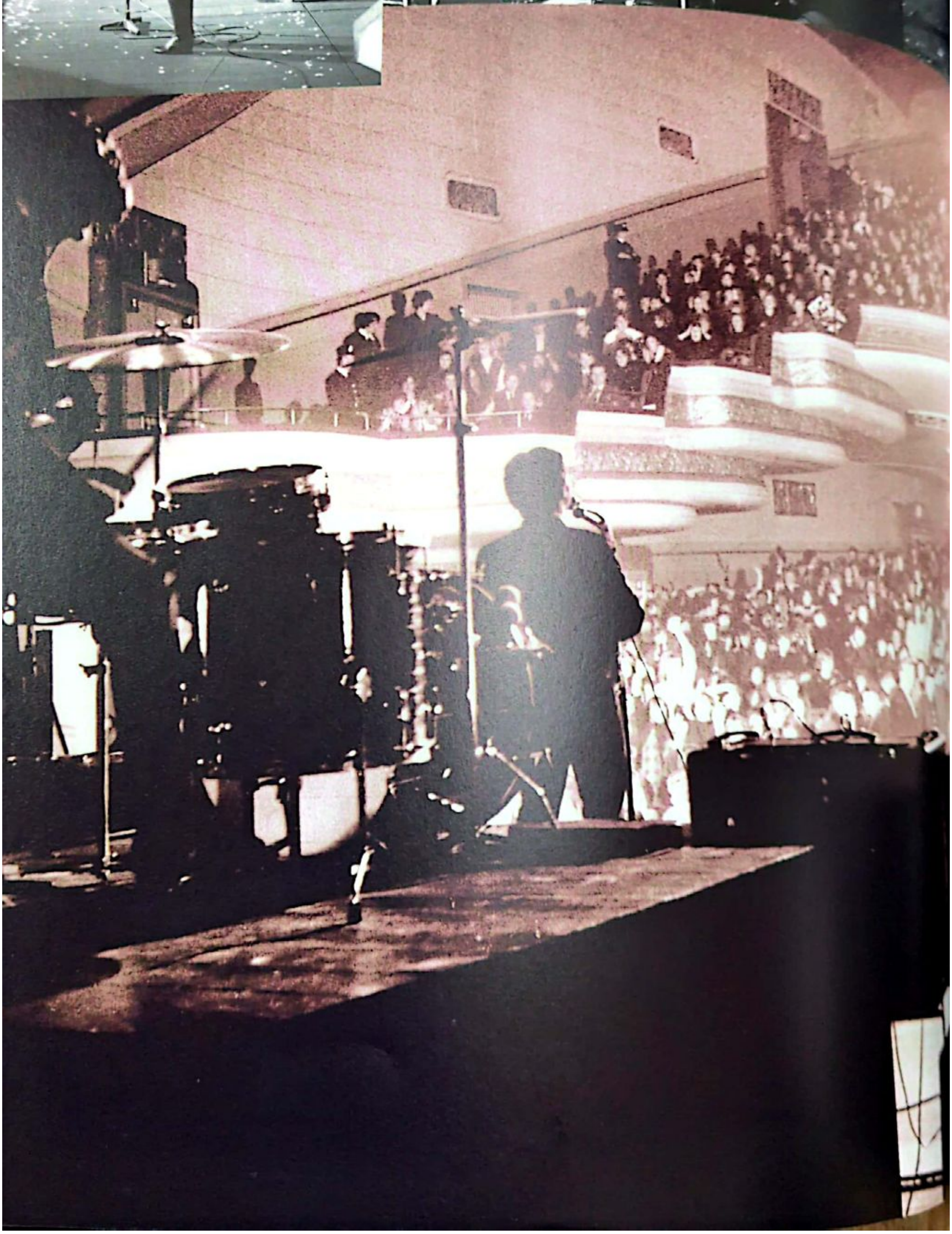
リンゴ　最初は出してくれるところならギャラなしで世界のどこへでも行く。次にクラブに出るようになり、少しでも金

をもぎとろうとする。それからダンス・ホールでプレイし始め、そして気がつけば、いきなり劇場で席に座った観客(座ってるのは初めのうちだけだけど)を前にしてる。僕は劇場が大好きだった。今でもそうだよ。ラジオ・シティ・ミュージック・ホールみたいな会場でプレイするのが好きだった。オーディエンスと触れ合うのが好きなんだよ(スタジアムではその触れ合いがなくなった。もう絶対スタジアムじゃやりたくない。1964年にやった時はわくわくしたよ。だってああいう場所でやるのは僕らが初めてだったんだから。でも今は、スタジアムでやるバンドを見に行く気はしない。テレビみたいだ――ビデオが出るまで待った方がましだよ)。

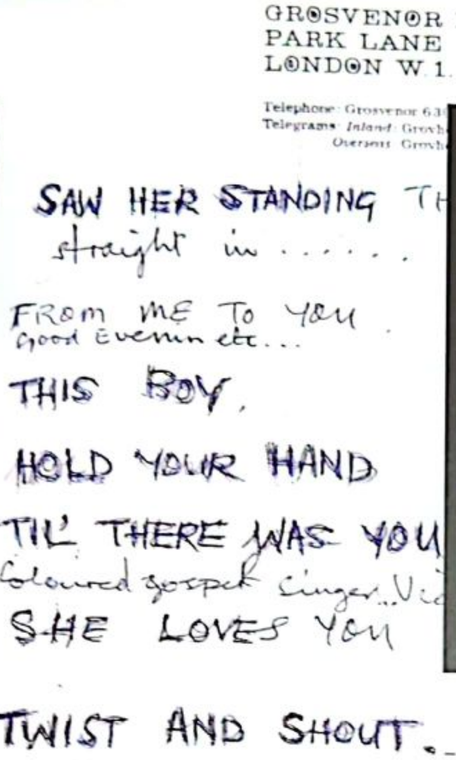
CamScannerでスキャン







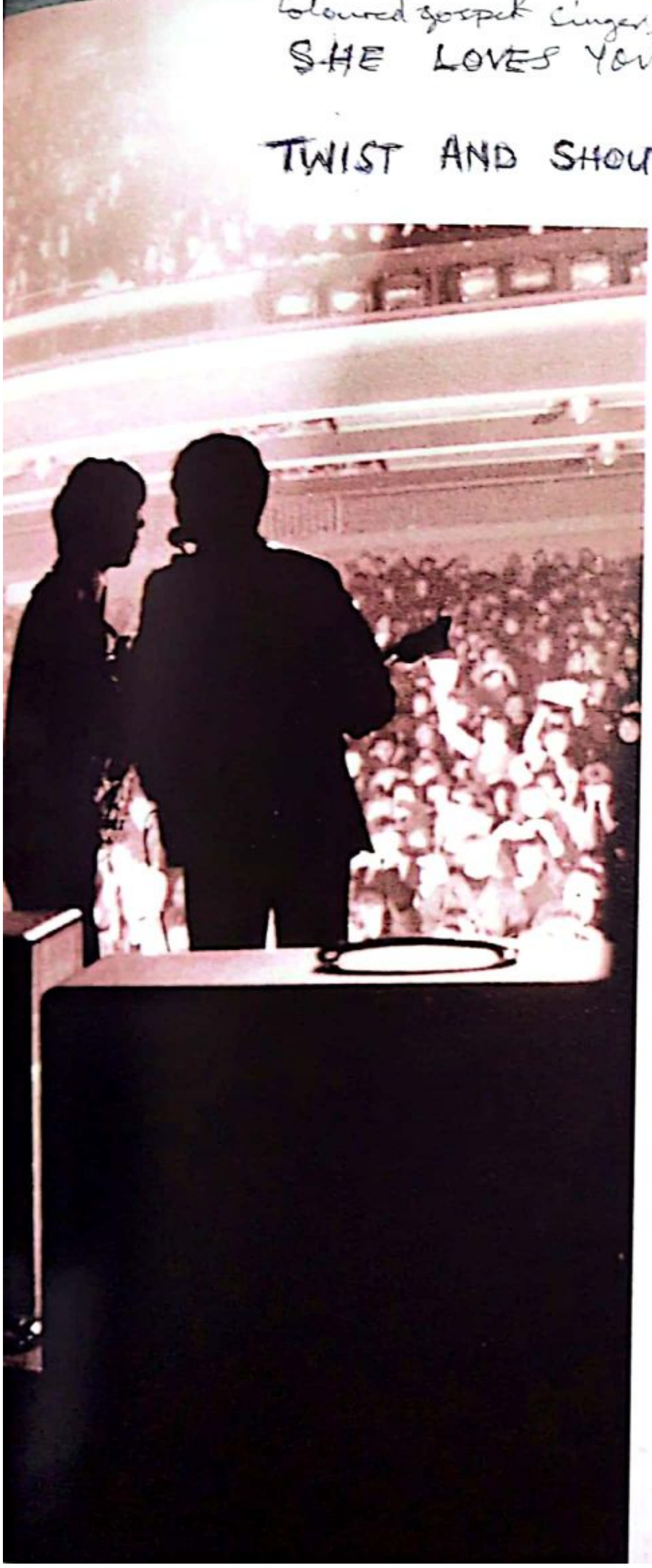
CamScannerでスキャン


GROSVENOR HOUSE
PARK LANE
LONDON W.1.

Telephone: Grosvenor 63
Telegrams: Inland: Grovh
Overseas: Grovh

SAW HER STANDING TH
straight in . . . . .
FROM ME TO YOU
Good Evenin etc...
THIS BOY.
HOLD YOUR HAND
TIL' THERE WAS YOU
Coloured gospel singer..Vi
SHE LOVES YOU

TWIST AND SHOUT.



ニール・アスピノール　アーサー・ハウズ・エージェンシーと組んでツアーをやるようになった。ハウズはゴーモント・シアターとかオデオンとか、イギリス中の劇場でコンサートを開いてた人だよ。ビートルズが最初に組んだ相手はヘレン・シャピロだった。

いきなり僕は複雑な照明システムを任されることになってね。今みたいにコンピューター制御されちゃいないんだから。当時はフットライトがあり、サイドのライトがあり、さらに頭上のライトもあった。ツアー最初の晩、シャピロのツアー・マネージャーだったジョニー・クラプトンから、ビートルズのロード・マネージャーは誰かと訊かれたんだよ。答えがないんで、ついに彼は"じゃあ、ビートルズには誰もついてないのか？"って。それで僕が、"いや、ついてるよ、僕がいる"と言ったんだ。すると彼が"それなら君がロード・マネージャーじゃないか"と。それからクラプトンは言った。"照明プランはどこだ？"――"照明プランって？"――"おい、ステージまであと30分なんだぞ"と彼。"しょうがない、最初の会場では僕が照明をやる。僕がやるのを見てろ、あとは君が自分でやれよ"。

かくしてその時、僕はビートルズのオフィシャル・ロード・マネージャーになったわけだ。そんな肩書きのことなんて、それまで考えたこともなかった。僕はただ彼らがやらないことを全部引き受けてただけ。必要なことは何でもやってた。それはずっと変わらないよね。

毎晩照明のアレンジを変えなくてはいけなかった。だって新しい会場へ行くたびに（会場はいろいろ変わるわけだ、たとえばクリスマスに彼らがどんな劇をやるかによって）ライトの色や操作方法が違うんだ。映画館のステージでプレイする時には映写技師――いつもは映画を流してる人たち――が、プロジェクターをスポットライト代わりに使っていた。彼らはポールが歌ってる時にジョンにスポットライトを当て、ジョンが歌ってる時にはポールにライトを当ててた。どうしてもわかってくれないんだよね。だけどみんなはステージの上で、僕は客席だ。小さなマイクで必死に怒鳴るんだけど、まわりでも何千人という若者が叫んでるんだからね。いつだって大混乱だった。それで僕はステージが始まる段階できちんとしておこうと、彼らに飲みものとか持っていって、うまく丸め込んで、間違えずにやってもらおうとしたんだ。

ジョージ　サウンドのコンディションはひどかったね。マイクが1本しかない会場もあったし。エンパイア・シアターも当時は1本だけで、ステージ中央の床から出てくるやつだった（エヴァリー・ブラザーズがあそこでやったのを覚えてる。ふたりで1本のマイクに向かって歌うんだ。"Wake up, little Susie, wake up_"って。それからふたりともギターを前に出して、でかい古ぼけたマイクに向けて弾くんだよ。僕らもそれをやらなきゃいけなかった）。その後サウンド・システムが改良されてくると、会場にマイクが2本置かれるようになって、さらにそのマイクが移動可能なスタンドにつながれるようになる。そのうち僕らも、いつもマイク2本と指定するようになった。自分たちの曲をちゃんとやれるようにね。だけどおかしいのは、僕らのドラムやアンプにはマイクを立ててなかったんだよね。

ジョン　どのツアーでも必ずトラブルがあった。僕らの望みどおりの会場なんてひとつもなかったよ。午後にまずリハーサルして、こういうふうにやりたいんだって言っても、絶対そのとおりには進まない。位置が悪かったり音が小さかったり。アマチュアのタレント・ショーでやるのと同じようにセッティングしちゃうんだ。まあ、僕らも恨んではいたね、僕らの音楽を真剣に考えてもらえないんだから。コントロール・ルームにいるブライアンに向かって、いつも僕らは怒鳴ってた。すると彼は、どうしようもないんだって合図を返してくる。それでこっちはますますカッとした。1967年

CamScannerでスキャン

リンゴ　1963年2月、シングル「プリーズ・プリーズ・ミー」がNo.1になった。その時、僕らは、ヘレン・シャピロと組んでツアーに出るところだった。僕らは彼女の前座で出て、そのあとは次のショーが始まるまでぶらぶらしていた――いつも退屈していたんだ――それが突然、No.1をとったんだ!

ジョージ　モス・エンパイアに出たのは、このツアーが初めてだった。当時のイギリスでは、パラディアムを除けば一番大きな会場だよ。この公演にはかなり満足していた――ヘレン・シャピロは押しも押されもせぬスターで、いろんなところに出ていたし、ヒットもたくさん飛ばしていた。だけど「プリーズ・プリーズ・ミー」がNo.1になると、誰もがビートルズだけを目当てにショーにやって来るようになったんだ。あれは気まずかったな。彼女はすごくいい人だったから。

ジョン　「ラヴ・ミー・ドゥ」でトップ30に入って、それだけで最高の気分になっていた。そしたら今度は「プリーズ・プリーズ・ミー」が――どかん！ この曲はできるだけシンプルな作りにした。これまで書いた曲の中には、ちょっと取っつきにくいのがあったけど、この曲は、まっすぐヒット・パレードに狙いを定めていたんだ。1963年

僕はロイ・オービソンみたいな曲を書こうと思った。これを書いた日のことを覚えているよ。僕は、メンローヴ・アベニューの自宅、つまりおばの家の寝室のひとつにいた。ベッドにピンクの羽根ぶとんがかかっていたのも覚えてる。ラジオからはロイ・オービソンの「オンリー・ザ・ロンリー」が聴こえてきた。それに、僕はずっと、ビング・クロスビーの曲の"Please lend a little ear to my pleas"（小さな耳を私の祈りに傾けてください）という歌詞も気になってたんだ。"please"を二重に使ってるのがね。だから、あれはロイ・オービソンとビング・クロスビーを合わせたものなんだよ。1980年

だけど僕ら、もう少しであの曲を「ラヴ・ミー・ドゥ」のB面に追いやるところだったんだよ。それだけに1位はますます嬉しかったよね。気が変わったのは、単に「ラヴ・ミー・ドゥ」をやった夜、すごく疲れていたからってだけ。何度かリハーサルはしてたから、B面はどうしようということになった時、「プリーズ・プリーズ・ミー」を使おうって気になったんだ。レコーディング・マネージャーのジョージ・マーティンが、僕らのアレンジじゃ凝りすぎだと言うので、もっとシンプルにしようと取りかかった。でもすごく疲れてきちゃってね。これじゃ、ちゃんとやれそうもないと思った。作品のことなると僕らは真面目だから、あわただしくやりたくないんだ。1963年

ジョージ・マーティン　デビューの年は、私が作品の最終決定を下していた（その後はやらなくなったが、当時はそうだったんだ）が、彼らはファースト・シングルの両面に自作曲を使いたいと言ってきた。私はその時まだ「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ・イット」で行くべきだと考えていたんだよ。彼らは"僕らのオリジナルの「プリーズ・プリーズ・ミー」をやらせてもらえない？"と言う。その曲を初めて聴いた時、ロイ・オービソン・タイプの曲だった。ボーカル・パートのキーが高い、とてもスローなロックでね。正直言って、ちょっと退屈だった。

ポール　僕らが「プリーズ・プリーズ・ミー」を歌ったら、ジョージ・マーティンは"テンポを変えてみないか？"と言うんだ。"どういうこと？"と訊くと、"少し速くするんだ。私がやってみようか"って、実際にやってくれた。僕らは"ああ、ほんとだ。こりゃいい"と思った。ほんとはちょっと恥ずかしかったんだ。僕らより彼の方がいいテンポをわかってたから。

ジョン　結局ジョージ・マーティンは、別の曲をやったらどうかと言った。"「プリーズ・プリーズ・ミー」は、また別の機会にとっておこう"ってさ。"その間に、もう少しアレンジを考えてみるといい"。

それから数週間、僕らは何度も何度もやり直した。少しテンポを変え、わずかばかり歌詞を変更し、「ラヴ・ミー・ドゥ」のようにハーモニカをメインにしたらどうかって考えた。セッションに入る頃には、僕らは結果に大満足してたよ。もっと早くレコーディングしたい気分だった。1963年

CamScannerでスキャン

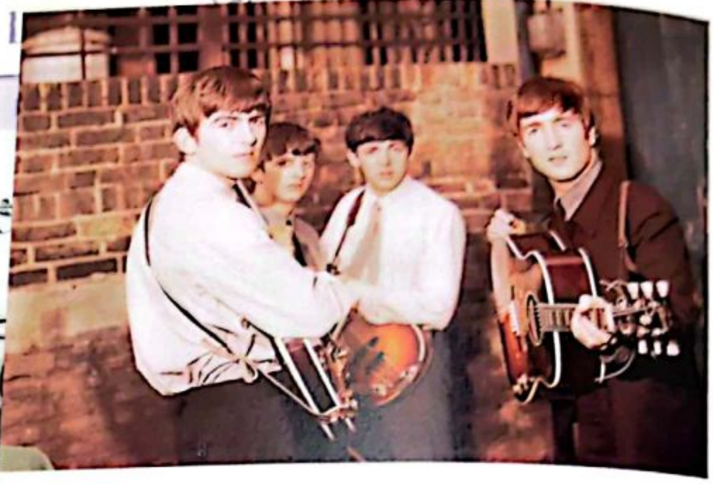
CamScannerでスキャン

s. d.
RECEIVED

POST
TELEGRAM
Prefix. Time handed in. Office of Origin and Service Instructions. Words

131

C 179 3.40 REGENT TS 20/20
BEATLES CAVERN CLUB MATHEW STREET



ジョージ・マーティン　次のセッションにはテンポを上げたバージョンを持ってきたから、"よし、じゃあやってみよう"と言ってね。そしてそのセッションが終わると、こう言うことができた。"君たちの最初のNo.1ができたね。すばらしい"。

ニール・アスピノール　それが彼らの望みだった——No.1になること。でも、これと同時に、ビートルマニア現象も始まった。リバプールの頃もひどい騒ぎは何度もあったけど、リバプールの若者のことらわかってたしね。彼らは飛びついてきたり、バンをひっくり返しり、サイド・ミラーをもぎ取ったりはしなかった。いきなりこんな狂の沙汰になってきて、それは刺激的ではあったけど、とても始末負えなかった。こうなると、僕が劇場の出入りの段取りをつけなならない。普通に劇場に入ることなど不可能だった。
BCにも出演するようになり、事務所も構え、ロンドンにファン・ブができた——クリフ・リチャードも独自のファン・クラブをもった。そういう時代になりつつあったんだ。まずやったのは配写真を作ること。全員がおそろいの衿なしジャケットを着てポーズをとったやつ。がファンの前でサインをし、僕が配った。
奏中は、悲鳴の絶える時がなかった。ほとんどは女の子だったけど不思議と男も多た。ビートルズは誰から見ても魅力的だったんだよ。

ジョン
1年前、こんな騒ぎになる前は、
どこの会場だって自由に
出入りできたし、
ホテルだって落ち着いて泊まれたし、
夜に出かけるにしろ、
買い物に行くにしろ、
人に取り囲まれることなんかなかった。
ほんとに楽しんでやってたことが、
今じゃ手の届かない夢みたいに
なってしまったんだ。
でもきっと、いつかこういう騒ぎも
収まるさ。
そしたら僕らも、
普通の平和な生活に戻れる。
1963年

ほんの少しの間だけみんなが叫んでくれるのが嬉しかった。そういう駆け出のライブでは、誰か僕らのひどい音をかき消してくれないかなと思ってたから。うもない機材の時も多かったし、僕らの演奏はいつもすばらしい出来とは言え。どこだったか忘れたけど、ある晩なんか見事に音がはずれてて、ほんとにた。それでも僕らはやり通したけどね。

最悪なのは、劇場を出る時だ。無事脱出できて、何とか車に乗り込んだと思っかの馬鹿野郎にタイヤの空気を抜かれていたりするんだ。1963年

レコードを1〜2枚出した頃——たとえばクリス・モンテスとのツアー中——そい劇場で、すごく早い時間から女の子が外で待ち伏せしているようになった。の前で車を停め、彼女たちの群れの中を駆け抜けて楽屋口に向かう。そっと感じのいい子を目ざとく見つけたら、一緒に楽屋口へ押し込んで扉をバ部屋まで連れていく…。

をとったら、あとはどこを目指せばいい？ No.1は頂点だった。もちろんそせばなんでもNo.1で、そのうち妙な心境になってきた。おかしなことだけど、い曲を期待するようになったんだよ。実際No.1をとれなかった時、僕ら思れやれ、これで終わった"って。すごいプレッシャーだったんだ。僕らはNo.1をとった。だから、No.1じゃなくなって、ほんとホッとしたのさ。

ースト・アルバムのレコーディングは、
間ぶっとおしのセッションだった。 1976年

ジョージ　2枚目はもっと長かった！

ニール・アスピノール　初期のレコーディングから、いつもアビイ・ロードの第2スタジオでセッションをやっていた。コントロール・ルームは一段高いところにあった。そこからスタジオに降りる階段がついててね、相当大きな、納屋みたいな部屋だった。初めビートルズはすごく上がってた。でも、初めてのレコーディング・セッションなら、誰でも上がるものなんじゃないかな。実際、あれは学習期間だったんだ——ビートルズだけでなく、ジョージ・マーティンにとってもね。かなりよく勉強したよ。

ジョン　生まれて初めてレコーディング・スタジオに入り、12時間で仕上げた。それ以上お金をかけてもらえなかったからさ。
あのレコードでは、生の雰囲気を出そうとした。ハンブルクやリバプールではあれに近い感じの音だったんじゃないかな。それでも、オーディエンスがビートに合わせて足を踏み鳴らす、あのライブの雰囲気までは出ない。だけど、"お利巧さん"のビートルズになる前のサウンドには、これが一番近い。1976年
このレコードでよかったことのひとつは、エコーなしで録音したことだ。エコーが出始めた時、僕らにはそんなものを使える余裕がなかった。余裕ができた頃には、もう好きじゃなくなっていた。だからステージでは一度も使ったことがない。使わなくてよかったよ。使っていたら、きっと他のグループと似たり寄ったりのサウンドになってただろう。1963年

ジョージ・マーティン　私はキャバーンに出かけ、彼らが何をやれるのか把握した。彼らのレパートリーを知り、演奏できる曲目を知っていた私は、こう提案した。"君たちが持っている曲を全部やろう。スタジオに下りてきなさい。何とか、1日で全曲通してみよう"。午前11時頃に始めて、夜の11時頃まで。その時間内で、アルバムをまるまる1枚録音したんだよ。
初めのうち、ビートルズはレコーディングに関してあまり意見を言わなかった。彼らがスタジオ・テクニックにほんとに興味を持ち始めたのは、1年目が過ぎてからだよ。しかし、彼らは常にきちんとしたものを作りたいと思っていた。だから、作業は1テイクでは終わらなかった。最初のテイクを聴き、それから2〜3テイクやって、納得できるものを仕上げた。時間をたくさんかけて何テイクも録り直しを許されるようになるのは、もっと先になってからだ。

リンゴ　僕の場合、すべてがちょっとぼやけちゃっててね。あのアルバムをやるまでの時期とかセッションとか——それにアルバムそのものも——はっきり覚えてないんだよ。
ファースト・アルバムのリハーサルはしなかった。僕の記憶では、"ライブ"で録ったんだ。まず全曲を通しでやって、それぞれの曲のサウンドをある程度つかんでもらう。そのあとは、とにかくひたすら曲をこなしていった。

ジョージ　僕らはずっとピリピリしてたよ。レコーディングするにも、その前に、全曲を通すんだ。僕らがちょっと演奏すると、ジョージ・マーティンが言うのさ、"よし、他には何がある？"って。
「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット」は、このアルバムの中の"僕の曲"だ。この曲の自分のボーカルが気に入らなかった。僕はどう歌えばいいかわからなかったんだよ。誰も歌い方なんか教えてくれなかった。"Listen, do da do, Do you want to know a secret? do da do, Do you promise not to tell..." (ねえ、秘密を知りたい？喋らないって約束できる？)。

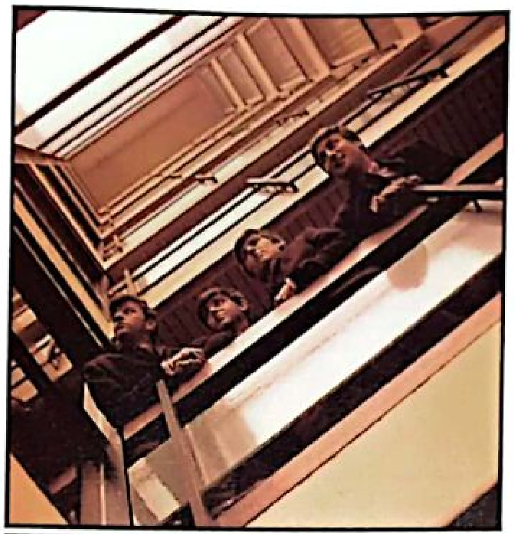
EAT GROUP FROM A HAPPY GUV
TIONS ON A WONDERFUL ACHIEVEMENT =
LEASE ME
BRIAN +

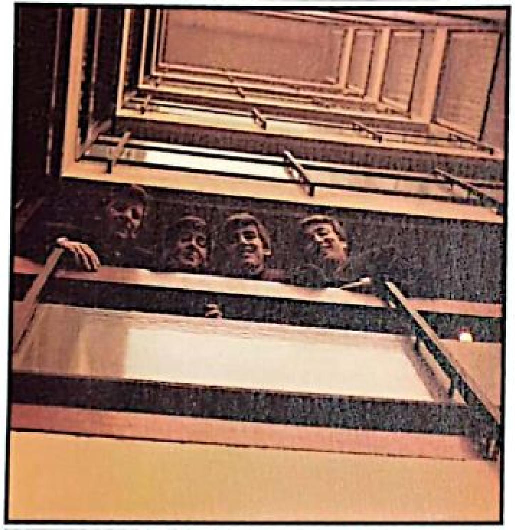
ジョン　「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット」は、特にジョージのために書いたってわけじゃないんだよ。僕は、初めてまともなアパートメントを手に入れてさ。14人もの学生と共同生活しなくてすむ場所をね。——それまではアート・スクールの奴らと男女一緒くたで住んでたから。あの頃僕はシンと結婚したばかりで、ブライアン・エプスタインがちょっとした秘密のアパートメントを譲ってくれたんだ。彼が恋人と会うためにリバプールに持っていた隠れ家だよ。自宅とは別にそういう場所があったんだ。そのことが頭にあったからあの曲を書いたわけ。それでジョージにあげたんだよ。1980年

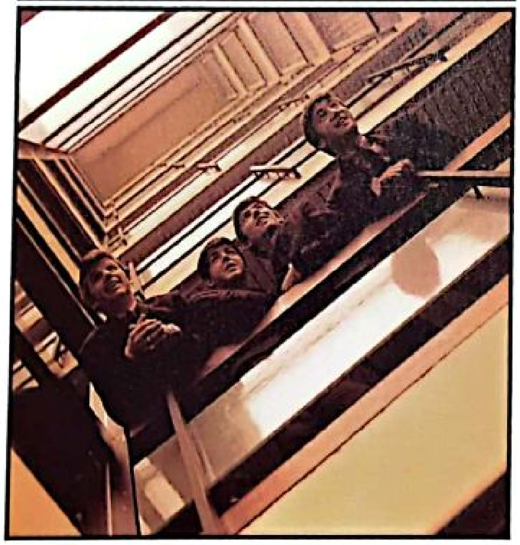
ジョージ　あのセッションでは、ひょっとしたらゴフィン＆キングの「キープ・ユア・ハンズ・オフ・マイ・ベイビー」(リトル・エヴァが「ロコ・モーション」のあとに出した曲)をやってたかもしれない。時々、曲を覚えたりするものの、1〜2回やってやめちゃうことがあったんだよ。ポールがエイントリー・インスティチュートで「ザッツ・ホエン・ユア・ハートエイクス・ビギン」を歌った時もそう。あれはエルヴィスの曲だけど、途中で語りが入るんだよ。こんなくだらないセリフ、聞いたことあるかい？——"愛とは決して共有できないもの"なんて。

このアルバムには、アーサー・アレキサンダーの「アンナ」も入ってる。僕は彼のレコードを何枚か持ってた記憶があるよ。それにジョンも、彼の曲を3〜4曲歌ってた(「ソルジャー・オヴ・ラヴ」もそう。あれはBBCライブ・アルバムに入ってるよ)。アーサー・アレキサンダーは、独特のドラム・パターンを使ってて、僕らもそれをコピーしようとしたんだ。でもうまくいかなくて、結局自分たちで作っちゃった。すごく風変わりだけど、同時にすごく独創的だったね。コピーしようとしても、できないことが多かったんだよ。その結果僕ら独自のバージョンが生まれることになったのさ(レゲエもそうやって生まれたんだと思うな。カリプソ・ミュージックをやってきた人たちが、60年代にロックン・ロールを聴いて、"これをやってみよう"と思ったのさ。でもうまくできなかった。その時出てきたものがレゲエとして定着したんだ。今じゃみんなレゲエをやろうとするけどできないだろ)。

リンゴ　昼頃始まって真夜中に終わったんだよ、僕の記憶ではね。「ツイスト・アンド・シャウト」を歌うジョンの声が見事にがらがらになってた。アルバムに入れた曲は全部知ってたよ。イギリス中のステージでこなしてきたレパートリーなんだから。そのおかげですぐスタジオに入ってレコーディングできたのさ。マイクの位置もややこしくなかったし。アンプそれぞれの前に1本ずつ、ドラムの上に2本、ボーカル用に1本、バス・ドラム用に1本。でも、バス・ドラムは全然聴こえない。今改めて考えると自信がなくなってきたな。僕の記憶が混乱しているのかもしれない。バス・ドラムにマイクはなかったのかもしれないね。







ジョージ・マーティン　「ツイスト・アンド・シャウト」がすごく咽喉に負担をかけることはわかっていたから、私は言ったんだ。"この曲をやるのは最後にしよう。これを先にレコーディングしたら、そのあと声が出なくなってしまう"。それであの曲をあの晩の最後にやってたんだよ。2テイクやると、ジョンはまったく声が出なくなった。だが、あのレコードの場合は、あれでよかったんだ。ああいう、布を引き裂くような声が必要だったんだよ。

ジョン　最後の曲で死にそうになった。しばらく声が戻らなかった。何か飲み込むたびに、ヤスリをかけられているみたいでさ。ずっとあれが恥ずかしくてたまらなかった。もっとうまく歌えるのにって思って。だけどもう気にならない。必死になってがんばってるのが伝わってくるだろ。1976年　——ほとんど休みなしで12時間歌い続けた。僕らは風邪をひいててね。それがどう影響するかも気になってた。1日が終わると、とにかく何パイントもミルクを飲みたいってことしか頭になかったね。

あのLPのプレイバックを待っている間というのは、ほんと不安で仕方なかった。僕ら完全主義者なんだよ。少しでも古臭く聴こえたら全部最初からやり直したくなっただろう。でも実際聴いてみたらすごく満足できた。1963年

ジョージ　あのLPのジャケット写真は、マンチェスター・スクエアのEMIビルのバルコニーから僕らが顔を覗かせてるのを撮ったものだ。撮影はアンガス・マクビーン——僕は今でもあの時着たスーツを持っているよ。(1990年に、あれを着てパーティに行った。50年代の衣装を着ていくことになってたんだけど、ごまかして60年代のを着ていったんだ。サイズがピッタリに見えたけど、実はズボンのウェストが締まらなかった)。

1969年にまたあそこへ行って、"赤盤"と"青盤"のアルバムのために同じ写真を撮った。「レット・イット・ビー」のジャケットにするつもりだったんだけどね。

サイケデリック時代まで、いやサイケデリック時代になっても、EMIはお役所みたいだった。エンジニア全員がきっちり訓練を受けてたことは確かだけどね。テープ・コピーから始まって、次にテープ・オペレーター、その次にデモ・セッションのアシスタントになる。さまざまな部署をすべて経験したあと、ようやくデモ・セッションのアシスタントにしてもらえる可能性が出てくる。あるいは、空いてるエンジニアが突然いなくなった場合に、見習いが大抜擢されるかもしれない。ほんと、訓練は行き届いてたよ。だけど1967年になっても職場ではスーツにネクタイ着用なんて、ちょっと馬鹿げてるよね。EMIはエンジニアをきちんと訓練させた。だけど、1967年になっても、まだスーツにネクタイで作業に入るのは、ちょっと間抜けだった。

ポール　レコーディング・スタジオに入ると、たいていひどく緊張してたね。それでいてすごく興奮してるんだ。緊張しつつ興奮してるんだよ。アビイ・ロードは最高だったな。正面玄関でサー・ドナルド・ウルフィットに会ったのを覚えている。僕らはビルに入っていくところで、彼は出てくるところだった。「ジャスト・ウィリアム」シリーズ(童話)の一場面みたいに思えた——偉い人の登場！って感じ！　大きな毛皮の衿の付いたコート——すごく仰々しい雰囲気だ——それに太くてもじゃもじゃの眉。彼はその眉の下から、いささか見下すような感じながらも好意のこもった目で、僕らを眺め深い声で言ったんだ。"やあ、元気かね"。

当時、僕らはコントロール・ルームに入ることすら許されてなかった。"僕ら"対"彼ら"って感じだったんだよね。コントロール・ルームにいる彼らは白いシャツにネクタイという姿。彼らは大人だった。廊下や奥の部屋には、全身を白衣に包んだメインテナンス係とエンジニアがいる。そして僕ら職人がいるわけさ。僕らは業務用入口から入って、組織の下っ端の人たちの手を借りて機材をセッティングした。ずっとそんな感じだったね。僕らがものすごく有名になるまでは(有名になってからもそういう状況が消えたわけじゃない。違いと言えば「サージェント・ペパー」時代から深夜にレコーディングをやるようになったことくらいだ)。

だけど次第に僕らは仕事場を仕切る熟練工になっていった。最後には、ビルにも自由に出入りできるようになった。僕らと、僕らのセッションに参加するレコーディング関係者、それに守衛。他には誰もいない。すばらしかったね。ビルの中をうろついて、エコー・ルームで煙草吸って。僕らは、EMIの会長よりもあのビルを知っていたと思うよ。だって僕らあそこに住んでたんだから。僕は家も、あのすぐそばに買った。あそこが大好きだったんだよ。帰りたいなんてちっとも思わなかった。

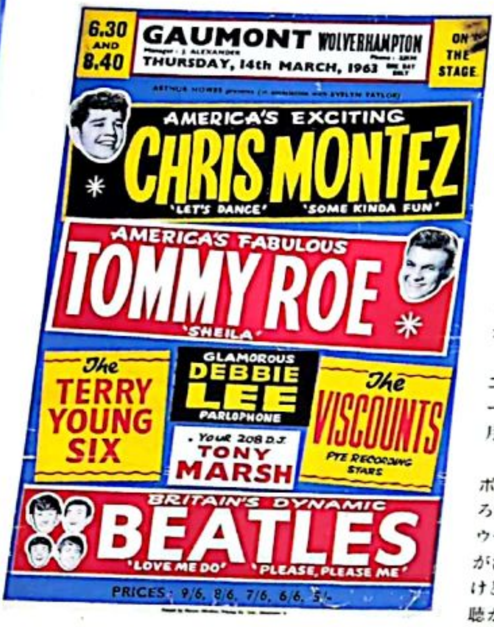
CamScannerでスキャン

ROY ORBISON FROM THE UNITED STATES

THE BEATLES

ジョージ　3月にトミー・ロウとクリス・モンテスと組んでツアーをやった。ふたりが対等の立場でヘッドライナーを務めることになっていたんだ。最初のステージでどちらかがトリをとれば、次のステージでどちらかがトリという具合でね。クリス・モンテスには「レッツ・ダンス」という大ヒットがあったし、トミー・ロウにも「シーラ」(可愛いシェイラ)があった。

ビートルズ人気はますます上がっていた──トミーとクリスにしてみれば不運だったね。ツアー初日はロンドンのバーキングだったんだけど、その晩のステージが終わったあと、大勢集めてあわただしくミーティングが開かれた。プロモーターのアーサー・ハウズが、前半の締めはビートルズにやらせようって言いだしたからさ。確か、公演全体はクリス・モンテスが締めて、前半はトミー・ロウが締めるってことになってたはずだ。"それはダメだ。トミーとクリスがトリだよ"って僕ら言ったんだよ。だって僕らにすれば、ふたりはやっぱりビッグ・ネームだったからね。トミー・ロウがいきり立ったのを覚えてるよ。"契約はどうなる。トリじゃないなら僕は抜けるぞ"って言ってさ。



クリス・モンテスには悪かったな。かわいい顔したメキシコ人でね。椅子に座ってスローな曲をやるんだ。スペイン語の歌。すると、テディ・ボーイがいっせいに怒鳴るのさ"ブー、とっとと失せろ"って。すると彼は"ああ、これが気に入らない?　そうか"ってその曲をやめて、ギターを下ろすと別の曲に変えるんだ。ほんとに気の毒だったけど、ビートルマニア現象はどんどん膨らんできてたから。「プリーズ・プリーズ・ミー」がヒットして、「フロム・ミー・トゥ・ユー」が続いて出るところだった。

ニール・アスピノール　次の大物ツアーは、ロイ・オービソンとのツアー、5月だった…。

ポール　ロイ・オービソンはバスの後ろで曲を作ってるんだよ。「プリティ・ウーマン」とか。すると僕らも競争心が湧いてきた。それがよかったんだけどね。彼はよく自分の作った曲を聴かせてくれてね、僕らは"わあ、すごくいいね、ロイ。今作ったの?"とか言いながら、心の中では"こっちも負けないくらいいいやつを出さなきゃ"って思ってた。となれば次にどうすべきかは自明の理ってわけ──自分たちでいい曲を作るのさ。そして僕らは実行した。それが「フロム・ミー・トゥ・ユー」だった。

ジョン　レコードはよく売れていたけど、僕らはまだヘッドライナーにはなれなかった。デビュー当時にやったビッグ・ツアーのひとつに、ロイ・オービソンに次ぐランクづけで出演したものがあった。あの男に対抗するのは、かなりきつかったよ。彼はほんとに目立ってた。いや、目立つ奴は他にいくらでもいるけど、何しろオービソンにはあのすばらしい声があるんだからね。1975年

ジョージ　彼は死ぬ瞬間までずっと、最高にイカした奴だったよ。曲がいいし、それにあれほどすばらしい声を持っていたんだから。ヒット曲はすごくたくさんあって、ひと晩中でも聴いていられる。彼は何もしなくてもいいんだ、脚を動かす必要もない。実際彼は、ピクリとも動かず、大理石みたいだった。動くのは唇だけさ──あの高音を出す時でも、まるで無理してないんだ。まったく奇跡だね。あんな人は他にいないよ。

そのうち僕らがヘッドライナーになった。ロイのあとで出ていかなきゃならないわけさ。ああいった劇場ではステージのカーテンの一部を閉じて、他の奴がまだステージに出てる間に準備できるようになってる。ロイのバック・グループがどこにいたかは覚えていないけど、ロイは毎晩出演してきて、最後はいつも"She's walking back to me, do do do do da do do do..."(彼女が僕のもとに戻ってくる)と歌うんだ。それで、観客はどっと沸く。僕らが待機している前で、彼は大きなアンコールの声に応えてもう1曲歌う。僕ら思ったよ、"どうすりゃいいんだ、このあとに出るのかよ?"って。ほんと、真剣に悩んだね。

ジョン　僕らはそれまでメイン・アクトになったことがなかった。成功ってのは測りようがない。でも仮に測れるとすれば、僕がビートルズの成功を感じ取った瞬間は、僕らの曲を2曲レコーディングさせてくれないかとロイ・オービソンから訊ねられた時だね。1963年

リンゴ　ロイのあとに出るなんて、とんでもないね。彼は観客を圧倒し、観客はもっとやってくれって叫んでる。出番が近づくと、僕らはカーテンの陰に隠れてひそひそ言い合うんだよ。"さあ、皆さん、次は誰でしょう。みんなの大好きな馬鹿騒ぎだよ!"って。だけどステージに上がっちゃえば、いつだって問題なしだった。

ジョン　僕はもう何年も、ポールと組まずにいろいろ書いているよ。
前からずっとそうさ、僕らはふたりで書くこともあれば別々に
書くこともある。僕には他のライターは必要ない──
まあ、ジョージならいいな。ジョージとなら一緒に書くよ。

リンゴ　「ラヴ・ミー・ドゥ」、「プリーズ・プリーズ・ミー」、「フロム・ミー・トゥ・ユー」──と最初のシングル3枚(僕は「ラヴ・ミー・ドゥ」に参加していないけど)を出したあと、何より楽しみだったのは、ラジオで曲がかかることさ。曲が流れる時間はいつもわかっていたんだよ。"みんな、7時20分だぞ"ってブライアンが教えてくれるのさ。車に乗ってても、その時間が来ればどこを走ってようと停めてラジオを聴いた。それにもうひとつすごいのはね、レコードがチャートを上がるたびにお祝いの食事をごちそうしてもらえたことさ。ビートルズがレコーディングを始めた頃からずっと見ていけば、最初の1年半で僕らの体重がぐんと増えてるのがわかるだろう。あれだけいろいろ食べてりゃ無理ないよ。僕がスモーク・サーモンを知ったのは、この頃だ。22歳になるまで缶詰のサーモンしか食べたことなかったんだよ。今でも缶詰のやつは好きだけど。

ジョージ　1963年には4曲のヒットが出た。レコードは発売される前からゴールド・ディスクになっていた──ありとあらゆることが起こりつつあった。

3枚目のシングル「フロム・ミー・トゥ・ユー」はほんとに大きな意味を持っていた。これでお墨付きがもらえたわけだから。ファースト・シングル「ラヴ・ミー・ドゥ」はよく売れた。それでまたスタジオに呼んでもらえて、「プリーズ・プリーズ・ミー」をやった。続いてアルバムを出し、そのあとに「フロム・ミー・トゥ・ユー」がヒットして僕らの名声はある程度確立されたんだよ。

ジョン　ポールと僕が「フロム・ミー・トゥ・ユー」を書いた夜は、ヘレン・シャピロとのツアー中でね、ヨークからシュルーズベリーへ向かうバスの中だった。真剣にやっていたわけじゃない──ただギターで遊んでただけ──ところが、いいメロディ・ラインが出てきたんで、本気で取りかかり始めたんだ。シュルーズベリーに着く前には、歌詞でも何でもすべて出来上がってたよ。確か最初のラインは僕が考えて、そこから膨らませていったんだ。「フロム・ミー・トゥ・ユー」なんてタイトルをどうして思いついたのか、自分たちでも不思議に思っていた。そのことを考えながら、チャートの順位を見ようとNMEを手に取って、その時思い出した──僕らバスで新聞を読んでいてインスピレーションを得たんだよ。ポールと僕は"フロム・ユー・トゥ・アス"というコラムに掲載されてた投書のことを話してたのさ。

「プリーズ・プリーズ・ミー」の次のシングル用には、すでに「サンキュー・ガール」を書いていた。だからこの新曲は、B面になるはずだったんだよ。でもこれがすごく気に入ったから、こっちをA面にして「サンキュー・ガール」をB面にするしかないと思った。1963年　かなりブルース色が強かった。今なら、すごくファンキーなアレンジもできるだろうね。1980年

ポール　僕らは、何年もの間にかなりの曲を作ったよ。でも、伝説になってる"最初に100曲作った"とかいうのはね、実際にはたぶんその半分もいかないだろう。「プリーズ・プリーズ・ミー」はジョンがメインだ。僕はそんなに手を入れてない。「P. S. アイ・ラヴ・ユー」はどちらかと言えば僕の曲だね。「フロム・ミー・トゥ・ユー」は半々だ。ほぼ完全な合作と言える(サビの部分に大満足したのを覚えてる。変わったコードが入ってるだろう。そこからマイナーに変わって"I've got arms that long..."とつながる。これはすごい進歩だって僕ら思ったよ)。「シー・ラヴズ・ユー」は、レコードを出さなきゃいけないっていうんで作ったもの。「ラヴ・ミー・ドゥ」は、"2曲をつなぎ合わせた"みたいな感じだね。

曲のクレジットをレノンとマッカートニーの共同にするというのは、かなり早いうちに決めていた。僕らは、ロジャース&ハマースタインみたいになりたかったのさ。ソングライティングに関して僕らの知ってることといったら、彼らやラーナー&ロウといった人たちがやってるってくらいだった。そういう名前なら聞いたことあったから、曲作りというと彼らに結びつけていたんだよ。それでふたりの名前をくっつけるのがいいような気がしたんだ。

僕は＜マッカートニー＝レノン＞にしたかったんだけど、ジョンの方が強いからね。それがジョンのやり方だった。それが悪いって言ってるんじゃないよ。僕があんまり要領よくなかったってことさ。彼は僕より1歳半年上だった。あの年頃だと、それだけでもちょっとした世渡りのコツの差になって現れるんだ。

覚えてるよ、ミーティングに行ったら言われたんだ。"君たちの作曲のクレジットは＜レノン＝マッカートニー＞にするべきだと思う"。僕は"いや、レノンが先じゃダメだ。＜マッカートニー＝レノン＞はどう?"と言った。でもみんな、＜レノン＝マッカートニー＞の方がいい。響きがいいじゃないか"と言うんだ。僕は"いや、＜マッカートニー＝レノン＞だっていいよ"と反論してみたけど、結局"ああ、わかったよ。じゃあそうすれば!"って言うしかなかった──でも、もし望むなら、平等にするために並びを逆にしてもいいってことになったんだ。実際、「プリーズ・プリーズ・ミー」のアルバムは、全曲＜マッカートニー＝レノン＞のクレジットになってる。レノン＝マッカートニーは共通用語みたいになったけど、最近時々「イエスタデイ」のような曲では順序を替えて、誰が何をやったかはっきりさせたいと思うこともある。すべてレノン＝マッカートニーになっちゃったからね。だけど僕らは目標を達成し、ロジャース&ハマースタインみたいになっていた。僕らはソングライティング・コンビになったのさ。

CamScannerでスキャン

ン　昔のポールと僕は、音楽のことではほとんど意見が一致していたんだ。占星術
、双子座と天秤座は相性がいいことになってる。それに僕らの共同作業がうまくい
のは、好きな音楽が一緒だったからじゃないかな。1971年
緒に書く時もあれば、そうじゃない時もあった。1970年　最初のうちは別々に書いて
ポールの方が僕より腕が上だったからさ。コードについては彼の方が詳しかった
の曲にはいつもコードがたくさん使われていたよ。彼の父親はピアノを弾いてい
つもポップスやジャズのスタンダードを耳にしてたから、ポールは自然といろいろ
けていたんだよ。1971年　ポールが単独で書いた曲もいくつかある。それから、
とかというLP(『レット・イット・ビー』)の「ワン・アフター・909」は、僕ひとりで書い
だ。17歳か18歳くらい、まだリバプールにいた頃だよ。
一緒に書いていたのは、すごく楽しい時もあったからさ。1970年　曲を書ける
、自分にそれができるんだとはっきりわかることは嬉しかったね。どういうもの
が、好まれるかってことも、"これなら踊れるな"みたいに、いつも聴衆を意識していた。
だから、ほとんどの曲は、ダンス向けにできてるんだ。1974年　"さて、アルバムを作るか?"って言われると、パパッと何曲か作るのさ。仕事みたいなもんだね。1970年　でも、僕はいつだって、自然と湧いてきたものが一番いい曲だと思ってた。

映画か何かのために曲を書いてくれと頼まれ、腰すえて取りかかればまあ曲は作れるよ。でもわくわくすることはないし、やり辛いね。だけどやればできるよ。職人技ってやつさ。そうやって何かを組み立てる作業は、もう何年もやってきた。でも楽しいと思ったことは一度もない。インスパイアできるものを作りたい。魂から生まれたものを作りたいんだよ。1980年

CamScannerでスキャン

ポール　ギターを抱えていたこともあるし、ピアノの前に座っていることもある。何を使
って作曲するかは、どの楽器を触っていたかによるんだ。そのたびに違うんだよ。「オー　1965年
ル・マイ・ラヴィング」はちょっと詩人のように詩を書いてから、あとで曲を付けた。

ジョン　たいてい、どちらかが曲の大半を書き、もうひとりがメロディをちょっと足したり、
歌詞をちょっと付け加えたりして、仕上げに手を貸すんだ。1971年　もし僕が歌詞の1節
だけ書いて、何週間か経ってもその先の歌詞が浮かびそうもないと思ったら、ポールに
声をかけて、ふたりで書く。彼が"これを入れよう、あれを入れよう"って言ってくれる
んだ。
行き当たりばったりみたいだよね。ソングライティングにはルールなんかないんだ。僕
らはどんな場所でも書くけど、普通はポールと僕とで一緒に作る。ギターとピアノだった　1965年
り、ギター2本だったり、ピアノとギターとジェフ(ジョージのことだよ)の場合もある。
考えつくかぎりの組み合わせを使ってるよ。ふたりで曲を書く場合のあらゆる組み合わ
せが揃ってる。それに当然僕らはお互いに影響を受けているんだ。グループ同士、人
間同士は、みんなそういうもんだよ。1968年

ジョージ・マーティン　プロデューサーとして彼らの歌詞に果たした役割はほとんどな
かった。詞の響きがあんまりよくないと思えばそう指摘したし、あと8小節くらい書き足
したらどうかと提案することもあったが、彼らは完成した形で持ってくる場合が多かった
よ。アレンジ面でのアイディアを出すのが私の主な仕事だったね。

ポール　「シー・ラヴズ・ユー」は、ジョンと僕とで一緒に書いた。当時ボビー・ライデル
の曲がよくかかってたね。よくある話で、他の曲のことを考えながら書いてたわけ。
バンでニューキャッスルを走っている時だ。僕はもともと"かけ合いの歌"を作ろうと
思っててね。ふたりくらいが"She loves you"と歌うと、別のひとりが"Yeah, yeah"と応
じる。それは安っぽいアイディアだってことになったんだけど、とにかくその時に「シー・
ラヴズ・ユー」という曲のアイディアはできたわけ。それで、そのあとホテルの部屋に何
時間かこもって書き上げたんだ。
それをジョージ・マーティンのところに持っていって、歌って聴かせた。"She loves
you, yeah, yeah, yeah, yeah, yeeeeeaah"。最後はあの、みんなでいっせいに張り上
げる6度和音さ(6度和音はジョージのアイディア――ジョージって、ジョージ・ハリスンだ
よ)。するとジョージ・マーティンが言うんだ。"エンディングがひどく古くさいね。昔の歌
のようだ――De de dum dum wowww――私なら6度で終わらせたりしない"。でも、
僕らは言ったのさ。"これだけいいサウンドなんだ。かまわないじゃないか。これで行こ
うよ。こんな最高のハーモニーは今までない"って。
彼はそうやってよく決まり事を言うんだよ。"3度は重複させちゃいけない"とか"6度
で終わるのは古い。7度はもっと古くさい"とか。でも僕らはおかまいなしだった。
"僕らはこれが好きなんだ。ブルージーじゃないか"って。彼のいわゆる専門家として
の決断を僕らの無知でどんどん踏みつぶしてしまう。それがよかったんだよ。今誰かに、
"すばらしいソングライターの徴とは？"と訊かれたら、僕は"曲が良ければいいライター
だ"って答えるね。僕らはどんなルールにも絶対耳を貸さなかった。
父はこの曲を聴いた時、言ったよ。"おまえ、ずいぶんアメリカかぶれしてるな。1回ぐ
らいYes, yes, yesと歌えないのかね"。僕は答えた。"わかってないな父さん、それじゃ
ダメなんだよ"

ジョン　リバプールの人間が"Yes"なんて歌うか？　"YEAH!"だろ。
そこが一番大事なキャッチ・フレーズだった。曲を書き終わったあと、まだ何か必要
だと思って、それで"yeah, yeah, yeah"と加えてみたんだ。そしたら、これが受けたん
だよ。1967年
あれはポールのアイディアだよ。また"I love you"と歌うんじゃなく、第三者を持っ
てきたのさ。そういうちょっとしたことへのこだわりは、今の彼の作品に出てるね。彼
はいつも誰か他人についてのストーリーを書く。僕は自分のことの方が書きたいけど
ね。1980年

ポール　ラジオで司会をやってるブライアン・マシューが、『メロディー・メイカー』に「シ
ー・ラヴズ・ユー」の評を書いた。"banal rubbish"(陳腐なゴミ)だって。僕らみんな
"banal"なんて言葉聞いたことなくてね、"banal？　何だそれ？　女々しいってことかな？
…的だっていうのかな？　いったいどういう意味だ？"って思ったよ。でもその次の週、
レコードが『メロディー・メイカー』のチャートで一気にNo.1まで駆け上がると、マシ
ューは第1面で自分のコメントを訂正したんだ。"いやいや違うんだ――初めはちょっと
…じゃないかとも思ったのだが……こういうものはだんだん価値がわかってくるもの
…かね。
…が評論家の意見を気にしてたのは確かだよ。だからあれは僕にとって輝かしい
…なんだ。批判されたからって僕らがやり方を変えるわけじゃない。誰だって変え
…じゃないよ。評論家というのは、自分じゃレコードを出せない人たちでしかない
…。
…を、『タイムズ』のウィリアム・マンが、僕らの曲「ノット・ア・セカンド・タイム」の下降
…を"エオリア風カデンツァ"なんて呼んだり、「ジス・ボーイ」のエンディングの単
…つきのことを"汎全音階的密集和音"とクソ難しく書いたりしてたね。僕らは
…とちっとも意識していなかった。少しでも時間があれば、ホテルの部屋で曲を
作ってただけさ。ジョンと僕とツインのベッドに、ギターを持って座ってね。僕がこっちの
ベッド、僕がもう片方のベッドでさ。

ジョン　自分たちの曲をどう思うかなんて、聞かないでくれ。僕には公正な判断はでき
ないんだから。曲と近すぎるっていうのがまずいんだろうね。だけど、真面目ぶった評
論家たちが、僕らの書くものにあれこれと隠れた意味をくっつけ始めた時は、ひそかに
笑うしかなかったね。ウィリアム・マンは、ビートルズに関するいかにもインテリっぽい記
事を書いた。音楽の専門用語を、これでもかっていうぐらい使ってね。馬鹿だよな。1965
年　いまだに最後のところはどういう意味だかわかんないんだけど、おかげで僕らは知
識人にも受け入れられるようになった。効果はあったからね。「ノット・ア・セカンド・タイ
ム」を書いたのは僕だけど、あれはほんとに何の変哲もないごく普通のコードだったよ。
僕はあの時、スモーキー・ロビンソンか何かの曲を書いているつもりだったんだ。1972年
インテリっていうのは、厄介だね。理解しなきゃいけないって思い込んでるから、感
じるってことができないんだよ。インテリの心をつかむには、まず解説してから、レコー
ドをかけるしかない。レコードをかけて聴かせるだけじゃダメなんだよ。1972年

ジョージ　「ジス・ボーイ」も、3声のハーモニーを使った曲だ。ハーモニー・ソングはた
くさんあった。西洋音楽ではハーモニーは当たり前なんだ。ポールは彼の父親が僕ら
に3声のハーモニーを教えたって言ってたけど、僕の記憶ではそうじゃない。初期のロ
ックン・ロールを振り返れば、いつもフランキー・ライモン&ザ・ティーンエイジャーズ、エ
ヴァリー・ブラザーズ、プラターズみたいなのがあるだろう。誰でもハーモニーをやって
いた。時々ハモって歌うのは自然なことだったんだよ――エヴァリー・ブラザーズの場合
は時々じゃなくていつもだったけど。

ジョン　そこがビートルズの強みだったんだよ。ビートルズは決してひとつのスタイルに
こだわらなかった。ブルースしかやらないとか、ロックしかやらないとか、そういうことは
絶対なかった。僕らはすべての音楽を愛していたんだ。「イン・マイ・ライフ」とか、初期
の「アンナ」とか、バラードっぽい曲もたくさんやってる。僕にはもっとロックっぽいイメ
ージが強いけど、そういうビートルズの曲を見てみれば、僕だってセンチメンタルな曲を
しっかりやってるんだよ。ポールと同じさ。僕は、その手の音楽も同じぐらい好きなん
だ。1980年

ポール　僕はジョンのハードなイメージの引き立て役になることも多かった。でもその逆
もあり得たんだよ。みんな一方的な見方をしがちだけど、ジョンがすごくソフトになるこ
ともあるし、僕がハードな曲をやることだってある。(映画『バックビート』で気に入らな
かったのは、「ロング・トール・サリー」をジョン役に振っていたことだ。僕はおもしろくな
かったね。あれはいつだって僕が歌っていたんだ。僕と、リトル・リチャードがね)
おかしいよね。僕はメロディアスでソフト。ジョンはハードで辛辣っていう伝説がすっ
かり定着しちゃった。表面だけ見ればそれもある程度当たってるかもしれないけど、ほ
んとはね、昔の彼が気に入ってた曲には「ガール・オブ・マイ・ドリームス」なんていうの
もあったんだよ。あれは彼のお母さんの影響だね。それに「リトル・ホワイト・ライズ」
あれも、確かにクールじゃないけど、いい曲だしよくできてるよ。「ジス・ボーイ」も、そう
いう曲だよね。

リンゴ　他のメンバーみたいに曲が書けたらいいなって思ってたよ――やってみたけど
ね、どうもダメなんだ。歌詞は何とかなるんだけど、僕がメロディを考えるたびに、必ずみ
んなから何々みたいだぞって言われるんだ。彼らに指摘されると、なるほどねって思う
んだよね。

ポール　ジョージは、自分でも曲を作っていたし、僕らが彼のために書くこともあった
(「ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット」なんかそうだね)メンバー全員にファ
ンがいて――リンゴなんてファンが多かったよ、いい奴だし、すばらしいドラマーだから
ね。となると、どのアルバムにも彼のために1曲必要だ。ジョージの場合もそう。彼に夢
中になってる女の子はいっぱいいたからね。彼には最低1曲あげたいよね。でも、その
うちジョージは気づいた。"僕の曲を君たちに書いてもらう必要ないんじゃないか？"っ
て。それで、彼も自分で曲を書くようになったんだ。
ジョージは、曲を書き始めると、アルバム1枚につき1曲ずつ提供していた。ジョージ
を曲作りのチームに入れるのもひとつの方法ではあったんだ。実際、ジョンと僕はその
ことで話をしたんだよ。ある朝、ジョンとウールトン教会の前を歩きながら、話したこと
を覚えているよ。"ジョージに肩身の狭い思いをさせたくないし、どうなるんだろう。3人
で書くべきかな、それともこのままシンプルな形でいく方がいいのかな"。それで結局、
ふたりのままでやっていこうってことになった。
ジョージは「ドント・バザー・ミー」を書いた。それが初めての作品だった。そこから
一気に上達し、すごくいいライターになったよね。「サムシング」のような傑作も生まれた。

ジョージ　「ドント・バザー・ミー」は、1963年にボーンマスで夏の公演をやっていた時
にホテルで書いたんだ。自分が曲を作れるかどうか確かめてみようと思ってね。その時
調子が悪くて寝てたんだよ。
特にいい曲だとは思わないね。全然曲になってないかもしれない。でもとにかく、曲
を書き続けてさえいれば、いつかいいものが書けるんじゃないかってことはわかった。

DIRECTORS E C SILVER (CHAIRMAN)
R L JAMES (MANAGING DIRECTOR)
B S EPSTEIN
J T ISHERWOOD

NORTHERN SONGS LIMITED

今でも思ってるよ、いいものが書けたらなって。いい曲というのは相対的な基準だけどね。だけど、これで僕にも仕事ができたんだ。

他のふたりを見てたから、曲作りのことはちょっとは知っていた。僕は恵まれた立場にいたんだ。つまりひとつの歌が生まれる様子を、同じ車の中で見ることができたんだから。

昔、ローズ・レーンの角の映画館へポールと行ったことがある。ペニー・レーンのそばのポールの家からもそう遠くないところだ。"リンク・ファニチャー"の宣伝が流れててね。"Are you thinking of Linking?"というのがキャッチ・コピーだった。それを見てポールが"お、これはいい歌になるぞ"って、"Thinking of linking my life with you"というのを書いたんだ。

ジョンはいつも助けてくれた。いろいろ考えてくれてね。"書き始めたらその場で仕上げた方がいい。途中でやめると、あとで完成させるのが大変だ"と。そのとおりだ。まあ常にそうとはかぎらないけどね。彼はちょこちょこといいアドバイスをくれた。その後、実際に彼と組んで書いたこともある。ある日僕が彼の家に行くと――60年代中頃の話だけど――彼がいくつか曲を抱えて悩んでたんだ。未完成の曲の切れ端がたくさんあってね。3曲分くらいかな。それで僕もアイディアを出して、つなぎ合わせる手伝いをしたんだよ。それでひとつの曲が出来上がった。「シー・セッド・シー・セッド」。あの中盤はもともと別の歌だったんだ。"She said, I know what it's like to be dead, and I said, Oh, no, no, you're wrong..."という部分。そこからまた別の歌になる。"When I was a boy..."ってね。まさに溶接だね。それで僕もそういうふうにやってみた。時々まだ完成してない曲を彼に聞いてもらったりもしてね。ある日1曲聴かせたら、"お、いいな。これは悪くない"って言われたんだ。その時は何ごともなかったんだけど、次に彼が書いた曲を聴いて気づいた。僕のコード進行をパクってる!

僕は自分ひとりで曲を作るようになった。書き始めがそうだったから、ひとりじゃないと書けなくなったんだ。それで何年もの間、誰とも組まずに作ってたから、ちょっと孤立するようになった。ちょっと神経質になってたんだろうね。他人と一緒に曲を作るのがどんなものか、経験がなかったから。共作ってのは難しいよ。片方がいいと思っても、もう片方はダメだと思うかもしれない。お互い信頼がなきゃできないさ。

ジョージ　**車にテープ・レコーダーを入れてあるんだ。**
歌を吹き込んでおけば、
家に帰ってからゆっくり曲が作れるだろ。 1966年

ジョン　**ノーザン・ソングズとの契約は長期的なもので**
ポールと僕が60歳まで曲を書き続けることが
前提になっている。何か起こらないかぎり、
ポールと僕は年をとってもヒット曲を書いているだろう。
すごく儲かるし、いずれにせよ僕らはいい友だちだ――
やめる理由なんてどこにもない。 1965年

ニール・アスピノール　ブライアンはディック・ジェイムスと知り合いだった。ジェイムスはテレビ・ドラマ「ロビン・フッド」の主題歌を歌ったことで知られてたけど、その頃すでに自分の音楽出版社をやっていた。ちょうどジョンとポールは自分たちで曲を書き始めたところだったから、ブライアンは彼らのテープをジェイムスに聴かせたんだよ。

ディック・ジェイムスはシングル「プリーズ・プリーズ・ミー」の版権を手に入れて、さらにその後に出た曲の権利も獲得した。当時の僕らはみんなかなりの世間知らずだった。著作権については、あんな契約を結んでしまったことをビートルズはずっと悔やむことになったんだ。

CamScannerでスキャン

ポール　僕らは契約したくてたまらなかったんだ。若手の小説家がとにかく本さえ出せればって思うのと同じだよ。そう言う新人作家は、ダブルデイみたいな大手出版社と契約できるなら死んでもいいと思ってるだろ。どんな契約だってかまわない。"いやね、新作がダブルデイから出るんだよ"って友だちに言えるならね。"えっ、ほんとにあのダブルデイ？"——"そうさ！"。僕らが望んでいたのもそれだけだったんだ。出版されればよかったのさ。"僕らのレコードがEMIから出るんだ"——"えっ、あのEMI？"。だけど、ブライアンがお粗末な交渉をしてくれたおかげで、僕らは長期に及ぶ奴隷契約につながれてしまったのさ。僕はいまだに縛られてるんだよ。「イエスタデイ」は、ジョンの手も借りず、完全に僕ひとりで作った曲だ。その曲についても僕の取り分は15%なんだよ。ブライアンの結んだ契約のせいで、今日に至るも僕の取り分は15%だ。まったくの不公平だよ。これほどの大ヒットとなればますますね。これは20世紀最大のヒットかもしれないんだよ。

でも、恨んでばかりじゃいけないね。ジョージ・マーティンは、ビートルズとの契約ではほんとに少ししかもらっていないんだよ。僕は彼に聞いたことがあるんだ。"ジョージ、今思い返すと悔しくならない？"。すると彼はこう言うんだ。"いや、私はすばらしい経験をしたからね。あのブームの頃、ある時期私は13週連続でNo.1をとらせてもらった。君たちと、シラ、ビリー・J・クレイマー、ジェリー＆ペースメーカーズ——みんなブライアンのアーティストだ。だが私はボーナスも何ももらわなかったよ"。彼は固定の契約料しかもらっていなかった。僕は言ったんだ。"あなたはいい人だなあ、恨む気にならないなんて"。ほんとにそうなんだよ。彼はそうやって自分のカルマを平穏に保ってるんだ。僕も彼と同じように考えている。だけど、もしブライアンに欠点があるとしたらこれだね。あまり目先が利かないってこと。

ジョン　思うにブライアンは、ディック・ジェイムスにちょっとだまされたんじゃないかな。だってさ、ブライアンが死んだあとどうなった？　ディック・ジェイムス・ミュージック・カンパニー——何百万と稼ぐ、音楽業界のクソ会社だ。ノーザン・ソングズ。僕らのものじゃない。NEMS。僕らのものじゃない。そういうのはすべて、ブライアンとまわりのアドバイザーが仕組んだことさ。1972年

それどころかディック・ジェイムスは、彼が僕らを育てたと言ってる！　どうかディック・ジェイムスの音楽を聴かせていただきたいね。ちょっとでも聴かせてみろってんだ。1970年

ジョージ　ブライアンはどの件についてもあまりいい契約を取ってこなかったな。何年もの間、EMIは僕ら4人に対してシングル1枚につき、たったの1ペニー、アルバムについては2シリングしか、よこさなかったんだよ。その上、ブライアンの父親がビートルズ関連商品の権利を譲るなんて大失敗をやらかした。そもそも彼の父親は権利を譲れるような立場じゃなかったのに、彼が誰かに渡しちゃったから、そいつがまた別の誰かに売り渡し、そこからさらに違う人間の手に移ったんだ。

1962年か63年あたりの僕らが今と同じ知識を、いや、せめて1967年頃の知識を持っていたら、状況はまるで違っていただろう。いったいどういうことになっているのか、それさえわかっていれば、もっと率のいいギャラをもらっていただろう。この印税率のおかげで、その後あまりに多くのトラブルと、あまりに多くの訴訟に巻き込まれた。僕らはもっとまともな印税率を与えられてもよかったんだよ。

僕はあの頃はまだ曲を書いていなかったけど、ジョンとポールは書いていた。その後、曲を書き始めたら、"君の曲を出版したいか？"と持ちかけられたんだ。ジョンとポールの曲はディック・ジェイムスのところで出版されていたし、僕は"うん、そうだね、僕も曲を出版しよう"と答えたんだ。"あなたがこのちっぽけな紙にサインして、あなたの曲を出版させることに同意くだされば、私はあなたからあなたの曲の権利をいただくことになります"なんて、わざわざ教えてくれる人はいないよ。で、僕はこの契約にサインして、"すごいな、誰かが僕の曲を出版してくれるんだ"って思ってた。ところが何年かたったら、"僕のものじゃないって、どういうことだよ？"って言ってるわけ。実際の話、あれじゃ泥棒だよ。そういうことがしょっちゅうあったのさ。

ジョン　金の話なんてしたことがなかったね。僕らはただのソングライター・チームにすぎなかった。16歳からやりだして、"レノン＝マッカートニー"名義にしようって決めて、"はい、これ書いたよ"って出しただけ。たとえ9割方完成しているものでも、必ずスタジオで付け加えるものが何かしらあるはずだ。歌というのは——今、自分で曲を書く時でもそうなんだけど——完全じゃないんだよ。レコーディングが終わるまでは絶対に出版者には曲を渡せない。歌詞もメロディもアレンジもすべて完璧にできているとしても、それは紙の上でのことだ。スタジオに入れば変わるんだよ。僕らはずっとそんな感じでやってきたんだ。でも、金のことは誰ひとり考えてなかった。金の話をしたがる奴なんてどこにいる？1974年

ポール　**僕らには信頼できる人がついてる——僕らのマネージャー。それにレコーディング・マネージャー、出版者、会計士——みんな信頼に値する人だと思う。彼らに任せておけば心配することなんてないよ。**1965年

リンゴ　1963年4月、ポールとジョージと僕とで、テネリフェで休暇を過ごすことにした。クラウス・フォアマンの両親がそこに家を持っててさ。電気を引いてなかったから、ほんとボヘミアンの気分だった。

黒い砂があるところに行ったのはあれが初めてだ。黒い砂なんて、それまで見たこともなかったよ。あの旅行はほんとに楽しかったな。ポールがいい写真を持ってるよ。僕らがスペイン風の帽子をかぶってブラブラしてるところを写したやつ。なんかドラマティックに見えるんだ。スペイン人ってそこが最高にいいんだよな。すごくドラマティックなんだ。

ポール　テネリフェに行って少し泊まったんだけど、何だか不安になったよ。カナリア諸島じゃ、誰も僕らのことを知らないんだもの。ちょっとがっかりしたよ。"僕らのこと知ってる？　ビートルズだよ。知ってる？"。するとみんな言うのさ。"さあねえ……知らないな"。

僕は日焼けでひどい目に遭った。イギリス人特有のやつさ。あとですごく痛くなるんだ。おかげでかなり辛い思いをしたよ。その上、沖に流されちゃうし。海で泳いでいて、もう岸に戻るかって泳ぎだしたら、全然進まないんだ。それどころか沖に流されちゃってるんだよ。

ジョージ　**黒い砂浜が記憶に残ってる。僕らは長いこと太陽を浴びすぎて、どうしようもなく焼けちゃったんだ。いかにもイギリス人のやりそうなことだよ。リンゴと僕は、1日だったか2日だったか、揃って日射病になった。ひと晩中震えが止まらなかったのを覚えてるよ。**

僕は車でいろんなところをまわった。あの頃スポーツ・カーに凝ってたんだけど、クラウスがすごくいい奴でね、オースティン・ヒーリー・スプライトを使わせてくれたんだよ。ポールと僕がこの車に乗ってる写真がある——火山に登った時に撮ったんだ。火山の頂上は月の表面みたいだったね。望遠鏡があちこちに置いてあって、大きな観測所が建っていた。

ポール　同じ時期にブライアン・エプスタインはスペインに出かける予定でね。ジョンも誘ったんだ。ジョンは賢い奴だよ。ブライアンはゲイだし、ジョンはいいチャンスだと思ったのさ。このグループのボスが誰なのか、ミスター・エプスタインにはっきりわからせてやろうって。それで彼はブライアンと旅行に出かけたんだと思う。まあ、がんばってくれって感じ——彼はそういう奴だった。ブライアンに教えたかったんだよ、誰の意見に耳を傾けるべきか。関係といってもそれだけのことさ。そういう意味ではジョンは確かにリーダーだった。実際に口に出してそう言うことはなかったけどね。

ジョン　シンに子どもが生まれそうな時に旅行の予定が入っちゃってね。でも、僕は赤ん坊のために休暇を潰す気はなかった。まったくひどい奴だよなって自分で思っただけ。それで出かけちゃった。ブライアンが男を漁るのをの眺めてさ、僕もちょっとホモっぽくふるまったりして——けっこう楽しいもんだよ。

相手がホモセクシャルと知りながらホモセクシャルと過ごしたのはあれが初めての経験だった。トレモリノスのカフェに座って、男を眺めながら、僕は"ああいうのが好み？　こっちの方が好み？"なんて言ってた。けっこう楽しかったよ、ずっと作家みたいに考えてたんだ。"今、これを経験している"って。恋愛関係に近かったけど、完全にそうとは言えなかった。最後までは行ってないからね、でも、まあかなり濃い関係ではあった。1980年

ところがリバプールのあの噂は何だい！　僕らが初めて全国紙で報道されたのは、「デイリー・ミラー」の裏ページさ、ポールの21歳の誕生日に僕がボブ・ウーラーを殴ったという記事だよ。"レノン暴行"記事の第1号だ。翌日はものすごく気分が悪かった。BBCの予定があって、みんなは電車で出かけたけど、僕は行く気はなかった。ブライアンから行ってくれって頼まれたけど、僕は"行かない！"って言い張った——あやうくウーラーを殺しかけたことが、自分でもすごく怖かったんだ。

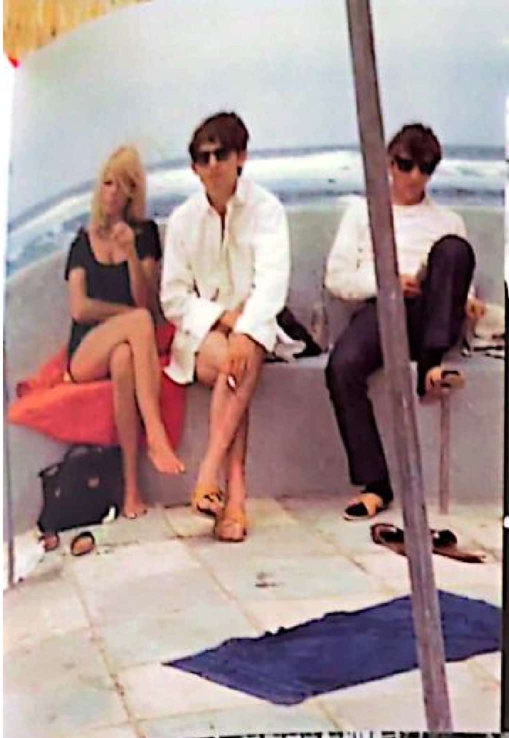
ボブは僕とブライアンがスペインで関係を持ったとほのめかすようなことを言ったんだ。僕も自分にそんな面があるんじゃないかと恐れていたに違いないね。あんなに腹を立てるなんてさ。僕は酒で頭がどうかしてたんだ（空になったグラスを逆さにして、滴でも飲もうとすることあるだろう、ああいう酔っぱらい方だよ）。そういう時にボブが"なあ、ジョン、君とブライアンのことを話してくれよ——僕らみんな知ってるんだ"って言われたんだ。21歳という年齢は、男っぽくふるまいたい年頃だ——今なら、そんなことを言われても屁とも思わないけれど、あの時の僕は彼をメチャクチャぶちのめして、でかい棒でガンガン殴りつけてた。"こいつを殺してしまうかもしれない"って初めて思った。映画のスクリーンみたいに浮かんで見えたんだよ。もう一発殴ったら、それで終わりだって。ほんとショックだった。その時僕は暴力を振るうのをやめた。それまでの自分はずっとそんなふうだったから。1972年

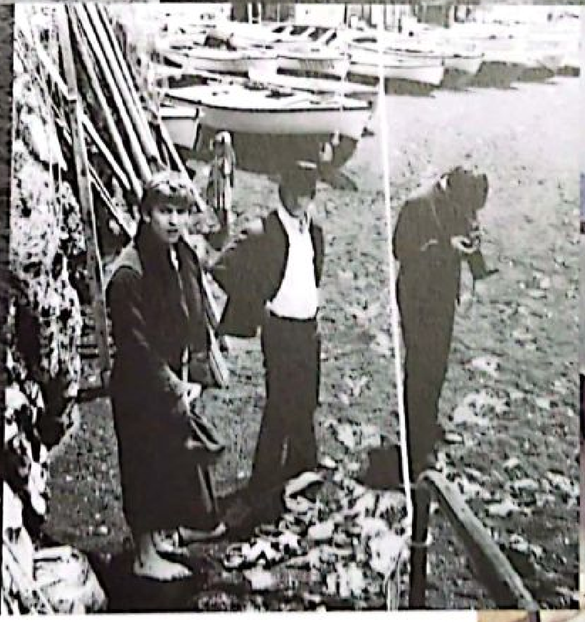
その後彼が訴えて、僕が彼に200ポンド払って決着がついた。ケンカらしいケンカはたぶんあれが最後だろう。1967年　あれ以来——若い頃はちょっとおかしくなってたから、時々愛する妻を殴ったりもしたけど、それを別にすれば（僕は非暴力主義とは言えない。僕は時々おかしくなるからね）——僕は暴力をやめた。1972年

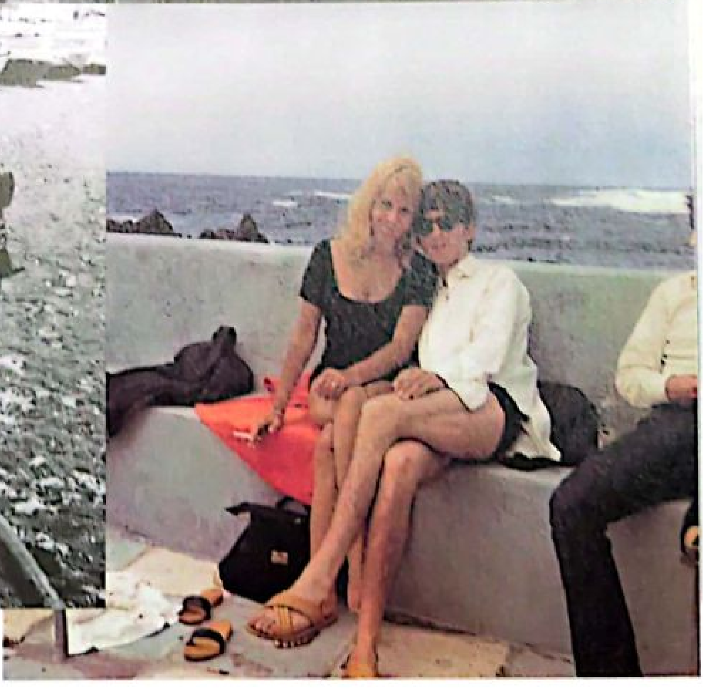
ポール　そういうホモセクシャル話はあったよ——ジョンが何かしたのかどうか、僕にはわからないけど、まあ、確かに僕らも、彼が帰ってきてからあれこれ文句は言ったね。

ジョン　ブライアンが僕に恋したって。そりゃ見当違いだよ。いや、話としてはおもしろいさ。それをもとにしてブライアンの性生活をテーマに「ハリウッド・バビロン」みたいな素敵な本が書けるかもしれない。だけど的はずれさ。まったくのハズレだよ。1980年

CamScannerでスキャン



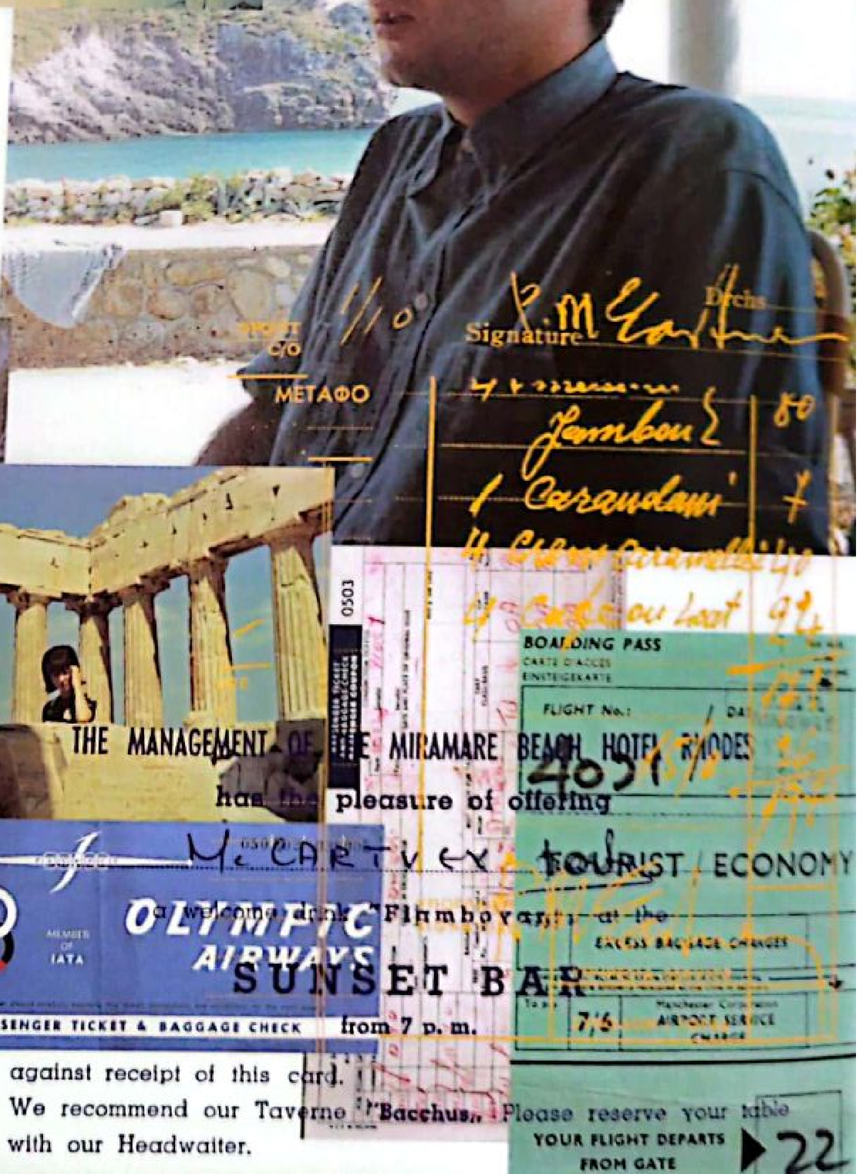


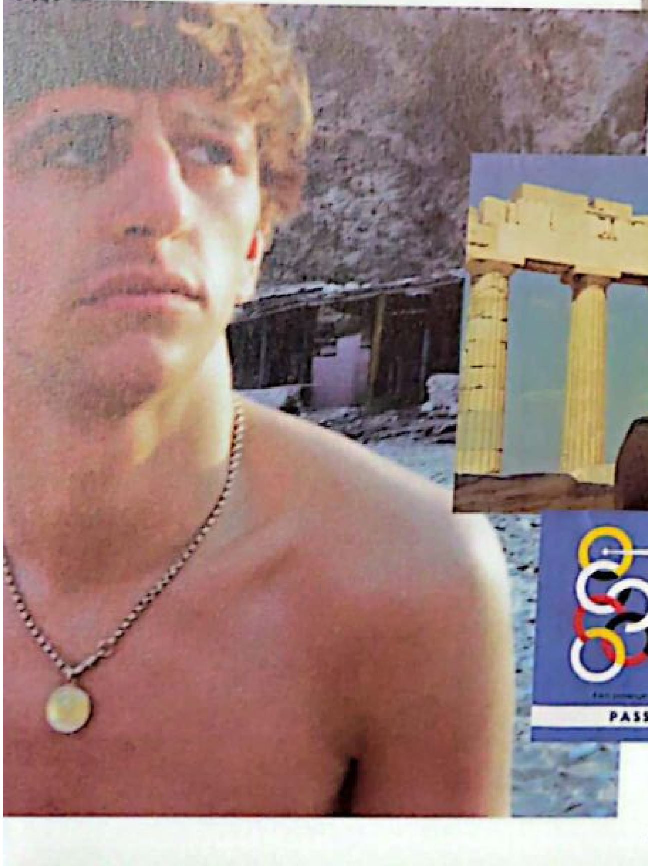


CamScannerでスキャン

リンゴと僕は9月に再び旅行に出かけた。今度はギリシャで、ジェーン・アッシャ
ーも一緒だった。

ロードスとコルフとアテネに行った。ロードスではヘリオスの巨像が見たかった
ルのバーの女性に"すみません、ヘリオスの巨像はどこにあるんですか"。す
は答えた。"そんなのもうないわよ、あんた"——イギリスにこもりきりだとそう
なるんだ——"だけど、港に行けば……"。言われたとおり港に行くと、小さ
たつあって、その上に鹿が2頭のっていた。たぶんそこにヘリオスの巨像
だろう。パルテノンの周りを3回まわったのも覚えてる——確かジェーンの御
ためだ——ほんとに疲れた。





CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　60年代初め、僕らが興味を持った音楽は、アメリカのR&Bだった。ロンドンでは何が流行ってるんだろうってクラブに行くと、やっぱりアメリカの影響を強く感じた。その頃はまだ、僕らはロンドンに馴染んでなかった。新入りだったのさ。その頃、アンドリュー・オールダムという男と知り合った。ブライアンが広報の代理人として連れてきたんだよ。僕らはアンドリューと、リッチモンドに行きブルース・バンドを見た。ローリング・ストーンズさ(言うまでもなく、彼はその後、ストーンズのマネージャーになった)。

ジョン　僕らが成功したあと、ストーンズが出てきて、僕らよりちょっとばかり過激なことをやりだした。髪も長いし、ステージでも無礼な態度だし。僕らがやめてしまったことを彼らはやってたのさ。

初めてストーンズを見たのは、リッチモンドのクローダディ・クラブだった。その後、ロンドンの別の場所でも見た。当時はジョルジョ・ゴメルスキーって男がマネージャーをやってたね。僕らがロンドンをふらつくようになった頃、ストーンズはクラブでめきめき人気を上げ始めていた。僕らはエプスタインを通してゴメルスキーと知り合った。それでストーンズに会って、仲良くなったわけさ。1974年

ジョージ　僕らは『ラッキー・スターズ』の収録でテディントンに行き、「フロム・ミー・トゥ・ユー」の口パクをやると、そのあとリッチモンドへ行って彼らに会った。

彼らはまだクラブ中心だったけど、ビートをガンガンに効かせたR&Bをやってたね。彼らの音楽はレザーの上下を着てた頃の僕らがやってたものに近かった。僕らはレコード契約を結び、テレビに出るために、レザーを脱いじゃったけどね。あの頃はもう僕ら、大人しくなってた。

リンゴ　どこかの蒸し暑い会場でストーンズのステージを立ち見したのを覚えてるよ。キースとブライアン──ワオ！ストーンズは最高だって、あの時もうわかったね。とにかく彼らには存在感ってものがあった(もちろん僕らには見極めることができた──この世界に入ってから5週間も経っていたんだもの。もうすっかりわかってたさ！)。

彼らと話をしたよ。何を話したんだっけ。楽屋に行ったかどうかも覚えていない。

ポール　ミックが言ってるね、僕らが丈の長いスウェードのジャケットを着てるのを見たって。ハンブルクで買ってきたやつで、イギリスでは絶対手に入らないものだった。それで彼は思った、"よし──俺も音楽の世界に入るぞ。ああいうジャケットを手に入れるんだ"って。

ジョン　ブライアン・ジョーンズに"「ラヴ・ミー・ドゥ」でハーモニカかハープを演奏してる？"って訊かれたのを覚えてる。彼は僕がこの低音(bottom)を出してるって知っていたんだ。僕は"ボタン(button)付きのハーモニカさ"とジョークで答えた。これではあまりファンキー・ブルースっぽくならないけれど、ブルース・ハープじゃ、「ヘイ・ベイビー」みたいなフレーズはできない。僕らはブルース・チャネルの「ヘイ・ベイビー」もやっていたんだ。1974年

ジョン
マージー・サウンドなんてものは
存在しないと思う。
あれはジャーナリストが
でっち上げたものさ、
単なる名前だ。
僕らがリバプール出身だっていうんで、
一番近い川を探して、
その名前を付けたんだ。
僕らは自分たちの曲を書いただけさ。
1964年

ニール・アスピノール　その夜のストーンズは、なかなか良かった──キャバーンに出ているバンドはみんな良かったけどね。彼らは独自のものを持ってた。必要なのはそれなんだよ。それができない人ってたくさんいるんだから。

イアン・スチュアートがピアノで参加していたのを覚えてる。だからそのあと宣伝用の写真に全然彼が写ってないのが不思議だった。彼はまたピアノをやってるみたいだったけど、それでいてバンドの中に存在しないも同然だった。まあ、彼らにとってはそれが一番効果的なやり方だったんだろう。

ポール　ある日、ジョンと僕はチャリング・クロス・ロードを歩いていた。ギター・ショップがたくさん集まってるところだから、しょっちゅう出かけてたんだ。僕らにとってメッカみたいなもんさ。午後にやることがなければ、チャリング・クロス・ロードへウィンドウ・ショッピングに行くって感じでね。ミックとキースがタクシーに乗ってるのを見つけて、僕は声をかけた。"おい、ミック、僕らも乗せてよ！"。で、タクシーに飛び乗った。彼らはレコーディング・スタジオに行くところでね。ミックが言うんだ。"ねえ、俺たちに出せそうな曲、何かないか？　俺たち、デッカと契約したんだよ"。僕らは"うーん"って考えた。ひとつあることはあったんだ。リンゴに書いた曲「アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン」(彼氏になりたい)だ。

リンゴはステージで必ず1曲歌っていた。あの頃の持ち歌は「ボーイズ」だ。あれはちょっとやりにくいんだよね。"I'm talking about boys(男の子の噂をしている)──yeah,yeah──boys"って歌詞だから。あれはシュレルズのヒット曲で、もともと女性が歌ってたわけ。でも僕らは、リンゴが男だからってだけで「ガールズ」に変えることはないだろうと思った。オリジナルのまま歌うとおかしな意味にとられるなんて考えもしなかったよ。それで、「ボーイズ」の感じで何か新しくリンゴに曲を書こうと思って、結果できたのが「アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン」だった──ボ・ディドリー風のやつさ。僕はミックに言った"そうだな、アルバムでリンゴがやる曲なんだけどシングルにはしないから、君たちに合ってるかもしれないし"って。

ストーンズは「ノット・フェイド・アウェイ」やボ・ディドリーの曲をやってたし、ミックはマラカスに凝っていた。クローダディなんかを見たからそういうことも知ったんだよ。で、僕らは彼らと一緒にスタジオに行った。

ジョン　「アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン」をあげることになったのは、彼らがレコード出さなきゃならなくなったからだ。チャック・ベリーの「カモン」を出したあと、すぐその次を出さなきゃならなかったんだよ。僕らはアンドリュー・オールダムに会った。彼は以前エプスタインのところで働いていたけど、その後ストーンズと組んで、まあ、おそらくジョルジョ・ゴメルスキーから彼らを引き抜いたんだろう。そのオールダムが僕らのところに来て言ったのさ、"彼らに1曲もらえないか？"。それで僕ら、"ああいいよ"って。僕らの方じゃ別にいらなかったしね。

僕らは一緒にスタジオに行った。曲を教えてやったのを覚えてるよ……ざっとやって聴かせると、彼らは"うん、わかった、これは俺たちのスタイルだ"って。それからポールと僕は隅へ行って曲を全部仕上げた。彼らがみんなまだそこで喋っている間にね。それで出来上がったのを持ってったわけ。この時ミックとキースは刺激を受けて曲を書く気になったんだよ。"すげえなぁ、見ろよ。ちょっと隅に引っ込んだと思ったら書き上げてきたぜ！"。彼らの目の前でやったんだからね。

初期の頃にはもう少し時間があって、というかあるような気がしてて、けっこう他の人にも曲を書いていたんだ。曲ならいくらでもあるから分けてあげようって思ってね。クリフにも1曲書いたよ、でも結局自分たちでやった。1966年

ポール　僕らとローリング・ストーンズがライバルだっていうのは、新聞が言い出したことだよ。ライバル同士みたいに見えるのは当然だろうけど、実は彼らがレコード契約にこぎつけたのもジョージのおかげなんだ。ジョージがあるパーティでディック・ロウと顔を合わせたのさ。ディック・ロウと言えば、デッカのオーディションでビートルズを落としたことで有名な男だよ。

ジョージ　リバプール・フィルハーモニック・ホールで、新人発掘目当ての大々的なコンサートがあったんだ。ビートルズが有名になって、ジェリーとかも成功しただろう、みんな"クソッ！"って思いながらもリバプールに目を向けるようになっていたんだよ。フィルハーモニックに出た奴なんて、それまではひとりもいなかった──向こうが出してくれなかったのさ、ロック・コンサートなんて言わずもがな、だよ。ところが突如として、リバプール中のグループが集まった──前はグループも組んでいなかった連中まで(リバプールは流行の先端とされていたから、このシーンに便乗しようとあっちこっちで次々にグループが生まれてたんだ)。

ともかく、ロンドンから来たお偉方の何人かと会ったのは覚えてる。その中にディック・ロウがいたんだね。彼が"どのグループがいいか教えてくれよ"って言うから、僕は"それはわからないけど、ローリング・ストーンズは取るべきだね"と答えたんだ。

ジョン　僕らがストーンズとつきあっていた時期が2回ある。最初は出会ってすぐ、まだ彼らがクラブで演奏していた頃だ。次はどっちのグループも波に乗ってた頃。ちょうどロンドンにディスコ・シーンが生まれていた。あの頃の僕らはジャングルの王者みたいだったね。ストーンズとはすごく仲が良かった。他のメンバーがどの程度のつきあいだったかは知らないけど、僕はブライアンやミックとしょっちゅう会ってたし、彼らのことは尊敬していた。1974年

リンゴ　ロンドンに来てみたら、ちょっとリバプールにいるような感じがした。ほとんどのバンドが北部出身で、一緒にジャム・セッションをした仲間だったから。よくお互いの家に集まった。アニマルズやストーンズや、クラブで顔を合わせるジャズ・プレイヤーなんかとしょっちゅう会ってたね。いいクラブがあったんだ。バッグ・オネイルズとか、ああいった店さ。(おかしなことがひとつ。ロンドンのクラブに行きだすと、ロンドンの人たちが頬にキスするってことを知った。北部出身の僕にとっては、それってすごく妙なことでね。北部では握手だけだ。それが男の挨拶さ。すぐに慣れたけど、最初はギョッとした。アドリブを経営していたブライアン・モリスが近づいてきて、僕の頬にキスしたのさ。辱めを受けたような気分だった。だけどそれがロンドン流だったんだ)。

ジョン 僕らはワーキング・クラスの出で、ワーキング・クラスであり続けた初めてのシンガーだった。ワーキング・クラスだってことを堂々と言い、イギリスでは見下される発音も改めようとしなかった。変わったのは僕らのイメージだけさ。1980

ジョン パラディアムへの出演オファーは来てるけど、まだそういう時期じゃないと思う。だけ、他のミュージシャンが出演してこき下ろされるのを見てるからね。1963

ジョージ 10月のでかい仕事は『サンデイ・ナイト・アット・ザ・ロンドン・パラディアム』だ。イギリスに来てるアメリカの超大物スターとイギリスの超大物スターが出る番組だんだけど僕らは落ち着いていた。かなり生意気だっただろうし、それにもう十分に慣れていたからね。僕ら、梯子を1段上がる前は、いつも少し神経質になったけど、いってそんなふうな自信があった。それが4人で一緒にやってるメリットさ。僕らは経共有することができたんだ。

リンゴ パラディアムに出演するのは、僕にとってはものすごいことだったんだよ。何年も昔、うちの居間でエディ・クレイトンと僕が練習していると、母の親友のアニー・マグワイアが必ず言ったのさ、『あなたたちもパラディアムに出てね。あなたたちの名前がライトに照らし出されるのを見たいわ』と。だから僕はずっとパラディアムに出たい、あの回転ステージに乗りたい、って思ってた。

パラディアム出演よりすごいことはこの世に存在しなかった。あの頃僕は言ったものさ、『うん、もちろんだよ、アニー。僕らはいつかパラディアムに出る』。そしてほんとに僕らは『サンデイ・ナイト・アット・ザ・ロンドン・パラディアム』で演奏し、回転ステージに乗ったんだ。最高だった。知り合いはみんな言ったよ、『すげえ、おい、見ろよ!』――僕ら当人も言ってたね。

番組が始まる前、僕は舞い上がってるのと緊張してるのとでおかしくなっちゃって、バケツに吐いてしまったんだ。よくあるショービズ・ストーリーって感じ――吐いたあとでステージに出てったなんて。いまだに僕は、イントロが鳴りだすとつい走ってステージに出て行っちゃうんだ。いったんステージに立てば大丈夫なんだけど。フランク・シナトラみたいにゆったり歩いていって、『やあ』なんて言ってみたいなってよく思う。だけど、シナトラだって、足どりはゆったりしてても、心の中じゃ駆けまわってるんじゃないかな。

ジョージ

パラディアムみたいな場所に出るために僕らはスーツを着て彼らのゲームの規則に従った。だけどたいてい心の中で思ってたんだ。"ふん。今に見てろよ、こいつら"。

リンゴ　僕らはショー・ビジネスの世界をくぐり抜けてきた。今のバンドはそんなことをしなくてもいい――ロックン・ロールだけやってればいいんだ。僕らはシャーリー・バッシー学校を出なければならなかった。それが僕らの闘いだったんだよ。スーツを着なけりゃ、絶対にパラディアムなんて出られなかった。僕らの服装や態度の変化は、音楽的進歩を通じて起こったんだ。

20代は、ひたすら前だけ向いて生きている。何だってできるような気がする。邪魔するものは何もない。たとえ行く手を阻む障害があっても、絶対打ち負かしてやる気でいるからね。

ジョージ　当時はスターの派閥を組んでた。みんな要するに体制順応派さ。規則どおりやってる人たち、独創性のない人たちばかりいつもズラッと並んでる。そういう番組の出演者リストを見ると、グレードやデルフォントの組織(ロンドンの大手エージェンシー)で仕切ってる感じだった。みんな彼らのお抱えだった。

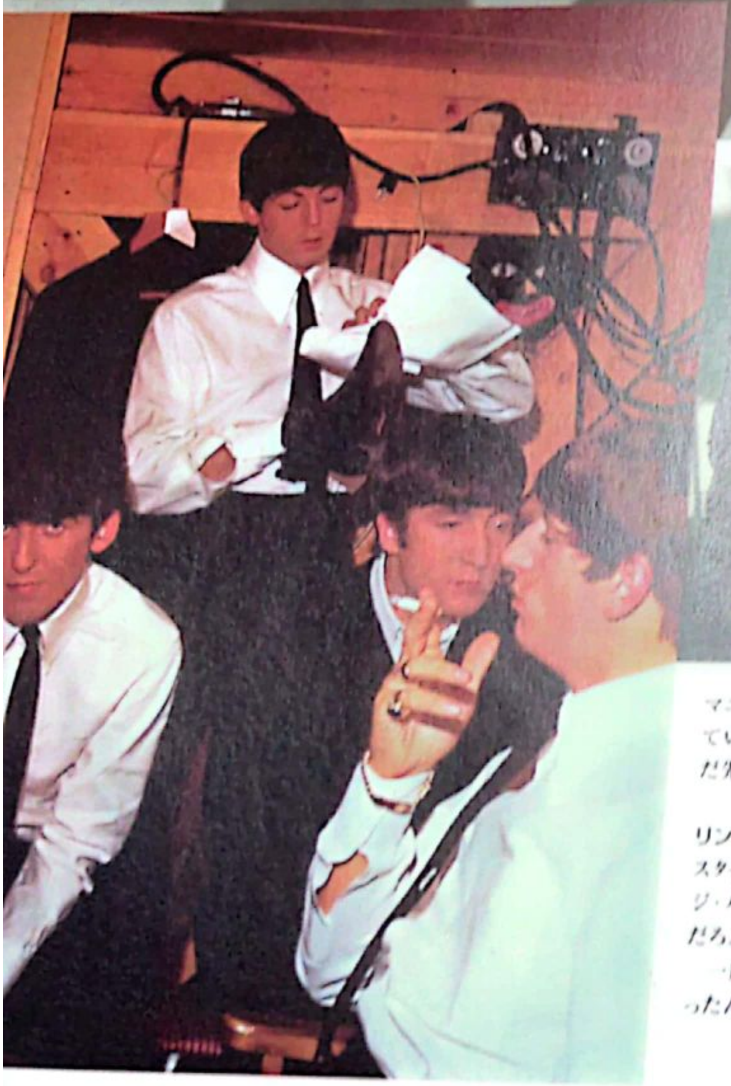
駆けだしの頃、ロンドンのバンドからさんざん言われたよ。ウォトフォードから10キロ北はすべてクズだって。だから僕らが"のし上がった"時、まずそういうバンドすべてに対して、ざまみろと思ったね。ロンドン出身で、僕らなんかよりよっぽどチャンスに恵まれてたくせに、ってさ。

いまだにほとんどのレコード会社はトレンドも才能もつかんでない。彼らは不安にさいなまれてるだけさ。ハズレと契約しちゃったんじゃないか、大当たりする奴と契約し損ねたんじゃないかって。僕らはいつも言われてたよ。"おまえらみたいな北部のクズに何ができるもんか"。みんなそういう態度だった。面と向かって"引っ込んでろ"と言われはしなかったけど。でも、ほんとは僕らずっと思ってた。"見てろよ、このクソッタレが"って。そして僕らはロンドンを抜け、パラディアムを抜けてどんどん進み、さらにエド・サリバンも通り抜けて、香港へ世界へと出ていったんだ。

学校も同じだったよ。教師は僕に何も期待してなかったし、僕に何か教える力もなかった。僕の卒業証書に校長が書いたのはこうだ。"学業に関しては何とも言いようがない。彼は何もやらず、行事にもいっさい参加しなかった"。まったくありがたいね。そんな風に書いてくれれば、きっといい仕事にありつけるだろうよ！　数年後にポールが最新型のフォード・クラシックを買って、フォードのショールームから出てきたら、かつての校長が立っていたので、ポールは"ハハ、そうだよ、僕ですよ、この僕が自分でフォード・クラシックを買ったんだ"って顔で彼を見てた。それは"ざまあみろ"ってこと。校長が何を言おうと、教師やディック・ロウやEMI(彼らだって僕らと契約してくれなかった)が何を言おうと、僕らは成功したんだ。金も何もなかった僕らは、なんとかギリギリのところでがんばって、ようやくジョージ・マーティンというほんのわずかな幸運をつかんだ。それに僕はああいうくだらない夢を信じていたのかもしれない。僕らの中にはいつだって固い決意があった。僕はいつだってその決意を忘れなかった。それがなかったら違ってたかもしれないね。必ず何かが起こるだろうって確信みたいなものが、僕らにはあったんだ。成功するにはそれが必要なんだ。弱い立場に置かれ、虐げられた経験がある人なら誰でも知っているように(僕らにもその経験がある。リバプールのワーキング・クラスだったから)、ビッグになれば、みんなすり寄ってくる。みんな勝ち組が大好きなのさ。でも、負ける時はひとりぼっちだ。

ジョン　階級意識の嫌らしさってのはいつまでも変わらないね。僕らみたいな人間は、少しは風穴を開けられる――でもほんの少しだ。一度僕らがレストランに入った時、こういう格好だから追い出されそうになったんだ。初めは僕らが誰か気がつかなかったのさ。"何の用だ?"ってボーイ長が言うから、"食いに来たんだよ、決まってるだろ"って言ったのさ。そうやってる時にオーナーが僕らに気づいた。とたんに"ああ、テーブルを御用意します、どうぞこちらへ"だ。19の頃を思い出した。あの頃の僕は、どこへ行ってもジロジロ見られたり、あれこれ言われたりしてた。ビートルズになって初めて、"これはこれは、お越しいただいて光栄です、どうぞどうぞ"なんて言われるようになった。そのせいで、ほんとはどう思ってるのか、ちょっと忘れかけてたね。みんなが見てるのは輝く星なんだよ。でも輝きが失せれば、彼らの目にはまた服装と髪型しか映らなくなる。

僕らはそれほど率直でも誠実でもなかったよ。そうするだけの力がなかったから。適当にやるしかなかったのさ。リバプールを出るために髪を切り、テレビに出るためにスーツを着た。妥協しなければならなかったんだ。入り込むにはだまされることも必要だった。そうするうちにわずかな力を手に入れて"これが本当の僕らだ"と言えるようになる。ちょっとは嘘もつかなきゃならなかった。もっともその時点では嘘のつもりじゃなかったけどね。1966年

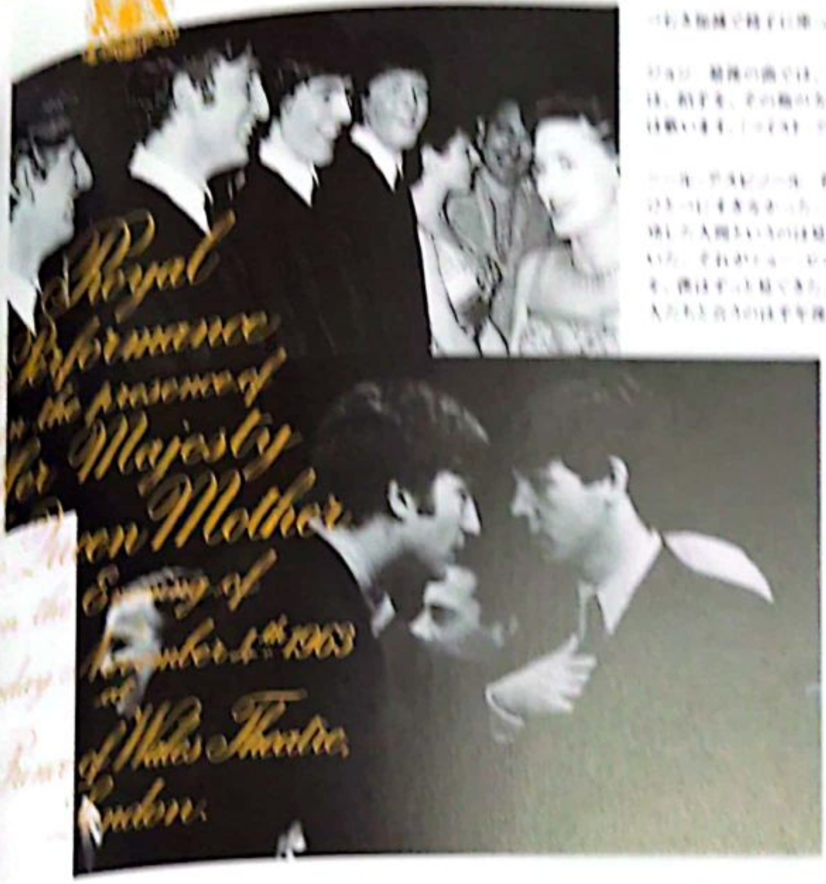


リンゴ　その年の10月、1週間スウェーデンに行って、何度かコンサートをやった。ホテルはすごく楽しかった。忘れられない1日があるんだ。ポールが変装してきて、カメラを持って"スウェーデンのみなさん、初めまして"って言いながら、レストランを走りまわったんだ。[illegible]らないことを言いながらみんなの写真を撮ってたんだけど、誰もポールと気づかない。なかなか粋じゃないかと思ったね。僕は某人からもらった奇妙な名刺を出してきて……あれも人生の楽しい体験のひとつだよ。

ニール・アスピノール　僕らの人気は日に日にものすごい勢いで膨らんでいった。リバプールでエディ・コクランとジーン・ビンセントがステージをやった時、僕は楽屋口の外で待ってたんだ。女の子が大勢いて、金切り声をあげて騒いでいたのを覚えてる。――でも、決してビートルマニアの比じゃなかった。スウェーデンから帰国したら、ロンドン空港には1万人の人が待っていた。勢いは増すばかりだった。この騒ぎが始まったのは1963年だけど、ピークはまだ先だった。

リンゴ　僕らはその年からほんとにあちこち飛行機で移動するようになった。ブライアン・エプスタインと一緒に、グループとして初めてリバプールからロンドンまで飛行機で行った時、ジョージ・ハリスンの座席は窓側だった。そして窓が開いた……。彼は悲鳴をあげてたよ。ほんとだろ。

一度、ロンドンからグラスゴーに向かう飛行機に空席が3つしかなくて、僕は馬鹿だから言ったんだ。"僕が立つよ"。――"申し訳ありませんが、それは困ります、ミスター・スター――"



[illegible]

リンゴ [illegible]

ニール・アスピノール [illegible]

ジョン [illegible]

ポール [illegible]

リンゴ [illegible]

ポール 僕らがほんとに有名になったのは、バラエティ・ショーで演奏したからだ。それから僕らはロイヤル・コマンド・パフォーマンスに呼ばれて、女王様に会った。女王様は拍手していたよ。

ニール・アスピノール ロケットみたいに一気に人気が上がったね。ロイヤル・コマンド・パフォーマンスの時を覚えてるよ。僕らはそれはものすごくあがってた。ああいう観客には慣れてなかったからね。キャバーンとは違って、大規模なチャリティ・ショーで、[illegible]まったく別の種類の人間が、[illegible]見に来るんだ。

ジョージ 見に来るのはみんな金持ちのはずだってことで、ジョンは"宝石をジャラジャラ"って言ったんだ。彼は何を言ったらいいのか、少しは考えていたと思う。自然に出てきた言葉ではないと思うな。ジョンはことさら誇張したお辞儀もしてみせた。ジョンだよ。お辞儀みたいな"ショービズ"っぽいことって、僕らどうしても好きになれなかったからね。

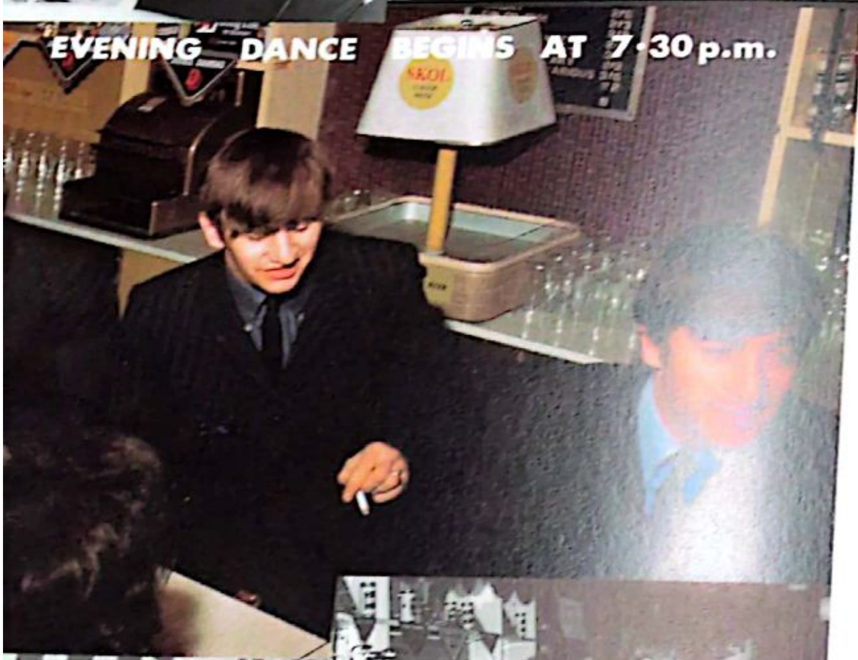
ジョン あのステージでは、ちょっとジョークも入れた。観客が悲鳴をあげないから、僕らの言うことがちゃんと聞こえると思ったんだ。1964年

新聞には知られてないけど、僕らはありとあらゆるオファーを何年か断っていたんだよ。ロイヤル・バラエティ・ショーをやったら、毎年出演してほしいと丁重に頼まれたけど、僕らはいつも"嫌だよ"と言ってた。それで、"なぜ御前コンサートにビートルズが出ないか"って新聞に載った。すごくおかしかったよ。僕らが断ったことを知らない人だから。いずれにせよ、あの手のショーはヤボとして理想的とは言えない。みんな緊張でカチカチになっちゃって、誰ひとりまともに演奏できないんだ。僕らが出た時は、僕がステージでジョークを飛ばした。僕もひどくあがってたけど、ちょっとばかり反抗的なことを言いたかったんだ。僕にできたのは、せいぜいあの程度さ。1970年

ポール 女王様から"明日の夜はどちらで演奏なさるのです?"と訊かれたから、僕は"スラウです"と答えた。そうしたら女王様は"あら、私たちのすぐ近くね"って言ったよ。

リンゴ ショーにはマレーネ・ディートリッヒも出演していた。彼女に会った時、その脚を見つめちゃってたのを覚えてる——もう最高の脚だった——気取そうに

CamScannerでスキャン



ニール・アスピノール　12月14日、サウス・エリア・ファンクラブの集まり、ウィンブルドン・パレがあった。ちょっとしたコンサートがあり、参加した3000人のファン全員がビートルズと握手した——まだこの時はゼリー・ビーンズ攻めはなかったね。

ジョン　一度、誰かにファンはどんなものを贈ってくるかって訊かれたんだ。僕らは"ゼリー・ビーンズとか"って答えたんだけど、僕が"でも、それはジョージが食べた"って言ったんだ。次の日から"ジョージに1個もあげないで"って手紙付きのゼリー・ビーンズをもらうようになった。ジョージのところには"ジョージ、あなたのゼリー・ビーンズです。ジョンのをもらわなくても大丈夫"ってのが来た。そのうち、これが異常にエスカレートして、ステージを埋め尽くすほどのゼリー・ビーンズが飛んでくるようになった。そのうちやっと、もう好きじゃないってことにして何とか収まった。1964年

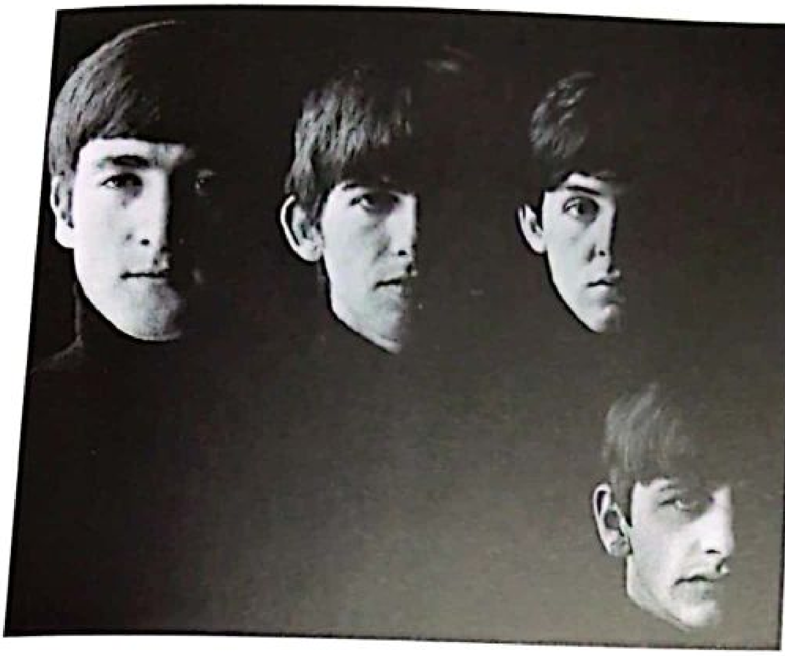
リンゴ　あのライブは檻の中でやったんだ。覚えてるよ。すごく騒ぎになっちゃったから。ステージだってのに動物園みたいだったよ！　危い雰囲気だった。もう手に負えなかったんだ。うっかり近づいたら八つ裂きにされるんじゃないかって思ったのは、あの時が初めてだった。

ニール・アスピノール

ジョージは途中で"もう嫌だ"って言いだして、ギターを片づけると、楽屋口に向かい、タクシーを探し始めた。

僕は彼を追いかけていって、"何やってるんだ。途中で抜けちゃダメだよ。最後までやらなきゃ"って言ったんだ。するとそこへジョンがギターを持って現れた。"何やってるんだよ"と言うと、"いや、ジョージが帰るなら僕も帰ろうと思って"。

でも結局、彼らはライブをちゃんと終えて、ファン全員と握手をした——実際は約1万人ってことになる。みんなすぐまた列に戻って、何度も並んでるんだから。



てたよ。ここでアーサー・アレキサンダーやリッチー・バレット(「サム・アザー・ガイ」はすばらしい曲だ)といったアーティストや、ジェイムズ・レイの「イフ・ユー・ゴッタ・メイク・フール・オブ・サムバディ」みたいなレコードを見つけたんだ。駆けだしの頃はこういう曲をクラブで演奏してた。その後イギリスの多くのバンドが、こういった作品をレコーディングするようになった。「デヴィル・イン・ハー・ハート」とバレット・ストロングの「マネー」は、あの店で僕らが見つけてかけてみたやつだ。おもしろいと思ったよ。

僕は「ウィズ・ザ・ビートルズ」で「ロール・オーバー・ベートーヴェン」を歌った——僕の好きな曲だ。僕はチャック・ベリーのレコードを持っていて、クラブでこの曲を歌っていた。このアルバムには、僕が初めて自分で書いた曲「ドント・バザー・ミー」も入っている。

ジョージ・マーティン その頃のビートルズは、たいていレコーディングするとおりにリハーサルをやっていた。私は彼らと会って、ひととおり曲に目を通し、"わかった。次は何をやる?"と言う。そして私たちはスタジオに入って曲をリハーサルし、レコーディングした。ワークショップのようだったね。

ジョン 僕らはいつも、生でやれるものだけレコーディングしている。たとえ上に何か重ねる場合でも、歌の基本的な部分はライブでやるんだ。演奏と歌を同時にレコーディングしてる。つまり、その場でできないようなことは、やっていないんだ。1964年

僕らが初めて使ったレコーディング・トリックは、セカンド・アルバムのダブル・トラックだ。僕らが見つけたんだったか、"こういうことができる"と教わったんだか忘れたけど、ここからほんとにうまくまわりだしたんだ。僕らはこのアルバムから自分たちでダブル・トラックをやりだしたんだよ。

ファースト(アルバム)は、単なる"グループ"として参加しただけだった。僕らがスタジオに入って演奏すると、スタッフがテープに録音し、終われば僕らは出ていく。リミックスも何も一切彼らがやったんだ。1970年

ジョージ 「ウィズ・ザ・ビートルズ」のアルバム・ジャケットは、60年代でもっとも模倣されたデザインのひとつになった。あのジャケット写真を撮影したのはロバート・フリーマンだ。僕らはアストリットとユルゲンがハンブルクで撮った写真を見せて、"こういうのをやってくれないか?"って言ったんだ。あのフォト・セッションは、背景を黒くした部屋の中で行った。

あのジャケットから僕らはビートルズのアートワークに積極的に関わるようになる。「プリーズ・プリーズ・ミー」のアルバム・ジャケットは最悪だよ。でもあの時は気にならなかった。お粗末とさえ思わなかったんだ。レコードを出せるだけですごく嬉しかったからだと思う。[illegible]のは、「ウィズ・ザ・ビートルズ」からさ。

[illegible]住んでいたのがロ[illegible]ではジョンが僕を[illegible]をビートルズ[illegible]ビートルズではア[illegible]

ジョージ・マーティン ファースト・アルバムは、実際のところ、彼らのレパートリーの発表会のようなものだった。当時はアルバムそのものを統一性のある独立した作品とは見ていなかった。シングルをレコーディングし、シングルとして発表されなかった曲をアルバムに収める——セカンド・アルバムの「ウィズ・ザ・ビートルズ」は、そうしてまとめたものだ。あれは単に彼らの曲と、あと他人の作品1、2曲を集めただけだよ。

リンゴ 「ウィズ・ザ・ビートルズ」に入れたカバー曲は、みんなそれぞれ好きな曲を持ち寄ったんだ。おもしろいのはね、僕がビートルズに入った時、まだお互いによく知らなかったわけだろ(もちろん、他の3人はもうわかり合ってたけど)。なのにレコードのコレクションを見ると、4人ともほとんど同じものを持ってたんだよ。全員[illegible]を持ってたし、全員バレット・ストロングとかそのあたりのを持ってた。そういうのも僕らのつながりを強めるのに役立ったと思うよ。ミュージシャンとして、グループとして。

ポール 僕らは全員、アメリカの音楽にすごく興味を持っていた。イギリスの音楽よりずっと関心が強かった。あとからバンドに入ってきたリンゴは[illegible]川沿いのディングル地区の出身の彼には、商船員の[illegible]。商船に乗り込むことは、リバプールを出てニューオリンズや[illegible]のひとつの手段だった)。商船員がブルースのレコードを[illegible]僕らに古いカントリー&ウェスタンを教えてくれたのも[illegible]た人たち。こういったジャンルでは、リンゴはすごい[illegible]を持ってたね。[illegible]エルヴィスなんかの音楽に関するかぎり、僕らの好みはかなり共通していた。それでいてちょっとずつ傾向が少しずつ違うんだ。だから毎日がおもしろかったのさ。

ジョージ セカンド・アルバムは、ファーストよりちょっとよかった。時間をかけて録音したし、オリジナルも多かったからね。セカンドでは「マネー」をやった。それから、他のカバー・バージョン、たとえば「プリーズ・ミスター・ポストマン」、「ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー」、「デヴィル・イン・ハー・ハート」(あまり知られていないけど、ドネイズが歌ったアメリカの曲)なんかもやった。

アメリカにはレコード会社がたくさんあったから、地域ベースでしか配給されないレコードも多かったみたいだね。地域はかなり限定されていた。運よく全国的に配給されるレコードもあったけど、そうじゃないのもあった。でも小さな会社には、イギリスに配給ルートを持つメジャー・レーベルと提携しているところが多かったから、アメリカでは無名のレコードが、アメリカでは知られないままイギリスで売れてるなんてこともあった。アメリカのすばらしいR&Bレコードなのに、当のアメリカ人がちっとも知らないって場合すらあるんだよ。

ブライアンはNEMSのポリシーとして、リリースされたすべてのレコードを少なくとも1枚は仕入れていた。それが売れたら、もう1枚注文する。あるいは5枚だろうと何枚だろうとね。その結果彼の店にはイギリスはおろか、アメリカですらヒットしていないレコードまで置いていた。僕らはライブに行く前に閉店後のレコード屋に集まって、どんな新着レコードがあるかって、探偵みたいに棚を探し回っ

CamScannerでスキャン

17th December, 1963.
C/I/SS

s

THE BEATLES

so many different stories about how the Beatles
I. that I thought I ought to set down on paper
te.

e Polydor recording was submitted by Brian
to Mr. R.N. White.

White submitted this disc to Mr. Ridley and to
l. Both turned it down on the basis that it
ike a bad recording of The Shadows - and
y it did!

hen took the Polydor disc to Decca. Their "pop"
nager, Dick Rowe, was in America, so his deputy
give theBeatles a test, and in fact did so.

returned from America and the test recording
to him. His reaction was that electric guitars
ld hat' and he was not interested in the Beatles.

Brian Epstein then sent to our private recording
in the Oxford Street Store a tape of some of the
compositions which he wanted transferred to disc.

at Oxford Street was quite impressed with some
sitions and referred them to Syd Colman.

honed George Martin, said he thought he ought to
, and Martin agreed.

then took the tape to George who agreed to give
recording test - Martin took the test himself -
with what he heard, signed them to a contract
e public knowledge.

L.G. WOOD
E.M.I. RECORDS LTD.

家族全員の態度が変わった。まるで僕が違う人間になっ
たんだ。
れた。それまで千回くらい行ってたおばさんの家だよ。あ
たら、誰かがテーブルにぶつかって、僕のお茶がソーサ
ろって、"僕にはそんなものは出せない。きれいに片づ
ってるんだ。そんなことそれまで絶対になかった。そ
だな"と思ったよ。まさしく頭に矢が刺さったような感

人"になってしまった。家族といてもそ
れてもそうそうできるもんじゃない。この
活してきたのに、気づいてみると僕は
たんだ。

ジョージ　僕の家族は変わった。だけど、いい変わり方だった。こんなことが起こるなんてとすっかり呆然としてたけどね。そりゃ、どんな人でもそうなるさ。誰だって成功はしたいさ、でもあそこまでのスケールで成功しちゃうと、もう笑うしかないって感じさ。うちの家族は、それを楽しんでた。

僕の母はいい人だ。だけどお人好しでね。当時のリバプールの人間はみんなそうだった。母はうちに手紙をくれた人全員にファンレターの返事を出していたんだよ。"ハリスン様。ポール・マッカートニーの足の爪をくれませんか"なんていう手紙にまで返事を書いていたんだ。今でも、昔母からもらった手紙を振りかざして僕のところにやってくる人がいるよ。僕は子どもの頃、文通をしていた。相手はノーサンバーランド（イングランド最北の州）だかニュージーランドだかに住んでる人たちさ。ただ一度も顔を合わせたことがない。お互いに手紙を書いたり写真を送ったりするだけでよかったんだよ。

リンゴ　故郷と家族だけは変わってほしくないと思っていた。"外部"ではすべてが変わってしまったからね。有名になる前からの知り合いでないかぎり、ほんとの友人が誰なのか、もうわからなくなっていた。前からつきあっていた仲間なら信頼できたけど。いったんビッグになり、名前が売れると、人が寄ってくるのは"ビートル"という曖昧な評判のせいでしかないってすぐわかったよ。これが家族の中で起きた時は、かなりのショックだった。僕はどうしたらいいかわからなかった。立ち上がって"前と同じように扱ってよ"と言うわけにもいかない。そんなことをしたらかえって"大物"ぶってることになるだろう。

有名になると出てくることがもうひとつ。みんなこっちをちょっとした知識人みたいに思い始めるのさ。これについてどう思うか、あれについてどう思うかってやたら訊きたがる。それでこっちは適当なこと言うわけ——いかにも22〜3の奴がやりそうなことだろ——突然物知りになったみたいにさ。僕は何だって話すことができた。理想的な国の運営方法、物事が起こるべき理由と状況を何でもきっちり知っていた。僕は突然戯言を並べるようになった。"さあ、ミスターほら吹きのおでましだ。何が知りたいのかな？"。ほんとに異常だった。何日も何日も議論が続いたのを覚えているよ——まさに夜も昼もなしで、世界のことやら音楽のことやら。突然みんながものすごく認めてくれるようになる！　だけど、僕らはこれっぽっちも変わっていなかった。ただ何度かNo.1になっただけで、何百万人もの人が僕らを愛してくれた。

僕は、ビートルズの前にもビートルズの後にも、学校教育なんか受けてなかった。人生そのものがすばらしい教育さ。

ポール　ありとあらゆる類の、奥の深い質問をしょっちゅう受ける。でも僕ら、そんなに深みのある人間じゃないんだよ。"水爆をどう思います？　宗教は？　ファンの崇拝は？"。そういわれても、僕らそんなこと真剣に考えたこともないんだ。それにそのあとじゃ、あまり考える時間もない。僕が水爆をどう思うか。それじゃあ、課程5年と課程1年の知識をフル活用して答えるよ。僕は水爆には反対だ。1964年

ジョージ　"今日を思いっきり楽しもうぜ、明日は死ぬんだから"——馬鹿らしい！　中にはそういう人もいる。そういう鈍い人間が世界をダメにする。僕はこれから起こることに興味がある。1963年

ニール・アスピノール　みんな、だんだんとロンドンに_り始めた。それまではしょっちゅうリバプールに帰り、_ャバーンやその他の会場での残された日程をまだこ_していた。でもまもなく、リバプールよりロンドンに住_方がよっぽど便利だってことになった。4人の家族は_んな、彼らがなしとげたことをすごく誇りにしていた_ど、彼らが出ていってしまった時は自分たちのものを_ったような気分に少しなっただろうね。アパートメント_したのは、確かマル・エヴァンスと僕が最後だった。_金銭的に余裕がなかったんだよ。結局、アパートを_てもらえることになった。僕らはホテルに滞在してい_だけど、その方が高くつくから、そうするしかなかっ_さ。

_　グループのみんなとリバプールを出た時、リバプールの人間の多くは僕らを_た。"そうやって俺たちを捨てるんだな"ってさ。イギリスでも同じだった。イギ_出てアメリカに行った時、僕らは多くのファンを失ったよ。ファンというのは、自_が所有者でもあるかのように思い始める。リバプールの人がそうだった。僕ら_プールを出ると決めるまでずっとそうだった。僕ら大勢の人に見捨てられた。_ろん、また大きな山を手に入れた。1971年

1963年が終わる頃には、家に帰るのはもう不可能だった。それにこの業界にい、どうしてもロンドンに集まるものなんだ。レコーディングもロンドン、見るべき場_のもロンドン、何かが起こるのもロンドンだ。自然の成り行きだったんだよ。

ジョージと僕は、初めの頃パーク・レーンのグリーン・ストリートのアパートで一緒に住んでいた。家賃は週45ポンド——大金だよ！　ジョンはシンシアと暮らしていた（この時ようやく彼らは結婚のことを僕に明かした——それまでは、僕が誰かに言うといけないと思って秘密にしていたんだ。僕を全然信用してなかったんだよ。冗談だよ！）。

下に住んでたハリー・ファインゴールドとキャロル・ファインゴールドが僕らの食事の世話をしてくれた。僕ら自分の身の回りのことができなかったんだよ。ずっと親と住んでいただろ。食事は作ってもらえたし、お茶はいつでも用意されていた。ところが突然ロンドンに自分たちだけで暮らすようになっちゃったんだから。僕らはよくサドル・ルームに行ったよ。エジンバラ公も会員になっているクラブさ。そこは馬と馬車を外に置いてたから、飲んだくれた馬鹿なビートルズふたりがこの馬車に乗ってパーク・レーンの自宅に帰る光景がよく見られたはずさ。パカッパカッてね。リバプール出の田舎者ふたりにとっては、こんなのもものすごいことだった。"さあ、馬車で帰るぞ！"なんて。

人にもたくさん会ったね。フィル・スペクターに会った時はわくわくした。僕らと同じグリーン・ストリートにDJのトニー・ホールが住んでいて、そこへフィルとロネッツが泊まりに来てた時、ジョージと僕で会いにいったんだ。

ジョージ　ロンドンでのホテル住まいが長くなったから、アパートメントに移った方がいいとようやく決めたんだ。最初はジョンだった。彼は結婚していたからね。リンゴと僕は、ずっとラッセル・スクエアのホテル・プレジデントに泊まってたんだけど、その後アパートメントに引っ越した。最高の気分だったね。リバプールの上下2部屋の小さな家で育った僕らが、今やメイフェアの豪華なアパートに住んで、それぞれ専用の浴室を持っている。これはすごいことだった。

1963年から1966年あたりは、ジョンとポールがインテリじみてた時期だね。思い返すと、ジョンはいつも詩や映画に興味を持っていたけど、僕らがロンドンに移ってから、彼とポールは何から何まで知識を競い合うような感じになった。ポールはエスタブリッシュメント・クラブに行き始め、ジェーン・アッシャーとつきあうようになった。一時の彼らは、芝居を見にいっても"何々を見た？　これ読んだことがある？"ばかり言ってた。

ポール　実際、リバプールを離れた理由はそこだよ。ロンドンは大都市で、すべてが集まっていた。芝居を見るにしても、英国国立劇場ならうっとりするような俳優たちを見ることができる。『ジューノ・アンド・ザ・ピーコック』（ジューノと孔雀）でコリン・ブレイクリーを見た時、目から鱗が落ちたね。当時、僕は女優——ジェーン・アッシャー——と付き合っていたから、劇はしょっちゅう見にいってたんだ。

自分でも短い映画を作るようになった。みんなでよくホーム・ムービーを撮ったよ。僕はサウンド・カメラが好きじゃなかった（当時はあまり普及していなかった）から、映像だけを撮ったあとサウンドトラックをつけて、あれこれ試してみた。交通整理の警官を撮影したのを覚えているよ。警官を撮影したあと、そのフィルムをもう一度入れて、車の往来だけを撮影した。だから、警官が車を止めようとすると、みんな走り抜けていくという映像ができたんだ。そこへ、クレイジーなジャズのサックス・プレイヤーを重ねた。「ラ・マルセイエーズ」を調子はずれに演奏しているんだ——「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」の出だし部分は、きっとここからアイディアをとったんだよ。すごくおもしろかったな。

僕はいつもひとりの相手だけとつきあう人間なんだ。ジェーン・アッシャーと初めて会ったのは、僕らがロイヤル・アルバート・ホールのコンサートに出演した時だった。彼女は『ラジオ・タイムズ』の取材でコンサートに来ていたんだ——僕らはその雑誌のために彼女と一緒の写真を撮った。僕らはみんなして彼女に惹かれた。僕らは彼女が出ていた『ジューク・ボックス・ジュリー』を白黒のテレビでしか見たことがなかったから、彼女はブロンドだと思っていた。だけど、実際に会ってみたら、赤毛なんだ。"へえ、赤毛なんだ！"。僕は彼女の気を惹

CamScannerでスキャン

こうとして、それがうまくいってね。それで僕らはかなり長い間ボーイフレンドとガールフレンドの関係にあった。

ビートルズ・ヒストリーにジェーンを引き込むことでは、いつもすごく慎重になる。僕らの関係について彼女の言葉が印刷物になったことは一度もないんだ。世界中の誰もが自分の話を売っているというのに。自分が過去を暴く人間になったら妙な気分だろ。

僕らはいい関係だったよ。ツアーがあっても、それなりの関係を続けるための機会は十分にあった。実を言うと、当時、女性は二の次の存在だったんだ。今ならすごい男尊主義者って思われるだろうね。でもあの頃は、"僕ら4人は炭坑を下りていく坑夫だ。炭坑に女は必要ないだろ? 炭坑に女なんか入れない"という感じだった。僕ら、ビートルズというのは、かなり閉鎖的な世界で動いていた。他の人にはなかなか入り込めなかった——ジョンの妻のシンシアですら——僕らが自分たちのまわりに張り巡らしていた壁は、それほど頑丈だったんだよ。一種の安全バリアとして、僕らは"仲間うち"のジョーク、ちょっとしたサイン、音楽の話のネタをたくさんもっていた。僕らにはそういう共通のつながりがあって、"部外者"が入り込むのはとても難しかった。そういうのは当時の恋愛面からするとよくなかったのかもしれないね。

他のメンバーはみんな結婚して、ゴルフ・クラブのある郊外に移り始めたけれど、僕はまだひとりでロンドンに住んでいた。僕には郊外なんて全然面白味がなかった。ひとつには、僕は結婚していなかったから、まったく意味がないように思えた(みんなには意味があった。子どもを郊外で育てようとしたんだ)。そしてふたつ目。僕はロンドンに住んでいられたからこそ、かなり頻繁に劇場や美術館にも行けたし、この大都市で起こる、あらゆることに接していられたんだ。

ジョン　あそこまでビッグになってよかったよ。僕らがそこそこビッグになった時、みんな言い始めた。"あなたたちは何々以来の大物だ"。"何々以来"の大物ってのにはうんざりした。無条件で"ビートルズが一番の大物"と言われるようになりたかったんだ。黄金と同じさ。たくさん手に入れれば入れるほど、もっとほしくなるんだ。1970年

リンゴ　自分たちがすごいバンドだってことはわかってたけど、あの当時、どこまで行くか予言できた人はひとりもいなかった。僕らはいい音楽を演奏し、いい金を稼いだ。僕はロリーと一緒にハリケーンズで演奏していた時、週16ポンドもらっていた。エンジニア見習いの時の手取り賃金は週に2ポンド10シリングで、見習い期間を終えたら週12ポンドか15ポンドになるって期待して過ごしてた。今は、金持ちになったね。金ってのはすばらしかったね。金さえあれば、自分の家に浴室も作れるし、車だって持てる。一番出費がかさんだのはジョージと僕が一緒に住んでいたアパートだ。スーツもシャツも靴もすごい数で、とにかく何でも買い込んでいた。ある時、シャツを数えてみたら、75枚あったよ。信じられなかったね。

最初の年はまだブライアンから週50ポンドずつもらってた。僕が入った時は25ポンドだった。それだってすごい大金だったよ。

ジョン　金を稼いだという実感がないんだ。物質的な物が増えたような気がするだけで、金を持っている気はしない。自分の目で見たことがないからさ。僕は100ポンドを超す現金を一時に見たことがない。いつも僕らは、週30ポンドか40ポンドもらってる。僕はだいたい妻に渡しちゃうね、自分じゃ全然、使わないんだ。いつも連れ回されているだけだから、僕が金を触るのは休暇の時だけさ。1966年

ョージ　僕らはまだそれほど裕福じゃなかった。昔の貧乏ぶりに比べたら、よっぽましだったけど。でも、もらっていた現金の額からすると、金持ちとはとても言えなつい最近、1963年のある時期に実際に僕らに支払われていた金額を示す書見つかったんだ。最初の数字が7万2000ポンド、そこから僕ら4人に約4000ずつ支払われ、ブライアンが週2025ポンド取って、ニールとマルはそれぞれドだった。ということは、ブライアンはマルとニールより毎週2000ポンド多くていたんだ。

と、確かに僕らの生活は変わりつつあった。この時の僕らにとって成功と差しは、自動車を持ったこと、メイフェアに住んでいたこと、旅する時にス着持っていけたこと。実際、悪くなかったよ。

自惚れて大きく出る時もある。"そうさ、僕らは10年続くよ"ってね。ところの根も乾かないうちに、今度はこんな思いが頭をよぎる。"3ヵ月もてばよな"。1963年

ァーティン　1963年の時点で、ビートルズが永遠の存在になること、そしても彼らの話をしていることを予測するのはまず無理だったろう。だが、彼なったのは、とても嬉しいことだったね。彼らがほんとに世界を征服すまる1年かかったんだよ。彼らがアメリカでNo.1をとったのは、1964年にった——1963年は、イギリスでの地盤を固めるだけで終わった。この年、ーズ・プリーズ・ミー」、「フロム・ミー・トゥ・ユー」、「シー・ラヴズ・ユー」、トゥ・ホールド・ユア・ハンド」の4枚のシングルを出した。レコーディンはレコードをアメリカのキャピトル・レコードの友人に送り、"このグルい。絶対出すべきだ。アメリカでも売るべきだよ"と勧めた。だが毎

回、キャピトルの社長から断られた。"申し訳ないが、アメリカのマーケットについては私たちの方がよく知っている。私たちはこのグループをいいとは思わない"とね。もちろん最後には、彼らも世間の需要に応えるしかなくなかった。

ニール・アスピノール　そう、すでに僕らはイギリスを征服した。あらゆるところ、ビートルズだらけ——ジョージは、「デイリー・エクスプレス」に自分のコラムまで持ってた。やがて友人になるデレク・テイラーの助けを借りてね。

デレク・テイラー　ビートルズ初体験はその年の初めだった。それはもうすごい体験だったよ。まだ30歳だったものの、あの1963年の春の辺りには"若者"の世界には疎くて、この急上昇中の新鋭バンドを知らなかった。僕は当時マンチェスターで「デイリー・エクスプレス」のジャーナリストとして働いていて、ビートルズとロイ・オービソンの1日公演を取材するためにオデオンへ行った。ショーを見て、2時間後、観客の絶叫を残したままショーが終わると、僕は電話に飛びつき、メモなしで一気にレビュー記事の文面を口述していた。それが新聞に掲載された。ビートルズこそ、この世に生まれた真の民衆のヒーローだと思った。今世紀最大、いや史上最大のヒーローだ。1963年5月30日のあの日から今まで、僕の考えは一時も揺らいだことはない。ビートルズは世界を結ぶ新たな虹をかけたのだ。その虹の両端には、伝説の黄金の壺があり、それから……。

「デイリー・エクスプレス」のジョージのコラムが僕に回ってきたのは嬉しかったけど、出だしから失敗してしまってね。お粗末なゴースト・ライター。ジョージの父親はバスの運転手だったから、典型的な大衆紙スタイルでジョージ親子の会話をでっち上げたんだ。こんな感じ。"そして父さんは僕にこう言った。「私のことは心配するな。お前はギターを続けなさい。私はがんばってビッグ・グリーン・ジョブの運転を続けるから」"。

僕は、ジョージのコラム第1回目を届けるためにロンドンに行った。するとブライアンが言うんだ、"ああ、みんなに読んでやってくれる? 聞かせてやりたいから"。それで僕は仕方なくコラムをポケットから取り出して、まるでジョージが書いたかのように、読み始めた。"……お前はギターを続けなさい。私はがんばってビッグ・グリーン・ジョブの運転を続けるから"。するとジョージが"ビッグ・グリーン・ジョブって何?"ってと言うんだ。それで僕は、"えー、バスだよ——リバプールのバスだ"。ジョージが"ビッグ・グリーン・ジョブなんて呼ばれてるとは知らなかった"。ジョンも"僕も知らなかった"。それで僕も"いやあ、僕も知らないんだ"。僕のでっち上げなんだからね。もちろん新聞じゃよくあることだ。だから新聞に書いてあることは、みんなあんなに嘘っぽく聞こえるんだよ。

とにかく、かいつまんで言うならば、僕は"ビッグ・グリーン・ジョブ"をでっち上げたと認めたことでテストに合格したわけで、それからジョージにこう言われた。"コラムを書くのを手伝うよ——ふたりで一緒にやればいい"。

CamScannerでスキャン

1964

nineteen sixty-four

CamScannerでスキャン

JOHN

MERSEY BEAUCOUP!

ジョン　「ロング・トール・サリー」とか「ロール・オーバ
ー・ベートーヴェン」みたいな曲なら、酔っぱらってた
って演奏できる。明日のオランピアのプログラムを変
更して、ハンブルクやキャバーンでよくやってた昔の
ック・ナンバー——「スウィート・リトル・シックスティー
」なんか——をいくつか入れたっていいよ。簡単な
とさ。
でも僕らはメインだからね。前座バンドだったらも
っとおもしろくなんかないんだからさ。適当にやっ
ってかまわないさ。あとに他のアーティストが控え
いるんだし。だけどメインはそうはいかない。——
、うまくいくように祈るだけさ。1964年

ージ　1964年1月に、僕らはパリで何日かコンサ
をやったけど。フランスの客にはまいったよ。

**らは、フランス人の女の子が
、ラ、ラ"なんて言うところを
してたけど、少なくとも初日は、
ード姿の年輩の人ばかりだったんだ。
、ゲイっぽい男の子が、
って楽屋口のあたりにたむろして
、リンゴ！"と叫んだり、
車を追っかけたりする。
ット・バルドーみたいな子を
いていたけど、
子はひとりも見かけなかったよ、
ら。**

らは僕らをパリ中追っかけ回すんだ。女の子に
たんだけどね。歓声は、悲鳴というより唸り声だったよ。ストウの男子校で
ちょっとそんな感じだったけど。

場で音を出したら、機材がみんなダウンしてしまった。ラジオ関係者がヒ
してしまったからなんだ(彼らは、僕らに断りなしで生中継していたし)。
かりしたけど、生まれて初めて広い大理石のバス・ルーム付きのスウィー
まれたので、ま、いいかって思った。確か、隣同士のつながったスウィ
割り当てられた。あまりに部屋数が多かったので、どこまでも続いている

のビル・コーベットという、すごくいい奴がいたんだ。彼は僕らと一緒に
って、自分はフランス語ができるんだとアピールしてきて、"ポール、僕、
意なんですよ"なんて言う。それで、彼を車と一緒に船で行かせ、僕ら
、パリで合流したんだ。

う言うんだ。"パリに行っても、カエルを食べてしまうフランス人なん
たくないでしょう？　何かにつけ、だまされちゃいますよ。僕を行かせて
通訳を引き受けますよ"。世間知らずの僕らは、もちろんOKと言って

彼が警官に話しかけた。最初になんて言ったと思う？ "Oi!　May I

れてしまった時のために、メンバーの誰かが蜂蜜を頼んだ。ビルは
いって、"Avez-vous... er, buzz-buzz?"だってさ。

杯食わされたんだ。だけど、いつもビルは何でも揃えてくれた——
下を探してくれるよう頼んだことがある。ジョージは、エッシャーの
った時に、"80フィート(約24.4メートル)の飛び込み台がほしい"と
"了解。朝には持ってきますよ、ハリスンさん。この場所にね"。彼
らの欲しがるものを何でも調達するのが得意だったんだ。

ジョージ・マーティン　ビートルズは「シー・ラヴズ・ユー」と「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」のドイツ語バージョンの録音を予定していたので、彼らがオランピア劇場に出演している時、私はパリに行き、そこのEMIスタジオで彼らのレコーディングができるよう手配していた。

ドイツのレコード会社のA＆Rの責任者からは、実際にドイツ語で歌わないかぎりドイツでビートルズのレコードが売れることは絶対にないだろう、と言われていた。私は信じる気にはなれなかったが、彼の言葉をビートルズに伝えた。"まったく馬鹿げてる"と笑う4人に、私は"しかし、ドイツでレコードを売ろうと思ったら、やるべきなのだろう"と言った。こうしてビートルズはドイツ語でレコーディングすることに同意したんだ。ほんとに馬鹿げていると思ったが、会社はドイツ語訳を用意してオットー・デムラーというドイツ語のコーチを派遣してきた。かくして「シー・ラヴズ・ユー」は「Sie Liebt Dich」となった——わかりやすい話だ！

約束の日、私はオットーと一緒にスタジオで待っていたが、4人は現れなかった。それまで彼らが私との約束を破ったことはなかったので、来ないのは大変だと思って彼らが泊まっているジョージ5世ホテルに電話した。すると、ニール・アスピノールが出て"すみませんけど、僕らは行きませんと、あなたに伝えるよう頼まれました"と言う。私はこう言った。"彼らが直接私に言わないで？　君に伝えさせるというのか？ "—— "そうです"—— "今すぐ、そっちに行こう"というわけで、私はオットーを連れて彼らに会いにいった。私はカンカンになり、怒鳴りながら部屋に入っていった。すると彼らは、優雅に部屋の真ん中でお茶を飲んでいた（何だかんだ言っても、彼らはとても魅力的な人間なのだ）。髪の長いジェーン・アッシャーがお茶をついでいたその光景は、なんとなく、「不思議の国のアリス」の気狂い帽子屋のお茶会のシーンのようだった。

私が入ったとたん、彼らはソファーや椅子の陰に隠れてしまった。誰かは、ランプ・シェードを頭にかぶっていたよ。そして、コーラスが始まった。"ごめん、ジョージ、ごめん、ジョージ、ごめん、ジョージ…"。私は思わず笑ってしまい、こう言った。"まったく困った子たちだ。オットーには謝らないのかい？"。すると彼らは"ごめん、オットー、ごめん、オットー…"ときたのだ。

結局、彼らはドイツ語で2曲録音したが、外国語でやったのはこれが最後だった。彼らの判断は正しかったのだ。

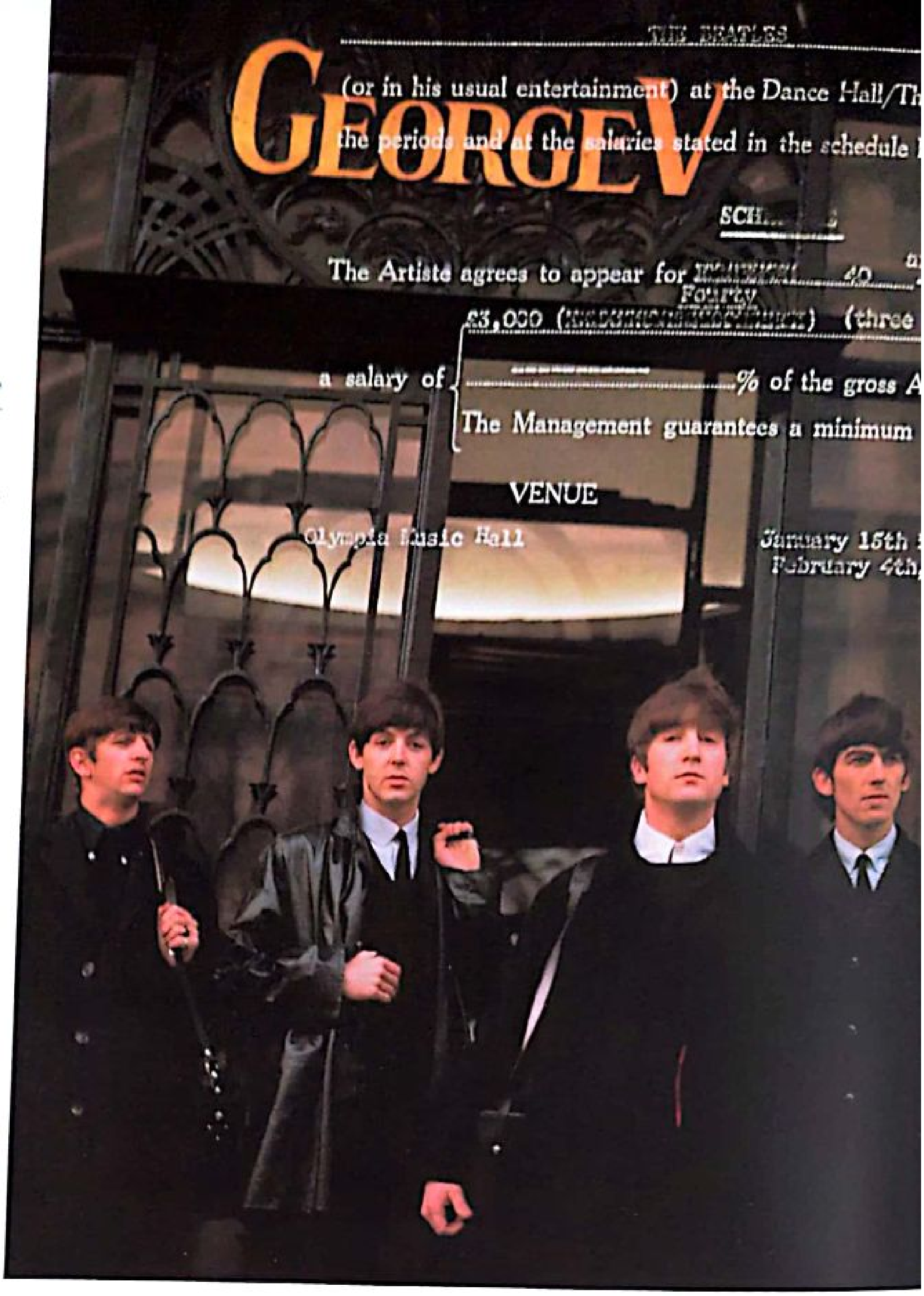
ニール・アスピノール　ジョージ5世ホテルでは、刺激的なことがたくさんあった。ドイツ語での録音のためにジョージ・マーティンが来たり、デレク・テイラーは、ジョージの代理でデイリー・エクスプレスに書いていたコラムのために話を聞きに来たり。そしてジョンは、2作目の『スパニアード・イン・ザ・ワークス』の執筆にとりかかっていた。彼らがディランのアルバムを初めて手に入れたのもあのホテルだった！　デヴィッド・ウィンはビートルズの頭部の像を彫っていた。

ビートルズはオランピアで3週間公演した。キャバーンとハンブルクの仕事を除けば、ひとつの会場の出演期間としては、これが最長だった。

ジョージ　僕が一番印象に残ってるのは、ボブ・ディランの『フリーホイーリン』を手に入れたことなんだ。僕らはいつもこのアルバムを聴いてた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



ジョン　ボブ・ディランを聴いたのは、それが初めてだったと思う。僕らはフランスでラジオの仕事をしたんだ。その時のDJがレコードを持っていて、ポールが"彼のはよく聴いてるんだ"って言ったら、くれたんだ。ポールがディランを前に聴いたことがあったのかどうかは、わからないけど。
──それで僕らはレコードをホテルに持って帰った。1970年
パリにいる間はずっと、そのレコードをかけっぱなしにしていた。みんなディランに夢中になったんだ。
初めてディランを聴いた人は、自分が彼の第一発見者だと思ってしまう。でも実際は、アメリカでは有名だったんだ。1964年

デレク・テイラー　1964年に、ジョージのコラムを書くためにパリに行った。ジョージは"おもしろいコラムを書くには、外に出よう。ナイト・クラブに行って、エッフェル塔に昇ろう。フランスっぽいことをやろうよ"って言ってた。当時の僕らにとって、旅は未知の体験で、すべてが新鮮だった。
パリ公演の頃には、僕は少しずつ信頼されるようになっていて、ある夜、ジョンからこう言われたんだ。"リバプールあたりの人間のつもり？"　他の人たちはもう寝ていて、僕たちは少し飲んでいたのだが、そこから会話が厄介な方向に進み出した。"つもりって何のことだかわからないけど、でもとにかく、僕はリバプール出身だ"。"そう、マンチェスターで生まれたんだろ"。"違うよ、今はマンチェスターに住んでいる。でも生まれた土地と違う場所に住む人なんかたくさんいるだろう。僕はリバプールで生まれたんだ。ウェスト・カービーに住んだこともあるし、妻はバーケンヘッド出身だ"
これは、地元意識だった。そしてそのあとマンチェスター出身でないことがわかり、くだらない言い争いだとわかると、一見意地っぽいジョンが実は話題豊富な、とても楽しい会話のできる人だということがわかった。どんな話題が出たのか、覚えていないけど、何しろふたりともすごく酔っぱらっていたんだ。彼と僕、ふたりだけでとても楽しく夜を過ごした。

ジョージ　ドイツ語バージョンの2曲の他に、「キャント・バイ・ミー・ラヴ」を録音した。イギリスに戻ってから、そのテープに少し手を加えた。前に、「キャント・バイ・ミー・ラヴ」の批評を読んだことがある。ダブル・トラックのギター──僕が弾いていたパート──について、最初に録音したギターが聴こえてしまうのはあまりよくない、と書いてあった。この曲はパリで録音して、それからイギリスで録音し直した。もちろんオーバーダブしたけど、当時は2トラックしかなかったから、ロンドンで入れたバージョンも聴こえるし、前の録音がバックに小さく聴こえるんだよ。

ジョージ・マーティン　この曲には、エンディングとイントロにインパクトが必要だと思った。そこで、私は"最初にいきなりサビで始まり、サビで終わろうと"と言った。彼らは"悪くないアイディアだ。そうしよう"と言ってくれた。

ポール　**個人的には、それぞれ好きなように解釈していいと思う。でも、「キャント・バイ・ミー・ラヴ」が娼婦の歌だとかいう解釈は間違ってるよ。それは行き過ぎだ。**

ある夜、オランピアからホテルに戻ると、ブライアンにアメリカのキャピトル・レコードから電報が届いていた。彼は"見てくれ。アメリカでNo.1だ！"って言いながら部屋に駆け込んできた。アメリカで「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」がNo.1になったんだ。

その時の僕らの反応は、ちょっと説明できない。みんなでビッグ・マルの背中に乗って"ヤッター！ヘーイ！"って言いながらスウィート・ルームの中を飛び回った。僕らはNo.1だ。それから1週間、興奮が冷めることはなかった。

リンゴ　信じられなかった。僕らはみんな、テキサスの人みたいに大声で"ヤッホー"って騒ぎ続けた。その夜、僕ら1人とニールが最後にいた場所は、セーヌ川のほとりのベンチだった。僕らがニールに泳げば2万ポンドあげるって約束すると、ほんとにニールは泳いだんだ。でも僕らは言った。"やだよ。悪いね"って

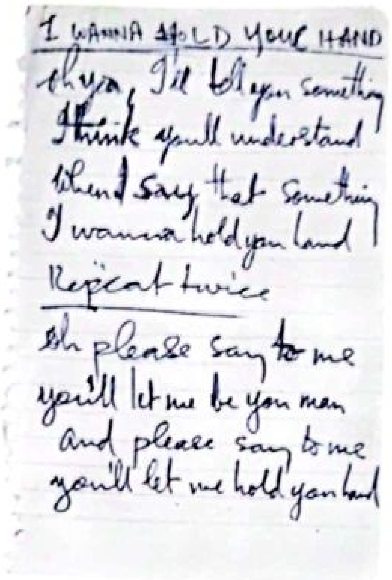
ジョージ　キャピトルからレコードが発売されることになり、プロモーションがちゃんと行なわれれば、ヒットのチャンスがあるのはわかっていた。前の小さなレーベルではあまりプロモーションしてもらえなかったからね。
すでに、「ライフ」や「ニューズウィーク」とかの雑誌には、ヨーロッパのビートルマニア現象が紹介されていた。だから、キャピトルにとってはそれほど難しい仕事ではなかったはずだ。いずれにせよ、曲自体が、すごいキャッチーだったしね。

CamScannerでスキャン

ジョン　「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」は好きだよ。メロディが美しい。1979年　あの曲のコードを決めた時のことを覚えているよ。僕らはジェーン・アッシャーの家の地下室で、一緒にピアノを弾いていた。その時に"Oh, you-u-u……got that something……"とやったんだ。

それだよ！
ポールがこのコードを思いついた。
僕は、それだ！ もう1回弾けよ！
当時の僕らは、まさにそんな風にして
曲を作っていた——
向かい合って楽器を弾きながらね。

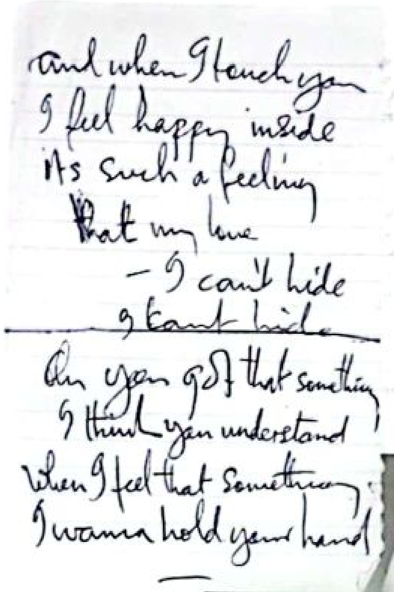
1980年



ジョージ　No.1になったと知った時は、すごい騒ぎだった。その夜は、ブライアンやジョージ・マーティンと一緒にディナーに出かけた。ジョージ・マーティンが、大きなワイン樽が眠っている地下貯蔵庫みたいなレストランに連れていってくれた。そのレストランではパンがペニスみたいな形をしてて、スープは便器みたいな器から取り分けられて、チョコレート・アイス・クリームは大きな糞みたいだった。そしてウェイターがやって来て、女の子全員の脚にガーターをつける。その時の写真が残ってるよ。ブライアンが頭に壷を載せているんだ。

すごくいい気分だった。パリ公演のあとは直接アメリカに行くことになっていたから。No.1になったのは好都合だった。エド・サリバンの仕事がすでに決まっていたから、No.2だろうとNo.10だろうと、どっちみち行っただろうけど、No.1として行くのはいいもんだった。

アメリカではこれより前に3枚のレコードが発売されていた。他のレコードは、別のふたつのレーベルから出ていたんだ。キャピトル・レコードは、僕らが有名になってヨーロッパでビートル・マニア現象が起きてから、やっと"さあ、ビートルズのレコードを出そう"と決めたんだ。キャピトルは「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」を僕らのファースト・シングルとして売り出したけど、実際には4枚目だったんだよ。



ポール　「フロム・ミー・トゥ・ユー」——アメリカでは失敗だった。「シー・ラヴズ・ユー」は——イギリスでは大ヒットしてNo.1になったけど——アメリカでは失敗した。「プリーズ・プリーズ・ミー」がアメリカでリリースされ——失敗に終わった。「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」の前は、みんなダメだった。

ジョン　アメリカでNo.1になるなんてとんでもないことさ——あそこでレコードをヒットさせるというのは、不可能なことだったんだ。とにかく、そんな風に思っていたよ。でも、どこの子どもたちも欲しがるものは同じだと気づいたんだ。イギリスでの僕らの実績を考えれば、アメリカでやれない理由はない。だけど、アメリカのディスク・ジョッキーはイギリスのレコードのことは知らないし、かけない。プロモーションをする人もいない。だからヒットも出なかったんだ。

「タイム」と「ニューズウィーク」がやって来て記事を書き、僕らへの興味を呼び起こすと、ディスク・ジョッキーが僕らのレコードをかけ始めた。そしてキャピトル・レコードが"レコードを出していいでしょうか"と言ってきた。彼らは何年も前に僕らのレコードのオファーを受けていたんだけど、当時は興味がなかった——でも今になって、僕らがビッグになったと聞いて"これからレコードを出してもいいですか"と言ってきたんだよ。僕らは"プロモーションをしてくれるのなら"と答えた。そしてキャピトルがプロモーションをやり、僕らのことを書いた記事が登場し、レコードが売れ出したんだ。

デレク・テイラー　その頃にはジョンは僕を受け入れてくれていた。ジョージとは、最初からすごくいい関係だった。彼は"君はマンチェスター出身だろ"というようなことは言わないし、人の気持ちを考えてくれる人なんだ。今でもね。何かに打ち込んでいる時の彼は、驚くほど完璧でまっすぐなタイプだ。だから、ジョージに"溶け込む"のは、とてもすんなりといった。当時、リンゴとはまったく面識がなく、ポールは少し距離を置いていた——でも彼もとてもいい人だ。僕らには共通点がたくさんあった。マージーサイドのグラマー・スクールの生徒だったこと。年は違ったけど気が合ったんだ。

パリにいる間、彼らが旋風を巻き起こすのは明らかだった。「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」がキャッシュ・ボックスのチャートでNo.1になり、ビートル・マニア現象が行く先々に広がっていた。アメリカ進出前の最後のジョージのコラムを"明日は世界だ"というような感じにした。"今夜僕らはヴェルサイユを征服した。フランス全土が陥落したと言っていいだろう……。ニューヨークの人々の目に僕らの訪問がどう映るのか、僕はただ想像するしかない！"。

なぜなら僕はアメリカ・ツアーに派遣してもらえなかったんだ。アメリカには通信員のデヴィッド・イングリッシュがいた。しかし、イングリッシュはビートルズを知らないし、彼らを理解していない。彼らを理解しているのは僕だけだ。僕は彼らを知っているんだ。だが、僕はブライアン・エプスタインから本の執筆協力を要請され、僕と彼とは4日間トーキーに滞在し、お粗末な本——「ア・セラーフル・オヴ・ノイズ」——を書き上げた。3日目に、ブライアンから"デレク、すごくいいアイディアがあるんだ。君に一緒に来てほしい"と言われた。

信じられなかった……僕は、"なるようになる"と考えて、当面ビートルズの仲間になるのはあきらめていたのだ。約15年勤めた新聞社をやめ、ブライアンの個人秘書としてビートルズの仲間に加わり、その後ビートルズの広報担当になった。

CamScannerでスキャン

ブライアン・エプスタイン

世界的スターとして成功するかどうかは、
すべてアメリカにかかっていた。
結局、アメリカ訪問は
大成功だった。 1964年

リンゴ　僕らには、何もかもが好転し、神も僕らに味方してくれているように思えた。バンドにはすごいシンガー／ソングライターもいたしね。とにかく何もかもがうまくいってたんだ。僕らはスウェーデン、フランス、スペイン、イタリアと大成功を収めていた。だけど、アメリカだけは不安だったんだ。

僕らの中で、前にアメリカに行ったことがあったのはジョージだけだった。ジョージはレコード屋に入って"ビートルズのレコードありますか"と尋ねた。ヴィー・ジェイ・レーベルとスワン・レーベルから3枚出てるはずなのに、どこにも置いてないし、僕らのことを知っている人さえいなかった。帰国した彼は"誰も僕らのことを知らないよ。どうも厳しそうだね"と言う。その時の僕らは有名であることに慣れっこになっていたけど、ほんとに不安だった。

僕らがスウェーデン公演を終えてヒースロー空港に戻ってきた時、ちょうど別の飛行機を降りたばかりのエド・サリバンと居合わせた。彼は、空港に大勢のファンが詰めかけているのを見て、その場で僕らと出演契約を結んだんだ。彼は僕らを知らず、僕らの方も彼を知らなかった。

こういうことがうまく働き始めてキャピトルとも契約が終わってたし、僕らがアメリカの地を踏んだ時にはレコードがNo.1になっていた。契約したのは5カ月も前だったから、まさかそんなことになるとは思わなかった。飛行機を降りると、まるでイギリスみたいに、数え切れないほどのファンが詰めかけていたんだ。

ジョン　アメリカで受けるなんて、まったく予想外だった。クリフだってアメリカでは、全然受けなかったし、フランキー・アヴァロンのショーのプログラムでは、扱いは14番目だった。1967年　初めて渡米することになった時、マネージャーがエド・サリバン・ショーの出演を決めていたのは知ってたけど、僕らは少なくともアメリカでLPを買ったり、聴いたりすることくらいはできるだろうって気持ちだったんだ。びっくりしたなんてもんじゃないよ。ほんと仰天したよ。1964年

ジョージ　前にアメリカに行った時には、まだ有名なビートルズのひとりではなかった。1963年にニューヨークとセントルイスを見て回り、姉が当時住んでいたイリノイの田舎に行った。レコード屋にも行って、ブッカー・T&ザ・MG'sのファースト・アルバム『グリーン・オニオン』と、ボビー・ブランドとかその手のものを買ったんだ。

僕がビートルズ初のアメリカ・ツアーに行く前に、すでにブライアン・エプスタインはキャピトルに対して"30ドルかけて宣伝するならビートルズとのレコード契約をしますよ"と言っていた。キャピトルはその通りにした。実際には5万ドルくらいかけたんだ。とてつもない大金だと思ったよ。宣伝は取り引きの条件の一部だったんだ。

ポール　お金は主に、LAで映画スターのジャネット・リーなどにビートルズのかつらをつけてもらった写真をプロモーションに使ったんだ。映画スターがやれば、アメリカ全土に広がる。"ちょっと、このおもしろい写真見て。ジャネット・リーがおかしなかつらつけてるよ――モップトップ・ウィッグだって"。そしてアメリカで"モップトップ"旋風が始まった。僕らの知名度も上がっていったんだ。

誰も予想していなかったけど、空港には多くのファンが来ていた。そのことは飛行機の中で知らされた。飛行機にジャーナリストが乗っていて、パイロットが通信したあと"大群衆が待っていると彼らに伝えてください"。"うひゃー！　すげえ！　ほんとにやったんだ"と僕らは思った。

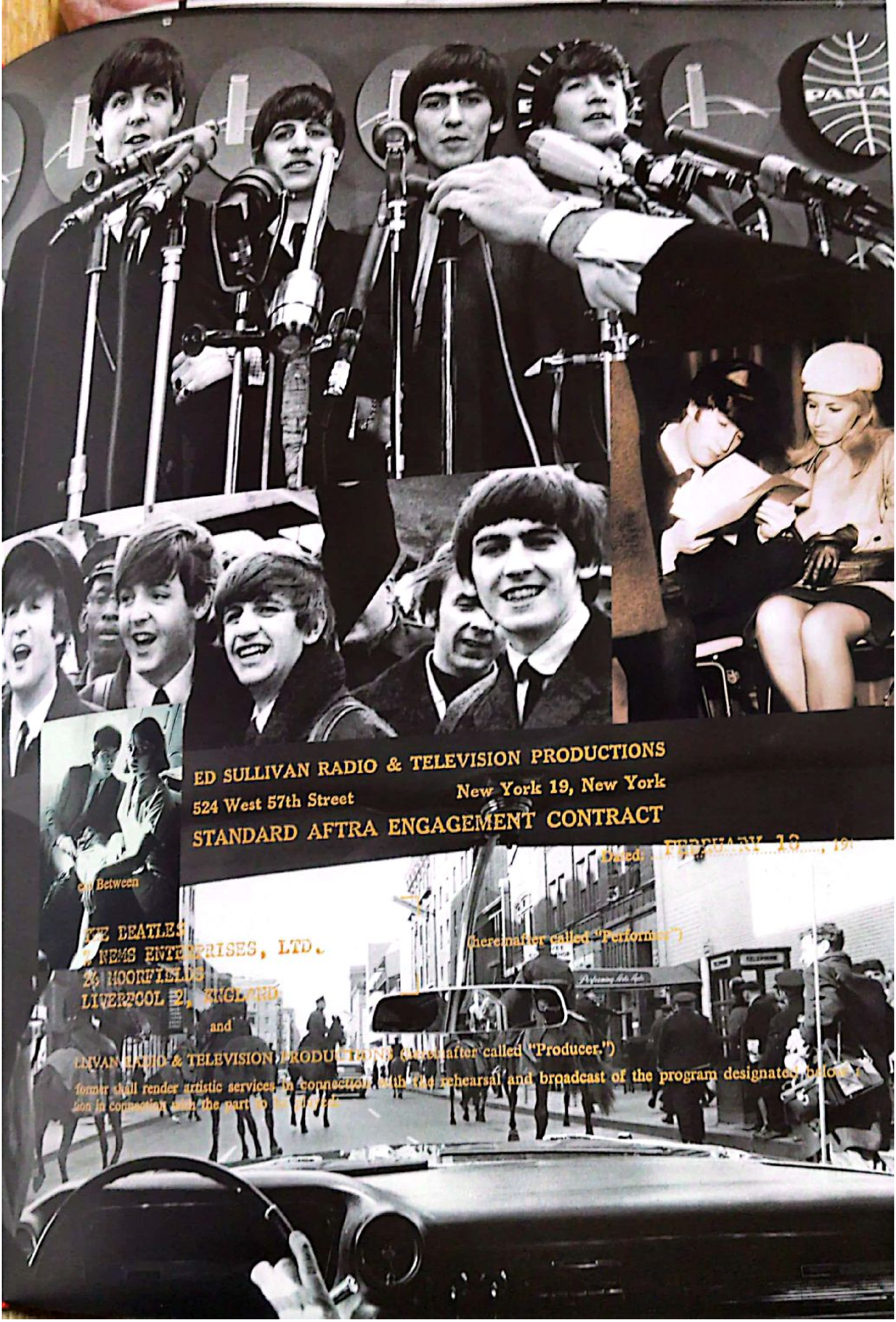
すごく嬉しかったのを今でも覚えてる。リムジンに乗り込んでラジオをつけると、僕らのことを言っていた。"彼らは今し方空港を離れ、ニューヨーク・シティに向かっています……"。夢みたいだった。生涯最高の思い出だ。

リンゴ　**すごく興奮したよ。**
飛行機が空港に降下してる間、
まるで大きなタコの足に絡まれて
飛行機ごとニューヨークに
引きずり下ろされてるんじゃないかと
思った。アメリカは最高だ！

リバプールに比べたら、あれは夢の世界だった。

すごく楽しかった。ラジオはかっこよくてノリノリ。テレビも見たし、ナイト・クラブにも行った。それにアメリカ人はリンゴが大好きだった。だから僕はすごく嬉しかったんだ。だって、アメリカではジョン、ポール、ジョージ、リンゴじゃなくて、半分ぐらいはリンゴ、ポール、ジョージ、ジョンとか、そんな感じだったから。急に対等になったんだよ。

ニール・アスピノール　あれは、アメリカのレコード会社が空港に来た人全員に1ドルとTシャツをプレゼントすると約束していた、と言われてたんだけど、実際にキャピトル・レコードがやったのは、受付係が電話に出る時に"キャピトル・レコードです――ビートルズがやって来ます"と答えることだけだった。ラジオでも"ビートルズがやってくる！"とさかんに言っていただけだ。Tシャツを無料で提供していたのは、当時ビートルズの商品を取り扱っていた業者だったんだ。当時の僕にはそんなアイディアはなかったよ。レコード会社は無関係だったんだ。



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　ジョージは扁桃腺炎になり、エド・サリバン・ショーのリハーサルに参加できなかった。僕が彼の代役をして、全員の立ち位置に印をつけたんだ。僕はギターを下げていたけど、アンプにはつながってなかった（全員演奏はしなかった）。数日後、アメリカのある有力誌に僕の"ギター・プレイはすごかった"と書いてあったのにはびっくりしたよ。

ビートルズの帰国後に放映されるステージを昼間に録画し、その夜にエド・サリバン・ショーに生出演したんだ。

ジョージ　咽喉の調子が悪かったので、セントラル・パークでの宣伝用写真の撮影には行っていないんだ。ニューヨークの高層ビルをバックに撮った写真には3人しか写っていないだろ（エド・サリバン・ショーのリハーサルも同じ。僕抜きでリハーサルしてる写真がある）。ビートルマニア現象が進行し、いろんなところに大勢のファンが押しかけていたのに、いったい彼らはどうやって公園で撮影することができたのか。永遠の謎だね。

リンゴ　初めてのエド・サリバン・ショーでは、リハーサルに半日かかったんだ。テレビは音響機材が悪かった（今でもよくないけど、当時はほんとひどかった）から、リハーサルを録ったあと、コントロール・ブースに上がって、あれこれつまみをいじるのが普通だった。僕らは、向こうのエンジニアと一緒にいろいろ整えて、そのあと休憩に出たんだ。今でもこのことは、よく覚えてるんだけど。

僕らがいない間に部屋とコンソールの清掃担当者が、"なんでこんなにいっぱいチョークの跡がついているの？"と思って全部拭き取ってしまったんだ。僕らがやったことは、水の泡と化し、そのあと大慌てで、また音を整えたんだ。

ジョージ　エド・サリバンがビッグだってことは、エルヴィスと彼のマネージャーのパーカー大佐から、電報をもらってわかったんだ。ビートルズがエド・サリバン・ショーに出演した時は、犯罪の報告がゼロかそれに近かったんだって。犯罪者さえ10分間休憩したんだね。

ポール　最初のショーの視聴者数は7300万人と伝えられた。今でも全米史上最高と考えられているんだ。

これはとてもすごいことだった。モップトップ頭の僕らが突然現れる。すごいインパクトだった。僕らがブレイクした最大の理由のひとつはそこにもあると思う——初めは音楽よりもヘア・スタイルだったんだ。多くの父親は、僕らが出るとテレビを消そうとした。彼らは子どもにこう注意した。"ごまかされるなよ。彼らはかつらをかぶっているんだ"。

ジョン　もしそうなら、あれは本物のふけが付いている世界に4つしかないかつらだったってことだ！

ポール　父親はテレビを消したけど、多くの母親と子どもはつけたままにしておいた。その子どもたちも今や大人になって、その頃の思い出を語っている。"ケネディ暗殺当時、君はどこにいた？"みたいにね。ダン・エイクロイドのような人までが"そうそう、日曜日の夜だった。何に感動したのかはわからないけど——ただ座ってエド・サリバン・ショーを見ていたよ"と言われた。それまでは、ジャグラーか、ジェリー・ルイスとかのコメディアンだった。そこに突然ビートルズだ！

ジョン　彼らはワイルドだ。とてもワイルドだ。正気の沙汰ではないみたい。こんなのを見るのは生まれて初めてだ。まるで映画でも見ているような感じなんだ。何だか他人事みたいでね。たとえばジョージの姿が見えると、"あっ、あれはジョージだ。あんなに多くの人に囲まれてる"なんて思ってしまう。

たくさんの番組に出て、どのニュースにも取り上げられた。2曲ぐらいヒットが出ると"そろそろだな。あとは落ちるだけだ"という気がしてきた。でも、僕らの勢いはどこまでも続きそうなんだ。こんなこと、数百万年に一度たりともあることじゃない。

大スターになるのを期待されているけど、ほとんどの人はありのままの僕らの方がいいんじゃないかな。彼らは先入観を抱いてやってくる。それに応えれば彼らは喜ぶらしい。僕らがやってるのはそんなことなんだ。疲れたら疲れた顔をする。嬉しいなら嬉しい顔をする。ごまかしは嫌いだ。調子が悪い日には"ちょっと調子が悪いんだ、ごめんなさい。今日は頭が回りません"と正直に言うんだ。1964年

ポール　ニューヨークのDJ、マレー・ザ・Kは、ビートルズ事情に一番通じていた。彼はビートルズ旋風が始まったのを見て、いち早く目をつけたんだ。彼は、記者会見では前の席で小生意気な質問をするタイプのジャーナリストだった。黙って後ろに引っ込んでいることはなかったね。彼は"ちょっとちょっと、君たち、いい？　あのさ、感想を聞かせてくれない……？"って調子さ。

すごく印象が強かったから、僕らは彼の放送がある時にはよくラジオをつけるようになった。僕らは彼が気に入ったので、他には漏らさないことでも全部話してやってたんだ。彼はパッケージ番組をやっていて、スモーキー・ロビンソンとか、彼が会ったことのある人について喋っていたよ。スモーキー・ロビンソンは、僕らの神様だね。

ジョージ　マレーがどうやって部屋に入り込み、ツアーの間ずっと僕らにくっついてたのか、よく不思議に思うんだ。おかしいよ、ほんとに。いったいどうやったのか、全然わからない。

リンゴ　マレー・ザ・Kはまったくおかしな奴で、よく音楽を知っている優秀なDJだった。彼は僕らのツアーに同行し、僕らが起きている時は常にそばにいて、僕らが酔っぱらってベッドに入ったあとで自分の番組を始めなきゃならない。僕らのせいで、1日20分しか眠っていなかったから、へとへとだった。実際、僕らのそばから消えるのは、トイレに行く時ぐらいだった。

ニューヨークには、彼の他にDJのカズン・ブルーシーもいたけど。マレーは"5人目のビートル"といってもいいくらい、ほんとに熱心にビートルズのレコードをかけてくれたんだ。レコードのヒットに貢献してくれたよ。

ニール・アスピノール　アメリカに着いた時は、まったくの世間知らずだった。宣伝関係については何も知らないし、自分たちをアピールするためならあらゆる手段が使われていた。記者会見では広告か何か、大きな掲示板が背後に掛かっていた。それすら、僕らは気がつかなかったんだ。

当時イギリスには、ラジオ局はBBCしかなかったが、アメリカにはたくさんのラジオ局があり、いろいろなDJがいて、マレー・ザ・Kはニューヨーク・シティのWINSに出ていた。マイクを手にビートルズを追ってエレベーターに乗り込み、話しかけた時の会話がそれぞれの担当するラジオで放送されるんだ。

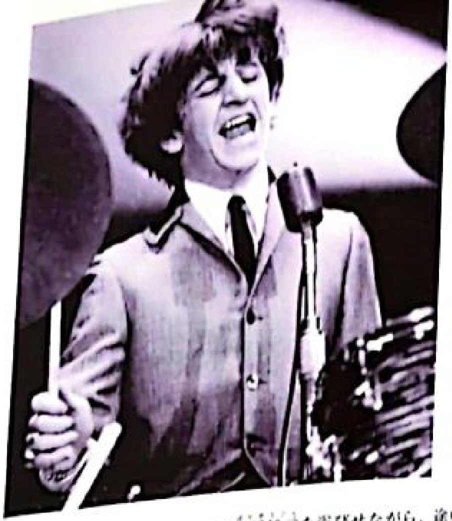
ビートルズはよく"あなたはどこのラジオ局の人？"と聞いていた。DJはその質問は局の宣伝になるので喜んで答えたんだ。彼らはどこの局のDJかなんて、わからないから、いつでも誰にでも同じ質問をしていたよ。そしてよくラジオを聴いて、リクエストの電話をかけていたよ。

ジョン　アメリカのラジオには圧倒されたね。エプスタインは僕らにやめろと言ってきた。僕らは、街のすべてのラジオ局に自分たちの聴きたい音楽、たとえば"ロネッツのこれをかけてくれ"って電話をかけていたんだ。自分たちのレコードはリクエストしなかったから、エプスタインはやめろと言ったんだ。他の人の曲ばかりリクエストしてたね。1974年　昔は、エルヴィスはもちろん、チャック・ベリー、カール・パーキンス、リトル・リチャード、エディ・コクランや何かを聴いていたんだけど、その頃はマーヴィン・ゲイ、ミラクルズ、シュレルズあたりが好きになっていんたんだ。

一日中そんなことばかりしていたよ。僕らはそれぞれ別のトランジスター・ラジオをつけて、好きなレコードがかかると、ボリュームを上げるんだ。すごくおもしろい。今ではイギリス——イギリス沖——でも始まって"パイレート・シップス"（海賊船）と呼ばれている。イギリス風に変えられているけど、似たようなもさ。でも、一日中いいレコードが聴けるなんて、以前は絶対できなかったことだよ。

最初のうちはコマーシャルが多いような気がするんだけど、そのうち慣れると思う。イギリスに来た人（民放テレビを見たことのない人）がテレビ・コマーシャルを見て、これはひどいと思う。でもそのうち慣れるんだ。1964年

CamScannerでスキャン



リンゴ　僕はニューヨークが大好きだった。僕らは馬車に乗ってセントラル・パークに行った。プラザ・ホテルで、全室テレビ付きのすごく広いスウィート・ルームに泊まった。僕らはイヤホンとラジオを持っていた。何もかも、僕にはとても魅力的だった。あまりにも進んでいて、情報がすごく速かった。

僕が朝起きてテレビをつけると、イタリア映画「ヘラクレス・アンチェインド」を放映していたのを覚えているよ。ヘラクレスが古代の世界で大活躍してた。外出して用をすませ、午後に帰ってきてテレビをつけると、まだヘラクレスがいる。夜の外出から帰ってきて同じチャンネルをつけると、またやっている！　僕は自分の頭がどうかしたのかと思った。実際には、このチャンネルはムービー・オブ・ザ・ウィークと題し、同じ映画をひたすら繰り返し放映していたんだ。だからエンディングのクレジットが終わると、すぐに頭から始まるんだよ。

こんなのイギリスでは考えられないことだった。わずか2、3年前まで家にテレビもなかったんだから。アメリカには、こんなことをやってるチャンネルさえあったんだ。

ジョージ　アメリカのテレビで気になったのは、朝起きたらサッカーの試合を放映していたことだ。朝に試合なんかやってるはずないのにね。時間が不適切だと思ったよ。

僕は、時間帯によって見たくない番組があるんだ。「アイ・ラヴ・ルーシー」とか、明らかに夜の番組を朝見るのは我慢できない。もっと嫌なのは、朝の7〜8時の映画。僕に言わせれば、映画は夜やるものだよ。

ニール・アスピノール　エド・サリバン・ショーのあと、電車でワシントンに行った。僕らの車輌は報道関係者などでいっぱいだった。それにとても寒い日だったね。

リンゴ　生意気な奴でいると、得することもあるよ。特にワシントン行きの電車の中ではそうだったね。報道関係者は、僕らをやり込めようとするんだ。いかにもってニューヨーカーのレポーターたちが言いがかりをつけてきたら、僕らは反撃したよ。そのうち何人かと知り合いになった。"君たちをやっつけにきたのに、君たちときたら、僕らに怒鳴り返すんだから——信じられなかったよ"。だって、それまでのポップ・グループは、報道陣の前で優等生みたいにふるまっていた。"いいえ、煙草は吸いません"とかね。ところが僕らは、煙草は吸うわ、酒は飲む。そして報道陣を怒鳴りつける。彼らは僕らのそんなところが気に入ったみたいだ。

ジョン
ニュージーランドの人々も
少し乱暴だった。
確か、僕の髪が多量にとられたんだ。
ちょっとなんてもんじゃない。
グラウンドに出る途中だった僕は
"ああ、殺到してきたら暴動に
なるに違いない"と思った。
約3000〜4000人集まっていたのに、
パトロールの警官は3人だった。
彼らはそれ以上増やすのを拒んだんだ。
"ここではいろんなことがあるんです。
僕たちはすべて目の当たりに
してきたんですよ"。
確かに彼らは目の当たりにした
——もみくちゃにされて
押し倒された僕たちを！
1964年

ョン　僕らはあらゆるシチュエーションでの対応の方法を覚えた。イギリスの報道は
世界一厳しいんだ——帰国した時、僕らはどんな記者の質問もあしらえるようになって
た。飛行機の中では"ああ、無理だ"って思ってたけど、落ち着きさえすれば彼らを
かす自信はあったんだ。1970年
けなされるのは一向にかまわない。誰からも好かれるなんてつまんないからね。誰
ひれ伏して"あなたはすごい"と言うようじゃ。僕らは批判も楽しんでいるんだ。何
かってない奴じゃダメだけど、一部の賢い人の批評はほんとにおもしろい。
ードなことでも切り抜けられたのは、僕らにユーモアがあるからだ。僕らは、どんな
もジョークで返すんだ——僕ら自身も含めて何をやる時でもそう——何だって冗談半
んだ。自分自身に対しても同じだよ。深刻になることはまずないね。1964年

　1960年の初めの頃は、イングランド北部出身の僕らと、階級の違う"大使館の
の間には大きな隔たりがあったんだ。ブライアン・エプスタインもちょっとそんな風
けどね。僕らが急に有名人になったせいか、ワシントンのイギリス大使館に招待
さ。なぜか僕らは出かけて行ったんだよ。ブライアンもすばらしいことだと喜ん
ね。そこで悲惨な経験をしたんだ。ただ突っ立って、"はい"とか"いいですね"
ながらドリンクを飲んでいたら、突然髪をひと握り切られちゃったんだ。僕はす
きて"何するんだ"って怒ったら、"ああ、気にしないでくれ、君……"だって。ク
たく馬鹿げてるよ。ビートルズの髪を切るなんて。

ジョン　歩いていると、人がべたべた触りに来たり、僕らはどこへ行っても普通の人間扱いされないんだ。市長やその夫人たちに何をされても我慢するもんだとか、「ア・ハード・デイズ・ナイト」みたいにやたらと触ったりいじったりしていいものだと思われてたらしい。アメリカ大使館かワシントンのイギリス大使館では、どこかの野蛮人がリンゴの髪を切ったんだ。だから、僕は罵詈雑言を浴びせながら、途中で抜け出してやった。1970年

ポール　あそこには、鼻持ちならない金持ちがたくさんいた。それまでそんな奴には会ったこともなかったんだ。僕らはケンブリッジ・メイ・ボールみたいな気取ったダンス・パーティには行ったことがないけど、2、3杯飲んだあとでちょっと絡んでくる奴がいるって噂は聞いていた。"ねえ、ラフマニノフのピアノ・コンチェルトを弾いてよ"。はいはい、ラフマニノフは好きですよ……。

大使館にも何人かそんな奴がいた。女の子が僕らの髪の毛をちょっと切りたがっていたのを覚えてる。これは絶対に許せないことだった——というわけで、彼女たちは軽く肘打ちを食らうことになったのさ。

ニール・アスピノール　ワシントンのショーは大変だった。四方に観客を入れるボクシング・リングだったので、全方位に向けて演奏しなければならなかったんだ。

ビートルズは1曲ごとに別の方向を向かなくてはならないので、僕らは常にマイクを持って移動した。リンゴはステージ中央の丸いターン・テーブルの上に座っていたが、それも僕らが回さなきゃならなかったんだ——ところが、こいつが動かなくなってしまって！　それで大混乱になったりした事もあったけど、内容的にはいいコンサートだった。この公演のあとはニューヨークに戻った。

そのコンサートが録画されていて、アメリカ中でテレビ放映され、アメリカ中の子どもがお金を払って劇場に出かけてコンサートを見たという事実を20年後に知ったんだ。だから8月にビートルズが再びアメリカ・ツアーに来た時には、観客の中にテレビでコンサートを見たことのある人がたくさんいた。ビーチ・ボーイズやその他のアーティストとの抱き合わせで映画館で公開されていたんだ。

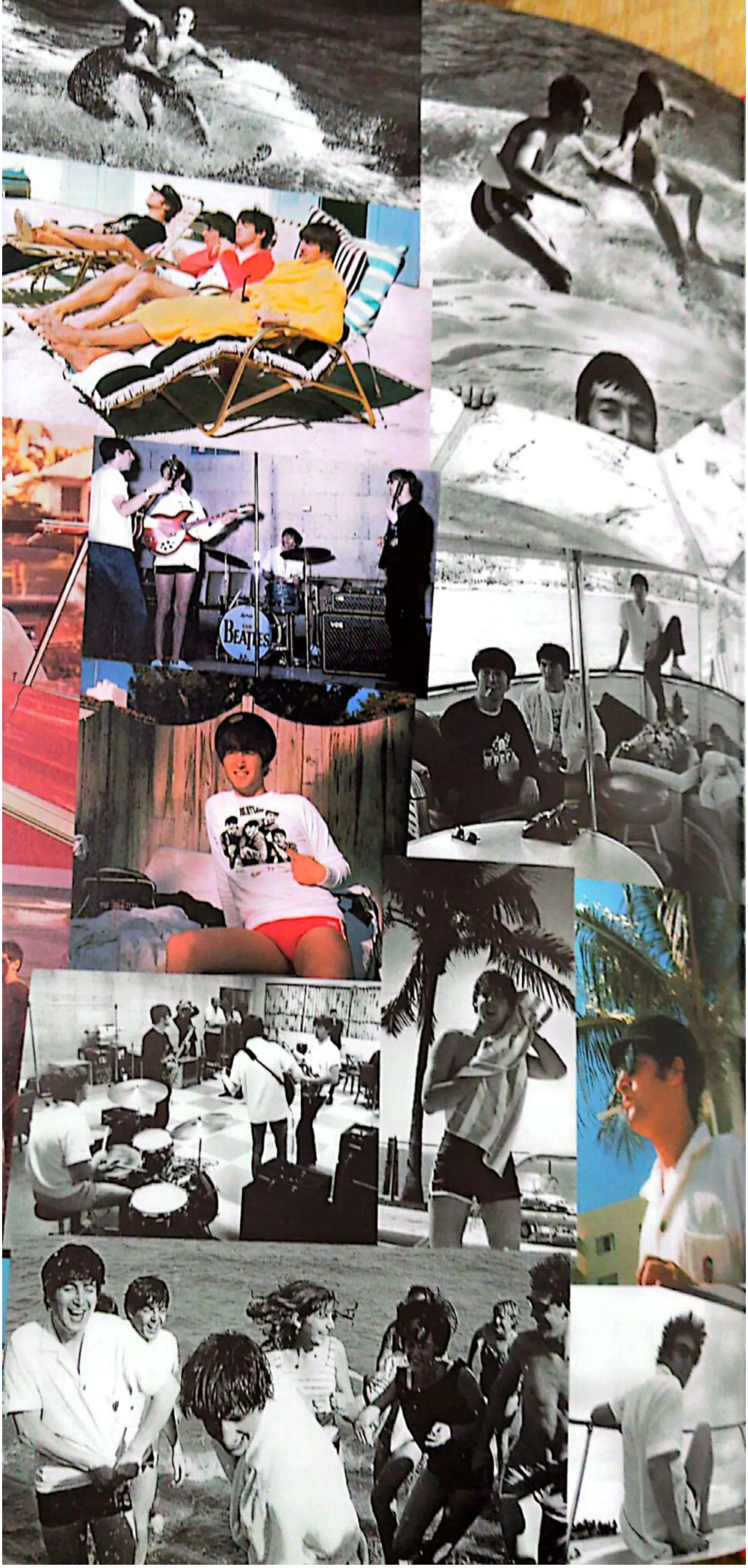
ポール　僕らはカーネギー・ホールで演奏した。ブライアンがクラシックのホールでやりたがったからなんだ。そのあとマイアミに行って、2回目のエド・サリバン・ショーを録画した。

マイアミはパラダイスみたいで楽しかった。椰子の木が生えてる土地なんて、それまで行ったことがなかったから。僕らはまったく観光気分だった。ペンタックスのカメラを持って、たくさん写真を撮ったよ。オートバイの警官が銃を持った写真は、今もたくさん持っている。銃を持った警官を見たのはそれが初めてで、マイアミの警官はすごくかっこよく見えたよ。僕らはあるホテルで演奏したんだ。大きいホテルは、必ず地下にキャバレーがあったんだ。浜辺を見おろすと、ファンが砂に書いた"I Love John"の文字が見える。すごく大きく書いてあって、部屋からだって読めるんだ。

ジョン　でも、僕らが手を振ると誰かに言われた。"彼らを刺激することになるから、手を振らないで！"。

リンゴ　マイアミは僕が行った中で最高の場所だった。たとえばヨットとか、欲しい物は何でも貸してくれ。フロリダではすごいことがふたつあったんだ。ひとつはとてもきれいな若い女性ふたりにリンカーン・コンチネンタルに乗せてもらって、初めてドライブ・イン・シアターに行ったこと。もうひとつは家族連れからボートを借りて運転させてもらったこと。60フィート（約18.3メートル）のスピード・ボートで、僕は真っ正面から突堤に突っ込んでしまった。スピード・ボートの運転はあまりよくわからなかったんだ。

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

ジョージ　沖でモーターボートのレースをやっていて、僕らは出艇のひとつに乗せてもらった。V12エンジンがふたつ付いていて、アクセルを踏んだらすぐ発進だ。すごいスピードで、プロペラの付いてるところ以外は水面から浮いてしまうから、ボートはほとんど立った状態で、僕らは必死にしがみついていたんだけど、あれは楽しかったよ。

ニール・アスピノール　リンゴは、ボートにブレーキがないのに気づくのが遅すぎて僕たちは突堤に衝突してしまった。

リンゴ　正面にオシャレな欄がついていて、僕はあちこち曲げてしまったよ。でも誰も気にしてないようだった。みんなただ楽しかったんだよね！

ジョン　あそこでは金持ちの家を2軒借りた。1964年

ポール　ブライアンにプールで泳ぎたいって言ったら、レコード会社の人が手配してたんだ。今から思うと、マイアミにしては質素で小さなプールだったけどね。巨大なやつじゃなかったんだ。午後は、誰にも邪魔されずいろんなところを歩き回った。それはすごいことだった――他の場所では考えられないよ。"水着を持ってきて"なんて。「ライフ」誌は、僕らが泳いでる写真を撮った。

知らずに僕らはマフィアとつきあっていたようだ。僕らをひどい目に遭わせる批評が報道されたことがあった。ジョージ・マーティンとブライアン・エプスタインがそれについて話し合っていると、体格の大きな男が寄ってきてこう言った。"エプスタインさん、我々がこいつをこらしめてやりましょうか"――"あ、いや、それはけっこう"。僕らは、"そうか、俺はマフィアの人間だ"というような連中と一緒だったんだ。でも、僕らは知らなかった。ただ単に、プールとヨットを持っているいい人なんだと思っていた。僕らは彼よりヨットに興味があっただけなんだ。

この頃から、新聞や映画でしか見たことのなかった人たちと会うようになり、親しく交際するようになっていった。

ジョージ　僕らには確かに影響力があったに違いない。著名人たちがしきりに僕らに会おうとしたんだもの――たとえば、モハメッド・アリとかね。初めてのツアーの時、彼に会いに行ったんだ。モハメッド・アリはすごくキュートで、2日後にソニー・リストンとの試合を控えていた。彼が片方の脇にひとりずつ僕らを抱えている有名な写真があるんだよ。こういうのは大々的な宣伝イベントだった。みんな、ビートルズの仕事の一部だったんだ。連れ回されるのも、報道陣が詰めかけた部屋に押し込まれて写真を撮られたり質問されたりするのもね。

ンゴ　僕はカシアス・クレイとスパーリングをした。当時、アリはそう名乗っていたんだ
一僕は、彼が知るすべてのことを教えてやった。もちろんドキドキしたよ。そして僕はストンにお金を賭けたんだ。僕はほんと何が起きるかわかっていたのさ！

ール　フィル・スペクターを通じて何人かの人に会ったんだけど、ロネッツと会った時興奮したな。あと、偉大な作曲家のジャッキー・デ・シャノンに、ダイアナ・ロスとシュープリームスのメンバーとか、いろんな人に会ったよ。みんな僕らが尊敬していた人たち
その後――僕らと同時期に出てきたいろんな人たちにも会ったよ。みんな同僚のなものだったんだ。

ン　僕は、ほとんど誰も覚えていない。1965年

ージ　会った人の中には、僕らが知らない有名人もいた。つまりアメリカには、現地すごく有名なんだけど、イギリスでは無名という人がいたんだ――今でもいるけどね。
ビを見たりラジオを聴いたりしなければ、彼らが誰なのかか絶対わからないかもしれ
もちろん知ってた人にも会ったよ。シュープリームスとか。

たぶん今ではドン・リクルズの名前は誰でも知ってると思うけど、当時の僕らは
知らなかった。彼は、僕らが泊まっていたドーヴィル・ホテルのショーに出演してい
舌タイプのコメディアンだった。"奥様こんにちは。どちらから？"と彼が言う。す
の女性は"ええ、イスラエルから参りましたの"。次に別のテーブルで"どちらか
そのテーブルの人たちが"ドイツです"。彼はこうだ。"ナチスめ、出ていけ！ま
なんてこった"。

当然、彼は僕らに目をつけた。僕ら4人はボディガードの警官（僕らはこのボデ
をどこにでも同伴させた。いい友だちで、彼の家にもよく行った）と一緒にひと
ーブルについていた。リクルズはまずボディガードを標的にした。"おい、お巡り、
よ！なんだ、これは。ビートルズのお守か？ たいした仕事だね。ビートルズの
よ！"。彼は続ける。"たいしたもんだ。9階の部屋でサテンのシーツにくるまっ
子がキャーキャー言うたびに「おー」と大騒ぎ"。僕の記憶では、あまりにも痛
ので、僕らは楽しめなかったんだ。変てこなこと言ってるなって感じだった。
好きになったけど、最初は少しショックだった。

全員、呆気にとられてしまった。それに、僕らは目立たないよう心がけてたんだけど、急にスポットライトをあてられて、バツの悪い思いをしたんだ。この時はさすがのジョンも少しきまり悪かったんだと思う。僕らの舞台だったら、奴をさんざんコケにしてやれたのに。

彼はこうも言った。"ここの警察はすばらしい。いい仕事をしてらっしゃる"。ここで急に向きを変え、"お前のバッジなんか溶けてしまえ"と言い放った。

このショーには、試合を控えたソニー・リストンかモハメッド・アリのマネージャーも見にきていた。ドン・リクルズはこう言った。"そうだねえ、ジャック。僕の予想では、勝つのは黒人だね"。そして突然彼が僕らのテーブルに戻ってきた。僕らはびくびくしながら座っていた。"この超有名人に御注目！"。

リンゴ　彼が"どちらから？"と聞いたので、僕は"リバプール"と言った。場内は沈黙。すると彼は"おお、この喝采をお聞きください！"。

ジョージ　最後に彼はすごいことをやった。"さて、この部屋の後方にアラブの方がいらしてます。アラブとユダヤの間では争いの話が絶えません。僕は、我々がほんとにお互いを尊重し、悪い感情を抱いていないことを申し上げたいと思います。それを証明するため、みなさん、起立して御挨拶いただけませんか"。アラブの人たちは、みんなそれに従い、会釈をした。するとリクルズは床に突っ伏して"ダダダダダダ……"と機関銃の真似をした。

結局、彼はクールじゃなかったよ。最後の最後にすべて台無しにしてしまった。だって彼は、場内を騒然とさせたまま消えたりしないで、それまで言ったことすべてに謝罪を始めたんだから。

リンゴ　マイアミの夜には、もうひとつ悪い思い出がある。僕らは、「ヤケティ・ヤック」をヒットさせた大好きなコースターズを見に出かけたんだ。クラブに着いてみると、みんな曲に合わせて踊ってるんだ。僕には理解できなかった。僕にとってはロックン・ロールの神様なのに、軽々しく踊るなんて！ すごく気分が悪かった。でもコースターズは偉大だった。アメリカのアーティストを見られるなんて、とてもわくわくしたよ。それまでアメリカにいてもこういうのを見る機会はなかったんだもの。

ジョージ　ニューヨークにいた時、コースターズがショーをやっていた。僕らがフロリダに行った時も、コースターズがいた。僕らの行くところどこにでも、カリフォルニアでさえコースターズの広告があったんだ。

当時は、たくさんのバンドが同じ名前でツアーに出る傾向があった。顔と名前を一致させられる人なんて誰もいなかったし、――バンドはただ出てきて歌を歌うだけ。たとえばシャングリラズを名乗るバンドは、何百とあったんじゃないかな。

ポール　この旅では興奮することがたくさんあったけど、舞い上がったりはしなかった。僕らの経歴の中で重要なのは、いくつかのステップがあったってことなんだ。もし舞い上がるようなら、キャバーンで成功した時にそうなっていたよ。あれは地元でのささやかな成功だったんだ。ピーターボロー・エンパイアみたいなところでショーをやった時も、舞い上がる可能性はあったかもしれないけど、僕らは平常心を失わなかった。その後テレビや主要なラジオ・ネットワークに出演し、それもすべてうまくこなした。だから、実はアメリカも、その延長上にあるワン・ステップに過ぎなかった。ただ、他と比べて大きさと質が上回っていただけなんだ。

アメリカ人の喋り方は大好きだし、親近感があったよ。僕らの発音と共通点が多いように思えたんだ。"bath"とか"grass"と言う時、僕らは"a"を短く発音する（"bah-th"のように長く発音しない）けど、アメリカ人も同じだ。リバプール出身の人間は、アメリカ人やGI、戦争とかに共感するんだと思う。リバプールにもカウボーイ・ハットをかぶって歩いている連中がゴロゴロにいっぱいいるよ。リバプールとニューヨークは双子の都市なんじゃないかと思えるぐらいだよ。

リンゴ　僕の家族は、僕らがアメリカでビッグになってもどうってことなかったよ。リバプールでビッグになった時も無関心だった。今回もその続きだ。彼らはほんとうに興味がないんだ。パラディアムで演奏したら、家族がすごいって誉めるんだ――ただそれだけのこと。

ジョージ　今思うと、あのアメリカ・ツアーをやってた時は、立場が変わったことをよく理解してなかったんだと思う。僕は自分の将来にあまり期待を持っていなかった。"その時その時を楽しんで、やりたいことをやっていくんだろう"と思っていただけさ。

最初の頃は楽しんでいたけど、そのうち面倒になってきたんだ。初めてアメリカ・ツアーに行った時は、アメリカを"征服する"ことが新鮮だったけど。同じ年にもう一度行き、その翌年にもツアーをやると、もう十分と思うようになっていたんだ。身動きもとれなくなっていた。

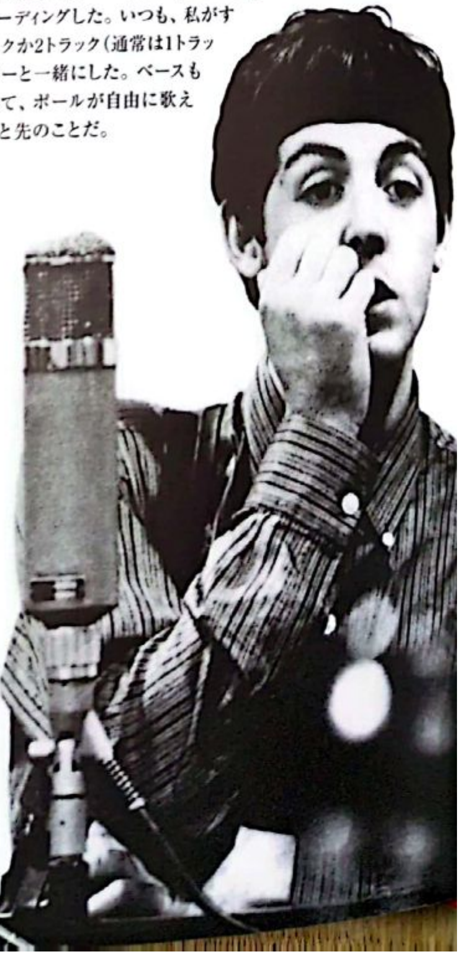
CamScannerでスキャン

リンゴ

ジョージ・マーティンは
片耳が聞こえなくなった。
今は、モノラルでしか
作業できないんだ！

ジョージ・マーティン　ツアーをやめる前はビートルズはレコード制作に完全に関与していたわけではなかった。それまでは時間がなかったから、スタジオに駆け込んで曲を演奏したあとは、すべて私たちに作業を任せていた。

最初の頃のレコードは、ステレオの設備を持っていたにも関わらず、モノラルで作った。それにミキシングを簡単にするため、ボーカルとバッキングは別にした。そしてステレオ機材を左右別々のトラックとして使った。ステレオにしようと考えたのではなくて——単に、モノラルにリミックスする際の柔軟性の面で少しばかり有利だったから使っただけなんだ。そういうわけで、最初の年のレコーディングは、2トラックだけでライブで録っていた。生放送のようにね。技術が格段に進歩して4トラックが誕生したおかげで、あとからダブル・トラッキングでのボーカルとギター・ソロをかぶせて入れられるようになった。「ア・ハード・デイズ・ナイト」（ビートルズがやって来るヤァ！ヤァ！ヤァ！）の頃は、間違いなくベーシック・トラックを録ったあとでボーカルをレコーディングした。いつも、私がすべてのリズム楽器を1トラックか2トラック（通常は1トラック）に入れて、ベースはギターと一緒にした。ベースもあとから入れるようになって、ポールが自由に歌える機会が増えたのは、もっと先のことだ。



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ジョン マルクス兄弟と比較されるなんて、まったくくだらない！
共通するのは、メンバーが4人ということだけさ。 1965年

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ポール　映画を作りたいって気持ちは前からあった。僕らはアメリカで成功したから、次は映画ってわけさ。僕らは『女はそれを我慢できない』が好きで、ロックン・ロールの映画もありだと思っていた。僕らは小規模のアメリカ作品をよく見た。予算が少なくてあまりいい出来じゃなかったけれど、音楽が使われていたから、僕らはいつも見にいっていたよ。

僕らもそんなのを作りたいと思った。ただし、いい作品を。それまでのほとんどの作品は、バンドについて回るDJを主人公した適当なストーリーをいいかげんに寄せ集めたようなものばかりだった。どれも、とにかくストーリーがひどかったね。

ジョン　つまらない映画なら作らない方がいい。本物のライターに書かせるべきだと主張した。1967年

ポール　前に『イエロー・テディ・ベアーズ』という作品のオファーを受けたことがあった。喜びはしたけど、それの関係者が曲を全部書こうとしていたことがわかってやめたんだ。でも映画に興味があったから、ブライアンが交渉して、ディック・レスターの名前が浮上した。スパイク・ミリガンの短編コメディ『ザ・ランニング、ジャンピング＆スタンディング・スティル・フィルム』を作った人だとブライアンから聞いた。好きな作品だったので、みんな"彼はイカしてる。僕らにぴったりだ"と言ってたんだ。

ディックが会いに来て、彼も音楽をやっていることを知った。ジャズ・ピアノが少し弾けたんだ。僕らはなおさら彼に興味をもった。彼はアメリカ人だけど、ずっとイギリスで仕事をしてて、グーンズの仕事をしたこともあったんだ。僕らには、それだけでも十分だった。

ジョン　僕らはグーン・ショーに育てられて大人になった。ある意味では、僕らはあの反抗精神の延長上にいる。 1972年

ポール　台本には、ディック・レスターがアラン・オーエンを連れてきた。人気のあるリバプールとウェールズの劇作家で、ビリー・ホワイトローがやったテレビ・ドラマの名作『ノー・トラム・トゥ・ライム・ストリート』を書いた人だ。

ジョン　ライム・ストリートは、リバプールでは有名な通りで、昔は売春婦が立っていた場だ。台本作家のオーディションをした時、彼の名があがった。彼は、リバプール訛りで品を書くことで有名だったんだ。僕らは彼の作品も知っていたので、"いいよ"と言っ。そして、僕らのことを知るために彼がやって来て——彼はプロのリバプール人という感じだった——シナリオを書いた。1970年

リンゴ　ブライアンは、プロデューサーのウォルター・シェンソンも連れてきた。それともウォルター・シェンソンが彼に持ちかけたのかな——とにかく誰もが映画を作りたがってたんだ。僕らはアラン・オーエンとつきあい始めた。彼は、イギリス・ツアーの一部にして、僕らを取り巻く騒ぎや生活を書きとめて、僕らに自分自身のパロディを演じさ。

から、『ア・ハード・デイズ・ナイト』は、生活の中の1日のようなものだったね。あるいは2日2晩だ。レコーディング・スタジオに行き、それからテレビのスタジオに行く。僕らのまわりで起きているすべてが盛り込まれていたよ。彼は他の人の役も書き足していた。

ジ　あの映画では、実際の出来事がコメディっぽく表現されている。現実のプレッシャーはあれよりずっときつかったんだ。1971年『ア・ハード・デイズ・ナイト』は好きだよ。アラン・オーエンは僕らと2日間行動を共にしただけであの台本を書いたんだ。あは気に入らなかったね。

の一面——ロンドンなりダブリンなりをツアー中の僕ら——の描写としては、よくで。あれは人前でパフォーマンスしなきゃならない立場にあった僕らを描いたものらは現実にあんな風だった。アラン・オーエンは記者会見を見て、それを映画でた——とてもよくできてる。でも、その当時でさえ僕らはすごく嘘っぽいと思ってだ。1970年

アランは、僕らに関する些細なことをたくさん拾い上げた。たとえば"遅くなるごくきれいになってくるよ"みたいなところ。ちょっとしたジョーク、皮肉、ユーモのウィット、リンゴのぶっきらぼうな物言い、僕らひとりひとりの違い。あの映画個性をすごくうまくとらえてる。アランは、僕らが実際に喋るような言葉だけで書こうと気を使っていた。ひとつのシーンを終えると、彼は僕らに"これでい聞いてきたよ。僕らは"うん、よくできてる。でも、これをこんな風に喋っちゃってもいいのかなあ"と答えたりしてたよ。僕の台本はすごくよく書けてたと思う。

ジョージ　僕のセリフで、こういうのがあった。"ええ、僕はそんなの着ないよ——それダサい(grotty)よ!"。アラン・オーエンが作ったんだ。僕じゃないよ。この言葉は今では定着してるよね。あれはグロテスクをもじった新しい表現だったんだ。

ジョン　すごく変な言葉づかいだと思ったよ。ジョージは、そのセリフのたびに気恥ずかしくてうんざりしてた。

ジョージ　彼は、リバプールの人ということで僕らのユーモアがわかると思っていたんじゃないかな。どうしても気に入らないところがあったのなら、僕らはやらなかったと思う——でも『ヘルプ!』(1965年)の頃には僕らも生意気になって、セリフを好きなように変えていた。アランは、僕らが報道陣の攻撃を受けているシーンを書いた——実際僕らは毎日こんな攻撃を受けていた。僕らはこんな質問をする。"アメリカはどんなところだった?"。僕らは答える。"グリーンランドを左に曲がったところ"。

これはビートルズの重要な部分だったと思う——ユーモアが個性のひとつになったんだ。新しいバンドが初めて出てくる時には、たとえばジェリー＆ザ・ペースメーカーズもそうだったけど、どれが誰だかわからなくて、ヒット曲も似たり寄ったりで、みんな同程度の扱いしかされなかった。だから、たとえヒット曲が出ても、記事になるにはプラス・アルファが必要だった。実際ビートルズはとってもおもしろくて、たとえニューヨークでも他のどこでも、すごく受けた。僕らはほんとに図々しくしてたけど、それが人々に愛されたんだ。

リバプールの人はみな、自分たちをコメディアンだと思ってる。マージー・トンネルを抜けると、料金所にいる係員がコメディアンなんだ。そういう気質がすでに僕らの中にしみついているんだ。

僕らの場合は、4人が補い合うから、ユーモアはより増幅される。もしひとりが話に詰まってしまっても、誰か他のメンバーがすごく気の利いた別の言葉でフォローするんだ。

リンゴ　あれはとても楽しかった。でも自分たちの映画を作るなんて僕は考えもしなかったね。僕は子どもの頃映画が大好きで、リバプールのベレスフォード映画館やゴーモン映画館にしょっちゅう通っていたよ。土曜の朝の映画はすごくいい思い出だ。僕は、何にでも入り込んじゃうんだ。海賊映画をやっていれば海賊に、ウェスタン映画ならカウボーイになった気分になる。ダルタニアン気取りで、道中ずっとフェンシングをしながらうちに帰ったこともある。映画は僕にとってすばらしいファンタジーの世界だった。その世界に突然僕らが飛び込んだんだ。照明を浴び、リムジンで仕事場に行く。何もかも夢のようだった。

僕は映画が大好きだったから、他のメンバーよりはすんなり入れたんだと思う。ジョンも映画にのめり込んだ。ジョージは、たいていの場合は、やりたくなさそうだったね。彼は僕らがやるからやってただけなんだ。

ジョージ　リンゴは何を言ってるんだか。僕は映画大好きだよ! 好きじゃなかったのは、朝5時に起きなきゃならないことだけさ。

スタートがすごく早いんだ。僕らは現場に行き、服を着て髪もメークも整えなきゃならない。その間に、代役を使ってセッティングが始まっているんだ。だけどシーンのリハーサルの準備ができるまで、ずっと僕らは待ってるんだよ。

いつもハプニングの連続だったから、いったいカメラがいくつあったのか全然知らなかったし。細かいことは気にもとめなかったよ——僕らはいろんなものに囲まれたど真ん中にいたからね。

リンゴ　僕らは早起きは得意じゃなかった。それが影響してるシーンがあるんだ。僕がけっこう誉められたあのシーン、カメラを持って川のほとりを歩くところ——"孤独な男"の部分——なんだけどね。

僕は、ナイト・クラブから撮影に直行していたんだ(なんて希薄なプロ意識)。控えめに言っても、ちょっと二日酔いが残ってた。現場では、ディック・レスターが関係者を全員そろえ、共演の子役も来ていたけど、僕は頭がからっぽだったんだ。

僕らはいくつかのやり方でやってみた。子役が自分のセリフを喋り、僕のセリフはカメラの外から誰かに怒鳴ってもらうとか。それから僕が子役のセリフを喋り、子役は"何とかかんとか"とやる。あるいは、僕が"あのね、坊や……"と言う。僕はぐったりしてきてできなかった。するとスタッフが"じゃあ、何でもいいからやろう"。僕は"ただ歩き回るところを撮影してくれない?"と言った。そして、そのとおりに撮影されたんだ。あんなに寒そうで憂鬱そうに見えるのはお腹の具合が悪かったから。演技はしてないよ。それほど気分が悪かったんだよ。

ジョージ　やりながら作り出した箇所もある(もっとも、あまり自然とは言えないけど)——たとえば、記者会見のシーンがそうだ。僕らは、質問の答えをたくさん考え出した。するとディック・レスターが"いいね。それを使おう"と言う。彼は、そんな風にとても有能だった。

ジョン　バスタブのシーンは自然だったよ。でもアイディアの段階ではそうでもなかったんだ。僕らはアイディアを話しただけで、僕は自分で思いついたことを何でもやらなければならなかったんだ。あれは大部分が自然な感じだね。アドリブで喋ったこともたくさんあるけど、映画では必ず8つのテイクをとらなきゃいけないので、アドリブはできないんだ。すごくおもしろいことをアドリブで言って、誰もが笑い、技術者も笑う。すると"もう1回とろう"と言われるんだ。だから"アドリブ"もどんどん空々しくなって、最後にはまるでおもしろくなくなっちゃう。かなり多くの部分が台本どおりだけど、ギャグの中には僕らが作ったものもある。それと、監督だ——彼もけっこうたくさん付け加えた。1964年

リンゴ　ほとんどは台本どおりだったけど、やり損ねたのはシーンの終わりだ。なぜなら、彼らは4人をひとつの部屋に入れてそれぞれ別の方向に出ていかせようとしたんだ。僕らは一緒にいる方が楽だったから、そこをでっちあげた。問題だったのは名優ウィルフリッド・ブランベルで、彼はワン・シーンが終わるとそれでやめてしまうんだ。僕らがそのまま"なんとかかんとか、うんうん、あとさあ……"と演技を続けてやってたのは馬鹿っぽく見えたよね。彼はプロフェッショナルとしてそれには関わらなかった。

ポール　ある日、僕らはメリルボン駅から電車に乗った——そこが撮影の始まりだ。制服を着た女子学生の役でモデルが出演していて、僕らはクラクラしたよ——ジョージはそのひとりと結婚さえした。パティ・ボイドとね。

すごい1日だった。大勢のファンが駅になだれ込んできて、電車がファンを残したまま出発するシーンを撮影し、それから僕らは残りの撮影を続けた。電車が僕らを乗せて行ったり来たりして、撮影は進められた。

ジョン　電車のシーンは、今では少し照れくさい。映画を見る人にはあまりわからないと思うけど、すべての動作がすごく意識的なことが、自分たちにはよくわかる。僕ら、互いに他のメンバーの方を見るようにしているんだ。ポールは、自分が喋っているところを僕に見られると照れるんだ。それは僕も同じで、ポールもそれはわかってる。大方の映画には、緊張してるシーンがひとつやふたつはあるものだ。たとえばラスト・シーンとか——それを撮った次の日に最初の場面を撮ったりすることもあるんだけど、僕らはほとんど順番どおりにやったよ。僕らが最初にやったシーンは電車で、僕らは終始メチャクチャ緊張していた。

俳優じゃないんだから、あんなものだろう。僕らに演技ができないことは監督にも僕らにもわかっていたはず。だから監督は、僕らの隙を突くようなことをしなければならなかったんだけど。ただ、映画では何度も何度も同じシーンの撮影を繰り返さなければならないから、それが不可能なんだ。でも彼はすべての力を発揮した。数分間の自然なシーンは、実に際立っているよ。1964年

僕らはいつも、カメラ・ワークをリアルに、もっとリアルにと心がけていた。結局それはできなかったけど——でも映画は完成した。あれはそんな映画なんだよ。それで問題ない。他のロック・ムービーよりはましだよ。1970年　最高のシーンは、喋らないでただ走っていればよかったところ。あそこは楽しかった。僕ら全員、あの広場で気が狂ったみたいに飛び回っているところが好きなんだ。あそこはピュアな部分だから。監督に、自由にやっていいって言われたんだ。

僕らは、歌がいきなり始まるミュージカルは好きじゃなかった——突然"歌でも歌おうか"なんてのは——避けたかった。あれは、曲の入り方がぎこちなかったと思う。映画の中で、僕が"さあ、みんな。ここらでショーを始めないか"というアメリカのミュージカルの決まり文句を言うところがある。もともとはジョークのつもりで入れたんだ。昔のポップ映画では、その文句が必ず使われていたってノーマン・ロッシントンが言っていた。たいてい荒野の真ん中で、誰かが"俺にいい考えがある。さあ、みんな。ここらでショーを始めないか"と言うらしい。そういうのを入れたつもりなんだけど、狙いはハズした。本気で言ってるように見えるんだ。ギャグのセリフで落としてみんなにジョークだと伝わり、そこで曲に入る、というのを考えてたんだけど。1964年

ニール・アスピノール　ノーマン・ロッシントン——チビのノーム——は僕を演じた。ノームは好きだ。いい奴だよ。彼は、役柄について僕には話さず、ただ台本どおりにやった。でも少し戸惑ったよ。現実とはほど遠かったんだ。

ビートルズにとって、映画は6週間の大仕事だった。彼らは何でもさっさとやったけど、映画を撮るだけではすまなかったんだ——作曲もアルバムのレコーディングもあるし、関連する仕事もいろいろあったから。

ジョンとポールはいつも曲を書いていたけど、14~16曲すべてがすぐレコーディングできる状態だったわけじゃない。いくつかは準備できていたけど、あとは同時進行で書いていた。水曜日にスタジオに入って1曲、金曜日までにあと2曲書かなきゃならないというノルマだったんだ。飛行機の上でも、ホテルの部屋に何日かこもっている時も、プール・サイドでもどこででも、彼らは年中作曲していたよ。いつも手元にギターを置いてたんだ。

ジョン　ポールと僕は、映画用の曲作りを楽しんだ。正直、全部書き上げるのは時間的に絶対無理だと思ったこともあったけど、パリにいる時、なんとか2曲仕上げたんだ。そしてアメリカで3曲、マイアミ・ビーチで日光浴をしながら書いた。僕がすごく気に入ってる曲が4つあるんだ。「キャント・バイ・ミー・ラヴ」、「イフ・アイ・フェル」、「アイ・シュッド・ハヴ・ノウン・ベター」(恋する二人)——オープニングの電車の場面で流れるハーモニカを使った曲だよ——と「テル・ミー・ホワイ」、映画の最後に出てくるシャッフルの曲だ。1964年

ポール　注文で曲を作ることはなかったから、普通はあんな風にはしないんだ。いつもは、ジョンと僕が座ってて、何か思いついたら曲を書いていた。だけど、ウォルター・シェンソンが、ジョンと僕にオープニングとエンディングのクレジットに使う曲を書いてくれないかと言ってきた。考えたけど、「ア・ハード・デイズ・ナイト」というタイトルの曲を書くのはちょっと馬鹿らしいと思えた——その時は変なタイトルと思ってたからね。でも少しすると、大変な1日の夜だった、1日中働いた、彼女のもとに帰ったらとても元気になった……というアイディアが浮かんできた。そして、それを発展させて曲を作ったんだ。

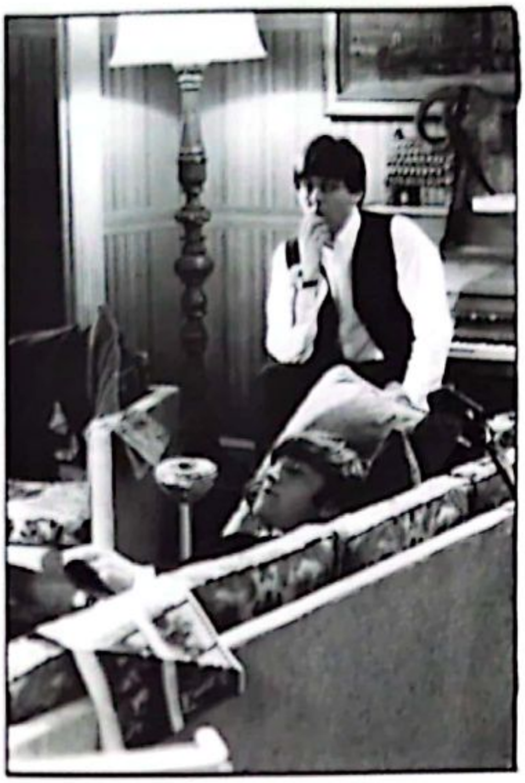
ジョン　車で家に帰る途中、ディック・レスターが、リンゴの言った言葉からタイトルを考えた。僕はそれを『イン・ヒズ・オウン・ライト』で使っている。それは、リンゴが何気なく言った言葉だ。リンゴ特有のおかしな間違い言葉——リンゴイズム——のひとつで、リンゴは笑わせるつもりで言ったわけじゃなく、ただ自然に口から出てきたものなんだ。それでディック・レスターが"あのタイトル「ア・ハード・デイズ・ナイト」を使おう"と言った。その翌朝には、僕はその曲を作ってきたよ。1980年

CamScannerでスキャン

ジョージ　リンゴはいつも、たぶん文法的には正しくないフレーズを口にするんだ。僕らみんな、よく笑っていたよ。いつだったか、ルートンからリバプールまでリンゴのゼファーでM1高速を走って帰ったことがあった。車のボンネットがちゃんと閉まっていなくて、風でボンネットが吹き上がり、前が見えなくなってしまった。全員"アーーー！"と叫んだんだけど、リンゴは落ち着いてこう言った。"心配しないで。すぐにみんなと安全なベッドに戻してあげる"。

リンゴ　今は昔ほどじゃないと思うよ。前は、ひとつのことを喋っている間に、他のことが頭に浮かんできてどんどん出てきちゃったんだ。前に、昼間ずっと仕事して夜になっても終わらなかった時、まだ昼間だと思っていた僕は"たいへんな日……"と言いかけて、あたりが暗くなっていたのに気づき、"の夜だった！"と言い直したんだ。

「トゥモロー・ネバー・ノウズ」も僕が言ったことだ。どこから出てきたのかは自分でもわからない。"Slight bread"（かすかなパン）というのもそうさ。"かすかなパン、ありがとう"というやつ。ジョンはそれが一番好きだった。彼はよく僕の言葉を書き留めていたよ。



ジョージ・マーティン　私が映画音楽を書いたのは、あれが初めてだった。監督もミュージシャンだったのは、私にとって幸いだったね。私たちは、通常のレコーディングとまったく同じ要領で映画用の曲をレコーディングした。ディックはすでにレコーディングずみの曲もたくさん使った。たとえば、映画で2回使われた「キャント・バイ・ミー・ラヴ」などだ。

BGMのひとつとして「ジス・ボーイ」をインストゥルメンタル・バージョンに編曲し、リンゴが川辺をさまよう場面に使った。これに「リンゴズ・テーマ」（リンゴのテーマ）と名前を付けた。この曲は、アメリカのオーケストラ・チャートにランク・インした――多少なりとも嬉しかったね。これは、4トラックを使ってレコーディングとミキシングをした曲なんだ。

ポール　この映画の製作を担当したのはアメリカ人なんだ。これはアメリカでの集客には良かった。世界的な成功にもつながった。だけど、アメリカで封切られる時に、1個か2個、セリフが変えられたんだ。僕らはそれについてかなり議論した。アメリカの観客にはイギリス人が使う一部のフレーズが通じない、とのことだった。僕らは言った。"冗談でしょ？　カウボーイ映画でアメリカ人が「Yep……」（イエス）と言うけど、僕らははっきり意味がわかるよ。子どもだって見当がつくよ"。僕らの言葉だってそれと同じだろ。そんなことに関係なくアメリカ人たちは、映画を何度も何度も見に行ってくれたけどね。僕らはこんな手紙をもらったことがある。"私は「ア・ハード・デイズ・ナイト」を75回見ました。この映画が大好きです！"って。

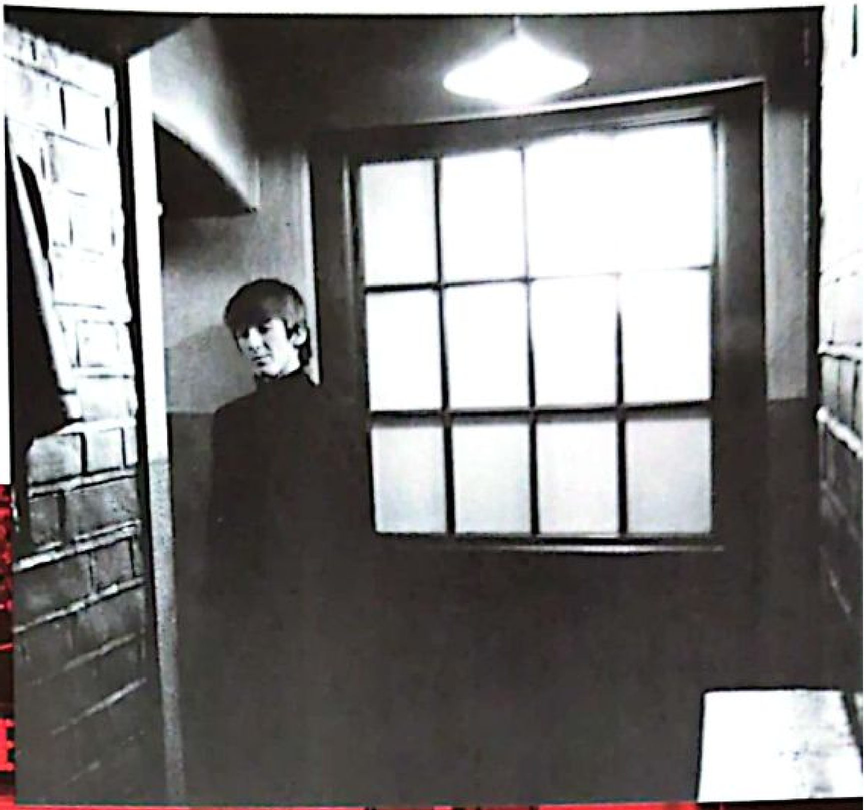
ジョン　映画を初めて見た時は最悪だった。なぜなら、プロデューサーと監督とカメラマン、それに関係者全員が一緒だったからね。大画面に映っている自分を初めて見る時には、"何だよ、あの耳は。それにあの鼻。ああ、髪の毛が立ってる……"と自分の姿が気になってしょうがなかったよ。僕ら全員そうだった。映画が終わった時には、何が何だかわからず、げっそりしたよ。1964年

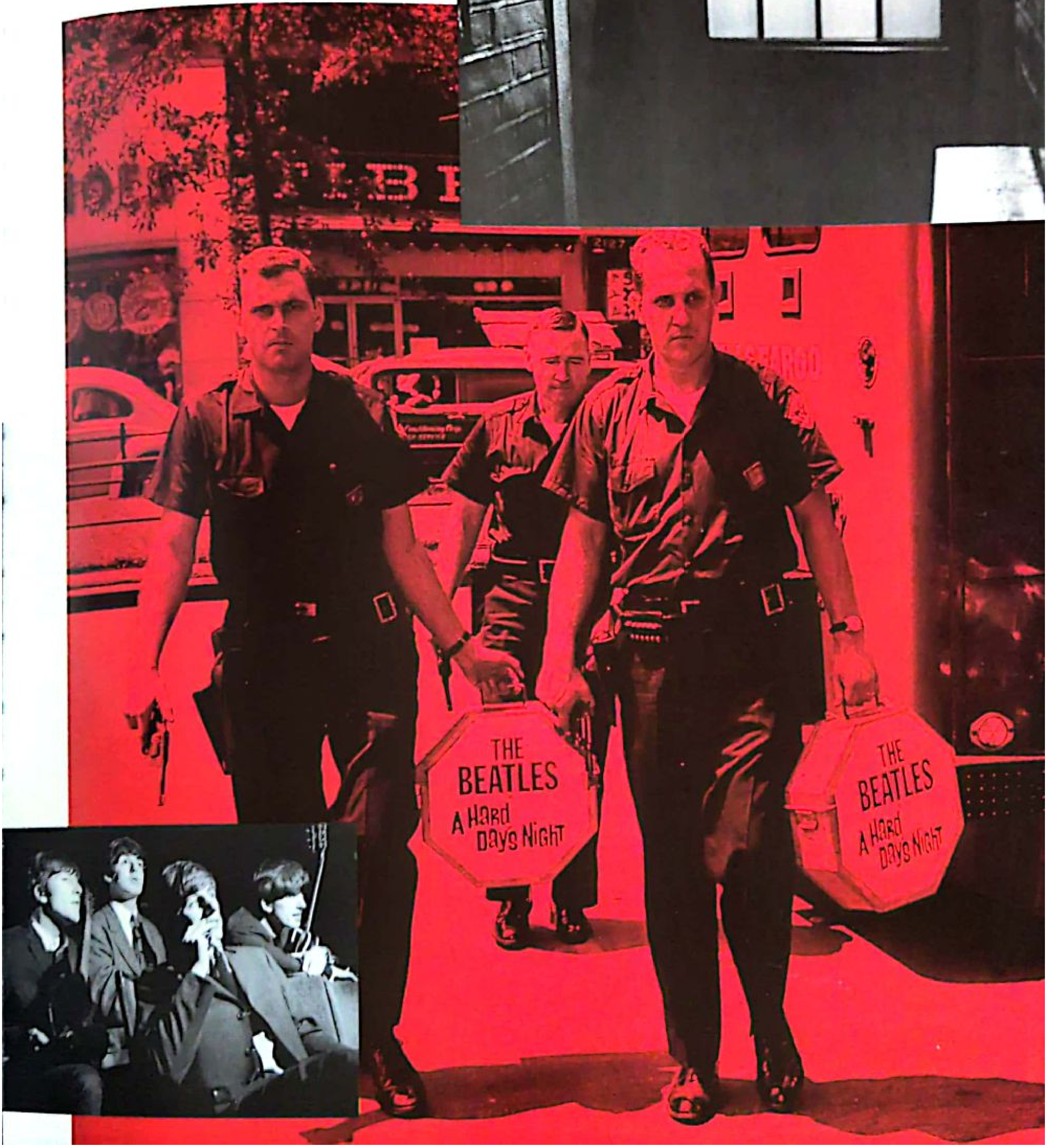
ポール　映画の契約がどうだったのか詳しく知らないけれど、僕の記憶では、僕らはロイヤリティはもらわなかった。一時払いの報酬をもらったんだ。今思うと、低率でも歩合制でもらった方がよかったよ。僕らの会計士は3%とっていた。僕らは報酬ベースだった。でも誰もまったく気にしてなかったんだ。"僕らはアーティストだ。うしろは振り返らない……"。僕らはただ"仕事をとってきて、ブライアン。できるだけいい条件で契約してきて"とだけ考えていた。

一度だけ、ブライアンに不平を言ったことがある。ローリング・ストーンズがデッカと結んでる契約の方が、僕らとEMIの契約――レコード1枚あたり6ペンスぐらい――よりも条件がいくらかいいって聞いたんだ。僕はブライアンに苦情を言ったら、彼が傷ついたのを覚えている。僕にはそれが教訓になったんだ。二度とそんなことを言ってはいけないってね。彼のやってることはもっともだったし、しかも彼は僕らのためにあれほどいろんなことをしてくれたのに、僕は1～2ペニーのことで文句を言ってしまったんだ。

リンゴ　映画の計画は、僕らが実際に関わる数カ月前から始まっていた。そして、完成した時には僕らはその時よりずっとビッグになって、映画が公開された時には超大物的な存在になっていた。

「ア・ハード・デイズ・ナイト」が公開された時、いやその前でさえ、僕らは"僕らの人気は爆発し、いろんな国を制覇したし、レコードの売上げも多い。それにファンにも愛されているんだ!"と感じていた。でも、僕らは、"明日終わるだろう"とも"永遠に続くだろう"とも、考えなかった。現在進行中のことしか頭になかったんだ。将来の計画なんて立てていなかったし、僕らは絶好調で、全員が20代初めで、波に乗って突き進むだけだったんだ。





CamScannerでスキャン

ジョージ 帰国してすぐ、僕は21回目の誕生日を迎えた。ちょうど『ア・ハード・デイズ・ナイト』の撮影が始まろうとしていた。3万通のカードとプレゼントをもらったよ——まだ全部は開けていないんだ。ミスター・エプスタインにもらった腕時計は、今でも着けているよ。

ジョン 僕の21歳の時は、[illegible]とカードをくれたよ。1964

デレク・テイラー 『デイリー・エクスプレス』から、ジョージのバースデー・パーティの様子を取材するように言われて、EMIスタジオで、ジョージが21歳の誕生を祝う記者会見に出席した。プレス関係者はパーティには招待されなかったんだ。"ゴメン、ごめん、君はファミリーの友だちなんだけど……"。ジョージのコラムを書いているだけでは、プライベートなパーティに出席する資格はなかったんだ。

ジョージ ジョンの『イン・ヒズ・オウン・ライト』が、3月に出版された。ジョンのジョークと漫画的な絵や挿絵のコミックなんだ。その一部は、学生時代に書いた『デイリー・ハウル』がもとになっている。大部分は新しく書いたよ。この本は『ア・ハード・デイズ・ナイト』にも出てくるんだ。本の宣伝としては最高だね——ヒットした映画に映ってるなんて。

ジョン 別に大した本じゃない。好きなものは好き、嫌いなものは嫌い。ただそれだけさ。思いついたことをその辺の紙切れにでも書いてポケットに押し込んでおくんだ。いっぱいになったら本になるってわけ。本を書こうと思って書いたことはないね。1964 ビートルズじゃなかったら出版なんて考えもしなかったし、無一文で、ただ書いては捨てていただろうね。ビート詩人になっていたかもしれないな。1964 成功すると自信がつく。言葉にしづらい感じだけどね。でも一度成功したら、手放したくなるよ。1964

あれは僕のユーモアのスタイルで、学生時代からなんだ。ルイス・キャロルと(ジェームズ)サーバー、それにイギリスのイラストレーターのロナルド・サールが好きで、11歳ぐらいの頃から、この3人に興味を持っていた(僕の絵が"サーバライズ"したのは15歳からだったと思う)。

僕は、くだらないジョークの中にほんとの気持ちを隠していた。『イン・ヒズ・オウン・ライト』のようにね。十代の頃からそうだったんだ。いつも正直な気持ちをミミに隠していたんだ。1970 14歳ぐらいの時、英文学の本——チョーサーか誰かのもの——を渡された。僕らはみんなこんなのはクズだと思った。先生がその本を読み出すと、みんなうんざりした。授業が終わると、僕はその本を真似た文を書いて自分や友達を笑わせたりしていた。1964

ポール ミミおばさんの家に行くと、ジョンはよくタイプライターの前に座っていた。リバプールでは滅多にない光景だった。タイプライターを使ってる友だちさえいなかったぐらい[illegible]

たよ。いや、[illegible]タイプライター[illegible]、僕も[illegible]

ジョン [illegible]

[illegible]に使ったんだ。1964

本の大部分をタイプライターで書いているんだけど、[illegible]。ストーリー[illegible]重要だと思ったことはない。[illegible]重要なのは、ストーリーと言葉の響きなんだ。1964

[illegible]本を出版することになった時、[illegible]。1964

原稿の大部分は、ペーパーに書いた。[illegible]『不思議の国のアリス』や『ウィニー・ザ・プー』(くまのプーさん)みたいにね。[illegible]いただきたい"と言ったんだ。

[illegible]。1964 僕は本を書くのが好きだ。[illegible]。

僕は緊張してたんだ。[illegible]。1964 [illegible]これはすべて僕ひとりの作品だ。1964

ブライアン・エプスタイン 本の成功を記念して、ジョンがフォイルズ書店の昼食会に主賓として招かれたが、僕はスピーチをしなかった。[illegible]。

昼食のあと、僕は起立してマイクを握り、こう言った。"[illegible]みなさん、幸せのようなお顔をしていらっしゃる"。

There was no reason for Michael to be sad that morning, (the little wretch); everyone liked him, (he sod!). He'd had a hard days night that day, for Michael was a Cooky Watchtower. His wife Bernie, who was wel

[illegible] 旅の[illegible]を味わったあと、タヒチへ遊びに行った。1963年　タヒチは人間
[illegible]、日常[illegible]　だけど僕は興味なかった。酒場に[illegible]
[illegible]くしまうんだ。ジョージと　緒に3週間そんなことをやっていた
[illegible]、次の日には[illegible]。いったい何だったんだ？
[illegible]　僕は疲れただけだった。1963年
[illegible]気はないよ

1964年当時は、1日が1週間分の感じだった。

ジョージ　1964年当時は、[illegible]僕は、パリスに行った。その頃僕らは有名になっ
[illegible]、[illegible]ずに飛行機に乗るのは不可能だった。

[illegible]　ビートルズのパリ[illegible]は、最大限プライベートにしなければ
[illegible]　僕らはある会社を雇い、若い男4人とそのガールフレンド3人、および
[illegible]、[illegible]説明した。また、男たちはパリを旅行し
[illegible]　[illegible]ずつが合流する2台の目的地も
[illegible]

[illegible]はなかった

[illegible]は電話は使わず、僕ら8人はコード・ネームにして、ミスター・マッカー
[illegible]その同伴者は、ミ
[illegible]ミスター[illegible]スター・ストーン。[illegible]ミスター・トスリーで、その
[illegible]、ミスター・ハーグリーヴスで、そのガールフレ
[illegible]はミスター・[illegible]はヴァー
[illegible]、マニングとストーン、アッシュクロフトとコッククロフトはヴァー
[illegible]、トスリー夫妻、ハーグリーヴス、ボンドはタヒチに行く。
[illegible]過ごし、[illegible]

ジョージ　僕らは事業機でアムステルダムに行き、バンクーバー経由ホノルル行きの飛
[illegible]　バンクーバーで給油の間20分飛行機を降りた。
[illegible]長いフライトのあと、[illegible]ネットワーク全体に僕らの情報
[illegible]には、アメリカのディスク・ジョッキー・ネットワーク
[illegible]いた。
[illegible]ためにホノルルに2日ほど滞在した。ワイキキから離れる
[illegible]人のいない海岸を目指し、車で島の北部へ行った。それからタヒチ
[illegible]、[illegible]していたヨットを待った。2軒ほど店を覗き、ジョンと僕は、
[illegible]の防水コートを買ったんだ。
その夜はボートの上で眠り、次の朝、起きたらすぐにセイリングを始めた——だけど、

港を出たとたん、すごく荒れた水路に入ってしまって。エンジンを止めるわけにはい
かないし、ボートはペンキで塗装したばかりだし、ディーゼルとペンキの匂いがひどい
し。波のせいで船室に降りることもできず、ずっとデッキにいた。まもなくシンシアと僕
は気分が悪くなり、あちこちで吐いちゃったんだ。その1日はとても長く感じた。日が沈
む頃、やっと次の島に停泊できたけど、すごく気分が悪かったからすぐベッドに入って
寝てしまったよ。
翌朝目を覚まし、船窓の外を見た。最高の眺めだった。それまではとんどイギリス
から出たこともなく、熱帯はまるでこの世のものとは思えなかった。海面はおだやか
で、遠くには山やココヤシの島も見える。島民人5、6人がアウトリガー・カヌーを漕い
で、静かな海の上を滑っていき、僕は心を奪われたね。

ジョン　タヒチに行くにはホノルルを経由しなければならなかった。タヒチではうまく
逃げおおすことができた。ボートに乗ってしまえば、そばには誰もいない——シドニー
から来た男が唯一の例外で、僕らから話しかけなかったのに、彼は泳いでついてき
て、"あなたたちのボートに乗ってもいいですか"と聞いてきたんだ。僕らが"ノー"と
言うと、なんとまた何マイルも泳いで帰っていったよ！1964年

ジョージ　泳いだり潜ったり、島から島へとセイリングしたり、とても楽しかった。ジョ
ンは時々「スパニアード・イン・ザ・ワークス」を書いていた。テーブルの前に座ったジ
ョンが原稿を書いて大声で読み上げていて、僕も短いフレーズをたくさん思いついた
のを覚えている。誰かが何か言うと、それが、本になったんだ。

ジョン　ある言葉がひらめいた時、文章にしてみたんだけど、どうもしっくりこなかっ
た。そんな時ジョージに、"Ⅲy"を別の言い方で言うと？と聞くと、彼は何か提案して
くれた。僕は「ザ・シンギュラージ・エクスペリエンス・オヴ・ミス・アン・ダフィールド」を書
いていた。シャーロック・ホームズの1節だ。それまでに書いた中で一番長い文章だっ
た。どこまでいけるか試してたんだ。それだけで本が1冊できるぐらい書き続けようと
したんだけど、できなかった。
コナン・ドイルの本は、子どもの時に1、2冊読んだことがあったけど、借りたボートに
はドイルの作品集（半分はフランス語、半分は英語で書かれていた）が置いてあった。
1963年　タヒチと周囲の島々——すべてすばらしかった。僕は読書に熱中し、好き嫌

CamScannerでスキャン

いに関係なく、置いてあった英語の本は全部読んだんだ。シャーロック・ホームズのストーリーがすべて収められているマニア向けの分厚い本も読んだ。どの話もストーリー展開が同じだと思った。1968年　それをやってみた。僕はそのすべてをひとつにまとめてみたんだ。1968年　つまり、タヒチで3週間シャーロック・ホームズ漬けになったあと、「シャムロック・ウォムルブズ」を書いたというわけ。1968年

ジョージ　シンシアとパティは、変装に使った長い黒髪のかつらを持っていた。ジョンと僕は、そのかつらと防水コートを着けて、島の人々を改宗させるために海から出てきた伝道師（ジョン）と島の人々を撮した短い8mm映画を作った。

バカンスは最高だったけど、4週間もすると飽きてしまった。タヒチのはるか彼方まで来ていて、遠路ボートで戻ることを考えるとうんざりしたので、飛行艇でタヒチに戻り、1日過ごした。それからニュージーランド発のパン・アメリカン707に乗ってロサンジェルスまで行ったんだ。飛行機の乗客は、僕ら4人だけだったから、かなり広い空間を占有し、床で寝転がったり眠ったりしたのを覚えている。ロサンゼルスでは、バスに乗ってサンセット・ストリップ、ビヴァリー・ヒルズで有名人の邸宅を回った。"左手に見えますのが、ジェーン・マンスフィールドの家でございます"みたいにね。

ロンドンに戻ったのは、デンマーク、オランダ、香港、オーストラリア、ニュージーランドのツアーに出発するわずか1週間前だった。僕らは、またすぐに、タヒチの目と鼻の先に戻ったわけだ。

リンゴ　ポールと僕はヴァージン諸島に行った。すばらしかったよ。おかしいのは、僕らにジョンとジョージのパスポートが渡されて、彼らには僕らふたりのが渡されたんだ。"ああ、ビートルズのひとりか。どれでもいいから渡しておけばいいさ。どうせ同じなんだから"ってことでね。僕らはリスボンに着いて、ホテルにチェック・インした。ポールは変装してたんだけど、フロント係が疑わし気にパスポートを見て、"これは誰ですか？　あなたではありませんね"って言ったんだよ。

僕らは30フィート（約9．1メートル）のモーター・ボートを借りた。キャプテンとその妻ともうひとりが乗船員だ。豪華なボートではなかったけど、僕らはクルージングを楽しんだよ。僕はモーリーンを連れ、ポールはジェーン・アッシャーを連れていた。ジェーンは日焼けはしないようにしてたけど、ポールは1日で日焼けしてしまい、ひと晩中悲鳴をあげていた。僕らの寝室は通路の両側にあり、仕切りはカーテンだけだったから、何でも聞こえてきたんだよ。

僕らは以前にもポールとジェーンと一緒にギリシャに行ったことがある。しばらくの間僕らは相棒だったってわけ。モーリーンと僕は、1966年に、ジョンとシンシアと一緒にトリニダード・トバコに行ったこともあるんだけど、なぜだかジョージと一緒にバカンスに行ったことは一度もないんだよ。

CamScannerでスキャン

リンゴ　1964年4月に、僕らはなんとアメリカのヒット・チャート1位~5位を独占するという快挙を果たした。

ポール　1964年6月にワールド・ツアーが始まり、スカンジナビア、オランダ、香港、オーストラリア、ニュージーランドを回った。リンゴは扁桃腺炎で入院していて、出演できなかった会場があるんだ。コンサートはキャンセルできないから、代役を立てることになり、ロンドンのセッション・ドラマー、ジミー・ニコルに決まった。彼はよくやったよ――もちろんリンゴと同じってわけにはいかないけど、十分がんばってくれたよ。

ジミーにとっては大変なことだったんだ――時的にすごい名声を押しつけられ、終わったとたんに有名じゃなくなるんだ。"僕はリンゴの代役をやったことがあるんだ!"ってことだけは残る。でも彼はたいしたものだったよ。そしてリンゴは、回復してオーストラリアから合流できたんだ。

リンゴ　僕の病気は、ほんとに一大事だった。あの苦しさは、よく覚えてるよ。咽喉がすごく痛み、ゼリーやアイス・クリームだけで食事をすました。当時は煙草も吸っていたから、我慢するのは、かなりきつかったね。

彼らが僕抜きで出発するのは、すごく変な感じだった。彼らはジミー・ニコルを連れていった。僕は思ったよ、"もう僕は彼らに愛されてないんだ"って――そんなことが頭に浮かんだんだ。

ジョージ　もちろん、ジミーには感謝してるけど、やるべきじゃなかったんだ。重要なのは、ファブだということ。ローリング・ストーンズのツアーで"すまない、ミックが来られないんだ"――"問題ない、2週間、誰か代わりに来てもらおう"なんて考えられる?　あれはまずかったよ。僕は理解できなかった。当時、自分のことを自分で決められなかったのは、ほんとに嫌だった。"君たちは出発しなさい"――"でもリンゴも一緒じゃないと"――"いや、悪いけど、別のドラマーとやるんだ"と、こんな風だった。もっと年をとってからなら、反対して"行かない"と言えたと思う。当時僕は若すぎて主張すべき物事がよく見えてなかったんだ。

ジョージ・マーティン　彼らはもう少しでオーストラリア・ツアーをやめるところだった。ジョージはとても誠実で、"リンゴがいないなら、そのグループはビートルズじゃない。どうしてそんなことをしなきゃならないのか、僕にはわからない。僕は行かないよ"と言うんだ。ブライアンと私は、力の限りを尽くして、ジョージが行かなければみんながっかりすると彼を説得した。

ジミー・ニコルはとても優秀なドラマーで、リンゴのパートをよく覚えてくれた。もちろん、ビートルズとのリハーサルは必要だった。彼らはアビイ・ロードに来て全曲通して練習し、ニコルは彼らと知り合った。彼はすばらしい仕事をしたそのすぐあとに、名もなき人にもどった。

ASSOCIATED ARTISTES INTERNATIONAL
431-432, PRESIDENT HOTEL
KOWLOON, HONG KONG.

ジョン　ツアー中のちょっとした出来事さ。「サテリコン」だよ! 写真の僕は、ひれ伏してアムステルダムの売春宿から四つん這いで這い出てきて、"おはよう、ジョン"と声をかけられている。そういうところに行くにも警察の護衛がついていたんだ。大きなスキャンダルを起こさせないようにするためさ。僕らは演奏するために行ったんだ――目的もなく行ったわけじゃない。1970年

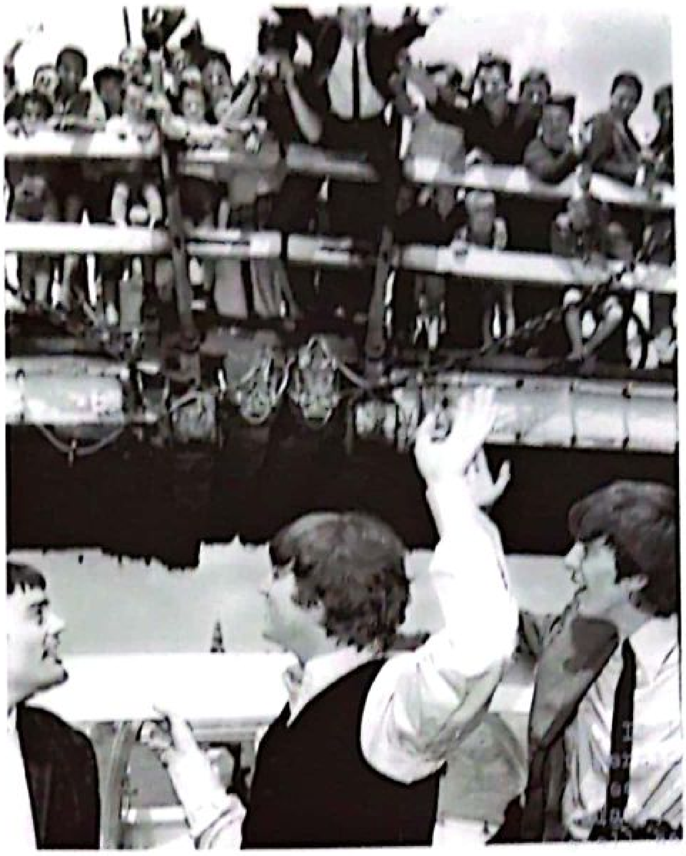
確かに(女とは)遊んだよ。おもしろい子たちだった。当時はグルーピーとは言わなかったんだ。どう言ってたか忘れちゃったな。"スラッグ"だったかな。1975年

ポール　このツアーも、大部分はいつもと変わらなかったけど香港は別だった――みんなイギリスの軍人で、それがすごく変だったし、香港ではアジアのファンを期待していたんだけど、軍がまずチケットを入手していたんだ(香港の人はビートルズの名前も知らなかったのかも)。僕らは、ひと晩で各自2着ずつスーツを作らせ、ケープも作らせた。色落ちがひどく大失敗に終わったけどね。

ニール・アスピノール　アムステルダムでケープを着ている学生を何人か見かけたんだ。僕は売っている場所を探し、いくつか買ったよ。彼らは、24時間仕上げの仕立屋に頼み、さらにいくつか作らせた。のちにビートルズが『ヘルプ!』で使ったケープは、それをもとに作ったものだ。

ジョン　初めて見たのはアムステルダムだった――運河を通行中にケープを着ている人を何人か見た――だけど僕らは欲しい色のケープが買えなかった。――グリーンしか買えなかったんだ。だから、香港でコピーを1着作ってもらったのさ。1964年

ジョージ　運河でボートに乗っていた時、気分よく手を振りながら人混みを見ると、最高にかっこいいマントを着ている男がいた。マルに頼んで、彼がどこで買ったのか探し



てもらった。マルは、ボートを飛び降りたか泳いでいったかは知らないけれど、30時間後にマントを持ってホテルに帰ってきた。それは、あの男から買ったものだった。そのあと香港に行った時、全員でマントのコピーを作ってもらった。だけど、安っぽい材料を使ってあったので、シドニー空港で暴風雨に遭って色落ちしてしまった。

僕の記憶に残っている最高のフライトは、香港行きのフライトさ。ほんの数時間で"お席にお戻りください、まもなく香港に到着します"とアナウンスがあった。"こんなに早く着くはずがない"と思った。僕らは、床の上に座って約30時間も酒を飲んだり、プレルーディンを服用したりしていて、飛行時間が10分間ぐらいにしか感じなかったんだ。

この手のフライトでは、いつも僕らはまだ薬をやっていた。これが、飛行機の旅を乗り切るのに最高だ。なぜなら、僕らは誰とでもウィスキー&コークを飲んでいたからね。たとえ相手が悪魔でも――そして魔法でやっつけてしまうんだよ!

ジョン　香港の新聞では"ビートルズ、悲鳴をあげる客に負け戦"と書かれた。他に比べれば、まるで静かな観客だったんだけど。1964年

ポール　香港では、小さめの場所での単調なステージだった。観客は行儀がよく、軍隊のように見えた。僕らは演奏したけれど、あまり楽しくはなかったと思う――少しは僕らの演奏も聴こえていたと思うよ。

ジョン　オーストラリアでの僕らの人気を聞いた時、とても信じられなかった。もちろん、行くのは楽しみにしていた。フロリダでは水上スキーがとても楽しかった。オージーにはすばらしい海岸があると、みんなが言っているし。

僕は、仕事と私生活は切り離すのがいいと思ってたんだ。シンシアをオーストラリアへ連れていかなかったのは、スケジュールもかなりきつそうだったから。でも、こういう旅を人生に一度は経験してもらおうとアメリカには連れていったんだけど。オーストラリア・ツアーにはおばさんを連れて行った。ニュージーランドにおばさんの親戚がいたからね。僕は会ったことがないんだけど。1964年

ポール　ジョンの一族の女性たちは、とても強かった。ミミははっきりしていて、言葉を濁すことがなかった。彼女は、ジョンの悪童ぶりを知っていたから、いつも少しジョンに目を光らせていて、彼にいろいろやらせていた――"子どもはいつまでも子どもよ"。ミミは、ジョンを実の息子のように愛していた。でも、ジョンはよく叱られていたね。それに"ごめん、ミミ"って従順だったんだ。ミミはどこにいても自分らしさを保ち、たとえ脅されても考えを曲げるような人ではなかった。彼女は1991年に亡くなった。

デレク・テイラー　オーストラリアは、僕にとって初めての大規模なツアーだった。すべてがとても新鮮だったけど、今となっては、あんな騒動に自ら進んで加わるなんてでき

ジョージ
僕がテレビを見ていたら
"なぜ彼らは出てきて
手を振ってくれないのでしょうか"
と言っていた。
伝えようがなかったんだ
乾いてるズボンが1着もなかったなんて!
1964年

っこないと思ってた。どんな状況になっているのか、僕はまったく考えていなかった。
ビートルズのメンバーは、僕が一緒に来たことを喜んでいてくれていたようで、僕によくしてくれた。それが救いだったよ。彼らの広報担当はデレク・テイラーで、仕事のできる人だったけど、当時は周囲にたくさんのスターがいたので、とても手が回っていなかった。ブライアンはビリー・J・クレイマー、ジェリー&ザ・ペースメーカーズ、シラ・ブラックなどを抱えてたんだ——当時、彼らはだれもがNo.1が目前でとても忙しい時期だった。

ジョン　PR担当は、いつもひとりだけなんだ。ブライアンはアーティスト1組につきひとりしか割り当てず、彼らが一緒に仕事をすることはない。デレクとは1年前に知り合った。彼は、初めて会った時から意気投合できる人だった。1964年

ニール・アスピノール　シドニーに着いた時、土砂降りの雨が降っていた。飛行機を降りたビートルズは、群衆に姿が見えるように平台トラックの荷台に乗せられたんだ。彼らは傘を差し、香港で作らせたケープを着ていた。運転手は時速1マイル(約1.6キロ)で走行していた。ジョンが身をかがめて"もっと速く、もっと速く!"と言い続けても、運転手は速度を上げなくてね。僕が"もっと速く——雨がすごいんだ"と言うと、彼はこう言ったんだ。"あの子たちは、彼らに会いたくて24時間待ってたんだよ"。
この大きなオーストラリア人運転手は、何があってもそれ以上速く走るつもりはなかったんだ。ホテルに着いた時には、みんな青くなっていた。ケープの色が落ちて、すでに染み通ってしまったからさ。彼らは、青い染料で染められた古代のケルト族の戦士みたいだった。

ジョン　僕らはヒステリックに笑ったよ。すごくおかしいじゃないか。オーストラリアまで来て、大型のバンに乗り、ずぶ濡れになるなんて。僕らは、そのうち晴れるだろうと思った。僕らが濡れたのはたった15分くらいだったけど、ファンのみんなは何時間も濡れてたんだ。僕たちに会うためにものすごい雨風の中で立って手を振っていて。すごいよ、ほんとにすごい。僕はタヒチ以外でこんなに激しい雨を見たことはないよ(タヒチでは2日間雨が降り続き、この世の終わりかと思った)。1964年
オーストラリアは楽しかった。初めてアメリカに行った時みたいにね。アメリカでは、どのチャンネルにも僕らが出ていて、レコードは10枚チャート・インしていた。この時もそうだった。おかしいのは、どこの国よりも多くの人が僕らに会いに来たんだ。オーストラリアの人全員が来ていたんじゃないかと思うくらいだ。1974年
オーストラリアを発つまでに百万人くらいの人に会ったに違いない。行く先々でたくさんの人に会い、みんな悲鳴を上げていたけど、警備がしっかりしていて怪我をした人は誰もいなかったし。1964年

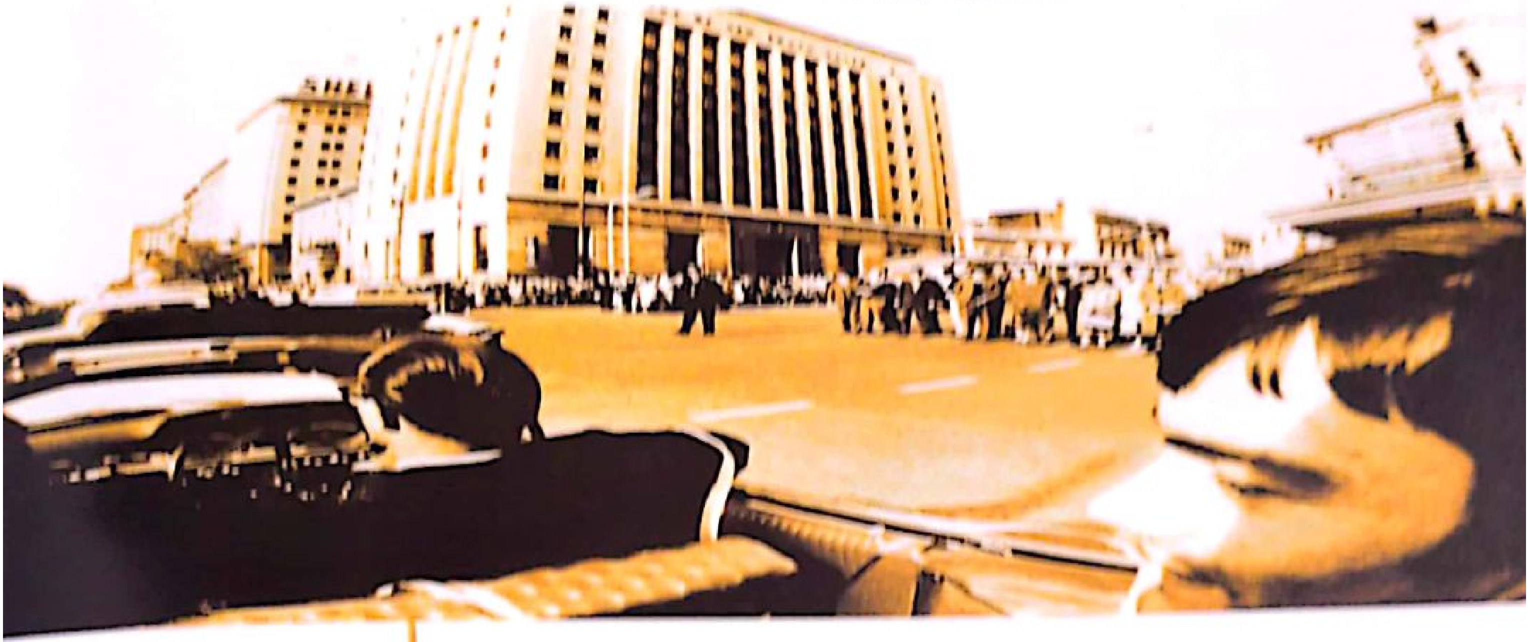
ジョージ　僕はバルコニーから手を振るのが嫌いだった。"手を振って"と彼らが言う。"君が行って、手を振らなきゃ"っていいながら、デレクはよく僕の代わりにホテルの窓から手を振っていたよ。
ポールは、手を振ったりサインを書いたりするのが得意だった。僕らはよく車の中で待たされた。"来いよ、ポール、もう行こう。あれ、どこ行った? なんだ、あんなとこにいる"——"ああ、いいよ。名前は? ベティだね。ベティへ、愛を込めて、ポール"——"早く車に乗れよ。出発しようぜ!"。

ポール　アデレードの街に着くまでに30万人の人に歓迎された。まるで英雄の凱旋みたいだった。ジョージも手を振っていた。僕らがタウン・ホールに来ると聞いてみんなが集まってきた、という感じだった。もし一夜にして突然そうなったのなら、僕らは自惚れてしまったかもしれない。でも、僕らは階段を一段ずつ昇ってきていたから、そうはならなかった。こんなに多くの人が来てくれて、僕らはとても嬉しかった。
僕らはまだリバプール時代のルーツをそれほど忘れていなかったので、あるパレードに会いたくて街に出てきた時の気持ちや、それがどういうことかもわかっていた。だから、彼らの気持ちになって感じることもできたんだ。僕らはすべてを大事にしたんだと思う。少し大変だったけど、その時は疲れは感じなかった。
僕らは空港から街に直行した——リバプールで『ア・ハード・デイズ・ナイト』のプレミア・ショーをやった時と同じで、街には人があふれていた——僕らは、市庁に着いて車に向かって親指を立てて挨拶した。それから、市長と一緒にアデレードのタウン・ホールに行き、そこでも親指を立てた。リバプールでは問題ないんだ。みんな親指を立てる意味がわかっているからね——だけど、それはオーストラリアでは下品な表現だったんだよ。

リンゴ　他の4人と離れているのは嫌だった。僕は彼らを追ってオーストラリアに飛んだ。空港に人はいたけど僕はひとりきりで、無意識に彼らを探し回ってた。僕らはやっとメルボルンで合流できた。フライトは恐ろしかった。今でもそう——4時間くらい短縮されたかもしれないけれど、かなり長時間であることには変わりない。僕にとっては飛行機が精神病院みたいだったことを覚えている。
オーストラリアは素晴らしかった。もちろん、バンドに復帰できたのもすごくうれしかった——ほんとに素敵な瞬間だった。それに、彼らは香港で僕にプレゼントを買っておいてくれたんだ。

ポール　シドニーの天気は
あまりよくなかったね。
きっとマングースのシーズン
だったんだと思う。1964年

ジョージ 西海岸沿いにはマリファナがあったよね。



ジョン キーウィかと思ったよ。僕の靴を磨き始めたから。

CamScannerでスキャン

ジョン　メルボルンはアデレードと同じぐらい熱狂的だった。どちらも、過去最高と言っていいぐらいだった。僕らは役人の社交辞令の出迎えなんていらないんだ。そんなの期待してない。どうってことないからね。メルボルンではホテルの外に人だかりができていた。侵入してきた人もたくさんいた——そういうのは、だいたいバスルームで発見されるんだ。

僕らがスーツ・ケースに荷物を詰め込んでいると、窓をノックする音が聞こえた。僕は、メンバーの誰かが遊んでるんだろうと思って気にしなかったんだけど、ノックがやまないのでバルコニーに出た——そこには、いかにもリバプール人という男が立っていた。僕にはすぐどこから来た奴かわかったよ。8階まで上がってくる奴なんて他にはいないだろうから。この男——ピーター——は、入ってきて"やあ"と言った。僕も"やあ"と言った。彼は、排水管とバルコニーを伝ってここまでたどり着いた顛末を話してくれた。僕は彼に一杯勧めたんだ。その価値があると思ったからね。そして僕は彼を連れて他のメンバーに会わせた。みんなすごくびっくりしてたよ。冗談だと思ったみたいだ。1964年

ニール・アスピノール　道沿いに並んでいる群衆の中に、僕らに向かって叫ぶ人がいるんだ。"ブラックプールに行く時はビルによろしく言ってくれよ。僕はブラックプールから来たんだぜ"って。ビートルズは人だかりに慣れっこになっていた。オーストラリアに行く前のオランダで彼らがボートで移動した時には運河の土手に大群衆が集まったし、アメリカでも同様だった。

ジョージ　僕らは、群衆の写真を撮った——バルコニーやパレード・カーの後部座席からも撮った。すごくびっくりしたけど、ハッピーだったし、僕らがここでも人気があることがわかって、嬉しかったんだ。みんな"女王が来た時よりすごい人出だ"と言っていた。そりゃそうだろ、女王にはヒット曲がないもの。

ニュージーランドに行った時は、イギリスみたいだと思った——牛や羊がいて、デヴォンみたい。でも、その頃の僕らは刺激的なことを求めていていたから、ちょっと平穏すぎたけどね。

ホテルの部屋でフィッシュ&チップスと豆を食べながらテレビを見ていたら夜の9時頃に突然全部のチャンネルの放送が終わってしまったんだ。僕らは食べてたものをテレビに投げつけてやった。

ニュージーランドでの一番大きな出来事(もっとも、あまりいいことじゃなかった)は、サウンズ・インコーポレーテッドのドラマーが部屋に入れた女の子が、彼がパブに行った際に手首を切ろうとしたことだ。デレクがうろたえていたのを覚えているよ。通信社を通じてそのニュースが世界中に流れたんだ。"ビートルズのホテルで自殺未遂"ってね。

ジョン　今までで一番短時間で最高に楽しい歓迎だった。僕らはバルコニーに出て、群衆に向かって手を振った。するとマオリ族の人たちが、僕らのために踊りを披露した。それで終わり。

市長はとてもいい人で、こんなことを言った。"もしあなた方が来なくても私は非難しませんでしたよ。費用がかかるといって大論争が起きていた土地ですからねえ"。1964年

リンゴ　オーストラリアのどこかの都市でビルの屋上に立った時、大勢のファンが下から叫んでいた。僕らが楽しんでいたら、松葉杖の男が、杖を投げ捨てて叫び始めた。"歩ける、歩けるぞ！"。彼自身はどう感じていたのか知らないが、治っているように見えた——その時彼がうつぶせに倒れたんだ。印象に残っているのはこの出来事のせいかもしれない。

体の不自由な人が、"ビートル"に会うために舞台裏に連れてこられることがよくあった。あれは変だよ。海外だけじゃない。イギリスでも同じだったんだけど、ほんとに気の毒なケースもあった。カゴで運び込まれた貧しい小さな子どもとか、腕や脚のないサリドマイド児とか、ほんとに痛ましかった。

問題は、こういう大変な患者を連れてきた人が、彼らを楽屋に置いていくことなんだ。お茶を飲みにいくんだか何だか知らないが、彼らを置き去りにしていく。問題が起きると僕らは"マル、体の不自由な人が!"と大声で呼んだ——そしてこれが合図になったんだ——ハンディキャップのある人がいない時でも、いてほしくない人がそばにいたら、僕らは"マル、体の不自由な人が!"と叫ぶんだ。すると、彼らは外に連れていかれるんだ。

ポール　ジョンはよくステージで痙攣が起きて麻痺してしまったようなふりをすることがあった。透明ビニール袋をゴム・バンドで足にくくりつけたりしてね。ブライアンはそれをよくは思っていなかった——彼はロイヤル演劇アカデミーに通ったことがあったから、真面目なショー・ビジネス・マンで、僕らにも、真面目にふるまうように、過激にならないようにと求めていた。でもジョンは、体の不自由な人の真似をしながら横断歩道を渡って、人を立ち止まらせたりするんだ。

僕らは、10代の頃に笑いの対象にしてしまったある種の言葉、"cripple"(身体障害者)や"harelip"(兎唇)、"cleft palate"(口蓋裂)、"club-foot"(湾曲足)なんかをおもしろがって使っていた。"Club 40"という名前のギターが発売された時、僕らはそれを"Club Foot"と呼んだり、ロンドンに通じる道で"Cripples crossing"(障害者横断)という標識を見た時は、ワイワイはやしたてたりした。僕らはそれを指示標識ではなくて場所の名前だと思っていたんだ。

僕とジョンがジーン・ビンセントのアルバムを聴いたあとで、ペニー・レインの近くを歩いていて、象皮病の女の人に出会ったことがあった。なんとなく怖くて笑うしかなかった。僕らの行為の多くは普通の人とは違う感覚だったのかもしれない。間違ったことだけど、僕ら独自の世界で表現してしまっていた。それは他人の障害に対してあまりにもナーヴァスになってしまい、ブラック・ユーモア化してしまっていたんだ。僕らは、笑うことによって人生を生き抜くしかなかった。

ジョージ　ジョンは、障害者アレルギー的なところがあった。彼らに対して特別な感情を抱いているのが、はた目にもわかった。それは漠然とした畏敬の念だったんだ。僕らのホーム・ムービーを見ればわかるけど、ジョンに向かってカメラを回すと、彼は必ず痙攣の演技をする。障害があるというのはヘヴィなことだから、ジョンはいつも、それを茶

い飛ばさずにいられなかったんだ。彼にとって、そういう現実はあまりに重すぎたんだと思う。

僕らはただロックン・ロールを演奏しただけなのに、人々が体の不自由な人や重病人を連れてきた。車椅子だけじゃなく、時には酸素吸入テントで運ばれてきた人もいる。僕らにどんな力があると思っていたんだろう。僕にはわからない。ただ、介護する人がショーを見たいだけのために彼らをダシに使っただけなんじゃないのか？"ブライアン、今晩は何人来るの？"と聞きたくなるほどだった。僕らは、楽屋を出てステージに向かう途中、大勢の恵まれない不運な人たちの間をすり抜けなければならなかった。

ジョンは、それを嫌がっていた。そのうち僕らは普通の人に対してもある種の人々のことを"cripple"(障害者)と呼ぶようになった。ある意味では、ほとんどの人が障害を持っているからね。頭であれ、脚であれ、どこかしらに障害がある。ジョンが"One thing you can't hide, is when you crippled inside."(隠せないのは、心の内に障害がある場合)と書いたようにね。昔のジョンの映像を見て「イン・ヒズ・オウン・ライト」を読み、彼の歌詞に織り込まれたいくつかのキーワードとつなぎ合わせると、彼が明らかに障害を恐れていたことがわかるよ。ほとんどの人がそうなんだ。"そうならなかったのは神様のおかげ"にすぎないんだ。

ジョン　麻痺患者を色眼鏡で見ているとは思わない。僕は彼らにこだわっているわけではないんだ。普通の会話で"麻痺"と言う時、その言葉を文字どおりの意味で使っているんじゃない。僕は、彼らにすごいシンパシーを感じてしまうんだ――この世の終わりみたいに思えてね。そして僕らはツアーの間にそういう人にすごくたくさん会ってきた。1965年

どこのコンサートでも、障害者や車椅子の人のための席をいくつかとっておいた。僕らは有名だから、どんな病気の人であろうと、あらゆる人をいつも楽屋に迎え入れるべきだと思われていた。彼らに親切にして当然と思われた。

僕だってひとりになりたい時もある。でも、どう言えばいいのかわからない。そんな時、彼らはたいてい"あなたのレコードを持ってます"と言うか、一言も喋らずにただ触りたがるんだ。彼らを押し出すのは、いつも母親か看護婦だ。まるで僕がキリストで、僕に触れた人にはオーラが乗り移るかのように、彼らは子どもや患者を僕の方に押しやるんだ。

こんな風だったから、僕らはそれには反応しなかった。とにかくひどかった。毎晩毎晩、ステージの幕が開くとそこにいるのは若者じゃなくて、前列に並ぶ大勢の障害を抱えた人たち。終わって走り抜けようとしても、まわりは黒山の人だかり。僕らはいつも障

害者や盲人ばかりに囲まれているようだった。廊下を通ると、彼らは僕らに触ろうとする。怖かったよ。1970年

アメリカでは、そんな人が何百人も楽屋に連れてこられた。すごいよ。僕は見てられなかった。思わずうしろを向いた。笑いでもしなければ、倒れてしまいそうだった。彼らは列をなしていた。ビートルズは病を治す祈祷師とでも思われているのか！　もううんざりだった。1965年　僕らが彼らの病気を治すなんて"内輪"のジョークみたいなものだ。僕らが言っていたのは、そういう類のことだったんだ。つまり、僕らは彼らを気の毒に思っていた――それは誰でもそうだろう――でもあれはやりすぎだ。目や耳や身体の不自由な人たちに囲まれると一種の戸惑いを感じるもんだ――僕らにはステージで演奏することへのプレッシャーについて言うべきことがたくさんあったのに。1970年

ポール　**初期のビートルズのスピリットは若さと希望にあふれていた。**僕らはいつもハンディキャップのある子どもたちに"ハロー"と声をかけ、望みを与えるように頼まれた。でもそれは、僕らには難しかった。なぜなら、僕らのユーモアにはちょっと意地悪なニュアンスも含まれていたから。僕らにとって、車椅子の人に祝福を与えるのは、ほとんど義務みたいなものだった。僕らはこんな二面性を持っていたんだ。

ジョン　僕らは残酷なんじゃない。リバプールのマージーサイドで多くの悲劇を見てきたからね。だけど、"ちょっとでも息子に触れてやってください。そうすれば息子は歩けるようになります"なんて母親の金切り声を聞くと、僕らは逃げ出して、泣いて、心を空っぽにしたくなる。僕らは、たとえ命を落としてもノーマルのままでいたい。1965年

CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　オーストラリアとニュージーランドのツアーのあと、ピカデリーで開催された映画『ア・ハード・デイズ・ナイト』のワールド・プレミア・ショーのために、イギリスに戻った。そこもまた大群衆だった。ロンドンに続きリバプールでもプレミア開催されたんだ。

ポール　ピカデリーが超満員だったのを覚えている。僕らはリムジンで行く予定だったが人が多くて通り抜けることができなかった。別に怖くはなかった——群衆に悩まされたことは一度もなかったと思う。彼らはいつもフレンドリーで、狂暴な顔をした人はいなかった。

　僕らはプレミアのためにリバプールに帰ることになった。リバプールでは、僕らがロンドンへ出ていったことで裏切りみたいに思われているという嫌な噂があった。だから少しは心配していたんだけど、いつの世にもその手の中傷はつきものだよ。

ジョン　口には出せなかったけど、僕らはほんとはリバプールに戻りたくなかった。僕らは地元のヒーローになったことで、神経質になっていた。リバプールでショーをやれば、いつも知人でいっぱいになった。でも僕らは小綺麗にスーツを着てたから友だちには気が引けたし、心を売ったと思われてるんじゃないかと心配だった——ある意味では、事実そうだったんだけど。1967年

ジョージ　リバプールから初めて飛行機でロンドンに行った時は、スターウェイズ・エアラインを使った。リバプールから飛び立って、マージーやポート・サンライトの上空を飛ぶんだ。初めてその便に乗った時、飛行機が滑走路を猛スピードで突っ走っている最中、ちょうど僕が座っていた後部の窓が開いてしまい、吸い出されそうですごく怖かった。僕が悲鳴を上げたらスチュワーデスがやって来て、窓をグッとつかんでバタンと閉めた。初めて乗ったエアラインのことを覚えている。プレミア・ショーのためにリバプールに行った頃、その航空会社ではダコタのターボ・プロペラ・エンジン機を使い始めていたんじゃないかな。

ポール　空港に着くとものすごい人だった。王族になったみたいで信じられない光景だった。その昔、バスに乗ったり歩いたりしたことのある通りに、大勢の人々が並んでいた。女の子と一緒に映画館に行った時もこの道を通った。今、数千人の人々がここにいる——僕たちのために。"よう、どうしてる？　元気か？"という声がたくさん聞こえた。故郷の人たちだから妙な感じもしたけど、すばらしかった。

　僕らは最後にリバプール・タウン・ホールのバルコニーに上がった。多くの人——実際には20万人——が、タウン・ホールからキャバーンの間にあふれていた。あの辺はいわば僕らの庭だったんだ。

ジョン　最高だった。何人いたのか知らないが——ゾクゾクしたよ。車に乗ったら、さらにすごかった。目の前に彼らが迫って来るんだ。

　みんなどんな風に迎えられるのかと、何日も前から緊張していた。あれほど多くの人が来てくれるなんて、まったく予想外だった。街角に2、3人立ってるぐらいじゃないかと思っていたんだ。なぜって僕らはビートルズはリバプールではもうおしまいだっていう声を聞いていた。僕らはそれを信じるようになり、"もしそうならリバプールには帰りたくないな。こっそり家に帰るだけにしよう"と思っていた。"キャバーンでもビートルズの人気は落ちた"っていう噂もあったしね。でもそれはビートルズを知らない人たちの話だったんだ。実際に帰ってみたら、最高にすばらしかった。

　何よりも嬉しかったのは、名士からリバプールの一般の人たちまでみんながとても優しく親切で、僕らを絶賛してくれたことだ。僕はそんな賞賛に値する人間じゃないのに。1964年

ジョージ　沿道に並んだ人が手を振ってるなんて奇妙だった。だって、あそこは僕が車で何度も走ったことのある道なんだもの。僕らはタウン・ホールのバルコニーに立って市の歓迎を受け、ジョンが挨拶をした。

ニール・アスピノール　ジョンは、バルコニーでヒットラーの真似をやってのけたんだ。でも気づいた人はいないようだった。ジョンはいつもこうなんだ。少し非礼なところがある。誰だって神経をすり減らしている時は、それを和らげようとするものだよ。

ポール　リバプールは、僕らの愛する場所だ。歓迎はすごかった。負け惜しみの悪口も少し聞こえたようだけど、そんなのは記者連中を喜ばせただけさ。

CamScannerでスキャン

ジョン 勲章をありがとう、ハロルド。

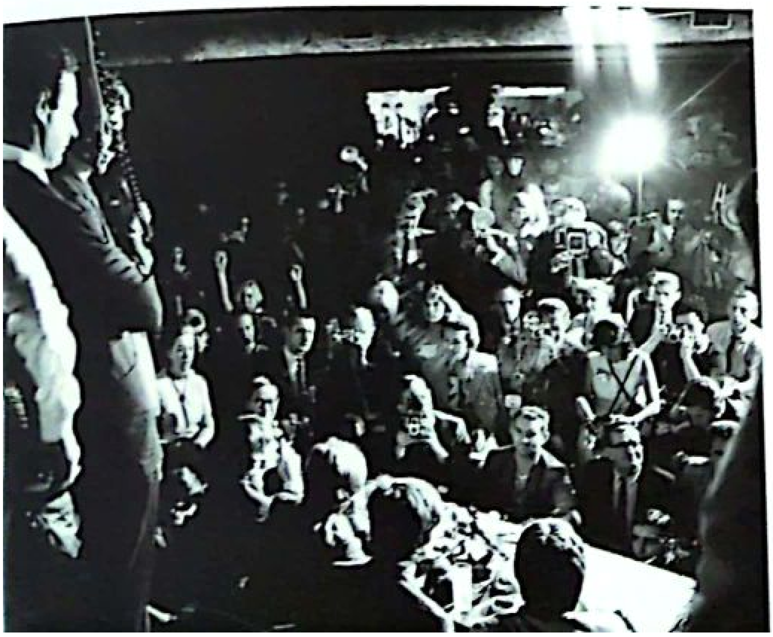
ジョージ　僕らが報道陣に対して慎重になったり身構えたのはたいした理由があったわけじゃない。単純におもしろがっていただけなんだ。結局、ビートルズの記者会見ではそれが魅力になっていた。僕らは率直で、現実的で、きわめて正直だった。

ジョン　記者会見での僕らはおもしろかった。ジョークで質問されるから、ジョークで答える。でも、僕らがほんとに楽しんでいたかというと、そうでもなかった。報道陣はお粗末で、子どもしか笑わない中学生程度のユーモアを持っているにすぎなかった。音楽に関する真面目な質問には、僕らも真面目に答えていた。僕らは神経質になっていたんだが、まわりはそうは見ていなかったみたいだ。

僕らのイメージは僕らのほんの一部にすぎない。マスコミと僕らが作り上げたものだったんだ。新聞の報道には間違いが多い。たとえ部分的に真実であっても、すでに時は遅くて僕らの真の姿をとらえてはいない。マスコミを通した"新しい"イメージが定着する頃には、僕らはすでにそれを捨てようとしているんだ。1967年

個人的な質問でない限り、戸惑うことはなくなっていた――個人的な質問に過剰な反応をするのは当然のことだ――。僕らはいつも同じ質問をされてイライラしていた。"この泡のような人気が終わったらどうしますか？"。僕はまだ夢を追い続けているのに。1968年

初めてのアメリカ·ツアーの時は、エプスタインからベトナム戦争の話をしないよう釘を刺されていた。2度目のツアーの前に、ジョージと僕は"戦争について話しちゃいけないのなら、僕らは行かない"と言った。僕らはいつも、戦争について意見を求められていたんだ。馬鹿馬鹿しいよ――僕らは、自分の意見を話すなと言われ、昔のアーティストのように振る舞わなくてはならなかった。無邪気なふりを通すことはできないし、自分を抑えきれなかった。何も言わなくても事実は露見してしまう。1972年　そのあと、僕らは自分の考えを話した。"いいとは思わないし、賛同できない。戦争は誤りだと思う"1968年



ジョージ　僕らはいつも、ベトナムについて発言すべきだと言っていた。時々は発言していたけどね。アメリカ·ツアーの最中ずっと報道陣に話しかけていたことがある――僕らは報道陣を同じ飛行機に乗せていたんだ。僕は、いろんなことをだらだら喋り続けた。かつてはポップ·スターは観客やプレスに話しすぎてはいけないと考えられていた。結婚もできない。ガールフレンドを公表してもいけない――そして、戦争の話をしてはいけない！　僕らは純粋だったのだろう。世間的にはまだ受け入れにくい問題がいろいろあったのだろう·····。

ジョン　僕らの曲は、全部反戦歌だ。1964年

ジョージ　僕は毎日そのことを考えている。あれは間違いだ。戦争に関係のあることは、みんな間違いだ。彼らはみんな、ネルソンやチャーチルやモンティに心酔している――口にするのは戦争の英雄の話ばかり。『オール·アワー·イエスタデイズ』を読んでみなよ。イギリス人がドイツ兵をいかにあちこちで殺したことか。ぞっとするよ。彼らは、杖をつきながら"軍隊に2、3年いればいいことがある"と僕らに教えるような人々なんだ。1966年

CamScannerでスキャン

ジョージ **その年のツアーは異常だった。**
僕らはまともだったんだ。
世間が異常だったのさ。

ジョージ　僕らの行くところどこにでも、警察がこれ見よがしに出動していた。ビートルズがやって来ると誰もが熱狂した。みんなが狂ってしまう様は、それだけで映画が作れたほどだよ。

アメリカでは、警察が交通規制し、自動車行列の先頭を走り、十字路に来ると、腕を上げて笛を吹く。すると別のバイクが通過して次の交差点に行く。僕らはみんな黙りこくって全速力で道路を行ったり来たりしてるだけなんだ。"大統領のお通りだぞー"みたいな雰囲気が大好きなんだよ。衝突してしまって、隣同士から離れたりしたな。どこでもそんなことが起こっていた――スウェーデンでさえもだ。僕らの行くところはどこもそんな風だった。

ジョン　僕らはいつもそれを"台風の目"と呼んでいた――真ん中は静かだから。(笑)

ニール・アスピノール　8月に2度目のアメリカ・ツアーに行った時には、『ア・ハード・デイズ・ナイト』の映画もアルバムも大ヒット中で、ビートルズ人気がヒートし、大騒ぎだった。行く先々で、地元の高官から面会を求められ、そんな時はいつも彼らの子どもたちが一緒だった。

アメリカではイギリス・ツアーよりもあらゆることが巨大化し、収拾がつかなくなった。ロンドンのハマースミス・オデオンの舞台裏の楽屋では、ビートルズは自分たちだけの時間を持つことができたが、スタジアム公演ではわけが違った。楽屋は選手のロッカー・ルームで、そこは200人ものスタッフが収容された。僕たち5、6人の他、GAC(ツアー・エージェンシー)、警備スタッフ、地元のプロモーター、食事の運搬の人――それにラヴィン・スプーンフルやグレイトフル・デッドなどのバンドが楽屋にくるのだった。

CamScannerでスキャン

ポール　**僕らは、少しずつ**
クレイジーな状況になっていった。

ョン　周囲の騒動はだんだんひどくなっていった。僕らがビッグになればなるほど、
待も大きくなっていったが、より多くの理解できない現実に直面しなければならなか
た。――市長夫人と握手しなかっただけで、彼女は金切り声で"よくもそんなことを！"
罵倒し始めるんだ。
これはデレクから聞いた話だけど・・・・・、僕らは、アメリカのどこかのホテルでセッシ
を終えて眠っていた。そこへ市長夫人がやって来て"彼らを起こしなさい。私、彼
会いに来たのよ！"と言った。デレクが"起こすことはできません"と応じると、彼女
起こさないなら報道陣に話しますよ！"とわめき始めたというのだ。
度のことだ。彼らはいつもマスコミを通じて悪い評判を立ててやると脅し、歯の矯
かしてる彼らのクソガキと僕らを会わせようとした。たいてい警察署長か市長の娘
た。両親も最低なら、子どもも最低なんだ。僕らはいつも押しつけられて強制的
らされた。何よりも屈辱的な体験だった。1970年

　ツアーの熱狂ぶりは刺激的だった。囮のパトカーも、会場に誘導される時の面
り方も、大好きだった。ミュージシャンや俳優とか有名な人たちにたくさん出会っ
おもしろいバーを見つけたこともあった。誰にもつかまらないなんて奇跡的だっ
、まだ当時は外出することができたんだ――少なくとも、僕はたびたび外出した。

僕らだけでは外に出られないんだ――17年間、歩いて買い物に行くことができ
・・・・。たまに、誰かがひとりで抜け出すことがある。その時がチャンスなんだ。
ズはいつも4人で移動するものと思われているから、ひとりの時は気づかれない
いんだ。

　名声と金が自由をもたらすって思われてるけれど、そんなことはない。今の僕らは、自由よりも制限を感じている。僕らは以前と同じ食事をし、同じ友だちとつきあっている。そういうのは突然変わるものじゃない。僕らは自分で稼いだ金さえ使えないんだ。買う暇がないからだよ。部屋の中で、いったい何に金が使えると思う？
　ツアー中は、いつもこんな風に隔離され、仕事して、寝て、食べて、また仕事するだけ。僕らは、馬鹿みたいに何時間も働くしかないんだ。仕事してない時間は思い出せない――もう何年間もそうだったような気がするよ。1964年

CamScannerでスキャン

リンゴ　僕らはバーやクラブによく行った──警官と一緒のパトカー・ドライブにもね（その頃の警察は僕らにとても親切だった。彼らは子どもたちから没収したマリファナやヘロインを全部僕にくれたんだ。警察大好き！）
　サンフランシスコでは、すごいことがあった。僕らがバーに行ったら、デイル・ロバートソンがいたんだ。いいかい、デイル・ロバートソンだよ！"やあ、デイル、調子どう？"──"元気だ"。それで一緒に酒を飲んでいると、"はい、閉店です。皆さん、バーから出てください"ってことになった。カリフォルニアは午前2時に閉店と決められているんだ。それでみんな一度店を出るんだけど、そのあとバーテンダーも客もまた店に戻って続きをやるんだ。おもしろいだろ。
　バート・ランカスターに会えたのもいい思い出だね。彼はすごいんだよ。初めてのロサンゼルス滞在の時、僕らは大邸宅を借りていたんだ。バートの家に招かれた時も僕はポンチョを着ておもちゃの銃を2丁持って、カウボーイの格好をして出かけたんだ。僕が"手をあげろ、バート。この町には、俺らのような奴はふたりもいらねえ"とやると、バートは"何だそれ。子どものおもちゃじゃないか"って言って、本物の銃を2丁と革のピストル・ホルダーをくれた。僕はただカウボーイの格好をしていただけなのに、彼にはおもちゃの銃は受けなかったんだ。
　彼の家には驚かされたよ。外にプールがあるんだけど、リビング・ルームに泳いで行けるガラスの通路があるんだ。LAはすごいよ。LAでは僕らはよくサンセット・ストリップを歩いた。リムジンから降りると人が寄って来るんだけど、みんな落ち着いていてクレイジーな雰囲気はまるでなかった。何度も"ハロー"って声かけられたけどね。65年頃に社会が消費時代へと移り変わり始める頃には、ショッピングでサンセットを歩くこととかがイカすことだったんだ。それに夕暮れの風景もすばらしかった。そして僕らは、ウィスキー・ア・ゴー・ゴーとか、いろんなクラブに行った。

ジョン　リンゴの言った"バート・ランカスターは本物"という言葉は、ショー・ビジネス界の俳優とか映画スターの陳腐な常套句みたいに聞こえるけど、そうじゃないんだ。僕らは本物と思えないような人には初めから会わないし、もし違っても"彼らはお粗末だ"なんてテープに記録したり、言いふらしたりしないさ。1964年

リンゴ　僕らはハリウッド・ボウルでコンサートをやった。巨大な貝のような壁に囲まれたステージは最高だったね。あのハリウッド・ボウルだよ──印象的なところだった。僕は当時ハリウッドに恋していたんだ。ハリウッドとは今も恋愛中──ビヴァリー・ヒルズ、ハリウッド、カリフォルニア……。ニューヨークより好きだね。
　ハリウッドには椰子の木がある──リバプールには、あまりないよ。気候が暖かくて、ライフ・スタイルがすごくオシャレだった。

ジョン　ショー・ビジネスには、ちょっとイカれたところがある。狭いエリアにどっぷりと浸かったショー・ビジネスなんてそんなものさ。僕らは数人の映画スターに会った。エドワード・G・ロビンソンにジャック・パランスにヒュー・オブライエンだ。もっとたくさん会えると期待していたから、ちょっとがっかりだった。
　ハリウッド・ボウルはすばらしかった。動員数はそれほどでもなかったけど、僕らはみんな楽しんだ。──特別な場所に思えたし、有名なところだからね。ステージはでかいし、最高だった。ハリウッド・ボウルは音響効果がいいから、たとえ観客がうるさくても、自分たちの演奏が聴こえた。数年の活動の中で、演奏がすごくよく聴こえたのは2ヵ所くらいだよ。1964年　でも、僕らは、観客に静かにしてほしいとは思わない。ただ座って聴いているだけなら、ショーをやる意味がない──それならレコードを聴けばいい。僕は、騒がしいのが好きなんだ。1966年

ジョージ・マーティン　ハリウッド・ボウルのコンサートを録音しようと思い、キャピトルのエンジニアを手配した。ハーフ・インチのテープを使い、3トラックに録音したが、分離の悪い録音になってしまった。ボーカルはドラムと一緒にセンターに、そしてベースとギターを残りのふたつのトラックに分けて録音した。しかし、観客の絶叫がまるでジャンボ・ジェット機のエンジンのうしろに置いたマイクで録ったようなサウンドで全体を覆ってしまったんだ。いいサウンドでライブを録音するのはとても難しかった。

ポール　"大勢の女の子があんなに叫んでる中にいて、気がおかしくならない？"と聞かれたことがあった。僕らは気にしていなかった。演奏を間違えても音程がずれても平気だったからね──僕らにも聴こえないし、観客にも聴こえないんだから。

ジョージ・マーティン　ハリウッド・ボウルを録音したテープは、その当時は発表されなかった。ビートルズが発表すべきじゃないと考えたんだ。1977年になって初めて私が掘り起こし、磨き直して、レコードとして発表した。
　彼らは、偉大なライブ・バンドだった。自分たちの演奏が聴こえないという状況を考えてみてほしい。今の時代のコンサートでは、全員の足元にモニター・スピーカーが置かれているから、今どこを演奏しているのかがわかる。ビートルズがライブ・ショーをやっていた時代には、それがなかった。ジョン、ポール、ジョージは、6万人の絶叫の前でマイクに向かい、リンゴはステージ後方のドラムの位置に座っていた。
　状況を把握するのがいかに難しかったか、リンゴの話を聞いたことがある。"僕がやりたかったことは何ひとつできなかった。すごいキックもロールもフィルインもできなかった。ただ、常にバック・ビートをキープして、みんなをまとめ上げなければならなかった。僕はどこを演ってるのか判断するために、3人の体の動きを追っかけていたんだ。"

リンゴ　演奏中、僕は控えめにオフ・ビートを刻み、彼らの口や体の動きでどこを演奏しているのか感じとるしかなかった。タムで何かオカズを入れようとしても、かき消されてしまうからね。でも、それでがっかりしたことはなかったよ。僕らがツアーをやっていた60年代には、コンサートはレコードを売るための手段だったし、家に帰ったファンはレコードを聴くことができ、僕らは印税をもらうことができた。1枚あたり1ペニーの印税をね。

ジョージ　**僕の頭の中では、全部のツアーがごっちゃになっている。**
　ジャッキー・デ・シャノンと一緒にツアーをしたことがあった。彼女とギターで共演したのを覚えている。ロサンゼルスに行った時には、ベル・エアーにある古くて大きい薄暗い家に滞在した。僕らは誰かの言葉に乗せられてウィスキー・ア・ゴー・ゴーに行った。

　玄関を出て20分で店のテーブルに着いたとたん、ハリウッド中のパパラッチが押しかけてきた。あれは、ジェーン・マンスフィールドが僕らと一緒の写真を撮ろうとして仕組んだ完全な罠だったんだ。彼女の両側にはジョンと僕がいて、彼女は僕らの股間のあたりに手を乗せた──少なくとも僕はそうされた。僕らには氷の入ったグラスだけが来ていて、飲み物がくるのに何時間も待たされ、そのうち氷は全部溶けてしまった。パパラッチが来て写真を撮ろうとしたので、僕はグラスの水を彼にひっかけようとした。その時女優のマミー・ヴァン・ドーレンが通りかかり、彼女に水がかかってしまったんだ。パパラッチはその瞬間を写真に収めた。次の日僕らは街を出発したんだけど、飛行機の席で新聞を読んでいたら僕が水をひっかけている写真が出ていたんだ。

リンゴ　誰にでもありそうなことなのに、それがビートルズのジョージだったから、あんな風に報道されたんだ。クラブに行くと、大きなカメラを抱えた小さなカメラマンが何人かいる。"写真を撮ってもいいですか"と聞く人はいない。駆け寄ってきて、僕らの目の4インチ（約10.2センチ）先でフラッシュをたく。その大きくて不快な光のせいで、目がつぶれるかと思ったよ。

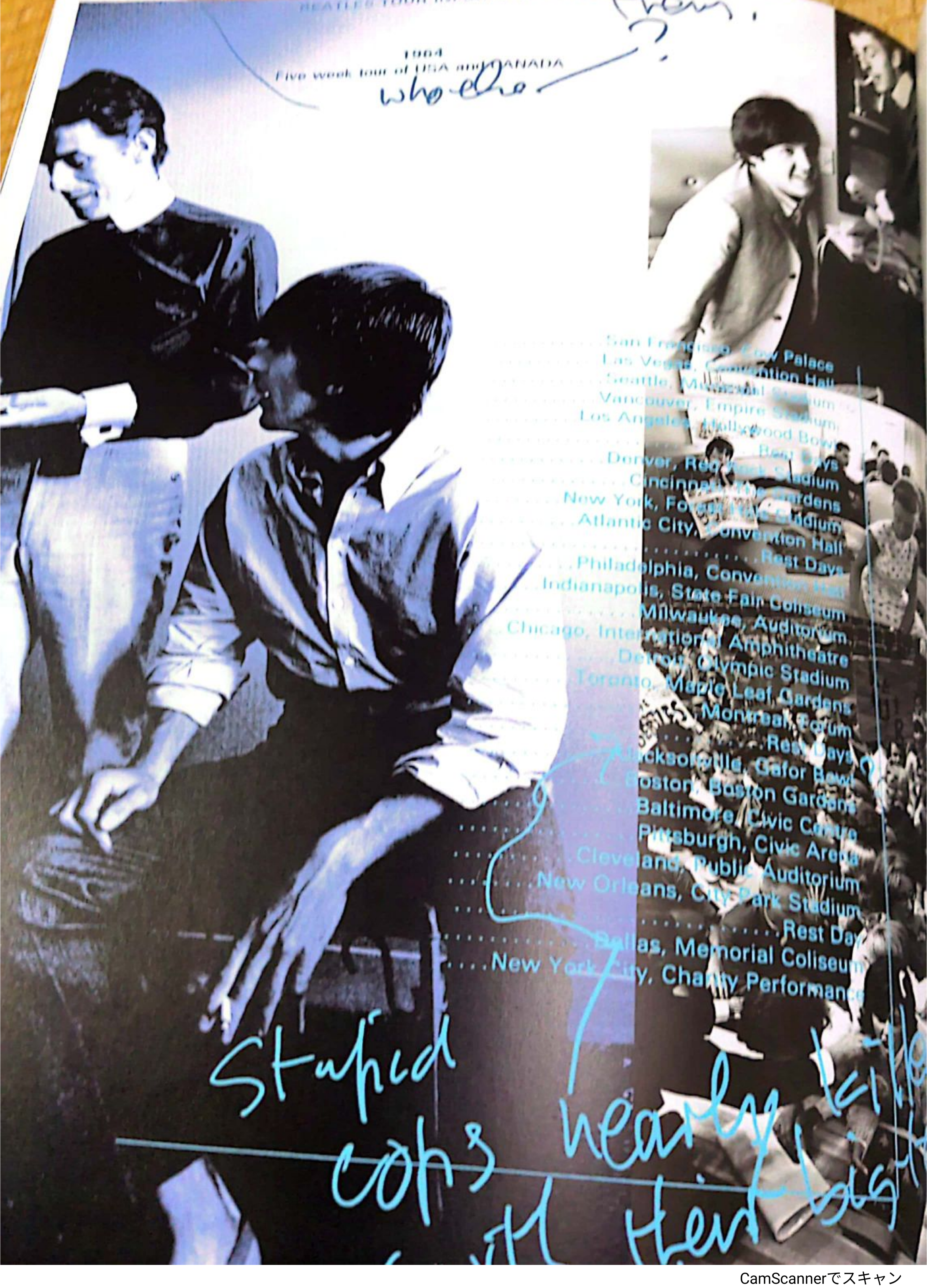
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

BEATLES TOUR INFORMATION

1964
Five week tour of USA and CANADA

who else — them?



San Francisco, Cow Palace
Las Vegas, Convention Hall
Seattle, Municipal Stadium
Vancouver, Empire Stadium
Los Angeles, Hollywood Bowl
Rest Days
Denver, Red Rock Stadium
Cincinnati, The Gardens
New York, Forest Hills Stadium
Atlantic City, Convention Hall
Rest Days
Philadelphia, Convention Hall
Indianapolis, State Fair Coliseum
Milwaukee, Auditorium
Chicago, International Amphitheatre
Detroit, Olympic Stadium
Toronto, Maple Leaf Gardens
Montreal, Forum
Rest Days
Jacksonville, Gator Bowl
Boston, Boston Gardens
Baltimore, Civic Centre
Pittsburgh, Civic Arena
Cleveland, Public Auditorium
New Orleans, City Park Stadium
Rest Day
Dallas, Memorial Coliseum
New York City, Charity Performance

Stupid cops nearly kille[d] … with their …

CamScannerでスキャン

ジョン　どこに行っても、パパラッチが押しかけてくる。彼らが何度もシャッターを切ったところで、こう言うんだ。"じゃ、もういいね。僕らは何もしないよ。ただここに座ってるだけだ。写真は十分撮っただろ。あんたが誰だか知らないけど"。あのハリウッドのクラブで起きたのも、そんなことだった。僕らが"出ていってくれ"と行ったら彼は出ていく。まわりの人に"奴ら、思い上がっているよ。人に向かって「出ていってくれ」はないよな"とか言ってまた戻って来るんだ。まいっちゃうよ。そこへクラブの支配人がやってきて"彼が失礼なことを？"と聞く。僕らはこう答える。"そうです。彼を連れ出してください。カメラを捨てろと伝えてください。こっちに来て僕らのテーブルに座っても何をしてもいい。ただし、フラッシュをたくのだけはやめろ、と"。1964年

ジョージ　LAの前はラスベガスで公演をした。その時はリベラーチェが僕らを訪ねてきた。コンサートでは前から4列目まで、パット・ブーンとその娘たちで埋まっていたと思う。彼には何百人も娘がいるようだ。

アメリカではありとあらゆるトラブルを経験した。アメリカ人はすぐ裁判を起こす習慣があるんだ。僕らはアメリカに行くまで他人を告訴するなんて知らなかった。僕らを裁判にかけるため、完全なでっち上げで僕らを訴えようとして部屋に女の子が入り込んで来るんだよ。

僕らはフレンチ・カナダからキー・ウェストへ向かった。フレンチ・カナダでは、リンゴが撃たれるんじゃないかと心配したよ。モントリオールの新聞に、誰かがリンゴの命を狙っていると載ったからね。彼の鼻か、あるいは他の何かが気に入らないからか？ ビートルズの中で彼が一番イギリス人らしいから？ それはわからない。とにかく僕らは"この街を出よう"と決め、モントリオールで1泊するのをやめて、1日早く飛行機に乗ったんだ。

リンゴ

鏡をのぞいて独り言を

言ったことがある。

あー、それほど大きくないじゃないか。

僕自身は、自分の鼻のことは

もうあきらめてるのかもしれない。

これは、人が僕の話をする時の

ネタになってるんだ。

笑うしかないよな――

片方の鼻の穴から上がって、

もう一方から出てくるなんて。

1965年

リンゴ　誰かが、イギリス系ユダヤ人への見せしめに僕を懲らしめようと考えた（大きな間違いがひとつある。僕はユダヤ人じゃないよ）。僕らは、脅しに冷静に対処した。警官の数を急遽増やしたりね。真剣に我が身を案じたことが何回かあったけど、これもそのひとつだった。演奏中、僕はいつも一段高いところにいたから、多少なりとも防御になるように、いつもは平らにセットしていたシンバルを観客席に向けて立てた。それから、そばに私服の警官も座らせた。でもだんだん不安になってきた。"もし観客が僕にピストルを向けたら、彼に何ができるだろう。弾丸を受けられるのか？"と思ったんだ。時間が経つにつれて、ますます不安になった。警官は、ただそこに座ってるだけなんだから。

ジョージ　僕らは、フロリダのジャクソンヴィルに向かう飛行機に乗ったんだけど、ジャクソンヴィルがハリケーンに襲われているということで、行き先がキー・ウェストに変更され、こんなアナウンスが入った。"シート・ベルトをお締めください。当空港の滑走路は、この飛行機には小さめにできております。逆スラスト全開で着陸いたします"。おまけにこの飛行機はエレクトラだった。事故がすごく多い機種だったんだよ。それでも僕らは無事キー・ウェストに着陸し、そこで1日オフを過ごした。

飛行機がジャクソンヴィルに向かっていた頃にはハリケーンは通過したあとだったけど、風がメチャクチャ強く、厚くて黒い雲が全体に広がって、とても暗かった。少し晴れても、相変わらずすごい強風で、街に近づくにつれヤシの木が倒れ、あちこちに強風で飛ばされたものが散乱していた。

アメリカ中僕らを追いかけ回して撮影している連中にやめるように言ったのに、奴らはフロリダにまで来ていた。"見ろよ。さっさと消えろと言ったのに、また来たよ。真正面だ"。カメラマンは優先的にステージの真ん前の場所を与えられていたんだ。ステージで強風が吹き荒れる中、マルがドラム・キットを釘で台に固定していた。地面から3メートル以上の高さだった。そんな中、あいつらがまだそこにいたので、僕らは"もうやめにする"と言った。仕方なくプロモーターはカメラマンを追い出したが、僕らに向かって文句を言い始めた。とうとうデレク・テイラーがステージに立ち、まるでヒットラーのように怒鳴った。"カメラマンは邪魔です。彼らは出ていくべきです"。"ビートルズをステージに立たせたいか？"――"イエー！"――"それなら、カメラを追い出すか？"――"イエー！"。ニュルンベルクの大集会みたいだった。警察やプロモーターは、僕らがトラブルの元だと考えていたんだろう。でも、その頃には僕らには、コントロールできない何かが起こり始めていたんだ。

どの都市でも暴動があった。学生の暴動、黒人の暴動。カナダでは、フランス系の人々がイギリス系の人々と分離しようとしていた。どこに行っても、何かしら問題が起きていたようだった。

僕はいつも暴動に怯やかされていた。アメリカ・ツアーに出発する時に、"サンフランシスコからスタートして、紙吹雪のパレードをしよう"という案が出た。僕は"嫌だ"と言ったんだ。あれはケネディ暗殺から1年もたっていない頃で、アメリカはおかしくなっていた。紙吹雪だって、あとで誰かが掃除しなければならない。僕は道を汚すのも嫌だったから、こう言ってやった。"僕はやらないよ。紙吹雪のパレードはやりたくない。馬鹿らしいよ"って言ってやったよ。

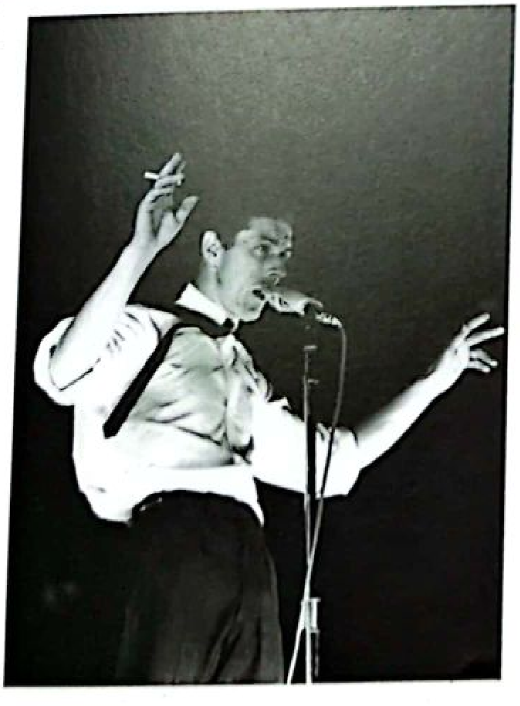
ジョージ・マーティン　彼らは殺害の脅迫を受けたこともあった。デンバーのレッド・ロック・スタジアムのコンサートでは、ブライアンと私がステージを見渡せる台に上り、演奏中の彼らを見守った。この円形劇場は、スタンドに狙撃手がいれば、いつどんな相手でも狙い撃ちできるようなところだった――でも大丈夫。私も十分警戒していたし、ブライアンも、そしてビートルズ自身も同様だった。

ジョン　僕らを殴った相手は、ほとんどが僕らを護衛していた人たちだった――彼らはたいてい見当違いのことをして、僕らの邪魔になった。ファンがステージに上がってくると、僕らはヒステリックになる。ジョージは抱きつかれて、それでもギターを弾き続けようとしたけど、間違いだらけになった――首に女の子が絡みついている状態で！ それでも僕はたとえファンが突破してきても、ステージの上ではなんとなく安心だった。ギターをアンプにつないでいる間は大丈夫なような気がするんだ。1964年

ポール　一度、ライターを目にぶつけられ、滞在中ずっと目が開かなかった。シカゴでは、紫と黄色の動物のぬいぐるみ、ゴム・ボール、縄跳びまでがステージに飛んできた。演奏中にウィンストンの煙草1カートンが邪魔で蹴飛ばしたこともあった。1964年

ジョン　後頭部に何かがゴツンと当たった。靴が飛んできたんだ。ひとりがやると、みんなが思うんだ"靴か"とね。"あれで彼らの注意を惹ける。頭に靴が当たったら、こっちを見てくれるだろう"とね。僕はいつもステージ上に目を光らせて、マルに伝えるんだ。よさそうなものを奪い取ろうとハゲタカたちが跳びかかってくる前に、マルが全部拾っておいてくれるんだ。1966年

デレク・テイラー　公式にはダラスの次はニューヨークに行くことになっていた。でも、その前に秘密の行き先があったんだ。それはアーカンソーとミズーリの州境で、リード・ピグマン（彼のロッキード社製エレクトラ型飛行機が、僕らの前月の移動住居だった）の牧場だった。



ジョージ　ダラスから中継地の空港に飛び、そこでピグマンに会った。僕らは、翼が機体の上に付いていてエンジンがひとつかふたつの小さな飛行機に乗った。僕はバディ・ホリーを思い出していた。飛行機事故によるミュージシャンの死というものを、この時ほど身近に感じたことはない。別に墜落しそうだったわけじゃないけど、パイロットが膝に小さな地図を置きライトで照らしながら、"あれ、どこだかわからなくなっちゃった"と言ったのが聞こえたんだ。まわりは真っ暗で山に囲まれ、パイロットは曇りをとろうと窓を拭いている。やっと彼が現在位置を突き止め、飛行機は燃えるブリキ缶を誘導灯にして野原に着陸したんだ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

デレク・テイラー　一睡もせず、ビールを飲み煙草を吸いながら朝までポーカーをやった。翌朝、僕たちはピグマン夫人がおもしろがって見ている中、競馬の中から好き勝手に選んだ。まず最初にビートルズ、次にスタッフ、最後にブライアン——僕らの中で彼だけが乗馬を少しかじったことがあった。

ジョージ　コンサートとビートルマニア現象はだんだん新鮮味が薄れ、うんざりしてきた。ステージでの騒音、演奏が聴こえないこと、相変わらず同じ曲ばかり演奏すること。もうどこにも行きたくなかった。たとえ悲鳴をあげるファンから逃れることができても、警官、市長とその夫人、ホテルの支配人と従業員の悲鳴から逃れることはできなかった。

平穏でいられたのは、ホテルのバス・ルームに閉じこもっている時だけだ。バス・ルームが唯一の安らぎの場所だった。

デレク・テイラー　僕は、マスコミの対応をするのを得意としていた。多くの人々に歴史的な瞬間を共有してもらおうと考えていた。しかし、万単位の人が少しでもバンドに近づきたいと要求し、アメリカでのある週末には、2万人がニューヨークのホテルの交換台に電話をかけ僕に連絡をとろうとしてきた。もうたくさんだった。あまりにも多く、頻繁すぎた。

ビートルズは、そんな極度のプレッシャーをうまく処理していた。当時、それがどんなに大変なことか、僕にはわからなかった。ほんとの状況を見据える余裕がなかったのだ。

僕は彼らに多大な要求をした。彼らはバルコニーで手を振ることなんかも受け入れてくれていた。"さあ、もう1回手を振りにいくよ。外に出よう"。時には誰かが、特にジョージが反発して"それなら僕の代わりに自分で手を振れよ。僕は行かない"などと言うこともあった。こんなやりとりもあった。"シャーリー・テンプルには会わない！"——"大声出さないで。彼女に聞こえるよ"——"聞こえたっていい。僕はシャーリー・テンプルなんか知らないよ。彼女は僕にとっては何の意味もない！"

ジョン　僕らは、人前で走り回りながら手を振ったりすることではなく、曲を書いてお金をもらってるんだ。1966年

デレク・テイラー　のちにジョージが話していた。"ヘッダ・ホッパーやジョージ・ラフトやエドワード・G・ロビンソンを超大物だと知っていたら、会いに行く勇気はなかったよ。僕らがおどおどしたりしていなかったのは、何もわかっちゃいなかったらなんだ"。僕はもちろん彼らの名声を知っていたから緊張していた。ビートルズは海賊でも、僕は彼らの足もとにも及ばなかった。

ビートルマニア現象が最も激しかった時期は、人々はビートルズと知り合いになれるだけで一生の幸せという感じだった。ビートルズにとって1964年はすべてが初めてのことばかりだったので、彼らはのちに認め出すことになるようなひどい種類の人間にもすべて会っていた。

当時僕はまだジャーナリストの立場で行動していたので、ビートルズを多くのマスコミのもとに連れ出していた。僕は報道関係者の男の子や女の子たちが要求することを精一杯実現させてあげていたのだ。

ジョージ・マーティン　私は、ビートルズの4人に押し寄せる地獄のようなストレスを目の当たりにしていた。どこに行っても、少しでも彼らに近づきサインを欲しがる人々が大挙して押し寄せてきた。

ビートルズのまわりにはレポーターも群がった。彼らはまったくマナーもなく、肘や足で相手を押しのけ4人に迫った。そんな状況の中、私は、パトカーに護衛されたり、ある時は飛行機に乗ろうとすると、ビートルズと一緒に我先にと乗り込むレポーターたちから危うく押し出されそうになったこともある。彼らのおかげでエレベーターが動かなくなってしまったこともあった。

あれは、休演日のない大型サーカスのようなものだった。

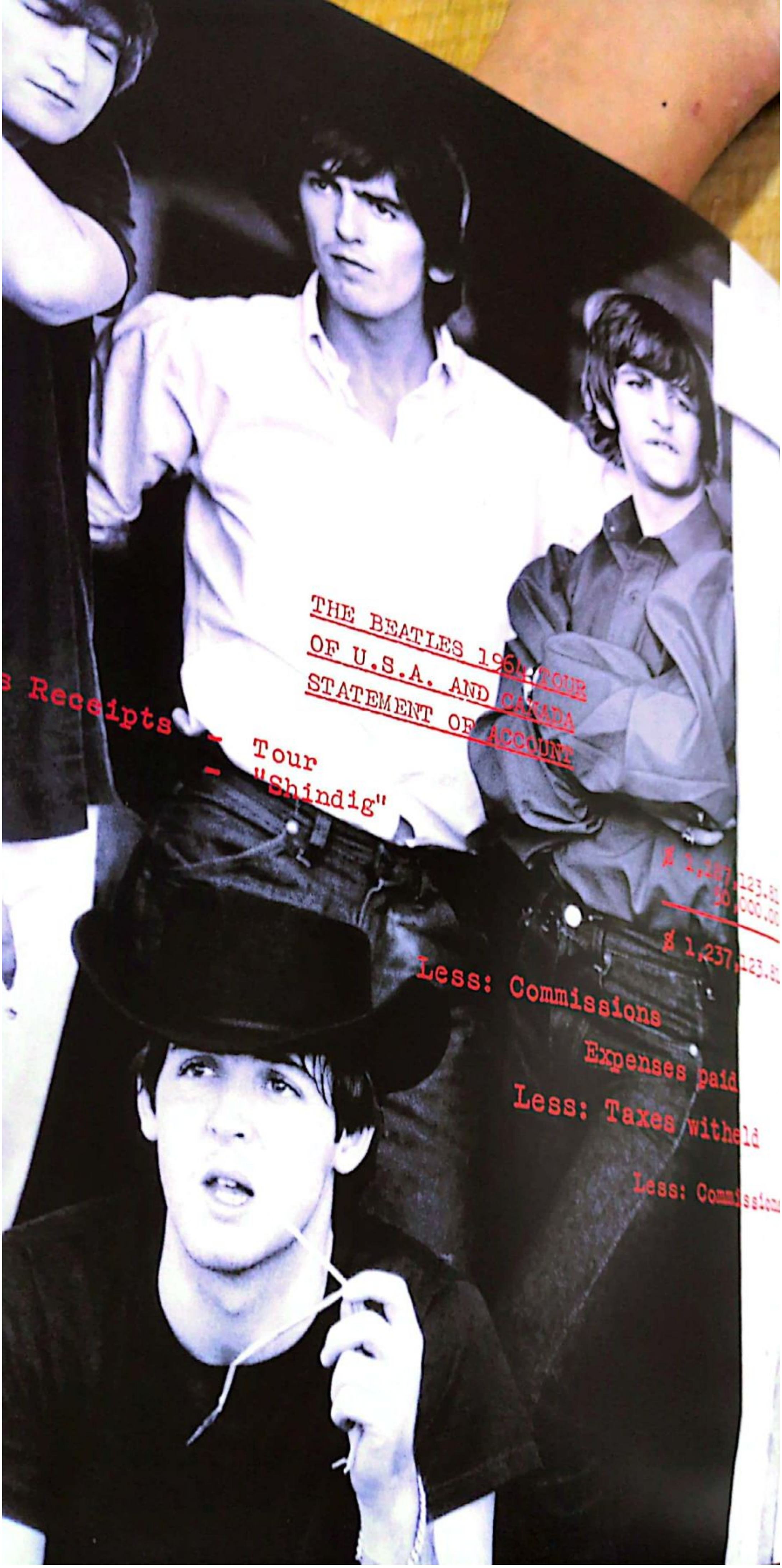
彼らが平穏を得られたのは、ホテルの部屋でテレビを見たりしている時だけだった。それでも相変わらず外では悲鳴が渦巻いていて、まったくひどい生活だった。

ジョン　僕らの生活は、映画「ア・ハード・デイズ・ナイト」のような楽しいものではない。あれはすべて作り事だよ。僕らは各地のホテルの部屋でじっとしているだけだ。何も見ることができない。——いろんなところで違う部屋を見るだけだ。1968年

ツアー中はほとんどオフの時間がない。アメリカ・ツアーにはコンサートのない"1日オフ"という日があるけれど、そんな日は僕らはホテルの部屋にいるだけだ。ちょっと外出するのに警察やらいろんなことを巻き込むことになるんだからね。それに、多くの人がサインやなんかをもらいにくるから、まるでオフにならないんだ。ずっと緊張するし、結局仕事になってしまうんだ。

でも、そんな生活にも慣れるもんだよ。たぶん囚人もそうだろう。僕らはギターを弾いて、歌って、人々に囲まれて、トランプで遊んで、絵を描く。僕らは何でもやる。時々嫌気がさして疲れることがあっても——そんなのみんながやってることだよ。それでも学校とか貧乏に逆戻りするよりはまだましだよ。1965年

ニール・アスピノール　ブライアンはビートルズを仕切っていた。何をと聞かれても、はっきりとは答えられないけど——とにかく彼は4人を掌握していた。ブライアンがミルウォーキーで公演すると言えば、彼らはミルウォーキーに出かけていく。ブライアンが契約をまとめれば、ビートルズはそれを必ず実行する。そして、あとから"もうあんなコンサートの仕事はとらないで"とか"ダブル・シャッフル——ひと晩で2回コンサートをすること——は嫌だ。あんなの普通じゃない"と不平を言うんだ。でも、文句を言うのはいつも仕事が終わってからだ。彼らはやる前に不満を言うことはなかった。仕事が決まれば、ビートルズはきちんとやるんだ。



CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　カンサスでのコンサートのオファ
ーがあった――予定にないコンサートを追加でやっては
しいと、6万ドルのギャラを提示された。しかし、オフの日
がほとんどないビートルズの返事は"ノー"だった。その年
はすでに、パリとアメリカに行き、「エド・サリバン・ショー」
に出演し、帰国して「ア・ハード・デイズ・ナイト」のレコード
と映画を完成させていた。それから休む間もなくワール
ド・ツアーに飛び、またイギリスに戻り、コンサートをやり、
さらにテレビやラジオにも出演していた。そしてスウェー
デンを訪れ、そのすぐあとに2度目のアメリカ・ツアーを開始したのだった。
彼らにとってオフの日は貴重だった。ブライアンが追加公演でオフの日を埋めようとす
ると、彼らはちょっと考えざるを得なかった。アメリカの35都市を回るツアーは、当時とし
ては大規模で、月、火、水、木、金と毎日違う都市で公演があった――それは飛行機が
到着する。そしてホテル、記者会見、コンサート、ホテルに帰る。そしてまた飛行機で離
陸という毎日だった。
ブライアンが35回公演のツアーの契約をすれば、彼らは自分のやることをわきまえ、仕
事に取り組んだ。しかし、その間にもうひとつショーを押し込むとなると、話が違った。
ビートルズは"ノー"と言い続け、提示されるギャラはどんどん膨らんでいった。この時6
万ドルで始まったオファーは最終的に彼らが承諾した時には15万ドルまでになっていた。

ジョン　どこへ行っても大騒ぎだった。デレクとニールの
部屋は、わけのわからない奴や警官、その他いろんな人
でいっぱいだった。1970年　デレクの部屋に行って
いる人は、もともと僕らの部屋に来るつもりだったんだ。
奴ら飲み物でも食べ物でも何でも、ただでもらうのをあて
にして来るんだぜ。そういう奴はちょっと付き合えば見分
けられる。中には、すごくおもしろい奴もいるけどね。口
のうまい頭脳的なペテン師なんだ。感心するよ。でもみ
んなただのフーテンさ。だから僕らの部屋には来られないのさ。1964年　僕らの1つの
ベッド・ルームは、彼らが入ってこないように隔離してあったんだ。
僕らにはやらなきゃならないことがあったんだ。もし薬が切れないうちに出かける時
間が来ちゃったら困るだろ。1970年

マル・エヴァンス　アメリカ・ツアーの間、みんな汗で1.5ストーン（約9.5キロ）も痩せたよ。

ニール・アスピノール　おもしろいことがあったし、愉快だった。緊張と疲れはあった
が、嫌にはならなかった。楽しんでいたんだ。もし誰かがほんとに張り詰めた時には、
彼らは僕に八つ当たりして気を晴らしていた。

ポール　僕らにとってオフの日は神聖なものだった。1964年の予定表を見れば、その理
由がわかるよ。つい最近まで気づかなかったんだけど、僕らは、丸1年働き続け、11月
23日ぐらいにオフをとる――そしてその日は美人コンテストの審査員をしなければならな
い――というようなスケジュールが当たり前だった。だから、カンサス・シティあたりで、
おそらくオフが1日必要だったんだろう。ブライアンがオフの日に仕事を入れようとしてケ
ンカになったことを、僕はほんとに覚えていないんだ。ケンカより話し合いをするはずな
んだけど。

デレク・テイラー　ビートルズと僕は時々ツアー中に外部の人々とのつきあいをした。リ
ンゴとポールはよくやってくれたけど、広報の僕としてはもっとやって欲しかった――ジ
ョージはまったくつきあってくれず、ジョンは他のメンバーが頼りにならない時はひと晩中
起こしておくことができさえすれば、朝一番にやってくれた。僕らは薬で眠気を覚まし、
たくさん酒を飲んだ。そうやって僕とジョンは友情を深めていった。理由はどうあれ、男
同士が一緒に酒を飲んだ時に芽生えるその種の友情を、ジョンと培っていったのだ。
ビートルズ全員はみんなツアーを楽しんでいた。彼らは、自分たちのスターのファッ
ツ・ドミノなどに会えることをとても喜んでいた。

ポール　ファッツ・ドミノのことは尊敬していた。彼にはニューオリンズで会ったんだ。星
形の、大きなダイアモンドの腕時計をしていたのが印象的だった。

ジョージ　ファッツ・ドミノは、小さな男の子ように可愛らしかった。ツアー中、僕らはよ
くタムラ・モータウンを聴いていた。マーヴィン・ゲイとかその手のアーティストだ。スティー
ヴィー・ワンダーは当時出てきたばかりで、レイ・チャールズは50年代から好きだった。僕
らは、チャック・ベリーやカール・パーキンスにも会ったんだ。
インディアナポリスはよかった。出発の日、空港に向かう車でインディ・サーキットの
500オーヴァル・コースをキャデラックで回ってもらったんだ。すごかったよ。直線コース
があんなに長いなんて信じられなかった。それに、バンクからメイン・スタンドを見る気
分は最高だった。

デレク・テイラー　彼らはニューヨークを満喫していた。デル・モニコ・ホテルに滞在し、
フォレスト・ヒルズのテニス・コートへはヘリコプターで行ったんだ。ニューヨークの
夜は刺激的で、街のイルミネーションやテンポの速さを楽しんでいた。少なくとも、
僕にはそう見えていた。

ジョージ　僕らがこのでかくて忌々しいチヌーク・ヘリコプターに乗って空から現れた
時、ステージではライチャス・ブラザーズが「ユーヴ・ロスト・ザット・ラヴィン・フィーリング」
を歌っていた。観客はライチャス・ブラザーズをまったく無視し、空を指差し悲鳴を上げ
ていた――彼らはこれに腹をたて、ツアーから抜けることを決めたんだ。ライチャスは
怒っていたんだ。

ジョン　僕らはどうしようもなく嫌な奴らになっていた。あんなプレッシャーのかかる状
況では、そうならざるを得なかった。僕らはニールやデレクやマルに八つ当たりした。
彼らは、とんでもない立場にあった僕らのイライラを和らげてくれた。それはきつい仕事
で、誰かがそれを引き受けなければならなかった。僕らがどんなにわがままだったか、
誰も知らない。とんでもないろくでなし、それがビートルズなんだ。成功するには、ろくで
なしにならなくちゃいけない。それは事実だ。ビートルズは世界一のろくでなしなんだ。
僕らはシーザーだったんだ。パンフレット、賄賂、警察、詐欺。100万ポンドもの金が
生まれるというのに、誰が僕らをひきずり降ろそうとするんだい？ 1970年

デレク・テイラー　9月のアメリカ・ツアーの終わりを前に、ブライアンと僕は反目し合うよ
うになっていた。実際、僕らは何度もやり合っていた。それは、僕がまだ独立心を持っ
ていたからだ。僕は、労働組合の権利や休日や自分の意見をはっきり発言するといった
ことについて詳しかった。また本来ならマネージャーがすべき仕事にも関わっていた。
"よし。ジョンはカメラの前でサウス・オーストラリアのオパールを贈呈することができる"
――"待て、それは契約の話だね"とブライアンは言う。"ジョンにカメラの前でサウス・
オーストラリアのオパールの贈呈をさせるなんて、君はそんな立場なのか？"――"気
がつかなかった"――"気がつくべきだったよ。君は職権を不当に行使しているよ。僕
はそういうことで君を雇ったんじゃない。君の仕事はこれなんだ。とにかく、君はビート
ルズのことには手を出すな。いつも僕のそばにいればいい"――"そんなの馬鹿げて
いる。それじゃあ、僕はやめる！"ということになった。
僕はニューヨークで彼らと別れた。9月、ツアーの最後に正式に辞職したけど、3カ月
前の予告が必要だって理由で、ブライアンは僕をクリスマス直前まで働かせた。彼は、
「ザ・ワイルド・サイド・オヴ・ライフ」という曲を歌っているトミー・クイックリーのアメリカ・ツ
アーという拷問のような仕事を僕にさせたんだ。
彼は、期間いっぱい僕を働かせた上、残留を持ちかけてきた。"デレク、君と僕、
我々はうまくやってるじゃないか"――"そう、そうだね、ブライアン。でも、やめればす
ごく楽になるんだ。なんで彼らと一緒に仕事したいと思ったのか、僕はもうわからない
んだ。友だちでいる間は、それでよかった。この世界とさよならして、新聞の世界に戻
ることにするよ"
そういうわけで、僕は「デイリー・ミラー」の記者になった。ほとんど普通の、ただの
記者だった。幸せだった。

ジョン
おやすみ。そして、パンをありがとう。 1964年

: Paid out, 11th February
bank charges,
e to Beatles Limited -　　£ 85,273.18. 5.

リンゴ ニューヨークでボブ・ディランに会った。僕がマリファナを吸ったのは、その時が初めてだった。僕は、笑って、笑って、笑いまくった。気分がよかった。

リンゴ　ボブ・ディランは、僕らのヒーローだった。ジョンを通じてボブを知ったんだ。ジョンがボブのレコードを聴かせてくれて、彼は、ほんとにすごいと思った。すごい曲を作る、粋な若者だった。彼の曲は時代を反映して、詩的ですばらしい態度に貫かれていた。

ボール　僕らがニューヨークにいたある夜、ボブがやって来た。彼は僕らのアイドルだった。リバプールにいた時に、グラナダ・テレビでニューヨークのビート詩人を描いた番組をやっていた。ボブがアレン・ギンズバーグと一緒に歌っているのを見たんだ。だから僕らは、彼に詩人として興味を持ち始めた。彼のファースト・アルバムは全員持っていた。ジャケットのボブは、くたっとしたキャップをかぶっていた。ジョンがかぶっていたようなやつだよ。レノン・キャップの出所を確認したよ。ジョンは、特に入れ込んでいたんだ。「ユーヴ・ゴット・トゥ・ハイド・ユア・ラヴ・アウェイ」みたいな曲に、それが出てるね。

ジョン　ボブ・ディランに会った時、僕はすごく感動した。僕はすぐファンになりやすいタイプなんだけど、自分でやるようになってからは"ファン"になるのをやめていた。サインを集めたりするのに熱を上げたことはないけど、もし誰かを好きになったら、とことん好きになる方なんだ。1971年

「ユーヴ・ゴット・トゥ・ハイド・ユア・ラヴ・アウェイ」は、僕のディラン時代の曲だ。1974年

ちょっと悲しげに、自分に歌って聴かせるタイプの曲。"Here I stand, head in hand……"(頭を抱えて、立ち尽くしている)。僕は、自分自身の感情を表現するようになっていた。いつからだったのか、正確にはわからない。「アイム・ア・ルーザー」か「ユーヴ・ゴット・トゥ・ハイド・ユア・ラヴ・アウェイ」あたりかな。あるシチュエーションに自分を投影する代わりに、自分自身についてどう感じているか表現しようとしたんだ。それまでは、自分の本の中でやっていた。僕にそれを気づかせてくれたのはディランだ——話し合いとかをしたわけじゃなく、彼の作品を聴くうちに、気づいたんだ。

僕はポップ・ソングの作曲をいわば職業作曲家の姿勢でやってきた。シングル用にあるスタイルの曲をひねり出し、あれこれの目的にフィットするように、あるスタイルの曲をひねり出すという姿勢だ。僕の中には、ダンス・ホール向けの曲を書くジョン・レノンという別人の作曲家がいて、僕はこれ(歌詞であれ何であれ)にまったく重要性を感じていなかった。自分自身を表現するのは、「ア・スパニアード・イン・ザ・ワークス」や「イン・ヒズ・オウン・ライト」だった。この2冊は僕の個人的な感情を表現した私的ストーリーだ。その後、僕は曲においても自分自身を表現するようになった。客観的ではなく、主観的に書くようになったんだ。1970年

ボール　歌い方と詩の面で、ディランからは多大な影響を受けた。歌詞について言えま、彼は今も最高の詩人のひとりだ。彼の音楽に乗せながら漫然と話すような長い詩のいくつかは、今も僕の好きな作品だ。。

彼が僕らに教えたもののひとつにマリファナがある。つまりその、僕らはこういうジョクを聞いたことがあった。レイ・チャールズがハマースミス・オデオンに出た時、清掃員こう言った。"すごくケチに違いないよ。あのレイ・チャールズって人は——彼のバンドのュージシャンが、トイレの中で1本の煙草をふたりで分け合ってるんだもの!"。このジョはおもしろいと思ったけど、自分たちには関係ないことだった。そしてボブが現れた。は、僕らのホテルにやって来て"ほら、これ、ちょっと試してみなよ"と言ったんだ。ことを喋るなんて、すごく軽率だよね。だって、ボブがビートルズにマリファナを教えは自分だって明かすかどうか、わからないもの。でも、あれはおかしかった。

ドラッグはずいぶん昔からあったんだよ。ジャズ・ミュージシャンはみんな、もう何年も前からきつい麻薬をやっていた——ただ、メディアに載るようになったの代からだったんだ。僕らがまだ子どもの頃、リバプールにもマリファナを吸う人。もっとも、当時の僕はあまりよくわかってなかったけど。黒人の若い男やそのんなジャマイカ出身で、マリファナはそこかしこにたくさんあった。ちょうどビー出始めた頃だった。1960年に、誰かが僕らにマリファナを見せてくれたんだ。たけど、その時は何だかわからなかったよ。僕らは酔っぱらっていたからね。

初めてのマリファナは、リバプールのあるグループの年上のドラマーから手にンブルクに行くまでは、実際に試したことはなかった。サウスポートでライブに楽屋で吸ったのを覚えている。その夜、僕らは全員、当時人気だったツってみたんだ。みんなこう言った。"これを吸ってもどうにもならないね"。こらあるこんなジョークみたいだ。パーティをやっていて、ヒッピーふたりがフワフワ浮かんでいる。片方のヒッピーが相手にこう言うんだ。"なあ、こないな"。

ジョン　ボブ・ディランが僕らのレコードを聴いていた。「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」の歌詞の"I can't hide"(隠せない)という歌詞が、彼には"I get high"(ハイになる)に聴こえて、それで彼は僕らのところに飛んできてこう言った。"おい、俺、すごいいクスリ持ってるぜ"。こんな男、好きにならないわけがない。彼は僕らがドラッグを常用していると思ったんだ。僕らはひと晩中、ドラッグをやって、笑った。電話が鳴るたびにボブが出てこう答えた。"はい、ビートルマニアです"。すごくおかしかった。1969年

ジョージ　僕らには、アル・アロノウィッツという共通の友人がいた。彼は『サタデイ・イヴニング・ポスト』に勤めていて、僕らとは1963年からのつきあいだった。アル・アロノウィッツとボブは、ビートニク仲間だった。僕らはいつもボブ・ディランやビートニクが好きだった。僕は今でもそう——今でも、普通と違う奴が好きなんだ。アルがやったことのひとつに、ビートルズとボブ・ディランのレコードのロシアへの持ち込みがある。彼は政治活動分子になろうとしたんだ。彼はボブの友だちで、僕らに電話をかけ、ボブと一緒にいるから合流しようと言ってきた。アルがホテルにボブを連れてきた。僕らはみんなすごく気が合い、話をして大笑いした。

ボール　初めて会った夜は、狂ったパーティになった。その夜、僕は人生の意味を見つけた気がして落ち着かなかった。僕はマルに何度もこう言った。"鉛筆と紙をくれ、ひらめいたんだ"。マルも少しボーッとしていて最初は鉛筆も紙もどこにあるのかわからなかった。僕は宇宙からのメッセージを書き留めて"じゃ、これをマルのポケットに入れておいて"と伝えた。翌朝マルがこう言った。"ああ、ポール、あの紙、見る?"そこには"7つのレベルがある"と書いてあった。まあ、いいじゃないか。まったく的外れだったかもしれないけれど、とにかくすごく楽しかったんだから。

ドラッグは今では深刻な問題になっている。だから、ここでそれについて書くのは難しい。今の時代の人たちに影響を与えたくはないからね——僕自身にも子どもがいる(僕らがよくそういう話をしていた頃は、もうちょっと軽いものだった。スコッチ・ウイスキーとコーラに相対するものとして、マリファナとワインの話ができた)。でも、これは真実のひとつなんだ。

ジョン　何を話したか、あまり覚え[illegible]麻薬を吸って、ワインを飲んで、基本的にはロックン・ローラーになって、笑[illegible]まあ、知ってのとおりシュールだった。あれはパーティだったんだ。

ひとつ大切なことを思い出した[illegible]クのホテルで(彼は新しいレコードを作るたびにデモを持ってきた)、彼が[illegible]"おい、ジョン、歌詞を聴いてくれよ"
"歌詞は忘れろ!"。僕らみんな[illegible]んだ。その僕らに歌詞を聴けだって?それはできないよ。僕らはただ、リズム[illegible]方を聴いたんだ。1974年

ボール　ディランとジョンに一番大きな影響を与えたのはディラン・トーマスだ。ボブがロバート・ジンマーマンという本名を使っていないのはディラン・トーマスにあこがれていたからさ。かつて僕らはみんなディラン・トーマスが好きだった。僕も彼の作品はたくさん読んだ。ジョンが文章を書き始めたのは彼がいたからだと思う。そして、ボブ・ディランが詩を書いていたことで、ディラン・トーマスに対するジョンの興味はよけいに高まった。ジョンはすでに『イン・ヒズ・オウン・ライト』で(独自に)それをやっていた。彼は、ボブ・ディランを知る前から文章を書いていたんだ。

僕らはいつもそういうことに興味を持っていた。僕らには、少し学生みたいなところがあって、そうじゃない他のバンドのことをよくからかっていた。一度、ハンブルクで詩の本を受け取ったことがある。エフトゥシェンコだった。ガールフレンドが送ってくれたんだ。みんながサックスや機材を置いている共同の楽屋で出番を待っていると、他のグループのサックス・プレイヤーが楽屋に入ろうとしてノックした。僕らは"どうぞ"と言った。みんながいろいろなポーズで"イエー、アー、アー"と騒いでいる脇で、僕は本を読んでいた。"その黄色い花は、無意識のうちに緑の階段を飾っている"。その男は忍び足で通り過ぎた。"悪い、邪魔するつもりはなかったんだ"だって。

僕らはいつも詩の本を持っていた。それは僕らの機材の一部のようなものだった。僕ら全員が大好きで不可欠なもの——それはアートだった。ジョンはアート・カレッジに通っていたし、僕は学校時代に美術で小さな賞をもらったことがあった(決してガリ勉じゃなかったけど、たまにすごくいい成績を取ることがあったんだ。1953年に、即位式エッセイ・コンテストがあった。今の女王陛下の栄誉ある即位のお祝いとして、イギリスの子ども全員が、君主制に関するエッセイを書くように言われてね。僕はそれで賞品をもらった。現代美術の本だった)。

僕らの曲や歌詞には、確かにこういう要素があった。そして僕らが興味を持った人も同じ影響を受けていた。たとえば、ボブ・ディランがそうだ。すべて、ここに行き着くんだ。

CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　アメリカ・ツアーを終えてイギリスに戻り、アルバム「ビートルズ・フォー・セール」とシングル「アイ・フィール・ファイン」を録音した。そのあとまた映画館や小さな劇場を回るイギリス・ツアーを開始した。ビートルズがイギリスでやった最大のコンサート会場はウェンブリー・アリーナだった。でも、主にやっていたのは、オデオン映画館のような小規模のところだったんだ。

ジョージ　1964年10月、僕らはまたイギリス・ツアーを始めた。アメリカでは大きなスタジアムで演奏したけど、以前から入っていたイギリスでの仕事はアクリントンの労働者クラブあたりでわずかな報酬で演奏するようなものだった。僕らは成功を収めてからも有名になる前に約束していた仕事をちゃんとこなした。このことは誰もが誇りに思っていた。

リンゴ　1963年と同じだった。どこかの小さなクラブで演奏する契約をしていれば、僕らはちゃんとそこに行って当初の条件どおりの報酬で演奏した。僕らもブライアンも誠意を重んじる人間だったんだ。でも、かなり場違いの感じもあったけどね。人里離れた小さなダンス・ホールで僕らが演奏し、そこが満員になるとかね。でも、僕らはそういうショーを全部こなしたんだ。

僕は、ビートルズが音楽面で飛躍的に進歩していると感じていた。「ビートルズ・フォー・セール」と「ラバー・ソウル」の数曲は、[illegible]輝いていた。スタジオ内が、ほんとにエキサイティングになってきていた。リハーサル、レコーディング、曲の仕上げ、全部スタジオでやったんだ。他の場所を借りて練習するようなことはなかった。なぜかというと、ほとんどの曲が未完成だったからさ。[illegible]、あるいはコーラスのアイディアはあっても、みんなでやりながらそこでいいアイディアが生まれたら変わっていくんだ。

[illegible]聴かされる時は、だいたいギターかピアノだった。いろいろな曲の進化の過程をずっと聴いているのはすごいよ。[illegible]ていくんだから。まず最初に、作曲者が"こんな感じ"と言ってピアノかギターで弾き語りをする。彼らは毎回必ず[illegible]プレイの練習をすると同時に彼らは歌を練習してたんだ。

[illegible]ーディングのほとんどは、3トラックでやっていた。1トラックはオーバーダブ用だった。僕らはバンドとしてのまとまり[illegible]僕らは何度も何度も演奏した。歌い続ける奴がひとりいれば、僕ら4人は永久に演奏を続けられた。"ベース[illegible]はあとで入れよう"ということはなかったし、ボーカルも含め、ほとんどをその場で入れた。曲はいろいろな場所で書か[illegible]ようだ。

[illegible]「ビートルズ・フォー・セール」のレコーディングは、長くはかからなかった。この作品はカバー曲が多かったから、僕らのステージ・ショーに新曲がいくつか加わるって感じだった。――たとえば「エイト・デイズ・ア・ウィーク」とかね。ウェイブリッジのジョンの家でこの曲を書いた時のことを覚えている。ネタになったのは、僕を乗せてきた運転手の言葉だった。ジョンはロンドンを離れ、郊外に引っ越していた。僕はいつもは自分で運転していたんだけど、その日は運転手に乗せてきてもらったんだ。僕が"最近どう？"と尋ねると、運転手は"もう、すごく忙しくて"と答え、"週8日働いているよ"と言った。こんな表現を聞くのは初めてだった。だから僕はジョンの家に着くと、"あのさ、彼、さっきeight days a weekって言ってたよ"と教えた。するとジョンが歌い出した。"そうか思いついたぞ、よし――Oooh, I need your love, babe・・・・・"(君の愛が必要なんだ)。そして僕らはあの曲を書いた。僕らの曲作りはいつもすごく速かった。思いついたらすぐその場で書いていたんだ。僕がジョンの家に行き、そこで彼と一緒にインスピレーションを見つけたり、誰かが何かを言うのを聞いたりしていた。

ジョンと僕は、いつもタイトルを探していた。いいタイトルが見つかれば、誰かに"今度の新曲は何？"と聞かれた時、人の興味を惹く返事ができる。そうなれば半分成功だ。もちろん、曲がよくなくちゃダメだけどね。仮に「アイ・アム・オン・マイ・ウェイ・トゥ・ア・パーティ・ウィズ・ユー、ベイブ」(君と一緒にパーティに行く途中)という曲だと答えたとすると、人は「ああそう…」となるかもしれない。でも「エイト・デイズ・ア・ウィーク」だと、"へえー、おもしろそうだね！"と言われるだろう。「ア・ハード・デイズ・ナイト」なんてタイトルがあれば、もう人々の心をつかんだも同然なんだ。

だから、僕らはまずタイトルから始めた。よくジョンの家に行ったな。彼は、僕が行くと起きるんだよ。ジョンと一緒にお茶を1杯とコーンフレークの食事をとり、ふたりで小さな部屋に入り、ギターを取り出し、あれこれ考える。長くはかからなかった。僕は2、3時間で帰っていたもの。だいたいいつも、シンシアやたまたまその場にいた人に聴かせた。当時はカセットがなかったから、記録することはできなかったんだ。覚えておかなくちゃならなかった。いつもそれがいい教訓となった。"もし、僕らが忘れてしまうようなら、くだらない曲なんだ"。

ジョン　ポップ・スターは、いわゆる高級住宅地に住むものだと考えられているよね。
他のポップ・スターがなぜそういう地区に引っ越すのか、僕にはわからない。
僕が今住んでいる家は、アパートからすぐ出なくてはいけなくなって、3軒目ぐらいに下見した家で、
どこでもいいから引っ越したんだ。ロンドンに住みたいとは思ったけど、事態が落ち着くまでは、リスクを冒す気はなかった。
すごく大きくて、リバプールに帰ったり、親戚の家を訪ねたりして自分の家と比較するまで、
その大きさに気づかなかったよ。3階建てなんだ。ギター約14本、ピアノ20台、オルガン、テープ・レコーダー、あらゆるものを
置いてある部屋がひとつある。その隣は、レーシング・カーでいっぱい。その隣の部屋には書き物をする机があって、
その隣には、スロット・マシンとかサッカー・ゲームとか、コインで遊ぶゲームがたくさんある。それ以外の場所は普通だよ。
でも、これでも十分な大きさじゃない。巨大な場所が必要なんだ。 1965年

CamScannerでスキャン

ジョン　「エイト・デイズ・ア・ウィーク」は、ポールが映画用のシングルを作ろうと努力した作品なんだ。それが幸運にも僕の書いた「ヘルプ！」に変わったんだ。あれは僕がパッと書いたものだけど、シングルになった。「エイト・デイズ・ア・ウィーク」は、決していい作品じゃなかったね。最終的にどうにかこうにか録音し、どうにかこうにかまとめた曲だった。最初は彼が努力したけど、僕らふたりで仕上げた曲だと思う。1980年

「アイム・ア・ルーザー」は、歌詞に"clown"（道化者）という言葉が入っていて、ディラン時代の僕自身を歌った曲なんだ。僕は"clown"という言葉には否定的だった。いつも、やけに気取った言葉だと思っていたからね。だけど、ディランが使ったからいいかな、と思ったんだ。韻も踏みやすいしね。1974年　僕の中には、自分はルーザー（敗者）じゃないかと危惧する部分と全能の神と思っている部分があるんだ。

「ノー・リプライ」は僕の曲。出版を管理していたディック・ジェイムズは、この曲について"君の作品では初めて、自身の中で解決している完璧な曲だ"と言った。これには完結したストーリーがあるからね。これはジョン・レノン版「シルエット」なんだ。街を歩いていたら彼女の家の窓にシルエットが映っていた、でも彼女は電話に出ない。こんなイメージを持っていたんだ。でも、僕は女の子に電話をかけたことは一度もないけどね——イギリスの子どもにとって、電話は生活の一部じゃなかったんだ。1980年

ジョージ　僕らのレコードは進化していた。初めてスタジオに入った時は、僕らも他の新人と何も変わりはなかった——興奮していて、未熟で、成功を求めていた。だけど、たくさんのヒット曲が出て、ツアーも何回か経験し、肩の力が抜けてスタジオでも緊張しなくなってきた。そして音楽はよくなっていった。

このアルバムのために、リハーサルした曲は新曲だけだった。「ハニー・ドント」とか「エヴリバディズ・トライング・トゥ・ビー・マイ・ベイビー」（みんないい娘）とかは、ライブで何度もやっていたから、音決めをして演奏するだけでよかった。だけど「ベイビーズ・イン・ブラック」なんかは、覚えて練習しなければならなかった。ジョージ・マーティンが、それほど多くはなかったけど、いくつかのアイディアを提案してね。オーバーダビングも少しやり始めたよ。たぶん4トラックで。彼はいつも僕らの作品の重要な一部になっていた。

ポール　僕らはますます自由に自分自身を追求するようになった。「フロム・ミー・トゥ・ユー」、「サンキュー・ガール」、「P. S. アイ・ラヴ・ユー」でやったような、"女の子を喜ばせてお金を稼がなきゃ"という意識よりも、学生みたいな感覚が強かったんだ。「ベイビーズ・イン・ブラック」は、ワルツのリズムが好きだったからやった——僕らは、よく「イフ・ユー・ガッタ・メイク・フール・オブ・サムバディ」をやっていたんだ。4分の3拍子のかっこいいブルースだ。他のバンドから、よくこんな風に言われたよ。"何だ、ひどいな。3拍子なんかやってんのか"。僕らはそれで知られるようになった。ジョンと僕はストレートなポップより、ブルージーで少し暗めの大人びた曲をやりたかったんだと思う。それが、喪に服しているかのように"彼女が黒い服を着ている"（baby's in black）みたいなイメージにつながった。それに、黒は僕らの好きな色でもあったしね。

リンゴ　僕らはみんな「ハニー・ドント」を知っていた。リバプールのどのバンドも演奏した曲のひとつだった。僕はカントリー・ミュージックとカントリー・ロックが大好きで、ロリー・ストームのバンドでは、僕のショー・タイムがあって、5、6曲歌っていたよ。だから、演奏しながら歌うのは経験ずみだったんだ。「ビートルズ・フォー・セール」でこの曲をやったのは、僕のショータイムってわけだったんだ。脚光を浴びるひと時は、気分がよかったよ。とうとう自分の持ち歌が1曲レコードに入ったんだ。

ジョン　「アイ・フィール・ファイン」は、バックでずっと鳴ってるあのリフを中心に書いたんだ。僕は、あの効果をLPの全曲で生かそうとした。だけど、他のメンバーはそうしようとしなかった。僕は、リフのための曲を特別に書きたいと言った。すると彼らは、アルバムがほとんど完成していたのを知りながら、"そう、ならやりなよ"と言った。とにかく、ある朝スタジオに入る時、僕はリンゴに"この曲を書いたんだ。だけど、どうもよくない"。それでも僕らは、リフをつけてその曲を試してみた。そうしたら、A面にふさわしい感じに仕上がったので、あの形でリリースしたんだ。

ジョージと僕がギターで同じパートを一緒に弾いた——評論で"足でリズムを取りたくなる"と言われた箇所だ。あの曲にはどこかカントリー＆ウェスタン風のところがあるけど。まあ、僕らの曲では珍しくないよね。サビは、僕から見て一番音楽的な部分だ。いかにもビートルズらしい部分だろ。1964年

ョージ　あのギターのリフは、実はボビー・パーカーの「ウォッチ・ユア・ステップ」というレコードの影響を受けているんだ。だけど、あのテンポのリフはみんな似たようなサウンドになる。ジョンがあのパートを演奏し、僕もひたすら同じように弾いた。それでダブル・トラック風のサウンドになったんだ。

ョン　「ウォッチ・ユア・ステップ」は、僕の好きなレコードのひとつだ。ビートルズは、いろんな形でアイディアを取り入れた。オールマン・ブラザーズはそのままパクってたけ1974年

ージ　ジョンは、偶然出してしまったフィードバックの音を気に入って、曲の頭に入とおもしろいと考えた。それ以後、彼はすべてのテイクで、わざとフィードバックが起うな位置にギターを構えていた。

ジョン　フィードバックをレコードに使ったのは、あれが世界で初めてだ。あんな風にフィードバックを使ったレコードはないはずだよ——1922年の古いブルースのレコード以外には。今じゃステージでは、誰だってフィードバックをやっているけどね。ジミ・ヘンドリックスみたいなプレイも（彼より）ずっと前からあったんだ。実際、今のパンクも、かつて僕らがクラブでやっていたことと同じだ。僕は、ビートルズこそが——ジミ・ヘンドリックスよりも、ザ・フーよりも、誰よりも前に——初めてレコードでフィードバックを使ったアーティストだと主張するよ。

B面の「シーズ・ア・ウーマン」はポールの作品で、確か、僕が手伝った歌詞が少し入っている。"turns me on"（僕を元気にしてくれる）という言葉を入れたんだけど、"turns me on"と言うのは興奮したよ——だってさ、この表現はマリファナがらみでも使えたろ。

ポールと僕の間には、どちらがA面をとるか、どちらがヒット・シングルを出すかという部分でちょっとした競争があった。気づいているかもしれないけど、初期の大多数のシングルは——映画でも何でも——僕の作品だった。その後、僕が自分を意識して内省的になり始めると、もしかして占星学上の問題かもしれないけど、初めてポールがグループの中で優勢になり始めた。でも、初めのうちは、明らかに僕が優勢だったよ。「ラヴ・ミー・ドゥ」以外、僕は実質的にすべてのシングルで歌っていた。僕の曲か僕のボーカルか、あるいはその両方だった。「ア・ハード・デイズ・ナイト」でポールが歌ったのは、僕には音が高すぎた——"When I'm home, everything seems to be right. When I'm home……"の部分——からにすぎない。こういうことは、時々あった。音が高すぎて歌えないけど、その代わりに別のサウンドがほしい時は、他のメンバーにハーモニーをさせていた。

敵意はなかったけど、競争心はあった。つまり、ふたりの間にはいつもライバル意識があったということだ。でもこれは建設的なライバル意識で、ビートルズとストーンズの関係も似たようなものだった。僕は、若い頃から、この"兄弟同士のライバル意識"を生かして曲を書いていた。だから、これは悪意ある残酷な争いではなかったよ。そういうレベルの話ではないんだ。1980年

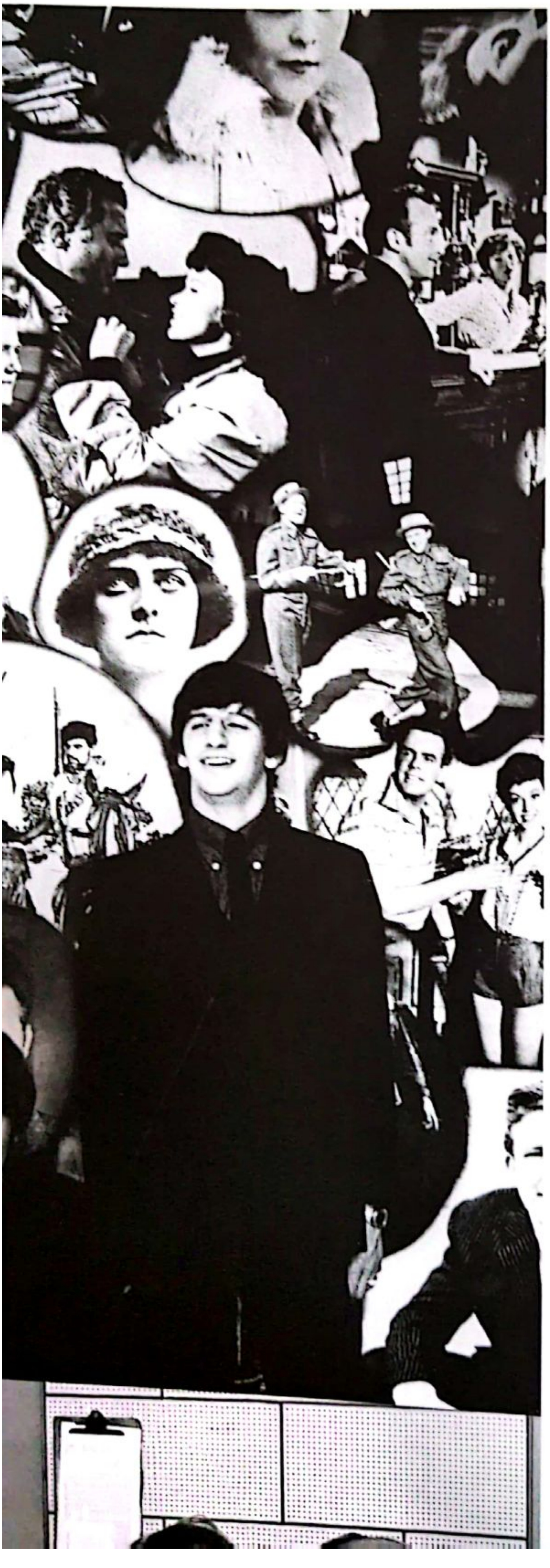
ポール　アルバム・ジャケットは、けっこういいよね。ロバート・フリーマンの写真だ。楽だったよ。2時間ぐらいの撮影で、使えそうな適当な写真がいくつか撮れたんだ。僕らは、ハイド・パークのアルバート記念碑のところに集まった。あの時の小さなモップみたいなジョージの髪型は印象的だった。カメラマンは、いつも僕らに"もっと派手に"と注文した。僕らが年中同じような格好をしていたからだ。黒い服に白いシャツと大きな黒いマフラーだ。

リンゴ　買い物する時は、みんなで同じ店に行った。僕が青いシャツを買うと、誰かが色違いのピンクを買い、誰かが衿の型違いのボタン・ダウンを買うといった具合だった。そういうわけで、僕らはどの写真でも同じような服を着てるんだ。

たとえば、あの有名な衿なしジャケットは、「サンク・ユア・ラッキー・スターズ」——テレビ番組——でライブをする時に買ったものだ。僕らはシャフツベリー・アヴェニュー界隈にいた。ショー・ウィンドウにあのスーツを見つけ、すぐ店に入って買った。みんな1着買ったんだ。そしたら、いきなりそれがユニフォームになった。僕らは、こんな風にいろんな店に行って、自分たちでユニフォームを買っていた。これも、僕らがビートルズらしく見えたひとつの理由だ。髪型以外でも、僕らはみんな同じような外見だったんだ。

ジョン　新しいシングルとアルバムができて、ほんとに満足している。不調の時期もあって、その時はLPにする曲もないように思えたし、シングルも出せなかった。今、僕らは問題をクリアし、発売の予定もたった。ちょっとほっとしてるよ。1964年

CamScannerでスキャン



ニール・アスピノール　9月末に長いアメリカ・ツアーを終えて、曲を同時進行で書きながらスタジオに入ってニュー・アルバムに取りかかり、そのあと続けてイギリス・ツアーを始め、ツアーの合い間に5週間でアルバムを完成させ、アルバムをクリスマスに間に合うように出すバンドなんて、今はいないだろう。でも、1964年の終わりに、ビートルズはそれをやっていたんだ。世間知らずな面もたくさんあったからだろうけど。世の中そんなものさと思っていた。レコード会社からニュー・アルバムを求められたら、行って作るものだと思ってたよ。今だったら、1964年末のビートルズと同じぐらいの成功を収めたバンドは、自分たちの要求を少し出し始めるよね。

かつてジョンがこう言っていた。“僕らは青春のすべてをビートルズに捧げた”と。

1963年末と1964年1年間の仕事の予定を見れば、ほんとに信じられないスケジュールだったよ。ツアーとレコードと映画に加え、クリスマス・ショーや、『トップ・オブ・ザ・ポップス』、『サンク・ユア・ラッキー・スターズ』、『アラウンド・ザ・ビートルズ』(37回)といったテレビ番組もやったんだ。それに、BBCのラジオ番組(22回)もあったからね。まさにノンストップだ。

ブライアンは、かなり先の計画を立てるようになってたし、例えば1964年のクリスマスには、1965年のアメリカ・ツアーを計画し、『ヘルプ！』の台本をまとめようとしていた。また、ツアーの計画も考えていた。これらすべてが進行している大変な時に、誰かがこんな切実な提案を出していたよ。“ブライアン、休みも1日入れられるかな？”。

CamScannerでスキャン

1965

nineteen sixty-five

CamScannerでスキャン

リンゴ　モーリーンと結婚したのは、1965年の2月だった。

知り合ったのはキャバーン・クラブだよ。客として来ていたモーリーンと彼女の友だちを家まで送って行ったんだ。"君の家まで送らせてくれよ？"――"いいわよ、でも友達も一緒よ"――"いいよ"なんて会話は、当時のリバプールではごく当たり前だった。それから何日かして誘うんだ"ねえ、ふたりだけで出かけない？"ってね。

僕らはごく自然にステディな関係になった。仕事をしながら彼女とつきあうのは楽じゃなかったよ。しょっちゅうツアーに出ていたし、休みはほとんどなかったからね。でも、休日は必ずモーリーンと一緒に過ごしたんだ。特に月曜日は公演がほとんど休みだったから、僕はモーリーンに会うためにリバプールに飛んで帰ってきた。一緒にパブに行ったり、映画やショーを見たり、レストランに行ったり、朝から晩までずっと一緒にいたよ。

全米ツアーから戻ってまもなく、僕は扁桃腺の手術で入院したんだ。その時モーリーンは、ロンドンにいる僕の母親とずっと一緒にいてくれたのさ。その時僕は決心した。"結婚してくれないか？"って言うと、彼女は"いいわよ"って答えた。僕らは少しずつ愛情を深め合って、ついには結婚して3人の子供に恵まれた。1975年まで、僕を支えてくれたのはモーリーンなんだよ。

ジョン　メンバーふたりが結婚していることとビートルズの人気とは全然関係ないよ。だいたい、リンゴと僕の結婚が発表されるまで、僕らみたいな立場で結婚していた人間はいなかったんだ。僕らより早く結婚していたのは（ゴールド・ディスクじゃなくて）シルバー・ディスクぐらいのスターで、しかもセクシー路線で売っていたような連中だ。でも、僕らはセクシーさを売り物にしたことはないし、今だってそうだ。いくら熱心に愛してくれるからってファンに媚びたりしたことはないよ。1965年

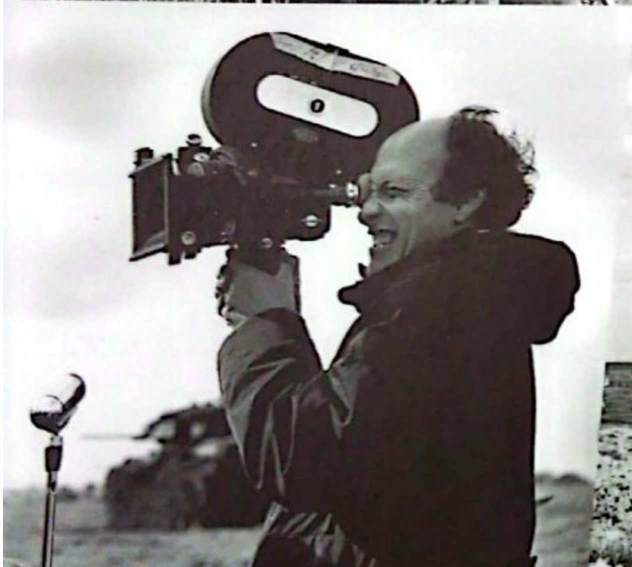
Mr. Webb,
Bryce Hanmer & Co.
23, Albemarle Street,
London W.1.

Dear Mr. Webb,

I would be grateful if you would send an extra 48/- this week to the cleaning lady for John Lennon.

Yours sincerely,

Peter Brown



CamScannerでスキャン

ジョージ　2月になって2作目の映画『ヘルプ！』の撮影を始めた。イギリスの他に、バハマとオーストリアでもロケをしたんだ。映画のロケはすごく楽しかったよ。撮影中はぶらぶら過ごしている時間が多かったけど、最初のロケ地のバハマにはビーチがあったしね。

驚くようなシーンも撮ったよ。カットされちゃったけどね。僕らはなるべくたくさんのフィルムを回そうとしていたんだ。レンタカーで島めぐりをしながらね。僕らが借りたのは、トライアンフ・スピットファイアーとMGBのスポーツ・カーだった。撮影中はいつも警官が一緒だったから、スピード違反でつかまる心配はなかったんだ。

ある時、石切場の跡地を見つけた僕らは、夢中になって車を乗りまわした。横滑りさせたり、ぐるぐるまわってスピンさせたり、もうメチャクチャだったよ。そこにはリチャード・レスターを呼んできて、カメラをセットし、撮影してもらったんだ。魚眼レンズで撮影したフィルムを観せてもらった時は驚いたよ。金色に輝く巨大な石切場で、青と赤のおもちゃみたいなスポーツ・カーが上がったり下がったりしながら、くるくるまわってるんだ。今思えば、なんで映画に使わなかったのか不思議なくらいだ。

リンゴ　バハマでは夏のシーンを撮ったんだけど、あんまり寒いんでまいったよ。シャツとズボンだけで自転車に乗ったり走ったりさせられて、凍え死ぬかと思った。

ニール・アスピノール　あとからヨーロッパで映画の最初の方のシーンを撮影するって決まってたから、日焼けするわけにいかなかった。だから、彼らは帽子をかぶって、日陰に隠れていた。

ブライアン・エプスタイン　ポール、リンゴと一緒にロンドンを出発した。ヒースロー空港に着くと、すでにジョンとジョージが来ていた。車がクイーンズビルに近づくと、屋上で大勢のファンが見送っていた。角を曲がって滑走路の前で車を降りると、溢れんばかりのファンが集まってプラカードを掲げて手を振り、歓声をあげていた。ファンに気づいたジョンとジョージは、かなり驚いた様子だった。ポールとリンゴも興奮していた。

4人は大勢のカメラマンの前でポーズをとり、航空会社からストップがかかるまで、ファンに手を振り続けた。ビートルズがファンの応援を大切にしていることが、みんなに十分に伝わったと思う。

バハマ・ロケの一行は78名、機内は満席だった。エリナー・ブロン、俳優のビクター・スピネッティ、ジョン・ブルタル、パトリック・カーギル、プロデューサーのウォルター・シェンソンと監督のリチャード・レスター、人気カメラマンのロバート・フリーマンが同行した。ビートルズのロード・マネージャーであるニール・アスピノールとマルコム・エヴァンスも、写真、のど飴、タバコなど、ツアー用の必需品を携えて乗り込んだ。

燃料補給のため立ち寄ったニューヨークは、かなり冷え込んでいた。イギリス出発から約11時間、現地時間の朝7時、チャーター便のボーイングがナッソーに到着した。暖かい気候と人々が出迎えてくれた。だが、ビートルズと私は、出迎えのファンに近づく隙も与えられず、記者会見の会場に連行されてしまった。アーティストが"ファンを無視した"とたたかれるのは仕方ないことなのだ。

その日の午前中からさっそく撮影を開始した。最初のシーンは、メンバーたちが自転車に乗って話をしながら大通りを走っていくところだった。4人とも演技力が一段と上達し、ごく自然に演じていたので、私はとても感動してしまった。特にリンゴは前作よりも、さらに俳優らしくなっていた。別の日に、服を着たまま(シャツにジーンズ、靴まで履いて)泳ぐシーンを撮影した。みんな大喜びだったが、ジョンは"ずっとやってみたかったことだけど、スーツとネクタイ姿の方がもっとよかったなあ"とつぶやいた。

金曜日、ナッソーを発つ前に、モーターボートを借りて4人がロケをしている小さな島に向かった。間一髪でロケ用のランチ・ボックスにありつき、4人と一緒に昼食をとることができた。4人ともこの映画の撮影を心から楽しんでいる様子で、今までになく意欲的だった。穏やかで愉快なレスター氏、聡明で包容力のあるシェンソン氏、そしてナッソーの人々と海と太陽が、4人をあたたかく見守ってくれるだろう。私はそう信じてナッソーをあとにした。—アップルの倉庫に残っていたノートの写しより

リンゴ　『ヘルプ！』のシナリオは、僕と、指輪と、カイリ教徒をめぐるストーリーだった。僕が主役に選ばれたのは、前作の映画で、僕がかなり熱心だったからじゃないかな。

ジョン　誰であろうと、その指輪をはめている人間が生け贄になる運命なんだ。僕らはリンゴを助けるために彼の指から指輪をはずそうと努力するんだけど、他にもいろんな理由で指輪を狙っている連中がいるのさ。複雑なんだけど、基本的には、リンゴが生け贄になるのを阻止しようっていう話だよ。1965年

ポール　「ア・ハード・デイズ・ナイト」の時は、脚本を覚えようと努力したけど、『ヘルプ！』の話がきた時は、冗談だろうぐらいに思っていたんだ。誰も脚本を知らなかったと思うよ。撮影しながらセリフを覚えた記憶があるからね。

ジョン　この映画では、僕らは言われたとおりにやるしかなかったんだ。「ア・ハード・デイズ・ナイト」では最初にいろんな情報をもらっていたし、ほとんどドキュメンタリーだったけど、「ヘルプ！」の時はどんな映画なのか、リチャード・レスターはまったく教えてくれなかった。今思えば、「バットマン」なんかのテレビ番組の先駆けみたいな、かなり画期的な作品だったけど、そんな説明はまったくなかった。1作目が終わって2作目にかかるまで、ほとんど時間がなかったこともあるけど、考えてみたら、僕らはたいてい朝食の時にマリファナを吸っていたのさ。つまり、だれも僕らとまともな話なんかできなかったんだよ。何しろ、目はトロンとしているし、始終ゲラゲラ笑ってるし、自分たちだけの世界に浸っていたんだからね。1980年　何もすることがないのに朝7時に起きなきゃならないから、みんな退屈してたのさ。1970年

リンゴ　撮影期間中は山ほどマリファナを吸ったね。すごかったよ。でも、おかげで大いに楽しむことができた。

ジョージ　ブランドン・デ・ワイルド(1972年、自動車事故で死亡)っていうジェイムス・ディーンみたいな俳優がいたんだ。彼はビートルズの大ファンで、僕らがバハマで撮影することを聞いてニューヨークから飛行機で乗り込んできたのさ。マリファナの大袋を手みやげにね。僕らはバハマに着く前からマリファナを吸い始めていた。俳優と撮影スタッフだけしか乗っていないチャーター便だったから、気づかれないと思ったんだ。マルは、マリファナの匂いが消えるように、せっせと葉巻を吹かしてくれたよ。

CamScannerでスキャン

ジョージ　次のロケ地はオーストリアだった。僕がスキーをしたのは、あれが最初で最後だね。すごく危険だったよ。今だったら映画を製作する前に、みんな保険に加入するし、俳優が怪我をするようなことはさせない。予算も限られているしね。でも、僕らはオーストリアに連れて行かれて、山に登らされ（紐すら結んだことのない）、スキー・ブーツとスキー板を履かされたあげく、"では、ターンしてください。テイク1、アクション！"の声で、いきなり背中を押されたんだよ。

リンゴ　オーストリアは初めてだったし、スキーをするのも初めてだったから、僕はすごく楽しかったよ。

ビクター・スピネッティとロイ・キニアが大きな石を滑らせて遊ぶというシーンがあったんだけど、石のひとつに爆弾が埋め込まれていたんだ。そいつが爆発するかもしれないっていうんで、僕らはあわてて逃げ出したよ。僕とポールは10キロは走ったね。運良く爆発を止めることができたから戻ってきたけど、国境を超えてスイスまで走っていきそうな勢いだったよ。

写真を見るとわかるけど、僕らはたいてい真っ赤な眼をしている。マリファナのせいだよ。それでいてクリーンカット・ボーイズ（清純な少年たち）とか言われていたんだから、呆れるよね！ レスター監督は、昼休みのあと、僕らがほとんど使いものにならないってわかっていたんだ。午後は、ワンカットでもOKが出れば上出来だった。僕らは手の施しようがないほど興奮していたから、監督も"ダメだよ、君たち。もう一度やり直そう"って言うしかなかったのさ。とにかく、あの頃は最高に楽しかったよ。

ジョン　フィルム編集室の床で笑い転げているだけで楽しかったんだ。何も言わないで、ただ寝そべっているだけなんだけど。1970年

ポール　ほろ酔い気分でにっこり笑ってれば、何とかなるさって感じだったね。いつもクスクス笑ってばかりいたよ。

クリヴデン（クリスティーヌ・キーラー　プロフモのスキャンダルで話題になったアスター卿の邸宅）でバッキンガム宮殿のシーンを撮った時もそうだった。僕らが両手を上にあげているシーンだ。ランチでワインを飲んだあとだったから、みんな浮かれていて、カメラに背を向けながら必死で笑いをこらえていたのさ。振り返った時に驚いた顔をしなきゃいけないのに、カメラの方を向くと、笑い涙でみんな顔がクシャクシャになってるんだ。どこで笑い転げてもかまわなかったけど、撮影中は許されなかったね。カメラマンがイライラしてくるんだ。"こいつら、まるでプロ意識がない"って思われていたよ。でも僕らは"プロらしくないけど、腹がよじれるほどおかしいんだから仕方ないさ！"って感じだった。

ジョージ　何日も同じシーンばかり撮ったこともある。パイプから赤い煙が立ち昇っていて、僕らが窓を開けるとガードマンが全員倒れているってシーンなんだけど、これを何度も何度も繰り返したんだよ。僕らはおかしくておかしくてヒステリックに笑いこけてばかりいたんだ。リチャード・レスターも、この時ばかりは、ついに堪忍袋の緒が切れたよ。ものすごくおおらかで、愉快な監督なんだけどね。

ジョン　映画は失敗だったね。撮影は楽しかったし、ある程度は満足したけど、自慢できるほどじゃないよ。すばらしいシーンがあるし、いい俳優もそろっているけどね　――もちろん僕らのことじゃないよ、僕らはできることをやっただけだから。レオ・マッカーンは最高の俳優だね。ビクター・スピネッティとロイ・キニアも、やせっぽちとデブっちょのいいコンビだ。映画は終わりの方より前半の方がよくできているけど、バハマのシーンはちょっと期待はずれだったな。

結局僕らは映画を極めようとしなかったんだ。自分たちのサウンドを作れるようになったのは、レコードを数枚発表してからだ。映画だって同じなんだと思うよ。映画で自分たちの表現ができると思えたなら、もっと執着しただろうね。エルヴィス・プレスリーが映画を極めていたら、僕らもそうしたかもしれない。重要なのは個性的な映画にすることだったんだ。僕らはレコードで、聴き手をあっと言わせるつもりだ。もうプレスリーには執着しないよ。とにかく、映画にはそれほど興味がない。映画のスピードは僕らに合わないんだ。僕らはもっと活発に動きたいのさ。観客がひとりしかいなくても、ライブで演奏する方がましだよ。

つまるところ、僕らはハリウッドを馬鹿にしていたんだよ。この映画でアカデミー賞をもらっても突き返そうぜ！ って決めていたぐらいだから。1965年

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ジョン　インドに初めて関心を持ったのは「ヘルプ!」の撮影中だ。奇妙なインド人と、指輪と生け贄を信じるアジアの一派が出てきてね、セットにシタールなんかの楽器が置いてあって、インド人のミュージシャンたちが演奏していたんだ。ジョージは彼らをじっと観察していたよ。

ロンドンのレストランで少しだけ撮影して、それからバハマで続きを撮ったんだ。ある時、僕らの前を小さなヨーガ行者が走り抜けて行ったのさ。当時は何者か見当もつかなかったけど、その小さなインド人がいそいそと近づいてきて僕らにヨガの本を差し出し、サインしてくれたんだよ。僕らはその本を見もしないで、他のプレゼントと一緒に重ねてしまったけどね。

それから2年ぐらいたって、セットの楽器を見てインド音楽に興味を持ったジョージが、ハタ・ヨーガの修行を始めたんだ。すべては、あのクレージーな映画がきっかけだったのさ。何年かして、ジョージは本をくれたヨーガ行者に再会したんだ。名前は忘れたよ。何しろ僕らは"ブラン・ブラン・バドゥーラバン"とかなんとか適当な名前で呼んでいたからね。ともかく僕らとインドの関係は「ヘルプ!」から始まったんだ。1972年

ジョージ　彼に出会ったことがすべての始まりだったね。偶然なんだけど、彼はパラダイス島に小さな家を持っていたんだ。スタッフのひとりが、「ザ・イラストレーテッド・ブック・オブ・ヨガ」という彼の著書を僕らにくれないかって、頼んでくれたんだろうね。僕らが自転車にまたがって撮影が始まるのを待っていると、オレンジ色のローブをまとったスワーミーがやってきたんだ。スワーミー・ビシュヌ・デバナンダ――ハタ・ヨーガの最高権威者さ。その日はなんと僕の誕生日だったんだよ。

何年かしてインド哲学に興味を持った僕は、リシケシュに行ってみたくなった。例の本を読み返してみて、彼がリシケシュのシヴァナンダ・アーシュラムの出身だとわかった時はびっくりしたよ。当時、彼はモントリオールに住んでいたんだけど、小さな飛行機を持っていて、あちこちの国を飛びまわっていたんだ。捕まって刑務所に入れられたけど、"国境なきツアー"を主張して有名になった。彼は国と国の間に国境を設けるという考えに反対していて、僕らみんなに"地球パスポート"まで発行してくれたんだ。イエロー・サブマリンみたいな絵を描くポップ画家のピーター・マックが、ビシュヌ・デバナンダの飛行機の絵を描いてるよ。

この本を読んだ時、僕はすでにベジタリアンだった。僕が肉を食べるのをやめたのは、動物を殺すことに反対したからだけど、本来、肉を食べることはヘルシーではないし、自然なことじゃないんだ。この本には、こんなことが書いてあった。サルは頭痛にならない、というのも、人間の不快感や病気はすべて不自然な食物によるものだからってね。

さらに、鼻孔をきれいにする方法が絵に描かれていた。鼻の穴から紐を通し口から引っ張り出すんだ。

水に浸しておいた包帯を飲み込む方法も書いてあった。長い包帯をそれを飲み込んで引っ張り出すんだけど、完璧な身体を作るためのものなんだ。ジョンは、このふたつを組み合わせる方法を考えだした。

鼻の穴に通した紐を引っ張りながら、飲み込んだ包帯を肛門から引っ張り出すっていうんだけどね。ジョンは最高だよ。おかしかった。天才だね。

ポール　アルバムの曲作りは、ほとんどウェイブリッジのジョンの家でやったんだ。「ア・ハード・デイズ・ナイト」の時は、ジョンが家で作った曲を持ってくるというパターンだったけど、「ヘルプ!」(4人はアイドル)の曲は一緒に考えた。座って頭をひねっていた時、ジョンがタイトル曲を思いついたんだ。僕が曲の構成を手伝って、メロディに少しメリハリをつけた。完成した曲を階下にいたシンシアとモーリーン・クリーブに聴かせたら、とても気に入ってくれたんで、それに決めたのさ。

あとでジョンの話を聞いて、「ヘルプ」というのはジョンの心の叫びだったんだって思ったよ。ジョンはビートルズのさまざまな状況にストレスを感じていたんだ。

ジョン　たいていの人はアップ・テンポのロックン・ロールだって言うけど、僕はあの頃、そうは思っていなかった。この曲を書いたのは単純に映画のタイトル曲をまかされたからだって、最初はそう思っていたんだ。でもあとになって、僕自身が"ヘルプ"って叫んでいたことに気づいたのさ。「ヘルプ」は僕自身の曲だ。ちょっと詩的だけどね。1971年　歌には自分のすべてが表れるんだと思うよ。

ビートルズの何もかもが、わからなくなっていたんだ。
僕は豚のように飲み食いし、
豚のように肥えていく自分に幻滅していた。
無意識のうちに助けを求めて叫んでいたのさ。
太ったエルヴィスの時代だったんだ。

映画の中の僕――つまり僕――は、すごく太っていて、不安定で、完全に自分自身を見失っているよ。僕は今、自分がずっと若かった時のことを歌っているけど、振り返ってみれば気楽な時代だった。でも当時の僕は、ひどく追いつめられていたんだ。1980年

幸福というのは、不幸だと感じていない状態のことだ。僕を確実に幸せにしてくれるものは何もない。こうすれば幸せになると思える方法はひとつもないんだ。1966年

今は前向きに生きているけど、どうしようもなく落ち込んで窓から飛び降りたくなったこともある。年をとるにつれ、そう思わなくなったけどね。自制心が強くなったのかもしれないし、年をとって心が穏やかになったからかもしれない。いずれにしても当時の僕は、太っていて、落ち込んでいて、助けを求めていた。それが事実さ。1980年

CamScannerでスキャン

ジョージ　曲ができた時、ジョンは何も言わなかったんだ。ずっとあとになってから教えてくれたんだよ。あれは自分の気持ちだったんだって。当時のジョンは太っていて眼鏡をかけていた。四角い眼鏡をしたマイケル・ケインみたいだったよ。

ジョンは自分が"ド近眼"になったって大騒ぎしていたから、眼鏡がなくても困らないように、僕らはいつも彼と一緒にクラブに行き、椅子に座らせていたんだ。眼鏡なんかしているのはダサかったからね。おかしかったのは、ジョンとシンシアが出かける時だ。ふたりは車に乗る前に、今度はどっちが眼鏡をかける番かって、必ず言い争うんだよ。眼鏡をしていないと、ふたりとも僕らがどこにいるのかわからなかったのさ。ジョンが"今より若かった頃……"と言っている時代の彼は、そんな風だったね。

ジョン　歌詞は今の方がいいね。分別がある、いや分別というより、自分を把握しているっていう安心感があるんだ。LSDも何も(マリファナも)やってないからね。

昔の僕らのレコードはあまり好きになれない。僕らは、かなり短いサイクルでシングル盤を発表していたから、曲本来のフィーリングが失われているしね。もう一度、もっと時間をかけてやり直したいと思ったこともあるよ。とにかく覚えているのは、どんな歌詞だろうと、ものすごく感情をこめて歌おうとしたことだ。曲の良い部分を台無しにしたくなかったからね。「awop-bop-alooma-awop-bam-boom」とか、わけわかんないような歌詞でも、感情を込めて歌っていたんだ。そうすればおのずと、感動的な音楽が生まれてくるものだからね。1971年

モーリーン・クリーヴ——「イブニング・スタンダード」紙に有名な「キリスト」の記事を書いた記者だけど——彼女が僕に言ったことがあるんだ。"どうして歌詞に1音節だけの単語しか使わないの?"って。それまでまったく気にかけていなかったんだけど、そう言われたから、3音節の単語も使ってみたんだよ。それで、彼女のためにその曲を歌ったのに、ほとんど何も言ってくれなかった。当時の僕はすごく不安定だったから、こんなこともあったね。1980年

リチャード・レスターと私が「ア・ハード・デイズ・ナイト」で最大限の力を発揮したことも、音楽部門でアカデミー賞にノミネートされたことも、彼らには関係なかったんだよ。

ジョン　映画の挿入曲はかなりいい方だと思う。僕が気に入っているのは「ユーヴ・ゴット・トゥ・ハイド・ユア・ラヴ・アウェイ」(悲しみはぶっとばせ)だけど、売れる曲じゃないね。ポールが書いた「ザ・ナイト・ビフォア」の方がいいよ。1965年

僕はギターが好きだったから、アルバムではギターを弾くかピアノを弾くか、それ以外のことはやりたくなかったんだ。成りゆきで何かすることはあったけどね。「チケット・トゥ・ライド」(涙の乗車券)はそれまでにない新しいサウンドだったよ。ヒット・チャートにランキングされている他のミュージシャンの曲なんかに比べると、かなりヘヴィだったしね。今聴くとそんなに悪くないけど、ちょっと恥ずかしい気もするね。もう一度、A面の曲としてリミックスさせてくれるなら、もっと本来の味が出せると思うよ。このアルバムは好きだよ。かなりヘヴィだし、ドラムも重たいしそれなりにいいからね。1970年

ポール　**ジョンはいつも前面に出ていたけど、**
自分の欠点をさらけだしたことは一度もないよ。
いつだって完全武装していたからね。
ジョンはいつも固い殻をかぶっていたんだ。

残念なことだけど、ジョンはみんなに間違った印象を持たれているんだ。本当はとてもいい奴なのに悪ぶってしまうからさ。自分のいい面を、わざと隠そうとするんだよ。本当の姿を見せないから、いつだってロックン・ローラーなんだ。

ジョン　皮肉屋なんて呼ばれたくないよ。みんな(マスコミ)は、僕が言ったことや書いたことだけで性格を判断しようとするけど、レッテルを貼られるのはゾッとするね。僕は多少ひがみっぽいところはあるけど、皮肉屋じゃない。人間っていうのは、まず意地悪を言う。だんだんひがみっぽくなって、最後に皮肉屋になるんだよ。僕が皮肉を言うのは、社会とか、政治とか、マスコミとか、政府とか、言われて当然なことに対してだけだ。人生や、愛や、神や、死について皮肉を言ったことはないよ。1966年

皮肉を言わせたら、僕なんかよりポールの方が、はるかに痛烈だね。ポールは忍耐強いけど、キレると容赦しないんだよ。遠回しに皮肉を言うとかじゃなくて、もうズバリと核心をついた言葉をたたきつけるんだ。ポールはそういう奴さ。1969年

ポール　ジョンのことで忘れられないのは、ふたりで言い争った時のことだ。僕はどうしてもジョンに賛成できなくて、お互いに悪態をついたり、相手を罵り始めたんだ。やがてふたりとも黙りこくったんだけど、そしたらジョンがおもむろに眼鏡をとって"これがほんとの僕だよ"ってボソッと言うと、また眼鏡をかけたのさ。僕にとってのジョンはそういう奴だった。自分の殻をはずして、ありのままの姿を見せてくれたんだ。完全武装のジョンも、もちろん好きだったけどね。かっこよかったし。でも、殻を脱いだジョンを見れば、わかったんじゃないかな。本当は自分をさらけだすのが怖かったんだってね。

ジョージ・マーティン　映画の全曲をプロデュースしたのは私だが、スコアの作成は頼まれなかった。スコアは他の人に依頼したんだ。

リンゴ　「ヘルプ!」では、リリースされなかった曲もレコーディングした。「イフ・ユーヴ・ゴット・トラブル」っていう曲で、ジョージ・マーティンがEMIスタジオの倉庫から見つけてきたんだよ。

ジョージ　偶然見つけたのさ。ものすごく変わった曲だった。レコーディングしたって記憶はないなあ。くだらない歌詞にうんざりしたことは覚えてるけどね。どっちにしても、どうにもならない曲だったよ。

リンゴ　アルバム「ヘルプ!」で僕が歌ったのは「アクト・ナチュラリー」だ。バック・オーエンスのレコードに入っていたんだけど、"この曲を歌おうと思うんだ"って言ったら、みんな"OK"って感じで認めてくれた。僕らは、あらゆるジャンルの曲を聴いていたからね。ジョンが歌った「ディジー・ミス・リジー」も、よく聴いていた曲だった。ポールは「イエスタデイ」みたいな曲を作っちゃうしね。世界で一番多くカバーされてるっていうんだから、まったくスゴイ奴だよ!

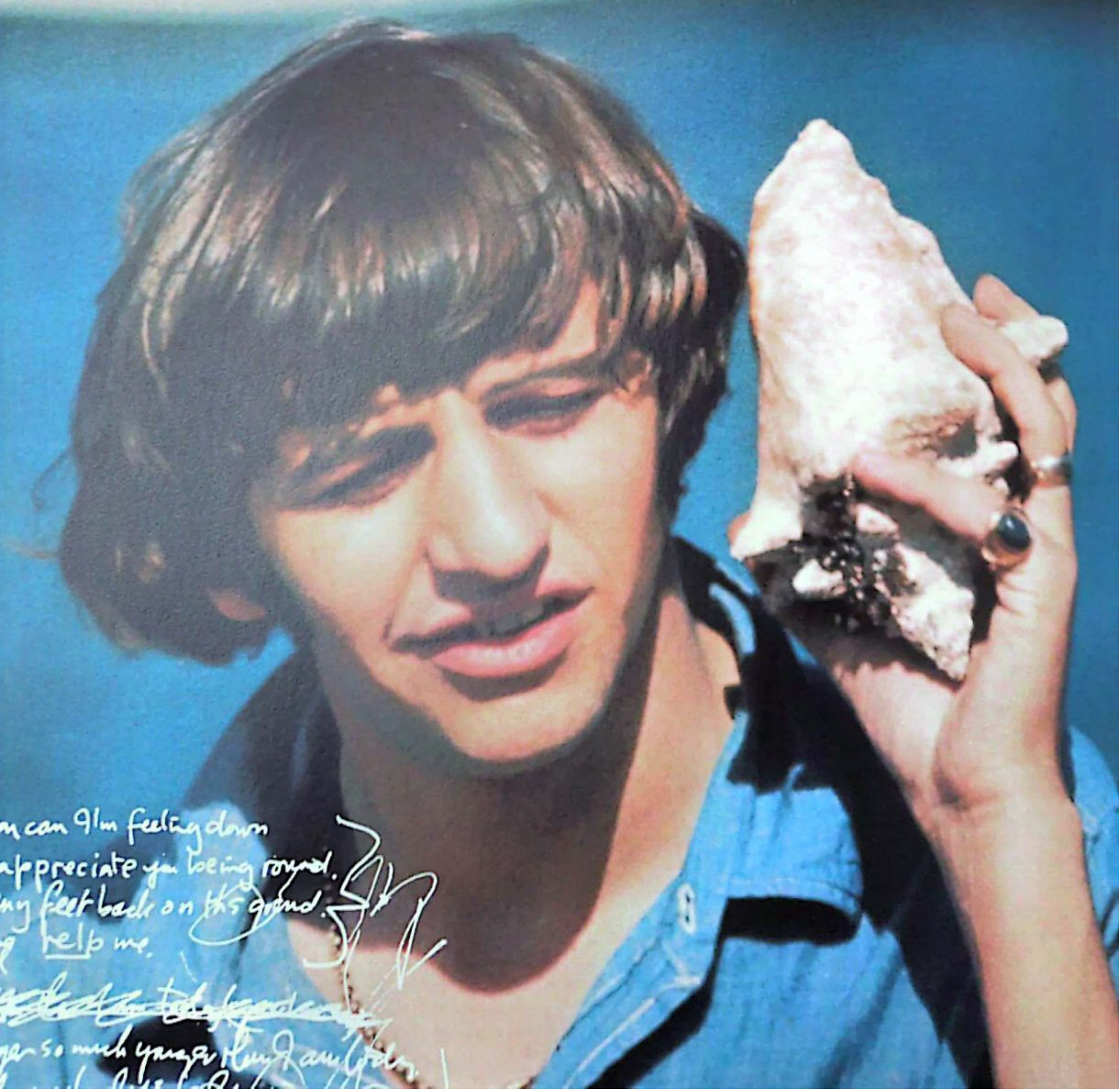
CamScannerでスキャン

ジョン　「ヘルプ!」って映画は、曲で言えば「エイト・デイズ・ア・ウィーク」みたいなものだったね。この映画も、このアルバムも、好きだっていう人はたくさんいるけど、どちらも僕らがやりたいことではなかったんだ。僕ららしくないってわかっていたしね。この映画を恥ずかしいと感じたことはないけど、僕らの身近にいる人は、この映画も「エイト・デイズ・ア・ウィーク」もベストな作品だとは思ってないよ。両方とも作られたものだからね。

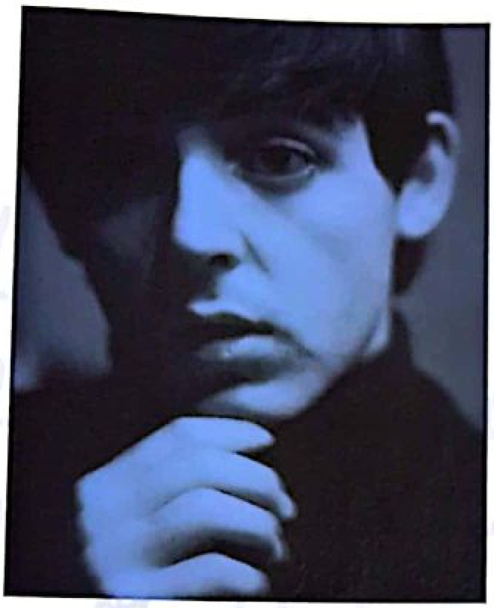
シングル盤の「ヘルプ」は、その前の2枚、「アイ・フィール・ファイン」と「チケット・トゥ・ライド」よりは、はるかに売れた。1965年　でも映画の「ヘルプ!」は好きじゃないっていうファンは、けっこういたんだよ。"ビートルズはあたしたちを忘れている。「ア・ハード・デイズ・ナイト」の方がずっと良かった"ってね。そう言われちゃおしまいだけど、すべてのファンを喜ばせることなんかできやしないよ。そんなことしてたら、結局中途半端になって、誰からも相手にされなくなるからね。自分の考えがベストだって信じて、やるしかないんだよ!

みんな、僕らをマシンかなんかだと思ってるんだ。6シリング8ペンスも支払ってレコードを買うんだから、ファンの期待どおりにしなくちゃいけないってね。僕はそういう考えは嫌いなんだよ。まるで違うことをやる人だっているわけだし。僕らはレコードを作る。それが気に入ったら買えばいいのさ。僕らには毎回すごいものを作る責任なんかないんだ。好きか嫌いかは世間が決めることだ。"私たちがここまで支えてきたのに、この恩知らずのブタ!"なんて言われると"この野郎"って思うよ。ある意味では確かにそうかもしれないけど、生活のために義務でやることには限度ってものがあるからね。

他人から好かれるのが嫌いなんだろう、みたいに誤解されるのは心外だな。好かれるのは嬉しいけど、自分のすべてを犠牲にすることはできないよ。僕らが作ったレコードを、気に入ったら買えばいいし、気に入らなかったら買わなければいい。決めるのはそっちなんだから。



CamScannerでスキャン



ジョン　「イエスタデイ」のことなら全部わかっている。僕は「イエスタデイ」を絶賛しているんだ。ポールが生み出した、ポールの曲だ。よくできているよ。すばらしいね。僕の曲だったらよかったなんて一度も思ったことないよ。

1980年

ポール　小さなアパートの最上階に住んでいた時だ。ベッドの横にピアノがあってね。ある朝、目が覚めると頭の中でメロディが鳴ってたんだ。"何だこれは。こんなの知らないぞ"って思ったけど、ほんとに知らない曲なのかどうか自信がなかった。ジャズのメロディみたいだったんだ。親父はジャズの曲をたくさん知っていたから、小さい頃聴いた曲を思い出しただけなのかもしれないって思ったんだ。とにかく僕は忘れないように、ピアノでコード(G—F#m7—B)を弾いてみた。それから、いろんな友人に訊いてみたんだよ。"この曲知ってるかい？　いい曲なんだけど僕が作ったんじゃないんだ。夢に出てきたんだよ"ってね。歌手のアルマ・コーガンにも同じことを訊ねた(彼女は、僕が彼女のためにこの曲を作ったって誤解したかもしれない)。彼女は"知らないけど、素敵な曲ね"って答えたよ。

最初は歌詞がなかったから"スクランブルド・エッグ"ってふざけた名前をつけて歌っていたんだ。"Scrambled eggs, oh, my baby, how I love your legs——diddle didle——I believe in scrambled eggs."ってね。ちゃんとした歌詞をつけたのは数週間ほどたってからだ。とても好きなメロディだったから、時間をかけて言葉を探そうと思っていたんだ。「スクランブルド・エッグ」じゃなくて、もっとぴったりした何かをね。それである日、「イエスタデイ」を思いついたのさ。

ジョン　この曲は、完成させるまでに何ヵ月もかかったんだ。レコーディング・セッションの曲を決めようって時になると、いつも候補に上がったよ。だいたいはできていたんだけどね。ポールがほとんど全部をひとりで作ったんだけど、タイトルだけが決まらなかったのさ。「スクランブルド・エッグ」っていうのは、僕らの間ではジョークだったからね。

単語ひとつだけのタイトルにすることは決めてたんだけど、なかなかぴったりくる言葉がなくてね。ところがある朝、ポールが目を覚ますと、曲とタイトルの両方が揃っていました！　これで完成だよ。実は、ジョージ・マーティンがアメリカでこの曲のオーケストラ・バージョンをリリースしているんだ。そのタイトルが、なんと「スクランブルド・エッグ」！　笑っちゃ悪いと思うけど、僕らはこの話で何度馬鹿笑いしたかわからないよ。今じゃファンの方が、「スクランブルド・エッグ」っていう曲を聴いたけど「イエスタデイ」の完全コピーよって、わざわざ知らせてくれるんだ。1965年

ポール　みんな悲しい曲が好きだという思いがあった。ひとりぼっちの時って、レコードをかけて感傷的な気分に浸りたがるものだからね。それで、最初の一節の歌詞を考えたんだけど、そしたらすんなり完成しちゃったんだ。

僕の曲の中では一番の成功作だけど、夢から生まれたっていうのは驚きだよ。だから僕は何でも知ってるようなふりはしないんだ。音楽はとても神秘的なものだからね。"身体の中を何かがするりと通過していった"みたいな話をよく聞くけど、運が良ければ、僕みたいなこともあるのさ。

スタジオでこの曲を初めてギターで弾き語りした時、すぐにリンゴが"この曲にドラムをつけるなんてナンセンスだよ"って言ったんだ。そしたらジョンとジョージも、口を揃えて"他のギターもいらないよ"って。その時ジョージ・マーティンが"ひとりでやってみたらどう？"って提案したんだ。"ソロ・レコードってこと？"僕はみんなの顔をまじまじと見たよ。みんなは言ってくれた。"そうさ、かまわないよ、だって僕らができることはないんだから、やってみろよ"ってね。

ジョージ・マーティン　EMIの第2スタジオで、ポールは背の高いスツールに腰かけて、ギターを弾きながら「イエスタデイ」を歌った。最初からマスター録音した。"さて、どうしようか。ストリングスを入れることぐらいしか思いつかないけど"って言うと、ポールは"マントバーニみたいにはしたくないよ"って言った。そこで私は"少数の弦楽器を加えるのはどうだろう、カルテットとか"と提案した。ポールが興味を示したので、私は彼と一緒にスコアを準備することにした。もちろんポールのアイディアも入れ、それから弦楽四重奏のカルテットに演奏してもらい、オーバーダビングし、このレコードが完成したんだ。

ポール　ジョージ・マーティンと曲を練る時は、だいたいいつも同じやり方だった。「イエスタデイ」の時もそうだ。彼が僕を誘ったんだ。"明日、私の家に来ないか？　ピアノも楽譜もあるし、1時間ばかり一緒にやれば君の考えもわかるからね"って。作業はとてもスムーズに進んだよ。僕はこの曲にどんな音を加えたいか、自分なりに決めていたからね。彼もいくつか提案してくれた。まったく違う構想や、インパクトのあるものや、とても細かい指摘までね。その中から、ひとつひとつ選択していったんだ。"ハーモニーっていうのは、実際、こういう方法で作っていくものなんだ"ってジョージ・マーティンは教えてくれたけど、僕は反論した。"どうして、そう型どおりに作らなくちゃならないんだい？"ってね。

「イエスタデイ」も型どおりにはしなかった。僕がチェロで7thの音を入れようって提案した時、ジョージはこう言ったんだ。"それは絶対にあり得ないよ。とんでもない弦楽四重奏になっちゃうからね"。僕は言った。"そんなことかまうもんか。この音に決めたよ"って。

いつもこんなふうだったよ。彼は"正当な"作曲方法を教えてくれたけど、僕はいつもそれを打ち破ろうとしたんだ。自分が好きな音楽を作ることがオリジナルなわけだからね。今もその考えは変わらないよ。

ジョージ・マーティンが「ア・ハード・デイズ・ナイト」のメロディの中の特徴的なある1音を決めかねていたことがあるんだ(僕ら用の楽譜じゃなくて、彼がオーケストラでレコーディングするアレンジをしていた時のこと)。彼はジョンに訊ねた。"ねえ、It's been a hard day's night and I've been working……のところだけど、これって7thかな。それとも違う音？なんか両方の中間みたいなんだけど"って。ジョンが"そう、ふたつの音の中間だよ"って答えたもんだから、彼は何やら注釈めいたことを書き込んでいたよ。

こういうやり方はものすごく楽しかった。今でも夢中になれるしね。僕は何かを習得したいとは思わないんだ。物事のやり方を習得してしまったら自由な発想ができなくなるからね。

ジョージ・マーティン　「イエスタデイ」は斬新な曲だった。レコーディングに参加したのは、ポールと何人かのミュージシャンだけで、ビートルズの他のメンバーはひとりもタッチしなかったし、録音を聴くまで、どんな曲になっているかも知らなかった。ジョンは、チェロのブルージーなメロディがすばらしいって絶賛していた。大成功だった。

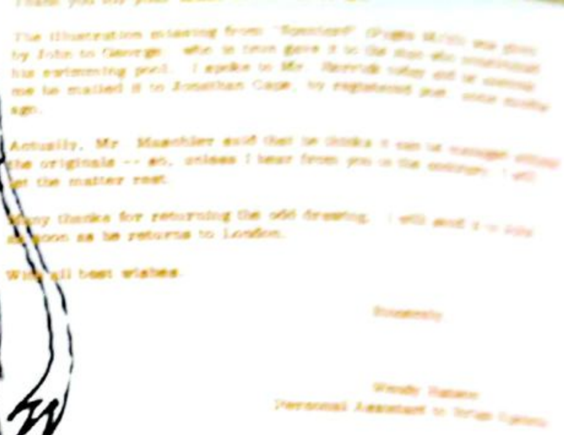
でも、実際にはビートルズのレコードではなかったので、ブライアン・エプスタインに相談した。"ポールの曲なんだから、クレジットはポール・マッカートニーにすべきじゃないか？"とね。ところがブライアンは"ダメだ。どんな事情があってもビートルズとして発表する"と言った。ポールだけがレコーディングしたものでも、やはりビートルズだったんだ。当時の方針としてはね。

ポール　ポール・マッカートニーのソロ・レコードとして発表したいとは、まったく思わなかったね。そんな考えすら浮かばなかった。よくお世辞で"ひとり立ちすべきだ"とか"ソロ・レコードを出すべきだ"とか言う人たちもいたけど、いつも否定していた。イギリスで「イエスタデイ」のシングル盤をリリースしなかったのは、ちょっと抵抗があったからなんだ。僕らはロックン・ロール・バンドだったからね。

この曲は誇りに思っているよ。女々しいとかよくからかわれたけどね。ジョージなんか"驚いたねえ。また「イエスタデイ」の話題だよ。あいつはベートーベンか何かの生まれ変わりかい"ってな調子さ。でも、まんざら悪い気はしなかった。僕の曲の中で、これほど完璧な作品はないからね。

ジョン　スペインのレストランで、バイオリニストがさかんに「イエスタデイ」を弾くんだ。僕に聴かせようとしてね。サインを求められた時、僕はどう言ったらいいかわからなかったから、とりあえず"OK"って、ヨーコと一緒にバイオリンにサインしたんだ。そのうちポールの曲だってわかるだろうと思ってね。1971年　でも、たとえ彼がそれを知っていたとしても、あそこで「アイ・アム・ザ・ウォルラス」を弾いてまわることはできなかったと思うよ。1980年

CamScannerでスキャン



The illustration missing from "Spaniard" (Pages [illegible]) was given by John to George who in turn gave it to the man who [illegible] his swimming pool. I spoke to Mr. [illegible] today and he [illegible] me he mailed it to Jonathan Cape, by registered post, some months ago.

Actually, Mr. [illegible] said that he thinks it can be managed without the originals -- so, unless I hear from you to the contrary, I will let the matter rest.

Many thanks for returning the odd drawing. I will send it to [illegible] as soon as he returns to London.

With all best wishes.

Sincerely

Wendy [illegible]
Personal Assistant to [illegible]

ジョン　2冊目の本はまるきりゼロから書いたから、けっこう試練だったね。みんなから"仕上げるのに、ずいぶん長くかかったね"って言われたものさ。1965年　1冊目の「イン・ヒズ・オウン・ライト」を最初に書いたのは学生時代だったからね、ごく自然に書いたものだった。でも、"もう1冊書いてくれないかな、レノン先生"と頼まれた時は、あれこれ考えているうちに、ひと晩でジョニー・ウォーカーのボトルが空っぽになったんだよ。"こんなふうに毎晩ボトルを空けていたんじゃ、たまんないな"と思ってね。それで、もう本を書くのはやめにしたんだ。1980年　試練に耐えるなんて性に合わないからね(ビートルズのメンバーだったことも一種の試練だったけど、そうは思わなかったね。試練でも試練だと感じなければかまわないのさ)。

2冊目の「ア・スパニアード・イン・ザ・ワークス」には、僕の書いた中で、一番長いストーリーが載っている。シャーロック・ホームズの話だ。小説を書いた気分だったけど、本になったらたったの6ページだった。「ア・スパニアード・イン・ザ・ワークス」の作品は、1冊目よりは長いものが多いね。僕は同じことをずっと考えていられないんだ。自分で登場させた人物がわからなくなって、困ったなと思っているうちに飽きてきて、どうでもよくなるんだ。だから、たいてい殺しちゃうのさ。1冊目では殺したのが多かったけど、2冊目の時は殺さないように努力したんだ。なるべく話を続けようとしたんだよ。1965年

かなり頑張ったけど、編集者はもっと違うものを要求してきた。"何かアイディアが見つかれば"ってイタリア語のおかしな辞書まで送りつけてきたよ。ページをめくってみたけど、ちんぷんかんぷんさ。その時、単語を入れ替えることを思いついたんだ(学生時代にもキーツの詩をそっくり書き写して、単語をいくつか入れ替えて遊んだことがあったからね)。でも批評家の反応はこうだった、"本全体に苦心のあとがうかがえる!"。1967年

一度書いたものに手を加えることは、ほとんどなかったよ。自己中心的だったし、うぬぼれていた。自分が書いたものは気に入っていた。編集者が"このままにしますか、それとも変更しますか?"なんて言おうものなら、怒鳴りつけたね。僕が書いたんだから、そのままに決まってるじゃないかって。でも、深く考えて書いたわけじゃないから、出版前に真面目に校正していれば、訂正したかもしれないね。校正なんかしなかったからね。思いつきのままさ。1965年

「イン・ヒズ・オウン・ライト」の批評家のひとりが、僕のことを、ケンブリッジ出身のピーター・クックのような風刺作家と比較したんだ。"教会とかアメリカとか、ごく普通のことを風刺している"って書かれたけど、そのとおりだ。僕が風刺していたのはそういうことだし、それしかなかった。1970年　僕はこれみよがしの善人じゃないし、デモ行進もしない。そういう人間じゃないんだよ。1965年

ポール　ジョンは無宗教だった。若い頃、十字架にかけられたキリストが勃起しているイラストを描いたことがあったけど、すごく冴えてたよ。生意気なティーンエイジャーの絵だったんだけど、僕らはブラック・コメディだって思っていた。ジョンの作品は、どれも辛辣なところがあったね。

ジョン　最初はいつも、子供向けの話にしようと思うんだ。『不思議の国のアリス』みたいなストーリーを書きたくてね。1980年　ロナルド・サール風のルイス・キャロルになることが夢だったんだ。1968年　今でも密かにそれを狙ってるんだけどね。1980年　ルイス・キャロルは尊敬する作家だった。「不思議の国のアリス」も「鏡の国のアリス」も大好きだったから。

みんなが読むような一般的な本は、たくさん読んだよ。ディケンズは好きじゃない。ディケンズやシェイクスピアは、学校で読まされているだけで、不愉快な気分になるんだ。シェイクスピアは大嫌いだね。好きにならなきゃ、なんて思ったこともないよ。学校の勉強を思い出すからなのか、全然興味がないからなのか、理由はわからないけどね。

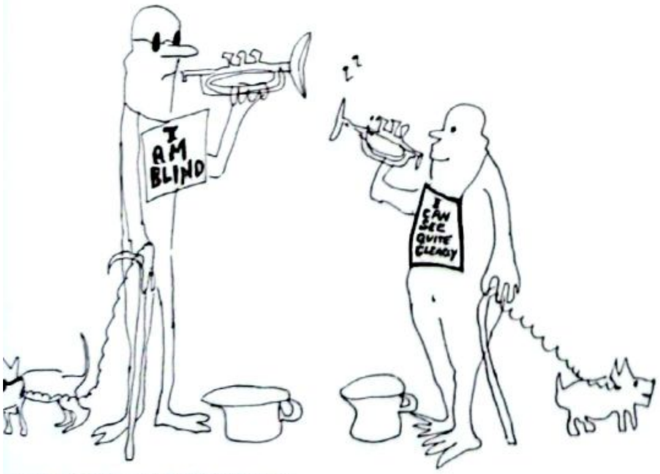
僕はほとんど何も知らないんだ。エドワード・リアの名前も聞いたことはあるけど、学校では教わらなかった。僕が読んだ古典や純文学は、学校で習ったものだけなんだ。1965年　ジェイムス・ジョイスも読んだかもしれないけど、シェイクスピアと同じように、ただ授業でやったという記憶しかないね。"ジェイムス・ジョイスを読んだに違いない"って言われたけど、僕は読んでいなかった。そこで、ジョイスの「フィネガンズ・ウェイク」を買って第1章を読んでみたんだ。すごい本だよ。掘り下げて読んでいくと、自分はジョイスの旧友なんじゃないかって気持ちになったよ。でも、最後まで読み終えることはできなかった。

エドワード・リアの本もチョーサーの分厚い本も買った。だから批評家が何を言いたかったか、今はわかる。1968年　でも、(僕の作品が)彼らの作品に似ているとは全然思わないよ。あえてあげるなら「フィネガンズ・ウェイク」だけど、非常に風変わりな作品だし、別格だと思うね。単語いじりをするような作家とは誰かれかまわず比較されるけど、ジョイスの作品とは真似できないよ。

リンゴは僕の本を全然読まなかったけど、ポールとジョージは読んでくれた。ふたりとも1冊目の方に興味を持ったみたいだ。その頃には多くの人が"他のメンバーも書くの?"と言いだしたから、ポールはひどく夢中になって"まえがき"まで書いてくれた。ストーリーのアイディアも出してくれたんだけど、そんな話は忘れられてしまうから、ポールの名が批評に書いてあったのは1回だけだった。

世間の騒ぎようときたら、もう歯止めがきかなかったね。僕がビートルズであることも、ギターを弾くことも、どうでもいいみたいだったよ。本業は音楽なのに、当時の取り巻きときたら、少しでも仲良くなると、僕に本を持ってくるんだ"これ、読んでみてよ"ってね。その時は、作家が本業でギターは二の次になってたね。今はまた、ギターが本業だけどね。ものを書くのは趣味にすぎないんだよ。

「ア・スパニアード・イン・ザ・ワークス」は、僕の気持ちを前向きにしてくれた。1冊目ほど出来は良くなかったけど、2冊目を書いたということが重要だった。この本に載っている多くのストーリーは、自分がずっと抑え込んでいたものだ。それを、外に吐き出すことができたんだ。貯め込むより吐き出した方がいいってことさ。この本はけっこう難解で、自分でも理解できないストーリーもある。出版されるとわかっていながら、引出しに放り込まれるようなものを書いたのはなぜか。ぶっちゃけて言えば、書くことが好きだからなんだ。出版してくれる編集者がひとりもいなかったとしても、僕は書き続けていただろうね。1965年



SPANIARD IN THE WORKS

CamScannerでスキャン

ジョージ

初めてLSDを体験したのは偶然だったんだ。1965年頃のことさ。レコーディングとツアーの間の合間の出来事だった。何も知らない僕らは、

悪い歯医者にハメられたんだよ。

"まあ、いいじゃないか、コーヒーぐらい飲んでいけよ"

"LSDを飲まされた"

ものすごく不思議だったよ。

"歯科治療体験"

そいつは僕らのコーヒーにLSDを盛り込んだのさ。

正気の沙汰じゃなかったね。完全にイカれてたよ。

突然、今まで経験したことのない不思議な感覚に襲われたんだ。

とにかく最高に幸せな気分なんだよ。

ジョージがミニ・クーパーを運転して、なんとか家にたどり着いたんだ。

でも時速16キロというスピードでノロノロ走っていたから、100キロ以上も走ったような気分だったね。パティが"ねえ、車を降りてサッカーやりましょうよ"って言い出した。大きなラグビー用のボールか何かが見えたんだ。僕は、まるでスピード(覚醒剤)をやっている時みたいに、馬鹿みたいなジョークを連発していたんだ。僕はいつもそんな調子だった。ジョージは"お願いだから笑わせないでくれよ、ああ、神様!"って祈り続けていたよ。

怖かったけど、夢を見ているみたいだったね。

その時、(どこかで)4人の顔を描いたんだ。"全員一致で賛成!"とか言ってるところをね。オリジナルはリンゴにあげてしまったけど、その晩は何枚も何枚も絵を描いたんだ。みんなが寝てしまうと、ジョージの家は大きな潜水艦みたいで、僕が操縦していたんだ。1970年

リンゴ　ジョンとジョージが、

"エレベーターが火事だあっ!"

と叫んだ時、僕はたまたまクラブにいたんだ。それから、僕らの間ではLSDは最高ってことになった!

ョージ　初めてLSDをやった時、頭の中で電球がパチンとついたんだ。頭が冴てきて妙に理屈っぽくなり始めた。"僕はこれをやろうと考えている"とか"こうなだから、これはこうあるべきじゃないか"とかね。質問と答えが交互に出てくるだよ。イルミネーションがチカチカして、たった10分なのに千年も生きた気がした僕の脳と意識が一気に遠くに押し出されたみたいだった。宇宙飛行士が月にして、あるいは宇宙船の中から、地球を眺めているような気持ちとでも言うの。僕の意識がずーっと遠くにある地球を見つめているんだ。
時はLSDは違法じゃなかったし、だれも詳しいことは知らなかった。"天国とを見た"なんて聞いても、たいして驚かなかったよ。天国と地獄が魔法みたてくるわけじゃないからね。でも現実の世界は二元的なんだ。あらゆるもので、かつ地獄なのさ。人生だって天国にもなれば地獄にもなる、それが本うものだ。LSDをやると宇宙を体験できる。あらゆるものが、とてつもなく強るんだ。経験したいと思えば、地獄はもっと地獄らしくなるし、天国はもっらしくなるんだよ。

ジョン　CIAとLSDを取り締まる軍隊には感謝しなくちゃいけないと思うけど、正反対のことになってしまったね。彼らはLSDを取りあげて僕らを制圧したけど、結果として、僕らに自由を与えることになった。LSDは時にミステリアスな結果を招くんだよ。つまり、彼らの方が地獄を見たってことだ。政府のLSD報告書を見ると、LSDをやって窓から飛び降りたっていうのは軍隊の人間だけなのさ。僕のまわりには、LSDをやって窓から飛び降りたり、自殺したっていう人間はひとりもいないんだよ。 1980年

ジョージ　他の人間がLSDでどんな体験をするかなんて、僕には言えないよ。それぞれみんな違うんだ。特別な体験をするんだけど、同じ体験をしているかどうかなんて実際にはわからないのさ。最初は僕も、みんなが同じLSD体験をするんだって思い込んでいた。ウィスキーを飲むと、みんな目がトロンとしてきて足もとがふらつくのと同じようにね。LSDをやると、誰もが啓蒙されるんだって勘違いしてたのさ。ところが、LSDをやっても何も考えない奴もいるし、いろんな色や光が現れて「不思議な国のアリス」みたいな体験をしても、まったく啓発されない人もいるってことがわかったんだ。

2~3回体験すれば、それ以上やっても意味ないんじゃないかと思うよ。テーブル・クロスが舞いあがったり、椅子が縮んだりするかもしれないけど、僕が最初に体験して思ったのは、意識の状態を変えるのにLSDを使うべきじゃないってことだ。化学物質で意識を変えるのは、明らかに自己実現とは違うからね。時にはいい影響もあるかもしれないけど、危険でもある。結局、みんなLSDの力に負けてしまうんだ。悪魔が出てきて地獄に連れ去られてしまう。車に体当たりしたり、屋上から飛び降りたりしてね。僕にはそういう人間の気持ちもわかるけどね。実際、魂が身体から解き放たれて自由になった気がするんだ。死んだあとみたいに意識が身体から離れていくのがわかるのさ。それでも身体と意識はつながっているんだって自覚すべきなんだけどね。

1966年にインドに行った時、ちょうどシバの崇拝日とかでね、こまごましたものがたくさん売っている通りで、僕はてっぺんに大きな芥子の花がくくりつけてある小さなサボテンを見つけたんだ。一緒にいたラビ・シャンカールに"これ何?"って訊いたら、"シバが神話の中で食べたものだ"っていうんだ。メスカルボタンとかペヨーテみたいな植物だったから、"ひとつ食べてみようかな"って言ったら、ラビがあわてて止めたんだ。"ダメ、ダメ。食べるんじゃない。これを食べた人間は気が狂う"ってね。これって、麻薬防止のキャッチ・コピーにピッタリなんだよ。精神があまりにもかけ離れてしまうと、理性が失われて、二度と正常な意識状態に戻れなくなる。ある意味では、ほんとに以前の自分には戻れないんだ。

マリファナやアルコールでは、酔っぱらっても幻覚症状は起きない。身体は何らかの影響を受けているけど、意識はまともっていうか、ちょっと焦点がズレる程度なんだ。幻覚を見る時っていうのは、突然、壁の向こう側が見えたり、身体がばらばらになっていく感覚に襲われるんだよ。オレンジの房の薄皮をむくと、小さい果実の粒がかたまりになっているけど、ひとつひとつが別の粒だろ。身体もそれと同じように見えてくるんだ。思い出すだけで頭に浮かんでくるよ。ひとつひとつの細胞がそれぞれ脈打ってきて、動き始めるのさ。この感覚はとても言葉にはできないね。熱気が目に見えた時もすごかったよ。熱そのものが見えたんだ。ロサンゼルスの自宅で、LSDをやりながら日光浴した時だったよ。皮膚が焼けていく音が聞こえるんだ。まるでフライパンでベーコンを焦がすみたいな音がしてね。"ドラッグのせい"と言ってしまえばおしまいだけど、神経がそこまで研ぎ澄まされるってことさ。

宇宙的な悟りを開いた人間も、同じ感覚なんだと思う。木の内側が見えたり、地中に埋まっている木の根っこが見えたり、樹液が木に浸透していくのがわかるんだよ。スーパーマンが壁を透視できるようにね。この世界のあらゆる物質は、純粋な知性がさまざまな形態で表現されているにすぎないんだ。"僕はこの身体の中にいる"って考えるのは、自己の精神と身体を同一視しているからだ。僕がLSDを通じて得たものは、"僕はこの身体の中に存在するわけじゃない。僕の純粋なエネルギーはあらゆるところから舞いあがっている。この身体は一時的に借りているだけだ"という思考なんだ。

CamScannerでスキャン

僕には、それまで知らなかったことが見えてきた。僕は生まれて、幼年時代を過ごし、ビートルズとして生活し、LSDやいろんな体験をした、それがカルマ、つまり宿命だったんだ。LSDにはマイナスの面もあるけど、僕はこれを体験できたことを神に感謝しているよ。何年も無関心だった自己を目覚めさせてくれたわけだからね。人生にとって重要なことは"自分は何者で、どこへ行こうとしていて、どこから来たのか？"を自分に問いただすことだって思ったんだよ。それ以外のことは、ジョンに言わせれば"つまらないロックン・ロール・バンドみたいなもの"だ。つまり、どうでもいいんだよ。その他のことは、みんなくらだないことに思えたんだ。政府も、地球上のあらゆる人々も、やらなければならないことに翻弄されている。まさに時間の無駄だってね。みんな、大きな妄想を追いかけているだけなんだ。精神世界のルールに従って宇宙の法則に身を任せることができれば、政府や警察なんかいらないのさ。もしチャンスがあったら、僕は政治家たちのお茶の中にLSDを入れていただろうね。

リンゴ　LSDは人間を変えてしまうんだ。物事が、まったく違って見えるからね。自分自身を見つめることで、自分の感覚や感情が敏感になるんだよ。僕の場合は、自然をよりいっそう身近に感じることができた。自然の力と美しさに夢中になったんだ。たとえば、木はただの木ではなくて生き物だって気づいたのさ。ものの考え方が変わって、服装も変わったんだ。

ジョン　トリップ体験なら千回はしているね。朝から晩までずっとトリップしていたこともあるよ。やめたのは悪夢を見たからだ。僕には耐えられなかったのさ。どのくらいの期間かわからないけど、僕はドラッグをやめていた。またやり始めたのは、ヨーコと出会う少し前だ。

自我を破壊すべきだというLSDの本を読んだんだよ。リアリーが書いた「サイケデリック・エクスペリエンス」という本だ。くだらない本さ。ゲームをやりながら、僕は自我を破壊していったんだ。自我がなくなると、僕は自分が何もできない人間だと思うようになった。みんなにやりたい放題のことをさせ、言いたい放題のことを言わせる、そんな風になってしまった。僕は、何の価値もない、ちっぽけな存在になりはててしまったんだ。ある時、ロサンゼルスから戻ったデレクが、自宅で僕にLSDをやらせて、こう言ったんだ。"君は正しい"。デレクは、僕が作った曲の名前をあげて、こう続けた。"この曲は君が作ったんだ。これは君が書いたものだ。君には知性がある。恐れることはない"ってね。1970年

LSDはもう何年もやっていないよ。マジック・マッシュルームとかペヨーテなら年に2回ぐらいやることがあるけど、LSDは化学物質だ。今はもう、誰もLSD体験を語らなくなったけど、LSDをやろうとする人間はいる。宇宙を見ようとするんだ。誰も体験を語らないのは、それが違法行為だからさ。

僕は今までフラッシュ・バックを体験したという人間に会ったことがない。60年代にはそれこそ数え切れないくらいトリップしたけど、一度だってトラブルが起きたことはなかったんだ。不快なトリップもあったけど、シラフの時でも不快な気分になったし、マリファナでも不快になった。僕はレストランにいるだけで妄想を抱くことができるから、ドラッグはもう必要ないんだ。

LSDは映画ではなく現実そのものだ。経験したことは、ほんとに体験したことだ。僕は何もLSDを肯定しているわけじゃない。僕がLSDをやらないのは、取締りが厳しいからじゃなく、それが化学物質だからだ。それにしても、LSDが人間にどんな影響を与えるかなんて話は、くだらないね。1980年

ジョージ　ジョンが千回もトリップしたなんて話はウソだ。大げさに言ってるだけ。でも、たしかにLSDをやりまくっていた時期があった。ツアーをやめた年、モントレー・ポップ・フェスティバルがあった年だ。一日中、家に閉じこもっていたり、お互いの家を行ったり来たりしていたんだ。

精神医学的に言えば、ある意味で、LSDはあらゆるものから解放してくれる。ものごとを、きちんと考えることができるんだ。でも、ジョンがそこまで追いつめられているとは知らなかったよ。愛想がよくて優しかったから、苦しんでいるようには思えなかった。不機嫌で冷淡な時もあったけど、"親父が家出して母親が亡くなったせいだ"なんて考えなかったよ。こうしたことが実際には大きな傷になっていたんだろうけどね。僕が想像していたよりはるかに苦しんでいたことは、ジョンがヤノフのプライマル・スクリーミングのアルバムを作った時に初めて知ったんだ。

一緒にLSDをやってから、僕とジョンはとてもおもしろい関係を築くことができた。ジョンは、僕の方が年下で身体が小さいなんてことにこだわらなくなった。ポールは今でも"年下だったから、僕らはジョージを見下していた"なんて言ってるけどね。そう思い込んでいるだけなんだよ。包容力のある意識を持って、創造的に暮らすことができれば、年齢はいくつで体格がいいか悪いかなんて関係ないんだ。僕はジョンと一緒にいることが多かったし、他のメンバーよりも親しかったと思う。ジョンが亡くなるまでね。ヨーコ

Dear Mr. Epstein,

Under contract to this agency, to write his life story, is Mr. Alfred Lennon, father of John.

Mr. Lennon is deeply resentful of letters he has received from relatives, and others, accusing him of trying to sponge on the now famous son he neglected as a child.

He is anxious that his own viewpoint should be fully put in his story of John's early homelife, the time they spent together in Blackpool etc...

However, before going ahead, he has asked us to try and arrange a meeting with John so that he can give his own explanation of what happened when the family split up.

Mr Lennon asked us to emphasise that he is not interested in his son's wealth, but only in "putting himself straight" in the eyes of John - and the rest of the world. Something, he says, that he was not able to do in the brief, highly publicised meeting, they had some time ago.

Such a meeting, he feels, would clear the air of acrimony, and be of advantage to both.

I'm sure you would agree that no harm could come of this, and on our part we would make sure that the general press would not have access to Mr Lennon.

Perhaps you would let me know what you and John decide.

が現れてからジョンと個人的に触れ合う機会はかなり減ったけど、時々ジョンに会ったりすると、目を見るだけでお互いの気持ちがわかり合えたんだ。

ジョン　僕は父親をまったく知らなかった。22歳になる前に、2回だけ会ったことがある。僕が何枚かヒット・レコードを出したから、名乗り出てきたんだよ。会って話をしたけど、それ以上、彼について知りたいとは思わなかったね。1966年

父親が現れたのは僕が有名になってからだ。僕としては嬉しいわけがない。だって彼は僕がどこに住んでいるか、ずっと知っていたんだからさ。ずっと同じ場所にある、同じ家で生活していたんだから。僕は金目当てじゃないかって疑った。そのうち彼は、マスコミの力を借りて僕に圧力をかけ始めた。新聞の第1面に"炊事をするジョンの父親、なぜ息子は面倒を見ないのか"って見出しが出たんだよ。"彼が僕の面倒を見てくれなかったからだ"って僕は答えたよ。僕は、育ててもらったのと同じ年数だけ父親の面倒を見た。4年間だけね。1972年

僕は、彼の面倒を見始めた。でも、カウンセリングを受けて、幼児期に捨てられたことを、僕が心の奥でどれだけ恨んでいたかを思い出したんだ（貧しくて育てていけないという理由で子供を置き去りにする親の気持ちを理解できないわけじゃないけどね）。僕はカウンセリングから戻ると、父親に"出ていけ!"って怒鳴りあげた。彼は出ていったよ。あんなことしなければよかったって、今は思っている。誰だって、何かしら問題を抱えているものだからね。[illegible]父親がいることもそうだ。年をとってみて、子供を持つことや結婚に[illegible]責任という重圧に耐えられない気持ちも理解できるようになったんだ。1980年

それから数年後、父親は[illegible]でも65歳の時、僕、というか、ビートルズのために働いていた22歳の秘書と結婚して、子どもが生まれたんだ。飲んだくれで浮浪者まがいの暮らしをしていた男だけど、その時は、これで立ち直れるんじゃないかって期待したよ。1980年

ポール　ある日の午後、ナショナル・フィルム・スタジオにブライアンがやってきて、僕らをこっその控え室に呼んだ。何だろうって思っていたら、彼はおもむろに"よく聞いてほしいんだが、首相と女王が君たちにMBEを授与してくれるそうだ"って言うんだ。"何それ？"って聞くと"勲章だよ"って教えてくれたんだよ

リンゴ　ブライアンは僕らに"どう思う？"って意見を訊いた。僕はなんの問題もないと思ったし、その時点では、[illegible]疑問を抱かなかったんだ。とにかく興奮[illegible]ったけど

エリザベス女王に会えて、女王が僕らに勲章をくれるなんて"スゴイ！"って思ったよ。

ジョージ　最初は驚いたけど、そのうちに"これはいったいどういう意味なんだろう？"って思い始めたんだ。"大英帝国の勲士になるってことさ"って言われたけどね。僕らは純粋に叙勲者に選ばれたわけだけど、そのうちに、いろいろ文句を言う人間が出てきた。勲章をもらって得することがあるのか訊ねてみたら、[illegible]の優待がもらえて、セント・ポール大聖堂に無料で入場できるってことがわかった。だけど大聖堂の入場料はたった[illegible]。すばらしい勲章を授かって光栄だと思う反面、ひがみっぽく言うなら、ずいぶん安上がりな栄誉だなあとも思ったね

ジョン　"OHMS(公用)"という封筒がきた時は徴兵令状かと思ったよ。女王の前で恥をかかされないように、王室はあらかじめ叙勲者に受勲する意志があるかどうか確認するんだよ。僕はその手紙をファン・レターと一緒に片づけちゃったから、ブライアンに手紙を持ってるかって確認された時、どこにあるのかわからなかった。僕はブライアンに、手紙は勲章をもらうための権利書みたいなものだから探すようにって説得されたんだ。1965年

[illegible]顔をしていると、ブライアンは"手紙を持ってなかったら、受勲を辞退しなきゃいけないんだぞ"って言うんだ。だけど、ロイヤル・バラエティ・ショーの出演でも、誰にも知られないんだぞ"って言うんだ。だけど、ロイヤル・バラエティ・ショーの出演を毎年断っていることだって、誰にも知られていないんだ。出演を依頼されるたびに、ブライアンはルー・グレードに丁重に断ってたのさ(依頼を断りきれないと、ブライアンは土下座して"お願いだから出演してくれ"って頭を下げたけど、それでも僕らは"1回出演したんだから十分じゃないか"って耳を貸さなかったんだ)。1967年

受勲するのは偽善的な気がしたけど、良かったと思ってるよ。手にした勲章のおかげで、僕は4年後にちゃんと意思表示ができたわけだからね。1970年

ジョージ　新聞で発表される前に、僕らは[illegible]みたいに扱われていたんだ。僕らは絶対に秘密を守るように約束させられたけど、マスコミはたぶん情報をつかんでいたと思うよ。

僕らが叙勲者に選ばれたのは、おそらくハロルド・ウィルソンが推薦したからだよ。イギリス首相で、リバプールのハイトン選出だったからね。いろいろ意見の食い違いはあったみたいだけど

ジョン　当時の僕らは自分を妥協したくなかったんだけど、MBEの受勲だって妥協みたいなものだった。僕らだって、世間と同じように、MBEをもらうなんて[illegible]って思ってたさ。頼んだわけじゃないのに、どうして、何のために僕らに勲章をくれるのかってね。僕らは、この問題について、どうするか話し合い、一度は全員一致で"断ろう"って決めたんだけど、そのうち何だかゲームみたいに思えてきて、アイヴァー・ノヴェロ賞をもらった時みたいに、ちょっと遊んでみるかってことになったんだ。[illegible]を放棄すれば、僕らには失うものは何もなかったからね。1970年

僕らは王室を信用していなかったけど、宮殿に入った時は、さすがに興奮したよ。目の前に女王がいて、何もかも豪華で、王室の歴史が保存されていて、夢を見ているみたいだった。宮殿の天井がすばらしいんだよ。歴史があって、まるで美術館みたいなんだ。1970年

衛兵が、行進の仕方とか、拝謁で女王の前に出るとか、どうやってお辞儀をするとか、いろいろ教えてくれたんだ。左足を最初に出すとかね。衛兵が名前を呼び上げるたびにリンゴはけらけら笑ってたよ。女王はただの女性だったけど、僕らは言われたとおりに歩み出て、うやうやしく受勲したんだよ。1965年

最初から、僕らは吹き出しそうになった。勲章を授かる時に笑うわけにはいかなかったから、必死でこらえて苦虫を噛んだみたいな顔をしていたんだ。すごく緊張していたから、バッキンガム宮殿のトイレでマリファナを吸ったんだよ。僕らが黙っていると、女王は目の前で何やら言ったけど、理解できなかった。でも、写真で見るよりずっと素敵な女性だったよ。1970年

僕はたぶん疲れきった顔をしていたんだろうね。女王は"最近、お仕事は忙しいの？"って僕に訊いたんだよ。最近どんな仕事をしたのか思い出せなかったから、とっさに"いいえ、最近は休暇中です"って答えた。ほんとはレコーディングの最中だったんだけど、覚えていなかったんだ。1965年

ジョージ　受勲式でマリファナは吸ってないよ。何百人もの人が列を作っていて、僕らは名前を呼ばれるのを待っていた。ひどく緊張していたからトイレにいって煙草を吸ったんだよ。当時、僕らはみんなスモーカーだったからね。

何年かたってジョンは思い出した。"そうだ、トイレで煙草を吸ったんだ"ってね。なぜかマリファナを吸ったことになっちゃったんだ。女王に会見する前に一番失礼なのはマリファナを吸うことだよね。でも、僕らは吸っていないよ。

ポール　女王の侍従だった衛兵のひとりが、僕らを脇に連れていって、どうすればいいか教えてくれたんだ。"女王陛下の前には、このように歩み出てください。絶対に背中を見せてはいけません。女王から話しかけられるまでは黙っていてください"とかなんとか。僕らはリバプールの向こう見ずな若者で"やあ、兄ちゃん"って感じだったからね。笑っちゃうよ。でも女王は素敵だった。穏やかで母親みたいだったよ。僕らが若造だったからだろうけどね。

CamScannerでスキャン

家で一番小さい部屋にしまっておくよ——僕の書斎にね。

ビートルズ"宮殿でマリファナ"は真実か。

CamScannerでスキャン

リンゴ　女王の前に出ると"グループを結成したのは、あなたですか？"って訊かれたから、僕は"違います。僕は最後に加わったメンバーです"って答えたんだ。そしたら"そうですか。バンドを始めて何年ですか？"って訊かれたので、僕とポールはすぐさま答えた。"僕らは40年一緒にやっています。とても1日とは思えません"。女王はどういう顔をしたらいいかわからないで困っているみたいだった。笑いたかったか、とことん怒っていたか、どちらかだね！

マリファナを吸ったかどうかは、はっきり覚えていないんだ。それくらい宮殿っていうのは不思議な場所だったよ。

ジョン　女王は何でも正しいと思ってしまうんだ。そうしないといけないからだ。ジョン・レノンもビートルズも特別な人間なんかじゃない。僕はただの男だからね。でも女王は、自分が特別な人間だって信じている。1967年　そうやって2000年も育てられてきたわけで、それ自体、かなり異常なことだ。彼らは、普通の人間になろうと苦心してきたに違いないんだよ。そうなれた人がいるかどうか、僕にはわからない。王室のことはよく知らないからね。でも、可哀相な人たちだと思うよ。僕らみたいだけど、もっと悲惨だもの。彼らが特別だと信じているとしたら、それこそジョークだね。1968年

社会的なつきあいは大嫌いだった。出席しなきゃならない授賞式だか表彰式だかは、みんな嘘っぱちだ。そこに集まっている人々を見ると、真実がわかるんだ。僕は彼らを軽蔑していた。僕とは階級が違うせいかもしれない。いや、そうじゃないな。そこにいた連中が偽善者ばかりだったからだ。1967年

リンゴ　家族はとても喜んでくれた。僕らが叙勲したら何人かの高齢の兵士が勲章を返上したけど、その時はなぜだかわからなかったよ。叙勲を拒否したのはオーストラリア人の兵士たちが多かったような気がする。彼らは、僕らみたいな口のへらないロックン・ローラーがMBEを受勲することが気に入らなかったのさ。

ジョン　僕らのMBE受勲に不平を言っていたのは、たいてい戦争の英雄行為で勲章を受けた人たちだった。僕らは文化的な受勲者だ。彼らは人を殺して勲章をもらったわけだけど、僕らは人を殺さずにもらった。殺人の代償として叙勲されるなら、イギリス経済が今後も人を傷つけて発展するように勲章を受け取るべきなんだ。僕らは、MBEとOBEの授与の順番を待っている人たち全員にサインしたんだ。1965年

ポール　サインを求めてきたのは、ひとりだけだった。"君たちのどこがいいのかわからないが、娘がサインを欲しがっているから"ってね。叙勲者たちの多くは僕らを祝福してくれたけど、英国空軍の長老たちの何人かは、長髪の馬鹿どもが叙勲するとはMBEも落ちぶれたものだって思っていたみたいだ。でも、たいていの人たちは、僕らのことを輸出に貢献したイギリス大使みたいに思ってくれたよ。少なくともみんなイギリス贔屓だから、ミニとかジャガーのようなイギリス車や、マリー・クワントとかのイギリスのファッションが海外で売れるのを喜んでいたんだ。そういう意味じゃ、僕らはイギリスのスーパー・セールスマンだったってことさ。

ジョージ　結局僕らは、大英帝国のために歌い、コーデュロイの服を流行らせたってことだ。その代償に、古くさい革のメダルに木製の文字が埋め込まれた勲章をもらった。でも、受け取った時は"素敵なメダルですね"って言ったんだ。ジョンも"ああ、いいね"って言ってたんだよ。

僕は、家に帰ると勲章を引き出しにしまっておいた。その後、「サージェント・ペパー」のアルバム・ジャケットを撮影する時に、勲章をして行ったんだ。ポールもそうだった。1年ぐらい「サージェント・ペパー」のジャケットの上に勲章をピンで留めておいたんだけど、また箱に戻して引き出しにしまっちゃったよ。

リンゴ　MBE勲章をもらうのは、証明書をもらったようなものだった。"公共の場で身につけることはできませんが、正装用のスーツにはMBEと入れることができます"っていう但し書きが添えてあった。何だこれって思ったね。勲章をつけて出かけたことは一度もないよ。だから、ガラクタみたいに捨てちゃったんだろうって思われてるみたいだけどね。

僕は、ブライアンがMBEを叙勲しなかったことを気にかけているんじゃないかって心配してたんだけど、彼は僕らが授与したことを心から喜んでくれたよ。もしブライアンが生きていて、ずっと仕事を続けていたら、ナイト爵位ぐらいもらっていたんじゃないかな。

ジョージ　ブライアンは宮殿に行かなかったし、招待もされなかったんだ。授与式に出席できるのは家族だけだったのさ。だから、心の中では不愉快だったと思う。そんなことは、おくびにも出さなかったけどね。

ポール　1952年にケニアから戻って王位を継承した時から、女王は君主なんだって言われて育てられたけど、僕らは彼女をあまり評価していなかったんだ。

"女王陛下はとても素敵な女性ですが、あまり語彙が多くないようですね"
——僕はそう言った。

CamScannerでスキャン

MEMO

BILL OAKES

TO

DEREK TAYLOR

REFERENCE | YOUR REFERENCE

September 25th 196 9

デレク・テイラー　4年後の1969年11月に、ジョンがMBEを返還したのは、自分の主張を世間に知らせたかったからだ。

リンゴ　僕は勲章を返そうと思ったことは一度もないよ。ジョンがそうしたのは、ジョン
なりの理由があったからだ。でも僕には理由がない。当時、僕はとても誇りに思ってい
たよ。僕にとっては大きな意味があったんだ。受勲して得したことはないけど、ハロル
ド・ウィルソンが当選したからだし、女王に会えたことも嬉しかった。今では女王は誰
でも会うけれど、当時はすごいことだったんだよ。

ジョン　僕はずっと考えていたんだ。受勲したものの、ほんとにそれで良かったのかな
ね。ミミおばさんに勲章を渡したら、すごく喜んで暖炉の上に飾ってくれた。その気
はよくわかる。おばさんはすごく誇りに思っていたからね。僕が考えていたことは
できないだろうけど、おばさんの気持ちを思いやって取りやめるわけにはいかなか
勲章は数ヵ月前に持ち帰ったけど、おばさんには、僕がやろうとしていることは
かった。もちろん今はもう知っているだろうけどね。おばさんにはすまないと思
るけど、どうしようもなかったのさ。

いずれにしても、僕は自分を偽ったわけで、それがずっと気になっていた。勲章をどうにかしなきゃ、この呪縛から逃れなきゃって、いつも思っていたんだ。返還の方法についても考えた。僕がひそかに勲章を返しても、いずれマスコミは嗅ぎつけて騒ぎ立てるだろうし、ならばいっそのこと隠したりしないで、大胆に行動しようと決めたんだ。それで勲章を返還した。何かのイベントの時に返還しようかと思っていたんだけど、このこと事態がイベントだって気づいたんだよ。僕らがやろうとしている平和のためのイベントなんだってね。

僕ら(ヨーコと僕)はガンジーやキング牧師みたいに、いずれ殺されてしまうような過ちはしたくないんだ。人々は自らの命を犠牲にする聖人を讃えるけど、僕は聖人にも殉教者にもなりたくない。イギリス国民として、ヨーコと一緒に、ビアフラ紛争に関わっているイギリス政府に抗議したいだけだ。できるだけ効果的な方法で、できるだけ大声で抗議したいんだよ。1969年

on has returned his MBE award in protest
ritain's involvement in the Nigerian and
e conflicts. In identical letters addressed
jesty The Queen, the Prime Minister, and
ary of the Central Chancery, John Lennon
m returning this MBE in protest against
involvement in the Nigeria - Biafra thing,
support of America in Vietnam and against
slipping down the charts."
is signed "with love John Lennon", in his
Typed underneath is "John Lennon of Bag".
are written on notepaper headed "Bag Productions,
, London, W.1" Bag is the company set up
d his wife Yoko Ono to handle their films,
other merchandise.
nd the other three Beatles were awarded the
een's Birthday Honours list in the Summer

HOW TO SEND BACK AN M.B.E.

The medal, with a brief explanation, should be
sent to - The Secretary of the Central Chancery
8 Buckingham Gate,
London, SW1.

Two optional letters should be sent to:
a) Harold Wilson
The main protest should be lodged here
- presumably this letter would become publ
b) H.M.The Queen
Solicitors advise no more than a respectf
regretful note..

ジョン　**女王は頭がいいから勲章を返したって嘆いたりしないよ。**

1969年

File

BAG PRODUCTIONS 3, SAVILE ROW, LONDON W.1. 7348232

TO

Her Majesty the Queen

25th November 1969

Majesty.

eturning this MBE in protest against
's involvement in the Nigeria - Biafra
against our support of America in
and against Cold T...

ジョージ　僕らはレコードを作ることしか望んでいなかったんだ。スターになることを夢見てきたんだろうって言われるけど、そんなのアホらしいことだって思ってたよ。1964

ジョン　僕らはエルヴィスより有名になりたかった。最初の目標はゴフィン&キングで、それからエディ・コクランやバディ・ホリーを目指したけど、最後はやっぱり、一番の大物のエルヴィス・プレスリーを越えたいって思っていたんだ。

それが、リバプールで有名になり、ロンドンで有名になり、イギリスで最高のグループになるってことだった。目標はいつも、すぐ目の前にあることじゃなく、ちょっと難しいことだった。僕らの目標はエルヴィスと同じぐらい偉大になることだったけど、自分たちが実際にそれを目指しているとは思ってなかったね。

ポール　遅かれ早かれ、何かしら起きるだろうと思っていたよ。僕らはいつも、あのアメリカ人のスターを追いかけていた。他人から認められたいのは、みんな一緒さ。何をするかはそれぞれ違ってもね。自分が世間から認められないことを不満に思っている人間は、世界中に山ほどいるだろうね。

僕らはビートルマニアなんて信じていなかったし、事態を深刻に考えたこともなかった。そうやって、どうにかまともな精神状態を保っていたのさ。

ジョン　昔の友人に会うと、いつも笑われたよ。学生時代の僕を知っている連中は、僕の顔をじっくり見つめてから"ほんとにおまえなのか"って確かめるんだ。1964

レストランで注文する時だって、僕だとわかると"ほんとに本人なの?"って驚いちゃって、僕の注文なんか聞いてないんだ。だからレストランでは"僕はステーキ。ミディアムでね。あとゾウを2匹。僕の頭を押さえつけたおまわりもね。それと、紅茶をもらおうかな"なんて注文してたんだよ。たいてい"はい、かしこまりました"って言われたけどね。1974

リンゴ　僕らにつくウェイターがひとりだけってことは、滅多になかったね。僕らの顔を見ようとして、レストラン中のウェイターが入れ替わり立ち替わりテーブルにやってくるんだからね。

ジョージ　有名になって一番困ったのは、みんなが普通に接してくれないことだった。みんながすごいと思っているのは、僕ら自身じゃなくて、僕らが有名になったことなんだ。僕らがスターで有名人だから騒いだんだよ。ラジオやテレビの番組に出演したというだけで、他人の態度は変わるものだからね。ビートルズは1年以上も毎日のように新聞のトップを飾っていたわけだから、注目されるのは当然だったけどね。

同じ店に顔を出すっていうのも難しいことだった。だれもが友だちみたいに話しかけてくるんだ。リバプールに帰った時、以前よく訪れていたクラブに出かけたんだけど、一杯だけ飲もうと思っていたのに、みんなが次から次へとあいさつにやってくるもん

リンゴ
[illegible]
僕はジョンに向かってこう言った。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ジョン
[illegible]
僕はリンゴに向かって
こう言うんだ。
僕らは神様じゃないんだ。

だから、息をつく暇もなかったよ。

ジョン　僕らが音楽にどう受け入れられているかってことは、いつも気にかけてたよ。[illegible]

リンゴ　エルヴィスの精神状態がだんだん悪くなったのは、友人がひとりもいなかったからだと思う。[illegible]連中は大勢いたけどね。僕らの場合は、メンバーの誰かが精神的に参ってしまうと、他の3人がそいつを助け出していた。僕らの強さは、そうした連帯感にあったんじゃないかな。いつだったか、僕の頭がおかしくなりかけたことがあった。そうしたら、3人がじっと僕の顔を覗きこんで、こう言うんだよ。"もしもーし、大丈夫かーい?"って。他の3人も、時々こんな状態になっていたけどね。

ポール

有名になるってことは、結局、
サインを求めて追いかけてくるファンから
逃げるように車に乗り込んだり、
食事中にポニー・テールの中年のアメリカ人女性に
話しかけられるってことなんだよ。
僕ら4人は世界中の人々に
知られているみたいだけど、
そんなに有名になったなんて思ってないよ。

ジョン　ツアー先は僕らのマネージャーが観光したかったところさ。彼はいつも写真を撮りまくっていたよ。

ポール　バルセロナのプラザ・デ・トロスという大きな闘牛場でコンサートをしたことがあるんだ。バルセロナ市のお偉いさんたちが特等席を陣取り、他の席も全部金持ちの客ばかりだった。僕らの演奏をほんとに聴きたがっていたファンの子たちは闘牛場の外にいたのさ。僕らは頭にきて"どうしてこんな役人たちのために歌わなければならないのか。僕らは外にいるファンのために演奏したい。彼らを中に入れてもらいたい"って頼んだ。もちろん聞いてもらえなかったけどね。

ジョン　観客が年寄りばかりだとムッとしたよ。最前列にデンと座っているのを見ると、そのまま立ち去りたくなった。年寄りがそんなふうに僕らの演奏を見にくるなんて、どう考えても不自然だからね。誰が来てもかまわないけど、年寄りっていうのは普通、家の中で編み物でもしているもんだろう。1965年

リンゴ　マドリッドで印象的だったのは闘牛場で演奏した時のことだね。警察がめちゃくちゃ暴力的だった。警官が若者を本気で殴りつけるところを見たのは、それが初めてだったんだ。

闘牛観戦もしたけど、あんなに悲しいものはないね。闘牛がどんどん力尽きていくのを見ていて涙が出そうになったよ。最後には殺されて、両足をチェーンで縛りつけられるんだ。馬車が死骸をずるずると引きずっていったよ。可哀相な結末だった。あれ以来、闘牛を見たことはない。見たいと思ったこともないよ。

ニール・アスピノール　ツアーではフランス、イタリア、スペインをまわった。イタリアで覚えているのは、レーシング・ドライバーが私たちをミラノに連れて行ってくれたことだ。ヨーロッパのあとの全米ツアーで、最初のシェア・スタジアム公演を行った。

ジョン　ニューヨークで行った全米ツアーのオープニング公演で、55,000人の観客の前で演奏したんだ。会場は狂気にあふれてたね。これだけ大勢の人間が集まったら卓球の観戦でも同じ状態だろうけどね。今でも怒号のような歓声を思い出すよ。

イギリスを離れるのは面倒だけど、どこかへ行くとしたらアメリカがいいね。すごく気に入っている場所があるんだ。インドネシアに行けと言われたら、アメリカに亡命するだろうね。1965年

ジョージ　シェア・スタジアムは巨大な会場だった。ロンドンではまだアストリア・シネマとかで演奏していたからね。巨大スタジアムでロック・コンサートをしたのは、僕らが最初だったんだ。このツアーのために特注の100ワットのアンプが用意された。30ワットからいきなり100ワットのアンプを使ったんだけど、それでも音量は足りなかったよ。屋内用のPAしかなかったからね。

リンゴ　さあ、スタジアム公演をするぞ！って言ったって、膨大な観客に対してちっぽけなPAシステムしかないんだから、大音量を出せるわけなかったんだよ。いつも屋内用のPAを使っていたけど、僕らにしてみれば、それで十分だったんだ。たとえシェア・スタジアムだろうとね。ファンが僕らの音楽を聴くためにコンサートにくるなんて一度でも思ったことないよ。みんな僕らを見にきただけなんだ。オープニング・ナンバーの出だしのカウントをとり始めたとたん、観客の歓声以外は何も聴こえなくなるんだからね。

ポール　今ではシェア・スタジアムとかジャイアンツ・スタジアムといった巨大な会場でコンサートをするのは当たり前になっているけど、当時ロック・コンサートをやったのは僕らが初めてだったのさ。何万人も入る会場だったけど、僕らにはそれだけの客を動員することができた。主催者は、僕らなら会場を満杯にできるって考えたんだよ。

ステージに上がると巨大な球場が人で埋まっていた。魔法をかけられたみたいだったよ。観客が分厚い壁みたいに見えるんだ。こんなにすごいコンサートをやってるんだと思うと、やっぱり嬉しかったね。でも観客に僕らの演奏が聴こえたとは思ってないよ。球場のPAは"レディース・アンド・ジェントルマン、次の選手は……"って放送するために用意されたものだし、システムも簡単なものだったから、僕らの音が外れていようが、演奏が間違っていようが、誰も気づかなかったんだよ。お祭り騒ぎみたいなものだったね。僕らはただ、自分たちの曲を陽気に演奏し、待機していたリムジンに大急ぎで乗りこんで帰った。それだけさ。

ニール・アスピノール　アメリカのコンサート会場には照明も音響システムもそろっていたので、マルがすべての機材をチェックするだけでよかったんだ。私はブリーフ・ケースを持って会場に行くだけですんだ。アメリカの状況はまったく違ったね。イギリスでは私たちはツアー・バスに乗らず、自分たちで運転して会場に行き、時には照明の設置までやっていたんだ。アメリカでは大勢のガードマンや警官が大騒ぎするファンを取り締まっていたので、私は警察署長とビートルズをどうやって会場に入場させ、退場させるかを検討したり、その都度持ち上がる問題に対応していたんだ。

ジョージ　ヘリコプターで会場入りしたんだけど、アリーナに着陸できなかったんで、ワールド・フェア・ビルの屋上に降りたんだ。そこからスタジアムまでは、ウェルズ・ファーゴの装甲トラックに乗っていった（ウェルズ・ファーゴがまだ走っているなんて驚いたよ。何年も前にインディアンの手に渡ったもんだと思っていたからね）。ウォール・ストリートで乗り込んだヘリコプターのパイロットは、着陸しかけたとたん、ふいに急上昇して球場の上をぐるぐるまわりだしたんだ。"見てみろよ、すごい光景だぜ"って言いながらね。僕らは必死の思いでシートにしがみつきながら、"早くここから脱出しなきゃ"って考えてたよ。

ポール　僕らは襟の高いベージュの軍服みたいな衣装に着替えると、ちょっと緊張しながら大急ぎで球場に駆けこんだんだ。何とか息を整えて演奏を始めたけど、もう汗びっしょりだったよ。

ジョン　ステージに上がる前はひどく緊張したね。着替えの30分前になると必ずと言っていいほど嫌になってくるんだ。突然、みんなのやる気が失せるのさ。スーツに着替えてジャケットをはおる時"あー、嫌だなあ"って思うんだけど、ステージに上がるとすぐに気分が回復するんだよ。1964年

ジョージ　本物のミリタリー・ジャケットじゃないよ。ベージュ色のただのジャケットにシェリフのバッジを付けてただけさ。

会場に出入りする時は1秒たりとも余裕はなかったね。いつでもそうだった。シェア・スタジアム公演のビデオを見ていたら、突然キング・カーティス・バンドが登場してきたんだ。"わーっ、かっこいいバンドじゃないか"って思ったよ。キング・カーティスはツアー中の飛行機でずっと一緒だったけど、彼の演奏は一度も見たことがなかったんだ。何しろ僕らは、いつも会場の地下室に閉じこめられていたからね。

ポール　僕らが騒音をかき鳴らし、観客が歓声をあげる。重要なのは僕らとファンが一体になって騒ぎまくったってことだ。すごいんだよ。セシル・B・デ・ミルと6万人のエキストラが出演しているみたいなね。 1965年

リンゴ　ビデオを見ると、僕らがステージでどんな様子だったかがわかるよ。巨大な会場で、今まで経験したことがないコンサートだった。ジョンは完全に狂ってたね。精神的にというんじゃなくて、興奮しすぎてキレちゃったんだ。肘でピアノを叩いたりして、とにかくおかしかったよ。

ジョン　ピアノの上に足を乗せたもんだから、ジョージときたら笑い転げちゃって、まともに演奏できないんだ。まあ、笑わせるためにそうしたんだけど。観客は僕が何をやってるかなんて、わからないからね。

「アイム・ダウン」でオルガンを弾いたんだ。ステージでこの曲を弾くのは初めてだったし、ギターを持っていないとなんか手持ち無沙汰で、何をしたらいいのかわからなかった。だからジェリー・リー・ルイスの真似をして、飛び跳ねたりしてたのさ。結局ちゃんと弾いたのは2小節だけだった。

僕はすごく感動していた。世界のどこでも、これだけ大勢の人間の前で演奏したことはなかったからね。前代未聞にして世界最大のライブ・ショーだったらしいよ。興奮して夢を見ているみたいだった。観客はものすごい歓声をあげていたけど、どうにか演奏は聴こえたんじゃないかな。何しろ巨大なアンプを使ったからね。

僕らはすごく遠くにいたからファンが投げてくれたものは何にも届かなかったけど、いたるところにポスターが貼ってあるのはわかったよ。僕らの頭上にも幕が飾ってあったけど、そんなことどうでもよかった。自分が誰かなんて関係ないのさ。プラグを差し込んで演奏を始めたら、ただのバンドにすぎない。自分たちがビートルズでどんなレコードを出しているかなんて意識しないよ。ただ歌うだけさ。1965年

ポール　シェア・スタジアムでのジョンはすごく楽しそうだった。ひとりではしゃいでるんだけど、それがすごくおかしいんだ。そこがジョンのすばらしいところさ。こんな会場に来たら、誰だって緊張するものだ(大観衆の前で初めて演奏する時に緊張しない人間なんていないからね)。そんな時、ジョンは必ず僕らを笑わせるんだ。おかしな顔をしたり、馬鹿なことをやったりするんだけど、僕らはそれで大いに勇気づけられるんだ。"よーし、それでいい。そんなに肩肘張ってやることないさ"って。僕らがいつも陽気にしていられたのは、ジョンのおかげなんだよ。

ニール・アスピノール　ジョンは、ちょっとした発言をする時も、何か行動する時でも、抜群のユーモア・センスを発揮していた。他のメンバーたちは、それをよく心得ていた。ジョンはおじぎをする時でも、メンバーたちとペチャクチャしゃべってるんだ。僕らは気づかないふりをしてたけどね。

リンゴ　とにかく観客がすごく遠くにいたってことが、一番の印象だったね。外野席もそこら中、観客で埋まってるんだ。今ツアーをするなら、観客の顔がすぐ見えるような会場がいいな。観客の反応を見ながら一緒に楽しめるようなね。シェア・スタジアムでは観客が遠すぎたよ。確かに大成功だったし、何万人もの前で演奏するのは初めてのことだった、というより、こんなコンサートをしたのは僕らのバンドが初めてだったわけだけど、僕らの最初の意向とはまったく違ったんだ。僕らは、すぐそばでファンに楽しんでもらいたかった。ファンの歓声はもう当たり前みたいになっていた。何も"このコンサートを永久に忘れないように、みんなで叫ぼう!"って言ったわけじゃないんだ。みんな、ただ悲鳴をあげてたのさ。

おもしろいのは、今、僕の妻になっているバーバラがあのコンサートに来ていたってことだ。姉さんのマージョリーと一緒にね。マージョリーはビートルズ・ウィッグをかぶっていたらしいけど、バーバラはローリング・ストーンズのファンだったんだよ。

ポール　リンダもあのコンサートに来ていたんだ。彼女は真面目な音楽ファンだったから、悲鳴ばかり聴こえるのは不満だったらしい。おもしろい体験だったけど、ほんとは音楽をちゃんと聴きたかったのさ。だから、彼女にとっては不満足なショーだったわけだ。

ジョン　最初の4~5年はライブでちゃんと音楽を聴いてもらえたし、すごく楽しかったよ。それから有名になって、演奏は聴いてもらえなくなったけど、それもまた楽しいよ。客は入場料を払ってコンサートに来るんだから、叫びたければ叫べばいいのさ。僕らだって、ギターを持って叫んでいるみたいなものだ。観客に向かってね。悲鳴をあげるだけなら、危険なことじゃないからね。1964年

ニール・アスピノール　甲高い歓声を1時間ほど聴いているうちに、耳鳴りが止まらなくなったよ。いい経験だったけどね。かつてない最大の屋外コンサートだったというのは、あとから知ったんだ。ビートルズのコンサート・ツアーの中で、最も豪華で派手なコンサートだった。

ジョン　(サンフランシスコ公演は)ワイルドだったね。少年が僕の帽子をつかみとったんだ。そいつは最初からショーには興味なさそうだったけど、いきなりステージに上がってきて、うしろから僕の帽子をつかみとると、最前列にいたファンたちの頭上に飛び込んだのさ。つぶされて死人が出てもおかしくない状態だったよ。ああいう馬鹿な真似はやめてほしいね。

最前列のカメラマンたちが立っていなければ、事態はさほどひどくなかったと思う。ファンも立ち上がらなくても見えただろうからね。カメラマンたちが高い位置から、立ち上がって叫ぶファンの姿を撮影しようとするもんだから、こんなことになっちゃうんだよ。

最初から嫌な予感がしていたんだ。"何か、よくないショーになりそうだ"って感じたのさ。そしたら悪夢が起こった。観客が演奏を聴こうとしないのはわかってたけど、スタッフが僕らを守るためにステージに走ってきたもんだから、ギターのチューニングは狂うし、アンプのコードははずれちゃうし、悲惨だったよ。1965年

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

リンゴ　アメリカはいつも僕に何かを与えてくれたよ。カリフォルニアに行った時は、自分の家にいるみたいだった。カリフォルニアは大好きなんだ。

最初の全米ツアーは驚異的だったね。僕らのロード・クルーはニール、マル、ブライアン、それと広報担当のデレクの4人だった。ブライアンはマネージャーだから、作業はしなかった。ニールは僕らにお茶を入れてくれたり、いろいろ世話をしてくれた。マルは機材の管理をしていた。僕らと一緒にいるのは、この4人だけだったんだ。今、僕がツアーをする時は48人のスタッフが同行するっていうのにね。

でも、公演は単純だった。直前に会場に入って、演奏して、帰るだけ。ツアーとしては最高のやり方だね。今もそうできたらって思うよ。今は、会場に運びこむ荷物が山ほどあるからね。ビートルズ時代は会場に駆け込んで、曲を演奏して、大急ぎで会場から去っていくのが普通だった。不謹慎なことだけど、僕らにしてみれば、ステージで演奏するのは息抜きみたいなものだったんだ。それ以外に楽しいことがたくさんあったからね。

ニール・アスピノール　ツアーの最後にカリフォルニアに行き、ロサンゼルスで一軒家をレンタルして1週間ほど滞在したんだ。ピーター・フォンダが訪ねてきて、プールでとんでもない芸当をやってくれた。深いプールの底に降りていって両足をつけて立つと、そのまま反対側まで歩いていったんだ。"すごい! もう一度みせてくれる?"って言うと、彼は難なくやってのけたよ。

ジョージ　僕らが借りたのは、のちにジミ・ヘンドリックスが滞在していた家なんだ。マルホランドの丘の途中にある蹄鉄形の一軒家で、守衛用の小さな離れがついていた。マルとニールは離れに寝泊まりしてたんだけど、壁一面にアラビアン・ナイトみたいなカーテンが飾りつけてあったよ。

この家では、忘れられない出来事があった。僕とジョンは、ポールとリンゴにもLSDをやらせようと決めていた。じゃないと話が通じないからさ。LSDをやると自分がものすごく変化するんだけど、口では説明できない感覚なんだ。わかってもらうには経験してもらうしかなかった。LSDで体験した感情や思考を説明しようと思ったら一生かかっちゃうからね。ジョンと僕にとっては、ふたりに体験してもらうことがとても重要だったんだ。僕らは、オフの日にハリウッドに出かける時、LSDを持っていくことにした。この時のLSDはニューヨークで手に入れたものだった。僕らは、銀紙でくるんだ角砂糖を、ロサンゼルスに来るまでずっと大切に持ち歩いていたのさ。

ポールはLSDをやらなかった。やりたくないって言ったんだ。リンゴとニールはLSDをやったけど、マルはみんなの面倒を見るために正気を保っていた。家にはザ・バーズのデイヴ・クロスビーとジム・マッギンが来ていた。それと、なぜだかわからないけど、ピーター・フォンダもいたんだ。彼は"死ぬってどういうことか僕にはわかるんだ。自分自身をピストルで撃ったからさ"と言い続けてた。ある時誤って撃ってしまったらしいんだ。銃弾の傷跡も見せてくれたよ。気味の悪い奴だったな。

リンゴ　僕は何でもやってみようと思っていたけど、ジョンとジョージは僕にはLSDをくれなかった。ロサンゼルスに滞在していた時、ふたりの男がやってきて、僕に勧めてくれたんだ。"君もやってみろよ"ってね。彼らは、目薬の容器に入っていた液体を角砂糖に数滴垂らすと、僕にくれた。それが僕のトリップ初体験だった。ジョンとジョージとニールとマルも一緒だった。僕がプールで泳いでいる間、ニールはドン・ショートの相手をしなきゃならなかった。すばらしい1日だったけど、夜になると、このまま正気に戻らないような気がして落ち着かなかったよ。12時間たっても"神様、ちょっと休ませてください"って感じだった。

ジョン　2度目の体験は最初と状況が違っていたから、慎重だったよ。カリフォルニアでやることに決めていたんだ。僕らはドリス・デイが住んでいるような家を借りていた。リンゴとジョージと僕、それにニールも体験したと思う。ポールは自分だけ仲間はずれみたいに感じていたと思うよ。みんなポールに対して冷たかったからね。"僕らはやるけど、君はやらないんだ"って感じでね。ポールが体験したのは、それからずっとたってからだった。

僕らは何も食べられなかった。食べ物を手にとるんだけど、どうしても食べられない。誰かが食事を用意してくれたけど、僕らは食べ物を床に散らかしただけだった。庭に出ると、レポーターのドン・ショートが来ていた。まだ2回めのトリップだったから、素敵な家にいるのに何をしたらいいのかわからなかったし、正気に戻る方法も知らなかった。ただ体験しただけなんだ。僕はレポーターの顔を見て、とっさに思った。"普通にするにはどうすればいいんだ"ってね。僕らは異常な行動をしているに違いないって思い込んでたんだ。実際はそうじゃなかったみたいだけどね。僕らは、絶対に見破られると思ってドキドキしながら彼が帰るのを待っていた。彼にしてみれば、僕らがどうして話をしないのか不思議だったろうね。ニールもその時初めてLSDをやったんだけど、ロード・マネージャーだから相手をしなきゃならなかった。僕らは"早くドン・ショートを追い出せ"って耳打ちしたけど、ニールはどうすればいいのかわからなくて、座って話し込んだりしてたよ。1970年

トリップしている最中にピーター・フォンダが訪ねてきた。彼はこっちに近づいてきて僕の隣に腰を降ろすと、"死ぬってどういうことか僕にはわかるんだ"って囁くんだ。そんな話はやめてくれ!って思ったよ。せっかくトリップして太陽がキラキラと輝き、(『プレイボーイ』誌に出てくるような)美しい女性たちが踊っていて、すばらしき60年代を満喫してたっていうのに。あいつ——当時はまだ名前も知らなかった。『イージー・ライダー』が制作される前のことだからね——がつきまとってきて、サングラス越しに"死ぬ時の気持ちがわかる"って言い続けるのさ。僕らはできるだけ彼から離れようとした。うんざりしたんだ。僕
かったのさ。ハイな気分の時にそんな話は聞きたくなかった。"話しかけないでくれ。死ぬ時の気持ちなんて知りたくないよ!"って叫びたかったよ。

僕はこの時のことを「シー・セッド・シー・セッド」の歌詞にした。"彼"じゃなくて"彼女"に変えたけどね。1980年　僕の歌詞はこうやって生まれるのさ。"彼女は言った、死ぬ時の気持ちが私にはわかるの"。これ、トリップした時の曲なんだ。1970年

ポール　ピーター・フォンダはちょっと疲れているように見えた。淋しかったんじゃないかな。ヘンリー・フォンダの息子ってことで、みんなの期待が大きかったせいかもしれない。でも彼は僕らと同世代の人間だし、まともな男だったよ。僕らが大嫌いだった人間は、そんなにはいない。何とかうまくつきあおうとしたからね。それでもうまくつきあえなかった人間とは、二度と会わなかったよ。

ジョージ　最初にLSDを体験した時に、どんなことが起きるかってことを、僕なりに理解したつもりだった。だけど、頭で理解していることと実際の感覚は全然違う。2回目に体験した時、"そうだよ、この感覚だよ!"って思ったんだ。僕はギターをしばらくいじってから、プールに入った。最高の気分だったね。水の感触がとても気持ちよかった。プールの向こう側まで泳いだ時、変な音がしたんだ(自分の背後の様子が見えるくらい五感が敏感になっているからね)。嫌な予感がしたよ。振り返ってみると、「デイリー・ミラー」紙のドン・ショートがいたんだよ。ツアーが始まってから、ずっと僕らを追いかけていた記者だ。いかにも親しい友人みたいな顔をして近づいてくるんだけど、ほんとは僕らのスクープを探してたのさ。

しかたなくニールが彼と話し始めた。LSDをやっていると、ものを認識する感覚が歪んでしまうんだけど、ジョンと僕とジム・マッギンはそんな状態だった。僕らとドン・ショートとの距離は18メートルぐらいだったけど、まるで望遠鏡で向こう側を覗いているような気分だったよ。ずっと遠く離れたところにいるように見えたから、僕らは大声で"嫌だな。あいつ、また来てるぜ"ってわめいたんだ。おかげでニールは僕らの声が聞こえないように、彼をビリヤードに誘うはめになった。LSDをやっている時は、1分間がまるで千年みたいに長く感じるんだ。たった1分で千年分の年月が流れていくのさ。ドン・ショートとビリヤードをやるなんて最悪もいいとこさ。

何時間かたつと、僕らはどっぷりトリップに浸っていた。そのうちに女優の卵たちがやってきて、家の中で映画が見られるようセッティングを始めたんだ。夕方には、メイクアップした知らない女性たちが僕らのまわりに座ってたよ。LSDをやってなかったら、さっさと逃げていただろうね。やがて映画が始まった。ドライブイン・シアター用の『キャット・バルー』だった。ドライブイン・シアターの映画には字幕がついていて、観客の反応も書いてあるんだ。車の中で見ていると、他の客が笑っているかどうかわからないから、"ここで笑う"とか"ここは笑わない"とか、御丁寧に指示してあるのさ。トリップしながらこんな映画を見るのは、何とも奇妙な気分だった。僕はリー・マーヴィンが大嫌いだったし、LSDをやってる時に山高帽をかぶったチビ野郎の声なんか聞きたくなかったよ。それまで見た中で、最低にくだらない映画だった。僕は耐えきれなくなって、気づいたら外にいたんだ。そのうちに突然"バキューン"って音がして、僕は思わずのけぞった。何事だ?って思ってあたりを見まわしたら、ジョンが同じようにのけぞって、そこにいたんだよ。ふたりで並んで立っていると、しばらくしてまた"ウワッ!"とか"止まれ!"って声がしたんだ。何かと思ったら映画だった。『キャット・バルー』が続いてたんだ。おかしなことに、ふたりで一緒にLSDをやると同じ反応をしたり、同じことを言ったりする。何を考えているのかわかるんだ。目を見ると、わかっちゃうんだよ。

CamScannerでスキャン

ポール　ロサンゼルス滞在の最後にエルヴィス・プレスリーに会ったんだ。僕らは何年もチャンスを狙っていたんだけど、まだ一度も会ったことはなかった。エルヴィス、それにマネージャーのトム・パーカー大佐に会うのはちょっと恐かったしね。何回も頼んだけど、大佐が手みやげを持って会いにきて、僕らとしばらく話をしてくれるだけだった。エルヴィスが僕らを軽視しているからだとは思わなかったけど、そう思われても当然だ、とは思ったね。何たって僕らが面会したがっていたのは、エルヴィス・プレスリーなんだから。でも、僕らはとうとう招待された。ハリウッドで映画製作中のエルヴィスに会えることになったんだ。

ジョン　僕らはずっと、エルヴィスに会うタイミングを逃し続けていたんだ。ようやく会えることになった時も、マネージャーのトム大佐とブライアンは、どうやって行くのかとか、何人で行くのかとか、ずいぶんいろいろ話し合っていたよ。1965年

ジョージ　エルヴィスとの面会は、このツアーの最大イベントのひとつだった。だけど、おかしなことに、彼の家に近づく頃には、僕らがどこに向かっているのか忘れていたんだ。キャディラックのリムジンでマルホランドの周辺を走りながら、僕らはリア・シートでお茶ばかり飲んでいた。どこに行くかなんて、あまり気にしていなかったんだ。コメディアンのロード・バックリーが"原住民の村に行ってペヨーテの芽をつまんで食べると、自分がどこにいるのかわからなくなるが、自分が誰だかわからなくなることはない"って言ってるけど、そんな感じだった。

とにかく、僕らは興奮していて、はしゃぎまくっていたんだ(大笑いしたよ。そのうち、馬鹿笑いすることもなくなったけどね。訴訟とかに関わるようになったら、何もかも殺風景に見えてね。でも、あの頃の、僕らはしょっちゅう笑ってばかりいたよ)。大きな門の前でリムジンが止まると、誰かが"エルヴィスに面会に行くんです"って言ったんだ。僕らは笑いながら車から飛び出した。僕らは馬鹿じゃないぞって素振りをしながらね。まるでビートルズのアニメみたいだったよ。

ジョン　ものすごく興奮したね。ロサンゼルスのエルヴィスの自宅で彼に会った時、僕らはひどく緊張していた。たぶん、僕らが滞在していた家と同じぐらいの大きさだったんだろうけど、エルヴィスの大邸宅に来たぞって、怖気づいちゃったんだ。エルヴィスのまわりには大勢の人間が集まっていた。みんな、近所に住んでいる人たちだった(僕らがリバプールに行くと僕らのまわりにリバプールの人たちが大勢集まってくるのと同じことだけどね)。ビリヤード台がいくつもあったよ。アメリカの邸宅ってそんなもんかもしれないけど、僕らはすげえって感動したよ。まるでナイト・クラブみたいだったんだ。1976年

ニール・アスピノール　大佐の他に、"メンフィス・マフィア"と呼ばれているエルヴィスの仲間たちとプリシラが来ていた。彼らが最初に見せてくれたのは、回転させるとクラップス(サイコロ博打)テーブルに早変わりするビリヤード台だった。

それから、6メートル四方もありそうな巨大なテレビ・セットが置いてある部屋に入った。ブライアンが部屋に入ると、大佐が寄ってきて"エプスタイン様のお席はこちらです"って案内した。すると、その席に15人ぐらい集まってきたよ。

みんな、めいめいに座って話をしていた。エルヴィスは水を飲んでいて、ビートルズのメンバーふたりと一緒にギターを弾いていた。私はマルと部屋の反対側にいて、他のふたりと話をしていたんだ。

リンゴ　何もかも興奮することばかりだったよ。4人というのは便利なんだ。ふたりずつに分かれることができるからね。メチャクチャ大きいけど暗い家だった。僕らが部屋に入ると、エルヴィスはテレビの前にあるソファに座って、ベース・ギターを弾いてた。何か不思議だったね。彼のまわりには仲間たちが大勢いたけど、僕らは"ハイ! エルヴィス"って声をかけた。彼はかなりシャイな男で、僕らもちょっと緊張していたけど、5人で楽しく過ごすことができたんだ。エルヴィスも僕らに会って興奮してたけど、僕の方がはるかに興奮していたね。

ポール　家に招かれたのは、すごいことだった。なんたってエルヴィスだからね。エルヴィス本人がそこにいたんだ。僕らは昔から大ファンで、エルヴィスは尊敬するヒーローだった。そのヒーローが"やあ、みんな。何か飲むかい?"って声をかけてきたんだ。僕らは、座りながらテレビを見た。エルヴィスは世界初のリモコン・スイッチを持っていたんだ。もちろんリモコンなんか見るのは初めてだった。テレビに向かってスイッチを入れると、なんとエルヴィスが現れたんだ。エルヴィスはずっとジューク・ボックスでかけていた「モヘア・サム」に合わせて演奏していた。

ジョン　エルヴィスはずっとテレビをつけっ放しにしてるんだ。僕もそうだ。僕らもいつもテレビをつけている。全然見ないんだけど、画像だけ映しておいてレコードを聴いてるんだ。エルヴィスのテレビの前には巨大なベース用のアンプが置いてあって、彼はテレビの映像をつけたまま、ずっとベース・ギターを弾いてるんだ。僕らもそこに行って、そのへんにあった楽器をアンプにつないで、一緒に弾きながら歌ったのさ。僕が持っているようなジューク・ボックスもあったよ。たぶん、エルヴィスのヒット曲が全部入っていたと思う。僕も彼と同じくらいヒット曲があれば、自分の曲ばっかり入れるだろうね。1976年

ポール　エルヴィスがベースを弾いているなんて僕にとっては最高だった。もちろん僕はそばに行ったよ。"ちょっと弾かせてもらっていいですか…"って。とたんにエルヴィスは僕の友だちみたいになった。願ってもない状況だったね。ベースのことならいくらでも話ができるし、すごく楽しかったよ。エルヴィスは話し好きで、フレンドリーで、ちょっぴりシャイで、すばらしい人だった。でも僕らが思い描いていたイメージっていうのがあるからね。イメージどおりの人物でいてほしいって気持ちもあったよ。

マル・エヴァンス　エキサイティングだったけど、人生で一番がっかりした日だ。僕もエルヴィスの大ファンだったんだ。僕は身長が190センチもある大男だけど、エルヴィスに会うためにわざわざスーツをクリーニングに出し、きれいな白いシャツとネクタイまで用意して、精一杯めかしこんだ。ところがクリーニングから戻ってきたスーツは、ポケットが縫いつけてあったんだ。僕は今でもピックを持ち歩いてるんだ。今はもう必要ないけど、習慣なんだ。その時もポケットの中にピックが入っていた。

部屋に入るとエルヴィスが"誰か、ピック持っていないかい?"って。するとポールが僕の方を見て答えた。"マルなら持ってるよ。いつもピックを持ち歩いてるんだ。休暇の時もね"。それで、ポケットの中を探ろうとしたら、口が縫いつけてあったんだよ。

結局、キッチンにあったプラスチックのスプーンを壊して、エルヴィスのためにピックを作ったんだ!

もう、がっかりしたなんてもんじゃなかったよ。どうして自分のピックじゃないんだって、もう悔しくてね。エルヴィスが使ったピックを返してくれたら、額に入れて飾っておけたのに。

チャーリー・リッチも来ていた。僕はエルヴィスと同じぐらいチャーリーも好きだった。アーム付きのレコード・プレイヤーが置いてあって、マディ・ウォーターズをひと晩中かけていたと思う。部屋のすみに画面だけついているカラー・テレビがあって、エルヴィスがベースを弾き、ジョンとポールがギターを弾いていた。私はぽかんと口をあけたまま、彼らを眺めていたんだ。

ジョン　最初はちょっと気詰まりな感じだったから、僕からエルヴィスに、次の映画のアイディアはあるんですかって尋ねたんだ。エルヴィスはしどろもどろな感じで"ああ、もちろんあるよ。ええっと、ギターを持った田舎の少年がいてね、何人かの少女に出会ってさ、それで歌を歌うんだよ"って答えたんだ。僕らが互いに顔を見合わせていると、プレスリーとパーカー大佐が吹き出したのさ。これが「ワイルド・イン・ザ・カントリー」(嵐の季節)の最初のアイディアだって言うんだ。赤字だったらしいけどね。1965年

ポール　それから、エルヴィスのオートバイ仲間2~3人とビリヤードをやった。午後10時頃になってプリシラがやって来た。カントリー・ウェスタンの男たちが妻への愛情をどうやって表現するのか、見せつけたかったのかな。そっけない紹介だったよ。"これがプリシラです"って、それだけなんだ。

彼女を見たとたん、バービー人形みたいだって思ったよ。紫色のギンガム・チェックのドレスを着て、蜂の巣みたいなヘア・スタイルにギンガムのリボンをくっつけて、厚化粧でね。僕らが"こんばんは"ってあいさつすると、うしろから"いいかみんな、彼女に手をだすなよ。おまえはもう下がれ"って声がしたんだ。彼女はすぐに出ていったよ。

エルヴィスを責めたりできないよ。もちろん誰も、彼女を口説こうなんて思ってなかったけどね。そんなこと絶対にできないさ、彼女はエルヴィスの奥さんなんだから! まったくあり得ないことなんだから、そそくさと彼女を追い払わなくてもよかったのにって、そう思ったよ。

ジョージ　プリシラに会ったことさえ覚えていないよ。何しろ僕は、マフィアみたいな連中の誰かがマリファナを持っていないかって、そればっかりに気を取られていたからね。でも彼らは"ウィスキーをたしなむアッパークラス"だったんだ。南部にいてもマリファナなんか吸わなかったのさ。

リンゴ　プリシラに会ったことは全然覚えていないな。彼女の存在なんかどうでもよかったんだと思う。僕が会いたかったのはエルヴィスだからね。実をいうと、一緒にいたメンバーのことも覚えていないんだ。

ニール・アスピノール　プリシラはロング・ドレスを着て、髪飾りをつけていたと思う。印象的だったのは、ブライアンが大佐に、自分はビートルズ以外のバンドのマネージャーもしているんだって話した時、大佐がひどく驚いたことなんだ。自分はエルヴィスの世話をするだけで休む時間もないのに、ブライアンがビートルズ以外のバンドのマネージャーも兼ねているなんてとても信じられないってね。

CamScannerでスキャン

ジョン　エルヴィスに会えたのはすごいことだった。あのエルヴィスにだ。彼は何曲か演奏し、僕らはみんなでギターを弾いた。何も喋らずに、ただ音楽をかき鳴らしていた。図体はそれほど大きくなかったけど、エルヴィスはエルヴィスだ。モゴモゴ喋る男だったね。1972年

ごく普通の男に見えたよ。映画製作のことや、テレビに出演しないことなんかを話した。映画製作はすごく楽しそうだったけど、僕らにとっては、テレビにまったく出演しないというのは考えられないことだった。僕らはいつも、何かおもしろいことはないかって探しているからね。エルヴィスは、たまには出演してみたくなるって言ってたよ。それが普通さ。エルヴィスは僕が期待していたとおりの、すばらしい男だった。1965年

ポール　エルヴィスに会ったことは生涯忘れないだろうね。僕らには好意的だったと思う。あの頃、エルヴィスは僕らの存在を少し恐れていたのかもしれないけど、そんなことは一切言わなかった。敵意はまったく感じなかったよ。

エルヴィスに会ったのは一度きりだ。ビートルズが大成功したことで、エルヴィスの人気が少しずつ落ち始めたんだ。すごく残念だったよ。一緒にやりたかったからね。エルヴィスは僕らの世代のビッグ・アイドルだったけど、スタイルがどんどん変わってきて、僕らの方が注目されるようになった。イギリスでは、エルヴィスは男らしくて力強いイメージだった。アメリカでのエルヴィスのコンサート写真を見ると、飛び跳ねている観客はひとりもいないんだ。最前列にいる客が、踊りもしないで、じっと座って見ているんだからね。びっくりしたよ。

リンゴ　何年かして、エルヴィスがFBIと組んで僕らをアメリカから追放しようと企んでいたことがわかった時は、すごくショックだったよ。悲しかったのは、エルヴィスが他のアメリカ人みたいに、僕らがアメリカの若者に悪影響を与えるって思っていたことだ。ミスター・ヒップが、僕らを危険人物と視ていたなんてね。僕にしてみれば、エルヴィスと彼の経歴の方が、よっぽど危険だよ。

彼にはもう一度だけ、会ったことがあるんだ。エルヴィスがまったく音楽をやらなくなったんで、すごく怒りを感じていた時だ。エルヴィスは何もしないで、仲間たちとフットボールをしていたよ。僕は何だかとても悲しくなって"どうしてスタジオに戻って、僕らのために歌ってくれないんだい？　いったい何やってるんだよ"って言ったんだ。エルヴィスがどう答えたかは覚えてないよ。たぶん黙って引き返して、またフットボールを始めたんじゃないかな。

ポール　エルヴィスが僕ら、つまりビートルズを告発しようとしていたっていう有名なニクソンの記事を読んだことがあるんだ。そこには、エルヴィスが敬愛するニクソン大統領に"実は、ビートルズと名乗る男たちはドラッグを乱用しており、アメリカにとってきわめて危険な人物であります"って語ったことが書いてあった。

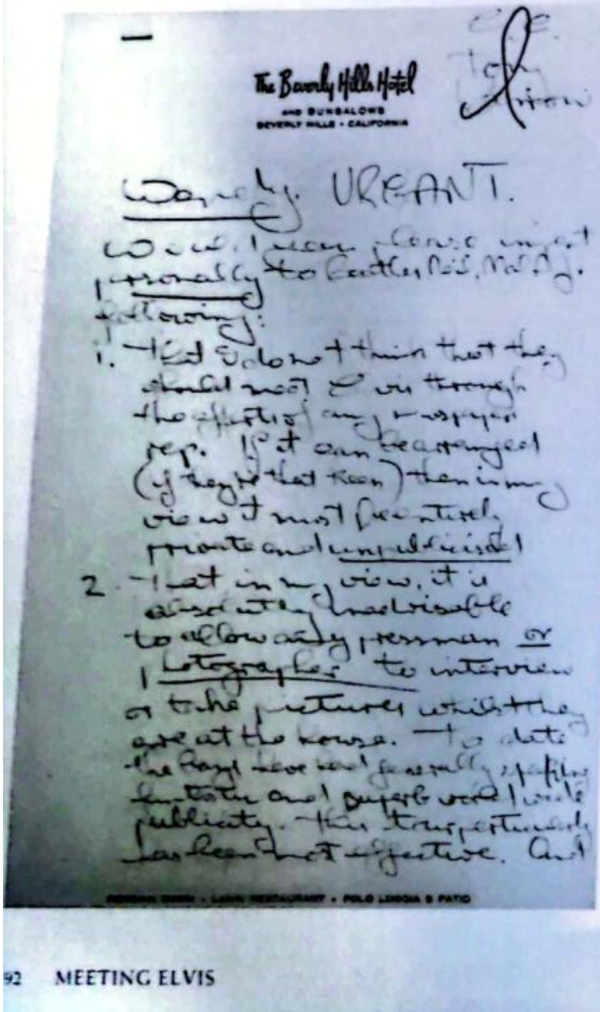
何か裏切られたような気分だったね。僕らがドラッグをやったのはエルヴィスがどんな反応をするか見たかったからなんだ。すっかりハイになってる時に、トイレで彼をつかまえたんだよ。この記事には失望したけど、それでもエルヴィスが好きだって気持ちは変わらない。特に初期の彼は最高だね。エルヴィスから受けた影響はすごく大きいんだ。

ジョン　初めて「ハートブレイク・ホテル」を聴いた時は、何を言ってるのかまるでわからなかったよ。それでも聴いているだけで鳥肌が立ったんだ。こんなふうに歌うアメリカ人はいなかったからね。それまでは、シナトラとか、はっきりとわかるように歌う歌手しかいなかったんだ。それが突然、ブルージーな音楽にエコーがかかった田舎臭いボーカルだからね。プレスリーも、リトル・リチャードも、チャック・ベリーも、歌詞なんか全然聴き取れなかったよ。わけがわからないまま聴いてたんだ。すごい音だって、それだけの理由でね。1971年

陸軍に入隊する前のエルヴィスの音楽はすばらしかったよ。エルヴィスは僕らの世代にとって、いわば60年代のビートルズみたいな存在だったんだ。1977年　でも入隊してから"ホモ野郎"っていじめられたんだろうな。エルヴィスは髪の毛を刈られただけでなく、股間も刈られちゃったのさ。入隊後もいくつかすばらしい曲があるけど、以前とは全然違ったよ。精神的にすごく変わってしまったんだ。1975年

本当のエルヴィスは、陸軍に入隊した日に死んだのさ。奴らが彼を殺して、生きる屍にしたんだよ。1977年

ポール　何もかもがすごかったね。全然楽しくなかったとしても、リバプールに帰って、"ねえ、誰に会ったと思う？"って自慢できるからね。エルヴィスみたいな有名人に会うとか、サンセット大通りを歩くとかっていうのは、リバプールでは夢みたいな話だったからね。


The Beverly Hills Hotel
AND BUNGALOWS
BEVERLY HILLS • CALIFORNIA

URGENT.

1.

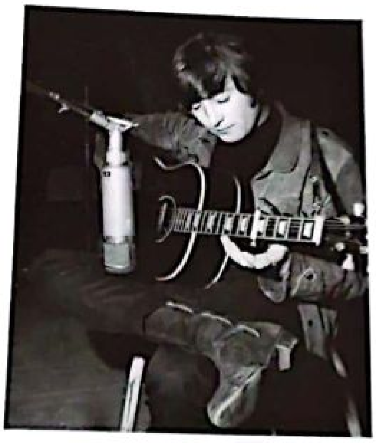
2.

or take pictures whilst they are at the house.

CamScannerでスキャン

ジョン　答えは“愛”だってわかった時は、目の前が突然開けたような気がしたね。アルバム『ラバー・ソウル』を作っている時だった。僕は「ザ・ワード」(愛のことば)という曲で、初めて愛を表現したんだ。いい本にも悪い本にも出てくる言葉、それは“愛”、いつでも、どこにでもある言葉、それは“愛”だってね。これこそが宇宙の根底にあるテーマだって思ったんだ。愛に値しないものなんて世の中には存在しないのさ。愛すること、愛されること、愛を表現すること(愛について何か語ること)に一生懸命になるのは、すばらしいことじゃないか。

愛にはさまざまな形がたくさんあるけど、愛そのものは不変なものだ。永遠に変わらない。僕はいつも愛にあふれているわけじゃないけど、そうなりたいと思ってるよ。常に愛を忘れない人間でいたいんだ。



ポール　**「ザ・ワード」は救世軍の歌にもなり得るよね。その言葉は“愛”だけど“神”かもしれないんだ(そうだというんじゃないよ。かもしれないってことだ)。**

1965年

ある時「アイム・ダウン」のアウト・テイクを聴いていたら、僕の話し声が録音されていたんだ。“アメリカのブルース・マンが「ミック・ジャガーさんよ、音楽は悪くはないが、それじゃ、まるでプラスチック・ソウルだな」って言ったらしい”ってね。それで、プラスチック・ソウルから「ラバー・ソウル」を思いついたんだ。

このアルバムのレコーディングを開始したのは、1965年の10月だ。僕らの方向性は、「サンキュー・ガール」、「フロム・ミー・トゥ・ユー」、「シー・ラヴズ・ユー」みたいなポップスとはかなり違ってきていた。初期の曲はどれもファンの女の子たちのために書いたものだ。“僕らのレコードを買ってよ”っていうスタンスでね。だけど、そういう時代はもう終わった。僕らはもっとシュールでエンターテイメント性のある曲を書くべきだって思ったのさ。影響力のあるミュージシャンが出てきたってこともある。当時の僕らは、ボブ・ディランにかなり影響されていたんだ。

ジョージ・マーティン　『ラバー・ソウル』の頃には、ビートルズはすでに新しい音楽性を見い出していた。初期の曲は、アメリカのリズ

ジョン　僕らは音楽的にも技術的にも進歩していった。最後は自分たちでレコーディングするまでになったんだ。最初の頃は、指示されたとおりにするしかなかった。2時間で完成させなきゃならなかったし、せいぜい3テイクまでしか収録できなかった。もっと音を響かせたいと思っても、やり方がわからなかったしね。だんだんテクニックを覚えていったのさ。1970年　やがて最新テクニックを使えるようになった。『ラバー・ソウル』、僕らがそうなり始めた頃のアルバムなんだ。

最初は他人の真似をして覚えたわけだけど、そのうちに自分たちのスタイルを作るようになった。レコーディング・スタジオのあらゆるテクニックを試してみたのが『ラバー・ソウル』なんだよ。音楽的に進歩したのは、スタジオの知識が増えたからなんだ。1973年

は、より丁寧にアルバムを作ろうとし、ジャケットから何からすべて自分たちで決めた。

トルを決めたのはポールだ。「ヤー・ブルース」と似てるよ、つまり、英国人の魂(ソ)のことなんだ、ラバー・ソウルはね。ラバーにしたのは、ただのシャレだよ。1970年

ポール　『ラバー・ソウル』のタイトルは、年取ったブルース・マンがミック・ジャガーに言った言葉がきっかけなんだ。

ム&ブルースの影響が大きかった。いわゆる"ビートルズ・サウンド"が生まれたのは、リバプールが港町だったことに関係していると思う。私たちよりずっと早くアメリカの音楽を聴くことができたわけだから。彼らはモータウンやブラック・ミュージックについて、誰よりも詳しく知ってて、多大な影響を受けているはずだ。
その後、年月とともに、彼らのサウンドに違う音楽の影響が見え始めたんだ。クラシックとかモダン・ミュージックとか。1965年頃からだね。

リンゴ 「ラバー・ソウル」ではありとあらゆる実験をしたよ。ドラッグのせいもあるだろうね。ジョージ・マーティンはそのことを知っていて、よく怒ってたよ。本気で怒ったわけじゃないけど、僕らを見ると"またか"って感じだった。何をやるにも時間がかかるからさ。
彼は優れたプロデューサーだったね。最初の頃はリハーサルの助手みたいに、テイクの準備ができるとスタジオにやってきて録音ボタンを押すだけだった。そのうちにずっとスタジオにいるようになったんだ。僕らは延々と演奏を続けて、最高の出来だったって思うと"ジョージ、今のテープに入ってる?"って確認する。僕らがジョージ・マーティンにテープをまわし続けることを教えたのさ。テイクの時だけ録音ボタンを押すということはなくなったんだ。僕らはスタジオにいる間、ずっとテープをまわしていたからね。だから、いいテイクがたくさんあるんだよ。

ポール 僕らの音楽はどんどんサイケデリックでシュールな方向に変わっていったけど、ジョージ・マーティンはとてもよく理解してくれたよ。音楽的には自分の趣味とまったく合わないこともあっただろうけど、いつだって熱心に聴いてくれたね。
でも、彼には、よく怒りをぶちまけたよ。いろいろ注文するもんだから、だんだん腹が立ってくるんだ。この前も「ディジー・ミス・リジー」のアウト・テイクを聴いていたら、ジョンがイラついた声で"何が悪いんだよ?"って言ってるんだ。ジョージ・マーティンが"うーん、ちょっとパワーが足りないんだよ、ジョン"って言うと、ジョンは"くそったれ"て毒づいてたよ。そのうちに爆発して"パワーが足りないだって? じゃあ、おまえがここで歌ってみろよ!"ってことになるんだ。ジョンはプレッシャーがたまってたのさ。長時間ずっとハードな仕事をしていたから、休みが必要だったんだよ。

リンゴ みんなみたいに、僕らだってカーッとなったりするさ。
も、度を超すほどじゃない。殴り合ったりとか、そういうこと
一度もないよ。1965年

ョン 言い争いなんか、しょっちゅうしてるよ。でも何年も一
にやっているから、お互いに相手のことがよくわかるんだ。これを言ったらおしまい
とこで、踏みとどまるのさ。腹の中を探り合うようなもんだね。リンゴと僕が言い争
だって、これ以上いくとヤバイぞってところで、全員がぴたりと黙っちゃう。だから、
争うことはあってもケンカにはならないね。ショー・ビジネスの世界でケンカするって
のは、19回目の結婚をするとか、グループを脱けてソロになるとか、そういう連中
1965年

イ ドラッグをやりすぎると、まともな演奏はできなかったね。ひどいもんさ。その
出来だって思っても、翌日スタジオで聴いてみると、お互いに顔を見合わせて
度、やるしかないな"ってことになるんだ。ビートルズの場合、トリップしながらレ
ィングするのは無理だったね。だからランチに出かける時は、ほとんど持ってい
った。前の晩にハイになるのが効果的なんだ。クリエイティブな記憶があざやか
ているけど、精神的には正気に戻っているからね。

僕らはよく気持ち悪くなったよ。高級住宅街のはずれに住んでいた頃、ジョ
ウィンドウを黒く塗った大型のロールス・ロイスで迎えにきてくれたんだ(ジョン
僕は一緒にスタジオに行ってたからね)。最初にリンゴ、次に僕が乗るんだけ
のロールス・ロイスはスプリングがイカれていたから、車体はものすごく揺れる
ィンドウは閉じたままなのさ。倍の量のマリファナを吸うんだけど、ハマース
頃にはすっかり酔っぱらって気持ち悪くなってるんだ。アビイ・ロード・スタジ
車から降りると、もうへとへとなのさ。
を語る時、マリファナの話を出さないわけにはいかないだろうね。僕らが
グする時は、ニールとマルが第2スタジオのサウンド・バッフルの影にすわり
とハッパを丸めてたんだから。セッション・テープを聴くとわかるよ。曲が
に、ジョンが"ちょっと待って"って言って消えてしまい、ポールが穴埋めを
たジョンが戻ってくるのさ。エンジニアがテープの巻き戻しを始めると"ち
てくるか…"って感じだったしね。

「ラバー・ソウル」は一番好きなアルバムだね。ビートルズのアルバムの中ではベストだと思うよ。いいアルバムを作ろうっていう意気込みがあったしね。すごく時間をかけたし、新しいことも試してみた。でも一番重要なのは、僕らが突然、まったく新しいサウンドを創り出したってことだ。他のミュージシャンからの影響も大きかったよ。とにかく、いろんなことが開花した時代で、僕らも成長の真っ只中にいたんだ。

リンゴ 僕らが変わったのは、マリファナの影響もあるだろうね。特に作詞作曲はそうだ。今までとは違う曲ができるから、演奏も違ってくる。僕らはもっと大きな世界に目を向け、新しいことに挑戦しようとしたんだ。ラブ・ソングはもう十分だったんだ(初期の曲はどれもラブ・ソングだったからね)。「ラバー・ソウル」をきっかけに、作曲の幅がずっと広がって、演奏の仕方も変わってきた。これは僕らの旅立ちのアルバムなのさ。それから、僕らのアルバムには、いろんな影響が反映されるようになったんだ。
「ノーウェア・マン」(ひとりぼっちのあいつ)はいい曲だよね。「ガール」もすばらしい。ミステリアスで美しいサウンドに仕上がっている。「ザ・ワード」もすごいよ。ジョージ・マーティンがハーモニウム、マル・エヴァンスがハモンド・オルガンを弾いてるんだ。とにかくいろんなサウンドに挑戦したよ。歌詞も初期の頃とは違っていた「ドライヴ・マイ・カー」、「ノーウェジアン・ウッド」(ノルウェーの森)、「ユー・ウォント・シー・ミー」、「ノーウェア・マン」なんかは特にね。もちろん「ミッシェル」もだ。

ジョン 「ラバー・ソウル」はマリファナのアルバムで、「リボルバー」はLSDのアルバムってとこだ。ハンブルクでビルに頼ったり、アルコールの力を借りていたのと同じことさ。
「ラバー・ソウル」の曲はすべてシラフでレコーディングしたものだ。あの頃はマリファナをやってると、まともにレコーディングできなかったんだ。LSDをやりながらレコーディングしたことは一度もないよ。
"ディラン・トーマスはビールを飲みながら「アンダー・ミルク・ウッド」を書いたらしい"って噂されるのと同じだよ。そんなこと関係ないんだ。ビールを飲むのは、現実的な思考から自分を解放するためだ。ドラッグをやるのも自分を解放するためなんだ。ドラッグをやったからって、いい作品が生まれるわけじゃない。LSDをやっていたから、あるいはやっていなかったから、すばらしい曲が書けたってことは一度もないね。1972年

ジョージ 「ラバー・ソウル」の頃、自分で作詞作曲するのはかなり勇気がいることだった。ジョンとポールは3歳の頃から曲を書いてたんだから。いきなり曲を書けって言われても、そう簡単にはできないよ。ふたりとは経験が違うんだ。ふたりとも、僕らがレコーディング・スタジオで仕事をするまでに山ほど失敗作を作ってるっていうのに、僕はまったく何も知らない状態から曲作りを始めたんだ。しかも、アルバムに収録するには、驚くべきヒット曲と肩を並べるぐらいの出来じゃなきゃならない。涙が出るほど苦労したよ。

ポール 1965年には、ジョンと僕は思いどおりに曲が作れるようになっていた。それまでに試行錯誤を繰り返してきたからね。オリジナル曲がそろそろ底をつき始めていたから、「ラバー・ソウル」のために曲作りを再開したんだよ。
作曲はジョンと一緒にやることが多かったね。ふたりだけで部屋に閉じこもって"さあ、始めようか"って。ジョンがちょっとしたアイディアを出すんだ。「イン・マイ・ライフ」もそうだった。"There are places I remember......なんてどう?"。ジョンは最初の歌詞をポエムみたいに言ったんだ。Places I Rememberってね)。それをもとにメロディを練って主題を決めていく。3時間も4時間も、ああだこうだとやっているうちに、ほとんど完成するんだ。とにかく、セッションをやって1曲も完成しなかったってことはなかったよ。
一番行き詰まったのは「ドライヴ・マイ・カー」だった。"You can buy me golden rings"っていうフレーズが気に入らなくて、何時間も先に進めなかった。あんまり考えすぎるのもよくないからね。ちょっと休憩することにしたんだ。そしたら突然"ちょっと待った。Drive my car!だ"ってジョンが叫んだんだ。それ、どういうこと? 運転手になれってことかい? それとも……。いきなりアイディアが溢れてきたよ。金の指輪みたいな陳腐なものよりずっとパンチがきいていた。"金の指輪"が"beep.beep.yeah"に早変わりさ。爽快に走る車、キャディラックのオープン・カー、運転手、気分はすっかりロサンゼルスだったね。

ジョージ 「ドライヴ・マイ・カー」ではベース・ラインを弾いたんだけど、オーティス・レディングの「リスペクト」みたいだったよ。

CamScannerでスキャン

ポール　ソングライティングをやめるなんて考えられないよ。
もう習慣になっちゃったから。　1965年

CamScannerでスキャン

ジョン　「ガール」は現実的な歌だ。実際にモデルになった娘がいたわけじゃないけど、歌詞は切実だよ。この曲は歌というよりも、僕らが探し求めている女性——僕にとってはヨーコになるんだけど——について語っているんだ。

"子供の頃、苦しみはいずれ喜びに変わることを教わっただろうか。その意味を理解できただろうか"っていう歌詞を書いた時は、自分でも哲学書から引用した文章みたいだなと思ったよ。キリスト教のことを言いたかったのさ。僕は、子供の頃教会に連れていかれるのが嫌だったからね。

僕が書いた2冊の本の中で、僕はキリスト教について、かなりたくさん語っている。そのことが話題になったことはないけど、読めばすぐにわかるよ。"天国に召されるには苦難を乗り越えねばならない"っていう教えに疑問を持っていたからね。これはカトリック教の考え方なんだ、喜びは苦しみから生まれるってね。真実かもしれないけど、教えではない。僕は信じていなかったよ。何かを得るために苦悩しなきゃならない、なんてね。苦悩するかしないかは状況次第なんだ。1970年

レコーディングでは、いつも何かしら
ふざけたことをやっていた。
「ガール」の時はメンバーたちがバックで
"TIT-TIT-TIT-TIT"
(おっぱい・おっぱい・おっぱい・おっぱい)って
歌ってたんだけど、誰も気づかなかったよ。1971年

ル　「ノーウェア・マン」は、前の晩、朝5時頃
起きていたジョンが持ってきた大作だった。
、考えついたんだ"って言ってね。すばら
だった。"He's a real nowhere man"(ほ
行き場のない男)っていうのは、僕のこと
らしいけどね。僕もいくつか歌詞を加えた
ョンはほとんど完成させていたよ。
が譜面を持ってくるなんてことは一度もな
。メロディを口ずさむだけで、何とかな
。お互いに歌ってみせて、アイディアを
ったりもした。ジョンが何か歌って僕が
れ"って言ったり、"Nowhere land"(ど
い土地)っていう歌詞を聞いて"For
誰のためでもない)って続けたりね。ま

さに共同作業だったよ。

ジョン　意味のあるシリアスな歌詞を書きたくて、朝になるまで5時間ぐらい悩み続けたんだ。1980年　僕はじっと座ったまま、ひたすら考え続けた。そのうちに何もせず、行き場もなく、ただ座っている自分はいったい何者なんだと思い始めたのさ。すると、何かがパッとひらめいたんだ。僕は、それ以上何も考えないようにした。頭が空っぽになると、気が滅入ってきて、寝そべりたくなった。ああ、もうお手上げだってあきらめたよ。その時思ったんだよ。僕はひとりぼっちだってね。Nowhere Land(空想の世界)にいるNowhere Man(行き場のない男)だって。1967年

そしたらふいに「ノーウェア・マン」の歌詞とメロディが浮かんできた。冗談じゃないぜって思ったね。「イン・マイ・ライフ」の時もそうだったんだ。知的な歌詞を書きたくて何日もずっと頭をひねっていたんだよ。もう限界だってあきらめたとたん、「イン・マイ・ライフ」がひらめいた。結局、成り行きに任せるのが一番なのさ。1980年

ジョージ　第2スタジオにはコントロール室に上がるための急な階段があって、その下の戸棚にありとあらゆる種類の楽器が置いてあったんだ。今はもうほとんどなくなってしまったけど、手回しのウィンド・マシン(風の音を出す装置)はまだ残ってるよ。当時は、風変わりなタンバリンとか、モロッコの太鼓とか、おもちゃみたいな楽器がたくさんあった。ペダル式のハーモニウム、(耳障りな)卓上ピアノ、チェレスタ、ハモンド・オルガン……、スタジオはまさに楽器の宝庫だったね。僕らがレコードにいろんなサウンドを使ったのは、こうした楽器が、最初からそこにあったからなんだ。オーバー・ダブの時になると、適当な楽器がないかどうか戸棚を探しまわったものさ。「ドント・バザー・ミー」に使った、おかしな音のするドラムとかね。

「シンク・フォー・ユアセルフ」(嘘つき女)では、ポールはファズ・ボックスをつけてベースを弾いてるんだ。もとはといえば、フィル・スペクターが「ジップ・ア・ディー・ドゥー・ダー」のレコーディング中に発見したサウンドなんだ。エンジニアがギター・マイクのボリュームを上げすぎちゃって、すさまじいディストーションがかかったのさ。フィル・スペクターは"それでいこう、すごいサウンドじゃないか"って、そのままレコーディングしたんだよ。そのうち、みんなが同じサウンドを真似するようになって、ファズ・ボックスができた。僕らは、これをベースにつないでみたんだ。そしたら、すごくいいサウンドだったってわけさ。

ジョージ・マーティン　ビートルズはいつも新しいサウンドを探していた。次から次へとね。新しい楽器を試してみるのは、いい意味で緊張感があったし、楽しかったね。彼らは、見たこともないような楽器を平気で使おうとしたから。

ジョージ　レコーディングでシタールを使ったのは、「ノーウェジアン・ウッド」が最初だった。映画「ヘルプ!」のレストランのシーンで、インドのミュージシャンが弾いていたのを見て、興味を持ったんだ。

その年は、ずっとラビ・シャンカールを聴き続けていたね。彼の名前は何度か聞いたことがあったんだけど、3回めぐらいの時、友人から"ラビ・シャンカールって知ってるかい。すごい音楽だ"って言われて、始めてレコードを買ったんだ。それで、すっかり彼にハマッちゃったんだよ。

あらためてインド音楽を聴いてみると、何だか昔から知っているようなサウンドだった。子供の頃、長波と短波が両方入いるラジオを持っていたから、インドの古典音楽を聞いたことがあったのかもしれない。とても懐しいような、それでいて不可思議な音楽だった。何だかわからないけど吸い込まれてしまうようなね。

それで、オックスフォード通りの"インディア・クラフト"という小さな民芸店に、シタールを買いに行ったんだ。インドの彫刻やお香なんかを売ってる店だったけど、シタールは安っぽいおもちゃみたいなものしか置いていなかった。でもとにかく買ってきて、いじってみたんだ。その頃に、「ノーウェジアン・ウッド」のバック・トラック(12弦と6弦のアコースティック・ギターとベースとドラム)をレコーディングしたんだ。この時も、何か新しいサウンドが必要だということになって、僕らはいつものように戸棚を物色し始めた。そしたら、そこにシタールがあったんだよ。もちろんまだ弾き方なんか知らなかったから、思いつくまま音を出しただけなんだけど、それがけっこううまくいったのさ。

ジョン　「ノーウェジアン・ウッド」の歌詞は、僕の体験なんだ。家の外で僕が何をしているか妻のシンシアにバレちゃいけないって思っていたから、歌詞を書く時、僕はものすごく慎重だった。女の子とどうにかなるなんてよくあることだったから、情事のことを書く時は、できるだけ曖昧にしたんだ。ほんとにあったことかどうか、わからないようにね。といっても、この曲の女の子のことはまるで覚えていないんだ。1980年　僕は自分の経験したことを書いていた。女の子の部屋に行ったりとか、そういうことだよ。1970年

CamScannerでスキャン

ジョージがシタールを取り出した時、僕から"それを弾いてくれないか"って頼んだんだ。その日、僕らは何度も何度もテイクをとったんだけど、全然うまくいかないんで、僕は頭にきて"言ったとおりになってないよ"って怒鳴ったんだよ。そしたらみんな"じゃあ、おまえがやりたいようにやれよ"って言うから、僕はマイクの前で、馬鹿でかい音でギターを弾きながら歌ったのさ。ジョージがシタールを持ってきたのは、その時だ。僕は、ついでにこの曲を弾いてくれないかって言ったんだ。ジョージは、まだ全然習っていないから弾けるかどうかわからないけど、やってみるよって言ってくれたんだ、いつもみたいにね。それからジョージは少し練習して、あとからオーバーダブしたのさ。

リンゴ　とんでもない楽器を使ってレコーディングするのは、ゾクゾクするくらい興奮したよ。ジョージがシタールを持ってきた時、僕らは、もう何でもありの状態だった。歌ってくれるなら、それこそゾウでも連れてきちゃいそうな勢いだったよ。ダメなものなんかなかったのさ。僕らの考え方は変わり始めていた。少しは成長していたんじゃないかな。

ジョン　「ミッシェル」はポールの曲だけど、サビは僕が書いたんだ。どこかに滞在していた時に、ポールが最初の数小節を口ずさみながら歩いてきて、こう言ったんだ。"このあと、どうしたらいい？"ってね。僕はその時ニーナ・シモンを聴いていたんだ。確か「アイ・プット・ア・スペル・オン・ユー」だったと思う。その中に"I Love you～"ってところがあって、サビに使えるぞって思ったんだ。それが"アイ・ラヴ・ユー、アイ・ラヴ・ユー、アイ・ラヴ・ユー"になったのさ。

ポールが曲を持ってきた時は、僕がちょっとブルージーなテイストを加えることが多かったね。特に「ミッシェル」は、直球のバラードだったしね。ポールは明るくて陽気なメロディを作ってたけど、僕のはどちらかというと暗い感じか、騒々しいか、ブルース調だった。当時の僕は、メロディなんか作っていなかったんだよ。ポールがメロディを担当していて、僕はただストレートなロックン・ロールをシャウトしているだけだった。もちろん「イン・マイ・ライフ」とか、初期の「ジス・ボーイ」とかは、最高のメロディをつけたって自負してるけどね。1980年

ポール　「ミッシェル」を発表したばかりのある晩、アド・リブ・クラブでこの曲を聴いたデヴィッド・ベイリーが、僕にこう言ったんだ。"冗談だろ、こんな曲。ふざけて出したんだろ"ってね。僕はカチンときて"出てけよ！　これは真面目な曲なんだよ"って怒鳴っちゃったよ。そんな風に思う奴もいるってことが、すごくショックだった。でも、60年代はそういう時代だったんだ。今ならわかるよ。とにかく「ニードルズ・アンド・ピンズ」や「プリーズ・プリーズ・ミー」みたいな曲ばかり溢れている時に、突如として「ミッシェル」だからね。たしかに古くさかったかもしれない。でも、僕の趣味には合ってるんだ。クリフ・リチャードのベスト・ソングは「リビング・ドール」だと思うしね。彼がアコースティックのこの曲を発表した時はかなり驚いたけど、よくできた曲なんだ。

ジョン　僕らは一緒にいろんなことを勉強したよ。ジョージ・マーティンはきちんとした音楽のバックグラウンドがある人だし、音楽の知識も豊富だったから、僕らの言うことをちゃんと理解して、アドバイスしてくれたんだ。ピアノの速回しみたいな驚くべきテクニックも教えてくれた。僕らが"ここをこうしたいんだ、えーっと、こんな感じで……"って言うと、ジョージ・マーティンが"そうなんだ、ゆうべ考えたんだよ、そこのところをね。話をしていてね、えーっと誰だったかな、まあいい、とにかく思いついたんだ"って答える。僕らは"やったあ、すごいすごい、ちょっとやってみてよ"って感じなんだ。"オーボエって知ってるかい？"みたいに切り出すこともあった。"それってどの楽器？"ってきくと"これだよ"って教えてくれるんだ。1975年

「イン・マイ・ライフ」に思いどおりのエリザベスⅠ世の時代みたいなピアノ・ソロを入れることができたのも、ジョージ・マーティンのおかげなんだ。僕らは"バッハみたいに弾いてほしい"とか"12小節でやってほしい"って頼んだだけなんだ。他の演奏家に対しても、彼は僕らが何を望んでいるのか理解して具体的に指示してくれた。僕は人見知りする方だし、いろんな理由から、どうも演奏家と肌が合わないんだ。それに、20人もの連中のところに行って、こうやってほしいとか指示するなんてまっぴらだった。みんな、ヘタクソだったしね。1970年

ジョージ・マーティン　「イン・マイ・ライフ」は、ジョンらしさが出ていて、私の大好きな曲だ。単純な曲だが、手がこんでいる。ジョンが間奏をどうすればいいか決めかねていたので、彼らが休憩を出かけた隙に、バロック調のピアノ・ソロを録音しておいた。旋律がちょっと複雑だったんで、私はテンポを半分に落として弾き、倍速にして再生した。ジョンはとても気に入ってくれたね。

「イン・マイ・ライフ」は、僕がまじめに作った最初の作品のひとつだ。それまでは、口先だけの浅はかなものばかりだったからね。僕は、本を書く時の自分と、歌を書く時の自分を分けていたんだ。僕とポールは"アイ・ラヴ・ユー"とか"ユー・ラヴ・ミー"とか歌う曲をやみくもに作っていたからね。センスのいい歌詞を書こうとはしていたけど、真剣に悩んだことなんか一度もなかったよ。

「イン・マイ・ライフ」は僕が初めて、真剣に、自分の人生について書いた曲なんだ。その気になったのは、「イン・ヒズ・オウン・ライト」を出版した時、イギリスのジャーナリストからこう言われたからだ。"君はどうして、本を書くような姿勢で曲を作らないのか？　子供時代のことを歌詞にしてみたらどうだい？"ってね。1980年

まず歌詞を完成させて、それからメロディをつけた。「イン・マイ・ライフ」とか、「アクロス・ザ・ユニバース」とか、傑作と言われている作品は、みんなそうやって作ったものだ。ケンウッドの自宅の2階で、テープ・レコーダーを10台つなげてね。2年くらい、そうやって曲作りをしていた。ロックン・ロールのレコードは1枚も作らなかったけど、型破りのすばらしい曲を書くことができたよ。1970年

メンローヴ・アベニュー251番地の家からバス通学していた頃を思い出してみたんだ。思い出したすべての光景を書き出して、いくつもの詩を書いた。過去の友だちや愛した人々の思い出。「イン・マイ・ライフ」はそこから生まれたんだ。ポールはサビを手伝ってくれた、音楽的にね。1980年

ポール　おかしなことに、ジョンと僕の意見が合わなかった唯一の曲が「イン・マイ・ライフ」なんだ。確か、踊り場に置いてあったメロトロンでメロディをつけたんだ。

ジョン　「イン・マイ・ライフ」、「アイム・ア・ルーザー」、「ヘルプ」、「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」といった僕の代表曲は、すべて一人称で書いたものだ。1971年　つまり、僕の個人的な歌なんだ。僕はなるべく自分のことを書こうとしていたのさ。コンクリートのアパートに住んでいる知らない人のことなんか書いても、おもしろくないからね。僕は個人的な曲が好きなんだ。でも、僕は気が弱いし、いろんな理由があって、僕自身のことを書くのは、ごくたまにしかなかったけどね。

同じ時期の曲だけど、「ラン・フォー・ユア・ライフ」（浮気娘）はまったく好きになれなかったね。裏切られた歌だからね。たぶん、エルヴィスの「ベイビー・レッツ・プレイ・ハウス」がヒントになったんだと思うよ。"他の男といるのを見るくらいなら、死んだおまえを見る方がマシだ"って歌詞があって、そこから書き始めたんだ。僕としては、そんなに騒ぐほどのことじゃないと思ったけど、ジョージはこの曲が大好きだったよ。1970年

ジョージ　僕の歌は自分のことを書いたわけじゃないよ。「タックスマン」だってそうだ。ソロになってからは、いくつかそういう曲もあるけど、ビートルズ時代は頭に浮かんだ単語をただ並べていただけなんだ。

ジョージ・マーティン　スタジオはいつも賑やかだった。みんなレコーディングを心から楽しんでいました。いつもふざけたり、笑いこけたり、特にボーカルをオーバーダブする時はたいへんだったね。ジョンがおかしなことばかりするんで、他のメンバーもそうだったけどね。とにかく覚えているのは、すごく楽しかったってことだ。

ポール　「サージェント・ペパー」を制作した時、ロンドンのメイフェア・ホテルに泊まっていたディランを訪ねたことがあるんだ。巡礼に行くみたいな気分だったよ。キース・リチャードが先に来ていて順番を待っていたから、僕らはディランに会えるまで、しばらく時間をつぶさなきゃならなかった。法王に接見する時みたいにね。『サージェント・ペパー』の収録曲をいくつか聴いて、ディランは"わかるよ。君たちはもうアイドルみたいな曲はやりたくないんだろう"って言ったんだ。「ラバー・ソウル」の頃の僕らは、まさにそうだった。アイドル時代はもう終わった、もっと幅広い音楽に挑戦したい、そう思ってたのさ。

アルバム・ジャケットも以前とはちょっと違うものにした。歪んだ写真を使ったんだ。なんでもありの冒険のひとつだったんだよ。ジャケット写真は、カメラマンのロバート・フリーマンがウェイブリッジにあるジョンの自宅の周辺で撮影したものだ。僕らは、今までにないポロネックを着て、すました顔をして上半身だけ撮ったんだ。ロンドンに戻ると、フリーマンは写真のスライドを見せてくれた。ジャケットにした時の感じがわかるように、アルバム・サイズの厚紙の上にスライドを映写してね。たまたま映写した厚紙がちょっとずれて、写真が引っ張られたみたいにゆがんで映った時、僕らは"これだ、これだよ。『Rubber So-o-oul』はこれで決まりだ"って思ったのさ。"こんな感じでジャケットを作れるかい？"ってきいたら"もちろん、こうやってプリントすればいいんだ"って。それであのジャケットができたんだ。

ジョージ　顔をぬっと延ばしたジャケット写真、僕はすごく気に入ったよ。純真で素朴なイメージを捨てたかったんだ。「ラバー・ソウル」はマリファナ常習犯の僕らが作った最初のアルバムだからね。

ポール　11月に「ザ・ミュージック・オブ・レノン&マッカートニー」というテレビ番組を収録したんだ。僕らが作った曲を他のスターたちに歌ってもらうっていう、ディレクターで友人でもあるジョニー・アンプの企画だった（グラナダ・テレビには知り合いが大勢いたんだ。最初にテレビ出演した時も一緒にやったしね。グラナダのスタジオまではリバプールから30分ぐらいで行けたから、よく遊びに行ったのさ）。

僕らは最初あまり乗り気じゃなかったんだけど、ジョニーがすごくいいやつで、熱心に説得するもんだから、彼のためにOKしたんだ。僕らとは長いつきあいのシラ・ブラックも出演して歌うっていうし、ヘンリー・マンシーニも僕らの曲を演奏してくれるっていうしね。ヘンリーほどのスターに演奏してもらえるのはすごく光栄なことだったから、断ることなんてできなかったよ。

「ムーン・リバー」は大好きだったから、マンシーニに会えたのはとても嬉しかったね。「マイ・ハックルベリー・フレンド」でファンになったんだけど、「ティファニーで朝食を」からは大スターだったからね。

フリッツ・スピーグルズ・アンサンブルは僕らの曲をクラシックみたいに演奏したよ。当
時はそういうのが流行ってたんだ。銀髪のかつらをつけてバロック時代の弦楽四重奏
みたいに演奏するのがね。バロック&ロールさ！　実は僕ら、フリッツ・スピーグルには何
年か前に顔を合わせていたんだ。あるパーティでね。その時のことは、ちょっとしたエ
ピソードなんだよ。

ジョンがまだアート・スクールの学生だった頃だ。当時、パーティをやるのはアート・ス
ールの人間だけだった（僕らの学校ではパーティなんかやらなかったし、放課後はさ
さと帰宅させられたからね）。パーティがあったのはジョンの先生の家だったと思う。
ごく洗練されている雰囲気で、僕とジョージはおどおどしていると思われないように精
一杯気取ってたよ。そのうちに、公演を終えたリバプール・フィルハーモニック・オーケス
の演奏家たちがやってきたんだ。公演のあとだから、もちろん正装でね。僕らは圧
れちゃって、できるだけ上品に見えるようにふるまっていた。そしたら、フリッツ・ス
グルがこちらに向かって歩いてきたのさ。彼はレコードをかけた。リストの「ハンガ
狂詩曲」をね。そうしたら、忘れもしない、ジョージが彼に向かってこう言ったのさ。
, ジェラルド。エルヴィスはないの？"ってね。彼はにこりともしなかったよ。

番組にはピーター・セラーズも出演したんだ。僕は彼のことをあまり知らなかった
（リンゴはよく知ってたよ。芸能人たちとよく遊んでいたからね。マーロン・ブラン
チャード・バートンやエリザベス・テイラーと一緒に食事したこともあるらしい。リン
いう場でも怖気づかない奴なんだ）。ピーターは、すごく真面目で、いい人だっ
メディアンってそういう人が多いらしいけど、彼もミュージシャンになりたがって
ラムをやってたんだ。でも、この番組の時は、サー・ローレンス・オリビエのひょ
物真似をしながら「ア・ハード・デイズ・ナイト」を歌ったんだけどね。

ィッツジェラルドも出演してくれた。彼女は僕らとは正反対の歌手だけど、僕らの
くれたのは、やはり光栄なことだった。彼女は「キャント・バイ・ミー・ラヴ」を歌
僕は昔から彼女のファンだった、とにかくすばらしい声をしているんだ。

作する前に、ジョニー・アンプは僕らに、当時リリースされていたレノン・マッ
のカバー曲の中で、どれが一番好きかって訊ねた。僕が一番気に入っていた
ー・フィリップスだった。彼女は「アンド・アイ・ラヴ・ハー」を「アンド・アイ・ラ
えてカバーしていて、すごくかっこよかったんだよ。僕らが当時よく聴いて
タックスやモータウンといったアメリカのブラック・ミュージックだった。ジョージは自分のジューク・ボックスにスタックスのレコードを山ほど入れていたくらいだ。僕は、マーヴィン・ゲイやスモーキー・ロビンソンが好きだった。ミラクルズからも大きな影響を受けたよ。昔のリトル・リチャードと同じくらいね。リトル・リチャードの代わりによく聴くようになったのが、モータウン・ミュージックなんだ。僕は黒人のミュージシャンが大好きだったし、その中の誰かが僕らの曲を生で歌っているところを見られるとしたら、それこそ夢みたいだって思った（僕らはもちろん彼らの曲をカバーしていたけどね）。僕はジョニーに、エスター・フィリップスは最高だよって言ったんだ。そしたら彼は、ほんとに彼女を連れてきちゃったんだ。

僕らの曲はいろんなミュージシャンがカバーしているけど、自分の曲のカバー・ヴァージョンが出るのは悪い気はしないね。ピンキーとパーキーがカバーしたとしても別に気にならないよ。だって、僕らの曲を気に入ってくれたってことだからね。だからカバー・ヴァージョンを聴いて、笑っちゃうことはあっても、嫌な気分になったことは一度もない。すばらしいのもあるし、そうでないのもあるけどね。レイ・チャールズやエスター・フィリップスのカバーは、ほんとにかっこいいんだ。ロイ・レッドモンドの「グッド・デイ・サンシャイン」のカバーもすばらしいし、「カウント・ベイシー・プレイズ・ザ・ビートルズ」もすごいと思う。こういうカバーは僕らもすごく真剣に聴くし、大好きなレコードだ。楽しんで聴き流しちゃうカバーもあるけどね。

ジョン　シナトラがカバーしたのは、もはや僕らの曲じゃないね。ボーカルもバンドのアレンジも、僕の好きなシナトラの曲そのものになっている。ペギー・リーは完全にロックン・ロールだね、毎日ずっと聴いていても飽きないよ。エラ・フィッツジェラルドもすごい。彼女がどうしてこんなに人気があるのか、僕はずっと理解できなかったんだけど、ある歌を聴いていて"これはすごい！"って感動したら"エラ・フィッツジェラルドだよ"って言われたんだ。信じられなかったよ。てっきりリズム&ブルースのシンガーだと思ったからね。1964年

ニール・アスピノール　ビートルズはこの頃も、テレビに出演したり、クリスマス向けのお笑いコントをやってたんだから、すごいよ。ロックン・ロール・バンドとしては異例だったね。アート・スクールの出身で、いろんな経験をしてきたからできたんだ。1965年には、まだ彼らも、こういう番組への出演を拒まなかったんだ。

ポール　12月に最後のイギリス・ツアーをしたんだ。僕らはほとんど毎日、公演に追いまくられていたよ。だからその1〜2年後には、レコーディングに専念するようになったんだ。

言ってみれば、絵を描くことを許されない絵描きみたいなものだった。全国を渡り歩いて、自分たちの絵を売っているだけのね。ところがある時、いきなり言われたのさ。"君たちにはアトリエがある。自分たちの時間を使って絵を描けばいいじゃないか"ってね。そのうちに、レコーディング・スタジオで過ごす方が、ツアーに出るよりずっと楽しくなったんだ。

ジョン　僕はもとからレコーディングの方が好きだったね。自在に機材をいじれるようになってからは、スタジオが一番好きな場所になった。誰にも指図されないのが良かったんだ。1975年

CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　レコーディングを続けていくうちに、彼らはスタジオで作ったサウンドをステージでは再現できないことに気づき始めた。技術的に不可能だってね。それに、演技をしたり大声で歌ったりすることにうんざりしていた。決していい加減にやっていたわけではないけど、ベルト・コンベアーみたいに次から次へとこなしていくだけだったから、やる気をなくしていたんだ。

ジョン　「デイ・トリッパー」を書いた時は、1ヵ月ほど前に作ったフォーク・ソングをベースにしたんだけど、かなり苦労したね。時間をかけただけあって、いい作品ができたけどね。1969年　これはシリアスなメッセージ・ソングじゃない。いわゆるドラッグ・ソングだ。真っ昼間からトリップしている奴、つまり「デイ・トリッパー」ってわけ。この言葉がすごく気に入ったんだよ。1970年

「ウィ・キャン・ワーク・イット・アウト」(恋を抱きしめよう)では、ポールがコーラスの部分を書いて、僕がサビを加えたんだ。ポールの"we can work it out"(なんとかなるさ)って歌詞は、あまりにも楽観的すぎたから、僕はちょっとひねりたくなって、"Life is very short and there's not time for fussing—"(人生はひどく短い、ケンカしている暇はない)って歌詞を入れたんだよ。1980年

リンゴ　1965年が終わる頃、僕らはツアーをやることに疑問を持ち始めたんだ。ツアー中にみんなで話し合ったことを覚えてるよ。このままあちこちに出かけて、滞在先のホテルでマリファナを吸って、退屈しのぎをしているだけじゃ、ミュージシャンとしての誇りがなくなって、精神的に堕落するだけじゃないかってね。

今のバンドのツアーでは、記者会見は1日だけで、あとの4日間で公演をやるっていうのが普通だけど、ビートルズの場合は24時間、記者やインタビュアーたちに追いかけまわされていたんだ。気が休まる時がなかったよ。目を開いたとたんに、大勢の人たちが飛び込んでくるんだからね。

ずっとそんなプレッシャーが続いていたから、休暇をとった記憶なんかないよ。ロサンゼルスで一軒家を借りて1週間ほど滞在した時が、唯一の休暇だったね。その時だって、僕らは常にバリケードを張っていたんだ。ニールやマルが記者たちを近づけないように気遣ってくれたのさ。うるさい奴が訪ねてくると"まかしとけ。ドアに鍵をかけて、ちょっと休んでな"って感じでね。

ジョン　ライブで演奏するのは好きだけど、全米ツアーは最悪だったね。会いたくない奴に会わされたりとか、くだらないことばかりだった。僕は半分キレかかったよ。手が痛くなるほどサインしたって、結局は関係者の手に渡るだけなんだ。プロモーターとか、警官とかね。ほんとのファンは何日も何時間も待たされるのさ。サインが欲しいっていうだけで半狂乱扱いされてね。そのくせ警官はみんなサインをもらっていくんだぜ。イギリスじゃ、警官の娘はみんな僕らのサインを持っていると思うね。たぶん、その半分は僕らのファンなんかじゃないよ。ほんとにサインが欲しいファンにとっては、不公平もはなはだしいだろ。1964年

僕は苦痛だったんだ。自分がしていることが許せなくて、頭がおかしくなりそうだった。もう我慢できなかったのさ。何もかもひどすぎたよ。ビートルズのメンバーだってことが耐え難い屈辱に思えてきて、情けなくなった。僕らがしてきたことが、こういう結果になるなんて、予測できなかったことだ。少しずつ状況が変わってきて、狂ったような大騒ぎに巻き込まれて、気づいてみたら、まったくやりたくもないことをやらされていたんだ。大嫌いな連中のためにね。子どもの頃、つばを吐きかけたかった連中のためにだ。1970年

ニール・アスピノール　当時、そばにいた人間はみんな、ートルズがツアーにいらだちを感じていることに気づいてた。だから、ロサンゼルスで休暇を取ることにしたんだ。

ョージ　ロサンゼルスでも、僕らのまわりに大勢の人たが近づいてきた。たいてい、うまくかわして逃げていたどね。スターの息子が一緒に遊ぼうと誘ってきたり、記が僕らの様子を詮索にきたり、パーティに招待されたり、ゆるショー・ビジネスの厄介なつきあいってやつさ。

でも、デヴィッド・クロスビーとかジム・マッギンとか、一緒にいて楽しい連中とは友だちになったよ。だから、ツアーにもプラス面とマイナス面があったわけだけど、マイナス面の方が多かったんだ。

1963年から65年頃までは異常だったね。映画を制作して、ヨーロッパ・ツアーをして、イギリス・ツアーを2回やって、いくつものシングルとEPとアルバムをレコーディングして、全米ツアーをして、アジアにも行って……今考えると信じられないよ。毎日毎日何かしていたんだ。ポールなんか、オフの日にわざわざミス・コンテストの審査員をしていたぐらいだ。

年中、どこかに行っていたしね。オーストラリア、東京、アメリカ、ヨーロッパ。最大のツアーでも、往復の日程を含めて6週間でやり遂げた。ずっとに走り続けていたのさ。ものすごい勢いでコンサートをやって、またイギリスに戻ってくる。自分の時間を持てるのはイギリスにいる時だけだった。少しはホッとできたし、ずっとそうしたくなったんだ。

イギリスにいる時は、ほとんど毎日スタジオに出かけたよ。僕らは、とても仲が良かったんだ。僕がフェラーリを買ったのは、この頃だ。みんなで1台の車に乗ってロンドンまで行って、一緒にスタジオに入って、レストランやクラブに出かけ、また車で帰宅する。ずっと一緒に行動していたね。一日中、一緒に仕事をしていて、帰宅して着替えて、夜の10時半ぐらいに、またクラブで落ち合うんだ。1964年頃から、僕はスコッチ&コークをやめて赤ワインを飲み始めた。"イギリス人のくせに女々しいやつ"って罵られたけど、僕らはかまわずクラブをはしごしてたよ。

ポール　ミス・コンテストの審査員をしたのは
女の子を見ていればよかったからだ。
下心？ もちろんあったよ。

リンゴ　当時はいろんな変化があった。僕らの考え方が変わり、生活そのものも変わった。「ラバー・ソウル」のレコーディング・セッションは、ある意味では、崩壊への道のりの第一歩だったんだ。僕らはいろんなことに挑戦したし、スタジオで過ごす時間はとても楽しかった。完成したレコードもすばらしい出来だったよ。でも、時が過ぎていくにつれ、スタジオにいる時間が負担になり始めたんだ。5～6年後には、スタジオにいることにさえ飽きてしまったのさ。

1965年、僕はまだ新婚だったのに、毎日車でアビイ・ロードに出かけていた。今思えば、その時からスタジオへの憤りを感じ始めていたのかもしれない。すばらしく天気のよい日でも、一日中スタジオにこもりきりで、帰る頃には外は真っ暗だったからね。

CamScannerでスキャン

1966

nineteen sixty-six

CamScannerでスキャン

ジョン　60年代は若者に革命が起きた時代だ――金とか階級とか、そういうちっぽけなことばかりじゃなく、考え方全体における革命だよ。まず若者に起きて、それから次の世代に伝わっていった。ビートルズもその革命の一部だったんだ。革命というより正確には進化だね、その進化は今も続いてる。1969年

みんな60年代というひとつの船に乗ってたのさ。僕らの世代は新大陸を見つけに出た船だ。ビートルズはその船のマストのてっぺんに登ってたんだよ。僕らはその船に乗り込み、自分たちにやれることをやったんだ。何をやって何をやらなかったか、そういう具体的なことは言えない。それぞれの人がビートルズにどれだけ影響されたか、衝撃波がどこまでいろんな人に広がっていったかっていうことだからね。僕らは変わっていく時代の真っ只中にいて、ただ"こっちは雨が降ってる！"とか"岸が見えた！"とか言ってただけなんだよ。"太陽が出た！"とか"カモメがいるぞ！"とかさ。自分たちに起きてることを報告してただけだよ。1975年

ジョージ　60年代はいい時代だった。僕らが戦争に行っていない世代だってことと大きく関係していると思う。少なくともヨーロッパではそうだ。僕らは第二次世界大戦中に生まれ、子供の頃、嫌になるほど戦争の話を聞かされた。いまだに新聞やテレビは第二次大戦の話が好きだろう、そもそも戦争の話ならなんでも大好きだよね――いくらやっても飽きないんだ。しょっちゅう戦争の番組をやってる。現在も世界の54くらいの地域で戦争が起きているし、その54個の戦争のどれかひとつがおさまったとしても、第二次大戦やパール・ハーバーの番組を再放送するだろう。

僕らは戦争で辛い目に遭わなかった世代で、ヒットラーの話ばかり聞かされるのはごめんだった。未来に対してもっと希望を持っていたし、ビクトリア朝の堅苦しい考えや貧しさや苦労から抜け出そうとしていた。そういう世代は僕らが初めてだったんだよ。その意味では恵まれた時代だった。それにリトル・リチャードやエルヴィスやファッツ・ドミノのような音楽も聴けた――それまでは50年代のまったくもってくだらない曲ばかりだったからね。70年代は壁にぶつかった感じで、ちょっとがっかりした。髪振り乱して踊って、互いに唾し合うだけになってしまったようでね。

そしてちょうどあの頃ベトナム戦争とぶつかった。僕らはビートルズとして煮詰まり始めていて、ちょっとばかり大人になり、世間知らずのビートルズをやってるだけが人生じゃないってわかってきた。

ポール　すごく自由な時代があったんだよね。僕はよく、神がモーゼのために海をふたつに割って再び閉じたのと似てるって言うんだけど。僕らが当時味わった性の自由は、エイズによって閉じられてしまった。僕らの前の世代にとっては性病が同じ役割を果たしていたんだよね。おまえがうらやましい、って父が言っていたのを覚えてるよ。もう性病を恐れる心配はないんだから、って。父の若い頃には、性病はものすごく恐ろしいものだった。でも僕らはもう心配する必要がなかった――病院に行って注射してもらえばいいんだから。それに女の子はみんなピルをやってた。それで、昔ながらの心配は減るわけさ、おかげで僕らは性の自由をものすごく謳歌できた。

ジョン　若者が自由気ままに楽しんでるって、みんなが怒ってる。でも、そういう自由を楽しめなかったのは、自分たちがそれをつかもうとしなかったからだろ。親が決めてくれた人生にそのまま従ったからさ。それで親の決めた道に反抗する人間に嫉妬してる。ただの性的な嫉妬じゃないか。

20年代や30年代が実際どういう時代だったのか知らないけど、当時のポップ・ミュージックというのは、まず現実にはありえないロマンティックな愛の幻想を歌ってた。どれもこれも愛の歌、男と女の歌だけど、一番大事なものを見落としてた。セックスだよ。今の若者は現実を聞きたがってると思う。それが愛だろうとセックスだろうと何だろうと。

音楽というのはその時の社会の状態を反映するんだ。ほのめかすんじゃなくてね。詩人やミュージシャンやアーティストはその時代に生きる人間なんだ――時代を引っ張るだけじゃなく、その時代を反映してもいるんだよ。ポップ・ミュージックがやっているのもそういうことだと思う。これは時代を映す鏡なのさ。

ビートルズもそう。僕らはリバプール出身で、僕らの歌うものには僕らの生きてきた背景が反映され、僕らの考えが反映されている。それって誰でもやってることなんだよ。1971年

ポール　ファッションって、火山の噴火みたいに突然出てくるものじゃないかな。僕らもビートルズとしていきなり登場した。ビートルズの出現と、ファッションや文化や新しい思想の出現とは切り離せないだろうね。すべてが同時に、渦巻きみたいにわき起こってきたんだ。でも僕らがどこかへ招かれるとすれば、それはまず僕らがビートルズだからで、着ているもののせいじゃない。ファッションなんて二次的なものさ。

マリファナとLSDも大きな影響を及ぼしたね。スコッチなら酔いつぶれてぶっ倒れるだけだろうけど、僕らの頃にはすごく真剣に話し合い、朝まで楽しく過ごせるようになったのさ。でも、今は逆戻りして、まるであんな時代はなかったかのような雰囲気だ。グルッとまわって元の位置に来ちゃった。海は再び閉じられ、花で銃を覆うどころか軍国主義の匂いが漂ってきてる。いつになったらみんなわかるんだろうね？

リンゴ　ビートルズは自分たちのやりたいことをやってたんだと思うよ。世間の考え方を変えようという若者らしい思いが、その中でも特に強かったんだ。僕らが出てきたことがきっかけで、みんなそれ以前には考えもしなかったことをやれるようになったんだと思う。それまでは、"ああ、君たちならそういう格好をしたり、そういうことをやったりしてもかまわないだろうけど"って言う人ばかりだったじゃないか。でもほんとは、誰がやったってかまわないんだよ。

60年代は僕にとって最高の時代だったけど、父にとっては40年代が一番だった。父に言わせれば、グレン・ミラーを超えるものはないんだよ。ビートルズを含めてね。僕はレコードを聴く時、1970年代よりあとのものはまず聴かない。ブルースとか一昔のジャズとか、60年代のものを選ぶ。あの頃のポップ、あの頃のエリック――たまにエルトン、滅多にないけどね。ガチャガチャやかましいのはほとんど聴かない。僕は1970年代までで十分だ。

ニール・アスピノール　異常なスケジュールの合い間に少しのんびりしようということで、1966年初めに数ヵ月オフにしたんだ。それで全員がちょっと時間をもらえることになってね。彼らは友だちと遊んで、仕事以外のことをやって、それぞれの生活をする時間ができた。旅行にも行けたよ。

ジョン　僕らの全盛期だね、ロンドン中を車で飛ばして、アニマルズとかエリック（バードン）とか、いろんな奴らに会って音楽の話をして。ほんとにいい時代だった。名声という点からはあの頃が最高だね。ファンの追っかけもそんなにひどくなかったし、男だけの気楽な集まりって感じで、すごくいい雰囲気だった。1970年

ポール　**しばらくは最高の時期が続いたね。**
時代や状況が違えば会えるはずもない人たちに
引き合わせてもらえた。
それにいい集まりでさ、
いろんな人種が混ざったグループなんだ
――ゲイとストレートとが、
そんなこと考えもしないでつきあってた。
もちろんアメリカ人もイギリス人もいたし、
あらゆる国籍が混ざり合っていたよ。

ジョン　みんなでよく行ったクラブはアドリブ。もうひとつがバッグ・オネールズだ。他にもいくつかあったけど、そのふたつほどビッグじゃなかった。いつもそこへ行っては踊ったり、音楽の話をしたり、酔っ払ったり、マリファナでハイになったり。僕らがいつもアドリブでかけてたレコードの1枚がデレク・マーティンの「ダディ・ローリング・ストーン」だった。それをかけながらみんなで踊ってね、メチャクチャハイになってたな。あの曲はその後ザ・フーがカバーした。イギリスじゃ、ああいういい曲を何でもすぐカバーするんだ。でもあんまり出来がよくない――僕らのも含めてだよ。イギリスはいつもそれだった、アメリカのレコードばかり出すのさ。あの当時はイギリスのレコードと呼べるようなものなんかなかった。1974年

ポール　僕らは他のグループともすごく仲がよかったんだよ。アドリブへ行けばローリング・ストーンズがいたし、アニマルズやムーディ・ブルースも来てた。みんなで音楽の話とか、お互いの新しいレコードの話とかするのは楽しかったよ。1965年

ジョン　アドリブみたいなクラブのいいところは、行けば誰かに会えるってことさ――ローリング・ストーンズにも、アニマルズにも、その時、イギリスに来てるアメリカのアーティストにも会えた――それにあそこならうるさくかまわれることもなかった。確かアドリブでは1回サインしたきりだったよ、それで1年ずっと通っていられた。つきまとってくる奴はいないし、酔っ払っても、ぶざまにぶっ倒れても、誰も気にしない。あそこならくつろげるんだ、やたら騒がしいところではあったけど。1965年

ポール　午前2時とか3時とかにレコーディング・セッションが終わると、みんなでウェイブリッジまで吹っ飛ばしていくんだよ。"ヘイヘイ"とか叫びながら、すごいスピードでね。たいていジョージはフェラーリに乗ってたんじゃないかな――彼はかなりのスピード狂だったんだよ――ジョンと僕は、彼のでかいロールス・ロイスかプリンセスでついていった。ジョンはロールスの外側にスピーカーを付けててね、マイクで前のジョージに叫ぶんだよ。"抵抗しても無駄だ、抵抗しても無駄だ！ 車を止めなさい！"。とんでもないね。道路沿いの家にぱっと明かりがついて――そりゃみんなぎょっとするよね。

「ハウ・アイ・ウォン・ザ・ウォー」（ジョン・レノンの僕の戦争）の撮影でスペインへ行った時もジョンはその車を持っていって、ほとんど家の代わりにしてた。窓は黒いスモークガラスにしてあったから、中に誰がいるかわからなくて、完璧だったんだよね。ジョンは外に出なかった――マイクで外の人に話しかけるのさ。"車から離れろ！ 離れなさい！"。

ノース・ロンドンへセッションに行く途中でリージェント・パークを通ったことがあった。みんなでジョンのロールスに乗って、ウェイブリッジの彼の家から来たところだったんだよ。するとブライアン・ジョーンズがオースティン・プリンセスの後ろで静かに座ってるのが見えた。僕らはさっとその後ろに車を停めた。

ジョンはほんとおかしい奴でね、マイクでこう叫んだんだ。"動くな、ブライアン・ジョーンズ！ おまえは包囲されている――おまえを逮捕する！"。ブライアンは8フィートくらい飛

び上がって、紙のように真っ白になった。"なんてことだ! なんてこ
とだ!"って。それから相手が僕らだってことに気がついて――"ひど
い奴らだ!"。彼はあの日死にかけたね。ジョンの声はほんとにそ
れらしかったから。

ジョージ　僕はフェラーリを何台か持っていたんだけど、そのうち、
ジョンが突然、自分もフェラーリが欲しいと言い出した。それから
はよく一緒に走ったけど、僕の運転の方がまだマシだって思ってた
よ。まず何より、ジョンは目がどうしようもなく悪いだろう。そして第
二に、彼はいつまでたってもあんまり運転がうまくならなかった。
それでもフェラーリに乗りたがるから、僕はいつも不安だったよ。
そのうち大事故でも起こすんじゃないかって。僕らはよくピカデリ
ーを時速90マイルくらいで走り抜けて、ハイド・パーク・コーナーの
交差点の下を、地獄から飛び出してきたコウモリみたいにぶっ
飛ばした。ジョンはコンタクト・レンズを入れてたか何かして、僕に
ぴったりすぐ後ろをついてきてたよ。そうやってA3を通って家
に帰る。何度かそんなのをやったね。時々僕はスピードを落と
す。彼が巨大な"肉団子"と化すのは見たくないからね。
 ジョンはフェラーリの助手席にテリー・ドランを乗せた。テリ
ーはリヴァプールのカー・ディーラー「ジレーズ・リービング・ホーム」にあ
る"自動車会社の男"で、ブライアン・エプスタインの古い
友人だった。その当時はしょっちゅう僕らと一緒だったよ。ジョン
と僕で時速90マイルくらいで緑を走ってたら、鳥が一羽前
に飛んできて、フロント・ガラスにぶつかったんだ。ジョンは思わず"わっ!"って身を
伏せて両手を放した――テリーがハンドルをつかんで、何とか事故を免れたけど。

ジョン
初めて待望の黒の
ロールスを買った時、
僕はまだ免許がなかったんだ。
試験に受かってなかった。
それほど車に興味もなかったから、
別にいいやと思ってた。
でもみんなが免許を取ると、
僕も取らないと
置いてかれちゃうなと思ってさ。
でも初めてロールス買った時は、
何だか乗っても落ち着かなかった。
窓を黒く塗りつぶしたのは
隠れるためだってみんな思ってたろう。
それもあるけど、午前様で家に
帰る時のためでもあるんだ。
朝の光が
射し始めてたとしても、
車の中はまだ暗い
窓を全部閉めてしまえば、
まだクラブにいる気分になれるのさ。
1965年

 ブライアン・エプスタインもすごくおしゃれな車を持ってた。僕
はあれが魅力でね。ポールと僕はその頃までに免許を持っていた
から、彼の車に乗りたくてたまらなかった。彼と契約したのもそれ
がひとつの理由だよ――いい車を持ってる奴だから、って。だけ
どブライアンの運転は最悪だった。リバプール空港の入り口にあ
る"左側通行"の杭は倒すし、それに信号もちゃんと見てないか
らね。青になれば止まり、赤になると進んでしまう。彼の車はマ
セラッティだった。60年代初め頃には、かなりパワーのある車だっ
たんだよ。ある日彼がそれに乗ってピカデリーを走っていると、信
号が赤になり、彼はそのまま交差点を渡った。脇に立ってた警官
が"おい!"って叫んだんだけど、ブライアンはそのまま次の信号ま
で進み、そこで青になったから止まった。駆けてきた警官が
追いついたと思ったとたん信号が赤になって、ブライアンは車を出
した。警官はブライアンを捕まえようとピカデリーをずっと走りまわ
ってたけど、ブライアンの方は警官が自分を追っているとは思って
もいない。彼はほんと、自分のルールで動いてた。

ポール　僕らはストーンズとよくつるんでて、彼らのセッションにも
参加してた。あの頃はみんなすごく仲がよかったよ。ちょっとはラ
イバル意識もあっただろうけど、それは自然なことだし、友だちに
は変わりなかった。"何か出す予定ある?"っていつも訊いてさ、も
し向こうにも出すものがあれば、"そうか、何週間か待ってよ、僕ら
も1枚出すから"みたいな感じで。リリース時期をズラす方が実際
賢いからね。ジョンと僕はストーンズの「ウィー・ラヴ・ユー」でコーラスに参加してる――ミ
ックはアイディアに詰まって、僕らに来てくれって言ってね。それで僕らはオリンピック・

スタジオへ行って、一緒に曲を作った。
僕らとストーンズは仲間だったんだ。いつもアールズ・コートの誰かのフラットへ夜中に集まってたよ。実際、あの辺に住んでる人が多かったから――ロバート・フレイザーも、僕も、ミックとキースもいた。ブライアンもだったかな。ミックが「ルビー・チューズデイ」のデモ・テープを持ってきた時のことを覚えてるよ。出来上がったばかりで、すごくいいと思った。僕らいつでも、できてすぐのレコードを必ず持ち寄ってたんだ。"今回の、どう思う？"って僕らが言い、"うん、すごくいいね。「ルビー・チューズデイ」――これはいい"って。

ブライアン・ジョーンズをセッションに呼んだら、驚くことに彼はサックスを持ってきた。分厚いアフガンのコートを着て、アビー・ロードに現れてね。あのクレイジーな曲「ユー・ノウ・マイ・ネーム」でサックスを吹いてくれた。おもしろいサックス・ソロだった――びっくりするほど上手ってわけじゃないんだけど、まさに僕らの望むとおり――絡みつくような、震えるようなサックス。ブライアンはそういうの、すごくうまかったよね。

ジョージ　ブライアンとはクラブでも会ってたし、よく遊んでたよ。60年代半ばくらいには、彼はよく僕の家に来てた――特に彼が"不安"になった時、変なものを一度にいろいろやりすぎた時さ。庭から彼が"ジョージ、ジョージ……"って呼ぶ声がすると、僕は彼を入れてやる――いい仲間だった。僕がシタールに凝ってる頃もしょっちゅう来てたよ。「ペイント・イット・ブラック」の話をしてるうちに彼が僕のシタールをとって試してみた――すると彼、すぐに曲を弾けちゃうんだよ。

考えてみれば、僕らふたりにはずいぶん共通点があった。誕生日もほとんど同じだし、だからたぶん彼も魚座だろう。それにふたりとも、世界で最も有名なバンドの中で同じような立場にいたしね。彼にはミックとキースがいて、僕にはポールとジョンがいた。彼は僕と通じることをずいぶん感じていたと思うよ。僕は彼のことが好きだった。僕に何もくれないような人もいたけど、僕は彼がすごくおもしろい人間だと思ってた。

ジョン　何年かのうちに彼は衰えていき、人が変わってしまった。ついにはみんな彼からの電話を怖がるようになった。彼から電話がかかってきたら、トラブルに決まってるからさ。彼はすごく苦しんでいた。でも昔の彼は若くて自信にあふれていて、何ひとつ問題なかったんだよ。ああいうふうに、目の前で壊れていく奴がいるんだよな。彼はいい奴だった。天才とかそういうんじゃなかったけど、とにかくいい奴だった。

ポール　ブライアンは神経質で、すごくシャイで、とてもまじめな人間だった。ドラッグの量が許容範囲を少し超えてたんだろうな。ちょっぴり手が震えてた。でもいい奴だったんだよ。彼がヘロインをやってるのは僕らも知っていた。ヘロインのことは僕も話に聞いてたけど、どうも今ひとつ納得できなくてね。ロバート・フレイザーに会ったのを覚えてる。確か彼が言ったんだ。"買う金さえあればヘロインにはなんの問題もない。ドラッグの常用者なんて何百万といるんだぜ"って。一瞬僕も、そうかもな、って思った。だけど幸い、何かが僕に囁いたのさ。"いや、それはどこかおかしい"って。それで僕は手を出さなかった。ラッキーだったね。僕がジョン・ダンバーの家にいた時、誰か仲間のひとりがやってきた。彼はゴム・バンドを取り出し、それで腕を縛ると、注射器を出して打ち始めた。僕はすごく怖かったけど、その光景から目が離せなかった。彼の人生だからね、やるなというわけにはいかなかったけど、見ていてほんと恐ろしかったよ。あの週にその男が死んだと聞かされた。僕らがやっているのがどういうものか、それでわかったよ。

ジョージ　僕はパティと1966年1月21日に結婚した。
ポールに新郎付き添い役をやってもらい
エプソムで式を挙げて
それからハネムーンで
バルバドスへ出かけた。

Paul Foster

YOUR ITINERARY

File George personal

Mr & Mrs. G. Harrison

Tuesday Feb. 8th London/Barbados BA 695

eport BOAC Air Terminal, Buckingham Palace Rd. SW1 10.15 hours

r Report No 3 Building Oceanic, London Airport ntral 11.00 hours

part London Airport Central 11.45 hours

rive Barbados-Seawell Airport 19.15 hours

hauffeur driven car will be awaiting your arrival
will transfer you from the airport to the
nclare' at Gibbs Beach.

l Agents: Messrs. H.B. Niblock & Co.,
Bay Street,
St. Michael,
BARBADOS.
Telephone BARBADOS 5747

day Feb. 24th Barbados/London BA [illegible]

fer from the 'Benclare' to Seawell Airport
uffeur driven car.

Barbados-Seawell Airport 16.15 hours

Barbados-Seawell Airport 17.15 hours

Feb. 25th

London Airport Central 08.[illegible]5 hours

BOAC Air Terminal, Buckingham Palace Rd. SW1 09.45 hours

GPO To send Telegrams—CONSULT TELEPHONE DIRECTORY OR TELEX DIALLING CARD

ZCZC
LLG2875 RRB110 5969
BARBADOS 33 9 1527

WENDY HANSON NEMSTAFF LONDON

EVERYTHING NOW IS GREAT STOP FOUND HOUSE WITH ROOM FOR
FRIENDS STOP WE CAN BE CONTACTED BY CABLE THROUGH PAUL
FOSTER NIBCO BARBADOS LOVE FROM GEORGE AND PATTIE NIBCO

CamScannerでスキャン

ジョン　あのカバーは
僕のもともとのアイディアの方がよかった
ポールの首をちょん切るってやつ——
でも、ポールがどうしても乗ってこなくてね。

ジョージ　1966年にアメリカで出した「イエスタデイ・アンド・トゥデイ」は、アルバム・ジャケットが問題になった。確かブライアン・エプス
タインはカメラマンのロバート・ウィッティカとオーストラリアで知り合ったんだよ。それでウィッティカがロンドンに来た時、ブライアンから
彼を紹介されたんだ。アヴァンギャルドなカメラマンで、すごくたくさん写真を撮ってた。彼がフォト・セッションを企画したんだけど、当
時、僕個人としては好きになれなかったね。
悪趣味だと思ったし、くだらないとも思った。僕らみんな、時にはくだらないことをやったけどさ。無知で馬鹿らしいだけのことを、
クールでヒップだと勘違いしてね。あれもそのひとつだった。だけどあの場合、グループのひとりとして協力せざるを得ない状況だっ
たんだよ。で、僕らは肉屋の白衣を着てあの写真を撮った。
写真の中の僕らは"うえっ!"って顔してるだろう。実際、僕はそういう気分だった。げっそりだよ、特にあの、頭のない子供の人形
を見たらね。こんなのに、一体何の意味がある?
まったく当然だと思うけど、誰かがそれを見て言ったのさ、"本気でこれをアルバム・カバーにする気?"。それでレコード会社は言
ったわけだ。"こんなカバーを使うんじゃない。まともな写真にしてくれ、メンバー全員が小さな箱の中に座ってるような"。

ニール・アスピノール　あの"ブッチャー"カバーは、ボブ・ウィティカーのアイディアだ。彼は粗野な感じを出そうとしたんだよ。あれは
アメリカ盤だった——キャピトル・レコードは当時イギリス盤をもとにいろんなバージョンを出してたから。でもそれを見たレコード店側
がギョッとしたのさ。何枚プレスしたのかよく知らないけど、反応はというと、"何だこりゃ?"だった。
キャピトルはすでにプレスがすんでいたオリジナルのカバーに新しい写真を貼り付けた。そのあと出たものはすべて新しいカバー
になった。でも最初に出たものを買った人たちは、"ブッチャー"写真を見ようと蒸気を当てて上のカバーをはがしたんだ。今じゃほ
とんどあのカバーは出まわってないだろう。

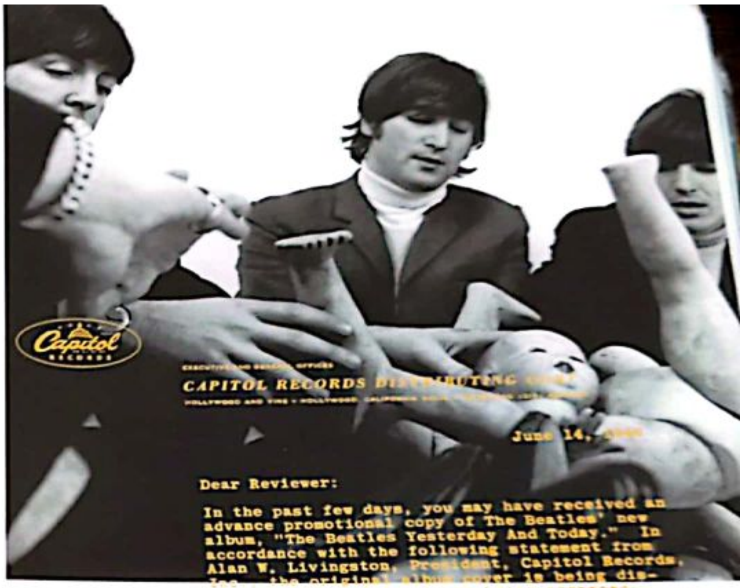
ポール　当時のフォト・セッションでは、カメラマンがアイディアを出すのが普通だった。デビューして間もない頃、デゾ・ホフマンから眼
鏡をかけてくれって言われたことがあったよ。
"デゾ、僕は目が悪くないよ"って言ったら、"知ってるさ、でもそういう写真なら世界中の眼鏡雑誌に売れるじゃないか"だって。で
もだんだん僕らも、どんなふうにやるものか、ちょっとずつわかってきた。カメラマンが変なアイディアを出すのにも慣れた。時にはどう
してそんなことをするのかって訊ねたりしたけど、いつも答えは"これでいいんだ"って感じで、僕らもそれで納得するしかなかった。
以前にもボブとはフォト・セッションを何度かやっていたから、彼は僕らの性格もわかってた。僕らがブラック・ユーモアや趣味の悪
いジョークを好きなこともね。当時はそういうのがすごく流行ってたんだ。で、彼は言った。"いいアイディアがある——白衣を着てみよ
う"。僕らにはそれほど不快なものとは思えなかった。ただ人形と、肉がいっぱいあっただけ。彼がほんとのところ何を言いたかっ
たのか、それはよくわからない。でもともかく、他の人たちが僕らにやらせたがってたことよりは独創性があったんじゃないかな——
眼鏡よりはね!
彼は前からそういう撮影をする人だったんだ。前にも僕らが撮影現場に行ったら、彼が発泡スチロールを出してきて、これを壊し
てくれという。それで彼は僕らが動いているところを撮った。写真が出来上がったら、僕らはあるものすべてを壊しまくって喜んでる
みたいに見えただろうね。でも僕らはフォト・セッションのアイディアとして、そうやれって言われただけなんだ。"ブッチャー"カバーも同
じだよ。僕らは気に入ってた——すごく衝撃的でいいじゃないかって。でもそこに含まれる意味がすべてわかってたわけじゃない。
キャピトル・レコードがやめさせたんだよね。
でも当時の風潮を忘れてもらっちゃ困る。デッカの社長、サー・エドワード・ルイスは、便器の落書きがあるってことでストーンズのア
ルバム・カバーを却下した。ミックが僕らのところへ来てその話をしてね、僕は実際にサー・エドワードに電話して、このまま出すべきだ
と思うって言ったんだ。でも彼は一切耳を貸さなかった。僕らは時々ちょっとしたショックを与えるのも悪くないと思ってた。そういう
のも僕らの性格の一部だったんだよ。

リンゴ　どうしてああいうことになったのか知らないな。どうして僕らが肉屋のジャケットを着て、体中に肉を貼りつけることになった
のかね。僕らの目を見れば、自分たちのやってることを誰ひとりわかってないのが明らかだ。人生を生きていくうちにはそういうことも
あるんだよ。僕らにとっては最高のジャケットだったんだけどね。
僕らはすごく趣味のいい人間だから、"こういうのをやろう!"って思ったのさ。ムチャクチャだったのは、あのジャケットがダメになっ
たんで、その上に紙を貼り付けて出しただろう、そしたらみんな蒸気を当てて新しいジャケットをはがそうとするんだ。それでほんと、
すごいコレクターズ・アイテムになったんだよ——残念ながら僕はあのレコードを持ってないんだ。"これは取っておいた方がいい"なん
て、当時は考えもしなかったからね。

ョン　あの写真はロンドンで撮った。その手のフォト・セッションはもう何度もやってて、あの頃は、つくづく嫌気がさしてきてた——
ォト・セッションというのは重労働のうえ、普段どおりの自分に見せなきゃいけない。普段と同じ気分のわけないのにさ。でもあのカ
ラマンはちょっとシュールレアリストがかってて、赤ン坊の人形や肉や白衣を持ってきた。それでこっちもすごくやる気になってね、
ェー!"って感じだったよ。
僕はずっと同じことやらされるのが好きじゃないんだ。それにあの頃の僕らは天使みたいなイメージでとらえられてたしね。僕らだ
人生を考えてるんだってことを見せたかったし、だから僕はあのアルバム・カバーをすごく推してたんだよ。あれが出たのは僕の
も影響してたんだろう。引っ込めるのにも僕は反対だったんだけど。

CamScannerでスキャン

あれをアルバムのカバーに使おうと言ったのは、何よりイメージを壊したかったからだ。アメリカで発売になって、あのカバーをプリントしたやつが6万枚くらい出たのかな。するとまたいつものようにちょっと反発が出たわけ。それで全部送り返されるだか引き取るだかして、代わりにおぞましい写真をくっつけたんだ。ボケッとした顔の、幸せそうな4人組に見えるやつ。僕らは何か違うことをやろうとしてた。イギリスではジャケットを自分たちでデザインするとか、そこまでいかなくても自分たちのジャケットに対する権限はあったんだけど、常にアメリカで出すアルバムの方が多かったから、写真もカバーもそれだけ必要になってくる。僕らはいつも、"どうしてアメリカじゃ14曲入りで出せないんだ?"って言ってたんだよ。だって僕らはいつも曲順を考えてた——並べ方で聴こえる感じが違ってくるからね——それを考えるのだってすごく大変なんだよ。だけど決まりだか何だかがあるとか言って、14曲入りは出させてもらえなかった。それで僕らもアメリカのアルバムがどうなってるかなんてほとんど気にしなくなってたんだけど、アメリカへ行く回数が増えてくるうちにわかったのさ。8曲入りにして、使わない曲をストックしてるんだ——今じゃおもしろいと思うけど、あの当時は腹が立ったよ。僕らがアルバム1枚作るたび、そこから2曲ずつとってたんだぜ。



CAPITOL RECORDS DISTRIBUTING CORP.

June 14, 1966

Dear Reviewer:

In the past few days, you may have received an advance promotional copy of The Beatles' new album, "The Beatles Yesterday And Today." In accordance with the following statement from Alan W. Livingston, President, Capitol Records, Inc., the original album cover is being discarded and a new jacket is being prepared.

"The original cover, created in England, was intended as 'pop art' satire. However, a sampling of public opinion in the United States indicates that the cover design is subject to misinterpretation. For this reason, and to avoid any possible controversy or undeserved harm to The Beatles' image or reputation, Capitol has chosen to withdraw the LP and substitute a more generally acceptable design."

All consumer copies of The Beatles' album will be packaged in the new cover, which will be available within the next week to 10 days. As soon as they are, we will forward you a copy. In the meantime, we would appreciate your disregarding the promotional album and, if at all possible, returning it, C.O.D., to Capitol Records, 1750 N. Vine Street, Hollywood, Calif. 90028.

Thank you in advance for your cooperation.

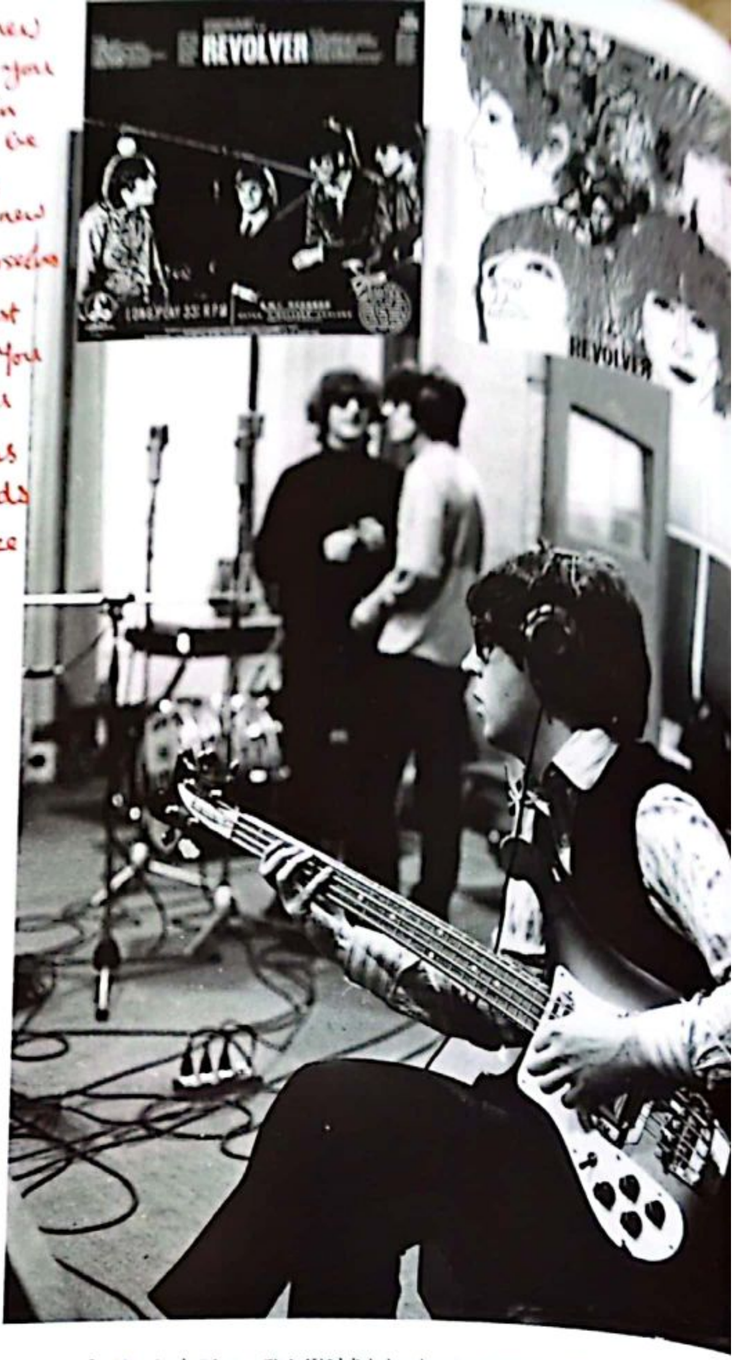
Sincerely,

Ron Tepper

Ron Tepper
Manager
Press & Information Services

RT:s

I'll send you a copy of the new
L.P. as soon as its out ('spose you
heard the whole Pop world awaits in
vigil.) and Matt and Frankie will be
well pleased. Called 'Revolver' for
some unknown reason, has fourteen new
songs specially written by the boys themselves
some up tempo rock a shuffle protest
folk and more ballads in the 'Do You
Want a no a negro' vein. Altogether
I'd say its quite good but not as
good as their last one—"Boss Sounds
Man". Still give it a spin and see
what you say!



ジョン　ひとつだけ確実なことがある――次のアルバムはまったく違うものになるってことだ。曲の間に一切スペースが入らないようにしたかった――ずっと切れ目なく続くように。でもそれは認めてもらえなかった。

ポールと僕は、今、電子音楽というやつに夢中なんだ。グラスを2個鳴らして、あるいはラジオの音なんかを録音して、そのテープでループを作り、間隔を置いて音を繰り返させる。それでシンフォニーを1曲作ってしまう人もいるんだよ。そういうものの方が、前の映画で使ったBGMよりよかっただろうな。あんなくだらないバンド。もう二度とごめんだね！ 1966年

ジョージ・マーティン　彼らはスタジオでもどんどんアイディアを出すようになっていた。こういうことがやりたいと私に言ってくるようになったし、私にもアイディアを求め、さらにそういったアイディアを実現させる方法を求めてきたりもした。

「リボルバー」を聴くと、彼らがアメリカのレコードをたくさん聴いていて、"こういう効果音を出せるかな？"と考えていたことがわかると思う。彼らはいつもラディカルなことをやろうと持ちかけてきた。でもこのアルバムではミキシング時に高域をイコライザーで持ち上げ、ホーンには超高域成分がほしい、低域は一切カットしたいと言っていたね。そんなにイコライザーをかけていいものかって、エンジニアが時々頭をひねっていたものだよ。

イコライザーを全域にかけ、もしそれで足りなければ、さらに違う周波数帯域がいじれるイコライザーをかけて、それを併せると、とてつもなく奇妙な音が出てくる。ビートルズはそれを気に入った。そして明らかに、それで見事な効果をあげた。

ジョージ　イコライゼーションというのは等質にすること――高域成分をちょっと加えたいとか、低域をちょっと落としたいとかいう時に使う。要するにトーン・コントロールなんだけど、イコライゼーションと言った方がイカしてるのさ。僕の頭のイコライザーはイカれちゃってるんだけどね。

ポール　最初ジョージ・マーティンは、神様みたいな存在だったから、コントロール・ルームに入れてくれなんて恐れ多くて頼めなかった。でもそのうち気軽な雰囲気になってきて、僕らも中に入れてもらえるようになってね。ジョージはちょっとした機材の操作法なんかを教えてくれて、僕らにもやらせてくれたよ。

ジョージ　ジョージ・マーティンはスタジオですごく大きな役割を果たしていた。でもだんだん僕らにも自信がついてきて、彼もEMIの人たちも僕らに任せてくれるようになった。時間が経つにつれて、僕らの力を信じられるようになってきたんだろうね。僕らが成功したのは明らかだったし。みんな学校の先生みたいな態度をとらなくなってきたよ。

それにジョージ・マーティンとはすっかり打ち解けて、友だちみたいになっていた。No.1のレコードを出すごとに、僕らの権限は強くなった。それにスタジオに入ると、僕らは仕事場を乗っとるまで頑張ってたからね。

ジョン　僕らはスタジオのノウハウを身に付けた。最初スタジオに行った時は思ったよ、"要するにテープ・レコーダーじゃないか。歌とギターをやるのは僕だ。そのテープ・レコーダーのことを知ってるのは君らだ――まわしてくれたら歌うよ"。ところが、"そうだな、ちょっとエコーかけようか"とか、僕の立ち位置によって音が違ってくるとか、そんなことを聞くと、こっちもだんだん学ぶようになるわけだ。1973年

僕はよくデビュー・アルバムから4枚順番にかけてみて、音楽的な成長を確かめていた。おもしろかったよ。「リボルバー」あたりまで来ると、ものすごくいろんなものを取り入れてる。全部聴くとすごく時間かかるけど、僕らがレコーディングの技術を身に付け、テクニックが洗練されていく過程がよくわかる。1972年

ジョージ　「リボルバー」のレコーディングにとりかかったのが1966年の4月だった。「タックスマン」は「リボルバー」に入ってる曲だよ。僕は税務署に莫大な金を払ってるってことに気づいてね。最初のうちは、やっとこんなに金を稼げるようになったって嬉しいばかりで――でもそのうち、税金のことがわかってくるんだ。

当時僕らは1ポンドあたり19シリング6ペンス（1ポンドは20シリングなんだぜ）払ってた。さらに付加税、特別付加税、税だらけだ、馬鹿げてるよ――金を稼いだってことに対して、そんな重い罰金を払わなきゃいけないのか。あれじゃ誰だってイギリスに愛想を尽かすさ。少しでも儲けた人間は、みんなアメリカかどこかへ移住してた。

ブライアン・エプスタインと契約したばかりの60年代初め、クラブでプレイしてた頃は、僕らの給料は週に25ポンドだった。でも週給25ポンドはかなりいい額だったんだよ。僕の父は週給10ポンドだったから、僕は親の2倍半も稼いでいたわけだ。そのうち僕らはもっと稼ぐようになったけど、ブライアンはそのままの額を僕らに支払ってた。一度彼は、今後ずっと週給50ポンドを保証する代わり、余剰分は彼が取るという契約にサインさせようとしたことがある。でも僕らは考えた。"いや、保証はいらないよ、ブライアン。賭けてみるさ、僕ら週50ポンドよりもうちょっと稼げるんじゃないかな"。

ポール　「タックスマン」はいかにもジョージらしい曲だね。ビジネス・ミーティングなんかでさ、社会はどのように動いているかってことを弁護士や会計士が説明してくれるわけ。当時の契約を見れば明らかだけど、僕らはほんと何も知らなくて、それでジョージなんてすぐに"じゃあ税金なんか払いたくない"って言う。すると彼らが、"そういうわけにはいきませんよ、誰だって払ってるんですから――それに金を稼げば稼ぐほど、持っていかれる分も多くなるんです"って。ジョージは、"でもそれはフェアじゃな

CamScannerでスキャン

いだろ"とやり返す。
"いいですか、死ぬ時だって税金は納めなきゃいけないんですよ"って僕らが言う。——"何だって?"——"遺産税です"。そこから彼のすばらしい歌詞が出てきたわけ。"まぶたに乗せたコインも申告しましょう"。あれはジョージの怒りだよ。怒るのも当然さ。ついにここまで来て、これだけの金を稼げるようになったというのに、その金の半分は無理やり持っていかれてしまうんだ。

ジョン 「タックスマン」は、税金に抗議する反体制ソングだよ。"街を歩いただけで足に税金をかけられるぞ"って言ってるのさ。歌詞はジョージが書いて、僕もちょっと手を貸した。当時の僕らは、税金のシステムをまるでわかってなくてね。いまだに僕は、税金ってのがどうなってるんだかよくわからない。自分で稼いだ金なら自分で持っていてもいいだろうって僕らは思ってた。コミューンや共産主義や、ほんとの意味でのキリスト教社会なら話は別だけど、でも実際僕らが住んでるのはこういう社会じゃないか。僕は抗議するね。どうして僕がこれほどの金を政府に払わなきゃいけないんだ。

ポール 『リボルバー』では、レコーディングよりも曲作りの方が記憶に残ってる。僕はスイスへ初めてのスキー旅行に行ったんだ。『ヘルプ!』の撮影の時、ちょっとスキーをかじったらけっこうおもしろかったから、またやってみようと思って。で、スイスのシャレーの小さなバスルームで「フォー・ノー・ワン」を書いた。あの曲の基本になってる、だんだん低くなっていくベース・ラインを考えたのも覚えてるし、あの歌のキャラクターも覚えてる——化粧してる女の子さ。

新しい形で楽器を取り入れるアイディアも、僕らはよく考えた。特にソロでね。たとえば「ユーヴ・ゴット・トゥ・ハイド・ユア・ラヴ・アウェイ」(悲しみはぶっとばせ)で、ジョンはフルートを使いたいと言った。「フォー・ノー・ワン」では、僕はフレンチ・ホルンを使いたかった。子どもの頃からずっと大好きだった楽器だし、すごくきれいな音色だ。それで僕はジョージ・マーティンに言ってみた。"これを使ったらどうなるかな?"。すると彼は"よし、飛び切りのプレイヤーをつかまえてくる"って。

そこがまた、ジョージのすばらしいところなんだよ。彼は最高のミュージシャンを引っ張ってくることができるし、そういう人間を使おうって勧めてくれる。この時僕の前にあったのはアラン・シヴィルだった。すばらしい人たちというのはみんなそうだけど、彼もセッションではごく普通に見えるんだよ——ところがプレイは天使みたいに美しい。

ジョージが"さて、どういうふうにプレイしてほしい?"って言うから、僕は"こんな感じかな"ってソロを弾いてみせた。彼がそれを楽譜に書き入れた。セッションが終わりに近づいて、アランに吹いてもらう段階に来た時、ジョージからこの楽器の音域を説明してもらった。"つまり、ここから始まってEが最高音なんだ"。それで僕は"Fを吹いてくれって頼んでみようか?"って言ったのさ。ジョージもそのジョークが気に入って、一枚噛んだわけ。

僕らがセッションに行くと、アランが楽譜から顔を上げた。"あの、ジョージ? ここが間違っているようだけど——最高音がFになってる"。ジョージと僕は"そうだよ"ってにっこり笑って見せた。それで彼は僕らの考えがわかって、それきり何も言わずに吹いてくれたんだ。優れたプレイヤーというのはそういうものだよ。理屈としては楽器の限界を超えることになっても、そういう人たちには演奏可能なんだ。実際にしょっちゅうやってることだよ。あれはいいソロになった。

ジョージ・マーティン 「フォー・ノー・ワン」のトラックは、私が持っていたクラヴィコードで入れた。すごくいい音だと思って、私が家から持ってきたんだ。あんな楽器でレコーディングするなんてまったく奇妙だったけれどね。弾いてるのはポールだ。だが絶対他にはないサウンドにしたかったから、それにはさらに楽器がほしかった。それでポールが選んだのがフレンチ・ホルンだ。ポールはアラン・シヴィルのプレイがどれほどすばらしいかわかっていなくてね。完璧な演奏だったのに、ポールは、"うん、いいんだけど、君ならもっとできるだろう、アラン?"という感じで。アランはもう少しで爆発するところだったね。当然ながら、それ以上のものなど不可能だ。レコーディングで使った音も、最初に聴いた音と変わらないよ。

John Lennon Esq., M.B.E.

Dear John,

Dividends

It was decided earlier on this month, just before the end of the tax year,

...tles,
...non, P.McCartney,
...ison, R. Starkey)
...le Row,
W.1.

Tax Appeals

...Commissioners will hear appeal(s)
23 JUN 1971 at 11 a.m.
...ter Council House,
...Road, London, N.W.1
...attend in connection with the appeals listed below, and
...with you
Year of assessment | Source of income
1966–67

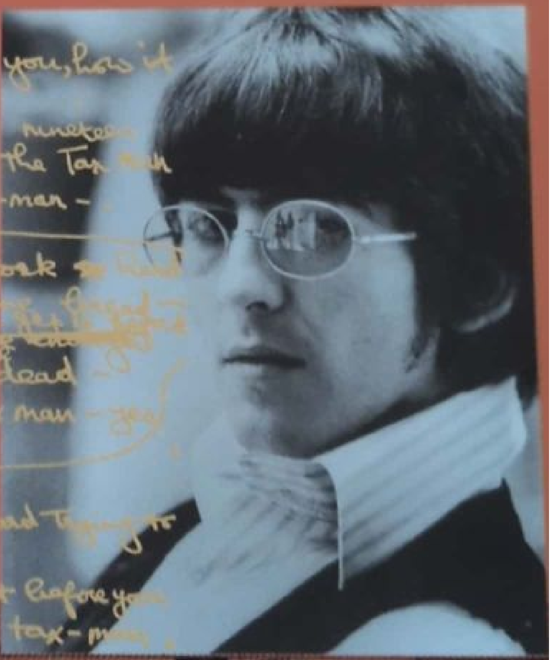
リンゴ
税金問題には、ほんとウンザリした。
僕らひどい策略に引っかかってね。
バハマで暮らすことにした男がいて、そいつに僕らの金を預ければ
税金がかからないって話になったんだ。
ところが結局はその金を全部またこっちに持ってきて、
それに対する税金を払い、その男にも金を払わなきゃならなくなった。
そんなことなら、最初からずっと動かさずにそのままにしておけばよかったよ。
あれは策略だったんだ。誰かがブライアンに持ちかけて、
それに僕らが飛びついちゃったのさ。

...ryce Hanmer have now confirmed our fears and they have
...e Inspector of Taxes that there is an excess dividend of
... Section 83 of the Finance Act 1965. This excess dividend
...ave been payable on April 6, 1966 and Schedule F tax
...0. in respect of this dividend is due to the Collector of

...les are in the 90% tax bracket. Accordingly, in
... to personally give the £15,000 gift, they
...earn £150,000. It is possible to obtain a cash

47, OLD BOND STREET, LONDON, W.1
HEAD OFFICE
...E HUNDRED AND NINETY NINE POUNDS
£15,999-0-0
or Order

£1,000,000
APPLE CO
3 AUG 1973
W 33



きたりするだろう――その時「イエロー・サブマリン」を思いついたんだよ。"みんな黄色い潜水艦の中……"。

僕は子どもに関わるものがすごく好きなんだ。子どもの考えとかイマジネーションとか。だから、かなりシュールなアイディアであると同時に子どもっぽいアイディアであっても、クールじゃないって気はしなかった。それにもうひとつ、リンゴはすごく子どもに人気があるから――おもしろいおじさんってタイプだろ――チルドレン・ソング、っぽいのを彼に歌わせるのも悪くないんじゃないかと思った。すごくシリアスな曲を歌わせるよりいいんじゃないかって。彼はあんまり歌いたがらなかったからね

ジョン　歌詞にはドノバンも参加してる。僕も一緒にやった。メロディはほとんどスタジオで作ったようなものだけど、もとになってるのはポールのアイディアだ。ポールの考えたアイディアで、ポールのつけたタイトル――だから僕はあれをポールの曲だと思ってる。1980年

ジョージ　「イエロー・サブマリン」はポールとジョンで書いたものだよ。でもすでに初期の頃から、大部分はどちらかひとりが書いてたんだ。それからもうひとりが手を入れて完成させる。あとになると、それがもっとはっきりしてきたけどね。

リンゴ　どこからああいうアイディアを持ってきたのか、実際のところ僕はまるで知らない。ただ、すごくおもしろい曲だからやってみたいなと思っただけ。僕がそれまでやってたのはカバー曲が多かった。当時僕がやったのはカバーか、彼らが僕のために書いたものか、どっちかだった。

たいていそういう話はアルバム作りがかなり進んできた頃に出てくる――僕がどこかで1曲やるってことはみんなわかってるんだ、たいてい4分の3くらいのところで――それで僕から"曲できた？"って訊くか、彼らの方から"これはおまえに"とか"まだ何もできてないんだ――何かやりたいものある？"とか言ってくる。僕はカール・パーキンスのナンバーやバック・オーエンズのナンバーなんかをやってたけど、何年かするとほとんどジョンとポールが僕に曲を書いてくれるようになった。

あの頃は自分の曲なんか持ち込める状況じゃなかったよ。なんたってレノン＝マッカートニーのコンビがいるんだからね。実際、ちょっとしたジョークみたいなもんだった――僕が自分の書いた曲を持ってくると、みんな床を転げまわって笑うんだ。僕は古いスタンダードを焼き直しただけだったからさ。ジェリー・リー・ルイスの曲をリライトさせるとうまいもんだったよ。僕はそうやって自分の枝をかき集めようとしてたんだ。

最初のうちはジョージも、自分の曲を見せる時、僕と同じ悩みを抱えてた。でもそれは長くは続かなくて、いつの間にか彼はすばらしい曲を書いてくるようになった。「タックスマン」はすばらしいよ――『リボルバー』のオープニングとして、なかなかのもんじゃないか？

ポール

詩人って自分で経験したことしか
詩に書いちゃいけないと
思ってるのかな。
どうだか知らないけど
ともかく僕らの歌はほとんどすべて
イマジネーションだよ――
90%、イマジネーションだ。
ベートーベンだって、
同じだったと思うよ。 1966年

ポール　僕は楽譜を書くことはできなかったけど、子どもの頃はいろいろレッスンを受けてたんだ。まず年配の女性に習った。いつも宿題を出す先生だったな。その後、16歳でまたやり始めた。先生は近所の若い男の人。だけどまた5本指の練習曲からやりだすんで飽きてきちゃってね、だってその頃もう僕はメロディを少し作り始めてたんだ。「ホエン・アイム・シックスティー・フォー」とかね。その楽しさがわかってきてたから、今さら練習問題に引き戻そうたって遅いさ。

その後、「エリナー・リグビー」を書いた頃、ギルドホール・スクール・オブ・ミュージックのちゃんとした人に教わろうとしたことがある。ジェーン・アッシャーのお母さん（マーガレット・エリオット。オーボエ教師）が紹介してくれたんだよ。でもその人ともうまくいかなかった。僕が彼を嫌になったのは「エリナー・リグビー」を見せた時だ。興味を持つだろうと思ったら、全然だったんだよ。あのちょっとしたテンポの切り替えに飛びつくと思ったのに。

「エリナー・リグビー」を書いたのはロンドンに住んでいる時。地下にピアノがあって、よくそこへもぐりこんではピアノで遊んでたんだよ。それでその時も適当にコードを弾いてたら言葉が浮かんできたんだ。"ダディダダー……ライス・イン・ザ・チャーチ……"。結婚式の終わったあとで、撒かれた米粒を誰かが拾う、そういうアイディアから、これが"寂しい人々"っていう方向に強く引っ張られていったんだ。

名前にはちょっと苦労した。僕はいつも、まともに聞こえる名前を付けたいと思ってるんだ。それで昔の学校の写真を見ていたら、いろいろ名前を思い出した。これならいいなと思って。ジェイムス・ストリングフェロー、グレース・ペンドルトン。小説読んでると、登場するのはみんな"ジェイムス・ターンベリー"とか、現実にはありえないような名ばかり。あの曲のあのイメージでは、絶対に真実味のある名前を入れたかった。『ヘルプ！』でエリナー・ブロンと共演しただろう、エリナーという名前は気に入っていたんだよね。そういう名前の人に会ったのはあれが初めてだったんだ。"リグビー"は、リストルの町をある晩歩いてて見かけた店の名前。"へえ、いい名前だな、リグビーっ"とその時思ったんだ。実際にある名前だけど、ちょっとエキゾティックな感じがする。で「エリナー・リグビー」になったんだ。

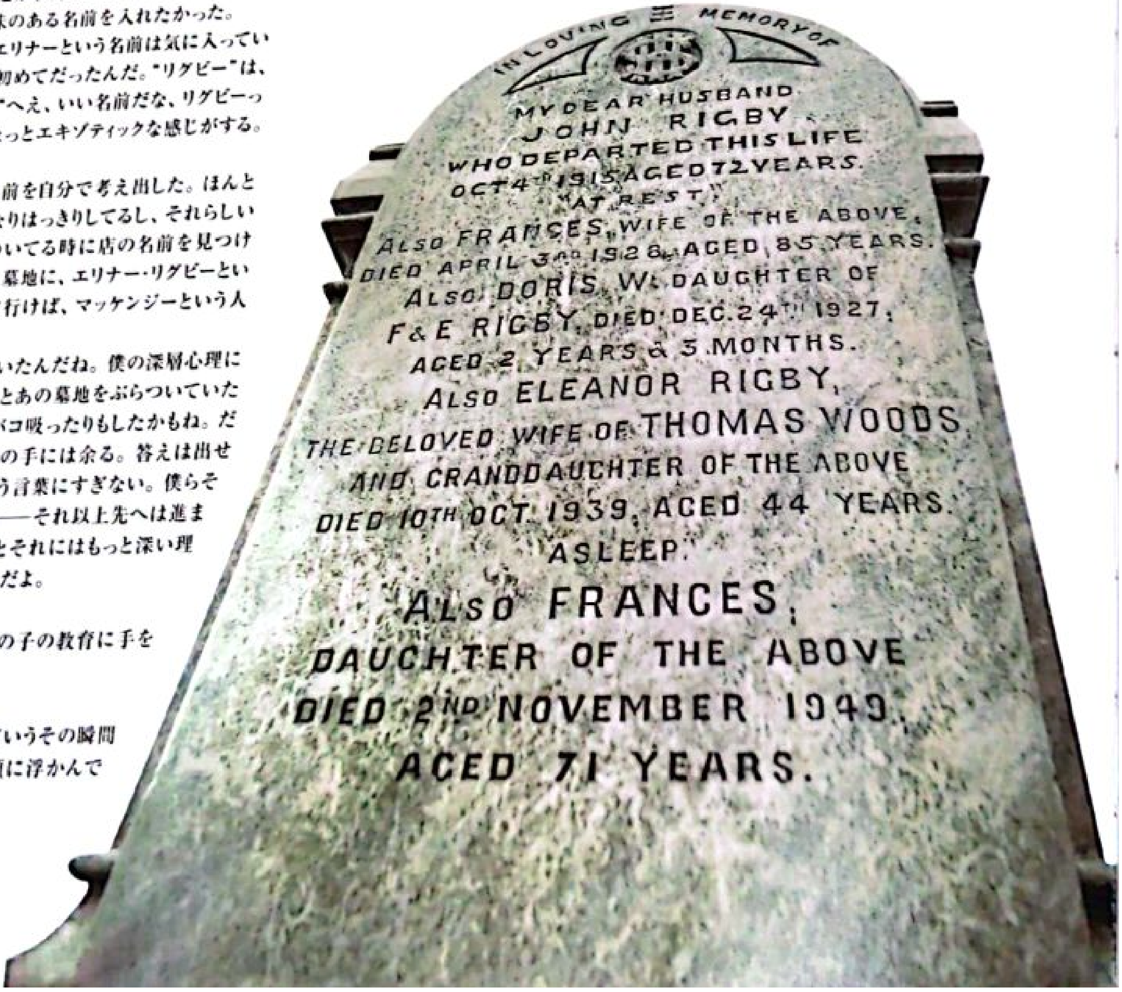
ういうふうにして、僕はエリナー・リグビーという名前を自分で考え出した。ほんとう思ってたんだ。エリナーという名前の経緯はかなりはっきりしてるし、それらしいを探していたらブリストルの波止場あたりをうろついてる時に店の名前を見つけもどうやら、昔僕がジョンとよく遊んでたウールトン墓地に、エリナー・リグビーとい墓があったらしい。しかもその墓の右へ数ヤード行けば、マッケンジーという人あるとか。

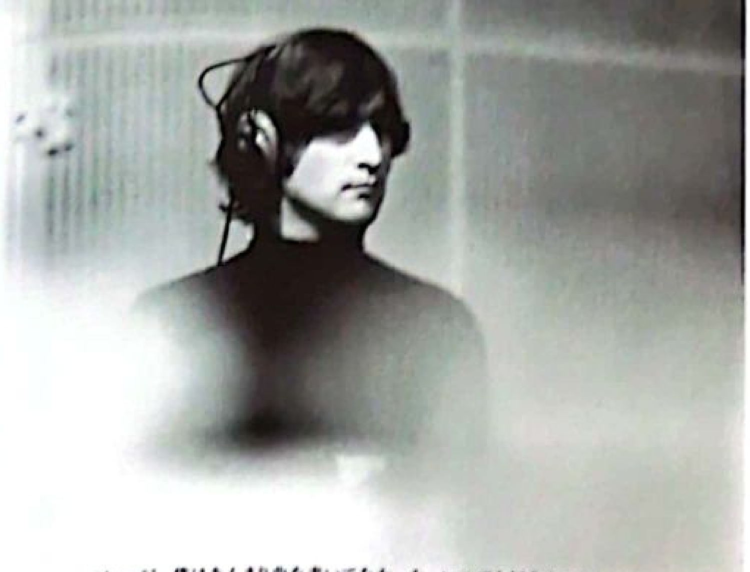
くの偶然か、でなければ僕が無意識に記憶していたんだね。僕の深層心理にいたと考える方が無難だろうな。僕はいつもジョンとあの墓地をぶらついていた。あそこは日向ぼっこにもよかったし、隠れてタバコ吸ったりもしたかもね。だ深層心理ってことなんだろう――でもちょっと僕の手には余る。答えは出せ偶然というのは、ふたつのことが重なったのをいう言葉にすぎない。僕らそてしまおうとするけど、でもこれは名前だからね――それ以上先へは進まどなぜかち合ったのかということになると、きっとそれにはもっと深い理僕らのちっぽけな脳みそじゃつかみきれないんだよ。

リナー・リグビー」はポールの子どもで、僕はその子の教育に手を

1980年

晩ベッドに横になっていてね、眠りに落ちようっていうその瞬間かな闇に包まれた瞬間って、変なアイディアが頭に浮かんで





ジョージ　僕はあんまり曲を書いてなかった。いつでも何曲かやりかけのものや考えてるものはあって、その後かなりの数のストックができた。でも60年代半ばにはそれほど多くなかったんだ。

ジョン　「シー・セッド・シー・セッド」は僕。あれはおもしろい曲だよ。ギターが最高にいい。あれを書いたのはアシッドでトリップしたあと。ビートルズのツアーの合い間にLAへ行って、ザ・バーズと大勢の女の子を引き連れて遊んでた時さ。
「ドクター・ロバート」も僕の曲だね。ほとんどドラッグ、覚醒剤のことだよ。自分のことを書いたのさ。ツアーに覚醒剤持っていってヘロヘロになってたのは僕だ。まあ、初期の頃だけどね。そのうちローディがそういうことをやるようになった。僕らはばらでポケットに入れてたんだ、トラブルになった場合を考えて。1980年

ポール　「ドクター・ロバート」はジョークみたいなもんだよ。ニューヨークにある男がいて、アメリカでは"そいつなら何でもお望みのものを手に入れてくれる――どんなドラッグでも"ってみんな言ってた。かなりいかがわしい話だよね。でもこの男が誰のどんな病気でもそういうドラッグで治してしまう、というジョークでもあるんだ。トランキライザーとか注射とか、これにはこれ、あれにはあれ、って、そうやって彼はニューヨークをハイにしてる。それが「ドクター・ロバート」だよ。みんなを元気にしてくれるお医者さんなのさ。あれは僕らの間のジョークだったんだけど、仲間うちのジョークが外にも広まっちゃった。聞いた人がみんな、それぞれの話をくっつけるからさ。でもそれってすごくおもしろいだろ。僕は小さい頃、"gilly gilly osten feffer catsa nell a bogen"って何のことかさっぱりわからなかったけど、それでもおもしろがって歌ってたもんだよ。1967年

ジョン　「グッド・デイ・サンシャイン」はポールの曲だ。1行くらい僕が何か入れたかもしれないけど――どうだったかな。「フォー・ノー・ワン」もポールだ。あれは僕の好きな曲のひとつ――いい作品だよ。「アンド・ユア・バード・キャン・シング」は僕がいいかげんに作ったやつ。
「ゴット・トゥ・ゲット・ユー・イントゥ・マイ・ライフ」もポールだ。あれは彼が作った中でもベストに入ると思う。歌詞がいい――あれに関しては、僕はまるで書いてない。その気になれば彼はいい詩が書ける、っていうのは、これがいい例だよ。これはほんとは、彼のLSD体験を書いたものだ。そのことを言ってるんだと思うよ。断言はできないけど、あれはその結果生まれた歌だと思う。1980年

ポール　実はあれ、マリファナの歌なんだよ。

ジョン　「ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア」はポールひとりで作ったはずだ――ビートルズの曲の中で、僕が一番気に入ってるもののひとつだよ。1980年

ポール　僕の最高の思い出のひとつがね、「ヘルプ!」の撮影でオーストリアのオーバータウエルンへ行った時のことさ。ジョンと僕は同じ部屋だった。1日の撮影が終わり、重たいスキー・ブーツを脱いで、さあこれからシャワーを浴びて楽しいお酒と夕食だって、準備しながら、新しいアルバムのカセットをかけてたんだよね。すると僕の「ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア」が出てきた時、ジョンが言ったんだ。"このテープに入ってる僕のどの曲よりも、たぶんこっちの方が好きだな"。ジョンの口からそういうセリフが出ると、ほんと最高の誉め言葉になるよ。

ジョージ　「アイ・ウォント・トゥ・テル・ユー」は、雪崩のようにどっと襲いかかってくる気持ちを歌ってるんだ。文字に示すことも、話すことも伝えることもできないような気持ちだよ。
「ラヴ・ユー・トゥ」はシタールで作った。シタールの響きがすごくよかったし、僕は常にもっと深いものを求めたいと思っていたから。初めからシタールを想定した曲を書きたかった。これにはタブラのパートもあるんだよ。タブラ・プレイヤーを使ったのはあれが最初だった。

ポール　ああいうインドのサウンドは、完全にジョージ主導だね。僕らインド音楽に触れてからいろいろ聴くようになって、そういう転調のない曲作りというのが気に入ったんだ。前にもそういう感じをちょっと取り入れたことはあったんだよ。でもジョージはすごく興味を持って、ラビ・シャンカールのコンサートにも何度か行ってたね。その後彼はラビその人に会って、"ノックアウトされた!"って――人間としてね。彼はすばらしい人だった。偉大なる人間のひとりだ。僕はジョージが真剣にやるつもりだなんて思ってなかったから、ジョージが本気だって知った時には、今度は僕の方がノックアウトされた。そしてふたりはすばらしい時間を過ごしたわけだよ! で、そうやって僕らはインドのサウンドを取り入れるようになった。2種類の音楽を結びつけるというのはおもしろかったね。僕らはすごくシンプルな形で始めたんだけど、それでこのアルバムがちょっとよくなった。ちょっとインド音楽っぽくなったんだ。それにみんながインド音楽を理解する手助けにもなる――すごくとっつきにくいものだからね。でもいったんハマり込んでしまったら、これは最高だよ。1966年

ジョン　これはすごいよ――最高にクールだ。インド音楽ってクールだと思わないか? クールな感じがしないかい? この音楽は数千年の歴史を持ってるんだ。笑っちゃうね。イギリス人はそういうインドへ行ってあれこれ指図してたんだぜ。ほんと驚きだよ。1966年

ジョージ　今の僕にとっては、これが唯一、真に偉大な音楽だ。西洋の3拍とか4拍といった要素が、何だか中身のないものに思えてくる。ほんとうに気持ちを集中して聴けば、すごく多くのものを得られるんだ。もっとたくさんの人がこれを聴いて、好きになってほしいね。1966年

ポール　「リボルバー」の最後の曲、「トゥモロー・ネバー・ノウズ」は、完全にジョンの曲だ。この頃になるとみんなドラッグを試すようになっていた。LSDなんかも含めてね。ジョンはティモシー・リアリーが翻案した「チベットの死者の書」を持っていた。あれはすごくおもしろい本だよ。初めて僕らにもああいう感じがつかめた。古代エジプトの風習みたいに、人が死んで何日か安置されている間に女性の召使がやって来て、これからの雄大な旅の支度をしてくれる。これがイギリスだと、バタッと死んでおしまいだけどね。LSDをやると、このテーマがますますおもしろくなってきたんだ。

ジョン　リアリーがそこら中で触れまわってたんだよね。これをやってみろ、やってみろ、って。それで僕らは彼の"トリップする方法"の本に出てる指示に従ったのさ。僕は彼がその本で言ってるとおりにやって、そのあと「トゥモロー・ネバー・ノウズ」を書いた。あれは初めてのアシッド・ソングと言えるんじゃないかな。"何も考えず虚空に身を任せよう"って、ああいうのはみんな、リアリーが「チベットの死者の書」からパクってきた戯言さ。
ジョンが「チベットの死者の書」にハマってるって、ジョージ・マーティンが言ってるのを何かで読んだけど、僕は生まれてから一度もその本を見たことがないんだぜ。僕はリアリーのサイケデリック・ドラッグの宣伝パンフを見ただけ――当時はあれがすごくおもしろいものだったんだ。
「リボルバー」ですでに僕らアシッドをやってたよ。みんな勘違いしてるのさ――ジョージ・マーティンすら。"「ペパー」が僕らのアシッド・アルバムだった"って言ってた。でも、ポールも含めて、「リボルバー」が完成する頃には全員がアシッドをやってたんだよ。1972年
「トゥモロー・ネバー・ノウズ」という表現も、これまたリンゴの言葉だ。無造作にそれをタイトルにしちゃったんだ。ちょっとばかり歌詞が気にかかってたんでね。だからリン

CamScannerでスキャン

ゴの「ハード・デイズ・ナイト」もどきのおかしな言葉を借りて、哲学的な重い内容を和らげようと思ったんだ。1980年

ジョージ　最近ずっと不思議に思ってたんだけど、どうしてこれが「チベットの死者の書」からとったってことになったんだろうね。むしろティモシー・リアリーの「ザ・サイケデリック・エクスペリエンス」って本に基づいていると思うけど。あの歌詞は超越主義の本質を描いてるんだよ。

「トゥモロー・ネバー・ノウズ」を何度聴いても（ビートルズ・ファンはほとんど聴いてるだろうけど）、実際のところそれが何を言ってるのかよくわからないと思う。結局のところ、これは瞑想がどういうものかってことなんだよ。瞑想の目的は覚醒も睡眠も夢も超える（つまり超越する）ことだ。だからこの曲は"思考を断ち切り、気持ちを鎮めてフワフワと落ちていこう、これは死ではない"ってところから始まってるんだ。

それから"何も考えず虚空に身を任せよう――そこに輝きがある。内類なるものの意味がわかるだろう――それが存在"と続く。生まれてから死ぬまで、僕らはいつでも考えてばかりだ。あることを考えると別の考えが浮かんでくる。そうやって、どんどんいろんなことを考えてしまう。眠っている時だって夢を見てるだろ。だから生まれてから死ぬまで頭は瞬時も休むことはなく、常に何かを考えてるんだ。でも自分の思考を断ち切ることができれば、マハリシの言わんとするところへたどり着ける。"あなたがそのことを考える前、その考えはどこにあったのか？"

一番大切なのは、この歌は僕らだということだよ。自我とは純粋な認識の状態から生まれるものだ。人間の本質からね。それ以外のもの、物質世界に現れる表面的なものは（結果的に思考や行動となるすべての動きを含めて）すべてゴミだ。ひとりひとりの魂の本質は、純粋な意識にある。だからこの歌は、実は超越と、超越の本質がテーマなんだよ。

実際ジョンが自分の言っていることを完全に理解していたのかどうか、僕にはよくわからない。彼はそういう言葉を目にした時、大切なことをつかんだと思い、それを歌にしたんだろう。だけど、あの歌の歌詞が本当にどういう意味かを経験としてわかっていただろうか？　本当に彼が完全に理解していたかどうか。

西洋音楽的に言うと、インド音楽には転調がない。ずっと同じ調子なんだ。ある主音を選べば、それは曲の最後まで変わらない。「トゥモロー・ネバー・ノウズ」はこうしたタイプの初めての曲だと思うよ。全編を通じてワン・コードのみだ。
上声部に重ねた和音は変化するけどね。主音
がCだったら、B♭の和音が鳴ってるんだ。でもあ
はオーバーダブのようなもので、基本のサウン
はずっと同じ調子のままだ。

ール　何日かオフにしたあと、ジョンが曲を持ってき
だ。覚えてるよ、僕はベルグラビアのチャペル・スト
トにあるブライアン・エプスタインの家にいた。そこへジ
が曲を持ってきた。最初から最後までCコードで、僕らには
なアイディアに思えた。
ジョージ・マーティンがどう言うだろうって思った。すごく大胆に基本
してるからね、僕らはいつも最低スリー・コードは使ってたし、たいてい曲の中
たりで転調してたんだから。それが突然、ジョンはCだけをつま弾いて――"考
やめて……"。あの詩がまた、すごく深くて、重い意味を持ってた――明らか
キュー・ガール」とは違う。あの手のものからは、ちょっと変わってきてたってこ

ョージ・マーティンはすごく気に入ってくれた。"おもしろいね、ジョン。とっ
！"って。それで僕らはスタジオに入り、かなりストレートにロックン・ロー
っぽくレコーディングした。
要だってことになった。僕はその頃テープ・ループに凝っててね。ブレンネ
ーを2台持ってたから、それでテープ・ループを作ることができたんだ。小
袋に20本くらいテープ・ループを入れて持ってきて、他のスタジオからマシ
かき集めてくると、鉛筆やグラスに引っ掛けて全部のループをまわす。レ
台*注くらい使ったんじゃないかな。普通アルバム1枚作るのに1台しかい
どね。いっせいにまわしたループで、ミキシング・コンソールのチャンネル
たよ。
が家でテープを作ってきたんだ、どのキーだか知らないけど。それを6
かけて、6台*注のマシンにかけた。全体の効果は望みどおりだったと

れ家で、テープ・ループを作った。"よろしい生徒諸君、全員家に帰っ
のループを作って持ってきなさい"。僕らシュトックハウゼンみたいな
っぽい音楽に近づこうとしてたのさ。
ちゃいループを作ってスタジオに持っていった。それを違うフェー
ダーにかけてミキシングする。必ずちょっとずつ違うものが出てくる――偶然に出てくるもんだよ――あの"カモメの声"も、単におかしな音の集まりだ。

僕のループに何を入れたかよく覚えてないんだけど、確か柱時計の音をスピードを変えて入れたんだと思う。何でもできるんだよ。何かちょっと持ってきて編集して、それをつなぎ合わせて違うスピードで再生すればいい。

リンゴ　僕も自分のマシンを持っててね。ジョージが言うように、僕らあの頃"ハッパをいっぱい喫んでた"もんだから、僕のテープはどれを聴いても"あれ、スイッチ入れたっけ"って声が入ってる。強力なハッパで完全に頭が混乱しててね、何時間も座ったまま、そういうノイズを作ってた。

ジョージ・マーティン　「トゥモロー・ネバー・ノウズ」は革新的な試みだった。ジョンはこのトラックをすごく不気味な、この世のものじゃないような感じにしたいと言ってね。オリジナルのバージョンでは、タンブーラの単調な音と、リンゴのすごく特徴のあるドラムのみでやったんだ。

リンゴ　「トゥモロー・ネバー・ノウズ」のドラミングは自分でもいい出来だと思ったよ。全体通じて、なかなか自慢できるドラミングだった。

ジョージ・マーティン　あの頃4人の中では、ポールが一番アヴァンギャルドな方向性を持っていただろう。ヨーコの影響などもあって、アヴァンギャルドといえばジョンというイメージがあるが、当時のポールはシュトックハウゼンやジョン・ケージといったアヴァンギャルドなアーティストにすごく夢中になっていた。ジョンの方はウェイブリッジで快適な郊外暮らしをしていたよ。

ポール　ジョナサン・ミラーみたいな言い方はしたくないけど、僕はあらゆることを詰め込もうとしてるんだ。これまで見落としてきたことすべてをさ。すばらしい話、すばらしい絵、すばらしい本、すばらしい曲。いろんな人がいろんなことをやってる。僕はみんなが何をしてるのか知りたいんだよ。僕の知らないことを人が知ってるっていうのが、何となく気になるんだ。1966年

ジョン　ウェイブリッジはつまらない。僕はバス停で降りるみたいにちょっと立ち寄るだけだよ。あそこに住んでるのは銀行員や株屋だ。足し算やってりゃいい人たちさ。ウェイブリッジはそういう人間が住むところで、彼らにとってはそこに住むのが最終目的なんだ。奴ら本気でそう思ってるんだぜ。僕は毎日考えてる――ヘンゼルとグレーテルもどきの家の中でね。ゆっくり時間かけて考えるのさ。自分の求めてるものがわかったら、ほんとに自分に合った家を買うよ。

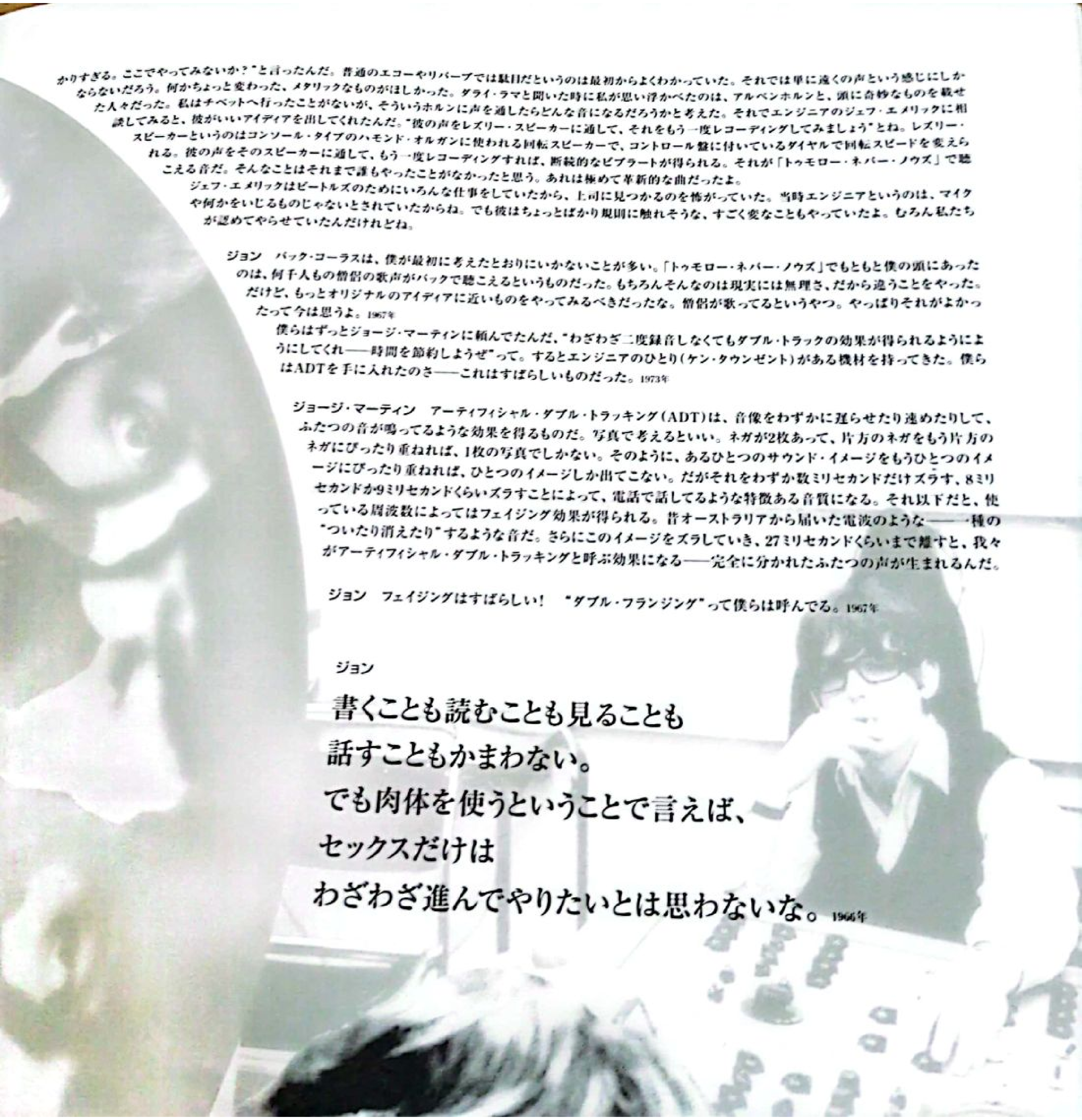
僕には何か他にやることがあるはずなんだ、やらなきゃいけないことが――ただ、それが何なのかわからない。だから僕は絵を描いたりテープ作ったり、ものを書いたりしてるんだ。それがやるべきことのひとつかもしれないから。僕にわかってるのは、まだ僕にとってしかるべき時期じゃないってことだけさ。1966年

ジョージ・マーティン　自宅のテープ・レコーダーで実験を始めたのは、実はポールなんだ。彼はテープが消去ヘッドに触れないようにテープをループさせて、奇妙な音でテープを埋めつくした。彼が他のメンバーにその方法を説明し、リンゴとジョージもそれにならっていろいろなループを持ってきた。私はそれをいろいろなスピードで再生し、逆回しにしたり、逆回転させたりして聴いてみて、いくつかセレクトした。

あれはおかしなトラックだったね。一度やったらもう二度とできないんだから。EMIのスタジオ中、ループを入れたテープ・レコーダーだらけだった。ループを鉛筆に引っかけて、ちょうどいい間隔に保っておく。常にテープ・レコーダーをまわし続け、各ループはミキシング・コンソールの別々のフェーダーに送られ、オルガンの（ドローバーの）ような感じでいつでもサウンドを出せる。だからミキシングはその時その時のランダムなもので、二度と同じものは作れない。当時あんなやり方でレコードを作っていた人は他にいない――少なくとも、私が知るかぎりではね。

ジョンは自分の声をどうしても好きになれなかった。なぜだろうね、あんなにすばらしいのに。朝起きて自分の顔を鏡で見る時、"なんてひどい顔だ！"と思うのと同じことなんだろう。自虐的なものだよ。彼はいつでも自分のボーカルをゆがめたがった。ダブル・トラッキングしてくれとか、アーティフィシャル・ダブル・トラッキング（ADT）で録音してくれとか、いろんなことを注文してきたよ。"もうそれはやめよう。ジョージ、違うやつにしてくれ"とね。いつでも何か違うものを求めていたね。

「トゥモロー・ネバー・ノウズ」の時は、丘の上でダライ・ラマが経文を唱えているようなボーカルにしたいと言うんだ。それで私は、"チベットまで行くのではちょっと金がか



かりすぎる。ここでやってみないか？"と言ったんだ。普通のエコーやリバーブでは駄目だというのは最初からよくわかっていた。それでは単に遠くの声という感じにしかならないだろう。何かちょっと変わった、メタリックなものがほしかった。ダライ・ラマと聞いた時に私が思い浮かべたのは、アルペンホルンと、頭に奇妙なものを載せた人々だった。私はチベットへ行ったことがないが、そういうホルンに声を通したらどんな音になるだろうかと考えた。それでエンジニアのジェフ・エメリックに相談してみると、彼がいいアイディアを出してくれたんだ。"彼の声をレズリー・スピーカーに通して、それをもう一度レコーディングしてみましょう"とね。レズリー・スピーカーというのはコンソール・タイプのハモンド・オルガンに使われる回転スピーカーで、コントロール盤に付いているダイヤルで回転スピードを変えられる。彼の声をそのスピーカーに通して、もう一度レコーディングすれば、断続的なビブラートが得られる。それが「トゥモロー・ネバー・ノウズ」で聴こえる音だ。そんなことはそれまで誰もやったことがなかったと思う。あれは極めて革新的な曲だったよ。

ジェフ・エメリックはビートルズのためにいろんな仕事をしていたから、上司に見つかるのを怖がっていた。当時エンジニアというのは、マイクや何かをいじるものじゃないとされていたからね。でも彼はちょっとばかり規則に触れそうな、すごく変なこともやっていたよ。むろん私たちが認めてやらせていたんだけれどね。

ジョン　バック・コーラスは、僕が最初に考えたとおりにいかないことが多い。「トゥモロー・ネバー・ノウズ」でもともと僕の頭にあったのは、何千人もの僧侶の歌声がバックで聴こえるというものだった。もちろんそんなのは現実には無理さ、だから違うことをやった。だけど、もっとオリジナルのアイディアに近いものをやってみるべきだったな。僧侶が歌ってるというやつ。やっぱりそれがよかったって今は思うよ。1967年

僕らはずっとジョージ・マーティンに頼んでたんだ、"わざわざ二度録音しなくてもダブル・トラックの効果が得られるようにようにしてくれ——時間を節約しようぜ"って。するとエンジニアのひとり（ケン・タウンゼント）がある機材を持ってきた。僕らはADTを手に入れたのさ——これはすばらしいものだった。1973年

ジョージ・マーティン　アーティフィシャル・ダブル・トラッキング（ADT）は、音像をわずかに遅らせたり速めたりして、ふたつの音が鳴ってるような効果を得るものだ。写真で考えるといい。ネガが2枚あって、片方のネガをもう片方のネガにぴったり重ねれば、1枚の写真でしかない。そのように、あるひとつのサウンド・イメージをもうひとつのイメージにぴったり重ねれば、ひとつのイメージしか出てこない。だがそれをわずか数ミリセカンドだけズラす、8ミリセカンドか9ミリセカンドくらいズラすことによって、電話で話してるような特徴ある音質になる。それ以下だと、使っている周波数によってはフェイジング効果が得られる。昔オーストラリアから届いた電波のような——一種の"ついたり消えたり"するような音だ。さらにこのイメージをズラしていき、27ミリセカンドくらいまで離すと、我々がアーティフィシャル・ダブル・トラッキングと呼ぶ効果になる——完全に分かれたふたつの声が生まれるんだ。

ジョン　フェイジングはすばらしい！　"ダブル・フランジング"って僕らは呼んでる。1967年

ジョン

書くことも読むことも見ることも
話すこともかまわない。
でも肉体を使うということで言えば、
セックスだけは
わざわざ進んでやりたいとは思わないな。

1966年

CamScannerでスキャン

ポール　だんだんみんな、ポップ・ソングだけに目を向けるんじゃなく、いろんなアーティストとつきあうようになってきた。僕らは役者や画家を何人か知ってたし、ギャラリーにもよく出かけてた。その頃ロンドンに住んでいたからね。異種交配みたいなことが起こり始めていたんだ。

他のメンバーはみんな結婚して郊外に引っ越してたけど、僕はロンドンに残っていて、ロバート・フレイザーにバリー・マイルズといった友人や、インターナショナル・タイムズみたいな新聞を通じて、アート・シーンにも詳しくなった。ジョン・ダンバー、ピーター・アッシャーなんかと一緒にインディカ・ギャラリーをオープンしてね。ジョン・ケージの話なんかも聞いてたよ。彼はちょうど「4'33"」という曲をやったばかりで(一切音を出さないというもの)、そのパフォーマンス中に客席で誰かが咳をすれば、彼は"はらね?"という。誰かがブーイングすれば、また"はらね"。つまり完全な沈黙はありえない――それは音楽なんだ。

僕はそういったものすべてにすごく引き込まれた。そういうものが僕の人生の一部になり始めたんだ。シュトックハウゼンもよく聴いてたよ。ある曲なんかはずっとカランコロン音がしてるだけのものでね、おもしろいアイディアがぎっしり詰まってた。きっと僕らのオーディエンスだってちょっとした変化くらい気にしないだろう、そう僕らは思った。どっちみち、気にするようなファンならがっかりだ！　とにかく僕らはずっと自分たちの感覚に従ってた――ほとんどの場合はね。「トゥモロー・ネバー・ノウズ」はひとつのアイディアを膨らませていった例のひとつだ。

いつも言ってるんだけど、僕はジョンがほんとに興味を持つようになる前から、ずいぶん長い間、こういうことに関わっていたんだよ。だって当時ジョンはシンシアと結婚してたんだから。彼がロンドンへ戻ってきて、あちこちのギャラリーへ顔を出すようになったのは、ヨーコとつきあうようになってからだよ。

ジョージ　「リボルバー」のジャケットは、最初ロバート・フリーマンがアートワークを準備してたんだけど(アルバムでは用いられなかった)、彼じゃなくクラウス・フォアマンが起用された。クラウスは優れたアーティストだったし、僕らともすごく仲がよかったよ。どうしてクラウスをってことになったのか思い出せないけど、彼はすごくいい仕事をしてくれた。あれは歴史に残るアルバム・カバーになったよね。

「リボルバー」は評判がよかった。「ラバー・ソウル」と「リボルバー」にはたいして違いがないと思うけど。僕には第1部、第2部でもおかしくない気がした。

ポール　クラウスはハンブルク時代からの大の友だちでね――彼も当時知り合った実存主義者のひとりだ。彼が絵を描いてて、ずっとグラフィック・デザインをやってたことは僕らも知ってた。ただ、彼が実際どんなことをしてるのかは、正直な話よく知らなかったんだ。だけど彼は大学に行ってたし、きっと任せても大丈夫だろうと思ったから、"何かアルバム・カバー用に作ってくれる？"って言ったんだよ。

彼が持ってきたものを見て、僕らは全員とっても満足した。みんなの耳から何かが飛び出してるのも気に入ったし、絵を大きくして、小さい部分でコラージュをしてあるのも気に入った。それに彼は僕らをよく知ってたから、僕らの絵も素敵に描いてくれた。光栄な気分だったよ。

リンゴ　「リボルバー」は「ラバー・ソウル」と質的には同じだよ。だってあの続きなんだから。僕らはスタジオでほんとの自分たちを見つけ始めていた。4人だけで、自分たちの楽器をプレイしながら、自分たちに何ができるか、つかみ始めていたんだ。オーバーダビングもよくなってきた。トラックがないからいつでもかなりやりにくくはあったけど。曲はますますおもしろくなってきて、同時に効果音もどんどんおもしろくなってきた。

このアルバムではドラッグの量がちょっと増えてきてたね。まだそんなにすごいものはやってなかったと思うよ、昔ながらのよくあるやつだけ――マリファナとアシッド。今でも思うんだ、確かにああいうものをある程度やってはいたけど、セッションで大量にやるってことは絶対になかった。僕らすごい働き者だったんだ。それもビートルズで忘れてはいけないこと――僕らはきちんとできるまで、忠実な犬みたいに働いてた。

ニール・アスピノール　かなりマリファナをやってたね。そのせいでちょっとレコーディングが遅れたんじゃないかと思うけど、作品の質には影響してない。

その頃彼らがレコードを作る時には僕も一緒にスタジオに入ってたんだけど、レコーディングのパターンはだんだん変わってきていた。「リボルバー」の頃には、セッションがだいたい午後2時、3時から始まって、何時だろうと終わるまで続いた。

その日新しい曲があれば、それを書いた人間がセッションの始めにギターかピアノでジョージ・マーティンにコードを聴かせる。あるいはみんなでピアノのまわりに集まって、弾きながらコードを覚えていく。レコーディング中の曲がある場合には、すぐハーモニーなりダブル・トラックなりギター・ソロなりに取りかかる。すべて4トラック(のレコーダー)でやってたから、時々、1トラックにミックス・ダウンして、残りをやるためのスペースを空ける必要があった。

評論家は「リボルバー」がある意味で新たな一歩であり、新天地を開いたものだと評価した。メンバーはみんな評論家の意見に耳を傾けていたと思う。気にしないふりはしてたけど――ほんとは気になってたんだ。

ジョン　何だってそうだけど、人はその時の流行に動かされる。で、今流行ってるのは「リボルバー」を転換期とする考えだ。その前は「ラバー・ソウル」を転換期と考えるのが流行りでね。「サージェント・ペパー」を転換期と考えるのもあった。だけど実際には、すべてがだんだんと変わっていったんだよ。まるで鶏方薬か何かがあったかのようにどこかへつながってるって僕らは感じていた――前へ進んでいってるって。確かなことは、僕らが旅の途中だったってこと――実際に旅に出てたんじゃないよ。スタジオで"旅の空"にいたのさ――そして空はくっきり晴れ上がっていたんだ。1984年

ポール　この時期に「ペイパーバック・ライター」と「レイン」のレコーディングもやった。ジョンと僕とで書いたんだよ。「ペイパーバック・ライター」のアイディアを持って彼の家に行ったのを覚えてる。ジョンの家までは長いドライブになるから、僕はよく途中で考えが浮かんで、車の中でアイディア全体を膨らませていくことが多かった。その日僕はコーンフレークのボウルを手に彼の家に入って、こう言ったんだ。"手紙を書くっていうのはどうだい？　ディア・サー・オア・マダム、と来て、次のライン、次のパラグラフへ、と続くんだ"。僕が全部書きだすと、ジョンが"うん、それはいいな"って。そこからどんどんアイディアが出てきた。

ジョン　「ペイパーバック・ライター」は「デイ・トリッパー」の息子さ――つまりリフをファジーなギターでがんがん鳴らすロックン・ロール・ナンバーだよ――でも、あれはポールの曲だ。1980年

ジョージ・マーティン　「ペイパーバック・ライター」は初期の作品よりもヘヴィーなサウンドになっている――それにボーカルも非常にいい。そういうふうに、その頃にはリズムが彼らの構成の中で最も重要な要素になっていたのだと思う。

リンゴ　「レイン」のドラミングは、僕としては際立ってると思うんだ、誰か他の人がプレイしてるような気がするもの――僕は何かに取り憑かれてたんだ！

ポール　「レイン」はジョンひとりの曲じゃない。僕らふたりで書いたんだ。ジョンのボーカルだし、ジョンの雰囲気が出てる歌だけど、ああいう特徴が出たのはコラボレーションの結果だよ。"これはジョンの曲、これはポールの曲"って、あんまり簡単に言われすぎだと思う。"ポールがやるのはバラード――ジョンはロック。ジョンの方がハードで、ポールはソフト"なんてさ。そんなのとんでもない誤解だよ。

ほとんど僕の曲と言えるものもあるし、ジョンとふたりで3時間も考えたような、完全にコラボレーションと言えるものもある。そして一方には、ほとんどジョンの曲と言えるものもある。だいたい半々くらいだと思うよ。

「レイン」で覚えてるのは、バッキング・トラックが録れなかったこと。それで仕方なく、速くプレイしてあとからスピードを落とそうって決めた。"グー・グー・グー"ってたどたどしいのはそのせいだよ。速く正確にプレイしなきゃいけなかった。でもあれはジョンのアイディアじゃなかったと思うな。誰が思いついたのか忘れちゃったけど、共同作業的な面が大きかったと思う。

ふたりとも、"俺のは「ストロベリー・フィールズ」だ、おまえのは「ペニー・レイン」だ"って言ってたから、そういうふうになってきちゃったんだと思う。だんだんそういう感じになってしまったけど、あの頃、「レイン」の頃までは、僕ら全員がそういうものをやりたいって思ってやってたんだ。ジョンだけがそういうレコードを作りたいと思ってたわけじゃない。それをやるには彼の曲がちょうどいいってことだったんじゃないかな。

ジョン　どんな音楽を聴くのかってみんなから訊かれるんだよね。僕は車が走る音を聞き、鳥の歌う声や人が呼吸する音を聞く。それに消防車。昔はよく夜に水道管の音を聞いたね。灯りがすっかり消えた中で、水道管が演奏するんだ。

曲のアイディアの半分は偶然なんだよ。初めて逆回転ギターを発見したのは「レイン」を作ってる時だ。この曲は、いつでも天気のことで嘆いてる人たちを書いたんだ。僕はなんとか工夫できないかとトラックを家に持って帰った。そのままじゃどうも納得いかなかったからね。1969年

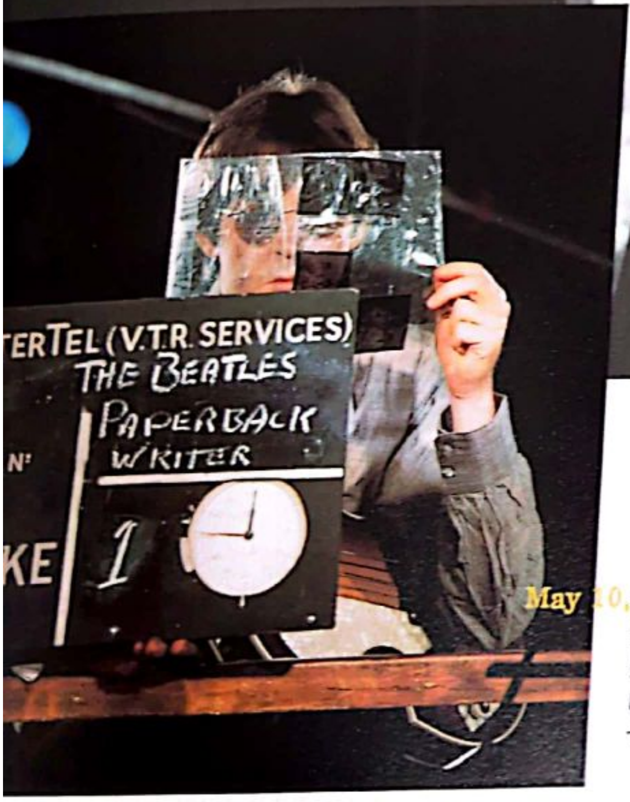
マリファナでブッ飛んだままスタジオから家に戻り、いつものようにその日レコーディングしたものを聴いた。それがどういうわけか、逆さまにかけちゃったんだよ。僕はイヤホンをして、太いマリファナ煙草を持って、ピクリとも動かずに座ってた。そして翌日スタジオに駆け込み、"どうすればいいかわかった、わかったよ……これを聴いてくれ！"って。それでみんなにリバース再生して聴かせた。1980年

僕は1曲まるまる逆回転でやりたかったんだけど、結局は最後のボーカルをちょっとと、ギターの半分を逆回転にしただけで終わった。1969年

あれは神の贈り物だね――正確に言うとマリファナの神"ジャー"かな。"ジャー"があのアイディアを授けてくれたんだ。逆回転テープはそれまでどこのどんなレコードにもなかった。ヘンドリックスよりも、ザ・フーよりも、どこの誰よりも先だ。"They're coming to take a way, ha ha."あのレコードはひょっとすると先に出たかもしれないけど、あれとはまた話が違う。「アイム・オンリー・スリーピング」でも逆回転ギターを使ってるよ。1980年

ジョージ　何か曲にとりかかってる時は、たいていみんなラフ・ミックスを家に持ち帰った。その頃はカセットなんてなくて、みんなオープン・リール式のテープだよ。ジョ

CamScannerでスキャン



May 10,

ンとポールと僕は家にオープン·リール式のテープ·レコーダーを持ってた。なかなかよくできた機械で、速さを3段階に切り換えられるんだ。「レイン」を途中までやって、夜スタジオを出る時に、ジョンが"それのラフ·ミックスをくれる？"って言ったんだよ。

当時のコピー·テープは3~4インチぐらいのリールだった。つまりラフ·ミックスを録り終えると、そこでテープを切って、ボックスに入れて渡すんだ。だからテープの最後の部分が先頭になってるわけ——"テイルズ·アウト"と言うんだけどね、その頃ジョンは知らなかった(僕も知らなかったと思う)。それで彼は家に帰ると、それを頭出しせずにテープ·レコーダーにかけてしまった。そうやって反対に曲を聴いて、"ワオ、これはすごい！"となったわけだ。

見るからに興奮してたね、翌日彼は入ってくるなり夢中になって喋りまくった。それ

turning the harmonica that you found in the dressing
al Express Concert. Actually it did not belong to
vans (the Beatles Road Manager).

it back and John asked me to thank you for your

でみんなで実験してみたわけさ。テープを裏返して逆にかけて、それから少しギターを加えた。彼と僕とふたりでギターを入れたんだったと思う。うまくハマるかどうか、様子を見ながらちょっと弾いただけだけどね。ジョージ・マーティンはマスター・テープを逆にして再生した。そのサウンドを聴いた時には、ゾクゾクしたね。あれは魔法だった――逆回転ギタリスト！音の出方、消え方、その響きというのはすばらしかった。みんなすごく興奮して、オーバーダビングでもそれをやり始めた。次はボーカルの逆回転もちょっとやってみた。インドの歌唱法みたいな感じになったよ。

時が経つにつれて僕らのレコードで使う技術が進み、ツアーのライブでプレイできない曲がほとんどになった。当時はステージで今みたいなテクノロジーを使えなかったからね。ギター2本にベースとドラム、それがすべてだった。スタジオではレコーディングのトリックを使ってできるものでも、ツアーで同じものを出すことはできなかった。

今ならそれができる。「トゥモロー・ネバー・ノウズ」だってやれる――ループをキーボードやイミュレーターにかければいいんだ。ピアニストでもドラマーでもオーケストラでも、好きなだけ使える。でもあの頃はそんなの不可能だった。僕らはちっぽけなダンス・ホール・バンドのようなもので、自分たち自身も人数を補強しようとは別に考えていなかった。"まあ無理だな。できるかぎりやって、ほんとにこれ以上はダメだってところまで来たら、それは外そう"と、そういう考え方だった。だからこの頃から、レコードに入ってる曲でもライブではずいぶん外すようになってきたんだ。「ペイパーバック・ライター」もそうだね。あれはすべてダブル・トラックで、ステージでやるとすごくつまらないサウンドになってしまう。だからあの曲をやる時には（少なくともアメリカ・ツアーでは）、救いようもなくお粗末になってくると、"エルヴィス方式"で観客に手を振った。するとみんなワーッと声をあげてくれるから、ひどい演奏がカバーされるのさ。ポールも言っていたけど、歓声は実際困った状況を何度となく救ってくれたんだ。

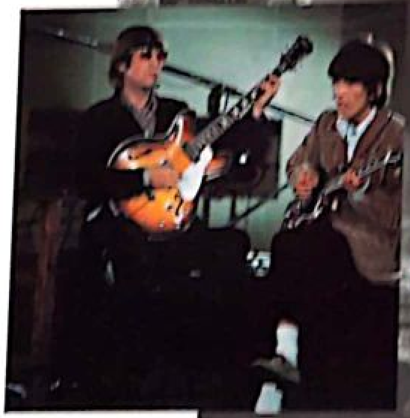
リンゴ　「ペイパーバック・ライター」と「レイン」のプロモーション・フィルムを作ろうという話になったのは、そうすれば僕らが出て行かなくてすむと思ったからさ。そのフィルムを送ってしまえばいいんだから、すばらしいアイディアに思えた。"ビデオ"なんて呼び方すら考えてなかったね。ただテレビ用ってだけで。

「レイン」の撮影はすごくおもしろかった――クラウス・フォアマンが全部企画したんだよ。あれは楽しかったなあ。「ペニー・レイン」の馬に乗るやつは、僕はそれほどおもしろくなかった。ちょっとリアルすぎたよ！

ジョージ　ビートルマニアのせいで出歩くのがやっかいになって、いろいろ不都合だから、テレビではあんまりレコードのプロモーションをしないことにしようって決めたんだ。あまりに大騒ぎになりすぎるから。その代わり、自分たちでちょっとしたフィルムを作って、それをテレビ局に送ればいいって考えたんだよ。

それでフィルム・スタッフを集めて撮影に入った。そういうフィルムが何本もある。初めてのまともなやつが、チズウィック・ハウスでやった「ペイパーバック・ライター」と「レイン」だね。あれは現在のプロモ・ビデオの先駆だよ。

アメリカでもイギリスでもそういうフィルムを使おうという考えだった。"すべての土地に行けるわけじゃない。ツアーはやめて、こういうフィルムでレコードのプロモーションをしよう"って僕らは考えていた。金切り声をあげる人の群れをかき分けてスタジオに入り、「レディ・ステディ・ゴー！」で新曲を口パクで歌うだけじゃ、苦労をする価値がないだろ。それにアメリカじゃ、その番組自体流れてないんだから。



実際、一度僕らは「エド・サリバン・ショー」でビデオ・クリップのみの出演というのをやった。確かエド・サリバンが出てきてこう言ったんだ。"ご存知のとおり、ビートルズは以前ここへ来てくれました。すばらしい若者たちだったよね。でも今回ここへは来られないということで、このクリップを送ってきてくれたんです"。最高だったね、だって僕らフィルム・クリップを出すことで、「エド・サリバン・ショー」にニュー・シングルのプロモーションをさせてしまったんだ。近頃じゃ誰でもやってることさ――そういうのがシングルのプロモーションの一環になってる――だからある意味、僕らがMTVのパイオニアと言えるんじゃないかな。

ジョージ　1966年の6月、再びハンブルクへ行った。1962年以来初めてだよ。ミュンヘンとエッセンでまずコンサートをやって、それから列車でハンブルクまで行った。王室がドイツをまわった時に使ったという列車でね、とても快適だったよ。それぞれ個室のコンパートメントを与えられたんだけど、大理石のバスタブ付きで、内装もほんと豪華だった。

ハンブルクは、僕にとってはプラスとマイナス両方でね。いい方としては、自分た

CamScannerでスキャン

ちが富と名声を身に付けて戻って来たということ。前に僕らが来た時は、汚ないナイト・クラブでプレイしながら上を目指していたわけだもの。違いは、どこからともなく亡霊がいっぱい出てくることさ——もうあんまり会いたくもないような人たち。1960年のある晩、酔っ払ってプレルーディン漬けになってた時だけの友達みたいな人たち。もう1966年で、こっちはものすごい変化を遂げてるというのに、そこへいきなり亡霊が飛び出してくるんだから。

ポール　昔のよしみで引き受けなきゃならない義務があった。ハンブルクの昔の友だちに会うのは妙な気分だったね。僕らはもう違うものに変化してるのに、外見はやっぱり同じ人、みたいなさ。だけど僕らも彼らも、互いに会わないうちに僕らが有名になってることはわかってた。ほんとは僕らがそういうギグをやるべきじゃないんだってこともね。

だけど実際、やってよかったよ。すごくクレイジーな、熱気溢れる夜だった。ドイツ時代の悪い仲間がたくさん顔をみせてさ、昔を懐かしむ気分があったね。音楽的に見ていいギグだったかどうかわからないけど、最後にもう一度行けてほんとよかった。

リンゴ　いまだにハンブルクは変わってない気がする。1992年にあそこでプレイした時も、やっぱり同じ雰囲気だったよ。いつも1、2年おきには行ってるんだけど、レーパーバーンには今でもあの空気があるもんな。僕にはいまだにスリリングな場所だよ。20歳の人間にとっては、あれ以上エキサイティングなところはなかった——ドイツの赤線地区だもんね——そういう周囲のナイトクラブでプレイするんだから。酒もドラッグも腐るほどあって、売春婦がいて、あの独特な雰囲気で。まったく信じられないけど、1966年にまた行けておもしろかったよ。

ニール・アスピノール　1962年には僕は行ってないから、僕にとってはあれが初めてだった。昔レーパーバーンやクラブにいたドイツ人がみんな来てたよ。ベティみたく、バーのカウンターやクローク・ルームで働いてた人たち。僕がまったく知らない、彼らの昔の友だちだ。

ジョージ　ジョンは楽しんでたね。とはいえ、パッと行ってパッと帰るって感じだったけど。その頃は何もかもがとんぼ帰りだったんだ。ハンブルクでのコンサートの翌日には東京行きの飛行機に乗らなきゃいけなかった。だからコンサートが終わるとまっすぐハンブルクからシュロス——大きな城みたいなホテル——へ運ばれ、その晩そこに泊まって、翌日にはヒースローへ飛び、日本行きの飛行機に乗り換えた。あいにく東京に台風が来ていて、僕らの飛行機はアラスカに進路を変えた。

リンゴ　アラスカのアンカレッジというのは、僕らにはカウボーイ・タウンみたいに思えた。ほんとに田舎なんだよ。アラスカでのいい思い出といったら、空港のガラスケースにでかくて見事な北極熊が飾ってあったことだけだね。

ジョージ　降りていく飛行機の窓から外を見た時、アラスカはすばらしいと思った。山があり、青々とした松の林があり、美しい湖や川があって。飛行機が高度を下げていくと湖や林はまばらになっていった。そして着陸したとたん、目の前はブルドーザーでメチャクチャにされた土地に変わった。みずみずしい美しさの真ん中に、人間が混乱を生み出していたのさ。

"ああ、ここもか"って思ったよ。人類はどうしようもなく薄汚ないものを生み出し続けて、ついにこの地球はそういうもので覆いつくされてしまった。そそくさと建てられるみっともないホテル——ただのコンクリートの箱だよ。アラスカでもまったく同じだった。それでも普通は都市に吸収されてしまうんだけど、100万エーカーもの松林の真ん中にあるとちょっと目立つね。

僕はきっと、前世から地球のことを心配してるんだろうな。子どもの頃はよくひとりで歩きまわって、自然に触れ、空や木々や植物や動物にすごく親しんでいたものだよ。

僕らがそこにいたのは12時間くらいだ。あれ以来行っていないけど、いつかまた行ってみたいと思う。それから東京に向かった。飛行機を降りると、第二次大戦でアメリカ兵がかぶってたようなメタルのヘルメット姿の警官と一緒に、1940年タイプの小さな車に乗せられた。隊列組んで市街地に入り、東京ヒルトンに連れて行かれて、スウィート・ルームに入れられて——それでおしまい。コンサートの時間になるまで部屋から出してもらえなかった。

外に出してくれない人たちに仕返ししようと、僕らはよく業者をスウィートに呼んでもらった。みんなきらびやかなキモノに翡翠、香り袋、彫刻品なんかを、大きな箱やトランクにパンパンに詰めて持ってきたよ。それを僕らは買い込むわけだ。"僕らにも見せてあげようか"って。僕らショッピングに行きたかったんだ。

プロモーターはすごく気前のいい人だったね。マルとニールに腕時計をくれて、僕らにはニコンをくれた。その頃のニコンといえば、最新のおもちゃだった。

僕らがどこへ行っても、必ず何かしらデモがあるんだよ。アメリカではビートルズが登場したところへ人種紛争が起こった。日本ではちょうど学生運動が盛んだったのと、武道館で僕らがコンサートをやるというのでデモが起きた。武道のための神聖な場所なんだからって。つまり武道館は武力と精神的なものだけが認められ、ポップ・ミュージックはダメだってことなんだ。

ポール　僕らはずっとホテルに閉じ込められてて、その間、いろんな業者がやってきては扇子やら何やらいろんなみやげ物を見せてくれた。みんな東京へショッピングに行くのに、僕らはホテルから出られない。一度脱け出そうとしたら警官が追いかけてきたよ。何とか外に出た時も、東京の警官隊の半分を動員して僕らにつけるんだ。僕は皇居を見に行きたかったんだけど、警察はそのアイディアにあまり乗り気じゃなかったね。

ニール・アスピノール　ジョンと僕はホテルからこっそり脱け出した——ポールとマルもね。ポールとマルは警備員につかまったみたいだけど、ジョンと僕は成功して、東京の市場へ行ったんだ。最高におもしろかった。外に出るとほっとしたよ。だけど、いろいろ見てまわって買い物をしてるうちに、警察に見つかっちゃった。"困った人たちだ——一緒にお帰りください"。

ポール　ホテルの部屋で、僕らは絵の共作をやった。いっせいに1枚の紙の端から絵を描いていって、真ん中で全部がぶつかるんだ。ただの暇つぶしなんだけどね。最近その絵を見たよ。いろんな色の混ざり合った、サイケデリックでわけのわからない絵だった。

ギグ会場へ行くまでの段取りが、日本人はすごく組織だっていたね。全員が無線を持ってた。当時はああいう無線ってあんまり見なかったよ。彼らはぴったり予定どおりの時間に僕らを迎えに来たものね。

リンゴ　東京でおもしろかったのは時間配分だ。日本人というのは時間をものすごく大切にするんだよ。僕らが部屋を出るのは7時14分。エレベーターの前に7時15分30秒に到着。エレベーターから車に乗り込むまで1分と8秒。すべてそういう具合。僕らは時間どおりに動くことになってた。ところが彼らがドアをノックしても、僕らは絶対に出てこない。彼らの時間配分はみごとに狂ってしまうわけ。見てるとみんなだんだんいらだってくるのがわかるんだよね。僕らが7時14分30秒に廊下へ出ないからさ!

僕らも迷惑かけてるのはわかってたんだけど、ロードでは自分たちでちょっとした道楽を探して、それで気晴らしをしてたんだ。だってギグの時しかホテルを出られないんだからさ。

ポール　すべての車の駐車位置もきっちり決めてあった。驚くべき効率性だね。イギリスじゃあんなの見たこともなかったよ。会場へ行くと、どの角にも警官がいてファンをきちんと並ばせてる。道路にファンがはみ出すこともない。ファンは1カ所に集められて、そこでなら手を振ってもいいことになってる。だから僕らが道路を進んでいくと、こっちでちょっと"キャ——ッ!"って声があがり、数百ヤードくらい行くとまた"キャ——ッ!"って。

武道館では昔のサムライの衣装を見せられた。
僕らは素直に、観光客っぽく驚いてあげたよ。
"すごいなあ! 古いんだなあ!"って。

CamScannerでスキャン

ポール　もっと驚いたのは、プロモーターが来たら女性たちがぱっと席を立ったことだよ。あんなの西洋じゃ見たこともない。女性たちの従順さといったら、ほんとびっくりした。"まあ、すみません、あなたのお席でしたか"とか言うんだよ。イギリスに帰ってから、それぞれ妻や恋人に言ったんだ。"あんなふうにしろとは言わないけど、そういう傾向も考える意味はあるんじゃないかな?"。即座に却下されたね。

僕らはお揃いの黄色のシャツと、すっきりしたボトル・グリーンのスーツに着替えた。スーツのいいところは、みんながチームだっていう気分になれることだ。来る時は私服だけど、そういうスーツを着れば、とたんに僕らはビートルズ！――4匹のモンスターだよ。みんな同じものを着るのはいいことだと僕は思ってたな。それを着てるとひとつの集団の一員だって気持ちになれた。

会場が埋まっていくのをステージ裏から覗いてると、両脇から警官が入ってきて、1階も2階も通路沿いにぎっしり並んだ。そのあとで観客の入場が許されるんだ。それまで僕らが見慣れてた西洋の観客と比べると、すごく行儀よかったね。それでも楽しんではくれてるようだった。

僕らの前座におもしろい日本のグループが出てた。この当時は、日本人はまだロックン・ロールってものをよくわかってなかった。今じゃすっかり理解してるけどね。そのグループは"ハロー・ビートルズ！　ウェルカム・ビートルズ！"とかいう歌を歌ってた――ロックン・ロール的にはかなりダサいけど、すごく優しいことではあるよね。僕らのステージもすごくうまくいった。

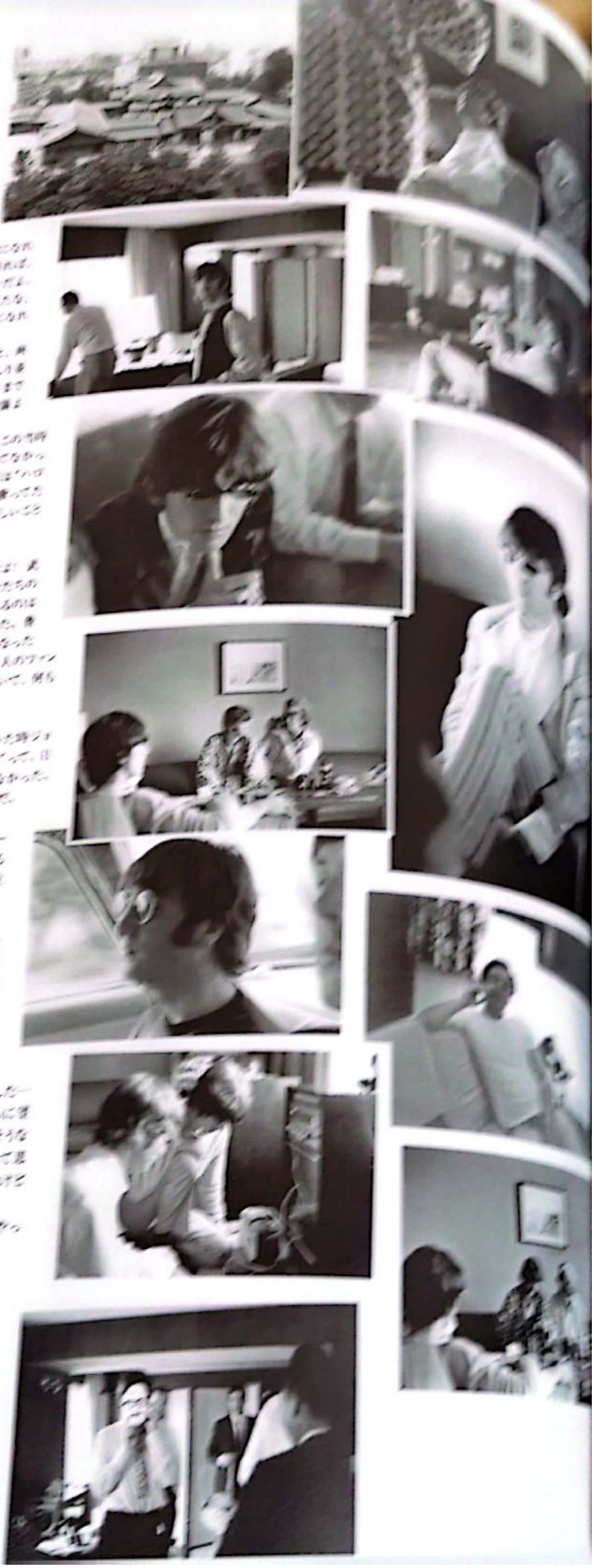
ニール・アスピノール　あのステージはちょっと変だったよ！　武道館は普段武術家が使うところで、彼らはあそこを自分たちの神聖な場所だと思ってたんだ。ロック・バンドがそこに入るのはこれが初めてのことで、それが彼らには気に入らなかった。脅迫状とか来てたから、それで警官が大勢出てくることになったんだ。日本人ってのはすごく統制がとれてるんだね。1万人のファンに対して警官3千人だよ。会場のいたるところに警察がいて、何も起こらないようにと見張ってた。

ジョージ・マーティン　何だか緊張していたね。ドイツにいた時ジョージに手紙が来たんだよ。"来月まで生かしてはおかない"って。日本に行ったらすごい厳重な警備で、僕らはどこへも行けなかった。日本人はそういう脅迫を、すごく深刻に受け止めていたんだ。

リンゴ　オーディエンスはすごくおとなしかった。あのステージの映像を見ると、どの列にも警官がいるのがわかるだろう。みんな僕らのプレイに夢中になってはいたんだけど、立ち上がってそれを表現することができなかったんだよ。

ニール・アスピノール　客席まで音が届くなんて、滅多になかったことだよ。大声で叫ぶ人もいなかった。あれは驚きだったね。それでメンバーは音が狂ってることにハッと気がついて、あわてて直さなきゃならなかった。2回目のステージはかなりよかった――その時は調子が戻ってたから――だけど初回の僕らのステージは、ちょっとしたショックだったね。

ジョージ　オーディエンスは静かだったけど、立ち上がりはした――というか、立ち上がろうとはしたね。でも会場いたるところに望遠レンズつきのカメラを持った警官がいて、立ち上がってステージに駆け寄りそうなやつがいるとすぐ写真に撮るんだ。観客はすごく規制を受けていて、僕らに対して思いどおりの反応を示すことは許されなかった。暖かい受け止め方ではあったけど、ちょっと独裁者的だね。日本って今もそうだけど。ホテルに戻るのは、来る時の手順をそっくり逆さまにしただけ。ステージをやって部屋に帰る。それで終わりさ。まるで軍事作戦みたいだったね。



CamScannerでスキャン

リンゴ　フィリピンなんて大嫌いだ。着いたら何千何万という若者と、何百何千という警官——それにちょっと危ない雰囲気だった。みんな銃を持ってて、ほんと何というか、暑くてカトリックで銃持っててスペインの異端審問みたいな態度の国だ。

ジョージ　着いたとたん、これはまずいなって感じがしたよ。おっかないゴリラみたいのがいてさ——小柄なんだけど——半袖シャツ着て、脅すような態度なんだ。

当時はファンがそこら中にいるから、空港で一般の乗客と同じように飛行機を降りるのは普段は避けていた。飛行機は空港の敷地内の一番奥に着陸して、そこで僕らは降りる。たいていニールと一緒に、"社交用バッグ"（僕らは小さなバッグに髭剃り道具を入れて——まあ、他のものも少し——持ち歩いていた）を持って車に乗り、税関を無視してコンサート会場へ行く。マル・エヴァンスとかブライアン・エプスタインとか、他のみんなが僕らのパスポート手続きやら何やらをやってくれていた。

だけどマニラに着いたら、こっちに向かって誰かが怒鳴ってるんだ。"そのバッグを置け！　この車に乗れ！"。あんなふうに威張り散らされたのは初めてだった。礼儀知らずだよ。どこでだって——アメリカでもスウェーデンでもドイツでも——ファンの騒動はあったにせよ、僕らがショービズ界で有名な人間だからってことで常に扱いは丁寧だった。ところがマニラでは、飛行機を降りた瞬間からすごく嫌な空気が漂っていて、ちょっと怖い気がしたね。

車に乗ると、その男が僕らと一緒に乗り込んできて、ニールはそのまま置いてきぼりになった。僕らのバッグは滑走路に置かれたままさ。僕は思ったね、"これで終わりだ——僕らは逮捕されるんだ"。

ニール・アスピノール　軍隊はいるし、ズボンに半袖シャツの何だか人相の悪い奴らもいるし。その全員が銃を持ってるんだ。膨らんでるからわかるんだよ。そいつらがビートルズの4人をつかまえてリムジンに押し込み、そのまま行ってしまった。彼らのブリーフ・ケースを持ち込むことも許されなかった。そのまま滑走路にほったらかし——あの小さいブリーフ・ケースにはマリファナが入ってたんだよ。僕はその場がごたごたしてる隙に、僕の乗るリムジンのトランクにそれを押し込んだ。それから言った。"ビートルズを連れてったところへ僕も連れてってくれ"。

ジョージ　僕らはその車でマニラ港へ連れて行かれてボートに乗せられ、湾内に停泊してたモーター付きヨットに運ばれた。そしてその中の一室に入れられたんだ。

ものすごく蒸し暑かった。モスキート・シティだからね。みんな汗びっしょりだった。それに怖かったよ。ニールやマルやブライアン・エプスタインと切り離されたのは、ビートルズという存在になってから初めてのことだった。彼らの誰ひとりとしてそばにいない。それどころか、僕らが入れられたキャビンのまわりは、銃を持った警官にずらりと取り囲まれてる。そんな状況だから、僕らすごく気がふさいで、ほんと暗くなった。こんなとこ来なきゃよかったと思ったよ。ここは飛ばすべきだったって。

CamScannerでスキャン

フィリピンはほんとに怖かった。
あれほど怖い目に遭ったことって
まず他にはないね。

着いたとたんに
ヤバいなって気がしたよ。

BEATLES TOUR INFORMATION

blank
who else?
tough

1966 Summer Tour Germany and Japan

JUNE 24	Munich, Circus Krone
JUNE 25	Essen, Grugahalle
JUNE 26	Hamburg, Ernst Merck Halle
JUNE 27	Journey to Tokyo
JUNE 30	Tokyo, Budo Kan Hall
JULY 1	Tokyo, Budo Kan Hall
JULY 2	Tokyo, Budo Kan Hall
JULY 3	Journey to Manila
JULY 4	Manila, Araneta Coliseum
JULY 5	Depart for London

torture
nearly fucking killed by the government

1966 American Tour

AUGUST 12	Chicago, International Amphitheatre
AUGUST 13	Detroit, Olympic Stadium
AUGUST 14	Cleveland, Municipal Stadium
AUGUST 15	Washington, Washington Stadium
AUGUST 16	Philadelphia, Philadelphia Stadium
AUGUST 17	Toronto, Maple Leaf Gardens
AUGUST 18	Boston, Suffolk Downs Racetrack
AUGUST 19	Memphis, Memphis Coliseum
AUGUST 20	Cincinnati, Crosley Field
AUGUST 21	St. Louis, Busch Stadium
AUGUST 23	New York, Shea Stadium
AUGUST 24	New York, Shea Stadium
AUGUST 25	Seattle, Seattle Coliseum
AUGUST 28	Los Angeles, Dodger Stadium
AUGUST 29	San Francisco, Candlestick Park
AUGUST 30	Depart for London

and its just another Beatle day in His book

after manila george said in London Press World "they should drop an H. Bomb on Manila" ... agreed...

ニール・アスピノール　僕は桟橋の突端まで連れて行かれた。車を降りて、"みんなはどこだ？"って訊くと、"あそこだ"って指差すんだ。その先を見たら、何マイルも先、湾の真ん中に、大きなボートが浮かんでる。民兵同士で対立があったか何かしたのかな。片方の派閥が彼らをボートに連れ出して、コンサートを主催する側じゃない人間に会わせようとしたとか。まったくもって奇妙だったね。どうして彼らが船に乗せられたのか、今もってよくわからないよ。

ジョージ　どうしてあのボートに連れて行かれたのか見当もつかない。いまだにわからないよ。1〜2時間経った頃、ブライアン・エプスタインがフィリピン人のプロモーターとあわてふためいてやって来た。すごい剣幕で怒鳴りまくってたよ。みんなで怒鳴り合ってるうちに、僕らはボートから降ろされ、車に乗せられてホテルのスウィートに送られた。
　翌朝はドアを叩く音で起こされた。外ですごい騒ぎになってるんだ。誰かが部屋に入ってきて言った。"何してる！　君らは宮殿にいるはずじゃないか"。"何の話だい？"って感じでね、"僕らはどこの宮殿へ行く予定もない"。——"君らは宮殿に行くことになってるんだ！　テレビをつけてみろ"。
　言われたとおりテレビをつけると、なんと宮殿からの生中継だ。長い大理石の廊下の両脇に、ずらっと人が並んでる。子どもたちは一番いい服着てさ。で、テレビのコメンテーターがしゃべってた。"まだ現れません。ビートルズはもう到着するはずですが"。
　僕らは座ったまま呆然としてた。信じられなかった。僕らは僕らの到着を待つ大統領官邸の様子を見ているしかなかった。

ポール　僕は朝ひとりで出かけて、"ウォール街"的な地域まで行ってみた。何枚も写真を撮ったのを覚えてるよ。だってその地域のすぐ隣が貧民街なんだもの。その"ウォール街"の目の前に、段ボールの家みたいなのが並んでるんだ。あそこまで対照的なのは見たことなかった。"ワオ、これはいい絵になる！"って僕はカメラを取り出した。それからその貧民街で帰りのみやげに何枚か絵を買って、それからランチにしようとホテルに戻った。
　その時間にはもうみんな起きていた。でホテルにいたら、まわりの人が言い出すんだよ。"もう大統領官邸に行かなきゃいけないはずだ！　約束を忘れたのか？"。僕らは、"何言ってるんだ、とんでもない"って。マニラの人たちはみんなああいうレース付きの白いシャツを着てるらしいけど、そんな姿のプロモーターたちは、僕らにはちょっと陰険な感じに見えたね。何人かは銃を持ってたし、ちょっとばかりやりにくかった。
　国によってそれぞれやり方が違うことに僕らは慣れていた。彼らがドアをどんどん叩き始めて、"出てこい！　出てくるんだ！"って怒鳴っても、"ねえ、ドアに鍵かけちゃおうぜ"って言って。僕らそういうのには慣れてたからね。"今日はオフなんだから"って感じで。
　あとになって知ったんだけど、イメルダ・マルコス（あの靴とブラのコレクションで有名な）が僕らを待っていたらしいんだ。誰かから招待を受けて、僕らはその申し出をお断りしたんだよ（上品にしたつもりだったけど）。でもテレビのアナウンサー——フィリピンのリチャード・ディンブルビー（英BBCアナウンサー）みたいな人だよ——その人がこう言ってるんだ、"ファースト・レディがお待ちかねです。まもなくあの有名なポップ・グループがここに姿を見せるはずです"。それを聞いて僕ら、"ええっ——誰も断ってないのか！"って。プロモーターは"さあ、もう行くんだ。リムジンで行けばいいんだから"ってしつこく言ってる。でも僕らは"行けないよ"って言い張った。そのままあとに引かず、僕らはその日ずっとホテルにいた。テレビを消して、オフ日を過ごすことにしたのさ。

リンゴ　僕自身は、マダム・マルコスが僕らをディナーに招待してたなんてこと、まったく知らなかった。だけどとにかく僕らの側は"ノー"と言って、ブライアン・エプスタインは彼女に"ノー"と伝えたわけなんだ。ジョンと僕は同じ部屋で、朝起きるとフロントに電話して卵とベーコン（だかなんだか、とにかくその頃僕らが朝食べてたもの）を注文した。それと、いろんな新聞を全部持ってくるようにって。僕ら自分のことを読むのが好きだったからね。

それからしばらくベッドに入ったまま、しゃべったりしてのんびり過ごしていた。ずいぶん時間が経ったから、もう一度下に電話入れたんだ。"すみません、朝食持ってきてくれる？"。それでもいっこうに来てくれないんで、テレビでもつけるかって。そしたら恐ろしい番組をやってたんだよ。マダム・マルコスが叫んでるんだ、"私は侮辱された！"って。カメラマンは空っぽの皿とか小っちゃい子の顔とかをアップにして映してた。子どもはみんな泣いてるんだ、ビートルズが来てくれなかったって。だけど御招待は、とっても丁寧にお断りしたはずなんだよ。

ニール・アスピノール　僕が思うに、彼らは招待はされたけど、ブライアンがテレックスか電報で"ノー"と返事を出したはずだ——ビートルズは相手が誰であっても、その種の申し出はお受けしていません、とね。彼らは政治には関わらなかったし、宮殿なんかには絶対行かなかった。だけどそれが、そんな返事など来ていないかのように無視されてしまったんだ。
　覚えてるよ、朝起きて朝食を食べてたら、テレビでニュースをやってたんだ。イメルダ・マルコスが大勢の子どもたちのためにパーティを開き、そこにビートルズが出席するって言ってる。"さあ、あと5分ほどで彼らがここにやって来ます"。みんな顔を見合わせて、"何の話だ？"って言ってたよ。もちろん彼らが現れるはずがないさ。
　すべてが終わり、彼らがついに姿を見せなかったということで、みんなカンカンになっていた。どういうことなんだって僕らはブライアンに訊いたのさ。すると彼は、"僕がキャンセルした。出席する予定などなかった"って。
　フィリピンはほんと最悪だったね。僕は3日間ものを食べられなかった。とんでもない食事を持ってくるんだから。朝食のコーンフレークですら、ミルクをかけるとかたまりが浮いてくる。ミルクが腐ってるんだよ。一度夕食を注文したら、すごい大きなトレイに載せられて出てきた。丸い蓋がついててね、その蓋を巻き上げると——"うぇぇ——！"——匂いだけで、食べられないってわかった。

ポールと僕はここでもこっそり脱け出した。すごく勇敢だったのか、でなきゃすごく愚かだったに違いないね。車で何マイルも走って——最初の5分はマンハッタンみたいだったけど、それからずっとすさまじい貧民街が続いた——そのうち砂丘に出た。何枚か絵を買って、砂丘に腰を降ろして一服して、それからホテルに戻ったらみんな大騒ぎしてる（特に警備員が）。"どこへ行ってたんだ？　どうやって出たんだ？"
　フィリピンでのコンサートは失敗だったってみんなずっと言ってたけど、ビートルズは2回のギグで合計10万人を動員したんだ（マルコス騒ぎのあとで）。ファンはみんなすごく喜んでた。ほんとに楽しんでたよ。相変わらずゴロつきはいて、いろいろ仕切ってたけど（軍とは関係ない）、僕らよりもファンを仕切ってた感じだね。車は必ず違う道に入っていくし、楽屋はすごく汚なかった。

CamScannerでスキャン

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

突如として何千人が僕らを攻撃してきた。空港に向かおうとしてる時も、数えきれないほど殴られたりしてね。誰も乗せてくれないんだ。車も調達できない。何も使わせてくれない。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ジョージ　[illegible]

そういう奴らが何人も僕らの方へ向かってきて、"あっちへ行け!"って叫ぶんだ。それで僕らに追いやられると、今度は別の奴が反対側へ出てきて、"あっちへ行け!"って[illegible]。僕は奴ら全員に目を配りながら、ぶつからないように気を付けていった。[illegible]

[illegible]　空港に行くまでずっと、僕らを嫌いな人たちが声をそろえて罵ってた——そ

[illegible]

ポール　すごく怖かった。でも攻撃はほとんど僕らにそれは助かったんだけど、僕らのまわりの人間に向けられてた。[illegible]

ちょっと怖かったとは思ったけど、僕らの責任じゃないと思った。今は当時のフィリピンの体制のこともわかってるから、僕らの出演しないっていう返事を彼らの方で無視したんだね。"来なくてもいい——その代わり思い知らせてやる"ってさ。

空港の前に記者のグループがいた。殴り合いが始まるし、ガラス窓の向こうではファンの連中が騒いでるしで、僕らはその記者の方へ逃げたんだ（なかなかいいショットだよね——前線にいる記者とビートルズ）。僕らにはいろんな共通点があった。悪い意味だし、僕らが同じタイプの少数派だ。僕らは彼らたちの後ろにまわった。"この人たちをどかさないと僕らには手を出せないぞ。この人たちを押しのけられるかい"って感じ。

記者たちは別に僕らを守ってくれたわけじゃない。ちょっと困った顔で立っていただけさ。彼らたちが動くたび、僕らはその後ろにまわった。

ニール・アスピノール　マル・エヴァンズと僕はともに押されるわ小突かれるわで殴られるわ、ほんと怖かったよ。誰もひどい怪我はしなかったはずだけど、それはこちらがやり返さなかったからだ。小突かれてもやり返さないほうがいいってわかってた。

もしやり返してたら、大変なことになっていたかもしれない。ほんと、ものすごく怖かったよ。あんなことはそれまでなかった——その後も一度もないね。

ジョージ　ようやくフライトのアナウンスがあって、僕らは飛行機に乗った——飛行機に乗れたってだけで、すばらしい気分だったね。ホッとしたよ。ところが飛行機が飛ばないんだ。

やがてアナウンスが流れた。"ミスター・エプスタイン、ミスター・エヴァンス、ミスター・バーロウ（トニー・バーロウ、当時のプレス・エージェント）……飛行機をお降りください"。3人とも降ろされてしまった。みんなすごく不安げな顔をしていたよ。

マルは僕の横を抜けていく時に泣きだして、通路で僕の方を向くと"リルに愛してると言ってくれ"（リルはマルの奥さんだ）と言った。これで終わりだと思ったんだよ。飛行機は飛び立ち、彼はマニラに足止めされてしまう。全体の空気が、"いったい何だっていうんだ、これからどうなるんだよ!"って感じだったね。

ポール　機内に入ると、みんな座席にキスしたよ。聖域にたどりついたような気分だった。僕らがいたのは完全なる異国の地で、ここではあらゆるルールが変わり、みんなが銃を持っている。僕らはそういうのに血をたぎらせる方じゃないんだよね。

するとそこへアナウンスが聞こえた。トニー・バーロウは再びライオンの巣へ戻らなくてはならなくなり、そして目の飛び出るようなマニラ式出国税を払わされた。あんなの、適当にでっちあげただけだと思うよ。不思議なことに、それがこのツアーで稼いだ額と同じだったんだよね。そういうことかって感じ。

ジョージ　待ってる時間が何時間にも思えたよ。実際には30分か1時間くらいだったんだろうけど、蒸し暑くてね。ついにみんなが戻ってくると扉が閉められ、離陸の許可が出た。僕らがコンサートで稼いだ金を奴らは全部持っていった。それでおしまい。ここを出られるだけでほっとしたよ。だけどあそこの人間にはすごい憎しみを覚えたね。

ポール　イギリスに戻った時、ある記者がジョージに"楽しかったですか?"って訊いたんだ。すると彼はこう答えた。"もし僕が原子爆弾を持ってたら、あそこの上から落としてやるよ"。

散々なツアーだったけど、よかったこともある。結局（マルコスとイメルダが国民に対してどんなことをしていたか、すべて彼らが暴利を得るためだったらしいとわかってみれば）僕らのしたことは正しかったのさ。すごい! マルコスにたてついた人間は、きっと

僕らしかいないよ。だけど僕らのしていたことの政治的な意味なんて、何年も経つまでわからなかったけどね。

リンゴ　僕ら牢屋に入れられるんだろうって思ってた。当時あの国は民主主義じゃなくて独裁制だったから。独裁政治のもとでは、どんな人だろうと権利は奪われてしまう。だから僕らは飛行機を降りる気がなかった。僕らのまわりの人間はまた乗せてもらえたけどね。僕がマニラに行ったのは、あれが最初で最後だ。

ニール・アスピノール　あれでみんな、ツアーに嫌気がさしたんだよ。あれが棺に打ち込まれた最後の釘の1本だったかもしれないね。あれでツアーはお釈迦になったんだ。

ジョージ・マーティン　あの国を出ると彼らは言った。"もう二度とやらない。これっきりだ"。するとブライアンが、"悪いがみんな、シェア・スタジアムで何かやらないといけないんだ。キャンセルすると百万ドル失うことになる……"。おっと――それでシェア・スタジアムでコンサートということになったんだ。

ジョン

僕の乗った飛行機がフィリピンを通ることはない。

上空を飛ぶだけでもごめんだね。

とにかく、もう二度と狂った場所へは行きたくない。

1966年

Apple

21st October, 1971.

J. Lennon, Esq.,
c/o ABKCO Industries Inc.,
1700 Broadway,
NEW YORK, N.Y. 10019.

Dear John,

You probably remember the chaos which surrounded your visit to Manila in the Philippines in 1966 but I am wondering whether you can remember one specific incident that was supposed to have occurred.

Apparently your plane was grounded by the authorities until certain tax had been paid on the income of the tour. I understand that in fact a representative of the Manila promoter boarded the plane and Brian actually handed to him in cash $17,000 for the payment of the tax. It is this incident that I am wondering whether you remember because since then efforts have been made on your behalf to recover the money and they have now reached the stage where the lawyers in the Philippines are trying to produce evidence of actual payment.

Can you recall Brian handing over any cash on the plane ?

For the sake of convenience, could you please write either yes or no on this letter and return it to me and we can discuss it in more detail when you return.

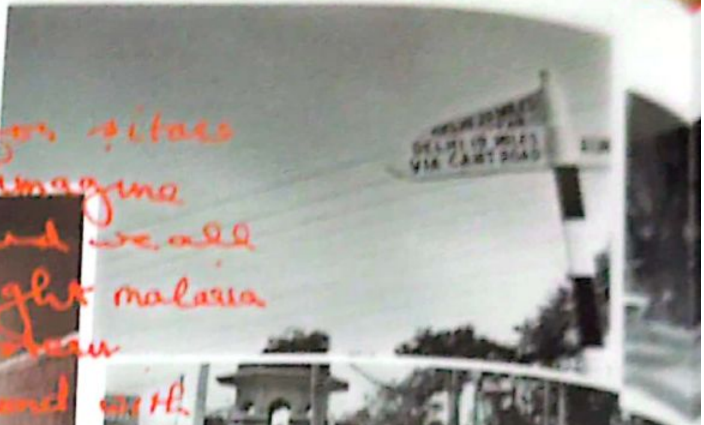
Yours sincerely,

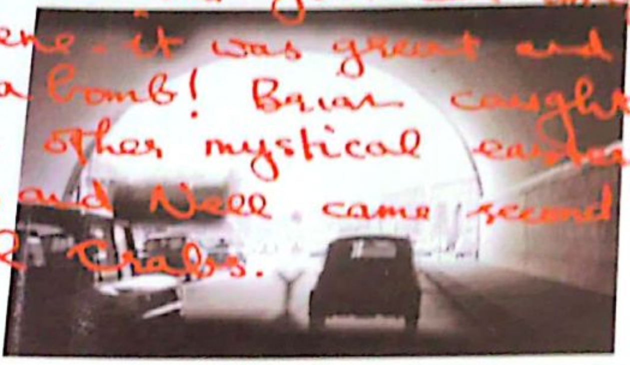
Peter

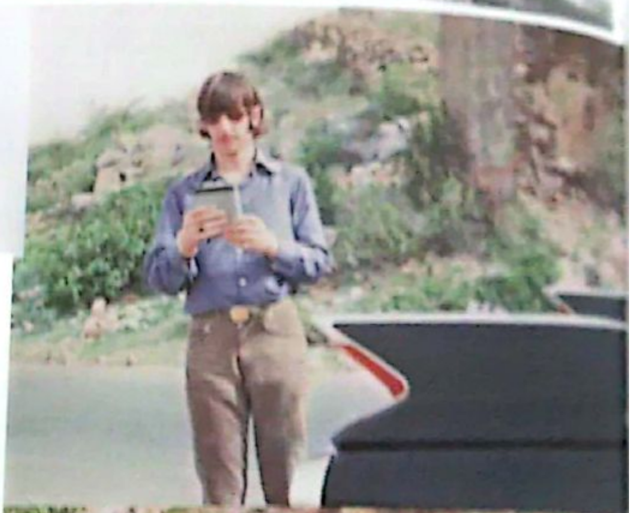
I think Brian gave them money. anyway they NEVER paid us at all for 'insulting the 1st family.' they stopped the 'plane for other reasons than tax! they wanted to FRIGHTEN US!

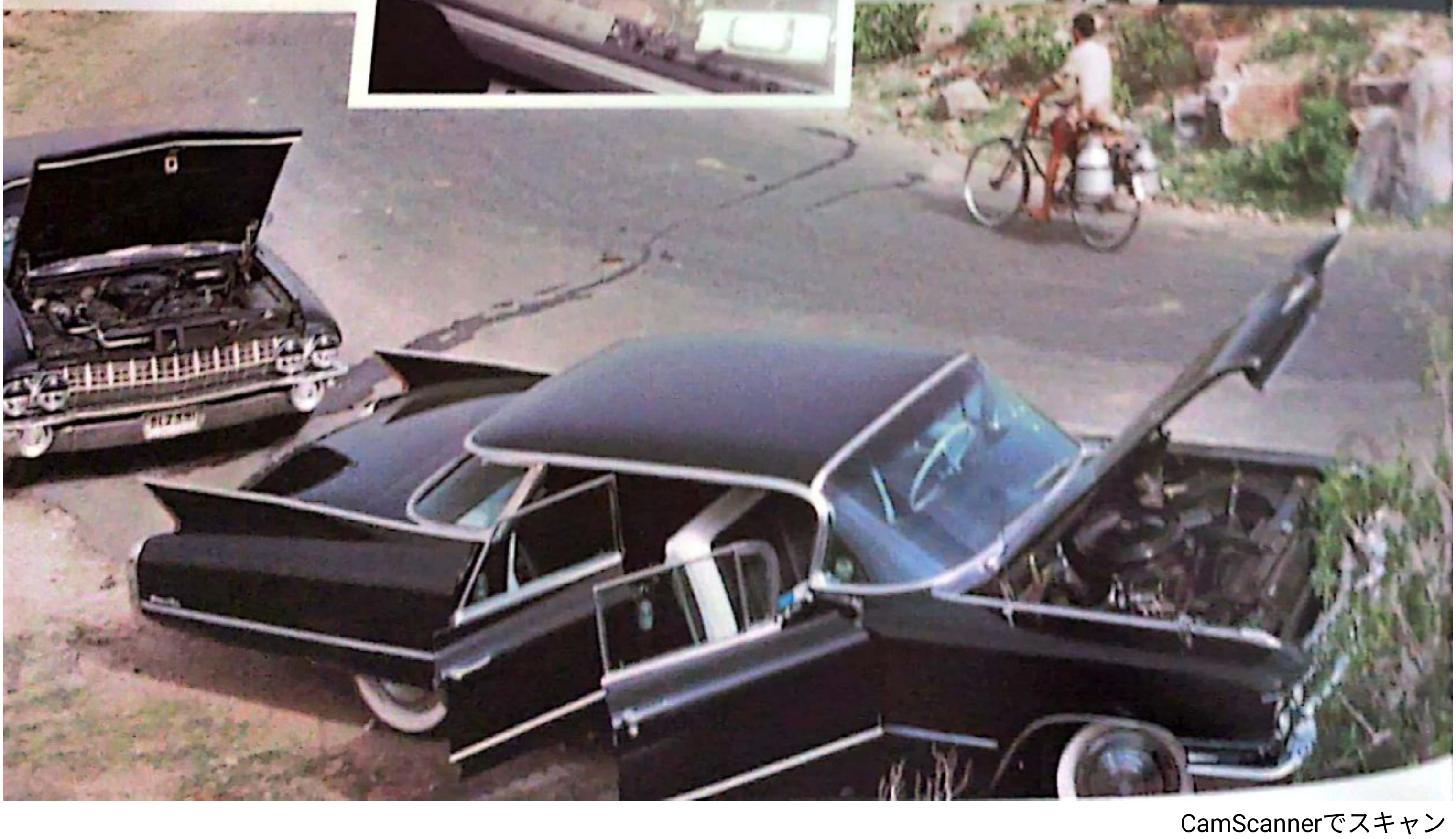
CamScannerでスキャン

We popped of to India for sitars hookers etc.. and you can imagine that scene - it was great and we all spent a bomb! Brian caught malaria or some other mystical eastern disease, and Nell came second with Oriental Crabs.









Dear Paul,

Welcome home. Hope you had a marvelous time.

Sorry to bother you so quickly, but could you please see Maureen Cleeve on Monday? She would like to invite you to lubbh. She has done all the boys, and Monday is her latest deadline.

Could you leave a message so that, when I phone monday morning, I have your answer.

ジョージ　このツアーの日程が決まる前から、僕はフィリピンからロンドンに帰る途中でインドに寄ることにしていた。インドというところを見てみたかったし、いいシタールも買いたかったし。ひとりきりでインドに行くのは嫌だったから、一緒に来ないかってニールを誘ってね。それで彼も行くというんで、デリーに降りる便をふたり分とっておいたんだ。

ロンドンからドイツ、日本とまわってフィリピンに行く間に、いつの間にか他のみんなも、"僕も行こうかな"って言い出した。でもデリーまで来ると、フィリピンで嫌な経験をしたあとだから、みんな迷い始めた。もう外国はたくさんって気になってたのさ──みんなイギリスに帰りたくなってた。

僕自身もちょっとそういう気分になってたんだ。帰った方がいいかもなって。だけどもうデリーまで来てるんだし、最初からここで降りようと決めていたんだからと思ってね。"きっとここなら大丈夫だ。とにかくインドじゃビートルズは知られていないだろう。この素敵な太古の国にもぐりこんで、ちょっとだけ静かで平和な時間をすごそうじゃないか"。

他のみんなは、"じゃあまた──僕らはまっすぐ帰るよ"って。ところがスチュワーデスがやって来て、"すみませんが降りてください。みなさんのロンドン行きの席は売ってしまいました"だって。

それで全員その飛行機を降ろされた。もう夜だった。僕らは立ったまま荷物が出てくるのを待ってたんだけど、そこで最大の失望を感じた。ビートルズがいかに有名になっているかがわかったんだ──鉄条網のフェンスの向こうの夜の闇に、何人もの黒い顔があって、"ビートルズ! ビートルズ!"って叫びながらくっついてくる。

僕らが車に乗ると、みんな小さなスクーターで追いかけてきた。ターバン巻いたシーク教徒が"ビートルズだ! ビートルズだ!"。僕はつくづく思ったよ、"どんな狐にも穴があり、鳥には巣があるのに、ビートルズが体を休める場所はどこにもないんだ"って。

デリーというのはすごく不思議な感じのする都市だった。あそこへ行った人はほとんどそういう気分を味わっていると思う。イギリス人が開発したニューデリーの一画は、意外かもしれないけど狭苦しくはないんだ。道路は広いし、中央分離帯もロータリーも作られている。

驚いたのは、恐ろしくたくさんの人がいたことだよ。どこのロータリーでも、日陰には何百、何千という人がいて、何人も集まって座り込んでる。パイプをくわえた老人もいるよ。どこでも人がいっぱいなんだ。最初は"うわ! 何があったんだ?"って思った。スーパーボウルが開かれてるか、大惨事でも起きたかってくらいに、すごい数の人間がうろうろしてる。そのうち、これが普通なんだってわかってくる──、ここにはたくさん人がいるってだけなんだよ。

翌日シタールを買った。頼んで持ってきてもらったんだ──ここでも簡単には外へ出られなかったからね。リッキー・ラムという男からギターを1本買った。彼の店は今でもデリーにあるよ。

車でデリーの郊外へ出てみた。あれは目を見張らされる経験だった。1950年代末の古い巨大なキャディラックを連ねて、小さな村へ行ったのさ。みんなニコンのカメラを持ってね。貧困というものがほんとに身にしみて感じられたのはあれが初めてだった。蠅をたからせた小さな子どもたちが寄ってきて、金をせがむんだ。"バクシー! バクシー!(施しを)"って。僕らの持ってるカメラは、その村の全員が一生かかって稼いでも買えない。キャディラックと貧困が一緒にある光景というのは、ものすごく奇妙な感覚だった。

リンゴ　僕らがインドに行ったのはあれが初めてで、すごくおもしろかった。だけど英国航空の奴らに連れられてラクダの水汲みを見に行った日は最悪だったね。水場にラクダが円形に並んでポンプを動かすんだよ。デリーでは英国航空の人間はすぐわかる。日陰で100度以上あるような場所でもネクタイをはずさないんだから。そのうちのひとりが、哀れなラクダに飛び乗ったらおもしろいだろうと思ったんだね。そのラクダ、生まれてからずっと、そうやって引き具をつけて水を汲むことしかしてなかっただろうにさ。とんでもないよ。だから、あの男にはちょっと腹が立った。

でもそれから買い物に出かけてね、あの時店を見て歩いたのは、デリーでの最高の思い出だろうな。大きな象牙の彫り物を勧められたけど、あまりにも値段が張りすぎると思った──大きなチェスの駒で、今ならきっとひと財産になるようなアンティークだよ。だけど買わなくてよかった。その頃から僕らは、象牙は買っちゃいけないと思ってたのさ。

ジョン　キリスト教はなくなるよ。いつか衰えていって消えるだろう。そんなことあれこれ論じる必要もない。僕の言ってることは正しいし、いつか正しいことが証明されるはずだ。今の僕らはキリストより人気がある。ロックン・ロールとキリスト教と、どっちが先にすたれるかはわからないけど。キリストそのものには問題なかった。でも彼の弟子たちが頭の悪い凡人だったんだよ。僕に言わせれば、彼らがキリスト教をねじ曲げて堕落させたんだ。1966年

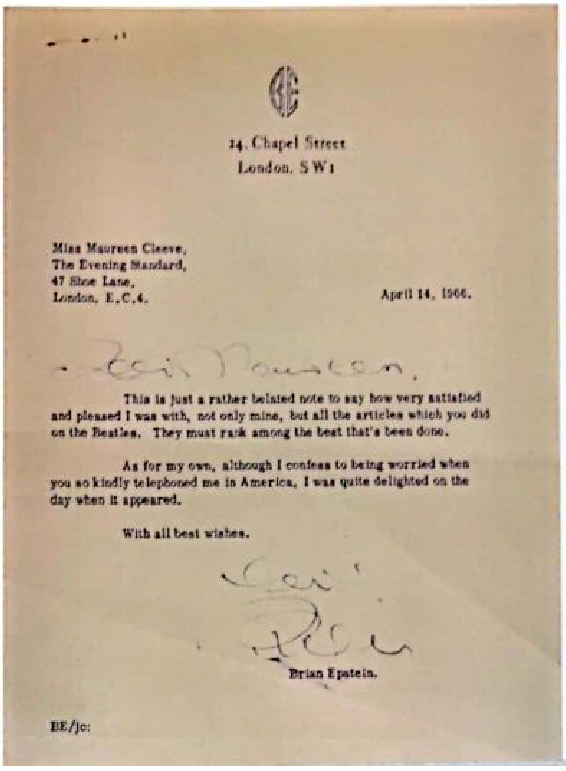
ジョージ　どうしてこういうことをすべてさらけ出しちゃいけないんだ? どうして神に対する冒涜だとかそういうことになるんだ? キリスト教がみんなの言うとおりの優れたものなら、ちょっとくらいの議論でビクつくことはないはずだ。1966年1月

ポール　ジョンはロンドン・イブニング・スタンダード紙のモーリーン・クリーブをよく知ってたんだよ。僕らは水準よりちょっと上のジャーナリストが好きだった。そういう人とならちゃんと話ができるからね。僕らは間抜けなロックン・ロール・スターじゃないつもりでいた。ロック以外のことにも興味を持っていたし、若者の代表という見方もされていた。それでモーリーン・クリーブの記事が宗教に触れた時、ジョンはみんながはっきり感じてることを口にしたのさ。英国教会はもう何年も前から衰退しつつあるって。英国教会側だって、信徒がいないって以前から不平を言ってたじゃないか。

モーリーンはおもしろくて話しやすい相手だ。彼女のインタビューでは僕ら全員が突っ込んだ話をしてる。ジョンのインタビューの際、たまたま宗教の話になったのさ。僕らは信心深くはないけど、宗教に興味は持ってるからね。

僕らのコンサートには何人もカトリック司祭が来ていたし、楽屋でも僕らはいろいろ議論をしてた。裕福な教会と世界の貧困を比較してみたりね。"ゴスペルを取り入れるべきだ──そうすれば人が集まる"とかって話をしたり。"もっと活気が必要だよ。使い古しの聖歌ばかり歌ってるんじゃなくてさ。ああいうのは誰でも聞いたことがあるから、みんなもう楽しめなくなってるんだ"。

僕らは教会がもっとしっかりするべきだって強く感じてた。実際僕らはすごく教会の側に立ってたんだよ。ジョンが言おうとしてたのは、何も悪魔的な、反宗教的な見方なんかじゃない。記事全体を読めば、彼が言わんとしてることは誰もが思ってることと同じだってわかるはずだよ。"教会はどうしちゃったんだろう。今はイエス・キリストよりビートルズの方がビッグだ。今の教会はキリストの教えを広めようとする努力が足りない。もっと活動するべきだ"ってことさ。でもあまりに気軽に話しちゃったのは不幸な間違いだった。モーリーンは僕らのよく知ってる相手だったし、彼女なら正直に思ったままを話せたからね。だけどそれが過ちだったんだろうか? 僕にはわからない。短絡的に考えればそうだろうね。長い目で見れば、そうじゃないかもしれないよ。


14, Chapel Street
London, S.W.1

Miss Maureen Cleeve,
The Evening Standard,
47 Shoe Lane,
London, E.C.4.

April 14, 1966.

Dear Maureen,

This is just a rather belated note to say how very satisfied and pleased I was with, not only mine, but all the articles which you did on the Beatles. They must rank among the best that's been done.

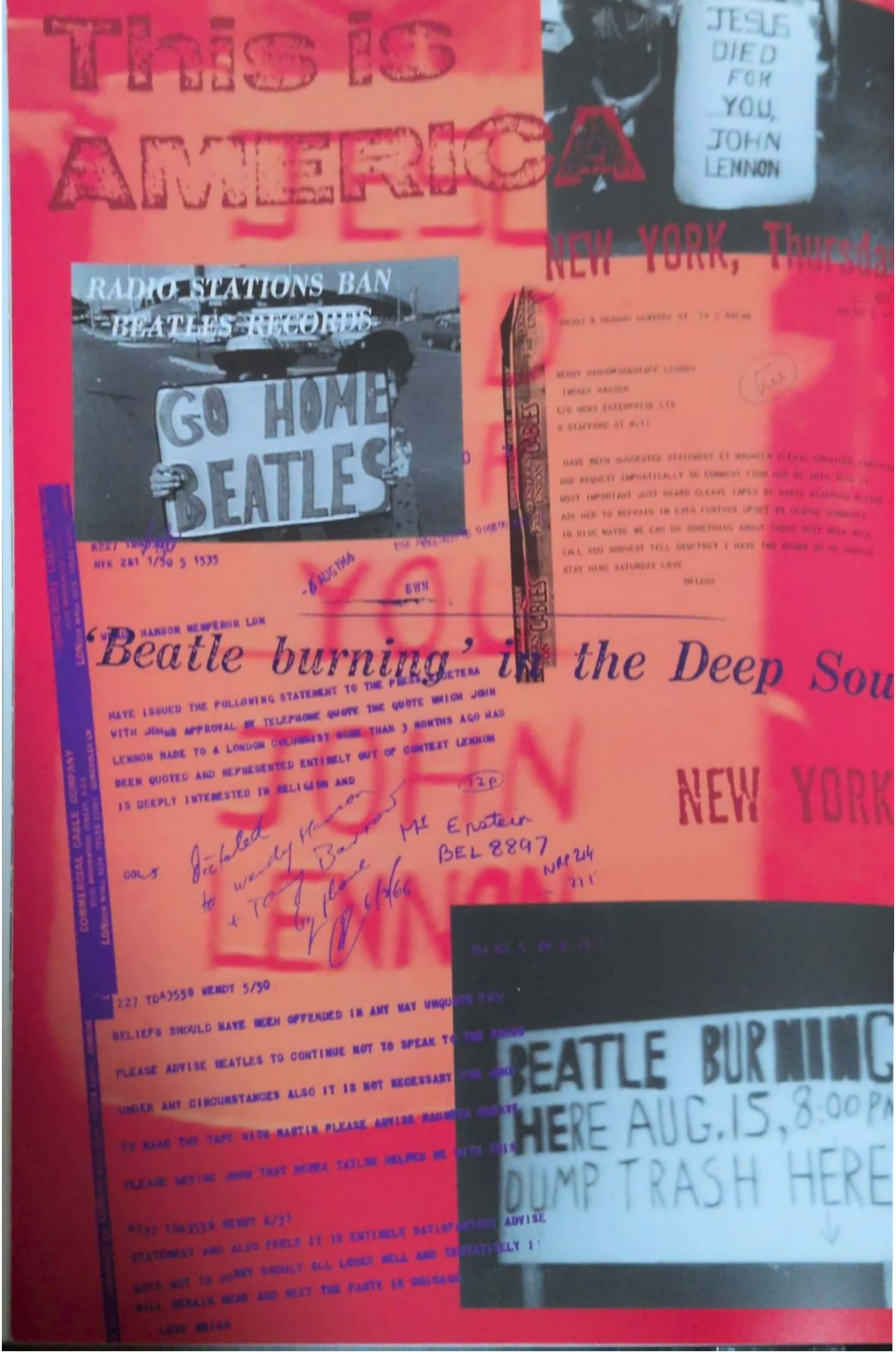
As for my own, although I confess to being worried when you so kindly telephoned me in America, I was quite delighted on the day when it appeared.

With all best wishes.

Brian Epstein.

BE/jc:

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

ジョン　悪い知らせとなれば使者は撃ち殺され、実際の言葉は聞いてもらえない。キリスト教でもイスラム教でも仏教でも儒教でも、マルクス主義でも毛沢東主義でも、どんな世界でも同じだ。みんないつでもその人間ばかり気にして、ほんとに言ったことなんて決して聞いちゃいないんだ。1969年

デレク・テイラー　モーリン・クリーヴの記事が「ロンドン・イヴニング・スタンダード」に出たのは3月の話だ。それがアメリカ・ツアー間近の8月になって、アメリカの雑誌に転載されたんだよ。ビートルズはキリストよりビッグだっていうジョンの発言が、『デイトブック』というティーン雑誌の大見出しになった。その頃ブライアンは、ノース・ウェールズで元気を取り戻そうとしてるところでね。何よりマニラがきつかったんだよ――実際あれで彼は病気になったんだから――その静養先で知らせを受けたわけさ。ジョンのコメントでアメリカ人がカンカンになっているってね。2ページにわたる記事のうち、ほんの1行にすぎないというのに。

ジョージ・マーティン　あの言葉がアメリカで取り上げられると、あちこちのラジオ局で話題になり、どんどん膨らまされていった。そしてビートルズに嵐のような抗議が押し寄せたわけだ。"何様のつもりだ、自分たちをキリストと比べるなんて？"とね。レコードは公共の場で焼かれ、ラジオ局からも締め出された。とてつもない状況にまで発展してしまったから、ブライアンはジョンを説き伏せ、記者会見で謝罪することにしたんだよ。

ジョージ　あの"キリストよりビッグだ"発言は、アメリカで広まったような意味で言われたんじゃない。彼らは1ヵ所だけ取り出して、前後関係はまるでおかまいなしに膨らませてしまったのさ。だけどあの反動はすごかった。特にバイブル・ベルトではね。南部じゃ鬼の首を取ったような大騒ぎさ。あのディスク・ジョッキー、あんな騒ぎを引き起こした張本人が映ってる映像があるよ、"さあ、ビートルズのゴミを持ってきてくれ、そんなものは捨てよう！ アメリカ中にゴミ置き場を作って、みんなで燃やすんだ"だとさ。その上、クー・クラックス・クラン(KKK)まで出てきた。"我々が彼らを殺す"って。

ニール・アスピノール　アメリカ人があの発言に腹を立てているんで、ブライアンはジョンに声明文を録音させることにした。ほんとに言おうとしたことを説明し、こんな騒ぎを引き起こしたことを後悔しているって。ジョージ・マーティンのためにスタジオを取ってあったんだけど、予定は変更になった。

ブライアンはツアー前にアメリカへ行って謝罪し、コンサートをキャンセルしたければかまわないと記者会見で言ったんだ。どこのプロモーターも手を挙げなかったよ。

ブライアン・エプスタインの声明　3ヵ月以上前、ジョン・レノンがロンドンのコラムニストに語ったことが、前後関係をまったく無視した形で引用され、誤解を招いています。レノンは宗教に深い興味を持つ人間であり、この取材の時も真剣に話をしていました。相手のモーリーン・クリーヴはビートルズの友人であり、『ロンドン・イヴニング・スタンダード』紙の記者でもあります。

彼が実際に述べたこと、そして彼の真意とは、この50年間でイギリスの教会が勢力をくし、それによってキリストの力も失墜してしまった、その現状に驚いているということす。ビートルズは有名だと吹聴する気などありませんでした。彼はただ、一部の若い代に対しては、ビートルズの方が直接的な影響力を持つように思える、それを指摘しうとしたのです。

ゴ　アメリカじゃひどい騒ぎになったね。まったくの勘違いだよ。僕らもあの記事をだけど、ただ読みすごしただけ。あれは神への冒涜でも何でもない――ひとつの方だよ。世界的に見れば、やっぱり教会の方が勝ってただろうさ。僕らを見に来より、教会に行く人の方が多いんだから。

けど言ってることは的を得ていたんだよ。僕らは馬鹿な若造で、時にはくだらない言ったけど、あんな騒ぎを引き起こすつもりはなかった。アメリカであれほど大問なったのは、誰かがあの1行だけを取り出して、月まで飛んでいきそうなほどかけ離話に仕立てたからさ。

イギリスでは誰ひとり、まったく気にしなかった。ああ、馬鹿なこと言ってる奴―誰だこいつ？ってなもんさ。ところがこっちじゃ、とたんにどっかの頭のイカれクランの頭巾かぶって、火のついた十字架持って駆けまわり始める。1974年

ノ　すごい面倒なことになってたけど、それでも僕らはアメリカに行き、そこで記を開いて、ジョンは謝罪した。あれだけのカメラと記者連中が並ぶプレッシャー彼は自分の引き起こしたことの後始末をつけなきゃいけないって重圧を感じな罪というか説明をしたわけだよ。彼はそれを無事やり遂げ、それで僕らも決め"予定どおりギグをやろう"って。

リンゴ

僕ら全員が大変な目にあった。
ほんとに恐ろしい時期だったよ。
ジョンが謝罪しなきゃ
ならなくなったのは、
あの発言のせいじゃない。
僕らみんなの命を守るためさ。
ほんとに半端じゃない脅迫が、
数え切れないほど舞い込んで――
彼だけじゃない、
バンドのメンバー全員にだよ。
誰にだって、時には帽子とって、
"エクスキューズ・ミー"って
言うしかない場合もあるだろ。

"You had a serious and long talk about religion (in which you are very interested) and the quote came out of the fact that you were astonished and surprised that Christianity in the last 50 years in this country has gone off in its appeal. When you said the Beatles are more popular than Jesus you were not trying to upset anyone, but merely suggesting that your appeal is more immediate." He felt you shouldn't mention the Disciples being "thick" as that would cause more offence. Also that you could conlude with "Profound and sincere apologies to Americans and to all people throughout the world who may have misinterpreted this quote, which was taken out of context."

George Martin has said he will do the tape with you and has booked Number 3 Studio at Abbey Road for 2.30PM tomorrow (as your BBC thing at Paul's is for 4PM).

Brian wanted to discuss this with you. If he doesn't call you and you want to reach him, (remembering NY is 5 hours BEHIND us) he's at the Waldorf TOWERS which is EL 5-3000. Our office there is 212-563-6767. I'll be home (HYDe Pk 6440) til around 7.45 tonight....anyway will see you at Abbey Road tomorrow.

ジョン　僕は喋りたくなかった。喋れば殺されると思ったからね。こっちじゃ何でも深刻に考えすぎなんだ。つまりさ、撃ち殺したあとで初めて、そこまでするほどのことじゃなかったって気づくんだよ。だから僕は行きたくなかった。だけどブライアンとポール、それに他のメンバーも、行こうってせっつくもんだから。僕は死にそうなほど怖かった。記者会見の映像をいくつか見たよ、そこで僕は言ってるわけさ。"いや僕がほんとに言いたかったのは、僕らがキリストよりビッグだってことがいいとか悪いとかじゃない。僕はただ、今の若者が追いかけてるのはキリストではなく僕らだという事実を言っただけだ"なんてさ。そういう偽善を並べながら――僕はおびえてた。ほんとに怖かったんだ。1974年

喋った当人すら、あの記事そのものにたいした意味はないだろうと思ってた。そもそも中身なんか忘れてたからね。それだけ取るに足らないことだったんだよ――それきり忘れてた。あの記事を全部読み直さなきゃならなかったくらいだ。自分の意思に反するようなことを喋ってないか、確かめるためにさ。

僕らはキリストより人気がある、そう僕は言った。単なる事実だよ。僕はキリストもブッダも正しかったと思ってる。ああいう人たちはみんな正しいと思う。彼らはみんな、同じことを言ってるんだ――僕はキリストが実際に語った言葉を信じている――愛とか善とかについて彼が語った、根本的なことだよ――彼が言ったと伝えられてることじゃない。キリストの方が人気がある、それがすなわちキリストの方が権力があるって意味だとすれば、僕はそんなものいらない。それならみんながあとをくっついてくる方がましだ、僕らの真似したって、死ぬまで歌って踊るだけかもしれないけど。もしもみんながキリスト――他のどの神様でもいいけど――そういう人たちが言ったことにもっと関心を持てばさ、ほんとにそうしていれば、僕らはみんな神の国に行けるはずだよ。1966年

CamScannerでスキャン

リンゴ　ジョンは謝りたくなかったんだよ。だって彼が言ったことは、みんなが言ってるようなこととは違うんだからさ。だけど僕らのまわりでどんどん騒ぎが大きくなっていって、ブライアンは何か言ってくれって彼に頼み続けた。それで結局ジョンも、出て行って何か話さなきゃマズいらしいって思ったのさ。

ジョン　僕は教会へ行く必要を感じない。教会は大事な場所だと思うよ。信仰を持つ人たちによって、長い年月のうちに神聖さが加えられてきた場所だから。だけど教会やキリストの名を語って、ひどいこともたくさん行なわれてきたと思うんだ。だから僕は教会を避けて、かつてドノバンが言ったように、"1日1回、自分の聖堂の中の、自分の教会に行く"ことにしてる。教会が必要な人は行くべきだと思うよ。でも教会が自分の頭の中にあるとわかってる人は、その聖堂を訪ねればいいんだ。そこが源なんだから。

僕らはみんな神なんだよ。キリストは"神の王国は汝の中にある"と言った。インド人もそう言ってるし、禅宗でもそう言ってる。ひとりひとりが神なんだ。僕は数ある神のひとりじゃないし、唯一神キリストでもない。でも僕らみんなが神なんだ。誰でも神の可能性を持っているんだ——そして悪魔の可能性もね。僕らはすべてを自分たちの中に持っていて、神の王国は天にあると同時に僕らの中にもある。しっかり見ようとすれば見えてくるはずなんだ。1966年

ポール　全員で話し合った。僕らにとっては別に大問題でも何でもないけど、これだけ話が大きくなってしまうと無視するわけにもいからね。あんなにピリピリしてるジョンは初めて見た。彼は起きたことの重大さに気づいたんだ。だから彼も言うしかなかった。"僕が言おうとしたのは、そんなことじゃない。実際には教会を支持しているんだから……"——みんなそれを答えとして受け入れてくれた。ただバイブル・ベルトだけは別だった。

ジョン　もし"テレビはキリストより人気がある"と言っていたら、何も言われずにすんだかもしれない。余計なことを言ってしまって後悔してるよ。僕はたまたま友人と話をしていて、"ビートルズ"という言葉を自分とは離れた存在として使っただけなんだ——他の人たちが僕らを見るような感じで、"ビートルズ"を持ち出したんだよ。今の彼らは何にもまして大きな影響を若者や状況に与えてる、あのキリストよりも、って言ったんだ。そういうふうに言ったのが間違いだった。僕は神に敵対する気もないし、キリスト反対派でも教会反対派でもない。そういうものをけなそうとしたんじゃない。僕らの方が上だとか優れてるとかいうんじゃないんだよ。ちょっと馬鹿げてると思うな。僕らのことが嫌いなら、レコード買わなきゃいいだろ?

あれは彼女が進めていた、徹底インタビュー・シリーズの一環だった。だから僕はプロモーションとしてはまるで考えてなかったし、自分の言ってることをわかりやすく翻訳しようとも思ってなかった。数時間かけてやったインタビューの中で、そのテーマに沿って話しただけのことだよ。それがすごくややこしくなって、手に負えないことになってしまった。

最初そういう反発が出てるって話を聞いた時は、"まさか——またいつもの騒ぎだろ"くらいに思った。だけどそれがどうも一大事らしいとわかってくると、僕はすごく不安になった。こういうのがどんなふうに膨らんでいくか知ってたからさ。それについてどんなふうに言われるかってこともね。そのうち、僕がいかにも嫌味な奴みたいに映ってるみっともない写真がそこら中に載って、どんどんどんどん、どうにもならないところまで行ってしまうんだ。そうなるともう僕には手出しできない。そこまで話がでかくなってしまったら、僕には責任負えないよ。僕とは関係ないことになってしまってるんだから。

あんな騒ぎを引き起こしたことについては悪いと思ってる。だけど反宗教的な意味合いはまったくなかったんだ。僕の意見は、キリスト教についてこれまで読んできたものや、自分で見てきたことに基づいていて、キリスト教の過去や、これまでの歴史や、これからの可能性を言ってるんだ。けなしてるんでもないし、悪い宗教だと言ってるんでもない。ただ、キリスト教は衰えつつあり、現代の状況を見失っているんじゃないかということだよ。本来の姿をとり戻そうとしているようにも思えない。"うん、すべて申し分なしだ、我々はみんなクリスチャンで、みんな熱心に信仰している"なんて言ってたって意味がないだろ。だって僕ら、信仰なんかしてないんだから!

ジョージ

銃を持ってる人
全員がそれで
自分を撃ってくれれば、
何も問題は
ないんだけどね。

ポール

迫害というのは
僕らには理解しがたいことだった。
僕らは偏見なんて持ってなかったよ。
いつだっていろんな民族の人たちに
聴いてほしいと思ってた。
昔、僕らの学校へ、女性講師が
南アフリカについての
話をしに来たことがあった。
それで彼女が言うんだよ、
"すばらしいんですよ——
男の子にお茶を入れてもらえるし、
掃除をする子もちゃんといて、
クリケットの球拾いを
する子もいて……"。
"ちょっと嫌な感じしない?
それじゃ奴隷みたいじゃないか"って
僕らは言った。
でも彼女は"とんでもない、
あの小さい子どもたちは
自分から好きでやってるんです"って。

ジョージ

確か南アフリカでコンサートを
やってくれって話があったんだ。
でも僕らは行かなかった。
そのせいで僕らのレコードが
発売禁止になったんだよ。

ジョン

ミュージシャンというのは、
普通自分がどんな町に住んでるか
なんて気にしてないよ。
ミュージシャン同士が会えば
そんなことどうでもよくなる。
大事なのは音楽さ。
音楽ほどどんな社会にも
共通する要素はない。
1966年

ポール

グループ全員が
そういう考えだったから、
僕らは南アフリカでもどこでも、
ブラックが差別を受けている地域では
コンサートをやりたくなかった。
あとでみんなから、たとえすべての
人を受け入れたところで、
どうせ黒人は黒人、白人は白人で
かたまってしまうって言われたけど、
この方がいいと
誰かが言ったからって、
まとまりゃしない——
みんな仲間と
一緒にいるはずだってね。
それはそれでかまわない。
でも差別は嫌だ。
人間の権利はすごく大事だと
僕らは考えていた。
別にいい人ぶってるんじゃないさ、
ただこう思ったんだ。
"どうして黒人と白人を
分ける必要がある?
そんなの馬鹿らしくないかい?"

僕はきちんと教会に行ってるふりなんかしない。キリストは聖書で言われてるとおりの人だったんだろうと思うし、誰かがキリストの偉大さを語れば信じるよ。だけど、今の僕は子どもの頃のように教会に通ってはいない。

イギリスでは誰も気にしなかったし僕のことをわかってくれてたから、別に何事も起きなかった。だけどアメリカじゃ違だ。僕らは時々、自分たちがビートルズだってことを忘れてしまうんだよね。それは仕方ないことなんだ。それに"イギリスは警察国家になりつつある"みたいな話題だって、パブでバーに並んで座ってる友だち同士みたいに気軽に口にするじゃないか。

キリストみたいな人が今生きていると仮定して、彼ならどうするかって想像してみるのは好きじゃない。でも、もしキリストがいるとして、彼が昔と同じ考えを持つ本物のキリストだというのなら、——「エリナー・リグビー」は彼にとってたいした意味はないだろうね。

1966年8月11日、シカゴでの記者会見

ポール　あの発言のせいで僕らを嫌いになった人がいても、僕ら自身は気にしないさ。僕らを好きな人のために演奏する方がいいからね。この騒ぎを引き起こした男は、恥知らずな売名行為としてああいうことをしただけだってわかったし。1966年

ジョン　僕らのレコードを好きじゃない人、僕らの顔や僕らの言ってることが好きじゃない人、そんな人たちのことはどうでもいい。彼らには僕らを嫌う権利がある——そして僕らにも、嫌なら彼らと一切関わらないでいる権利があるんだ。誰にだって権利はあるのさ……。1966年

リンゴ　人間の本性というのがわかるよね。大好きだ大好きだって言ってたのに、ああいうことが起きれば何百万という若者たちがビートルズのレコードを燃やし始める。盛大なかがり火だ——僕らはかまわないさ、みんなあとで買い直してくれたからね! だけどあの頃、これはかなりマズいことになっているっていうのは僕らもわかってた。

ツアーの時に影響が出たね。どこへ行ってもみんなすごく怒ってるんだ。KKKが大勢で繰り出してきてさ、あれはかなりおっかなかった。アメリカではいつでもああいう危ない目にあったよ——彼らが実際に銃を持ってるのもわかっていた。

でもツアーをキャンセルしようとは考えてなかったよ。そもそも僕ら、何ひとつキャンセルしたことがないんだ。いつもブライアンが"さあ行こう"って言って、僕らは"えっ、また行くのか"って。"もうたくさんだ"ってぼやいていたとは思うよ。だけど決まりごとになってたのさ。"もう秋だからレコードを作ろう、クリスマスには出す"って。そういう変なルールがいっぱいあって、僕らはそれに従ってやってきた。でもいいかげん、うんざりしてきたんだよ。だんだん鬱憤が貯まってきてさ、ついに言ったんだ。"もうこれで終わりにしよう"って。

ジョージ　それでなくてもストレスとかいろいろ重なってたんだ。その上こんなことまで起きなくてもいいだろうって感じだよ。僕らが危ない目に遭うかもしれないということで、ツアーはやらなくてもいいんじゃないかって意見も出てた。実際1ヵ所やめようかと思ったんだよ、南部のメンフィスだ——メンフィスに映画があってさ、頭巾かぶったKKKの男が"我々のやり方で始末をつけよう……"みたいなこと言ってるやつ。だけどスタジアムの外にいたクランのメンバーはファンに追い払われたみたいだった。つまり、僕らはかなり怖い目に遭ったものの(ちっぽけなミニバスでコンサート会場へ行く途中、ちょっと怖かったのを覚えてる)、結局コンサートはやったんだ。何も起こらなかった。会場に行けばいつものとおりだったよ。

ポール　南部のバイブル・ベルトに行く頃には、みんなが僕らの車の窓をガンガン叩くようになってた。中でもよく覚えてるのが11歳か12歳くらいの男の子だ。僕らが乗ってるバスの窓を夢中になって叩いててね。もし彼につかまってたら、僕ら殺されたんじゃないかな。神の御霊のために燃えたぎってたからね。僕らはただ、"やめてくれ、僕らは君を愛してる。何でもないことなんだ"って言っただけさ。

あれで僕らも、ツアーに疑問を感じ始めた。ツアーをやってどのくらいの得になる?ってことだよ。人間どこまで耐えられるものなのか? ツアーはいつでも大成功だったけど、僕らはちょっと

CamScannerでスキャン

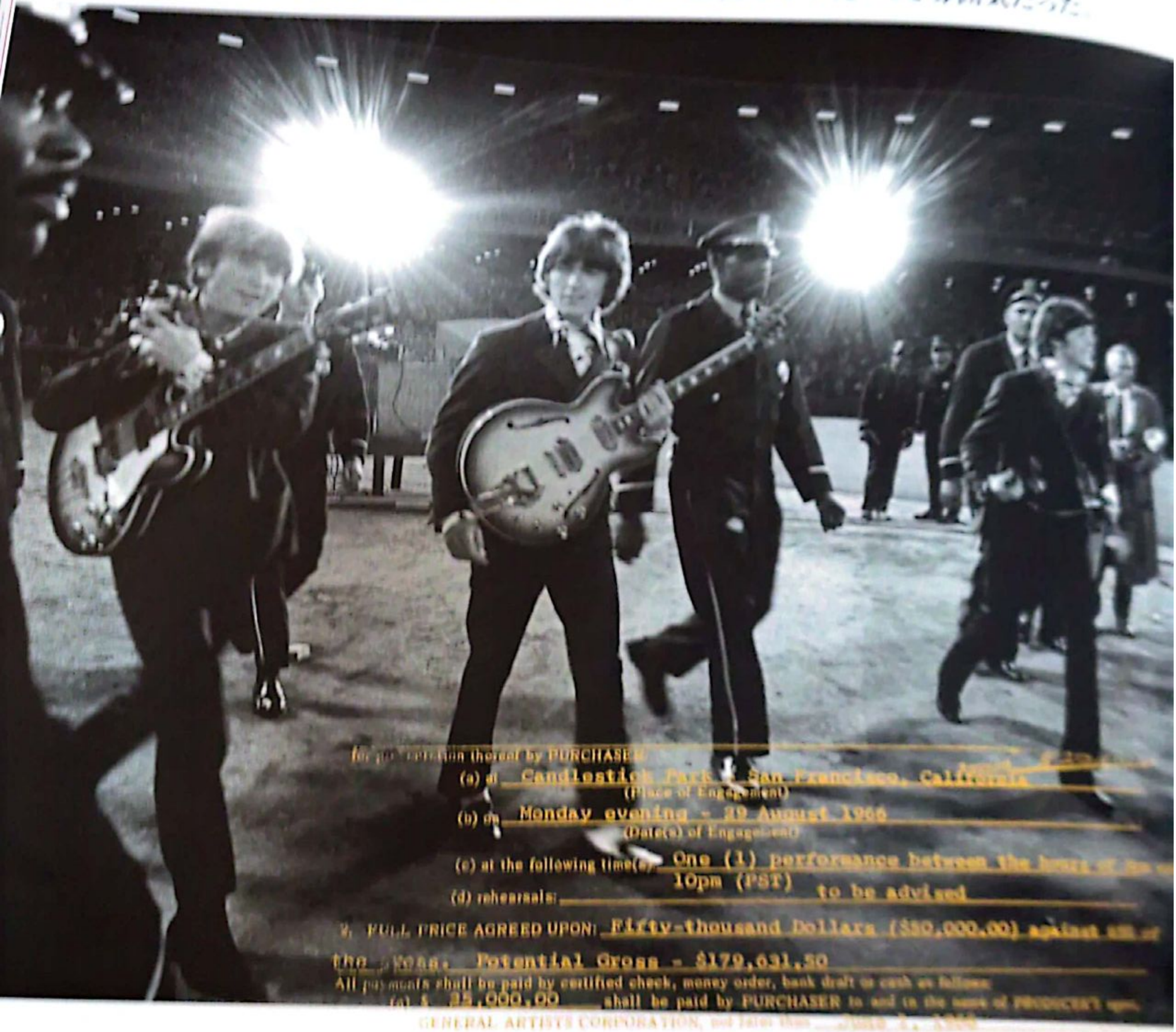
ポール キャンドルスティック・パーク公演の時には、
“誰にも言うなよ、でもたぶんこれが僕らの最後のギグだ”って雰囲気だった。

リンゴ　キャンドルスティック・パークの時、これで終わりにしようという話になってきてた。サンフランシスコのコンサートの時も、ここが最後かもなって感じはあったんだけど、ロンドンに戻るまでは100%の確信は持てなかった。ジョンがメンバーの中で一番やめたがってたね。もうたくさんだって言ってたよ。

ジョン　二度とツアーはやりたくなかった。キリストを馬鹿にしたって責められてからは、とりわけそういう気になったね。軽い気持ちでちょっと言っただけで、外にはKKK、中では爆竹だもんな。あれ以上耐えられなかった。1980年

CamScannerでスキャン

キャンドルスティック・パーク公演の時には、
"誰にも言うなよ、でもたぶんこれが僕らの最後のギグだ"って雰囲気だった



for presentation thereof by PURCHASER
(a) at Candlestick Park - San Francisco, California
(Place of Engagement)
(b) on Monday evening - 29 August 1966
(Date(s) of Engagement)
(c) at the following time(s): One (1) performance between the hours of
10pm (PST)
(d) rehearsals: to be advised

2. FULL PRICE AGREED UPON: Fifty-thousand Dollars ($50,000.00) against
the gross. Potential Gross - $179,631.50
All payments shall be paid by certified check, money order, bank draft or cash as follows:
(a) $ 25,000.00 shall be paid by PURCHASER to and in the name of PRODUCER'S agent,
GENERAL ARTISTS CORPORATION, not later than June 1, 1966
(b) $ 25,000.00 shall be paid by PURCHASER to PRODUCER not later than
30 days prior to performance
(c) Additional payments, if any, shall be paid by PURCHASER to PRODUCER no later than
day of performance

PURCHASER shall first apply any and all receipts derived from the entertainment presentation to the payments ... All payments shall be made in full without any deductions whatsoever.

PRICES OF ADMISSION $6.50, $5.50, $4.50

NEMS ENTERPRISES INC.
By
Tom Donahue, Bob Mitchell &
By
Address 70 Dorman Avenue
San Francisco, California
Phone

Return all signed copies to agent:
General Artists Corporation
Burt Zell
9025 Wilshire Blvd.
Beverly Hills, Calif.

THE ABOVE SIGNATURES CONFIRM THAT THE PARTIES HAVE READ AND APPROVE ...

コ　キャンドルスティック・パークの時、こ
終わりにしようという話になってきてた。
フランシスコのコンサートの時も、ここか
もなって感じはあったんだけど、ロンド
るまでは100%の確信は持てなかった。
がメンバーの中で一番やめたがってた
たくさんだって言ってたよ。

度とツアーはやりたくなかった。
を馬鹿にしたって責められてから
けそういう気になったね。軽い気持
と言っただけで、外にはKKK、中
だもんな。あれ以上耐えられなか

A & CANADA

リンゴ　ツアーをやめたくなかった奴はいなかったと思うよ。でもポールだけだったら、ジョージや僕よりは続けてただろうね。僕は自分がひどいミュージシャンになった気がしてて、こんなプレイを続けるのは嫌だって思った。僕にすれば、それがツアーをやめる理由だった。まともにプレイできないのなら、もうツアーには出たくなかったんだよ。

即座に決定が出たわけじゃない。それまでだって僕らみんなそういう気持ちは口に出して不満も言い、ジョークにもし、怒鳴ったりもしてた。やがてそれが煮詰まってきて、"イエス"か"ノー"かってところまで来たんだ——ツアーの件もそうだったし、レコーディングでも解散の問題でもそうだった。話し合いもなく、誰かがいきなり振り向いてひとこと言い捨てて終わり、ってことはなかったよ。ツアーをやめるっていう正式な発表はしなかった。僕らで決めたことで、決めたらあとは自然に任せるだけだ。

ジョージ　キャンドルスティック・パークに来ると、僕らはカメラをアンプの上に置いてタイマーをセットした。曲が終わるとちょっと間を取って、リンゴもドラムから降りてくる。そしてみんなで、観客に背を向けてアンプに向かい、写真を撮ってたんだ。僕らわかってたのさ。"これで終わりだ——もう二度とこういうことはない。これが最後のコンサートだ"って。全員一致で決めたことだった。ああいう騒ぎやら大雨やら、もううんざりだった。ビートルマニアの影響がだんだん出てきたんだね、それに僕らはもう名声や成功に酔えなくなっていた。ツアーも楽しくなくなっていたしね。

それまですでに1400回くらいのライブをやってたんだよ。どう考えても、これだけやれば十分だって気がした。先を見とおしていたわけじゃない。ただ、"ホッとするだろうな——もうこんな狂気の沙汰ともおさらばだ"って思ってただけさ。

有名になったのは嬉しかった。だけどそこまで有名になってしまうと論外だし、危険な感じもあった。誰もが手に負えない状態で、誰も言うことを聞かないんだからね。警官まで秩序を乱す側にまわってる。みんなおかしくなってしまってた。何だかみんながどうしようもない映画の中にいて、僕らはその真ん中に引っ張り込まれてしまったようだった。ものすごく奇妙な感覚だったよ。僕はあの1年くらい前からずっと言い続けてたんだ、"こんなこともうやめよう"って。そして結局は自然と終わりが来て、1966年にはみんなが"もうやめなきゃだめだ"という気持ちになっていた。1966年のいつだったかはっきりとは覚えてないけど、明らかにフィリピンのあとでは"おい、もうやめるべきだぜ"と思ってたね。

あの頃はまだ、みんなすごく仲がよかったんだよ。ただ疲れただけさ。4年もの間、キャーキャー叫ぶファンの中を逃げまわってきたんだ。短い休暇は何度かあったけど、長い休みは4年の間にたった1回だけだ。僕らには休みが必要だったんだよ。誰も、"これでひとつの時代が終わった"なんて悔やんでなんかなかったさ。みんな喜んでいたはずだよ。

ジョン　僕ら4人の蝋人形を置いてあったとしても、ファンは満足したと思う。ビートルズのコンサートは音楽とはまるで関係ない。むごたらしい民族儀式だよ。1966年

ジョージ　**誰も彼も頭がおかしくなってる中で、**
僕らが一番正気を保ってたね。

ニール・アスピノール　1967年はツアーをやらないかもしれないって初めて聞いたのが、インドにいる時だった。僕ら全員ホテルのスウィートにいて、アメリカに行く話をしてたんだ。その時ジョージがブライアンに訊ねた。"このツアーっていうのは毎年恒例になってるのかい？"。彼にはもうやるつもりがなかったのさ。たぶん彼らはすでに自分たちだけで話し合っていて、ツアーは好ましくないって結論になったんだろう。それでその場ですぐ、次の年はアメリカに行かないってことに決まったんだよ。

だからキャンドルスティック・パークに着いた時、僕らもこれが最後のコンサートだってわかっていた。ただ僕にすれば、これでもう二度とコンサートがないってことじゃなく、しばらくツアーをやらないだけだと思ってたんだ。僕は自分の役割なんてよくわかってなかったから、彼らがツアーをしなくても僕には大して影響がないだろうと思ってた。

最後のコンサートにブライアンが来てたかどうかはっきり覚えてないな。彼はブリーフ・ケースを探してたのかもしれない。彼の部屋から金や私物が盗まれたって話だった。ブライアンは泥棒に遭うことが多かったんだよね。

ライブの予定がなくなれば、もっとレコードを作れるってことになる。それまでビートルズのアルバムはすべて、まあ「リボルバー」だけは別かもしれないけど、それ以外はツアーが終わってまた始まるまでの期間に作られていたんだ。つまり2、3週間でアルバム1枚作らなきゃならなかったんだよ。アルバム・カバーなんかもすべて含めてだ。それからまたツアーに出る。その間はアルバムのことなんか考える暇もない。

ジョージ・マーティン　不思議だが、2度目のシェア・スタジアム・コンサートでは約1万1千席が売れ残った。かなり落ち着かない時期だったしね。そういう背景もあって、彼らは"いいさ、もうこれ以上絶対にやらない"と言ったんだろう。"休みをとって、それからスタジオに入ってレコードを作るんだ"とね。

ポール　バンドに関して否定的な気持ちになった記憶はない。ツアーに関しては否定的だったけど。でも人間、嫌なことって忘れてしまうもんだろ。休暇に雨ばかり降ってても、晴れた日のことしか覚えてないのと同じさ。ジョージが言ってたよ、"僕らはもうミュージシャンじゃなくなっていた。単なるモップトップのぬいぐるみだった"って。そのとおりだと思う。みんなそういう面が嫌になってきていたんだ。でも僕自身、自分は対処できたんじゃないかと思うんだ。有名になればそうなるってわかってるから。だけど音楽の質はよくなかったな。ツアーをやってもまるでよくならなかった。レコーディングに入れば新しいことに全員が夢中になれるんじゃないかって、みんなの考えが一致したんだよ。

ジョン　いい子ぶるつもりはない。無限の辛抱強さなんて持ち合わせちゃいないさ。ある種のファンの要求をニコニコと受け入れるには、天使にならなきゃ無理だ。若者だからってことで許してもらおうなんて思ってない。だけど僕らだってみんなと同じ人間なんだよ。年相応に見えるかどうか知らないけど、自分自身ではいつだって実際の年齢より年取ってるような気分だった。

いつまでもただの仲良しじゃいられないさ。僕らはこれまで、これ以上ないってくらい最高のビートルズだった——4人の明るい若者たちだよ。だけど今はもう違う。僕らは年を取ったんだ。いつまでも「トップ・オブ・ザ・ポップス」[*注]で飛び跳ねちゃいられない。いまでも楽しめるよ、でも時々馬鹿らしく思えるのさ。歌もまともに歌わせてもらえないんだから、うまくなることもないしね。何か他にやることを見つけるべきなんだ。ポールは学校を卒業して仕事を見つけるようなものだと言ってるよ。実際学校みたいなもんさ、それまではグループで集まってたのが、突然自分ひとりになるんだから。

世間から拒絶されたとしても僕は不安にならないよ。自分が自分を認めなくなったらこたえるだろうけどね。もしも突然、自分が無意味な人間に思えたら。これまで僕がやってきたことはなかなか立派だった——過去の自分が無意味な人間じゃなかったことはわかってる。でもこれから僕は何か違うことをやらなきゃいけない。ちょっと転落を期待してるとこもあるんだよ——素敵な転落さ。そうすれば僕らはただの楽しい思い出になれる。1966年

*注　BBCテレビの人気音楽番組

リンゴ　そりゃブライアン・エプスタインにしてみれば、僕らがツアーをやらないということになって、ぽっかり穴が空いた気分だったろうね。僕らをツアーに駆り出すのが彼の仕事のひとつだったんだから。あれは彼にとって大変なマネージメント業務だった。そこでの彼は"ビッグなイギリス人"になれるんだ——ツアーの間はね。僕らがツアーに出たとたん、"ビートルズのマネージャー、ミスター・エプスタイン"になるんだ。

ブライアンも僕らみんなと同じように、似たようなことの繰り返しには飽きていたと思う。キャンドルスティック・パークやシェア・スタジアムに毎度毎度僕らの出演予定を入れて、いったい何が楽しいんだ？

ツアーをやめると決めたって、僕ら何も気にしてなかったよ。「リボルバー」や「ラバー・ソウル」を聴けばわかるように、それまでだってスタジオの方が楽しかったんだ。こっちに力を注ぐようになってくると、さらに実験的になっていった。僕らはスタジオで前よりもさらに時間を費やすようになり、曲もさらにおもしろくていいものになっていった。スタジオから引っ張り出されてツアーに出るんじゃなく、もっとゆっくり時間を使えるようになったんだよ。

ジョン　延々パフォーマンスばかりやってるのにはうんざりした。どんなツアーだろうと、僕らがまたやるべき理由なんて思いつかない。僕ら全員、ほんとにくたびれたんだ。もはや僕らにとってツアーは何の意味もない——ファンにとってはほんとに身勝手な話だっていうのはわかってる、でも僕らだって自分のことも考えなきゃいけないんだよ。1967年

僕らを生で見られない人には申し訳ないと思う。どうせ音は聴こえないんだから何の損にもならないって思う時もあるけど、それでも楽しんでくれてたのかなって思う時もある。すまないと思うよ。1964年

しばらくツアーから離れていると、学校の休暇みたいな感じだった。勉強なんかちっともしなかったのに、楽しいことばかり思い出す。早くまた学校に行きたいなと思う。でも、学校へ戻ればまたうんざりするのさ。軍隊みたいなもんだ。ずっと同じ単調さを我慢してなきゃならない。大きなかたまりがドカンとひとつあるだけさ。ツアーのことなんか、僕は何ひとつ思い出せないね。1967年

ジョン　**音楽なんか聴こえやしなかった。**
ただの見世物だよ。
ビートルズそのものが見世物だったんだ。
音楽はどうでもよかったのさ。1969年

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

Dear Mr. Brown...

"HOW I WON THE WAR"

JOHN LENNON is

This is to confirm that xxxxxx called for post-synching
WEDNESDAY 28th Dec. at 9 a.m. for all day
at Twickenham Studios on THURSDAY, 29th Dec. at 9 a.m. for ½-day.

Yours sincerely,
For PETERSHAM FILMS LTD.,

Mr. Lennon is at present abroad making a film in Spain and I do not expect him back in England for quite some time. However, if you would send me some idea of the information you require I may be able to help through other members of his family.

With appreciation of your interest and with all best wishes.

Yours sincerely,

Wendy Hanson
Personal Assistant to Brian Epstein

ニール・アスピノール　1966年の秋、ジョンが出演した「ハウ・アイ・ウォン・ザ・ウォー」(ジョン・レノンの僕の戦争)の撮影について行った。ジョンが撮影している間、僕は死んだ兵士の扮装をさせられた。あの映画では死んだ兵士はオレンジ色に塗られてるんだよ。

ロケ地が近かったから、またハンブルクへ行った。すごく楽しかったな。ファンもコンサートもビートルズもなしで、ジョンと僕だけだったからね。由緒ある場所とか店とか、全部まわった。1日くらいのものだったかな、それから列車でパリへ行った。

スペインにいる間、ジョンは海岸で「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」を書いて僕に聞かせてくれた。

ジョン　アルメリアにいた時だよ。あの曲を書くのに6週間かかった。あの映画の撮影中、ずっと作ってたんだ(誰でも知ってるとおり、撮影というのはぶらぶらしてる時間がやたらと多い)。オリジナルのテープが今もどこかにあるはずだ——実際のレコードではサイケデリックな感じになってるけど、最初はあんな感じじゃなかったんだよ。1980年

アーティストとして、僕は常に一番リアルな瞬間の自分を表現しようとしてる。そして誰か他の人ではなく、自分自身をさらけ出そうとしてるんだ。自分をよくわかってなけりゃ表現も弱くなる、それだけのことだ。

「ストロベリー・フィールズ」では"いつでもこれがほんとの僕だと思ってる"みたいなことを言ってる。「ヘルプ!」でも僕は自分を描こうとしてた。自分が感じていることを、でも自分がどう感じているのかよくわからなかったんだ。だから"時々、いやいつも、これがほんとだと思ってる……"みたいな言い方になった。たどたどしい言い方になってるのは、自分が感じているものがつかみきれてなかったからだ。だけどもうはっきりわかった。"そうだ、僕が感じてるのはそれだったんだ——心の痛み、それだ"。そこから自分を表現できるようになった。1970年

2番の歌詞に"僕の木には誰もいないらしい"とある。この部分で僕が言おうとしてたのはね、"誰も僕ほどヒップじゃない気がする。つまり僕は狂ってるのか天才なのか、どっちかに違いない"ってことさ。僕が5歳の時から抱えてる問題だよ。1980年

「ストロベリー・フィールズ」は、実は心理分析を音楽に持ち込んだものなんだよ。分析というと、たいていただ自分のことをしゃべるだけ、症状を表すだけのものだと思う。僕はそんなことをやる必要がない。レポーター相手にしょっちゅうやってきたからね。精神科医とかそういった類の人間に関わってる暇なんかないさ。そういう人たちはみんな頭がイカれてるんだから。

感情や苦痛を閉じ込めてしまうより、しっかり感じ取ることだ——もしもの時に備えて貯め込んでおこうなんて考えない方がいい。誰だって心理的に抑圧されてると思うよ。心を苦痛にふさがれたことがまったくない人間なんて、会ったことがないね。子どもの頃から、生まれてから一度も、精神的に追い詰められたことのない人などいるもんか。どうして泣いちゃいけないんだ? 12歳くらいになると、もう泣くなと教えられる。"大人になりなさい"って。いったいそれってどういうことだい? 大人だって辛い思いはするんだよ。1970年

ニール・アスピノール　ある晩すごい嵐になった。何もかも海へ押し流されて、道路はどこも泥まみれだ。それが乾いたら、今度は埃だらけ。僕らはジョンのロールス・ロイスでロケ地から戻るところだった。カー・ステレオでディランをかけていたんだけど、途中でタンノイのスピーカーに切り替えて、外に音を流すようにした。ディランをガンガン響かせながら走っていたわけさ(あとで聞いたんだけど、みんなあれを"死の車"と呼んでいたそうだ——彼らにはこの車が霊柩車みたいに見えたんだね)。細い橋を渡っていると、角を曲がってバイクがやって来た。向こうにすれば、大きな黒いものが音楽とともにグワッと現れてきたんだ。橋の手前に狭い隙間があったんだけど、そのバイクはまっすぐそこを突き抜けていった——見事に飛んでったよ!

ジョンがスペインにいる間、他のメンバーはそれぞれの活動をしてた。ポールは『ザ・ファミリー・ウェイ』(ふたりだけの窓)のサウンドトラックをやっていて、ジョージはインドにいた。

リンゴはジョンと僕がいる時、スペインにやって来た。ピーター・ブラウンも来たよ。マリファナをいっぱい詰めたチョコレートの箱を持ってね。"ブライアンと僕とで、君たちのためにぎゅうぎゅうに詰め込んだんだ"。彼はそう言って箱を開けた。そのとたん中身が飛び出して、全部厚いパイル・カーペットに吸い込まれた。"ああ、ほんとにどうもありがとう!"

リンゴ　1966年の末ごろ、ジョンが「ハウ・アイ・ウォン・ザ・ウォー」の撮影でスペインに行ってる時に遊びに行った。彼は寂しがってたんだ。僕らはほんと、お互いにずいぶん支え合ってたんだよ。

モーリーンと僕とで行くことにしたんだ。共演者のマイケル・クロフォードも一緒に泊まることにした。5日か6日おきには家を移ってたね。みんなで同じ家に泊まってたんだけど、必ず何かしらの不都合があるんだ——それが一番げっそりしたね、ものすごく暑かったし。

モーリーンと僕は1965年にウェイブリッジに家を買った。ジョンもそこに住んでいて、ジョージは5マイル先のエッシャーにいたから、僕らはみんな結局同じ地域にいたわけさ。僕にとっては最高の環境だった。その頃はもう息子のザックも生まれていたんだけど、ロンドンに住んでいる頃は彼を外に出すことができなかった。家庭があったことだし、引っ越すにはいい時期だったんだ。

建設会社に家の改築とか内装をやらせていたんだけど、そのうちこう考えた。"この会社を買ってしまおう——そうすれば本気で働いてくれるだろう!"。そこで僕は共同経営者になって、会社をブリッキー・ビルディングという名前にして、僕の家の仕事を全部やらせた。その方が安上がりだと思ったんだ。毎晩親方が夕食を作ってくれてね。彼しかできる人がいなかったんだよ、あの頃モーリーンは料理が作れなかったからさ。

そうやって家を建てたわけだ——でもあの家を買って改装したのは、おそらく僕がやった中でも最も愚かな行為だろうね。僕はあの家を3万7千ポンドで買った。それだけでも、あの当時としてはかなりの額だよ。でも改装がすんでみたら9万ポンドかかってた。そしてそれを4万7千ポンドで売ったんだ。その建設会社ではジョージ・ハリスン宅の仕事もちょっとやった——彼はいまだに支払いをすませてない!(ジョークだよ)

1966年のオフはほんとに楽しかった。"さあ、もうツアーは終わった——妻と子どもと一緒に楽しく過ごそう"って考えられるようになった。僕にも他のことをやる時間ができたんだ。

ジョン　1966年に「ハウ・アイ・ウォン・ザ・ウォー」をやってからというもの、僕はずっとビートルズから抜け出す理由を探していた。ただ、実際に抜ける勇気がなかったのさ。どこへ行けばいいのかわからなかったからね。なぜあの映画に出たかは覚えてるよ。ビートルズがツアーをやめたあと、やることが見つからなかったからやったんだ。家に戻って家族と過ごす代わりに、すぐディック・レスターとスペインへ行った。ステージに出ずっぱりの生活がなくなって、どうしたらいいのかわからなかったんだ。あの時が初めてだね、"このまま何も起こらなかったらどうする? いったい何があるんだろう? ステージがなければ生きてる意味がない"って思ったのは。そしてあの時種が植えつけられた。僕は何とかしてここから抜け出さなきゃいけないと思うようになったんだ。他のメンバーから追い出される形ではなくね。だけどどうしても宮殿から足を踏み出せずにいたのさ、あまりにも怖くて。

実際、出て行くのは不安でたまらなかった。"ほんとにこれで終わりなんだ。もうツアーはない。つまり、これから先は空白になるということだ"って僕は考えていた。その頃だね、ビートルズのない人生を本気で考え出したのは——それってどういう人生になるんだろう? 僕はあの6週間、ずっとそのことを考え続けていた。"何をしよう? ベガスでショーでもやるか? キャバレーのショーか?"。だってさ、どこへ行けっていうんだい? ともかく、そうやって僕は考え始めた。でもビートルズのない生活がどんなものなのか、どうすればやっていけるのか、まるで考えられなかった。自分のバンドを組むことなんて思ってもみなかったね。そういう考えは頭に浮かんでこなかった。ただひたすら、ビートルズが終わったら自分は何をやるか? ということばかりだった。1980年

CamScannerでスキャン

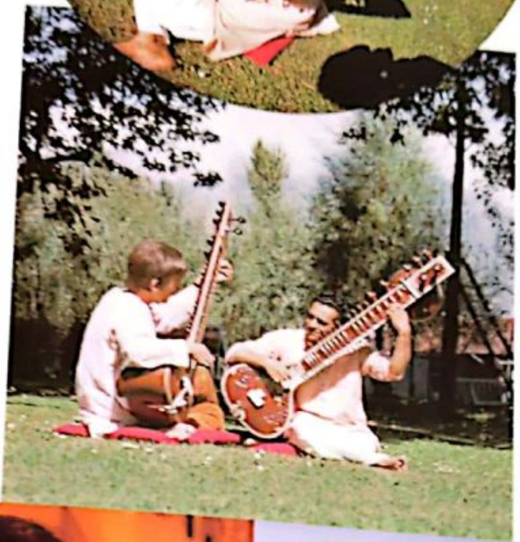
I WON THE
Film by
ICHARD LESTER
reenplay by
ARLES WOOD
om the Novel by
TRICK RYAN
RHINE (LEAGUER) (COLOUR) GERMANY 1945 NIGHT A
battle order move up silently in the dark. Officers
small group of searchlights and whisper their unit
er and over again. LIEUTENANT GOODBODY says
he loves the rolling sound of it which he does.
GOODBODY
rd Troop the Fourth Musketeers
rd Troop the Fourth Musketeers
rd Troop the Fourth Musketeers
OTHER OFFICERS
st Troop
st Troop
st Troop
Headquarter Fighting
Headquarter Fighting
Headquarter Fighting
Fourth Troop
Fourth Troop
Fourth Troop
GOODBODY
Third Troop the Fourth Musketeers
Third Troop the Fourth Musketeers
Third Troop the Fourth
B THE RHINE (COLOUR) NIGHT B
cuts thro
oil ?
Far a ind the front line near the and
tanks in league ive fool of a tech storeman
jerry cans on a P.O. tonner and tosses in the
tank crews refuel. The TECH STOREMAN bangs with his
deck of the three tonner welding is going on as the
STOREMAN
the next.
F1351397

ポール　ジョンはまた演技をやり始めた。ジョージはシタールとかインドのいろんなものにすっかり夢中になってる。彼はラッキーだよね。自分にあった宗教を見つけたようなもんだよ。僕は自分が楽しめるものを探しているところ。急ぐことはないんだ。時間も金もあるからね。1966年

ジョージ　1966年9月にインドへ行った。ラビ・シャンカールのレコードに出会った時、僕はいつかどこかで彼に会うことになるんじゃないかって気がした。そして偶然、6月にロンドンで彼と会ったんだ。エイジアン・ミュージック・サークルの創立者、アヤナ・デーバ・アンガーディの家でね。あるインド人が電話をくれて、ラビが彼の家に来るって教えてくれたんだよ。その前からすでに、僕が「ノーウェジアン・ウッド」（ノルウェーの森）でシタールを使って以来、マスコミはずっと僕と彼を結びつけたがっていた。"ビートルとインド人——これはいい写真になる"って考え始めたのさ。それでずっと僕らを引き合わせようとしていたんだけど、僕は"ノー"と言い続けた。いつかふさわしい状況で彼に会えるとわかっていたからね。実際にそうなったよ。彼は僕の家にも来てくれた。僕は彼から何度かレッスンを受け、座ってシタールを持つ姿勢も教わった。

それでツアーが終わった9月、ジョンが「ハウ・アイ・ウォン・ザ・ウォー」の撮影に行ってる間に、僕は6週間くらいインドへ行っていた。まずボンベイに飛んで、しばらくそこでぶらぶらしていたんだ。でもファンのおかげで、僕がいるってことがすぐ広まってしまったんだよ。

僕はビクトリア朝のタジ・マハール・ホテルに泊まり、シタールを習い始めた。ラビがレッスンをしてくれたんだ。彼は教え子をひとり連れてきたよ。床に



てると、僕は腰が痛くて死にそうになっちゃってそれを見たラビがヨガの先生を呼んできて、ヨの体操も教えてもらった。

ばらしい休暇だった。僕は外へ出かけて寺を、買い物に歩いたりした。インド中を旅行し後はカシミールまで行き、ヒマラヤの真ん中スボートに泊まった。信じられないくらい幸たね。朝起きると、小柄なカシミール人のミバットが紅茶とビスケットを運んできてくれの部屋からはラビがシタールの練習をしていこえてくる。

をやって以来、ずっと頭から離れずにいた

思いがあった。"ヒマラヤのヨギ"だ。どうしてそれがいつまでも頭に残っていたのかわからない。そういう人たちのことなど考えてみたこともなかったのに、いきなり僕の意識の奥に張りついてしまった。まるで誰かが僕に囁きかけてるみたいだった。"ヒマラヤのヨギ"ってね。それもインドへ行った理由のひとつだったんだよ。ラビやシタールもすごく大事な理由ではあったんだけど、実際のところは口実で、ほんとは精神的なつながりを探しに行きたかったんだ。

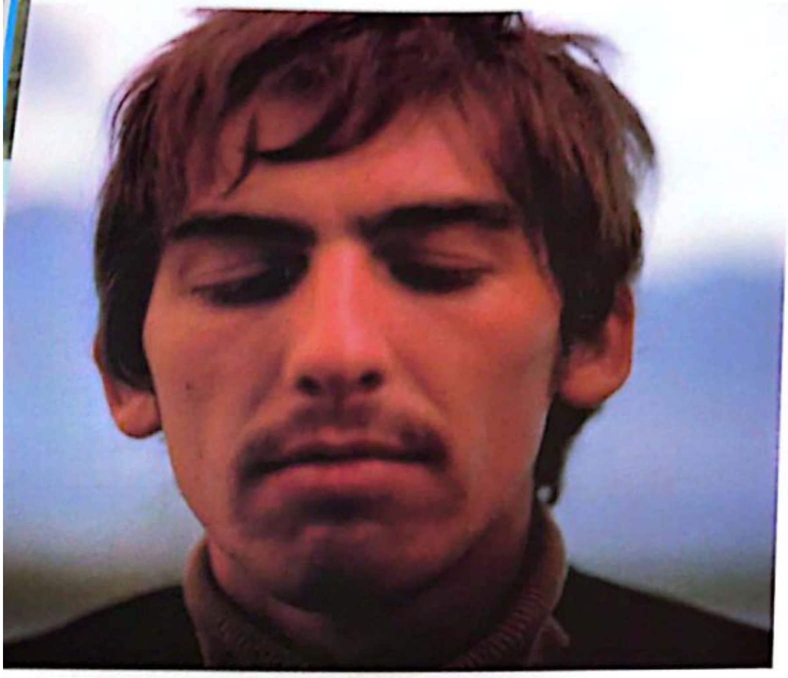
ラビにはラジューというすごく優しい弟がいて、その彼が賢者の書いた本をたくさんくれた。そのうちの1冊、スワミ・ビブカナンダという人の本に、こう書かれていた。"神が存在するなら見えるものでなければならず、心霊が存在するなら知覚できるものでなければならない——そうでなければ信じない方がよい。偽善者よりは率直な無神論者でいる方がましだ"。

僕は子供の頃ずっとカトリックの教育を受けてきたけど、本気で信じてはいなかった。ああいった"クリスチャン"としての姿勢（ここで言うのは括弧つきのクリスチャンだ。クリスチャンと称しながら実は違う人がたくさんいるから——僕から見ると、そういう人たちは真にキリストについて語れる権利などなくて、キリストが言おうとしていたことを表現しているとは言えない）からすると、彼らの言ってることを信じろと教えているように思えた。直接経験などしなくていいと。

インドに行き、"自分で直接感じ取るまでは、何も信じてはいけない"——実際、当然のことだけど——そういう本を読んで、僕は思ったんだ。"ワオ！すばらしい！筋の通ったことを言う人をついに見つけた"。それでそういうものを、もっともっと奥まで掘り下げていきたくなった。それほど影響を受けたんだ——僕はさまざまな聖者やヒンズーの導師や神秘主義者の本を読み、あちこちを旅して彼らを探し、何人かでも会ってみようと思った。

インドなら会えるんだよ。インドというのは信じられないところだ。町を行くとバスやタクシーが走り、自転車が通り、それに混じってニワトリや牛もいる。ブリーフ・ケースを持ったビジネス・スーツ姿の人もいる——サフラン色の法服を着た、老いたサンヤーシー（僧侶）もいる。すべてが混ざり合っているんだ。ほんとに不思議な場所だよ。音や色やざわめきが幾重にも幾重にも重な

CamScannerでスキャン



り、すべてがいっせいにこちらの感覚に襲いかかってくる。あの時は呆然とした。何だか時をさかのぼったような気がしたよ。あの時初めて、解放された気分になった。ビートルズであることから、ただの数字であることから。パトリック・マグーハンの主演した『プリズナーNo.6』を思い出すね。"僕は数字じゃない"ってやつさ。僕らの社会では、気がつかないうちに自分にも相手にも番号をつけてる。政府もそれをやってる。"きみの社会保障番号は？"っていうのが、アメリカでまず最初に訊かれることだろう。そういうところから、いきなり紀元前5千年に来ちゃったみたいで、すばらしい気分だったよ。

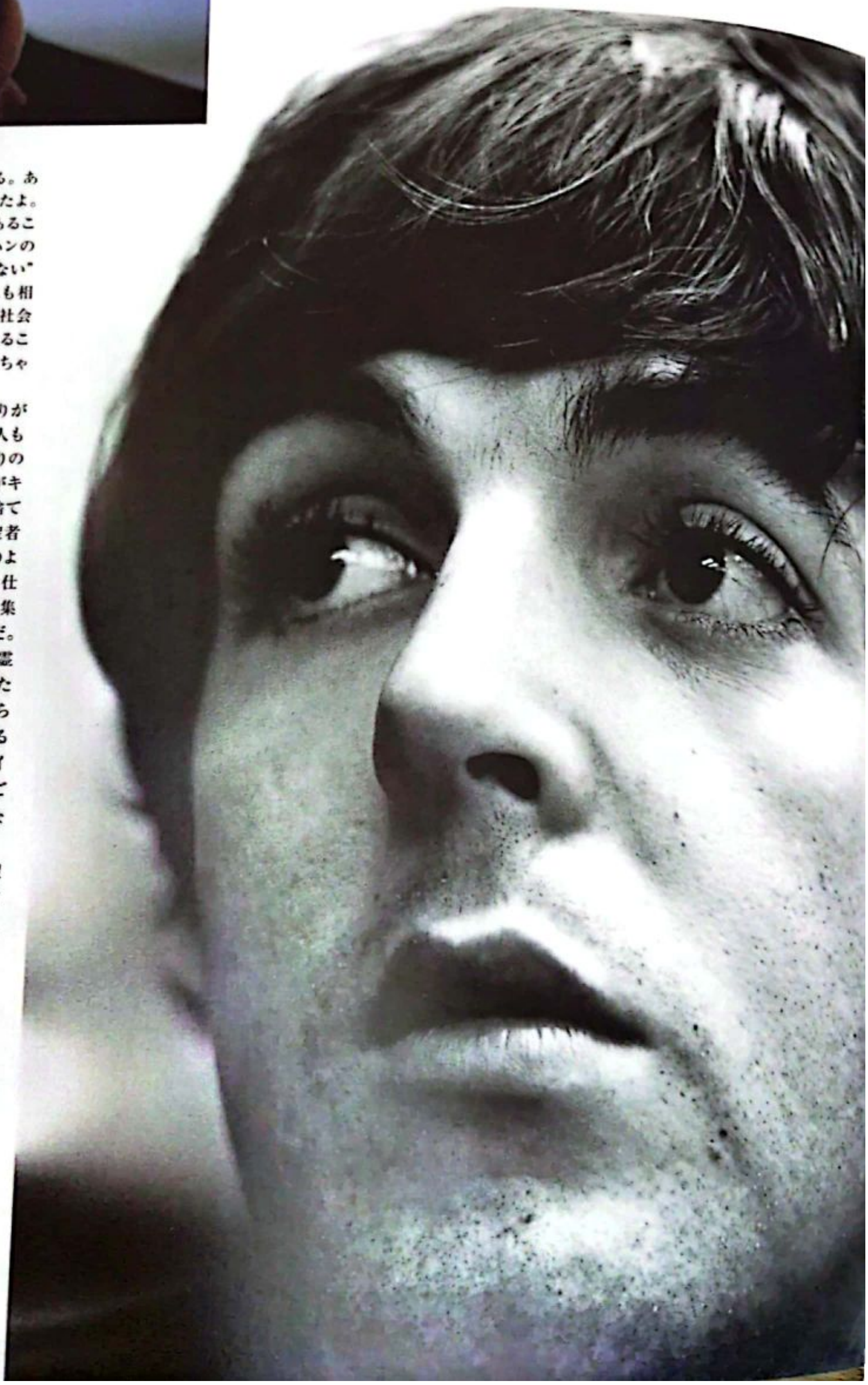
ベナレスという都市へ行くと、ラムリアという宗教的な祭りが行なわれていた。300から500エーカーくらいの場所に何千人もの聖者が集まり、1ヵ月にわたって祭りが続くんだ。この祭りの期間はマハラジャがみんなに食事を出す。さまざまな人々がキャンプを張っていて、その中には放浪の聖人もいる——世捨て人だよ。イギリスやヨーロッパ、つまり西洋では、そういう聖者たちは浮浪者と呼ばれて逮捕されてしまう。だけどインドのようなところではみんな自由に歩きまわってるんだ。彼らには仕事もなく、社会保障番号もない。それぞれの名前すらない。集団としての呼び方だけだ——彼らはサンヤーシーと言うんだ。中にはキリストみたいな顔の人もいるよ。彼らは真の意味で霊的な人たちだ。アレン・ギンズバーグみたいな感じのイカれた人たちもたくさんいた。彼のトリップ体験はすべてあそこから始まってるんだよ——縮れた髪を伸ばして、チラムと呼ばれる小さな水パイプをくわえて大麻を吸う。イギリス人は何年もインド人の大麻をやめさせようとしてたけど、インドじゃものすごい昔から吸っているんだから、やめさせようとしたって無理なりさ。

僕はいろんな人たちのグループを見た。ほとんどの人が聖歌を唱えていたよ。信じられないような光景が混ぜ合わさってた。象の背中に乗ったマハラジャが、埃を巻き上げながら群集の中を通り抜けていく。僕はもうゾクゾクしたね。

ール　曲を書く才能に恵まれている人は、その手腕をいろいろな形にして出すことができる。僕は昔からそういう技を持った人に憧れててね——ロジャース&ハマースタインのような、かつての偉大なソングライター・コンビとか、あるいはコール・ポーターとか。ミュージカルの作曲ができること、映画音楽を作るってことはすごいと思ってた。だから映画音楽は僕にとっておもしろい気晴らしになったんだ。ジョージ・マーティンは楽譜が書けるしオーケストラ用の編曲もできる——しかもすごくうまいだろ——それでブルティング・ブラザーズを通して、彼と僕とで『ザ・ファミリー・ウェイ』のサウンドトラックをやってくれないかというオファーが来たんだ。

映画を見て、これはすばらしいと思った。今でもそう思ってるよ。パワフルで感動的で——センチメンタルだけど、あの時代に合っていた。僕は吹奏楽用の曲を書こうと思った。ビートルズではいろんなタイプの音楽を試したけど、吹奏楽はちょっと北部的な感じが強いというか、"ホービス"(イギリスのランクス・ホービス・マクドゥガル製の黒パン)っぽいだろ。でも僕はそういうのも好きだった。僕の父はトランペットをやっていて、父の父は吹奏楽団にいたから、僕にもそういう傾向があるんだね。この映画では"ブラバン"っぽい感じを取り入れて、ストーリーの北部的な雰囲気を出すようにした。やっていて、すごく楽しかったよ。

僕らはこのサウンドトラックでアイバー・ノベロ賞をもらった——「ラブ・イン・ジ・オープン・エア」という曲が、その年の最優秀主題歌に選ばれたんだよ。あれにはジョニー・マーサーが歌詞をつけかけたんだけどね、僕は彼が誰なのか知らなかった。あとになってわかったんだ、"ああ、ジョニー・マーサーか！この地球上で最も偉大な作詞家じゃないか！"。やってもらえばよかったよ。まあいいさ——ダメだったんだから——でも映画音楽をやるのはとっても楽しかった。



CamScannerでスキャン

ジョン　ヨーコはデストラクション・イン・アート・シンポジウムというアーティスト・グループの招きでロンドンに来ていた。ロンドンでなんだか盛大な催しが行なわれていて、彼女はインディカ・ギャラリーで展覧会をやることになってた。ジョン・ダンバー——マリアンヌ・フェイスフルの前夫、彼がやってるギャラリーだよ。僕はよくそこにテイキスとかを見に行ってた。ライトなんかを作って法外な値段で売ってるような輩さ。そんなのただのゴミだよ。でもその時は、パンフレットが送られてきたんだか、彼が電話をかけてきたんだか——どっちだか忘れたけど——とにかくニューヨークから来た日本人女性が、袋に入ってイベントだかハプニングだかをやるっていうんだ。"はーん"って思ったね、"セックスか"って。それで行ってみたんだよ。1980年

僕は全然髭を剃ってなくて、すごくみすぼらしい格好だった。3日3晩眠ってなかったしね、その頃はトリップしながらいつでも起きてた。完全に飛んでたよ。1969年

入って行くと誰もいない。実はオープニング前夜だったのさ。ほんとはまだ会場が開いてなかったんだ。でもジョン・ダンバーはすっかり舞い上がっててね。"大金持ちが何か買いに来た!"みたいな感じで、バタバタ動きまわってたよ。その時僕の前にあった代物は、何本か釘が刺さったプラスティックの箱。それから目を奥に向けると、台の上にリンゴがひとつ置いてあって、"アップル"と文字が添えてある。"ジョークだな、これはなかなかおもしろい"と思ってね。だんだん作品のユーモアがわかってきた。"このリンゴはいくらだい?"って訊くと、"200ポンド"と言う。——"ほんとに? へえ、そうなんだ。じゃあその曲がった釘は?"1980年

僕にはそれがどういう意味なのかよくわからなかった。どこか人を食ったところがあるんだろうとは思ったけど。彼女は自分のことをコンセプト・アーティストと言ってる。それって"セプト"を取れば"コン"(詐欺)アーティストだろ。そういう面がわかったんだ。あれはおもしろかったよ。1972年

そうやってブラブラ楽しんでたんだけど、下へ降りていくとジーンズ姿の薄汚ないのが何人か座ってた。僕はちょっと身がまえちゃってね、"こいつらヒップな奴らなんだろうな"とか思って。実は作品の準備をしてたアシスタントにすぎなかったんだけど、僕は"こっちは有名なポップ・スターなのに、あの釘やリンゴの意味を知ってるのはこいつらなんだ"みたいに考えちゃってさ。僕はそういう作品をユーモラスだと思った。それでよかったのに、僕は彼女のユーモアに対して、ほとんどの人と同じ反応をしてたんだ。つまり彼女に腹を立てて、彼女にはユーモアのセンスがないって言うことだよ。実際には、彼女はものすごくおもしろい人なのにさ。

そのうちダンバーが彼女を連れてきた。だって大金持ちの客が来てるんだからね。でも僕は袋を見たかったんだ。袋に入った人たちはどこにいるんだ? 僕がずっと考えてたのは、自分がどっかの誰かとその袋に入る勇気があるだろうかってことだ。誰とその袋に入るのかわかんないんだぜ!

で、当然そのハプニング・イベントをやるはずだから、ダンバーに紹介されたあとで僕は訊いたんだ。"それで、そのイベントというのは?"。すると彼女が小さなカードをくれた。そこにはただ、"息"とだけ書いてある。僕が"つまり?(と喘ぐ)"ってやる。"そうです、そのとおり"。それで僕は、"わかったぞ!"みたいに思ったわけだ。すっかり何かをやろうって気になってた。その"息"をやったけど、呼吸に自分の意識を集中する以上のことをしたかった。つまり知的な目でそういうものを見たかったんだ。僕はあの釘を見てユーモアを感じた——深いところまではわかってなかったかもしれないけど、暖かい感じを受けた。"ちくしょう、僕にもああいうのは作れる"と思った。"僕にだってリンゴを台に置くことはできる。もっと見てみたい"。

それからあの梯子が目に入った。絵の上に架けられた梯子が天井まで伸びていて、天井からは小型望遠鏡がぶら下がってる。そこで僕は足をかけた。梯子を昇っていって、望遠鏡をつかむと、小っちゃな文字が書いてある。ほんとに梯子のてっぺんに立たないと届かないんだ——馬鹿みたいな気分だよ、今にも転げ落ちそうで——それでよく見てみると、ただ"イエス"とだけ書いてあるのさ。

だけど当時のいわゆる前衛芸術と呼ばれるもの、おもしろいとされていたものは、すべてが否定だっただろう。ピアノを金槌で叩き割るにしろ、彫刻を壊すにしろ、すべてがつまらない、ただ否定するだけのクズだった。なんでもかんでもアンチ、アンチ、反対、反対だ。反芸術、反体制。だからその"イエス"のひとことで、僕はリンゴや釘ばかりのギャラリーにとどまる気になった。"こんなクズ、ひとつだって買うもんか"と立ち去る代わりにね。

次に"釘を打ってください"と書かれた作品の前に来た。"釘、打ってもいい?"って訊くと、彼女は"ノー"と答えた。展覧会が開かれるのは翌日だったからね。でもそれを聞いてオーナーのダンバーが、"やらせてあげなよ"って。つまり、"彼は大金持ちだ。買ってくれるかもしれないじゃないか"ってことさ。だけど彼女はオープニング前の作品をきちんとまっさらな状態にしておきたかった。そんなふうだからいつも儲からなかったのさ——彼女はいつでも作品を守る方が大事だった。そこでちょっとした話し合いが持たれて、ようやく彼女は言った。"わかりました、5シリング払ってくれたら釘を打っていいわ"。で、この小ざかしい野郎は言うわけさ。"じゃあ5シリングあげたつもりで、釘を打ったつもりになろう"。その時初めて、僕らは本当に顔を見合わせた。その時僕らの目が合い、彼女はぴんと来て、僕もぴんと来た。そういうことさ。

でも時間はかかった。どっちもすごくシャイだったからね。次に僕らが会ったのはクラース・オールデンバーグのオープニングだった。ゴムなんかのゴミで作ったチーズ・バーガーとか、そういったヤワなオブジェをたくさん並べてるような展覧会だ。そこで再会し、僕らは視線を交わした。でもほんとにつきあうようになるのは、それから1年半か2年くらい先だよ。

そのあとは、僕らが受けた取材記事のすべてに書かれているとおり。ひとつの歴史が生まれたのさ。1980年

CamScannerでスキャン

ボール　僕はリバプールの近くのウィラルで事故に遭った。モペッド（ペダルで漕ぐこともできるオートバイ）から落ちたんだよ。ロンドンにタラ・ブラウンという、すごく仲のいい友だちがいてね。ギネス・ビールの後継ぎだ——すごく繊細な、人のいいアイルランド人でさ、僕は時々一緒に遊んでた。その彼が、僕が父や弟に会いに戻ってる時、リバプールへ訪ねてきたことがあってね。僕はモペッドを借りてたから、じゃあこれで僕のいとこのベット（エリザベス・ロビンズ）の家へ行こうって思いついたんだ。

モペッドで走りながら、僕は後ろからついてくるタラに景色を見せてあげていた。とても素敵な満月の夜でね、ほんとに大きな月だったよ。僕が月のことで何か言って、彼が"そうだね"って答えた。その瞬間、僕の頭にその体勢の自分の姿がストップ・モーションになって浮かんだ。もう遅かった。僕はまだ月を見上げていて、それから地面に視線を戻したけど、気づくまで数分くらいあったような感じがしたね。"ああ、もうダメだ——顔から歩道に突っ込む！"。バン！

見事にやったね、歯はかけるし。その歯が唇を突き抜けて、唇が裂けた。それでも立ち上がっていとこの家まで行ったんだよ。"ベット、心配ないから。ちょっとした事故でさ"って言うと、彼女はジョークだと思い込んでね。初めはケラケラ笑ってたんだ。でもそのうち嘘じゃないってわかって、"大変……！"って。僕の顔は見事に腫れあがって、まるでマイク・タイソンと何ラウンドかやり合ったみたいだった。それで彼女が医者の友だちを呼んでくれた。

彼がすぐやって来て、針を取り出すとえらく苦労して糸を通し、傷の片側を縫い始めた。少し手が震えてたけどなんとか全部縫い合わせて、終わったと思ったとたん、"あっ、糸が抜けた——もう一度やり直しだ！"。麻酔なんかないんだよ。僕は彼が針に糸を通してもう一度傷を縫うまで、ずっと立ったままだった。

実は、そもそもそれが理由で髭をはやし始めたんだ。だってすごく恥ずかしいじゃないか、あの頃は自分の写真が「16」みたいなティーン雑誌に載るってわかってるんだよ。腫れ上がった唇の写真を出されるなんてちょっと耐えられない。それで口髭を生やすことにしたんだ——ちょっとサンチョ・パンサみたいな感じの——要するに唇を縫ったあとを隠すためさ。

それがグループのメンバーにも広がった。いつもそんな感じだったんだ、誰かが髪を長く伸ばして、それがいいとなるとみんなで髪を長くする。でもそのうちそれが一種の革新的アイディアみたいに見られるようになって、僕らの年代の若者はみんな口髭をたくわえないといけない！ みたいな感じになった。それがまたサージェント・ペパーとうまくハマッたんだよね。彼はだらんとした口髭を生やしてたから。

僕は最初、中国人風の長い髭を生やそうと思ったんだけど、あれはすごく難しいんだ。かなりうまくワックスをつけないとできないし、60年くらいかかるよ——結局一度もやったことがない。

ジョンは髭の人向けのカップを持っててね。唇が当たるあたりに小さな穴が開いてて、髭を濡らさずに紅茶が飲めるようにできてる——なかなか魅力的だね！

リンゴ　口髭はヒッピーの要素のひとつだった。髪を伸ばし、口髭を伸ばし、そして僕の場合は顎髭もはやした。あれは60年代が一世を風靡し始めたっていう感じだったね。

もともと僕は髭剃りが大嫌いだったし、僕にしてみれば口髭は特別なものでもなかった。口髭でも顎髭でも自然に伸びるもんだし、髪の毛だって自然に伸びる。僕らはだんだんとサージェント・ペパーズになっていったんだ。なんだか変身していくみたいだったね。

ンゴ　こんな小さい幼虫が蝶になったようなもんさ。

ール・アスピノール　彼らの風貌は常に変わり続けていた——口髭とかはやし始めて——でもそれは誰が決めたわけでもないんだ。全員が影響を与え合っていたというけだ。誰かが何か新しいことを持ち込むと、他のみんなが"それいいね、どこで買っ"って訊きたがる。そんな感じだったよ。ボールはツアー中もよく変装してた。僕は

彼と一緒によく観客席にもぐりこんだよ。階段をあがって、ファンで埋まってるバルコニー席とかに入って、他のグループのステージを見るんだ。ボールはそういう時、髪をバックにして、口髭つけて眼鏡をして、重いオーバーを着込んでいく。彼がそんなところに来るとは誰も思っていないしね、だから誰にも気づかれなかった。

ボールはウィラルに行った時に事故を起こして、怪我した口を隠すために髭をはやしたんだ。そして彼が口髭をはやしたもんだから、すぐにみんなもはやし始めた。とにかく僕から見るとそういうことだよ。僕も当時口髭をはやしてた。

ジョージ　口髭はシンクロニシティでもあり、集合意識の表明でもあった。僕の場合には、ボンベイに行く前にラヴィ・シャンカールから来た手紙がきっかけだったんだ。その手紙に、"変装した方がいい——口髭をはやしてもらえませんか？"と書いてあったんだよ。それで"よし、じゃあ口髭をはやそう。それで変装になるとは思えないけど、今まで髭をはやしたことないからやってみよう"って思ったのさ。

サージェント・ペパーのセッション写真を見ると、僕らみんなで髭はやして、おかしなことになってるだろう。そのうち誰もが髭をはやし始めた。たしかエンゲルベルト・フンパーディンクまで髭はやしてたよ。

ニール・アスピノール　当時のビートルズは、流行に敏感なオーディエンスにアピールするようになっていた。彼ら自身が敏感だったからさ。ブライアンはそういうことすべてを気に入ってたよ。彼はビートルズをものすごく信頼していて、彼らのやることに疑いを持たなかった。彼らをバンドとして、ミュージシャンとして、アーティストとして、すごく好きだったんだよ。ブライアンはファンのひとりだったのさ。

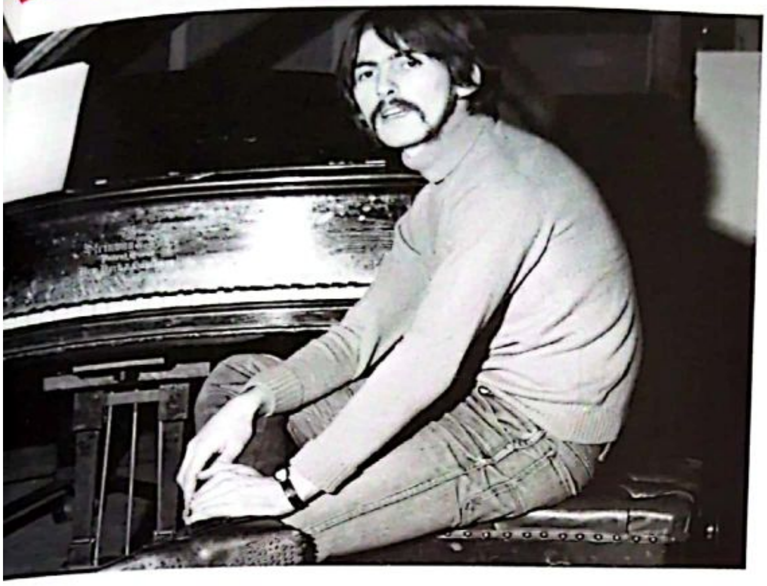
ビートルズはデビュー当時からずっと世間に影響を与えてきた。初期の頃だって、みんな突然襟なしのジャケットを着始めて、太いヒールのブーツをはき、ビートル・カットの髪に変えただろう。常にそういう影響力があったんだ。

ジョン　"僕らがみんなのヘア・スタイルを変えた"とかいう話——でも僕らだって何かに影響されたんだよ、その時そこにあった何かにさ。誰が何を最初にやったかなんて、考えても意味がない。僕らは60年代の一部なんだ。すべて自然に起きてきたことだよ。"ストリート"で起きているものを示す代表として僕らが選ばれたというだけだ。ほかの誰かでもよかったんだろうけど、実際にはそうならなかった。僕らやストーンズや、そういった人間が選ばれたんだ。1974年

リンゴ　1966年から67年、ビートルズは他のすべてのバンドに影響を与えていた。僕らがLAでのんびりするようになって、デヴィッド・クロスビーやジム・ケルトナー、ジム・マッギンとつきあい始めてから気づいたんだけど、おもしろいことに、みんなものすごく僕らに似せようとしてるんだ。一部の人間だけじゃないんだよ。他のバンドの話も聞いたんだけど、プロデューサーたちがビートルズみたいなサウンドにするように、ってみんなに言ってるんだって。

ジョージ　僕は10月末くらいにイギリスへ戻り、ジョンも同じ頃スペインから帰ってきた。今度いつみんなで集まるかということはあらかじめ決めてあったんだ。そして僕らはスタジオに入り、「ストロベリー・フィールズ」をレコーディングした。その頃はバンド全体に前より深みが出てきていたと思う。

CamScannerでスキャン



ジョン　新しいサウンドはどんなものになるんですかってあちこちで訊かれるけど、僕自身も皆目見当がつかないんだ。どんなふうに展開していくか——これまでのシーンに代わるものがあるとすれば、それは何なのか。どっちにしろ僕は予測するのって好きじゃない。そういうのは常に曖昧だし、必ず間違ってる。もしわかってりゃ、僕はひと財産稼いでるよ。1966年

ポール　**これまでよりいいものなんてできないんじゃない？** 1966年

ジョージ・マーティン　11月、ツアーをやめると決めて以来初めて、ビートルズがスタジオに戻って来た。みんなそれまでの生活にはうんざりしていたね。前の年にあれだけ厄介なことがあったし、ブライアン・エプスタインは彼らがこのまま忘れられてしまうのではないかと心配していた。これでビートルズはおしまいだと彼は考えていたんだね。実際、1966年には、そう考えてもおかしくないような兆候があった。フィリピンでは災難に遭い、一部のコンサートでは観客数が減ったし、彼ら自身名声にがんじがらめにされるのが苦痛になってきていた。

レコーディングはまず「ストロベリー・フィールズ」から始め、次に「ホエン・アイム・シックスティー・フォー」と「ペニー・レイン」をやった。すべて次のアルバムに入れるつもりだった。その時はまだ我々にも、これが『サージェント・ペパー』になるとはわかっていなかった——とにかく新しいアルバム用の曲というだけでね。だが、これがスタジオから生まれる作品であり、ライブで演奏できない曲を入れることになるのは明らかだった。

ニール・アスピノール　『リボルバー』でも、他のどのアルバムでもそうだったけど、彼らはとにかくスタジオに入ってレコーディングを始める。アルバムのタイトルやジャケットはそのあとなんだ。

リンゴ　スタジオに入って次のレコーディングにとりかかるという段になると、いつも必ず、どの曲からやるかというのでちょっともたつくんだ。誰も1曲目を出そうとしない。その頃は"レノン=マッカートニー"というより"レノンかマッカートニー"になっていたからね。いつも彼らは、"どんなのがある？"——"そっちはどんなのがある？"ってやってたよ。もう80%方、それぞれで書いた曲になってたね。どっちがジョンの曲か僕にはわかっ……僕はジョンの曲の方がプレイしやすかったな。彼の方がいつもちょっとだけロックンロール色が強かったから。

……　自分たちの音楽的能力には、とりたてて不安を持ってなかったよ。問題は世……って、僕らじゃなかったんだ。そこがビートルズの一番いいところだったね。僕ら……とり、音楽面では不安を感じてなかったはずさ。みんな早くとりかかりたくてウ……してたんだよ。

……ともう僕らはツアーから解放され、スタジオで新しい曲にとりかかった。「ストロ……フィールズ」はジョンが作ってきた曲で、リバプールにいた頃彼の家のそばにあ……軍の古い孤児院を歌ったものだ。僕らにとってそれは若さと、輝く夏と、苺畑……る。僕には彼の描いているものがわかったよ。

……ろかったのは、僕らの曲の多くが、ちょっとばかりシュールになってきてたこと……の家に『ビザール』っていう、ありとあらゆる奇妙なものを載せた本があった……てる。芸術面で僕らの目は大きく開かれ始め、いろんなものが見えるようにな……たんだ。

……ベリー・フィールズ」ではメロトロンを使った。僕はこの楽器はミュージシャンズ・ユニオンから認めてもらえないだろうと思った。だから僕ら、セッションで使うだけにして、表立った宣伝はしなかったんだ。これには今で言う"サンプリング"されたフルートの音が入ったテープが、それぞれの鍵盤ごとに用意されていて再生するんだ。それぞれ11秒まで鳴らすことができるんだよ。

ジョージ・マーティン　ジョンが初めて「ストロベリー・フィールズ」を聴かせてくれた時、彼はアコースティック・ギター1本で歌ったんだが、これがとてつもなくすばらしかった。最高によかったんだ。もともと私はジョンの声が大好きだけれど、あれを聴けたというのは最高の特権だったね。

ポール　いくつかのバージョンを作った。ジョンは最初の何回かのテイクが今ひとつ不満で、僕らはすべてをやり直したんだ。最終的にジョンとジョージ・マーティンとでふたつの異なるバージョンをくっつけた。継ぎ目はほとんどわからないけど、そういう編集部分でかすかにベースが変わるんだ。曲の後ろ半分では少しだけテンションがあがってるんだよ。

「ペニー・レイン」もちょっとシュールだけど、「ストロベリー・フィールズ」よりクリアな感じだ。ジョージ・マーティンに"すごくクリアなレコーディングをしたい"って言ったのを覚えてるよ。その頃僕はクリアなサウンドが気に入っててね——ビーチ・ボーイズの影響があったのかな。

歌詞の"砂時計を持った消防士"とか、そういったイメージには、僕らがちょっとアートっぽいのを目指してた姿勢が出てる。歌詞は全部、実際にあったことをもとにしてるんだ。ビオレッティとかいう床屋があって（今でもペニー・レインにあると思う）、そこは床屋の例に漏れず、客が選べるようにいろんな髪型の写真を並べてあった。でも"窓に髪型の写真を並べた床屋"という代わりに、"お目にかかったあらゆる頭"になったんだ。写真を見せてる床屋ってことさ、展覧会みたいにね。

あの曲ではちょっとだけアートっぽい感じ、演劇に近いような感じにひねろうとしていたんだ。たとえば英霊記念日に、お盆に載せてポピーを売ってる看護婦（アメリカ人の中には"お盆に載せて子犬を売ってる"って思った人がいたけど）。"彼女はお芝居の中にいる気分"——"実際お芝居の中なんだ"。そういうシュールなアイディアをちょこちょこ入れようとしてた。

どちらの曲もリバプールを歌ってる。僕らには常にそういう強みがあった。長いこと一緒にやって来たグループだから、そういうことができるんだよ。「ストロベリー・フィールズ」と「ペニー・レイン」——ワオ！　僕らは成長期のほとんどをあのあたりで過ごした。ペニー・レインは僕の家からジョンや他のいろんな友だちの家に行く時の、バスの乗り換え場所だったんだよ。あそこは大きなバス・ターミナルになっていて、僕らみんなすごくよく知ってるところだ。僕はあの向かい側のセント・バーナバス教会の聖歌隊に入ってた。

あの2曲が先行シングルになった。新曲のレコーディングで最初にやった曲だよ。

ポール　事実でもあり、
すばらしい土地へのノスタルジアでもある
——僕らの記憶の中にある郊外の青い空。
今でもそれは変わらない。
それにひとつふたつジョークも入れた。
"娘さんとフィンガー・パイがいっぱい"。
女性は仲間同士以外じゃ絶対口にしない言葉だろうね。
たいていの人は聞きたくないだろうけど、
"フィンガー・パイ"というのはエロ話が好きな
リバプールの若者たちの、
ちょっとしたジョークなんだよ。1967年

CamScannerでスキャン

1967

nineteen sixty-seven

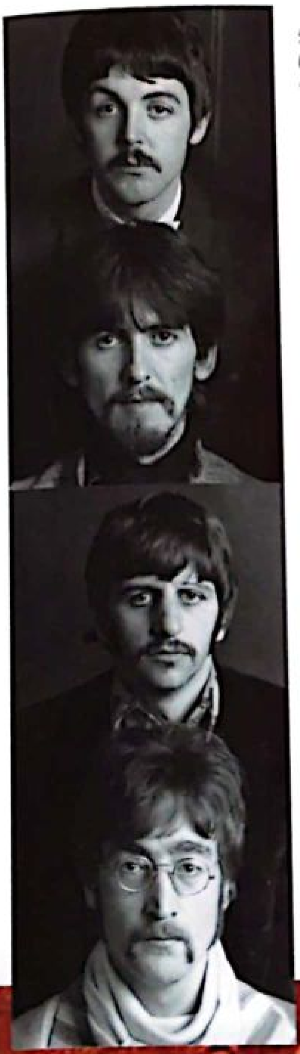
CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　両A面として発表された「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」と「ペニー・レイン」が、ビートルズの1967年最初のシングルだった。

ジョージ　エンゲルベルト・フンパーディンクのせいで「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」は1位になれなかった。ちょっと残念だったね。でも不安はなかったよ。デビュー当時の僕らはチャートでいい位置に入りたいと思っていたけど、そのうちそれを当然と思うようになってきてた。2位になって、ちょっとショックを与えられた方がよかったのかもしれない――とはいえ、常にいろんなチャートがあちこちにあるんだから、こっちのチャートで2位でも、あっちでは1位かもしれないよ。

ジョン　チャート？　全部見てるよ。どんなものにもチャンスはある。フンパーベルト・エンゲルディンクなんてどうでもいいさ。あんなの子ども向けだよ。子どもは子どもの歌を聴いてればいいんだ。1967年

ポール　「リリース・ミー」みたいなレコードに1位をとられたってかまわないよ。そういうのと同レベルのことをやろうとしてるわけじゃない。まったく違う世界なんだから。1967年



ジョン　シングルを出すと、最初の売り上げがどのくらいかを見る。金が理由じゃない、前のシングルと比べてどうかってことを見たいんだ。僕らが作ったものだからね。僕らが求めてるのはそういう満足感なんだ、No.1の栄誉じゃない。1968年

ジョージ・マーティン　「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」と「ペニー・レイン」を新しいアルバムに入れなかったのは、シングルとして出したものはアルバムには入れるべきじゃないという気持ちがあったからだ。それだけの理由だよ。とんでもない考え方だし、私にも責任があったと思う。近頃ではそんなのナンセンスだが、あの頃はファンが払うお金に見合う価値を与えようと思っていたんだよ。

両曲ともA面にするというのは、実は私とブライアンのアイディアだ。ブライアンは人気を取り戻そうと必死でね、だから確実にすごく売れるものを出したかった。彼が私のところへ来て、"本当にすばらしいシングルが欲しいんだ。今どんなものがある？"と言う。"そうだな、3曲候補がある――そのうち2曲は、これまで彼らが作った中でも最高の曲だろう。この2曲をカップリングすれば、すごいシングルになる"と私は言った。それでそれを実行したんだ。実際あれはすばらしいシングルだった――だが同時に恐ろしい間違いでもあった。他のもの、たとえば「ホエン・アイム・シックスティー・フォー」をB面にしていれば、はるかに売れただろうし、チャートでもずっと上に行っていただろう。

ニール・アスピノール　バンドのみんなはチャートの心配はしてなかったよ。でもエンターテイメントの世界にいれば、当然誰だって売りたいと思うよ。両A面でセールスが分かれたために2位になってしまった、彼らは気づいたのさ。だけどいずれは起きることだったんだし、あの時起きても悪くなかったんじゃないかな。

リンゴ　曲をA面、B面に分ける意味はもうなくなっていたと思うよ。僕らは"これがレコードってもんだ"と思った。それを勘違いすると、レコードを作る時、誰もが陥りがちな、昔ながらの罠にハマっちゃうんだよ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

[illegible]

ポール　今僕らが作ってるのは
普通のタイプのツアーに
ふさわしいものじゃないんだ。
空飛ぶ円盤1台を
アルバート・ホールのてっぺんに
着陸させる方法を考えついたら
ツアーも可能になるだろう。
でも、今のところそんな方法は
見つかりそうもないんだ。

[illegible]

CamScannerでスキャン

ジョージ・マーティン　私はアヴァンギャルドめいたレコーディングにはずいぶん関わっていたし、初期にはいわゆるミュジーク・コンクレートと呼ばれる音楽や、さまざまな電子音楽の実験もやっていた——ビートルズと組むずっと前だよ。私はビートルズにも新しいサウンドやアイディアを教えた。だが、『サージェント・ペパー』で彼らは考えられるかぎりの技巧を試しがった。私が見つけてきたものなら、彼らは何でも受け入れたよ。

リンゴ　『サージェント・ペパー』をやる頃には、ジョージ・マーティンは欠くことのできない存在になっていた。僕らはどんどんストリングスやらホルンやらピアノやらを詰め込んでいく。それを全部楽譜に書けるのはジョージだけだ。それに彼はすごいんだよ。誰かが"あ、ここのバイオリンはデデディドリーって感じにしたいんだ"とか言うだろ、するとジョージはそれをそのまま楽譜にしちゃうのさ。彼はもうバンドの一部になってたね。

ジョンとポールとジョージ——ソングライターたち——は、何でも望むものを曲に加えていった。僕らは長時間スタジオにこもった。ベーシック・トラックをレコーディングするのはいつもと同じだったけど、ストリングスやら何やらのオーバーダビングに何週間もかかるようになって、パーカッションのオーバーダビングはさらにまたそのあとだ。『サージェント・ペパー』はすばらしいと思うよ、いいアルバムだ——でも、待ち時間が長くてね。僕がチェスを覚えたのはあのレコーディングの時だ(ニールが教えてくれた)。

ジョージ　僕にはだんだん辛くなってきた。そもそも、僕はそれほどのめりこんでなかったからね。それまでの僕らは、もっとバンドらしいレコーディングをしていた。つまり、まず曲を覚えてからレコーディングするってことだよ(オーバーダビングはすでに取り入れていて、『リボルバー』ではかなり使っていたけれど)。『サージェント・ペパー』で、いろんなことがちょっとずつ違ってきた。ポールがピアノを弾いてリンゴがテンポをとってるだけで終わるってことが多くて、僕らはバンドとしての演奏があまりできなかった。流れ作業みたいになってしまって——ちょっとしたパートを入れて、それからオーバーダビングして——僕にはそれがちょっとくたびれるし、ちょっと退屈にもなってきた。楽しいことも少しはあったよ、だけど全体としては、あのアルバム作りはあまり好きになれなかった。

僕はインドから戻ったばかりで、気持ちはまだ向こうにあった。1966年にああいうことがあってからは、何もかもが辛い仕事に思えてね。あんまりやりたくないことをやるのも仕事なんだ。僕はあの時点で"ファブ・フォー"の一員であることに興味を失い始めていた。

インドへ行くまで、僕は西洋のものしか知らなかった。だからインドへ行った時に目からウロコが落ちたんだよ。僕はすべてに夢中になった。音楽、文化。いい匂いもあり、嫌な匂いもあり、たくさんの色があり、さまざまなものがあふれ——僕はそういうものに次第に慣れ始めていた。あのグループの息苦しさからしばらく逃れていたから、またセッションに戻るのはきつかったんだよ。ある意味で、逆戻りしていくような感じだった。他のみんなは『サージェント・ペパー』を革新的なアルバムだと思っていた——でも僕にとっては『ラバー・ソウル』や『リボルバー』ほど楽しいものではなかった。単純に、僕はすでに自分で何度もトリップを経験していて、もうそういうものを卒業しようとしていたからさ。

あの時期を通して、僕はジョンとすごく結びつきを強めていった(世間はいつでもレノン=マッカートニーの面から見てたけど)。僕らは一緒に"歯医者体験"をしたんだからね。

ニール・アスピノール　『サージェント・ペパー』には半年費やしたから、その分それまでよりも実験ができたし、それまでのアルバムより時間をかけることができた。同じところにあまりに長時間一緒に詰め込まれていると、逆効果を招く場合もある。まとめるよりも壊す方に行ってしまう可能性があるだろ。でもそういうことは起こらず、すべて順調に進んだ——とはいえ、実を言うと、僕にはちょっと退屈する場面もあったけどね。

ジョン　僕はスタジオでLSDをやったことはないよ。いや、実を言うと一度あったな。僕は覚醒剤をやってるつもりでいたんだけど、どうも様子がおかしくなってきてね。マイクに向かっていて、突然パニックになった。"どうなってるんだ？　気分が悪い"って。体がどこかおかしくなったんだと思った。頭が変になりそうだった。外に出て空気を吸いたいと言うと、みんなが屋上へ連れて行ってくれた。ジョージ・マーティンが変な顔で見てる。それでだんだん、これはLSDをやっちゃったらしいってわかってきたんだ。

"これじゃ僕は続けられない。君らでやってくれないか、僕はここで見てるよ"って言ったんだ。でも見てるだけだとすごく不安になってね、"これでいいのか？"って何度も言った。みんなすごく優しくて、"うん、大丈夫だよ"って答えてくれたけど、それでも僕は"ほんとに平気なのか？"って言ってた。みんなはそのままレコードを作り続けた。1970年

別にあのアルバムにマリファナとLSDを詰め込んだわけじゃないけど、まあね、確かに影響があったことはあったよ。だけど僕らは前よりも意識的にそういう影響を締め出そうとしていたんだ。"ちょっとアシッドやったぜ、もう最高に乗ってる"なんて誰が言うもんか。だけど『リボルバー』と『サージェント・ペパー』の間に何かがあったなって感じはたしかに出てる(ドラッグなしでも同じ結果になったかどうかは推測の域を出ないけどね)。1968年

ジョージ・マーティン　彼らがマリファナをやっているのは知っていたが、危険なものにまで手を出しているとは思わなかった。実際、そんなこと考えもしなかったから、私は愚かにもジョンを屋上へ連れて行ってしまったんだよ。まさかLSDでトリップしているとは。LSDだと知っていれば、屋上へ連れていこうなどと考えるわけがない。

彼はスタジオに入っていて、私はコントロール・ルームにいた。彼がひどく気分が悪いと言うので、"ちょっと出よう"と言って、ジョージとポールにオーバーダビングの続きを頼んだ。"ジョンに新鮮な空気を吸わせてくる"とは言ったものの、ビルの外へ連れ出すわけにはいかなかった。500人ものファンに囲まれているんだからね。いっせいに叫ばれたら彼は完全におかしくなってしまっただろう。だから新鮮な空気にあたるには屋上へ行くしかなかったんだ。星のすばらしい夜でね。ジョンは屋上の端まで行き、高さが50センチもない手すりにもたれて星を見あげると"ねえ、すばらしいじゃないか？"と言った。そりゃ彼には特別素敵に見えたことだろう。私にはごく普通の星にしか見えなかったが。

彼らにとって私は兄のような存在だったのではないかな。年齢も14歳と開きがあったし。まあ私は堅い人間だったんだろうね。彼らも私がドラッグが大嫌いだということは知っていた(それでいて煙草はいつも吸っていた。煙草だって体に悪いことは変わらないのに)。彼らが私の前でマリファナを吸うことはなかった。いつもさっと階下の食堂へ逃げて、ちょっと吸って、ちょっと明るくなって帰ってくる。何をしているかは知っていたが、彼らはマリファナをやってもまったく変わらなかったよ。

リンゴ　「ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ」は僕のために書かれた曲なんだけど、1ヵ所だけ歌いたくない歌詞があった。"音を外したらどうする？　立ち上がって僕にトマトをぶつける？"というところ。"このラインはぜったい歌えないよ"って言い張ったんだ。僕らの中には、ゼリービーンズやおもちゃをステージに投げられた記憶がまだ強く残ってたから。またステージに上がることがないとも限らない、その時トマトをぶつけられるのは勘弁してほしいと思ったんだ。

ジョン　ポールが"リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ"という歌詞を考えて、それを使った構成に仕立てた——彼のオリジナルのアイディアをもとに、ほぼ完全に半分ずつ歌詞を書いた。1970年

リンゴ　「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」にまつわる大騒ぎは、まったく狂ってるとしか言いようがないね。現にあの時、僕はジョンと一緒にいたんだ。ジュリアンがいかにも子どもらしい、ああいうわけのわかんない絵を描いて持ってきてね。それでジョンが父親らしく、"あれ、これは何だい？"って訊いたら、ジュリアンが言ったんだ。"これはルーシーがダイアモンドつけて空にいるの"。とたんにジョンは書き始めたってわけ。

ポール　僕がジョンの家に行ったら、ジュリアンが学校で描いたっていう絵があった。その絵の上の方に、「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」ってタイトルが書いてあってね。それから僕らは彼の部屋へ行き、サイケデリックなアイディアを出し合いながら歌を作っていった。僕が"セロファンの花"と"新聞のタクシー"を思いついて、ジョンが"万華鏡の目"とか"鏡のネクタイ"とかを出してきた。人から言われるまで、イニシャルがLSDになるなんて気がつかなかったよ——その時にはもうみんな、僕らを信じてくれなかったけどね。

ジョン　メル・トーメがレノン=マッカートニーの曲を紹介する番組を見ていたら、「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」はLSDの歌だって言うんだ。そんなの全然関係ないよ、だけど誰も僕の言うことなんか聞いてくれない。神に誓って、いや毛沢東に誓ってでも何でも好きな人でいいけどさ、とにかく僕は、あれがLSDのイニシャルになるなんて考えてもいなかったんだよ。"事実"を話そうか。僕の息子が帰ってきて、学校で描いた絵を見せてくれた。変な女が空を飛んでる。"これは何だい？"って僕が訊くと、"これはルーシーがダイアモンドつけて空を飛んでるの"って答えだった。"これはいい"って思って、それですぐ曲を書いたんだよ。ところがあの歌が出て、アルバムが発売されたら、全部の文字の頭をとるとLSDになるって誰かが気づいた。こっちはそんなこと考えてもいなかった。でももちろんあのあとは、どの歌もスペルをチェックするようになったよ。他の人の歌は、一切スペルなんか問題にされなかった。あの歌は、そんなのとはまるで関係なかったのにさ。1971年

イメージは『不思議の国のアリス』だ。ボートに乗ってるアリスだよ。彼女が卵を買うと、それがハンプティ・ダンプティに姿を変える。店の女性は羊になる。そしてあっという間に彼女たちはどこかでボートを漕いでいる——僕はそういうイメージを描いていた。もうひとつ別のイメージもあって、それはいつか僕を救いに来てくれる女性のイメージ——"万華鏡の目をした女の子"だ。いつか彼女が空から降りてくる。あれはアシッド・ソングなんかじゃないよ。1980年

ジョージ　僕は「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」がすごく好きだったな。ジョンはいつも曲に鋭さを加えることができた。僕が特に好きなのはあのサウンドでね、あの曲で僕は西洋の音楽にインド楽器を重ねることができた。それ以前にもインド楽器の特徴を生かすために「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」みたいな曲を書いてはいたけど、ああいうのは特別で、普通の状況では「ルーシー」のような西洋の歌とはうまく噛み合わないんだ。コード・チェンジや転調があるから(タンブーラやシタールはいつまでも同じキーのままだ)。あの曲ではタンブーラの単調な響きがうまくマッチして、そこが気に入ってた。

CamScannerでスキャン

それからもうひとつ、インド音楽のボーカル・パートではサーランギと呼ばれる楽器を使う。これは人間の声に似た音を出すもので、パフォーマンスではボーカリストとサーランギ・プレイヤーがユニゾンしているような感じになる。「ルーシー」ではそのアイディアを取り入れようと思った。ただ、僕はサーランギ・プレイヤーじゃないから、それをギターでやったんだ。この曲の中間部では、ジョンの声にギターがかぶってるのがわかると思う。僕はインドの古典音楽をコピーしようとしたんだよ。

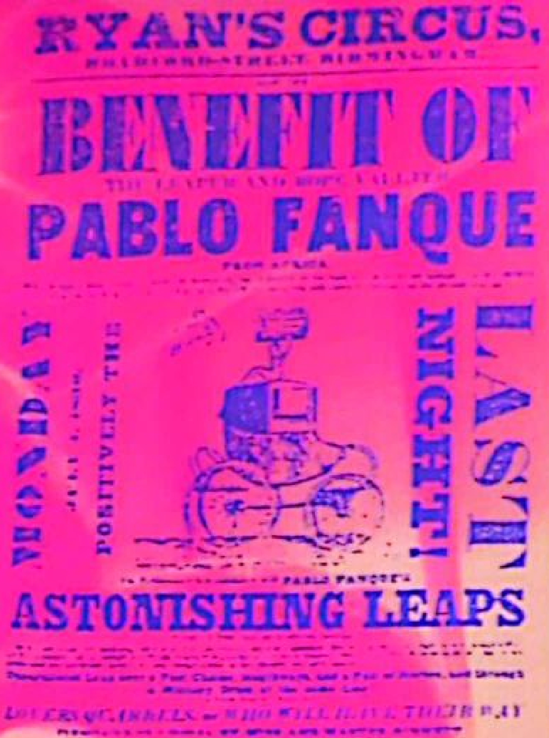
ポール あとはあらゆるアイディアが出たね。「これにはハーモニカを使おう」とか、「ここでは紙に櫛をはさんで吹いてみよう。ね、ここからの子どもの頃やったことないか、おもしろかったよね」とかって。

ジョージ ジョンが「ミスター・カイト」のアイディアを思いついたのは、僕らがケント州セブノークスで撮影してる時だ。昼休み、レストランへ行く途中でアンティーク・ショップに寄ったんだよ。みんなでぶらぶら見てたんだけど、ジョンはその時に古い大きなポスターを買った。それには「ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト」の歌詞がそのまんまといっていいくらい載ってた。

ジョン あの歌は19世紀のサーカスのポスターがもとなんだ。僕がアンティーク・ショップで買ったやつ。ちょうど「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」のテレビ用ビデオを撮影してて、休憩時間にその店へ行った時に見つけた。ミスター・カイトを中心にしたバラエティ・ショーの宣伝ポスターだよ。

パブロ・ファンキズ・フェアに出ていたヘンダーソン一家も出演するって書いてある。輪や馬を使った曲芸あり、ほんとに燃えてる大樽をくぐる人もいる。それからお馬のヘンリー君。バンド演奏は6時30分頃から。すべて会場はビショップゲイト。僕が考えた歌詞なんてほとんどないよ。そこに並んでるものをつなぎ合わせただけさ。実際の話、そのまんまだね。

あれはあんまり自慢できるもんじゃない。ちゃんと作ったとはいえないからね。とにかくあの時は『サージェント・ペパー』用の新しい曲が必要だったから、おざなりにやったわけさ。1967年 すぐに作らなきゃいけなかったんだ。そうでないと、あのアルバムに僕の曲はゼロってことになりかねなかった。1970年 (のちに)馬のヘンリーはヘロインのことだとか、またいろいろと話が出てきたけどね。あの時期の僕はヘロインなんて見たこともなかった。1980年

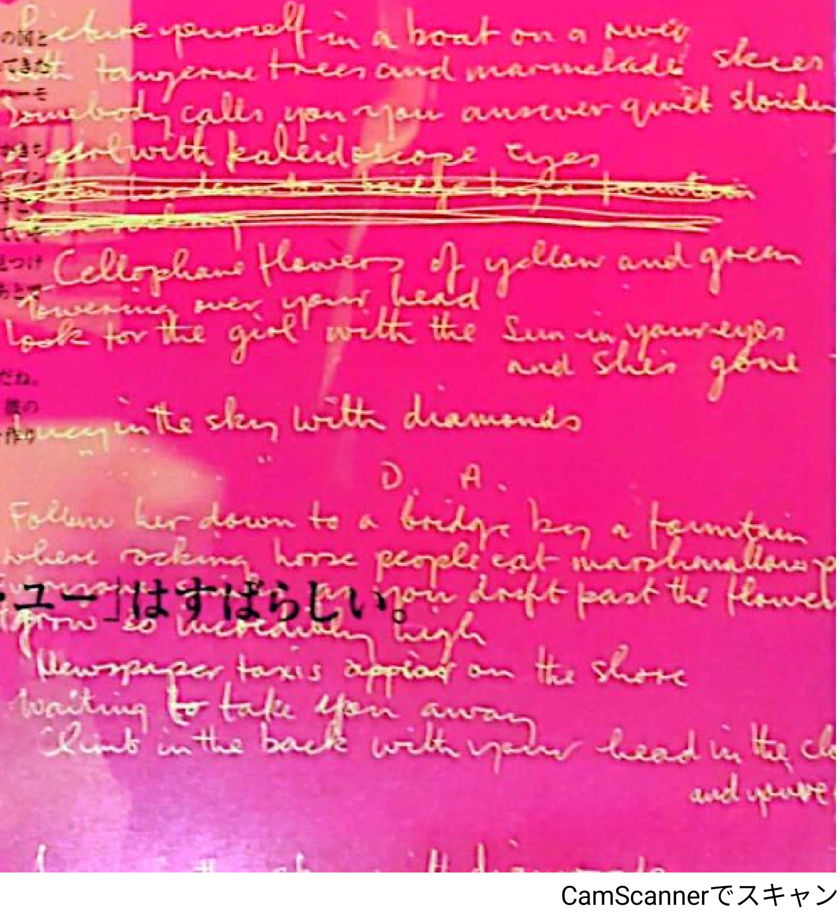


ジョン ジョージがインド的なすばらしい曲を作ったよ。
ある晩行ってみると、400人くらいのインド人と一緒にプレイしてるんだ。
あれは最高にスウィングしてる夜だったね、言うなれば。1967年

ジョージ 「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」は、僕がインドで少し過ごして、あの国とあの国の音楽の魔法に取り憑かれた結果生まれたものだ。楽器もいろいろ持ち帰ってきたよ。ハムステッドのクラウス・フォアマンの家で、ある晩食事の後に書いた。ペダル・ハーモニウムを弾いてるうちに曲が出てきたんだよ。

ラビ・シャンカールらにもずいぶん教えてもらった。座ってシタールを弾くやり方を何とかきちんと覚えようと思って。そもそも「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」は、ラビがオール・インディア・ラジオのためにレコーディングした曲をベースに書いた曲なんだ。あれはものすごく長い曲でね――30分か40分あるんじゃないかな――いくつかのパートに分かれていて、それぞれに曲進行がある。僕はそのミニ・バージョンをやったわけさ。彼の曲の中で見つけたサウンドとよく似た音を使ってね。3つの部分に分けてレコーディングし、それをあとでつなぎ合わせた。

ジョン (「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」は)ジョージのベスト・ソングのひとつだね。僕個人としても、彼の曲の中で特に好きなやつだ。あの曲では彼がクリアに出てる。彼の考えも彼の音楽もはっきりと現れてるよ。彼に備わった才能だな、ああいうサウンドを作り上げてしまうんだから。



リンゴ 「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」はすばらしい。
僕はあれ、大好きなんだ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ジョン　「ホエン・アイム・シックスティー・フォー」は、ポールがキャバーン時代に書いたものだ。僕らはそこへ、"膝の上には孫"とか"ベラとチャックとデイブ"とか、いくつか言葉を加えただけさ。ポールが昔から持ってた曲なんだよ。そういう、途中までしかできてないようなやつってたくさんあったのさ。それにあの曲はすごく受けた。アンプが壊れると、いつもあれをやってたよ。ピアノだけで歌うんだ。1967年

ポール　新聞にメーター・メイド(パーキング・メーターのチェック係の婦人警官)の"ラヴリー・リタ"の話が出ていたんだ。メーター・メイドをやめて交通監視員になったって。"メーター・メイド"という言い方がすごくアメリカっぽくて気に入ったし、僕にとって"メイド"というのは常にちょっとセクシーなイメージがあったんだよね。"メーター・メイド。僕のメーターをチェックしてくれないか、ベイビー"。まあちょっとそんな感じでね。それに彼女が軍人に似てるなって思って。あの歌はそうやってあちこちいじったりバラしたりしてたんだ。ヘズウォール(当時父が住んでいて、今は弟が住んでる)をブラブラしながら歌詞を考えてたのを覚えてるよ。そういうのを全部くっつけて、それからみんなでレコーディングした。

ジョン　彼は小説家のように仕立て上げるんだ。ラジオを聴いてるとマッカートニーに影響された歌がたくさん流れてくる——退屈な人間が退屈なことをやってるストーリーさ。郵便配達や秘書の仕事をしてる人間が故郷に手紙を送るとか。僕は第三者の歌を書く気はないね。自分のことを書きたいんだ。自分のことはわかってるから。1980年

ジョン　「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」は、ピアノに「デイリー・メイル」を立てかけて書いてたんだ。"ニュース・イン・ブリーフ"だったかな、それとも"ファー・アンド・ニア"って言うんだったか、とにかくその面を開いてたんだ。1967年　ふたつの話に目がとまった。ひとつはギネスの後継者が事故で死んだという話。それが一番大きな記事だった。ロンドンで自動車事故に遭って死んだのさ。1980年

ポール　ジョンは新聞記事から"彼は車を飛ばしているうちに我を忘れてしまった"という文章を引っ張ってきた。僕らはそれをちょっと変えた——"我を忘れた"なんて、少しドラマティックすぎるから。実際には車をぶっつけたんだぜ。でも歴史はみんなそうなんだよ、マルコム・マガリッジが言ってたことだけど、歴史はすべて嘘なんだ。なぜなら、報道された時点ですべての事実はゆがめられている。ヘイスティングスの戦いにしたって、ハロルド王は矢で目を射抜かれて死んだんじゃない。バイユーのタペストリーにそう描かれているだけだ——その方が見映えがするから、そういう絵にしたんだよ。いまハロルド・ウィルソン(当時の首相)について調べれば、彼が官邸とは別の場所にいたことがわかるだろう——シェア・スタジアムで演奏してたんじゃないかな。

ジョン　その隣の紙面には、ランカシャー州ブラックバーンの道路に約4000個の穴が開いていたという話が載っていた。1980年　レコーディングが近づいているのにまだ1ヵ所言葉がうまく入らなくてさ。"アルバート・ホールを○○するにはいくつの穴が必要か"って。まったく意味のない歌詞だよ、だけどどういうわけかその行だけうまく埋まらなかった。穴とアルバート・ホールがどうつながるだろう？　答えをくれたのはテリー(ドラン)だった。彼がアルバート・ホールを"一杯にする"って言ったんだよ。それで決まった。僕はずっとその言葉を捜していたんだけど、うまく出てこなかったんだ。必ずしも言葉やラインを与えてもらわなくてもいいんだ、ちょっと口にしたことがこっちの求めているものだったりするんだよ。1967年

曲作りは完全にポールと僕との共同作業だった。特にこの「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」ではそうだね。ほとんどの場合、そういうふうにして僕らは曲を作ってたんだよ。おいしい部分、"今日新聞を読んだ"みたいな簡単な部分をまず書く。そのうち煮詰まったりとか、やりにくくなったりすると、無理に続けずにそこでやめておくんだ。それからふたりで会った時に僕がそのできかけのやつを歌って聞かせると、彼が何かひらめいてその続きを書く。またはその逆だね。彼はこの曲に関してはあまり付け加えたがらなかった。このままで十分いけると思ったんだろう。お互い自分の曲をいじらせたがらない場合もある。人の曲だと、ちょっとこういうのを試してみようとか、わりと軽い気持ちでやったりするからね。1970年　ポールはこの歌にちょっとばかり美しいフレーズを加えてくれた。"I'd love to turn you on"(違う世界を見せてあげたい)ってやつ。彼の頭には前からその言葉があったんだけど、使うところがなかったんだ。すばらしくいい作品になったと思ったよ。1980年

ポール　ジョンと僕とふたりで取りかかった。出だしの部分とメロディはできていた。デイリー・メイルに出ていたブラックバーンの穴のおかしな記事、それがそこからどう続いていくかって僕は考えたんだよ。その次の記事に、誰々様がアルバート・ホールで演奏したというのが出ていた。それで全部を一緒にして、詩的に仕上げたんだ。なかなかいい感じになったね。

それから僕がちょっとピアノ弾きながら入れてみた。"目が覚めて、ベッドから落ちて、櫛でのろのろ髪をとかして……"って、僕の得意のジョークなんだけど、その部分しかなかったんだ。でもその時、"そうだ、出だしに目覚ましの音を入れよう"って思ってね。セッションでやってみたのさ。マル・エヴァンスにカウントとってもらって、"3、4——5"、そこで目覚ましが鳴り、それを合図に次の部分に入る。全部そうやって区切ったんだよ。

オーケストラを豪勢に使った部分もある。ぼんやり座ってる時にふと思ったんだ。"そうだ、すごくいいチャンスじゃないか。これこそぴったりの曲だ！"。そもそもクレイジーな歌なんだからさ、"違う世界を見せてあげたい"とか、いろいろサイケデリックな言葉が出てくるし。この曲ならうまくいく、絶対成功するって思った。僕はジョンにこのアイデイアを売り込んだんだ。"15小節分だけ、やりたい放題の部分を入れよう。そのあとの部分から雰囲気を変えるんだ。オーケストラにはそれぞれの楽器で一番低い音から始めて、一番高い音まで上げるように指示する。ただし高音に達するまでの時間は自分で決めていい"。実際に楽譜にもそう書いた。"ここからは自由"って。

僕はセッション・ミュージシャンのみんなに言ってまわらなきゃならなかった。"15小節分だよ。他のプレイヤーとそろえたければそれでもいい"。トランペット奏者というのは先に立って引っ張るのが好きだってことで有名だ。彼らはまわりにかまわず、誰よりも先に高音までいっちゃう。ストリングスの人たちは可愛い羊みたいにみんなで顔を見合わせて、"音上げる？"——"そうだね"——"じゃあ僕も上げよう"。そうやってちょっとずつ上げていく、そろそろと静かに、全員でそろえてね。それにしてもあのトランペットの音——完全にブッ飛んでるね。結果として、クレイジーなスウィングの嵐になった。それを他のいろんなアイディアと組み合わせたんだ。すごくエキサイティングだったね。12小節のブルースやるよりずっとおもしろいよ。アルバム全体がそういう感じで作られたんだ。

あの頃ようやくステレオを使いだした(まだ出てきたばかりだった)。だから僕らはあらゆるところであらゆるものをステレオ・ミックスにしていた。レコードではどうして必ず曲と曲の間が空くのか、って訊いたことがある。エンジニアが説明してくれた。昔から3秒空けることになっていて、それはDJがレコードをかける時に便利だからだって。でも僕らは"何かここに入れてもいいんじゃないかな、おかしな音をさ"って思ったんだ。そのうちエンジニアが周波数の話をしてるのを耳にはさんで、それについて訊ねたんだ。"つまり、低周波と高周波があって、一番周波数の高い音は犬しか聴きとれない"と言うんだね。"嘘だろ"って言ったら、低周波を武器として使う実験も行なわれたことがあるという——適切な周波数で強力な音波を流せば、都市をひとつ吹っ飛ばすことができるんだって。

それで僕らは思った。"どうかな、犬にしか聴こえない音波を入れてみたら。人間向けのレコードばかり作らなくたっていいじゃないか？"。ちょっとイカれた話になってきた。それであういうのをちょっとレコードの最後に入れたんだ。ほんとのおふざけでさ。"この部分は犬のマーサやフラッフィやローヴァーに聴かせてあげましょう"って。

ジョン　あれ(「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」)をみんなワイセツだと思ったらしい、まるでお門違いだね。あれを逆にかけるとどうにかなるとかなんとか。逆回転で聴いてみたら、何かワイセツなこと言ってるみたいだったけどね、僕らにはわからないよ。あれもよくある話のひとつだ。1969年

あの曲を放送禁止にした奴に会ってみたいね。それこそ"違う世界を見せてあげたい"だ、狭いところしか見えてないんだ。電力会社はどうしてドラッグを広めたって非難されないんだ？　電気をつけるには"スイッチ・オン"。あれにもドラッグをやるという意味があるだろ。隠れた意味があるじゃないか。何でも読み方次第で変わってくるんだよ。僕らの曲にドラッグの意味を読みとりたいなら、どうとでも読めるさ。でもそういう読み方をしてるのは向こうだ、奴らの方だよ！1967年

リンゴ　あのアルバムには何か隠されてるってみんな信じてた。まあ僕は何も隠れてないと思ってたよ。確かに動物の声はいっぱい入れたけど、僕らの声が入ってるのは、単にあの頃の技術がまだ未熟だったせいさ。最初のトラックで声が入ってしまうと、もう消せないんだ。次のトラックにもそのまま残っちゃうんだよ。

実際の声を入れたということでは、最先端のやり方もした。みんなでマイクに吹き込んで、それを逆回転させたんだ。聞かれちゃまずいことを喋ったわけじゃないよ。レコードを逆回転で聴いて何かまずい言葉が出てきたら、みんなすぐ通常のかけ方に戻すこと。そうすれば至極まともな言葉が聞けるだろう。

ジョージ・マーティン　アレンジの説明については、ジョンが一番曖昧だった。彼は雰囲気で伝えるんだ、色で表現するというのに近い。それにどの楽器なのか、どの部分なのかもはっきり言わない。ポールの場合は実際に私とピアノに向かい、ふたりで作業を進めた。ジョンはそうではなくて(たとえば「ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オブ・ミスター・カイト」の場合)、"ここはサーカスの場面だ。あのサーカスの雰囲気を出したい。この曲を聴くとおがくずの匂いが感じられるようにしたいんだ"というような言い方をする。つまりそのための現実の音を作るのは私なんだ。

CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　ブライアンはビジネス・パートナーのナット・ワイスとアメリカに行っていた。彼はちょっと不安になって――飛行機に乗る前にはそういう気分になる時があるだろう――ニュー・アルバムのカバーについてのメモを残していった。

ジョージ　ブライアンは自分の乗った飛行機が墜落するって予感がしたんだ。それで"サージェント・ペパー関連のものは茶色の紙袋"ってメモを送ってきたんだよ。

ポール　このアルバムは大作だから、ジャケットもほんとにおもしろいものにしたかった。全員の意見が一致した。僕らは若い頃、バスに30分揺られて、ルイス・デパートメントにアルバムを買いに行った。帰りのバスではそれを茶色の紙袋から取り出して、ジャケットを隅から隅まで"読んだ"のさ。当時は(今のCDと違って)大きなアルバムだったから、文字も多かったしね。それを読んで熱心に学んだわけだ。だからレコードを買ってくれる人にこちらから働きかけるのはいいことだと思ったんだよ。ようやく手に入れた金で買った思い出が僕らにもあるし、誰かが僕らに金を払うだけの価値を認めてくれるのはすごく嬉しかったからね。それでジャケットにはいつものビートルズの写真ではなくて、つまりタートルネックを着た感じの良さそうな4人組のじゃなく、もっとパントマイムっぽい、もっと"ミスター・ボージャングルズ"っぽいものにしようと思ったんだ。

服を選ぶために、舞台衣装を扱ってるバーマンズという店へ行った。昔の軍服を基本にして、最高にワイルドなものを注文したよ。あそこは映画を撮る時に"バーマンズへ行って軍服を見つけて来い"って必ず誰もが行かされる店なんだ。店にはカタログが置いてあって、どんな衣装があるのか見ることができる。エドワード朝のものがいいか、クリミア軍のがいいか？　僕らはいろんなところから変なものを選んできて、それを組み合わせた。みんなで自分たちの色を選んで、自分たちの服装を決めたのさ。"それはダメだよ、彼がそれを使うんだから……"ってやりながらね。

色は鮮やかなサイケデリック調にした。50年代に履いてた蛍光色のソックスみたいな

感じ(真っ黄色、ショッキング・ピンク、目の覚めるような水色)。僕らは頭の隅で、ごてごてに飾り立てた制服にしようと考えてたんだと思う。それが実は制服という概念に逆らうものになる。あの当時は誰もが"僕はキッチナー卿(イギリスの元帥で第1次大戦当時の陸相)に仕えていた"とでも言いたげな格好をしてた。バンドの若者は軍服着てライフルの銃身に花を飾ったりしてたしね。

ジョン　『ペパー』は、ビートル・ブーツとかあの手のものすべてが発展した形にすぎない。ビートル・カットもビートル・ブーツも、フラワー・プリントのパンツと同じくらい流行ってたんだよ。ヘイト・アシュベリーが『ペパー』から生まれた結果だなんて、考えてみたこともないね。僕にはいつだって、すべてが一度に起きているという感じがしてた。キングズ・ロードの若者はすでにアーミー・ジャケットを着ていたよ。僕らはそれを有名にしただけさ。1972年

ポール　サージェント・ペパーズ・バンドのキャラクターに入り込むため、僕らは自分たちのヒーローといえば誰になるだろうと考え始めた。"そうだなあ、このバンドなら誰をカバーにしたいと思うだろうか？　僕のキャラクターなら誰を尊敬するだろう？"って。それをリストにしてみた。マーロン・ブランド、ジェイムス・ディーン、アルバート・アインシュタイン――誰でもいい。どんな人でもいいんだ、僕らが望む人なら。そこから選んでいく……ディキシー・ディーン(昔エバートン校にいたフットボール・ヒーロー。よく父親に話を聞かされた。僕自身はあんまり知らない人だけど)、グルーチョ・マルクス、そういう具合にね。僕らの好きな人なら誰でもよかった。

ニール・アスピノール　スタジオにいる時、"おまえならバンドに誰を入れたい？"ってみんなから訊かれたのを覚えてるよ。おかしな意見がどんどん出てきた。ジョンはアルバート・スチュービンスを出そうと言ってた――それが誰なんだか、彼以外の人間はほとんど知らなかった。実はリバプールのセンター・フォワードだったんだよ。

ンゴ　『サージェント・ペパー』は特別なアルバムだったから、ジャケットの段階になっ僕らは大いに着飾ろうと思ったんだ。そして彼ら、つまり"ペパーズ"になろうと思っんだよ。ちょうどフラワー・パワーが頂点に達しかけていた頃だった。ラヴ&ピースの代だよ、すばらしい時期だったね。僕にとっても、世界にとっても。

ール　僕らは美術界の人たちを引き込んだ。僕はロバート・フレイザーとすごく仲良くてね。彼はロンドンのアート・ディーラーで、ビジュアル・アートに関しては、僕が知ってる中でも最高の目利きのひとりだ。当時彼と友だちになったことは最高にイカしたことだったんだよ。僕はアルバム・ジャケットのアイディアを全部彼に話した。彼はピーター・ブレイクというアーティストの代理人をやっていて、それにカメラマンのマイケル・クーパーともすごく親しかった。"マイケルに写真を撮らせるといい。背景はピーター・ブレイクに描かせて、それから全部をコラージュにする"。そうロバートが言った。

僕はピーターの家に行き、出発点として僕のささやかな絵を見せた。ジャケットの背景はどこか北部の雰囲気がする写真。ビートルズは市長からその楽団の賞を受け取っているところ。横にはよく公園で見かけるような花時計がある。内ジャケットで僕らは座っていて、まわりに僕らの大好きなアイドルたちの写真が並んでる。

それがもとのアイディアだったんだけど、ピーターはそれをコラージュでいろんなモチーフに入れ込んだ。それで全部決まって、僕らは夜にフォト・セッションをすることになった。いろんな植木が花屋から届いたんだけど、みんなそれをマリファナだと思ったらしい――違うよ、あの時は一切ドラッグ抜きだった。

ニール・アスピノール　あのジャケットはピーター・ブレイクとの話し合いから生まれた。ビートルズが背景に入れたい人物のリストを作り、マルと僕とであちこちの図書館へ行って写真を手に入れ、ピーター・ブレイクがそれを引き伸ばし、さらに色をつけ、そこからコラージュを作った。植物とか、あのジャケットに映ったすべてのものを集めた。

ポール　フールも僕らの仲間だった。アーティスト集団で、その後ベイカー・ストリートのアップル・ブティックの外装もやってくれたし、ずっと僕らの衣装を担当してたんだ。彼らは折り込みページですごいサイケ調の絵を描こうと考え、ビートルズもそのアイディアを気に入った。だけどロバート・フレイザーは反対だったんだよ。"絵がよくない"と言ってね。でも僕は言ったんだ、"いや、悪いけど君の考えはいいんだ。君は気に入らないかもしれないけど、これは僕らのジャケットなんだから"。僕らが最後までがんばったんで、予定どおりフールの絵でいくことになった。ロバートは"ダメだ、絵がよくない"って言い続けてたけどね。実際彼は絵を見る目がほんとに肥えていたんだよ。今なら僕も彼に賛成するけど、あの時はあれでも問題なかったんじゃないかな。ロバートはマイケル・クーパーのフォト・セッションで撮った4人の写真を折り込みページに使うべきだと言った。彼が正しかったよ。あの頃は友だち同士の交流が盛んで、みんながいろいろ意見を出してきたんだ。

ジャケットのアイディアを練り始めた時、一番の問題は、金がかかりそうだと思われたことだ。当時ジャケットにはあんまり金を出してもらえなかったんだよ。普通70ポンドかな。アンガス・マクビーンのような腕のいいカメラマンを入れてスナップを撮ってもらったら、それだけで70ポンドとんじゃうよ。

ニール・アスピノール　ジャケットが出来上がると、ポールはジョセフ・ロックウッド卿とミーティングをした。ロックウッド卿がアルバム・ジャケットを持ってきた時、僕はその場にいたんだ。そのジャケットを見たら、花とドラムとビートルズの4人は出てるけど――あとは大きな青い空だけ。背景の人間を全部消しちゃったんだよ。載せたら訴えられるか、ジャケットに出さないでくれと言われるかどっちかだろうって心配してたんだね。

ポール　"大丈夫さ、ジョー――すべてうまくいくよ"って言ったんだ。でも彼は、"訴訟をいくつも抱えることになる――とんでもない話だ。法務部がカンカンになる"と言う。だけど僕は言ったのさ、"心配ないよ、全員に手紙を書けばいい。気にする人なんか誰もいないって。みんなに手紙を出して、そのあとでまた僕に言いに来てよ"。

ニール・アスピノール　ポールは彼の意見を拒み、みんなから断られるはずはないって言った。で、結局ブライアンの事務所から全員に手紙を出したんだ。"ご承知いただければここにご署名ください"って。みんな署名してくれたよ。でもバワリー・ボーイズのレオ・ゴーシーだけは、代わりに500ドル要求してきた。彼は一番後ろの列だったから、彼の場所まで青空にすればそれですんだ。ブライアンはこのジャケットをすごく気に入ってたよ。全員に許可をとらなきゃいけないっていうんでちょっと頭抱えてたけど、アイディアそのものはすばらしいと思ってたんだ。

ジョージ　載せてほしくないって言ってきた人もいたよ。"私は淋しい人間じゃない"とか"ジャケットに自分の顔が出るのは嫌だ"とかってね。手紙を送って全員の許可をとらなきゃいけなくて、実際何人かには断られたんだ。

CamScannerでスキャン

ポール　当時のEMIはかなり植民地支配的なレコード会社だった。[illegible]インドや中国でレコードを売ってる——だから昔も今も、インドの受け止め方をすごく気にしてるんだ。サー・ジョー(実際には昔からのいい友達だけどね)がセント・ジョンズ・ウッドの僕の家へやって来たのを覚えてるよ。"なあポール、これは無理だよ、ほんとに。ガンジーを出すわけにはいかない"。僕は言ったのさ、"どうして？　僕らは彼を尊敬してるんだよ"。——"ダメだ、そんなことは関係ない。誤解される可能性がある。彼はインドじゃ神聖な存在なんだよ"。それでガンジーは外すことになった。

ニール・アスピノール　ガンジーは椰子の木の下に座るはずだったんだ。だから椰子を余分に持ってきて、彼のいるところを葉っぱで隠した。

ジョージ　いったい誰が選んだのか、いまだにわからないような人もいるね。混乱させるような人物をピーター・ブレイクがたくさん入れたんだろう。ただ単に、ありとあらゆる人がいるというだけ。僕が出したかったのは自分が好きな人だ。嫌いだったら出さないよ(他のメンバーはどうか知らないけど……)。

ポール　ジョンはヒットラーとかキリストとか、型破りな人物を入れたがった。ムチャクチャ恥知らずなことをやってみたかったのさ。ジョンは危ないことをするのが好きだから、僕には彼のやりたいことがわかった。賛成はしなかったけどね、でも彼はほんと、いつでもぶっ飛んだことをやろうとする奴だったよ。
ロバート・フレイザーとマイケル・クーパーは、僕らだけじゃなくローリング・ストーンズとも仲が良かった。ふたりが"ストーンズも出したらすごくおもしろいだろうな"って言って、それで隅に名前をちらっと入れたんだ。

ジョン　あのアルバム・ジャケットをよく見ると、ドラッグやってるのがふたりと、やってないのがふたりいるのがわかるはずだよ(ちょっとした"内輪"受けのジョークだ。仲間のふたりが他のふたりに分けてやらなかったってことさ)。1975年

リンゴ　ジャケットを見て、みんなそれぞれ好きに結論を出せばいい！　疲れた目で映ってる写真なんて、どこにでもあるだろ。

ポール　「ペパー」では、いつまでも表ジャケットを見て楽しめるような、ここに出てる人たちを眺め、裏ジャケットの文字を全部読んでもらえるような、そういうものにしたかった。小っちゃなバッジとか、ちょっとしたおまけもついてたんだよ。最初はおまけを入れた袋をジャケットの中に入れたかったんだけど、作るのがあまりに大変だということになってね。それじゃなくても十分たいへんだったんだし、レコード会社も必死でこらえてたのさ。普段の安っぽい紙ジャケットより、ちょっとばかり費用がかさんでいたからね。

ジョン　「サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド」は、僕らのキャリアで最も重要なステップのひとつだ。絶対それにふさわしいものにしなければいけなかった。僕らは努力したよ。そして、自分たちが目指したものを作り上げることができたと思う。そうでなきゃ出してない

ジョージ・マーティン　今、「ペパー」を振り返ってみると、あれはあの時代を象徴するアルバムだったし、おそらくあそこからレコーディングの形が変わったのだと思う。作っている時は意識していなかったがね。ビートルズはレコーディングの時間をもっと楽しもうとして、そうするうちにだんだん自分たちも成長していったんだろう。"もうステージでやる必要はないんだ、僕らだけのためにやることができる。スタジオでだけやれるんだ"と彼らは思っていた。だから違うアート・フォームになったんだよ——ライブ・パフォーマンスよりは映画を作るような感じだ。それが彼らの考え方や曲作りにも影響し、私のプロデュースにも影響した。
間違いなく「ペパー」は若者の興味の対象を象徴していたと思う。それがちょうど、若者の思想に革命が起きた時期とぶつかったのではないかな。あれはスウィンギング・シックスティーズの縮図だった。マリー・クワントやミニ・スカートや、ああいったもの——性の解放、マリファナのようなソフト・ドラッグの解放——そういうものすべてと結びついた。

ジョン　9カ月かかった。スタジオに9カ月こもりきりだったわけじゃないよ。仕事して、ちょっと休んで、仕事して、休んで、また仕事……。僕は1回ですませるほうが好きだけどね。ちょっと飽きてきちゃうんだよ。それまでのアルバムでは、たいてい3週間集中してやって完成させてた。終わったら1週間のんびりする。それから全体を判断できるようになるんだ。あのアルバムは金も一番かかったから、当然レコード会社はギャーギャーわめいてたよ。ジャケットの費用がどうとか、いろんなことでガミガミ言ってた。今じゃきっと、壁一面にジャケットを飾ってるだろ。1974年

ポール　完成した時、このアルバムはすばらしいって思ったよ。すごい進歩だって、とても嬉しかった。だって1〜2カ月前まで、マスコミも音楽誌もずっと言ってたんだよ、"ビートルズは何をやってるんだ？　きっともうひからびてしまったんだな"。だから気分いいじゃないか、「サージェント・ペパー」みたいなアルバムを出して、"そうだね、ひからびたんだろう、なるほどね"って。あのアルバムでみんなをあっと言わせることができて、ほんと最高の気分だった。僕はお祝いのパーティをやった——僕の記憶じゃ、週末中パーティのようなものだったね。"サージェント・ペパーよ永遠に"っていう電報をもらったのも覚えてる。"すばらしいアルバムだ"ってみんなが言ってくれた。
注目されてたことは間違いない。リリースされたのは金曜日だったんだけど、その次の日曜にサビル・シアターへジミ・ヘンドリックスを見に行ったら、オープニングが"サージェント・ペパー"だったんだよ。僕にとっては、あれが何より大きな賛辞だったな。僕はジミの大ファンだったし、彼は金曜から日曜までのわずかな間に曲を覚えたんだよ。
ジョンもあのアルバムにはとても満足してた。僕らのやりたいことにぴったりハマッたアルバムだったし、彼の曲もすばらしいのが入ってる。「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」は名曲だよ。

ジョージ　完成した「サージェント・ペパー」は僕も気に入った。これまでとは違うものを出せたんだ。ジャケットのコンセプトにもすごく満足できたよ。「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」はすごいオーケストラとすごいピアノの和音を使っていたし、「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ」は音楽的に好きな曲だ。でもそれ以外はごく当たり前の曲だね。

ジョン　「ペパー」はこれまでのものとはまったく違う。"よし、LSDキメたぜ"って、ヘラヘラやってたわけじゃない……。1967年

CamScannerでスキャン

ジョン　あの当時、批評はそんなに重要じゃなかった――何を言われようと、僕らは出せば売れたからね。最近じゃ僕はやたら敏感になってて、どんな批評でも気になるけど。当時の僕らはあまりにビッグで、怖いものなしだった。どんな批評が出たかもまるで覚えてないよ。僕らはほんと生意気で、新聞の切り抜きすら読まなかった。そんなのどうでもよかったし、自分たちについて書かれたものなんか読む気もしなかったよ。退屈なものばかりでさ。1970年

リンゴ　『サージェント・ペパー』はあの時代のムードを捉えていた感じがする。同時に多くの人たちに、本気で自分のやりたいことをやろうって気を起こさせたんだよ。あのアルバムが出るとみんなすごく気に入ってくれた。あれはモンスター・アルバムだったね。誰もが気に入って、誰もが本当にすばらしい作品だと認めてくれた。実際すばらしい作品だったのさ。

あのアルバムを作っている間は、みんな僕らがスタジオにこもってわがままやってるだけだろうと思ってた。ファブ・フォーが勝手なことしてるだけだって。映画でよくあるみたいに、有名になるとみんな最後にはスタジオにこもって壮大なオペラを書き始める。絶対実現しないようなやつをね。だけど僕らはほんとにあんな立派な作品をレコーディングしてたんだよ。あそこで生まれたものは、史上最も愛されたアルバムの1枚だと思うね。

ポール　他の人たちが僕らのやることに興味を持ち始めた。僕はいつも感じてたんだけど、ストーンズは僕らのやることをすぐ真似するんだよ。僕らが『ペパー』みたいなことをやれば、その1年後に彼らは『サタニック・マジェスティーズ』を出す。あの頃は他にも、たとえばドノバンなんかはすごくファンキーないいレコードを出してたけど、僕らみたいにとんでもない楽器の使い方を考えたり、アートに凝ったりする人はいなかったと思うよ。

これまで何度も言ってることだけど、一番影響を受けたのはビーチ・ボーイズのアルバム『ペット・サウンズ』だったんだ。僕があそこからいただいたのは基本的にハーモニーだ。それにあれは実のところアヴァンギャルドじゃない、ストレートな音楽、サーフ・ミュージックだよ――でもちょっとだけ、歌詞やメロディの面から、解釈を広げたのさ。

ジョン　要するに『サージェント・ペパーズ』というアルバムは、曲をつなげて入れただけのものだ。あの時はそれもおもしろいアイディアだったけど、今じゃ何の意味もないさ。

特に気に入らないのがいくつかある。出来が良くないんだ。「ルーシー・イン・ザ・スカイ」も好きになれない部分があるし、「ミスター・カイト」のサウンドにも一部まともじゃないところがある。「ア・デイ・イン・ザ・ライフ」は好きな曲だけど、それでもやってる時はあの2倍くらいいい曲だと思ってたよ。もっと考えてもよかったんだろうけど、僕はあれ以上時間かける気にはならなかっただろうな。「サージェント・ペパー」はいい曲だ、「ゲッティング・ベター」もいい曲だ。ジョージの「ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー」もすばらしい。だけど、曲を全部つなげるっていうコンセプト以外、あれにどんな音楽的意味があるっていうんだい？ 1967年

ポール　あのアルバムの雰囲気はあの時代の精神と合っていた。僕ら自身があの時代の雰囲気に溶け込んでいたからね。その時のムードに合わせようって考えたんじゃない――たまたま僕らがそういうムードになっていたんだ。それに僕らに影響を与えたのは時代全体の雰囲気だけじゃない。僕はむしろ中心から外れたところに、何かあてはまるものを探していた。あの時代に実際に感じられた雰囲気というのは、ザ・ムーブとかスパイクス・ウォーとか、そういうのに代表されてた感じだけど――でもそういうものの外側にはアヴァンギャルドな雰囲気があったんだ。それが『サージェント・ペパー』に入り込んでいたと思う。

明らかに人々のムーブメントが起こり始めていた。僕が言いたいのはこういうことなんだ、つまり僕らはそのムーブメントにあやかろうとしていたんじゃない――僕らもその一部にすぎなかったんだ。それまでだって常にそうだった。はっきり言っておきたいんだけど、ビートルズは世代のリーダーではなくて、スポークスマンだったんだよ。僕らはアート・スクールの若者がやっていたのと同じことをやっていたにすぎない。あれはワイルドな時代だったね。なんだか時間がワープしてるみたいだ――あの頃の僕らはすばらしい電話の世界にいて、ベルベットのパッチワークの服を着て、香なんか焚いてた。今じゃすっかりおとなしい感じになっちゃったね。

CamScannerでスキャン

ジョージ　1967年の夏は僕らのサマー・オブ・ラヴだった。音楽祭があちこちで開かれ、どこへ行ってもみんなスマイルしながら芝生に座って紅茶を飲んでいたよ。その大半は親密で、マスコミが騒いでるだけだったけど。それでもバイブレーションは確かに存在していた。自分の友だちがどうしているか、感じ取ることができるんだ——アメリカで同じような目標を目指している人たちがどうしているか——たとえ何マイルも遠く離れていてもね。みんながバイブレーションを感じることができたのさ。

リンゴ　もちろんああいうのはごく小さな世界で起きていたことだ——イギリス、アメリカ、オランダ、フランス——大都市の話だよ。ウェイブリッジの僕のところで働いてた、ポール・ダドリーってアーティストはね、僕と一緒にいる時はビーズつけてアフガンのコートを着ていた——だけど北部の故郷に戻ると茶色のスーツになるんだよ。フラワー・パワーがあんまり通じない場所もあったのさ。たとえばオールダムとかブラッドフォードとか。リバプールでもあんまり認められなかっただろう。それでもやっぱり、世界的な動きって感じがしたけど。

ポール　1967年という年は黄金時代だった気がする。ロンドン中のクラブやショップを荒らしまわった思い出があるよ——キングズ・ロードにフルハム・ロード、チェルシーにメイソンズ・ヤード（そこにインディカ・ギャラリーと本屋があった）。いつでも太陽が燦々と降り注いでいたような感じ。僕らは突拍子もない服を着て、突拍子もないサングラスをかけていた。あとはとにかく音楽だね。サマー・オブ・ラヴと呼ぶのはちょっと気楽すぎるかもしれないけど、確かに光り輝く夏だったよ。

　サンフランシスコからポスターが届いた。みんなああいったサイケデリック調のやつで、最高だったね。ジョージはその年サンフランシスコへ行き、僕も似たような旅行をした。"やあ、こんちは"みたいな感じだよ。ある朝はグレース・スリックの寝覚めを襲ったりして。ジェファーソン・エアプレインのジャック・キャサディにも会った。とにかく実際に行って、どういうところか見てみたかったんだ。ツアー・バスがヘイト・アシュベリーに移動する前にね。

デレク・テイラー　僕は1964年12月にビートルズのもとを離れ、3年間ハリウッドで暮らしていた。いろんなことがすごく"順調"に行っていた。つまり、僕はあまりにも抱え込みすぎていたということだよ。ザ・バーズ、ビーチ・ボーイズ、ヴァン・ダイク・パークス、ママス&パパス、チャド&ジェレミー——USポップの知的な側だね。とても無理だって、僕は手を引いたんだ。

　とはいえ何もしないでいるのは嫌だから、モントレーで初めて開かれるインターナショナル・ポップ・フェスティバルの発起人になった。発起人は僕を含めて3人。1967年6月に開催の予定だった。すぐに小さな安っぽい事務所の外へ掲示板を出してね。最初に載った名前はペトゥラ・クラーク。モントレーの会場はすでに3日間の予定で押さえてあった——8000人入るところで毎日5つのコンサートをやる——差し迫った問題は残りの出演者の確保だった。でもそこで僕たちは考えたんだ。"フェスティバルは何のためにやるんだ？ どうして誰かが儲ける必要がある？"。フェスティバルはみんなのため、音楽と、愛と、そしてそう、花。それが僕のスローガンだった。僕らはそのスローガンをバンパーのステッカーやポスターに掲げた。そしてそれがみんな現実になったんだよ。このフェスティバルは善意に満ちた催しになった。誰もが報酬なしで出演したんだ。

　準備の方はLSDのおかげで簡単だった。もうホントに、すべてが音楽と愛と花、という感じになっていた。バンパー・ステッカーだけじゃない。まわりの空気にも、オフィスにも、電話で話していても、そういう雰囲気が満ちていた。僕たちは"問題"という言葉を取り払うことができた（たとえば"どうやって8000人分もの食料をまかなう？"という問題）。うまくいかないはずがない、というフリをするのではなく——現実感覚を失ったらあのフェスティバルは実現しなかっただろう——とにかく絶対"情緒不安定"にだけはならないようにしたんだよ。

　自分の時間なんかなかったね。最高にきつい仕事で。でもそれを後までやり遂げたんだ。一番扱いにくかったのは、まずは警察と、年を召した議員たちだった。金や何かを使ってうまいこと追い払と、次はヒッピーだ。全員に無料で食べ物と飲み物と音楽を提供るべきだと信じてる連中さ。それにヘルズ・エンジェルス（俺たちにただでビールとヤクをくれよってね）。そして最後にLSD常用者だ。までは人に助けられてたような奴らが、今度は自分たちが"セキティ"役を引き受けて、みんなを安全にフェスティバルへ案内しよ思い立ったんだ。"ヘイ、それもいいじゃないか？"ってなもんさ。察と消防署は、初めは大反対だった。けれどもわずらわされるがまったくないとわかったとたん、すっかり落ち着いてのんびりって、お互いに花を渡したりしてたよ。僕は最後の記者会見署長にカットグラスのネックレスをプレゼントした。"これはあの贈り物です。これで私たちはひとつになれます"ってね。ことを吹き出しもしないで言えたんだ。彼も恥ずかしがりも

せずに受け取った。そういう時代を想像してごらんよ——無理かもしれないな。でも実際、モントレーでそういうことが起きたんだ。ずっと昔のことさ。

　音楽的にも、あのフェスティバルは言葉じゃ表現できないくらいにすばらしかった。どれほど褒めても褒めきれないようなアーティストばかりだった。ギャラなしで出演しようという申し出も立派だけど、パフォーマンスそのものがすばらしかったよ。全部のショーを見たら——僕は忙しくて無理だったけど——ポップ界の有名なスターをずらりと集めたようなもんさ。あれだけのメンツがそろうことは、今後二度とないだろう。夢の国？ そんなもんじゃない？ この世の楽園？ そのとおり！ どの世代も、ああいう幸運を味わうべきだな。

ポール　ジョン・フィリップスとあと何人かがロンドンの僕のところへ会いに来て、モントレーにビートルズも出てもらえないかと言うんだ。僕らは無理だって言ったんだけど、ジミ・ヘンドリックスを推薦した。それまで彼らはジミのことを知らなくて、"うまいのかい？"とか言ってたね。ジミは出演した。最高だったよ。

ジョージ　僕はその場にいなかったから何も知らない。僕らはセント・ジョージズ・ヒルでアシッドをやりながら、どんなだったんだろうなって思ってただけだよ。

PAUL AFTER I TOOK IT, IT OPENED MY EYES. WE ONLY USE ONE-TENTH OF OUR BRAIN. JUST THINK WHAT WE COULD ALL ACCOMPLISH IF WE COULD ONLY TAP THAT HIDDEN PART. IT WOULD MEAN A WHOLE NEW WORLD. IF THE POLITICIANS WOULD TAKE LSD, THERE WOULDN'T BE ANY MORE WAR OR POVERTY

ポール　あれから僕は目覚めた。僕らは自分たちの脳の10分の1しか使ってないんだよ。考えてごらんよ、その隠れた部分を引き出せたら、みんなどれだけのことができるか。すっかり新しい世界が開けるはずだ。政治家がLSDをやれば、この世には戦争も貧困も飢餓もなくなるよ。1967年

JUL 29 1967

British Minister Of State Horrified By Beatle's Views

LONDON (UPI)—A woman government minister said Friday she was horrified by Beatle Paul McCartney's views on drugs.

"I was in the hairdressers yesterday and this magazine was passed to me to while away the time while I was under the hair dryer," said Miss Alice Bacon, minister of state at the Home Office, during a parliamentary debate on drug-taking.

"There was a long article in it called 'The Love Generation,' and statements from various people who are pop singers and managers of pop groups. I just say I was horrified by some of the things I read in it," she said.

She added McCartney had said God was in everything and he had realized this from LSD. Beatle Manager Brian Epstein had said he was wholeheartedly on the side of hallucinatory drugs, according to Miss Bacon.

Miss Bacon said: "Our young people do take what some of these pop stars say quite seriously.

"What sort of society are we going to create if everyone wants to escape from reality into a dream world?"

ール　アシッドが出まわり始めた頃、一度やったら世界変わるって言われていた――人生が変わる、考え方ももかも新しくなるって。ジョンはそういう話にかなり惹かたと思うけど、僕はむしろ怖い気がした。"これだけはめた方がいい"、そう思った。"このおかしなやつをやら、僕は二度ともとに戻れなくなる。とんでもない！"だから僕はすぐには手を出さなかった。グループの中、ちょっとのらりくらり逃げてるような感じに見られてろうね。仲間うちのプレッシャーってやつさ！ ほんとビートルズは究極の圧力団体になってたんだ。彼僕の仲間で、同じミュージシャンだしね。1965年にオフをとって、ロサンゼルスで過ごしたことがある。ッドに家を借りたんだ。ジョンとジョージとリンゴはアシッドをやってた。でも僕はその時手を出さな。僕がやりだしたのはかなりあとのことだよ。つう思うようになったのさ。"僕だけやらずにいたら、らったビートルズということにならない"って。年6月19日、僕はITNからドラッグ使用についてイーを受けた。19日ってことは僕の誕生日の翌日だ――なんてすばらしい日だろう！ ITNの人がふ来たのを覚えてる。そのあとニュース・キャスタ、"あなたがドラッグを使用しているというのはか？"。僕の家の玄関に来てたんだよ――帰っ言えなかった――それで思った。"ハッタリでか、ほんとのことを言うか、どっちかだな"。そ決断した。"いいじゃないか。ほんとうのことを言ってやる"。

先にレポーターと話をして、こう言ったんだ。"いいかい、こういうことは承知しておいてくれ。僕からみんなにドラッグをやっていると言えば、それは僕に責任がかかってくるだろう。でもこのニュースを世間に広めるのは君たちなんだからね"。僕はそう言ったんだよ。"僕は君たちに話すんだ。でも君たちの方で、このニュースは若者に悪影響を及ぼすかもしれないと思ったら、その時は放送しないでくれ。僕は事実を話すけど、君たちが世間にすべてをバラまいたら、もうそれは僕の責任じゃない。こんなこと説いてまわる気はあんまりしないけど、君たちが訊くのなら――ああ、僕はLSDをやってるよ"。その時点で4回くらいやってた。だからそう話した。それくらいはたいした量じゃないと思ったけど、それが大ニュースになっちゃったんだ。

ジョン　誰がドラッグをビートルズに与えたかって？ ああいうものを発明したのは僕じゃない。僕はある人から買って、その人は他のある人から手に入れたんだ。別に僕らが作り出したわけじゃないさ。

ビートルズがLSDやってるっていう大騒ぎが起きたのは、イギリスのテレビ局がポールにインタビューして、"LSDやったことありますか？"って訊いた時からだ。ポールは"イエス"と答えた。すると次にテレビ局は、"このことを公表することについて責任を感じますか？"と訊ねた。で、ポールは、"うん。だからこの映像は流さないでくれ"と言ったのさ。でも当然、隅から隅まで流れたよ。5年後に同じタイプの人間が、"ポール・マッカートニーとビートルズはドラッグを宣伝している"と言い出した。そんなことしてないさ。僕らが宣伝してるだなんて、どうして言えるんだ？ 奴らは僕らのやることなすこと捻じ曲げて伝えてるっていうのに。1975年

僕らが若者に何か影響を与えたなんて思わない――誰が何をするにせよ、それは自分のためにやってるんだ。1972年　いわゆるアイドルだからって、僕は何の責任も感じたことないね。そんなもの期待する方が間違ってるよ。みんなは自分たちの責任を僕らに押しつけてるだけだ。ポールがLSDやってるって認めた時にしてもそうさ。ポールが責任ある立場だってことを気にかけてたなら、新聞社の方にだってそれなりの責任があるわけじゃないか。記事にしなけりゃいいんだよ、もしもあいつらが、みんなが真似するかもしれないと純粋に心配してるのならさ。1967年　レコード買った人間はこっちの言うことをすべてそのまま受け入れるだなんて幻想だよ。そんなわけないだろう。1975年

ポール　あのことでみんなに攻撃されたと言えるのかどうか。半々だったんだよ。あの年、あれが流行ってたのは多くの人が知ってたことだ。友だちの反応は"おい！ おまえが喋ってるのニュースで見たよ"って、その程度だった。確かに新聞はどこも僕を叩いたけどね、でも僕ははっきりと警告してるんだよ、危険はあるって。みんなを煽動してLSDをやらせるようなことはしたくなかったから。確かインタビューの中でも言ったはずだ。

あの頃にはみんなやってたよ。たまたま僕に訊きに来たというだけさ。僕の友だちの誰に訊いたって、同じ答えが返ってきただろう。僕が訊きやすい立場だったんだろうね、ITNに一番近かったんだよ。

ジョン　真実なんてこれっぽっちも伝わってないと思う。新聞に書いてある真実といったら、新聞の名前だけだ。わざと悪意のある書き方をしてるって言いたいんじゃない。コントロールしようがないのさ。真実を伝えることができないんだ。だからシステムそのものがどこかおかしいんだね。

テレビの方が少しはマシだけど、それでもやっぱり、真実を伝えることを許さないシステムに抑えつけられてる。みんなが思ったことをそのまま口に出せないようなシステムが、いまだに機能してるんだ。昔より思ったことを言えるようになったとしても、言えば規制やルールが押しつけられる。そういうルールで何かを守ってるんだよ。でも何かを守ろうとすれば副作用が出てくる。そうなればどこで線を引くかってことだ。今の僕らはセックスを描くことはできないだろ。システムが許さないからさ。1968年

ジョージ　新聞にでかでかと載ったね。マスコミは大喜びさ。僕はポールが黙ってるべきだったと思ったけど――何も言わずにいてくれたらよかったと思うよ、あれですべてがメチャクチャになったんだから。あのことで僕らはいつまでもしつこく悩まされた。誰かが噂を聞きつけて、ポールにインタビューに行ったに違いないね。

それにしても妙な気分だった、だって僕らは1年半くらいの間、ずっと彼にLSDをやらせようとしてたんだ――ところがある日テレビをつけると、彼がLSDについて喋ってるんだから。

ジョン　あいつはいつでも重大発表のタイミングをきっちり計ってるよね。1972年

ポール　他のメンバーは僕があれを計画的に発表したものとずっと思ってた。でも実際には、僕は取材チームのカメラにつかまって、ほんとのことを言うかどうか、その場ですぐ判断しなきゃいけなかったんだよ。

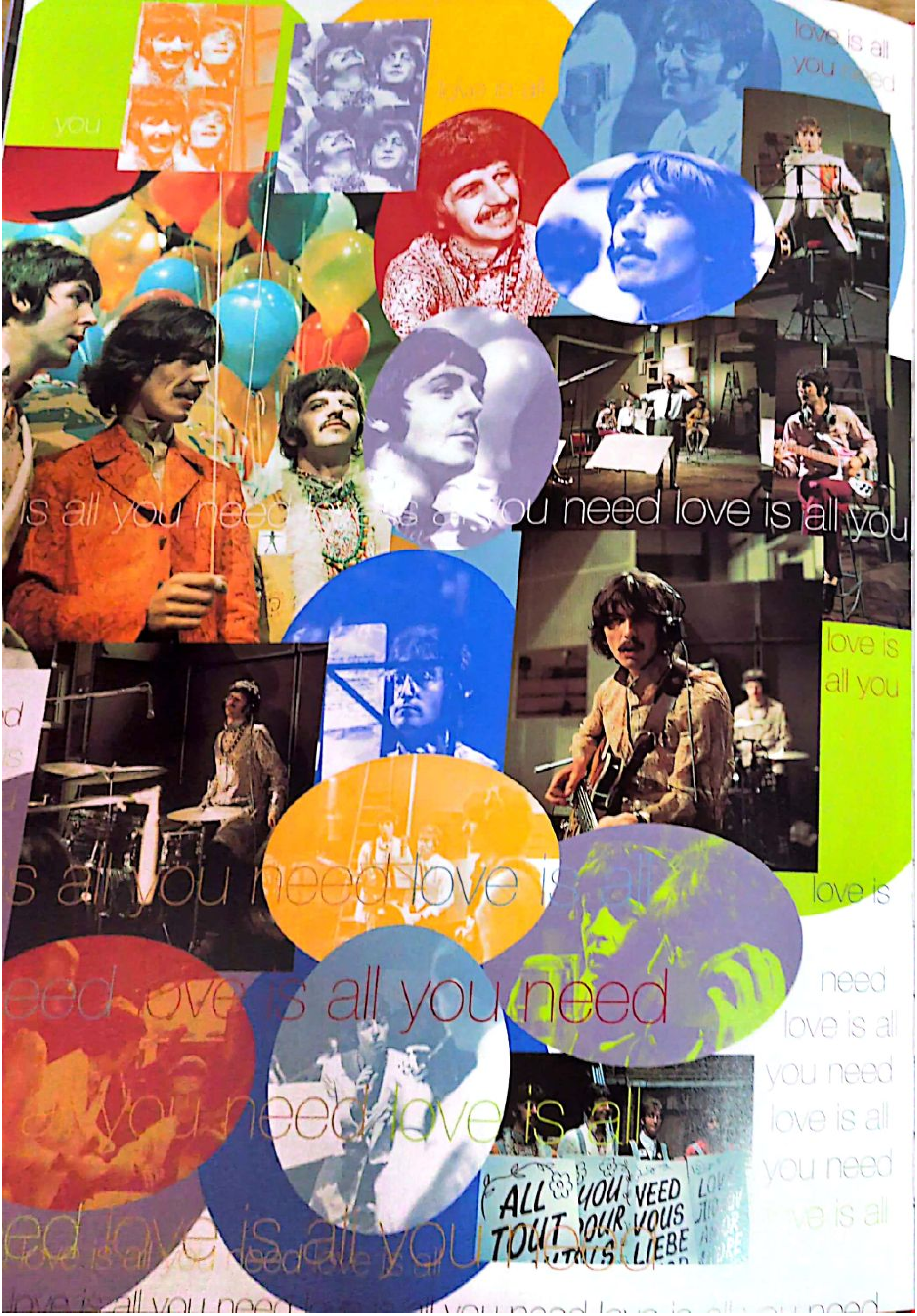
リンゴ　僕らはLSDの話を誰にでもベラベラ喋ってたわけじゃない、僕らを知ってる人にしか言わなかった。ところがポールはみんなに公表してしまおうと決めちゃった。彼はいつでもそういうことを喋っちゃうんだよ。世間の反応はさまざまだった。問題は、あれでマスコミは僕ら全員に関わる口実を手に入れたってことさ。僕個人としては、マスコミの知ったことじゃないと思った。でもいったんポールが口を開いてしまうと(これはビートルズのメンバーの誰が何を言ってもそうなんだけど)、他の3人も関わらざるを得ないんだ――僕らは愛情を持って参加したさ、お互いを好きだったからね。だけど僕自身は、あんな騒ぎに巻き込まれたくはなかった。

マスコミはああいった質問を始める。"ドラッグをやるのは正しいことだと思いますか、あなた方の言うことを世間の人たちが真似するというのに？"。あの頃、僕らは、誰もがやるべきだと思ってた。みんなマリファナ吸ってアシッドやるといいって思ってたよ。27歳の僕があの頃やっていたのはそういうこと。あれは愛のドラッグだったんだ――僕らの同志への愛さ。

ジョン　僕らは人生をどう生きろだなんて指図はしないよ。僕らにできるのは――僕らは世間の目にさらされる立場だからね――自分たちのやってることを表現する、それだけさ。僕らに起きていることをどう判断するかはみんながそれぞれでやることだ。みんなが僕らをガイド・ラインとして使ってるにしても、僕らは自分たちにとって正しいことをやるように努めるしかない。それがみんなにとっても正しいことであることを祈るね。1968年

ポール　**危険は認めるよ、**
でも僕は目的を持って
これを使ったんだ。
人生の意味を
見つけるためにね。

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

リンゴ　僕らはあれだけの大観衆を惹きつけられる人気があった。楽しかったね。いま考えてもワクワクしてくるよ。「アワー・ワールド」は愛と平和のためだったんだ、みんな銃に花をさしてさ。

リンゴ　「アワー・ワールド」は最高だったね、世界中の何百万、何千万という人たちに電波が届けられたんだ。衛星放送で世界に放送された初めての番組なんだよ。今じゃ当たり前のことだけど、あの時僕らがやったのが一番最初なのさ。ほんとワクワクしたね。僕らは史上初ってことをたくさんやった。どれもエキサイティングだったよ。

ポール　僕はあの番組の前夜、寝ないでシャツに絵を描いてたんだ。トライケムという薬品があって——これでシャツに絵を描くと、洗濯しても落ちない。僕はこれを使って、しょっちゅうシャツに絵を描いてたんだ。すごくおもしろいんだよ。でもあの時のシャツは番組のあとで盗まれた——手に入れるのが簡単なら、失うのも簡単ってわけ。

ジョージ　何百万人見たのか知らないけど、とにかく天文学的な数字だったらしい。ああした衛星放送網が可能になったばかりの番組だったんだろう。日本やメキシコやカナダ——あらゆるところから電波が送られた。

あのレコーディングは覚えてるよ、僕らは"ラヴ・ジェネレーション"とでもいうべき人たちを引き込もうと思ったんだ。よく見ると、フロアにミック・ジャガーが座ってるのがわかるだろう。エリック・クラプトンもすぐそばにいたはずだよ、モロにサイケ調の服とパーマ頭でね。オーケストラもその場にいて、生で演奏したんだ。あれはよかったな。ちょっとリハーサルして、それから"君たちは12時の出番"って言われた。上にいる男が指で示すとそれで終わり。僕らはキメたよ——ワン・テイクで決まりだ。

ニール・アスピノール　プロの撮影だった。カメラ・クルーと派手な格好の奴らがいっぱいいたのを覚えてるよ。見事にサイケデリックだった。ところがBBCは白黒で撮影してたんだよ！　それがわかってれば自分たちで撮ったのに。

リンゴ　僕らは着飾るのが大好きで、あの番組のためにスーツを仕立てたんだ。フールのサイモンとマリケが僕のを作ってくれた。とんでもなく重たくてさ、ビーズとかびっしりついてて、1トンくらいあったよ。

みんな幸せそうな顔してるだろ。僕の隣にはキース・ムーンがいた。みんなが参加してた——素敵な時間だったよ、音楽的にも精神的にも。それにあの番組に関しては、曲を書いたふたりがすばらしかった、まさに核心を突いてたね。

ポール　ビートルズは「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」を歌った。あれはジョンが中心となって作った曲だよ。あの頃僕らは何曲か持ってて、そのうちのひとつだ。ほんとピッタリの曲だから、あの番組のために書いたのかもしれないね（曲が決まってからは、もちろん番組に合うようにアレンジした）。どっちみちジョンの曲のどれかが使われることになったんじゃないかと思うけど。バーンズのオリンピック・スタジオに行ってあの曲をレコーディングした。誰もが言ったよ、"ああ、これを番組でやるべきだね"。

ブライアン・エプスタイン　僕はまったく心配していなかった。彼らは必ずすばらしい曲を作ると確信していたよ。あのTV番組に出ると決まったのは放送の数カ月前だったが、その日がどんどん近づいてきても曲がまるでできていなかった。3週間くらい前になってようやく本腰を入れて取りかかったんだ。10日でレコードは完成した。

あれはインスパイアされて書いた曲だよ。世界中に中継される番組で使うものだから、彼らは世界にメッセージを送りたいと考えたんだ。あれ以上すばらしいメッセージはないんじゃないかな。背筋がゾクゾクするような、美しく、すばらしいレコードだ。

ポール　スタイルとしては少し初期に戻った感じだろうけど、実際には2周目の軌道に入ってるんだ。要するに、新しい感覚で昔を振り返ってる。1967年

ジョン　とにかくワン・トラックやってみた。コードを知ってるのは僕だから、僕がコードを弾いた。あれは何だったのかな、ハープシコードか。ジョージはバイオリンを弾いてる。そういう感じがいいんじゃないかと思ってさ。で、ポールがダブル・ベースをやった。でもふたりとも弾き方がわかってなかったから、一風変わった音が出たよ。オーケストラみたいに聴こえるけど、実はあれ、ふたりのバイオリンとダブル・ベースなんだ。それから僕ら思った。"そうだ、このちょっとフリーキーなオーケストラに、もっとオーケストラを加えてしまおう"って。だけどあの日実際にリハーサルでやるまでは、どんな音になるかわからなかった。やったらやっぱりちょっと変だったね。1980年

ジョージ・マーティン　ジョンはあのテレビ番組のために「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」を書いた。ブライアンが突然現れて、世界で中継される番組にイギリスの代表として出ることになったから曲を書いてくれって言い出したんだよ。ある種、挑戦だったね。曲を形にするまでに2週間も猶予がないんだ。しかもそれから、3億人もの人が見る番組だと聞かされてね。あの当時では天文学的な数字だよ。あの曲のアイディアはジョンが考えついたんだが、まさに理想的で、すばらしいものだった。

ジョージ　当時の風潮を考えると、あの曲をやるのはすばらしいアイディアに思えた。他はカナダの伝統的な編物を見せるとか、ベネズエラでアイルランドの木靴ダンスをやるとか、そんなのばかりだったんだ。"じゃあ、僕らは「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」をやろう、これはちょっとした神の宣伝になる"って思った。あの歌がもっと前から出来てたのかどうかは覚えていない。あの頃の僕らはたくさん曲を書いてたからね。

ジョージ・マーティン　アレンジにかかって、出だしに「ラ・マルセイエーズ」を入れ、ストリングスを最後に入れた。だがそこから困ったことになってしまったんだ。演奏に使ったこまごまとしたものの中に、「イン・ザ・ムード」がちょっと入っていたんだよ（メンバーは知らなかった）。「イン・ザ・ムード」には著作権がないとみんな思っていた。実際そうなんだ——だがイントロだけは違う。あの部分はアレンジされているんだ。私が使ったのはそのイントロ部分で、あれは著作権のある作品なんだよ。EMIが私のところへやってきてね、"君がこれをアレンジに使ったのだから、何かあった場合、会社に損害がないよう保障してくれよ"というんだ。"冗談だろう、私はこのアレンジで15ポンドしかもらってないのに"。向こうもジョークがわかったらしい。キース・ブロウズだったか、とにかく著作権の持ち主に使用料を払ってくれたんだよ。それで私はアレンジを完成させた。「グリーンスリーブス」も入れてある（テンポを半分に落として）。それにバッハを少しと、「イン・ザ・ムード」を少し織り込んでね。

ポール　番組の撮影でEMIへ出かけた。レコーディングはあらかじめたくさんやってあったから、そのバッキング・トラックに合わせて生で歌った。すべてジョージ・マーティンの力を借りてやったんだよ。あれは楽しい1日だった。朝早くカメラ・リハーサルに行くと、ズラッとオーケストラがいて——「グリーンスリーブス」とかをあの曲の途中に入れるためさ。誰でも連れてきてくれって言われてたから、僕らはミックやエリック、友だちに奥さん連中をいっぱい呼んだ。

ジョージ・マーティン　私は生放送のカメラの前にいた。EMIの大きな1番スタジオで行なわれたものだから、いささかあわてた感じになったね。当時コントロール・ルームは階段のすぐ下にあった。それほど広い部屋ではないよ、そこへテープ・オペレーターのジェフ・エメリックと私が入っていた。番組のレコーディング用にベーシック・トラックは準備してあったが、大部分は生で録るつもりだった。オーケストラも呼んであり、歌もライブで、もちろん観客もいて、生のテレビ番組ということはみんなわかってる。カメラはコントロール・ルームにも入っていた。

あと30秒くらいというところで電話が鳴った。番組のプロデューサーからだった。"スタジオとつなげなくなってしまったようです——キューはあなたが出してください。それではすぐ放送が始まります"。"やれやれ、トチったら3億人に見られてしまうのか"と思った。その時は笑うしかなかったね。

ニール・アスピノール　「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」はすぐさま1位になった。あの曲は当時の空気、フラワー・パワーを始めとするいろんなムーブメントを表現していると思うよ。ほんとに「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」という時代だったんだよね。

CamScannerでスキャン

リンゴ　7月にみんなで休暇をとってギリシャへ行った。島を買うためさ。アレクシス・マーダス――"マジック・アレックス"も一緒だった。

ジョージ　アレックスにマジックめいたところなんかすこしもなかったよ。だけどジョンは彼には何かがあるって思ってて、それで彼は僕らと親しくなったのさ。彼の父親がギリシャの軍部と何か関係あったらしくて、アレックスはあそこの軍の人間を全員知っていた。奇妙な話だね。

ジョン　ギリシャの政治状況なんて心配してないよ。僕らに害が及ばなきゃいいんだから。ギリシャ政府が全員ファシストだろうとコミュニストだろうとかまわない。そんなのどうでもいいよ。イギリスだってひどいのは同じだろう。むしろこっちの方がひどい奴は多いさ。僕はイギリスもアメリカも見てるけど、どっちの政府にも興味ない。みんな同じなんだよ。政治家がここでやってることを見てみろ。ラジオ・キャロラインを押えつけて、ストーンズを見捨てて、その一方じゃ何億という金を核武装につぎ込んでる。それにこの国はアメリカ軍の基地だらけだ。誰も基地の事情なんか知らされてないだろ。1967年

ニール・アスピノール　島をひとつ買おうって話になってた。いったいどういうことだったのか僕にはわからないけど――実際、ちょっと馬鹿げてたね。家を4軒建てて、その4軒を全部トンネルでつないで、ぶつかった中央にドームを作るっていうんだよ。

ジョン　僕らみんなでそこに暮らすんだ。たぶんこのまま一生ね。イギリスにはちょっと帰るぐらい。あるいは半年ずつかな。僕らだけで島に暮らすなんて最高じゃないか。小さな家を自分たちで適当に建ててさ、コミューンみたいな生活をするんだよ。1967年

デレク・テイラー　僕たちみんなで広い土地に暮らそうってことになった。ビートルズの
4人とブライアンのネットワークは、その敷地の中心に拠点を置く。鉄骨ガラス張りのドー
ムだ（万博の時に建てられた水晶宮にちょっと似てるかな）。そのまわりはクリエイティ
ブなことや遊びに使える共同エリアで、そこから木陰の休憩所が点在する道がホイー
ルのスポークみたいに伸びて、4人それぞれの大きくてすごくきれいな住まいに続いて
る。その外側は仲間たちの家。ニール、マル、テリー、デレク、それぞれパートナーや子
どもたち、友人を連れてね。たぶんノーフォークあたりかな、あそこには使ってない土
地がたくさんあったから。まったくあきれたアイディアだよね！ 風とか雨とか洪水とか、そ
ういうことをまったく考えてないんだ。風邪については……世間と縁を切ってしまえば、
邪はひかないかもしれないね。あの頃の僕らはすぐに連鎖反応を起こして、それが
まりに強いからどんなものも止めなかった。いいじゃないか？って思ったよ。"もうす
て試しただろ"ってジョンが筋の通ったことを言った。"戦争、国粋主義、ファシズム、
主義、資本主義、いろんなくだらないこと、宗教も――どれも成功しなかった。そ
らこれを試したっていいじゃないか？"

ジ　船を借りてね、アテネから岸に沿って島巡りをした。ちょっと投資すべきだっ
に言われてたんだよね、それで僕らは"よし、島を買おう"って思ったんだ。"島
て世間から脱け出すんだ"って。
旅は最高だったよ。ジョンと僕はずっとアシッドをやりどおしで、船の一番前に座
レレを弾いていた。左にギリシャ、右には大きな島。太陽は光り輝いている。
時間も何時間も「ハレ・クリシュナ」を歌ってた。そのうち小さな村のある狭い
を見つけた。ところが陸地に降りたとたん、どっと雨が降り出したんだ。あっと
嵐に変わり、稲妻が光って。でもその島にある建物といったら、漁師のちっぽ
だけ――仕方がないから全員でぞろぞろ入っていった。"すみません、ここで
宿りさせてもらっていいですか？"
は大きな石がごろごろしてた。でもアレックスが"大丈夫だよ"って言うんだ。
もらって、全部運び出してもらえばいい"。だけど僕らは船に戻ってその島を
度とあの場所のことは考えなかったよ。
がベンチャー・ビジネスに金を使ったのはあの時だけじゃないかな。島を
国際的に通用するドルか何かの通貨に両替したんだよ。またポンドに戻す
ートが上がってたもんだから、20シリングかそこら儲けたね。

ノール　僕は1日しかいなかった。"僕は帰る"って言って。リンゴも一緒

リンゴ　結局何にもならなかったね。僕らは島を買わずに帰ってきた。すごいアイディアを抱いて休暇に出るのは得意なんだけど、絶対に実行できないんだ。イギリスで村をひとつ買おうっていう計画もあったんだよ――四方にズラッと家が並んでて、真ん中には緑に囲まれた広場がある。で、僕ら4人でそれぞれその一辺をもらうわけ。

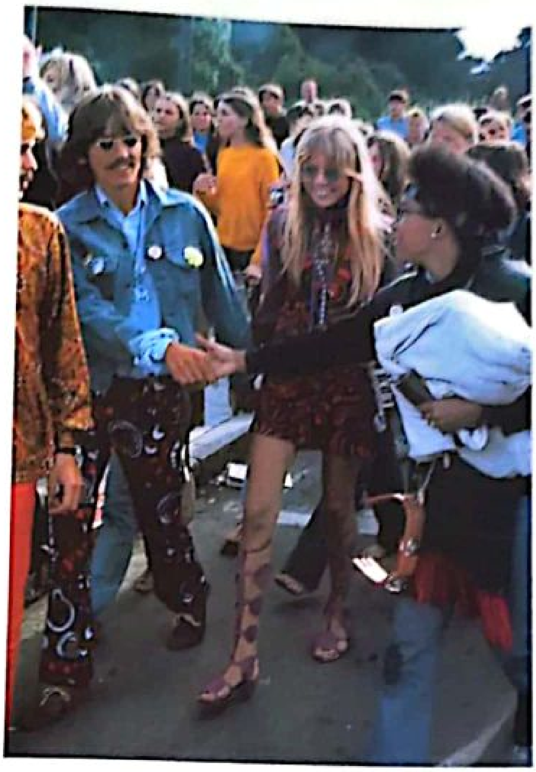
外に出るとそういうことになるんだよ。レコード作ってた方が安全だ。いったん外に出されたら、僕らすぐ頭がどうかしちゃうんだから。

CamScannerでスキャン

ジョン　**ヘイト・アシュベリーって名前じゃなきゃ、あんなに評判にならなかっただろ。**1968年

ジョージ　8月にみんなでアメリカへ行った。モンタレー・ポップ・フェスティバルの数ヶ月あとかな。当時僕の義理の妹だったジェニー・ボイド(ドノバンの曲にジェニファー・ジュニパーとして出てくる)が、ずっとサンフランシスコに住んでいたんだけれど、もうイギリスで暮らそうと決めたんだ。それでその前に、1日みんなで彼女のところへ行くことにしたのさ。デレクとニール、マジック・アレックス、それから僕とパティだ。

ニール・アスピノール　ヘイト・アシュベリーはサンフランシスコのふたつの通りがぶつかったところ。ヒッピーがそこでどんなことやってるかって話をしょっちゅう聞いてたから、ちょっと寄ってみようってことになった。僕らはそもそもパティの妹に会いに行くつもりだったんだ。でもサンフランシスコに着いたら見てみたくなってね。ヘイト・アシュベリーが目的の旅行じゃない——あそこも途中で寄った場所のひとつだよ。



ジョージ　サンフランシスコまでリアジェットで行った。デレクがあるディスク・ジョッキーに会わせるというので、僕らは空港からリムジンでラジオ局へ直行した。そのDJから何かを混ぜ合わせたドラッグをもらい、そのあとヘイト・アシュベリーへ向かったんだ。僕はすばらしい場所を想像していたんだよ。グルーピーなジプシーたちが小さなワークショップで絵や彫刻作品を作ってるようなさ。ところが実際に行ってみると、ドラッグ漬けになってるニキビ面のドロップアウトたちがゾロゾロいるばかりで、そのおぞましさを見たら僕はいっぺんで嫌になった。そこは荒廃した裏町と化していて、浮浪者や落ちこぼれが溢れていた。その多くはまだ年端もいかない奴なのにLSDをやってる。アメリカ中から、このLSDのメッカへ集まってきてるわけさ。

通りを歩いていると、僕はメシアのごとき扱いを受けた。ビートルズはかなりビッグな存在だったから、そのひとりが来てるとなれば一大イベントになるのさ。僕はすごく不安だった。あのDJからもらったドラッグの影響が出始めていたんだよ。ニキビ面の若者たちが見えてはいるんだけど、歪んで映ってる。ヒエロニムス・ボッスの絵が現実になったみたいだった。人間の顔をした魚やら、掃除機みたいな顔やらが店の戸口から覗いてる……。彼らが僕にいろんなものを手渡そうとするんだ——羽のついた大きなインディアン・パイプとか、本とか、お香——それにドラッグ。"いらない、僕は欲しくない"とある男に言うと、彼が哀れっぽい声を出すんだ。"おい、おまえ——俺をコケにするのか"。ひどい状況だった。僕らはどんどん足早になりながら公園を抜け、最後にはリムジンに飛び乗った。"こんなところ早く出よう"って、そのまま空港へ向かったよ。

ニール・アスピノール　バイク野郎やヒッピーのそばを通っていくと、あちこちでケンカしてる声が聞こえたね。公園に入って芝生に座ると、誰かが"あれ、ジョージ・ハリスンだぜ"って言って、人が集まり始めたんだ。誰かがジョージに近づいてギターを渡し、"1曲歌ってくれない?"って言ってね、彼はちょっと歌ってあげた。するといきなりものすごい人だかりになってきちゃって、"おい、こりゃ出た方がいいぞ"って思ったよ。

彼らに取り巻かれるような格好になり始めた時、リムジンまで1マイル近くあるって気づいてね。僕らはそろそろと歩き出した。でもまわりを見たら千人くらい後ろにくっついて来てるんだ。"サインちょうだい"って、背中を叩いたり。僕らは少し歩調を速め、しまいには必死で走ったよ。

ドラッグのせいで警戒心が薄れてたんだろう。普段ならあんなことにならないように、初めから注意してたはずだ。僕らはいつもホテルの部屋から出ず、外出の時にはリムジンと警察の護衛つきだった。ファンは近づけないようにしていた。でもあの時、僕らはほとんどこちらから、人が集まるような状況に入っていってしまったんだ。僕らはたった6人(しかも女性がふたり)だったのに。どうにか無事切り抜けたけどね。彼らは幸せな人たちで、危害を及ぼすつもりなど一切なかったんだけれど、大勢人が集まるとぶつかって怪我することもあるからね。

デレク・テイラー　ファブ・フォーの露払きによる偉大な訪問の顛末は、写真がそのまま語ってるよ。"偉大な物語"の中でも一番知られた個所のひとつだ。集まってきた群衆は善意の人々ではあったけれど、イギリスからの訪問者に迫り、彼らの自由を奪い、少しばかり危険な思いをさせた。ジョージはヘイト・アシュベリーを楽しめなかった。でもあの当時彼らのひとりがあそこへ行ったりすれば、ああなるのが当然であり、仕方ないことなんだよ。

ジョージ　あれではっきりと、ドラッグ・カルチャーの現実がどういうものかわかった。僕が思っていたようなもの——精神を覚醒させ、芸術性を促す——そういうものではなかった。あれはアルコール中毒と同じだ。どんな中毒とも変わらない。ヘイト・アシュベリーの若者たちは学校をやめてあそこで野宿して、酒を飲む代わりにありとあらゆるドラッグをやっていた。

あれが僕にとってターニング・ポイントになった——あれから僕はドラッグ崇拝をキッパリ断ち切り、恐ろしいリセルグ酸とも縁を切った。リセルグ酸は液体で、僕はそれを小さな瓶に入れて持っていた。顕微鏡で覗いてみると、古いロープの切れ端みたいに見える。こんなものをこれ以上自分の脳ミソに入れられないと思ったね。

みんな薬品を混ぜ合わせて、ほんとに恐ろしいドラッグを作っていた——LSDの10倍くらい強いやつだよ。そのひとつがSTP。インディー・カー・レースで使われたオイル改良剤にひっかけた名前だ。ママ・キャス・エリオットが僕らに電話をくれたよ。"気をつけて。STPという新しいのが出回ってるから"。僕は一度も手を出さなかった。そういう怪しげな混合ドラッグがどんどん作られていたし、ヘイト・アシュベリーの人たちはほんとにおかしくなってたよ。あれを見て僕は気づいたんだ。"これは間違ってる"って。それから本気で瞑想にのめりこんでいくようになった。

ニール・アスピノール　リアジェットで戻った。あの時、僕は完全に正気だったんで、コックピットの赤いライトがいきなり全部ついたのに気がついたんだ。飛行機はロケットみたいに飛び出して、それに負けないくらいの勢いで急降下し始めた。警戒信号のライトが全部点灯してる中で、パイロットたちは"大丈夫さ、ハリー"とか言い合ってる。すごく恐ろしかったよ。どうやら無事に持ち直したけど。

ジョージ　僕はパイロットのすぐ後ろの席だった。爪先に模様のある茶色の靴を履いた、デカいフランク・シナトラみたいなのがふたり。飛び立ってから飛行機は失速し始めて——そんなに高くまで上がらないうちにいきなり急降下し始めたんだ。ダッシュボード中"危険"って信号がついた。"ああ、これで終わりだ"と思ったよ。アレックスは"ハレ・クリシュナ、ハレ・クリシュナ"って唱え始めるし。僕は"オーム、キリスト、オーム……"ってね。

なんとか持ち直して、無事モントレーに到着した。それからビーチへ行って、僕らはようやく気持ちを落ち着けることができたよ。

デレク・テイラー　当時の若いポップ・スターはみんなリアジェットが大好きだった——空におけるポルシェだね。僕自身は、高速で簡単に操作できる乗り物はすべて怖いんだけど、それでも一緒に乗った。

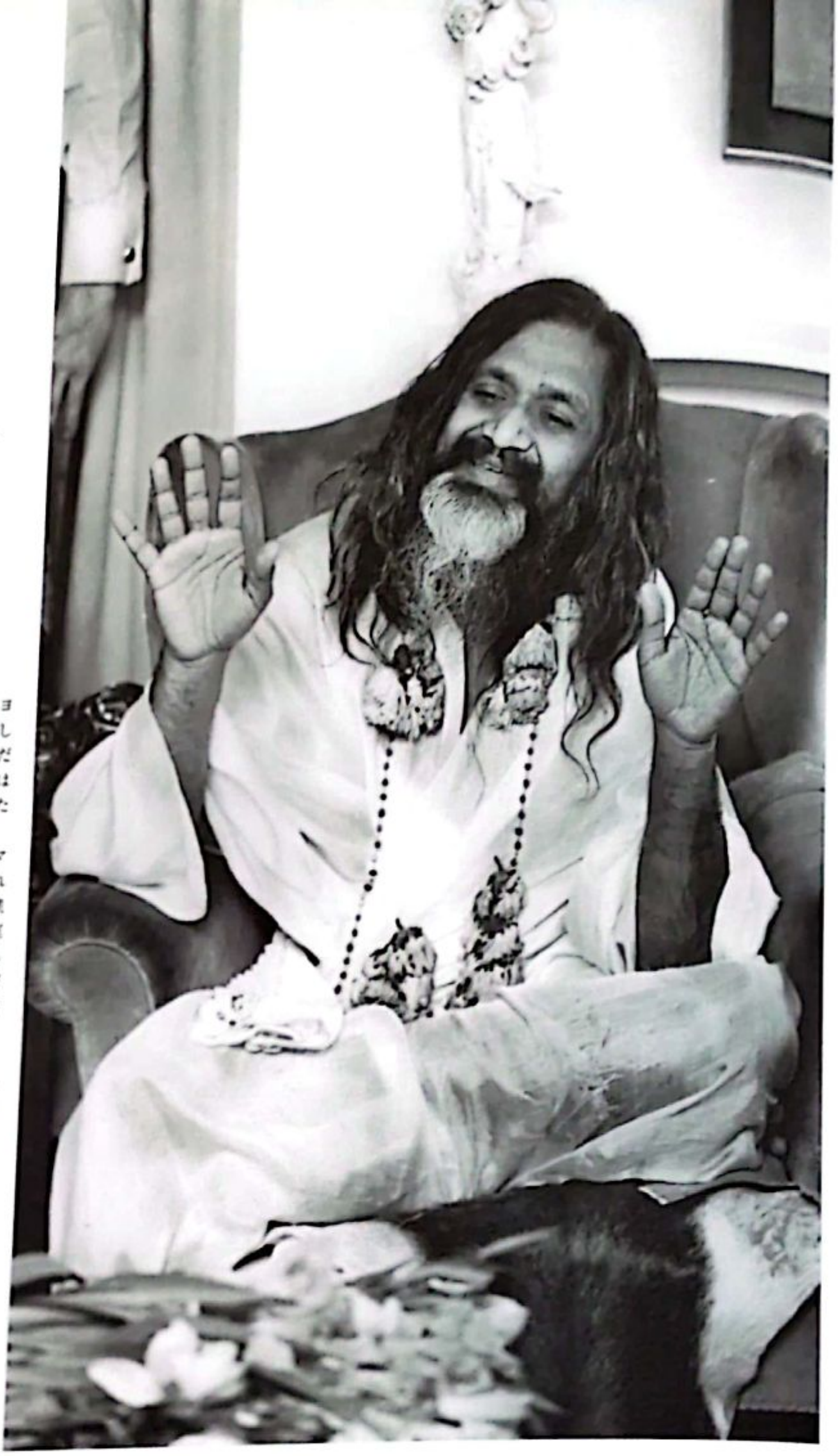
モントレーで喫茶店に入ったら、コーヒーを注文するのもひと苦労だった。ウェイトレスは僕らが目に入らないふりしてるから、ジョージが呼んだんだ(しまいには"金は持ってる"って声を荒げて、1000ドル札を何枚も振って見せた)。彼女はジョージと気づいたとたん、持っていた食器を全部も見事に落っことした。何枚もの皿やカップや受け皿が床で粉々に砕けた——彼女はそのあまりにたくさんの破片を拾い集めながら、隣にいるジーンズ姿のビートルに目を向けまいとしていたよ。古い考えが消えない場所もまだ残ってたみたいだね。

ジョージ　**みんなもう完全に頭がおかしくなってた。僕にSTPやLSDを押しつけようとして——一歩踏み出すごとに誰かが何かを差し出してくる——でも僕は、それが何か知りたくなかった。**1967年

CamScannerでスキャン

マハリシ・マヘシ・ヨギ

愛とは人生
愛とは人生の最上のもの
愛は人生を動かす
愛は強く崇高な力
愛は人生に喜びをもたらす
愛はあなたのまわりに
喜びを広げます。



ジョージ　僕はまたデヴィッド・ウィンに会って、いろんなヨギたちのことを話していたんだ。すると彼が、すごく珍しい奴がいるって教えてくれた。生命線が途切れないんだって。その男の手を撮った写真を見せてくれてね、“彼は来週ロンドンでレクチャーをやるよ”と言う。それで思ったんだ、“へえ、ちょうどいい。会ってみよう”。

8月24日、リンゴを除く全員でヒルトン・ホテルに行き、マハリシのレクチャーに参加した。僕がチケットを手に入れたんだ。実のところはマントラが聞きたかったんだよ。僕はその頃すでに瞑想をやりたいと思い始めていてね。瞑想の本を読んで、マントラを知らなきゃいけないとわかったんだ――もうひとつの世界へ行くためのパスワードだよ。で、僕らは何をやるにも一緒って感じだったから、ジョンとポールもついてきたんだ。

ポール　そもそもジョージが行く気になったんだよ。「サージェント・ペパー」の頃、ジョージが一番インド文化に興味を持っていた。メンバー全員興味はあったけど――ジョージの場合には、定められた方角って感じだった。でもラビ・シャンカールの音楽はよかったよ、おもしろいし、すごく美しい――そして深いんだ、テクニックとしてもそうそうできるものじゃない。

ペレグリン・ウォースソーンが来てたのを覚えてる。翌日、彼はどう思ったんだろうと記事を読んだけど、ちょっと疑ってたみたいだね。でも僕らは何か大切なものを求めてたんだ。すでにドラッグにハマっていた僕らにとって、次のステップはすべての意味を見つけることだった。

僕らは子どもの頃、北部でマハリシを見たことがあったんだよ。彼は何年かおきにテレビに出てたんだ。グラナダTVに「ピープル・アンド・プレイシズ」という、地元の出来事を伝える番組があってね。“ねえ、夕べあの頭のおかしい奴、見た？”ってよくみんなの話題になった。だから僕ら全員、彼のことは知ってたわけ。よく笑う小柄な男で、世界を癒すために地球を7周するんだ(あれが3周目だった)。

彼の言うことはかなり筋が通ってると思った。僕ら全員そう思ったはずだ。簡単な瞑想――朝20分、夜20分――それだけで人生を高めていくことができる、そうすることで何らかの意味を見つけることができる、彼はそう言ってたんだ。

ジョン　僕ら、“なんていい人だ”って思った。僕らが求めていたものはそれだったんだ。いや、そりゃ誰だっていい人に会いたいだろうけど、あの日僕らはみんなそれを求めていたんだよ。僕らは彼に会って、すばらしいものを見つけて、そしてそれに従った。素敵なトリップをどうもありがとう、って感じだね。

現代の若者は本気で答えを探してる――まともな答えをね。既成の教会じゃ与えてくれない、親も与えてくれない、物質的なものじゃ与えることのできない答えだよ。1968年

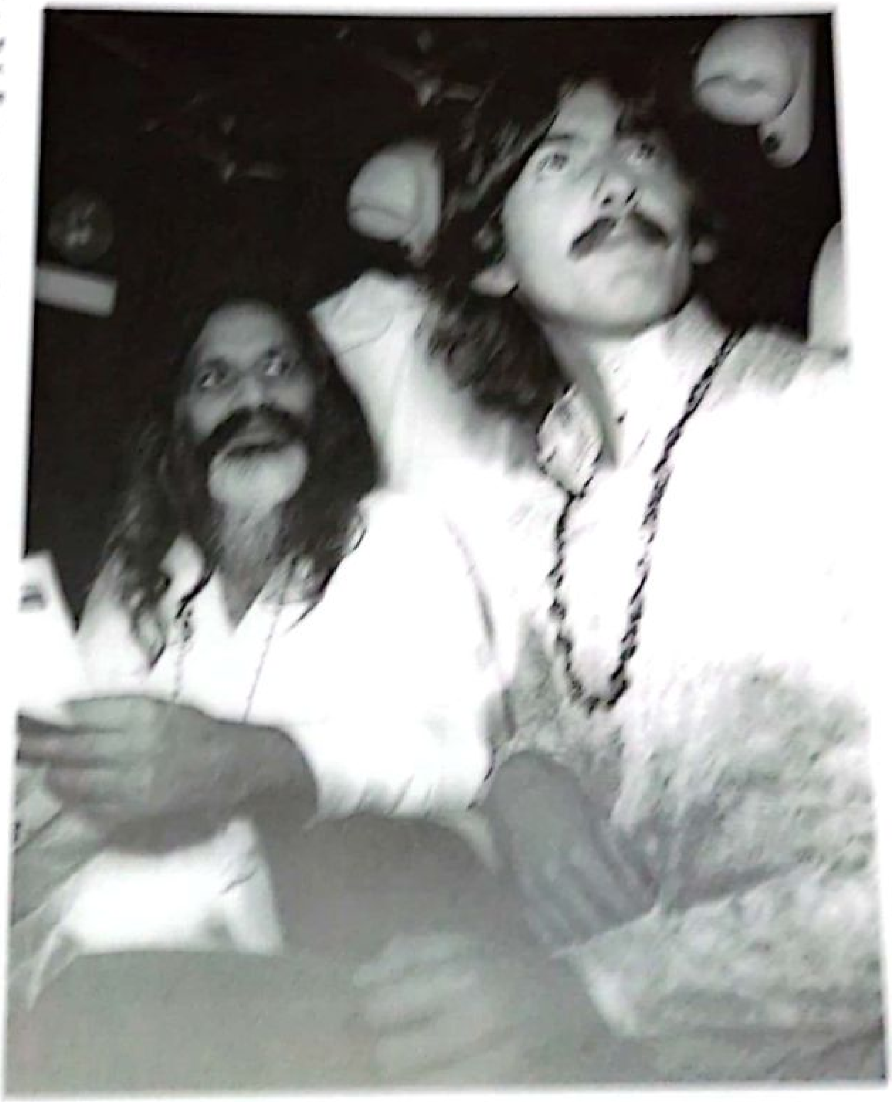
リンゴ　あの時ちょうどモーリーンがジェイソンの出産前でね、僕は病院に行ってたんだ。家に帰って留守電を聞くと、ジョンからメッセージが入ってた。“おい、すごいぜ、そいつに会ってさ、みんなでウエールズへ行くことにした。一緒に来いよ”。次がジョージから。“もうすごいよ――会ったんだぜ。マハリシは最高だ！　みんなで土曜日にウェールズへ行く、絶対来いよ”。

ジョン　この話が出るまでは、シンとリビアへ行くつもりでいたんだ。リビアかバンゴアか。迷いようがないだろ？ 1967年

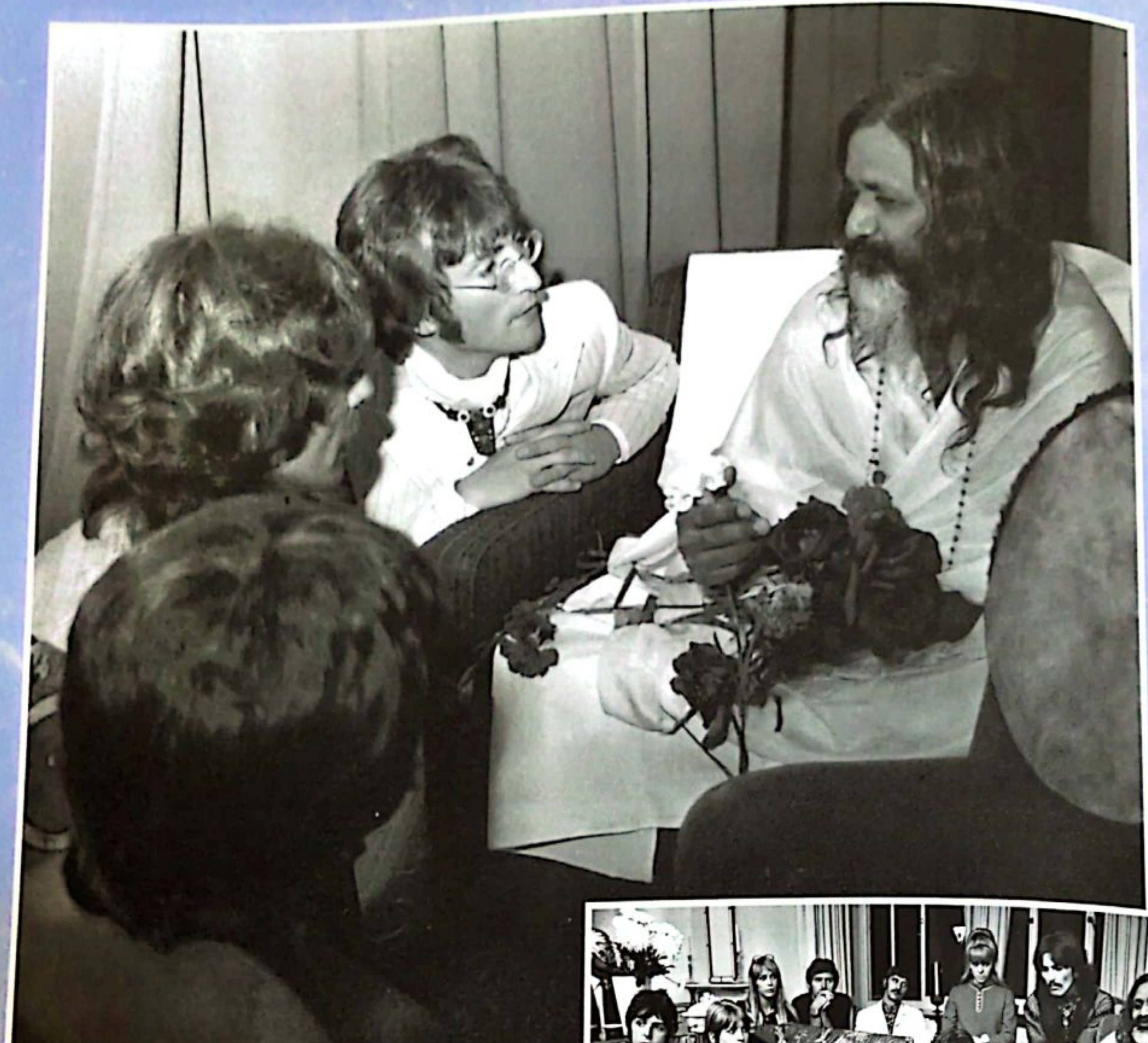
ジョージ　たまたまマハリシがバンゴアでセミナーを開く予定になっててね、“明日いらっしゃい、瞑想のやり方を教えましょう”って言われたんだ。それで翌日にはみんなで列車に飛び乗って出かけたわけさ。

ミック・ジャガーも来ていた。あいつはいつでも僕らのまわりをうろついてて、何が流行るのかって探ってたんだよ。ミックはファブ・フォーがやってることに遅れをとりたくなかったのさ。

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



ニール・アスピノール　みんなそろってマハリシのところへ行ったのは、「サージェント・ペパー」の時で、全員が髭を伸ばしたのと同じ頃だよ。ああいうことはほとんどが"リーダーに従え"（あの時のリーダーが誰だったのかは知らないけど）で始まるんだ。ひとりが髭をはやせばみんなも髭をはやす。誰かがフレア・パンツをはけば、数週間のうちに全員がフレア・パンツをはいてる。マハリシも僕らの一部にとってはそういう感じだったんだと思うよ、でもジョージは真剣だった。

ジョージ　他のメンバーの考えや経験について代弁することはできないけど、僕らが全員でリバプールから出てきて、どんなこともみんなで乗り越えてきたことを考えれば、ビートルズには集団意識があったと言える。僕らのうちのひとりが感じれば、他の全員もそれに近いものを感じるだろうと僕は思ってた。だからヨギたちに関するあらゆる本を、ジョンにもポールにもリンゴにも渡したんだ。マハリシに会いに行く時も、他の3人の分までチケットを手に入れた。だけどみんながどう思うかとか、どんな経験をしているかとかについては、一度も訊ねたことがなかった。

バンゴアで僕らは記者会見を開いて、もうドラッグはやめたと言った。別にマハリシのせいじゃない。もっと瞑想体験を深めたいという僕の気持ちから出たものだ。どちらにしろ、シタールを弾けるようになりたくてヨガも始めていたしね。すでにそういう方向へ来ていたんだ。瞑想をやってみたいと思った時、ちょうどそこへマハリシが現れたのさ。

ジョン　LSDをやる前にマハリシに会っていたら、LSDを試す必要もなかっただろう。この瞑想ってのをやる前から、もうドラッグはやめてたんだけどね。ジョージがドラッグをやめるつもりだって言うから、"ふうん、僕には全然悪影響ないぜ。僕はやめないよ"って言ったんだ。でもふいに思った。"ああいう悲惨な状況をずっと見てきたじゃないか。やってても意味がない、それにもし身体や脳がどうにかなっちゃったらどうする？"。それから誰かに手紙をもらったんだよ。本人が望もうと望むまいと、悪影響が出ていないと思っていても、実際には何らかの変化が起きてるんだって書いてあってね。だから、僕に答えを教えてくれる人にもしほんとに出会えたら、僕はこんなものとはおさらばできるって思った。

LSDをやったこと自体は後悔してないよ。あれはひとつの足がかりだったんだ。でも今は、僕らは直接体験することができる。ドラッグみたいな、人工的な間違った足がかりを使わなくてもいいんだ。1968年

CamScannerでスキャン

ポール 記者会見が開かれた。僕らがマハリシに従うつもりなら、それをマスコミに知らせた方がいいんじゃないかって話になったんだ。そうすればみんなも僕の為でずっと思ってなくてすむしね。あの時、ドラッグをやめたとはっきり言ったかどうか覚えてない——でもいずれにしろ、あの頃はもうやめてたはずだよ。

ジョージ LSDは真の答えじゃない。あんなものからは何も得られないよ。それまで気づかなかった可能性をたくさん教えてはくれるけど、それが答えではないんだ。LSDをやらずにそのままずっと行けるなら、それで少しも問題ない。真にハイになるためには、まともな状態でやらなきゃだめだ。僕はハイになりたい。でもLSDじゃハイになれない。好きなだけ何度でもやり続けることはできるけど、ある時点でそれ以上先に進めなくなる。やめるしかなくなるんだ。1967年

ポール 永遠にドラッグをやり続けることはできないよ。1日15錠アスピリン飲まなきゃ頭痛が治まらないってところまで行っちゃうからね。僕らはもっと自然なものを求めていたんだ。まさにこれだよ。

あれも僕らの体験のひとつではある。でももう終わった。もう僕らには必要ない。他の方法で同じ場所に到達できるようになってきたと思うんだ。1967年

ジョージ これで人生に充実を見い出すことができる。満ち足りた人生を送れるようになるんだ。若者は自分たちの心の中に、ちょっとした平和を見つけ出そうとしているんだよ。1967年

ジョン 何もできはしないんだから"ハイになって社会から抜け出そう"なんて、そんなくだらない言い草を信じるな——ハイになって社会に入り込まなきゃいけないんだ。そうしないとメチャクチャに叩かれるだけだぜ。

ジョージ これがどのような形で音楽に現れてくるかはわからない。いつでも超越瞑想のことばかり出てくるなんて思わないでくれ。僕らはこれをクリフやビリー・グレアムみたいなものにしたくないんだ。1967年

マハリシ・マヘシ・ヨギ 私は彼らを今世紀における活動的な哲学者に育て上げることができます。彼らは世界の役に立つ、とても偉大な哲学者になれるはずです。彼らにはすばらしい未来が開ける可能性がありますよ。

ジョージ 「サージェント・ペパー」を作った時、僕はまだ23歳だったけど、すでにインドもLSDも経験し、超越主義へと向かっていた。ビートルズとしてあれだけ強烈な成長期を過ごし、あれだけ成功して、あげくにこれはあらゆるものに対する答えではないと気づいた時、問いが生まれてきたんだよ。"いったいこれはどういうことだ?"。そして、無理やり詰め込んだLSDのおかげだけど、僕は神を知ったんだ。

キリスト教にかかわる人の中で、神の哲学を十分に理解し、それを人間の言葉にきっちり置き換えられる人は、僕が知るかぎりひとりもいない。教会の指導者たちは意味のないことを伝えているだけだ。彼ら自身がちゃんと理解できてないからだよ。だから無知で覆い隠そうとする。政府みたいにね。教会の権力が、何も訊いちゃいけない理由になるとでもいうみたいだ。"あなたはキリストのことも神のことも何ひとつ知らないでしょう。この特権を与えられているのは私たちなんですよ"って感じだね。

僕はビブケナンダやヨガナンダの言葉をたくさん読んで、どうやって神に会えばいいかを理解した。相対的な意識の状態(覚醒、睡眠、夢)を超越し、最も純い、純粋な意識のレベルに到達するために、ヨガのシステムを使うんだよ。そのレベルに来れば、人間ひとりひとりが純粋な覚醒を体験できる。純粋な意識、あらゆる存在の源泉を。「トゥモロー・ネバー・ノウズ」で言っているのはそういうことだよ。

虚無というのは覚醒、睡眠、夢を超えた超越のこと。この世に起こるすべてのことは、純粋な存在、つまり超越した存在たる神がもたらしたものなんだ。神がもとなのさ。そしてその結果は因果の世界、霊的世界、自然の世界、三つの世界すべてに及ぶ。

僕は祈りの力を完全に信じている。でもこれは愛と似てるんだ。みんな"愛してる"って言うだろ、でも問題は、"君の愛はどのくらい深い?"ということなんだ。マハリシはよく弓と矢にたとえていたね。弓をちょっとしか引けないと、矢はそんなに遠くへ飛んでいかない。でもずっと後ろまで引っ張ることができれば、矢を一番遠いところへ飛ばせる。祈りの場合にも、ある人は祈りの効果をすごく引き出せる力を持っている。でもある人はその意志があっても力がないかもしれない。力の強い人間は重いものでも軽々と持ち上げられるだろう。でもそれだけの力がない人間もいる。どちらも同じ意志を持っているんだけれど、それをなす力を発揮できるのは一方の人間だけなんだ。祈りの効果をほんとに得るためには、超越の状態でもなおなくてはいけない。物質世界(あるいは意識のレベル)が強く出れば出るほど、効果は弱くなる。つまり祈りの力というのは人それぞれの精神の成長と関わっているんだよ。だからそのレベルに到達するには、マントラがすごく大きな意味を持つことになる。マントラは処方箋みたいなものだ。処方箋に正しいことが書いてあれば、正しい薬が手に入るのさ。

僕らは五感とエゴとに引っ張られながら、新たな経験を求めつつ人生を生きている。経験がなければ知識は得られないし、知識がなければ解放は得られない。でも生きていくうちに僕らは向上心をなくすと人生につまずき、エゴや、物質世界のエネルギーと関わるせいで、いくら僕らが神から生まれた存在だといっても、そうやって汚れていくうちに僕らは神を示すことができなくなっていく。だからそういうものを自分の中からすべて追い出すために、大変な戦いをしなければならなくなるんだよ。ミツバチは花粉を集めるために花に近づき、それからもっと花粉の多い花を探そうとする。ミツバチが蜜を求めるのは自然な本能だ。人間がさらに高度な経験を求め続けるのと同じさ。でも、そういう経験をすっかりやり尽くして——あらゆる有名人に会い、ある程度金も儲けて、世界ツアーをやり、とてつもない評価を得て——それでもまだ、"これで終わりなのか?"って思う。それで満足する人もいるかもしれないけど、僕は満足できなかった。今も満足しきっていない。

ビートルズの一員であったことは、確かに神を知る早道にはなった。だけどその一方で妨げにもなったんだよ。ビートルズだったがために、誤った印象に包まれ、しがらみに縛られて、そこから抜け出すのが人より大変だった。経験や思想はすべて自分の内側のファイルに記録されていく。何らかの目標に到達するためには、瞑想が唯一の手段なんだ。瞑想によってすべてのゴミを自分の中から追い出すことができる。そのゴミがなくなったら、もともとの自分になれるんだよ。まるでジョークだけどね。つまり僕らはすでに僕らがなりたい自分になっているんだよ。もとに戻すだけでいいのさ。

僕らはロック・バンドをやりたかっただけだ。でもシェイクスピアが言うように、この世はすべて舞台であり、人間は役者にすぎない。僕らは役を演じているだけなんだ。ビートルズとは僕らがあの時期身にまとっていた衣装のようなもので、ほんとの僕らじゃない。全員がほんとの自分じゃなかった。今僕らの本質は、内側にあるものをもう一度取り戻そうとしている。すべての知識を。

ジョン どんなトリップでも——クスリで得たものだろうと何だろうと——そこで見つけ出すのは自分なんだよ。すでに自分が知ってるものばかりなんだ。新しいものを教えてくれる人間なんていない。科学者は新しいものなんか発見しないよ、すでにそこにあるものを教えてくれるだけだ。誰も何ひとつ教えてくれやしない。ディランとかサルトルとか、そういった連中だって無理さ。いかにも新たな啓示みたいに言うけど——だけどそれって、絶対みんなが知ってたことなんだよ。内側では誰もが知っていたことを、彼らが確認してくれるだけのことさ。

ジョン　彼に捧げる言葉が見つからない。とにかく彼は楽しい奴だった。今僕らが思い出すのはそういう楽しいことばかりだ。1967年

ポール　ひどいショックだ。ショックでおかしくなりそうだ。1967年

リンゴ　僕らはブライアンが大好きだった。優しい人だったよ。僕らは彼にすごく大きな恩がある。ずっとブライアンと一緒にやってきた、一緒に歩いてきたんだ。1967年

ジョージ　彼はビートルズに人生の多くを捧げてくれた。僕らは彼のことが大好きだったよ。彼はビートルズの一員だった。死なんてものは存在しない。彼は変わっちゃいないって思えば、僕らみんな気持ちが安まる。1967年

リンゴ　僕らはブライアンが死んだことをバンゴアで聞かされた。ずんと気持ちが重くなった。頭が混乱して、信じられなくて。"嘘だろう！"としか思えないよね。そんなこと絶対聞きたくないって、頭が受け入れようとしないんだ。どうしたらいいのかわからない。あの時の映像を見れば、僕ら全員、"何なんだ？　どういうこと？　僕らの友だちが死んだっていうのか"って顔してるよ。何より、死んだのは"僕らの友だち"だったんだ。ブライアンは友だちだった。僕ら全員、取り残されてしまった。僕らは花と希望を持ってバンゴアへ行ったのに——こんなことになるなんて。それから僕らはそこを出た——ひどくのろのろとね。

ジョージ　電話があったんだ。誰が出たのかはっきり覚えてないけど、ジョンだったような気がする。彼の顔から血の気が引いていた。"ブライアンが死んだ"って。死んでいるのを発見されたという以外、僕らはほとんど何も知らなかった。僕らが真剣に瞑想を始めた、まさにその時に起こるなんて、すごく不思議だったよ。そんなのたいしたことじゃないように思えるかもしれないけど、実際はすごいことだったんだ。心の内側への旅を始めると、人生はとても大きく変わる。だからその特別な日にブライアンが死んだということは、ものすごいことなんだよ。僕らはすぐ荷物をまとめた。外へ出たらマスコミが詰めかけててね。僕らが"ショックで何も言えない"って言ってる映像が残ってるよ。僕らは車に乗り込み、ロンドンへ戻った。

ポール　愕然とした。僕らがあの"人生の意味を見つける"旅に出た時に、彼が死んでしまったんだから。僕らは何とか悲しみをこらえようとした。マハリシが何か光を与えてくれないものかと、彼と話をしに行ったんだ。"僕らにとって、ほんとに古くからの友人だったんです。もうずうっと僕らのマネージャーで——その彼が死んだんだ。帰ってもいいですか？　僕らはここにいるべきじゃないかもしれない。師よ、僕らはどうしたらいいんでしょう？"

すると彼が言った。"彼はこの世を去った。あの世へ行ったというだけです。何も気に病むことはない"。彼の考え方に沿った言葉だ。僕らはそのあとでもう一度マスコミに話をした。とても悲しいけれど——みんな悲しんでいたさ。ブライアンはすばらしい奴だったから——だけど、こうなってしまったらもうどうすることもできない、って。

彼が死んで、残念でならなかった。ジョンだってひどいショックを受けてたよ。とにかくがっかりしてたんだ。一番古い仲間のひとりだったから、それだけショックも大きかった。彼は僕らの大親友だったし、僕らは彼をすごくよく知っていた。そんなふうに誰かが死ねば、それは大きなショックだよ。自分のいる場所からその人の存在がもぎ取られてしまうんだ。"もう彼に会えないんだ"って思う。僕はあいつが好きだったよ。

ジョン　僕らは彼を愛していた。彼は僕らの仲間のひとりだったんだよ。マハリシの瞑想のおかげで、こういうことにも耐えられた。まだ僕らは瞑想を始めて間もなかったけど、それでも耐えていけそうだという自信が持てた。1967年

ニール・アスピノール　ジェリー・マースデンに会ったのを覚えてる。彼はゴムボートを持ってバンゴアの海岸にいてね。僕らが会ったのはほんとの偶然だったんだ。その時すでに僕は、ブライアンが死んだということを車のラジオで聞いていた。ジェリーはひどくショックを受けてたよ。それから僕はみんなのいるマハリシのところへ行った。ブライアンが死んだってジョンに話すと、彼はこう言った。"知ってるよ——エキサイティングだね"。"何だって？"って思ったけど、あの時はみんなショック状態だったんだよ。

ジョージ・マーティン　私自身はブライアンがとても好きだった。だがあの時は、ひどく奇妙な形で知らされることになってね。私は田舎の方にコテージを持っていて（現在はそこにずっと住んでいる）、ロンドンでのきつい1日を終えるとそちらへ行った。すると地元の店で"聞きましたよ、辛いことですね"と言われた。"聞いたって、何を？"。彼が教えてくれたよ。"お友達が亡くなったそうです"。

私はまるで知らずにいた。ちょうどその頃、妻に初めての子どもが生まれるところでね。ルーシーが生まれて妻が退院すると、私たちはロンドンの家に戻った。するとドアの外に置かれたままの花束があったんだよ。ブライアンから贈られたもので、すでに花はしおれていた。それがブライアンが死んだと聞いた日でね。何とも胸に詰まった。

リンゴ　マハリシはブライアンに執着してはいけないと言った——彼を愛し、そして彼を行かせてやるようにって。僕ら全員の力はすごく強いから、彼が自然の法則に従って天国へ向かうのを妨げてしまうかもしれない。"彼のために悲しみ、そして彼を愛してやらなければいけません。そしてもう彼を旅立たせてやらなければ"。そう彼は言った。その言葉にすごく助けられたよ。

CamScannerでスキャン

ジョン　僕ら全員、悲しい気持ちで一杯なんだ。だけど悲しみをこらえ、感情を抑えているんだよ。自分で気持ちが落ち込んでいると感じると、僕は彼のいいところを思い出すんだ。だけど人間、辛い気持ちを隠すことはできない──僕はついさっき電話帳で彼の名前を見て、それだけで辛かった。思い出は大切にしまっておかなくてはいけないけど、当然僕らの心の中には、ブライアンは死んだんだっていう声がしてるんだ。

親しい人が死ぬのは辛い。ブライアンは特に親しい相手だった。僕らみんな、思い切り泣きたい気持ちでいるんだよ。だけど泣いたところでどうにもならないだろ?

みんなが悲しみを感じてる。だけど超越瞑想のおかげで、僕らはずいぶんこの気持ちに立ち向かうことができた。小さな子どもがティーンエイジャーになり、ティーンエイジャーが大人になって、大人が年老いていっても、別に心は痛まないだろう? ブライアンも次の段階に移っていっただけなんだよ。彼の魂はまだ存在してる。永遠に存在するんだ。僕らが持ってる思い出というのは、彼の肉体の記憶だ。人間として僕らはその思い出にすがっていく。僕らはひとりの天才を失ったけれど、過去の天才たちも肉体はこの世を去っている。それでも世界は彼らの魂から多くのものを受け取っているんだよ。

彼はバンゴアに来て、僕らと一緒にマハリシのもとで超越瞑想を教わることになっていたんだ。がっかりだよ、彼が来れなくて。1967年

リンゴ　ブライアンが自殺だったなんて考えたこともない。僕はずっと、ブライアンは鎮静剤を飲んで──たぶん医者に出してもらったやつだ──いったん寝てからまた目が覚めて、さらにまた飲んだんだろうと思っていた。彼の夜明かしはあちこちで書かれてることだ。キース・ムーンの場合も同じだったんじゃないかな。鎮静剤の飲みすぎだよ。"僕は大丈夫だ"って思ったのさ。ジミもそう、ジム・モリスンも──ああいう奴ら、みんなそうだよ。誰も死ぬつもりじゃなかったと思う。

ジョージ　最後にブライアンと話した時、ずいぶん変わったなと思った──それは避けようのないことだった。LSDをやるとみんな変わってしまうんだよ。もう以前の状態には戻れない。時が経つとともにその影響は薄れていくけれど、ある特定の変化は二度と消えないんだ。ブライアンはインドや、僕の考えていたこと、感じていたことに興味を持っていたようだった。もしかしたら彼はマハリシに会いたかったのかもしれない、でも残念ながらそれは実現しなかった。

あれは事故だったんだと思うよ。あの頃はそういった事故で死んでしまう人間がやたらにいたのさ。覚醒剤やアンフェタミン、あるいはその両方と一緒に酒を飲み──大量のウィスキーやブランデーと覚醒剤をやって──それでサンドウィッチを喉に詰まらせて死んでしまう。それがお決まりのパターンだった。ブライアンの場合もそれに似ている。彼は自分の吐いたものを喉に詰まらせたんだ。

彼がすごく不幸な人間だったことは確かだ。ある意味で、映画「ザ・ラトルズ」は現実そのもののシチュエーションを描いていたとも言える。"友だちを見つけることができなくて、彼はオーストラリアの教師の仕事を引き受けることに決めました"。

ポール　彼が無残な死に方をしたなんてこと、なかったと思うよ。すごく悲惨な状況だったとかいう噂があったけど、僕はあれは酒と睡眠薬の飲みすぎだと思う。僕が見たところ──僕が聞いた話以外に証拠と言えるものはないけど──ブライアンは地方にある彼の家に向かうところだったんだ。金曜の夜で、友だちが来ているはずだった。ブライアンはゲイだったから、おそらく家には若い男たちが来ることになっていたんだろう。友だちがひとり一緒だったんだけど、家に着くと誰も来ていなかった──それでブライアンは思ったんだ、"あーあ──でも金曜の夜じゃないか! 急げばロンドンに戻れる。ロンドンでクラブに行けばいい"。僕には十分ありうる話に思えるね、ブライアンを知ってるから。彼は車を飛ばしてロンドンへ戻り、クラブへ行った。だけどもうどこも閉まる時間で、たいして盛り上がってもいなかった。

それで彼はちょっと酒を飲み、それから自分を慰めるために睡眠薬を1、2錠飲んでベッドに入った(ブライアンはいつでもそうしてたんだ。彼は錠剤が大好きだった)。それからたぶん、真夜中に目を覚ましたんだと思う。それで"ああ、眠れない。薬を飲まなかったんだ"って思って、さらにまた薬を飲んだ。それだけ飲めば死んでしまっても不思議はないだろう。

数日後にブライアンの執事に会いに行ったけど、彼も不審な点はないと思っていたようだ。ブライアンがひどく不機嫌になっていたということもなかったらしい。僕は事故だったんだと思うよ。

ニール・アスピノール　ブライアンの部屋に入るにはドアを壊さなきゃならなかった。だけど僕はあれが自殺だったとは思わない。次の日にバンゴアへ来る予定だったんだから。

ジョージ・マーティン　私はブライアンと同じ医者にかかっていたから、彼の状態は知っていた。ブライアンは覚醒剤も鎮静剤もやっていたはずだよ。それに酒もずいぶん飲んでいた。あまり幸せな男ではなかったね。

リンゴ　世界中で僕らのツアーの予定を組む必要がなくなると、ブライアンの役割は変わった。僕らはスタジオにこもるようになってただろ。僕らがレコードを作り、レコードが発売される。どこに彼のやる仕事が残ってる? スタジオの予約──そんなの電話1本ですむ。あの頃は仕事というとその程度だったんだよ。

デビューしたての頃は、僕らのいるところには必ず彼がいて、彼のいるところには必ず僕らがいた。ジョージと僕がロンドンで住んでいたアパートメントは彼と同じブロックにあったから、あの頃はしょっちゅう行き来してたんだ。そのうち彼が郊外に家を買うと、僕らはパーティに出かけたり、きらびやかで素敵な週末を過ごしに行ったりした。でもそれからいきなり僕は結婚して子どもができて、つまり僕には家族とビートルズとブライアンが存在することになったんだ。だから僕の中で彼の位置は3番目になりつつあった。そういうふうに、優先すべきことが他に出てきて──他のみんなの場合も同じだと思うよ。

ブライアンと仲がいいことは、デビュー当時から変わってなかった。僕らが彼の家に行ったり、彼が僕らのところへ来たりもしてた。一緒に出かけることもあったよ。だけどもちろん、そんなに長い時間一緒じゃなかった。僕らは彼が行くような場所にはあんまり馴染めなかったし。

ジョージ　僕らがツアーをやめてから、ブライアンは実際のところ何もしていなかった。彼はちょっと途方に暮れてしまったんだ。僕らはその後スタジオ活動をするようになったけど、彼はもうほとんどスタジオにも顔を見せなかった。最初のうちは時々曲を聴きに来たりしていたけどね。それに僕らがスタジオにいる時は、彼にはほとんどやることがない。それでも付き合いは続いてたんだよ。

ポール　だんだん僕らは、ビートルズの作品を自分たちで管理したいと思うようになっていった。自分たちの会社、アップルをやりだす前から、僕らは事実上自分たちでマネージメントをやっていたんだよ。ブライアンのやることがなくなってきた時も、僕らは言ったんだ。"あなたの仕事を取る気はないけど、僕ら自分たちでやりたいんだ"って。だからちょっと難しい雰囲気にはなってたね。それに、何も言いはしなかったけど、彼はちょっとのけ者にされた気分だったんだと思う(彼はまだ僕らのマネージャーだったけど)──それが彼の憂鬱を深めたのは確かだろうね。

ニール・アスピノール　ある意味で、彼はそんなにがんばって働く必要がなかった。とにかくビートルズの代理人としてはね。それは彼のためにいいことだったんだよ。実際誰にとってもいいことじゃないか、ちょっと休みをとるってのは。

ブライアンはバンドのメンバーとすごく仲が良かった。でも僕はずっと、彼はいろいろやりすぎだと思っていた──ビートルズだけじゃなく、シラにジェリー&ペースメーカーズ、ビリー・J・クレイマーにトミー・クイックリー、さらにロバート・スティグウッドやクリームやビージーズとも組んでさ。ブライアンがロバート・スティグウッドやヴィク・ルイスにビジネスを任せていこうと考えてたのは知ってる。他のバンドは全部彼らに担当させて、ブライアンはビートルズだけ見るようにね。

ジョージ・マーティン　彼はビートルズに対する権限を失いつつあると思われていた。彼らはあまりにもビッグになり、あまりにも大事な存在になっていたし、彼自身も個人的な問題にうまく対処できずにいた。だが彼が死んだ時、ビートルズは自分たちのリーダーを失ったことに気づいたんだ。

そもそもの始まりから、常に彼がビートルズを導いてきたんだ。皮肉なことだが、彼がずっと生きていたとしたら、ある意味でもっと悲劇的な結果になったかもしれないね。彼はどのみちビートルズを失うことになっただろうから。だが、とにかくあの事件はかなり大きな打撃だった。

> **リンゴ　僕らがいずれブライアンと別れることになったかどうかそれは何とも言いようがないけど、でも僕はそうはならなかったと思うな。ちょっと距離ができていたのは確かだ彼の仕事が減っていたからね。でもブライアンが今も生きていたら、やっぱり僕らのマネージャーを続けていたと思うよ。それにブライアンと一緒だったら、自分たちを見失ってアラン・クラインに頼ったりすることもなかったさ。**

ジョン　ブライアンが僕らを見ていてくれた頃、僕らは彼に100%の信頼を置いていた。そりゃ振り返って考えろと言われれば、彼はあそこであんな間違いをしたとかいうことはあるよ。するとみんなは"何だ、馬鹿なビジネス・マンだな"と言うだろう。でも僕らにすれば、彼はエキスパートだったんだ。

僕はブライアンが好きだったよ。彼とは何年もの間、すごく親しい関係だった。ビートルズの中でも僕が一番彼と親しかっただろう。彼はすばらしいところを持ってる人間で、とても楽しい奴だった。実業家というより演劇青年だったね。僕らに対してもそんな感じだった。

上品できれいな言葉遣いのマネージャーを得て、ビートルズはちょっとばかり上流の雰囲気を持つようになった。そこが他のグループとは違ってた。文字どおり、彼は僕らをきれいにしたんだよ。長く一緒にやってきた間には、彼と僕はずいぶん派手にやり合ったこともある。僕がちゃんとした格好をしないことが原因でね。彼とポールが組んでる感じで、いつもふたりで僕をまともにさせようとしてた。実際僕のせいで僕らがいろいろ埋め合わせするはめになったんだけど、それでも僕は懲りずにイメージを壊し続けてたね。僕はポールをけなしてるんじゃない。ブライアンをけなすつもりもないよ。彼らがうまくやってくれたから、僕みたいな人間も始末に負えないトラブルを引き起こさずにすん

だのさ。まあ僕だってそうそうひどいことまではしなかったけどね。ブライアンは決して横柄な態度をとらなかった。それにブライアンとポールと残りのみんなが"なあ、いいじゃないか、ちょっと思い切って、こんなふうにしようよ"って言えば、結局"わかったよ"って言うしかないだろう。でなきゃ"クソッ、じゃあシャツのボタンは留めないからな"とかね。

世間は常にイメージを持ってる。ジョージ・マーティンがすべてやっていてビートルズは何もやってない、とか、ビートルズがすべてやってジョージ・マーティンはいてもいなくても同じだった、とか、ブライアン・エプスタインが全部やったんだ、とか。そういうんじゃないんだよ。組み合わせなんだ。ポールとジョンと他のふたりだったとしたら、ビートルズにはならなかった。ポール、ジョン、ジョージ、リンゴの組み合わせでなきゃビートルズはできなかったんだ。"だって曲は全部ジョンとポールが書いてるんだから、あのふたりの方が貢献してるはずだろう"なんて、そんなことはありえないんだよ。僕らがいなければ、どこかから曲をもらってたさ。それに初期の頃は、ブライアンの存在も大きかった。僕らがタレントで、彼がセールスマン。彼が僕らを売り込み、彼が僕らを世の中に送り出したんだ。デビュー当時、ブライアンにはかなりきつい仕事が多かった。それに彼はツアーもうまくさばいてくれてたよ(一度イタリアへ行ってギャラをもらえなかったことがあったけどね。それにマニラじゃ殺されかけた……)。そういうことをすべて、彼は僕らのためにやってくれたんだ。彼がいなければ僕らは絶対成功しなかったろうし、僕らがいなければ彼も成功しなかっただろう。1972年

リンゴ　ブライアンはすばらしい人だった。ブライアンなら信じられた。すごく楽しい奴だったし、僕らのレコードのことをほんとによく知ってたよ。映画の『ダイナー』に出てくる奴みたいだ。よくブライアン相手にゲームをやってさ。僕らが質問を出す。"よし、じゃあ『カモン・エヴリボディ』だ——これのB面は?"。すると彼はちゃんと答えるんだ。次に僕らが、"じゃあこれは何位までいったでしょう?"と訊く。するとそれも覚えてるんだ。すごいもんだよ。

彼は僕らをいろいろなレストランへ連れて行って教育しようとした。脂まみれのスプーンが出るような場所から引き離そうとね。彼に説得されて僕らはタイを締め、ちょっとまともな格好をするようになった。彼の言うことは正しかったよ。"ステージで酒を飲むな。演奏中はできるだけ煙草を吸わないように"。彼の力はほんとに大きかった。僕らの態度はそれだけ変わり、僕らを受け入れようとしてファンも変わったんだよ。

ポール　ブライアンとは僕ら全員すごく親しかったけど、ジョンがみんなよりもちょっとだけ親しかったかな。デビュー当時、ジョンが彼を脇に引っ張っていって、"いいかい、このグループとやっていきたいのなら、まず僕を通せ"って言ったんだと思う。ジョンはそういうことができる人だよ。彼は賢いからそういうことに目端が利くんだ——残りのみんなは、ただ"ああいいよ、そうしよう"って言うだけだけどね。

ジョンがブライアンと休暇でスペインへ行ったのも、そういうことだったんだと思う——ジョンはグループのリーダーとしての位置をはっきりさせようとしてたんだ。それに僕はブライアンがジョンを好きだったんだと思う。僕らみんなジョンを好きだったけど、ブライアンはゲイだったから、そこにはいささか違う意味が出てくる。

ブライアン・エプスタイン　**何でもやった。すごく一生懸命働いた。**
ファンなどひとりもいない時に、屋根の上から大声で宣伝した。
みんなから頭がおかしいと思われても、ずっと叫び続けた。

デレク・テイラー　初期のエピソードで有名なのがある。嘘かほんとかわからない類の話だけどね。たぶんEMIスタジオでのことだ、ブライアンが"誰かひとり半音低いと思う"と言った。するとジョンが言ったんだ。"歌は僕らがやる、あんたは利益を考えていればいいんだ"。ブライアン本人が言ってたから事実かもしれないな。だけどそんなのは一度きりだった。彼の方もメンバーにすごく気を使ってたからね。

誰だってあの4人に攻撃されたくはないさ——どんなに冗談めかした言い方でもね。あの4人から集中砲火を浴びるのは気分のいいものじゃなかった。"行くぞ"みたいな感じで——いっせいに牙を向けてくる。いつまでも続くわけじゃないよ、だけどあれは相当きつい。そっと逃げ出して傷を舐めるしかない。

ジョン　僕らがほんとにほんとにどうしてもやりたくない場合、ブライアンはやらせることができなかった。彼はそんなに強くなかった。

一度僕らがパリにいる時にブライアンがやって来て、もうたくさんだ、僕らを手放すって言ったことがある。デルフォントかグレードか忘れたけど、どっちかに売りたいって。僕らみんな、口をそろえて言った——僕は面と向かって彼に言ったけど——それなら僕らはやめるってね。全員で言ったんだよ。"どういう形だろうと、そういうことをする気なら、僕らは今ここでやめる。もう演奏しない、バンドも解散だ。他の人間をマネージャーにするつもりはない、特にそいつらは"。

リッチェンバーグやグレードみたいな奴らにはわからないんだよ。彼らじゃ僕らみたいな人間を扱えない。彼らは戦後に出てきたトミー・ハンドリーとか、そういった間の抜けた奴らしか知らないだろう。あとはあの哀れなクレージー・ギャングとかね。デレクがよく言ってたけど、80歳でもステージに引っ張り出せるようにシリコン注入したみたいな奴さ。

とにかく、ブライアンがやらせようとすることなら、たとえそれが違法だろうと僕らは気にしなかった。今だって同じさ。何かあれば、僕はそれが合法だろうと違法だろうとかまわない。自分の好きにやるよ、つかまえに来ればいいんだ。日本にでもアフリカにでも追いかけてくればいいさ。やりたくない仕事を僕に押しつけられるもんならやってみろって。言うことなんか聞くもんか。どんな契約も僕らを縛りつけることはできないよ。1972年

ポール　ブライアンと僕とでビートルズにスーツを着せたというのは誤解だよ——僕らみんなで、喜んで洋服屋へ行ったんだ。それにあのヘア・スタイルは、僕とジョンとでパリに行った時カットした形だよ。

ブライアン・エプスタイン　ウィリアム・シェイクスピアだったかな、リンゴ・スターだったかな、"この商売がおもしろくなくなったらやめる"と言ったのは。どちらの言葉だとしても、僕にはその意味がわかるよ。今年の初め頃、僕は本気でやめようと思った時期があった。

ジョージ・マーティン　ブライアンはとてもいい友人だった。彼がゲイだということは知っていた——だがブライアンとジュディ(私の妻)と私とは、いい友人同士だったよ。3人で出かけることもあった。とても楽しかった。

ビートルズの成功に彼がどれだけの役割を果たしたかということを考える時、私にわかるのは、彼がいなければ私は彼らと出会っていなかっただろうということだ。ブライアンがいなかったらどうなっていたかなんて、そんなこと誰に言える? リンゴがグループに入っていなかったかもしれないなどと誰が言える? "もしも"はいくらでもあるんだよ。判断は誰にもつけようがない。

ジョン　エプスタインがいなかったら、ビートルズは現在の位置にいなかったか? 今と同じではなかったろうね、うん。だけどそういう質問には意味がない。僕らは現に彼に出会ったんだし、起きたことは事実起きたんだ。彼が現れなくても、僕らはみんな——僕ら4人もブライアンも——同じ方向へ向かっていただろう。もしかすると直接の目標は違っていたかもしれないけどね。僕らはみんな、自分たちが何を乗り越えたいかわかっていた。そして彼は僕らに力を貸し、僕らは彼に力を貸したのさ。1967年

ポール　ブライアンのホモセクシュアリティについては、僕らにまったくその気がないことをブライアンの方でもわかっていたんだと思う。だから僕に近づいてきたことなんか一度もなかった。それは断言できる。僕らよく、遅い時間でもやってるパブやクラブへ行った。今考えればゲイ・クラブだったんだね。そこで会ったブライアンの友だちはゲイ仲間だったんだってあとで知ったよ。でも、彼はあんまりゲイっていう感じがしなかった。むしろマッチョだったし、彼の友だちもいい人たちだったよ。僕らの中にはゲイの世界を知ってる奴はいなかったんじゃないかな。

それでもブライアンがゲイだということはずっとわかってた。ゲイの話をしたって平気だったよ。だけど彼が"やあポール、今日は素敵だね"なんて近づいてくることはなかった。僕は女の子を追いかけてたし、ゲイじゃないってことは見ればわかったはずだ。僕ら全員がそういう感じに見えたと思うよ。ジョンとブライアンがホモセクシュアルの関係だったとかいう話もあるけど、僕は違うと思う。僕らがつきあってたのは女の子だけだよ。

ショー・ビジネスの世界はゲイが仕切っているって誰かが言ってた。ゲイの影響はすごく大きくて、会社の社長や権力者の多くがゲイなんだって。すると僕らは、ゲイのコネがあってすごく助かったはずだよ。みんな僕らに好意をもってくれただろう、少なくとも僕

ムのマネージャーとはやり取りがしやすかっただろうからね。今振り返れば、ゲイのプロデューサーたちとのつながりができていたことに気がつく。あの当時の僕らはそんなこと知らなかったけど。

ゲイのネットワークに入り込むことは悪いことじゃなかった。でも入り込んでいくのはブライアンで、僕らはゲームの駒にすぎなかったんだよ。だけど僕らはそれですごく助かったんだ。ブライアンがいいマネージャーではなかったというのは間違いさ。ブライアンは最高のマネージャーだったんだよ。

ジョージ　ブライアンの進む道は僕らと同じではなかった。ある時点までは一緒だった

けど、彼には彼の解決すべき業があった。それに、まるで僕らは、彼の望みをかなえるための手段だったかのように思える。

ブライアン・エプスタインの人生――軍隊から追い出され、学校に馴染めず、RADAを中途でやめ（役者になるのが彼の夢だった）、そして家業に加わりながらもどこか満足できずにいた――そう見ていけば、僕らが彼にとって理想的な手段だったことがわかるだろう。お互いに必要としていたんじゃないかな。僕らはあの地下から引き上げてくれる人を求めていて、彼は自分がハマッてしまった穴から救い出してくれる人を求めていた。どちらにとっても幸せな出会いだったんだ。だけどロンドンに出てくると彼は劇場通いを始め、興行主になり、百万長者になって、もう昔のままの関係はなくなっていた。

一緒にLSDで新たな世界を見出そうと（オルダス・ハクスリーの『知覚の扉』にあるように）試みることもなかった。ブライアンはゲイの世界に入り込んでいった。そのことについては、僕らはあんまりよく知らないんだ。彼がその種の人間だということはわかっていたけど、僕らの方はそういう世界に入っていこうとはしなかった。あの時代にはすべて隠れて行なわれていたしね（僕個人としてはそれで助かった。でなきゃ、ゲイのマネージャーが歩きまわっている楽屋で、全員が下着姿でいられるもんか！）。

実際、僕らは彼がどういうことをしてたのかまるで知らなかった。彼が金を盗られたとか誰かに殴られたとか、そういう話が耳に入ってくるだけだ。殴られたというのは、彼がLSDをやった時のことだと思う。その1日か2日後に会ったんだ。彼はずっと部屋に閉じこもったきりで、新聞が全部細かく引きちぎってあった。そこに何か示されているよね。精神分析医も同じ意見だと思うよ。

ジョン　ブライアンはひどいかんしゃくを起こしたり、当り散らしたり、"労働者締め出し"をやったり、それに何日も姿をくらますこともあった。とにかくいきなり怒り出すんだ。でも僕らはあんまり気にしてなかった。いろいろわかってきたのはあとになってからだよ。彼は時々発作を起こし、すると仕事がすべて止まってしまう。何日もぶっとおしで睡眠薬を飲み続け、何日も目を覚まさないんだ。オールド・ケント・ロードでどこかの港湾労働者にこっぴどく殴られたこともあった。ブライアンがしょっちゅういなくなるから、そのたびに仕事がいきなりストップしてしまう。

彼がダメになっていくのを、僕はそばで見ていたわけじゃない。彼が死ぬ2年くらい前から、僕らはほとんど彼と顔を合わさなくなっていたんだ。僕らがツアーをやらなくなると、彼はほんと、やることがなくなっちゃったのさ。金はレコードから入ってくる。ビリー・Jとかはみんなあっという間に沈んでいって、彼の秘蔵っ子――闘牛士とかそういった奴らは――みんなどこかに消えてしまった。そうやって、ほんと、僕らの間には距離ができていったんだ。

誰かが死ぬと必ず思うもんだよ、"自分がもっと話をしてやれば、彼はもう少し幸せになれたかもしれない"って。僕は罪の意識を感じた。以前はもっと親しかったからね。

でもあの2年間、僕自身も精神的な悩みを抱えていたし、僕らは彼に会っていなかったから、彼がどんな生活をしていたのか見当もつかないんだ。

"一緒に食事に行かない？"って、そう言われるたびにすごくとまどってね。それで僕ら、彼と会わなくなったんだよ。僕ら4人と彼とでいると重苦しかった。いつもある種の空気があって、それでだんだん僕らには距離ができていって、そのために彼はLSDやその手のくだらないものに目を向けるようになった。彼を立ち直らせたら――僕らそうしようとしたんだ。でも実行できなかった。そして彼は死んでしまった。1972年

ブライアンにクスリを教えたのは僕だ――だから彼の死を思い出すと罪悪感を覚える――でも僕は彼の目を開かせようとしたんだよ。彼の状態を探ろうと思ったんだ。"僕のことをとやかく言わないでくれ"って彼が言ったのを覚えてる。僕はそんなことしなかったさ。1970年

ジョージ　くだらないよ。億万長者になって、人生で考えつくかぎりのものを手に入れようと、そんなのはくだらないことだ――死ぬことには変わりがない。一生を終え、何百万回と人生を繰り返しても、いまだに人生の目的がつかめないままかもしれない。目的を見つけようと努力することはできる。リバプールのライム・ストリートを思い出して、ただのリバプールのガキだった頃に立ち返って考えることもできる。そして僕はこう思った。"なるほど、こういうステップはそんなに難しいことじゃないんだ。単に考え方の変化、受け止め方の転換でしかない"。僕はいつでも人々を、世間の人を身近に感じていた。僕のふるさとの人も、ビートルズのファンになってくれた世界中の人も。

だから僕はああいう歌を作ったんだと思うんだ。"ねえ、みんなもこういうことを経験できるんだよ、誰もが手に入れられるんだよ"、そう伝えたかったんだ。だけどやがて気づくのさ、馬を水辺まで連れて行くことはできても、実際にその水を飲ませることはできない。真実が目の前にあったって、それが見えるとはかぎらないんだ。本人に準備ができた時、初めてそれに気づくものなのさ。時々僕の歌を誤解する人もいた。僕が説教しているとでも思ったらしい。だけど、そんなんじゃないんだよ。

ポール　僕らがどれほど愛していたかを聞いたら、ブライアンはきっとすごく喜んだだろうね。

ジョン　ブライアンは肉体として死を迎えただけだ。彼の魂はいつでも僕らと一緒だよ。彼の力と強さがすべてだった。その力と強さはこれからもずっと消えない。僕らが正しい方向に進んでいれば彼にはわかったし、僕らが間違った方向に進んでいればそう教えてくれた――そしていつも彼の言うとおりだった。だけど、とにかく、彼はほんとは死んではいないのさ。1967年

CamScannerでスキャン

ジョン　もう僕らでやってかなきゃいけないんだ。僕らとブライアンが望んでいた方向に向かって。彼の肉体は死んだかもしれない。でもそれは否定的な考え方だ。彼は僕らに力を与えてくれた。今でもその力は消えていないんだ。
　この先新しいマネージャーをつけるかどうかは、まだまったくわからない。今までだってずっと自分たちのことは自分たちで面倒見てきたし、これからだってやらなきゃいけないことは自分でやらなきゃいけない。やるべきこととやるべきでないことの区別はできる。でもブライアンは生まれついての指導者だったし、いなければ悲しいのは当然さ。1967年

ジョージ　ブライアンが死んだあとはポッカリと大きな穴が開いたようだった。彼と出会って僕らはプロになり、レコード業界やロンドン・パラディアムに向かって進み始めたんだから。僕らは自分たちのビジネスや金銭面については何も知らなかった。彼がすべて見てくれていたんだ。だから彼がいなくなったあとはメチャクチャだったね。

ジョン　僕らはガタガタに崩れた。ヤバいことになったってあの時僕は思ったよ。僕は馬鹿な勘違いはしてなかった。僕らに音楽をやる以外の能力があるなんて思っちゃいなかったよ。だから怖かった。思ったね、"もうこれで終わりだな"。1970年

リンゴ　どうしたらいいんだろうってみんな思ってたよ。いきなり僕ら、首を切られたニワトリみたいになっちゃった。どうしたらいい?　どうしたらいい?って、バタバタしてさ。
　それからクライブ・エプスタインが僕らのマネージャーになるつもりらしいって聞いて、会いに行ったんだ。彼のプランについて話し合おうと思ってね。でも聞いてみたら、彼には自分の家具屋とリバプールでの生活の方が大事らしかった。それで時間が経つにつれ僕らはクライブから自由になっていき、アップルという組織を始めた。僕ら、ブライアンの代わりに誰かを入れようとは考えていなかった——すぐにはね、だってツアーをやめてレコーディングに専念するようになってからは、役割が変わっていたから。

ニール・アスピノール　彼らはここで止まってはいけないと考えた。何をやるにしてもそれまでは常にブライアンと話し合ってきたけれど、もう誰もいない。ブライアンの組織はあったけど、彼らは一切関わっていなかった。ブライアンだけが関係してるものだったんだよ。これからどうしたらいいんだろう?って彼らは思った。自分たちの契約内容を示す紙切れ1枚、彼らは持ってなかったんだよ。
　僕ら6人——ビートルズの4人と、マルと僕でミーティングをした。彼らがいるのは誰か他の人のオフィスだった。自分たちは何も持ってないことに彼らは気づいたんだよ。金がどこにあるのかもわからない、ブライアンとも何ひとつ正式に契約を交わしていない、レコード会社とも、映画会社とも——ブライアンがすべて取り仕切っていた。彼らは何ひとつ持っていない。その時座ってるオフィスすら、彼らのものじゃなかった。
　彼らが弱い立場になったわけじゃない。でもあれがきっかけで、彼らは自分たちでコントロールしなきゃいけないと思ったんだ。そして突然、聖域が精神病院に変わった。
　いろんなところからああしろこうしろというアドバイスが入ってきたけど、彼らは自分たちのオフィスと自分たちの組織が必要だという結論を出した。アップルを拡大したのは、それが本当の理由だよ。

ジョージ・マーティン　彼らのひとりがマネージャーになるのは不可能だった。民主主義のグループだったから(それに誰かひとりがマネージャーになったとしても、どのみち他の3人が認めなかっただろう)。彼らのまわりの人間を見たところで、ニール・アスピノールもマル・エヴァンスもブライアンのような"あちら側"の存在ではなかった。最終的にニールはアップルのマネージャーになるけれど、あの時点ではまだ、ジョー・ロックウッドのような人間とファースト・ネームで呼び合えるほどの力はなかったからね。ほんとに苦しい時期だったよ。
　マネージメントが真空状態になり、ありとあらゆるところからハゲタカが飛んで来て死体にたかろうとしていたが、実際には何も起こらなかった。私はマネージメント面にかかわったことはない。関わりたくなかったんだよ。もしそうなれば、スタジオでの信頼関係が崩れてしまうだろうと思った(スタジオでの私たちは仲間だったから)。私たちはみんな同レベルで、同じ言葉を喋ることができた。もし私がマネージメント側に立って、"それはやるな、こっちをやれ"などと言うようになれば、スタジオでの関係が失われてしまっただろう。

ポール　ブライアンなしでやっていくことについては、僕はそれほど悲観してはいなかったと思う。あの頃はもう、スタジオでの僕らの権限も増してきていたからね。ほとんど自分たちでマネージメントをしていたと言ってもいい。昔からの仲間をああいう状況で失うのはすごく悲しいことだった。でも"ああ、これからどうしよう?　僕らにはもうマネージャーがいない"っていう不安はあんまりなかったと思うよ。いずれにしても、すでにマネージャーの必要はなくなってきていたしね。

ジョージ　あの時からニールがビジネス面にも関わるようになって、どういうことになってるのか見極めようとしたんだ。クライブ・エプスタインが引っ張り込まれて、彼がNEMS——マネージメント会社——を引き受けることになった。でも彼の方じゃ興味がなかったんだよ、実はあんまりやる気がなかったのさ。
　ロバート・スティグウッドがらみの問題もあってね。ブライアンはビリー・J・クレイマーやシラ・ブラックや、その他大勢のマネージメントにうんざりし始めていて、それでスティグウッドを引き入れた。ブライアンの死後、ロバートは自分がこの事業を引き継いで僕らのマネージャーになろうと考えたんだ。現に彼は、ドイツ・グラモフォンかフィリップス・レコードと契約を結ぼうとしていた。そうすれば彼にも金が入るからね。
　ブライアンは死ぬ前、ずっと僕らに何か伝えようとしていたんだ。でも結局できなかった。彼が自宅で盛大なパーティを開いた時、僕らはパーティの前にミーティングをするはずだった。でも不幸なことに"サマー・オブ・ラヴ"の時代で、誰もがイカれてたんだよ。僕らはパーマ・ヘアでサイケデリック・カラーの車に乗り、いつでもどこでもラリってボーッとしてた(ブライアンもその時はそんなに暗い雰囲気じゃなかった)。だからしまいにミーティングはしないままだったのさ。
　その後ブライアンがロバート・スティグウッドに、NEMSの株51%を取得する権利を与えていたとわかった。つまり、実際にはビートルズのマネージメントの権利だよ。だから、僕らはスティグウッドに会って言ったんだ。"NEMSは本来ビートルズが主体になってるんだ。だから引っこんでくれ。僕らが51%をもらう。残りの49%はあげるよ"って。それで彼は手を引き、自分の会社を作った。すごく順調でね。一方NEMSは落ち込むばかりだった。ニールと何人かの弁護士とで、いろんなものがどこにあるのか見つけ出そうとしてたみたいだね。あの頃は僕らの曲の版権を持ってたノーザン・ソングスの件でも、見事に失敗した。

ポール　僕らブライアンに言ったんだよ、もし僕らをスティグウッドに売ったら、調子外れの"ゴッド・セイブ・ザ・クイーン"しかレコード出さないから、って。

ジョン　ブライアンは僕らをごまかすようなことも少しやってた。僕らには何の得にもならなかったけど、ブライアンの得にはなってたんだ。事実、NEMSはビートルズよりもでかい会社だろ。僕らには会社なんかない……ノーザン・ソングスに、NEMSに、ディック・ジェームズ。僕らに何があった?　銀行に数ポンドだけさ。そういうところがブライアンはメチャクチャだったんだ。"あと10年契約しろ"って、彼が言ったんだぜ。それで誰が得をした?　僕らじゃない。タマつかまれて身動きできないのは僕らだったんだ。1972年

ニール・アスピノール　すっぱりあきらめてしまえばよかったんだよ。"ブライアンが死んでしまった。これで終わりだ。これからどうする?　どうもしない——それでいいじゃないか?"ってね。でなかったら、組織がバラバラにならないように何かやるべきだった。NEMSはまだ存在してたし、NEMSの人間だってたくさんいたんだから(トニー・バーロウなんかはその後"マジカル・ミステリー・ツアー"のバスに同行して、いろいろなことの準備やらマスコミの対応に当たってくれた)。「マジカル・ミステリー・ツアー」の宣伝はNEMSにやらせてるし、NEMSが彼らのエージェントであることは変わりなかった。
　「マジカル・ミステリー・ツアー」の撮影中にロバート・スティグウッドがやって来た。ホテルでみんな一緒のテーブルについて食事をしていると、ロバートがこれからは自分がビートルズのマネージャーだ、みたいなことを遠まわしに言うんだよ。彼はブライアンのパートナーだったから(だから今はNEMSの所有者ということだ)。"従って、僕が君たちのマネージャーだ"と彼は言った。でもみんながはっきり言ったんだよ。"いや、そうはいかない。他のものは何でもあげるけど、あなたと僕らとは関係ない"。
　実はブライアンがすでに会社を分割していて、持ち株会社のNEMSとNEMSエンタープライゼズに分けていたんだ。ビートルズは持ち株会社の方に入れられてたから、スティグウッドとは無関係だった。そう言うとちょっと単純化しすぎだけどね、でも要するにそういうことだったんだ。とにかく、彼はビートルズとは何の関係もなかったのに、関係を作ろうとしてたんだよ。目のつけどころはよかったね、ロバート。

ジョン　知らない奴に仕切られたくなかったってだけだ。それに、誰がやるにせよ、やるなら友だちにやってほしかった。僕は友だちと仕事がしたいんだ。1972年

リンゴ　ロバート・スティグウッドも株を持ってるって、僕らは突然知らされたんだよ。どうなってたのかわからないけど、とにかくかなりの犠牲を払って僕らは難を逃れた。魔法の瞬間ってやつだね。スティグウッドは自分がでかい手を持ってるつもりでいたけど、僕らはそうは思わなかった。すごく簡単に解決しちゃったね。
　アラン・クラインが興味を示したという話も聞いたけど、僕らは応じなかった。
　バンドの中では、"ねえ、今のうちは僕がやるよ"とは誰も言わなかった。自分たちでやるなんて考えたこともなかったよ。僕らはきっかけだけ作って、あとは他の人を入れようって思ってたのさ。

ジョン　アップルはビートルズの子どもみたいなもんだけど、もともとはエプスタイン家とNEMSが始めたものなんだよ。そのうち僕らが"こういうふうにしよう"って言って、それで彼らが形を整えてくれた。僕らがノーザン・ソングスと同じようなことをやれるように——つまり僕らを僕らに売るのさ。
　80%は一般に売り、僕らが一番下の株主でひとり5%ずつ、ってことになってた。誰が運営するのかは神のみぞ知る、だったね。1972年

CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　アップルのもともとのプランは、例によって経
理の側から出てきたものだと思う。ビートルズは経営を多角化して、
投資対象を増やした方がいいって、ブライアンが会計士から言われ
たんだよ。それで僕はベイカー・ストリートにアップル・パブリッシン
グという会社を作った。もとはそれだけだったんだ。ただのちっぽ
けな出版社だったんだよ。そこをやってたのはテリー・ドランだ。

ジョン　会計士がやって来て言ったのさ。"これだけの金がありま
す。政府にあげてしまうつもりですか、それともこれを何かに使い
ますか?"。それで僕らはちょっとビジネス・マンをやってみようと思
ったわけだ。1968年
　もともとアップルをやる気はなかった。クライブ・エプスタインが言
ったんだよ、"これをやらないと税金でとられちゃいますよ"って。
数年おきにはそういうことを言われるんだよね。ほんとは僕らもビ
ジネスなんかやりたくなかったさ。でも"どうせ参加しなきゃいけな
いのなら、やりたいことをやろう"って思ったんだよ。1972年

ジョージ　誰が最初にアップルを考えたのか、僕にはさっぱりわか
らない。誰が思いついたにしろ、ひどいアイディアだったね！　ブラ
イアンが死んで、スティグウッドとかクライブ・エプスタインとかとごち
ゃごちゃして、そのあたりから出てきたんだと思う。"もういいよ、僕
らは僕らでやった方がマシだ"って思うようになってたんだ。

ポール
ある晴れた気持ちのいい日に、
僕らはみんなで庭に出ていた。
するとそこへロバートがやって来た。
彼は僕が気に入るはずだと
マグリットの絵を持ってきて、
その絵をテーブルに置くと
帰っていった。
僕らが家に入るとその絵があったわけ。
大きな緑のリンゴに、
マグリットの手書きの文字で
"AU REVOIR"と書いてあった。
最高にクールなコンセプトだ
ロバートは僕が気に入ると
わかっていて、
僕があとでお返しすることも
わかっていた。
僕らはマグリットのリンゴを宣伝部の
ジーン・メイホンに見せた。
それで僕らの会社の基本イメージとして
使うことにしたんだよ。

やるのも自然な感じがしたんだよ。だけど、そういう事業をやり始め
ると、突如として嫌なことに気づかされるものなんだ。まず繊維業者
の人たちに会って話を聞いたんだけど、みんな言うのさ。"そ
れはいい。私どももこれにはとても興味があります
れますよ"。"違うよ！　来月用意してほしいんだよ"。僕らの方で
欲しいんだ。今年の夏に！"。僕らが言うと、次の年にどんなものが
流行るかを考えてほしいっていう。工場の準備にそれだけかかる
んだって。それを聞いて僕らは言ったんだ。"そんな、来年のことな
んかわからないよ――どんどん変わるんだから予想つかないよ"
それであういう業界そのものにはとても入り込めないから、自分た
ちのブティックをオープンするだけにしようって決めたんだ。

ジョン　僕らは結局洋服屋を始めた。どうしてそうなったのかわか
らない。まずクライブ・エプスタインが来て、"君たちにはすごく金
があるから、これを君たちのために小売店に投資しようと思って
いる"って言ったんだよ。ちょっと想像してごらんよ。ビートルズと靴
屋チェーン――彼らの考えそうなことだ。
　それで僕らは言ったんだ。"僕らが店を持つとする。もし僕らが
店をやるのなら、せめて僕らの望むような店をやろう。僕らが買い
たいものを置いている店をさ"。僕らが考えてたのは、"ウルワース
みたいに安い店にしよう"ってこと。自分たちが18歳くらいの頃に
マークス＆スペンサーでイカした セーターが買えたらどんなによか
っただろうって。安いけど質がいい。アップルはそういうものを置
く店にしたかった。

　ヒッピーの時代だったからね、みんな思ってたんだよ、"まあや
れはできるさ、あれもできる、これもできる、新しいやり方でやって
みよう"ってね。事実そのとおりだった。いろんな意味で、あれは勇気ある試みだった
よ。イギリスにはまだ戦後の考え方がかなり根強く残っていた。でも60年代半ばには
人々の興味が呼び起こされ、みんな人間の能力に気づき、自分たちのやり方を見つけ
始めた。マリー・クワントもそのひとつの例だね。
　みんなが古い型から脱け出そうとしていた。僕らもビジネスの方面でそれができると
思っていたんだよ。他の人にもチャンスをあげよう、自分たちで映画を作ろう、って思っ
たんだ。すべて自分たちでやってしまおう！
　忘れてもらっては困るけど、1967年は誰もが浮かれてたんだよ！　ビートルズだけじゃ
ない、地球全体がそうだった（少なくともサンフランシスコとLAとロンドンはね）。みんな
でどうやって世界を変えていこうかって雰囲気だった。そして僕らは、"他の人たちを助
けてあげられたらすばらしいじゃないか？"って考えを基本にして、アイディアを出して
いったんだ。"僕らみたいに、ビジネス面で悩まされることがないように"ってさ。
　そこがヒッピー時代の問題だった――特にマリファナの――つまりボンヤリとした頭で
いろいろとすばらしいアイディアを思いつくものの、現実には誰も何もやらないんだよ。
やったとしても、ほとんどの場合は失敗だ。アイディアの段階ではすごくいいんだけど、
現実にはうまくいかない。のんびり座ってイカしたアイディアを考えるだけなら簡単さ、
でもそれを実現させるのはまた別の話なんだ。僕らには実現できなかった。ビジネス・
マンじゃなかったからね。僕らにできることといったら、スタジオにたむろして音楽を作
ることだけだったんだよ。

　僕ら、"よし、イカした服を売ろう"とか言ってさ。ポールがいいアイディアを思いつい
た。"商品を白いものばかりにしよう"って。どんなものでも、白って絶対見つからないん
だよ。カップでも何でも。僕は5年前からずっと白いカップのいいやつを探してるんだ。
1972年　でも話はそこで終わらなかった。アップルはあの手のいろんながらくたと、フー
ルと、くだらない服で埋め尽くされることになった。1970年

デレク・テイラー　僕は1967年の12月、アップル・ブティックのオープニングのためにイギ
リスへ行った。LSDをやってから、ジョージとアップルの話をしたよ。
　みんなでブティックのオープニング・パーティに出かけた。できるかぎりみんなで人類
の役に立とうって話をしてね。ジョンがこんなことを言ってた。"僕らの店では、誰かが
こういうカウンターを欲しいと言ったら――そのとおりのカウンターを売ってあげよう。こ
ういう椅子が欲しいと言えば、そういう椅子を見つけてあげるんだ。そういう店にしよ
う"って。

ジョージ　アップル・ブティックは、最初はすばらしいアイディアだった。今でも僕は、ほ
んとに価値のあるものを売る店があればいいのにって思ってるよ。僕らがやろうとして
いたのは、自分たちの好きなものを商品としてすべてそろえることだ。イカれた服とかヒ
ッピーのフラワー・パワーめいたもの以外にも、僕らはさまざまなタイプの音楽（今では
"ワールド・ミュージック"と呼ばれてるもの）をサポートしするつもりだった。それに僕ら
が興味を持ってるさまざまなことに関する本、宗教関連のものとかお香とか、とにかく何
でも置くつもりだった。

ポール　ベイカー・ストリートの店はすばらしかった。みんなの目を惹きつけるために、
壁全体にすばらしい絵を描こうと思ったんだ。絵は見事だったよ、フールがやってくれ
たんだ。

ポール　理論としては、僕らのやってることをひとまとめにして、僕ら自身の会社でやろ
う、ということだったんだ。これまでやりたかったことを全部やろうじゃないか、って。
　僕らはすばらしいアイディアをいっぱい抱えてた。"うん、これもできる。あれもできる"
って。そういうアイディアがたくさんあって、僕らはすごくやる気になってた。だけど計画
性はあんまりなかったのさ。だからすぐ、みんなが金を使いすぎて予算上の問題が出て
きた。秘書たちも一生懸命かと思えばやる気がなさそうだったりね。ちょっとおかしな
状況になることもしょっちゅうだった。情熱だけじゃ羽ばたけないんだよ。ブライアンな
らああいうことを常にうまくさばいていたんだろうけど、僕らには何の計画もなかった。
　初めは実際にアップルを僕らで経営していこうとしたんだ。つまり財政面でもさ。だけ
どそれは難しかった、ふたつの帽子をかぶらなきゃならないんだから。僕ら全員の責任
でやってたんだけど、ジョンがちょっと腹を立ててたのは知ってる。"ポールがリーダーに
なろうとしてる"って。僕は別に、僕らの"マネージャー"になろうとしてたんじゃない。僕
らが僕ら自身を管理できるように、グループの内側から働きかけていたつもりなんだ。
　僕は他のメンバーより"しっかり"してたかもしれないよ。「マジカル・ミステリー・ツアー」
をやった時だって、結局僕が監督をすることになった。監督はビートルズってことにしてあ
るけどね。僕はほとんどかかりきりで、翌日何をやるかカメラマンと深夜に相談もしたし、
編集もやった。すべて僕にまわってくる感じで、みんなはそんなにやってなかったよ。

ジョン　もう僕らが僕らのマネージャーだ、もう自分たちですべて決めなきゃいけない。
今までだって、自分たちのやることには自分たちで完全に責任持ってたけど、それでも
父親的な存在がいたからね。だから、やる気がしない時は――いいさ、ブライアンがや
ってくれるって。でも今は自分たちでビジネスすべてを仕切らなきゃいけないんだ、何か
ら何まで。それで僕はちょっとばかりとまどったんだよ。1968年

ポール　僕らにはずっと服を作ってくれてた友人がたくさんいたし、あの当時はあちこち
にいろんなブティックが出来始めていたから、僕らが自分たちのちょっとした洋服屋を

ジョージ

みんなに影響を与えよう、
アップルの店の外壁に絵を描こう、
そんなのもみんな僕らの
テディ・ボーイっぽさの現れさ。
"目にもの見せてやる"ってのが
テディ・ボーイのテーマだよ。
"ひと晩で建物に絵を描くんだ、翌朝みんなが
通ったら建物全体がサイケデリックになってるんだぜ"
そういうのっておもしろいじゃないかと思ったんだ。
単にそれだけのこと――
僕ら、前世では海賊だったんじゃないかな。

CamScannerでスキャン

ポール　またこうやって仕事してる、
ほんと最高の気分だよ。1967年

CamScannerでスキャン

ジョン　1967年初め、僕らはもうコンサート・ツアーはやらないだろうと思った。僕らが作り始めたレコードは、ステージで再現できるような曲じゃなかったから。で、ステージがないとすると、何かそれに代わるものが欲しくなった。テレビというのはわかりやすい答えだろ。1967年

ジョージ　僕らは適当な脚本を何年も探してたんだけど、「ア・ハード・デイズ・ナイト」に「ヘルプ!」から時間が経って――といっても実際には2年くらいのものだろうけど――気分的には500年くらい経ったような感じがしていた。もう似たような映画は作る気になれなかった。4人の陽気な若者がキャッチーな歌を歌いながら逃げ回ってる映画なんてさ。作るなら、もっと意味のあるものにしたかった。

僕らはパトリック・マクグーハンが気に入っていてね。彼は「プリズナーNo.6」というテレビ・シリーズで何本か脚本を書いていて、僕らそれがすごく好きだったんだよ。"彼ならいいものを書いてくれるかもしれない"って思ってた。あと「リトル・マルコム・アンド・ヒズ・ストラグル・アゲンスト・ユーナックス」を書いたデヴィッド・ヘリウェル――僕らは彼をせっついて、何か書いてくれって頼んでたんだ。ジョー・オートンの話もあったのは知ってるけど、誰かがジョー・オートンに会ったとか、脚本を見たとかって覚えはないな(あとで脚本は出たんだけどね)。あれはたぶんブライアン・エプスタイン的なヘマだったんだと思うよ。

ポール　「マジカル・ミステリー・ツアー」のアイディアを誰が出したのかよく覚えてない。僕のアイディアだったかもしれないけど、僕がすべての責任を負わされるのはどうかな! みんな参加してたんだから――でもあの頃の素材というと、大部分が僕のアイディアだったかもしれないね。僕はいろんなコンセプトを思いついていたから。「サージェント・ペパー」もそうだ。(あれが僕のアルバムだと言ってるんじゃないよ――もちろん全員でやったんだ――だけどアイディアの多くは僕が考えた)。

僕はプライベートでもよくカメラで遊んでいて、公園なんかに出かけては映画を撮っていた。ちょっとしたホーム・ムービーなんかをみんなで見せ合って、イカれたサウンドトラックをつけたりしてたよ。僕は家でちょっと編集もしてた――ちょっとしたマシンを持っててね、すっかり夢中になってたんだよ。それで次のビートルズ・プロジェクトにって僕は考え
たんだ。"映画を撮りに行こう――おもしろいじゃないか"。
んな思いつきでやったことなんだよ。

「マジカル・ミステリー・ツアー」には脚本がなかった。ああいっ
タイプの映画に脚本は必要ない。あれは単に、ひとつのおかしなア
ディアから始まったんだ。僕らはみんなに、"月曜の朝バスに乗って"
言っただけ。"作りながら撮っていくけど、心配しないで――き
うまくいくから"って僕は全員に言った。だけどいろんな人と
続けてたんだよ、脚本があれば安心できるし、当然すご
かるからね。でも僕らのやろうとしてるのが普通の映画
うのはわかってた――僕らのやろうとしてるのは、"エッ
ン"とかの出てくる、クレイジーな60年代映画だった。

まだ脚本はできてないけど、
今イギリス中の公衆便所をまわらせてる。
壁の落書きを全部盗んでくるんだ。 1967年

「マジカル・ミステリー・ツアー」はポールのアイディアだ。いいやり方だったよ。
ばらしい紙を1枚出して――何も書いてない白い紙に、丸がひとつ。そして
のは――"ここからスタートする――それからどこかここらへんに行く……"。
ら埋めていくんだ。
りて出発した。少しは決めてあったんだよ。ジョンはいつでも小人をひとり
たがっていたし、セットを用意するのに飛行機の格納庫が必要だった。そ
、音楽は僕らでやる。あれは最高によくできたビデオだよ。それにすごく楽
者は『スポットライト』という役者名鑑を見て探した。"うん、こういう人が
いう人が欲しい"って言いながら。僕のおばさん役に大柄の女性が必要
、彼女もその名鑑で見つけたんだよ。

通の、ありふれた人たちがバスに乗ってあちこちをまわる。そしていろん
のさ。1967年

に観光バスのツアーだよね。昔リバプールの人たちが陽光あふれるブラックプールを見に行ったみたいな――ビールを何ケースも持って、みんなで騒…まったくお粗末な話だよ。それに僕らは自分たちが何をしてるんだか…ぱりわかっていなかった。少なくとも僕にはわからなかったね。いったい何が起きているんだか…しだった。僕がちゃんと考えていなかったのかもしれない。僕の頭…ど、つまり別の世界に行ってしまってたんだよ。

この頃、ポールは、誰かが何かやらなきゃいけないと思ってたんだ。それで僕の考えていることを押し出していこうとしたんだよ。でも僕はほんとに参加していたとは言えない――僕はおまけだったんだ。何人か協力を頼んだけど、そのひとりがデニス・オデル――たしか彼は「ハード・デイズ・ナイト」のアソシエイト・プロデューサーで、その後アップルにも引っ張られて何かやってたんじゃなかったかな。僕らには映画のビジネス面で大人の人間、父親的な存在が必要だったんだよ。「マジカル・ミステリー・ツアー」でも、ひとつはいいことがあったんじゃないかと思う。あれで僕らは仕事ができた。あれが僕らを全員一緒に引っ張り出してくれたんだ。

ジョン　僕はまだ感覚が狂ったままだった。ブライアンが"そろそろレコーディングをやろう"、"そろそろこれをやろう"って言いに来るような気がしてたんだよ。でも、ポールがそれをやり始めたのさ。"さあ映画を作ろう、さあレコードを作ろう"って。彼は自分が声をかけなきゃ、誰もレコードを作ろうとしないと決めつけてた。ポールが言うんだ、"僕は"やりたい気分だって――すると突如として、僕は20曲つくらなきゃならなくなる。あるいは彼が出来のいい曲を20曲くらい持ってきて言うんだ、"レコーディングしよう"。すると突如として、僕はどうしようもない曲を山ほど書かなきゃならなくなるんだよ。1972年

ニール・アスピノール　セント・ジョンズ・ウッドのポールの家で、ポールとジョンが取りかかった。円を描いて、それから車輪のスポークみたいに線を引く。"ここで1曲入れよう、そこで夢の中のシーンにしよう"みたいな感じでさ。そうやって細かいところを決めて行ったんだよ。

ジョン　どういうシーンを入れたいかはほとんど頭にあったけど、キャストに馴染んでくるとその人たちに合うようにアイディアを変えていった。僕らのプランがどこか気に入らない人がいれば、彼らの気持ちを優先する。うまくいくようならそのままにする。このバスにはすごくかわいい5歳の女の子も乗っててね、ニコラというんだけど、彼女ならうってつけだってことで、僕が彼女に話しかけて風船をあげる短いシーンを挿むことにした。1967年

ポール　ある朝、数人の仲間とフラッとフランスに行き、「フール・オン・ザ・ヒル」のシーンを撮影した。――"組合"ではそういうのは認められてない――本当はカメラマンを百万人くらい連れて行かなきゃいけないんだけど、僕らは嫌だった。僕らはシステムに逆らって、型破りでくだらない映画を作ろうとしていたんだ――ただ、ごくたまに、それで困ることもあったけど。

ほとんどの場合は大丈夫だったんだよ。"ねえ、これはすごく自由気ままな映画だから、ただそこのビーチまで行って……"って言えばよかった。アイバー・カトラーがバスター・ブラッドベセル役で出ていてね、彼が思いを寄せる相手がジェシー(太った女性ね)なんだ。砂浜で彼は彼女のまわりに大きなハートを描いた。僕らそれ、"いいねえ"って思って、それをそのままシーンに入れることにしたんだよ。

1~2度、ちょっとヒヤッとしたこともあった。ナット・ジャックリーみたいな人たちにはちょっと申し訳ないと思ったよ。僕らは彼を尊敬してた。ミュージック・ホールなんかに出てた昔ながらのコメディアンで、奇妙なダンスやおかしな歩き方で笑わせる。そういうことなら何をやらせても最高なんだ。ジョンと僕は彼が大好きで、ジョンは彼とのシーンを楽しみにしてた。だけどちゃんとした脚本がないことで、ナットはちょっといらだっていたんだ。昔の人たちにとっては、脚本を読んで仕事するのが当たり前だったから――結局はそれが一番理に適ってるし――だからあの映画には少しガッカリしたんだね。

リンゴ　あれはよかったね。"ここで停まろう"ってバスを降りて、外へ出て、あれこれやって。ビーチへ行き、ハートを描き、ダンスをする。それから音楽をつける。撮影は2週間だったけど、編集にはほんと時間がかかった。最初の監督がちょっと失敗だったな。僕ら"歩くカメラマン"を使っててね――歩きながらシーンを撮影するんだ。最初の3~4日分のラッシュを見たら、そいつカメラを回しっぱなしにしてた――だから何時間も舗道ばかり映ってる。どうもありがとよ。

CamScannerでスキャン

ジョン　監督がいなくては、たまたま入ってきたカメラマンたちを使った。僕らが"あなたは監督？"って言うと、彼らは"はい"と答える。それで"僕はいい？"と言うと"はい"。それで僕らは、"じゃあやってくれ"。でかい金が動く仕事で、こんなことやってたんだぜ。1972年

リンゴ　ドラム・セットは2種類使った。僕は大男用に作られたセットを持ってて――よく考えないで買うとこういうことになるんだよ。巨大なベース・ドラムとタムタム、巨大なスネア・ドラム。スネアが大きすぎて、僕の足はベース・ドラムまで届かない。だから撮影には一度も使えなかった。だけど叩くふりだけするにはなかなかいいんだよ。その他にミニのセットも持ってた。それは単に僕の遊びで、あとは普通のドラムだ。

ジョージ　ケントに大きな飛行機の格納庫があったのを覚えてるよ。ミニ・クーパーで空港を走りまわって、「ユア・マザー・シュッド・ノウ」の場面を撮影してた時だ。あれはけっこうおもしろかった。あのシーンは楽しめたよ。

ニール・アスピノール　ありとあらゆることが起きた。僕らの乗った派手なペインティングの大きなバスが、狭くて小さな橋を渡ろうとした時だ。バスは幅が広すぎて、橋の途中で身動きとれなくなって、前にも後ろにもうまく進めなくなっちゃったんだ。バックするしかなかったんだけど、すでに後ろには100ヤードくらい、両方向に車の列がつながっていて、みんなもうカッカしてたよ。

ジョンとポールがあの厄介なやつの編集にかかると、誰もつなぎのショットを撮ってなかったことがわかった。外側からバスを撮ったショットがひとつもなかったんだよ。それで、じゃあ僕がやろうと言ったんだ。ニック・ノーランドをカメラマンに、マルと僕とでまたバスに乗って出かけた。ポスターはとりあえずあとまわしにして、沈む夕日に向かって出ていったわけさ。

小さなジプシーのキャンプの近くで止めて、僕は通り過ぎるバスに数人の子どもが手を振るところを撮った。バスには誰も乗ってないから、さっと通るようにって運転手に頼んでね。バスが近づいてくるショットと、過ぎ去るショットを撮って、これで少しつなぎのシーンができた。そういったことがしょっちゅうあったよ。それに僕はずっと思ってたんだ。"彼らはいつ曲を作ったんだろう？"。

ジョン　「マジカル・ミステリー・ツアー」は僕の好きなアルバムの1枚だ。とっても変なアルバムだからさ。「アイ・アム・ザ・ウォルラス」もお気に入りの曲だ――もちろん僕が作ったってこともあるけど、それだけじゃなく、100年経ってもまだ楽しめるようなものがちょこちょこと含まれているからだよ。1974年

あれは「不思議の国のアリス」の"セイウチと大工"からとったものだ。僕にとっては、あれは美しい詩だったんだ。ルイス・キャロルが資本主義体制について語っているなんて思いもしなかったよ。彼がほんとは何を言おうとしてるのかとか、みんながビートルズの歌でやるみたいに突っ込んで考えたことはなかった。あとで見てみたら、あの話の中でセイウチは悪者なんだね。大工がいい奴なんだ。"しまった、引っ張ってくる奴を間違えた"って思ったけど、大工じゃちょっと感じが変わっちゃうだろう？"僕は大工……"なんてさ。1980年

人形で映画化されたやつを見たら、セイウチってすごい資本家なんだよ。牡蠣をみんな食べちゃう。僕にはずっと水族館のショーのイメージがあって、セイウチって大好きだったんだ。それでセイウチがどんな動物かチェックもしなかった。あれはひどい話だよ――それもあとでわかったんだけどさ。でもああいう書き方をすると、みんな何か意味があるって思い込む。いや、僕だってそうさ。みんな思ったんだ、僕が「アイ・アム・ザ・ウォルラス」って言ったのは"私は神"とかそういう意味だろうって。あれはただの詩だけど、それが僕の象徴みたいになってしまった。1980年

"ウォルラス"というのは夢のことを言ってるんだよ。言葉そのものにはあんまり意味がないんだ。みんないろんな結論を引っ張り出してくるけど、そんなのお笑いだね。僕は昔から不真面目な言葉が好きで――どこでもひねった言葉を使ってる。みんな何でも深く掘り下げようとするけど――本当は何を意味するのか？って。"私はエッグマン"とは何なのか？ プディングの器かもしれないよ。僕の知ったことじゃない。そんな真面目な話じゃないんだ。

ディランやキリストを好きでいながら、ハレ・クリシュナについて喋りまくってた奴がいた。今僕の頭にあるのはギンズバーグのことだけどね。"小学生のペンギン"というのは、ハレ・クリシュナを唱えてまわったり、ひとりの偶像的存在を崇拝したりできるような、そういうウブな奴のことさ。

あの頃の僕は曖昧な書き方をしていた。ディラン風にね。はっきりと意味は出さずに、何かの印象を伝える。その何かがなんとか読み取れるくらいの感じでね。おもしろいゲームだよ。"こういうアートかぶれのナンセンスを書いても大丈夫だろう"って思ったんだ。ディランのすばらしい詩についてはいろんなことが言われてる。これまでの詩ではなかったことだよ。僕の詩についてもそうだね。だけどディランやビートルズにあれこれ意味を読み込もうとするのはインテリたちだ。ディランは殺人を詩にしても何も言われなかった。それで、"僕もこういうくだらないことを書いたって平気だろう"と思ったんだ。

いくつかのイメージをくっつけて、つなぎ合わせて、それを詩と呼ぶ。でもあの歌は、「イン・ヒズ・オウン・ライト」を書いた時と同じ気分で書いてたね。

BBCラジオの生番組があって、シェイクスピアか何かの朗読をやってたんだ。僕はそこで出てきたセリフをそのまんま、あの歌に詰め込んだんだよ。最後になんて言ってるかわかるかい？"誰も同じものを持っている、誰も同じものを持っている"。BBCくらいミキシングをしたんだけど、たまたまその時に流れてたものをそのまま使ったんだよ。あれが「リア王」だというのは何年もあとになってから知った。誰かが教えてくれてね――僕は何言ってるんだかほとんど聞き取れなかったんだ。ラジオの生放送をそのままミキシングするというのはおもしろいもんだね。だから、それがあの歌の秘密だよ。1980年

ポール　ボクシング・デイにBBC1で放映された。いつもはミュージック・ホールとかブルース・フォーサイスとかジミー・ターバックをやってる時間帯だよ。それがいきなり、あんなラリってるような映画をやるんだから。しかもみんながクリスマスの準備をしてる時間にさ。驚いた人もいただろう。評論家は大喜びだったね。"なんという駄作だ！ 駄作、大失敗！"。

CamScannerでスキャン

ジョン　監督がいなくてね。たまたま入ってきたカメラマンたちを使った。僕らが"あなたは監督?"って言うと、彼らは"はい"と答える。それで"腕はいいか?"と言うと"はい"。それで僕らは、"じゃあやってくれ"。でかい金が動く仕事で、こんなことやってるんだぜ。1972年

リンゴ　ドラム・セットは3種類使った。僕は大男用に作られたセットを持ってて――よく考えないで買うとこういうことになるんだよ。巨大なベース・ドラムとタムタム、巨大なスネア・ドラム。スネアがでかすぎて、僕の足はベース・ドラムまで届かない。だから実際には一度も使えなかった。だけど叩くふりだけするにはなかなかいいんだよ。その他にミニのセットも持ってた。それは単に僕の遊び。あとは普通のドラムだ。

ジョージ　ケントに大きな飛行機の格納庫があったのを覚えてるよ。ミニ・クーパーで空港を走りまわって、「ユア・マザー・シュッド・ノウ」の場面を撮影してた時だ。あれはけっこうおもしろかった。あのシーンは楽しめたよ。

ニール・アスピノール　ありとあらゆることが起きた。僕らの乗った派手なペインティングの大きなバスが、狭くて小さな橋を渡ろうとした時だ。バスは幅が広すぎて、橋の途中で身動きとれなくなって、前にも後ろにもうまく進めなくなっちゃったんだ。バックするしかなかったんだけど、すでに後ろには100ヤードくらい、両方向に車の列がつながっていて、みんなもうカッカしてたよ。

ジョンとポールがあの厄介なやつの編集にかかると、誰もつなぎのショットを撮ってなかったことがわかった。外側からバスを撮ったショットがひとつもなかったんだよ。それで、じゃあ僕がやろうと言ったんだ。ニック・ノーランドをカメラマンに、マルと僕とでまたバスに乗って出かけた。ポスターはとりあえずあとまわしにして、沈む夕日に向かって出ていったわけさ。

小さなジプシーのキャンプの近くで止めて、僕は通り過ぎるバスに数人の子どもが手を振るところを撮った。バスには誰も乗ってないから、きっと通るようにって運転手に頼んでね。バスが近づいてくるショットと、遠ざかるショットを撮って、これで少しつなぎのシーンができた。そういったことがしょっちゅうあったよ。それに僕はずっと思ってたんだ。"彼らはいつ曲を作ったんだろう?"。

ョン　「マジカル・ミステリー・ツアー」は僕の好きなアルバム1枚だ。とっても変なアルバムだからさ。「アイ・アム・ザ・ウォルラス」お気に入りの曲だ――もちろん僕が作ったってこともあるけど、それだけゃなく、100年経ってもまだ楽しめるようなものがちょこちょこと含まれているからだよ。

年

れは「不思議の国のアリス」の"セイウチと大工"からとったものだ。僕にとっては、は美しい詩だったんだ。ルイス・キャロルが資本主義体制について語っているなんいもしなかったよ。彼がほんとは何を言おうとしてるのかとか、みんながビートルズでやるみたいに突っ込んで考えたことはなかった。あとで見てみたら、あの話の中イウチは悪者なんだね。大工がいい奴なんだ。"しまった、引っ張ってくる奴を間違って思ったけど、大工じゃちょっと感じが変わっちゃうだろう?"僕は大工……"なんてさ。1980年

1人で映画化されたやつを見たら、セイウチってすごい資本家なんだよ。牡蠣をみんな食べちゃう。僕にはずっと水族館のショーのイメージがあって、セイウチって大好きだったんだ。それでセイウチがどんな動物かチェックもしなかった。あれはひどい奴だよ――それもあとでわかったんだけどさ。でもああいう書き方をすると、みんな何か意味があるって思い込む。いや、僕だってそうさ。みんな思ったんだ。僕が「アイ・アム・ザ・ウォルラス」って言ったのは"私は神"とかそういう意味だろうって。あれはただの詩だけど、それが僕の象徴みたいになってしまった。1970年

"ウォルラス"というのは夢のことを言ってるんだよ――言葉そのものにはあんまり意味がないんだ。みんないろんな結論を引っ張り出してくるけど、そんなのお笑いだね。僕は昔から不真面目な言葉が好きで――どこでもひねった言葉を使ってる。みんな何でも深く掘り下げようとするけど……本当は何を意味するのか?って。"私はエッグマン"とは何なのか?プディングの型かもしれないよ。僕の知ったことじゃない。そんな真面目な話じゃないんだ。

ディランやキリストを好きでいながら、ハレ・クリシュナについて喋りまくってた奴がいた。今僕の頭にあるのはギンズバーグのことだけどね。"小学生のペンギン"というのは、ハレ・クリシュナを唱えてまわったり、ひとりの偶像的存在を崇拝したりできるような、そういううぶな奴のことさ。

あの頃の僕は曖昧な書き方をしていた。ディラン風にね。はっきりと意味は出さずに、何かの印象を伝える。その何かがなんとか読み取れるくらいの感じでね。おもしろいゲームだよ。"こういうアートかぶれのナンセンスを書いても大丈夫だろう"って思ったんだ。ディランのすばらしい詩については、いろんなことが言われてる。これまでの詩ではなかったことだよ。僕の詩についてもそうだね。だけどディランやビートルズにあれこれ意味を読み込もうとするのはインテリたちだ。ディランは殺人を詩にしても何も言われなかった。それで、"僕もこういうくだらないことを書いたって平気だろう"と思ったんだ。

いくつかのイメージをくっつけて、つなぎ合わせて、それを詩と呼ぶ。でもあの歌は、「イン・ヒズ・オウン・ライト」を書いた時と同じ気分で書いてたね。

BBCラジオの生番組があって、シェイクスピアか何かの朗読をやってたんだ。僕はそこで出てきたセリフをそのまんま、あの歌に詰め込んだんだよ。最後になんて言ってるかわかるかい?"誰も同じものを持っている、誰も同じものを持っている"。6回くらいミキシングをしたんだけど、たまたまその時に流れてたものをそのまま使ったんだよ。あれが「リア王」だというのは何年もあとになってから知った。誰かが教えてくれてね――僕は何言ってるんだかほとんど聞き取れなかったんだ。ラジオの生放送をそのままミキシングするというのはおもしろいもんだね。だから、それがあの歌の秘密だよ。1974年

ポール　ボクシング・デイにBBC1で放映された。いつもはミュージック・ホールとかブルース・フォーサイスとかジミー・ターバックをやってる時間帯だよ。それがいきなり、あんなラリッてるような映画をやるんだから。しかもみんながクリスマスの準備をしてる時期にさ。驚いた人もいただろう。評論家は大喜びだったね、"なんという駄作だ!駄作、大失敗!"。

CamScannerでスキャン

うなると何か出るたびに(映画でも何でも)みんないっせいにこキ下ろそうとするんだよ。あそこまで褒めちぎってしまうと、あとはまた叩きのめすしかなくなるからね。そういうもんだよ。それが人生か。
あの映画に関してはほんとに楽しんだ人も少なかったんだろうけど、それはわれわれも芸術的な見方からしても、あれはきちんとした脚本に沿って見事に演じられたというものじゃない。ちょっとしたホーム・ムービーみたいなものだ。手のこんだホーム・ムービーだね。でも僕らは楽しかった。楽しいはずさ。バスには何ケースものビールに、アコーディオン弾きまで載せてたんだ。
あの映画には見るべき部分もあると思うよ。あの当時よかった部分は今でもいいし、あんまりよくなかった部分は今でもあんまりよくない。時とともに味が出てくるというものではないけど、いい曲もいくつかあるし、おもしろい場面もちょっとはあるよ。ジョンがあの太った女性の皿にスパゲティを山盛りにするところ。僕にはあれが最高だな。僕にとってはあの映画で一番のシーンだ。あれはジョンのアイディアだよ。

ジョージ・マーティン 「マジカル・ミステリー・ツアー」は成功作とは言えない——ほんとのところ、それでも控えめな言い方だ。最初はイギリスのテレビで放映されたんだが、カラーフィルムで撮って白黒で映したんだよ。当時BBC1はカラーじゃなかったからね。あれはひどかった。大失敗だね。大げさで気取っていると誰もが言った。だがあれは一種アヴァンギャルドなビデオだったとも言えるんだよ。
ビデオというものを初めて製作したのはビートルズだ——今ではビデオも仕事の一部とみなされているがね。「マジカル・ミステリー・ツアー」は、むしろ趣向を凝らしたビデオだったんだよ。
たしかに少し気取ってはいるが——それでも非常に楽しめる。ちょっと退屈な部分もあるかもしれないし、あまり出来のよくない曲もあるかもしれないが、ひとつの試みとしてはよかったんじゃないかな。

ジョン "じゃあここ、この部分は君が書いて"ってポールが言ったんだ。"冗談じゃない、僕は映画なんてやったことないんだぜ"って思ったよ。"どういう意味だい、脚本を書けっていうのか?"。それで僕は急いで夢の場面を書いた。太った女と、スパゲティやらいろいろね。1970年

リンゴ 僕らはイギリス人だからね、BBCにあげようと思ったんだよ(当時はBBCがもっとも勢力の強いチャンネルだった)。ところが白黒で放送されてしまった。僕らも馬鹿だったけど、向こうも馬鹿だね。当然受けは悪かった。みんなここぞとばかり言ったよ、"やりすぎだ。自分たちを何様だと思ってるんだ? こんなもの、まるで意味がわからない"。ロック・オペラっぽいシチュエーションだったから、"彼らはベートーベンの器ではない"とも言われた。みんな依然として、きちんと筋の通ったものを求めていたんだよ。ところがあれはすごく抽象的だったからね。
みんなで思いついたことをどんどんやって、仲間同士楽しんでるってだけだ。当然ひどく叩かれたけど、カラーで見られるようになってからは、すごくおもしろいって言われるようになった。妙なもんだけど、あの作品は時の試練に耐えたんだと思うよ。白黒で見たらおもしろ味がほとんどなくなっちゃうというのはわかるけどね——まるで意味が通らないだろう(空中バレエのシーンは特に)。アイスランドまで行って撮ってきてもらったのに、その風景が白黒で映されてしまったら——なんだこれ?ってことになる。顔を塗った道化にマジシャン。どういう意味?って思うよね。
思い出してほしいんだけど、僕らが初期にやったのはみんなラヴ・ソングだった——「ラヴ・ミー・ドゥ」、「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」、「プリーズ・プリーズ・ミー」、みんなそうだった。それが突然"アイ・アム・ザ・ウォルラス"に"ニッカーズをおろす"だからね。"冗談じゃない、いったいあいつら何やってるんだ? あまりに度が過ぎる"ってね。いつだってたくさんいるんだよ、"今回はやり過ぎ"って言う人が。

ポール **ほんとにそんなにひどかったかい?**
最悪のクリスマス番組じゃなかったよ。
だってさ、女王のスピーチにしたって
無駄とはいえないだろ? 1967年

ポール その後スティーヴン・スピルバーグみたいな人たちから言われたんだ。"映画学校に行っている頃、あの映画は私たちの間ですごく話題になっていたんですよ"って。あれは普通の映画というよりアート・フィルムだったんだ。僕らみんな、あれはあれでいいと思ってた。僕らの最高傑作じゃないけど、でも僕は弁護するね。「アイ・アム・ザ・ウォルラス」の演奏シーンは、あの中でしか見られないんだし。実際に演奏したのはあれだけなんだよ。
そういうことだけでも、十分にあの映画には見る価値があると思う。それにジョンのスパゲティの夢のシーン。あれは彼が実際に見た夢なんだよ。"ねえ、夕べこんな変な夢を見た。やってみたいな。僕がウエイターで……"って。それでそのアイディアを全部入れたんだ。まるで計画性なし。そうやって人間は学んでいくんだよ、失敗によってね。
すべて失敗だったってわけじゃないけど、いくつもの小さな間違いが重なっていった。たとえばカチンコってものを全然使わなかったから、編集の段階で——音楽も入るし——すごく大変なことになった。編集に予定していた期間は2週間——それが実際には11週間かかった。だから編集でちょっとばかり予算をオーバーしてしまったんだよ。僕はソーホーに1日じゅう編集者とこもって——それは僕の仕事だったんだ——みんなは時々顔を見せたくらいだ。だからその点では、僕にかなり責任があるってことになるんだろうね。
でも一方で、僕はあの映画をすごく誇りに思ってる。あれは大胆な試みだった。ただ当時、明らかに時期と観客を間違えて放映されてしまったけどね。

ジョン ファンに対して責任があるとは思わないな。こっちのやることを好きになるか嫌いになるかはファンに決めてもらえばいいんだ。気に入らない時は、向こうが教えてくれるよ——即座にね。すべてファンの指図を待っていたら、他人のために自分の人生を生きているのと同じだ。僕らはファンと同等な立場でいるべきだ。1967年

ジョン みんな僕らが本来の役割から外れたと思ったんだよ。しゃっちょこばったお仕着せのスーツをいつまでも着ていてほしかったんだ。勝手にいろんなイメージを作って、僕らがそれに従わないと失望するのさ。でも僕らは絶対に人のイメージに従わないから、いつでも失望ばかりってわけさ。1968年

リンゴ いい撮影だった。すごく楽しかったし、それにビデオを作れば——ちょっとした映画を作れば——ツアーに出なくてすむ。テレビ番組のハシゴをして、キャシー・マクゴワンに"ハロー"って何度も言わなくてすむんだから。
あの頃のジョンの詩は、ほんと最高だったね。普通の人なら1曲全部か、あるいは小説1冊必要なところを、彼は切れ味鋭い1行で表現してしまう。曲はどんどんよくなっていた。メロディの面でも、演奏の面でもね。

ニール・アスピノール 空を飛んでいるシーンがあったんだ。素敵な歌がついていて、どんどん色を変えていく。でも白黒で映されたんじゃ、当然色の変化なんてなくなってしまう。だから観た人の反応もわかるよ、"なんだ、これ?"って、そりゃちょっとがっかりするさ。

ジョン 僕がレコードを出すと、必ずBBCはなんだかんだと理屈をつけて放送禁止にしやがる。"ウォルラス"だって一時BBCでは禁止になったんだよ。"ニッカーズ"って言ってるからだってさ。1980年 意味も幅があるし感じのいい言葉だから使っただけだよ。語呂がいいじゃないか。
昨日ジョイス・グレンフェルが"ニッカーズをおろす"って言ってるのを誰かが聞いたってさ。サー・ヘンリー・フィールディングだか誰だか知らないけど、BBCのお偉方、よく聞いとけよ。1967年

ジョージ マスコミの非難の的だったね。僕らはすでにあれだけ成功してしまったから、そ

14.9.67			Location all day - Newquay	£ 40	0
14.9.67			Two wheel discs stolen by fans	7	17
15.9.67			Newquay to London	40	0

CamScannerでスキャン

MR. J. LYNDON

From: ROSE HARDWAY

Home tel : 889:2497

Date: 10th Nov 1967

MR. CHICK LINTON
103 Granville Road,
London N22.

The above named gentleman called into the office yesterday afternoon and told me the following story :-

Paul McCartney had wanted 6 midget wrestlers for The Magical Mystery Tour. Great difficulty had been experienced in finding such artistes. Eventually Mrs. Lester managed to contact three - they needed a fourth to make up at least two pairs. One of those contacted by Mrs. Lester a ROY SMITH alias Jimmy Kay offered to get one of his friends to come along to film.

The friend he contacted was CHICK LINTON. He said "yes" he would do it, and was told that he would be paid. Chick Linton was on the film set working for two days - 22nd and 23rd September.

Up until 5 weeks or so ago, Roy Smith said that he had not yet received payment for the work - since then he has been missing somewhere in Europe and his own family does not know where he is.

Chick Linton's quandary is this :-

He has not been paid for his two day's work on the film.

He does not know exactly how much was being paid to the other wrestlers and so does not know how much is due to him.

He does not know whether Roy Smith has been paid for all four wrestlers or just for himself and Chick Linton.

[illegible] know whether Roy Smith has been paid at all.

[illegible], if nothing has yet been paid [illegible] [illegible] that he exists and that pay is due to him.

[illegible] do we have any suggestions as to what he can do if [illegible] does his Chick's pay and has disappeared with it.

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ポール　「ハロー・グッバイ」のプロモ・フィルムは僕が監督した。映画の監督って、誰でもやってみたいと思うじゃないか。僕はずっと興味を持っていて、ついに実際試すことができたんだ。で、やってみたら、ものすごくきつい仕事だってわかったよ。誰かが言ってたな、要するにこういうことだって。"いつでも誰かがそばに来て何か言う。「金のピストルと銀のピストルとどちらにします？」"。そのたび"うーん、うーん……"って考えるわけさ。そういうことばかりなんだ——決めなきゃいけないことが多すぎる——それで最後にはうんざりしちゃったよ。

まあ本当の意味では監督したとはいえない——必要なのはカメラ数台に腕のいいカメラマン数人、音楽を少しと踊り子数人、それだけだったから。"会場を借りて、午後にそこでショーをやろう"と僕は思った。それでそうしたんだ。「サージェント・ペパー」の時のスーツを着て、ウエスト・エンドのサヴィル・シアターで撮影した。

リンゴ　この年の末に僕は映画の撮影でローマへ行った。「キャンディ」という映画だ——もう最高の映画だよ。僕の人生でも、あんなに刺激的でワクワクした経験はそうはないね。マーロン・ブランドやリチャード・バートンやウォルター・マッソーなんかと一緒だったんだよ。嘘みたいだ！

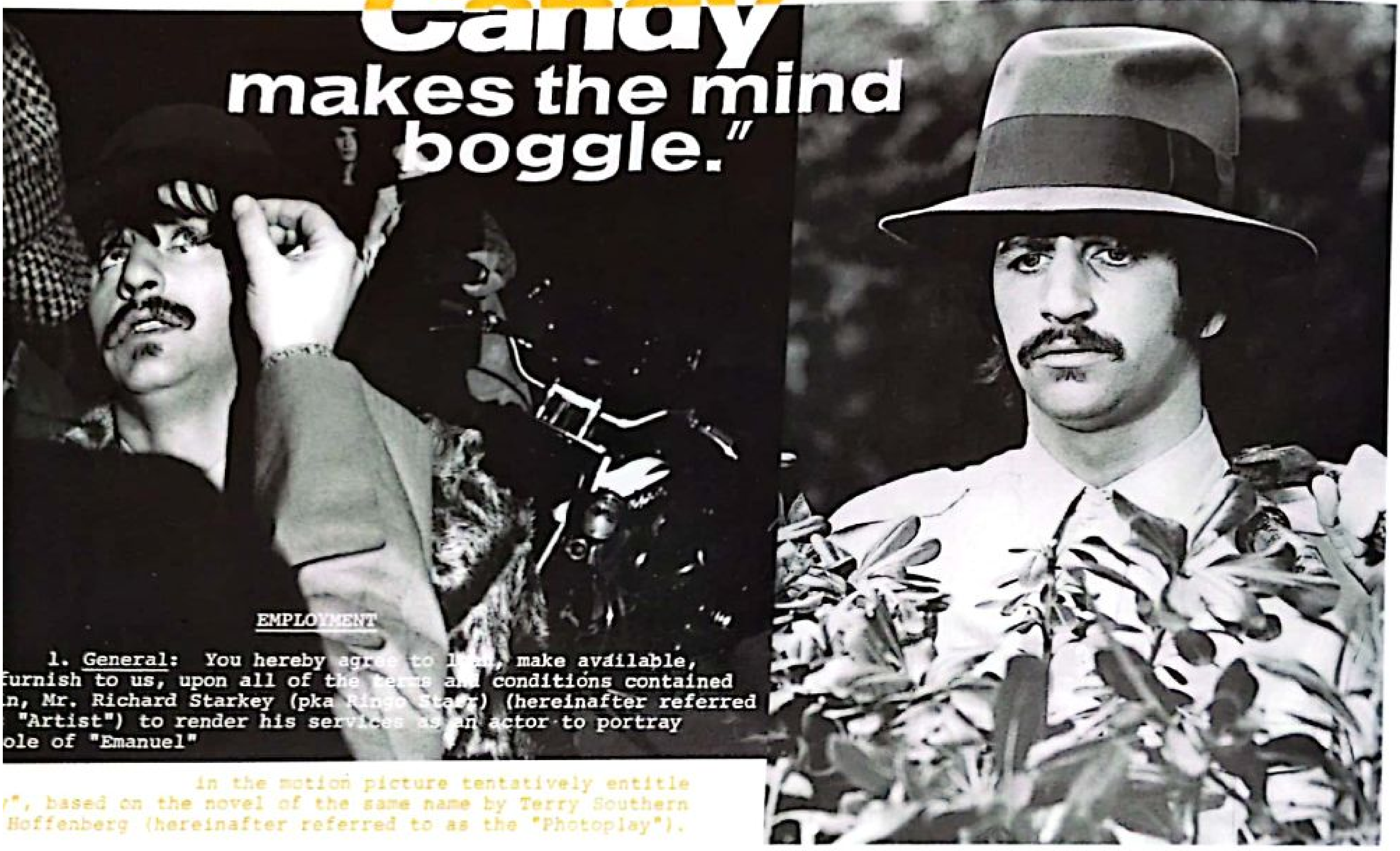
最高だったよ。マーロンはほんと楽しい人だった。彼は演じることが大好きなんだ。彼の到着予定の日、みんなでランチを食べてた。エリザベス・テイラーもいた（リチャード・バートンが出てたから）。彼女はほんと、ハッとするほど美しかったな。だけどマーロンが来たら、僕はもう興奮しちゃって——ちょっとやそっとじゃない——だってマーロン・ブランドだよ、僕はもう大ファンなんだから！ 現実の彼も、すごく感じのいい人だった。彼は僕のために"マーロンの真似"をやってくれたんだ。スプーンを持って、じっとそれを見つめる。映画のブランドだ。僕はそれを見て、"ブランドだ、マーロン・ブランドだ！"。最高だったなあ。愛してるよ、マーロン。

リンゴ
キャンディは
大勢の男とやりまくる
若い女の子で、
その最初の相手が僕なんだ。
1967年

リチャードとエリザベスは、最後にはとても仲のいい友だち同士になった。リチャードは嘘みたいに素敵なことをやってくれてね。アルバムのジャケットを見ながら、彼のあの声で、「アイ・アム・ザ・ウォルラス」を朗読したのさ。そりゃもうすばらしかった。僕らはよくふたりの船にお邪魔したんだけど、しょっちゅうリチャードを怒らせてた。僕が彼の信念をからかうようなことばかり言うからさ。"まったく、イギリス英語ってほんとつまんないなあ！"とか言うと、それだけで彼は爆発しちゃうんだ。あと、"シェイクスピア——うんざりだ"とか。そうやって、ちょこちょこ彼をからかってた。すると彼はいつも引っかかって、カンカンになって僕を船から追い出す。"私の船から出て行け、この生意気な若造め"ってさ。

僕は演技をするのが大好きだった。ほんとおもしろかったな。それにああいうすばらしい役者たちと会えるのが嬉しかった。あんな人たちと食事したり、出歩いたりできるなんてさ。みんないろいろアドバイスしてくれてね、そういうのが僕の演技学校だった。"ああ、そこはね、こういうふうにやってみたら……"って具合にさ。

"Candy makes the mind boggle."



EMPLOYMENT

1. General: You hereby agree to loan, make available, furnish to us, upon all of the terms and conditions contained in, Mr. Richard Starkey (pka Ringo Starr) (hereinafter referred "Artist") to render his services as an actor to portray role of "Emanuel"

in the motion picture tentatively entitle", based on the novel of the same name by Terry Southern Hoffenberg (hereinafter referred to as the "Photoplay").

リンゴ　あの映画の原作は前に読んだことがあったんだ。だから思ったよ、"冗談だろう、これをどうやって映画にするんだ？"って。セクシーなんていうんじゃすまないよ。上映禁止になっても不思議はないね！ 1968年

CamScannerでスキャン

1968

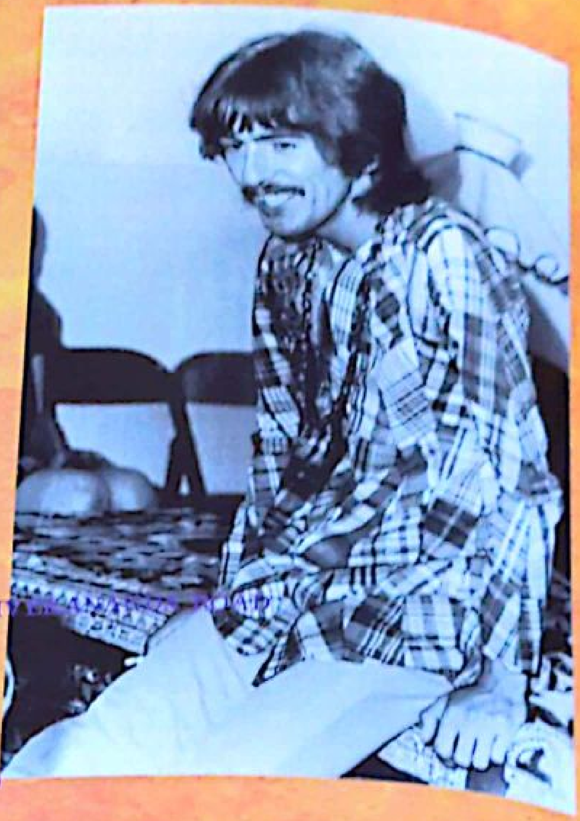
nineteen sixty-eight

CamScannerでスキャン

ジョージ　1968年1月、僕はボンベイで映画「ワンダーウォール」のサウンドトラックを作っていた。——ジョー・マソットが監督した60年代のヒッピー映画だよ。マソットから音楽をやらないかと言われた時、映画音楽はやったことがないって答えた。すると彼は、作ってくれれば何でも使う、と言う。それがしごく単純な話に聞こえたもんだから。インド音楽のアンソロジーを作ってみよう。もしかしたらヒッピーの数人くらいは、インド音楽に興味を持つようになるかもしれないし。

インドのミュージシャンとボンベイのEMI HMVスタジオでレコーディングした。ミスター・バースカー・メノン（のちにEMIで世界のトップの座に）が、電車ではるばるカルカッタから2トラックのステレオ機材を僕のために運んでくれた。僕らがアビイ・ロードで使っていた巨大な機材と同じ種類で、STEEDというやつ。今も、僕の家のキッチンに1台ある——「ペイパーバック・ライター」の録音に使ったやつだよ。イギリスに戻ってから、アビイ・ロードでさらに音を重ね、映画に音楽を乗せた。

「ワンダーウォール」は、少し公開が遅れ、公開されたらそのまま消滅しちゃったみたいだね。リンゴが一緒にカンヌのプレミアに来てくれた（僕がこのことを思い出したのは、このCDが発売されて、デレクのライナー・ノーツを読んだからだよ。僕らふたりが、映画に出演したジェーン・バーキンというなかなか素敵な女性と一緒に写っている写真を見るまで、僕はそのことを忘れていた）。



O SHAMBHUDAS

~~OMBAY MALABAR HILL~~ VILLA MANORAMA SWAMI VIVEKANANDA ROAD

BANDRA

BOMBAY 50.

XT:

RIVING 8th JANUARY 05.10 hrs. AIR INDIA 112 with TWO

ENDS. LOOK FORWARD TO SEEING YOU AGAIN.

ARDS GEORGE.

George - Personal.

INTERNAL MEMO

From: Peter Brown

Neil,

To: Neil Aspinall

Shambhudas etc.

Date: 5th January, 1968

Subject: Indian Trip

You have all the details of the trip on the VIP Itinerary. The Managing Director of EMI in India is Mr. Bhaskar Menon. His office is in Calcutta, Tel. Calcutta 57243. The studios have been booked from the 9th - 12th inclusive and they have shipped the stereo equipment in for George's use. I have not yet been able to find out who the Studio Manager is in Bombay. I may know by this evening if you do not have the information I suggest you telephone Mr. Menon in Calcutta on Monday morning.

The name and address of the Indian friend of George's who has made all the arrangements for accommodation and has been informed of what time your flight arrives, is SHAMBHUDAS of VILLA MANORAMA SWAMI VIVEKANANDA ROAD BANDRA BOMBAY 50.

Can't think of anything else!

DA Road

e free from Tuesday 9th through till

gs with musicians. 2 or 3 shanhai

hai. Please confirm if this is possible

dio through London office. Grateful if

ent for myself and one other for period

rm if you need any money as deposit.

London. Regards George Harrison.

Everything arranged

Regards,

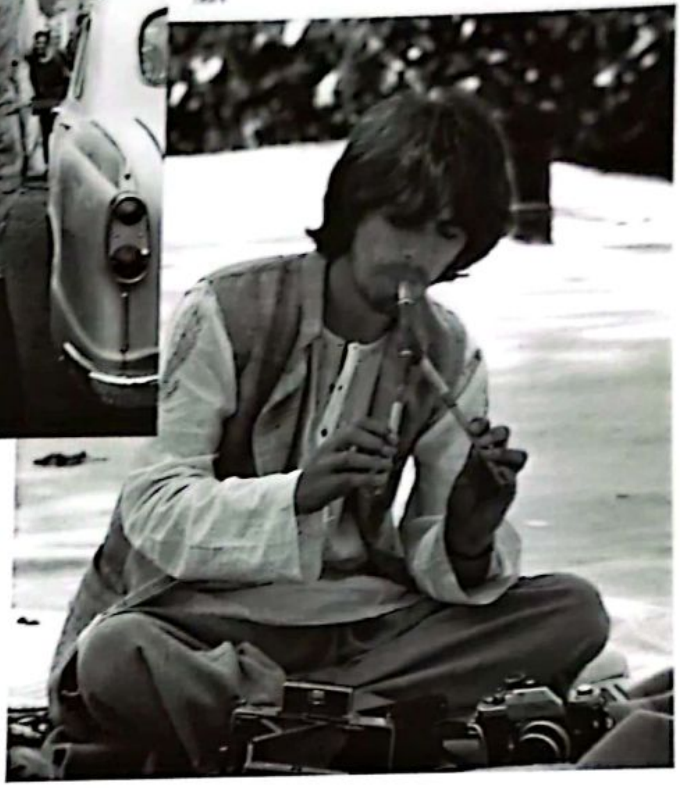
Peter.

mber.

ALL

12th Jan '68

ジョージ
僕はすでに寿命が20年延びたと思うね。
このヒマラヤには、何世紀もの間
生き続けてる人がいるはずだ。
キリストより先に生まれ、今もまだ
生きている人が、どこかにいるんだよ。
1968年



ジョン　超越瞑想を正式に学ぶために、僕ら全員で1～2
ヵ月インドに行くつもりだ。瞑想を広めて、この思想その
ものをみんなに伝えられるように、きちっと習っておきた
いんだよ。僕らは今、こういう形で僕らの力を使おうと思
ってる——僕らずっと若者のリーダーと呼ばれてきたけど、
これはリーダーとして正しい手本になるはずだ。
いつか世界中の人が僕らの言ってることをわかってくれる。若者やドラッグやその手
のことを心配してる人たち——頭のうしろも横も髪も短くしてる人たち——そういう人た
ちもみんな、やってみればわかるはずだ。
これはゴスペルじゃない。熱烈な伝道でもなきゃ、皆さん御一緒に歌いましょう、み
たいな類でもない。宗教と結びつけたくないなら、別に宗教にする必要はないさ。す
べて心の中にあるんだよ。これは一時的な気まぐれでも新しい仕掛けでもない。緊張
を和らげる手段なんだ。1967年

ポール　1968年頃になると、僕らみんなちょっと精神的に疲れてきてたんだと思う。僕
らずっとビートルズをやり続けてきた。それってすごいことだよ。ビートルズだってのはせ
上がることがないようにしていたし、なかなかしっかりしてた——現実感覚を失ったり自
惚れたりすることもなかったしね——でも全員がなんとなく感じていたと思うんだ。"そ
うだな、有名になるのってすばらしい。金持ちになるのは最高だ——だけどそれってい
ったい、何のためだ？"って。
それで僕らはありとあらゆることを探っていくようになった。ジョージがインド音楽に
凝っていたから、自然と疑問が湧いてきたのさ。"へえ、その瞑想とかって何なの？ 空
中に浮くわけ？ ほんとに飛べるの？ ヘビ使いってほんとにロープをのぼれるの？"。ご
く単純に知りたかっただけさ。で、マハリシに会って、そんなことをいろいろ考えて、み
んなでリシケシュに行くことにしたんだ。

ョージ　毎年、マハリシは超越瞑想のインストラクターになりたいっていう西洋人向け
講座を開いていた。僕はインストラクターになる気はなかったけど、そこでどっぷり瞑
に浸りたかったんだ。
ジョンが来て、そのあとポールも来た。続いてリンゴが、ハインツのベイクド・ビーンズ
持ったシェルパを15人従えてやってきた。それに世界中のマスコミ。僕は彼らと話す
面倒だったから、デリーまでずっと寝たふりをしてた。
空港からリシケシュまでは長かったね。当時、向こうには1950年代の車しかなかった
モリス・カウリーとかモリス・オックスフォード——そんなやつばっかりだから、4～5時
かかった。
シケシュはすばらしいところだよ。ガンジス川がヒマラヤ山脈から流れだして山脈
ーに挟まれた平野に注ぎ込む、ちょうどそこに位置していてね。ヒマラヤ山脈か
それはかなり水量が多くて、向こう岸に行くにはゆらゆら揺れる大きな吊り橋を渡
かなきゃならなかった。
リシの拠点というのはリシケシュとガンジス川を見下ろす小高い丘の上にあった。
リシの小さなバンガローと、ここにやってくる西洋人のために急いで建てた小屋が
、8エーカーか10エーカーくらいの敷地にごちゃごちゃとあった。
チンは外で食べられるようにテーブルがついていて、朝はいつもみんな一緒にそ
べた。その近くに広い屋根付きのスペースがある。その壇上で彼がレクチャー
んだよ。
に行ったら西洋の服なんて着られないさ。そこもインドのすばらしいところ——
クールな服が着られるんだ。ゆったりしたふかふかの服に、パジャマみたいな
テディ・ボーイのドレインパイプみたいなタイト・パンツもあるんだよ。

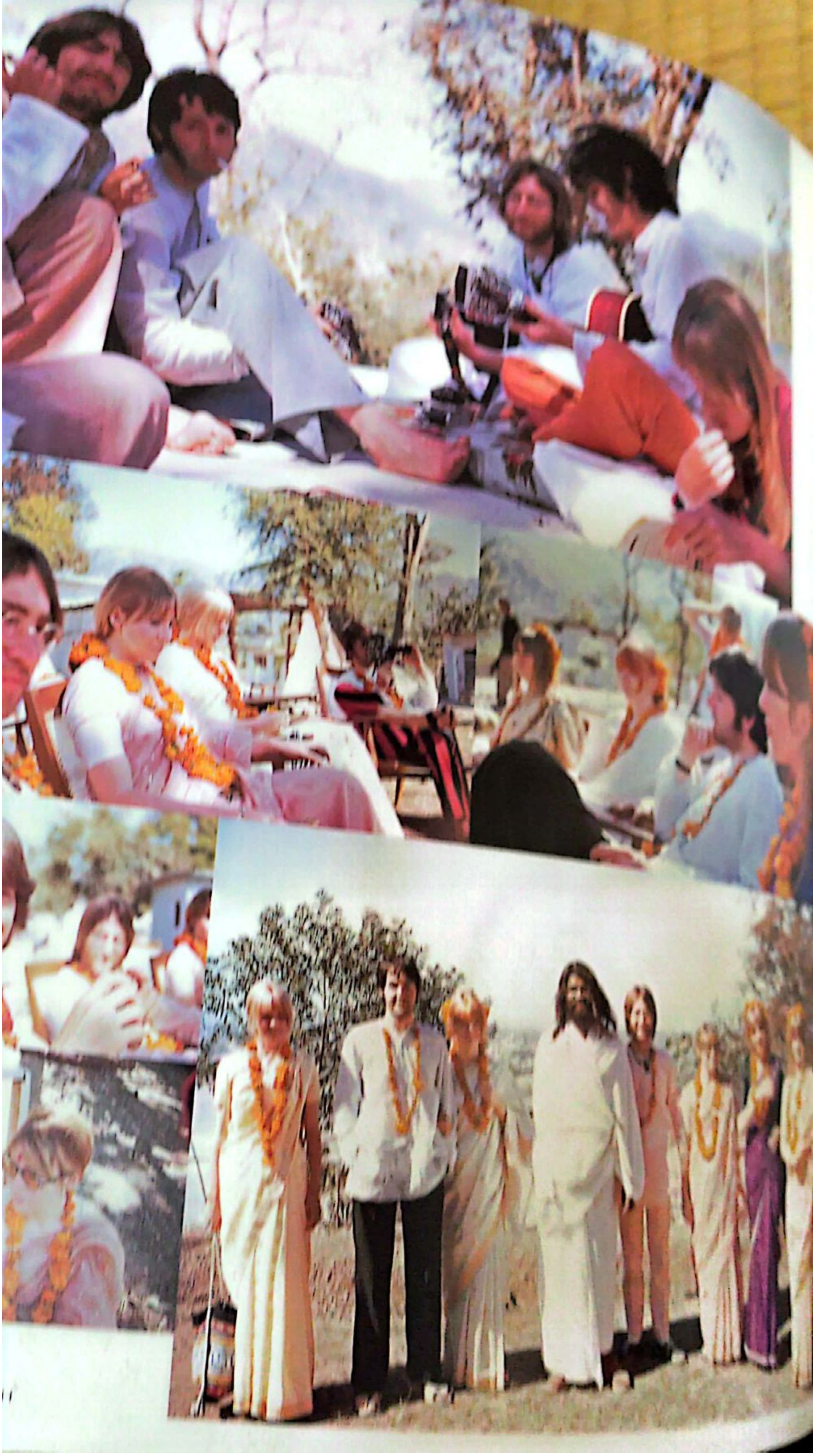
あの感じだと、ジョージは40歳になるまでに魔法のじゅうたんで空を飛んでる
ね。僕がここに来たのは、今の自分がどんな役割を演じるべきかを見つけだすためだ。
その役割をどこまで達成できるか知りたいんだ。ジョージは僕らより何インチか先を行
ってるね。1968年

リンゴ　最高だった。楽しいことがたくさんあって、瞑想もたくさんやった。すごく刺激
的だった。僕らはとても霊的な場所で、瞑想をしたり、マハリシのセミナーを受けたりし
てた。

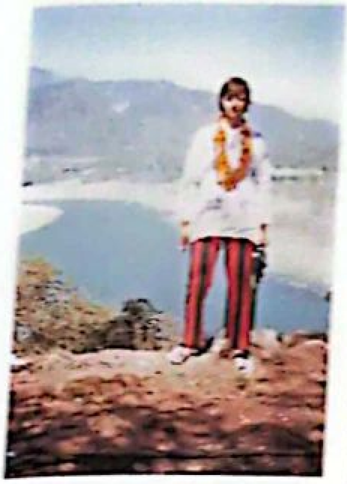
ジョン　僕らはほんとにわずらわしさから解放された。言ってみれば、あれはヒマラヤ
山脈の真下にある浮き世離れした休暇村だった。山の上にいるような感じがしたけど、
実際はガンジス川を見下ろす丘陵地にあって、朝食を盗みに来る猿がいた。みんなロ
ーブ姿でそこらをふらふらしたり、各自の部屋に座って何時間も瞑想したりした。かな
りの"トリップ"だったよ。
僕は、5日間部屋にこもって瞑想した。曲が100曲書けた。眠れなくて、猛烈に幻覚を
見て、匂いのある夢を見たんだ。数時間たったところでトリップから覚醒した。1回の
持続時間は3～4時間だった。こんな方法で目指していた境地に到達したんだ。驚くよ
うな旅を経験できたよ。1974年

リンゴ　僕らは外で朝食をとっていた。よく猿が来て、パンをとられたよ。朝食のあと、
だいたいいつも屋根に上がって、グループで朝の瞑想をした。昼食のあとも同じように
していた。
買い物もたくさんしたよ。みんなでインドの服をあつらえたんだ。インドではちゃんと
したのを作ってもらえるから。脚の部分がすごく細い素朴な巨大パンツに、細く絞って
着るネール・カラーの大きな胴衣。僕らにぴったりだったよ。
風呂に入ろうと思ったら、サソリやクモを退治しなければならない。だから、風呂場
はいつも大騒ぎだった。風呂に入るには、気合いを入れてまずこう叫ぶ——"ああ、そ
うだ、これから風呂に入ろうか"——そして足を踏み鳴らすんだ。風呂の中でも叫び続
ける。"ああ、何というひと時。実にすばらしい"。そして風呂から上がり、虫が戻ってく
る前に身体を拭いて風呂場から出る。その頃僕はモーリーンと結婚していたんだけど、
彼女はハエや蛾なんかが超苦手だったんだ。それは僕らの日常からは考えられない生
活だったよ。

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



リンゴ　僕らは、ジョージの誕生日を祝って盛大なパーティをやったんだ。人がたくさん集まったよ。僕らはみんなドレス・アップして、額に赤と黄色の塗料を塗った。

ジョージ　僕は25歳の誕生日をリシケシュで迎えた（滞在中に誕生日を迎えた人はたくさんいた）。たくさんの花や花輪、そんなものが飾られた。マハリシに僕はシタールを聴かせたよ。

ポール　サマー・キャンプのような生活だった。朝起きて、みんな一緒の朝食を食べに行く。食事は菜食主義（今の僕には望ましいけど）で、確か朝はコーンフレークを食べたと思う。

朝食後、小屋に戻ってしばらく瞑想し、軽い昼食を食べ、そのあと講話やちょっとした音楽イベントがあったりした。基本的には、食べて寝て瞑想するだけだった――たまに、マハリシの簡単な講義が入ることがあった。

参加者は、おそらく100人ぐらいだった。ステージがたくさんの花で飾られ、そこにマハリシが登場する。ほとんど魔法みたいだった。彼はこんなことを言った。"これは、単なる瞑想の方法でしかありません。私は皆さんに偉大な神や偉大な神話を信じろとお願いしているのではありません。これは、あなた自身の人生がより豊やかになるのを手助けする方法にすぎないのです"。

この点に限って、僕は今でもいい教えだと思っている。空を飛ぶとか空中浮揚とか、その手の話は信じられない。もっとも、今僕はこれに興味を持っているけどね。なぜなら、"シディーズ（悉地）"と呼ばれる不思議な力を学ぶ講習を実際に受けることができて、飛ぶ――地面から少し跳ね上がる――のを体感できるからさ。僕は、マハリシとのちょっとした会話をよく覚えているよ。僕らは彼に、空中浮揚は可能かと尋ねたんだ。彼はこう言った。"そうだね。私はできないが、できる人が隣の村にいるのを知っている"。僕らは"その人をここに連れてきてもらえませんか？　見てみたいんです"と言った。実現すればすごいことだったろうけど、結局その人に会うことはなかった。

夜には質疑応答の時間があった。ある日の質疑応答で、アメリカから来た男の人が立ち上がってこう言った。"マハリシ、私には悩みがあります。ですが、私はあなたのアドバイスに従っています。先日、私が瞑想していると、大きなヘビがこちらに向かって来ました。私はニューヨーク出身の都会育ちで、ヘビはほんとに怖いんです。でも私はあなたの教えを思い出し、ヘビを――心の眼で――見つめました。ヘビの目をまっすぐに見つめていたら、ヘビはくねくね動く紐に変わりました"。とても象徴的な話だと感じたね。自分に迫った危険を直視すれば、思っていたほどの事態ではない、ってことさ。

僕は瞑想の仕方を学んだ。今はあまりやってないけど、子どもたちには、瞑想を学ぶのは悪いことじゃないと伝えている。もしもどこかで行き詰まったり心が少し乱れたりしたら、瞑想をやるといいと思うから。

マハリシは、近代のテクノロジーにかなり通じていた。より速く世界を回って自分のメッセージを広めるための手段になる、と考えていたからだ。一度、彼がニューデリーに行かなきゃならない用事があった。キャンプ地にヘリコプターが来て、川辺に着陸した。僕らはみんな、カフタン姿でぶらぶらと下っていった。すると、こんなことになった。"誰かひとり、マハリシと一緒にヘリコプターに乗れますよ。誰が乗りますか？"。もちろんジョンだったよ。僕はあとでジョンに聞いた。"なんであんなに熱心にマハリシとヘリコプターに乗りたがったのさ"。――"実を言うとね、彼が僕にだけ人生の意味を教えてくれるんじゃないかと思ったんだ"。いかにもジョンらしい！

ジョン　何をすべきだったのかはさておき、僕はあそこにいる間に、自分の最高傑作のいくつかを書いた。いい環境だったんだ。安全で快適で、みんないつも笑顔だった。あそこで生まれた作品に限って言えば、あの体験は価値があった。でも、銀座でもベンネヴィスでも、どこでもよかったんだ。

キャンプに関して不思議だったのは、景色がとてもきれいで、僕は毎日8時間も瞑想していたのにも関わらず、出来上がったのが世界一惨めな曲だったことだ。「ヤー・ブルース」で"I'm so lonely I want to die"（寂しくて死んでしまいたい）と書いたけど、冗談じゃなく、ほんとにそう感じていたんだ。1971年　丘の上で神に到達しようと試みながら、一方で自滅的な気分になっていたんだ。1980年

生まれたばかりの赤ん坊は、乳母車に乗せられて笑いたい時に笑う。でも、やがて人生最初の処世術を覚える。それは、触れられる前に笑顔を見せろということだ。ほとんどの母親は、乳母車の赤ん坊を既に苦しめている――笑いたくない時に笑わせるんだからね。赤ん坊は、笑えば撫でてもらえる。でもほんとに嬉しいと感じていなければ、嬉しくはなれないよ。そうでなきゃ、それはまやかしだろ。母親は、気分がよくない時にも笑えと言ったり、"ハレ・クリシュナ"と唱えろと言ったりする。赤ん坊はそこで、あるプロセスを通過する。感情を偽るというプロセスをね。気分がよければ気分はいい。気分が悪ければ気分は悪い。それ以外はないはずなんだ。ドラッグをやったって酔っぱらったって何をやったって、感情を押しつぶしているだけだ。喜びにあふれた人なんて、会ったことがない。マハリシも、ヨーガ行者やハレ・クリシュナの歌い手にしても、ひとりだってそんな人はいなかった。変わらないものなんてないんだ。だから、不変の喜びを求める――僕に言わせれば、そんなのはクソだね。ステータスなんかない。絶対なんか存在しないんだ。

苦しみと喜びは即ち人生。苦しみは、ある意味で食物のようだ。食物は体の中に入り、苦しみは精神の中に入る。それらを解放したり放出しないと、便秘みたいになったり、苦しみから逃れられなくなる。確かに、苦しみはいつもどこかに存在していて、逃げ道がないと、煙草を吸ってみたり何をしてみても、神経に障害が起きて髪が抜けてしまうとか、似たようなことが起きてしまう。人はいつも何かしら苦しみを感じていて、まったく苦しみを感じないでいることなんてあり得ない。人は誰でも、いい時と悪い時があり、人生はあらゆることを感じ、受け入れるしかないんだ。いつだって、多少の喜びと多少の苦しみがあり、いい時ばかりじゃない。そしてどの日をとっても、喜びと苦しみの両方がある。言い方を変えれば人生、常に聖と俗あるってことさ。1970年

ポール　リシケシュにはビーチ・ボーイズのマイク・ラヴがいたね。ドノバンもいた。ミア・ファローと、妹のプルーデンスもいた。ジョンは彼女のために「ディア・プルーデンス」を書いたんだ。彼女がパニック発作を起こして小屋から出られなくなったから。

リンゴ　プルーデンスは小屋に引きこもって瞑想していた。2週間の滞在中、僕は彼女を2回しか見なかった。みんな彼女の小屋の扉をドンドン叩いていたよ。"まだ生きてる？"って。

ジョン　マハリシのケアを受けていた彼女が、完全な錯乱状態に陥るなんて、誰も予想していなかった。彼女が精神的におかしくなり始めたので、みんなすごく心配した。だから僕らは、彼女に歌を捧げた。1979年

ジョージと僕は彼女に信用されるだろうということで、外に誘い出す役に選ばれた。完全に精神がまいっていた。ヨーロッパやアメリカにいたら、見捨てられていただろうね。僕らは彼女を家から出した。3週間もこもりっきりで、外に出ようとしなかったんだ。誰よりも早く神に到達しようとしていたんだよ。それがマハリシのキャンプでの競争だったんだ。誰が最初に普遍的な存在になるかってことが(僕は、すでに普遍的だったのに、自分でそのことに気づいていなかった)。1980年

ポール　滞在中に、短いのを2、3曲書いた。「アイ・ウィル」という曲を書いたんだけど、まだ歌詞はできてなかった。それと、「オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ」の一部を書いた。僕らは村の映画ショーに行った。移動式のスクリーンが設営され、村中の人がやって来て、みんなとても喜んでいた。キャンプから村に行くのに、ジャングルの中の細道をギターを抱えて歩いたのを覚えているよ。演奏しながらね。"Desmond has a barrow in the market place……"(デズモンドは、手押し車で市場に露店を出していた……)。

ジョン　「ザ・コンティニューイング・ストーリー・オブ・バンガロウ・ビル」は、短い休みをとって哀れな虎を2、3頭撃ちに行った男が、神とともに部落に帰ってくるというストーリーで書いた。昔、ジャングル・ジムというキャラクターがいた。このキャラクターをバンガロウ・ビルに結び付けたんだ。ティーンエイジャーの社会批評ソングになるし、ちょっとしたジョークにもなる。1980年

ール　リンゴは早く帰国した。
彼は食べ物に耐えられなくて、
モーリーンはハエに耐えられなかった。

ゃそうさ。彼はとてもイギリス的な男だ。出される食事はカレスパイシー・フード——そもそも、リンゴは胃腸が弱いんだ(た子どもの頃にやった腹膜炎の影響だろう)。そしてモーリンェが嫌いだった——部屋にハエが1匹でもいると、彼女はい正確にその位置を当てた。ドアの上にハエが1匹いたために、彼女が部屋から出られなくなってしまったこともあったんだ。だからリシケシュは、明らかに、彼らにとって住みやすい場所ではなかった。

リンゴ　今となっては、どれもなかなか思い出せないな。僕は2週間しかいなかったんだからね。予想していたものは得られそうになかったよ。

好き嫌いが激しいから、食事はお手上げだった。僕はスーツ・ケースをふたつ持っていった。ひとつは服で、もうひとつにはハインツのビーンズをぎっしり詰め込んでいた(これは宣伝)。すると、ある朝、食事係に"卵はいかがです？"って聞かれた。僕は"うん、頼む"と答えた。次の朝、彼らはまた同じことを聞いた。僕はこう言った。"うん、嬉しいね——希望が出てきた"。

そのあと、僕は彼らが卵の殻を埋めているところに出くわした。その時初めて、神聖な修業の場では卵を食べてはいけなかったんだ、と気づいた。でも、"どういうことだ、殻を埋めるなんて。神にはお見通しじゃないのか？"。

僕らが帰ったのは、子どもたちが恋しくなったからだ。あそこの生活が気に入らなかったからなんて思ってほしくないね。僕はバトリンのホリデイ・キャンプのように楽しかったよ。僕らは何を言っても悪く書かれるんだよ。リシケシュはいい経験だったよ——ただ、僕は彼らほど長続きしなかっただけなんだ。

ポール　僕は、かなり現実的な方だから、リシケシュの滞在期間を決めていた。最初はこう思っていた。"すごい。求めていたものが見つかるかもしれないぞ。もしうまくいったら、一生帰れなくなるかもしれないな"。次にこう考えた。"ちょっと待てよ。1ヵ月にしよう。たとえ信じられないぐらいすごくても、それでも1ヵ月したら帰ろう"。

CamScannerでスキャン

また行きたくなったら、行けばいい。だけど、1ヵ月たった時、僕は帰るのがすごく嬉しかったんだ。輝かしい悟りを開いた人なんて、ひとりもいなかったよ。僕はこう考えた。"僕にはこれで十分だ。突き詰めたければどこでもできる"。これは、瞑想の利点のひとつだ——教会に行かなくてもできるんだから。

1ヵ月しか滞在しないと伝えることで、僕は他のメンバーから熱心じゃないと思われた。実際、ジョージには言われたよ。彼はすごく厳格なんだ。次のアルバムのことを話していると、こんな風に言われるんだ。"音楽の話をしに来てるんじゃない——瞑想しに来てるんだ"。はいはい、わかったよ、ジョージー君。ね、落ち着いて。ここではユーモア・センスが必要だよ。わかってるだろなんてね。実際、僕はあそこでもユーモアを大切にしていたよ。

ジョージ　リンゴは2週間だけで帰った——ちょっと、どんなものか試したかっただけなのかもしれないね。ポールはちょっと来てみただけさ。彼はあの旅から何も得てないよ。なぜかというと、「レット・イット・ビー」の映像で、こんな場面があるんだ。ポールがニヤニヤ笑って、ジョンにこう言っている。"リシケシュはなんだか学校にいるみたいだったよ。「教えてください、先生」だったもんね"。20年経って振り返ると、彼は、あれについては1ペニー落とした程度のことだったのかもしれない。だけど、今は後悔しているだろう。

あの講座は、リシケシュで何週間続いても、その期間が終わったら、キャンプをカシミールに移すことになっていた。これは毎年のことだった。でも僕は、リシケシュにしか行かないで、そのあとは南インドに下ってラビ・シャンカールと映画をやるつもりだった。ラビが『ラーガ』という映画を作ってたんだ。

僕は、事あるごとに"いえ、カシミールには行きません——去年行きました"とマハリシに言っていた。彼は"いやいや、君はカシミールに行くのだ"と言う。僕は、このあと南に行くんですと伝えた。ジョンと僕がマハリシのもとを離れたのはその時だった。リシケシュでの講座に最初から最後まで参加したのは、ほんとにジョンと僕だけだった。ジョンが帰りたかったのは——今になって思えば——インドに出発する前にヨーコとの関係を始めたばかりだったからだと思う。

ジョン　ヨーコと僕は、その頃に出会った。僕は彼女も連れていこうとした。でも、どうしたらいいかもわからなかったし、気も引けたから結局やめてしまったんだ。1970年

ポール　みんなが帰ってきて僕はすごく嬉しかった。残ったメンバーはどんな風になって出てくるんだろうと思っていたらね。彼らはみやげ話を持って戻ってきたよ。マハリシが、ブロンドのショート・ヘアーの魅力的なアメリカ人女性に言い寄ったんだって(ミア・ファローじゃないよ)。

ジョン　マハリシがミア・ファローを含む数人の女性に近づこうとしたとか、そんな類の噂が出て、大騒ぎになったんだ。僕らは、ほんとか嘘か、ひと晩中寝ないで論議した。ジョージがほんとかもしれないと思い始めたから、僕もきっと何かあるに違いないと思い、僕らはマハリシに会いにいったんだ。僕らはみんなで彼の小屋に押しかけた。山の中の、すごく豪勢に見えるバンガローにね。例によって、こういう嫌な仕事となると、僕がリーダーにならなけゃいけない。どんな場面であれ、核心に触れることは、僕が話をつけなくちゃならないんだよ。

"僕らは出ていきます"——"どうして"——"そうですね、あなたがそれほど普遍の存在というなら、おわかりでしょう"。彼の取り巻きはみんな、彼は奇跡を起こすといつもほのめかしていたからね。僕は続けた。"理由はおわかりですね"。彼は"いや、わからない。教えてくれ"と言う。僕は繰り返した。"わかっているはずです"。彼は"野郎、殺してやる"と言いたげな顔で僕を見た。ほんとにそんな顔をしたんだ。その時、彼の表情を見て、確信した。僕は、彼のはったりに挑戦してみたんだ。彼に対して少し求めすぎてかもしれない。僕はいつも求めるものが大きすぎるんだ——いつも母を求めているけど、得られない。それと同じさ。1970年

ジョージ　誰かがマハリシの悪い噂を流し、その噂は何年もメディアを騒がせた。マハリシは公明正大ではなかったとか、そういった話がたくさん伝えられた。でも、それは、マハリシへの嫉妬にすぎなかった。真相を解明するには、アナリストが必要だろう。書いた人たちの心に何があったのか知らないけど、こんなのは全部作り話だ。マハリシが"ミア・ファローにアタックしようとした"という話は、おそらく歴史の本にも書いてある——でも、まったくのインチキだ。ミア・ファローに会って聞いてみればいい。

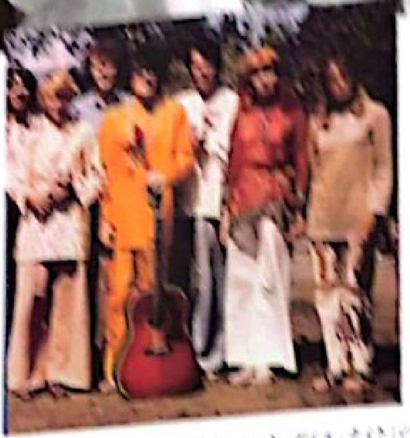
あそこには変人がいっぱいいた。どこもかしこも変人だらけだった。その一部が僕らだったのさ。

ジョン

ヒマラヤのてっぺんにある
マハリシの健康道場への道。
見つめて、見つめて、
ひたすら見つめる。
彼は、僕にふさわしい
マントラを選んだ。よろしい。
今の彼は、
僕がつきあっていた頃より
随分禿げた。
なぜ神は、彼ら神聖なる人々を
お苦しめになるのか?
病気もするし。
"あの方は他人のカーマ(業)を
背負っているのです"。
か弱き信者はみんな
そう言うに違いない。
でも、彼の笑顔はよかったよ。
『ザ・オートバイオグラフィー・
オブ・ア・ヨーグルト』
に載れるだろうね。
でも、それだけじゃない?
僕は自問する。
なぜ彼は僕らを妻と
別の小屋に住まわせた。

1978年

CamScannerでスキャン



[illegible]

僕らは、[illegible]

何時間も車に乗った。ジョンは、書き始めたばかりの曲を歌っていた。"Maharishi what have you done"（マハリシ、君は何をした）。僕はそれを聞いて言った。"[illegible]よ、そんなの、とんでもないよ"。[illegible] ジョンは[illegible]"Maharishi"を"Sexy Sadie"に変えた。[illegible] もとに帰り、僕はマドラスと南インドに行って、そこでさらに数週間過ごした。

僕らが出ていった話が伝わり、あれこれ新聞がそれに飛びついてきた。[illegible] で"瞑想師は、[illegible]" [illegible] 実際は何も起こらなかったんだ。

ジョン　僕は自重して、"Maharishi what have you done, you've made a fool of everyone"（マハリシ、君は何をした。みんなを欺いたじゃないか）と書くのはやめにした。1970年

この曲は出ていく時、荷物を乗せるタクシーを待つ間に書いたんだ。ところがこのタクシー、永遠に来ないんじゃないかというほど遅かった。"僕らをこの狂人キャンプから出させないために、わざとタクシーを足止めしてるんだ"と思ったよ。その時、ひどい偏執狂のギリシャ人が一緒だったんだ。彼はこう言い続けた。"これは黒魔術だ。黒魔術だ。奴らは永遠にここに置いておくつもりだ"。だけど僕は出られたよ。だって、今僕はここにいるんだもの。1980年

ジョージ・マーティン　私自身は、その種のことにはあまり深入りしないんだ。マハリシであれ、ダイアネティックス心理療法であれ、何であれ——そんなのはナンセンスだと思うんだ。でも、どんな信仰でもいいアイディアにはなるかもしれないね。彼らはマハリシを信じていた。それがかなりいい方向に作用したようだ。ジョージは今でもマハリシを擁護している。もっとも、他のメンバーはのちに彼の行動に幻滅していたけれど。

ポール　"彼はスイス銀行にお金を貯め込んでいたんじゃないのか"と聞かれると、僕はいつも、彼が綿布1枚の服しか着ていなかったことを伝える。彼の生涯を通じて、上品なスーツを着ていたのを見たことは、一度もない。彼が金のためにやっているなら、ニューデリーのナイト・クラブにロールス・ロイスで乗りつける現場を押さえることもできただろう。でも彼はいつも自分の小屋で瞑想していたようだった。綿布1枚の服でね。僕は"そのことで彼をこき下ろすことはできない"と思った。

僕らみんなでそこらにいた時、車を買うならどのメーカーがいいか、とマハリシに聞かれたことを覚えている。僕らはこう答えた。"そうですね、メルセデスでしょう。メルセデスはすごくいいですよ"——"実用的か？　長持ちするか？　性能はいいか？"——"はい"——"そうか、それならメルセデスがいいだろう"。1台だけだった。何百万ポンドもかけようというわけじゃなかった。そして僕らは話を続けた。マハリシは"女の子にモテそうな、一番派手に見える車は何だ"とは言わなかったよ。知りたかったのは"実用的な車はどれだ"ということだった。彼はそんなふうだったよ。

僕は内心こう思っていた。"何が問題だっていうんだ。彼は神でも聖職者でもないよ。彼の宗教には、口説いてはならないという決まりはない。結局、彼だってただの人間な

[illegible]

ポール　僕らは彼に超能力以上のものがあると思っていた。だけど彼だって人間だ。僕らはしばらくの間、そのことに気づかなかったんだ。1968年

ジョン　僕らは瞑想は信じるけど、マハリシやその取り巻きを信じてはいけなかった。僕らがお払い箱にしてしまったのは個人的な間違いだ。僕らはマハリシに誤った印象を抱いていたんだと思う。世間の人が僕らに誤った印象を抱いているようにね。僕らのやることは世界中の人が見てる。だから、もし事情が違うけどね。

僕らは彼のほんとの姿を見ていなかった。自分たちが探していたものを、おそらく彼に重ね合わせてしまったんだ。僕らは導師を待ち望んでいた。そしてそこに彼が現れた。でも彼は、自分が解決策を見出している相手と同じ種類のことを自分も背負っていたんだ。

あそこはインドだ。瞑想はいい。話に聞いたとおりのことはある。これは[illegible]のようなものだね——効果はあるんだ。だけど、僕らはあの時、その段階を[illegible]たんだ。今僕らは少しは広い視野で物をとらえていると思う。僕らは人並みに純粋だからね。"瞑想してはいけない"なんて言うつもりはないよ。

今でも瞑想には100%賛成だ。でも、入れ込むつもりはないし、ヒマラヤに黄金の寺院を建てようなんて思わない。もし、できるなら可能なかぎりの援助はしたいよ。我々にはすべてやり遂げるのは無理だ。でも、有り金全部はたくつもりはない。援助には他のやり方もあるんだ。1968年

リンゴ　**車に乗っている時、**
たまに目を閉じて瞑想することがあるんだ
——大丈夫、運転は運転手がしてるから！

ジョン　瞑想については、一切後悔していない。今でも信じているし、時々やっている。同じように、ドラッグをやったことも後悔していない。ドラッグは僕を助けてくれた。誰にでも勧めることじゃないし、自分だってもうやるべきじゃないと思う。でも僕に関して言えば、いい効果があった。インドに行ったのもよかった。インドに行く少し前にヨーコに出会って、滞在中はじっくり考える時間がたくさんあったから、3ヶ月間ひたすら瞑想して考え、帰国してヨーコと恋に落ち、そこでひとつが終わった。あれはすばらしいよ。1980年

彼がどんなレベルにいるのかはわからない。
だけど僕らはインドでいい休暇を過ごし、保養をして帰国し、
また仕事にもどった。 1968年

CamScannerでスキャン

ジョン
自分たちのレーベルを作ることは絶対にない。面倒すぎる。

デレク・テイラー 1967年の終わりに、ビートルズ全員から電話をもらった。それは電話会議だった。彼らはヒル・ハウスで大々的なアップル設立会議をしていて、僕に"一緒にやろう。アップル・レコードの経営者になれるよ"と言うのだ。願ってもない申し出だと思った。『サージェント・ペパー』の年の5月、サセックスのブライアン・エプスタイン邸の盛大な新築祝いのパーティで、僕はジョージからLSDをもらったし、前もってジョンからも薬をもらっていたので、2倍量を服用したんだ。僕らはすばらしいものを見て、ほとんどヒッピーと言ってもいいくらいだった。それから、ビートルズは厭世的なポップ・スターから、とても優しく上品な、抱きしめたくなるような魅力的な人物に変わっていった。僕らみんなが変わったのだ。1967年の彼らは、ほんとにとても感じがよかった。僕らは、この手であらゆるものをすごく美しく変えるのだと信じ、今こそすばらしい世界の始まりだと思っていた。だから、カリフォルニアでの3年間の楽しい生活に終止符を打ちイギリスに戻るということが、僕には聖地への旅立ちのように感じられたのだ。

電話で話す事柄がすべて片づいた時――僕が実際に何をやるのか訊いてみると、返ってきたのは、"そうだね、何もやる必要ないよ。レーベルとか組織とか、そういうものを僕らは信用していないんだ。ただ来てくれればいい"――という答え。――"交通費は払うから"って。そこで僕は1968年1月に住まいをイギリスに移したんだ。仕事の仕組みは、やはり少しは重要だったけど、大した問題じゃなかった。"神が授けてくださる"という認識だったんだ。

ニール・アスピノール 僕はアップル社を運営する立場だったので、リシケシュには行かなかった。ウィグモア・ストリートに仮事務所をいくつか置いたけど、まだ1通の書類も1件の契約もなかったんだ。まったく何もない状態で、僕はただ必要な情報――契約やファイルのコピー――をすべて集め、過去の事例を調べようとしていた。そうすれば、これからの方針について考えられるだろうと思ったんだ。

ポール 5月に、ジョンと僕はニューヨークに行ってアップルの設立を発表した。"あなたの埋もれた才能を送ってください"。盛大なスタートを望んでいたけれど、僕は何か変だぞって気がして、とても神経質になっていた。個人的に、漠然とした恐れから逃れられなかった。当時吸っていたドラッグのせいなのかどうかはわからない。でもとても変な感じだった。

会見場でインタビューを受けたんだ。ジョンは、バスの運転手だったか、カトリック系の学校の学事長だったかのバッジを着けて、うまく応対していた。そこで写真を撮っていたカメラマンのひとりがリンダだった。あとで僕は聞いてみた。"僕が神経質になっていたのがわかったんじゃない？"でも彼女は大丈夫だったと言った。どういうわけか、僕は全体に、ただ強い不安を感じていた。もしかしたら自分たちの力量の及ばないことをしていたからかもしれない。僕らはメディアに向かって『フォーチュン』誌のようにしゃべり、彼らはお堅い財界の有力者扱いで僕らのインタビューをとった――でも僕らはそうではなかった。業務計画もたてず、ただドラッグをやっておもしろがってただけなんだ。

ジョン 僕らは、マリファナでぼんやりした頭で、こんなことを言った。"そうですね、映画を作るかもしれません。それと、僕らの若い頃のように来るべき才能が埋もれたままにならないように、若いアーティストを支援するかもしれません"（1972年）

ジョージは"公園に入るなと言われるのにはもううんざり"と言っていた。だから僕らは、人々がいつでも出入りして好きなことができるような公園を作りたかったんだ。今回のはそういう話さ。靴の色のせいなんかで門戸を閉ざすべきじゃないんだ。（1968年）

ポール 僕らは、まさにこれ以上のお金は必要ないという、恵まれた立場にいる。だからこれは経営者が利益を求めない初めての会社だ。僕らはすでに、すべての夢をやり遂げた。だからこれからは可能性を他の人と分かち合いたい。（1968年）

ジョン これはレコード、映画、エレクトロニクス関連の会社で、副業として製造関係のことをやる。純粋に何かの映画を作りたいと思っている人が、他人の事務所（おそらくあなたの事務所）に行って土下座しなくてもすむようなシステムを作りたい。

この会社の目的は、銀行に金画の山を築き上げることじゃない。そういうことは、もうやり終えた。どちらかといえば、会社組織の中で真の芸術的自由を得られるのか、すばらしいものを創造して原価の3倍もの値段をつけずに売ることができるのか、そういうことを試してみるゲームみたいなものなんだ。（1968年）

ニール・アスピノール 僕も彼らと一緒にニューヨークに行った。何とも言えない妙な旅だった。僕らは、中国の帆船で自由の女神像のまわりを何周もしながら、これからアップルで何をするのか見つけようとしていた。

そのあと彼らは『ザ・トゥナイト・ショー』に出演した。ジョニー・カーソンが休暇中だったので、司会はジョー・ガラジオラだった。あの頃ジョンが言ったことのひとつに、こんなのがあったと思う。"僕らはただコマみたいに回って、その成り行きを見るだけ"。実際にアップルでやったことは、かなりこれに近かった。

ジョン 野球選手が番組の司会で、僕らはそれを知らされていなかった。彼は、"誰がリンゴ？"とか、くだらないことばかり聞いてきた。ジョニー・カーソンの番組に出るつもりだったのに……来てみたら、僕らのことをまったく知らないサッカー選手みたいなのがいる。そして、タルーラ・バンクヘッドが興奮しまくって、素敵だとやたらに褒めた。あんなに参る番組はなかったよ。（1972年）

リンゴ アップルは出版社とレコード会社を合わせもっていた。考え方としては、アーティストが僕らに会いにきて、アイディアなり計画なりを話し、僕らのうちの誰かひとりでもいいと思ったら資金を提供し、彼らがそれを実行する、ということだった。大きな看板でも出しとくべきだったかな。"頭を下げる必要はありません！"ってね。60年代の初め頃、僕らは少し頭を下げなきゃいけないって感じていたからね。人に頭を下げさせるのは嫌だったんだ。

ジョージ 僕はアップルにはほとんど関わっていなかった。アップルが始まった時は、まだインドにいたんだ。あれは基本的にジョンとポールの熱病みたいなものだったんだと思う――彼らは、自分自身の、あるいは相手の力を過信してしまったんだ。アイディアはたくさんあっても、結局のところ僕らがうまくやれたのは、曲を書くことと、レコードを作ることと、ビートルズであることだけだったんだ。

僕が帰国した時には、ウィグモア・ストリートに事務所ができていた。中に入ると、奇人変人が部屋を埋め尽くしていた。中国の古典の『易経』を投げる人とか、おこぼれで仕事にありつこうと企む者とか、ありとあらゆる種類の人がいた。当時はヒッピー時代だったから、みんなかなり友好的だった。要するに、根本的にカオス状態だったんだ。

ジョン 僕は全員に会おうとした。毎日毎日人に会っていたよ。でも、社会や僕に何かを提供しようという人はいなかった。ただ"欲しい、欲しい"と"どうしてダメ？"ばかり――ヒッピーや、その他のいろんな種類の人が僕に腹をたて、事務所の中はすさまじい状況が続いた。（1969年）

ニール・アスピノール 7月に、アップルはサビル・ロウ3番地に移転した。大きな建物で、レコード部門が1階にあり、地下にスタジオがあり、2階は僕とビートルズの各メンバーの部屋だった。僕の上の階に広報のオフィスがあってね。あとは覚えていない。

他の人たち、外部から来た人は、みんなわくわくしていたかもしれない。でも、僕にとってアップル設立はきつい仕事で、いつも大混乱だった。

ニューヨークに行って正式に設立を発表する前に、新聞広告を出した。"テープをお送りください。ゴミ箱に直行なんてことはありません。僕たちはお答えします"という広告だ。そうしたら、テープや詩や脚本がどっと送られてきて、正直言ってその多さに閉口していたんだ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ポール　送られてきたテープからはあまり大きな収穫は得られなかったけど、少なくとも僕らが興味を持っていることを知らせることはできた。そのおかげで、たとえばジェイムス・テイラーを獲得できた。彼はピーター・アッシャーが連れてきたんだ。

メリー・ホプキンは、僕がアップルでプロデュースしたメインのアーティストだった。でもほんとは僕が連れてきたんじゃない。イギリスのテレビでやってた大規模なタレント発掘番組「オポチュニティー・ノックス」に出ていたんだ。僕らはモデルのツイッギーと友だちだったんだけど、彼女が僕に電話をかけて知らせてくれた。"今回の「オポチュニティー・ノックス」で優勝した女の子はすごいよ――来週、絶対見た方がいいよ。嘘みたいにすばらしいの。声がきれいで"。だから、僕はテレビで彼女を見た。ほんとに美しいウェールズの声をしていると思った。音程も、とてもしっかりしていた。それに、フォーク・ギターがよく似合った。

僕は、以前ナイト・クラブで「ゾーズ・ワー・ザ・デイズ」(悲しき天使)という曲を聴いたことがあった。ニーナ&フレデリック風のアメリカ人カップルが歌っていた。ほんとに忘れられない曲で、僕はいつもこれはヒットするかもしれないと思っていた。この曲は、彼らがロシア民謡をアレンジして作った歌で、彼らはフィナーレとしてこの曲を演奏した。僕は事務所の誰かに"あの曲を手に入れて"と頼んだ。彼らはあのカップルを探し出し、曲を見つけた。メリーにこの曲をレコーディングさせたら、かなりの大ヒットになった。

それから、スタンリー・ホロウェイが出演することになっていたロンドン・ウィークエンド・テレビジョンのシリーズ「シングミーボブ」のテーマ曲の作曲も頼まれた。僕はずっとブラス・バンドがすごく好きだから、ブラック・ダイク・ミルズ・バンドのために曲を書いてプロデュースした。僕らは北に上がってブラッドフォード近くのサルテアに行き、エコーがよく効く大ホールでB面(「イエロー・サブマリン」のカバー)を録音した。A面はまったく違ったサウンドにしたかったので、外に出て街頭で演奏した。すばらしい出来だった。コルネットがすごくデッドな音で録れて、トランペットみたいだった。

その後、バッドフィンガーとも仕事をした。僕は、自分の書いた「カム・アンド・ゲット・イット」(マジック・クリスチャンのテーマ)を、かなり完成したデモにしていた。アビイ・ロードの近所に住んでいたのでビートルズのセッションの30分前にはスタジオに入ることができたんだ――思ったとおり、誰もいなくて、機材がすべてセッティングされていた――そしてリンゴの機材を使ってドラム・トラックを録り、ピアノを録り、ベースを急いで録り、ボーカルをやり、さらにボーカルを重ねてダブル・トラックにした。僕はバッドフィンガーに"それじゃ、このデモを手本にして、そっくりそのままやってほしい"と言った。デモがすごくいい感じだったからだ。実のところ彼らは自分なりのバリエーションを加えたかったんだけれど、僕は"いや。これがほんとにいいんだ"と言った。彼らは僕の言うことを聞き(何といってもプロデューサーは僕なんだ)、いい演奏をした。この曲は1970年にヒットした。

このグループのピート・ハムは、とても優秀な作曲家だった。彼が書いたニルソンの「ウィズアウト・ユー」は、すばらしくいい曲だ。でも、彼は自分で命を絶ってしまったんだ。愛すべき奴だった。今でも彼の姿が目に浮かぶ。ほんとに惜しい人を亡くした。

ジョンは、アップルでもっと前衛的なことをやりたがっていた――ザップルみたいなことをね。ザップルは、めちゃくちゃなことがやれるファンキーなレーベルだった。そして、結局それが彼の分野になったんだ。

ジョン　アップルが始まった当初は、何でも聴いてみようとしたけど、そのうち、他人のものを聴くのに自分の全時間を費やして、自分自身では何もやっていないことに気がついたんだ。1971年

リンゴ　アップルが作ったレコードはおもしろかった。メリー・ホプキンから始まり、それからジョージがジャッキー・ロマックスと、その後、ビリー・プレストンを連れてきた。僕はジョン・タヴナーをレーベルに紹介した。彼の兄弟がハムステッドの会社で建築をやっていて、うちの仕事をやってくれたのがきっかけだ。彼は僕のところに来て"僕の兄弟のテープを聴いてくれませんか"と言ってきた。聴いてみたら気に入ってね。僕らはあらゆる種類の音楽をとても広く受け入れているので、これをアップルでやろうと考えた。これは僕の貢献だ。

ポールはバッドフィンガーをプロデュースした。僕はのちにピーター・セラーズと一緒に映画『マジック・クリスチャン』を作り、そのタイトル曲はバッドフィンガーがやった。どうして彼らがやることになったのかはわからない。僕を通してじゃなかったと思う。

ポール　ビートルズの誰でも、表に立ってプロデュースをやりたければ、好きなだけ自由にやることができた。みんな何かしら関わっていたけど、やる量はそれぞれだったね。僕はロンドンに住んでいたから、アップルにいることが比較的多かった。たとえば、リンゴよりはたぶん少したくさんプロデュースをやった。実際にリンゴが何をやったのかよく知らないけど、あまり大きなものはなかったと思う。別に何もやらなくてもいいしね。義務じゃなかったんだから。でも、アイディアが浮かんだら、それを実行できたっていうことさ。

アップルは、すごく素敵な小さなレコード会社だった。僕らの望みどおりに行っていればね。だけど、ビジネス的に混乱し始めたら、僕らはこう思うようになった。"レコード会社なんて誰が必要なんだ? 僕ならただ自由があればいい"。

デレク・テイラー　彼らはアップルで多くのことを引き受けていた。ビジネス、慈善、芸術への資金提供に手を出し、いくつかの約束を自ら果たそうとした。彼らの中では、誠実な気持ちと同時に狂気が、かなりの割合で存在していたように思う。

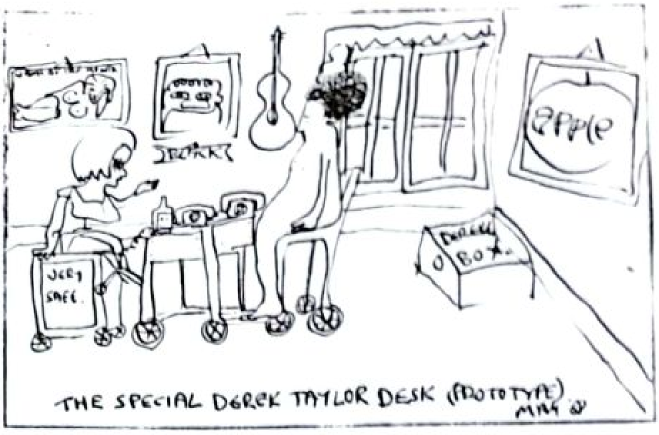
しかし、報われない人々にショー・ビジネスへの入り口を提供するという約束のあと、ビートルズは第一線から遠く方向に向かっていった。そして"彼らはどこだ? どこかに行ってしまった!"ということになり、僕だけが残った。僕は、頼み事などで本部を訪れる人を自分のオフィスに受け入れなければならなかった。それがエスカレートして、1の階に上がってきた人には飲み物を出したり――僕はいつでも何か飲んでいるのが常だった――ちょっとジョークを言ってみた。"そこに椅子がある。楽にして"。

僕は来た人を他の人に紹介した。すると、6ヵ月もするとすごい集団ができていたんだ。自己増殖し、際限なく続く遊びとゲームの集団が、広報のオフィスの中にできたんだ。その時ビートルズは"ホワイト・アルバム"を作っていた。

僕らの事務所には、多くの紹介者がいたんだ。彼らは受付やニールに電話をかけた。しかし、結局もし実際に建物の中にいる人が何か複雑な問題を起こしたり、ほんとに手をつけられない人だったりしたら、僕が彼らを捕まえていた(でなければ、僕の同僚が彼らに対処しなければならなかったはずだ)。

アップルにはたくさんのスタッフがいた――僕は、約4人の秘書とリチャード・ディレーロというアメリカ人のアシスタント、そしてメイヴィス・スミスというもうひとりの広報担当職員を抱えていた。部屋はスシ詰め状態だった――大きな部屋じゃないのに11人もいた。他の部署で解雇される人が出ると、彼らを引き受けた。一種の箱舟だった。ビル全体では40人ぐらい働いていたかもしれない。もうちょっと少ないかもしれないけど。

いろんな人々を取り込むことができた。フランキー・ハート(のちにグレイトフル・デッドのボブ・ウィアーのガールフレンドになる)が入り、その後僕のオフィスの秘書になり、次にジョージ・ハリスンのアシスタントになった。それから、報道陣、ジェイムス・テイラー、メリー・ホプキンとその父親と姉妹、彼女を取材するジャーナリストもいた。ほんとに、アルトマンの映画のようだったよ――いたるところでハプニングが起きていた。



ポール　僕らは物事を自分で管理しようとした。今では多くの人がそうしているけど。自分の会社を持ち、ミーティングには弁護士を伴い、いい条件で契約を取り付ける。僕らはこういうことの先駆けだったんだ。かなりでたらめだったけど。前提となる綿密な資金計画が全然なくて、ほとんど失敗ばっかりしてたんだから。

一度、整理を試みたことがあった。デレクの階を調べてこう思ったことを覚えている。"デレクは僕らの広報担当だ。だけど、実際のところ、秘書は4人も必要ない。ひとり少なくても大丈夫。減らす理由を考えなくちゃ"。だけど、当然ながら、そういうことを熱心に考える人間が人気者だった試しはない。僕はお金を節約しようとしていた。それが正当な理由になると思って"デレク、秘書はひとり減らすべきだ"と言った。デレクは、他の全員にそのことを告げた。彼らは僕のオフィスに下りてきて、"あなたが彼女をやめさせても、僕たちが復職させます"と言う。だから僕はこう言った。"ああ、わかった。それなら、もう削減はしない"。そう、僕は出すぎた真似をして、たしなめられてしまったんだ。

今、自分の会社を持ってみてわかったんだけど、こういうことは簡単じゃない。辛い仕事だね。僕らは理由をつけようとしたけど、できなかった。

リンゴ　僕は他のメンバーほど深く関わっていなかったけど、楽しかったな。アップルの活動の多くは、僕ら4人に関係があった。だけど僕は毎日顔を出していたわけじゃない。当時、都会にいるのが嫌だったんだ――田舎が好きだった。問題だったのは、僕らがお金とカメラと機材を全部あげてしまい、半数以上の人とはその後一度も顔を合わせなかったこと――彼らは持ち逃げしただけなんだ。

CamScannerでスキャン

ジョージ　終わってみれば、僕らは莫大な額のお金をばらまいただけだった。パートナーシップなんか持たない方がいい。これはすべての人への教訓だ。他人とパートナーになると、それについては、自分だけでは何もできなくなる(あるいはやるのがきわめて難しくなる)からだ。この点に関して、僕らは無知だった。基本的には、ジョンとポールがアイディアに夢中になって大金をばらまき、リンゴと僕はただそれに歩調を合わせなければならなかったんだと思う。

中にはお金になったものもあったけど、使った金額に比べれば雀の涙でしかなかった。この問題は、僕らに一生つきまとってくる。ビートルズに関係のあるものはすべて、いつもこのパートナーシップという状況に縛られていた。こういう状況は人には勧められないね。他人が妙なアイディアを持っていて、ふと気づいてみれば、自分もそのアイディア、あるいは少なくとも自分にふりかかるアイディアの一部分に同調しなければならない立場になっている。自分以外のいかなる人の酔狂にでも巻き込まれてしまうことになるんだ。それはすごい苦痛だよ。もちろんお互い様だけど。こういうことには表と裏があるんだと思う。でも、僕がアップルに関わるようになったのは、しばらく時間が経過したあとで、その時にはすでに破綻してたんだ。

1968年の間に、事態はさらに悪化した。僕らは決定的な方向に向かっていた。秩序は失われていたよ。かつてはブライアン・エプスタインが僕らのマネージメントをしていたけれど、彼は亡くなってしまったからね(あとでわかったことだけど、ずさんな取り引きだらけでとても収拾できる状態ではなかった)。少なくとも彼は僕らを育て、仕事の話を処理していた人間だった。アップルは突然野放しになった。国中の奇人がサビル・ロウを目指し、ジョンとヨーコからオフィスでの居場所を与えられた。ハレ・クリシュナ、ヘルズ・エンジェルス(暴走族の一派)、ディガー(ヒッピーの救済を主張するヒッピー)——あそこには何でもいたよ。僕らは、ポールとジョンにマンハッタンをボートで回らせ、これから何をするつもりなのか訊いた。マネージメントもなく、ますます常軌を逸することばかりだったから。

ジョン　お金を持っていながら僕のような考え方をしないのは、僕にはまるで理解できなかった。僕は、お金をあげるか失くすか、どちらかをしなければならなかった。僕は多くの金を人にやった。これは金を失うひとつの手段だ。もうひとつの手段は、それを無視して注意を払わないことだ。自分の実状、つまり大金持ちの男ということに対して責任を負わないことだ。

デレク・テイラー　恐ろしい忙しさだった。つまり、あのメチャクチャさや、僕らがマリファナなどを吸っていたという事実は別にしても、ものすごく活動的なオフィスだったんだ。ビートルズへの関心が、まだすごく高かったしね。彼らは、いたるところで新聞紙上をにぎわせていたよ。プレスは、1968年中頃には彼らの状況がわからなくなっていた。かなり彼らを疑問視せざるを得なくなった。"我れらがビートルズに何があったんだ"。彼らはどこに行ってしまったんだ。どうしてこんな風采をしているんだ。薬物でおかしくなったのか——離婚問題だの、マハリシだの、インドだのに現を抜かして。もう我々の仲間ではないのか。彼らに何があったんだ。デレク、君はどうなんだ。君もドレスなんか着てるじゃないか!

僕はドレスなんか着ていなかったけどね。着ていたのはヒッピーの服装——カフタン(この言葉は大嫌いだ)ではない。スモックだ。そう、モールや宝石や鈴も着けていた。考えてみてくれ。僕はこの時5人の子どもの父親で、プレスには以前からの知り合いがいたんだ。『イエロー・サブマリン』のパーティで僕は「デイリー・ミラー」の人間と会った——犯罪記者のエディ・ラクストンだ。僕はアップル・ブティックの、特に型破りな服を着ていた——フロック・コートに黒と白の靴、大きなひだ飾りの付いたシャツ、スカーフ、それにバッジも着けていた。この型破りな(ビートルズの)会社にいるせいでつきあいにくい人間になってしまったとは思われたくなかったので、僕はエディに歩み寄ってあいさつした。"やあ、エディ。僕だ。わかるよね"。すると彼はこう言った。"いや。こんな変な男とは一面識もない"。突然、何も着ていない裸のアダムになったようで、たまらなく恥ずかしい思いをした。僕は"ああ! 彼の言うことももっともだ"と思い、妙な気分になった——いわゆる現実の世界に生きるエディ・ラクストンに会う前に感じていたほどの自由を、僕がほんとに感じたことがあったのか今は定かではないが、そんな格好も時代の精神だったんだ。グレーのスーツを脱ぎ捨てた僕のような多くの人間(僕は今またグレーのスーツを喜んで着ている)が、この自由を歓迎したんだ。

ニール・アスピノール　僕はアップルを運営していたが、自分がどういう座についていたのか、まるでわからない——まあ、蓮華座(ヨガのポーズのひとつ)といったところかな。当時、アップルを運営するのは、大変な仕事だった。というのも、さまざまなアイディアがたくさん入ってきて、各人が千差万別の判断の基準を持っていたからだ。たとえば、アップルはどう経営されるべきか、アップルは何を代表すべきか、レーベルには誰が所属すべきか、部屋の装飾は何色にするか……そういうレベルの問題も、非常に難しかった。色の話は少し極端かもしれないが、それもひとつの象徴的な例だった。サビル・ロウには大きな部屋があった。誰かが"部屋をパーテーションで仕切って、君の部屋と秘書の部屋を分けたらいいんじゃない"と提案したとする。そしてパーテーションが設置される。すると翌日、別の誰か(ビートルズの別のメンバー)が入ってきて"何なの? このパーテーション"と言って脚で倒してしまうんだ。

例えば誰かが訊ねる。"広報のオフィスは必要?"——"必要だ"——"そうだな、必要ないかもしれない……"——"このアーティストと契約すべきかな、しない方がいいかな"。でも誰かひとりが気に入れば、そのアーティストと契約を結ぶ。また、他の誰かに気に入られたアーティストとも契約を結ぶんだ。あれは無政府状態だったね。実のところ、楽しい思い出もあるし、そうじゃないのもある。サビル・ロウはほんとにすごく楽しかった、とは言えないね。

デレク・テイラー　1968年が終わる頃には、僕は(自分の生き甲斐は他にあると思いながら、ビートルズやその他のことのために自分を押し殺してはいたものの)自分のための自己中心的なやり方で、かなり楽しんでいた——言い換えれば、このサーカスを自分の個人的な満足のために指揮していたんだ。あの職場は、まさに僕に合っていた。混沌としていたからね。メディアの注目はかなり集まった。そんな中で仕事が進んでいたんだ。でも、もし僕がビートルズの一員で、彼らのようにたまにしか来ていなかったら、そんな事務所に入ってショックを受けていただろうね。

時々(当時、オフィスにインターホンがあって、誰でも気軽にスウィッチを押すことができた)大騒ぎが聞こえてくることがあった。いつもレコード・プレイヤーを鳴らし、ハレ・クリシュナ信者から買った機械で天井に光を映し、ライト・ショーをやっていたからね。もし誰かがやって来て"ああ、なんて混乱したところなんだ"と言えば、僕は腹を立てていたよ。"混乱ってどういう意味だ? 僕らは、ここで起こっていることを正確に把握している!"。ある意味で、僕らは実際に把握していたんだ。

報道関係者がたくさんやって来て、長い特集記事を書いた。すべてが批判的だったわけではない。あそこは人々がキャリアをスタートさせる場所だったんだ——レコーディングだけでなく、ジャーナリストとしてのキャリアもね。

ジョン　**それから僕がマジック・アレックスを連れてきた。そうしたら、悪化していた事態がもっと悪くなっただけだった。** 1972年

ポール　"マジック"アレックスはギリシャ人で、もともとはジョンの友だちだった。ある日、ジョンが僕の家に来てこう言ったのを覚えている。"これが新しい導師——マジック・アレックスだ"。僕は"うん、わかった"とだけ言った。

人の紹介の仕方としては、すごくおかしいよね。かなり決定的だよ。僕は"へえ、そう。じゃあ、彼は何をやるのかな"と思った。彼は、エレクトロニクスにはかなり詳しかった。他人が彼のアイディアについて議論して、それは不可能だと言っても、アレックスは可能だと言った。当時——特に深夜——僕らはいろいろと思いつきを言い合った。アレックスにはすごい思いつきがあった。

彼は、スピーカーの機能をもつ壁紙を使うことを考えた。壁紙としてスピーカーを部屋に貼るんだ。今はそんな技術もあるけど、当時は存在していなかったと思う。それは科学雑誌でしか取り上げられないような話で、僕らはそんなの読んでなかったけど、アレックスは読んでいた。それに、いい奴だったから、僕らは気が合った。

そんなわけで僕らはアレックスにアップル・エレクトロニクスを担当させた。壁紙のスピーカーが作れればすごいと思ったんだ。でも、とうとう完成しなかったよ。彼は小さな研究所を持って、ひとつかふたつおもしろいことをやったけど、彼の言うようなものはできなかった。彼とは今もつきあいがある。今はちゃんとした名前を使っているよ。

リンゴ　マジック・アレックスは電気塗料を発明した。リヴィング・ルームに塗料を塗ってコンセントにつなぐと、壁が光るんだ! サンプルとして小さな金属片を見せてもらったけど、その時は、リヴィング・ルームの壁にスチールの板を張ってその上に塗らなきゃいけないのかと思っていた。それから、"トーキング・テレフォン"というのもあった(これが1968年だったことを考えてほしい)——いわゆるスピーカー・フォンで、部屋を歩き回っても、いつもボリュームが同じレベルになるように補正されるんだ。

彼は、ラジオで放送される僕らのレコードをリスナーがテープに録音するのを防ぐ工夫を考えた——デコーダーをつけて信号を受信しないと録音できないようにするというんだ。それから時間あたりいくらかの金を取ってコマーシャルを入れることもできると考えた。アメリカからEMIとキャピトルを呼んで見てもらったんだけど、全然興味を示さなかったけどね。

彼が他に何を発明したのか、誰も知らないよ。彼は、僕らみんなが頭に穴をあけるというアイディアを持っていた。それはトレパニング(頭蓋開口)と呼ばれた。マジック・アレックスによると、それをやれば内なる第3の目が開き、即座に普遍的になれるそうなんだ。

ジョージ　ジョンはマジック・アレックスに興味を持った。そして、そのためアレックスは僕らの人生にも入り込んできた。彼は魅力的な奴だったよ——しばらくの間はね。

それでも、彼の発明にはすごいものもあった。たとえば、ステンレスか何かの金属でできた小さな正方形に、フラッシュライト・バッテリーにつなぐ電線が2本付いている装置があった。金属部分を持ったまま電線をある方向につなぐと、急激に熱くなって持っていられないほどになったんだ。それを逆につなぐと、今度は氷みたいに冷たくなった。

もうひとつあるよ。それは薄い金属片でできていて、何かエナメル塗料みたいなのが厚く塗ってあって、これも金属片から電線が出ていた。電線をつなぐと、明るい黄緑の蛍光色に光る。アレックスは言った。"これが車の後尾にあって、今のがブレーキを踏む動作だったと想像してみて"。彼にはこういうことをしてほしかった。フェラーリをこすって地の金属が見えそうになった時、アレックスがその魔法のコーティングを塗ろうとし

CamScannerでスキャン

telephone 01-486 1931 INTERNAL MEMO

APPLE CORPS LTD
95 Wigmore Street
London W1

アップルは
エレクトロニクス製品を生産する。
それはインチキなんかじゃない、
すばらしい発明なんだ。
僕らの友人の
アレクシス・マーダスは、
発明の天才なんだ。

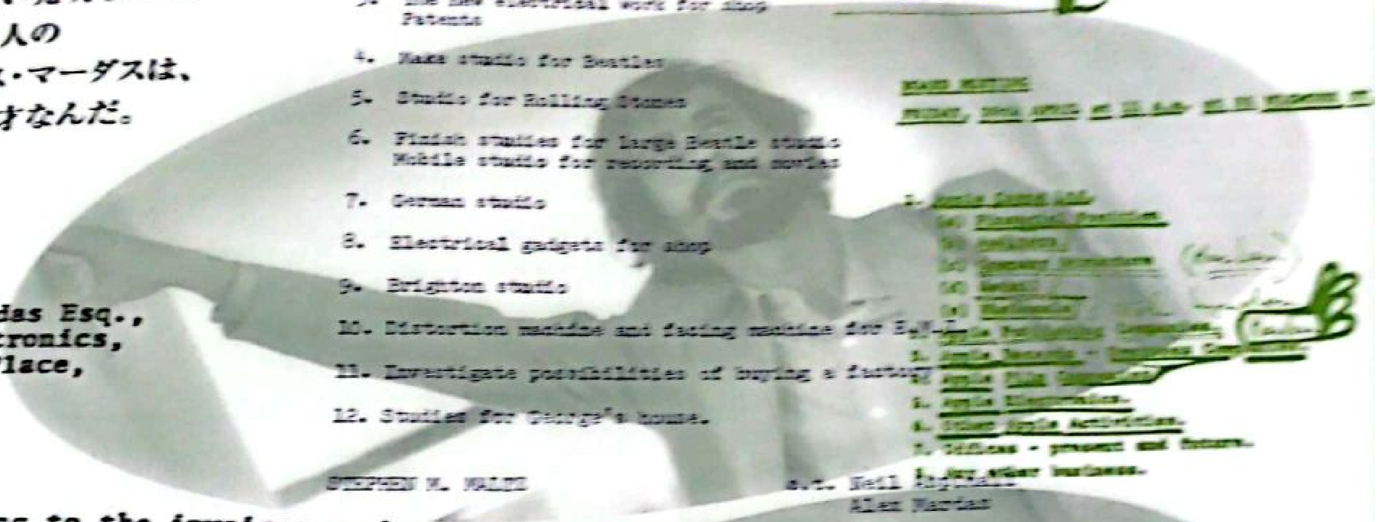
MEMORANDUM

Re: Future Plans of Apple Electronics Ltd.

1. Finish work at 34 Boston Place
2. Contract re Taj Mahal Hotel, India
3. The new electrical work for shop Patents
4. Make studio for Beatles
5. Studio for Rolling Stones
6. Finish studies for large Beatle studio Mobile studio for recording and movies
7. German studio
8. Electrical gadgets for shop
9. Brighton studio
10. Distortion machine and facing machine for
11. Investigate possibilities of buying a factory
12. Studies for George's house.

STEPHEN M. MALTZ

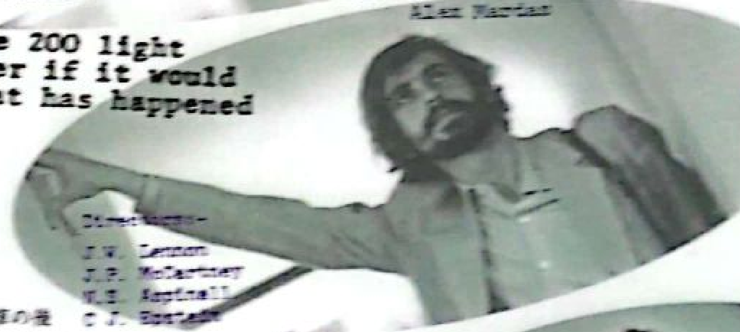
c.c. Neil Aspinall
Alex Mardas



Alexis Mardas Esq.,
Apple Electronics,
34 Boston Place,
N.W.1

Dear Alexi

According to the invoices we have 200 light
achines were ordered by you. I wonder if it would
possible for you to let me know what has happened
them.



Directors:
J.W. Lennon
J.P. McCartney
N.S. Aspinall

Dear Alex,

As you are no doubt aware, we

recording studio for some time

premises. I should like to know whether your company

for us and after having looked at our premises, if you

how much it would cost.

Yours sincerely,

N.S. Aspinall

ら は聞いてみた。"他の色もできる？"――"もちろん。何でもできるよ"。
は、彼が車のボディ全体の色彩計画を想像しているんだと判断した。車の後
くなる――ただしブレーキを踏んだ時だけ！ それ以外は、車全体がギア・ボック
に接続されている――だから、発進の時はすごくぼんやりした色で、ギアを上
れてだんだん明るくなる。そんな車が幹線道路のA3を走っていたら、すれ違
空飛ぶ円盤みたいに見えるだろうね（空飛ぶ円盤と言えば、もうひとつの話が
。僕は彼にフェラーリ・ベルリネッタVIIエンジンをあげようとして、ジョンも自分
あげようとしていた。なぜかっていうとアレックスは、このふたつのエンジンを
飛ぶ円盤が作れると思っていたんだ）。
実際には何もしなかった（ラジオ付きのトイレとかを作ったことを除いては）。
にスタジオを作らせた時、行ってみたらメチャクチャだったんだ。史上最悪
た。彼は化学者みたいな白衣を着て歩き回っていたけど、自分が何をしよう
か、まったくわかっていなかった。16トラックのシステムだからと言って、壁
きなスピーカーを埋め込んでいた。ステレオ・サウンドにはスピーカーは2個
、あれはひどかったよ。すべて取り外さなければならなかった。

は、72トラックのスタジオにしようと考えた。それは、1968年当時としては、
た。ウェイブリッジのブリティッシュ・エアロスペース社から巨大なコンピ
つか買って、セント・ジョージズ・ヒルの僕の納屋に入れておいた。そこに
んでいた――絶対にその納屋から出ていかなかったんだ。斬新なア
ど、やっぱりアレックスは実現させなかった。僕らは徐々に8トラックま
――72トラックで僕らが何をやろうとしていたのかは、神様だけがご存

いくつかは、事実上実現したと思う。ただ製造されていないだけだ。
はひとつぐらい売れる物があったかもしれない。ただ、彼はそうい
だ。彼の考えるものは僕らのような連中の目前で止まるのさ。彼は
わっている。言ってることはまともだよ。

ジョン
天才なんてものは、
この世にはいない。
もしいるとしたら、彼がそうだ。
彼が作る製品はすばらしい。
みんなに教えたいと思うけど、僕はこの楽しい企業社会で、
茶色のレインコートを着てサングラスをかけたスパイが徘徊
してるから、発売までは製品について何も言ってはいけな
い、ということを学んだんだ。

CamScannerでスキャン

リンゴ　「コロネーション・ストリート」のエディ・イェイツが、ジョンと僕の声をやった。どっちも同じに聞こえる。僕には違いが全然わからない。

ポール　制作者たちは、映画の最後に僕らが登場して"こんにちは、ビートルズです。映画は楽しかった？"と言うシーンを入れたいと考えた。1968年1月に、スタジオに行ってそのシーンを撮影しなければならなくなった。僕らは乗り気じゃないけど、いったん関わりをもったのだから、何かを提供しなければならなかったんだ。

もしも映画がディズニー風に作られていて、「ホェン・ユー・ウィッシュ・アポン・ア・スター」(星に願いを)をやってくれと言われたなら、僕は一生懸命やっただろうな。だけど、どちらかと言えば「ペパー」の路線だったから、僕らはすでにレコーディングしてある曲を使うと申し出た。たとえば「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」(愛こそはすべて)とかね。新曲もほしいと言われたので、アビイ・ロードで「オンリー・ア・ノーザン・ソング」を録音した。僕はどうしようもないトランペットのフレーズを演奏したんだ。僕の父親が昔トランペットをやっていたんだ。僕はちゃんとは吹けないけれど、適当にメチャクチャやることはできた——この曲のおかげで、自分の精神的骨格が正確につかめたよ。僕はかなりいいかげんな人間だってこと。

ジョージ　7月に『イエロー・サブマリン』が公開された。ハインツ・エーデルマンや制作に関わった主なアーティストと会ったことを覚えているよ。彼らは、アイディアの概要を説明し、アニメのキャラクターについて話してくれた。でも彼らやプロデューサーのアル・ブロダックスとのミーティングは、せいぜい1〜2回しかやらなかった——でも基本的には、僕らはほとんど関与していないんだよ。

ポール　脚本家の中に、『ラヴ・ストーリー』(ある愛の詩)の著者エリック・シーガルが含まれていた。彼と話しながら彼の今後の構想を知るのはおもしろかったけど、彼らがサイケデリックな要素を選んだ時は驚いた。制作者たちの狙いはもう少し商業的なところにあると思っていたからね。僕は、そっちの方がよかった。『イエロー・サブマリン』は、もっと正統派寄りのアニメにしてほしかったんだ。単に、ある男が海に出て潜水艦の国に行くというストーリーにするべきだった。海に潜って、いろんなものを見て、いろんな人に出会うというのもいい——すごくおもしろそうだよ。

僕はディズニーの映画が大好きだから、これは史上最高のディズニー映画になると思っていた——そして音楽は僕らのを使うんだから。この組み合わせが実現したら、すばらしかっただろうな。だけど彼らはそれを望んでいなかった。改めて見ると、今はこの映画が好きだよ。ほんとにかなりおもしろい。制作者たちは僕らの関心が向いている方向に行くべきだと感じていた。僕らが取りかかっていたのが『サージェント・ペパー』だったんだ——でも、当時の僕には『バンビ』の方がよかった。

僕らは、あまり深く関与しないつもりであることと、吹き替えはやりたくない——吹き替えは大変すぎる——ということを彼らに告げた。だから、ランス・パーシバル(キャバレー・アーティスト兼ナレーター)のような人が代わりをした。彼らはリンゴをすごくうまく演じた。それと同時に、あのひどいリバプール訛りのまがいものは、ここから始まったんだ。アメリカ人がロンドン訛りを真似しているみたいなんだよ。"Wotcher, all right"(こんちはー、元気？)ってね——まるでディック・ヴァン・ダイクの芸風だね。

製作が終わりに近づいた頃、映画の最後のシーンを撮影した。僕が穴をポケットに入れたりする、あのシーンだよ。ブルー・ミーニーがシアターから出ていくのを見たよ。

僕は、あの映画が好きだ。名作だと思う。どうして自分の役の吹き替えをしないことになったのかよくわからないけれど、おそらく俳優がやった方がよかったんだろう。アニメっぽくする必要があったからね。どっちみち僕らの声もかなりアニメっぽかったけれど、俳優のような誇張した喋り方が、あの映画には合っている。あれは、すべての世代が見れる映画だね——赤ん坊とか3〜4歳の子どもにも受けるよ。

ジョージ　「オンリー・ア・ノーザン・ソング」は、イギリス北部の聖都リバプールに関するジョークだった。さらに、この曲の著作権はノーザン・ソングズ社が管理していた。僕はノーザン・ソングズ社の所有者じゃないから、"It doesn't really matter what chords I play……as it's only a Northern Song"(僕がどんなコードを弾こうと関係ない……だって、たかがノーザン・ソングズの曲じゃないか)というのは、まさしくそのとおりだった。

リンゴ　僕は『イエロー・サブマリン』が大好きだった。アニメーションがすばらしくて、ほんとに革新的だと思った。シー・オブ・ホールズ、ブルー・ミーニーの動き方——今になってもすばらしい。関係者の一員であったことをうれしく思うよ。

あの映画にまつわる思い出で、今でも"やられたなー"と思うことがある。公開された年に、たくさんの子どもたちから"どうしてボタンを押したの？"と聞かれたんだ。映画で僕がボタンを押して、潜水艦の外に飛び出してしまう場面があるんだよ——それに対して、全世界の子どもたちが、まるで実際の出来事であるかのように、大きな声で僕に聞き続けた。"どうしてボタンを押したの？"って。子どもたちは、あれがほんとに僕だと思っていたんだ。

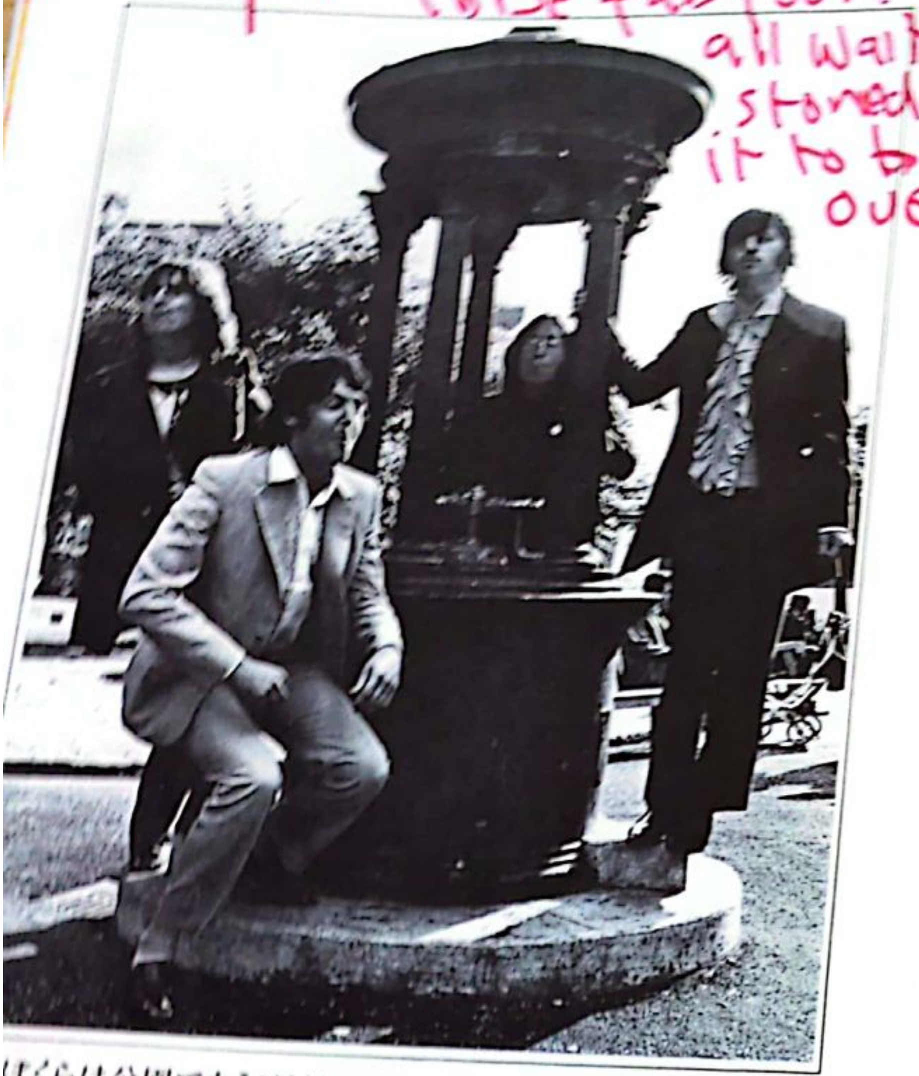
ジョン　『イエロー・サブマリン』の半分は、僕がブロダックスに喋ったことがもとになっているんだ。人々を吸い込むフーバーのアイディアとかね——みんな僕が考えた。彼らはよくスタジオに来て話していった。"よう、ジョン。なんか、いい映画のアイディアない？"。僕は、そういうのを全部話してやった。彼らはそれを聞いて帰り、映画に使ったんだ。1972年

あれは、ユナイテッド・アーティスツとの契約を果たすために制作した3本目の映画だった。契約はブライアンが決めたことだったから、僕らにはどうしようもなかった。でも僕はこの映画が好きだ。アートワークがいい。スタッフからもう1曲ほしいと言われたので、僕はパッと「ヘイ・ブルドッグ」を書いた。この曲は、サウンド的にはよく仕上がった。歌詞には特に意味はない。1980年

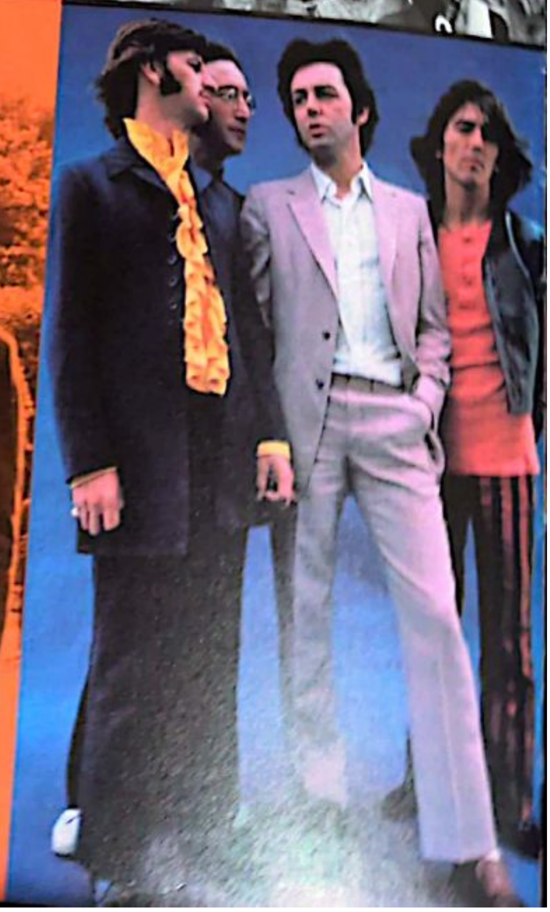
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

Staged photo: pretending to be fab four: all waiting stoned for it to be over.



ぼくらは公園でもう1日だけビートル・ボーイズとしてふるまおうとした。



CamScannerでスキャン

ジョージ　ベイカー・ストリートのアップルの店の壁画はすごかった。近所の小売店の中に建物の色調に否定的な人がふたりぐらいいたけど、他の人は、ベイカー・ストリートが急に注目の的になったので、喜んでいたよ。それまでは、シャーロック・ホームズを除いて、ベイカー・ストリートには何の特徴もなかったからね――バスに乗る人以外、誰も来なかったんだ。そこへ突然、あんなものができた。だけど苦情もあって、塗りつぶしただか誰かが、あの物件の所有者から絵を塗りつぶして消すように言われた。でも、何もかもすべてが失敗だったんだ。

ポール　市議会が困って壁画を消すように言ってきた。僕らはこう応じた。"え、冗談でしょう。美しいじゃないですか――みんな気に入っていますよ"。たぶん反対していた住民もいたんだろうね。そのあと、店を白く塗って道の反対側から絵を映写しようとしたんだ。僕らはいいアイディアをいっぱい持っていた。暇がなくて試せなかったのもあっただけど、アイディアを生むにはいい時代だった。

ジョージ　もし僕らが素晴らしい……が今も存在していたなら、……ただろうな。……いよ。これは……打たなくちゃ。だけど……タイプの偏狭さでね、僕らは……を挑んだのさ。……頑固な……う60年代のフラワー・パワー的な……政府全体、警察、世間……な連中ばかりだった。……しめることがあると気づいたけどね。……絵を消さなければいけないと言われた……ら、あらゆることが店の魅力を損なう方向に……めた。アップルの店の周囲で起きる現象全体が……い雰囲気になった。そして――店がうまく行かなくなった……ので――僕らは店を売ることに決めた。最後には、品物をただではらまいた。僕らは新聞に広告を出して、人々が店にまで来て品物をつかみ取って行く現場を撮影したんだ。

ジョン　あれはビッグ・イベントだった。たくさんの若者が来て、店の品物を全部持っていったんだ。店全体で一番よかったことはこれだったね。ひとつ残らず品物を全部持っていっちゃったこと。だけど、前の晩、僕ら全員が店に入って、欲しいものはとっておいたんだけど。そんなにたくさんじゃなかったよ。Tシャツとかね……。盛り上がったよ。泥棒にでもなった気分でね。欲しかったものはみんな家に持って帰ったんだ。
次の日、僕らは店の様子を観察していた。そしたら、何千人もの若者が店に入って品物をただで持っていった。すごかったね。もちろん、デレクや他のスタッフは大反対だったけど、その時はたまたま僕が事務所を指揮した。僕らが仕切ってたんだ。あるときポールからこんな電話があったんだよ。"僕は手を引く。あとは君が引き受けて"。馬鹿馬鹿しいほど簡単なことだったんだ。1972年　僕らは、品物を全部放棄して、サイケデリック洋服屋ごっこはやめにしようと思った。1970年

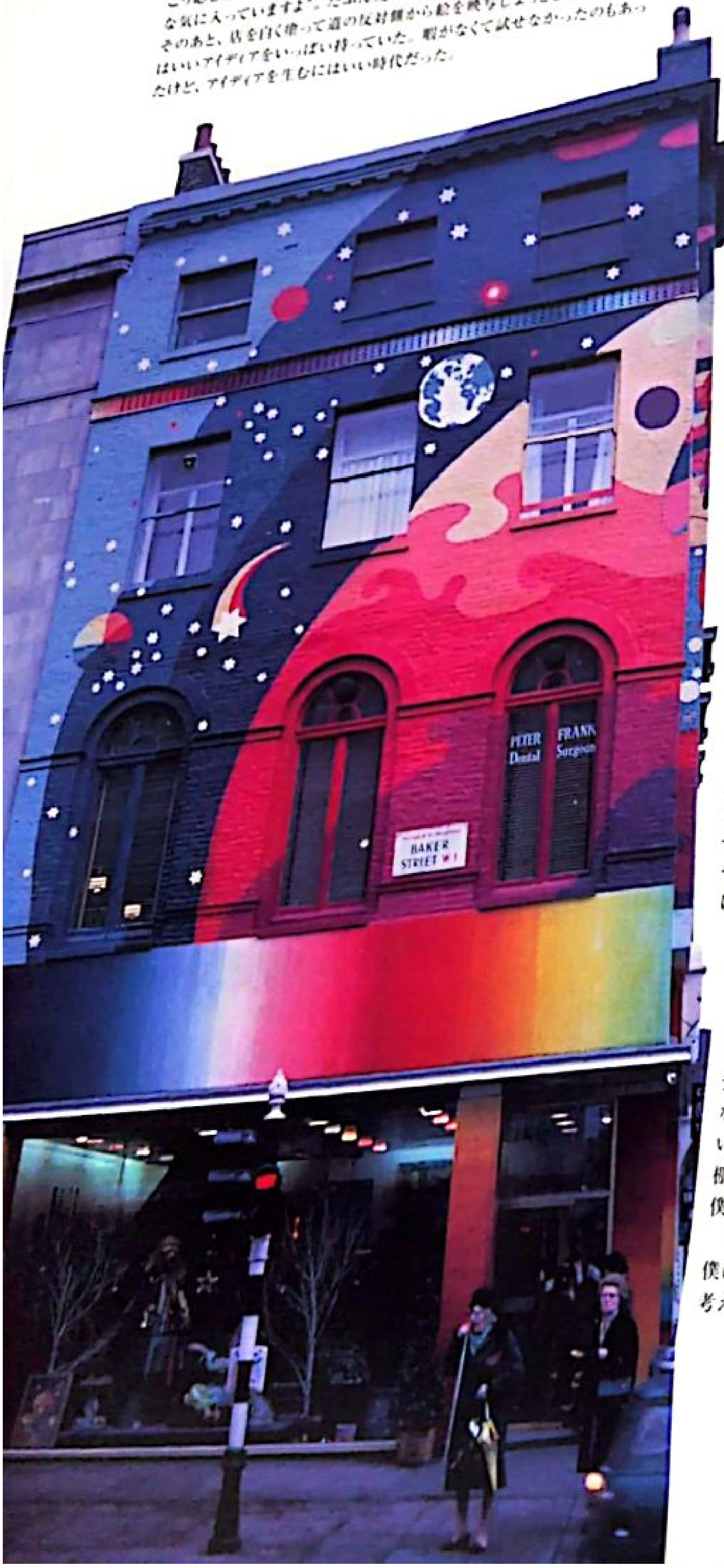
ポール　僕らは関係者入口から店に入った。
だけど、帰りは正面の扉から出ていく。
アップルの主要取り扱い品は、
洋服じゃなくて遊びなんだ。 1968年

リンゴ　僕らは前の晩に入って、欲しいものを全部とった。シャツやジャケットをたくさんもらったよ――僕らは品物を一掃した。セールじゃなくて、何でもただであげたんだ。それが一番いい方法だった。もちろん、最後には台車まで持っていかれた。馬鹿げたことだけど、僕らは店を開いてみんなに僕らと同じ服を着せたかったんだ。

ニール・アスピノール　彼らは、もうやりたくないという結論に達したんだろうね。損が出ていたとかそういうことではなくて、理由が何であれ、彼らが小売業から足を洗おうと決めただけなんだ。それに彼らは商人ではないのに、商売にたくさん時間をとられてしまったから。

ポール　幸いなことに、店がうまく行かなくなっても僕らはあまり悩まなかった。僕らは、赤字を膨らまさないためにも早めに手を引いた方がいいと、突然気づいたんだ。すごいことになったよ。当日、店に来た人に服をあげたんだ。俳優のマイケル・J・ポラードはジャケットを持っていった(それをリンダが写真に撮っている――彼女の本に載っているよ)。ひとりにつき1点ずつ持っていっていいことにしようと考えた。"ご着はいけません――趣旨を御理解ください"。
ほんとに彼らは店を空っぽにしてくれた。個人的には、いい方法だったと思っているよ。僕らが本気で服飾業をやろうとしたんじゃないってことを見せられたからね。"さあ、うまくいかなかったから、服をあげるよ!"って。

デレク・テイラー　服をただであげるという計画は、僕が決して見たいとは思わない人間の最悪の部分を引き出す結果となった。タクシー運転手が"あれがほしい"、"これがほしい"と、カフタンやケープやひだ飾りの付いたシルクのシャツを、棚からもぎとっていった。服をただであげたことによってもたらされたこの事態は、僕の知るかぎり、もっとも醜いもののひとつだと思った。卑しくて不快だった。
実のところ、僕は彼らに店をやめてほしいなどとは少しも思っていなかったのだ。僕は自分の熱い思いを手紙にしたためた。"親愛なるビートルズ様。お願いです。考え直してください……"。僕は、崩壊するところを見たくはなかったんだ。



ポール **僕らはそろそろ引退すべきなんじゃないかな、まだまだいい曲は書けるけど、みんなシングルのB面しか作れなくなるまでやり続けると思ってるみたいだ。**

ジョージ　アップルの店がさっぱになった時、ウィンドウを使ってニュー・シングルの宣伝をしたらいいんじゃないか、という考えが浮かんだ。そこで、誰かが白い塗料を持ってきて、大きな字で「Hey Jude」、「Revolution」と書いた。次の日、店のウィンドウが割られていた。どうも、誰かが戦前のナチの運動の"Juden"(ドイツ語で"ユダヤ人"の意味)と勘違いしたらしい。

ポール　「ヘイ・ジュード」リリースの直前にアップルの店に行った。ウィンドウが白く塗りつぶされていたのを見て、こう思った。"絶好の機会だ。ベイカー・ストリートといえば、すごくたくさんのバスが通るところだ……"。だから、まだ誰もその言葉の意味がわからないときに、白い塗料を削って「Hey Jude」と書いた。

すると、メリルボンで精肉屋をやっている男が、かんかんに怒って電話をかけてきた。"息子をひとり行かせて貴様を叩きのめしてやる"、"ちょっと待って。電話を切らないで——いったい何のことです"と聞くと、彼は答えた。"店のウィンドウに"Jude"と書いただろう"。それが"Jew"(ユダヤ人)と同じ意味だったなんて、全然知らなかった。だけど、ナチ時代のドイツの映像を見ると、白く塗りつぶされた窓に、ダビデの星と一緒に"Juden Raus"って書いてある。そんなつもりはまったくなかったんだ。誓ってもいいよ。僕は何度も何度も"ほんとにすみません"と言った。"僕の親友にもユダヤ人はいるんです。あれは、これから出る曲のタイトルなんですよ。聴いてもらえれば、そういうものとは無関係だってわかります——まったくの偶然なんですよ"。やっと、彼の気持ちも落ち着いたよ。

ジョージ　「ヘイ・ジュード」は、実際には、ジュリアン・レノンのことを歌った曲なんだ。ジョンがシンシアと別れようとしていた時に、ポールが書いたんだ。ジュリアンは、まだ小さな子どもだった——5歳ぐらいだったかな。それでポールは、ジョンの家に行き、罪のない傍観者であるジュリアンが離婚問題に巻き込まれているのを見て、不憫に思ったんだ。

ポール　ジョンとシンシアは、結婚した時から、あまり似合いのカップルじゃなかった。可愛い子どもも生まれ、しばらくの間はすごく幸せだった。だけど、僕の意見では、シンシアはジョンをパイプとスリッパの穏やかな生活に縛りつけたかったんだ。もちろん、ジョンはまったくそんなタイプじゃなかった。

ジョンは、崖を見れば飛び越えたくなるようなタイプの人間だった。彼にこう言われたことを、よく思い出す。"見ろよ、もうすぐ崖だぜ。飛んでみろよ"。そんな時僕はこう言った。"ジョン、そんなことをしたら、たぶん死んじゃうぞ"。彼がいつも向こう見ずなことを言い出すから、僕は防衛策をとるようになったんだ。"僕に考えがある。まず最初に君がやって、大きな声で僕を呼んでよ。大丈夫だったら僕も飛ぶ。君の声が聞こえなかったら、ここにいる"って感じさ。

例えばある日の夕食時に、彼は僕のところに来てこう言った。"トレパニング"(頭蓋開口)を考えたことないか? 古代ローマでやられていたことなんだって——頭蓋骨に穴を開けるんだよ"。60年代には誰でもそうだったように、僕らはそういう話をたくさんした。僕が"いや、真剣に考えたことはない"と答えると、彼は"僕ら全員でやるべきだと思うんだ"と言う。僕はやっぱりこう言った。"僕はそのことをよく知らない。もし君がやって平気だったら、みんなもすることにしよう"。ジョンの無鉄砲な思いつきをかわすには、その方法しかなかった。そうでもしなければ、次の朝には僕ら全員が頭に穴を開けられてしまうんだ。

そんなわけで、ジョンとシンシアが別れることになって、僕は特にジュリアンが不憫になった。僕らは昔からの知り合いだった。ジョンがまだアート・スクールの学生で、僕がドットという女の子とつきあって、ジョンがシンシアとつきあっていた頃からの友だちで、よく4人で遊びに行ったり一緒にパーティに行ったりした。その時以来、僕は彼らが結婚し、ジュリアンを出産するのを見てきたんだ。

家族の友人として、僕はウェイブリッジまで車を走らせ、何も心配することはないと言おうと思った。基本的には彼らを元気づけつつ様子をうかがおうと思ったんだ。車で1時間ぐらい走ったよ。僕は、いつもラジオを消しておく習慣があった。いつ曲が浮かんでもいいようにしてね……僕は歌い始めた。"Hey Jools - don't make it bad, take a sad song, and make it better……"(おい、ジュールズ——悪くとっちゃいけない。悲しい歌も楽しく考えるんだ……)。ジュリアンに向けた、楽観的で、希望あるメッセージだった。"元気出せよ。君の両親が離婚する。悲しいのはわかるけど、君は大丈夫だ"。

結局"Jools"は"Jude"に変えた。「オクラホマ」にジャッド(Jud)という登場人物がいるんだけど、僕はその名前が好きなんだ。曲を書き終えた時、ジョンに聴かせた——もっとも、"the movement you need is on your shoulder"(君に必要な動きは君の肩の上にある)という一節にもう少し手を加えるべきかもしれないと思っていたから。僕は、演奏しながらジョンの顔を見てこう言った。"ここは直さなきゃね"——"どこ?"——"shoulderって単語はもうすでに1回使っているし。どっちにしても稚拙な表現だと思うんだ。オウムみたいだしね。変えることにする"。するとジョンは言った。"変えるなよ。この曲の歌詞で、そこが一番いいと思うよ。君の言いたいことはわかる——すごくいいよ"。それがジョンのいいところさ。僕がはっきりとその1行をやめようとしていたのに、すごくいいと言ってくれるんだ。彼の目を見ると、彼がほんとにそう思っているのがわかった。だから、この曲を演奏している時、この部分に来るとジョンを思い出すんだ。時には、ここで少し感傷的になることもある。

ジョン　「ヘイ・ジュード」は、彼の傑作のひとつだ。僕の息子ジュリアンの歌だと言っていた。僕がシンと別れてジュリアンを手放すのを知っていたんだ。彼は、ジュリアンに"やあ"というために、車でやって来た。ジュリアンにとっては、おじさんのような存在だった。ポールはいつも子どもに優しかった。だから「ヘイ・ジュード」を思いついたんだ。

でも、僕はいつも、自分に向けられた曲として聴いていた。この曲について考えると、ヨーコのことが頭に浮かぶ。彼はこう歌った。"Hey Jude - hey John"。歌詞を深読みしすぎるファンみたいなことを言っていると自分でも思うけど、この曲は僕へのメッセージとして聴くこともできるだろ。"go out and get her"(積極的に彼女を手に入れるんだ)というくだり——彼は潜在意識の中では"さあ行け、僕を置いていけ"と言ってる。だけど、意識レベルでは、彼は僕に行ってほしくなかったんだ。彼の心の天使は"神の祝福あれ"と言っていたけど、心の悪魔はそんなことをまったく望んでいなかったんだ。なぜなら、パートナーを失いたくなかったから。1980年

ジョージ・マーティン　「ヘイ・ジュード」はトライデント・スタジオで録音した。長い曲だった。実は私は、曲の時間を計ったあと、"こんな長いシングルは作れない"と言ったんだ。すると、ビートルズは——この時に始まったことではないが——大声で私を非難し、ジョンが"なぜダメなの"と訊いてきた。実際、私は合理的な理由を思いつくことができなかった——ディスク・ジョッキーがかけられないという情けない理由を答えるぐらいが関の山だった。すると彼は言った。"かけるさ。僕らのレコードだもの"。まさしく彼の言うとおりになったんだ。

ポール　シングルとしては異例の長さだったけど、僕らには優秀なエンジニアが大勢ついていた。僕らは、45回転のレコードにどれだけ入るか訊ねた。彼らは、レコード溝に押し込めるのはせいぜい4分ぐらいだと答えた。長く記録するには音量を犠牲にしなければならず、約4分を超えると、音が小さくなってしまい、レコードをかける人がみんなボリュームを上げなければならないと言うんだ。だけど、彼らはすごく賢いやり方をした。大きな音にする必要のない部分を圧縮することによって、その他の部分に余裕を作ったんだ。とにかく、彼らは7分の曲を収めることができた——これはエンジニアの大手柄なんだ。

レコードを持ってトッテナム・コート・ロードのヴェスヴィオに行った時のことを覚えているよ。ヴェスヴィオというのは、"朝3時にビーンバッグ・チェアーの上でボーッとしている"というタイプのクラブなんだ。僕が行ったのは夜のちょうどいい時間だったので、DJにレコードをかけてもらったんだ。ミック・ジャガーが寄ってきて、僕にこんなことを言ったのを覚えている。"2曲入ってるみたいだな。1曲終わったあと、最後の"na na na"のところだけで、丸々1曲分あるぜ"。

僕はいつも、ニュー・シングルではちょっと地獄の苦しみを味わった。たとえば、初めてラジオで聴く時に、すごくハラハラするんだ。すべて受け入れられると期待するのは虫がよすぎると思っていた。もしかしたら、途中で消されてしまうかも……だけど、そうはならなかった。BBCでスチュアート・ヘンリーがこんなことを言ったのを覚えているよ。"じゃあ、次、行くよ——みんなが好きか嫌いかは別にして"。それに続けて彼は僕らのレコードをかけた。僕は思ったよ。"お世話様! スチュ、他に何か言うこと思いつかなかったの?"

リンゴ　「ヘイ・ジュード」は、今やクラシックになったね。あのレコーディングは、いい感じだったよ。僕らは2回ぐらい演奏した——ちゃんとしたのを録ろうとしてね。そして、いつものようにすごくヒットした。なるべくしてそうなったって感じだね。

ニール・アスピノール　ビートルズが「ヘイ・ジュード」と「レボリューション」の演奏シーンを撮影していた時、トゥイッケナム・スタジオにデヴィッド・フロストがやって来て、自分の番組か何かのためにやっているみたいに、司会をやったんだ。この撮影は観客を招いてやった。彼らは全員ステージに上がり、「ヘイ・ジュード」のコーラスのリフレインを歌ったんだ。

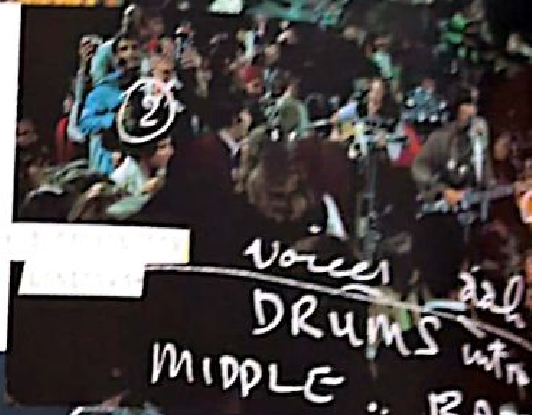
ジョージ　僕らは観客の前で撮影をやり、「ヘイ・ジュード」のために、人が呼び入れられたんだ。デヴィット・フロスト用に特別にやったわけじゃないんだけど、この模様は彼の番組で放送された。撮影の時、彼は実際にスタジオにいたよ。

ジョージ・マーティン　「ヘイ・ジュード」の B 面は「レボリューション」だった。この曲で、私たちは初めてディストーションを使った。これについては、技術者からいろいろと文句が出たよ。だけど、これはアイディアだった。この曲はジョンの作品で、限界ぎりぎりまでプッシュしようというアイディアだったんだ。そうだね、私たちは限界まで行き、それを超えてしまったんだ。

ジョージ　「レボリューション」に関して言えるのは（これについて話すと討論になっちゃうけど）、曲そのものより、これを作った姿勢が重要ということだ。「レボリューション」はすごくいいし、乗れる曲だ。だけど、僕はあのノイズが特に嫌いなんだ。僕が今"ノイズ"という言葉を使ったのは、ジョンのギターのひずんだ音が好きじゃないからだ。

「レボリューション」には――どんなスタイルの曲にも言えることだけど――独自のよさがある。確かにいい曲だ。だけどジョンの最高傑作には入らない。この曲が重要視される要因があるとすれば、それは実際に歌われている内容だけだ。だけどそれと同時に、政治意識の強い曲は、他にもたくさん世界中に出回っていた。

ポール　僕は「レボリューション」のサウンドが好きだ。



ジョン　ジョージとかポールとか、全員が休暇をとっていた時、僕はLPに入っている「レボリューション」を作った。シングルで出したかったけど、それはどよくないって言われたんだ。僕らは「ヘイ・ジュード」を出した。シングルにふさわしい曲だった――だけど、両方出してもよかったんだ。

1970年

この曲のレコーディングは2回やった。ビートルズがお互いにすごくピリピリし始めた頃だった。最初のテイクは、ジョージとポールが難色を示した。彼らは遅すぎると言ったんだ。確かに、ヒットするレコードとしないレコードの特徴を細かく突き詰めれば、彼らの言うとおりかもしれない。だけど、ビートルズは、ゴールドのレコードになろうが木のレコードになろうが、そんなことは気にせずに、わかりやすいスローなバージョンの「レボリューション」を、シングルとして出す余裕があったはずなんだ。だけどヨーコのことや、僕が（2年ほど休んだあとで）また昔のようにクリエイティブになり優位に立つようになって、彼らはそういうことに腹を立てていたから、計画がつぶされてしまった。僕は再び目を覚まし、彼らはそれに慣れていなかったんだ。1980年

僕は革命（revolution）について感じたことを表現したいと思った。発言すべき時期だと思ったんだ。ベトナム戦争に関する質問にノー・コメントを通すのはやめにすべきだと思ったのと同じように。

僕はインドの丘の上でそんなことを考えていた。僕には"神よ、救いたまえ"的な感覚がまだあった。"大丈夫だろう"と思っていたんだ。だから僕は「レボリューション」をやった。僕は発言したかった。革命に関する自分の思いを伝えたかった。誰でもいいから、聞いてくれる人に言いたかったんだ。意志を伝えよう、"君はどう思う？　僕はこう思う"と発言しようよって。1970年

この曲にはふたつのバージョンがある。だけど、反体制の革新派は"count me out"（僕を仲間から外してくれ）というバージョンだけを取り上げた。結局LPにしかならなかったオリジナル・バージョンでは"count me out in"（僕を仲間から外してくれ、入れてくれ）とも言っている。確信がなかったから、両方入れたんだよ。

僕は殺されたくなかった。毛沢東主義者のことは、ほんとはあまりよく知らなかった。だけど、彼らはすごく少数派に見えるのに、緑色の塗料を塗って警察の前に立ち、ひとりずつやられるのを待っていることだけは知っていた。僕はあからさますぎると思った。もともとの共産主義革命はもうちょっと賢くやって、飛び回るようなことはしなかったと思ったんだ。1971年

CamScannerでスキャン

ジョン　"世界を変えるには、世界のどこが悪いのかを把握し、それを変えなければならない。情け容赦なく"などと言う人は、明らかに破壊そのものに夢中になっている。世界のどこが悪いのか、僕が教えてやるよ――それは人々さ。君たちは人々を破壊したいのかい？ 情け容赦なく？ 君たち／僕らが自分の頭を変えなけりゃ、勝利はない。共産主義、キリスト教、資本主義、仏教、その他諸々をだめにしたのは誰だ？ 病んだ頭さ。それ以外の何者でもない。君は全員資本主義のバッジを付けているから、その人たちを撃てばいいとでも思っているのか？ 1968年

リンゴ　自分たちのやっていることが行き過ぎだと思ったことは一度もないよ。音楽面でも生活面でもね。ほんとに。実際、僕らは実生活では危なっかしいことは何ひとつやらなかった。僕らは急進的ではなかったね。音楽に関しては、そうだったかもしれないけど。逆回転テープとかそういったものを取り入れたからね。だけど、僕らは暴力的な人間ではなかった。

ジョン　「レボリューション」に書いてあることは、僕の考えだ。あの歌詞は、今も色褪せていない。僕はいまだに政治に関してあんな風に思っているんだ。僕は計画を見せてもらいたい。それは、僕が実際にジェリー・ルービンとアビー・ホフマンに言ったことだ。暴力のためにやるのなら、僕を外してほしい。花で飾られたバリケードでないかぎり、僕がそこに立つことを期待しないでくれ。マルクス主義やキリスト教の名のもとで何かを転覆させるというのなら、倒したあとに何をするつもりなのか教えてほしい。僕が言いたいのは、その一部を変えることはできないのかってことだ。ウォール街を爆撃して何の意味がある？ 制度を変えたいのなら、変えるがいい。でも人を撃って何になるんだ。1980年

19歳とか20歳の学生時代に自分がどんなことを思っていたか、僕は覚えている――完璧な破壊を求めていたんだ。単なるハプニングにせよ戦利品目当てにせよ、とにかく僕はいつも破壊を望んでいた。当時ならやったかもしれないけれど、今はわからない――僕はいまだに盗みが好きだ。でもやらないよ。面倒がかかるのが嫌だからね。当時、僕はそう思っていた。だけど、もし自分と同じような人がいたら、やっていたかもしれない。

平和を望むなら、暴力では得られない。武力革命がうまくいった例を、ひとつでも挙げてみろよ。確かにそのいくつかは政権を奪った。だけど、どうなった？ 問題は現状だ。彼らは、自分たちがぶち壊したものを誰が再建すると考えているんだろう？ 再建がなったあとは誰が運営する？ どうやって運営するつもりだ？ 奴らは自分の鼻より先は見ていないんだ。1970年　もし誰かに成功例を見せられたら、僕の考えも少し変わったかもしれない。"わかった。そうすべきなんだな"と言って、そこをメチャクチャに破壊しただろう。だけど、成功例はひとつもないんだ。

政権打倒劇は、絶えることなく続いてきた。それは何をもたらした？ アイルランドもロシアもフランスもやった――その結果、彼らはどうなった？ どうにもならなかったのさ。同じことの繰り返しだ。この転覆を指揮するのは誰だ？ 誰が政権を引き継ぐ？ それは最大の破壊者たちだ。彼らが最初に乗り込んで、政権を引き継ぐんだ。僕には答えはわからない。だけど、それは民衆の責任だと思う。1972年

僕が「レボリューション」――のすべてのバージョン――で言ったのは、"change your head"（君の頭を変えろ）ということだ。世界を変えようとしている人たちは、冷静になることすらできないからね。互いの顔に噛みついて攻撃し、いつもみんなで同じ道を進んでいる。そんなことを続けるのなら、一歩も動かぬうちに滅亡してしまう。

文句を言い合って小さなことにこだわるのは馬鹿げている。彼らは、工場とか国家という視点をやめて、少なくとも世界、あるいは宇宙の視点から考えるべきだ。

問題なのは、体制が実質的に存在していないことだ。たとえ存在していたとしても老人だ。それを変えたいと思うのは若者だけで、彼らは体制を打倒しようとする。若者が体制をすべてを打ち崩したいと思うなら、彼らはそれを再建するために労働者にもならなければならない。それを忘れてないか。体制は永遠に持続し得ないことを彼らが理解していればいいんだが。体制が今まで延々と続いてきたのは、革命以外の方法で変化を実現しようとした人がいなかったからにすぎない。必要なのは、現場に足を踏み入れることだけだ。そうすれば、大学を乗っ取り、その時点で現実的に可能なことをすべて実行することができる。だけど国家の乗っ取り、国家の打倒、あるいは工場でのサボタージュは必要じゃない。彼らがやらなければいけないのは、理解を広めてそれを変えることだけだ。なぜなら、彼らがそれになるのだから。1968年

体制のことを、あるいはブルー・ミーニーズであれ誰であれ、相手のことを考える場合、彼らが病んだ人々であることを忘れてはいけない。家族に病気の子どもがいたら、蹴飛ばしてドアの外に追い出したりはしないだろう――面倒をみたり手を差し伸べたりしなきゃならないんだ。だから、相手が誰であっても、我々はどこか途中で妥協点を作らなければならない。なぜなら、彼らも人間だからだ。事実、彼らはみな人間だ。だけど、人間もどきの外見をして人間もどきの反応をするような奴もいる。だから、我々が理解ある世代であるのなら、発達の遅れた子どもを虐待せずに手を差し伸べるのは我々の責任だ。なぜなら、相手はたまたまとても大きな子どもというだけなんだから。1972年

どんな種類の平和でも、それを確実に永続させる唯一の方法は、人々の心を変えることだ。それ以外の方法はない。政府はプロパガンダによってそれができる。コカ・コーラだってプロパガンダによってそれができる――だから僕らにできないわけはないじゃないか。僕らはヒップな世代なんだ。1969年

左翼の人たちは、民衆に力を、と訴える。それはナンセンスだ――民衆はすでに力を持っているんだ。僕らがやろうとしているのは、民衆に自分の力をわからせること、ただそれだけだ。暴力的な革命では、目的は正当化されない。

僕らが民衆に伝えようとしているのは、政治家を摘発し、他人事のように"ああ、我々はそれをどうすることもできない。それは、誰か他の人の仕事だ。ジョン、答えを教えてよ"と言っている偽善的な民衆自身を摘発せよ、ということだ。民衆は結束しなければならない。学生は結束して投票しなければならない。僕らはマンデー・クラブ（保守党右派のクラブ）にならなければならないんだ。ただし、方向は違うけれど。1971年

同じぐらいの努力をそれにつぎ込めば、すぐに平和な革命が得られるだろう。抗議の行進は、何をもたらした？ ベトナム戦争に反対するグローヴナー・スクエアのデモ行進――そのニュースは暴力に満ちあふれていた。それが行進の結果だ。

CNDは僕らに尋ねた。"他にどんな方法で平和を呼びかけることができるでしょう？ 行進は逆風に向かっているようで、成果が出ていません"。そこで僕は言った。"CNDにはセクシーな美女がたくさんいる。イギリス最大の新聞「デイリー・ミラー」には、毎日ビキニの美女が来ている。だから、「ミラー」が"平和を求める美しき政治家"と書けば、オッパイとお尻が写っているかぎり、主張が読まれることになる。平和を呼びかける手段は何でもいい――僕らはみんな策略をもっている"。変革のため彼らにセックスを使わせよう。1970年

それはいずれ起こる……起こらなければならない。今かもしれないし、50年後あるいは100年後になるかもしれない。 1970年

CamScannerでスキャン

ジョン　彼女は僕を否応なしに前衛的にさせ、僕の服を奪った。
その時まで僕はトム・ジョーンズに
なりたかっただけだったのに。—

CamScannerでスキャン

ポール　ヨーコという女性がいた。オノ・ヨーコだ。ある日、彼女が僕の家にやってきた。その日はジョン・ケージの誕生日だったから、彼にプレゼントするために、いろいろな作曲家の原稿を手に入れたいのだという。彼女は、僕とジョンの原稿をほしいと言った。だから僕はこう答えた。"そうだなあ、僕はいいけど、ジョンにも聞かなくちゃならないよ"。そして彼女は……。

デレク・テイラー　ウィグモア・ストリートに行った——すると、ヨーコがジョンと一緒にオフィスにいたんだ。ふたりはひと晩中起きていたようだ。僕は彼女のことは知らないし、会ったこともない。でも、彼女は素敵に見えた。そして、ジョンが紹介してくれた。"彼女はヨーコ"。そして"こっちはデレク。友だちだよ"って。

僕は歩み寄り、"アップルにようこそ"とか"こんにちは"などと言いながら、どういうわけか彼女の頭のてっぺんにキスしたんだ。ジョンはこう言った。"これから彼女と一緒にいようと思うんだ…."——それがジョンの運命だったんだろう。それから彼はうろうろし始めた——彼は何か考える時いつもうろうろしてたんだ。彼は腰に手を置いて、あてもなく歩き回ったあと、戻ってきては"どう思う?"と訊いた。"きっとうまくいくよ"と僕は答えた。

ジョン　僕は、ツアーをやめて以来、ビートルズから離れることをずっと考えていたのに、怖くてできなかった。漠然と行き場を探していたんだけど、ひとりで船に乗り込む勇気がなくて、ぐずぐずしていた。ヨーコに出会って彼女を好きになった時、こう思った。"ああ！ 今まで経験したどんなものとも違う。ヒット・レコード以上だ。黄金よりすごい。何よりもすばらしい….."。1980年

ヨーコに出会えたのだから、僕がくぐり抜けてきたことは、すべて無駄ではなかった。だから、僕の人生すべてが義務だったとしても——つまり、苦しかった子ども時代、苦しかった10代の頃、ビートルズでのとてもあわただしい毎日、そして最後にヨーコに出会って陸を見つけるということが避けて通れない道だったとしても——やる価値はあったということを。

こんな愛は初めてだった。夢中になってしまったので、シンとの結婚はやめざるを得なかった。無謀な決定だと思わないでほしい。そのことと、それに含まれるすべてのことについて、僕はかなり深いものを感じたんだ。わがままな決定だという人もいるかもしれない。でも、僕はそうは思わない。あのままずるずる行ったとして、子どもが18歳になった時、僕に感謝すると思うかい？ 夫婦関係が緊張した家庭環境で育てられるよりはよかった、ということになるんじゃないのか？

シンとの結婚は不幸ではなかった。だけど、それは何も起こらず、常に維持し続ける普通の結婚生活だ。この状態は自分を突然輝かせてくれる誰かが現れるまでは維持されただろう。ヨーコと会って僕は初めて愛というものを心から知った。僕らの結びつきは精神的なものだった。だけど、たまたま肉体的な結びつきでもあった。結婚にはどちらも不可欠なんだ。1968年

ヨーコといると自由になれる。僕はヨーコと一緒にいると完全な自分になれる。ヨーコがいなければ、僕は半分しかない。男は女がいなければ半分なんだ。1980年　ヨーコと僕が出会うまでは、僕らは半分ずつの人間だった。昔の神話にこういうのがある。人間は半分の存在でしかなくて、もう半分は空か天国か宇宙の反対側にあるか、左右逆の姿になっている、という話だ。でも、僕らはふたつの半分が出会い、一緒になって完全になったんだ。1969年

ヨーコは、女性について教えてくれた。僕はエルヴィスや他の多くのスターのように、仕えられることに慣れていた。ミミおばさんであれ、他の誰であれ、僕はいつも女性に尽くされるだけだった——女性、妻、ガールフレンドにいつも仕えられていたんだ。酔って一夜を共にして、次の朝は大学のガールフレンドが朝食を作ってくれるのを期待する。一緒に行ったパーティでは彼女もひどく酔っていたのを知りながら、女性はいつの間にかカウンターの反対側にいるものだと思っている。これは、まさに僕が経験してきたことだ。

ヨーコはそれを受け入れなかった。彼女はビートルズを屁とも思っていなかった。"ビートルズが何だっていうの。私はオノ・ヨーコよ！ 私を私として扱って"。彼女は出会った日から、対等の時間、対等の空間、対等の権利を要求した。僕は彼女が何を言っているのかわからなかった。僕はこう言った。"君は何が欲しいんだ？ 契約？ 欲しいものは何でも手に入れていい——だけど、僕からは何も期待するな。それに、僕はどうにも変わらないと思ってくれ"。すると彼女は言った。"あらそう。じゃあ、それに対する私の考えを言うわ。私はここにいられない。居場所がないからよ。すべてがあなたを中心に回っている。私はそんな中じゃ呼吸ができない"。僕は彼女の教えに感謝している。そして僕はこれまでいろいろな女性にしてきてもらったことに感謝することができた。以前はそんなこと考えたことさえなかった。

僕は、自分のために新聞が用意されているという状況に慣れていた。他の人は、僕が読んだあとで初めて読むことができると思っていた。誰かが先に目を通したいかもしれないという発想は、僕にはなかった。プレスリーやその同類が死んだのは、そのせいだと思うんだ。王は、いつも敵ではなく廷臣に殺される。王は、食べ過ぎてドラッグをやり過ぎて、甘やかされすぎるんだ。王を王座に縛りつけておくためには、何だって与えられるんだ。その立場にいるほとんどの人間は決して目を覚まさない。彼らは精神的

ジョン
ヒトムカシマエ、ジョウとヨノという
ふたつの風船があった。
100万年に1回は起こりうる
恋に落ちるのは当然だった。
ぴったしだったぜ。
稀少な時間差。
ふたりとも前の経験があったようで、
それによってあちらこちら
呼び出された(知っているでしょう)。
しかし、悪友を含む、殺到する
しょうがないものに対して戦い続けた。
恋に落ちていたから
それでさらにぴったしになった。
が、過剰評価。
バス満杯のうんこを投げている
ヤツラの毒性怪物の一部が
くっついたため、
時々クリーニング屋に
通わなければならなかった。
幸いこれによって
死ぬことはなかったので、
オリンピック・ゲームの参加は
拒否されなかった。
ふたりはその後末永く
希望に満ちて過ごした。
誰が彼らを責められようか。
1978年

に死ぬか、肉体的に死ぬか、あるいはその両方だ。ヨーコが僕にしたことは、その状況から僕を解放することだった。

そういうわけで、ビートルズも終わった。それは、ヨーコがビートルズを分裂させたからじゃなくて、エルヴィス・ビートルでいることがどんなことか、現状の維持だけに興味をもつ太鼓持ちや奴隷に囲まれていることがどんなことか、ヨーコが僕に示してくれたからだ。彼女は僕に"王様は裸だ"と言った。それまで堂々とそんなことを言える人はいなかった。

僕らの関係は、先生と生徒の関係だ。みんなはそれが理解できないんだ。彼女が先生で、僕が生徒。僕は有名人で、何でも知っていると思われている——だけど、彼女は僕が知っているはずのことをすべて教えてくれる。

男は、初めての女性と出会った時から、バーにたむろする男友だちとのつきあいをやめて、サッカーにもビリヤードにも行かなくなってしまうものだ。僕にとっては、ヨーコとの出会いがその時期だった。運命の女性を見つけたら、ビートルズは僕にとって旧友であること以外、全然大切じゃなくなってしまった。"Those wedding bells are breaking up that old gang of mine"(あのウェディング・ベルが古い遊び仲間をばらばらにする)という歌を知っているよね。僕は、年齢に関係なく、ヨーコと出会うまではこの歌に共感したことがなかった。ヨーコと会ったのは26歳の時だった。その時がそうだったんだ。古い遊び仲間は、彼女と会った瞬間に過去のものになった。当時は意識していなかったけど、実際にはそういうことになったんだ。彼女と会って間もなく、男仲間たちとの関係は終わった。だけど、その男仲間がたまたますごく有名で、バーにいる地方の青年じゃなかっただけの話だ。

まさにヨーコのおかげで、僕はほんとの自分に気づくことができた。彼女はビートルズのメンバーに恋したのでもなく、僕の名声に恋したのでもなかった。僕という人間に恋したんだ。そして、それによって、僕の最高の部分を引き出してくれた。彼女は究極のトリップだった。1980年

自由は心の中にある。普通は、カップルが一緒になってもすぐに男はどこかに働きに行ってしまい、女は男と別のところにいるのが当たり前になっているみたいだ。だけど、それはふたりのつながりにとってあまりいいことじゃないと思う。ただ、この社会では、たまたまみんなそういう生活をすることになっている。もしかしたら、昔は一緒に働くか、お互いに目の届く範囲にいたのかもしれない。女がジャガイモを掘って男が干し草を切ったりするとか、ふたりで狩りに行くとか、そんな感じだったんじゃないだろうか。だけど、なぜふたりが離れていなければならないのか、僕にはその理由がわからない。特に、僕らの場合は仕事も一緒、興味のあることも一緒なのだから。僕が登山家で彼女は考古学者というのとは違うんだ。僕らは同じことに興味を持っている。それは幸せなことだよ。

ふたりの人間の間に起こる出来事ほど重要なものはない。なぜなら子どもはふたりの人間から生まれるし、恋もふたりの人間の間に芽生えるものだから。普通は、同時にふたりの相手を好きになったりはしないだろう。僕は一度もそんな経験がないよ。不特定の相手と寝るのは、また別の話さ——そんなのは、ほんとのところ、ガキのやることだ。僕はもう卒業したような感じさ。だけど、いったい何だったんだろう。多くの場合、生存のための最終生成物としての満足とは違う。食べることと似ているよ。それだけで生きることはできない。他のものが必要なんだ。1970年

ヨーコと出会った当初は、彼女に恋したことに気づかなかった。芸術上の協力者と考えていたんだ。いわば——プロデューサーとアーティストの関係だね。そして、知り合ってから2年が経った。僕の前妻がイタリアに行って家を留守にした。そこへヨーコがやって来て、ふたりでLSDをやった。僕はいつも彼女に遠慮して、彼女も遠慮していたから、愛し合うかわりに2階に上がってテープを作った。僕は変なループなんかを考えたり、作ったりする部屋を持っていたんだ。ほら、ビートルズで発表したようなやつさ。そして、僕らはひと晩中テープを作った。彼女があの不思議な声を出し、僕がテープ・レコーダーのあらゆるボタンを押してサウンド・エフェクトを作った。そして、夜が明ける頃、僕らは愛し合った。それが「トゥ・バージンズ」なんだ。それが初めてだった。

「トゥ・バージンズ」は、偶然の産物だった。僕は、自分と同じぐらい熱狂的な人——幻覚のようなサウンドを持った妻——がいて、ダンス・ミュージックでもポップ・ミュージックでもない音楽を対等に楽しめることを知った。その音楽は……いわゆる前衛音楽だ。

それ以外に言いようがない。だけど、前衛というレッテルは、前衛を逸脱していると思う。前衛芸術の展示会というのがあるよね。でも、前衛芸術が展示会になるという事実そのものが、前衛の趣旨から外れている。なぜなら展示会になった時点で、すでに形式化され儀式化されているからだ。僕には、テーマを音のバリエーションで表現すること以外の前衛は思いつかないよ。1980年

CamScannerでスキャン

デレク・テイラー　あれは、また別の日の朝のアップルでの出来事だった（アップルでは、平穏な時は一瞬たりともなかった。この時も例によって——平穏どころではなかった）。僕の同僚のジェレミー・バンクスが"君の引き出しに何か入っているよ——たまげるようなものが"と言う。開けてみると、ジョンとヨーコの裸の写真が入っていた。

ニール・アスピノール　ジェレミーは、ジョンからフィルムを1本渡され"お願い、これを現像してくれる？"と頼まれていたのだ。彼は、戻って来て、そのヌード写真を見るなり"これはたまげた"と言った。ジェレミーは何でもかんでも"たまげる"で片づけてしまうんだが——その時に限っては——ほんとに彼の言うとおりだった。彼は、信じられないという面持ちだった。

ジョン　写真を撮るために服を脱いだ時、僕らふたりとも、少し照れがあった。だから、時限シャッターを使って自分で撮ったんだ。写真は、僕らがイカれたヒッピーのカップルじゃないことと、頭のキレたフリークでもないこと、僕らの心が健全であることを証明するために撮影した。もし社会が腹を立てたり、忍び笑いをしたりせずにこういう種類のものを受け入れるなら、僕らの目的は達成されることになる。1968年

僕らは、きれいな写真を撮ろうと意図したわけではないんだ。セクシーに見せたり美しく見せたりするつもりじゃなかったから、ライトは使わなかった。あの時撮影した中で、もう少し見映えのいいショットがふたつぐらいあったんだ。あまり美しくないあの部分が隠れていて、きれいに見えた。僕らは、一番ストレートで一番ありのままの写真を使って、ただ僕らが人間であることを示したんだ。1974年

ポール　魅力的な写真ではなかったよ。伸縮性の絆創膏や透明のセロテープで成形されたヌード・モデルじゃないんだもの。あれは真実だったんだ。彼らは世間にすべてをさらけ出した。それが「トゥ・バージンズ」の全理念だったんだ。

ショッキングな写真だったのはわかる。でも、僕ら大勢の人間がほんとに耐えられないほどのショックを受けたのか、その辺は定かではないよ——僕らは、彼に問題児の気があるのを知っていたんだ。もちろん、新聞関係者があんな写真を見たら、その瞬間に電話をかけようと思い立つだろうね。僕は、ジョンがそういう事態をたくさん招いたのを知っていた。最後に彼は、自分たちの望む以上の事態を招き、攻撃を受け始めたんだ。彼らを押さえ込むような気運が生まれたわけだけど、それは、たぶんあのジャケットが発端だろうね。気色悪いもの。そう思わない？　僕らの母親と父親は、僕らを身ごもるために、誰でも裸にならなければならなかった。それなのに僕らは、ヌードに関してやけに分別臭い態度を保っている。今現在になってもね。だけど、ジョンとヨーコは、アーティストとしての目でヌードを見ていたんだ。

ジョン　僕らは出会い、愛し合っていたから、ふたりともバージンのような気持ちになった。そして何か作ろうとした。僕らはすべてを見せようと考えた。僕みたいな人間は、いつも詮索するような目で見られるからね。"彼らは何をしているの？　彼らもトイレに行くの？　彼らは食べるの？"。だから僕らはただ"さあ、どうぞ"と言ってみたんだ。1975年

ジョージ　あのジャケットの感想は、当時も今も変わらない。それほど美しくない、たるんだふたつの身体が裸になっている。ただそれだけ。特に害にもならない——人にはそれぞれのやり方があるんだよ。

リンゴ　あのジャケットにはたまげた——彼らがやって来て、あれを僕に見せた瞬間のときは、今でも忘れられないよ。音楽はほとんど覚えていない。今聴いてみようか。だど、ジャケットを見せられた時、僕は「タイムズ」紙を指差して言ったんだよ。"おや、イムズ」も写したのか……"。まるで、彼のモノが見えていないかのようにね。

僕はこう言った。"ああ、頼むよ、ジョン。君がこんなことをやって、君にはかっこいいかもしれないけど、僕らみんなが対応しなきゃいけないんだ。わかってるだろ。まいいか。僕らの中の誰が何をやろうと、僕らみんなでそれに対応すればいい"。彼う答えた。"リンゴ。君は電話にだけ応対していればいい"。僕は"そうか、いいよ"った。そのとおりだったからだ。報道陣が電話をかけてきた。その時僕は関わりないと思っていた——でも、やっぱり、僕のすべきことはただひとつ、電話への応対たからね。何も問題はなかったよ。2~3人から電話がかかってきて、僕はこう応じ見てください。ジャケットに「タイムズ」が写ってるでしょ"。

ジョージとポールは少しショックを受けていたんだ。それはおかしなことだった。て僕の方がショックを受けたよ。彼らが分別臭かったという事実にね。今では想ないだろうけど——当時はすごい偏見があったんだ。そんなに昔じゃないのに、対して偏見があった。1974年　僕らはヌードの創始者じゃないよ。ただ発表した、僕らよりも前に、誰か他の人がヌードになっていた。1972年

僕は少しだけショックだったけど、僕が書いたジャケットのライナー・ノーツを見大な偏見は持っていなかったようだ。

デレク・テイラー　僕は"よし、わかった。けっこう。急いで何とか手を打つことにしよう"と言った。とてもおもしろそうで、興奮していた。これは記念碑的な問題になる、と僕は思った。僕はこれに対処することができた。アップルでの人生はかなり"作用反作用"的な状況だったので、この問題もスリリングな出来事のひとつでしかなかったんだ。

もちろん、日曜紙が僕やこの写真を放置するわけがない。"なんていやらしいんでしょう！　このいやらしい人たちにはびっくり！"という見出しを付け、写真の陰部を大きな丸で隠して矢印で指し示し、こんな風に書いた。"ここに陰部が見えていたのだが、当紙は慎みを知っている。これを読者のお目にかけようなどとは夢にも思わない——それにしても、なんという人たちだろう！"。

手を伸ばせば、必ず何か見つかるものだ。そう思わないか？　創世記に"男とその妻は裸で、恥じてはいなかった"というような部分があった。僕はそのとおりだと思った。ジョンとヨーコは夫婦ではなかった——でも、人生とはこんなもので……"聖書にこう書かれているんですよ——あなた方プレスは、これをどうしようっていうんです"。

ジョン　"どうにかしているよ！"ってみんなすごく怒ったんだ——ふたりの人間が裸になったという事実に。1980年　こんな騒ぎになるとは思わなかった。世間は僕らのことを醜いカップルと思っているんだろう。1969年

ニール・アスピノール　当時の人々はあまりヨーコが好きじゃなかったんだ——なぜかはわからないけど、僕にはそう見えた。新聞のせいかもしれないが、前衛的な要素が原因だったとも思う。世間の人には理解できなかったんだ。僕の経験から言えば、人は理解できないものは毛嫌いする傾向があるようだ。

ポール　「トゥ・バージンズ」のレコード自体はさほどおもしろいと思わなかった。あの音楽は僕にとってショッキングじゃなかった。僕自身も似たようなものをたくさん作っていたからね。ジョンは、僕がブレンネルのテープ・レコーダー2台を手に入れた時に、ヒントを得たんじゃないかな。僕はよく、夜遅い時間にふたつのテープ・レコーダーの間で音を行き来させて多重録音し、友だちに聴かせるクレイジーなテープを作っていた。ただの環境音楽ってことで。

僕は、テープ・ループやちょっとしたクレイジーなクラシック風のものが得意だった。ナット・キング・コールの曲からとって「アンフォゲッタブル」という名を名乗っていたグループに、短いラジオ番組風のレコードを作ってあげたことがあるんだ。僕は出版社に行き、大きな78回転のレコードを作って彼らに送った。"クレイジーな気分の人向けの音楽を少し送ります"。

どうやって作ったのかジョンに聞かれたから、機材の接続の仕方を教えたんだ。ジョンはウェイブリッジの自宅にテープ・レコーダーを2台入れて、まったく同じセッティングにした。僕はその使い方を全部教えてやったよ。重ねたい音を片方の機材から出力したら、もう一方に録音し、それを無限に繰り返して多重録音することができる——ただ行ったり来たりさせるだけ。比較的少ないトラック数で、クレイジーなレコードを作ることができるんだ（ただし、いい音質じゃなくてもいい場合に限られる。行き来させるたびに音質が劣化してしまうからね）。

ジョージ　僕は、実際に「トゥ・バージンズ」を全部聴いたわけじゃない。部分的にしか聴いてないんだ。あの種類のものには大して興味がなかったからね。あれは彼と彼女の個人的なトリップだったんだ。彼らはお互いに夢中になって、お互いに傾倒し合った結果、相手の言動がすべて重要だと考えるようになったみたいだね。だから彼らはレコードと映像に記録したんだ（僕はその頃ビートルズに嫌気が差し始めていたので、ビートルズを取り巻くすべてのことに興味がなく、興味はインド音楽に向かっていた）。

あれはアップルのアルバムだったけど、アップルはEMI経由で配給されていて、EMIに取り扱いを拒否されてしまった。だから、アメリカではテトラグラマトンから発売されたんだ。

ジョン　「トゥ・バージンズ」は大きな闘いだった。9ヵ月間差し止められたんだ。ジョゼフ・ロックウッドはとてもいい人だ。だけど、彼はEMIの最上階でジョンとヨーコと一緒に大きなテーブルに着き、僕らから「トゥ・バージンズ」の意義と僕らがそれをやった理由を説明させ、できるかぎりの助力をすると言ってくれた。彼は僕にサインさせた——彼は一番最初のレコードをサイン入りで持っているんだ。だけど、僕らが発表しようとしたら、彼はみんなに"印刷してはいけない。発表してはいけない"という個人的な手紙を送ったんだ。だから、僕らどこに行ってもジャケットを印刷できなかった。1980年

実際、もし差し止められていなかったら、「トゥ・バージンズ」はアップルが出す最初のレコードになるはずだったのに。彼らは、時間稼ぎをしながらあれやこれやと難癖をつけた。僕はいろんな意味で世間知らずだから、あっち側の人に何か言われるかもしれないと思ったけれど、仲間から罵倒されることになるなんて、思いも寄らなかった。僕は声明を出すことにした。歌みたいにうまくできた。いや、もっとよくできたかもしれない。あれ以上の言い方はできないよ——絵は言葉よりも雄弁だ。美しい声明だった。1974年

This statement, consisting of 5 pages each signed by me, is true to the best of my knowledge and belief and I make it knowing that if it is tendered in evidence I shall be liable to prosecution if I have wilfully stated in it anything which I know to be false or do not believe to be true.

Dated the 22nd day of October 1968.

D.S. Pilcher ... Lennon that unless he opened the front door it would be forced. Lennon still refused.

D.S. Pilcher then left me and I heard banging coming from the front door. Lennon moved away from the window shouting, "All right, I'll open it." I opened the window and entered the bedroom. Lennon said, "Oh well, you're in now."

he was a bit far away from this conversation – in fact he only leaned down from the roof to hand Pilcher the papers

ジョンが麻薬で逮捕されたことで、
僕らは思い知らされた。
警察は誰かがパーティを始めるのを
手ぐすねひいて待っているってことを——
当時は、やろうと思えば
どんなパーティだって
摘発できたんじゃないかな・・・・・

I said to Lennon, "We are police officers and we have a warrant to search the premises for dangerous drugs. Open the window and let me in." Lennon leaned on the window preventing me from opening it and said, "I don't care who you are, you're not bloody well coming in here."

they/we – were all so exited they would never talk this gobble-de-gook.

(Signed)

N C Pilcher. D/S coc

ジョン 僕は麻薬所持容疑でつかまった。僕の身体から検出されたんじゃなく、家の中にあったんだ。所持、つまり売人かもしれないと疑われたわけだ。ジョン・レノンが生活のために麻薬を密売するんだとさ!

60年代後半には、"首狩り"警官がいた(ロンドンの麻薬取締部門の、あまり地位が高くなかった警官だ——いずれにせよ、以前にはなかったことだ。この部署に、計2匹の犬がいた)。彼は、あちこち嗅ぎ回り、接触したすべてのポップ・スターを逮捕して、有名になった。ポップ・スターの中には、自宅に麻薬を持っていた者もいたけど、持っていない者もいた。1975年

ジョージ 10月、ジョンとヨーコが大麻で逮捕された。その時ふたりはリンゴから借りたアパートにいた。ジミ・ヘンドリックスも借りていた。歴史のあるアパートなんだ。彼らは、ピルチャー巡査部長という警官に逮捕された。デレクに言わせると、オリバー・クロムウェル気取りの人物だったらしい。自分は社会のためになることをやっている、と思っていたのさ。

麻薬取締部隊は人物リストを持っていたに違いない。今考えるとよくわかる。彼らは、リスト順に実行していったんだ。まず最初に、やりやすいドノバンを逮捕した。ドノバン逮捕のあと、警察はリストを追ってローリング・ストーンズのメンバーを逮捕した。そして、次にビートルズをつかまえようと考えた。

ジョン 僕らはベッドに寝ていた。麻薬の気もないし、やましいところはないと感じていた。3週間前に、警察が僕らをつかまえにくるという話を聞いていたんだ——家の中に麻薬を置いてあったのは不用意だった。突然、ひとりの女が玄関のベルを鳴らし、"伝言があります"と言ってきた。僕らは言った。"誰ですか、郵便配達じゃなさそうだけど"。女は"違います。とても個人的なことです"と答えると、いきなりドアを押し始めた。(ヨーコは)——報道関係者かファンかと思っていた。僕らは部屋の奥に走り込んで隠れた。ふたりとも服を着ていなかったしね。ベストを羽織っただけで、下半身は露出していた。

"何だ、何だ"と言いながら、僕らはドアを閉めた。マフィアか何かかと思ったんだ。すると、寝室の窓をガンガンたたく大きな音がした。そこには大柄の警視がいて、"入れろ、入れろ!"と怒鳴っている。僕は"そんな入り方は不当じゃないのか?"と言った。すごく恐ろしかったよ。"玄関の方に回ってくれよ、そして、服を着る時間をくれ"と僕が言うと、彼はこう答えた。"いや、窓を開けてくれ。落ちそうなんだ"。

正面にも背後にも、何人か(の警官)がいた。僕が服を着る間、ヨーコが窓を支えた——僕らが何も隠してないことを見せられるように、浴室から体を半分乗り出しながら。その時、彼らがドアに突撃し始めた。僕は、警察を相手におもむろにこう切り出した。"窓から入るなんて、悪い評判が立つぜ"。すると彼は"さっさと窓を開けろ。ぐずぐずしてるとためにならんぞ"と言う。"令状を見せてくれませんかね"と僕が言うと、別の男が屋根に上り、この書類を見せた。僕は読むふりをした——どうしたらいいか考える時間をとろうとしたんだ。そして僕は言った。"弁護士を呼ぼう、弁護士を"。だけど、(ヨーコが)弁護士じゃなく、僕らの事務所に電話した。僕は"違う、事務所じゃない——弁護士だ"と言った。

その時ドアが引っ張られたので、僕は駆け寄ってドアを開け、"どうぞ、どうぞ。どっちみち僕は潔白ですから"と言った。潔白だと思っていたんだ。彼は"どうだ、公務執行妨害で逮捕する!"と言う。"そうですか"と、僕。麻薬は持っていないと確信していた。

警官が全員入ってきた。大勢だった。女性もひとりいた。"このあとどうするんです? 事務所に電話してもいいですかね? 2時間後にインタビューの予定があるんですよ。行けないって電話してもかまいませんかね?"、"いや、君が電話するのは許可しない……私に君の電話を貸してくれないかね"。そして、僕らの弁護士が来た。

STATEMENT OF WITNESS

Statement of MICHAEL ANNETT, B.A.

Age of Witness (if over 21 enter "over 21") Over 21

Occupation of Witness Senior Scientific Officer

Address The Metropolitan Police Forensic Sc... 2, Richbell Place, Holborn, W.C. 1.

Lab. ref: C/1757/68

On the 22nd October, 1968, I took p... the following sealed items which I have ...

	Description	Result of Analysis
GYN 1.	One binocular case containing binoculars and herbal mixture.	12.43 grammes (191.8 grains) of Cannabis resin.
DS 1.	One tin containing herbal mixture.	Traces of Cannabis resin.
DS 2.	One envelope containing herbal mixture.	1.77 grammes (27.3 grains) of Cannabis resin.
DS 3.	One cigarette case.	Traces of Cannabis resin.
DS 4.	One box containing a phial of brown tablets.	Three 'OMNOPON' tablets. Containing a total of 30milli-grammes (½ grain) Morphine.

CamScannerでスキャン

彼ら(警察)は犬を何匹か連れてきてるつもりだった。結局犬が見当たらなくなったんだ——電話をかけ続けた。"もしもし、チャーリー、犬はどこにいる？ ここに来てから30分になるぞ"。そして犬がやって来た。

僕は持ち物を全部自宅からアパートに移していて、それを一度も見ていなかった。何年もそのままそこに置いてあったんだ。僕は服とカメラを頼んでいた——だけど僕の運転手は(不必要な)双眼鏡を持ってきてた。そして双眼鏡の中には、去年の残りの麻薬が入っていた。どこか他の場所にあった封筒の中にも入っていたってわけ。それでおしまいさ。1968年

ニール・アスピノール　その話はすぐに聞いた。ジョンから電話があって"ニール、最悪の事態を想像してくれ——奴らが来てるんだ"と言われたんだ。僕は"わかった。誰かをそっちにやろう"と言った。僕はピーター・ブラウンに頼んだ。ピーターはブライアン・エプスタインの個人秘書だったけど、当時はアップルで働いていたんだ。ピーターは彼らの個人的な用件の処理を一手に引き受けていた。ジョンの逮捕はきわめて個人的な用件だと思ったんだ。ピーターは法的なアドバイスをまとめ、弁護士を現地に呼び、この件は片づいた。

ジョン　話せば長くなるけど、簡単に言うと、僕はあらゆるものを別の部屋から移したばかりだった——そこら中ものだらけだった。だから"うーん、これは余っていた麻薬だったのかもしれない。すっかり忘れていた"と思った。僕は自状した。彼が"自状すれば、あなたを公務執行妨害の罪で連れていくことはしない"と言ったんだ。僕は"ああ、それなら100ドルかそんなものだろう。僕には大したことじゃない"と思った。彼はかなり考えだったことが判明したよ。彼は"あなたの奥さんにも来てもらいましょう"と言うんだ。1973年

デレク・テイラー　世間は僕らを困らせようとしているんじゃないかと思った。当時、逮捕されるというのはとても深刻なことで、誰もがすごく恐れていた。妄想と言ってもいいぐらいだ。それは、世間のみんなが鶴首待ち望んでいたイベントなんだ。そして、ビートルズのメンバーにとって、逮捕されるというのはとてもとても深刻なことだった。なぜなら、彼らは多少なりとも特権的な立場にいることに慣れていたから。彼らはパスポートなしで入国審査を通り、ロバの耳ほど長い年月の間、ライリーの如く気楽で贅沢な生活を送っていた(常套句をふたつも使ってしまいました)。そして今や、事態は悪い方向に回り始めた。ジョンの結婚が破綻したかと思えば、今度はドラッグ、それにヌードも問題あった。1968年を迎えるまでは、いろいろな問題にうまく対処できていたように感じられたのに。

ニールから、ジョンが電話で"最悪の事態を想像してくれ。奴らが来てるんだ"と言ったという話を聞き、そのあとジョン自身から、事の顛末と、新聞に知られたということを聞いた。

早くもフリート・ストリート(ロンドン中央部の新聞社街)から電話がかかり始めた——『イブニング・スタンダード』、『メール』、『ミラー』、あらゆる新聞社がかけてきた。ドン・ショートからの電話ではこんなことを言われた。"ほう、やっちゃったそうだね。実は、面倒な話があとふたつあるんだよ。ジョンの父親が結婚すると思うんだ。それと、ヨーコが妊娠したと聞いた"。事件は重なるものだ。まさしくすべてが同時に起きたのだ。王室の"アヌス・ホリビリス"(恐ろしい年)のように。

僕らは、マリファナは生活の手段として有効なものと考えていた。僕が心配したのは、不合理なことが起きた場合の影響だけだった。イーリング喜劇などを見て育った僕は、不合理にはすごく熱くなったのだ。イーリング喜劇では、勝つのはいつも平凡な男で、何かに情熱を抱き、いいことだと信じていれば、最後にはスーツ姿の気取り屋たちを納得させることができたのだ。

悲しいかな、現実はそううまくはいかず、僕らは世間の厳しい批判を浴び続けた。僕は、逮捕についてはそれほど心配していなかった。ジョンは犠牲者だと思っていた。逮捕歴のあるその他の人たち(たとえばドノバン、ミック、ブライアン・ジョーンズ)が、同情して電話をかけてきてくれた。まるで一族の集会のようだった。その日の午後、ポールがアップルにやって来た。ジョンも来ていた。リンゴはサルジニア島で電話を受けた。ポールはアイバン・ボーン(ジョンとポールを引き合わせた男)を連れてきた。だから、みんながジョンと一緒にがんばったんだ。

僕の受けとめ方はそんなところだ。僕は、1968年の終わりには、調子は上向いていると思っていた。もっとも、僕はいつでも上り調子のような気がしていたんだ——今でもそうなんだけど。

ポール　当時、逮捕されるというのは、僕ら誰の身にも起こりうることだった——僕らを含め、ロンドンに住む人の半数はそういう状況だった。いや、それどころか世界の半数だ。あの時代の人たちは、外で酒を飲んで酔っぱらうよりも、そういうことをやっていた——つまり、家の中で夜更けまでワインを飲んだり大麻をやったりしていた。実際、すごく悪いことをしているという気はなかった。僕は今でも、アルコールの方が体に悪く、死につながる確率が高いと信じている——大麻が原因で死んだ人なんて聞いたことがないもの(もっとも、みんなそんなこと聞きたくないだろうけど)。だからジョンとヨーコの身に起きたことはショッキングで、僕らは彼らが気の毒だと思った。まったく困ったもんだ。

あの頃は、逮捕される人がたくさんいた。実は、そうなったのも、当時警官だったひとりの男のせいだったんだ——確か"ピルチャー巡査部長"とかいう人だったと思う。彼は、ドラッグに溺れたヒッピーを目の敵にしていて、"今に見ておれ"と思っていた。だから彼は、事あるごとに誰かを逮捕した。確かに法律違反には違いない——彼には逮捕する権利があった。だから彼を責めることはできない。でもあれは"蝶々をつぶすのにわざわざ車を持ち出す"(1967年頃にリース・モッグがストーンズについて語る時に使った表現)やり方だった。僕らのほとんどはそんなに有害じゃないと知っていた。何も僕らは数百万人の人を売春させようと画策を上げていたわけじゃない。だけど、一般に言われていた馬鹿げた説は、全部信じなかったんだ。

僕らが60年代に犯したすべての間違いを、今になって非難する人がまだあそこにいる。僕は、それは正当じゃないと思う。彼らは、僕ら全員が常軌を逸して勝ち誇っていたと思っている。だけど、それはまったく違うよ。この問題の発端をたどっていくと、この前の戦争で兵隊が家に帰ってチャーチルを見限ったことにまでさかのぼれると思うんだ。お上の権威がなくなり始めたのは、その時からなんだと思う。僕らには関係ないと思うんだ。

ジョージ　ジョンとヨーコがつかまり、のちに僕も逮捕された——彼らは、ポールが結婚する日をわざわざ選んで僕を逮捕したんだ。ピルチャー巡査部長は、のちにオーストラリアに移住したけど、その後オーストラリアからイギリスに強制送還された。彼は偽証罪で告発されて刑務所に入った。それなのに、それから数年の間、僕らは前歴のせいでビザをとるのに苦労したんだよ。

ジョン　それが起きたのは、僕が出ていったあとだった。彼はオーストラリアで、逃げようとしたところをつかまえられた(イギリス人はいつもオーストラリアに逃げる。オーストラリアに行けば姿を消せると思っているんだ)。1975年

ジョージ　あれは間違いなく、体制側が僕らに対して仕組んだ陰謀だった。僕らが思ったことをバンバン発言していたから、体制側のクロムウェルもどきの連中が、仕返しをしようとしたんだ。すべてがどんどん上昇し続けて楽観的になっていた時期だったのに、おかげで突然下降が始まった。世の中のものは何でも周期的に巡っていて、いったん落ち始めて地面に叩きつけられると、みんなから攻撃を受けるようになる。報道というものに関して知っておかなければならないのは、彼らがやっていることはすべて誰かの売り込みだということだ(そしてよく、その手段として他の人間がこきおろされる)。報道は、金儲けの道具のために誰かを有名にし、あとでその人たちをこきおろす。王室はその最たるものだ。だけど、ビートルズも同じことをやられたんだ。彼らが僕らの息の根を止められないのは、僕らの人気が世界中に広がっていて幅広い世代の支持を受けているからにすぎないんだ。

ブライアン・エプスタインが亡くなったので、彼らは"そう、確かに、エプスタインの死後ビートルズがやったのは、ろくでもないことばかりだ"と言うようになった。たとえば『マジカル・ミステリー・ツアー』のことや何かをね。その次はこうだ。"今や、彼らは頭がおかしくなってしまった——何とかいう神秘主義者と一緒にインドに行ったんだ"。とかく新聞が興味を持ち、世間の人が好むのは、典型的な馬鹿らしいゴシップだ。そして僕らの逮捕が始まった！ ジョンとヨーコは、"倒れているうちに攻撃せよ"という陰湿な風潮の大きな標的になった。

ジョン　僕は怖くなった。とにかく誇大妄想に襲われている——僕らふたりとも、特に玄関先に現れる人に対して怯えきっているんだ。何年かの間に、妄想は次第に大きくなってきた——何かが起こるかもしれないといつも考えてしまうんだ。今は、恐怖は少し消えている。事の次第がわかってきたから、少し違うんだ。まあ、それほど悪くもないよ、150ポンドの罰金は。

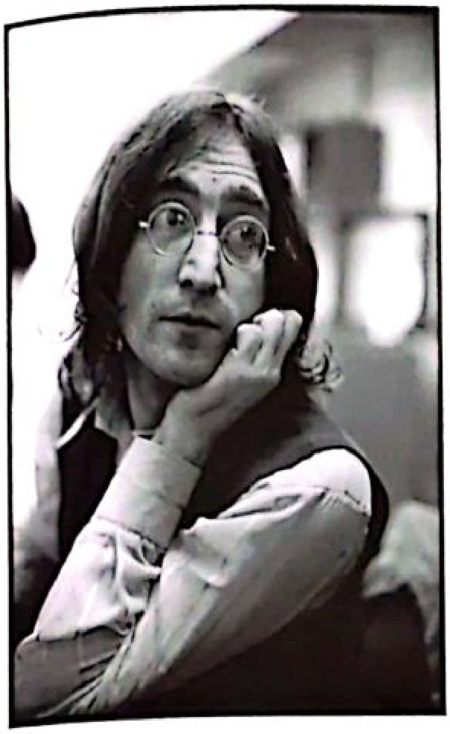
僕は、中毒性のあるドラッグとないドラッグは区別されるべきだと思う。酒を飲むバーがあるなら、マリファナ・バーもあっていいかもしれないね。でも、わからないな——僕ならまず蒔麻を禁止したいね。

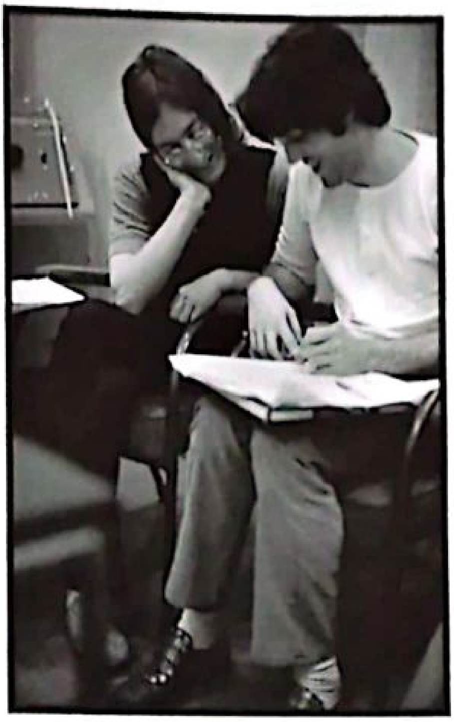
イギリスの体制側がどんなものか僕は知っていた。長いことそのまわりにいたからね。他のどことも変わらないけど、弱みを見せないんだよ。彼らは喜びも悲しみも表に出さないんだ。1968年

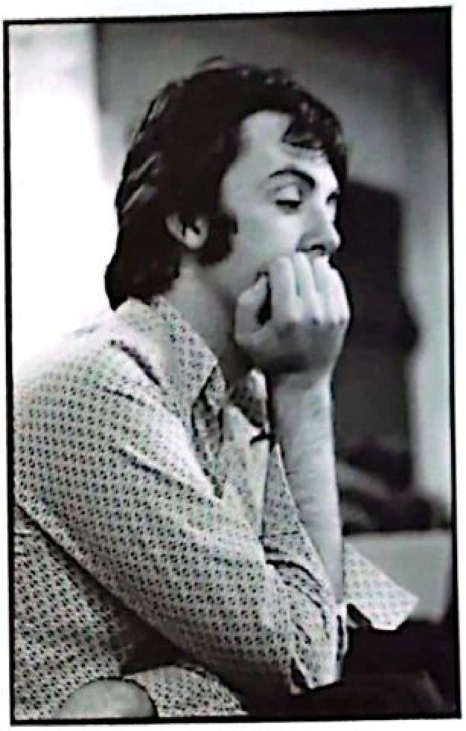
ホワイト・ハウスの奴らが、多くの人々に苦痛を経験させたにもかかわらず、しかもイギリスで僕らが逮捕される夜に、鼾をかいているのかと思うと、妙な気分だ。警官がごほうびを目当てにがんばって、僕とヨーコを逮捕して名をあげたから、僕は一生前科者だ。

僕はドラッグとの関わりを否定したことは一度もない。国会で、こんな質問が出たんだ。"ジョンとヨーコを逮捕するのに、なぜ40人も警官が必要なんですか"。つまり、それはヤラセだったってことさ。『デイリー・メール』と『デイリー・エクスプレス』は、警官が来る前から現場にいた——報道陣は彼に呼ばれていたんだ。実際、僕は3週間前にドン・ショートから"彼らが君をつかまえにいく"と聞いていた。1969年　僕らのイメージが、彼らに好まれなかったのかもしれない。ビートルズらしさはなくなったからね。もう僕らはソフトでも可愛くもないから保護される理由はないってわけ——だから僕らを逮捕しろ！ そういうことなんだろう。1971年

リンゴ 「サージェント・ペパー」は、やるべきことを果たした——これは、60年代、もしかしたら20世紀を代表するアルバムだ。曲はすばらしく、とても革新的だ。ほんとに楽しかったし、参加できたことを嬉しく思う。だけど、"ホワイト・アルバム"ができてみると僕はこっちの方が好きになった。







ジョージ レコーディングを始めた時は、"ホワイト・アルバム"が「サージェント・ペパー」ほど成功するかどうか、考えなかったと思う——僕らが前のレコードやその売上げをほんとに気にしたことは、一度もなかったと思う。60年代初期にヒット・シングルを出した人は、必ず次のレコードもできるだけ同じようなサウンドにしようと心がけていた——だけど、僕らはいつも違うものを作ろうとしていた。いつも、どこかが変わっていた——僕らは月単位であらゆる方向に変化していたから、前作と似たような新作を出す可能性はまったくなかったんだ。

「サージェント・ペパー」のあとのニュー・アルバムは、全体的にバンド・アンサンブルが強い感じになった。多くのトラックをライブ演奏し、全体的な仕上げが必要な録音ずみのトラックがたくさんできた。それから、おのおのの個性的な特徴もかなり出て、初めて人々が僕らそれぞれの違いを認識するようになった。このアルバムのレコーディングで3つのスタジオを同時に稼動させたのを覚えているよ。ひとつのスタジオでポールがオーバーダビングをやり、ジョンはもうひとつのスタジオにいて、僕が3つ目のスタジオでホーン・セクションか何かを録音していた。それは、もしかしたら、EMIが発売日を設定していて、あまり時間的余裕がなかったからかもしれないけど。

ジョン "ホワイト・アルバム"の曲は、全部インドで書いたんだ。僕らはインドにいた時にマハリシに金をやったと思われているけれど、そんなことはまったくなかった。僕らはマントラを習い、山の中に座り、粗末な菜食主義の食事をして、これらすべての曲を書いたんだ。1980年

全員合わせて約30曲を書き上げた。ポールは十数曲やったはずだ。ジョージは6曲作ったと言っていた。僕は15曲書いた。それに、リンゴが瞑想から得たものはすごかった——何しろ、彼はこの時初めて自分で曲を作ったんだ。1968年

ジョージ・マーティン 彼らは、曲を大量に持ってきた——実際、30曲を超えていたと思う。私は少々圧倒された。しかし、同時にがっかりもしたよ。中には傑作とは言えない曲もあったからなんだ。

私は、初めて3種類の作業を並行してやらなければならない必要性に迫られた。いつも複数のスタジオでレコーディングが行なわれていたからだ。まったくバラバラだった。このレコーディングでは、私のアシスタントのクリス・トーマスが、多くの作業をした。この経験によって、彼はのちにとても優秀なプロデューサーに成長した。

ジョージ 新しいアルバムには、インドや「サージェント・ペパー」以後のすべての経験が、形となって現れた。リシケシュで書いた曲のほとんどは、マハリシの教えを受けた成果なんだ。

帰国した時、アルバム1枚では収まりきらないほどたくさんの曲があることが明らかになった。だから"ホワイト・アルバム"は2枚組になったんだ。他にやりようがないだろう？ だって、僕らはすごくたくさん曲を作っていて、さらなる新しい作品を書くために手持ちの曲を吐き出したかったんだ。バンドの中では、それぞれが強い自意識を持つようになっていた。ボツにしたりB面に押しやるべきだったかもしれない曲も、たくさんあったけどね。それをやったら、今ある海賊版の数は、もっと増えていただろうね。アルバムから外された曲は、全部海賊版になるんだろうからさ。

ジョン "ホワイト・アルバム"は、ただ"これは僕の曲だ。僕らはこんな風にやろう。あれは君の曲だ。君たちはそんな風にやるんだね"という風にやっただけなんだ。3人の音楽をうまく1枚のアルバムに収めようというのは、とても大変なことだ——だから2枚組にしたんだ。1969年

エレクトロニクスや凝ったアレンジに興味をもったあと、僕は最終的にそういう要素をすべて振り払った。2枚組アルバムに入っている僕の曲は、きわめてシンプルでプリミティブなんだ。「サージェント・ペパー」とは180度違っていた。僕はいつだってこっちの音楽の方が好きだった。1971年

ジョージ・マーティン 「マジカル・ミステリー・ツアー」をやっている間に、私は、「ペパー」でのレコーディングは少々自由にやりすぎて、多くのレコーディングの経験を十分生かしきっていないことを意識した。彼らは、基本的なアイディアが浮かぶと、ジャム・セッションをやって簡単に終わらせようとしたんだ。そうして作った作品は、時にはあまり上出来でないこともあった。のちの"ホワイト・アルバム"の頃、私は彼らの作曲について少しばかり苦情を言った。ほんの些細な小さい批判だったけど。

私は、2枚組にするよりも、非常にすばらしい1枚のアルバムにすべきだと言ったんだ。だが、彼らは譲らなかった。もう少しまとめて凝縮させたら、とてつもなくすばらしいアルバムになったかもしれないと思うよ。それでも、私の知る多くの人が"ホワイト・アルバム"をビートルズのベスト・アルバムにあげている。あとでわかったのだが、彼らは、すべての曲をレコーディングすることによって、EMIとの契約を早く片づけようとしていたんだ。

リンゴ 2枚組アルバムは曲が多すぎた。だけど、僕は、ふたつの別々のアルバムとして出すべきだったという考えに賛成だよ。"ホワイト・アルバム"（白いアルバム）と"ホワイター・アルバム"（もっと白いアルバム）なんてね。

ポール 人は僕らの言動や僕らの曲をすべて政治的な声明だと思っているようだけど、そうじゃない。結局、いつだってただの歌でしかないんだ。聴いた人がビートルズは何をやっているんだろうと思うような曲も、ひとつやふたつはある——だけど僕らがやっているのは、ただ歌を歌うことだけなんだ。1968年

CamScannerでスキャン

ジョージ 「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」は、ウォリントン（ジョージ・フォーンビーの心の故郷）の母の家で書いたんだ。僕は中国の古典『イ・チン』（易経）に書いてあったことを考えていた。西洋では、偶然はたまたま起きるものだと考える——僕がここに座っていることも、髪が風になびくのも、その他のいろんなことも、たまたまそうなっただけだ。だけど、東洋の考え方では、すべての出来事は起こるべくして起こっているのであって、偶然などというものは存在しない——どんな小さなことにも目的があるんだ。

「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」は、その理論をシンプルにして生まれた曲なんだ。僕は、どれでもいいから本を開き、最初に目に入ったものをもとにして曲を書こうと決めた——それが、その時のその瞬間に即したことだと思ったからだ。無作為に本を拾い上げ、それを開くと、"gently weeps"（穏やかにすすり泣く）という言葉が目に入った。そして本を再び下に置き、曲を書き始めた。

僕らはこの曲をレコーディングしようとしたんだけれど、ジョンとポールは自分たちの作品を効率的に作ることに慣れていたから、僕の作品を真剣にレコーディングするのが難しいことがあった。結局その日はレコーディングは実現しなかった。僕には、すごくいい曲であることがわかっていたんだが、彼らが真剣に考えようとしないし、演奏さえしてくれないので、"ああ、残念だ"と思いながら家に帰ったんだ。

次の日、僕はエリック・クラプトンと一緒に車でロンドンに出かけた。僕は彼に言った。"今日、予定ある？ スタジオに来て、この曲に参加してくれないかなあ"。彼は"ダメだよ——そんなことできない。ビートルズのレコードで外部の人間がプレイするなんて。他のメンバーが承知しないだろ"。そこで"いいかい、これは僕の曲なんだよ。その僕が君に参加してほしいと言ってるんだ"。

こうして、彼が来てくれることになった。僕が"この曲にはエリックが参加するよ"と言うと、みんなが少しやる気になった。ポールはピアノの前に座り、すてきなイントロを弾いてくれたんだ。全員がすごく真剣に考えてくれた（のちにビリー・プレストンが「レット・イット・ビー」に参加した時も似たような状況で、言い争いが続いていた僕らの中に外部の人を入れることによって、みんなが冷静になれた）。

以前にもゲスト・プレイヤーを迎えたことはあった——ブライアン・ジョーンズが
ノウ・マイ・ネーム」（ルック・アップ・ザ・ナンバー）で）クレイジーなサックスのフレ
奏したし、フルートや他の楽器も使った——だけど、ジョージ（時にはジョンか
ていたけど）以外の人間がギターを弾いたのは、今回が初めてだった。
はすごいプレイヤーで、協調性もあるし謙虚だしとてもいい感じだった。エリ
も緊張していた。あの曲にはエリックのスタイルがピッタリだった。ジョージが
た理由がわかったよ——でもジョージは自分で弾けたんだよ。そしたら大当
は彼自身だったんだよ。

ッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン」も、ラジオで放送禁止になった曲のひとつ
射の歌だからという理由だった。だけどこれは、銃の広告が行なわれて
は異常だと思って作った曲なんだ。ヘロインとは無関係だよ。ジョージ・マ

ーティンから雑誌を見せてもらったら、その表紙に"Happiness is a warm gun"（幸せは温かい銃）と書いてあったんだ。これはひどい。正気の沙汰じゃない、と思ったよ。銃が温かいってことは、何かを撃ったばかりだってことだからね。1971年

僕はこの曲が大好きだ。美しい歌だと思う。3つの別々の曲をつなぎ合わせてひとつの曲を作ったんだ。あらゆる種類のロック音楽を駆け抜けているみたいで、どの部分も好きなんだ。1970年

ジョン 今日は2曲やった。2曲目は、リンゴの初めての作品なんだ。彼は、睡魔に襲われながら、ひとりでこれを作曲したんだ。1968年

リンゴ 「ドント・パス・ミー・バイ」は、家でボーッとしている時に書いたんだ。僕はギターでもピアノでもコードを3つしか知らない。僕はピアノで適当に遊んでいた——ただガンガンたたいていた。そんな時メロディと言葉が浮かんだら、続けるしかないよね。まさにその時がそうだったんだ。ただひとりで家にいたら、「ドント・パス・ミー・バイ」が生まれたんだ。僕らは、この曲をカントリー風に演奏した。僕が自分で書いた初めての作品が出来上がった時はすごく感激した。みんなほんとによく助けてくれた。あのクレイジーなバイオリニストのプレイを録音した瞬間は、ぞくぞくしたよ。

僕は、ジョンが作った「グッド・ナイト」も歌った。ついこないだ久しぶりに聴いたけど、悪くなかったよ。もっとも、僕の声は少し不安そうに聴こえたけどね。僕にとって大変なことだったんだ。

ジョン 「グラス・オニオン」あれは僕。ただ適当に作った曲なんだ。「ウォルラス」とか、これまでの作品を何でもぶち込んだ。あの1行——"The Walrus was Paul"（ウォルラスはポールだった）——はビートルズの曲を分析するような奴らを少し混乱させてやろうとして、おまけでくっつけたんだ。別に"The fox terrier is Paul"（あのフォックス・テリアはポールだった）でもよかったんだ。つまり、意味のない詩の1節にすぎないってことだよ。1980年

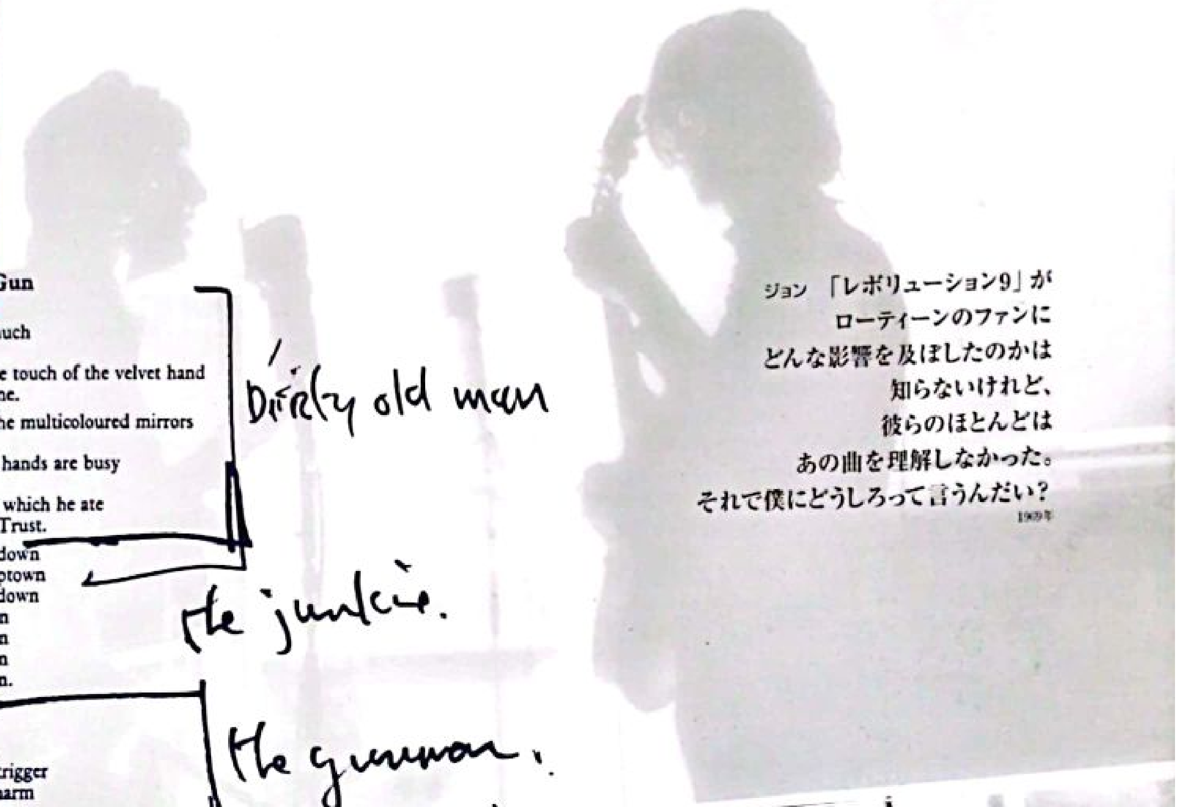
『サージェント・ペパー』では、わけのわからないこと——逆回転させると異常な言葉に聴こえるとか、そういう類のこと——をたくさん言われた。あれは笑えたね。

あの時の僕はヨーコに出会ったばかりでヨーコとの愛の雲に乗っているようだった。だから"そうだ、ポールをほめてあげよう。「大丈夫。君は今まで数年間、いい仕事をして僕らを団結させてくれた」って言ってあげよう"と思った。彼はまだ、何とかグループをまとめようとしていたから、ひと言言いたかったんだ。"僕はヨーコと出会った。今までありがとう。君は功労者だ"と。1970年

あの1行を入れたのは、ポールを置き去りにしてヨーコと一緒にいることに対して、僕が罪の意識を持っていたためでもあるんだ。すごくひねった言い方だけど、僕はポールに"ほら、このフレーズで君は僕の感謝の気持ちがわかるだろ——僕はもう出ていくから"と言ったつもりだった。1980年

ジョン　「レボリューション9」には、これまでのどの曲よりも時間をかけた。
アルバムに収録されたスロー・バージョンの「レボリューション」はすごく長かったんだ。僕はそのフェード・アウト部分を取り出して、それにいろんなものを重ねてみた。オリジナルの「レボリューション」のベーシック・リズムの上に、20種類のテープ・ループが重なっているんだ。素材はEMIの保管室にあったテープさ。僕は、古いテープを持って階段を上がり、そのテープを切ったり逆回転させたりして、サウンド・エフェクトを作った。
10台ぐらいあった機材にスタッフを配置し、鉛筆を使ってループを引っ掛けた――ループ・テープの長さは、数インチから1ヤード(約91センチ)までさまざまだった。すべてのテープの音量を上げて僕がリアルタイムにでミキシングした。数回ミキシングするうちに気に入ったのができたんだ。その間ずっとヨーコがそばにいて、どのループを使うべきか決めてくれた。ある程度ヨーコの影響を受けた作品だったと思う。1980年
「レボリューション9」は、知らず知らずのうちに生まれたイメージなんだ。僕は実際に、革命が起きたらこんな状況になるだろうと想像していた。その革命のイメージを描いた絵のようなものなんだ。あれはまさしく抽象画のような音のコラージュだよ。ループ、人の叫び声……。僕は、音を絵の具にして革命の絵を描いているという意識だった――だけど、ひとつ失敗があるんだ。それは、あの作品の立場が反革命だったってことさ。1970年
アクション・ペインティングみたいだよね。あの"number nine, number nine, number nine"というのは、エンジニアの声なんだ。テープに問題がないか確かめるための試験テープがあって、その中に"This is number nine megacycles……"(これは第9メガサイクル……)と喋っている部分があった。その"number nine"の言い方が気に入ったので、それをループにして思いつくままに入れてみた。1974年　"number nine"と話す声が、メチャクチャおかしかった。やたらと"number nine"と繰り返すジョークみたいだった。ただ、それだけのことさ。あの曲には象徴的なものがたくさんあるけれど、たまたまそうなっただけなんだ。1970年
僕は、1952年6月に、1人の男がサッカーをしている絵を描いた。その時描いた背番号も9番だったけど、それはまったく偶然の一致だよ。僕は、誕生日が10月9日で、ニューキャッスル・ロード9番地に住んでいたことがある。どうも僕は9に縁があるようで、だから9にこだわってきた。それに、9は宇宙で一番大きい数字だもんね。9の次は1に戻るだろ。1974年　9というのは、何かと僕について回る数字なんだ(だけど、数占いでは、僕は6か3に縁があるらしい。でも、どっちも9の約数だ)。1980年

ポール　僕も「レボリューション9」にかなり似たようなものを、遊びで作っていたんだ。僕のはリリースできないと思っていたんだけど、ジョンにはいつもやれと言われていた。



ジョン　「レボリューション9」が
ローティーンのファンに
どんな影響を及ぼしたのかは
知らないけれど、
彼らのほとんどは
あの曲を理解しなかった。
それで僕にどうしろって言うんだい?
1969年

Happiness is a Warm Gun
Lennon McCartney

She's not a girl who misses much
Do do do do do do do do
She's well acquainted with the touch of the velvet hand
Like a lizard on a window pane.

The man in the crowd with the multicoloured mirrors
On his hobnail boots
Lying with his eyes while his hands are busy
Working overtime
A soap impression of his wife which he ate
And donated to the National Trust.

I need a fix 'cause I'm going down
Down to the bits that I left uptown
I need a fix 'cause I'm going down
Mother Superior jump the gun
Mother Superior jump the gun
Mother Superior jump the gun
Mother Superior jump the gun.

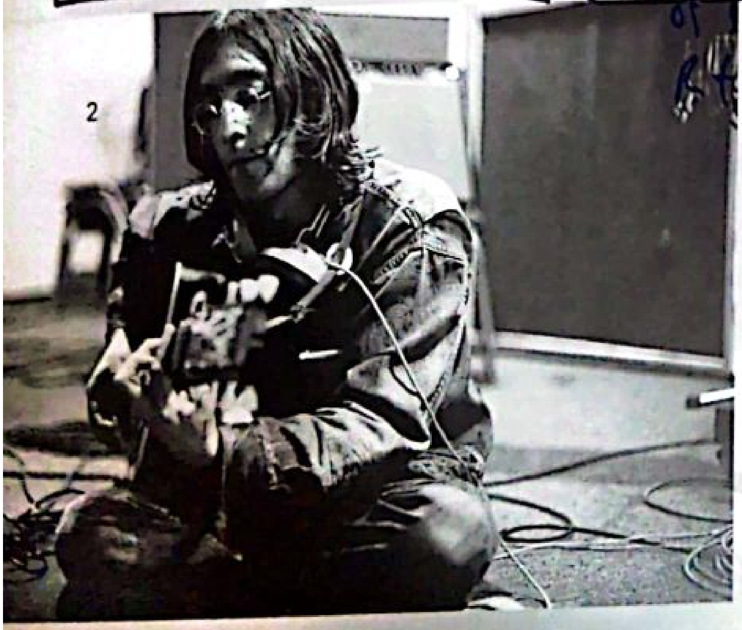
Happiness is a warm gun
Happiness is a warm gun
When I hold you in my arms
And I feel my finger on your trigger
I know no one can do me no harm
Because happiness is a warm gun
—Yes it is.

Dirty old man

the junkie.

the gunman.
(satire of 50's R&R.)

2



Mr. George Harrison
3 Savile Row
London, W.1

Dear George:

I am sending under separate cover these copies of the new U.S. Beatles album that are serially numbered from "A0000001 through A0000025" as personal souvenirs for you and selected friends. I have personally stolen number "A0000005," because I am a friend too. Besides, I love the music!

Sincerely,

Alan

CamScannerでスキャン

ポール　あのアルバムはジャケットがいいね。僕はアート業界に友だちがたくさんいた。そして「サージェント・ペパー」で、ロバート・フレイザーとのコネができた。僕は彼を通してさらにたくさんの芸術家と知り合った。当時の彼の仲間の中にリチャード・ハミルトンがいたんだ。

僕は2回ぐらい展示会に行ったことがあって、リチャードの作品は気に入っていたんだ。彼に電話してこう言った。"僕らのニュー・アルバムが出るんだけど、ジャケットのデザインに興味ない？"。彼が興味を示したので、みんなに確認したんだ。すると全員"いいよ"との返事だった。僕はジャケットの制作を進めることになった。たびたびハミルトンの彼の自宅を訪ね、話し合った。ある日、彼にこんなことを言われた。"そうだスナップ写真をたくさん持ってきてくれないかな。赤ちゃん時代までさかのぼって、君たち自身の写真を持ってきてよ——何でもいいから。それを使ってコラージュを作ろうと思うんだ"。

僕はアートに興味があるから興奮した。僕は、彼の臨時アシスタントになることができた——メンバーとの連絡係を務めたり、写真を集めてコピーしたりした。僕は、1週間の間、彼がコラージュをまとめるところをひたすら見ていた。絵が描かれる過程を見るのは素敵だよね。そして、仕上げが最高だった。彼は、全体が写真で埋め尽くされたコラージュを作ると、最後に白い紙を何枚か持ってきて、それを配置し空間を散在させた。写真を詰め込んで終わり、じゃなかったんだ。彼は、そうすることによって作品が呼吸をすることができると説明した。濃密な中に空間ができる。すごいアイディアだった。ネガティブ・スペース（そう呼ばれていたらしい）のいい勉強になったよ。僕ならそのままにしておいたと思う。だって、そのままでもすごくよかったんだ。今でもポスターを見てみると、白い部分がすごくクリアーなんだ。

そして、彼は最後に"ポスターはすんだけど、ジャケットはどうしようか。アルバムのタイトルは何ていうの？"、また"「ザ・ビートルズ」ってタイトルのアルバム、これまでにあったかな"と聞いてきた。僕は"ない"と答えたけれど、自信がなかったので、さかのぼって調べてみた。そうしたら、いつも「ビートルズ・フォー・セール」、「ミート・ザ・ビートルズ」、「ウィズ・ザ・ビートルズ」という感じだった。似たようなのはたくさんあったけど、「ザ・ビートルズ」だけだったことは一度もなかった。それでリチャードが、今度のタイトルは「ザ・ビートルズ」にすべきだと提案してくれた。みんなそれに賛成したんだ。

リチャードはミニマル・アートに傾倒していたから、真っ白の地に"Beatles"の文字をき出させただけのジャケットがいいと考えた。当初彼は、紙の上に"リンゴのしみ"をけたいと言っていたんだ。当時の彼の友だちで、何にでもチョコレートやなんかのしをつける人がいたんだよ。だけどそれは難しいということがわかったので、僕らは、ジャケットは白いままで行こう"と言った。

れから、リチャードは、アルバム1枚1枚に通し番号を付けることを思いついた。僕コレクターが目を輝かせそうなアイディアだと思った。つまり、000001、000002、はなどという番号が付くわけで、たとえば000200を手に入れたら、それが初期のプものであることがわかる——営業的に見ても、すばらしいアイディアだったけど、説得するのは大変だった。彼らは不可能だと言うんだ。僕は"ねえ、走行距離計できれば、出荷するすべてのレコードに番号を付けられるはずだよ"と言ってみた。彼らはやっと方法を見つけた。でもこの番号付けは、ある時点でやめられてし思う。だから、すべての「ホワイト・アルバム」に番号が付いているわけではないけど、いいアイディアだった。僕らは、初めの1枚をもらったんだ。最初の1枚目のはジョンだと思うよ。ただ例のごとく彼の叫び声が一番大きかったんだ！

枚目は僕がもらった——それは、僕が可愛いからさ！　ほんとは、全体的に一て一番親切なのはジョンなんだ。そうなれる時にはね。それに彼は、みんな

eatles LP numbering one to twent
en the four Beatles.

' numbering one to twenty should be shared
ur Beatles.

くれてなかったよ。1番目は僕がここに持っている。僕は1番目も持ってメリカに置いてあるんだ。

ン　"ホワイト・アルバム"のレコーディングには、たいていヨーコがスのそばにいたのを覚えている——実際、彼女が病気になった時など、に寝かせておくのを嫌がり、スタジオに彼女のベッドが置かれたほどコーディングしている間、その傍らでヨーコが寝ていたんだ。

には、とても大きな絆が存在していた。それは誰の目にも明らかだ。一体化していた。そして、ふたりの絆が育つにつれ、ジョンは、ボの絆を縮小していったんじゃないかと思う——もちろん、それははや彼らは、以前のような親密な4人組——私を入れて5人組—

さしく僕らの中に踏み込んできた。というより、ジョンがヨーコとだ——あるいは、ヨーコがジョンと一緒に踏み込んできたともがどちらかひとりだけでいるのを見たことはない（少なくともそんな風に、彼女は突然バンドに入ってきた。歌や楽器を始め

たわけじゃない。だけど、そこにいたんだ。ニールやマル、あるいはジョージ・マーティンがいるのと同じように、ヨーコはそこにいた。スタジオにヨーコのベッドが運ばれたことがあった。つまり、僕らがレコードを作っているのを尻目に、ヨーコがベッドの中か、ピアノの下に敷いたマットレスの上で寝ていたんだ。

最初は物珍しかったけど、少し経つと、彼女がいつも一緒にいるつもりだということがわかって困惑った。なぜなら仕事をしているのは僕らであって、僕らは僕らなりのやり方に慣れていたからなんだ。ただの習慣かもしれないけれど、スタジオに入るのは僕ら4人とジョージ・マーティンだけだったんだ。誰かが訪ねてくることはあったよ。ブライアン・エプスタインやその時のガールフレンド、妻、そういった人たちが顔を見せたりした。だけど、ジョン以外誰も知らない人が来たのは、ほんとに初めてだったんだ。

年中彼女がそこにいるのは、とても妙な気分だった。それがヨーコだからだとか、知らない人を座らせておくのに反対だとか、そういう単純なことじゃなかった。独特な空気があったんだ。そのために、僕は居心地の悪さを感じた。何とも不思議な空気だったね。

ジョン　僕らふたりを除いて、みんな誇大妄想の気があったみたいだ。僕らは愛の喜びに輝いていた。恋している時は、すべてが晴れやかで開放的になる。まわりはみんな、"このセッションの場で彼女は何をするつもりなんだ"とピリピリしていた。たまたま僕らがいつも一緒にいたいというカップルだったというだけで、僕らのまわりには何とも異常な空気が流れていた。（1980年）

ポール　ヨーコはよくスタジオに来た。ジョンとヨーコは寄り添い合って、すごく激しい恋をしていた。彼女は非常に強く、独立心の強い女性だ。ジョンが好きになった女性はみんな強い人だったと思う。そう言えば、ミミおばさんもどちらかというと強い女性だったし、お母さんもそうだった。だけど、シンシアは違った。ひょっとして、彼らが離婚したのはそのせいだったのかもしれない。シンシアは素敵な女性だけど、主導者にはなれなかった。ヨーコにはそれが可能だったんだと思う。

ヨーコはコンセプト・アートのアーティストで、そんな彼女にジョンは強く惹かれた。彼女は、多くの話題に通じていた。彼女が"私はビートルズは知らない"というようなことを言うので、"うわ！　ビートルズを知らない人がここにいる"って感じだったよ。ジョンにとっては、そこがとても魅力的だったんだ。

ジョン　ヨーコが前から知っていた名前はリンゴだけだった。どうしてかと言うと、日本語の"りんご"と同じ音だからなんだ。

1971年

ポール　彼女が"革のジャケットを着た男の人が好き"と言うと、ジョンは、また革の服を着て不良のティーンエイジャーみたいにふるまうようになった。昔やめたことをもう一度やり始めるにはいい口実だった。ヨーコはジョンにいくつものアートの道筋を示していたのだと思う。僕らにとって困ったことは、そのことが僕らが築き上げてきた枠組みを崩し始めたことだった。

ニール・アスピノール　アルバムのレコーディング中に僕がスタジオに一度も入らなかったのは、この作品が初めてだった。僕は、サビル・ロウのオフィスで彼らの仕事の雑事に追われていた。一度スタジオに行ったら、ジョンにこう言われたのを覚えている。"おまえ、ここで何やってんの？　オフィスにいなきゃダメじゃないか"。もちろん、いい気はしなかった。僕はオフィスにいるのが好きではなかった。そういう仕事は得意じゃなかったんだ。

ジョンはどこへ行くにもヨーコと一緒だった。ヨーコがいつもスタジオに来ていただけではなかった——ふたりは、どこでも一緒だったんだ。だから、彼がスタジオにいれば、必然的に彼女もスタジオにいることになるんだ。

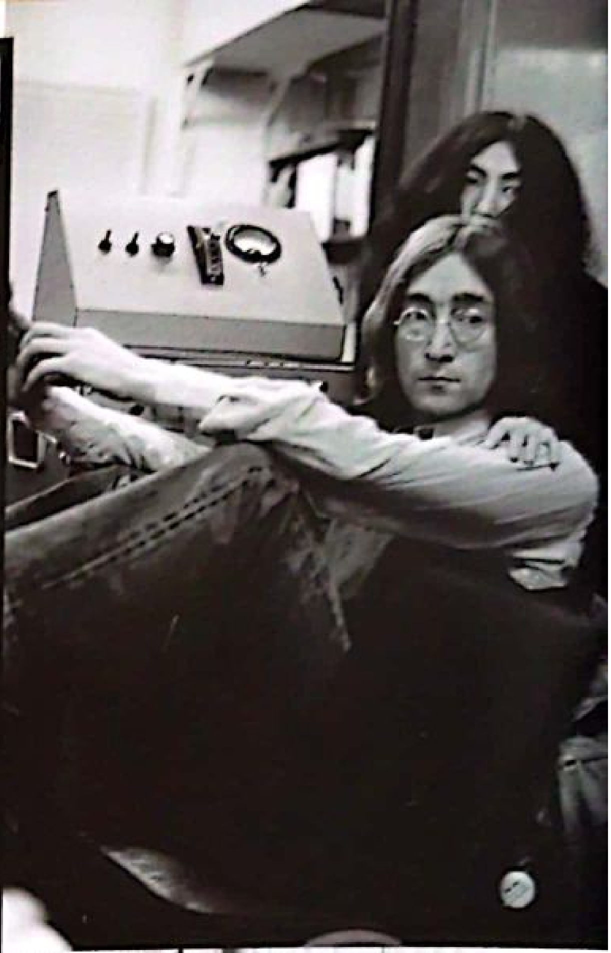
リンゴ　スタジオにしょっちゅうヨーコがいるというのは、目新しい状況だった。今まで経験したことがなかった。僕らはかなり北部的な人間で、妻は家にいて僕らは働きに行く——僕らは石炭を掘り、彼女たちは夕食を作る——というのが当たり前だと思っていた。それは、当時失われつつあった労働者の常識だったんだ。モーリーンは、スタジオに来たとしても、5〜6回ぐらいだったと思う。パティは、何年かの間にせいぜい数回だったろう。シンシアがジョンと結婚していた頃に、スタジオを頻繁に訪れたような記憶はない。あり得ないことだったんだ。それが突然、僕らのスタジオにベッドに横たわるヨーコが現れたんだ。

僕ら4人の関係は密接で、ある意味では家族のようなものだったから、ヨーコの登場は緊張を生んだ。僕らは他人からの度を越した干渉が嫌いだった。ヨーコは他人だった（ジョンにとってはそうじゃなくても、僕ら3人にとっては他人だった）。そこは僕らだけが一緒にいる場所だった。そうして僕らはうまくやってきたんだ。僕らはみんな冷静を装って、そのことを口に出さないようにした。でも心の中では全員不満を感じていて、部屋の隅で話をしていたんだ。

僕はジョンに"これって何なの？　どうなってんの？　どのセッションでも必ずヨーコがいるじゃないか！"。彼はきっぱりと言った。"じゃあ言うが、君は家に帰ったらモーリーンに1日の出来事を話すだろ。「ああ、今日のスタジオはよかった……」ってね。それは二度手間ってもんだ。僕らはふたりとも何があったか全部知ってるんだ"。彼らはその言葉どおりの生活を始めた——ひとときたりとも離れなかった（僕とバーバラが結婚した

CamScannerでスキャン

時も、やっぱりこんなふうだった。結婚して8年間、僕らは文字どおり一瞬一瞬を共に過ごしていた)。ジョンと話をしたことで僕は気が晴れ、それからはヨーコがいてもリラックスできるようになった。



ポール　ジョンはヨーコなしではいられなくなった。彼を責めることはできないよ。ふたりは激しく愛し合っていたんだ——初めて経験する熱情に溺れていたんだ。だけど、彼女がアンプに座るのは不愉快だった。"すみません、お嬢さん——ボリュームを上げてもいいでしょうか"とか、ふたりの邪魔にならないように"アンプから降りていただけませんか"って、どんなふうに言えばいいのかわからなかった。

あの時は、とてもやりにくかった。ジョンがグループを離れたのは、ヨーコとの関係の障害になるものすべてを清算するためだったんだと思う。それまでのジョンは何も清算できないでいた——彼は、ビートルズという大きな重荷を背負っていた。その重荷とは僕らと関わり続けることだった。彼はただ部屋の隅で、"きっとよくなる"と言い合いながら、何時間もヨーコの目を見つめていた。ただ、それを僕らが曲を作ろうとしている時にやられるのにはまいったよ。

僕らのその様子は今見たっておもしろいと思うよ。かなり笑えるものだったんだ。だけど当時、それは僕ら自身の問題だった。何と言ったって、僕らはビートルズだった。そしてあの女性がそこにいた……。まるで、僕らが彼女の家来になったみたいで、とても変な感じだった。"ホワイト・アルバム"は、そんなぎくしゃくした状況の中で作られたアルバムだった。

ジョン　ポールはいつも丁重にヨーコに近づいて"もう少しうしろに控えていてはいかがです？"と言った。僕の目の届かないところで行なわれていたから、何がどうなっていたのか僕はわからなかった。1972年

ジョージ　今ヨーコと話をしたら、ヨーコはビートルズが好きだとか、昔も好きだったと言うかもしれない。だけど彼女はビートルズを、ジョンとの間に立ちはだかる邪魔物と感じていたから、ほんとは僕らを好きなはずがなかった。僕は、ヨーコがジョンと僕らの仲を引き裂くクサビになるんじゃないかと感じていた。そして現実にそうなったんだ。

解散の全責任をヨーコに負わせるのはフェアじゃない。いずれにせよ僕らはもううんざりしてたんだ。みんな、自分の道を歩き始めていた。ヨーコはその状況を促進させる触媒のようなものに過ぎなかったんだろう。僕はひとつも後悔していない。だけど、当時は彼女がいることが煩わしかった。

ジョン　ビートルズ解散の原因がヨーコとリンダにあるのなら、僕らそれぞれが個人で作ってきたすばらしい音楽はすべて彼女たちの功績なのかい？ リンダとヨーコは言い争いをしたことが一度もないんだ。ふたりの女性が屈強な4人の男をどうやって別れさせることができる？ 不可能だよ。1971年

振り返ってみれば、状況は理解できる。ぴったりくっついていた4人の男がいて、彼らの妻やガールフレンドは、僕らの誰もが好む古風な女性だった。赤ん坊を抱えて年中キッチンにいるタイプ——セッションに来ることなど絶対なかった。たまたま髪を結う時ぐらいしか、妻の姿を見ることはない。そんな場所で僕らふたりは一緒にいるようになった。部屋の隅でお喋りしながらくすくす笑っている。そして、そこには"いったい彼らは何をやっている？ ジョンに何があった？"といぶかるポール、ジョージ、リンゴがいた。僕の関心は、完全に彼らからそれていた。わざとやっていたわけじゃなく、ただ僕らはふたりでいることに熱中して興味を持っていただけ……。まわりを見回すと、僕らが理解されていないのがわかった。でも、僕は彼らの気持ちもわかる。もし誰かと恋に落ちてすっかり夢中になったのがポールかジョージかリンゴだったと考えると……。1980年

僕は他のどのアルバムよりもこれが好きだった。「ペパー」よりも好きなんだ。音がよかったんだ。「ペパー」は大きな神話を作ったけれど、サウンドは"ホワイト・アルバム"の方がずっと優れている。

このアルバムで、僕はいい作品をたくさん書いた。どれも気に入っているよ。他のメンバーの作品も好きだ。アルバム全体が好きなんだ。もうずいぶん長いこと聴いていないけど、いい曲がたくさん入っているのはわかっている。1972年

ポール　すごくいいアルバムだったと思う。何かを訴える力があった。だけど、作っていて楽しいアルバムではなかった。でも一方で、そういう状況が芸術面で有利に働くことがあるんだ。このアルバムがおもしろいのは、バラエティに富んだ多くの曲が入っていることだ。すばらしいアルバムだと思う。

どんな反応があったか覚えていないな。今はレコードをリリースすると、誰がどんなふうに受け入れてくれているのかを興味をもって見ている。だけど「ザ・ビートルズ」の時は、チャートの順位を気にしたことはなかった。もちろん、気に入ってもらえるといいとは思っていたけどね。僕らは、ただアルバムを発売し、あとは普段どおりの生活を続けただけだった。あのアルバムは、多くの友だちが気に入ってくれた。友だちが気に入ってくれれば、いろんな店でかけてくれたり、あらゆる場所であの音楽が流れる——それが僕らにとっての成功の証だった。

CamScannerでスキャン

スコットランドに行った時、「メロディー・メイカー」を読んでいたら、ピート・タウンシェンドの"誰も聴いたことのないほど下品でやかましくて馬鹿げたロックン・ロール・レコードを作った"という発言が載っていた。実は、ザ・フーが作ったその曲というのが何を指していたのかいまだにわからないんだけど、僕はその話を聞いただけで刺激された。そこで僕はメンバーに言った。"そういう曲をやろうと思うんだ。すごくワイルドなやつを"。そして書いたのが「ヘルター・スケルター」なんだ。

あの曲では、声が嗄れているのがわかるよね。僕らは、休憩をとらずに長い時間演奏を続けた。最後にリンゴが "I've got blisters on my fingers" 指にマメができちゃった)って言っているのが、レコードでも聴こえるだろ。僕らは、ひたすら大きい音を出そうと努力した。"ドラムの音、もっと大きくできない?"。僕はほんとにそれだけを望んでいた――すごくやかましくて下品なロックン・ロールをビートルズで作ることを。これは、かなりいい作品になったと思う(だから"君はバラードばっかりやっているね。センチメンタルな人だ"と言われると不愉快なんだ。そういう時は"調べたの? 聴いたの?"と言ってやる。別に言い訳をしたいわけじゃない。だけど、僕には別の一面があるんだ)。

リンゴ　「ヘルター・スケルター」をやった時、僕らはスタジオで混乱し、ヒステリックな状況に陥っていた。その状況を振り払うために、この曲は始まった――ポールのベース・ラインと僕のドラムと共に――ポールが大声でシャウトし、その状況が収まったんだ。

ポール　そしてアルバムがアメリカに渡った――アメリカは、解釈好きな人たちの国だ。のちにあるDJが「アビイ・ロード」のジャケットで僕が靴を履いていないことを"説明"したのと同じように、チャールズ・マンソンは「ヘルター・スケルター」は黙示録の4人のホースマンに関係があると解釈した。僕は今でもその話自体、何のことだかわからない。聖書の"ヨハネの黙示録"から来ているということなんだが――読んだことがないから、わかるはずがない。だけど、彼は――僕らは4人のホースマンで、「ヘルター・スケルター」はその歌だ――と解釈し、行動を起こしてみんなを殺さなければならないという結論に達した。

あれは悲惨だった。僕は何の関係もない。やったのは何人かのアメリカ人の男だ――だけど、僕にはその理由がまったくわからない。恐ろしかった。そんな理由で曲を書いたんじゃないもの。もしかしたら今のヘヴィー・メタルのグループならやるかもしれない。でも、僕らはそんなこと絶対にしなかった。

ボブ・ディランは「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」(抱きしめたい)の歌詞の1行を"I get high, I get high, I get high"と誤解した。こういった笑える小さな誤解はいくつかあった。だけど、それはいつも無邪気なもので、ちょっとした冗談みたいだった。エルヴィス・コステロのマネージャーのジェイク・リビエラは"living is easy with eyes closed"目を閉じて生きるのは楽)を"living is easy with nice clothes"(いい服を持って、暮らしは楽)だと思っていた。こういう些細な間違いもあったけど、最後にやって来たのがあの空恐ろしい解釈だった。だけど僕らはどうしようもなかった。どうすればいいんだ?

ジョン　あのマンソンの話は、ジョージが書いた豚の歌とポールが書いたイギリスの移動遊園地の歌をもとに、でっちあげられたんだ。どれもまったく無関係だよ。それに、僕はこれぽっちも関係がない。1980年

彼は気がふれている。曲に神秘性を見いだしたがる他のビートルズ・ファンと同じだ。つまり、僕らは軽い気持ちであれこれ曲に埋め込んでおもしろがっていた。そしてインテリの奴らが僕らの作品の意味を読みとろうとしたり、象徴主義的な若者が分析したりしてたんだ。確かに僕らもちょっとした役割を果たしてはいた。だけど、「ヘルター・スケルター」が人を刺殺することとどういう関係があるのか、僕にはわからないな。1970年

リンゴ　動揺したよ。僕はロマン・ポランスキーとシャロン・テートを知っていた。そして――ああ!――あの時は辛かった。あの事件で、すべての人が歩みを止めてしまった。何しろ、愛と平和とサイケデリックの真っ最中で、突然こんな狂悪事件が起きたんだ。ほんとにすごく不幸な出来事で、みんなとても不安になった――僕らだけ、あるいはロック・ミュージシャンだけじゃない。LAの人全員が"ああ、次は誰があんな目に遭うかわからない"と感じたんだ。ありがたいことに、奴はつかまった。

ジョージ　僕らは信じられないことを体験した。すばらしい服、サイケデリックな自動車、家、すべてを手に入れた。僕らの作った作品は、「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」(愛こそはすべて)とか「レボリューション」(革命)などをテーマにした曲ばかりだった。それは"目覚めよ、仲間と同調せよ、既成社会からドロップ・アウトせよ"という精神だった。今はフラワー・パワー・レボリューションのようなことは起きていないけど、人々は理解できないことや、自分のライフ・スタイル――人々がはめこまれているちっぽけな型――に収まりきらない人に出会った時には怯えを感じ、そういう人を追いやり、変人や狂人扱いしてしまうんだ。

これまで彼らはあらゆることを言ってきた。僕らをすばらしいと讃えたり、一方で実にひどいとけなしてもきた。僕らはあまりにもいい加減なアップ・ダウンを何度も繰り返したから、もうどっちでもよくなっている。ある意味で、僕らはそのすべてを乗り越えたんだ。僕らはタブロイド新聞を超越した。彼らは今でも、時々やりたい放題にやっている――今だに、バカバカしい安っぽい記事を書いているんだ。だけど、僕らはもうまったく影響を受けない。それでいて彼らから一生抜け出すことはできないんだ。無難でつまらないなれ合いの日常から。

誰もがビートルズという名の大きな時の流れに乗ろうとした。警察も、プロモーターも、市長も――そして殺人者も。ビートルズは噂の的で、世界中の記事の話題の中心だったから、ビートルズの責任かどうか知らないけれど、誰もが自分をビートルズに結びつけた。チャールズ・マンソンのような汚ない奴と関連づけられるなんて迷惑だった。

僕が不愉快に思ったもうひとつのことは、マンソンが急に長髪に髭面というイメージで描かれるようになって、それが殺人者のイメージにもなったことなんだ。それまでは、長髪とあご髭は、髪も切らないし髭も剃らない――ただ、だらしないだけ――ということだったのに。

リンゴ　"ホワイト・アルバム"のレコーディングを終えた時、僕らはもう一度バンドらしさを取り戻していた。僕はずっとバンドというものを愛し続けている。バンドが大好きなんだ。もちろん、悩んだ時期もあったよ。現に僕はその年の夏、しばらくグループを離れたんだからね。

僕がバンドを離れたのにはふたつの理由があった。ひとつは自分が優秀なプレイヤーではないと感じていたから。もうひとつは他の3人がほんとに楽しそうで、自分が部外者みたいな気がしたから。僕はジョンに会いに行った。彼はケンウッドを出てからモンタギュー・スクエアの僕のアパートメントにヨーコと一緒に住んでいた。"僕はグループをやめる。僕はドラムがうまくないし、君たちに好かれてなくて孤立してるみたいに感じるから。君たち3人はほんとに仲がいい"と僕が言うと、ジョンは"仲がいいのは君ら3人の方だ!"と言った。

それからポールの家に行って、ドアをノックした。僕は同じことを言った。"僕はグループをやめる。君たち3人はほんとに仲がよくて、僕は孤立してるみたいに感じる"するとポールも言ったんだ。"それは君たち3人だと思っていたよ!"

そのあとジョージの家に行き、"僕は休暇をとる"と告げ、子どもたちを連れてサルジニアに行った。

ジョージ　どうしてリンゴが出ていったのか、正確には思い出せない。ある日突然誰かが"ああ、リンゴは休暇をとって出かけてしまった"と言ったんだ。あとで彼が、僕ら3人がすごくうまくいっているのに自分はそうじゃないと思っているということがわかった。それは仕方のないことだった。みんな同じことを感じていたんだ。誰もが、もうたくさんだと思っていた。僕は"ここにいることに何の意味がある? 彼らはとても楽しそうでノリもいい。僕は場違いだ"と感じていた。そして、僕は次のアルバムでグループを離れたんだ。

ポール　リンゴは一度もドラム・ソロをしなかったことで、自分は優秀なドラマーじゃないと悩んでいたんだと思う。彼は、バンドが舞台から消えてお茶でも飲んでいる間に、際限なくバンバン叩き続けるようなドラマーが大嫌いだった。『アビイ・ロード』をやるまでは、ビートルズの演奏にドラム・ソロを入れたことは一度もなかった。その結果、他のドラマーが、リンゴのスタイルは好きだけど、技術的にはあまり優秀なドラマーじゃないと言うようになってしまった。ちょっと見下されたような感じだった。だけど、僕らはあまり気にもしていなかった。

リンゴのフィーリングと情熱、それにきわめて正確なテンポは素晴らしいと思う。僕はいつもドラマーに背を向けて任せておけるということが良いドラマーに恵まれた証拠だって言っているんだ。リンゴに曲の構成について確認しておきさえすれば――いつでも僕らのうしろから、安定したテンポのすばらしいドラム・サウンドが聴こえてきた。ロックン・ロールはフィーリングとサウンドが命なんだ。だからリンゴがバンドを離れた時、僕らは"君をすごいドラマーだと思っている"とちゃんと言葉にして彼に伝えるべきだったと思った。

CamScannerでスキャン

人々ってそんなもんだよ。人生の途中で改めて"僕は君を[illegible]と思っているんだ"なんて、普通は言わないよ。好きなドラマーに対して、自分は君が好きだなんて必ずしも伝えたりしないもんだろ。リンゴは[illegible]世界一のドラマーだなんて[illegible]を抜けた。だから僕らは"いいかい、僕らにとっては君が世界一なんだよ"と伝えた(僕は今でもそう思っているよ)。彼は"ありがとう"と言った。僕らの言葉が嬉しかったんだと思うよ。僕らは花を[illegible]言った。[illegible]てきたことを盛大に祝って歓迎したんだ。そして、リンゴがスタジオに戻ってきた。[illegible]

ジョン　僕は彼のドラミングが大好きだ。リンゴは今でも世界一のロック・ドラマーのひとりだよ。1979

ジョージ・マーティン　どのメンバーも多少の悩みを抱えていたと思う。人と人との間にひびが入ると――[illegible]――緊迫した空気が流れるものだ。そんな時は、この場の雰囲気が悪くなったのは自分のせいだろうかと考えてしまう。私たちがリンゴの中に見いだしたのも、こういう種類の状況だったと思う。おそらく彼は、ジョンとヨーコとポールの精神的なよそよそしさ、誰も昔のような仲間意識を持たなくなった状態に、少し落ち着きをなくしてしまっていたんだろう。彼は"原因は僕だろうか"と自問していたのかもしれない。

リンゴ　僕はサルジニアで「オクトパス・ガーデン」を書いた。その日はピーター・セラーズから借りたヨットで1日海に出ていた。僕らはキャプテンに、ランチはフィッシュ&チップスがいいと伝えた(リバプール時代からそればかり食べてきたからね)。なのにランチタイムが来て僕らはフレンチ・フライド・ポテトを食べていた。するとそこに見慣れないものが皿に盛られてやって来たんだ。僕は言った。"フィッシュ&チップスです"――"ねえ、これは何?"――"イカです"――"僕らはイカは食べないよ。タラはないの?"。とにかく、僕らは生まれて初めてイカを食べた。けっこうイケたよ。ちょっとゴムっぽかったけど。味は鶏肉に似ていた。

僕はキャプテンと一緒にデッキに出て、タコの話をした。彼の話によると、タコは巣穴に住んでいて、光る石やブリキ缶や瓶を探して海底を動き回り、それをまるで自分の庭を飾るように巣穴の前に置いていくんだそうだ。それは素敵だと思った。僕も海に潜りたいと思った。そしてマリファナで一服し、ギターを弾いた――こうして「オクトパス・ガーデン」ができたんだ!

すばらしい休暇だった。僕は、誰の心にも傷があることを知った。僕だけじゃなく、全体の雰囲気が下降していたんだ。僕は確かに出ていった。もう耐えられなかったんだ。魔法が消えて、人間関係が悪くなっていた。妄想だったかもしれないけど、僕はすごく気分が悪かった――よそ者みたいな気がしたんだ。だけど、その後みんなも同じ気持ちでいることを知った。僕がみんなの家のドアをノックして回ったことで、それがはっきりしたんだ。

"君は世界一のロックン・ロール・ドラマーだ。帰っておいでよ。僕らは君を愛している"という電報が届いた。そして僕は戻った。僕には気分転換が必要だったんだ。スタジオに戻った僕は、ジョージが飾ってくれた花に迎えられた――スタジオ中、花でいっぱいだった。僕らはこの小さな危機を通り抜けた。すばらしいことだった。それは多くのグループが進む道だった。そして、"ホワイト・アルバム"もようやくここを抜け出した――そして僕らは全員スタジオを出た。

6月に、ジョージがラビ・シャンカールの映画の撮影のためにカリフォルニアへ行くのに、モーリーンと僕もついていった。ビートルズはいつも誰かが出かける時は他のメンバーの誰かと一緒だった。――ビートルズはふたりずつで行動することが多かった。ある時、

[illegible]

訪れ、どんなことをやっているのか見てきた。その内容は[illegible]想だった。そこには、アラン・ギンズバーグや僕と同類の人たちがたくさん[illegible]。ジョージはサンフランシスコに向かった。彼は、僕らのために[illegible]いの言葉をヘルズ・エンジェルスに与え贈った。あふれる愛のなせる[illegible]

ジョージ　ある朝、関税消費税庁からアップルに電話がかかってきた。"[illegible]トンもの荷物が到着しているのですが、その貨物便はお名前が書かれています。それでよろしいのですか"ということだった。僕はアップル[illegible]ーである男から"いつかイギリスに行くかもしれない。その時はお世話に[illegible]"と言われた覚えがあったからだ。僕は"そういうことなのか"と[illegible]。

そしてその日がやって来たんだ。ヘルズ・エンジェルスが、ハーレー・ダビッドソンと装備でサンフランシスコから到着したんだ。彼らは[illegible]あと、一路サビル・ロウ3番地を目指してバイクを走らせた。僕は急いでみんなに[illegible]出した。"用心するように。彼らに占領されてはいけない。通常どおりの仕事をするように。でも彼らには親切にすること。彼らを怒らせてはいけない。殺されるかもしれないから"ジョークのつもりだったんだけど、彼らは実際ヤバい連中だった。

ニール・アスピノール　ジョージが"じゃあ、イギリスに来ることがあったら寄ってくれ"とかなんとか言ったんだ。2ヵ月後、サビル・ロウのアップル・オフィスの外にバイクに乗った男たちが現れた。彼らは"そうだ、ジョージがいいと言ったんだ"と言い、結局アップルに住み着き、みんなを震え上がらせることになった。

ヘルズ・エンジェルスのクリスマス・パーティ事件というのがあった。みんながお腹をすかせていたところへ、大きな皿に載った巨大な七面鳥が4人がかりで運ばれてきた。彼らはドアから9メートルほど離れたテーブルに七面鳥を置こうとしたが、それは実現しなかった。ヘルズ・エンジェルスがひと声"ウー"とうなったとたん、すべてが消えてしまった――手羽、脚、胸、何もかも……。七面鳥がテーブルにたどり着いた時には、何も残っていなかった。彼らは、幼い子どもたちを押しのけて七面鳥に手を伸ばし、ばらばらに引きちぎったのだ。あんな光景は見たことがなかった。

リンゴ　彼らが来て、子どもたちのパーティが台無しになった。しかし僕らは彼らを追い払うことができなかった。彼らが出ていこうとしないので、僕らは執行官やあらゆるものを手配して彼らを追い出そうとした。あれは悲惨な出来事で、大人たちですら怖がっていた。しゃくにさわるクリスマス・パーティだった。

ジョージ　ジョンとヨーコはサンタ・クロースの扮装をしたんだ。トラブルが起きそうなことはわかっていたので、僕は行かなかった。ひどい有り様で、みんなさんざんな目に遭ったということだけは聞いた。

ニール・アスピノール　アップルから出ていくよう言っていたんだ。彼らはヒッピー風の喋り方で"俺たちを招待したのはあんたじゃない。だから、あんたに出ていくよう頼まれる筋合いはない……"と答えた。本来なら招待したのはジョージだから、ジョージが言わなくてはならないことだった。そしてジョージは非常にうまくやった――彼が何と言ったか正確には覚えていないけど、こんな感じだった。"イエス、ノー――陰　陽――イン／アウト――ステイ／ゴー。わかるだろ――とっとと失せな!"。彼らは"そうか、ジョージ。君がそんな風に言うのなら、もちろんそうするよ"と言って出て行ったのだ。

デレク・テイラー　事実ジョージは、彼らにロンドンに来たらアップルを訪ねなさいと勧めるようなことを言っていた。他にも、多くの人々がアップルにやって来ていた。カリフォルニアのホームレス家族がアップルに入り込み、オフィスの一室に住み着いたこともあった――母親と父親と子ども数人の家族だった。そこにヘルズ・エンジェルスが出たり入ったりしていた。

ケン・ケーシーもいた。彼は、タイプライターとテープ・レコーダーを借りて、朝、僕の事務室で詩の朗読を行なった。僕が出勤すると、ヘルズ・エンジェルスが床に座って彼ら流の健康療法をやっていた――身体をかきむしったり、おならをしたり、たいていはひどい行為だった。さらに彼らは、ビリー・タンブルウィードやフリスコ・ピート(のちにアメリカの読者にはお馴染みの名前になる)などのお偉方を私の仕事場に来させ、朗読させようとした。

1969-70

nineteen sixty-nine to nineteen seventy

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ポール　1969年1月、トゥイッケナム・スタジオで「レット・イット・ビー」にとりかかった。あの時はまだ「ゲット・バック」という仮タイトルでね。監督はマイケル・リンゼイ-ホッグ。ビートルズがリハーサルを始め、ジャム・セッションをやりながらだんだん調子を上げていき、最後にどこかで大々的なコンサートをやって締めくくる、その流れを映していくというアイディアだった。始まりから終わりまで、どういうふうに進むものかを見せようと思ったんだよ。僕はラスト・シーンのアイディアも考えてた。大規模なカメラ移動ショットでズーッと撮っていって、次にパッとコンサート風景に変わる、というようなさ。

もともとのアイディアでは、大型船に乗って世間にさよならするはずだった。リハーサル・シーンから切り替わって、そこでクライマックスのエンディングを迎えるわけ。だけど現実にはトゥイッケナムになっちゃった。監督にとっても誰にとっても、まあその方が安全なやり方だったと思う。そもそも船を使う案には、みんなさほど乗り気じゃなかったしね。その頃は僕らの関係もちょっとピリピリした感じになってきてた。長いこと一緒にやってるうちに、ひびが入ってきちゃったのさ。

ジョージ　最初にアイディアを出したのはポールだったと思う――新曲を何曲かリハーサルして、それからどこかいい会場を選んでコンサートをやり、その場でレコーディングしようって。曲を覚えたら、オーバーダビングを重ねたりしないでレコーディングしちゃおうというのさ。つまりライブ・アルバムだね。

ポール　ライブの感じを狙ってセッションしてたわけじゃない。まあ結果的にそうなったかもしれないけど、ライブ盤を作ろうと意識していた覚えはないよ。あとでアップル・スタジオに入ったらとてもいいセッションになったし、すごく楽しくやれたのを覚えてる。おもしろかった。

ジョージ・マーティン　当時の彼らは変革期にあり、何か新しいものを考え出そうとしていた――そして新しいエンジニアを入れたいと言いだし、ジェフ・エメリックの他にグリン・ジョンズが参加することになった。ほんとはプロデューサーを替えたかったのではないかと思うよ。だが彼らがじかに私に言ってくることはなかった。それで私はまだ残っていたわけだ。

その一方で彼らはとてもおもしろいアイディアを考え、私もこれはやってみる価値があると思った。アルバムの曲を準備し、それをリハーサルしておいて、大観衆の前で披露しようというんだ。新曲をライブでアルバムに収めるわけさ。ライブ盤というと、たいていそれまでの曲の焼き直しだろう。でも、彼らはこう考えた。"まだ誰も聴いたことのない、まっさらな新作を、オーディエンスの前でやってみよう"。

すばらしい考えだった。ただし、2月のイギリスで野外コンサートなど不可能だし、ビートルズ・ファンが入りきれる会場などどこも取れなかった。そこで我々は海外でのステージを考え始めた。カリフォルニアはどうかと思ったが、それでは経費がかかりすぎるだろう。マラケシュへ観客ともども大移動というのも考えたが――実現はしなかった。最後まであれこれもめて、結局はどこも除外された。そのまま彼らはトゥイッケナム・フィルム・スタジオでリハーサルを始め、私も参加した。

だが衝突が多くて、方向が定まらない。この時はほんとに舵取りがいなかった。彼らはお互いが気に入らずにケンカばかりしていた。

ジョン　僕が何の決断も下さなかったのはわざとじゃない。すべて無意識だよ。僕は朝9時に会社に行くみたいに、ビートルズのレコードを作ってた。ポールか誰かが"レコードを作る時期だ"って言う。すると僕はスタジオへ行ってレコードを作る。中身のことはあんまり深く考えてなかった。セッション自体は、いいセッションならいつだって楽しめる。プレイが楽しければそれでよかった。退屈なら退屈で仕方ない。とにかく、ただの仕事になってた。1969年

ポール　覚えてるよ。ミーティングで「レット・イット・ビー」の話をしてる時、ジョンがこう言ったんだ。"ふん、わかった。こいつ仕事がほしいんだ"。それで僕は言った。"そう、そうだよ、そういうことだと思うよ。僕らは仕事をするべきだと思うんだ。その方がいいじゃないか"って。みんな夏のオフを楽しんだあとだし、何かやるべきじゃないかって気がしてたんだ。僕はみんなを説得して、「レット・イット・ビー」をやるところまでこぎつけた。ところが始まったらひどいケンカばかり――それで結局、僕らがほんとに作りたかった映画ではなくて、ビートルズの分裂映画になっちゃったんだ。その方が話としてはおもしろかったかも――悲しい物語だけどさ。どうしようもないよね。

ニール・アスピノール　トゥイッケナムでやるっていうアイディアに全員が賛成だったのかどうか、よくわからないけど、とにかく彼らは、自分たちのやることをすべてそのまま撮影しようと決めた。プロデューサーのデニス・オデルが、撮影するならカメラを置くスペースが必要になるって言ったんだよね。「ヘルプ!」でも「ア・ハード・デイズ・ナイト」でも、トゥイッケナム・フィルム・スタジオを使ってたから、結局そこになったんだ。1月のトゥイッケナムといったらとんでもなく寒くてね、あんな場所でアルバムを作るなんておかしな話だよ。半分レコーディングで半分撮影という感じだった。まるでまともじゃなかったね。あそこでくつろげる人なんていないよ。撮影スタジオに大きなサウンド・ステージを作って――レコーディング・スタジオの設備がないから、ポータブルの機材を持ち込んでやってたんだ。クリエイティブな仕事をしようとしても、何から何まで映されてたんじゃ、理想的なレコード作りとは言えない。

ジョン
何ひとつ新しい手を
思いつかなかったらどうすればいい?
さて、僕らがLP作ってるところを
撮ったドキュメンタリーがある。
最悪なのはそれを見せないことだよ。
僕らがどんなことをやるにしても、
常に一番大切なのは
コミュニケーションだ。
テレビに出るのも
コミュニケーションだよ。
僕らは「オール・ユー・ニード・
イズ・ラヴ」みたいに、
みんなににっこり微笑む機会を
もらえるわけだ。
それが、僕がそういうことを
やる動機だよ。
1969年

ポール　実際どうなったかというと、
僕らがあそこへ入ってからは、
バンドというものがどういうふうに
分裂していくかを見せることになったんだ。
ほんとに解散することになるなんて、
その渦中にいる時は
気がつかなかったけどね。

ジョン　「レット・イット・ビー」の撮影は地獄だった。映画が公開されると、ヨーコがあまりに陰気すぎるっていろんな人から不満が出た。だけどビートルズをどんなに好きなファンだって、あの悲惨な6週間を耐えしのぶのは無理だよ。この世で一番悲惨なセッションだった。1970年

CamScannerでスキャン

ジョージ　1969年の映画の撮影では、[illegible]

[illegible]それがそのまま映画に出てくるんだよ。僕が"なあ、そういう弾き方はしないでくれ"と言い、それに僕が言い返す。"どうでもお望みどおりに弾くよ。僕に弾くなって言うなら……弾かないよ。どうでもいい、君が喜ぶようにやってやる……"。

ケンカしてる僕らを撮影してるんだぜ。殴り合いまではいかなかったけど、僕は思ったね。"こんなことして何になる? 僕はひとりでいても十分楽しくやれる。でもこんな状況じゃ楽しむなんて無理だ。こんなところにいたくない"。誰もが一度はそういう気分を味わった。リンゴも一時期バンドを離れていたしね。ジョンも抜けたがっていたはずだ。とにかく、ものすごくストレスの多い、重苦しい時期だった。ケンカしてるところを撮影されるっていうのもひどい話だよね。僕はそれで思ったんだよ。"もうこんなことはごめんだ。僕はもう抜ける"って。それでギターを持って家に帰り、その日の午後に「ワー・ワー」を書いた。

リンゴ　ジョージが抜けたのは、ポールとひどくやりあったのが原因さ。あの日は何だかあのふたり、うまくいかなくてね。それでジョージは出て行くことにしたんだけど、ジョンにも僕にもポールにも、何も言わなかった。午前中からちょっとぴりぴりした雰囲気でさ、でもどっちみちケンカはいつでもしてたんで、昼食の時まで、誰ひとりジョージが帰っちゃったことに気づかなかったんだ。食事が終わってもジョージはまだ戻ってこなくて、それで僕らはメチャクチャなジャムをやりだした。ポールはベースでアンプをぶったたくし、ジョンはイカれた音しか出さないし、僕は僕でそれまで聞いたこともないような変なドラミングをやってた。僕は普通あんなプレイはしないよ。あの時の僕らの反応ってのは、まったくもっておもしろいね。それに当然のごとく、ヨーコが割り込んでくるだろ。いつだって彼女がいたからね。

ポール　僕が何か提案をして、それがたとえばジョージのやりたくないことだったとする。するとすぐにちょっとしたケンカになるんだ。実際ジョージはバンドを脱けたしね。ほんとの理由はわからないけど、みんなは僕がイバってると思ってたんだろう。

僕みたいに何でもきちっとやりたがる人間は、我が強いように見られがちなんだよ。僕はすぐ夢中になって、何かにのめりこみすぎちゃって、ひどい早口で喋りだす――"いいじゃないか、いけるよそれ。月曜の朝に集まろう――トゥイッケナムね――やろう、やろう――そりゃいいよ……"。そのうちにちょっとやりにくくなってくる。"ビートルズが練習してるところを映画にしたらすごくおもしろいんじゃないか、きっと最高だよ"って僕が言うと、みんなは、"ふうん、ほんとにそんなのやりたいの?"みたいな感じでね。まったく気のない反応だ――それに僕も、自分がどんな態度をとってたかよくわかってなかった。

今あの映画を見直すと、ちょっと偉そうだなって思われても仕方ない気がするよ。しかも僕はプロデューサーでも監督でもない、バンドの一員にすぎないんだからね。僕にしてみればやる気になってただけなんだけど。だから監督とじっくり話し合おうともしたんだよ。とはいえ、それがケンカの原因になったこともあったんだと思う。そういうケンカをしてるうちに、ジョージは"いいよ。僕はもうこんなことやりたくない!"って言い出した。確かあの時僕は、彼のプレイについて何か提案してたんだ。バンド[illegible]そういうことをやるってのは、常に危険を伴うものなんだよね。

「ヘイ・ジュード」の最初のリハーサルの時、僕が"Hey Jude……"って歌うと、ジョ[illegible]ジがギターで"ダドゥ・ダドゥ"ってつけた。そのまま"Don't make it bad……"と続[illegible]ると、また"ダドゥ・ダドゥ"って返してくる。すべてのラインに返してるんだ――それ[illegible]は"ストップ!"って。"ちょっと待ってくれよ。そういうのはいらないんじゃないか[illegible]返しのラインを入れるとしたらあとにしよう。ここはまず、シンプルに始める方が[illegible]いと思うんだ"とね。すると彼は"ああそう、はいはい、わかったよ"みたいな言い[illegible]する。ちょっとそんな雰囲気になってきてたのさ。彼は僕の言うことが気に入ら[illegible]ったんだ。

[illegible]ドというのは民主主義だから、彼は僕の言うことを聞く必要はないわけ。彼はいつでもアイディアを出すことにうんざりしてきてたんだと思うよ。彼の目には、僕[illegible]ドを牛耳ろうとしてるように映ったんだろう。僕はそんなことする気もなかった[illegible]もそういうふうに見えたんだね。

[illegible]思うに、そういうところから結局ビートルズは解散することになったんだ。僕は[illegible]アを出すのがよくないことかもしれないと思い始めた。以前ならいつだって、[illegible]手放題なことだろうと、何も考えずにどんどんアイディアを言えたのに。

[illegible]・ジュード」にはギターのアンサー・フレーズは入れない方がいいって、それだ[illegible]しても通したかった――僕にとっては重要なことだったんだ――だけど当然、[illegible]にそう言えば、彼がそのアイディアにこちらほど乗り気にならない場合はさ、[illegible]を追い出そうとしてるように見えちゃうだろう。ジョージはそういうふうに感

[illegible]いつもの曲に弾き方を教えるようになったんだ[illegible]他の気持ちは僕にもわかるよ。

僕の曲には[illegible]それからは自由にアイディアを出せな[illegible]ようになったんだ[illegible]ないか?"[illegible]曲はそんなことない[illegible]いいアイディアだぜ。この曲は[illegible]結局これでいけるかって簡単に済ませたんだ。

ジョージ　僕自身は、何枚か前のアルバムから感じていたことだった――たぶんツアーをやめてからだと思う――ミュージシャンとしてプレイする自由がなくなってきてるってことさ。主な原因はポールだよ。昔だったらみんなで集まり、子どもの頃みたいに、それぞれギターを手にとって、全員で曲とコードを覚えて、それからアレンジをどうするかって話を始めたんだ。

でもそれが変わってきた。たぶん『サージェント・ペパー』の頃からだと思うけど、だから僕はあのアルバム作りをあんまり楽しめなかったのかもしれない。ポールは自分の曲をどうレコーディングするか、最初から自分の頭のなかで決めてるんだよ。彼は他のみんなの意見を聞こうとしなかった。そういう点ではジョンの方がよっぽどオープンだったね。ジョンは自分の作った曲でも、レコーディングに関しては人の意見を取り入れてた。

ポールとは最高に馬鹿馬鹿しい状況までいったよ。僕がギター・ケースを開けてギターを取り出そうとしたら、彼が"いいよ、いいよ、まだやらないから"って言うのさ。"リンゴと一緒にピアノ・トラックを入れて、そのあとでそっちをやる"。それでこちらはやることがなくなっちゃって、ただボケッと座って、彼がリンゴにテンポをとらせながら、"Fixing a hole……"って歌ってるのを聴いてるだけ。そのあと彼がベース・ラインやら何やら、自分ですっかりオーバーダビングするわけだ。

息が詰まりそうになってきてた。たとえ今度のアルバムがそういった形のレコーディングから離れることを目指していたにせよ(ライブ録音に戻るつもりだったからね)、結局のところ状況はほとんど変わらなかったんだ。彼のやりたいことはすでに彼の頭の中で固まってるんだから。ポールは自分でアレンジや何かを決めるまで、誰にも自分の曲をいじらせようとしなかった。僕にすれば、"いったい僕はここで何をしてるんだ? こんなんじゃ耐えられない!"って感じだよ。

そういうところへさらにヨーコまで加わってきたんだからね。あの頃はマイナスのムードしかなかった。ジョンとヨーコは孤立無援の状態だったよ。ジョンはもう、あんまり僕らとつきあいたくなかったんじゃないかな。それにヨーコが、バンドを脱けるようにけしかけてたと思うね。彼が僕らと一緒にいるのが嫌だったのさ。

ただ、これは言っておくべきだと思う。つまりね、いろいろあったけど、それはもう過ぎた話だってこと。今じゃみんないい友だちだし、時間が経てば過去のことも理解できるようになるもんだよ。だけどこうして当時のことを話していると、変な状況だったんだなってつくづく感じるね。

リンゴ　ジョージはどんどん曲を書くようになってた。彼だって自分の望む方法でやっていきたくなるさ。デビュー当時は基本的にジョンとポールのやり方でやってた。曲を作るのはあのふたりだったからね。でもジョージが自分でやっていけるようになってきて、ポールにあれこれ命令されるのを嫌がるようになった――だってポールはジョージにソロの指示まで出すようになってたんだよ。それでジョージは"なあ、僕はギタリストなんだよ。ソロは僕が弾くさ"って。実際彼はいつでもそうしてたし、いつでもすばらしいソロを弾いてた。なんか、だんだんとね、"この曲は僕が書いたんだから、僕の好きな形でやりたい"って、ちょっとそんな感じになってきてたんだよ。前はそうじゃなかった。"こういう曲書いたんだ――いいアレンジを考えてよ"っていうふうにやってたのに。

ポール　ジョージが抜けたあと、ジョンの家でミーティングを開いた。確かジョンの最初の言葉は、"エリックを入れよう"だったよ。"ダメだ!"って僕は言った。ジョンは半分冗談で言ったんだろうけどね。"それはダメだ、ちょっと待ってくれよ。ジョージが出て行ったからって、そういうことはできない――それはちょっと許されないことだ"って僕らは思った。

リンゴ　全員でジョージの家に行って、僕らは君を好きなんだって言ったんだよ。それで解決して、戻ってきてくれた。

ジョン　ポールの考えってのはこうだ、みんなでサイモン＆ガーファンクル風に完璧を目指してリハーサルする――そしてそれからアルバムを作る。だけど、言うまでもなく僕らは怠け者のバカヤローだろ、しかも20年近くも一緒にやってるんだ――大の大人がダラダラとリハーサルなんかやってられるもんか。そんなわけでみんな気が乗らなくて、何トラックかやるともう全員がやる気なくしてた。

とにかく最悪、恐ろしく不快だった。しかも四六時中カメラがまわってるんだぜ、どっか行ってくれって思ったよ。朝の8時からやってるんだ、朝の8時に音楽なんかできるかよ。いや、10時だろうが何時だろうが、あんな奇妙な場所じゃ無理だ。カラーの照明なんか当てられて、カメラで映されているんじゃね。

CamScannerでスキャン

これも「マジカル・ミステリー・ツアー」と同じだよ。要するにポールがやりたかったのさ――そろそろ次のビートルズ映画か何か作らなきゃってわけ――彼が僕らを引っ張り出したかったんだ、とにかく何かやらせたかったんだよ。そんな時、たいていジョージと僕は"えー、そんなのやりたくないよ"とか言ってた。だけど彼が準備しちゃうのさ。どこへ行くだとか何だとかあれこれやり合ってたけど、僕はただ、ハイハイってくっついてっただけ。あの頃はもうヨーコがいたし、何もかもどうだってよかったんだ。それに僕はいつだってラリってたからね、ヘロインとかいろんなのでさ。何がどうなろうと知ったことじゃなかった――ほんとはみんなもそうだったんだよ。あの映画でも出てくるけど、僕が「アクロス・ザ・ユニバース」をやりだしたら、ポールがあくびしてブギーを弾き始めた。すかさず僕は"あれ、テンポの速いのをやりたい奴がいるわけ？"って。もうそんな感じだったよ。そういうのが何年か続けば、誰だってうんざりしてくるさ。1970年

ポール　「レット・イット・ビー」の時は、ずっとそんなことばかりだったね。ジョージはバンドを抜けた。指図ばかりされてるって思ったからさ（僕はそれが理由だと思う）。その前にリンゴも脱けたことがある。ドラマーとして僕らに認められてないと思ったんだ。僕の場合はジョージの時ほど厄介じゃなかったかもね。だけど一方ではジョンも脱けたがっていたし、実際には僕らみんな、入れ物全体に亀裂が入り始めたのを感じてたんだと思う。

ジョン　ビートルズが頂点に達した時には、もう互いに他の奴の鼻をへし折ろうとしていたんだよ。ある種のフォーマットに押し込めなきゃって無理することで、自分たちの曲作りの能力も演奏力にも歯止めをかける結果になった。だからトラブルが起きてきたのさ。1971年

僕らは憎み合ってたわけじゃない。これまで僕は百万回くらい結婚にたとえてきたけどね、独身の人や恋人がいない人でもわかると思うんだ。ビートルズというのは長いつきあいだったんだよ。アメリカのマスコミやイギリスのマスコミに出る何年も何年も前から、僕らの関係は始まってたんだ。ポールと僕は、ポールが15で僕が16の時から組んでいた。ずっとずっと昔から、僕ら4人は一緒だったんだよ。その結果どうなったかというと、退屈もあり、あまりにいろんなことが起きたこともあり――エプスタインが死に、みんながビジネスがらみでうるさく言ってきてさ――そういうプレッシャーが全部のしかかってきて、ついに僕らは押しつぶされちゃったんだよ。そうなると、ずっと一緒にいる者同士はみんなそう、互いに粗探しを始めるわけなんだ。"おまえのせいだ――おまえがタンバリンの叩き方を間違えたんだ――だから俺の人生はこんなに惨めになったんだ"ってね。すごくみみっちい話になってたよ。でも自分たちしかいないから、互いにぶつけ合うしかないのさ。

ひょっとすると「レット・イット・ビー」のカメラのせいかな――そもそものアイディアは、何かまやかしを作り出そうっていうことだった。カメラがまわってて、ほとんど「マジカル・ミステリー・ツアー」と同じような感じだったけどね。でも前回はまだ、ちょっとした魔法を引き出すことができたんだ。

ところが「レット・イット・ビー」の時には、もう僕ら、こんなゲームは続けられなくなってたのさ。互いに相手の心の奥が透けて見えるし、そうなれば居心地悪くなってくる。それまでは自分たちがやってること、自分たちが生み出すものを本気で信じてた。だからすべてをきちんとやらなきゃって気になった。僕ら信じてたんだよ。だけど急に信じられなくなった。もはや魔法を生み出すことはできない。そういうところまで来ちゃってたのさ。

70年

ジョージ・マーティン　ポールはみんなを仕切ることで、何とかまとめていこうとしていた。彼はみんなを動かすのがわりとうまかったからね。だけどジョンとジョージはそういうことをされるのが嫌だったんだよ。

ジョンの方が厄介だった。常にヨーコが一緒だったし、ひどく遅刻してきたり全然顔を出さなかったりで――そういうところから、すごくぎくしゃくした雰囲気になっていったんだよ。実際彼は面と向かって私に言った。"あんたのプロデュースなんていらないよ。これは正直なアルバムにしたいんだ"とね。"正直なアルバムとはどういう意味かね？"と訊ねると、彼はこう言った。"編集はしたくない。オーバーダビングも一切使わない。そういうものにするんだ。レコーディングしたものを、そのままいじらずに出す"。そこで私は答えた。"けっこう、そういうのを望むなら、そのとおりにやろうじゃないか"。

ところがいざ曲にとりかかると、どうもうまくいかないのでもう一度やり直しということになる……次もまたやり直し……いつの間にか19テイク目になる。"なあジョン、ベースはテイク17より落ちるけど、今のボーカルはかなりよかった。もう一度やってみよう"。43テイク目。"うん、どうかな……"いつまでも終わらないわけだよ。完全なものなどありえないのだから――ひどく疲れるだけだ。

ジョージ　呼び出しがかかってね、サリー州エルステッドの、リンゴがピーター・セラーズから買った家でミーティングをやった。その結果、またみんなで集まってアルバムを完成させるべきじゃないかってことになったんだ。トゥイッケナム・スタジオはものすごく寒いし、あんまりいい環境じゃなかったから、そこはやめてサビル・ロウのレコーディング・スタジオに移ることにした。

CamScannerでスキャン

ニール・アスピノール　1月20日には、みんなサビル・ロウに移ろうと決めてたよ。マジック・アレックスがそこへスタジオを建てていてね。まだ完成してなかったから、コントロール・ルームもコンソールもケーブルだらけで、ポータブルの機材を持ち込むしかなかった。でもスタジオそのもの、実際にプレイする部屋はずっとまし、ずっと居心地よかったよ。前よりよっぽど落ち着けた。

リンゴ　1日1日が長かったなあ。つまらない日もあったしね。トゥイッケナムじゃいい雰囲気になるわけないさ。納屋のでかいやつみたいだったもの。それでアップルの地下にある新しいスタジオに移ることにしたんだ。

アップルの設備はすばらしかった。すごく快適でね、それにあそこは僕らの場所だから、家みたいなもんだった。行くのが楽しみだったよ。仕事してない時は暖炉のまわりに集まってさ。暖炉は僕らがつけたんだ、ほんとに居心地よくしようと思って。

プレイバックしてみて、火を焚いちゃいけないってことにようやく気づいたんだ。聴いてると"パチパチ"って音がするんだよ。"いったい何だ、これ？"ってみんなで言ってたんだけど、そのうちやっとわかった。暖炉で薪が燃えてる音だ！ ずっとスタジオにこもってるから過ごしやすくしようと思ったんだけどね。でも当然ながら、そんなのは許されなかったわけだ。それでレコーディングの時には火を消さなきゃならなくなった。

このアルバムではグリン・ジョンズと組んでたけど、あんまりよくない気がして、またジョージ・マーティンに戻したんだ。

ジョージ　どうして最初からジョージ・マーティンが加わってなかったのかな。誰かがグリン・ジョンズを使おうって思いついたんだよ。ちょっと変えてみようってくらいの気分だったんだろう。人間関係なんかじゃないよ。

サビル・ロウはいいビルだったんだ、建築業者が入ってきてテスコ（イギリスのスーパーマーケット・チェーン）に変えてしまうまではね。僕らがあそこを買おうかと考えてた頃、見てまわったのを覚えてるよ。地下はすごくよかった。大きな暖炉があって、オークの梁が渡してあって。前はジャック・ヒルトンのナイトクラブだったんだって誰かが言ってた。"最高じゃないか！ ここへ来て、曲を書いて、レコードを作ろう"って僕ら思ったよ。

ところがスタジオになってみたら、何もかも覆い隠されて、ポリスチレンの天井のひどい部屋に変わってしまった。もとを正せば、スピーカー16個を持つ16トラックのスタジオを"建てた"アレックスが悪いんだよ。結局は全部取り外してやり直さなきゃならなかった。ステレオ・サウンドにスピーカーは2個しかいらないんだ。あれはひどかったね。

だけど、そういう面で変わってしまったにせよ、トゥイッケナムよりは仕事場としてマシだった。

ジョージ・マーティン　マジック・アレックスは、EMIはまるでダメだ、自分ならもっといいスタジオを作れると言ったんだ。まあ結果としてそれは嘘になったわけだがね。サビル・ロウでレコーディングすることになって、私はEMIの機材を持ち込まなくてはいけなくなった。

当時アップルのオフィスはかなり貧弱だった。時代遅れの白いペンキで、病院みたいな感じでね——居心地はよかったが——でもスタジオの方は救いようがなかった。あれはただのガランとした部屋にすぎない。それどころかマジック・アレックスは、技術的な知識を十分持っているはずなのに、スタジオとコントロール・ルームの間に穴を開けるのをすっかり忘れていた。だからドアからケーブルを通さなきゃならなかった。しかも片隅ではエアコンの音がやかましくて、レコーディングの時はスイッチを切らなきゃいけない。それを除けば理想的だったよ！

リンゴ　あの頃はみんな、僕らにちょっと嫌気がさしてきてたと思うんだ。僕らはすごく時間をとってたしカッカして、言い合いばかりしてたからね。人生のことでも。何のことでもさ。

ポール　アップルの設備でも問題なかった。ジョージ・マーティンがトゥイッケナム・スタジオと同じことをやってくれたから。つまり、ちょっとした急場しのぎさ。だから大丈夫だったんだよ。スタジオはまだ出来上がってなかったけど、技術的な面では完全だった。

デレク・テイラー　スタジオにセントラル・ヒーティングがあったんだけど、防音になってなかった。誰かがそれを指摘したんだ。"セントラル・ヒーティングの音がうるさいぞ"って。するとビートルズは言った。"レコーディングの時は消すよ。暖炉の火なら静かだろ"。それはいいけど、ビルの他の部屋は地獄になっちまう——彼らも普通の人間なんだ、一般庶民だよ。判断を間違えるのはマスコミだけじゃないってことさ。

とにかく、スタジオめいたものはあった——だが結局、『レット・イット・ビー』をあそこで作るとなると、ポータブルのレコーディング・システムを持ち込まなきゃならなかった。ほんと、すごい高級なガス・レンジがあるのに、ガスを引いてないから携帯用コンロで料理してるようなもんだね。

だけど、そういう中であれだけのアルバムができたんだ！ あの時期、アップルの混乱きわまる時期に、"ホワイト・アルバム"が出て、『イエロー・サブマリン』と『レット・イット・ビー』と『アビイ・ロード』が完成した——すべて、あの狂った時期に作られたんだよ。

ジョージ　エリック・クラプトンと一緒にフェスティバル・ホールへレイ・チャールズを見に行った時のこと、レイがステージに出てくる前にオルガンを弾いてる男がいたんだよ。踊りながら「ダブル・オー・ソウル」を歌っててね。"どっかで見たことあるな"って思ったんだけど、僕の記憶よりでかいような気がしたんだ。そのうちレイが出てきて、バンドが何曲かプレイしたあと、もう一度彼が紹介された……ビリー・プレストン！ レイは言った、"ビリーがプレイするのを聴いてから、僕はオルガンを弾くのをやめた——そっちは彼に任せることにしたんだ"。"やっぱりビリーだ！"って思ったよ。最後にハンブルクで会ったのが1962年だ。あの頃の彼はまだほんの子どもだったのに、その時はもう180センチを超える大男になってた。

それで僕は伝言を残して、もしビリーがロンドンにいられるんだったらサビル・ロウへ寄るようにって言ったんだ。それで来てくれたんだよ。彼が来た時、僕らは地下で「ゲット・バック」のリハーサルをやってるところで、僕は迎えに出て言ったんだ。"一緒にやらないか、みんなツンケンしちゃっててさ"って。彼はすっかり喜んでね。ともあれ僕は他のメンバーもビリーを大好きだってわかってたし、それで新鮮な空気が入ることにもなった。

おもしろいね、ゲストを呼ぶとみんなほんと感じがよくなるんだよ。すごく意地悪な人間だってことを人に知られたくないからさ。"ホワイト・アルバム"の時も同じことがあった。僕がエリック・クラプトンを連れてきて「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」でプレイしてもらった時だ。いきなりみんな、ものすごく態度がよくなったんだよ。

ビリーが降りてくると僕は言った。"ビリーを覚えてる？ 実は今ここに来てるんだ——彼にピアノを弾いてもらおう"。彼がエレクトリック・ピアノの前に座ったとたん、スタジオの雰囲気が100%改善された。5番目の人間を連れてくるだけで、僕らの間に張り詰めていた氷が溶けたんだ。ビリーはそこでどんな駆け引きやらゲームやらが行なわれていたか知らない。何も知らないまま入り込んでくれたから、バンド全体にちょっと弾みがついたんだ。他人が加わった方がみんな喜んだし、レコーディングも楽しくなった。全員のプレイがよくなって、すごくいいセッションだったよ。レコードにもそれがほとんどそのまま出ている。

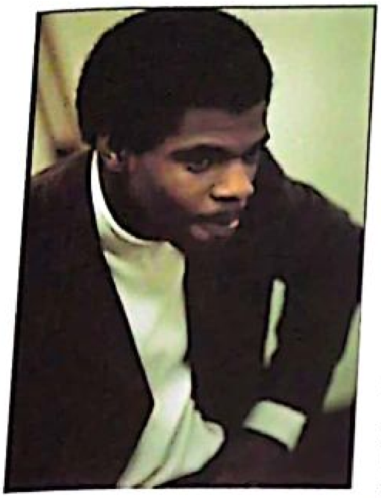
リンゴ　雰囲気がちょっとよくなったのは、別にビリー・プレストンが原因じゃないと思う。やってたのがいい曲だったからさ。いい曲をやってれば、僕らいつも乗ってくるんだよ。ビリーのプレイもひと役買ってるけど、とにかくいきなり——いいものをやってる時はそうなんだよ——くだらないことはみんな窓の外に飛んでっちゃって、僕らは本来やるべきことに戻り、それをしっかりやり遂げたわけさ。

「ゲット・バック」はいい曲だった。"こいつは気合いの入る曲だな"ってすぐ思ったよ。「ドント・レット・ミー・ダウン」もそうだね。この2曲はすごくいい。シンプルで荒削りで——基本に戻った感じだ。「ゲット・バック」には僕が作ったフレーズも入ってる。いいフレーズでね、その後コピーされた——実は僕がコピーしたんだ。「バック・オフ・ブーガルー」でね。ちゃんと僕の許可を得てるから問題ない！

ポール　ビリーはすばらしかったよ——あいつは神童だね。僕ら、彼とはずっと仲が良かった。彼がロンドンに現れたから、みんな"ビリーが来てるのか、そりゃいい——彼に何曲か手伝ってもらおう"って。それで彼がセッションに来るようになったのさ、何といっても古い仲間だからね。

おかげで僕らもセッションの間、互いに対する態度が和らいだのかもしれない。ただ、同時に問題も出てきたと思うんだ。というのは、ビートルズとしての僕らは、いつだって1人のバンドだった。僕らは固く結びついたユニットだった——頭が4つあるモンスターって呼ばれたこともあったくらいだ。

だからビリーが加わった時、確かに僕らはちょっと態度を改めなきゃならなかったけど——家に客を呼ぶようなものだったからね、人を招いたらお行儀よくしなきゃいけない——でもその裏には、もしかしたら彼がグループのメンバーになるんじゃないかっていう、かすかな不安もあったと思う。実際そうなってもおかしくない雰囲気だった。だからこれがすべてを壊す亀裂になるのか、それ



ともこのままうまくいくのか、僕らにもわからなかった。ちょっと戸惑いもあったね。
でも彼のプレイは最高だったし、みんなすごく楽しくやれたから、結果的にはよかった。

ジョージ・マーティン　ビリー・プレストンのおかげでずいぶん助かった。彼はとても優秀なキーボード・プレイヤーだよ。「ゲット・バック」の彼のプレイだけでも、彼を呼んだ価値は十分にあった。それに親しみやすい男でね、すごく性格がよくて、まわりを和ませてくれるんだ。あの頃のぎくしゃくした雰囲気の中で、彼が潤滑油になってくれたよ。

ジョン　「アクロス・ザ・ユニバース」は、もともと"ホワイト・アルバム"の最後にレコーディングしてたんだ。でもあのアルバムでは素材があまりにもたくさんあったんで、入れることができなかった。レコーディングの出来もよくなかったしね。あのダブル・アルバムが終わる頃には、みんなもうレコーディングにうんざりしてたのさ。残念だったよ、好きな曲だったから。1971年

あの曲は、ベッドで前の妻の隣に寝ながら考えてたんだ。もとはネガティブな歌だったんだよ。たぶん彼女が延々と何か喋り続けてたんだろう。そのうち彼女は眠った。でも僕の頭の中には聞こえてたんだよ、"言葉が果てしない流れのようにあふれ出し……"。僕はちょっといらついてたから、ベッドを出て下に降りていった。それでちょっと宇宙的な歌ができたわけさ。もとを正せば"どうしておまえはいつでも俺にあれこれ話しかけてくるんだ？"ってことだったのにね。

でも最初は誰もあの曲をやりたがらなかった。全員がげっそりしちゃってたから。曲はよかったんだ、でも無意識のうちに仕事したくなくなる時ってあるからね。僕はあれがビートルズの曲として出ないってことにすごくがっかりした。それでイギリス野生動物基金にあげて、そのチャリティ・アルバムとして出すことにした。1980年

その後「レット・イット・ビー」を作る時にもう一度やろうとしたんだけど、あの映画を見れば誰だってわかるだろ、僕があれをやろうとした時どんな反発を食らったか。結局フィル・スペクターがテープを引き受けて、すごくうまく仕上げてくれた。かなりいい音になったんで、もう1回リリースしたんだよ。1971年

あの歌詞はまったくのインスピレーションとして出てきたんだ、与えられたものだよ——1ヶ所か2ヶ所、組合わせなどでいじった部分はあるけど。あれは僕が作り出したんじゃない、そうやってどこからか出てきたものだ。1980年

ジョージ　「アイ・ミー・マイン」は、エゴの問題を歌ってる。"私"にはふたつある。人が"私はこうです"っていう時の"私"は小さな"私"だ。それに対して大きな"私"——すなわち"オウム"は、すべてを備えた、完全な、全宇宙的な意識だ。そこには二面性も、エゴもない。すべては完璧な統一体の中の一部なんだよ。小さな"私"がこの大きな"私"に溶け合った時、本当に自分の目の前が開けてくるんだ！

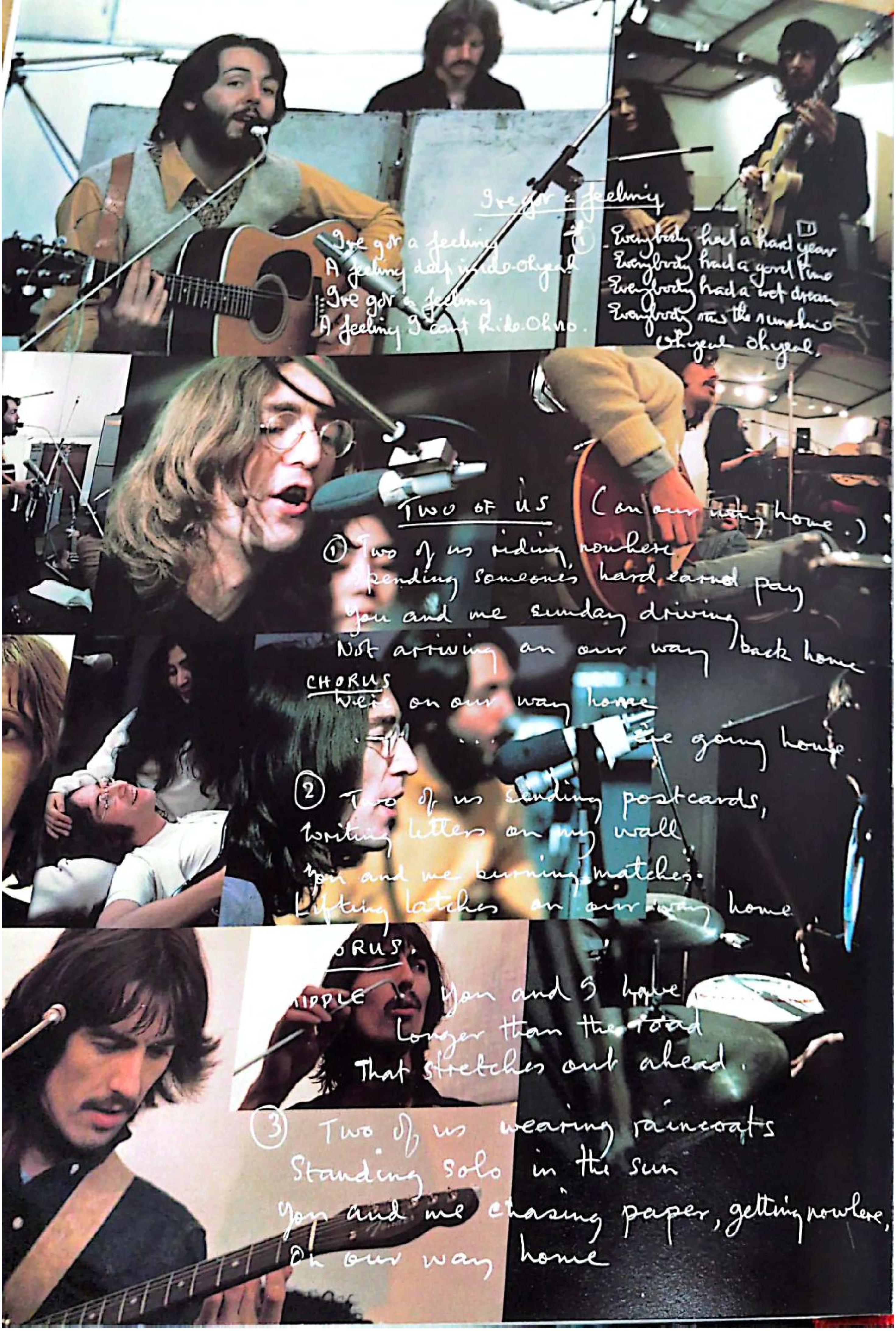
LSDをやったあとまわりを見渡すと、目に映るものすべてが自分のエゴに関わるものだった——"あれは僕の紙だ"とか"あれは僕のネルシャツだ"とか、あるいは"それを僕にくれ"とか、すべてが僕、僕、だった。おかしくなりそうだった。僕は自分のエゴのすべてを憎んだ——欺瞞的なまやかしのすべてが一瞬にして見えてしまって、たまらなく嫌だった。でもあとでそこから学ぶことができたんだ。この中には、べらべら喋るかつての自分（実際自分がそういう人間だって気がした——自分は人生で何ひとつ見ても聞いてもいないし実行してもいないのに、喋ることばかり一人前だって）とは別の人間が確かにいるってわかったんだ。"僕は誰なんだ？"。それが何より大切な命題になった。

ともかく、そこから「アイ・ミー・マイン」は生まれてきたんだよ。僕らの中にある真実に気づかなくてはいけない。それ以外はすべて、見えるものも手に触れるものも、香りとして感じるものも、ほんとのものじゃないんだ。それに気づいた時、実在とは何かがわかるかもしれない。そして"僕は誰なんだ？"という問題の答えが得られるかもしれない。

アラン・クラインはこれをイタリアの歌だと思ってたんだよ——「カラ・ミア・ミーネ」って。

デレク・テイラー　「レット・イット・ビー」セッションの間、僕は何度かアップルのスタジオに行った。数分しかいなかったけど、うまくいってるのがわかったよ。ビリー・プレストンがセッションに加わってから、すごく雰囲気がよくなっていた。なかなか楽しかった——トゥイッケナムは楽しくなかったけどね。これからどうするかって話を際限なくやってるって聞いてたし。その頃僕はちょうどパラノイアじみた考えにのめりこんでしまっていたから、彼らが"デレクとあのひどいオフィスをどうする？"って言ってるんだろうと思った。だから「レット・イット・ビー」で縁を切られるんじゃないかって、かなり心配だったんだよ——彼らがアップルに戻ってきて、もう一度あのビルに入ってくれた時は嬉しかった。1月終わりまで、2〜3週間くらいかな、いい時期だったよ。

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

ジョージ　「レット・イット・ビー」はもともと、新曲を全部リハーサルしてからライブでアルバムを作ろうというプロジェクトだった。でも現実にはまるで企画どおりにいかなかった。スタジオでのアルバムになったんだからね。曲をリハーサルしてる時にレコーディングして、レコーディングしてる僕らを撮影した。実際にはリハーサルやってる僕らの映画になったんだ。

ニール・アスピノール　船上コンサートの話はまだ消えてなかったんだよ。ギリシャの円形劇場でやろうとか、ロンドンのラウンド・ハウスはどうだとか。コンサートをやる場所のアイディアはいろいろあった。でも意見がまとまることはなかったのさ。

ポール　映画のエンディングにふさわしいものを探してたんだけど、"2週間でどうやって終わらせるんだ？"って問題があったからね。それで屋上でコンサートやったらどうだって意見が出た。そうすればみんなすぐ家に帰れるだろう。誰が言い出したんだかよく覚えてないな。僕がよく考えずに口にしたような気もするけど、はっきりは言えない。

リンゴ　どこかでライブをやろうというプランがあった。どこでやればいいかってみんなで考えてて――"ああ、パラディアムかサハラ砂漠だ"みたいなこと言って。だけどいろんなもの全部持ってかなきゃならないだろう。それで"屋上にしようや"って決めたんだよ。マルとニールが屋上に機材を準備してくれて、あそこであああいうのをやったわけだ。寒いし風は強いし湿っぽいし、だけどオフィスから覗いてる人たちはすごく喜んでたね。

ジョージ　ライブ・コンサートのアイディアは屋上で解決ということになった。どこかへ行くよりずっと簡単だったし、それまでそんなことした人はいなかったから。僕らが演奏を始めたらどんなことになるだろうって楽しみだったよ。あれはちょっとした社会勉強になったね。

アップルの受付ロビーにカメラを設置しておいた。誰にも気づかれないように窓の裏に隠しておいて、入ってくる人たちを撮っていたんだ。警察とかいろんな人がやって来て、"あんなことやっていいと思ってるのか！　早くやめろ"って言ってたよ。

ポール　ほんとおもしろかったね。マイクをセットし、ショーの準備をしてたら、どういうわけか通りを隔てた向かいのビルの屋上に、「レディ・ステディ・ゴー！」のヴィッキー・ウィッカム（彼女と言えばあの番組を思い出す）がいたのを覚えてる。彼女が友だち数人と一緒にそこにいて、そのうち隣の弁護士事務所の秘書たちも、そっちのビルの屋上にのぼってきた。

僕らはそれまでにリハーサルしてた曲を全部通してレコーディングすることに決めた。そこでいいテイクが録れたら、そのままレコードで使うことにする。あんまりよくなければ、地下のスタジオでやった以前のテイクを使う。ほんと楽しかったよ。外でやるなんて珍しかったからね。僕ら、もう長いこと、野外では演奏してなかった。

すごく粋なロケだったよね。ヴィッキー・ウィッカムとあと数人しか観客はいないんだから。誰も相手がいないところで演奏してたようなもので――空に向かってね。なかなかよかったよ。下の通りの様子も撮影してた――都会の紳士たちが大勢見上げてるんだ、"いったい何の音だ？"って。

ついにマル（カメラに入らないように、いつもそっと上がってきた）から、警察が文句を言ってきてるって報告が届いた。でも僕ら、"やめないよ"って言ったんだ。すると"逮捕するって言ってる"――"映画の締めくくりにちょうどいい。それでいこう。最高じゃないか！　それがエンディングだ。「ビートルズ、屋上コンサートで逮捕される」"。

僕らは最後までしぶとくやり続けた。ほんとおもしろかったな。僕はヘフナーのベースを使ってた――すごく軽くてね、気に入ってたんだよ。でもついに、グレーター・ウェストミンスター支部503号の警官が裏から回ってきて、"やめたまえ！"って。僕らは言ったんだ、"僕らをしょっぴけばいいさ、これはデモ・ライブなんだぜ！"

たしかプラグを抜かれたんだよ。それであの映画は終わりになった。

リンゴ　警察にはいつもがっかりさせられる。近所の誰かが通報したんだね、それで警察官がやって来た。僕はかまわずプレイを続けながら、"こりゃいい！　僕をしょっぴいてくれないかな"って思ってたんだ。警察に連行してほしかったんだよ――"そのドラムから降りてこい！"――撮影してたからね、引きずり降ろされたらすごい見せ場になるじゃないか。シンバルを蹴飛ばしたりなんかしてさ。だけどもちろん、そんなことはなかった。屋上へ来て、"音を下げろ"って偉そうに言っただけ。もっと素敵な場面になったはずなのに。

ジョージ　4～5曲やったのかな。電源を切られなければもっとやってたかもしれないけど――でもあれで十分だった。ラトルズもあれのいいバージョンをやってるね。

デレク・テイラー　1月30日、あの屋上でのコンサートの時、上から音楽が聴こえてきたのを覚えてる。僕はその日までずっと普段の業務で忙しかったから、仕事に来て初めて話を聞いたんだ。屋上で何かやるっていうのは知ってたけど、僕の業務とは関係なかったからね。僕は僕でやることがあった。でも表の通りの人たちを見て、コンサートが始まったのが聴こえて、こういう曲が聴けるのは最高だなって思ったよ。

僕はマスコミの対応で忙しくて、屋上へは行かなかった。電話をさばくのが大変だったよ。受話器を戻したとたんにまたベルがなるんだ。ビートルズが屋上で演奏してるってニュースは、あっという間にロンドン中の人に知れ渡った。あれはすばらしかったね。何ヵ月ぶりだろう、あんなに楽しくて前向きでスケールの大きなことが、何の揉め事もなしに進められたのなんて。

確かに一部の人にとっては、映画にも出てるように"騒音"だっただろう。だけどかかってきた電話のほとんどは、ビートルズがまた音楽をやってるって大喜びしてるマスコミからだった。あれはよかった――今見たって楽しいよ。

ニール・アスピノール　近所のビルにどういう人たちが入っているかなんて知らなかった。対立してたわけじゃないけど、いつでもファンがうろついてるんだからよく思われてなかっただろうね。それにあの屋上コンサートを気に入らなかった人もいた。でも僕はあの場にいなかったんだ。扁桃腺をとるんで病院にいたんだよ――だからあのコンサートを見逃しちゃったんだ！

ジョージ・マーティン　私は彼らが屋上で演奏している間、ずっと下にいた。治安妨害でサビル・ロウの警察署に連れて行かれるんじゃないかと、ひどく心配だったよ。

デレク・テイラー　あの屋上コンサートで、少し可能性が開けてきた。ああいう状況だったからね、彼らはもうライブ・パフォーマンスをやらないだろうと誰もが思っていた。"彼らはまたコンサートをやるかもしれない"と、こちらはずっと言ってたんだけどね。いきなりどこかでコンサートをやるかもしれない、という話は、1968年の後半にはずっと出てたんだ。だから実際あの屋上コンサートをやったあとは、すべてがまた浮上してきた。"彼らはまたパフォーマンスをやるかもしれない"ってみんな言い出した――あれがうまくいったせいだよ。

ジョン　あれで仕上げにした。一番しっかり仕上がったのが「ゲット・バック」だった。リハーサルはやってたもののちっとも完成しないから、僕らはうんざりして、リハーサルもメチャクチャになってきてた。ペチャクチャ喋ったり曲をいじくりまわしたり、そんなことばっかりやっててさ。そのうち他のアルバムに取りかかったもんで、そっちはそのままやめてしまった。それから疲れたんで休みをとろうってことになって。これは1枚のアルバムだけど、ブックレットをつけることになってた――アルバム作りの様子を印した本だよ――同時にメイキング・フィルムも作ってたから、そっちの仕上げもしなきゃいけない。僕らがアルバムを作ってるところを撮った、一種のドキュメンタリーだ。フィルムは68時間分あるから、ちょっと整理しないとね。トラウマもパラノイアも見事に出てるよ、レコード1枚作ろうとする時にふりかかってくることがすべて。1969年

CamScannerでスキャン

の頭にあった原則とは、どんなに成功しようと、
ートルズは常に偉大でちっぽけなバンドだったってこと。
れ以上でも、それ以下でもない。

ればすばらしいプレイができた――バンドとしてスタートした最初っからそう
がバンドに加わった頃から、いやその前から。でもリンゴが入った時、ほ
まとまったんだよ。バンドとしてうまくいってない時期はそんなになかった
、どこのバンドとも同じで、そういう時がないわけじゃなかったけどね。
切なのはそこだった――ライブをやらせれば僕らは最高のバンドだっ
もレコーディング・キャリアも、そういったことをすべて取っ払ってしま
れたバンドというところに帰るんだ。ああいうふうにライブ・パフォーマ
らにはあれこれもったいぶったオマケはいらないんじゃないかって全
思ったんだよ。とにかくプレイさえ続けていれば、何もかも自然と解
って。

まらなく感じるのは、バンドの全員でプレイしなくなったことだ。ビ
ゃなくなってきてる。ツアーをやめてからはレコーディングの時しか
だからレコーディング・セッションもほとんどリハーサルなしでやる
のはレコーディングの時だけだ。時々それすら気が滅入るような
手と一緒で、いつもやってないと腕が鈍るんだよ。でも僕らは何
からいきなりスタジオに入るだろ、それでまたすぐに正確な勘を
さ。気分をほぐし、みんなでプレイできるようになるまでには何
ートルズはこの数年、音楽的にはあんまりまとまってなかった。
テクニックはずいぶん身につけたけど、音楽的には初期ほど
全員がそれぞれのやり方を求めていたんだ。1972年

らん最後には「レット・イット・ビー」のドキュメンタリーは完成

した――いいところも悪いところも全部入ったままでね。グリン・ジョンズと私が音楽のプロデュースを担当した。彼らが望んだとおり、飾りを取り払ったアルバムに仕上がったよ。でもずっとリリースされないままだった。誰もあのドキュメンタリーが気に入らなかったらしいんだ、失敗だらけだからね。みんな洗練された作品に慣れていた――だからリリースされなかったのだと思うよ。

ジョン　テープは結局、海賊版みたいなものになってしまった。僕らはグリン・ジョンズにリミックスを任せて――あとはどうでもいいやって感じだった。彼にテープを渡して、"はい、やってくれ"って。僕らが一切関わらなかったなんて、デビュー・アルバム以来だね。僕らの誰ひとり、参加しようともしなかった。たぶん全員が"いいや、俺はやらなくても"って思ってたんだろう。テープは29時間あった。それだけテープの量があると映画みたいだね。どれもこれも20テイクずつ――リハーサルしながら、全部録音してたんだから。誰だってそんなもん相手にしたくないさ。

僕はこのまま出してしまえばいいって思ってた――あのどうしようもないバージョンをさ――そうすれば、それでビートルズは終わりになるかもしれない。それで神話が壊れるだろうって。"これがほんとの僕らだ、きらびやかなペンキを剥がした僕ら、何の希望もない僕らだ。身にまとってるものを脱いでしまえばこうなんだよ、だからもうこんなゲームやめようぜ"って言えるだろうと思った。でもそうはならなかったんだ。結局すぐ「アビイ・ロード」をやることになった。洒落たものを出して神話を守ったんだよ。1970年

ニール・アスピノール　映画を編集し、ユナイテッド・アーティスツとの契約がまとまるのを待ってたんだよ。アルバムの「レット・イット・ビー」は映画のサウンドトラックだ――だから映画が出るまで待ってたってことなんだよ。「アビイ・ロード」が先になったのは、本当はそういう理由だったんだ。

ジョージ・マーティン　「アビイ・ロード」は追加のようなものだ――言ってみればアンコールだね。「レット・イット・ビー」があの時期に出たのは、ジョンがフィル・スペクターに頼んでいたからだ。

CamScannerでスキャン

ジョージ　フィル・スペクターはアラン・クラインに近づいて、何か仕事をもらおうとしていたんだと思う。とにかく彼はクラインとつきあってた——たぶんクラインがビートルズに顔が利くのを知ってたからだろう。たしかクラインが僕らに持ちかけたんだよ、フィル・スペクターを呼んで、「レット・イット・ビー」を聴かせてみたらどうだって。

フィル・スペクターの作ってたレコードの感じ、僕は好きだよ。ああいう全面を覆い尽くすようなサウンド。僕は彼の大ファンだった。それに60年代初め、彼がロンドンにいた頃はちょっとつきあいもあったしね。だから僕はフィルを入れるというアイディアには賛成だった。それに彼は不運な目に遭って一時音楽をあきらめてたから、復帰したがってたんじゃないかな。僕はこれが立ち直らせる手段になるだろうって思っていたんだよ。

リンゴ　フィルはほんとに変な奴だよ。初めて彼に会ったのはニューヨークへ向かう飛行機の中だった。あの時、彼がいかに変わった人間かがわかった。だって彼は、"アメリカまで歩いていった"人だからね。飛行機が怖くて座っていられなかったんだ。それでアメリカに着くまでずっと、飛行機の中を行ったり来たりしてたんだよ。

それからずいぶん経って、またフィルと一緒になった。ジョンとヨーコがニューヨークのシラキュースで展覧会をやってた時だよ。僕らは何人か一緒に行くことになってて、最初バーで待ってた。僕らの飛行機がアナウンスされて、みんなで歩き出した時、この飛行機は危ないってフィルが言い出したんだ。それでまた全員でバーに戻った。それだけで僕らにとっては十分な理由になったわけさ。結局次の飛行機に乗った。飛行機のことになると、フィルはムチャクチャなんだよ。

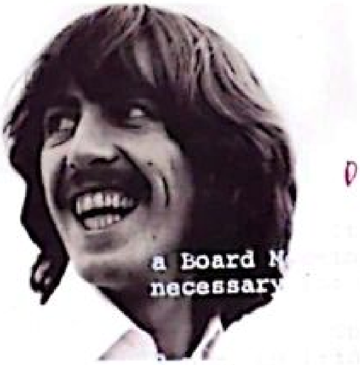
みんな彼のことをエキセントリックって言いたがる。とにかくかなり変わってるけどね、でもいい奴だった——それに音楽のこととなると、自分のやってることがちゃんとわかってた。

ジョン　コントロール・ボードを見事に操れる男だね。さりげなくやってしまうんだ。好きな音を何でも数秒のうちに作ってくれる。彼の知識といったらものすごいんだよ。僕は彼にずいぶんと教えられた。こちらが欲しいと思うイメージを説明するだろ、するとフィルはカメラで写すみたいに、最高のショットで切り取ってくる。舞台のセットを見せれば、そこからいい場面が出るようにしてくれる。いい音が出るようにね。そうやって、作りたいと思うものを引き出してくれるんだ。たいていの場合は、向こう側の人間がひっきりなしにあれこれ口を出してくるのがトラブルのもとなんだけどね。フィルはスタジオのどっち側にいてもよかっただろうな。バンドの一員みたいな感じで、レコーディング・ディレクターって雰囲気じゃなかった。彼は僕と同じで、くだらないロックが好きなんだよ。一緒に「インスタント・カーマ!」をやった時、彼が"どんなふうにしたい?"って言うから、僕は"1950年代風だな——今すぐやってくれ"って言ったんだ。彼はそのとおりにしてくれたよ。1970年

デレク・テイラー　「レット・イット・ビー」の時期にフィル・スペクターがやって来て、僕はその時初めて会った。イカれた奴だと思ったよ——それで好きになった。フィルは僕好みのおかしな男だった。一緒に休暇を過ごしたいとは思わないけどね。僕から見ても、あまりに"ぶっ飛んでる"人だったから。僕は何だかんだ言っても結局ウェスト・カービー出で、まともな、きちんとした妻がいるわけだ。そういうカミさんは、フィル・スペクターとかアラン・クラインとかいう飛んじゃってる人間と、夫をつきあわせたがらない——それでも僕は、少なくとも彼をうまく扱うことはできた気がしたね。

ジョン　彼をエキセントリックと呼ぶのは一番的外れじゃないかな。そういうのは間抜けな奴が言うことだ。1975年

ジョージ　ポールはフィル・スペクターを参加させたくなかったって言ったそうだ。「ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード」なんかの曲にオーケストラを入れたのが気に入らなかったとかって。でも僕個人としては、あれはすごくいいアイディアだと思ったよ。



ポール　僕にとっての「レット・イット・ビー」は、グリン・ジョンズがミックスした粗削りなレコード——オーバーダビングなし、オーケストラなし、何もなし。そういう、ほんとに、ほんとに、シンプルなものだった。バンドのみの、すごくライブっぽいサウンド——スタジオのも屋上のも——僕はそれがすごく気に入ってたんだ。あんまり売れ筋のものじゃなかっただろうけど。でもとにかく、そういうところからおかしな方向へ行き始めたんだよ。

ジョージ・マーティン　私はフィル・スペクターの「レット・イット・ビー」がまったく気に入らない。それまではずっと彼を尊敬していたんだが。彼のレコーディングはすばらしいと、ずっと思っていた——実際、彼はすばらしいサウンドを作っている。ただ、彼は「レット・イット・ビー」で、我々がそれまで許されなかったことをすべてやってしまった（しかもそれで成果を上げたとは言えない）。そのことで私はいささか彼を恨んだ。私に言わせれば、あれは下品で安っぽいだけだ。ビートルズのレコードの格を下げるような行為だ——私はそう思った。彼らのレコードが、他のみんなのレコードと同じに聴こえてしまう。

ポール　最近スペクターのバージョンをもう一度聴いてみたけど、どうしようもなくひどかった。僕は「アンソロジー3」に入ってるオリジナルの音の方が好きだね。

リンゴ　ほんと言うと、僕はフィルのが好きなんだ。彼は曲を違うレベルに持っていってくれた。彼は"サウンドで囲い込む"ことにかけては王者だからね。彼のやることが気に入らないんだったら、彼を連れてくる意味がないだろう——彼はそういうふうにやるってわかってるはずだ。彼の信用は確固たるものなんだから。

ジョン　彼は以前からビートルズと仕事をしたがっていたんだよ。その彼に与えられたのは、最悪の録音状態で、しかも不快感が詰まっているような、どうしようもないクズばかりだった。それを何とか形にしたんだぜ。立派なもんだよ。1970年

リンゴ　1970年5月、「レット・イット・ビー」はラスト・アルバムとして出た。でも言うまでもなく、最後にレコーディングされたのは「アビイ・ロード」だよ。この世の中がどんなによじれてるかわかるね——ラスト・アルバムの前のアルバムがラスト・アルバムとして出て、ラスト・アルバムがその前に出るんだから。僕らが解散したのは「アビイ・ロード」のあとで、その前のアルバムでは解散なんてまるで考えてなかったんだ。何から何まで、ほんと奇妙だよ。

あの映画を僕が編集したら違うものになってただろうね。ジョンがやったとしても違っていたはずだよ——ポールがやってもね。マイケル・リンゼイ=ホッグが仕上げたものより、ずっとおもしろいのができたのにって思ったよ。

ジョン　僕らはみんなが思ってる半分も稼いじゃいない。生活していくだけの金はあるけど、アップルをこのままの状態で続けていくのは無理なんだよ。最初はやりたいことをいっぱい考えてた——いろんな活動を支援しようって。だけどビートルズの例をいくつか見てもわかるように、結局うまくいかなかった。僕らは実務的なことに向いてないんだ。それに、こういうことをやっていくにはビジネスマンの頭脳が必要だってことに気づくのが遅すぎた。
　しっかり金が入ってこなきゃ、詩人にもチャリティにもフィルム・メーカーにも、ちゃんとした場を与えることはできないさ。初めっから絵空事にすぎなかったんだ。何もかも勘違いしてたんだよ——ポールと僕はニューヨークへ飛んで、"私たちはこういうことをして、これとあれを応援します"なんて言ってさ、あんなの間違いだったんだ。まずビジネスでなきゃいけないんだよ。僕らは今それに気づいた。改革してくれる新しい人間が必要だし、大勢の人にやめてもらわないといけなくなる。合理化しなきゃいけない。

ジョージ
アップルはある意味で、
落ちこぼれのための
避難場所だった。
僕らの親友たちの中には
落ちこぼれも
混じってたんだよ。
1969年

じゃんじゃん稼ぐ必要はないけど、このままの状態じゃ、僕ら全員があと半年で破産だよ。 1969年

リンゴ　アップルはまともに動いてなかった、というか、実際には動きすぎたんだ。みんなであっちやったりこっちやったりしてさ。僕はアップル・フィルムズの担当だった——1967年に『キャンディ』を作ったあと、やってみようという気になったんだ。そういう具合に、全員がアップルのどこかを仕切っていたんだけど、最後には誰かすごく力のある奴にまとめてもらいたくなったんだ。それがアラン・クラインの仕事になるはずだった。

ジョン　僕は会計士から手紙を受け取った。"あなた方にはお金がありません、このままでいくと、現在残っているものもすべて手放すことになります"ってね。彼は僕ら全員にそういう説明を送ってるはずだけど、ちゃんと読んだのは僕だけだったんだろう。それで僕はマスコミに発表した。"このゲーム、このアップルというビジネスをやめないと、僕らは破産する"って。
　でもみんな、"いやいや、何もかもうまく行ってるじゃないか"って言いたがるのさ。王室と同じだね。王室の人間はいつだって、絶対泣かない、トイレにも行かない、そんなことはやりませんって顔してる。でも王族だってみんなと同じなんだよ——彼らだって泣くことはあるし、トイレにだって行くんだ。
　他のみんなだって、財政を引き締めたいとは思ってたはずだよ。でもほんとの意味がわかってなかったと思う。いや、みんな感じてはいただろうさ。時々ジョージは怒り狂ってた。ビルに来てみたら、酔っ払った奴が何人もそこら中に寝転がってるって。そういう人間はみんな会社にたかってるんだ。でもどうにもできなかった。しっかりした人間の手を借りてやめさせるしかなかったんだ。1971年

ニール・アスピノール　ビートルズはビジネス・マンじゃなかったってことだよ。それに店とレコード会社とアーティストと出版とオフィス・ビルを抱えて、その上自分たちのこともやろうなんてしたら、メチャクチャになるに決まってる。使い道もよくわからないまま、たくさんの金がどんどん出ていってた。
　だから結局、"誰がやっていくんだ?"って問題になったのさ。僕は"誰か適任者が見つかるまではやる"という気持ちでやっていた。自分でやりたくはなかったよ。

デレク・テイラー　ビートルズは音楽業界か金融界か、どちらかである程度の地位を持つ"リーダー"を探していた。しっかり掌握できる人間がほしかったんだよ。そういう"ボス"をずっと探していた。
　ある晩僕の家でジョンと少しLSDをやって——ニールもいたね、彼も少しやってたはずだ——それですばらしい計画を思いついた。ウェイブリッジに住んでる銀行の支配人と弁護士のところへ行ってこう言おう。"ねえ、アップルはもうひどい状態で、僕らは簡単に解決したい。信頼できる銀行支配人と弁護士さんとで、この状況を切り抜ける方法を見つけてほしい"。LSD式解決法だね。
　翌日になれば、そんなことはすべてどこかに消えてた。でも僕はいまだに、現実に起きたことよりはあの方がましだったと思うよ。本物の"金融関係者"の手にゆだねるほうがさ——弁護士もいない、銀行支配人もいない、そういった救世主が誰もいないんじゃね……。

ジョン　起きたあとで言うのは簡単さ——みんないつだってアップルとビートルズのビジネスについて言いたがる。"どうしてああしなかった？　どうしてこうしなかった？"って。何百万ドル、何千万ドルという金が飛び交う中にのんびり座って丸く収めようとしてたのは自分たちだろう。1974年

ジョージ　アップルの問題を解決するために、当時何人もの人と面接したよ。僕はビーチング博士の話を覚えてる。イギリスの国鉄を閉鎖させた人だ——だからその人を呼んで、ビートルズも潰してもらおうとしたのさ。でも彼がその仕事を嫌がったから、クラインが代わりに請け負ったわけ。

デレク・テイラー　ある朝電話が来て言われた。アラン・クラインは僕に邪魔されてると思ってる——彼がビートルズと話せないのは僕のせいだと。彼はこっちへ来て彼らを助けてやろうと思ってるのに、僕が何らかの理由で彼を来させないようにしてるって言うんだ。こっちは思ったね。"僕は邪魔なんかしてない——そもそも彼のことなんか考えてなかった"。すると間に入ってたトニー・コールダーがこう言うんだ。"じゃあ、もし彼が電話してきたら、ピーター・ブラウンにまわしてくれるかい?"。"もちろん"って僕は答えた。
　それで彼が電話してきたら、案の定というか何と言うか、どういうわけかつながらなくてね。それで僕が妨害を取り除いてやったんだ。いつだって壁を取り除くのが僕の仕事だったのさ。誰が"旬"で誰が"過去"だとか、そういうふうに区別するのはよくないと思っていた。アップルにとって害をなすとはっきりわかってる場合じゃない限り、僕は誰でも受け入れるようにしていたんだよ。"ねえ、彼、評判は良くないけど、ちょっと会ってみたらどうだい。会うだけならかまわないだろう"って。それでこの時もピーター・ブラウンに、"アラン・クラインが連絡を取りたがってる——電話に出てやってくれ"って言ったんだ。それで彼が電話に出て、それからメンバーも彼に会うことになったんだよ。

ニール・アスピノール　アラン・クラインはアメリカ人で、会計士でありビジネス・マンでありマネージャーであり、実際ローリング・ストーンズのマネージメントをしてた。ジョンとヨーコが彼に会って、彼ならいいマネージャーになるだろうと判断したんだよ。

ジョン　クラインとアップルは、どのみちいつか会うことになってたんだ。僕らは彼がローリング・ストーンズの契約を取り仕切る腕に感心してたし。それにあんなこぎれいなタートル・ネックのセーターを着てる人間は見たことなかった。ビジネス・マンというと瞳の色から心の中まで陰気なもんだけど、そうじゃないのは彼だけだ。1969年

リンゴ　あの頃はいろんなことが一度に起きててね。アラン・クラインの他に、ジョン・イーストマン(ポールの義理の兄弟)もマネージャーになりたがっていたんだ。
　ともあれ僕らはアラン・クラインに会い、彼を信頼する気になった。いや、とにかく、僕は彼を信頼し、ジョンも彼を信頼した。初めて会った時、僕が持った印象は、ずいぶん威勢のいい男だってこと——"私がやろう、君たち"って感じだった。熱意にあふれてるというか。明るくていい奴だったよ、いかにもニューヨーク人らしい大雑把な感じでね。で、ふたりのどっちにするかってことになって——僕は彼を選んだ。それで賛成ふたり——そしてジョージもこちら側についた。

ポール　屋上コンサートのあと、結局ミーティングをやることになった。僕はみんなに、昔のようにもっと小さいギグをやらないかって言うつもりだった。みんなのやる気を取り戻して、元の僕らに帰ろうって。そこから始めて、もしもっと規模の大きいことをやりたいとなれば、また改めて計画を練ってもいいじゃないか。
　ところがミーティングの前の晩にジョンとヨーコはアラン・クラインに会って、ジョンはアランを彼のマネージャーにしようと考えた。それでアップルに通達を出したのさ。"現時点より、アラン・クラインが僕の代理人になる"。理由を訊くと彼はこう答えたよ。"ヨーコが気に入ったのは彼だけだったんだ"。

ジョージ　ジョンがやって来て言ったんだ。"僕はこれからクラインをマネージャーにすることにした、そういうことだから"。それで、僕らも彼に会ってみないかと言うんだ。僕らと話す機会を彼にやってくれないかと——それでリンゴと僕とで彼に会いに行った。
　実際には、そのあともう他に選ぶ道がなかったのさ。アップルを管理する人間は誰もいなかった。アップルは大金を無駄に使い続けるだけで、僕らの中にはビジネス・マネージャーになれるような能力のある人間はいなかった。あのときの僕らには誰かが必要だったんだ。
　ポールはその頃もうリンダとつきあっていたから、彼女の兄弟のジョン・イーストマンか、父親のリー・イーストマンを引き入れたかったんだ。僕らはアラン・クラインだけでなくリー・イーストマンにも会った。確か僕は"ふたり一緒に呼ぼう"って言ったような気がするな——リー・イーストマンとアラン・クラインと——だけど実際にふたりと同じ部屋で会った記憶はない。リー・イーストマンとジョン・イーストマンにはクラリッジスで会ったのを覚えてる。

リンゴ　僕はアランが好きだったよ。すごく楽しい男だったし、レコード業界のことも詳しかったからね。レコードのことや、現場のことを知っていて、音楽を知っている。僕らが話をした人のほとんどは、音楽界の人間と親しくなろうとしてるだけで、音楽のビジネス面は何ひとつ知らなかった。

ジョージ　僕は"そうだな、これで選ぶなら、僕はクラインにつこう"と思った。"ジョンも彼を信頼してることだし、かなり正直に話をする男みたいだから"って(何年もあとになって、僕らの意見は変わったけどね)。僕らは全員リバプール出身だから、ストリートの人間の方が好きだったんだ。リー・イーストマンはどちらかというと階級意識の強そうなタイプに見えた。ジョンもクラインを選ぶつもりなら、僕らもそうした方がずっと楽だったしね。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

THE SHAMPOO FROM NEW YORK IS LEAVING VIA AEI TONIGHT, SEA BOARD WORLD AIRLINES FLIGHT 302. THE A E I NUMBER 501 4655.

I WILL CALL

DOREEN

APPLE LONDON

ニール・アスピノール　アラン・クラインとリー・イーストマンとビートルズでミーティングしたのを覚えてるよ——あれはドーチェスターだったと思う。クラインとリー・イーストマンが大ゲンカしてね。ふたりとも相手が気に入らなくて、言い合いになったんだよ。何ひとつ解決しなかった。

リンゴ　ジョン・イーストマンは普段のミーティングにも必ず参加してたけど、入ってきて"よう、みんな! やろうぜ"って声かけるような感じじゃなかったね。

誰にアップルの経営を任せるかという点では、ポールは他のみんなと意見が違ってた。それで僕らはポールとずいぶん言い合いしたよ。僕ら3人は、"だって、僕らはもうこっちに決めたんだ——おまえもそうすればいいじゃないか?"っていう気分だった。ポールは義理を感じてたんだと思うよ。彼にとっては家庭の問題だったから。彼がイーストマン家の一員でなかったら——ジョン・イーストマンがジョン・"ノースマン"だったら——もっと簡単に解決していたかもしれない。だけどすっかり感情が入ってきちゃってた。家庭の問題だったからだよ。

ニール・アスピノール　数ヵ月かけて彼らはなんとか解決にこぎつけ、みんなで1枚の協定書みたいなものを作った(正式な契約書というのは結局永遠に出なかった)。3人——ジョン、ジョージ、リンゴ——はサインしたけど、ポールはしなかった。他の3人がサインした日、ポールはもう少し時間がほしかっただけだと思うよ。そんなに急ぐ必要ないじゃないかって。

ポール　アランは人を説得するのがすごくうまかったと思う。要するに、彼はいつも"欲しいものは?"と言い、"そうだな、お金をたくさん……"——"よし、あげよう!"。そういう感じ。あるいは、ヨーコの場合だと展覧会かな。彼女は展覧会を開きたがっていたけど、なかなかうまくいかなかったんだろう。それでアラン・クラインは、"OK、展覧会をやりたいんだね? 大丈夫さ!"って。それで僕ら全員が、彼女のシラキュースでの展覧会のために金を出すことになった——4分の1ずつ負担したんだ——だけど彼女はグループのメンバーでもないんだよ。アラン・クラインがやろうとしてたのはそういうことだ。確かに彼には説得力があったよ。誰の望むことでも、何だってやってやるんだ——自分がその相手を動かしたい場合にはね。

僕は弁護士としてリー・イーストマンを推したんだけど、みんなは"ダメだ、彼は公平じゃない、おまえを優遇して俺たちのことは後回しにするだろう"って言った。そう考えるのもわかるから、僕は彼に訊いたんだ。"もしビートルズがあなたにこの件を頼みたいといったら、引き受けてくれますか?"。すると彼は、"そうだね、やるかもしれないな"。それで僕は、リー・イーストマンに本気で話を持っていく前に、メンバーみんなに訊いたんだよ。するとみんなは"冗談じゃない——彼じゃ依怙贔屓するに決まってる"とね。彼らの言うとおりにしてよかったよ——頼まない方がよかったんだ、彼が加わってたらほんとにとんでもないことになってただろうから。

ジョンはクラインを選び、ジョージとリンゴも"OK、僕らもジョンに賛成だ"って言った。僕もそれに従うものと思われてるらしいって気がついた。でも僕にはいいアイディアとは思えなかった——ほんと、単純にそれだけのことだよ。実際、ミック・ジャガーが来た時に"どう思う?"って訊いてみたんだ。"ああ、いいんじゃないか、ああいう奴が好きなら"って彼は言った。はっきりと彼はやめておいた方ががいいとは警告してくれなかったのさ。だからああいうことになった——それにあの時は3対1の状況だったしね。

ビートルズでは、誰かひとりでも賛成しなければ、その計画は必ず却下になっていた。ういう面ではすごく民主的だったんだよ。だからあの3対1という状況はすごく厄介だっ結果として、あそこからいろいろ出てきたんだよ。

リンピック・スタジオでのある夜のことを覚えてる。もう『アビイ・ロード』を何とかしなけないって僕は思ってた。僕ら全員、レコードにかかろうと集まってたんだ。アラン・ンも来ていた。すると他の3人が、"契約書にサインしろよ——彼はもう役員会に持っなきゃいけないんだから"と言う。僕は言ったんだ、"金曜の夜だぜ。彼は土曜日仕ないだろう。それにどっちみち、アラン・クラインは自分のルールで動いてるじゃない員会に報告する義務なんてないだろ。心配するなって——月曜だって問題ないよ。ことよりセッションをやろう。無理強いはやめてくれ"。

彼らは、"ああ、ごまかすつもりか? 彼が20%を望んでるからって"って言う。それ"取り分は15%だって彼に言えよ"って言った。すると、"やっぱり時間稼ぎだな"。は僕らのために言ってるんだ。僕らはビッグなんだぜ"。そう僕は答えた。あのことははっきり覚えてるよ。"僕らはビッグなんだ——ビートルズはビッグなバンドなんだ。彼には15%でいい"。でも不思議なことに(たぶんみんな、彼の魅力に酔っていたんだろう)、彼らは言ったんだ。"いや、彼の取り分は20%だ。それから、彼は役員会に報告しなきゃいけない。今サインしないと、もうあとはないぞ"。でも、僕は言った。"そうかい、じゃあそうすればいいさ。でも、今サインはしない"。

それで大ゲンカさ。みんな帰ってしまって、僕はひとりでスタジオに残った。するとスティーヴ・ミラーがふらっとやってきてね。"やあ、調子どう? このスタジオ、空いてるの?"って。"ああ、空いてるみたいだね"って言うと、"使っていいかな?"。それでその晩、僕は彼の曲でドラムを叩くことになった。「マイ・ダーク・アワー」って曲だった——ほんと、いい曲だよ。彼と僕だけで作った。僕は何かやっていたかった。とにかく体を動かして、自分の中に貯まったものを吐き出してしまいたかった。

だんだんとそういう状況になってきてたのさ。そして、そうやってクラインが採用された——対1という状況で。彼の取り分は20%になったよ。

デレク・テイラー　クラインはおっかない男だって話だったけど、僕は怖くなかった。マフィアのドンみたいなタイプにそういう奴って多いんだよ。ほんとは弱い人間だと思ったね。フランク・シナトラに会った時も、この人は弱い人だと感じた——フランクはある面で、人に好かれたくてたまらないんだってわかったんだ。クラインだって、人り込めない相手じゃないって思った。コワモテの男にはそういうところがあるんだよ。

でもすぐビクつく人——脅しに弱い人——そういう人にとっては、彼はものすごく恐ろしい存在になった。あの小さな目は何ひとつ見逃さない。アランはニュージャージー出身で、我々とは違う文化から出てきた人だ。ビートルズとすでに何年か一緒にやってきていたアップルの人間は、何でもうまくやれるだろうと思っていた。"なあ、彼の評判はよくないけど——でも彼は使える人間だ、もし彼に厄介なところがあっても、僕らで抑えこめる"って。

彼は僕にこう言った。"君たちはえらく浪費しているそうだね。酒やらつきあいやらに大金を使っているそうじゃないか——そんな贅沢はしていられないんだぞ"。"それはわかってるんだ"って、僕も言ったんだ。"僕らは豪勢な外国旅行も何もしてない。ほとんどはウィスキーと煙草とクローネンバーグのラガー・ビールなんだ"。

ビートルズ(全員ではないけれど)が彼を雇うと決めたのはかなり速かった。ジョンは言ったよ——ヨーコと一緒にドーチェスターで彼と会ったあとでね——"彼に任すつもりだ"ってさ。ふたりはドノバンやジャガーやミッキー・モスト、いろんな人に話を聞いていた。そしてみんな、"そうだな、休暇を一緒に過ごしたい相手じゃないだろうけど、アランなら面倒をみてくれるだろう"って言ったのさ。

そこでジョンとジョージと(たぶん)リンゴは、わりとすぐ納得したんだよ。ポールはかなり長いこと承知しなかった——実際にはずっと不満だったわけだけど——でも結局はあの八角形のテーブルで何かにサインしたんだよ。確か写真があったと思ったな——テリー・ヴェナブル/アラン・シュガーの写真の中にさ。

僕はその頃、リチャード・ブランソン相手にひどく厄介な裁判をやってる最中だった。当時のリチャードはステューデント・マガジンにいて、まだほんとの若造だった。彼は僕が何か渡さなかったというんで訴えていたんだ。そもそもジョンとヨーコが何かのトラブルで僕に渡せなかったものなんだよ。つまり、僕はふたりから何か受け取って、ブランソンに渡さなきゃいけなかったんだけど、それができなかった——それだけで1万ポンドの請求を受けたんだ。

ジョンは言ったよ。"ああ、あのステューデント・マガジンの奴の裁判ね——アランがみんな片づけてくれるよ。すべてうまくいくさ。このオフィスには心配事がありすぎる——でもクラインが全部取っ払ってくれるよ"。新たな救世主が現れたわけだ——少しほっとしたけど、心配も少し増えたね。

ニール・アスピノール　アラン・クラインは自分の身内を連れてきて、アップルでもともと働いていた人間を大量にクビにした。一度に取り替えたわけじゃないよ、9ヵ月かけて、だんだんと替えていったんだ。たとえば、アップルにはアップルの広報部があったのに、レス・ペリンを使った(彼は自分の会社を持っていて、いろんな人間の広報を担当していた——ローリング・ストーンズなどいろいろなミュージシャンの宣伝も手がけていた)。ロン・カース(アップル・レコーズ)が辞め、デニス・オデル(アップル・フィルムズ)も『レット・イット・ビー』のあとで辞めた。ピーター・アッシャーも、トニー・ブラムウェルも、ジャック・オリバーもやめていった。あれは人減らしなんかじゃなかったよ——歴史の終わりだよ。

彼が来てから、アップルのすべてが変わってしまった。まったく違う場所になった。まず何より、ポールの存在が消えた。彼はあそこで行なわれていることすべてに反対していた。それでも彼らはスタジオに入り、クラインがいる間に『アビイ・ロード』をレコーディングしたんだよ。

TO

YOUR REFERENCE

I found some lost marijuana and mixed it with neppalese hashish, I then rolled a joint and smoked it and went into the garden and put up 50 yards of fencing and aquired a headache which took over the entire front half of my head. I took two codein and rolled another joint and smoked it. At that point Joan reminded me that you had called to find out what was happening. After giving the matter some thought I decided I didn't know what was happening., so I didn't call you.

I know you will understand.

Your friend.

CamScannerでスキャン

CONFIDENTIAL

L LLT069 SW INTL CNT PCG TDL LA CANADA CALIF 30/36 12 218A PST
LT THE BEATTLES CARE APPLE CO
LONDCN (ENGLAND)
HAVE INVENTED HYPERSOCAE DRIVE SUPER WAVE VAPIATER TOPOLOGICAL BIOLOGICAL NUMBER THEORY MINIATURE POLARIZING LAZERS +NEW MAGNETIC METHOD+ DISNEY HISTORICAL SOCITY JUDEAN CLUB INTERNATIONAL)
MICHAEL A WEINBERG PHONE 213-790-0636
213-790-0636.

Dear Allen,

The financial position of Apple Electronics Ltd. is causing me considerable concern at present.

ジョージ

アラン・クラインが
アップルに来た時というのは、
「ザ・ラトルズ」の
あのシーンそのままって感じだったね。
ロン・ディクラインがラトル・コープスに
入ってきたとたん、
全員いっせいに窓から飛び降りるところ。
彼はみんなをクビにして——
怖くて逃げた人もいるけど——
それから自分の子飼いの人間を
どっさり入れた。
そして自分の思いどおりのやり方で
すべてコントロールし始めたんだ。

APCORE TD/CX
C/O APPLE CORPS LTD.,
3, SAVILLE ROW W.1.

Dear Costa,

As a result of recent discussions I have had with the Beatles it has been decided that the trading activities of Apple Electronics Ltd. should discontinue.

This means that the Company will no longer require your services and we would like you to accept this letter as formal notice of service and cheque representing one months fee.

Alexis Mardas
Neil Aspinall
Al Crotti

This is to confirm your instructions that all employees of Apple Electronics Ltd. are to have their employment terminated with effect from Friday 29th August, 1969, and that we are to pay each person the equivalent of one month's salary in lieu of notice as at that date.

デレク・テイラー　アランがアップルをがらりと変えてしまった。ロンドンでの彼はものすごく大きな存在だったんだよ。彼のオフィスは僕の真向かいにあってね、あそこで仕事を続けてたなんて、我ながらたいしたもんだ。今ならやらないよ、怖気づいちゃってとても無理だ。でも当時の僕は、自分がまだここに雇われているのなら果たすべき役割があるはずだと、そういう確信に奮い立たされていたんだよ。何なら"古い時代"と言ってもいいけど、自分はまだそれを象徴しているんだって思ってた。ムードが消えてしまったあともそこに残る人間っているだろう、雰囲気を守る人間がさ。

ある恐怖の金曜日、クラインはおおぜいの人間をクビにした。その日、彼が"きょうは昼飯に連れてってやろう"と言ってね。一緒にランチに行くなんて、それが初めてだった。そしてその場で彼が言ったのさ。"何人かここの人間をね……うん……彼らに出て行ってもらおうと思ってね"。クラインが見て余分な人間を大量にリストアップして、ピーター・ブラウンに解雇させたんだと思うよ。そしてクラインはこう言うわけ、"おい、君たちはラッキーなんだぞ——僕が来たら、普通は全員クビになるんだからね"。残った僕らは、自分たちがビートルズのみんなのために働いてるんだって思い込んでた。だけど実際には、クビにされなかったからいたというだけかもしれない。ただ残ってただけなのさ。

僕のオフィスにはライトショー用の機械が置いてあった。プロジェクターとフィルターが付いていて、光がぐるぐるまわるやつさ。たしか150ポンドした。アラン・クラインはサイケデリック時代にローリング・ストーンズやドノバンと組んでたから、ライト・ショーみたいなのは馴染みのものではあるんだけど、実は彼には理解できないんだ。"こいつらはこういうものをやりたがる。いったい何のためにやるんだか見当もつかない。何の意味もない、金にもならない。だがこいつがやりたいというなら、まあそれくらいなら——なあ……"。そんな具合で、クラインがやって来てから1年と半年くらい、僕はなんとか"普通に"やっていくことができた。

ピーター・アッシャーはクビにはならなかったんだけど、結局やめていった。彼が出て行ったのはロン・カース（悲しいことに、もうこの世の人ではないけれど）への忠義からでもあるんだよ。ロン・カースはアップル・レコードの社長で、あのビルでは重要な人間だった。でもクラインはロン・カースを狙い撃ちしたのさ。彼に出て行ってほしかったんだ。自分と同じアメリカ人で、自分と同じように名の知れた会計士だし、それにロンは目立ってたからね。ピーター・アッシャーはアップルの制作部長としてすごく大事な人材だったけど、"ロンと一緒に出て行く"って言った。その後ふたりはMGMレコードを作って、ジェイムス・テイラーを引き抜いた。

それからはおかしな雰囲気になった——実のところ、最初からまともな雰囲気じゃなかったけどね。世の中を救えると信じ込むなんて気違い沙汰なんだよ、でもあの当時はたくさんの人間が世界を救おうとしていた。キリストの時代には救世主が大勢いたそうだ——キリストだけじゃなくてね——そういう救い主たちがあちこちで人々に説いてまわっていた。同じように、60年代末にも多くの救世主が現れた。悪意に満ちた者も善意の者も混じってたけどね。ビートルズは善なる者だった。でも本来善だったものが、次第に狂っていってしまった。いつの時代もそういうものなのさ。

ジョン　アランも人間だった。ブライアンが人間だったようにね。ブライアンに出会った頃と同じさ、値踏みしてたんだ。僕は人柄を見抜くという点では間違えることが多いけど——時には正しい判断もするんだよ。1970年

リンゴ　僕にしてみれば、出だしの何年かアランは最高だった。だって僕は面倒さえ見てもらえればよかったんだから。飛行機かクイーン・エリザベスII世号でニューヨークに着くと、誰かが迎えに来てる。かなりずんぐりした奴が待ちかまえてて、僕をリムジンに乗せ、まとまった金をくれて、ホテルのスウィートまで送り届けてくれて——それで十分。僕にすればそれだけでクールなんだ、僕を喜ばせるのは簡単なんだよ。時間どおりに飛行機に乗せてくれるだけでいい！

アランがアップルに来てやりだしたことというと、僕らの知ってる人間をすべて追い出して、自分の身内を連れてくることだった。もう僕にはどうにもできなくなってたね。僕はアップルから離れ始め、正気もなくし始めてて、アップルが崩れだした時には役職にも一切ついてなかった。

ポール　アラン・クラインはアップルを立て直すことができなかった。そもそもアップルの問題というのは、僕らはすばらしいクリエイターではあっても、誰ひとりとして予算というものをわかってなかったってことさ。だから稼ぐ以上の金を使うことになった。彼ならそういう問題を解決して、僕らがどういう状態にあるかを教えてくれるだろうと思ってたんだよ。

ところがとんでもないことになった。というのは、彼がやって来てまずしたことは、僕らが覗いたこともないファイル・キャビネットをすべてひっくり返すことだったんだよ。そんなものがあることすら、僕らは知らなかった（実際の話、ウィグモア・ストリートからサビル・ロウに引越す時に、ファイルの半分は紛失してるんだ）。"僕らはクリエイターだ、僕らはアーティストだ、僕らはプロデューサーだ"——だから僕らはファイルなんて持ってなかった。ところが彼は、ビートルズの10年契約というのを見つけた。僕らはそんなものに自分たちがサインしたことすら知らなかったよ。でもどこかで何かの契約をした時には、当然サインが必要だったはずだ。"はい、これにより我々は10年間離れないことを誓います"（僕らはそれまでずっと、言われるまま何でも鵜呑みにしていた——考えてサインしたことなどなかった。そういったことについて考えてなかったんだ）。クラインがどこかの引出しからこれを見つけ出してきて、そして僕はこれに縛られ始めた。僕はまさに、法律の文面に縛りつけられることになったんだ。

ジョン　何百万、何千万と稼いでたさ、だけどね、ビートルズはその金をほとんどもらっちゃいなかったんだよ。僕らは全員自分の家を持ってたけど、何年もかかってようやく支払いを済ませたんだぜ。それもクライン——人呼んでウルフ——が来てから、初めてかなったことだ。何百万と稼いでも、僕らの懐(ふところ)には絶対入っちゃこなかった。ロンドンには大きな会社がいくつもある。そのさまざまな名前の会社に全部当たって、ビートルズとの関係をチェックして、金がどこへ行ったか確かめなきゃいけない。同じことをアメリカでもやらなきゃいけないんだ。

ブライアン・エプスタインはすばらしい奴だった。直感の鋭い演劇好きの男で、僕らには何かがあるって見抜いて、僕らをうまく売り出してくれた。だけどビジネス面ではまともなアドバイスができなかったのさ。彼はうまいこと利用され——僕ら全員が利用されたんだ、ブライアンだけじゃなく——でも、僕らの誰ひとり、まるで気づいちゃいなかった。

CamScannerでスキャン

それが人生ってもんだよ。アーティストやショービズ界の若造が金をだましとられたな
んて、別に驚くようなことじゃないだろ。昔からお馴染みの話だよ。"金があったら働か
ないだろう"っていう考えなのさ。でもそれは違う。金をやればアーティストは安心し、
落ち着いて仕事ができるようになるんだ。僕にはいつも大きな不安があった。"僕はミッ
キー・ルーニーみたいになるのか？ 僕らが金を稼いだことはわかってるのに、その金
はどこへ行った？ 僕だっていつか税金を払わなきゃい
けないんだ。「そんな金もらってない」といったところで
何にもならない。帳簿上はビートルズに金が入ったこ
とになってる。それで僕らは死ぬまでずっと税金を払
い続けなきゃならないんだ"。それが僕の大きな不安
だった。この業界に入ってくる若者みんなに警告して
おくよ。相手の弁護士が自分の兄弟でないかぎり、ど
んなものにもサインするな。身内だけで固めておけ。
1971年

ポール　そもそも、リバプール時代のジョンと僕は、曲
の著作権のことなんか知らなかった。歌というのは空
気の中を流れていって、誰もがそれを所有できる、文
字通りそう考えていたんだよ。そういう僕らが最初に
会った版権管理者がディック・ジェイムズだった。"お入
りください、さあ座って。あなた方はそんなふうに考えてるんですか？ どうぞこちらに
かけて"って、そして彼はああいう契約を結んだんだ。いまだに僕は、事実上あの契約
に縛られてる。つまり、僕らは最初っから、かなりうまいことだまされてたわけだよ。
1969年3月、僕がハネムーンに出かけ、ジョンがベッド・インをやってた頃、ディック・ジェ
イムズは曲を売った——僕らがいない間にね。ロンドンに戻ってきた僕らは、"ディック！
君にそんな権利ないだろ！"って言ったんだ。すると彼、"そう思うかい？"って答えた。
そして、まったく彼が正しかったんだよ。こういうものはそういうふうにできてるんだ。し
たがって版権は売られ、そこから商品になった。その時買ったのが、ATVのドンだっ
たルー・グレードだ。そうやってジョンと僕は、あまりにも多くの曲の所有権を失った。そ
れにジョージもだ——彼も何曲か失った。

リンゴ　2月にピーター・セラーズと「マジック・クリスチャン」の撮影に入った。僕はあの
本(テリー・サザーンの小説)を読み、ふたりで一緒に映画をやろうと、ピーターの門を
叩いたんだ。"この映画を作ろう"ってね。で、何といってもピーター・セラーズだから、3
本電話をかけただけで資金は集まり、すぐ撮影にかかることになった。
ピーターには驚くべきところがあってさ。僕らはたいてい1日中仕事して、夜は一緒に
外へ食べに出る——そしていつもゲラゲラ笑いながら別れるんだ、彼はほんとおもしろ
いから——そしてその翌朝になって"おはよう、ピート"って言うだろ。ところが、そこか
らまた改めて始めないといけないんだ。前の日からつながってないんだよ。毎朝9時か
ら、もう一度友だちにならないといけない。夜6時にはみんな笑ってる、ところが翌日、

"おはよう、ピート！"と言ったとたん、"ダメだ！"——もう一度壁を壊して、"こんにちは"って入っていかなきゃならない。時々セットから出て行くように頼まれることもあった。ピーター・セラーズがピーター・セラーズ状態になってるから。

テリー・サザーンに会えたのは嬉しかったな。楽屋が隣だったから、すごく仲良くなって、メモのやり取りとかしてた。プロデューサーがしょっちゅうテリーのところへ来て、"テリー、すごいことになったぞ！"って言う。"え、何だい？"って僕が言うと——"ユル・ブリンナーの出演許可が出た"。そこでテリーは、ユル・ブリンナーのために役をこしらえなきゃいけなくなる。その後、僕らが一緒にいるところへまた誰かやって来て、"ラクエル・ウェルチが出ることになったぞ"。プロデューサーたちはとにかく役者に電話をかけまくり、あるいは誰かロンドンに来てれば撮影現場に引っ張ってくるんだ。気の毒なテリーはそのたびに新しい出演者のために役を書かなきゃいけない。ほんと変な現場だったけど、すごく楽しかった。テリーは僕の部屋のドアの下へセリフを投げ入れていく。1時間くらいすると僕は呼び出しを受けて、そのセリフを喋るんだ。

ピーターも楽しい相手だったね。僕らはほんとに笑ってばかりいた——彼はすごくユーモラスな人でさ。彼と一緒のシーンでは、時々芝居にならないことがあった。笑いが止まらなくて。どっちかが口を開くと、もうその瞬間にふたりとも笑い出しちゃって。そんな日が何日もあったな。

ピーターからはすばらしい教訓を教えてもらった。あの映画の中で、僕だけがずっとセリフを喋ってるシーンがあるんだけど、彼はスクリーンの反対側で鼻をほじってるんだよ。映画館であの作品を観てごらん、観客がひとり残らず視線を僕から彼に移すから。大勢の人がみんな、"あ、彼が鼻ほじってる"って思うわけ。僕が言ってるセリフなんかより、そっちの方がずっと重要なんだ——だから僕はもう二度と、共演者には絶対ああいうことをやらせないよ。あれはいい教訓になった。彼はいつも言ってた。"目だよ、リンゴ。重要なのは目だ。スクリーンじゃ200フィートもの大きさに等しくなるんだからね"。彼はほんと、イカした奴だった。一緒にいると楽しかったよ。

ジョンはヨーコとつきあってたし、僕は映画をやってた。僕らが違う方向へ進み始めたってことが、はっきりしてきたんだ。前にも言ったことがあるけど、ビートルズに向けられるエネルギーが弱まってきていたんだよ。前の僕らは1000%をそこにつぎ込んでた。だけどそれがだんだん衰えてきていた。もうあの頃じゃ、"困ったな——どうしても行かなきゃいけない？ またそんなことやらなきゃならないの？ 僕はこっちをやりたいんだ、ジョンはあっちをやりたがってるし、ジョージはまた別のことをやりたがってる……"みたいな感じだった。僕らにはそれぞれ家庭があったしね。他にやることができてきて、エネルギーが分散してしまったんだよ。

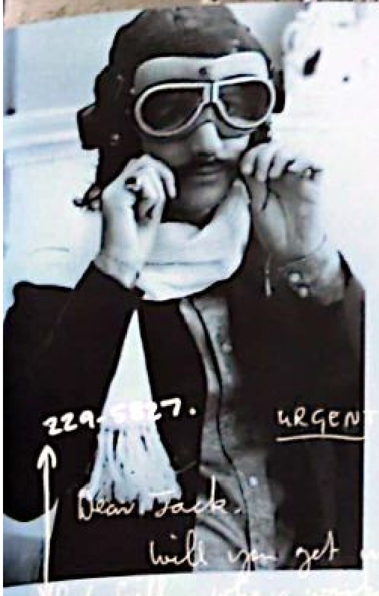
ジョージ　ジョンはアヴァンギャルドだか何だかをやりたがっていたし、僕はとにかく曲をレコーディングできるようになりたかった。ポールの方はそのままライブ活動をやりたがっていた(と思う)。僕らが仲良くやっていられれば、リンゴもそのまま続けていくことに不満はなかったんだろうと思う。彼の力を見くびるとかいうんじゃないけど、彼にとって大きかったのは、他のみんながすごく成功していて、居場所がないって感じたことだと思うんだ。

ニール・アスピノール　アラン・クラインのことや、お金の件とかで、すでにとげとげしい雰囲気になっていたんだ。ポールはアランをマネージャーにしたくなかった——そういうふうにして、溝がじわじわと深まっていったんだよね。

ジョン　僕らは全員がアーティストだ、それ以外の何者でもない。だから自分で自分のマネージメントをするとか、そういった面で自分の面倒を見ることなんてできないんだよ。ビートルズみたいなうぬぼれ屋が4人、これだけ長い間一緒にいるというのは、大変なことなんだ。最初のうちは、ビッグになるとか、アメリカに乗り込むとか、みんなに共通の目標があった。でも28とか29とかの年齢になると、だんだん"目標って何だ？ クリアしちゃったじゃないか"ってふうになってくる。それに才能も広がってきていたしね。ジョージはたくさん曲を書くようになってた。それなのにアルバムが作れない——アルバムに1曲入るだけでラッキーなんだから。そのうちみんな、それぞれ自分の音楽に興味を持つようになっていって、だんだん違う方向へ進み始めたのさ。1971年

CamScannerでスキャン

Richard Starkey



ポール シェア・スタジアムでは約5万6千人の観客を前に演奏した。それだけのことをやったあとは、"これ以上何ができる？"って気になってくるもんだよ。それ以上のことといったら、5万7千人の観客を集めてステージをやることくらいだろう。そうやって考えていくうちにわかってくるのさ。道はどっちかひとつなんだって。観客をどんどん増やし、イベントの規模をどんどん広げていくか、でなきゃちょっとのんびりするか。で、僕らはもう、後者の道に進み始めたわけ。少し落ち着いて、もうちょっと普通の生活をしようとね（1969）

リンゴ あの頃すでに、ジョンは事実上グループから抜けてたんじゃないかな――ほんとは60年代半ばからそうだったのかもしれないね。ポールはワーカホリックだった。というか、ビートルホリックかな。ジョンと僕はウェイブリッジですぐ近くに住んでたから、しょっちゅうお互いの家を行き来してた。とっても楽しく過ごしてたわけだよ。まったく何の問題もなく――そこへ電話がかかってくる。必ずポールなんだ。"もうスタジオに入るべきだと思うよ。これをやらなきゃ"――"冗談だろ、やりたくないよ。遊んでいたいよ"。でもポールに尻をたたかれてさ、それでみんなまたスタジオに戻ったんだ。

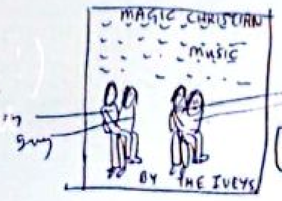
60年代も終わりに近づくと、"やれやれ、この先何をやろうっていうんだ？ やりたい奴なんているのか？"って感じだったね。とにかくもう、情熱が失せ始めてた。ポールだけはまだがんばってて、鞭を振りまわしながらつなぎとめようとしてたけどね。いまだに彼はそんな感じだ。そういう奴なんだ。

229-5827. URGENT POP 4477 cont

Dear Jack.
will you get in touch with Bob Gill, who is working for Denis O'Dell on the "Magic Christian" and ask him to give you a print of the photo they are using for their advertising on the film.
When you get it, have a photo session fixed up with the IVEYS, and arrange them exactly as Ringo and Sellers are in the photo.
(Ringo is sitting on Sellers knee.)
So the Iveys will do it like this

Then ask Bob Gill if he will do the cover design EXACTLY like the film posters except for the replacement of Ringo + Sellers WITH the Iveys.
So their advertising will be like this.

our cover will be like this.



Just have the photo done — lettering to be decided later.
Let me see it when it's ready to go to the printers.
Thanks.
Paul.

リンゴ
少しずつ離婚に
向かっていった感じだね。
ふつう離婚というのは
ある日突然話が
持ち上がるもんじゃない。
何ヵ月も何年も
惨めな日々が続いて
ついに耐えられなくなるんだよ。
それでようやく口にするんだ
"もういい
もう終わらせよう"って。

CamScannerでスキャン

彼女はステージ近くの奥まったところにいた。その時のバンドはジョージー・フェイム&ブルー・フレイムス——スピーディ・アクアイがボンゴを叩いてた。僕がずっと大好きだったバンドだよ。僕は彼女を見て、"お……"って思った。それで彼女がクラブを出ようとした時、そばに行って声をかけたんだ、"やあ、どっかで会ったことなかった?"——もろに口説き文句だね。

それから僕は言ったんだ、"僕らこれからスピークイージーってクラブに行くんだけど、一緒に来ない?"。もしそこで彼女が"ノー"と言っていれば、僕は今彼女と結婚していないだろうね。でも彼女は"ええ、いいわよ"って言ったんだ。それで僕らはスピークイージーへ行った。僕らのどちらも「ホワイター・シェイド・オブ・ペイル」(青い影)を聴いたのはあの時が初めてで、ふたりともスティーヴィー・ウィンウッドだとばかり思った。ところがそれはすごく変てこな名前のグループだった——プロコル・ハルム。

それが最初の出会いだった——そのあとも時々会ってた。僕がニューヨークへ行った時とか、彼女がロンドンに来た時とか。誰の人生にもあると思うんだ、結婚を考え始める時期がね。"もしいつか結婚するつもりなら、もし真剣に考える気があるのなら——今しかない"って。僕もそんなふうに思った。今までいろんな女性と知りあった時の自分がどんな風だったか思い出したりもした。すると、いつでも彼女の姿が浮かんでくるんだ。

それで僕は彼女に電話して、こっちへ来ないかって言った。彼女がロンドンへやって来て、僕らはしばらく一緒に住んで、そのうち噂になったんだ。でも彼女は前に一度結婚していて、再婚にはあまり乗り気じゃなかったんだ。迷ってた彼女を、僕が説得したんだよ。"今度は大丈夫だ"って言って。彼女は"一度噛まれると二度目を怖がる"みたいなところがあって——でもついに、メリルボーン登記所で正式に結婚した。

バンドのメンバーを結婚式に呼んだかどうか覚えてない。ちゃんと呼べばよかったのにね。僕はどうしようもない愚か者らしい——ほんと、どうしてなんだろう。きっと、グループがばらばらになってきてた頃だったからだろうね。全員が全員に腹を立ててた。僕らが遊び仲間じゃなくなってたことは確かだよ。そういうことさ。あんなふうに、いったんグループがばらばらになってしまえば、それでおしまいなんだ。

ニール・アスピノール　僕はポールとリンダの結婚式に行ってない。でもふたりは式のあとリッツでランチだかティー・パーティだかを開いたんだよ。といっても、確かポールとリンダ、マル、スージー(僕の妻)に僕だけだったと思う。他に誰かいたっていう記憶はないな。

リンゴ　僕らみんな、ポールはジェーン・アッシャーと結婚するものとばかり思ってたんだ。ふたりは恋人同士で、いつも一緒にいたし、結婚するのが自然に思えた。最終的に何でふたりが別れることになったのか、僕は知らない。それは彼に訊いてみないとわからないね。あるいは彼女に訊くんだな——その方がきっとおもしろいよ!

ポール　1969年3月12日、僕はリンダと結婚した。

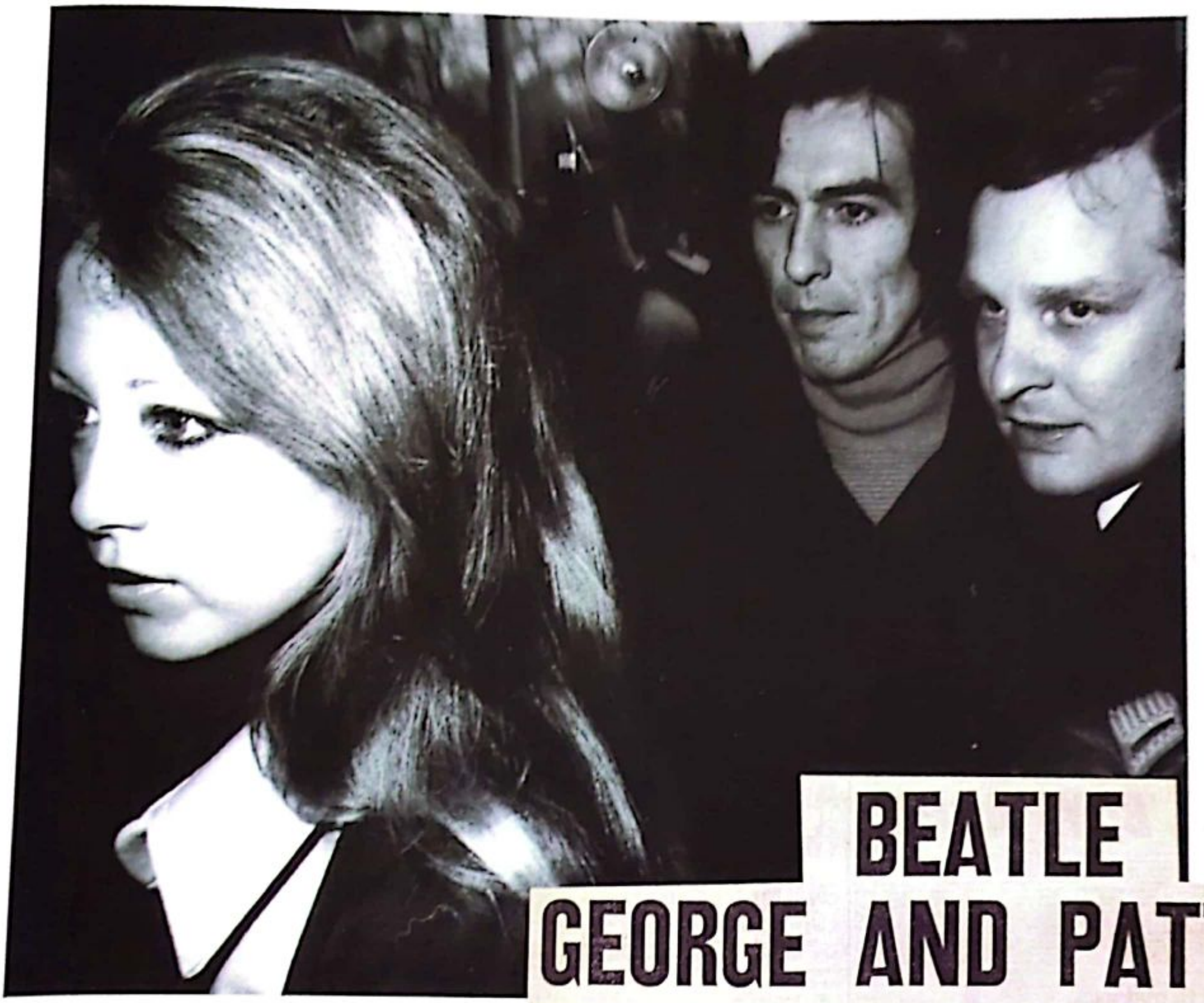
初めて彼女に会ったのはずいぶん前のことなんだよ。実は僕がよく行ってたロンドンのナイト・クラブ、バッグ・オネイルズで出会ったんだ。リバティーズの裏にあるクラブだよ。以前はよくあの辺に行っててね。ギグとかレコーディング・セッションが終わると夜11時くらいになってしまって、これから遊ぼうっていっても真夜中じゃ店はどこも閉まってる。だから行くとなるとキャバレーみたいな場所(最初のうちはブルー・エンジェルとかトーク・オブ・ザ・タウンなんかへ行ってた)か、クラブかディスコってことになるんだよ。

バッグ・オネイルズが気に入ってたのは、あそこは一番人気のクラブってわけじゃなかったけど、行けばたくさん仲間に会えたから——ピート・タウンゼンドとか、ズート・マネーとか、ジョージー・フェイムとかの音楽仲間にね。喋りながら夜明けくらいまで飲んでいられた。

ある晩そこへリンダが来たんだ。『ロック・アンド・アザー・フォー・レター・ワーズ』っていう本のために、ロンドンで写真を撮ってたんだよ。アメリカから派遣されてて、その晩ちょうどアニマルズとのセッションをやったところだった。そのあとみんなでクラブへ繰り

CamScannerでスキャン

ジョージ　僕はきちんとしてるんだ。ソックスはソックス用の引き出しに入れるし、隠したいものは隠し場所に入れておく。



BEATLE GEORGE AND PATTI ON A DRUGS CHARGE

ジョージ　わざわざポールが結婚する日を選んで、僕の家にマリファナ捜査に乗りこんできたんだ。いまだにあのせいで、僕はアメリカのビザをすんなり取れないんだよ。

あの男は警官を8人くらいと婦人警官をひとり、それに警察犬を引き連れてやって来た。その警察犬の名前がヨギでね――ビートルズとマハリシのつながりに引っかけたんだろう。ちょっと洒落たつもりだったのさ。

僕らは連行され、指紋をとられ、逮捕された。新聞にはファッション・ショーみたいに出てたね。"ジョージは黄色のスーツ、妻のパティは……"。

デレク・テイラー　僕がジョージとオフィスにいる時、あの電話が来たんだ。アップルでの長い1日が終わろうとしている時にさ。電話はパティからだった。"来たの――警察が来たの"。僕らはどう動けばいいかわかってた。すぐリリースの弁護士マーティン・ポールデンに電話した。彼は定期的にアップルに来てたからね。それでみんなでリムジンに乗り込み、エッシャーへ向かった。その時には警官はすっかり家に落ち着いてたね――僕がジョージとパティの保釈保証人になり、ふたりは警察署に連れて行かれた。ほんとに腹が立ったよ。ポールの結婚式の日なんだぜ。ひどい祝い方もあったもんだ。警察というのはそこまでやるものかね。

ジョージは穏やかだった。ジョージはいつでも穏やかなんだ――機嫌が悪いことはあるけど、それでもいつだって穏やかだ――あの晩の彼はとりわけ落ち着いてたよ。でも心の中では怒り狂っていたんだ。彼は家に入ると、ずらっと並んだ警官たちと婦人警官ひとりを見渡して言った。"鳥には巣があり、動物には寝ぐらがあるのに、人間が安心して休める場所はどこにもないのか"――"はう、そうなんですかね？　申し訳ありませんがこちらも仕事ですので……"って。そのあとはいつもの警察の手順どおりさ。

そういうふうに彼は穏やかであり、同時にひどく怒っていた。彼は自分で言ったとおり、自分のマリファナはマリファナの箱に、お香はお香入れにしまっていたんだよ。彼はいかにも60年代末らしく、家をきちんと片づけ、素敵なものを置き、いいものをくゆらして楽しむ人間だった。

彼が逮捕されるいわれはなかったというのが僕の考えだね。彼は誰にも迷惑をかけてなかったんだから。今でも思うね、あれは私生活の侵害でしかなかった。

ポールの結婚式のことはあまり覚えていない。僕は出席しなかったから。ポールとリンダは、誰でも明るく受け入れてたよ。みんなの写真も撮っていたんだ。だけど明らかにあの日は、ああいうふたつの出来事が引き起こした騒ぎが、出来事そのものを超えて大きく広がった日だったね。

だけど僕は別に興奮もしなかった。自分の人生に起きたことではないし、あれは計画されていたことだって、わかっていたことだったからね。アップルで僕らがやらなきゃならないことには、不意に押しつけられるものが多かった。アルバムのヌード・ジャケットとか、ヘルズ・エンジェルスとか、逮捕とか、そういったことさ。そっちの方は、時には大変だった。

ニール・アスピノール　パティが電話してきたあの晩、僕もジョージとオフィスにいたんだ。ジョージが"どうすればいい？"って言う。"家をメチャクチャに荒らされるぞ。どこに隠してあるんだ？"と伝える。彼は"マントルピースの上の箱にちょっとマリファナが入ってる"って。それで彼がパティに電話して、マリファナの場所を教えた――その時にはもう、警察がたっぷり手に入れてたよ。

CamScannerでスキャン

olutely renounce and abandon the use of my former

ston and in lieu thereof do assume as from the

onal christian name of Ono

日　ジョンとヨーコがジブラルタルで結婚した

結婚しようと思ってたんだ　そういうのってロマン
に着いたら船に乗せてくれないんだ　彼女がイギ
ビザをくれないんだよ　その上彼らは言った
はもう結婚式を執り行なう権限がないんです"
ウンに電話して、"結婚したいんだけど、どこ
が折り返し連絡してきて、"ジブラルタルしかな
ことになったのさ　あそこはすばらしかった
　それにあそこは一時期、地の果てとも呼ば
名前があるんだよ――昔の人はそこから先の
未知の世界への入り口みたいなものだった
し、僕らの関係を岩のように固く結びつけて

バラード」の歌の中に出てくるよ　ピータ
なら結婚できる"と言ったってね　ふたり
び、そこで結婚した　そのかなり前から、
うよ――実際には、ヨーコとつきあいだし

ら孤独だった　僕らはどちらも同じよう
らいつか現れるっていう夢を持ってた

それはビートルズのレコードを買うような人じゃないとわかってたんだ　シンの場合には、子供ができたから結婚した　お互い話したいこともそれほどなかった　でも彼女は無口だったし、僕もしょっちゅう家を空けてたから、そんな状況でも別に気にならなかったんだ　ただやっぱり、時々うんざりして、"僕の相手はどこにいるんだろう?"みたいなことを考えたりしてたね　僕にとってただひとりの女性が現れることをずっと祈ってた　誰だってそういうふうに、"ただひとりの相手"のことを考えるだろう　ただひとりの相手って、どんな人だ?　そう、僕が求めていたのは、男から得られるような知的なものを与えてくれる女性だったんじゃないかと思う　僕が僕自身でいられるような相手を求めていたんだ　1969年

ポール　完全にヨーコがジョンの人生の中心になっていた　軍隊仲間みたいなものだって思ったのを覚えてるよ　昔僕らがよく歌った歌に「ウェディング・ベルズ」というのがあった――"あのウェディング・ベルが僕の仲間を連れ去っていく……"　それに軍隊で仲間たちができても、いつかはさよならのキスをし、結婚して、普通の人たちみたいな生活をしなきゃならないだろ

ビートルズの場合もちょっとそんな感じだった　いつかそういう日が来るって、僕らにはわかっていたんだよ　ジョンがヨーコとあれだけ真剣につきあうようになった時、もう後戻りができないことは明らかだった　あれだけ激しい恋をしていたら、彼はああするしかないのさ　彼は恋に夢中になっていて、僕らに割く時間などほとんどなくなってしまった　僕らは過去であり、彼女は未来だった　僕らはそういうところに来ていて、それを理解しようと努力するしかなかった

デレク・テイラー　ヨーコはジョンの人生に存在するすべての人間に取って代わった　ふたりが出会ってから、彼女は彼の人生になり、彼は彼女の人生になったんだ　ふたりはひどく頼り合っていた　互いのいない人生などありえなかった

ジョン　"今、僕の人生は変わった、とてもいろんな意味で……"あの歌詞のとおりだね。1969年

僕はずっと不安だったんだ。これが事実として明らかになれば、僕は破綻した結婚の後処理やらマスコミの対応やら、そういったありとあらゆる厄介事を引き受けなきゃならなくなる。僕はジョンに話しておいたんだよ、そんなに偉ぶった言い方じゃないけどね。"この先のことは僕にも準備ができてる。ただ言っておきたいんだが、これからはいろいろおもしろくないことが降りかかってくるよ。誰かが夫婦の仲を裂き、家庭を壊したとか、そういったことさ。世間やマスコミはそういうことを言いたがる。彼らがどんなに気取ってて、どんなに好奇心旺盛か、君だって知ってるだろう"みたいなこと。

ふたりが正式に夫婦になると、僕が関わることになった。僕はシンシアのことがすごく好きだったけど、そうなってしまったらしょうがない。で、結果的には僕も賛成した。彼はヨーコに夢中で、実際彼と一緒にいるのは彼女だったんだからね。ふたりはとても話題になったよ。

ジョン　ヨーコと出会った時から、僕の気持ちは変わり始めていたんだ。でも世間は人が離婚するのが好きじゃないらしい。こっそりやれれば問題ないんだけど、こっそりやるなんて僕らには不可能だ。僕らは恋に落ちたから結婚したんだよ。ちょっとおかしいって考える人が多いけど、そんなのしょっちゅうあることだぜ。それにヨーコがたまたま日本人だったから、それもプラスには働かなかった。で、みんなジョンは頭がおかしくなったって思った――だけど僕は恋をしただけなんだ。結婚してても恋に落ちる人はいっぱいいるだろ、すごく若いうちに結婚しちゃった人とかさ。

ヨーコと僕が結婚してから、人種差別もはなはだしい手紙が来た――いつか彼女に喉を掻き切られるぞ、とかいうやつだよ。そういうののほとんどは、オールダーショットにいる軍人たちがよこしたものだ。士官の奴らさ。1971年

リンゴ　ジョンとヨーコは結婚をそっとやり遂げたかったんだと思う。だからジブラルタルへ行ったんだよ。

ジョージ　ジョンがヨーコとジブラルタルで結婚することはまったく知らなかった――僕はあのレコードを買ったんだぜ！ 彼は誰にも知られたくなかったんじゃないかな。ふたりだけで、静かにやりたかったんだ。

ジョン　ヨーコと僕は、僕らが何をやろうと新聞に載るんだなって思った。そこで、結婚がどうせ記事になるなら、そのスペースを平和の宣伝に使わせてもらおうと思ったのさ。1975年

ベッド・インはマスコミの目をひくための手段にすぎなかった。初めてのベッド・インは、ハネムーン中にアムステルダムでやったんだ。
カードを送ってさ。"ジョンとヨーコのハネムーンへ来てください：ア
ムステルダム・ホテルのベッド・インへ"。争うようにして入ってきたレ
ポーターやカメラマンの顔、見せてやりたかったね！ みんなが何を
期待してたか知らないけど――彼らの頭の中は、自分たちの予想
してるものではち切れそうになってた。それで必死になって入って
たら、みんな口をあんぐりさ。そこにいた僕らは天使みたいだっ
から。花に囲まれたベッドで、ピースとラブって言葉を頭の上に
げて。服だってきちんと着てたし、ベッドは単なるアクセサリーに
ぎなかった。パジャマとはいえ、普通の服とそんなに違わない―
も露出しちゃいなかったよ。1972年
スコミは僕らが人前でセックスでもするつもりだと思ってたらし
僕らが裸の写真をアルバム・ジャケットに使ったから――それで、
なことでもありうるって思ったんだろう。前にも言ったとおり、そ
ょっとしたら平和を訴えるアイディアとしてはいいかもしれない
もその場合、僕は実際自分がそのイベントをやるより、プロデューサーに回るだろう
9年
はマスコミ相手に話をした。共産主義の国から来た人にも会ったし、西側の国
も会った――世界中のあらゆる国の人が来てたよ。毎日8時間、起きてる間はず
スコミのために時間をあげた。僕らのことについて質問したいことなら何でも
。"でも、これが平和のために何の役に立つんです？"ってみんな言った。でも
う考えてたんだ。"毎日戦争が起きてる。ニュースに出てくる戦争だけじゃなく、
・ウェインの映画を観ても、どんな映画を観ても、戦争、戦争、殺せ、殺せっ
かりだ。たまには平和、平和って見出しを出そうじゃないか！"。だから僕ら
しかったね、1969年3月25日、世界の多くの新聞に、"ハネムーン・カップルの
"って見出しが出たんだ。やった！ これってすばらしいニュースじゃない

チャードとリズ、結婚"と同じような"ジョンとヨーコ、結婚"っていうんじゃな
とヨーコが結婚、平和のためのベッド・イン"にしてほしかった。そうすれば
商品を売ることができる。商品を売るには道具が必要だ。そこで僕らが
ベッド"という道具だったんだよ。なぜ"ベッド"を考えついたかというと、
たからさ。僕らはものぐさだから。ずいぶんあれこれ考えたんだ、僕らが

ジョン
パリでのベトナム和平会議は、
出席者が座るテーブルの形を
どうするかって
ところまでしか来ていない。
そういう話を
何ヵ月も続けてるんだよ。
僕らはたった1週間
ベッドにいただけで、
もっと多くの成果をあげた。
そうだろ？
ウィガンだかハルだかに
住んでる老女から、
ヨーコと僕をもっと1面に
出してくれって「デイリー・ミラー」に
投書が来たそうだよ。
こんなに笑ったことは
ついぞなかったって。
それってすばらしいことだ。
僕らが望んでるのは
そういうことなのさ。
つまり、ふたりの人間が
ハネムーンでベッドに入ったことが、
1週間の間あらゆる新聞の1面を
飾るなんて、楽しい世界じゃないか。
僕は道化として死んでも
一向にかまわない。
後世の人間に称えて
もらう気はないからね。
1969年

心から欲しているもの、つまり平和だ。その平和を広めるためにどうすれば最大の効果をあげられるか――僕らは平和運動にも参加してたんだ。[illegible]
平和を広める道はガンジーの方法しかないと思う。[illegible] とにかく、当時ガンジーが言っていた方法だよ。[illegible]

ジョージ　平和を広めるというアイディアはいいと思った――僕は大賛成だったね。[illegible]歯医者のパーティに行った時から、僕にはジョンが物事をどう感じているかわかっていた。だから彼が平和を望んでいると言ったって少しも驚かなかったよ。[illegible]で実行したことも、そんなに意外じゃなかった。それに僕にとっては楽しかった[illegible]ヨーコと一緒なんだし、結婚したあとのハネムーンのベッド・インとしてやれたんだから。

リンゴ　**平和のためのベッド・インというのはすばらしいと思った。ふたりは今やアヴァンギャルドって感じだったね。平和のためにあいうことをやっちゃうんだから。デビッド・フロスト・ショーが最高におもしろかったよ。袋に入った彼らがテレビに出てきて、"私たちのイメージではなく、私たち自身に話しかけてください"って。**

ジョン　オーストリアのテレビのために映画を作ってくれって頼まれて、それで撮ったのが「レイプ」だ――実際のレイプじゃないよ、タイトルが「レイプ」なんだ。実際にはカメラによるレイプってこと。で、この映画を持ってオーストリアへ行った時、袋に入って記者会見をやったんだ。あれは最高だったね。マスコミの人間がぞろぞろやって来るんだけど、彼らには僕らの姿が見えない――僕らはふたりでひとつの袋に入ってて、みんな袋に向かってインタビューするのさ。"本当にあなた方ですか？"とか言うんだよ。"どんな服を着てるんですか？""1曲歌ってみてくれませんか？"。それで彼ら、"どうしてここでそんなことをするんです？ これはどういう意味なんですか？"って訊くんだよね。それで僕が"これが完全なコミュニケーションだ"と言うと、"どうしてここを選ぶんです？ 私たちは一度もビートルズを見たことがないのに！"だって。誰もが袋に入って仕事に行けば、偏見なんてなくなる。中身で人を判断するしかないからね。僕らはそれをトータル・コミュニケーションと呼んでる。あれは最高にすばらしい記者会見だった。みんな袋を相手に、すごく真剣な話をしたよ。翌日のオーストリアの新聞の見出し――"報道陣は袋を相手に話す"。[illegible]

でかい白のロールス・ロイスに乗って白い袋が現れたシーンがテレビに映しだされた夜のニュースを、僕とヨーコはロンドンの家で見ていたんだ。とにかくそうやって関心持ってもらって、考えてくれればいいんだよ。

いつだって裏には真面目な意図があったんだ。ニュースじゃ"父親が子供を虐待"とか、そんなのばかり流れてる感じだった。「デイリー・エクスプレス」じゃ"もっと爆弾を落とせ"とかやってるし。だから僕らは、少し笑いを提供しようって思ったんだ。[illegible]

リンゴ　「ジョンとヨーコのバラード」に参加してるのは（ビートルズの他のメンバーでは）ポールだけだ。でも別にかまわなかった。「ホワイ・ドント・ウィ・ドゥ・イット・オン・ザ・ロード」はポールと僕だけだったけど、あれもビートルズの曲として発表された。それで何の問題もなかったんだよ。「ジョンとヨーコのバラード」はドラムもいいね。

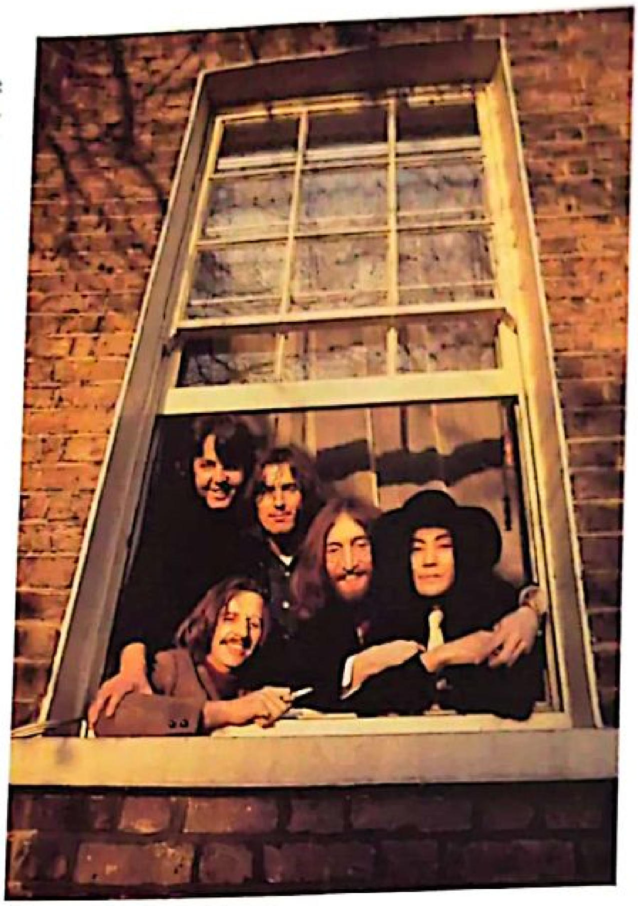
ジョン　「ゲット・バック」のあとに出たのが「ジョンとヨーコのバラード」だった。僕が書いた曲で、ちょっと昔のバラードっぽい感じ。僕らが結婚した時のストーリーだよ。パリへ行って、アムステルダムへ行ってと、そういういきさつを書いたんだ。"ジョニー・B・ペイパーバック・ライター"ってとこだね！

別枠のレコードという意識はない……ビートルズの次のシングルにすぎないよ。このレコードにはポールと僕しか関わってないからそういう話が出たんだろう。何の意味もないんだ。たまたま僕らふたりしかいなかったってだけだよ。ジョージは外国に行ってて、リンゴは映画の撮影中でその晩来られなかった。そんなわけで、リミックスをやるか、新しい曲をやるか、どっちかにしようってことになって――古い曲をいじくりまわしてるより、新しいものをやる方がいいに決まってるじゃないか。それで新しいのをやったら、出来がよかったんだよ。1969年

ジョージ　結婚式に呼ばれなくても気にならなかったし、あのレコードに参加しなくても気にならなかった。だってあれ、僕にはまったく関係ないものだからね――「ジョンとヨーコのバラード」なんだから。あれがもし、「ジョンとジョージとヨーコのバラード」だったら、僕も参加していただろうけど。

ジョージ・マーティン　ジョンとヨーコの曲はだんだんとよくなっていった。彼らが落ち着きを取り戻した頃には、ふたりと仕事をするのが楽しくなったよ。ジョンは作ったものをいろいろカセットに入れて、"これ、何とかなる？"と持ってきた。私もできるだけ協力した。彼は技術的なことがあんまり得意じゃなかったからね。

「ジョンとヨーコのバラード」を一緒にやった時はおもしろかったよ。あの時はジョンとヨーコのふたりにポールだけだった。今考えてみると、不思議なものだが、あれが彼らふたりのレーベル、彼ら独自のレコーディング方法を始めるきっかけになっていた。あれはビートルズの曲とは言いがたかった——それでいて、やはりビートルズの曲なんだ。彼らにとっては、重大な結果を呼ぶ小さな糸口だったんだろうね。そもそもジョンはすでに気持ちの上でビートルズから離れてしまっていたし、あれがすべての始まりだったんだと私は思うよ。



ジョン　ついでながら、「ジョンとヨーコのバラード」、あれはここ(アメリカ)で放送禁止になったんだよ。それでどうしたかっていうと、"キリスト"って言葉が気に食わないらしいから——ここでは白いローブを着ていないと"キリスト"って口にしちゃいけないんだね——その部分をごまかしたのさ。"Rrrrp. you know it ain't easy…"。

デレク・テイラー　5月末にもモントリオールでベッド・インをやった。その時も僕は一緒で——ジョンとヨーコ、映画スタッフ、ヨーコの娘キョーコ、デレク、荷物26箱、さまざまな白のスーツ。

ジョアンと僕はクイーン・エリザベスII世号で行った。ジョンとヨーコ、ニールとスージーも一緒に行くはずだったんだが——あの歌にあるとおり、"サザンプトンの波止場に立ち尽くし……"だよ。ジョンとヨーコはマリファナの逮捕歴のせいでビザのトラブルがあり、それで乗船許可が出なかった(彼らは飛行機でバハマとトロントを経由してモントリオールへ行った)。ニールも行かなかった。でもこの二度目の旅では、リンゴとピーター・ブラウンと奥様連中、それにその他大勢が、あの巨大な船のあらゆるところにいたね。またいろいろと変てこなことが起きてたよ。ジョンの指示で、僕はこの冒険談を長い長い記事にして、ビートルズ・マンスリーに載せるためテレックスで送った。

今回のベッド・インでは、最初の目的地はバハマのフリーポートだった。アラン・クラインの甥がハネムーンで出かけて、恐ろしいホテルに泊まったといういわくつきの場所だよ。ツイン・ベッドの脚には白いペンキを塗った大きなコンクリート・ブロックがついていて、それをセメントで床に固定してある。ジョンは部屋を見まわすと、"こんなところでベッド・インなんかできない。カナダへ行こう。バハマ以外では、カナダが一番アメリカに近い"って言った。

ふたりは8日間ベッド・インをやった。何百人という人がやって来たよ。質問に応じるジョンとヨーコは、まさしくアップルの精神にのっとっていた。部屋に入りたいという人ならどんな人でも完全に受け入れた——血だらけの斧でも持ってないかぎりはね。誰でも入ってきて質問することができた。ひょっとしたら数千人いたかもしれないな、実際そんな感じがしたよ。

僕は大がかりな人間劇を動かしてるようなものだった。その時のフィルムが少し残ってるけど、それを見るとぎゅうぎゅう詰めの部屋の様子がよくわかるよ。8日の間にすごい人数の人がスウィート・ルームを出入りして、みんなスピーカーホンから世界に中継していた。まだ通信衛星ができる前の話だからね。

僕の仕事は彼らがベッドにいる間、夜となく昼となくそばについていること。人が途絶えるとふたりは休むことができた。横になったり、新しいパジャマに着替えたり。一生ベッドで過ごせたらってたいていの人が夢見るものだけど、あのふたりはそれを8日間だけ実行したんだよ。

でもふたりにはモントリオールの領事に届けを出す義務もあった——数日おきだったと思う——彼らがそこにいられるのはお情けだったんだよ。実際ベッド・インが終わるとすぐ国外退去になった。ふたりの入国が認められないのは不当だと抗議していたんだけど、訴えは却下されてしまってね。ベッド・インをやっていたのは、その請求期間中だった。だから10日の期限が切れるなり、ふたりは即座にカナダを出るよう命じられた。それどころか、一番早いフランクフルト行きの飛行機に乗せられたんだ。僕らはドイツへ行きたいんじゃなくて、ロンドンへ行くんだというのに。みんなはそういうことも忘れてるんだ。ベッド・インをやり、それが終わったら国外退去になったってことを。

ポール　「イマジン」の中の、あのすばらしいシーンをよく観てると、漫画家のアル・キャップがいるのがわかる。彼もあのベッド・インに来てたんだ。だけどひどく意地悪でね。ほんとひねくれた親父だ。でもジョンはうまくかわしてる。ほんとはぶん殴りたいんだけど、しっかり自分を抑えてるのがわかるよ。あの時のジョンはよくこらえてたなと思う。だってあの男はヨーコをけなしてるんだ——それだけはやっちゃいけない。他人の奥さんをけなしちゃダメだよ——そういうのって、野蛮じゃないか？　ジョンは立派だったね。"彼のレベルまで自分を下げちゃいけない"って思ってたんだろう。

デレク・テイラー　その頃にはもう、"ビートルズをつかまえろ"みたいな雰囲気になっているのが明らかだった。マスコミの論調は見事に色とりどりだったよ。批判もすごかったし、賞賛もすごかった。

アメリカのメディアはわりと寛容だったね。ちょうどその頃は「オルタナティブ・プレス」が盛んでね。「ヴィレッジ・ボイス」に「LAフリー・プレス」、「ローリング・ストーン」。どれも当時出たばかりだった。だけどイギリスの日刊紙——「フリート・ストリート」とかそういうやつのほとんどは、ジョンとヨーコは頭がおかしいと考えてた。ふたりは狂っちゃいなかったし、ふたりのやってたことはすばらしい平和運動だった。「ギヴ・ピース・ア・チャンス」(平和を我等に)もすばらしい歌だよ。

ジョン　「ギヴ・ピース・ア・チャンス」は好きだね、いい思い出があるし。自分の書いた中で最高のいい曲だとは言えないけど、僕はあの曲を常に誇りにしてる。特に忘れられないのは、ワシントンであれだけの人数が歌うのを聴いた時だ。最高だったね、反戦グループがみんなで声をそろえてあの歌を歌ってた。僕にとっては感動の瞬間だったよ。1974年

でもちょっとだまされた。歌詞に"マスタベーション"って言葉が入ってるだろ、だけど歌詞カードに僕が書いたのは——僕はそれまでうんざりするほど禁止処分を食らってたから——つまり、ずっと数え切れないほど放送禁止になってきたから、ここでは逃げて"マスティケーション(咀嚼)"って言葉を使ったんだよ。"マスタベーション"でトラブル起こすより、曲を出すほうが大切だったからね。1980年

ポール
ジョージ・マーティンと僕らが
レコーディング・スタジオで
話している時、
"会いたいって人が来てる"って
誰か言いに来たんだ。
僕らが"誰だい？"って言うと、
"ああ、平和がどうのこうのって
言ってる、どっかの馬鹿だよ"って。
なるほど、平和を語る馬鹿が来てた。
平和について語る人間は
馬鹿ってことになってて、
まともに受け合ってもらえない。
ベトナムに関わって
トラファルガー・スクエアで
座り込めば、
ああこいつはこういう奴だって
みんなわかった気になる。
彼らがベッド・インをやって
"これは平和のためだ"って
言った時も同じさ。
だけどあれは、みんなの目を
平和に向けさせるための、
すばらしい方法だったんだ。

デレク・テイラー　その頃はもう論争が盛んになっていた。それで結局、ジョンとヨーコはやたらにマスコミに出て、ブラック・パンサーからジェイムズ・ハンラッティの無実証明までいろんな運動に関わったものだから、マスコミはジョンとヨーコにうんざりしてきたんだ。

ジョン　イギリスのマスコミは僕らを子ども扱いしてる。"あんな中年のビートルから平和について説教されたくない、それに哲学は彼の得意分野じゃないだろう"ってさ。じゃあ政治家やジャーナリストは、神から超人的な知恵でも授けてもらったというのかい。1969年

イギリスでは、僕は運よく賭けに勝っただけの男で、ヨーコは玉の輿に乗ったハワイアンとか言われて、とんでもないね。でもアメリカへ行けば僕らはアーティストなんだよ……。1971年

デレク・テイラー　ジョンがグループから離れ始めたとは思わなかった。彼らはまだ音楽面で完全につながっていたからね。どんなことが起きていても、すべてがどうにかうまく共存していける気がした——楽な1年じゃなかったのは確かだけどね。

とても幸せな年だったとは言えない。終わってほんと嬉しいよ。アラン・クラインが来てからひどくなったんだ。あれからオフィスの楽しい雰囲気が消えた。

CamScannerでスキャン

ジョン

今僕らがやってることは、実際にはこれまで
ずっとやって来たことと何も違っちゃいないんだ。
僕らはずっと平和への意識を持っていた。
初期のビートルズの歌にも出てるはずだよ。
ビートルズが"愛こそすべて"と歌ってたのと同じさ
——僕は今、"平和こそすべて"と
歌ってるだけなんだよ。1969年

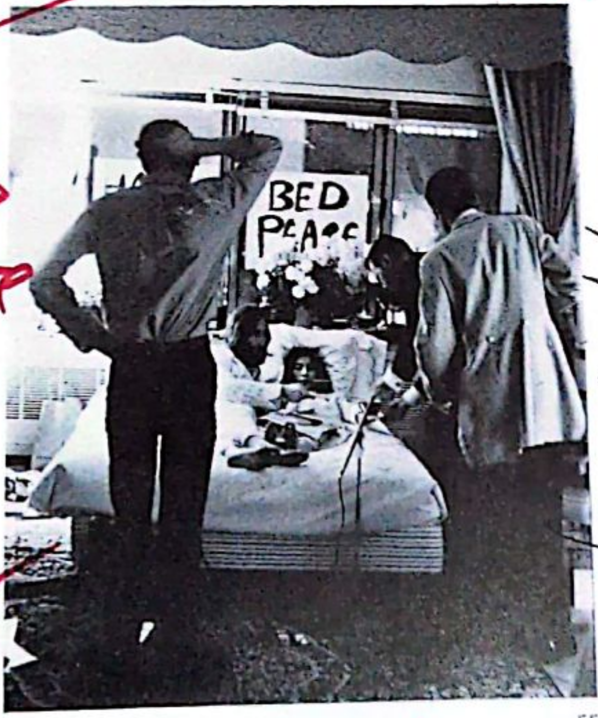
Via WUI

R.34

BYCH32 LUD45 XC 11
L OLCH10 AD INTL OAKLAND CALIF 22 153P PDT
LT THE BEATLES CARE DEREK TAYLOR
3 SAVILLEROW LONDONWEST1(ENGLAND)
HELP BLUE MEANIES UPON US THEY HAVE CAPTURED OUR TEETER TOTTE
PULLED UP OUR FLOWERS AND TORN DOWN OUR KITES LOVE
BESIEGED BERKELEY

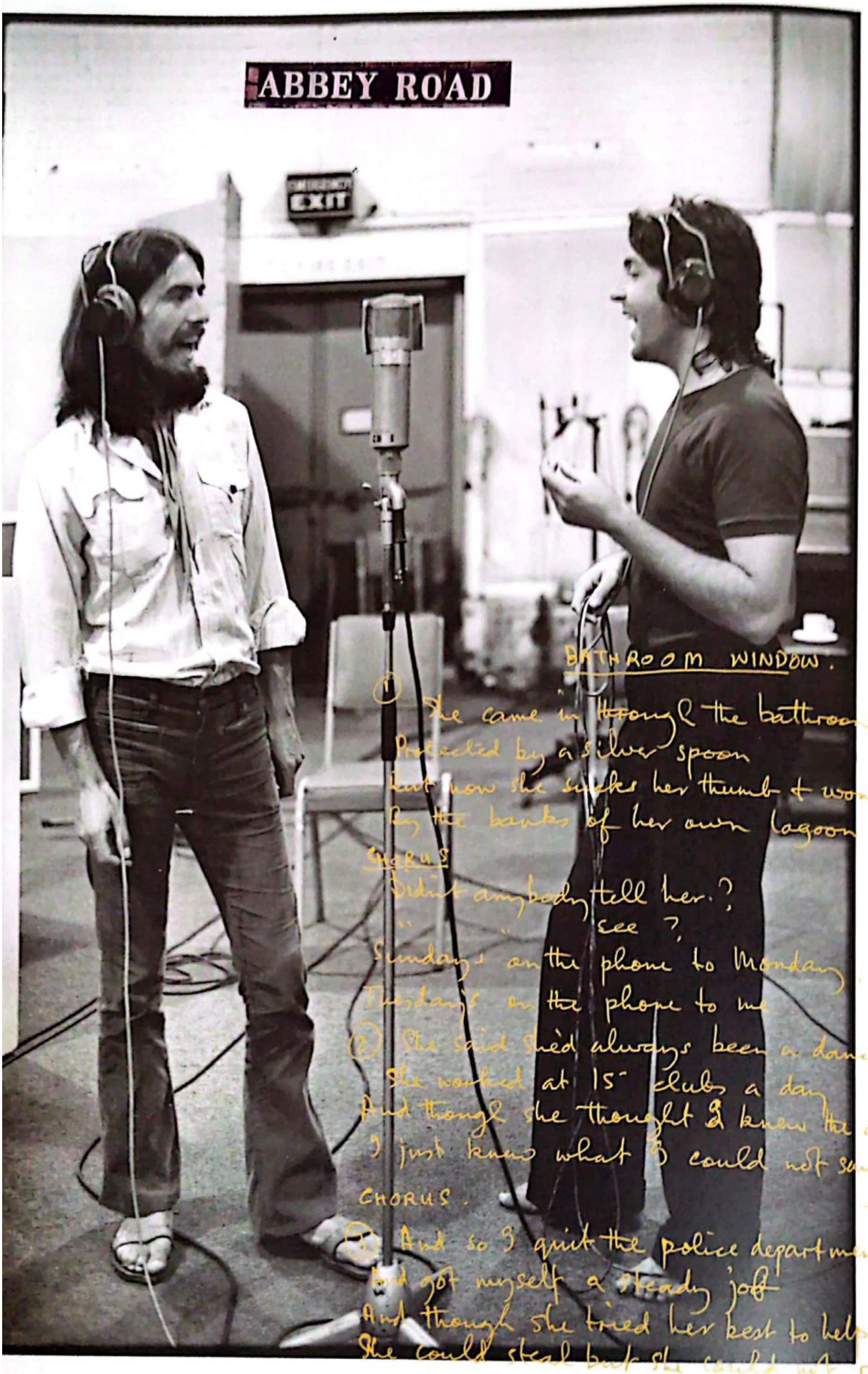
May 16	Ringo and family sailed on QE2 to ... of "The Magic Christian"; then two weeks holiday in Bahamas.
May 22	Ivor Novello award for "Hey Jude" which achieved highest c... British sales in 1968 although not released until August 1968.
May 24	John and Yoko fly to Bahamas for a Peace "lie in".
May 25	Change of plans for John and Yoko who flew to Montreal for Peace campaign instead. – not near enough to Americ
May 30	SINGLE: THE BALLAD OF JOHN AND YOKO.
June 1	George on holiday in Sardinia. Paul on holiday in South of France.
June 7	John and Yoko return from Canada after Peace "lie in". + Movie

world
headlines!
26nd + write
Give Peace
a chance!



Show picture with millions

CamScannerでスキャン



BATHROOM WINDOW.

(1) She came in through the bathroom window
Protected by a silver spoon
But now she sucks her thumb & wonders
By the banks of her own lagoon

CHORUS
Didn't anybody tell her?
" " see?
Sunday's on the phone to Monday
Tuesday's on the phone to me

(2) She said she'd always been a dancer
She worked at 15 clubs a day
And though she thought I knew the answer
I just knew what I could not say

CHORUS.

(3) And so I quit the police department
And got myself a steady job
And though she tried her best to help me
She could steal but she could not rob.

CHORUS. and out.

Another Lennon + McCartney original

CamScannerでスキャン

ジョージ　あのアルバム「ゲット・バック」(出た時は「レット・イット・ビー」になったけど)は、1970年5月までリリースされなかった。たぶん史上最も海賊版が多いアルバムだろう。あれが眠ったままになってるから、僕らは"またいいアルバムを作ろう"って決めたんだよ。ジョージ・マーティンに参加してもらうのがいいと思った。それでまたアビイ・ロードに戻って、あのアルバムを作り始めた。

リンゴ　ジョージ・マーティンと一緒にアビイ・ロードに戻ると、何だかくつろいだ気分になったね。家に帰ってきた感じだった。僕らはジョージを知っていて、ジョージは僕らを知っている。僕らはこの場所を知っている。"さあみんな、帰ってきたよ"って感じだった。

ポール　スタジオに入ってる間、エンジニアのジェフ・エメリックはいつでもエベレストという煙草を吸ってた。それでこのアルバムのタイトルは「エベレスト」にしようって言ってたんだ。気に入ってたわけじゃないんだけど、他に思いつかなかったのさ。だけどある日僕は、"これだ!"って——どうして思いついたのかわかんないけど——「アビイ・ロード」がいい! 僕らが今いるスタジオだ、このスタジオはすばらしいし、それに響きがちょっと修道院みたいじゃないか"。

リンゴ　何週間もみんなであれこれ言ってたんだ、"「ビリーズ・レフト・ブート」なんてどう?"とか。でもそのうちポールが言い出したんだよ、"「アビイ・ロード」にしたらどうかな?"。1969年

ジョージ・マーティン　「レット・イット・ビー」があまりにも悲惨なレコードだった(すばらしい曲が入っているとはいえ)から、ビートルズはもうこれでおしまいだと私は本気で思っていた。もう二度と彼らと仕事をすることもあるまいと。"こんな終わり方をするなんて実に残念だ"と思っていたんだよ。だからポールから電話がかかってきて、"またレコードを作るんだ——プロデュースしてくれないかな?"って言われた時は驚いた。

その時私は即座に、"我々の昔のやり方でやらせてもらえるなら"と答えた。"僕らもそのつもりだよ、そうしたいんだ"と彼は言った。"ジョンもかい?"——"うん。ほんとだよ"。それを聞いて私は答えた。"君たちが本当にそう望んでいるのならやろう。またみんなで集まろう"。とてもよくできたレコードだ。あれだけいいものになったのは、みんなこれで最後だと思っていたからではないかな。

ジョン　音楽は音楽だよ。ああいう連中は僕らやディランが進歩してないって批判するけど、みんなの目を新しいものに向けさせたのは僕らだぜ——だから僕らの言うことは信じろって言うんだよ。これは音楽の問題だ。僕らが変わりたい気分になれば、変わったっていいじゃないか。僕らが今取りかかってる次のアルバムでも同じことだ。今度のは、評論家にはちょっと受けるだろう。僕らも延々ギターをかき鳴らしてるだけっていうのに飽きてきたんだ。それでまたアルバム作りに入った。

僕らはもう一緒に曲を書いてはいない。一緒に作らなくなって2年くらい——たまにちょこっとやるだけで、共同作業といえるものはない。僕は僕の好きなものをやり、ポールはポールの好きなものをやり、ジョージはジョージの好きなものをやる——リンゴにしても同じだ。アルバムの時間を全員に割り振ってるんだ。僕らに言わせれば、今度のアルバムはダブル・アルバムよりビートルズっぽいね。1969年

ニール・アスピノール　「アビイ・ロード」のレコーディングの時は、僕は一度もセッションに顔を出さなかったと思う。時間もそんなにかからなかった——1~2か月ってとこじゃないかな。あの頃ジョンは自動車事故に遭ってね、しばらく来てなかったよ。

リンゴ　「レット・イット・ビー」の悪夢のあとだったけど、「アビイ・ロード」はうまくいった。B面なんてすばらしいね。あれだけメチャクチャなものを灰の中からまとめて甦らせたあの最後の部分。僕に言わせれば、僕らが作った曲の中でも最高傑作のひとつだ。

ジョンとポールがちょっとずついろんなものを持ってきてたから、それをレコーディングしてくっつけた。実はあの最後の部分に、一番の真実が現れてるんだ。曲はどれも完成してなかった。いろんな作品が入ってるけど、ふたりが一緒に書いたものはない。その頃ジョンとポールは自分たちの曲もそんなに書いてなかったんだよ、ほんとはね。

ポール　半端なやつを全部一緒にしようっていうのは僕のアイディアだったと思う。でもそういうことを主張するのはちょっと控えてるんだ。みんなのアイディアだってことでかまわないさ。とにかく、最終的には、僕らあれを全部メドレーにしようっていうアイディアを思いついて、B面をちょっとオペラっぽい構成にした——あれはすごくよかった、未完成のものを10曲か12曲、いい形で使えたんだからね。

ジョン　半端なものはいつでもいっぱい転がってた。僕も「サージェント・ペパー」時代に書いたものをそのままにしててね。何年もほうっておくと、ちょっと興味がなくなってきちゃうだろう。だから、そういう切れっ端を片づけるにはいい方法だった。実際には、ジョージとリンゴも少し書いたんだよ。文字どおり、やりながら作った——中間部とか、変わり目とかも。"ここに12小節分ある——これを埋めてくれ"ってポールが言うと、その場で作るんだよ。1969年

ポール　ジョンの曲に「ポリシーン・パン」というのがあったんだけど、ずっと前に彼が出会った女の子をモデルに書いたものなんだ。リバプール時代の僕らの友だちに、詩人のロイストン・エリスというのがいてね、ツアーに出た時、南部で再会したんだ。シュルーズベリーかどこかだったと思う——彼がギグにやってきたんだよ。ジョンは彼と夕食に出かけて、そのあと彼の家に寄った。するとそこにポリシーン(ポリエチレン)をまとったようにしか見えない女の人がいたんだ。彼は帰ってくると、そのポリシーンをまとった女性の話をしてくれた。"参ったぜ! こういう女がいたんだ、それがまた最高で……"。僕らはそれを聞いて、"へえ、すげえ!"ってね。しまいにはそれが歌になったわけさ。

ジョン　「ポリシーン・パン」は、ジャージーのある女性と、イギリスにおけるアレン・ギンズバーグみたいな詩人とのちょっとした出来事を思い出して作ったんだ。彼女は実際には長靴にキルト姿じゃなかったよ、あれは僕がこしらえたんだ。ポリエチレンの袋の中での倒錯的なセックス。僕は単に、何か書くネタを探してただけさ。1980年

ポール　僕にもいくつか未完成の曲があった。真ん中が抜けてるとか、2節目ができてないとか、最後がないとか。

リバプールの父親の家でピアノを弾いてたら、妹のルースのピアノ教本がスタンドに置いてあったんだ。それをぺらぺらめくっていくと、"ゴールデン・スランバー"というのが出てきてね。僕は楽譜が読めないし、そういう古い曲は思い出せなかったから、勝手に自分で節をつけていった。歌詞が気に入ったんで書き留めておいたんだよ。するとそれが僕の他の曲にうまくハマった。「ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー」も前からあったやつ……。

ジョージ　ほんと、漫画だよ——僕らがやってることは漫画みたいなもんさ。あなたはこれだけ稼ぎました、これがどうであれがどうで、そういう紙切れをもらうけど、実際にそれだけのポンド、シリング、ペンスでもらったことなんかない。僕らは全員、大きな家と車とオフィスを持っているけど、僕らが稼いだ金を実際に受け取ることは不可能らしい。1969年

ポール　"僕はもう大金持ちなのかな?"って僕らが訊くと、"書面上はそうです"とか、いつだってわけのわからない答えが返ってきた。それで"え、それはどういう意味? 金持ちなの、金持ちじゃないの? もう銀行には何百万以上のお金が入ってるわけ?"って言うと、"いえ、実際に口座に入っているわけではありません。私どもの考えでは……"みたいな。ほんと、ああいう人たちから何か聞き出すのはものすごく難しい。会計士というのは、絶対に成功した気分を味わわせてくれないね。

ジョン　僕がやったのは「ポリシーン・パン」と「サン・キング」、「ミーン・ミスター・マスタード」。僕らはそれをいじくりまわして、何となく意味が通るようなものにしたんだ。「ミーン・ミスター・マスタード」で、"彼の妹パン"ってのが出てくる——もともとの歌詞では"彼の妹シャーリー"だったのを"パン"に変えたんだよ。そうするとどこか関係あるような感じがするだろう。インドにいる時に書いたクズにすぎないんだけどね。

(「サン・キング」を)歌う時になって、ちょっと違う感じにしようというんで、ふざけて"カンド・パラ・ムーチョ"なんてやり始めた。適当に作ったんだよ。ポールは学校で少しスペイン語をやってたから、何となく意味ありげに聞こえるスペイン語を引っ張ってきてくっつけた。それに"チカ・ファーディ"——あれはリバプールの言い方で、意味は別にないんだ。単に"ハハハ"みたいな感じ。ただ僕ら、ひとつうっかりしちゃってね。"パラ・ノイア"って入れりゃよかったのに、すっかり忘れてた。僕らよく、自分たちのことを"ロス・パラ・ノイアズ"って呼んでたんだよ。1969年

ジョージ
僕らがふざけてつけた名前に
"ザ・フライング・トレリーニズ"と
いうのがあった。
"ザ・マスクト・アルバーツ"は
ジョンのお気に入りの名前のひとつ。
「グーン・ショー」に出てきそうな
名前だろ。
アルバートって人が何百人と
浮かんできそうだ。

ポール　"ジ・エンド"にはギター・ソロが入ってる。ジョン、ジョージ、僕がそれぞれ1フレーズずつ弾いた。そういうのをやったのはあれが初めてだった。それでついにリンゴを口説き落として、ドラム・ソロをやらせることにしたんだ。彼はそれまで、絶対に嫌だって言い張ってたんだけどね。そしてクライマックス。"そして最後、受ける愛は与える愛と同じになる……"。

ジョン　まさに全宇宙的、哲学的な一行だね。

CamScannerでスキャン

リンゴ
僕らがノッてる時は
それがそのまま
レコードに現れてると思う。
曲がエキサイティングだと
すべてがぴったりハマるんだ。
個人的なくだらないレベルで
僕らがどんな状態にあろうが
そんなことはまるで関係ない。
曲を聴けば最高に
クールだってわかるだろう。
僕らはみんな、全員が
1000%の力をつぎ込んだんだよ。

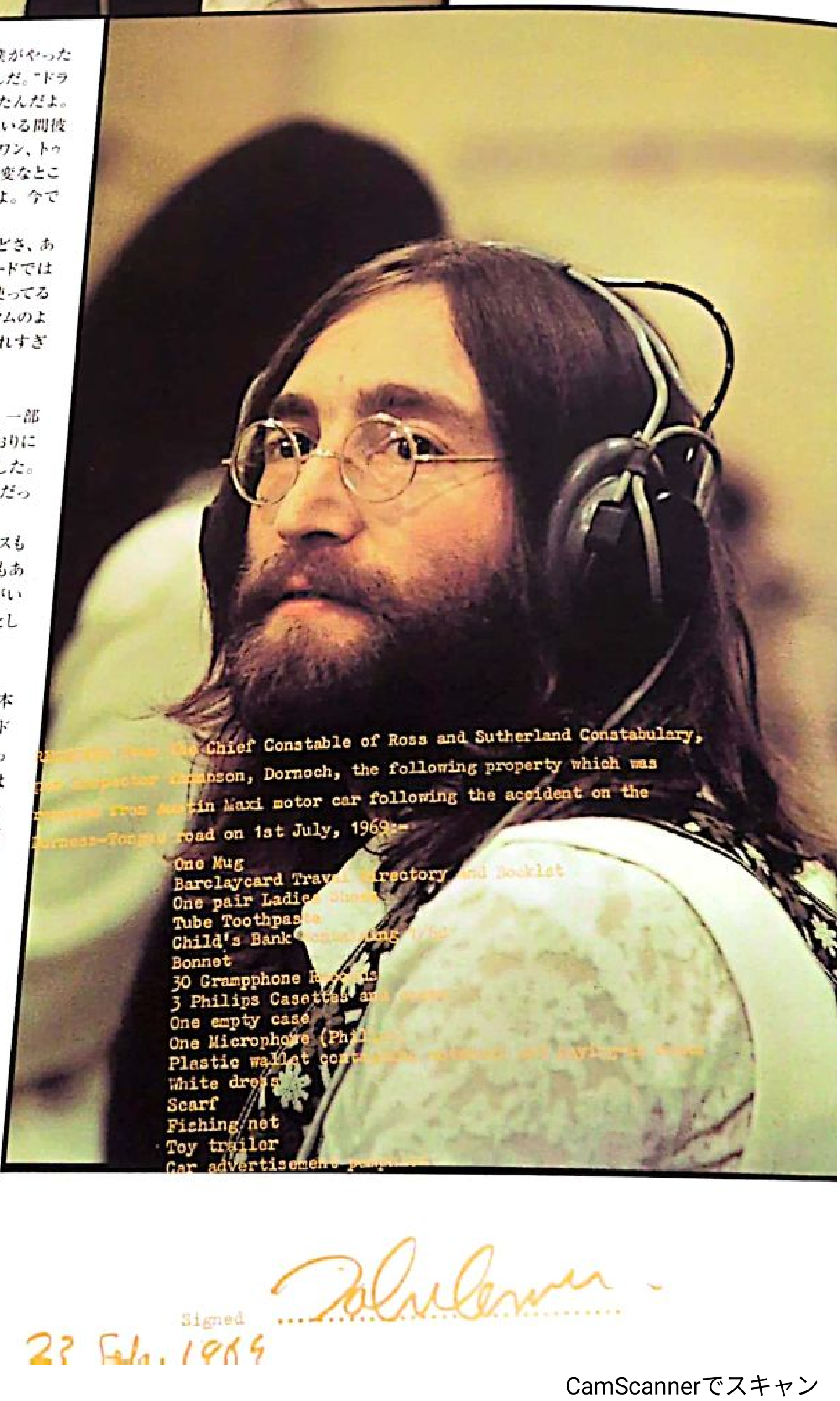
リンゴ　僕はソロにはまるっきり興味がない。あのドラム・ソロは、いまだに僕がやった唯一のものだよ。3人がギター・ソロをやったんで、それからみんなが考えたんだ。"ドラム・ソロもやろう"ってさ。僕は反対した。"ソロなんかやりたくない!"って言ったんだよ。でもジョージ・マーティンに説得されてね。タイムが必要だから、僕がプレイしている間彼がカウントを取ってた。あんな馬鹿みたいなのってないよ。"ドゥン、ドゥン——ワン、トゥー、スリー、フォー……"ってやっていくと、13小節分になったからって、すごい変なところでやめなきゃならない。でもまあ、やったことはやった。ほんと珍しいことだよ。今ではああいうのをひとつやっといてよかったと思うね。
(「アビイ・ロード」で僕がもうひとつやったこと。僕だけしか関係ないことだけどさ、あレコードのドラム・サウンドは、新しいカーフ・ヘッドの成果なんだよ。あのレコードではタムをずいぶん使ってる。ドラムのヘッドを新しくしたから、自然とそれをよく使ってるけ——あれは最高によかったからね。本物のレコードがすばらしいのは、タムタムのよしっかり出るところだ。ああいう魔法は今じゃ無理だね、あまりにも操作されすぎ

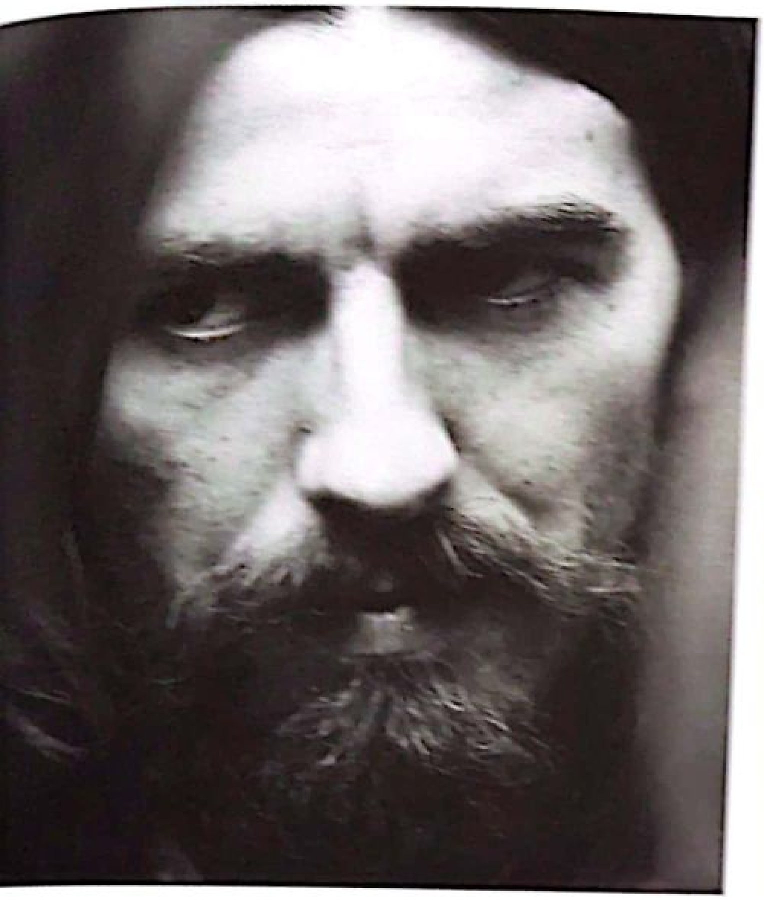
ージ　あのアルバムでは、雰囲気が少しばかり前向きな感じになっていたし、一部ーダビングを入れたものの、メドレーは全部通してプレイしたんだ。順番どおりに、バッキング・トラックをプレイして、それを全部ワン・テイクでレコーディングした。ごとにね。実際にプレイして、またほんとのミュージシャンに戻ったみたいだっ

ル・トラックもそう。いろんなハーモニーのリハーサルをやり、バック・コーラスもえた。ボーカルひとりで、その後あちこちにハーモニーを入れればいい曲もあパートに分かれてるのもあった。かなり凝ったところもあるよ。ここでこれがいど、その場で自分たちでパートを作ることもあった。その時は全員、ちゃんとしになろうとしてたよ。

ーティン　私とポールは、かつての「ペパー」の感じに戻ろうと思った。本あるものを作り出そうとね。それで私たちふたりで「アビイ・ロード」のメドに取り組んだ。私たちがあのB面でやったことに、ジョンはかなり不満だっとんどすべてといっていいほどポールと私の共同作業で、他のメンバーはたしね。ジョンは常にテディ・ボーイだった。彼はロックン・ローラーであり、たくさん入れたかったんだよ。それで私たちは譲歩し合った。だがB面ゃんと力を貸してくれている。スタジオにやって来て自分で作ってきたもストリーにちょっとずつ音を織り込むアイディアを出してくれた。全員がも仕事をしたね。だからこそ私はあのアルバムが大好きなんだ。

ンセプトというのはない。僕にとってアルバムというのは新曲を集めた一僕自身はシングルの方が好きだね。ポールはアルバムの構想を持っういうコンセプト・アルバムを作ろうとしてる。メドレーのアイディアを考コンセプト・アルバムに興味がない。僕が興味を持ってるのはサウンだろうとそのままのサウンドを入れたい。アルバムをショーにしたいとしては、ロック・ソングを14曲入れたいだけだ。1969年





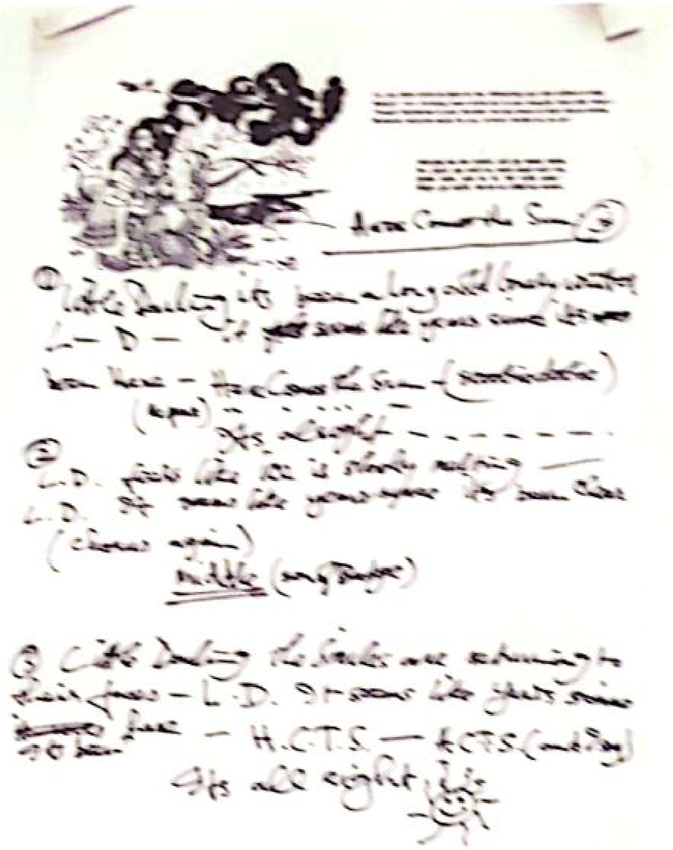
ひどい。あのサウンドは気に入ってる。1969

「カム・トゥゲザー」はセッションを重ねるうちに形になっていった。"ゆっくりやろう、これを変えよう、あれを変えよう"ってやっていって、最後にはああいう形になった。僕は言ったんだ。"あのさ、ヴォーカルは全然考えていないんだ。でも僕の中のなにかがわかるだろう?"って。そう言えたのは、僕らがそれだけ長い間一緒にやってきたってこともあるだろうね。僕は"ファンキーな感じにしてくれ"って言って、ポールはあのピアノを弾きはじめたのかもしれない。それからみんなでやったのさ。1969

ポール　僕の曲の中には言葉の断片をもとにしたものもあるけど、それを望ましいスタイルなんだ。でもまあ、ほとんど理解できないところから作ったものだね。「マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー」みたいな、ああいう曲を書くのが好きだ。会ったこともない人たちを使ってくだらないストーリーを考えるんだよ。小説を書くようなものだね。普通人が知っている名前はないんだ、自分で作ってしまえばいいんだから。

"僕にはそういう曲を書くことはできないだろうな"ってジョージに言われたことがある。僕は自分の体験から曲を作るタイプだからね。ジョンはもっと事実そのままを記述するタイプで、もし画家だったら、僕はきっともっと肖像画とかを描いていただろうね。

あの曲は人生の突然の転換を表してるんだ。すべてがうまくいっているように見えるとき——バン、バン! ——マックスウェルの銀のハンマーが振り下ろされて、すべてをメチャクチャにしてしまうのさ。



ジョージ　「ヒア・カムズ・ザ・サン」を書いたのは、アップルが学校みたいになり始めた頃だ。僕らはそこに通わなければならず、"これにサイン""あれにサイン"って、ビジネスマンみたいな真似をしなければならなかった。ある日僕はアップルをサボってやれと思い、エリック・クラプトンの家に遊びに行った。あの退屈な会計士たちの顔を見ないですむと思うと、ホッとしてすばらしい気分だった。イギリスの冬は永遠に続くかのように思えるから春が来るとほんとにそのありがたみがわかるんだ。そんな気分だったよ。それで僕はエリックのアコースティック・ギターを持って庭をぶらつき、そこで「ヒア・カムズ・ザ・サン」を書いたんだ。

ジョン　「カム・トゥゲザー」は僕の曲だ。昔のチャック・ベリーの感じをおおざっぱに入れながら書いた。"Here comes old flat-top"って、あの歌詞を入れたままだったのが悪かったんだな。チャック・ベリーのあの曲とは全然違うのに、訴訟を起こされそうになって、言っただけで法廷に引き出された。"Here comes old iron-face"にでも変えておけばよかったよ。だけどあの歌はチャック・ベリーとも関係ないし、この地球の誰とも関係ない。とにかく面白い歌だよ。1969

ポール　ジョンが持ってきたアップテンポの歌。それがチャック・ベリーの「ユー・キャント・キャッチ・ミー」そっくりなんだ。"flat-top"の歌詞までそのままだよ。それで僕は、"もう少しスローテンポにして、ベースとドラムを沼っぽい感じにしよう"って言ったんだ。ベースラインを僕が考えて、そこからどんどん膨らんでいった。いい曲になったよ。

ジョン　あれはスタジオで作っていったんだ。ややこしい話でね。「カム・トゥゲザー」という表現自体は、ティム・リアリーが考えたものなんだ。彼が大統領だか何だかの選挙に出ようとした時、キャンペーン・ソングを書いてくれって頼まれたんだよ。それで僕は考えた。でもいくらやってもいいのが出てこない。ようやく作ったのが「カム・トゥゲザー」だったんだけど、こんなのとても彼の役には立たないだろう——あんなキャンペーン・ソングはありえないよ。

何年も経ってから、リアリーが僕にだまされたって言ってきたけどね。だましちゃいないさ。それがきっかけで「カム・トゥゲザー」ができたってだけだ。どうしろっていうんだ? 彼にあの歌をあげればよかったのか? あれはファンキーなレコードだった——ビートルズの中でも気に入ってるひとつだよ。というより、レノンの曲の中で気に入ってるもの、そういうふうに言っておこう。ファンキーで、ブルージーで、僕のヴォーカルもすご

ジョン　あれは典型的なマッカートニー・ソングってやつだね。あれには随分金をかけたんだ。僕は「マックスウェル」には参加していない。事故のあとで元気がなくてね。その間にほとんど終わっちゃったんだ。ジョージとリンゴはあのレコーディングではほとほと疲れきってたよ。僕らがやったどのシングルよりも、あの曲に金がかかってるはずだ。1969

ポール　「マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー」のレコーディングには3日かかったって、みんな怒ってた。大問題だってわけさ。

「オー!ダーリン」のレコーディングの時は、僕は1週間毎日早くからスタジオに入って、ひとりで歌ってた。初めのうちは声がクリアすぎるんだ。1週間まるまるステージをやったあとのような声にしたかった。

ジョン　僕ならもっとよくなったのにって、ずっと思ってた——あれは彼より僕のスタイルに近い。まあ書いたのは彼なんだからさ、彼が歌うことになるんだけど。誰が歌うかは、誰が作ったかで決まるんだよ。僕らふたりで歌ってるやつは、たいていふたりで作った曲なんだ。「オクトパス・ガーデン」はリンゴの曲だけど、全員で歌ってる。つまりサビのところとか

CamScannerでスキャン

何かでみんなが協力したってことさ。単純な話だよ。1969年

ジョージ・マーティン　「サムシング」はジョージの初めてのシングルで、10月にリリースされた。あれはすばらしい曲だ。正直言って、私はジョージがあれだけのものを持っていたと知って驚いた。最高にすばらしい曲だよ。

ジョン　あれはこのアルバムの中で一番いい曲だと思う。ほんとにね。1969年

ジョージ　「サムシング」はピアノで作った。"ホワイト・アルバム"をレコーディングしてた時だよ。あのアルバムの時は、全員がそれぞれ違うスタジオで違うものの仕上げをしてる時期があった。それで僕は少し時間をとって、空いてるスタジオに入って「サムシング」を書いたんだ。

たぶん音域は5音の範囲でおさまるんじゃないかな、だからたいていのシンガーが無理なく歌える。僕があれを書いた時には、頭の中でレイ・チャールズが歌うのが聴こえてた。数年後、実際彼が歌ってくれたよ。フランク・シナトラが「サムシング」をやった時は、別に興奮しなかった。当時より今になってわくわくしてる。以前はそんなにフランクが好きじゃなかったんだ――彼は僕よりひと世代前の人だろう。彼よりもスモーキー・ロビンソンやジェイムス・ブラウンがやった時のほうが嬉しかった。だけど今は、誰がやってもすごく嬉しい。カバー・バージョンがたくさん出るってことは、いい曲であることの証だと思うから。

（いつだかBBCでマイケル・ジャクソンに会ったんだ。僕らにインタビューしてた人が「サムシング」のことを話題にした。するとマイケルはこう言ったよ。"え、あなたが書いたんですか？ レノン＝マッカートニーだと思ってた"）。

ポール　ジョージの「サムシング」は、突然現れたって感じだったな。あれはパティのことを歌ってるんだ。すごく美しいメロディで、構成もほんとによくできていて、僕はとっても気に入った。最高だって思ったよ。僕のベース・プレイはちょっと凝りすぎだってジョージは思ってたみたいだね。こちらから言わせてもらえば、僕はできるだけあの曲を引き立てようとしていたんだけどさ。だけど今度は彼が僕に言う番だったんだろうな、ごちゃごちゃと飾りすぎるって。とはいえあれは楽しかったよ、うまくいったしね。

これはジョージの最高傑作だって思った――「ヒア・カムズ・ザ・サン」と「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」と合わせて、たぶん彼のベスト3だね。それまで彼はアルバム1枚に1〜2曲しか作ってなかった。彼も自分がソングライターだという意識はあまりなかったと思うよ。それに、明らかにジョンと僕が曲を作るのが当然だと思われてたし――もちろんそんなつもりはなかったさ、だけど僕らは"レノン＆マッカートニー"だったからね。アルバム作りに入るとなれば、レノンとマッカートニーが曲を作りにかかる――たぶん彼がそこに入り込むのは楽なことじゃなかっただろう。だけどついに彼は「サムシング」を生み出し、他にもすばらしい曲を作った。みんなすごく喜んでたと思う。ジェラシーなんかなかったさ。実はね、フランク・シナトラはいまだに「サムシング」をレノン＝マッカートニーの曲でも特に好きな曲って紹介してると思うよ。ありがとうフランク。

ジョン　ポールと僕とで王国を築き上げたんだ。それは僕らがシンガーだったからさ。ジョージをメンバーに引き入れた頃、彼は歌うことすらなかった。彼は純粋にギタリストだったんだよ。それで最初の数年はステージでも歌ってなかった。1曲くらいはやらせてたと思うけどね、リンゴもそうだったし。"ではここで彼にも……"ってさ。ポールと僕が歌をすべて受け持ち、曲作りもすべてやっていた。ジョージが曲を書きだしたのはずっとあとのことだよ。

僕らがジョージをのけ者にするはずないだろ。彼の曲がまだあんまりよくなくて、誰も何も言いたがらない、そういう気まずい時期もあったけど、それでもみんな協力したんだ――リンゴの曲でもそうだった。つまり、僕らは自分たちの曲以上に、そういう曲に力を注いでいたんだよ。彼は長いこと同じレベルまで来られなかった――彼を低く見てるんじゃないぜ、僕らみたいにソングライターとしての練習をしてなかったってだけだよ。1974年

リンゴ　すばらしい曲だった。ジョージはソングライターとして開花しつつあったんだよ。「サムシング」と「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」――ほんと、過去に作られたラブ・ソングの中でも、この2曲は最高だよ。ジョンとポールが書いたものにも、いや、あの当時の誰が書いたものにもまったく引けを取らない。本当に美しい曲だ。おもしろいものだね、ジョージが前に出て来ると同時に、僕らは解散に向かってたんだから。

ジョージ・マーティン　ジョージの辛さは、優れたソングライティングの素質を持つ者として認められなかったことだと思う。誰も彼を同じレベルで見ていなかった――ジョンも、ポールも、私も。その点で私は罪の意識を感じている。私はよく言っていたんだ、"彼が曲を作ったらアルバムに入れてあげよう"――見下すようにしか聞こえないね。彼はとても嫌な気分だったに違いない。だが彼は辛抱して努力を続け、作るものも次第によくなっていった――そしてついに。「サムシング」はすばらしい曲だ――でも、今まで私たちは彼が曲を作ることにあまり期待してなかったんだ。実のところ、"彼はこれからすばらしいソングライターになる"などとは思ってもいなかった。

もうひとつの問題は、彼にはコラボレーターがいなかったということだ。ジョンには常にポールがいて、アイディアをぶつけ合うことができた。実際にポールと曲を書いたものでなくても、常に彼がライバルとして仲間として存在していた。だがジョージはまったくひとりきりで、それを私たち3人がさらに悪い方へ進めていた気がする。今私はそれを悔やんでいるんだ。

ポール　僕らはまとまってたよ。音楽は問題なかったし、僕らは友だちだったんだ。たとえ底の方で渦巻いてるものがあったにしても。最悪の時期だってお互いすごく尊敬し合っていたんだよ。かなり危ない雰囲気になってきてはいたけど――でもあの頃はまだ最悪の時期じゃなかったんだよね。おかしなことに。僕らはかなりいいアルバムを作った。ケンカといっても僕が1曲に時間をかけすぎたとか、その程度のことだった。僕は「マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー」に3日使ったんだよ。ジョージに言われたっけ、"3日もかかってる、たかだか1曲だけに"――"うん、だけどちゃんとやりたいんだ。これにはちょっと考えがあって"。まだムーグを使い始めてすぐだったから、ちょっと時間がかかったんだよ（今なら3日の仕事がスイッチひとつで終わっちゃうけどね！）。

ジョン　（「アイ・ウォント・ユー」の）最後でムーグ・シンセサイザーを使った。あのマシンはあらゆる音をあらゆる音域で出せるんだ――犬ならもっといろんな音を聴き分けられるはずだよ。ロボットみたいなもんだ。ジョージはあれをちょっと使えるんだけど、あのバリエーションを全部覚えるには一生かかるね。ジョージは1台持ってて、ビリー・プレストンのアルバムで使ってた。「ビコーズ」でソロも弾いてるし、「マックスウェル」にも出てくると思う。アルバムのあちこちで使ってるんだ。1969年

ジョージ　初めてムーグ・シンセサイザーの話を聞いたのはアメリカに行った時だった。僕は特注で作ってもらわなきゃならなかった。ミスター・ムーグはあれを発明しただけなんでね。ジャックの差込み口が何百とあって、キーボード2台で、ものすごく大きかったよ。

でも実物を持っているからって、それをすぐ使えるわけじゃない。使用マニュアルなんかなかったし、あったとしても数千ページになってただろうね。ミスター・ムーグだって、どうすればこれで音楽が作れるかはわからなかったと思うよ。もっと技術がいることだから。「ヒア・カムズ・ザ・サン」とかを聴くと、いい部分もあるんだけど、どれもかなり子供っぽいサウンドだよね。

ポール　僕が上に立ってはいけない、という気持ちがまた強くなってきていた。自分の曲は自分の好きな形にしたかったけど、誰かが気を悪くするようなことになったら嫌だった。それですごくやりにくくなってきてね。自分を懸命に抑えて、"OK"って言ったのを覚えてるよ。

ある時僕は、"ねえ、どうしたらいいか言ってくれないか？"って言ったんだ。するとみんな押し黙ってしまう。そういう日があってね、それからリンゴが僕のところへ来て言ったんだよ。"いや、いいんだ。指示を出してくれ。さあ――プロデュースしてくれよ！"。上に立ってくれと言われてる――でも僕は、それはやっちゃいけないことだと感じ始めてた。そんなふうだから、ものすごく仕事がやりにくい状況になって、結果的にあんまり楽しくなくなってしまったんだ。もっと楽しめたはずなのに。

ジョージ・マーティン　ジョンはレコード・プロデュースに幻滅していた。それまで私がやってきたことも、その時やっていることも、まったく気に入っていなかった。彼の言葉でいえば"いじくりまわす"ってことだね、そういうことを嫌っていたんだ。気取った飾りが嫌いだったとも言える。彼の言いたいことは私にもわかった。彼が望むのは、昔ながらの、シンプルで純粋なロックなんだ。"余計なものはいらない――ガンガンにブチのめそうぜ！"とね。あるいはそれがソフトなバラードなら、"流れのままにやろう"ということだ。彼はそのまま忠実にやりたかったんだよ。

ジョン　僕自身はストリングスとかそういうのはめんどくさいし、どうでもいい。バンドとしてやりたいんだ、じゃなきゃ電子音を使うか。ミュージシャン同士であれこれやりあうのも億劫だ――だけどポールはそういうのが好きなんだよ。そういうのが彼のやり方なんだ。バイオリンをどこに入れるか、どういう使い方をするか、それは彼次第さ。それに（「ゴールデン・スランバー」では）ストレートな感じのバッキング・トラックを入れたかったらしい――フリーキーなのじゃなくてね。1969年　彼が「アビイ・ロード」のB面でやりたかったのはそういうことさ。僕はあのポップ・オペラじみたやつには全然関わってない。僕が好きなのは3分間のレコードだ、コマーシャルみたいなね。1971年

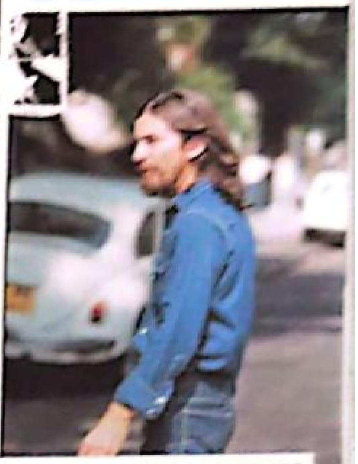
ポール　**僕らは8トラックを超えたことがなかった。**
ビートルズの作品はすべて
2トラックか4トラックか8トラックだよ。
「サージェント・ペパー〜」は4トラックだった。
「アビイ・ロード」の時には8トラックになってたけど、
それでも多すぎると思ってた！
ちょっと贅沢すぎるって気がしたよ。

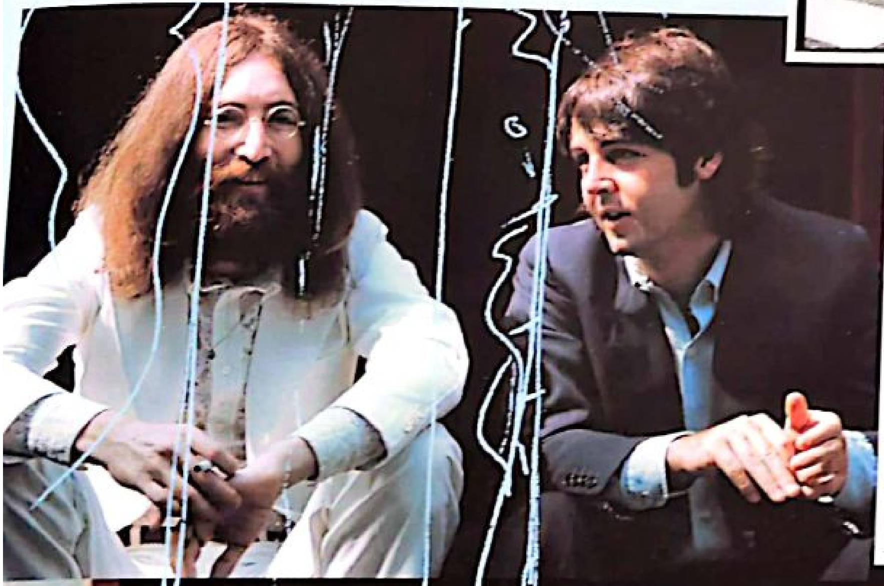
CamScannerでスキャン

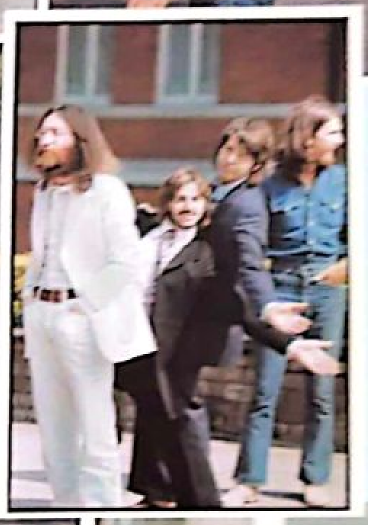
ポール　あの横断歩道はビルのすぐ前にあった。それで僕ら、"カメラマンを連れて外へ出て、横断歩道を渡るところを撮ろう。30分もかからない"。もうかなり遅れが出てきてたし、ジャケットは必ずサウンドより先に出来てないといけないんだ。それでカメラマンのイアン・マクミランをつかまえて、30分あげるって言って、みんなで横断歩道を歩いたのさ。

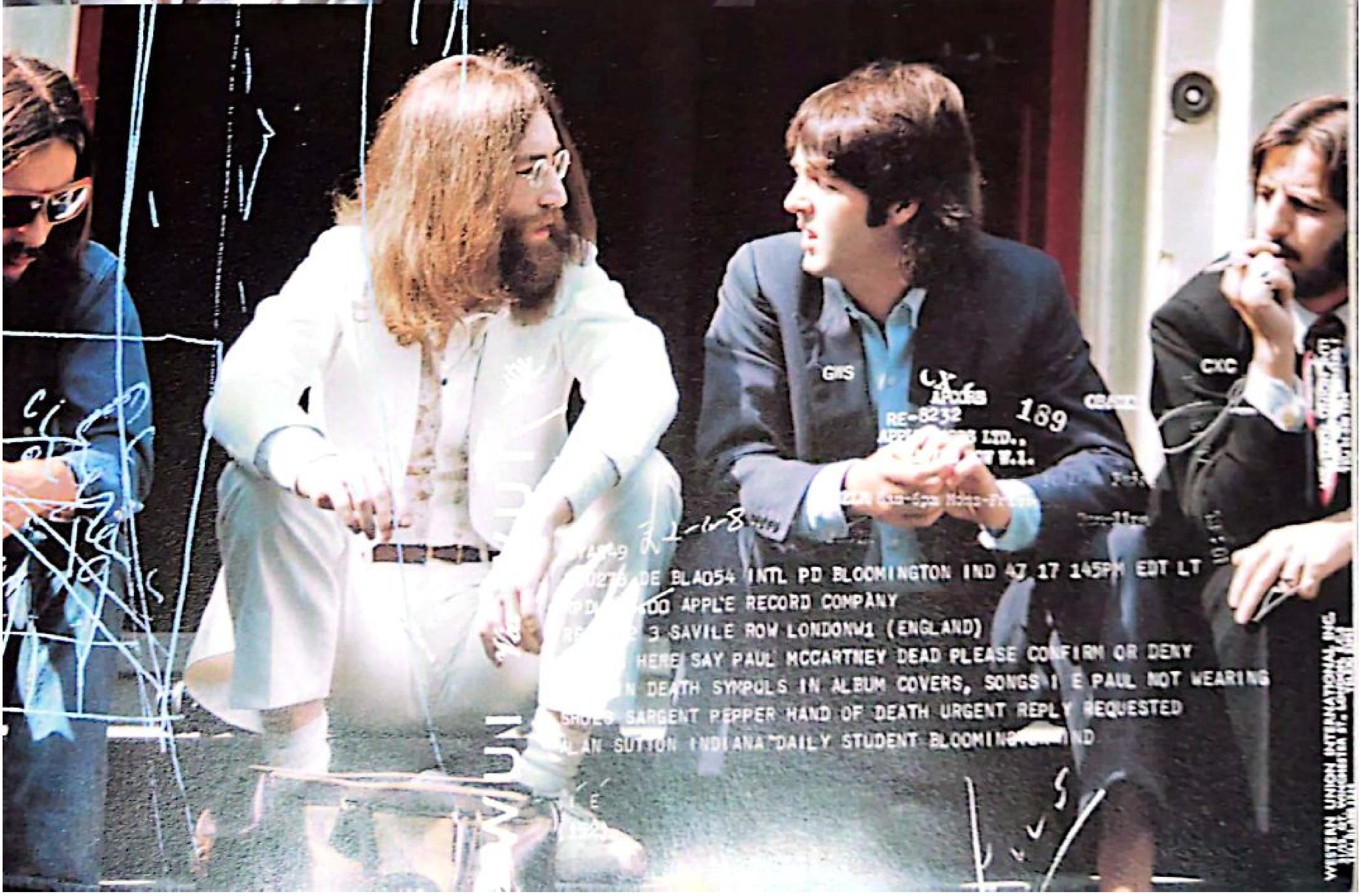
8月のすごく暑い日でね、僕はたまたまその日スーツにサンダルという格好で来てた。だけどあまりに暑いもんだからサンダルを脱いで、何テイクか裸足で歩いたんだよ。すると彼はそのショット、僕がサンディ・ショー・スタイルで靴を履いてないやつを使ったんだ。でも裸足になる人なんていくらでもいるし、どうってことないと思ってた。

ところがある日、オフィスの人間が電話をかけてきて言うんだよ。"君が死んだってアメリカのDJが言い出して、その噂が広がってるんだ！"。"馬鹿らしい――死んでないって言えばいいじゃないか"。そう言うと、"いや、それくらいじゃおさまらない。君はあのジャケット写真で靴を履いてないだろう。何でもマフィアの間では、それが死の暗示になるらしい。それに君の後ろに映ってる車のプレートは"28IF"だ。で、それがつまりこういう意味になる。きみは28歳だ――もし君が生きていたら！"。それを聞いて僕は言ったんだ。"ちょっと待ってよ――いくら何でもやりすぎじゃない？"。ところが彼は言う。"まだあるんだ。リンゴは黒い服を着てる。つまり彼は葬儀屋の役で……"。そういうふうにつながっていったのさ。それほどたくさん手がかりがあったわけ。

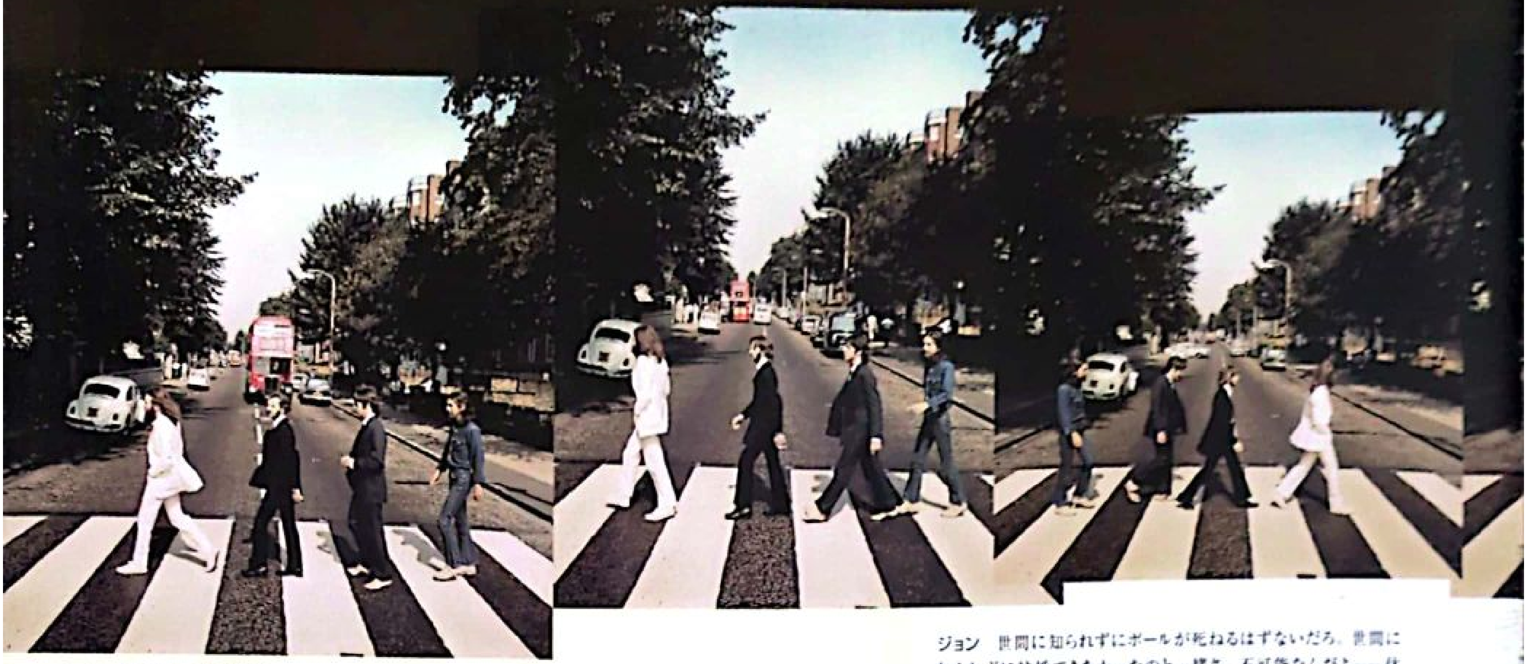








CamScannerでスキャン



ジョン　世間に知られずにポールが死ねるはずないだろ。世間に知られずに結婚できなかったのと一緒さ。不可能なんだよ——休暇でどこへ出かけても、世界中に知られてしまう。異常だね——だけどあれは「アビイ・ロード」のいい宣伝になった。1969年

デレク・テイラー　僕はあれをいつもの仕事の一環として処理した——典型的なナンセンスだよ、僕らはいつもああいうことの後始末をしなきゃならなかった。あの件では何千本と電話がかかってきたね(あの噂はいまだに消えていない。噂についての本まで出ているし、あちこちであの話をして生計を立ててる奴もいる)。それで最後には、本当かもしれないって言ったんだ。そういう噂が出ると、よくその手を使うんだよ。"ひょっとしたら彼は死んだのかもしれない——私にはわかりませんよ"って。

(モントレー・ポップ・フェスティバルでも同じようなことがあった。ビートルズの全員が会場に来てるっていう噂が出てね。それで僕はこう言った。"まあまあ落ち着いて。彼らのうちの3人はいると思います。でも3人とも変装してるはずです——それにどの3人かは私たちも知りません"。つまりこういう論法だ。もしメンバー3人がいるとしても、あなたがそう思っているにすぎない、彼らは変装している——確かめようがないだろう？　"まあ今そんな話をしてもね。もう少し早く質問してもらっていたら……"と。それで雰囲気が怪しくなってきて、みんなの気持ちもぐらついてくる。そこを突くんだ。"本当に彼らはいるんですか？"——"いや、実はいないんです"。取るに足らない話さ。タオルを投げてしまえばそれでうまくいくんだよ)。

彼は死んだってこちらが言うだろ。すると疑り深い人は言うわけだ、"でも、あれは彼みたいに見えないか——口も同じだし、目だって同じだ！"。そして突然、彼は生きていたってことになる。人間というのはひねくれた生き物だからね。そうやって僕らは次に進めるわけだ。

ATTN: DEREK TAYLOR

PAUL DEATH RUMORS STILL AROUND IN NEW YORK. ALLEN KLEIN, PETER ARHEM, AND LOVELY CHRIS ON CHANNEL 5 POST MORTEM LAST NIGHT VENUE LA AND [illegible] HEAVIES. RESULT INDECISIVE DUE TO STIMULATING AND TIME CONSUMING DISCUSSION ON MERITS OF GROWING BLACK ROSES ESPECIALLY FOR PAUL. JOHN'S [illegible] RUMORS MAKE ALL NEWSPAPERS/ TV [illegible] BUT NO HEADLINES THIS IS YOUR FRIENDLY NEW YORK INFORMATION CLEARING HOUSE

LOVE
JOHN K

ジョン　ポールが裸足で道を渡ったのは、みんなと同じに見せながら少し目立とうというポールのアイディアさ。耳を青く塗ったりしたら——それじゃちょっと凝りすぎだろう。それでポールは裸足になって歩道を渡ることにしたんだ。あのアルバムを最初に見ると、ビートルズの4人がきちんと服を着て道路を渡ってるようにしか見えないだろう。そこが彼のちょっとした技なのさ。僕だってアルバムが出るまで知らなかった。あの日彼が靴履いてないことに気づかなかったんだよ。とにかく早く撮影を終えてほしいって、そればかり考えてた。まわりにすごい人が集まってきてたからね。"そのうち撮影に邪魔が入る。さっさと逃げようぜ。僕らはレコーディングしなきゃいけないんだ、ビートルズの写真を撮らせるのが仕事じゃない"——そう思ってた。それで僕はぶつぶつ言ってたんだよ、"さあ、早くやろう、歩調を揃えろよ"って。

リンゴ　どこかのDJがああいう暗号をすべて結びつけたんだ。まずポールが靴を履いてない(これはまあ単純なやつだ)、それにあのフォルクスワーゲン・ビートル。それから「マジカル・ミステリー・ツアー」の時に、僕ら3人が赤いバラなのに彼だけ黒いバラだったというのもある。気違い沙汰だよ、だけど全部ひっくるめて考えればそういう結論を出すこともできる。彼が生きてるってことを証明したくても、僕らにはどうしようもなかった。"こんな噂は嘘だって、どうすれば証明できるだろう？　そうだ、写真を撮ろう！"。でもそんなことしたって、"写真ではニセモノを使ったんだ"って言われるだけだろう。

ほんとにくだらないよね、でも僕らは心配してなかった。それもロックン・ロールの一部なんだから。ロックは狂気を生み出し続けるのさ。僕らがアルバムを出せば、どんな新聞にも記事が載り、テレビでも取り上げられた。でかい行事だったんだよ。

ポール　あのあとしばらくは、人に会うとちょっと妙な感じだった。みんな僕の顔の向こう側を見てるみたいでさ、まるで後ろが透けて見えるみたいに。それに変だろ、"僕はほんとに彼なんです"みたいなこと言うのって。

ポール　しまいに僕は言ったんだ、"そういうことにして放っておこう。宣伝にはなるじゃないか？　あの男は僕らのニュー・アルバムに夢中になっちゃって、自分で何を喋ってるかわかってないんだよ。だからマーク・トウェインが言ったように言っておけばいい。「私の死の噂はとてつもなく肥大化する」。それ以上僕には何もできないよ"。

あれが「アビイ・ロード」だったんだよね。ジャケット写真を撮り、タイトルをつけ、曲をすべて揃えた。そして「レット・イット・ビー」(あれは我らが友人の手によってねじ曲げられようとしていた)より先に出た。実際のリリースとしては「レット・イット・ビー」が最後になったけど、最後にレコーディングされたのは「アビイ・ロード」なんだよ。

アルバムとしてはよくできてると思う。ジョンはちょっと凝りすぎだと思ってたようだけど——でも僕はそういうのが悪いとは思わない。単に構成上のことだよ。今じゃ凝りすぎになんて全然見えないだろ。

ジョン　正直に言おう。あのアルバムのことは覚えてないんだ。なぜなら僕にすれば、「アビイ・ロード」は——どのアルバムだって常に同じことで——好きな曲もあれば嫌いな曲もあるんだよ。いつだってそうさ。自分たちのアルバムにブチのめされたことなんてないよ、僕はそんなにビートルズ・ファンじゃない。自分たちの作品の中には好きなものもあり、そうでもないのもある。「アビイ・ロード」はよくできたアルバムだ。それ以上でもないし、それ以下でもないと思う。1970年

ジョージ・マーティン　これが最後のアルバムになる、そうはっきりわかってはいなかった——だが誰もが感じてはいた。ビートルズはとても多くのことをくぐり抜け、とても長い間一緒にやって来た。10年近くも一緒に閉じ込められてきたんだ。あれだけ長く続いたこと自体、私には意外だった。だから彼らが解散しても、驚きはまったくなかったね。全員がそれぞれの人生を進みたいと望んだのだから——私もそうだった。私もあれで解放されたんだよ。

PPLE LONDON

881290 ELEC D
3.11.69

EREK TAYLOR
ERMAN JOURNALISTS HAVE PICKED UP RUMOUR FROM STATES THAT
AUL MC CARTNEY IS DEAD . INQUIRIES COME IN DAILY AND IN
RDER TO END THESE WOULD APPRECIATE CONFIRMATION THAT SUCH
UMOURS ARE FALSE .
EGARDS = PRESS DEPT. ELECTROLA ++

Maarweg 149
B-5 Cologne - BRAUNFELD
German.

PPLE LONDON

881290 ELEC D

ジョージ　あれがビートルズとして作る最後のレコードになるとは、あの時はわからなかったけど最後が近づいて来ているという感じはしたね。

あのアルバムが完成したあとの気持ちを正直に言うことはできないね。あのレコードを気に入ったし、楽しんだ記憶もあるけど、そんなふうにはとり出して思い出せないんだ。ずっといろいろあったからね。"ビートルズ・デイズ"とか"ビートルズ・モーメンツ"とか、いろんなのが出ているだろう。そういう記録で日付を見れば間に長いオフがあるのがわかる。ビートルズが1日オフになれば、僕らは何か違うことをやっていたんだ——1年オフになっても、(今みたいに)25年オフになっても同じだ。やることはいっぱいあって、そういう隙間はすぐに埋められた。あのバンドに戻りたいと思ってなかったことは確かだね。

CamScannerでスキャン

デレク・テイラー　8月22日、ジョンがアスコットに買ったティッテンハースト・パークの新しい家に全員が集まった。
それが全員そろった最後のフォト・セッションになった。

CamScannerでスキャン

リンゴ　いつもと同じフォト・セッションだよ。"よし、これが最後のフォト・セッションだ"
なんて思ってたわけじゃない。

ポール　リンダが僕のカメラで、16ミリ・フィルムを少しまわした。
それが最後のフィルムになった。

CamScannerでスキャン

ジョン　プラスティック・オノ・バンドは、かなり柔軟性を持ったものになる――何といってもプラスティックだからね。ビートルズでライブをやるのとは違う――ビートルズの場合には観客の大きな期待に答えないといけないだろう、それはけっこう辛い――でも僕とヨーコだけなら、何をしたって許される。

金曜の夜に電話が来て、トロントで10万人だかなんだか集めてロックン・ロール・リバイバル・コンサートというのをやるって聞かされた。チャック(ベリー)も出るし、ジェリー・リー(ルイス)も出るし、今も生きてる偉大なロッカーたちがみんな出るっていうんだ。ボ・ディドリーも。たぶんドアーズが中心になるだろうって話だった。僕らが招待されたのはキングとクイーンとしてホストを務めるためで、プレイヤーとしてではなかった――でもそのことを僕は聞いてなかった。だから"ちょっと時間をくれ、バンドのメンバーを集めるから"って言って、翌朝出かけたんだよ。

まったく、ものすごい早さだった。あの時まで、僕らと30秒でさえ一緒にプレイしたバンドはなかったのに。僕はエリックに電話し、クラウスをつかまえ、それからアラン・ホワイトも呼んだ。みんなOKって言ってくれたよ。面倒なことは何もなかった――ビートルズでやってきたような、フォーマットの決まったショーじゃなかったからね。ビートルズの場合はステージに出て行っていつも同じナンバーをやる――「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ヘッド」とかをさ――ステージは20分、みんな叫んでばかりで何も聴いちゃいない。アンプはピーナツみたいにちっぽけだし、あれはロックン・ロールというより見世物だよ。1969年

ジョン
ドラッグをやるのは
希望がなくなった時だけさ。
だからドラッグから脱け出す
唯一の方法は
希望を取り戻すことだ。
希望を持ち続けていられれば
酒もドラッグもいらない。
だけど希望を失ったら
どうすればいいっていうんだ?

ジョージ　プラスティック・オノ・バンドが9月にトロントへ行った時、実はジョンからバンドに加わってくれって言われたんだよ。でも僕はやらなかった。あんまり前衛バンドに加わる気になれなくてね。そういうタイプのものになることはわかってたから。

ジョンはクラウス・フォアマンと、ドラマーにアラン・ホワイトを連れて行くつもりだと言っていた。解散前の数年はみんなビートルズ以外のレコードをやっていたから、スタジオで友だちができていたんだよ。ドラマーとかベース・プレイヤーとか、いろんなミュージシャンとつきあいがあった。だから急ごしらえでバンドを組むのもわりと簡単だったわけさ。僕が断ったからエリック・クラプトンを連れて行った――みんな飛行機の中でリハーサルしたんだよ。

デレク・テイラー　ジョンはトロントのライブ・ピースでプレイしたけど、あれが何かの終わりを意味することになるなんて思わなかった。実際の話、そうじゃないだろ? 僕はジョンとヨーコのやることにかなり深く関わっていたし、あのピース・キャンペーンは大成功だと思ったよ。

ジョン　あの熱狂はすばらしかった。あんな最高の気分は生まれて初めてだよ。誰もがピース・サインを掲げながら、僕らの演奏に合わせて飛びはねてさ。ほとんどはみんなが知ってる曲だった。「コールド・ターキー」はあの時初めてやったんだけど、みんなすごく気に入ってくれたよ。

「コールド・ターキー」はビートルズの曲にするつもりだったんだけど、その時、向こうにはシングルを出す予定がなかったから、じゃあプラスティック・オノでやろうと思ってね(出るのならどこで出そうが僕はかまわない)。1969年　あの歌は説明するまでもない、そのまんまさ。コールド・ターキー――ヘロインをやめた時の経験からできた曲だよ。言ってみればアンチ・ドラッグの歌だ。でも当然ながら、これまたアメリカ全国のラジオで放送禁止になって、泣かず飛ばずのままだった。僕がヘロインを宣伝してると思ったらしい。1980年

リンゴ　プラスティック・オノ・バンドがトロントでデビューしたあと、僕らはサビル・ロウでミーティングをやった。そこでジョンがついにはっきり持ち出したのさ。"だからそういうことだ、みんな。終わりにしよう"ってね。それで僕ら全員、"イエス"と言ったんだ。ただ、僕が"イエス"と言ったのは、もう終わりつつあることが明らかだったからで(そういう状況になれば、どっちみち続けていくのは不可能だ)、それに僕だったら、自分から"終わりにしよう"と言ったかどうかわからない。僕だったらたぶん、あと1～2年はずるずる続けていただろうね。

でもオフィスで全員が顔を揃えた時、これで終わりだなってみんなわかったんだよ。とげとげしいムードじゃなかったし、僕ら別にケンカしたわけじゃない。ある考えが自然と部屋の中に入り込んできたような感じで、みんな意見は同じだった。ジョンは脱退という形を考えていたんじゃなくて、とにかく解散すべきだと思っていた。"僕はやめる。君もやめる"っていうんじゃなくて、"さあ、これで終わりだ! もう十分だ。僕はこっちがやりたい――……"。そういうことだよ。

これが1965年、いや1967年に起こっていたら、ものすごいショックだっただろう。だけど、もうあの時には、"離婚話を片づけよう"って感じだった。それに、何かはっきりさせようという時、先に立つのはいつだってジョンなんだよ。

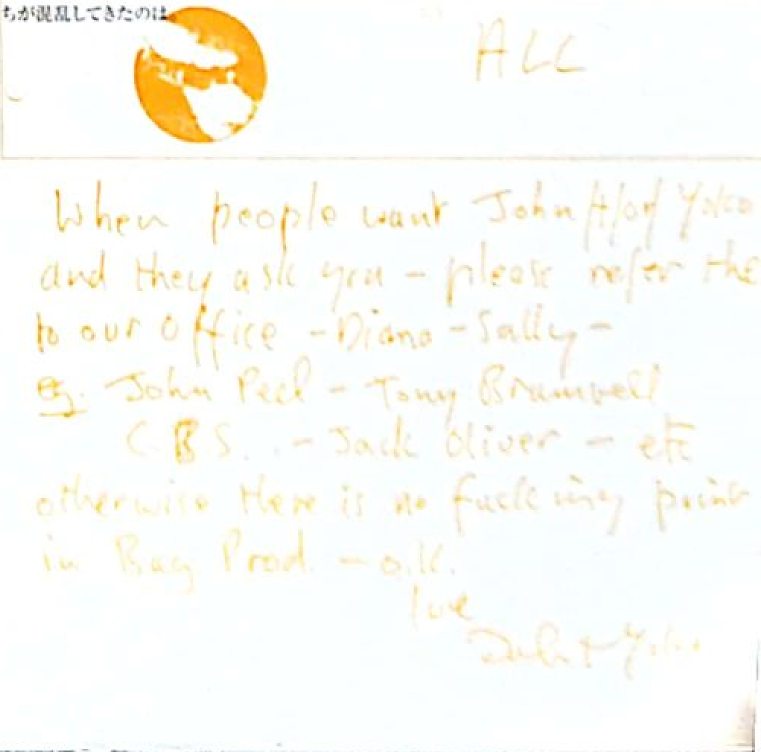
ジョン　トロントへ行く前からわかってたのさ。僕はやめるってアランに話していた。エリック・クラプトンにもクラウスにも辞めるつもりでいることを話してあったし、バンドのメンバーとして来てもらうかもと言ってたんだ。ただ、どういうふうにするかは決めてなかった――つまり、固定メンバーのグループとして、また新たなバンドを組むのか("どんなすばらしい顔ぶれだろうと、決まった人間とずっと一緒にやってくなんてごめんだってあとから思ったんだけどね")。それで僕は自分自身に告げ、トロントへ向かう時、まわりの人間にも告げた。アランも一緒に来てたから、もう終わりなんだって彼にも言ったのさ。イギリスに戻ってから何度かミーティングをしたんだけど、アランはずっと"まあ落ち着いて、落ち着いて"って感じだった。ビジネス面ではいろいろとやらなきゃいけないことが出てくるからね。それには時期がまずかったんだろう。

それからオフィスで何かの話をしてた時、ポールがいろいろ言うんだよ、何をやろうだとか。それで僕は彼の言うことすべてに"ノー、ノー、ノー"って言ってたんだ。そうやってると、そのうちこっちが何か言わざるを得なくなるじゃないか。ポールが"どういう意味だい"って言った。それで言ったのさ、"このグループはおしまいって意味だよ。僕はやめる!"。1970年

ポール　"もう一度、規模の小さいギグに戻るべきだと思う――僕らは最高のバンドじゃないか。僕はほんとにそう思うんだ"。僕はずっとそう言ってたんだよ。"僕らの基になってる根っこを見つけるべきだ。そうすればこの先またどう変わってくかわからないじゃないか? そのあとでやっぱり終わりにしたくなるかもしれない。でもひょっとしたら、まだしっかりやっていけるって自信が持てるかもしれないよ"。するとジョンが僕の目を見て言った。"おいおい、おまえは馬鹿じゃないか。キャピトルと契約するまで、このことは言わないつもりでいたんだけどな"――クラインは僕らを新しいレコード会社と契約させようとしていたんだ――"でも言っちまおう。僕はビートルズをやめる!"。僕らはみるみる青ざめた。ぽかんと口をあけてたかもね。

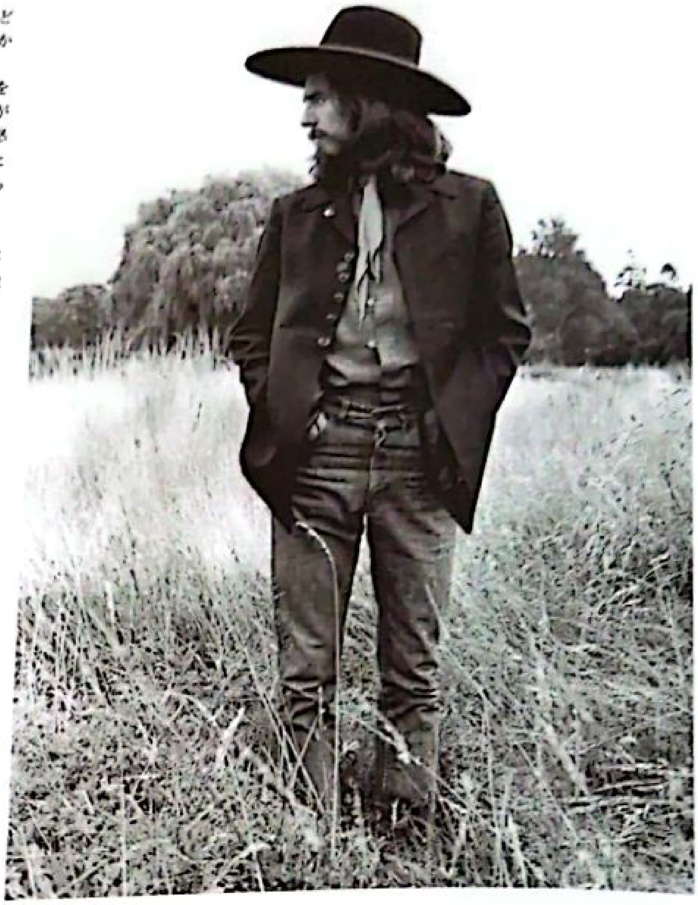
いつかはこういう時が来る、それがわかってたことは僕も認めるよ。ジョンがあれだけヨーコと深く関わっていれば、それは当然のことだった。ジョンには彼とヨーコのことにスペースを割く必要があった。ジョンのような人間は、ビートルズの時代にきっぱりケリをつけて、新たにヨーコとの時代をスタートさせたいんだろう。ふたつが重なり合うのは嫌なんだ。でも、"新しい契約に全員がサインするまで言うつもりじゃなかった"っていうのは、あんまり気の利いた考えじゃないよね。クラインがジョンに口止めしてたんだ。"ポールには言うな――黙っていて、新しい契約にサインさせろ"って。でもジョンはいい奴だからさ――彼にはそういうことができないんだよ。ついポロッと口に出しちゃうんだ。だけど、あれで終わった。言えることなんてないも同然だろ、"僕はグループを抜ける"って、中心メンバーから言われてしまったらね。

何を言えばいいのか、僕にはまるでわからなかった。反撃しなきゃいけなかったんだけど、もうすっかり彼のペースだった。あの時彼が言ったことを覚えてるよ。"こんなのおかしいんだけどさ、グループをやめるって言ってるのに、僕はどこかですごくわくわくしてるんだ"。シンシアに離婚話を持ち出した時と同じだよ。彼はすっかり舞い上がってた。僕らにはもう何もできなかったんだ。"ほんとにやめるつもり? それなら僕らはグループだから……"みたいな。時間が経って、その事実がしっかり飲み込めた頃だよ、本当に気持ちが混乱してきたのは。



CamScannerでスキャン

ジョージ　ジョンがビートルズを解散させたいと言ったことについては覚えてないんだ。どこでそれを聞いたのか記憶にない。メンバーは全員、抜けようとしたことがあった。だから今さら驚くことじゃなかった。全員が何年も前から辞めようとしていたんだよ。
　スタートした頃のビートルズは、まだ若かった僕らにいろんなことを可能にする手段を与えてくれた。だけどそれが息苦しいものに変わってきてしまったんだ。あまりに制約が多すぎた。内部から壊れていくしかなかったんだよ。誰かが脱けたいと思っても、僕は怒る気にはなれなかった。僕自身が脱けたい気持ちでいたんだから。バンドを離れてひとりになった方が、よっぽど先は明るいと思った。ビートルズはもう楽しいものではなくなっていた。もうやめるべき時期に来ていたのさ。あのままじゃ拘束服と同じだ。



ニール・アスピノール　解散という話が出てきたのは悲しいことだった。僕らみんな何年も一緒にやってきて、とてつもなくすばらしいこととか成功とか、ありとあらゆることを経験してきた。それが終わってしまうとなれば、当然ある種の悲しさや不安があるよ。誰にとっても、これはちょっと怖いことだったんだ。
　亀裂はだんだんと広がっていったんだよ。まずポールがアラン・クラインとの契約を拒んだ。でもそれはビートルズの解散に直接つながってはいない。だって彼らはそのあとで「アビイ・ロード」を作ったんだから。一方ジョンはビートルズよりヨーコとの活動にどんどん比重を移していたけれど、それでもみんなと一緒に「アビイ・ロード」を作った。つまり、突然じゃなかったんだよ。だんだんとそういう方向へ向かっていて、「アビイ・ロード」のあとはもうみんなで集まらなかったというだけ——彼らが現実にスタジオに入り、一緒に仕事をする姿は、もう二度と見ることができなかった。

リンゴ　"ホワイト・アルバム"の製作中に、僕が脱けるって言ったことがあった。あの時僕は、他の3人がすごく強く結びついていると思ったんだ。だけど実はみんなそれぞれ、他の3人がくっついてるって思ってたんだよ。ほんとおかしくなってたんだな。ジョージがやめるといった時には、僕らこれからどうなるんだろうって思った。だけどあの時までは、ほんとに終わっちゃいなかったんだろうね。サビル・ロウのオフィスに集まって、"これで終わりだ"って言う時まではさ。
　「アビイ・ロード」があるから続けてはいた。でもほんとはすでに終わってたんだよ。終わってるんだけど、頭がそれをうまく受けつけない、そういう状態だった。体はまだこの生活を続けてるんだけど、実際にはもう自分の道に進み始めてたわけさ。

ジョン　僕があのバンドを始め、僕があのバンドを終わらせた。そういう単純なことだよ。
　ビートルズとしての僕の人生は退屈な同じことのくり返しに変わっていた。テープ・ループのようなものさ。僕はそれ以前にも少しは自分のことをやってた。本を書いたり、それを舞台化するのに手を貸したり。ビートルズを離れて映画にも出た。だけどあの映画は、本当に気持ちの上で独立を目指していたというより、ビートルズがツアーをやめたことへの反動としてやったものだ——といっても、あの頃から僕の目は自由な世界へと向けられていたんだけどね。
　僕がついに他の3人に言う勇気が出た時、いわば離婚の申し出をした時さ、彼らには本気だってわかったんだ——リンゴやジョージが脱退をほのめかした時とは違う。ほんとのところ、あんなに突然持ち出したのは悪かったと思う。何だかんだ言って僕にはヨーコがいたからね。でも彼らにはお互いしかいなかったんだ。僕のソロ初シングル（「平和を我等に」）でヨーコを共作者とせずにマッカートニーをクレジットしたことには、ヨーコへ罪の意識を感じたよ。ヨーコと作った曲だからね。1978年

リンゴ　僕らは解散をすぐには発表しなかった。アラン・クラインが言い張ってたんだ、"解散したいならしろ——でも誰にも話すな"。
　みんな僕らを解散させたくなかったんだよ。でも、そのことはたいしたプレッシャーになってなかったと思う。"今までずっとやってきたことと同じだ、このまま続けてればいい"みたいに思ってたんだよ。だからあれだけごたごたしているのに、何日もそのままやってたのさ——実際うまくまわってた。でも毎日仕事するんじゃなくて、そうだな、月に2日ってところかな。あの頃はまだ楽しい日もあったんだよ、僕らがすごく仲のいい友だちであることは変わってなかったからね。でもそれがまた分裂して、何だかおかしなことになってっちゃったんだ。

ジョン　ポールとアランは、僕が発表しないでいてくれれば嬉しいって言ってた。まるで僕がひと騒ぎ起こす気だったみたいにさ。

リンゴ　解散という言葉をついに言ってしまったら、ほっとしたんだよね（「ストロベリー・フィールズ／ペニー・レイン」のシングルが1位にならなかった時と同じくらいの安堵感だったと思う。あの時はほんと、ものすごくホッとした）。僕は確かあの日、ふらふらと家に帰ったんだけど、そのあとは覚えてない。しばらく庭に座って、これから自分はどうしようって考えてた。終わりだって言っちゃったあと、家に帰ってきて考える。"信じられない——終わりなんだ。これからどうする？"。僕にとってはすごくドラマティックな時期だった——というか、実際にはトラウマティックといった方が正しいね。

CamScannerでスキャン

ジョージ　全員がそれぞれの道を進むとなった時に僕が感じたのは、これからの時を楽しもう、ということだった。これで僕は僕のスピードでものごとを考え、スタジオでミュージシャンと一緒に僕の曲をやることができるって。変な言い方に聞こえるだろう。たいていの人はビートルズのメンバーになりたがるだろうし、当時ビートルズの一員であることほどすばらしいことはないみたいに思われていたんだから。実際すばらしいことではあった。でも一方で、そこから脱け出すのもすばらしいことだったんだ——大人になって家を出て、翼を広げるようなものさ。

グループをやめるって決断を下すのは重大な一歩にも思えたけど、その反面あの中にいるのはすごいプレッシャーだ。プラス面よりもマイナス面の方がずっと大きくなっていたんだよ。ビートルズはあれだけ有名なバンドだし、慣れ親しんで居心地のいい場所だった。それは確かにプラス面だけど、あの頃はあまりに嫌な雰囲気になっていて、僕はどんなことをしてでも脱け出したくなっていた。

僕らはずっと、ちょっとした時間をもらって、それぞれソロ・レコーディングをやってみて、その結果どうなるか確かめてみようと思ってた。でもすでに僕の人生はまったく違う方向に膨らみ始めていたんだよ。ビートルズというちっぽけなポップ・バンドにいたのでは、ものすごく範囲が狭められてしまう。僕はヒマラヤへ行きたかったし、他のミュージシャンともプレイしたかった。ビートルズ以外の友だちもたくさんいたからね——それは他のメンバーも同じだった。

ポール　僕はこういうふうに思った。"さあ、これがまた新しいスタートになる。ビートルズはもう一緒にレコードを作らない。じゃあ僕は音楽業界を離れて、もう仕事しないことにするか？　僕はそんなことができるほどおとなしい人間じゃないだろう"。今だってなかなかおとなしくしていられない。これは僕の性分なんだよ。何らかの形でやっていくしかないって、僕にはわかってた。

スコットランドにある僕の農場に、かなり長くひきこもってた。普段は休みの時くらいしか行かないんだけど、その時は結局丸1年いることになっちゃったね。とにかく、それから自分がどうするかを考えたかった。一番気持ちがぐらぐらしてたのはおそらくあの頃だろう。自分はもう必要とされてないんだって、本気で思ってた。そりゃみんなは言うさ、"でもまだ金だって入ってきてたんだろう、必要とされないってわけじゃない。鉱山でクビにされた人間とは違うんだから"って。だけど僕にしてみれば同じだった。だって金の問題じゃないんだ、これは自分の価値の問題なんだよ。ビートルズにいなければ自分には何の価値もないって、僕は急にそんな気がしてきたんだ。

すばらしい仕事を失ってしまった——ビートルズという仕事を。17の時から、僕の人生はずっとビートルズの中にあったんだ。あれはかなりのショックだよ。僕はベッドに入ったまま、ほとんど髭も剃らず、飲んでばかりいた。"もうどうだっていいや"、そういう感じだよ。解雇された人間がよくそうなるって言うだろ。外へ出る気にもならず、人に会う気も起きず、ずっと家に引きこもってさ。僕もそうやって、しばらく——実際には1年近くだけど——道を見失っていたんだ。でも幸せなことにリンダがすごくわかってくれていてね、"あなたは大丈夫よ。ビートルズのことでいろいろショックを受けてるだけ"って言ってくれたんだ。でも僕はずっと思ってた。"だけど、また曲を書いたり歌を歌ったりできるんだろうか？　職を失ったベース・プレイヤーなんて、誰からも必要とされないんじゃないか？"。それほどひどい打撃だったんだよ。

だけどようやくこう思った。"何やってるんだ！　ここでしっかり考えろ"って。レコードを作ろう。一番シンプルな方法だね。レコーディング機材はあった。それで譜面も何もなしに、ほんと手作りでアルバムを作ったんだ。自分で仕事をやり、新しいバンドを組もうと考え始めた——だけど当然ながら、ビートルズのあとを継ぐのはたいへんだよね。

リンゴ　11月、ソロ・アルバムの『センチメンタル・ジャーニー』のレコーディングに入った。すべて終わってしまって、僕は何をしたらいいんだろうって考えてたんだよ。それで思いついたのが、自分が慣れ親しんできた曲を集めてアルバムを作るってことだった。

あのアルバム・ジャケットに出てるパブは、僕の両親がよくあそこへ行ってたんだ。母の友だちやパブをやってる家の人も、みんな僕らの家にやって来た。パーティでいつも歌ってたのがああいう歌なのさ。あれが僕にとって最初の音楽体験だった。だから、他にいいアイディアもなかったし、これをやろうと思ったんだよ。ビートルズのメンバーは誰も参加してないけど、まだジョージ・マーティンはいた。だから完全にひとりって感じはしなかった。

ニール・アスピノール　リンゴとジョージ・マーティンで『センチメンタル・ジャーニー』を作った。リンゴが歌いたい曲をリストにして、彼が歌えるキーに変え、それから彼が気に入ってるアレンジャーをずらりと並べた。僕はそのアレンジャーたちに電話していった。"この曲の中でどれをプロデュースしたい？　どんなミュージシャンでも、好きな人と一緒にスタジオに行ってくれ——できたらテープを送ってくれないか"。そのテープにリンゴのボーカルを重ねたんだ。

1曲だけ残った時、最後のプロデューサーに電話するのは、ちょっと辛いかもしれないね。"他のみんなは曲を選べたのに、どうして俺だけ選ぶ権利がないんだ？"って言われかねない。だけど僕らの場合、12曲しか使わないところに15、6曲持ってたから、誰もが選べたのさ。

そうやってあのアルバムが完成した。一緒にやれてすごく楽しかったよ。ちょっとのんびりした感じで、あれにはああいうやり方が合ってたんだよね。

ジョージ　12月、僕はビリー・プレストンと一緒にデラニー＆ボニー・バンドに参加した。前にもデラニー＆ボニーのことは聞いてたし、実際ロサンゼルスのヴァレーでプレイも見た。すごくいいバンドだから、アップル・レコードで契約しようとしたんだよ。だけど契約しに行ったピーター・アッシャーがオーディションの途中で居眠りしちゃって、それで彼らはアトランティック・レコードを選んだんだ。

アルバート・ホールへ彼らを見に行って、ほんと楽しいバンドだから、一緒にやれたらいいだろうなと思った。コンサートに行くと、たいていの場合、僕は"このバンドに入ってなくてよかった"と思うんだけど、あの時に限ってはすごくいいって思った。

アルバート・ホールのあと、彼らはスピークイージーでプレイしてね。その時、確か、ちょっと一緒に飲んだんだったと思う。すると何が何だかわからないうち、翌日の朝には彼らのバスが僕の家の前に来ていて、僕は彼らと一緒に行くことになった。僕はギターを持ってバスに乗り、そしてみんなとヨーロッパ・ツアーに出かけたんだよ。

すごく楽しかった。だって僕があの中にいたなんて、ほとんど誰も気づかなかったと思うんだ。みんなデラニー＆ボニーを見に来てるんだから。エリック・クラプトンがバンドにいるのは知ってただろうけどね。僕はほんと、興味本位で参加しただけ。後ろの方にいて、別に重要な役を果たす必要もなかった。それってほんとに楽しかったよ。ビートルズでは、たとえ後ろにいたって、フロントにいるような気分だった。ホーン・プレイヤーの陰に隠れることなどできなかったものね。

ポール　3〜4ヵ月の間、ジョージとリンゴと僕は電話をかけ合ってた。"じゃあやっぱり終わりってこと？"ってね。レコード会社からお払い箱にされたわけじゃない。ひょっとしたら僕らはまた元通りになるかもしれない、そういう可能性がまだ残ってる状態だったんだ。いつものジョンのちょっとしたわがままかもしれない、そうじゃないと確信持って言える人間はひとりもいなかった。もしかしたら彼は1週間でお金に困って、"ただの冗談だったんだ"って戻ってくるかもしれない。ジョンは実際、少しだけドアを開けておいたと思うんだ。彼はこう言ったんだから。"僕はグループを脱けるつもりだ、ほとんど気持ちは固まってるんだけど……"。

だから僕らは何ヵ月かその最後の糸にすがっていた。でもついに気づいたのさ。"そうか、僕らはもうバンドじゃないんだ。終わりなんだね。ほんとにこれで終わりなんだ"。

それで僕は考え始めた。"そうか、そういうことなら、僕もしっかりするべきだな。ジョンに振りまわされてばかりいられない。振られたガールフレンドみたいに簡単に放り出されてたまるもんか"って。僕はアルバム『マッカートニー』のレコーディングにかかってたし、その頃言ったんだよ。"そろそろみんなに話すべきじゃない？"ってさ。するとみんな揃って言うんだ。"ダメダメ——解散なんて誰にも言っちゃいけない"。でも僕は言うべきだと思った。なぜみんなが何も言いたくなかったんだか、僕にはわからないよ。クラインがかなり噛んでたと思う。

ジョージ　ビートルズはひとつの機関になってしまっていて、外の人間は誰もそれを壊したくなかったんだ。ただしマスコミは別だよ。マスコミというのは見出しになるものなら何だってほしがるんだから。見出しになる価値があるかぎり、いいことでも悪いことでもかまわないのさ。だからマスコミはいろんなことを突っつきたがる——それも悪い方へね。何かつかんだと思えばすぐ動き出すんだ。世間の人たちはもっとビートルズにレコードを出してほしいと思ってたかもしれないけど、イギリスのマスコミはもうすべて終わりだって勘づいていたのかもしれないね。

ポールはすでに自宅でソロ・アルバムをやり始めてたと思う。ジョンはプラスティック・オノ・バンドの方をやってたし、ビートルズが終わったってことは誰の目にも明らかだった。それでも誰ひとり、"さあ、もう終わりだ——僕らはもう二度と一緒にやらない"と言いださない。新聞記者に訊ねられれば、僕らはまだこう答えてた。"そういうこともあるかもね。いやもちろん、僕らは今も一緒だよ"。

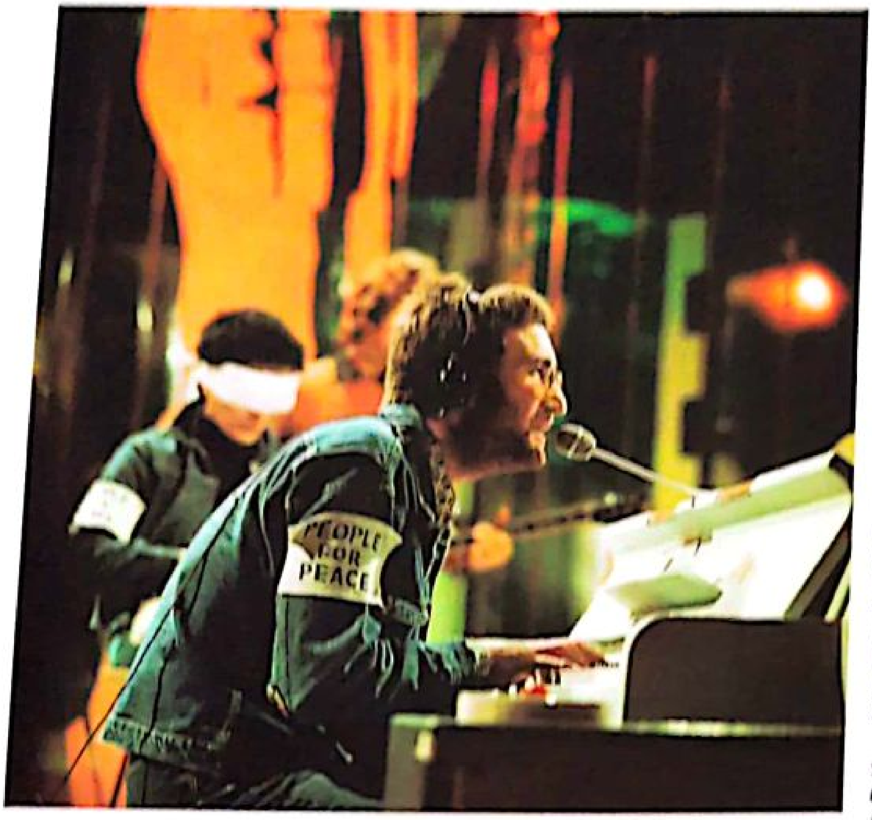
ポール　その頃にはかなり状況が険悪になってたけど、それでも僕はまだ電話をかけ、コミュニケーションを絶やさないようにして、なんとかドアは開けておこうとしていた。でもごたごたは実際20年も続いたんだよね、ビートルズの問題が片づくまでそんなにかかったんだ。

僕はクラインのことで一度に3人と対立した。どんな形であれ、僕は彼に代理人になってもらう気はなかったんだ。クラインに20%渡すべきだってみんなに説得されて、結局折れたけどね。そうするしかないって言うんだから。"OK、彼が僕らのギャラをあげさせたら、差額の20%は彼にあげよう。キャピトルが僕らにこれだけロイヤリティをあげるっていうところを彼がこれだけもらってきたら、その差額の20%は彼のものだ"。

3対1さ。実際には3対1どころか——僕ひとりで世界中相手にしてた！　僕にしてみりゃ、ひとりで300万人を敵にまわしてたようなものさ。僕はビートルズの財産を守らなきゃいけないと思っていた。僕らがそれまで稼いできたものは、すべてあの会社にあったんだ——それが消えてしまうのをむざむざ見てるわけにはいかなかった。

ジョン　あのくだらないオペラを書いたイギリス人、ギルバートとサリバン、あいつらの映画をいつも思い出すんだよ。ロバート・モーリーが出てる映画を見てて、"僕らは絶対ああいうことにはならないよな"と思った。ところがなっちゃったんだから、ほんと僕は愕然としたね。自分たちがそこまで愚かだとは思ってなかった。仲間割れして、言い合いするようになるなんてさ。でも間に人を入れたのは僕らが無知だった、だからああいうことになったんだ。とはいえ、どっちにしろいつか起きたことだけどね。ヨーコのことじゃないよ、僕はビジネス・マンのことを言ってるんだ。離婚を思い立った時みたいだな、たいていの場合、みんな友好的に別れようと思うのさ。でも弁護士を頼むとこう言われる。"弁護士立

CamScannerでスキャン



も会いのもとでない限り、相手方と話をしないでください"。本当にずれが出てくるのはそこからだ。

離婚を忌まわしいものにするのは、本当は弁護士なんだよ。離婚にも結婚式みたいに素敵なセレモニーがあれば、よっぽどましなのにね。ビジネス・パートナー同士の離婚でも同じだ。思ったとおり喋らせてもらえないから、必ず話がこじれてくるんだよ。わけのわからない用語で喋らなきゃいけないし、弁護士と会うだけで自分の時間をすべてとられちゃうし、それでイライラしてきて、しまいには普通なら絶対言わないようなことまで言っちゃうんだよ。1971

リンゴ　結局はアラン・クラインと手を切った。ひと財産失ったね——でも、ああいうのも僕らが人生を生きていくうちに悟ることのひとつだ。ふたりの人間がある契約にサインする。その時、僕はそれがどういうものかをはっきりわかっていて、相手もそれがどういうものかはっきりわかってる。ところが別れるということになると、片方にとってはそれが嘘みたいに違う意味になってしまうんだ。

ジョージ　1月のある朝、ジョンが電話してきてね。"1曲書いた。今夜レコーディングしてプレスして明日出す——そこが肝心なんだ、「インスタント・カーマ!」だからね"。それで僕も加わった。"いいよ、向こうで会おう"。僕はロンドンでフィル・スペクターと一緒だったから、"君もセッションに来れば?"ってフィルに言ったんだ。

4人だけのセッションだった。ジョンがピアノ、僕がアコースティック・ギターを弾いて、クラウス・フォアマンがベース、アラン・ホワイトがドラム。レコーディングして、フィル・スペクターが——インスタント(即席)に——ミキシングして、その週のうちにリリースされた。

ジョン　曲はいくらでもあったから、とにかく何らかの形で出したかった。ほんとは自分でやる方がいい。自分の曲は誰か他の人に提供するより自分でやる方が好きなんだ——まあ半々だね、そうしないと処理しきれない。1969

ニール・アスピノール　フィル・スペクターは仕事レベルだか何かでアラン・クラインと関わってて、その流れで「レット・イット・ビー」のリミックスに引っ張ってこられたんだ。彼にやらせようっていうのが誰のアイディアだったのか、見当もつかない。クラインが言ったのかもね。それでジョンとジョージが賛成したってことかな。

ジョージ・マーティン　あの件では、私はとても腹が立った——ポールは私以上に腹を立てていた。彼も私も知らないうちに、すべて終わってしまったのだからね。私たちに隠れて進められたことだ。アラン・クラインがジョンを動かしていたのさ。クラインがフィル・スペクターを引っ張ってきて、ジョージとリンゴも賛成したんだろう。実際彼らは、"これが僕たちのレコードになるから"ってEMIと話をつけていた。

それでEMIが私のところへ来て、"もともとはあなたが作ったアルバムだが、あなたの名前を出すわけにいかない"と言う。理由を訊ねると"あなたは最初のバージョンのプロデュースをしてないでしょう"と言うんだね。そこで私はこう言った。"オリジナルをプロデュースしたのは私だよ。こういうクレジットにすればいいじゃないか。「プロデューサー=ジョージ・マーティン、再制作プロデューサー=フィル・スペクター」"。そのアイディアは気に入ってもらえなかったらしい。

ジョン　海賊版、つまりスペクターの前のバージョンを聴いて、それからスペクターのバージョンを聴いてみれば、誰だってこんなこと言わなくなるだろう——ほんとに違いを見ようという気でいればね。あのテープはあまりにも無様で救いようがないから、僕らの誰ひとりも手を触れようともしなかった。半年くらい放っておかれたままだったんだ。あれをリミックスしようなんて誰も思わなかったさ。怖気づいてね。それをスペクターが見事に仕上げてくれたんじゃないか。1971

ポール　アラン・クラインが決めたんだ——たぶん他の3人には相談したんだろうけど、僕に話がなかったのは確かだ——「レット・イット・ビー」をフィル・スペクターの手でプロデュースし直そうってね。

それで僕らにはただのプロデューサーではなく、"リプロデューサー"がつくことになったわけだ。そして彼はありとあらゆる飾りをくっつけた——「ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード」には女性シンガーを持ってきて——僕ならたぶんそんなバック・コーラスはつけなかっただろう。いや、別にそれで史上最悪のレコードになったというんじゃない。だけど、明らかにメンバーのひとりが承知していないものが僕らのレコードに加えられているんだ。それはおかしいじゃないか。他のみんなが知ってたかどうかはよくわからない。"ああ、終わらせてくれよ。どうぞ——どうとでも好きにしてくれ"ということだったのかもしれない。僕らみんな、うんざりし始めていたから。

デレク・テイラー　「ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード」がいじられたことで、ポールがすごく怒ってたのは知ってる。僕は誰の曲にしろ勝手にいじるのはよくないという考えだった。僕にはあれが——ショックとは言わないが——でも明らかに間違いに思えた。それにマッカートニーのような才能ある人間が、自分の曲を勝手に変えられたと知ったら……怒るのも当然だろう!

ポール　もう「マッカートニー」はできあがっていた。ビートルズのあとの僕の初めてのアルバムで、リリース・スケジュールも決まってた。ところが他のメンバーがそのことであれこれ言い出したんだ。"「マッカートニー」をおまえの好き勝手に出されちゃ困る。僕らは「レット・イット・ビー」を出すんだから——それにリンゴのソロ・アルバムもある"って。

僕はニールに電話した。当時はもうすでに彼がアップルを運営してたんだ。"何なんだよ——僕のリリース日はちゃんと決めたじゃないか!"。もう話はつけてあったんだよ。僕はカレンダーでリリース日に印をつけておいた。それを忠実に守っていたのに、結局動かされてしまったんだ。

14th April, 1970.

A. Klein, Esq.,
Apple Corps Limited,
3 Savile Row,
LONDON, W.1.

Dear Sir,

In future no one will be allowed to add to or subtract from a recording of one of my songs without my permission.

I had considered orchestrating "The Long and Winding Road" but I decided against it. I therefore want it altered to these specifications:-

1. Strings, horns, voices and all added noises to be reduced in volume.

2. Vocal and Beatle instrumentation to be brought up in volume.

3. Harp to be removed completely at the end of the song and original piano notes to be substituted.

4. Don't ever do it again.

Signed

PAUL McCARTNEY

c.c. Phil Spector
John Eastman

CamScannerでスキャン

　自分が排斥されたみたいな気がした。もうすべての主導権を握られたみたいで。自分がその1つだけだったら、それを受け入れたと思う。僕が何をやろうとしても、彼らに「ノー」と言われてしまうだろう。それもただ僕らは争うだけのためだ、と僕は思った。
　リンゴが僕に会いに来たよ。みんなから送り出されたんだろうね――彼はすごくいい奴だから――争いを調停するために。リンゴが家に来た時、僕はほんと、ちょっとひどいことを言っちゃったんだ。「君らは僕を潰そうとしてるだけじゃないか」って言うと、彼は「違うよ、だからその、僕自身の代表として、ビートルズの代表として、僕らは君がうまくいくと思うんだ」とか。そういう言い方には、僕はもうほとほとうんざりしてた。あの優しい彼が、僕が彼に「出ていけ」なんて言ったのは、ほんとひどい話だった。でもあの頃は、すべてがそんな感じになってたんだよね。実際に手を出すところまではいかなかったけど、かなり危なかった。
　仕事をともに担ってたのはリンゴだった。だって、あまりにも僕は、誰よりも罪のない人間だったろう。だけど僕まで巻き込まれちゃうんだよね。それでリンゴは僕をあるように扱わず……それはたぶん僕は思ってただろう、「さっきポールならば……聞いてくれる」って――ところが僕が出したのは結局とは違う話だった。僕はもう完全にアップルをボイコットしようとしてたからね。

リンゴ　僕たちがけしかけて馬鹿やってただけだよ。
　僕らはそれぞれソロ・アルバムを出す予定だった。それで僕は言ったんだ。「僕のはもうできてるから出したいんだ」って。ポールのはまだ完成してなかった――だけど僕はカレンダーに黄色で印をつけてて何日だったかはもう忘れちゃったけど、「これが僕の日だ――この日までに僕はアルバムを出す」って言うんだよ。結局どうなったんだったかな――僕はそのまま出したんじゃないかな。

ポール　僕はもうすべてうんざりで、「いいよ、僕はこのレーベルをやめる」って言っちゃったんだ。アップル・レコードはすばらしい夢だったけど、その時思った。「こんなの馬鹿らしい。僕はもう降りたい」って。ジョージから電話で言われたのを覚えてるよ。「このレーベルから離れるな！　ハレ・クリシュナ！」。そう言うなり切った――「おやおや、これはほんとにヤバい雰囲気になってきたぞ」と思ったよ。
　すべて出来上がるまで、僕はアップルに『マッカートニー』を一切見せなかった。ジャケットも何もかも、僕は全部ひとりで作り、完成したものを渡した。僕にすれば、かなり難しい立場だった。

ニール・アスピノール　ポールのアルバムが『レット・イット・ビー』の前に出た。そしてもちろん、あの声明文も一緒にね。あれがアップルの人々にどう受け止められたか、僕は話せる立場にない――第一、当時アップルに誰がいたかもちゃんと覚えてないんだ。アップルの夢がどうして実現しなかったかについては――夢だったから、現実にはならなかったのかもしれないね。

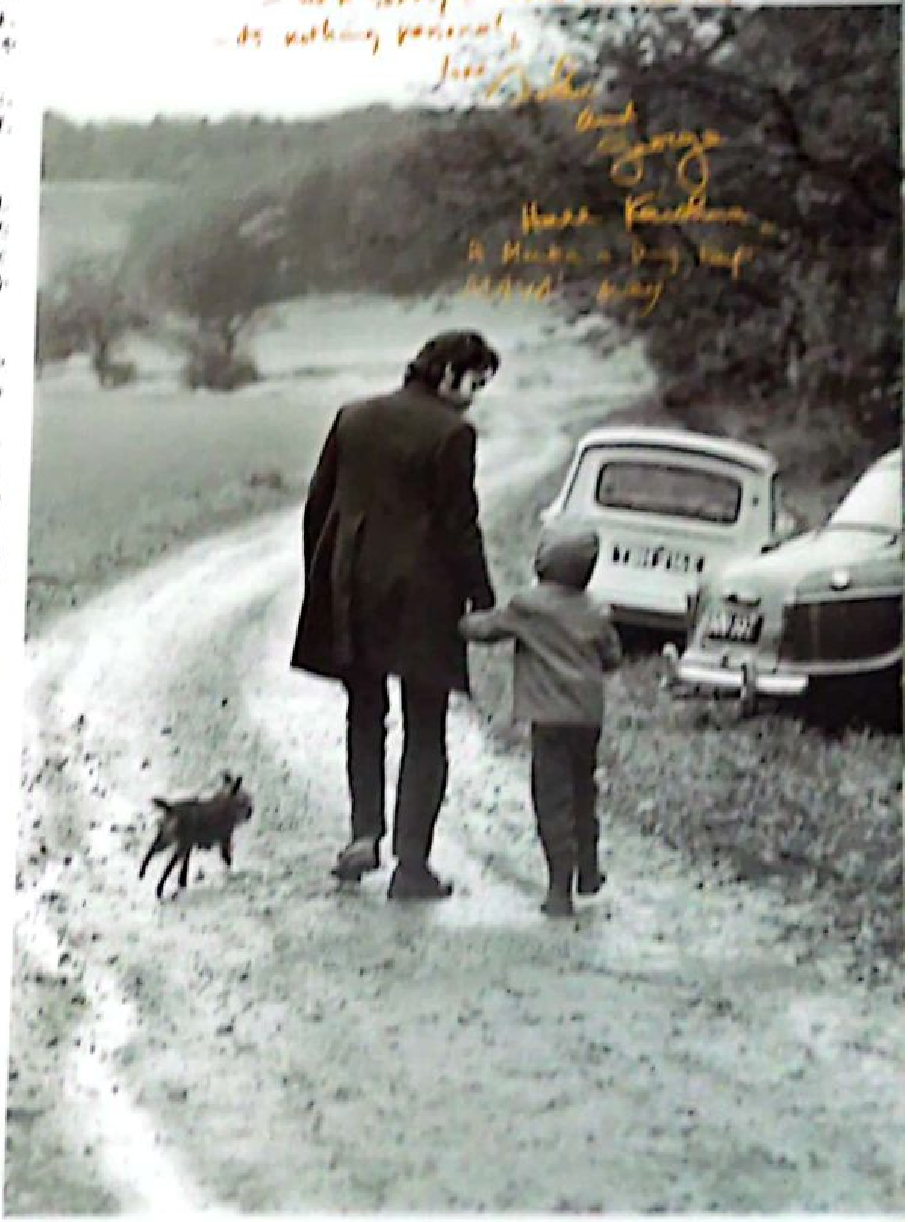
ポール　僕がビートルズをやめたんじゃない。ビートルズがビートルズであることをやめたんだ。でも、誰も自分から切り出したくないのさ。パーティは終わったって。(1970)

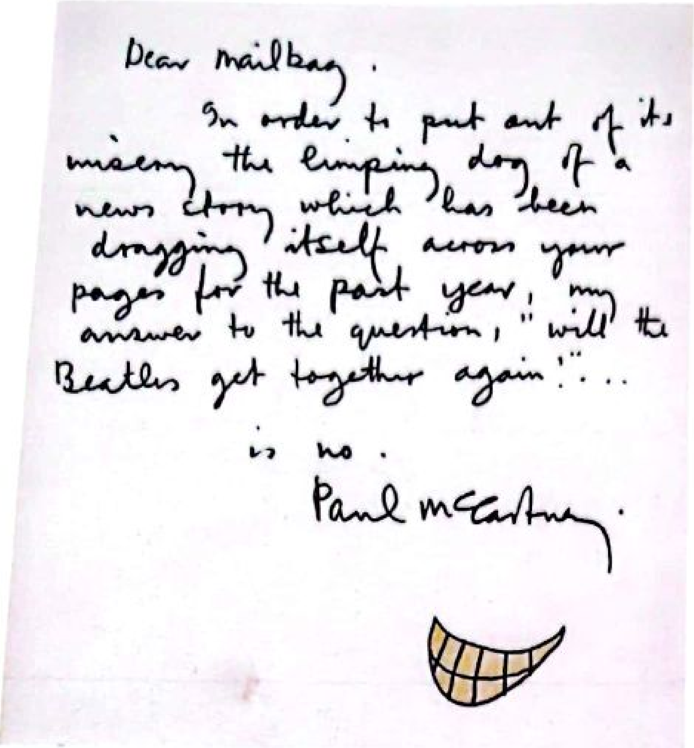
デレク・テイラー　ポールのソロ・アルバムをリリースするために、僕らは広報部で一連のインタビューをやった。全般的なことについても。「今後ビートルズと一緒にやる可能性は？　これでよかったと思いますか？　あなたのこれからの予定は？」というふうに。彼はすごくきちんと答えてくれたと思うよ――固い口調ではあったけど、それでも答えてはくれた――内輪喧嘩とか、ビートルズと一緒に仕事をすることとかの話とかは避けるようにしていたけどね。「今はリンダと一緒にやってる。これが今の僕のやり方だ……」。すごく気まずい時期だったね。あの時が最低だった。

ポール　僕はあの時、インタビューは一切受けたくなかった。何より先にビートルズの周辺のことを訊かれるのはわかってたからね。それは絶対に嫌だった。マスコミ相手にしたくないってはっきり言ったんだ。
　広報部のデレクは「何かやらないわけにいかない」と言う。それで僕は言った。「じゃあこうしよう――マスコミが訊きたがると思うことを質問表にしてくれ。そしたら僕はできるだけ正直に答える」。それをマスコミ用の試聴盤につければいい。彼が用意してきた質問の中に、「ビートルズは事実上解散したと言えるのでしょうか」というのがあった。それで僕は答えた。「そうだね――僕らはもう一緒にやらないだろう」（僕らが実際に決断してから1~2ヵ月は経っていたから、別にスクープでも何でもないと思った）。
　ジョンが「僕はやめる」って言った時、このグループは終わったって僕は感じたんだ。僕らはみんな（ジョンは別にして）、何とかグループを続けていこうとしてきた。でもうまくいかなかった。だから存続させようと努力する時期はすでに過ぎていて、あとはもう、世間に言うか言わないかの問題だったんだよ。「それぞれが別の道を行くなら、僕らがまだビートルズとして捉えられているのはマイナスにしかならない」と僕はそう思った。「もうきれいさっぱり別れたんだ。それを認めよう。世間に言おうよ。いいかげんそういう時期じゃないか？」。ジョンはちょっと腹を立ててたね。彼は自分で言いたかったんだと思う――言うにしろ言わないにしろ。彼が言いたかったんだ。

リンゴ　僕たちがけしかけたのかもしれない。その出版物は僕に来たんだ。ステイタス……ビデオ・ニュースを持ってる時、「音楽のことは？」……この会議の時……最後の合、僕がやってたことなどまるでなかったよ。
　だけど僕ら4人は……それから、僕は、ビートルズは終わったと、ますます自分は手を引こうと思った。ジョンも……そこで……解散も、もう何年も経ったし……ビートルズの解散を知ったのは、もう終わっていたんだな……

March 31
Dear Paul,
We thought a lot about yours and the Beatles LP — and decided it's stupid for Apple to put out two big albums within 7 days of each other (also there's Ringo's and Hey Jude) — so we sent a letter to EMI telling them to hold your release date til June 4th (there's a big Apple-Capitol convention in Hawaii then) — we thought you'd come round when you realized that the Beatles album was coming out on April 24th —
We're sorry it's turned out like this — it's nothing personal.
Love John
and George
Hare Krishna
A Mantra a Day Keeps MAYA! Away





Dear mailbag.

In order to put out of its misery the limping dog of a news story which has been dragging itself across your pages for the past year, my answer to the question, "will the Beatles get together again?"... is no.

Paul McCartney.

ポール　世間の反応は、"ビートルズ解散――正式表明"みたいな感じだったけど、僕らにすればもう何ヵ月も前からわかってたことだ。で、まあ、それでほんとにおしまいさ。マスコミが誤解したんだと思うよ。あのアルバムには僕の活動に関する質問と、それに対するおかしな答えがつけてあった。本当はあれ、マスコミ向けだったんだよ。一部の人は、僕が宣伝のために妙な真似をしたんだと思ったらしいけど、実際にはマスコミを避けるためにやったことなんだ。

ジョージ　ポールはいろんなことを利用するのがうまいのさ。今だってツアーに出る時は、僕らが再結成する予定だとかなんとか、都合のいい話をマスコミに流すだろう。それが彼の得意技なんだよ。ある時期までは僕らもそういうことに少し腹を立ててたかもしれないけど、これだけ年月が経てば慣れてくるさ。だけどあの時期は、みんなが互いに、どんなことでも腹を立てていたからね。

彼はアルバムを出す時、ちょっとばかり時の勢いを借りようと思ったんだろう。他のみんなが解散という事実をようやく受け入れ始めた時に、彼はそれを自分のために利用したんだ。"うん、僕のアルバムが出るんだ。ところで、ついでながら、ビートルズは解散したんだよ"って。

彼がマスコミにそう発表した。だけどあの時にはすでに、ほかのメンバーも全員バンドを離れていたわけだろう。あの時ジョンが怒ったのはそこなのさ。"待てよ、俺はもう脱けてるんだぜ、まるで彼が最初に脱退を考えたみたいじゃないか！"

ポール　他のみんなは僕が声明文を出したみたいに思った。まるでそれが僕に有利に働くみたいに(だけど僕はLSDのことでも悪影響を被ったし、解散に関しては事実を言ったまでだ、彼らと違ってね)。何年も経って、「アンソロジー」を出そうって話になっていた頃に、僕らがまた揃うことはあるのかって記者会見で訊ねられた。また集まることはわかってたから、僕は"あるよ"って答えた。ただそれだけさ。

デレク・テイラー　ポールの声明が出ると、世界中ですごい反響が起きた。大ニュースになったよ。あの時実際に"ビートルズは解散しました"と正式発表をしたかどうか、ちょっと僕の記憶は曖昧なんだ。確かに声明は出したけれど、あれはすごくぼかした内容で、実際には何も言っちゃいない。"ジョンとポールとジョージとリンゴは、今も変わらずジョンとポールとジョージとリンゴです。世の中はまわり続けています、回転が止まった時にはもう心配しても遅いのです。それではまた"。そんな感じだった。でも世界中で騒ぎになり、誰もが心の底から落胆していたね。

僕は完全に信じきっていた――何百万という人と同じようにね――ビートルズのメンバー同士の友情は、僕らみんなの救いなんだって思ってたのさ。彼らが仲良くしていられるなら、彼らがずっと一緒にいられるなら、よそで何が起きていようと、人生は生きていく価値がある、そう僕は信じていた。でも、僕らは彼らに期待しすぎたんだね。

ジョン　みんなそういうすばらしい夢を持っていた。でも決して夢のとおりにはならないんだよ。そもそもみんなが思ってたような状況なんか、一度だって起こっちゃいなかったんだから。すばらしい夢だったね。でも、もう終わりだ。だから親愛なる友人たちよ、みんなとにかくこのままやっていくしかない。夢は終わったんだ。

ジョージ　ビートルズは60年代においてある位置を占めていたってつくづく思う。でもビートルズに何らかの意味を感じていた人たちは、みんな大人になったんだ。どんなことでもそうだよ。一緒に成長したものには愛着を感じるものさ。何かに愛着を持つこと、それも人生における問題のひとつだ。みんなが今でもビートルズを好きでいてくれるのはすごく嬉しいことだよ。だけど、過去に生き、何かにしがみついていようとして、変化を恐れるようになれば、そこに問題が出てくるんだ。

ジョン　どんなことだって、時々なら楽しめるさ。だから僕らの場合も、そのまま続けてたら時には楽しいこともあっただろう。まあもっとひどいことになってた可能性もあるけどね。とにかく、大人になったってことなんだよ。僕らは30になってまで、クレージー・ギャング(イギリスのコメディアン・グループ)やマルクス兄弟みたいにステージへ引っ張り出されるのはごめんだ。喘息持ちで結核病みだっていうのに、「シー・ラヴズ・ユー」なんて歌えないさ。

1971年

ジョージ　僕らが解散した理由というのは、実際どんな人にもあてはまるものだと思う。僕ら全員がもっと広いスペースを必要としていた。ビートルズじゃもう狭すぎたんだ。確かに世界中でヒットを出したバンドではあったけれど、それでもすごく狭い場所であることには変わりなかった。ビートルズの話の中で、僕ら個人個人の人生に触れようとしても、そんなに深く入り込めない。ビートルズの境界というのが決まってしまっていて、僕らの人生はそれを超えてもっと違う分野まで広がっていたからさ。僕らみんな、外へ出る以外になかったんだ。僕らにとっては狭苦しい鳥カゴだったんだから。僕らはビートルズよりも大きい存在だった。僕ら4人それぞれが、ビートルズというものよりも大きくなっていたんだと思うよ。

それにストレスがひどすぎた。僕らは1963年からずっと、ものすごいストレスを背負わされていたんだ。最初の頃は感じなかったけどね。ああいうのはじわじわと染みこんでくるものなんだよ。ツアーやら、タイム・スケジュールやらのプレッシャー。僕らが何枚レコード出して何回ツアーやったか、今から考えたら信じられないと思うよ。

ジョン　僕らはみんな、別々の人間なんだ。そしてビートルズにいる間に僕らは成長し、ビートルズでは収まりきらなくなったのさ。バックがあまりにも小さくなってしまったんだよ。ジョージやポールがやりたくなければ、僕は彼らに前衛的な映画や音楽を押しつけるわけにいかない。それと同じで、ポールも自分の好きなものを僕に押しつけることはできないんだ。共通の目標がなくなってしまえばますますのこと。僕らは別々に、それぞれの人生を生きていかなきゃならない。もう大人になったんだ、僕ら学校を卒業したんだよ。今まで学校を卒業したことなかったからな――僕らまっすぐショービズの世界に入ってしまったから。1971年

初めは誰でも自分を持っているものなんだ。だけど常に社会や親や家庭がちょっかいを出してきて、本来の姿を消し去ろうとする。"泣いちゃダメだ。感情を表に出すな"、そういうお題目を唱えてさ。それが一生続くんだよ。16歳の時には、僕はまだ自分を持っていた――16から29までの間になくしてしまった。大人になろう、一人前の男になろう、責任ある人間になろうってもがいてさ……僕らはスーパースターという繭に包まれれてはいたけど、やっぱりティーンエイジャーならではの成長の過程はくぐり抜けなきゃならなかった(部屋にひとりきりだろうと、大きなオフィスにひとりきりだろうと、それは同じなんだ)。おそらく30という年齢は、ようやく目が覚めて、自分は自分でコントロールするものだと気づく時期なんだろうな。

ジョージ・マーティン　解散はいろんな原因が重なった結果だが、一番大きかったのはそれぞれが自分の人生を生きたいと望んだことだろう。彼らにはずっとそれができなかったんだ。常にグループのことを考えなくてはならなかった。だからその意味で、彼らは常に四人だった――そのことに、ついに耐えられなくなったのだと思う。

彼らは普通の人たちのような人生を過ごしたかったんだよ。仕事のパートナーよりも妻を大切にする人生を。ヨーコが現れ、そしてついにリンダが現れて、ジョンとポールにとってはそのふたりの女性の方がお互いの存在よりも大切になった。他のメンバーの場合も同じだった。

リンゴ　ヨーコはずいぶんといろいろ言われてきた。ヨーコとリンダね。だけどビートルズが解散したのはあのふたりのせいじゃないよ。気がつくと全員30で、結婚して、それぞれが変わっていた、それだけのことだ。もう、ああいう生活は続けられなくなったんだよ。

ジョン　僕はビートルズがリバプールを離れる前から結婚してた。結婚してたって何も関係なかったよ。シンはヨーコみたいなキャリアはなかったけど、パティは仕事してたろ――それでも何の影響もなかった。モーリーンだってすばらしいアーティストだ。リンゴの子供を育てる一方で、立派にアーティストとしてやってる。だからワイフは関係ないんだよ。

ブライアン・エプスタインが死んでから、ビートルズはゆっくりと崩壊していったんだ。『レット・イット・ビー』を見れば明らかだろ。あの頃すでにリンダとヨーコの存在もあったけど、ふたりが現れる前からもう始まってたのさ。インドに行った時からはっきりしてたよ。あの時、ジョージと僕は残り、ポールとリンゴは帰った。"ホワイト・アルバム"を見たってわかる。自然な成り行きだったんだよ、別に大惨事が起きたわけじゃない。みんなこの世の終わり

CamScannerでスキャン

みたいに、いまだに話題にしてるけどさ。たかがロック・グループの解散じゃないか。たいしたことじゃないよ。懐かしがりたいのなら、昔のレコードがいっぱいあるだろ。すばらしい音楽は全部ちゃんと残ってる。1971年

ンゴ　カチッとキーを回せば、"OK、もう君はビートルズじゃなくなった"ってわけにはいないさ。だって今になっても、あれが僕のすべてなんだ。僕の言いたいことわかる?タンとドアを閉めてしまえばすべて終わり、君はリバプール8、アドミラル・ブローヴ10番リチャード・スターキーに戻る、そんなはずないんだよ。すべてつながってるんだ。僕られぞれが、あのグループにいたことを引きずってるんだよ。

ョージ　ビートルズではとにかくあれだけいろんなことがあったからね。いい状態も悪状態も結局は同じだってことを学ばせてもらったよ。すべては常に変わり続け、常にバスが保たれている。そして、どんなことが起ころうと、それは自分が引き起こしたものだ。ビートルズの物語の教訓はね、一番いい部分を受け入れたなら、悪い部分もくぐけなきゃいけないということだよ。

　ビートルズとしての僕らの人生は、その極端な例だった。愛と憎しみを知り、浮き沈みを経験し、いいことも悪いことも学び、失ったものもあれば得たものもあった。世間の人が経験する何倍もの密度だったよ。結局は、悪いことなんて何もない。どんなことが起きたって、何かを学び取れるかぎり、それはいいことなんだよ。でも学べなければすべてが無駄になる。"僕は誰だ?　僕はどこへ行くんだ?　僕はどこから来たんだ?"って迷ってるままではね。

ポール　どれほど仲間割れしようと、僕らはやっぱり固く結びついているんだよ。ビートルマニアの騒ぎをすべて内側から見ていたのは僕ら4人だけなんだ。だから僕らは永遠に結ばれているんだよ、たとえどんなことが起きようとね。

ジョン　ビートルズは終わった。でも、ジョンとポールとジョージとリンゴは……この先どういう関係になるかは神のみぞ知る、だ。僕にはわからない。僕は今でもアイツらを愛してるよ!　アイツらが僕の人生のあの部分を占めていたってことは、永遠に変わらないんだからね。1980年

CamScannerでスキャン

ズはすごく長い期間やってたような気がするけど、現実にはたった10
。あの10年の間に20年分ぐらいが詰まってる——いろんな曲、そして
られ。口髭、アゴ髭、髭なし、カルダンのジャケット、いろいろあったよ。
い間に思えた。とっても楽しかった。

られるようになるずっと前から、僕らは一緒にいたんだよ。61年に始
いんだ。61年当時、僕は21だったけど、ポールとは15の時から一緒に
ージはその1年後くらいだ。それだけ長い年月を一緒に過ごしてきた
屋から最高級の部屋まで、信じられないような状況をくぐり抜けてき

年も何年も一緒に過ごすっていうのは大変なことだよ。それを僕らは
とあらゆる罵詈雑言を言い合った。殴り合いもした。恥さらしな真似
した。でも僕らは自分たちの本質ってものをちゃんとわかってたんだ。
僕らは10年以上も、一緒に辛い時期をくぐり抜けてきたんだからね。
ャーを受けてきたんだよ。1974年

けの年月を経て、僕らの間には強い絆ができていた。
たに分裂することは不可能なんだよ。解散した時にも言ったとおり、
変わっていないんだ。曲は残り、映像もみんな残ってる。僕らのやっ
ているし、これからも存在し続ける。起きたことは起きたこと——だ
なことじゃない。ヘンリー8世とかヒットラーとか、始終ドキュメンタリ
る歴史上の人物と同じだよ。ああいう人たちの名前は永遠に忘れら
トルズもおそらくそうなんだ。だけど僕の人生はビートルズから始ま
ビートルズで終わったわけでもない。あれはちょうど、学校みたいな
はダブデイルへ行き、それからリバプール・インスティチュートへ行き、
ートルズ大学へ通って、そこを卒業した。人生にはまだこれから先が

が言ったとおり、ただのちっぽけなロックン・ロール・バンドだったん
多くのことを成し遂げ、多くの人にとって大きな意味を持っていた。
れほど重要なものじゃなかったんだよ。

て単純なことだと思うけど。僕にしてみれば、あれはほんとにすば
ル・バンドだった。僕らはいい曲をたくさん作り、現在もそれは残っ
ジョージの言うこともわかるよ——たしかに僕らは、リバプールのち
ぎなかった。いまだに不思議なのは、ドゴールとかフルシチョフと
のリーダーたちが僕らを目の敵にしてたことだ。あれはどうしても理

ると、僕らは自分たちの力をもっと役立てることができたのかもね。
ゃないよ、ただもっと人のためになれたんじゃないかなってことだ。
したかもしれない。考えるとそう思うってだけだよ、後悔とは違う
はないからね。ただ、僕らが力を合わせれば、もっと強くなれて、
できたかもしれない。

悔してない。すべて済んだことさ。まあ他人を傷つけたことはあ
。それがなきゃ、何ひとつ残念に思うことなんてなかっただろう。

、ヒッピーが流行り始めた頃、僕らにはかなり影響力があったと
きな権力を持っていたとは思わない(たとえば、あの頭のおかし
ルが僕らを逮捕するのを止める力はなかったじゃないか)。
ったことすべてを変えたくなるかもしれない。出だしの1日目から
いいんだ、起きたことは変えられない。
ていたかもしれないよ。今の僕らが知ってることをあの頃に知
と、いろんなことを動かせる力を手に入れていただろう。だけ
4人組だったことを思えば、それにしちゃよくやったよね。僕ら、
た。それが僕らの強みだったんだと思う——ものの受け止め方
ないのに、うまくやっていけない人がたくさんいた。ヒット1曲出
りになってしまって、精神的に参ってしまう人たちがたくさんい
やっていけた。
ッシャーはすごかった。ビートルズほどのプレッシャーを受けた
意味エルヴィスもそうだったかもしれないけど、僕らほどひどく
トルマニアの騒ぎもあったし、それに加えてドラッグと警察、さ
こへ行っても政治の混乱やら暴動やらにぶつかった。

ると、ちょっと不思議な気がするね。あの中に自分がいたって
"台風の目"って呼んでた。周囲より、そのど真ん中の方が穏や

った恋愛だったね。みんなはお金を払ってくれたし、歓声をあ

けてくれた。だけどビートルズは全神経を犠牲にしてたんだよ。そのおかげで……大き
なことだ。
　ある意味で、僕らは訪れた場所を平穏にする役目を果たした。というか、そこを……
を前向きな力に集中させたんだ。でも僕ら自身は台風の目にいたわけだろう？ ビートルズの
"効果"は誰の目にもわかったけれど、誰も本気で僕らひとりひとりを心配してはくれな
かったし、"これだけのことを、あの連中はよくやっていられるなあ"なんて思ってもくれ
なかった。いつでも僕らは、あの連中とかビートルズと呼ばれてた。僕らが4人の人間
4人の個人の集まりだってことは、ほとんど誰の頭にもなかった。
　僕はそういうことのすべてからいろんな経験を積ませてもらった。有名になり、あら
ゆる状況、あらゆる人々を相手にして、ファンとかマスコミとかから叩かれて、そういう
ところからいろんな知識が身についた。測りしれない量の経験だったよね。
　ほんと、あんな経験ができるなんてものすごいことだよ。だけど、もしビートルズじゃな
かったら、僕らはもっと別のものになっていたかもしれないし、それもロックン・ロール
バンドとは限らない。カルマなんだよ。蒔いた種は刈り取らなくちゃいけない。ジョンが
「オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ」(愛こそすべて)で言ってるとおり、"どこにいようと、
それが君のいるべき場所だ"ってことさ。運命は自分の前世の行ないによって、自分自
身で切り開いたものなんだから。何かが起こるはずだと、僕はずっと感じていた。学
校に行ってる頃から——だから僕はあんまり勉強しなかったんだ。GCE(教育一般証
明試験)に通らなかったからって、僕の人生が終わるわけじゃないんだから。

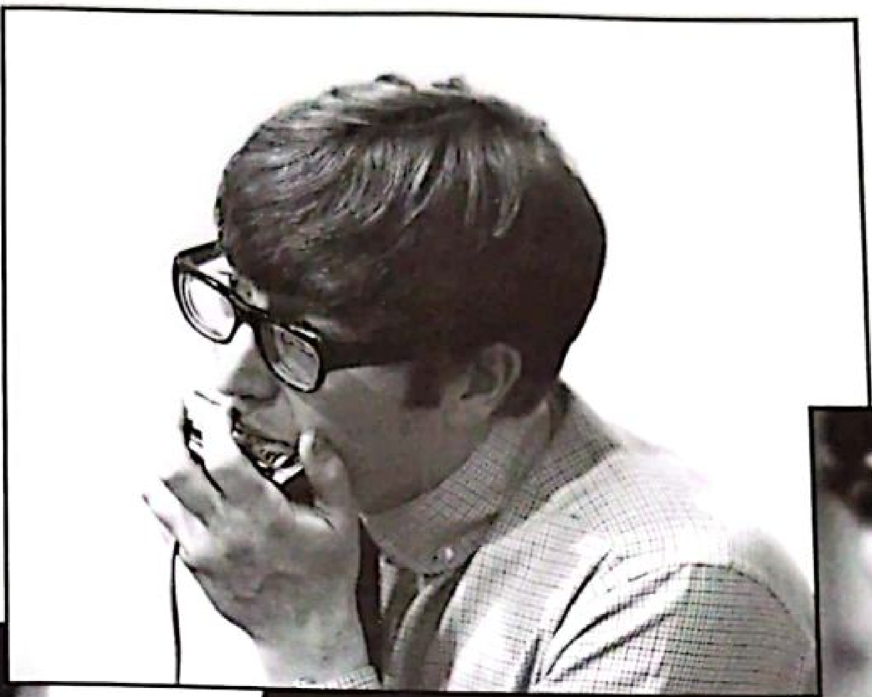
ポール　一番楽しかった時期？ 僕にとっては、あちこちに散らばってるよ。初期の頃は
ショービズ界のスターに会えることが純粋な喜びだった——スターに魅せられ、ショー
ビズ界のすばらしさに夢中になってた。実際、僕はみんなにからかわれたのをいまだ
に覚えてるよ。エジンバラ公に会って僕があんまり喜んでるもんだから、みんなして、
"何言ってんだ？"って——"だって、何はともあれエジンバラ公だぜ"。当時はそういう
ことに心酔しきってたんだよね。それが第一段階かな。それから僕らの曲がヒットし始
める。NMEのチャートで17位になったとき、僕は車の窓を開けて叫びたかった——ち
ょうどリバプールのグラフトンという小さな町を走ってるところでね——"17位だぞ、お
ーい！"って。初めてチャート入りした時の興奮、そしてその後No.1になった時の興奮。
ほんと信じられないくらいだった。それからグループとして一緒にやっていくうちに……
すばらしい瞬間は百万回くらいあったよ。あまりにたくさんありすぎて全部はとても話せ
ないから、いくつか拾ってみよう。たとえばマリファナにハマってた初期の頃、オースチ
ン・プリンセスに乗って——僕らはよく、とんでもない大騒ぎをしてたよ。何がって言う
んじゃないんだけど、とにかくおかしくてたまらなかった。
　ジョンと曲を作る時の楽しさも、すばらしい思い出になってる。ジョンはとてつもない
才能の持ち主だった。一緒にいるとすごく楽しかったし、頭の回転も速くて、ほんと素
敵な奴だった。残念ながら、時にはとんでもなくいやな奴にもなれたけど、でも全部ひ
っくるめて、一番深いところでは、彼という人と知り合えて幸せだった。彼はすごくカリ
スマ性の強い男だったよ。僕もちょっとジョンのファンだったのさ。僕らみんなそうだっ
たんじゃないかな。それに僕らは、お互いに敬意を持っていたと思う。悪口を言い合
うようになった頃、僕は自分に自信がなくなって、かなり辛い時期があったんだよ。"ジ
ョンはすばらしい人だ、僕はただくっついてただけだ"。すぐそう思ってしまう。だけど
自分に言い聞かせなきゃならなかった。"待てよ、彼だって馬鹿じゃない。僕が彼にと
って何の意味もない相手なら、あれだけ長い間一緒に仕事するはずがないじゃない
か"。ちょっとしたことだけど最高に嬉しかったのはね、ジョンが「ヒア・ゼア・アンド・エ
ヴリホエア」を、彼が当時書いた曲のどれよりも好きだって言ってくれたこと——そうい
うくだらない、ちょっとしたことがね、いろいろと忘れられないんだ。

リンゴ　僕はジョンの大ファンだった。彼は誰よりも広い心を持っているってずっと思っ
てたよ。それに彼はみんなが思ってるようなひねくれ屋でもなかった。彼は誰より広い
心の持ち主で、誰よりも先を行ってた。彼は何から何まで知ってたよ。僕らがようやく
たどり着いた時には、彼はもう次の段階に進んでた。

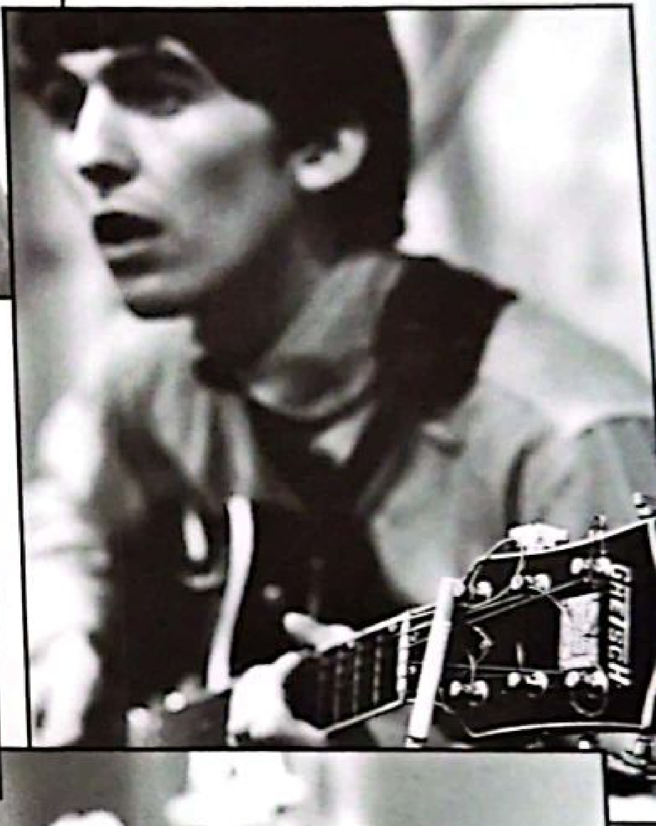
ジョン　とにかく、僕の友だちはビートルズだけだったのさ。僕にとってほんとに身近
な存在というのはビートルズであり、あの3人のメンバーだった。

ポール　僕らはいつもくっついてる仲間みたいなもので、それもよかったんだよね。ミッ
ク・ジャガーが僕らのことを、頭が4つのモンスターだって言ってたよ。僕らは同じような
格好で、どこへでも一緒に出かけたからさ。全員が黒のタートルネック・セーターに黒の
スーツで、髪型も同じだった。だから実際、4つ頭のモンスターみたいに見えたかもね。

リンゴ　最高の時ならいくらでもあったよ。グラスゴーでギグやった時も——あの時は
バンドとオーディエンスとの間に、ほんとのコミュニケーションってやつが存在した。あれ
は1963年か64年くらいだったと思う。魔法のようなステージというのを何度か経験した。
それにスタジオのギグでもね。
　アルバムすべてにすばらしい思い出がある。いい曲もいっぱいあった。僕はいつだ
ってバンドでプレイするのがほんと好きだったし、最高におもしろかった(今だってそれ
は変わらない)。バンドならいろんなことができるんだ。



ジョージ　すべてを含む大きな絵の中では、僕らが1枚もレコードを作らなかったとしても、1曲も歌わなかったとしても、それはそれでまったく構わないんだ。そんなことは重要じゃない。死の瞬間、人間には何らかの精神的な導き、物質的な世界を超えた、霊的な知識が必要になってくる。そういうところから言えば、自分がどこかの国王だろうとブルネイのサルタンだろうと、素敵なビートルズの一員だろうと、そんなことはどうでもいいんだよ。大事なのは中身だ。僕の最高の曲は、僕がこれから書く曲なのさ。そしてたとえ永遠にその曲を書くことがなくても、それはそれでいいんだ。だってそんなこと、大きな絵の中ではほんの些細なことでしかないんだから。



"ホワイト・アルバム"にもすばらしい曲がある。ミュージシャンとしての環境からすれば、あれはよかったよ。それ以外の面は別としてね。「サージェント・ペパー」は、僕はそれほど好きじゃないんだ、ものすごくいい曲も入ってるんだけどね――あれは実際、すばらしいアルバムだよ。(何より)ジョンとポールがあれだけのサウンドを生み出して、バイオリンとかのインストゥルメントを入れて、ふたりの曲だから自由にやれたんだ。そして出来上がった作品は、これぞアルバム、というものだった。どうして好みじゃないのか、自分でもわからない――あの頃起きたこととか、自分の精神状態とかと関係あるのかな。

でも僕にとって「リボルバー」は――すばらしい！　もう最高だね。それに「アビイ・ロード」のB面。それに"ホワイト・アルバム"の「ヤー・ブルース」、あれを超えるものはないよ。あの曲は僕ら4人だけだった。僕が言いたいのはそこなんだよ――僕ら4人で狭い箱のなかに閉じこもってさ、8フィート四方くらいの、仕切りも何もない部屋でやったんだ。あのグループはほんとに強く結びついてたんだよ。実際、60年代におけるグランジ・ロックみたいなもんだ――グランジ・ブルースだね。

ジョン　いろいろあったけど、ビートルズの4人というのはほんとにいいプレイができるバンドだった。まあメンバー同士がぎくしゃくしてない時にはね。それに僕が何かやりだすと、リンゴはすぐに感じをつかんでくれ、ぴったりとハマるんだ。あれだけ長く一緒にやってるとね。これがバンドってもんだよね。時々懐しくなるのは、瞬きひとつしただけで、ちょっと音を出しただけで、全員にパッと伝わる、あの感じ。どんどんアドリブをやっていける雰囲気だよ。1970年

リンゴ　僕ら4人が一緒にいると、魔法のような感覚があった。テレパシーだよ。スタジオでやってると、時々、何なんというか……表現しようがないんだ、ほんと。僕らは4人だけどひとつなんだよ。全員の心臓が一緒に動いてる。だけど、"おう、俺いいプレイしてるじゃないか！"と意識しすぎちゃうと、まるっきりダメになっちゃうんだ。

CamScannerでスキャン

ジョン　テレビでゴーギャンの一生を見た。彼はあんな悲惨な死に方をしていたんだね(性病だ、それも水銀剤が“治療”だって)。その上、片足が折れてねじくれたままでさ。パリでの展覧会が初めて“上出来”な滑り出しをしたというのに、そのために故郷へ戻ってきた彼は酔っぱらってケンカしたあげく、足を折ったんだよ。

彼がタヒチへ行ったのは自分を縛りつけていたものから逃れるためだった。銀行での仕事。妻と子どもたち。彼は南太平洋で暮らしている間つけていた日記を、一番慈しんでいた娘に捧げた。そこには自分が家族を捨てたわけが綴られていた。ところが彼がタヒチへ戻ると、その娘が死んだという手紙が故郷から届いてたんだ！“歴史に残る”ために、そこまで大きな代償を支払わなくてはいけないなんてね。彼はついに大きな“傑作”を完成させ、そして死んだ。ここで肝心なのはこういうこと。つまり、確かに彼は優れた画家だったけど、彼の“天才”ぶりを示す切れっ端がなくたって、世の中はちゃんとまわっていくんだよ。その“傑作”は、確か彼の死後火事でダメになったはずだ。もうひとつ大事なことは、もし彼がいわゆる神秘主義……断食、瞑想……何かしらそういう修行を身につけていたら、ひょっとすると“同じ宇宙”に到達できていたかもしれない。大変なことには違いないさ、だけど自分を殺し、まわりの人間を殺してしまうよりは簡単だろう。1978年

ジョージ　ああいうところがジョンのすばらしさなんだ。僕はあの年月の間に、それを彼から教わった(それから忘れないでほしいけど、ジョンとのつきあいは僕らそれぞれで違っていたんだ。僕ら4人全員が感じることも考えることも同じ、互いの関係も同じだと思われたら困る。ジョンと僕の1対1の関係は、ジョンとリンゴ、ジョンとポールとはまるで違っていたはずだ)。彼は僕らが物質社会にのみ生きているのではないとわかっていた。彼には死の向こう側にあるものが見えていて、この世の人生はちっぽけな芝居にすぎないってことをわかっていたんだ。そのことがきちんと理解できていたんだよ。人生にもっと大きなものがあるとわかっていなければ、ゴーギャンが芸術のために家族をないがしろにした、自分の絵のために死ぬなんてくだらない——なぜそんなもののために？　——そんなこと言わないだろう。沈む夕日の絵が、現実の夕日にかなうはずがない。絵は(音楽と同じように)神が生み出す一瞬一瞬を再現しようとする、無意味な試みにすぎないんだ。

リンゴ　答えは見つからなかった。“うん、僕には答えがわかった！”なんて、すごく傲慢だと思うよ。僕はどこかで僕なりの答えを見つけたんだ。60年代、70年代、80年代を経て、ここまで来れたことを、僕は神に感謝してる。今の僕は自分の精神性に安らぎを感じてるんだ。

痛みを伴わなければ成長はない、というのは、常に質問であり答えなんだ。本当はドアを通っていけるのに、壁に何度も頭をぶつけてる時ってあるだろ。でも誰だってそうなんだ——それがちっぽけな人間というものなのさ。神は僕の人生を救ってくれた。僕はいつでも神の祝福を感じてきたよ。だけど時々、どんどんおかしなほうへ行ってしまって、その幸せを忘れちゃうんだよね。

ニール・アスピノール　ビートルズとの一番幸せな思い出は、笑いにあふれた楽屋——他には誰もいなくて、僕らだけでジョークを言い合ってた時間。ほんと、たいしたことじゃないんだ。そういうちょっとした、個人的なこと、それが僕にとって一番の思い出だね。今でも思い出すよ。みんなでいるとほんとに楽しかった、僕らはいつでも笑ってた。いろんなことがあったけど、何よりそれが最高だったな——僕らは笑いを楽しめたんだ。

リンゴ　彼らは僕にとって一番の親友になった。僕はひとりっ子だったから、いきなり弟が3人もできたような気がしたよ。僕らは互いに気づかってた。それにほんと、みんなでいると笑ってばかりだったな。昔はホテルの中で一番大きなスウィートをもらって、ワンフロア全部貸し切りだったんだけど、結局、僕ら4人はひとつのバス・ルームに集まっちゃうんだ。一緒にいたかったのさ。あの頃は常にプレッシャーがあったからね。いつも誰かが何かを要求してきた。インタビューとか、挨拶とか、サインとか、僕らといるところを見せたいとか、僕の犬に話しかけたいとか。

僕ら4人はほんとに強く結びついていた。一緒にいるのがすごく楽しかった。僕はアイツらが大好きだったよ。

僕らはお互いを大事にしてた。それにビートルズという経験をしたのは僕らしかいないんだよ。ビートルズであることがどんなものか、知ってる人は他には誰もいない。今だって、僕ら3人で集まれば、ポールとジョージは僕を僕として見てくれる——まわりの景色と一緒に見るんじゃなくてね。彼はこんなふうで、そしてビートルズだ。他の人はみんな、そういう見方をする。友だちすらもそうなんだ。必ずどこかにそういう部分があるんだよ。

月へ行った宇宙飛行士は、彼らしか知らない特別な経験をするだろう。ビートルズの場合もまったく同じだ。今じゃもう、互いにわかり合えて、そういう経験を理解できるのは、僕ら3人だけになっちゃったね。

僕は月へ行った人に会ったことがあるんだ。それで彼に訊いたんだよ、“地球が僕らの考えてる地球じゃなくなって、ひとつの丸い惑星に見えたのはいつですか？”って。すると彼は、“いや、忙しくて気づかなかった”と言ったんだよ。信じられなかった！　それって大問題だったのに——彼はたぶん月へ行った12人目くらいだよ、だったら地球が丸く見えた時くらい気づいてもいいはずなのに。僕はびっくりした。だけど、同じようにビートルズも忙しかったのさ。僕らはいろんな変化を引き起こしていたけど、その最中に自分たちのまわりは見ていなかった。僕らが変化そのものなんだから、変化を求める必要はなかったんだよ。僕らが襟なしのスーツを着たら、世界中の人が同じスーツを着始めた——あれはセシル・ジーで買ったんだよ。僕らが作ったわけじゃない。そして僕らがカラフルな色の服を着ると、僕らが着てるからということで、他の人もみんな着る気になれたんだ。

ポール　僕らはある種の自由をこの世界に与えたと思う。今でもたくさんの人から、ビートルズのおかげで解放されたって言われるよ。考えてみれば、ビートルズが現れるまでの世の中というのは、ちょっとばかり上流階級が幅を利かせる場所って感じだった。地方の役者でも、シェークスピア風のすごくいい声を出せないといけなかったし。だけどそれが、自分の出身地のアクセントでもかまわなくなってきたんだ。自分の本当の姿を見せてもいいってことになったのさ。僕らは視野を狭められていた多くの人を解放したと思う。そういう人たちはたぶん、親の権威のもとで人生をスタートさせていたんだろう。

“何か勉強したんですか？”ってジャーナリストから訊かれるたびに僕は言うんだ——ほんとはちょっと文学をかじっただけなんだけど——“うん、そうだね、シェークスピアを”って。それでいつも“おのれに忠実であれ”という文句を引用する。これってビートルズにぴったり当てはまる言葉だと思う。僕らはいつだって、自分たちにすごく忠実だった——ビートルズの持っていた、厳しいくらいの正直さこそが重要だったんだと思う。僕らは自分たちの意志を曲げずに、自分たちの思うことをそのまま言っていた。すると世間の人たちの間でも、誰もが正直にものを言って構わないんだ、っていう考えが広がっていった。実際それっていいことだよね。

ジョン　若者は希望を持ってる。だって彼らが期待してるのは自分たちの未来だからさ。自分自身の未来に失望してしまったら、それはまずい状況だよね。希望を失わないためには自分たちでそれを生かし続けるしかない。僕は未来にすごく大きな希望を持ってるよ。

ビートルズは一種の宗教だったんだと思う。ポールがビートルズの代表って感じで、彼はほかの3人よりヒーローのイメージみたいなのが強かったね。若者や女の子なんかにも一番人気あったし。

60年代はすばらしい時代だったと思う。アメリカやワイト島に若者が集まったのも、一部の人にとってはただのポップ・コンサートにしか思えなかっただろうけど、実際にはもっと大きな意味があったんだ。若者が結集して、いわば新しい教会を作り出していたんだよ。彼らはこう言っていたんだ。“僕らは神を信じている、僕らは希望と真実を信じている。そしてほら、ここにこうして、2万人、20万人もの人間が、みんな平和に集まれたじゃないか”。1970年

ジョージ　ビートルズは他のバンドよりも多くの人々、多くの国、多くの地域に音を届かせた。他のバンドが行き着けなかったところまで浸透したんだ(今流れてる音楽を聴いても、いい曲はすべてビートルズから盗んできたものだよ。いいリフやフレーズ、アイディア、タイトル、ほとんどそうだ。ビートルズは30年間ずっと略奪され続けてきたのさ)。

僕らはビートルズ・ファンに希望を与えたと思う。前向きな考え方を教えたんだ。この先には晴れやかな日が来る、楽しい時がある、とね。そして、自分の主は自分自身であり、誰も何ものにも支配されてなんかいないんだ、と。僕らの歌の多くに、そういうメッセージが含まれていたんだよ。

ポール　僕は今でも「レット・イット・ビー」とか、ああいう曲をステージでやってるんだ。あの歌に感動して若者が涙を流すのを実際に見ると、ほんとうに嬉しく思うんだ。これがまったく別の方向に行く可能性だってあったんだよ。僕はよくみんなに言うんだ、“ねえ、ビートルズがすごく悪い奴らだったら、ヒットラーみたいにだってできたかもしれないよ。若者に対して、それくらいの影響とかパワーを持っていたからね”。

リンゴ　当時を思い出すと、どうしても湿っぽくなっちゃうね。僕はもともと情にもろい性格なんだ。情に流されやすい人間なんだよ。すごく感じやすくてさ。48歳になるまで、これはまずいってことに気づかなかった！

僕らは互いに正直で、音楽に対しても正直だった。僕らの音楽は前向きだったよ。愛に前向きだったんだ。ビートルズはいろんなことについて書いた——僕ら全員が書いてた——でもビートルズのメッセージの基本、それは愛だったのさ。

CamScannerでスキャン

リンゴ
僕らはお互いを
愛おしみ、思いやっていた。
4人でホテルの部屋を
行き来したり、
嘘みたいに仲が良かったんだ。
僕らは心から愛し合っていた。
ほんとにすばらしかったよ。

ジョージ
かつてのビートルズ・ファンは大人になり、
結婚して子どももいる。
みんな責任ある立場になっている。
それでもまだ、僕らのことを
心のどこかで
忘れないでくれる。

ール
んとによかったと思うのは
らの曲のほとんどが
と平和と調和を歌っていることなんだ。
なんてかまうもんか、
を出してしまえとは歌っていない。
こそはすべて」も
ンの「平和を我等に」も
な良心に基づいた歌だった。
そのことをすごく誇りに思うよ。
かく……最高だった、ビートルズは。

ジョン
ビートルズの一員だった頃、
僕らは世界一の
グループだと思っていた。
そう思っていたからこそ
僕らはあれだけの
存在になれたんだ。1980年
僕は大人になった。
もう父親的存在などいらない
神とかケネディとか
ヒットラーとか、
そんなものがいいとは思わ
もうグルなんて求めない。
もう他人に何かを求めたり
進むべき道を
訊ねたりもしない。
大事なのは自分自身だ。
そして、僕らはきっと、
永遠に音楽を
作り続けていくんだろう。

CamScannerでスキャン

SELECTED CAPTIONS

2：ビートルズ／映画「ア・ハード・デイズ・ナイト」。
5：ビートルズ／1969年4月。

1960-1962

41：（上）マーロン・ブランド／映画「乱暴者」。（下）ビリー・フューリーとジョン。（手書き文字）ポールの手紙。
42-44：ラリー・パーンズによるオーディション。1960年5月。
45：ハンブルクへ向けて出発するビートルズのツアー・バス。
46：（下）アルンヘム墓地においてジョンが撮影した写真（左からアラン・ウイリアムズ、ベリル・ウイリアムズ、ウッドバイン卿、スチュアート、ポール、ジョージ、ピート）。
46-47：ジョージが所有している写真から。
48：（上2枚と中右）ジョージから提供された写真。ジョージの手書き文字は、左上の写真の裏に書かれていたもの。"Film Foto Pressedienst"のロゴはポラロイド写真のオリジナル・フレームの裏より。
49：ロリー・ストーム＆ザ・ハリケーンズ。リンゴのプライベート・コレクションから（リンゴは左端）。
51：（右上）リーパーバーン。その下はグロス・フライハイト。（中左）ジョージの手書きによるセット・リスト。（下）ハンブルクで、船上のビートルズ。以上ジョージのプライベート・コレクションより。（中央）写真の裏に書かれたジョージのメモ。
52：（左下）アストリッド・キルヒヤー。
57：（下地）ポールと弟マイケルによるイラスト。
58-59：トップ・テン・クラブの屋上にて。ジョージのコレクションから。58ページは煙突の上に立つジョン。
59：（上）ボブ・ウーラーに宛てたポールの手紙。
62：（右下）ジョンが学校で授業の合間に書いた本「デイリー・ハウル」の表紙。
64：ポールとパリへ旅行に行った時のジョン。
68：（上）ポールが所有しているポスター。
70：一番下の写真以外はすべてジョージのプライベート・コレクションから。
71：メインの写真はリンゴのコレクションから。
72：キャバーンでのリハーサル風景 。
73：（左上）結婚したばかりのジョンとシンシア。写真の下に敷かれているのは彼らの結婚証明書。（右）リンゴのプライベート・コレクションから"あごひげのある写真"。
74-76, 78：ポールのプライベート・コレクションから。
75：1962年9月4日、EMIのアビイ・ロード・スタジオでのセッション風景。キャバーンでつけられた黒いアザがジョージの目の周りにまだ残っている。

963

：BBCでのセッション 。
：（上2枚）バンと乗用車両方の運転をこなすニ
・アスピノール。
（メイン）マル・エヴァンス。（左下）いつでもメ
をかけているマル。
（下中）ビートルズと一緒に食事中のニール・
ピノール。（下右）これもニール。（ドキュメント）
ルのコレクション。
上中）ポールの手書きによる曲目リスト。
と92（左）：アビイ・ロード・スタジオにてジョ
マーティンと。
スターはポール、ロイ・オービソンのドキュ
はジョージの提供。
）ジョンとジョージがディック・ジェイムスとス
。（中）ディック・ジェイムス、ジョージ・マー
そしてブライアン・エプスタイン。（左下）1963
ーンマスでのジョージとニール。

99：テネリフェでの休日。（中左）はリンゴ、（カラー2枚）はクラウス・フォアマン、その他の写真はジョージの提供。（左上、右下）にはアストリッド・キルヒヘヤー、（左下）にはクラウスの姿が。
100：すべてのカラー写真はリンゴの提供。ドキュメントはポールから。
101：ミック・ジャガーとビッグ・スリーのベーシスト、ジョニー・グスタフソンと。
103：（イラスト）ポールの教科書から。（イラストの下）1963年10月13日ロンドン・パラディアム。（右下）1964年1月12日、同所にて演奏中の写真。
105：（左上）マーガレット王女に謁見中のビートルズ。（左下）マレーネ・ディートリッヒ。
105-106：（ドキュメント）ポールのプライベート・コレクションから。
107：（右下）ジョージ・マーティンと。左後方はブライアン・エプスタイン。
109：洗濯機で成功した大資本家ジョン・ブルームの家で行われたロンドン・パークレーンのパーティで。1963年9月9日。

1964

112：（右上）"the beatles, france"という宛名でパリのジョージ5世ホテルに届いたファン・レターを読むジョン。（中）ブリジット・バルドー。
114：（下）ボブ・ディラン。
115：（上）「アイ・ウォント・トゥ・ホールド・ユア・ハンド」のポールの作詞原稿。（左下）エッフェル塔の前で。（右）ブライアン・エプスタインと。
118-119：1964年2月の「エド・サリバン・ショー」。
119：（左）エド・サリバンと。（右）ブライアン、ニール、ジョン。
122：1964年2月、マイアミ・ビーチ。
124-125：アビイ・ロード・スタジオでアルバム「ア・ハード・デイズ・ナイト」のレコーディング。
126：ロンドン、メリルボーン駅でのジョージ。映画「ア・ハード・デイズ・ナイト」の撮影中。1964年4月。
127：出演者とクルーの写真。（3段目左端）ディック・レスター監督。（3段目左から2枚目）ジョージと未来の妻、パティ・ボイドとその他の女優たち。
129：（右下）ディック・レスターとビートルズ。
131：（左下）映画「ア・ハード・デイズ・ナイト」のラッシュを見るメンバー。（メイン）ニューヨークのビーコン・シアター提供。
134：（下）1964年4月23日、ジョン、ドー・チェスター・ホテルで催されたフォイル書店の昼食会に主賓として招待される。
135-137：タヒチで休日を楽しむジョン、シンシア、ジョージとパティ。137ページの中央の写真（シンシアとパティ）以外はジョージのコレクション。
140：雨のオーストラリア、シドニーに到着。両方の写真とも右端に写っているのがジミー・ニコル。
141：（すべて）、142-143：（メイン）、143：（右下）はいずれもジョージがツアー中に撮った写真。
144：（上）1964年7月6日ピカデリー・サーカスのロンドン・パビリオン。映画「ア・ハード・デイズ・ナイト」の試写会にて。
145：（上）1964年3月19日、ジョン、労働党党首ハロルド・ウィルソン（写真左）から優秀ショー・ビジネス・パーソナリティ賞を授与される。
150：（右下）ジェーン・マンスフィールド。
152：（メイン）デレク・テイラーとジョージ。（右上）ポールとデレク。
153：演説するデレク・テイラー。
157：ファッツ・ドミノと。
159：すべて「ビートルズ・フォー・セール」のレコーディング風景。（下中）ブライアンとジョージ・マーティン。
161：（下）ジョージ・マーティンと。

1965

164-174：映画「ヘルプ！」の出演者とクルー。
165：（上）アーム役を演じたエリナー・ブロンと。
170 ：（1段目左端）エリナー・ブロン。（1段目の左から2枚目）ジョンとディック・レスター、マル・エヴァンス。（1段目の左から3枚目）エリナー・ブロンとディック・レスター。（2段目左端）ポールとニール。（4段目の左から2枚目）ポールとマル。（5段目左端）変装するジョンとジョージ。（5段目左から3枚目）ニールとマル。（6段目左端）クラングを演じたレオ・マッカーン。
174：（左下）ジョンの「ヘルプ！」作詞原稿。
175：（下地）ポールの「イエスタデイ」作詞原稿。
176：（左下）ジョンのイラスト。（右下）スイミング・プールのモザイクになったジョンのイラスト。一緒に写っているのはジョージ。
181：（上）ジョージのMBE勲章。
183：（下）「サージェント・ペパー」のアルバム・フォトセッションでMBE勲章をつけている、ポールとジョージ。
186-189：ニューヨーク、シェア・スタジアム公演。
192：（レター）ビートルズがエルヴィス・プレスリーに会ったことを、ブライアン・エプスタインが秘書のウェンディ・ハンソンに伝えるメモ。
194：ポールとジョージ。真ん中はジョージ・マーティン。
197：（下地）ジョンの「イン・マイ・ライフ」作詞原稿。
199：（下）ファンと一緒のニールとポール。

1966

206：（左上）デレク・テイラーに宛てたジョージの手紙。
207：（手書き文字）ジョージの「タックスマン」の作詞原稿。（下）ポールとジョージから国税庁への小切手。
208：リバプール、ウールトンのセント・ピーターズ教会墓地にあるエリナー・リグビーとジョン・マッケンジーの墓石。
209：（中）ジョージ・マーティン、ポール、ジョージ、ジョン。（右）インドの楽器タブラとジョージ。
210：ロバート・フリーマンによるアルバム「リボルバー」のオリジナル・ジャケット・デザイン。
213-214：アビイ・ロード・スタジオとチズウィック・ハウスで行われた「ペーパー・バック・ライター」と「レイン」のプロモーション・フィルム撮影風景。
213：（下）"ブッチャー"カバーの写真のスライドを見るポール。
215：（上）ビートルズの写真を撮るために抱きかかえられたヨーロッパで最も小さいマスコミ・カメラマン。（下）東京のビートルズ・ファン。1966年。
216-219：1966年日本とフィリピンのツアーから。
217：2枚のカラー写真はポールとブライアン。その下はマルとニール。（左下）ブライアン。
218：（中）イメルダ・マルコス。（下地）ジョンの手書きによるツアーの批評。
221：（レター）1971年、アップルのピーター・ブラウンから寄せられたフィリピンの税金に関する書簡に書かれたジョン自筆の回答。
222：カラー写真はジョージの提供。（左上）ジョージからデレク・テイラーに宛てた手紙。
223：（右下）ブライアンからモーリン・クリーブに宛てた手紙。
228：ラスト・コンサートとなった1966年8月29日、サンフランシスコ、キャンドルスティック・パークでのビートルズ。
230-232：スペイン、アルメリアでの映画「ハウ・アイ・ウォン・ザ・ウォー」の撮影風景。
233-234（上）：1966年、インド滞在中のジョージの写真。ラビ・シャンカールにシタールを教わる。浜辺の写真ではKamala Chakravartyとラビの教え子 Shambhu Dasとともに。
235：（下地）1966年11月、ロンドンのインディカ・ギャラリーで開催されたオノ・ヨーコの「未完成の絵画とオブジェ展」から「天井の絵」。（右下）ジョンのイラスト。

1967

239-240：1967年1月から2月にかけて、セブンオークスのクノール・パークで行われた「ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー」と「ペニー・レイン」のプロモーション・フィルム撮影風景。
243-247：アビイ・ロード・スタジオにおける「サージェント・ペパーズ」のレコーディング風景。
244：（3段目左端）ジョージ・マーティンとポール。
245：（1段目右端）マル、ポール、ニール。（3段目左端）ジョージと楽しそうなポール、そしてジョージ・マーティン。（6段目左端）ニール。
248-253：「サージェント・ペパーズ」のアルバム・ジャケット用フォト・セッション。
249：（右2段目）ニール、ポールとカバー・フォトグラファーのマイケル・クーパー。（メイン）クーパーの息子アダム、ポールとジョージと一緒に。（下）採用されなかったデザインのドラム・ヘッド。ポールのプライベート・コレクションから。
252：（左下）アルバム「サージェント・ペパーズ」のアルバムに入っている厚紙のおまけのひとつ。
253：（右下）1967年5月19日、アルバム発表のプレス・パーティにて。ブライアンのロンドンの家に保管されていた写真。
254：モントレー・ポップ・フェスティバルへビートルズが贈った平和と親善のメッセージ。
256-257： 衛星宇宙中継生番組「アワー・ワールド」での「オール・ユー・ニード・イズ・ラブ」のライブ。
258： 1967年7月20日ロンドンのヒースロー空港にギリシャから降り立ったマジック・アレックス、パティ、ジョージ。
259：（上）サンフランシスコのゴールデンゲート・パークで、ジョージとパティ。（下）ギターを弾くジョージとマジック・アレックス。ジョージの後ろがパティ、そしてデレク・テイラーを始めとする友人達。
264-267：ブライアン・エプスタイン。
264：（右下）ブライアンの死を報道する、番組プレゼンターのリチャード・ディンブルビー。
269：アップルのロゴのいろいろなデザイン案。
271-277：テレビ映画「マジカル・ミステリー・ツアー」の撮影風景。
273：ポールと新入り巡査部長を演じるビクター・スピネッティ。
276：ジェシー・ロビンズ演じるジェシーおばさんにシャベルでスパゲティを盛るジョン。ジョンの夢からヒントを得たシーン。
277：ストリップ・ショーを見るジョージ。
278：（上）「ハロー・グッバイ」のプロモーション・フィルム撮影風景。（手書き文字）同曲のポールの作詞原稿。（下）映画「キャンディ」のリンゴ。

1968

281-286：1968年初め頃、リシケシュでのビートルズ。282ページと283ページの左の写真2枚はジョージからの提供。
283：（右上）マハリシとヘリコプターに乗るジョン。（右下）ジョージとマイク・ラヴ。
284：（左下）左から、ジョン、マイク・ラヴ、ドノヴァン。黄色い印刷はリシケシュでポールのノートに書かれた手書きのソング・リストとマル・エヴァンスの似顔絵。
285 ：（上）女優ミア・ファロー。
287：1968年5月、アップル発足時にニューヨークで行なった記者会見でのジョンとポール。

:REDITS

CamScannerでスキャン

[illegible]

1969-70

[illegible]

ACKNOWLEDGEMENTS

[illegible]

PHOTOGRAPHIC CREDITS

[illegible]

TEXT SOURCES

[illegible]